俳諧歳時記

夏

俳諧歳時記

夏

青木月斗
藤村作
國富信一
武田祐吉
山本信哉
寺尾新
牧野富太郎

改造社

例言

一、本書は「俳諧歳時記」夏之部とす。

一、夏之部に採用せる季題選定の範圍は、立夏より立秋の前日迄を基準とし、之に陽暦、五月・六月・七月、及び陰暦、四月・五月・六月を割當て、年により立夏・立秋を前後する季題の採擇は慣例に隨へり。尚、行事或は祭日の日取は、主として陽暦を採用せるも、古書引用中の日附及び解說中に於ても過去にのみ存在せしもの、又現代に於て主として陰暦にて行はれ居るもの等は、便宜陰暦に依れり。故に「盆」及び「七夕」關係の季題等は秋の部に編入せり。

一、本書に收載せる季題は總數一千三百餘、新季題及び過去にのみ存せる季題をも漏らさず網羅し、地理的にも、臺灣に於ける城隍祭、樺太に於ける山火事等、日本全土に亙るやう心掛たり。

一、季題の分類は、先づ、時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物の七部門に大別し、各部門の順序は、實際句作上の便宜を考慮して、慣例による分類法を主とし、之に科學的見解をも參酌して案配せり。

一、傍題中にて、或は獨立せる季題として他部門に分類なし得べきものにして、特に獨立する必要を認めず、又主題と同一箇所に說くを便利とするものは、傍題として存せり。例へば、地理―青田の傍題中に、天文の部門に入るべき青田風を入れたるが如し。

一、本書に收載せる例句は、句作上の便宜を考慮し、名句集を兼ねしむる爲、古今著名俳家の句集を捃摭して、量に於ても質に於ても從來の例を遙に凌げり。而して排列は各傍題毎に區別し、略ゝ年代順によれり。

一、解說の明瞭を期するため、紛はしきもの、又は挿畫を便利とする季題等總て八十餘題には、それ〲畫圖を挿入す。尚その選定には、寺尾・牧野兩博士を初め諸家の好意を得たり。

一、本書の執筆分擔は左の如し。

季題解說・實作注意・例句　青木月斗

古書校註　藤村作

參考

時候・天文　國富信一

人事　武田祐吉

宗教　山本信哉

動物　寺尾新

植物　牧野富太郎

昭和八年六月

序言

俳句の中に浸つてゐる我々、季題の中に浸つてゐる我々が、さて季題の一つ〳〵に解説を附するとなると、面倒な事、疑義を生じて來る事など、今更に驚かされる。作者と學者、感情表現と智識表現との相違を思はされた。智的に解けば趣味索然となる、味的に傾けば本質的說明の薄らぐ恐れがある。我れ怪しいものは、古人も怪しい。いくら議論をしても追つかぬ。大槻氏が銀杏のいてふを「いちやう」、泥鰌のどじやう、どぜうを「どぢよう」の假名を正定する迄に三十年を費したこと等、つく〴〵思はされた。

季題の新舊混淆のものも、關東と關西の相違のものも、成べく自然的に兩様を採つた。季題の遺漏なきを期して、新古のもの、疑あるものも、多く掲げる事にした。例句の如きも、編者が豫め選をしたが、書肆の要望でそれ以外の範圍に亙つた。又例句のないものは同人で補うた。春と夏、夏と秋の區別も考案を要するものがあるが、重複を覺悟して掲出したものが多い。

この編纂に助力を致した人々に、岡本圭岳を初め、安保蘇北・宗田千燈・廣田耕牛・龜田小蛄・谷村凡水・中西二月堂、其他同人の多くが、いづれも、獻身的に努力精勵してくれた事を深く謝す。

同人發行所にて　月斗識

○

一、改造社の請により、同社編輯俳諧歳時記の「古書校註」の原稿作成を擔當した。但し編輯は同社の方針に據る。文學士藤崎一史君を煩した。

一、引用書は、俳諧歳時記關係では、俳諧御傘(貞德)・山の井(季吟)・增山の井(季吟)・滑稽雜談(其諺)・華實年浪草(麁文)・俳諧歳時記(馬琴)・俳諧歳時記栞草(青藍增補)、其以外では、日本歳時記(益軒)・雍州府志(道祐)・日次紀事(道祐)・和漢三歳圖會(良安)を用ひた。使用書は、滑稽雜談は東京帝國大學附屬圖書館所藏舊洒竹文庫の未紹介寫本、日本歳時記は貝原益軒全集所收本、雍州府志は續々群書類從所收本、日次紀事は珍書同好會複製本によつた。俳諧御傘は御傘、華實年浪草は年浪草、俳諧歳時記栞草は栞草、和漢三才圖會は三才圖會の略號で示した。(引用の本文中の三歳圖會は漢書の三歳圖會である)

一、所引の文中の漢文は假名交り文に書き改め、送り假名は適宜加へ、一般の便を計つた。

一、季題は多く古俳諧歳時記に見ゆるものを主とし、紙数の許す限り、適宜他書によりて附加した。同じ理由によつて「註」の部も簡單ならざるを得なかつた。

藤村作記す

部類目次

目次

時候

天文

地理

人事

宗教

動物

植物

—「目次」完—

夏之部

時候

夏（なつ）

炎帝（えんてい）　祝融（しゆくゆう）　昊天（かうてん）　赤帝（せきてい）　朱明（しゆめい）　蒸炒（じやうさう）　朱夏（しゆか）　炎夏（えんか）　三夏（さんか）　九夏（きうか）
升明（しやうめい）　長嬴（ちやうえい）　農節（のうせつ）　瓜時（くわじ）　炎節（えんせつ）　炎陽（えんやう）　朱炎（しゆえん）　朱律（しゆりつ）

古書校註

【年浪草】〔夏〕漢書律曆志に曰、太陽は南方。南は任なり。陽氣物を任養す。時に於て夏となす。（一）（略）三禮義宗に云、夏は大なり、萬物を養ひ長大ならしむる物なり。〔炎帝〕帝○淮南子に曰、南方は火なり。其の帝は炎帝、其の佐は朱明、衡を執て夏を治む　〔祝融〕神○禮月令に曰、夏の月、其の帝は炎帝、其の神は祝融、祝融は顓頊氏の子。（略）〔昊天〕爾雅に曰、天を昊天と曰ふ、言ふ心は氣浩汗（二）なり。〔朱明〕爾雅に曰、夏を朱明となし、一に長嬴と曰ふ。註、氣赤くして光明なり、故に朱明と曰ふ。（略）〔蒸炒〕韓文に曰、五月より暑濕に困しみ、深甑に坐し蒸炒（三）に遭ふが如し云々。

【滑稽雜談】〔赤帝〕文耀鈎に云、南宮は赤帝、其の精は朱鳥。

註（一）太陽南にある時、時節の上では夏と名づけるの意　（二）廣く大いなり。（三）むしいる事。○〔滑稽雜談〕に　の異名として朱明、炎夏、三夏、九夏、升明、長嬴、農節、還夏、瓜時、炎節、朱炎、朱律等出づ。

季題解説

季節の名、四季の一、春の後、秋の前をいふ。正しくは立夏より立秋の前日までなれど、俳句にては今、太陰暦の四・五・六月、太陽暦の五月・六月・七月の三箇月を夏の季節とす。之れを初夏・仲夏・季夏の三夏に頒つ。

實作注意

漢名に、朱明・長嬴・朱夏・炎陽等あり、夏九十日を九夏と云ふ。春夏秋冬、いづれも特徴を有してゐるは論をまたず。然も、春秋の中和は、花に紅葉、月に霞、それにつれての人事の數々、最も詩材に富めり。積極的の夏と消極的の冬は、春秋に比して寒暑の苦勞のわざはひせる點多し。然も一般世人より深く、自然を見、自然を樂しむ俳句に於ては、夏冬の中の箇々に、感じ行く點に於て、春秋と異ならぬものを持ちゐるなり。唯、夏といふ概念に就ては、春秋程、直覺的、詩的好感を持ち能はぬは爭へざる處也。古人の句を見るも、春秋の文字と、夏冬の文字の使はれゐるものを比するに、量に於て質に於て、春秋の立ち勝れるを見るべし。

序に、春秋夏冬の文字を附し置けばよしとせし如き季題の、近來の書に見受ける多し。これは一般に云ひ慣はしたるもの、又信賴すべき文獻によれるもの、普遍性を有してゐるものの他は漫りに、春夏秋冬の文字を附したり

とも季題としての實在性に乏しきなり。

例句

夏

世の夏や湖水に泛む浪の上　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
辨慶は夏も紙子の羽織かな　同（芭蕉翁消息集）
これやこの常世の島根夏もなし　宗因（三籟）
夏はまた冬がましじやといはれけり　鬼貫（其袋）
江戸に居て夏のやどりや隅田川　沾徳（俳諧五子稿）
肩衣は綟子にとゆるせ老の夏　杉風（杉風句集）
切味噌のひなた臭さや夏泊り　嵐雪（玄峰集）
見のこすや夏をまだらの京鹿子　蕪村（落日庵句集）
夏は猶もゆるか雲の淺間山　闌更（半化坊發句集）
百里來し甲斐ある夏のしら根哉　同（同）
町幅のいんき也けり京の夏　孤屋（有磯海）
夏知らぬ宿に來にけり宵月夜　士朗（枇杷園句集）
金閣や夏なき處松柏　助叟（京水）
座敷まで屆かぬ夏の木陰哉　野坡（ありそ海）
たれこめて夏は住けり裏借屋　幾音（家つと）
　桂離宮
楓樹林蒼々として日ざし夏　月斗（同人）
宇治の夏淋しきところ酒屋あり　青々（妻木）

卯月

卯の花月　四月　花殘月　得鳥羽月（エトリハノツキ）　この羽とり月
夏初月　跰躚　餘月　乾月　巳月　正陽月　乏月　陰月　首夏
初夏　孟夏　始夏

古書校註

【年浪草】〔四月〕潛確類書に曰、孟夏は日月實沈（一）に會して、斗（二）巳に建つの辰。晉樂志に云、巳は起なり、物此に至つて畢く盡きて起るなり。（三）〔跰躚〕史記天官書に曰、大荒落の歲、歲陰巳に在り、星戌に居る、四月を以て奎婁胃昴（四）とともに晨に出づるを跰躚と曰ふ。云々　通俗志に跰躚に作る。○廣義に云、跰躚は四月の名なり。〔余月〕爾雅疏釋に四月を余となす。〔乾月〕易經に曰、純陽を乾となす。○月令廣義に曰、四月は卦乾なり（五）、五陽一陰を決退す、陰變じて純陽となる。（略）〔巳月〕晉書樂志に曰、夏正（六）寅に建つ、正月となす。故に四月を巳となす。〔首夏、初夏、孟夏〕俱に梁元帝纂要に出づ。（略）〔花殘月〕藏玉　暮はてん春の名殘や山ふかみしげりがくれの花のこり月　後鳥羽院。〔得鳥羽月〕同　藤の花夏にかへれるおく山の下にやまたむゑとりはの月　有家。
【滑稽雜談】〔正陽月〕西京雜記に曰、陽德事を用ひ（七）、和氣皆暢び巳に

建つの月、故に之を正陽となす。〔乏月〕冬穀已に盡て夏麥未だ登らざる故也。「陰月」四月純陽事を用ふ、其の陰なきを疑はん事を恐る。故に特に之を陰月と謂ふ。純陽の月と雖も陰氣絶えざる所以なり。「卯月」清輔奥義抄に云ふ、此月卯の花さかりに開くゆゑに卯の花月といふを略せり。祕藏抄　卯月とて咲うの花に木づたひていつしか來なく山ほとゝぎす源宗干。「卯花月」藏玉集　うちはぶき今もなくなんほとゝぎす卯の花月夜さかり過行　鴨長明。（略）「この羽とり月」祕藏抄　尋てはなにかもすべき時鳥この羽鳥月をなば啼なん　家持。〔夏初月〕ほとゝぎす聲はけふまで夏はつき音羽の山のかきの庵りに。

註（一）星の名、参宿十星に當る　（二）斗は北斗星、此の星の東南方をさすのとき孟夏也と。（三）萬物四　に凡て盡き果て、新に新しき物がおこるの意。（四）二十八宿中の西方四星座の名。（五）易の上で四　の卦は乾。（六）正陽の意　（七）陽の氣が萬物を治め行ふ。

季題解説　陰暦四月の和名。卯の花の咲く月といふ意にて卯の花月と云ふを約せるなり。又う月は植月の義にて稲種を植うる月の意なりともあり。初夏に當たる月。

實作注意　卯の花月・夏初月・花殘月・得鳥羽月及び陰月・正陽月とも稱へ、漢名、首夏・孟夏・始夏と云ふ。〔參照〕初夏　天文―卯月曇　地理―卯月波　卯月野　春―四月

例句

卯月

山姫も花の衣ぬぐ卯月哉　宗砌（宗砌發句集）

母の死りけるに
身にとりて衣かへうき卯月かな　其角（五元集）
鶯廻り青みの見ゆる卯月かな　浪化（浪化上人發句集）
みづ〳〵と卯月の山や朝朗　竹平（焦尾琴）
何心なくて卯月のよるの雨　如泉（眞木柱）
日はながし卯月の空もきのふけふ　千代女（千代尼發句集）
巫女町によきゝぬすます卯月哉　蕪村（新花摘）
高からぬ花となりゆく卯月哉　闌更（半化坊發句集）
う月たつ窗は草木にまかせたり　成美（成美家集）
聞しらぬ小村の鐘も卯月哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
山水の音もほどよき卯月哉　同（同）
さき〳〵に晴曇ある卯月かな　梅室（梅室家集）
水底の草も花さく卯月かな　同（同）

卯の花月
うつらふか卯の花月の朝曇　宗祇（大發句帳）

四月
思ひ出す木曾や四月の櫻かり　芭蕉（熱田三歌仙）
玉川の雪かと見れば四月哉　鬼貫（俳諧七車）
白雲のたつや四月のよしの山　遊外（[illegible]）

四月　壁やれて有たけ草の四月哉　曉臺（曉臺句集）
　　　嵐山松の四月となりにけり　白居（五車反古）

仲呂（ちうりよ）

古書校註
【年浪草】律（一）○月令に曰、律は仲呂に中る。高陽が注に云、陽は散じ外にあり、陰は實して中にあり、所謂旅陽（二）功を成す。
【滑稽雜談】律曆志に曰、仲呂は四月の律なり。言ふ心は、微陰始めて起り、未だ成著せず、其中旅に於いて姑洗（三）を助く、（略）四月にあり。
註（一）四月の律の意　律は時候の變化を示す。（二）一所に止まらざる陽氣（三）三月の律の名。○一年を十二律に分ち四月の律は仲呂に當るなり。

立夏（りつか）

夏立つ（なつたつ）　夏に入る（なついる）　夏來る（なつくる）　夏かけて（なつかけて）　今朝の夏（けさのなつ）

古書校註
【年浪草】節（一）○月令廣義に曰、立夏は四月の節。孝經緯に云、穀雨（二）の後十五日、斗、巽に指す（三）を立夏となす。四月の節なり。
註（一）二十四節氣の一　（二）三月の中　（三）東南の間の方角を、北斗星がさす。

季題解説　二十四節氣の一。陰曆四月節に當り、これを夏の始とす。陽曆にては五月六日頃なり。

實作注意　立夏とは節の稱なれど、夏初めて立つの義なれば、夏立つ・夏に入る・夏來る、とも詠むべし。〔參照〕初夏（シヨカ）　春―立春（リツシユン）

例句
立夏　五百歳の立夏を鳴くや千代の鶴　魚路（あやにしき）
夏立つ　夏立つや衣桁にかはる風の色　也有（蘿葉集）
　　被川
　　日も空に霞の布の夏たちぬ　幸信（三山雅集）
夏に入る　負うて來て夏に入けり米三斗　成美（いかに〳〵）
　　さらし干す夏きにけらし不盡の雪　宗因（梅翁宗因發句集）
夏來る　淀舟や夏の今來る山かづら　鬼貫（鬼貫句選）
　　夏の來て夏はや深き嵐山　樗堂（萍窓集）
　　夏來ぬと人に驚く袷かな　蓼太（蓼太句集）

參考　支那の暦では冬至を起點として一年を二十四等分して二十四節とし之れに一々名稱を附し、之れによつて其の節季の氣候が分る樣にした。即ち立春が正月節であつて太陽の黃經三百十五度の時であるが之れから第六番目の季節が立夏になる。即ち節季から節季迄は太陽の黃經にして十五度の差があるから、立夏の時の太陽の黃經は四十五度になる。さうして立夏から立秋迄を夏としてある。
○二十四節氣、七十二候は夏の部に屬するものを、大約の太陽曆日取を附して左に掲ぐ。

二十四節氣（夏の部）

節氣	立夏	小滿	芒種	夏至	小暑	大暑
節氣	四月節	四月中	五月節	五月中	六月節	六月中
候	螻蟈鳴 蚯蚓出 王瓜生	苦菜秀 靡草死 麥秋至	螳螂生 鵙始鳴 反舌無聲	鹿角解 蜩始鳴 半夏生	温風至 蟋蟀居壁 鷹始摯習	腐草爲螢 土潤溽暑 大雨時行
陽曆日取	五月六日	五月二十二日	六月六日	六月二十二日	七月八日	七月二十三日

小滿（せうまん）

古書校註 【年浪草】四月の中なり。（一）○月令廣義に曰、立夏の後十五日、斗、巳に指す（二）を小滿となす。

註 （一）四月の節　節氣を小滿と名づける也。（二）北斗星が東南を指す。

季題解說 二十四節氣の一。立夏の後十五日、即ち陰曆四月の中に當る。陽曆にては五月二十一二日なり。陽氣旺んに萬物次第に長じて滿つるの義とす。杜鵑の鳴き麥の實る頃なり。〔參照〕 立夏（リッカ）

例句

小滿　小滿や後れし麥の山畠　圭岳（同　人）

五月（ごぐわつ）

季題解說 一年十二箇月の第五にあたる月。陰曆にては此月を「さつき」といふ。

實作注意 五月節句・五月場所等人事季題にあり。皐月の例句をも參照すべし。〔參照〕 皐月（サツキ）

例句

五月　五月半ば水に藻の張る曇かな　靜三醉（新題句集）
　　　鷺近く池は五月の濁りかな　雀村（同　人）

皐月

早苗月　五月　雨五月　五月雨月　橘月　月見ぬ月　早苗月　早月　狭雲月　多草月　梶月　吹喜月　賤染月　鶉月（ウヅラヅキ）　仲夏　茂林　蔚林　姤月　暑月　日長至　日短至

古書校註

【年浪草】〔五月〕潛確類書に曰、仲夏は日月鶉首（一）に會ひて、斗午に建つの辰（二）。晉樂志に云、午は長なり大なり、言ふ心は物皆長大なり。○此の月や農人方に苗を挿さんとす、故に早苗月（サナヘヅキ）と曰ふ、今略して早月（サツキ）と曰ふ。〔仲夏〕仲夏は中に同じ、又夏の中なり、五月卽ち仲夏なり。〔皐月〕爾雅疏釋に曰、五月、皐となす。五月戊を得れば（三）厲皐と曰ふ。〔鶉月〕月令に、五月日月鶉首に會す。（略）鶉首は星の名、鶉首月の略か。〔橘月〕藏玉ににが代より橘月の名をとめてしのぶむかしのおもひいづらん　家隆　〔月見ぬ月〕さみだれの晴間も見えぬ唐よりや月見ぬ月といひはじめけん　顯昭。

【滑稽雜談】〔茂林、蔚林〕梁元帝纂要に云、夏草を茂林と曰ひ、木を茂林蔚林と曰ふ。（略）惣じて木草のしげるは夏なり、茂林蔚林といふは和に云ふ夏木立、木の下闇などいへるにおなじ。又木の晩などいふ（四）。〔早苗月、さつき〕早月（サツキ）淸輔奥儀抄に云、田うふる事さかりなるゆゑにさなへ月といふをあやまれり。〔狭雲月〕秘藏集　池邊なる眞菰まじりのあやめ苅て宿にかざしつさくも月とて　篁。〔田草月〕莫傳抄　さみだれに雲もすくなきさ雲月田草月とは是をいはまし。

【日次紀事】〔祝月〕五月初朔日、互に相賀す。今日より神社の參詣多し、俗に此月も亦祝月と曰ふ。

註（一）南方の星次の名　（二）北斗星が正南を指す時。（三）五月草木の繁茂する氣節になれば。（四）以上本書四月茂りに見え、以下は五月の條に記す。○「滑稽雜談」に五月の異名として別に、姤月、暑月、日長至、日短至等あり。

季題解說　陰曆五月の和名。早苗を植うる月なれば、早苗月と云ふを約せるなりとも、さみだれ月の略なりとの說もあり。

實作注意　古くは五月をさ月と讀めり、早月とも書す。早苗月・五月雨月・さくも月・多草月・月不見月・橘月・吹喜月・賤染月とも云ひ、鶉月と稱へ、仲夏にあたる。參照　五月（ゴグワツ）　仲夏（チウカ）　天文―五月曇（サツキモリ）　五月雨（サミダレ）　五月闇（サツキヤミ）　地理―五月山（サツキヤマ）　五月川（サツキガハ）　皐月波（サツキナミ）

例句

皐月
降ふらずながめくらせるさつき哉　宗因（三籟）
花吹や皐月の菊の尺あまり　尙白（故人五百題）
おろ〱し闇の皐月の初まる夜　乙二（をのゝえ草稿）

早苗月
水上のすぐなるを見よさ苗月　宗因（三籟）

五月
海は晴て比叡降殘す五月哉　芭蕉（芭蕉翁發句拾遺）

雨五月

笠しまはいづこ五月のぬかり道　同（猿蓑）
篠すかき熨斗を敷寐の五月哉　其角（五元集拾遺）
五月音に我蓑蟲や母戀し　去來（玄峰集）
たま／＼に三日月拜む五月哉　去來（去來發句集）
町中の山や五月の上り雲　丈草（丈草發句集）
死こぢけ雨に日をふる五月かな　杉風（杉風句集）
秋ならで五月も寒し鷺の簑　支考（蓮二吟集）
八重雲の朝日ににほふ五月哉　太祇（太祇句選）
あらすごや井戸も五月のまさり水　同（勒隨草）
さりながら雨くらからぬ五月哉　闌更（半化坊發句集）
綠毛龜の逢にこもる五月かな　白雄（白雄句集）
物音の絶て雨ふる五月かな　雪高（句鑑）
降殘し／＼雨の五月かな　梅室（梅室家集）
住べくばすまば深川の夜の雨五月　其角（五元集拾遺）

蕤賓（ぜいひん）

古書校註【滑稽雜談】前漢律曆志に曰、蕤賓は五月の律也、蕤は繼也、賓は導也。言ふ心は陽始て陰氣を導きて繼がしめ物を養ふ也。午に位し五月にあり。

註 一年を十二律に分ち五月は蕤賓に當るなり。

芒種（ばうしゆ）

古書校註【年浪草】節○月令廣義に曰、芒種、孝經緯に云ふ小滿の後、十五日、斗、酉を指す（一）を芒種となす。五月の節。言ふ心は芒（二）あるの穀は、播種すべきなり。

註（一）北斗星酉の方角をさす。（二）稻麥などの實のさきの針の如き剛き毛を云ふ。

季題解説 二十四節氣の一。小滿の後十五日目、即ち陰曆五月節に當る。陽曆にては六月六七日頃とす。麥を収め、稻を植付ける時期とす。**參照** 小滿

例句
芒種　伊賀山や芒種の雲の不啻　圭岳（同人）

夏至（げし）

古書校註【年浪草】中○月令廣義に曰、芒種の後十五日、斗、午に指す（一）を夏至となす。

註（一）正南の方角を北斗星がさす。

季題解説 二十四節氣の一、陰暦五月中（チユウ）に當り、これを夏の最中とす、陽暦の六月二十二日頃なり。この日は一年中にて、晝きはめて長く、夜最も短かき時なり。〔參照〕芒種（バウシユ）　冬―冬至（トウジ）

例句

夏至　夏至の日や町行く馬の額迄も　賈友（新選）
　この分で雁も豐作夏至の雨　玻窗（ホトトギス）
　夏至の雨落口とめに田を廻る　英介（同人）

參考 太陽の黄經が九十度になつた時を云ふ。此の時に太陽の居る位置を夏至點と云ひ、天球上で太陽は最も北に偏する。從つて北半球では日照時間が最も長く、地表面上或る定つた面積の受ける熱量が最も多い。又一年中で夜間が最も短かく、晝間が最も長い。例へば東京では夏至になると晝間が十四時間三十五分、夜間が九時間二十五分である。併し此の日が一年中で最も暑い日では無く、最も暑い日は之れから遅れて七月末である。夏至の頃は未だ地面が暖められつゝあつて最高溫度に達しないからである。

六月（ろくぐわつ）

季題解説 一年十二箇月の第六にあたる月。陰暦にては此月を「みなづき」といふ。

實作注意 古くは六月と書してみな月と讀めり。〔參照〕水無月（ミナツキ）

例句

六月　六月や草の匂ひの水開寺　柳史（同人俳句集）
　六月の空晴れ楠の葉風哉　飛雨（同人）

水無月（みなづき）

六月（みなづき）　常夏月（とこなつづき）　風待月（かぜまちづき）　鳴神月（なるかみづき）　彌涼暮月（いすゞくれつき）　涼暮月（すゞくれつき）　松風月（まつかぜづき）
風待月（かぜまちづき）　季夏（きか）　瓜期（くわき）　且月（しよげつ）　陽氷（やうひよう）　遯月（とんげつ）

古書校註

【年浪草】〔六月〕淵確類書に曰、季夏は日月鶉火（一）に會して、斗、未に建つの辰。晉樂志に云、未は味なり、萬物成るに向はんとして咸く味有るなり。○此の月や暑熱烈しく水泉涸り盡く、故に水無月（ミナツキ）と曰ふ。○奥儀抄に曰、農事どもみなしつきたるゆへみなしつきといふをあやまれり、一說五月に植し早苗皆つきたる心ともいふなり。〔季夏〕禮記に曰、季夏の月日柳に在り。字彙に曰、凡そ末月を季月と曰ふ。云々〔瓜期〕左傳に曰、齊侯、連稱管至父をして葵丘を戍らしむ。瓜時にして往き、瓜に及んで代らしむ。〔且月〕爾雅に曰、六月を且となす。疏（二）に云、六月巳を得るときは則ち則且（ソク/シヤ）と曰ふ。（略）〔遯月〕易の豚卦本義に曰、遯は

退避也。卦たる、二陰やうやく長じ、陽當に退避す、故に遯となす。六月の卦也。「朔月」季吟が増山井に六月の異名となす。「陽氷」増山の井に出づ、疑ふらくは誤れるか。按ずるに陽氷の陽、暘に作るべし。○月令廣義に曰、暘氷は石季龍、氷室において氷を藏め、三伏の日を以て大臣に賜ふ、又林邑暘氷の賦あり。

【栞草】「奥儀抄（第一年題）の説あれどなほ信じがたし、又荷田東麻呂（三）はかみなる（雷鳴）月の上下を略してみな月と云ふといへり、此の説に姑くよるべくや。

【滑稽雑談】「常夏月」藏玉集　ちりはらひ妹にか見せん常夏の月待得たる花のさかりを　後鳥羽院。「風待月」同　松陰に床ゐをしつゝけふはは（や）風待月の夏のうとさよ　顕照。「鳴神月」同　夕立はなをはれやらでなる神の月にも成ぬ夏やくるらん　定家。「彌涼暮月」秘藏抄　郭公古郷こひて歸るなり彌涼暮月になりぬるそらとて　本匠院太子。「涼暮月」莫傳抄　風ふけば池に浪よる泉なる涼くれ月の頃にこそなれ。「松風月」同　雲高み雨ふる山のけふよりは松風月の夕暮ぞふる。

註　（一）南方の星次の名　（二）爾雅註釋の略。（三）徳川中代の國學者。

季題解説　陰暦六月の和名。此月は暑氣烈しく水涸れつくすより名附たりともあれど、諸説ありて斷じ難し。

作句注意　風待月・鳴神月・常夏月・いすずくれなどとも云ひ、漢名、且月等に稱へ、季夏・晩夏にあたる。（参照）　六月（ロクグワツ）　晩夏（バンカ）

例句

水無月

水無月はふく病やみの暑さかな　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
水無月や鯛はあれども鹽くぢら　同（葛の松原）
水無月や伏見の川の水の音　鬼貫（俳諧七車）
水無月や風にふかれてふる里へ　同（鬼貫句選）
杉の葉も青水無月の御旅哉　其角（五元集拾遺）
水無月の竹の子うれし竹生島　去來（去來發句集）
水無月や梢ばかりの風ゆるき　杉風（別座敷）
水無月や人の來ぬ間は丸裸　桃隣（古太白堂句選）
みな月の朝顔すゞし朝の月　同（同　）
水無月や屋根なき舟に身を焦し　闌更（半化坊發句集）
戸口から青水無月の月夜哉　一茶（一茶句帖）
水無月や朝起したる大書院　素牛（故人五百題）

六月

六月や峯に雲置くあらし山　芭蕉（句兄弟）
六月や臼をほさうぞつき臼を　鬼貫（鬼貫句選）
六月や芭蕉ゆすりて露涼し　言水（俳諧五子稿）
六月も鼻つきあはす數寄屋哉　凡兆（猿蓑）
六月や天の橋立しぐるゝ鐵　稀良（稀良發句集）

六月

六月の埋火ひとつしづかなり　曉臺（曉台句集）
温泉あれど六月寒き深山哉　闌更（半化坊發句集）
草津
六月やいたる所みな温泉の流　同（同）
六月や雲紅にまだら不二　同（同）
六月や旅人にあふ夜の山　樗堂（萍窓集）
六月の空すみきつて出る日哉　同（新十家句集）
六月の氷もとどく都かな　蓼太（蓼太發句集）
六月の蜜柑見せけり氷室守　同（同）
六月や磯にてりつく豆畠　怒風（篇突）
六月は丸にあつくもなかりけり　一茶（七番日記）
六月は稻の葉仲に朝茶かな　巣兆（曾波可理）
六月や待事多き晝の空　蒼虬（蒼虬翁句集）

林鐘（りんしょう）

古書校註

【年浪草】律（略）月令に曰、六月律林鐘に中る（一）。高誘の經に云、林は衆、鐘は聚なり。〇白虎通に曰、言ふ心は、萬物成熟して、種類多きなり。

註（一）一年を十二律に分ち六月は林鐘に當るなり。

小暑（せうしょ）

古書校註

【年浪草】節〇月令廣義に曰、小暑は孝經緯に云ふ夏至の後十五日、斗、丁に指す（一）を小暑となす。六月の節なり。

註（一）北斗星が東の方向を指す。

季題解說

二十四節氣の一。陰曆の六月節に當る。陽曆にては七月七八日頃なり。夏期の眞の暑熱に入るは、此日頃よりなり。參照　夏至（ゲシ）

例句

小暑　小暑なほ降りつぐ梅雨のおくれ哉　二月堂（同人）

大暑（たいしょ）

古書校註

【年浪草】中〇月令廣義に曰、大暑は小暑の後十五日、斗、未に指す（一）を大暑となす。六月の中（二）。

註（一）北斗星が西南の方角をさすの意。（二）六月の第二の節氣。「立夏」の項參照。

季題解說

二十四節氣の一。陰曆の六月中に當る。陽曆にては七月二十三四日頃なり。夏の暑の頂上にて苦熱を感ずるの候とす。參照　小暑（セウショ）

例句

大暑　麥飯のいつまでも熱き大暑哉　鬼城（ホトトギス）

七月（しちぐわつ）

季題解説 一年十二箇月の第七にあたる月。陰暦にては此月を「ふみづき」といふ。

實作注意 陰暦七月は異稱して文月といふ。乃ち秋なり。

月の異名　四月を卯月、五月を皐月、六月を水無月と云ふ。陰暦にては以上三月を夏とせしが、現今にては、七月をも夏とし、四月を春に入れざるべからず。七月土用の赫々炎々の最中に文月やにては、如何にしても、そぐはざるなり。故に先づ五月六月七月と云へば現代の太陽暦の感じにて詠み、旱月、水無月、文月と稱へれば、舊暦の心持にて詠む事、先づ當を得たりと云ふべし。然も、正月、又は師走、極月、臘月と云へば、新舊に關せざる感じなり。こは十二ケ月の初めと終りの爲に、かく新舊なしに感ずるものなり。理窟にてはあらず。感情にて行くのみなり「正月は陰暦一月の稱なり」と書けるもの却てをかし。俳句は公文書にてはあらざるなり。古き句や歐文には六月と書きて、みなづきと訓み、七月にてふみづきと訓ましあるなり、意を用ゐて見べし。**參照** 秋—文月（フミヅキ）

例句

七月　七月の鶯鳴くや山の晴　裸馬（同　人）
かきつばた咲く七月の信濃哉　致格（ホトヽギス）

初夏（しよか）

夏の始（なつのはじめ）　初夏（はつなつ）

古書校註 【年浪草】 乗章縹日注抄に曰、夏の初の題に首夏といふは、四月朔日二日の事也、春の立春早春と同じ事也。又更衣を首夏の次に出したるは(一)衣がへの心也。これは四月朔日より夏衣にかふる心なるべし。更衣といふ題に首夏の心は讀べし。首夏に衣がへの事斗にては首夏の心幽(二)なり。

註 (一)更衣を首夏の次に列したのは四月一日の衣がへをさすのであるの意。(二)首夏の意が明瞭でない

季題解説 いづれも夏のはじめを云ふ。

實作注意 初夏の音讀は、一に陰暦四月の稱なれど、季題としての初夏は、夏の始の方の意なり。「しよか」の二音に訓む。「はつなつ」と訓む事面白からず。**參照** 卯月。

例句

初夏　初夏の卓切子の酒器を運び來し　月斗（同　人）
酒前茶後初夏の風味の嬉哉　同（同　）
（前書略）
初夏の天雲無く海に波無き日　同（同　）

夏の始　また遠き首途や笠も夏の初め　霜後（しをり萩）
慕つゝじ思へば夏のはじめ哉　定雅（ 落　袋）

清和

清和天　和淸天

古書校註

【䔥草】「白氏文集　四月の天氣、和且淸し。（略）又同詩に孟夏淸和の月、東都、閑散官。（一）

【年浪草】古詩に簾纖りたる細雨正に梅黃なり、（二）景は尙ほ淸和にして風自ら涼しと作れり。淸和天然るべし、若し和淸と文字を顚倒したるは、淸和天皇の御名を避けるにや。

【增山の井】源氏には和して又淸しとあり。

註（一）閒職、暇多き官。（二）簾をおろす樣な細雨に梅は黃熟した。

季題解說　陰曆四月一日を淸和節と云ふ、轉じて四月を淸和月とも云ふ。又此頃の淸らにして和らげる空を、淸和天或は轉じて和淸天といふ。

例句

清和　天淸和南薰すでに至るかな　圭岳（同人）

夏めく

夏の色　夏の匂ひ　夏げしき

季題解說　春過ぎて夏來り、風物悉く夏らしくなりたるを云ふ。

實作注意　夏めきし風色を、夏景色・夏の色と用ゐ、生氣ある如く、匂ひある如く思はるゝを、夏の匂ひと表はするなり。

例句

夏めく　夏めきて人顏見ゆるゆふべかな　成美（成美家集）

夏の色　夏の色は露にしほるゝ楸かな　昌休（大發句帳）

杜若水はさながら夏げしき　定雅（椿花）

夏淺し

季題解說　夏に入りて日なほ淺き意なり。

例句

夏淺し　巖をうつ波に千鳥や夏淺し　月斗（同人）

夏淺き草花店や種も賣る　樂天（ホトトギス）

仲夏

季題解說　夏のなかばを云ふ。

實作注意　仲夏は陰曆五月の稱なれど、季題の仲夏はそれに限らず、夏のなかば頃をさしていへるなり。參照　皐月

例句

仲夏　南吹いて海は仲夏の煇きに　二月堂（同人）

半夏生（はんげしやう）　半夏（はんげ）　半夏水（はんげみづ）　半夏雨（はんげあめ）

古書校註

【滑稽雜談】 暦林内傳に曰、半夏生、五月の中より十一日。之を注すべし、此日不淨を行はず、婬欲を犯さず、五辛(一)酒肉を食はざる日也。(略)(二)和俗此日は毒氣降るとて、一切の野菜類を採て食せず。

【俳諧歳時記】 五月中より十一日なり。世俗この日を期として竹の子を食はず。是竹節蟲を生ずるゆゑ也。

【日次紀事】 今月半夏生日の前夜、諸各井を掩ふ。俗傳に今曉天より毒氣降ると云ふ。

註 (一) 五辛は葱・韮・蒜・薤・薑・芥(風土記)をいふ。(二) 以下其書の自説。

季題解說 七十二候の一。夏至の第三候。即ち夏至より十一日目の日。陽暦の七月二日頃にあたる。梅雨はこの頃にて明け、農家にては此時を田植の終りとす、過ぐれば熟しがたしといふ。

實作注意 半夏と略し、「はげ」と轉訛の地方あり。この日雨あれば大雨となる傳へあり「半夏雨」とて農家の恐るゝ所なり。

例句

半夏生　野に居るは鷺ばかり也半夏生　泰　勇（類題發句集）
　　　　半夏生降らず涼しき日なりけり　月　斗（同　人）
半　夏　石竹も半夏に胡麻まくついで哉　朱　袖（韵　塞）
半夏水　半夏水や野菜のきれる竹生島　許　六（同　）
半夏雨　半夏雨のたがはず降て濁り川　月　斗（同　人）

參考 夏至から十日を隔てた日から、六月節の前日迄の五日間を云ふ。其の頃には半夏と云ふ毒草が生ずる爲めに此の名がある。併し現今では太陽の黄經が百度の日を記してある。即ち夏至から十一日目頃を云ふ。古來半夏生の日の天候によつて其の年の吉凶を占ふ迷信がある。

麥の秋（むぎのあき）　麥秋（ばくしう）

古書校註

【年浪草】 禮月令に曰、孟夏之月、麥秋至る。註に秋は百穀成熟之期、此の時に於ては夏と雖も麥に於いては、則秋也、故に麥秋と云ふ也。

【日次紀事】 四月尾より五月初に至りて、農民麥を刈る。是を麥秋と謂ふ。民間、麥秋に附くと稱す。凡そ農民多く麥を食す、故に麥秋を悦ぶ。

季題解說 麥の黄熟する時を云ふ。早きは五月下旬より成熟し始む、大抵立春より百二十日前後を麥刈の好期とせらる。小麥は大麥より十日許り後るゝを常とす。

實作注意 麥の黄熟せるこれをも麥の秋と云ふ、又麥の收穫をも麥の秋をすると云ふ。前者は植物、後者は人事に屬す。何れも作句に就て判斷すべし。

例句

麥の秋

拖斧する兒も見えにけり麥の秋　浪化（續有磯海）
宿々は皆新茶なり麥の秋　許六（五老井發句集）
猶語れいねとは言はず麥の秋　也有（蘿葉集）
麥の秋さびしき貌の狂女かな　蕪村（新花摘）
暦見し日も過行ぬ麥の秋　同（同）
宵闇ぞ最中なりけり麥の秋　曉臺（曉臺句集）
旅寢してしるや麥にも秋の暮　蓼太（蓼太句集）

麥秋

麥秋や田鶴も見えぬ閒の宿　也有（蘿の落葉）
麥秋や狐ののかぬ小百姓　蕪村（新花摘）
麥秋やひとよは泊る甥の法師　同（遺稿）
麥秋や馬に出て行く馬鹿息子　太祇（太祇句選）
麥秋や子を負ひながら鰯賣　一茶（おらが春）
哀れげもなし麥秋の里の暮　連丈（しをり萩）
麥秋や頓に夏めく山の靄　月斗（同人）

田植時（たうゑどき）

季題解說　稻秧を苗代より本田に移し植うる頃を云ふ。その時期は土地の寒暖により遲速あれど、概ね六月上旬より中旬までに行ふを常とす。農家一齊に多忙の時なり。

實作注意　多くは五月雨の天候惡しき季節に當り著しく寒きことあり、俗に田植布子（人事）と云ふ諺あり。

例句

田植時

木綿にも南部の雨や田植時　蓑里（藤首途）
田植時たか根の雪や蔦からす　楓子（焦尾琴）
藤戸男塚にて
生て居て何せん浦の田植時　支考（類題發句集）
見わたせば蒼生よ田植時　蕪村（遺草）
送曉臺歸羽行
諷はせる發句のこせや田植時　柳几（しをり萩）
田植時お針子減つて一人かな　馬塘（同人）

入梅（にふばい）

梅雨の入り　梅雨に入る　梅雨入　ついり

古書校註

【滑稽雜談】　四時纂要に曰、閩人立夏の後、庚の日に逢ふを以て入梅となし、芒種の後壬の日に逢ふを出梅となす。事を得れば、乃ち耕耨（一）に宜し。（略）（二）惣じて入梅の說和漢ともにさまぐの說侍る。）

註　（一）耕し草をかる。　（二）其諺の自註也。

【季題解説】雑節の一、梅雨の季節に入ること、又その季節をいふ。芒種の後壬の日に逢ふを入梅とし、夏至の後庚に逢ふを出梅とす、とあれど異説あり、大抵、立春より百三十五日目に入り、凡そ三十日間、俗に雷鳴ありて明くとせり。故に梅雨期は通例六月十一日頃に入れど、年により長短ありて一定せず。従つて出梅の日は暦面にはなし。

【実作注意】季題としての入梅は、普通梅雨の降り初むるを云へるにて、梅雨に入る・梅雨入の語をも用ふなり。また梅雨入を「ついり」の約あれど、ついりの語は一に梅雨全般のことに用ゐる為注意すべし。【参照】梅雨寒 梅雨明 天文—梅雨 地理—梅雨出水 梅雨穴

【例句】

入梅　花よりも入梅さびし百ケ日　丁牧（文星観）　支考百ケ日

梅雨の入り　むし暑し四五日すれば梅雨の入り　月斗（同人）

梅雨に入る　油断して梅雨に入りけり旅硯　同（同）

梅雨寒（つゆさむ）　梅雨寒し　梅雨冷（つゆびえ）

【季題解説】梅雨期に陰霖連日に亙る時は、温度降りて寒冷を伴ふことあり、之を梅雨寒・梅雨冷などとも云ふ。俗に田植布子といふもこの時期に当る。

【参照】入梅 梅雨明 天文—梅雨 地理—梅雨出水 墜栗穴

【例句】

梅雨寒　梅雨寒や風呂の戻りの霧雨に　月斗（同人）

梅雨寒し　梅雨寒し堂の暗みにまたゝく燈　風可（同）

梅雨明（つゆあけ）　梅雨あがり　梅雨の後　つゆの明

【季題解説】梅雨期の終りて降り絶えたること、梅雨あがりとも云ふ。梅雨期は凡そ三十日とすれども、定まれるにあらず、俗に雷鳴ありて明くとせり。

雷の戀しき時ぞ五月雨　平砂（句鑑）

などあり。【参照】入梅 梅雨寒 梅雨期 天文—梅雨 地理—梅雨出水 梅雨穴

【例句】

梅雨あがり　箱崎や岩たて雲をつゆあがり　養浩（小文庫）

梅雨の後　梅雨の後牛ほす里の堤哉　延年（恒誠）

つゆの明　入梅の明遠かみなりを暦哉　白雄（白雄句集）

三伏（さんぷく）　三庚　伏日

【古書校註】【増山の井】夏至の後、第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚を中伏とい

ひ、立秋の後最初の庚を末伏といへり。是を三伏(一)といふ也。夏は火也。秋は金也。夏至に、一陰生じても、火盛なる時節なれば、金氣伏しかくるる心に、伏とはいふとぞ。書言(二)奏の時には、伏祠を作り蠱災(三)を防ぐに伏日にまつりし事有り。後漢の時は伏日に萬鬼行とて、終日宅を閉たる事など有り。事文。(四)

註 (一)又三伏とも云ふ。(二)書言故事(書名)の略。(三)コサイ　そこなふあしき氣のなす災。(四)書名。

季題解説 夏の最も暑き頃。夏至の後第三庚の日を初伏とし、第四を中伏、立秋の後の初庚を末伏とす。庚は金氣なり、夏は火氣なり、金は火を畏る。故に極暑中は金氣伏藏するの義なり。

實作注意 三庚又伏日とも云ふ。三伏は又專ら酷暑の候の稱に轉じて用ゆ。

例句

三伏　三伏の夏なき石の庸かな　蓼太 (蓼太句集)
東登寺石碑造立
三伏の日に酒のみの額かな　淡々 (句集)
三伏の月小さゝや燒ケ岳　蛇笏 (ほとゝぎす)

土用(どよう)

土用前(どようまへ)　土用入(どよういり)　土用中(どようちう)　土用明(どようあけ)　土用太郎(どようたらう)　土用二郎(どようじらう)　土用三郎(どようさぶらう)　土用四郎(どようしらう)

古書校註

【滑稽雜談】月令に曰、中央は土なり。其日は戊巳。(略)註に曰、土、四時に寄旺(一)する事、各十八日、共に七十二日、此を除けば、則ち木火金水も亦各七十二日なり。土、四時に於いて在らずと云事なし。故に定位なく、專氣なくして、辰戌丑未の末に寄旺す。未の月、火金の間にあり、又一歳の中に居る、故に特に中央の土一令を此處に揭げて以つて五行(二)の序を成す。(略)(三)惣じて土用は四季にある事勿論なれ共、夏の土用を專一とする事、五行の次第を立る時に、夏の土用は、一歳の中間に有りて、中央土の義なり。又五行相生の次第をいふに火と金と間にをく時は火生土生金と相生する也。(略)土用は四季共に十八日ある者也。

註 (一)土の氣は四時にやどり何時も存して旺である事の意。(二)木火土金水の五の氣の順序を組立る。(三)以下其諺の自說。

季題解説 年を通じて暑熱の最も盛んなる時期。暦の節の名、土旺の意なり。土用は一年に四期ありて一期を十八日間とす。春は清明より立夏まで、夏は小暑より立秋まで、秋は寒露より立冬まで、冬は小寒より立春までの稱なれど、俳句にては單に土用とのみにて、專ら夏の土用を意味す。大抵七月二十日より約十八日間を云ふ。その第一日を土用入と云ふ、第三日は土用三郎と云ひて俗に農家の四厄日(梅雨太郎・八專二郎・土用三郎・寒四郎の四日)とし、此日の天候によりて土用中の日和を率し、作物の豐凶を卜せらるゝと云ふ。而して土用入より十八日目、土用明となる。土用は暑熱、

最も盛の時なり。

【實作注意】此處には季節としての土用のみをいひ、土用と關連した事物は各別題なり。【参照】天文―土用あい　土東風　地理―土用波　人事―土用干　土用灸　土用餅　土用丑の日の鰻　土用芝居　動物―土用蜆

【例句】

土用
病む人を思ひやらるゝ土用哉　蚊足（續虚栗）
二つなき笠盜まれし土用かな　一茶（新集）
帆柱に箸干す舟の土用哉　海如（發句題叢）
よく見れば薊萎む土用哉　保吉（俳句全集）
暮れて燈の涼しさ頼む土用哉　青々（妻木）

土用入
おぼつかな土用の入の人心　杉風（韵塞）
夜の雨や曉晴れて土用の入　子規（子規全集）

土用中
寒さらし土用の中をさかり哉　許六（五老井發句集）

土用明
日車の高きに風の土用明　月斗（同人）

【参考】支那で四季を分つて春夏秋冬とし、立春から立夏迄を春、立夏から立秋迄を夏、立秋から立冬迄を秋、立冬から立春迄を冬とし、春分、夏至、秋分、冬至が各季の中央にある樣にした。然るに一方支那人は五行即ち木火土金水が天地を支配するものと考へて居る故、之れを一年に分配したいのであるが斯くては四季と一致しない。即ち一年を四季に分てば一季は九十一日餘となるが五行に分てば七十三日となつて一季に十八日餘の差が出來る。

其處で十八日餘の差支那流に云へば十八日二十六刻を以て五行の中の中心たる土の支配する所として、之れを四季の終りに置いた。故に四季の終りには、必ず土用と云ふ日が十八日乃至十九日ある。而して他の四季は春が木、夏は火、秋は金、冬は水の支配するものとしたのである。

斯くして一土用は土氣の旺にして地氣大過して變化に至る時節なる故、人の疾病も必ず不快、禽獸も氣を變す。此故に人は鍼灸を忌む、土を犯すことなかるべし」と言はれる樣になつたものである。斯くて現在では太陽の黄經から割出して其の初日を曆面に記すことゝなつた。即ち春土用は黄經二十七度、夏土用は百十七度、秋土用は二百七度、冬土用は二百九十七度の時刻で始まることゝした。故に土用の入りの日は大體立春、立夏、立秋、立冬から十八日程前であると見れば宜しい。

晩夏（ばんか）

【季題解説】夏の末つ方をいふ。

【實作注意】晩夏は、一に陰曆六月の稱なれど、季題の晩夏は、夏も終りに近づける頃をも云ふ。【参照】水無月

例句　早夏　河内野を晩夏の旱霞哉　士岳（同　人）

夏深し（なつふかし）　たつさぶ

季題解說　夏も閑に、まさに終に近き頃をいふ。季夏・晩夏の候にあたる。

例句

夏深し

夏深み草の名わかぬしげみ哉　心敬（心敬發句帳）

夏深き樹石は夜に入りにけり　裸馬（同　人）

秋近し（あきちかし）　秋風近し（あきかぜちかし）　秋隣（あきどなり）　秋隣る（あきとなる）　來ぬ秋（こぬあき）　秋迫る（あきせまる）　翌來る秋（あすくるあき）

季題解說　夏も將に終らんとして、秋の近づき迫るをいふ。秋隣も同じ、來ぬ秋は、來らんとする秋の義なり。〔參照〕秋を待つ（ナツ）、夏の果（ハテ）

例句

秋近し

秋近き聲して風は色もなし　紹巴（大發句帳）

變化めく雲や一夜の秋近し　浪化（浪化上人發句集）

又起さん菊の長坂秋近し　支考（蓮二吟集）

秋近く松茸ゆかし千葉山　桃隣（古太白堂句選）

沙雞の聲人あきちかくなりにけり　白雄（白雄句集）

蚩かほの赤みに人も秋近し　成美（成美家集）

秋近し麻刈跡の夕日影　吟江（推蔵日記）

物の葉のそよぎに濱の秋近し　里紅（藤首途）

秋近し黄ばみかゝりし鮎の腹　其考（類題發句集）

秋風近し

江戸に上らんとする人に別る

合點か秋風近し森の草　宗因（梅翁宗因發句集）

波の音も秋風近し西の海　玄旨（九州道の記）

何となく秋風近き柳哉　蓼太（蓼太句集）

秋隣

秋もはや小倉色紙の隣まで　鬼貫（俳諧七車）

大雨にひたと涼しの秋隣　月斗（同　人）

來ぬ秋

こぬ秋を衫むら寒き太山哉　宗養（大發句帳）

班女の仕ける跡とて人の數へけるに

こぬ秋をはこぶ幾汐はま楸　周桂（同　）

秋も來ぬ其人の閨の草枕　鬼貫（俳諧七車）

翌來る秋

國々を秋になつたら見にまはれ　同（鬼貫句選）

げに涼しあすくる秋の雲の色　和風（三千化）

そよ〳〵とあすくる秋や蚊やの裾　己專（馬光集）

秋を待つ（あきをまつ）　秋待つ（あきまつ）

季題解說　まさに來らんとする秋を待つの意なり。

【實作注意】月令神物答に「四月（舊）の頃は日々にあたゝかになる故新らしき暖と云へり」とあり。餘り作例を見ず。【參照】暑さ　極暑ゴクショ

【例句】

薄暑　しろき蝶野路にふかるゝ薄暑哉　青々（妻木）

日の光草木を見れば薄暑哉　月斗（同人）

新暖　新暖や楓に風の起る庭　同（同）

新暖や半日宇治の水邊に　同（同）

暑さ（あつさ）

暑し（あつし）　熱さ（あつさ）　熱し（あつし）　暑苦し（あつくるし）　暑氣（しよき）　暑熱（しよねつ）

【季題解説】夏となりての暑氣を言ふ。

【實作注意】暑さは夏なり。涼しさも夏なり。冷かが秋、寒さが冬なり。暖かが春。長閑、麗、が春。やゝ寒、肌寒、朝寒、夜寒、身に沁む、爽、が秋也。し。五官にうつたふる寒暑、冷暖を分類して、味到せる季題を見るべし。

【參照】薄暑ハクショ　暑き日アツキヒ　極暑ゴクショ　涼しスズシ　秋—殘暑ザンショ

【例句】

暑さ

蛤の口しめてゐる暑さかな　芭蕉（もとの水）

なんとけふの暑さはと石の塵を吹く　鬼貫（鬼貫句選）

あの山もけふのあつさの行方哉　同（同）

香盤の烟もあつき庵かな　同（同）

山賤が額の瘤のあつさかな　其角（五元集拾遺）

傳九郎が持ちし[illegible]に

朝比奈の樂屋に入りし暑さ哉　同（同）

小女の帶にくるまるあつさかな　同（同）

蠟かけの棚干暑し星は北　同（同）

供がたの鞘の暑さや岡の松　同（五元集）

むら雨の木賊に通るあつさかな　同（同）

小夜中に蟬一聲の暑哉　同（故人五百題）

おもだかのふとりすぎたる暑さかな　嵐雪（玄峰集）

美濃の國

蕣の二葉にうくる暑かな　去來（去來發句集）

夏かけて眞桑も見えぬ暑かな　同（同）

石も木も眼に光る暑かな　同（同）

青雲に底のしれざる暑かな　浪化（浪化上人發句集）

道ばたにまゆ干すかざのあつさかな　許六（五老井發句集）

禮いうて鯛は捨たるあつさかな　也有（蘿葉集）

抱た子は負ふた子よりも暑かな　同（同）

隙な身はたゞ横におく暑かな　同（同）

物申の聲にもの著るあつさかな　同（同）

肥取を先へ立てたるあつさかな　同（同）
傾城の汗の身を賣る暑かな　同（同）
牛も箭もなき草刈のあつさかな　同（同）
井戸ほりの浮世へ出たる暑かな　同（同）
子福者といはれて蚊屋の暑かな　同（同）
唐稻の中ゆく笠のあつさかな　同（同）
不破の關書は日のもる暑かな　同（同）
あさの間は空にしられぬ暑かな　千代女（千代尼發句集）
靈廟のほそう立日はあつさかな　同（同）
晩鐘に散殘りたるあつさかな　同（同）
來て見れば森には森の暑さ哉　同（同）
負た子に髮なぶらるゝ暑さ哉　その（小弓俳諧集）
粘になる鮑も夜の暑さ哉　里東（續猿蓑）
里は今夕めし時の暑さ哉　何處（猿蓑）
病人の駕の蠅追ふ暑かな　蕪村（夏より）
日がへりに兀山越ゆるあつさかな　同（同）
百姓の生きてはたらく暑かな　同（書簡）
居りたる舟に寢てゐる暑かな　同（句集）
端居して妻子を避る暑かな　同（同）
松陰に旅人帶とく暑かな　太祇（太祇句選）
堆石にとかきの光る暑かな　同（同）
朝寢しておのれ悔しき暑さ哉　同（同）
病で死ぬ人を感ずる暑哉　同（同）
色濃くも紫の干上るあつさかな　同（同）
酒藏に蠅の聲きく暑かな　同（同）
氣のゆるむあつさの顏や致仕の君　同（同）
世の外に身とゆるめゐる暑かな　同（同）
めでたきも女は髮の暑さ哉　同（同）
撫子に霜見むまでの暑かな　几董（井華集）
水のめば腹のふくるゝあつさ哉　同（同）
乳かくす女の罪の暑さ哉　田女（續明烏）
我宿は下手が建たる暑さ哉　田福（同）
大蟻のたゝみをありく暑さ哉　士朗（枇杷園句集）
ほくち搗臼のわれのく暑哉　闌更（半化坊句集）
大津繪の丹の過ぎたる暑さ哉　蓼太（蓼太句集）

西陣

龍虎織手もあらそうて暑さ哉　同（同）
捨苗の道々枯れてあつさかな　同（同）

暑さ

食ぶとり寢ぶとり暑さ／＼哉　一茶（七番日記）
米國の上々吉のあつさ哉　同（句帖）
手に足におきどころなき暑哉　同（同）
眞中に胖すゑてある暑かな　蒼虬（蒼虬句集）
根氣よき人にうらやむあつさかな　同（同）
きち／＼と蟬鳴く夜の暑哉　成美（成美家集）
麥搗の人に食つくあつさかな　梅室（梅室家集）
帶とけば砂のこぼるゝ暑哉　同（同）
さびきつて碇の暑し海のはた　乙二（をのゝえ草稿）
露の葉を引裂て見る暑かな　同（同）
鶯のうしろ見らるゝ暑さかな　同（同）
谷々の雲もかたまる暑さかな　馬光（馬光發句集）
赤松の松脂匂ふ暑哉　同（同）
たまたかに雨雲見ゆる暑哉　蒼狐（句鑑）
ぼつとりと桃落る日の暑哉　吐鳳（同）
瀧の音はありて山路の暑さ哉　春郊（同）
雨やんでやつぱりもとの暑さ哉　輕羅（報隨覽）
いかづちを遠くさく夜の暑さ哉　丸宝（句鑑）
古藏に日のさす家の暑哉　吾仲（篇突）
行馬の埃に土手の暑かな　山竹（八仙傳）
市馬の尿の香くさき暑哉　呂房（故人五百題）
牛の尾もふりきるばかり暑哉　架卜（東華）
鳥も來ぬ赤がね屋根の暑哉　起子（月影塚）
白鷺の千川に光る暑哉　尺布（新選）
蝸牛の葉裏へまはる暑さ哉　珍志（同）
樹々の葉も艷を失ふ暑哉　管子（同）
葉ばかりの薊ものうき暑哉　蛸山（同）
湖に指つけて見る暑哉　篤羽（同）
川筋を行はなれたる暑哉　南鳥（同）
墓もいゝ垣をはなるゝ暑さかな　巾絲（同）
足に知る闇の埃の暑かな　大夢（同）
叢にもえたつ蠅の暑さ哉　梅郊（古今句鑑）

達磨贊

來る人に物をもいはぬ暑哉　心祇（同）
松の葉の落ちて地に立つ暑哉　風律（故人五百題）
桐の葉にほこりのたまる暑哉　孤屋（韵塞）
引汐に動かぬ舟のあつさ哉　百里（花摘）
杖ついて坂見上げたる暑哉　吟江（推敲日記）

暑き日（あつきひ）　熱き日（あつきひ）　暑き夜（あつきよ）

古書校註　【年浪草】字彙釋文に曰、暑は煮なり、熱して物を煮るが如し。

季題解説　晩夏の暑さ一日を云ふ。夜も亦同じ、釜中にあるが如き蒸熱の趣なり。

實作注意　古來、暑き日は陰暦六月の季なりと定めあれど、三夏を通じて暑き日夜を詠むも差支なし　參照　暑さ

例句

暑き日

暑き日をかねてぞ植し庭の松　宗因（三籟）
暑き日を海に入たり最上川　芭蕉（鳥の道）
暑き日も樅の木の間の夕日哉　素堂（俳諧五子稿）
暑き日や神農慕ふ道の中　桃隣（古太白堂句選）
あつき日や指もさゝれぬ紅畠　千代女（千代尼發句集）
あつき日や明放す戸のやらんかた　太祇（太祇句選）
あつき日の都や鯛の恥さらし　几董（井華集）
暑き日や御嶽まうでのさばき髪　同（同）
暑き日や産婦も見えて半屏風　召波（春泥發句集）
暑き日や小庭の松に逃かへり　士朗（枇杷園句集）

殺生河原

暑き日や蝶鳥落て石黄み　闌更（半化坊句集）
暑き日や降ればふるぞと云ながら　同（同）
暑き日や子に踏せたる足のうら　一茶（七番日記）
あつき日のたよりともなれ青楓　成美（成美家集）
あつき日や軒のつまなし落もせず　同（同）
あつき日や杜踏ばる土ふまず　蒼虬（蒼虬翁句集）
暑き日に長口上の見廻かな　梅室（梅室家集）
あつき日や立寄陰もうるしの木　同（同）
暑き日や畦邊ゆく人の見えて猶　一鼠（明がらす）
暑き日や人なまぐさき江戸の町　岩蛾（心一つ）
暑き日や淵に童の長くらべ　梅睡（西華集）
暑き日や枕一つを持ありき　蝶夢（類題發句集）
暑き日に飽きし茄子の煮物哉　定誰（續明烏）
暑き日や草に鳴入川原鶸　謝大（たてなみ）

熱き日

熱き日や馬屋の中の糠俵　恕風（有磯海）

暑き夜

暑き夜の荷と荷の間に寢たりけり　一茶（七番日記）
あつき夜や起きて又出る緣の端　壺夫（恒誠）
暑き夜やいづくを足の置處　荷白（古選）

極暑（ごくしよ） 酷暑（こくしよ） 溽暑（じよくしよ）

古書校註

【年浪草】 函史に曰、季夏の月、熱極りて温し。○梁元帝の詩に曰、季夏（一）頓暑に金を流し石を爍す。

【滑稽雜談】 月令に曰、季夏の月、土、潤溽（三）として暑し。註に曰、溽は濕也。土の氣潤ふが故に蒸鬱して濕暑となる。（四）俗に蒸すなど云ふ義也。

註 （一）夏の末陰暦六月。（二）心苦しむ程に暑きを云ふ。（三）しめりてむし暑し。（四）以下其註の自說也 也引用は「土潤溽暑」に見ゆ

季題解說 極暑は最も暑きこと、酷暑はきびしき暑さ、溽暑は濕氣を含みて暑きを云ふ。共に夏土用頃の頂點に達したる暑の稱なり。〔參照〕 薄暑（ハクシヨ） 暑さ（アツサ）

例句

極暑 茴香の咲きすがれたる極暑哉 手古奈（ほとゝぎす）

酷暑 井戸深く酷暑の魚吊しけり 紫江（同人句集）

溽暑 庭山は埃汚れの溽暑かな 圭岳（同人）

參考

氣温の高極

地名	氣温高極	一年平均氣温	高極起日
臺北	三八度六	（二一、六）	大正一〇年七月三一日
京城	三七度五	（一一、〇）	大正八年八月一日
那覇	三五度五	（二二、〇）	大正五年七月二一日
長崎	三六度七	（一五、六）	明治三七年八月九日
福岡	三七度四	（一四、九）	大正一二年八月七日
高知	三七度一	（一五、六）	大正三年七月一九日
廣島	三八度一	（一四、七）	大正一〇年八月五日
神戸	三七度六	（一五、〇）	大正三年八月六日
和歌山	三七度九	（一五、三）	（大正一一年八月一三日 昭和四年八月九日）
大阪	三七度六	（一五、一）	明治四二年八月四日
京都	三七度六	（一三、八）	大正一二年八月一六日
岐阜	三八度二	（一四、三）	明治二六年七月二五日
名古屋	三七度七	（一四、四）	大正一二年八月一五日
濱松	三七度二	（一五、一）	明治三七年七月一九日
長野	三七度七	（一〇、九）	大正一三年八月四日
甲府	三八度五	（一三、四）	昭和二年七月二二日
新潟	三九度一	（一二、六）	明治四二年八月六日

地名	最高温度		年月日
横濱	三六度三	（一四、四）	大正一五年八月一日
東京	三六度六	（一三、九）	明治一九年七月一四日
八丈島	三二度八	（一七、八）	大正一二年八月一三日
小笠原島	三四度九	（一二、五）	大正五年七月一六日
秋田	三五度八	（一〇、四）	昭和四年八月一五日
山形	三七度九	（一〇、七）	大正七年七月二六日
水戸	三六度一	（一二、七）	大正一二年八月一五日
青森	三六度〇	（九、三）	大正四年八月六日
函館	三三度五	（八、五）	明治三七年八月二〇日
札幌	三五度五	（六、九）	大正一三年七月一一日
大泊	三〇度四	（三、〇）	昭和三年八月一九日
本斗	三〇度二	（四、五）	大正九年八月六日
新京	三九度五	（四、六）	大正一一年六月二二日

涼し（すゞし）　涼しさ（すゞしさ）　朝涼（あさすゞ）　夕涼（ゆふすゞ）　晩涼（ばんりやう）　夜涼（やりやう）　涼夜（りやうや）　微涼（びりやう）　涼味（りやうみ）　涼雨（りやうう）

季題解説 夏は暑きを常とすれど、朝夕の涼しさ、風に依る涼しさ等、五感による涼味を示す稱。微涼にやゝ涼しの意なり。

實作注意 涼しは名詞と連接して用ゐらる、風涼し・水涼し・草涼し等の如し、月涼し・露涼・星涼しは別項に說く。朝涼・夕涼は多くあさすず・ゆふすずと訓み馴らはし、晚涼・夜涼・微涼は音讀すべし。**參照** 暑さ（アツサ）天文―涼風（スズカゼ）秋―秋涼し（アキスズシ）

例句

涼し

かげ涼し松原さして落日より　宗因（梅翁宗因發句集）

露をおきて涼しき月の木の間哉　宗祇（大發句帳）

夕づく日さすがに涼し峯の松　宗養（同　）

河海眺望

此あたり目に見ゆるものみなすゞし　芭蕉（嗚野後集）

汐ごしや鶴はぎぬれて海涼し　同（類柑子）

小鯛さす柳すゞしや海士が妻　同（雪丸げ）

一心院にて

あら涼し鉦の音死ぬ一心院　鬼貫（俳諧七車）

夕薬師すゞしき風の誓ひかな　其角（五元集拾遺）

餞許六

木曾路とや涼しき味をしられたり　同（五元集）

眞如堂にて光明寺如山門叟

すゞしくも野山にみつる念佛哉　去來（去來發句集）

しだらくに寐れば涼しき夕かな　宗次（猿蓑）

涼しさ

涼しさやうか〳〵行けば行どまり　里東（笈日記）

涼しさや緡見ながら一寢入　如竹（[illegible]花）

涼しさや竿にもつるゝ釣の絲　蝶夢（類題發句集）

涼しさやよき恭に勝て肘枕　雨谷（[illegible]明鳥）

涼しさや髮結び直す朝機嫌　りん（古選）

夕涼

（[illegible]にて）夕涼や汁の實を釣る背戸の海　一茶（七番日記）

晩涼

晩涼や樓前すぐに伊萬里富士　月斗（同人）

夜涼

夕風がとけて來りし夜涼かな　同（同）

涼夜

ものたらぬ夕立ながら涼夜哉　同（同）

微涼

欄や海より微涼起しくる　同（同）

涼

水をかぶりし夜半の涼に寐たりけり　同（同）

涼味

頂上をきはめし山の涼味哉　同（同）

涼雨

雷が發して行きし涼雨かな　同（同）

夏の日（なつのひ）

夏日（かじつ）　日の夏（ひのなつ）

季題解說　夏の一日をいふ、時間的に表はせるもの、

實作注意　夏の日影を略して云へる夏の日は別項にあり、混同すべからず、

參照　天文　夏日影（ナツヒカゲ）

例句

夏の日

（旅行）夏の日を事とも瀨田の水の色　鬼貫（鬼貫句選）

（江ノ島）夏の日やさめて窟のいなびかり　嵐雪（玄峰集）

夏の日に懶き舶のもやしかな　同（同）

夏の日や疊の上のあぶら足　車庸（故人五百題）

夏の日や數寄屋大工の物靜　百明（同）

夏日

蝦蟆と化して夏日荷葉に聲（サウボン）　几董（新虛栗）

夏の曉（なつのあかつき）

夏の夜明（なつのよあけ）　夏の朝明（なつのあさあけ）　夏曉（かげう）

季題解說　夏の夜のあけがたをいふ、夜明・朝明なり。

實作注意　夏曉と音讀して用ゐるあれど、句多くは熟さず、參照　夏の朝（アサ）（ナツノ）

例句

夏の曉

夏酔や曉ごとの柄杓水　其角（五元集拾遺）

夏の夜明

麥蒸しのへらぬに夏の夜明かな　許六（五老井發句集）

岡風も寐させぬ夏の夜明哉　酒樂（心一つ）

人音のやむ時夏の夜明哉　蓼太（蓼太句集）

人行くや夏の夜明の小松原　子規（子規全集）

夏の朝（なつのあさ）

【季題解説】夏一日の朝なり。日いまだ高からず涼しき頃なり。

【實作注意】夏の曉と稍〻趣を異にす。然れども夜明をも、明けて後をも、夏の朝と詠めり 【參照】夏の曉

【例句】

夏の朝　冷しや燈火殘る夏の朝　藤羅（古今句鑑）

夏の朝　夏の朝祭のあとの錢拾ひ　南鷗（同人俳句集）

夏の夕（なつのゆふ）

夏の暮　夏夕　夏の夕

【季題解説】夏一日の夕暮なし 【參照】夏の宵　夏の夜

【例句】

夏の夕　夏の夕吹倒さるゝ風もがな　闌更（半化坊發句集）

夏のくれ　夏のくれたばこのむしの咄し聞　重厚（五車反古）

夏夕　雨後の傘四五人行くや夏夕　青々（妻木）

夏夕　宿坊につく山駕や夏夕　月斗（同人）

夏の夕　雲焼けて静かに夏の夕かな　虚子（ほとゝぎす）

夏の宵（なつのよひ）

宵の夏

【季題解説】夏の夜に入りて、いまだ間もなき時。

【實作注意】古語には夜をも宵と云へり。【參照】夏の夕、夏の夜

【例句】

宵月夜　おもふりて人なし夏の宵月夜　支考（蓮二吟集）

夏の宵　夏の宵門とざされし本願寺　地厚（同人）

夏の夜（なつのよ）

夜半の夏

【季題解説】夏一日の夜をいふ、

【實作注意】夜半の夏の、半は假借の文字にて、單に夜と同じく扱へるものと、夜なかに解することもありとあり、味讀すべし　三夏を通じて用ゆ。短夜は別項に説く、同一題に詠むべからず。【參照】夏の夕　夏の宵　短夜

【例句】

夏の夜　なつの夜や吾妻ばなしに月は西　宗因（梅翁宗因發句集）

夏の夜や崩れて明し冷し物　芭蕉（續猿蓑）

夏の夜や木魂に明る下駄の音　同（嵯峨日記）

夏の夜は[illegible]に瑞氣の起りけり　其角（五元集拾遺）

夏の夜を[illegible]に根みかな　同（同）

夏の夜

夏の夜は山鳥の首に明にけり　　　　青水（[illegible]）
夏の夜や焚火に簾見ゆる里　　　　　且藁（あらの）
夏の夜ゝ夢や菅家の詩の心　　　　　支考（蓮二吟集）
夏の夜や雲より雲に月走る　　　　　闌更（俳句全集）
夏の夜や背中合の戀後架　　　　　　一茶（[illegible]）
夏の夜や酢を買ふ女月に立つ　　　　成美（[illegible]）
夏の夜や茶の木の陰に敷むしろ　　　巣兆（曾波可里）
夏の夜は鍋釜もさゝず明けにけり　　吟江（[illegible]日記）
夏の夜やたゞ邯鄲のかり枕　　　　　立圃（[illegible]）
夏の夜や半ばに乾く洗ひ髪　　　　　臣女（[illegible]）

夜半の夏

水や出んこの大降りの夜半の夏　　　月斗（同人）

短夜（みじかよ）

夜短し（よみじかし）　夜つまる（よつまる）　明易き夜（あけやすきよ）　明易き宵（あけやすきよひ）　明易き闇（あけやすきやみ）　明易し（あけやすし）　明急ぐ（あけいそぐ）

古書校註　【滑稽雜談】夏の夜を短夜、明やすき夜などいへるは、立夏より前、清明の節（一）より晝ながく、夜短き也。就中夏至を最上とす。（略）古今集　夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一聲にあくるしのゝめ（二）　紀貫之。六百番歌合　短夜も鳥より後ぞ明やらぬ　老のねざめにもの思ふ身は　顯昭。

註（一）春分の次の節、四月五日頃。（二）東雲、曉。

季題解説　夏の夜の短かきを云ふ。春分より晝は次第に長く、夏至に至りては最も夜短し、明易き夜といひ、略して明易し、また、明急ぐとも云ふ。

實作注意　短夜の反對が日永なるべきも、俳句にては、日永は春也。短日（冬）の反對が夜長なるべきも俳句にては夜長は秋也。理窟にあらず、感情の上に於て春一日々々日永くなるを覺え、秋の夜の長きを感ずる爲に日永夜長を春秋に分類せり。這個の消息深く味ふべきなり。參照　夏の夜ナヨ

例句

短夜

短夜や驛路の鈴の耳につく　　　　芭蕉（もとの水）
短夜を二階へたしに上りけり　　　來山（續いま宮艸）
短夜や朝日まつ間の納屋の聲　　　其角（五元集拾遺）
みじか夜や隣へはこぶ蟹の足　　　同（同　）
みじか夜を寐あまるくせに宵寐哉　浪花（浪化上人發句集）
みじか夜や夫レ人間の遊ぶ時　　　北枝（北枝發句集）
　　舍羅送り來れるに
短夜の餘波や廿十ばかり　　　　　支考（蓮二吟集）
短夜を二十里寐たり最上川　　　　桃隣（古太白堂句選）
短夜や棚に鼠の明のこり　　　　　也有（蘿葉集）

みじか夜や蚤ほとゝぎす明のかね　同（同）
みじか夜や瓦に殘る月と星　同（同）
みじか夜のつのこ花かや紅畠　千代女（千代尼發句集）
みじか夜や芒生添ふ垣のひま　蕪村（新五子稿）
みじか夜の闇となりたる廿日かな　同（同）
みじか夜や金も落さぬ狐つき　同（遺稿）
みじか夜や地藏を切て戻りけり　同（落日庵句集）
短夜や化そこなひし地藏尊　同（同）
短夜や曉しるき町はづれ　同（同）
短夜やさゝら浪よる捨かゞり　同（同）
短夜や曉早き京はづれ　同（書翰）
短夜や浪うち際の捨篝　同（句集）
短夜や八聲の雞は八ツになく　同（落日庵句集）
みじか夜の闇より明て池の鷺　同（同）
短夜や眠らず守る翁丸　同（同）
短夜や思ひもよらぬ夢の告　同（夏稿）
みじか夜や吾妻の人の嵯峨どまり　同（同）
みじか夜や六里の松に更たらず　同（句集）
[illegible]
みじか夜や闇より出て大井川　同（[illegible]袋）
短夜や淺瀨にのこる水の月　同（月並發句帖）
みじか夜や淺井に柿の花を汲ム　同（書翰）
みじか夜や葛城山の朝曇り　同（同）
みじか夜や足跡淺き由井ヶ濱　同（蕪村句會草稿）
短夜やいとま給はる白拍子　同（句集）
みじか夜や毛蟲の上に露の玉　同（同）
短夜や同心衆の川手水　同（同）
みじか夜や枕にちかき銀屏風　同（同）
短夜や蘆間流るゝ蟹の泡　同（同）
みじか夜や二尺落ゆく大井川　同（同）
短夜や小店明けたる町はづれ　同（同）
短夜や一つあまりて志賀の松　同（同）
みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窗　同（同）
短夜や今朝關守のふくれ面　太祇（太祇句選）
みじか夜や旅宿の枕投わたし　同（同）
みじかよや東[illegible]に行くうき雲　同（同）
みじか夜や雲引殘す富士のみね　同（同）
みじか夜やむりに寐ならふ老心　同（同）

短夜

留守
短夜や妹がこむらの有あかし　几董（井華集）
みじか夜に敵の後を通りけり　同（同）
短夜や空とわかるゝ海の色　同（同）
みじか夜を四郎兵衛が假寐かな　同（同）
短夜や蟹の蛻に潮あらし　同（同）
題後朝
短夜や伽羅の匂ひの胸ふくれ　同（同）
短夜は犬の鼾に雀かな　同（同）
兵庫にて
短夜や蛸道のぼる米俵　同（同）
短夜の香をなつかしみひと夜菴　同（同）
短夜や老しり初る食もたれ　召波（春泥發句集）
みじか夜をしらで明けり草の雨　同（同）
短夜の獲見せうぞ桶の鯯　同（同）
短夜や宿立出て小石原　同（同）
わかれ路や今朝短夜の夢千里　樗良（樗良發句集）
みじかよや人現なき茶師か許　曉臺（曉臺句集）
月は月夜は短夜と別れけり　同（同）
短夜やいつ葬のかいわり葉　同（同）
みじか夜や闗屋に殘る笠の露　士朗（枇杷園句集）
みじか夜や宿直袋のあげおろし　白雄（白雄句集）
短夜をあくせくけぶる淺間哉　一茶（七番日記）
短夜をうれしがりけり隱居村　同（同）
短夜と思はるゝ也貴船川　蒼虬（蒼虬翁句集）
短夜や橋にほひ月はさす　成美（成美家集）
みじか夜はとてもかくても過ぬべし　同（同）
みじか夜や三味線草に蝶のかげ　巣兆（曾波可理）
みじか夜や玉江の蘆の一嵐　梅室（梅室家集）
短夜のあさむつ河を頂根かな　同（同）
みじか夜の滿月かゝる端山哉　乙二（をのえ草稿）
短夜やあけてたゞよふ月の雲　吟江（夢占）
短夜や耳につきたる雨の音　同（行雲日記）
短夜をふためき渡る鴉哉　同（夢占）
短夜やそだちかねたる瓜の蔓　同（心花）
短夜や人に追はるゝ夢心　同（同）
短夜になれて眼覺る旅寐哉　同（行雲日記）
短夜や淀のお茶屋の朝日影　雄山（續明烏）
短夜や朝飯出來て物靜　斗唫（同）

短夜や驛の飯に朝日さす　嘯山（新選）
短夜や今朝未澄まぬ小田の水　移竹（同）
短夜や翌また開かん竹の雨　成美（谷風草）
短夜や熊野詣のいとま乞　同（手習）
短夜や八幡の森の明烏　一己（翁反古）
短夜や四條あたりは宵ながら　素外（句鑑）
短夜や門たゝきあふ伊勢詣　成美（一陽）
短夜や耳もとすぐる馬士が唄　同（杉柱）
短夜を寐ぬや隣の鹿島立　同（谷風草）
短夜や山伏達の立いそぎ　也道（故人五百題）
短夜や寢返る窗の朝朗　明五（其雪影）
短夜に酒盛明る嫁入哉　玄化（半尾）
短夜や東雲ころのしづかなる　其誰（鶴音）

夜短かし

門立芭蕉庵

庵の夜も短かくなりぬ少しづゝ　嵐雪（あらの）
露ちりて急にみじかくなる夜哉　一茶（七番日記）
よる波の砂に濁りて夜みじかし　乙二（たのゝえ草稿）

夜つまる

行雲やだら／＼急に夜がつまる　一茶（七番日記）
夜のつまる峠の家の宿よさ哉　同（新集）

明易き夜

明けやすき夜の日三日や小磯宿　宗因（梅翁宗因發句集）

廿六夜待に招かれて

待かひや夜の埒もはや明やすき　鬼貫（俳諧七車）
明やすき夜をかくしてや東山　蕪村（句集）
明安き夜や住の江のわすれ草　同（新五子稿）
明安き夜や稲妻の鞘走　同（遺稿）
明やすき夜を泣兒の病かな　白雄（白雄句集）
明易き夜やすり鉢のたまり水　梅室（梅室家集）
明易き夜を拔出る名薑哉　鳥栖（新選）
明易き夜を芥の二葉かな　田福（其雪影）
吉島や但馬に夜の明易き　涼菟（類題發句集）

明易き宵

明やすき宵につるべの雫哉　蘆本（類題發句集）

明易き闇

明易き闇の小すみの柳哉　一茶（七番日記）

明易し

明易し川は夜行く舟の音　吟江（夢占）

明急ぐ

明いそぐ夜のうつくし竹の月　几董（井華集）

餘春（よしゅん）

【解説】夏に入りて尚ほ春の趣の存するを云ふ。日の光は既に初夏を思はす頃にありても、尚ほ漂ひ殘める山河の眺めにも、若葉ぶくれに逡巡と

して咲き殘る花に、、春の趣の殘れるを云ふ。

實作注意 殘春（春殘）とも餘春と均しく初夏の季題とせる書あれど、殘春は春の終りを云へるにて、殘花の春、餘花の夏とせらるゝに同じ。

例句

餘春

一片の雲なき空の餘春かな　月斗（同人）

鮒鰉近江は水に餘春哉　富竹雨（同）

棉のやうな雲わく山の餘春かな　桃村（同）

夜の秋（よるのあき）

季題解説 夏の土用に入れば、夜は北風吹きて涼しく、宛ら秋の如くなるよりかく云ふ。と記せる書あれど、よろしからず。

實作注意 俗に土用半ばにはや秋の風などの諺語より近時作られたる新題なるべきも、否定すべきなり。古人の夜の秋と詠ひたるものは、總て秋の夜のものなり。

玉蟲の活きるかひなき夜の秋　曉臺（臺稿）

月の後霜にしづけし夜の秋　定雅（椿花文集）

など秋の夜の句なり。

夏の空（なつのそら）　夏空（なつぞら）　夏の天（なつのてん）

季題解説 夏の大空を云ふ。

實作注意 或は雲多くして光強きを云ふとあれど、晴曇を論せず、三夏に通じて用ふべし。**参照** 梅雨空（ツユソラ）　梅天（バイテン）　炎天（エンテン）

例句

夏の空　雲かへぬ月や有明なつのそら　宗　長（壁　草）

[illegible]

佳詩まで帰へ果けり夏の空　嵐　雪（玄峰集）

夏の空ノへとして鳶二つ　月　斗（同　人）

夏空　夏そらや情をも出さず渡守　史　邦（小文庫）

夏空や廢れて高き煙出し　月　城（ほとゝぎす）

梅雨空（つゆぞら）　五月空（さつきぞら）　皐月空（さつきぞら）

季題解説 梅雨期の空合ひを言ふ。

實作注意 此の期に至れば空は陰鬱に曇りて毛の如き雨を降らし、地上に雲のたれこめて甚だ暗く、或は僅かに雲切れを見せる等此の期特有の空あひを呈するものなり。**参照** 夏の空、梅天、梅雨、時候　入梅

例句

梅雨空　梅雨空をうつせる水に網下ろす　朝　冷（同　人）

皐月空　木の下や闇をふたへの皐月空　也　有（蘿葉集）

梅天（ばいてん）　熟梅天（じゆくばいてん）　黄梅天（くわうばいてん）

古書校註

【年浪草】杜甫詩に云、南京西浦の道、四月黄梅熟し、湛々として長江(一)去り、冥々として細雨来る。(略)(二)潜確類書に曰、唐人成都を以て南京と爲す。則ち蜀中の梅雨は乃四月にある也。云々(三)是四月の梅雨を云ふ。(略)梅天、又には熟梅天、黄梅天とも云ふ。

註（一）揚子江。（二）以下俳文の自說。

季題解説 梅雨期の空。降りみ降らずみ陰鬱なる天候をいふ。**参照** 夏の空、梅雨、入梅

例句

梅天　梅天に鬱然たり千樟樹　月　斗（同　人）

夏日影（なつひかげ）

夏の日影（なつのひかげ）　夏の日（なつのひ）　夏の日出（なつのひので）　夏の朝日（なつのあさひ）　夏の夕日（なつのゆふひ）　夏の入日（なつのいりひ）

〔季題解説〕夏の日影をいふ。略して夏の日とす。炎熱燃ゆる如き夏の日射なり。夏の朝日、夏の夕日も亦可なり。

〔實作注意〕夏一日をまた夏の日と云ふ。夏の日光を專らとせるも、本項の夏の日なり。なつ日などいふは不熟なり。〔參照〕時候―夏の日ナガシ

〔例句〕

夏日影
朝顔の夏日影まつ閉の豆腐哉　杉風（[illegible]屋句合）

夏の日影
白雲のてりそふ夏の日影哉　宗祇（大發句帳）

夏の日
調和王（？）
川風や夏の日落る白の音　鬼貫（佛兄七車）
夏の日のうかんで水の底にさへ　同（同　）
夏の日の入相つらき雀かな　欺心（續虛栗）

夏の月（なつのつき）

月涼し（つきすゞし）

〔古書校註〕

【御傘】夏の三ヶ月夏のあり明いでずしに、夏月と申すは、みじか夜・涼しき・明やすき・あつき・卯花・橘・時鳥などを結び入れたる句を申す也。

【山の井】夕の影の涼しさをめで、いる事のはやきをおしみて、めぐるは扇車哉（一）とも、鳴門（二）や落すす月の舟（三）などもつらね、時ならぬ霜雪氷に見なして（四）、野山海川のけしきをも。

註（一）紋所の扇車に似た風車　（二）阿波の鳴門、急潮を以て聞ゆ。（三）大空を海に、月を舟に譬へて云ふ　又半ばの月の稱。（四）月の詞の條參照。

〔季題解説〕三夏を通じて、夏の夜の月をいふ。

〔實作注意〕俳句にては、單に月と云へば、秋季の定めなれば、夏の字を冠らしめ、又は、涼しの語をそへて、夏季とす。〔參照〕秋―月ツキ

〔例句〕

夏の月
宮の渡りにて
舟は七里三里さきにや夏の月　宗因（梅翁宗因發句集）
夏の月御油より出て赤坂や　芭蕉（向の岡）
蛸壺やはかなき夢を夏の月　同（陸奥衛）
手を打ば木魂に明る夏の月　同（嵯峨日記）
夏の月蚊を疵にして五百兩　其角（五元集拾遺）
明てのく家に伏見や夏の月　嵐雪（玄峰集）
蚊帳を出て又障子あり夏の月　丈草（丈草發句集）
われがねのひゞきも若し夏の月　北枝（北枝發句集）
米あれば雞あり里は夏の月　支考（蓮二吟集）
夏の月旅のかさでらいざぬがん　許六（五老井發句集）

たをれたる酒も醒けり夏の月　桃隣（別座敷）
釣竿の絲にさはるや夏の月　千代女（千代尼發句集）
市中はもの〻匂ひや夏の月　凡兆（猿蓑）
馬替ておくれたりけり夏の月　聽雪（春の日）
堂守の小草ながめつ夏の月　蕪村（夏より）
遠近に兵舟や夏の月　同（五車反古）
夜水とる里人の聲や夏の月　同（句集）
ぬけがけの淺瀨わたるや夏の月　同（同）
河童の戀する宿や夏の月　同（同）
石陣のほとり過けり夏の月　同（遺稿）
殿守のそこらをゆくや夏の月　同（同）
賊舟をよせぬ御船や夏の月　同（同）
寐くるしき伏やを出れば夏の月　同（書讃）
片道はかはきて白し夏の月　太祇（太祇句選）
掃流す橋の埃や夏の月　同（同）
橋落て人岸にあり夏の月　同（同）
あらはなる競の寐ざまや夏の月　同（太祇句集）
神鳴の上りし松や夏の月　几董（井華集）
古君の化粧上手や夏の月　同（同）
拔身戟と鞘のひかりや夏の月　同（同）
夏の月よき人加茂の歩わたり　召波（春泥發句集）
涼しさの比枝をのぼるや夏の月　同（同）
少年の犬走らすや夏の月　同（同）
ほのめけて[illegible]し時の君や夏の月　同（同）
檀林に談義果しよ夏の月　同（同）
夏の月平陽の妓の水衣　同（五車反古）
川向ひに見て居るは誰夏の月　樗良（類題發句集）
夏の月ぬれ〳〵しくも見ゆる哉　士朗（枇杷園句集）
太秦は竹ばかりなり夏の月　同（同）
慰に川渡りけり夏の月　闌更（半化坊發句集）
夏の月瀧の水上すゝのぼこ　同（新[illegible]音）
網もるゝ魚の光や夏の月　同（俳句全集）
雨雲にめぐりもあはで夏の月　月溪（續[illegible]歌仙）
裸にて時打行くや夏の月　雙駒（[illegible]）
石川や水を尋ねて夏の月　[illegible]太（[illegible]句集）
夏の月釣[illegible]て遠ひけり　同（同）
所望する僧のちからや夏の月　同（同）
みかき葉に[illegible]なりけり夏の月　白雄（白[illegible]句集）

夏の月　くちなはを吊しにたがふ夏の月　白雄（白雄句集）
町中をはしる流よなつの月　同（同）
雨持し杉の匂ひや夏の月　吟江（心花）
四ツからは町しづまりて夏の月　同（同）
遠浅の蛸出す暮る夏の月　同（挂蔵日記）
綱とけて流るゝ舟や夏の月　同（同）
戸口から難波がたなり夏の月　一茶（七番日記）
なぐさみにわらを打つ也夏の月　同（おらが春）
寐せつけし子のせんだくや夏の月　同（九番日記）
小むしろや茶釜の中の夏の月　同（嘉永板發句集）
庭中に階子のかげや夏の月　成美（成美家集）
砂濱や和布を打上て夏の月　同（杉柱）
魚市の跡掃立て夏の月　同（同）
夏の月むざと落たる野面かな　蒼虬（蒼虬翁句集）
夏の月苔の色なる青だたみ　梅室（梅室家集）
山人は山草かれや夏の月　乙二（をのゝえ草稿）
馬つなぐ川ぞひ廣し夏の月　瑳兆（恒誠）
月涼　月涼し蚊やりぞ夢のしるしかな　也有（蘿の落葉）
月涼し川岸に揚たる藻の光　丈州（たこなみ）
月涼し影すい〳〵と橋柱　左次（笈日記）

夏の星　星涼し

季題解說 夏の夜の星の總稱。燦々と涼しげなるを星涼しといふ。

實作注意 星祭は傳說のものなれども、秋の夜空の清澄により、種々の星座も燦々と輝き見ゆるなり、故に、星を秋季の題として、よかるべしと思ふ星月夜は古くより秋の季題なり。こは月夜の文字に重きを置きしものと解さるゝなれど、尤なり。**參照** 秋―星月夜

例句 夏の星　夏の星の顔なつかしも暮かゝる　鬼貫（鬼貫句選）
草枕の我にこぼれよ夏の星　子規（子規全集）
田の水に赤く映りぬ夏の星　月斗（同人）
星涼し　星涼し風のまに〳〵またゝきぬ　同（同）

夏の雲　夏雲　綿帽子雲　積雲

季題解說 夏の空に現はるゝ雲をいふ。

實作注意 夏の雲には變化多し、白く聳え立てる雲の峰、一天墨を流せる如き夕立雲、陰鬱極りなき梅雨雲、等は獨立せるもの別項にあり。夏の雲と

は普通一般の雲をいふ。【季題】五月雲（さつきぐも） 雲の峰（くものみね）

例句

夏の雲

懷古　大阪や霜幻の夏のくも　曉臺（曉臺句集）

小木の湊　夏の雲あやしや越を日の南　同（佐渡日記）

あれ夏の雲又雲のかさなれば　惟然（惟然坊句集）

參考　夏の雲と稱するものは、夏に特有な強い日射によつて生ずる雲を云ふ。此の種の雲としては積雲及積亂雲の二種を擧げる事が出來る。積雲は英名（Cumulus）と稱し、氣象學上では（Cu）なる記號で表はしてゐる。日射のため熱せられた地面に接してゐる空氣が、地面からの輻射によつて暖められて上昇し、次第に低温となり遂に凝結して水滴となつたものである。平坦な土地或は海上などでは其の上の空氣は殆んど同じ狀態にある故、上昇して冷却し雲を生ずる高さも略一定して居る。故に積雲の下部は切取つた如く平らである。而し其の上部は上昇に際して生ずる渦動の形を表はしムク／＼としてゐる。通常積雲は白い雲である故其の形から見て綿帽子雲とも稱する。而して其の平らな下底面の高さは一粁半位である。積亂雲は雲の峰或は入道雲と稱するものであつて雲の峰の項に詳説してある故其の項を參照せられ度い。

五月雲（さつきぐも）

梅雨雲（つゆぐも）

季題解説　陰曆五月の梅雨期の陰鬱なる雲をいふ。

實作注意　五月雲は梅雨期の雲のたゝずまひを云ひ、五月空はその雲のたゞよひに依り、醸し出される空合ひを云ふなり。【參照】五月空　夏の雲

例句

五月雲

町中の山や五月の上り雲　丈草（丈草發句集）

やゝ有て又のぼりけり五月雲　闌更（半化坊發句集）

めづらしや梅雨の中の峰の雲　晩山（古今句鑑）

梅雨雲

梅雨雲のきはしく切れて月夜哉　朔公（ほとゝぎす）

雲の峯（くものみね）

雲の嶺　阪東太郎（ばんどうたらう）　丹波太郎（たんばたらう）　比古太郎（ひこたらう）　信濃太郎（しなのたらう）　石見太郎（いはみたらう）

峰、雲いたゞき雲　積亂雲　入道雲（にふだうぐも）　雷雲（らいうん）　鐵砧雲　[illegible]

古書校註

【御傘】五月。六月照日の時分に、白雲の空にたかく峯のやうに[illegible]なるをいふ也。

【滑稽雜談】杜（一）が詩に曰、奇峯突兀として火雲升る。陶潜が詩に曰、夏雲奇峯多し。

註（一）杜甫。支那の人詩。

季題解說 夏日數々現はるゝ雲象、學術語は積亂雲と云ふ。棉の如き白雲の叢り立ちて、恰も峯の如く容ちづくれるものゝ稱なり。その姿、物凄き入道に似たるものあるより、俗に入道雲ともいふ。

實作注意 地方によりて異名多し。阪東太郎・丹波太郎・比古太郎・安達太郎・信濃太郎・石見太郎・黑ぐも・いたち雲・岸雲等とも云ふ。然し全般的ならざる稱へ、又は學術的の稱へは面白からざる場合多し。參照 夏の雲（ナツノクモ）

例句 雲の峯

今こゝに夕風おろせ雲の峯　宗因（三籟）

雲の峯いくつ崩れて月（ガツ）の山（サン）　芭蕉（花桶）

本間氏主馬が亭にまねかれしに、太夫が家を稱して

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峯　同（笈日記）

湖やあつさををしむ雲のみね　同（同）

嵐にも崩れぬものや雲の峯　鬼貫（俳諧七車）

寐てくらす麓の蟻蛾ぞ雲の峯　來山（續いま宮艸）

香薷散犬がねぶつて雲の峯　其角（五元集）

八雲たつ此輪奐をくもの峯　同（五元集拾遺）

夕ぐれや几ならびたる雲のみね　去來（去來發句集）

野社に太鼓うちけし雲の峯　北枝（北枝發句集）

鷹出の泡たつ空や雲の峯　支考（蓮二吟集）

前置に尾上の鐘や雲の峯　同（同）

國半や背川にうつる雲の峯　許六（五老井發句集）

てり附るさらしの上や雲の峯　同（同）

山寺や岩に負たる雲の峯　桃隣（古太白堂句選）

蟹や吐そこないて雲の峯　也有（蘿葉集）

何里ほど我目のうちぞ雲の峯　千代女（千代尼發句集）

雲の峯今のは比叡に似たものか　之道（[illegible]）

雲の峯石臼をひく隣かな　李由（韵塞）

地車に油さゝぬるや雲の峯　吟江（心花）

舟人の裸に笠や雲の峯　專吟（句兄弟）

雲の峯五百羅漢のあいま哉　青々（[illegible]）

動くともなくに暮るや雲の峯　[illegible]（續反古）

廿日路の背中にたつや雲の峯　蕪村（夏より）

飛のりの戻り飛脚や雲の峯　同（同）

雨となる戀はしらずや雲の峯　同（同）

蛤に口を明すな雲の峯　同（[illegible]發句合）

［參考事項］學名は積亂雲、英名 Cumulo nimbus 氣象學上では K.N なる記號を以て表はしてゐる。別名を雷雲、入道雲などと稱する。日射の強い時に起る激しい上昇氣流によつて生ずるものである。而して上昇勢力大なるときは十粁以上の高さに迄も達する。又上昇に際して極めて複雜な渦動を生じつゝ昇る故、此の雲の形もムク〳〵とした渦動の形を其の儘示してゐる。入道雲とは此の形から名付けた名稱である。

上昇氣流は日射が激しい程盛んとなる故、盆地の如く四圍の山からの反射により日射が特に激しい所では、上昇氣流も盛んであり、從つて積亂雲を生じ易い。故に此の雲は、日射の強い夏に特有な雲であり、然も盆地の上に現はれる場合が多い。卽ち夏期積亂雲が現はれる所は大體一定してゐる。夫れ故各地方により此の雲の現はれる所が一定してゐる事から夫々固有な名稱を附してゐる。武藏地方の阪東太郎、大阪地方の丹波太郎、播磨地方の黑ぐも、近江、越前の信濃太郎、九州の比古太郎等々は之れである。又大江丸の「先に立つ丹波太郎や道しるべ」も此の謂である。

積亂雲が上昇するに際しては雲を構成せる水滴は周圍の雲との間の摩擦により帶電し、其の電氣量は上昇に從つて增大する故、積亂雲が發達した際には其の中に多量の電氣が蓄積するに至る。雷雲の名は之れによつて附したものである。斯くて此の雲中の電氣は遂に他の雲或は地面との間に放電を起し電雷の現象を生ずる。

積亂雲が上昇する時は雲渦の形を示してムク〳〵としてゐるが、上昇勢力を失ふと頭が上層の氣流に流されて舌狀をなして擴がり、其の形は鐵鈷狀になる。故に此の形となつた雲を鐵鈷雲と稱する。鐵鈷雲が更に流されると其の行先に雷雨を生ずる。故に積亂雲を一名夕立雲とも稱する。

又積亂雲は強い日射はかりでなく、大火或は山火事などによつて烈しい上昇氣流が生じたときにも現れる。大正十二年九月一日關東大地震に伴つた大火災のため東京市及横濱の上空に現れた雲も積亂雲である。

夏の風（なつのかぜ）

夏風（なつかぜ）　夏の嵐（なつのあらし）　夏嵐（なつあらし）

［季題解說］夏の風・嵐をいふ。三夏を通じて吹くものゝ總稱なり。卽ち夏の

風一般に對していふ。

[實作注意] 夏期の風は、初め東南風多く、次で南風多し。嵐には往々雷雨・霖雨を伴ふことあり。別に獨立せる夏期の風の季題多し。[季題] 麥の秋風 南風 黒南風 茅花流し 筍梅雨 麥の秋風 土用あい 土用東風 ながし 黄雀風 山瀬風 御祭風 青嵐 風薫る 溫風 涼風

[例句]

夏風　夏風や粉糠だらけな馬のかほ　來山（續いま宮草）

夏の嵐　かしは山夏の嵐をうち見たり　白雄（白雄句集）

夏嵐　夏嵐机上の白紙飛びつくす　子規（全集）

星崎や俄しらみの夏嵐　青々（妻木）

[參考] 夏季は亞細亞大陸が日射のため強く暖められる故大陸上の空氣も暖められ、茲に大きな低氣壓部を生ずるが、之れに對して太平洋上の空はあまり暖められず、從つて大陸と相對的に太平洋上には高氣壓部を生ずる。而して空氣は地表近くでは高氣壓から低氣壓へと流れる故、夏季本邦では太平洋から、大陸へ向ふ風が吹く。即ち夏季は東或は南東、或は南風が吹くのが常で之れを夏の季節風と稱する。

南風（みなみかぜ）

大南風　南吹く　正南風

[季題解說] 夏の南風を云ふ。我國にての風は、四季に循環するを常とす。冬は北風多く、夏は南風多し。依て夏季とす。大南風は南風の強烈なるをいふ。

[實作注意] 南風を略して單に、みなみとも云へど、吹く或は強しなどの語を添へるべきものとす。又、はえの稱あり。九州大村灣に沿へる地名に、南風崎など云ふあり。[季題] 夏の風 黒南風。

[例句]

南風　島影に海綠すや南風　月斗（同人）

大南風　梅の澗に屯す蟹や大南風　青催（同）

大南風魚の平戸に魚なき日　蒲公英（同）

南吹く　傾けて葵の花を南風吹く　一我（ホトトギス）

黒南風（くろはえ）

白南風　荒南風

[古書校註] 【年浪草】梅雨中の空合をいふ也。譬へば、かきくらして（一）今も降るやうなる空のうちに、くまぶるけしきのあるを黒ばへといひ、又小雨降りなどから、折々、はれんとするけしきあるを、白ばへといふにや。夕がたに暮かゝる空の一しきり（二）晴れて、あからなるを夕ばへといふ心なるべし。

註（一）くらくなる。（二）一時。

季題解說　はえは南風なり。黑南風は、六月梅雨に入つて吹く南風をいふ。この風より天暗く梅雨降り續く頃となる。白南風は、梅雨晴るゝ頃より吹く南風をいふ。此風より梅雨晴れて天明くなる。荒南風は、梅雨中に吹く南風、荒くして航路危險なること多し。

實作注意　一說に、はえは映の意にて、梅雨のうち小雨降りながら折々晴れんとする景色あるを白はえと云ひ、空かき曇つて今も降るけしきの内に又晴るゝけしき有るを黑はえと云ふ。ともあれど白はえは梅雨晴の南風と氣象にて明かに云へり。**參照**　夏の風　南風　梅雨

例句

黑南風　黑はえにうろくづ匂ふ漁村哉　月斗（同人）

黑南風に水汲み入るゝ戸口かな　石鼎（ほとゝぎす）

白南風　白ばえや濱の出茶屋の柱組む　天高（同人）

白ばえや皮裂けたれしユーカリ樹　山丹（同）

茅花流し（つばなながし）

季題解說　陰暦四五月頃に吹く南風。ながしは南風なり。茅萱一名つばなの穗を出し、白き絮を著くる頃なり。**參照**　夏の風　南風　植物——茅花

例句

茅花流し　日の丘の光る茅花にながし哉　圭岳（同人）

筍黴雨（たけのこづゆ）

筍黴雨（たけのこづゆ）　筍流し（たけのこながし）

季題解說　初夏の頃天氣崩れ落ち、東南の強き風吹き來るを云ふ。これ支那東海にある高氣壓の東に移るに依る。筍流しとも云ふ。

實作注意　多くは雨を伴ふより黴雨の名ある歟。季語として面白し。春の菜種時雨と同趣の季題なり。**參照**　夏の風　人事——田植布子

例句

筍黴雨　旅衣じめと筍梅雨にあり　月斗（同人）

夕ばえの筍梅雨や翌も降り　同（同）

參考事項　梅中の時には三陸沖に高氣壓が發達して居る故、揚子江方面から本州へ進んで來た低氣壓に、此の高氣壓から冷たい北東風が吹く。之れを筍黴雨と云ふ。俗に田植布子と云ふのは、此の爽風のための寒きを呼んだものである。

麥の秋風（むぎのあきかぜ）

麥嵐（むぎあらし）　麥の風（むぎのかぜ）

季題考證　【年浪草】○文選に曰、暖風、宿麥を抽んず。○趙師民が詩に云、(一)麥天晨氣潤、槐の夏午風淸し。云云　是等の意、麥の秋風と謂ふ可きか。(略)○夫

木、御園生に麥の秋風ぞよめきて山時鳥しのびなく也　俊頼。

註（一）麥みのる頃の雨は氣ひろ〴〵とし、眞書には槐の木の枝を吹きわたる風が涼し。

季題解説 麥の黄熟する頃吹く風をいふ。麥嵐も同じ。

實作注意 麥の熟する頃は、空曇りがちにて、風自らもの淋しく、秋の如き感じあるを云ふとあれど、秋の文字に囚はるゝ要なし。要するに麥秋時の風、又は麥吹く嵐を云ふなり。麥の風にてもよし。參照　夏の風（ナツノカゼ）　時候―麥の秋（ムギノアキ）

例句

麥の秋風　在郷法師麥の秋風と讀れけり　言水（俳諧五子稿）
けさ麥の秋風立て袷哉　黒花（月影塚）

麥嵐　よき馬に乘あたりけり麥嵐　青女（其袋）
はなれ馬きのふ麥野の暴風哉　調柳（つゝきの原）
掃出て麥の穂のぼる嵐かな　歸朝（鶴音）

麥の風　晝眠る生麥村の麥の風　米旭（毅隨筆）
麥枯るゝ風が吹く也須磨の山　樗堂（萍窓集）

土用あい（どようあい）

季題解説 夏の土用中に吹く涼しき北風。俗に土用半にはや秋の風と云へり、これ等の風歟。（山陰・北陸・奥羽にては北風又は東北風をあいの風と云ふ）參照　夏の風（ナツノカゼ）　土用東風（ドヨウコチ）　時候―土用（ドヨウ）

例句

土用あい　岬の燈のまたゝき遠し土用あい　圭岳（同人）

土用東風（どようごち）

季題解説 夏の土用に吹く東風を云ふ。青東風（あをごち）は、土用中の空に一點の雲なく、青みたる天氣に、東風の吹くをいふ。參照　夏の風（ナツノカゼ）　土用あい（ドヨウアイ）　時候―土用（ドヨウ）

例句

土用東風　道々の涼しさ告よ土用東風　來山（五子稿）
うしろには涼しう負て土用東風　枳邑（藤首途）
土用東風天の川より吹やどり　乙二（をのゝえ草稿）

青東風　青東風の朝山拭ふ如きかな　月斗（同人）

ながし

季題解説 ある書に、土用中吹く朝風。上空は北より吹き、下空は南より吹く、とあれど一朗かならず。

實作注意 元來、ながしは南風の事にて、筍流し、茅花流し等用ゐあり。別項を見よ。參照　夏の風（ナツノカゼ）　茅花流し（ツバナナガシ）　筍黴雨（タケノコヅユ）

黄雀風（くわうじやくふう）

[illegible]

【滑稽雜談】同、(一)曰、仲夏長風(二)者を扇く。注に云、此節、東南常に風あり。黄雀長風と名くと。初學記に曰、五月、黄雀風にり。是の時海魚變じて黄雀となる。四五十日て之を名く。(三)是諸俗に云ふ竹の子折るゝ吹くなどいふ類にや。

註 (一)[illegible]の[illegible]土記を引く、故に此處は風土記による。(二)[illegible]吹くから吹きくる大風。(三)以下其諺の自說也。

[illegible] 陰暦五月に吹く東南の風。支那の俗に、この時、海魚變じて、黄雀となる、と傳ふ。[illegible] 夏。風なり。

例句
黄雀風　黄雀風畑の楠一つ落ちにけり　素石（雞 ）

山瀬風（やませかぜ）

[illegible] 近江琵琶湖邊にて、晩夏夜間に限り吹く風を云ふ。やませは、湖山の谷間ひた吹き通す涼風、ながせは、東南より吹き來るもの、ながせ氣ともいふ。せた嵐は、瀬田の流を廻りて吹くもの、之は四季共にあれども夏季に多し。[illegible] 夏の風なり。

長瀬風（ながせかぜ）　長瀬氣（ながせけ）　瀬田嵐（せたあらし）

例句
山瀬風　比枝の燈のまたゝき見ゆれ山瀬風　涼舟（同 人）
長瀬風　ざわ／＼と湖邊の蘆や長瀬風　同（同 ）
瀬田嵐　夕影に飛ぶ鮠鯆や瀬田嵐　同（同 ）

御祭風（ごさいかぜ）

[illegible] 夏の土用半ば頃、連續して東北より吹く風といふ、伊勢神宮の御祭ごろなれば此名あり。[illegible] 夏の風なり。宗教 伊勢の祭禮 志摩・伊豆の猟人の言なれば、全國的ならず。

例句
御祭風　御祭風吹く朝波高し女夫巖　圭岳（同 人）

青嵐（あをあらし）

[illegible]

【年浪草】俳名に曰、(晴)青嵐も、夏木立の梢の緑を吹あらすをいふにや。一說、六月土用中の空に、一點の雲なく青みたる天氣に、東風のくはゝりたるを青東風(一)といふ、無類の天氣也、是を青嵐といふと。云々

註 (一)[illegible]を參照。

季題解説 夏木立の梢を搖り動かし青葉を吹きあらす、清爽なる風を云ふ。

實作注意 必ず「あをあらし」と訓むべし。「セイラン」や、など音讀すべからず。又、青嵐は青東風と同じくに説けるもゝあれど、別個と見るをよしとす。

參照　夏の風　土用東風　風薫る

例句

青嵐

青あらし定まる時や苗の色　嵐雪（玄峰集）

長雨の雲吹き出だせ青嵐　素堂（類題發句集）

たが家の伊吹を軒の青あらし　支考（蓮二吟集）

うき雲や左右に分れて青嵐　史邦（小文庫）

北國や雪の中なる青あらし　樗良（樗良發句集）

むしろ取てたては舟ゆく青嵐　士朗（枇杷園句集）

人の知る曾我中村や青あらし　白雄（白雄句集）

沙川や梢をあはす青あらし　同（同）

山の邊や天蓼拾ふ青嵐　同（同）

蔦の巢の藁吹き散るや青嵐　吟江（行雲日記）

青嵐目を細めたる馬の面　乎石（故人五百題）

一つ葉もともにそよぐや青嵐　仙歡（梅首途）

橋立や海に一筋青嵐　雲裡（類題發句集）

青嵐瀧はたゞ落ちに落る哉　保吉（俳句全集）

燈籠の[illegible]れ色哀や青嵐　蓼太（蓼太句集）

芥子つゝじ散り交りけり青嵐　成美（いかに〳〵）

山[illegible]の淺[illegible]も過ぐ青嵐　乙二（[illegible]）

風薫る（かぜかをる）

薫る風（かをるかぜ）　薫風

古書校註

【滑稽雜談】唐太宗の詩に曰、薫風南より來り、殿閣微涼を生ず。呂氏春秋に曰、東南の風を薫風と曰ふ（一）六月に南より吹く風を云也。

註（一）其諺の自說也。

季題解説 中夏・季夏の晴れたる日、東南より吹き來る強からざる風。繁茂せる草木を渡つて、緑の夏の匂ふ心地のさるゝもの。風薫るとも云ふ。

實作注意 薫るとは云へど、實際には香はしきにあらざること、その爽快なるを稱せるものなり。一名「夏の風」。青嵐

例句

風薫る

風かをる羽織は襟もつくろはず　芭蕉（小文庫）

さゝ浪や風の薫の相拍子　同（笈日記）

風薫る

松杉をほめてや風のかをる音　同（同）

高紐にかくる兜や風薫る　蕪村（新五子稿）

青のりに風こそ薫れとろゝ汁　同（同）

風薫る奥の木立は何々ぞ　闌更（半化坊句集）

杉くらし五月雨山に風薫る　曉臺（佐渡日記）

風かをれ唐とやまとの墨の色　白雄（白雄句集）

（つゝじが岡）風薫る岡や空しき枝となり　同（しら葉）

川蟬の風かをるかと思ひけり　蓼太（蓼太句集）

風薫る森の木陰や弓の音　文波（五車反古）

心よや風薫る日の龍花　來道（古今句鑑）

風薫るまくらや小笠小風呂敷　巣兆（曾波可理）

文字書く墨の煙や風かをる　梅室（梅室家集）

風かをる墓や鞠場の茶の給仕　乙二（をのゝえ草稿）

薫る風

帆をかぶる鯛のさわぎや薫る風　其角（五元集拾遺）

薫るとはこゝらの風か袖が浦　桃隣（太白堂句選）

何の木にもまれて來るや薫る風　東皐（恒誠）

薫る風思はず足のとまりけり　岸指（俳諧新選）

薫風

薫風やともしたにかねつくしま　蕪村（新五子稿）

薫風やもよぎ匂ひの鎧ぬぐ　同（落日庵句集）

温風（をんぷう）

出典校註

【年浪草】月令に曰、季夏（一）の月、温風始て至る。

註（一）陰曆六月

季題解説

季夏に吹くあたゝかき風。曆七十二候の一、即ち陰曆六月節第一候に、温風至とあり。陽曆の七月七日頃なり。

實作注意

必ず音讀のことなり。風温しなど用うれば、春季のものとなる。

例句

温風

温風やあぶら蟲とる畑の菊　圭岳（同人）

涼風（すゞかぜ）

季題解説

季夏の頃より吹き初めて、涼しき熱氣なき風をいふ。

實作注意

俗に涼風が立つといふ。晩夏のものなり。風涼しと區別すべきものなれど、多く混同せらるるもやむなし、参照 時候—涼し

例句

涼風

涼風や虚空に滿て松の聲　鬼貫（鬼貫句選）

竹暮れて涼風渡る座敷哉　吐故（月夜）

涼風の通りて竹の葉音かな　嘯雨（新選）

延々の旅宿にて

涼風の鎮き森の宮居哉　樗良（類題發句集）

涼風や夏の白嶺を竹の上　闌更（同）

涼風や橋にそひ寝の伊勢参　巴水（北の山）

朝凪（あさなぎ）

季題解説 海岸地方にては夏期の朝、海風と陸風の交代のため無風狀態を呈すること多し。この風をいふ。〔参照〕夕凪（ユフナギ）

例句

朝凪の潮のぬくさを泳ぎ哉　圭岳（同人）

気象解説 同じ熱量を與へても、陸地は直ぐ暖まり高温に達するが、海は暖まり難く、従つて陸地に比して温度は低い。それ故日中陸地の方が海より高温にある間は、陸上の空氣は海上のよりも高溫になつてゐる。故に日中は、海上の高い氣壓の部分から陸地の低壓部へ、空氣が流れる。之れを海風と稱する。併し日没後になると、陸地は外界へ熱を放散して冷えるが、海の方は冷え難いため尚温つてゐる。それ故ある時刻になると陸上の空氣と海上の空氣とが略等しい温度になり、風が全く止んで仕舞ふ。此の時を夕凪と云ふ。神戸・大阪等瀬戸内海沿岸の夕凪の暑さは有名である。

深夜になると陸地が冷えるため陸上の空氣は比較的高い氣壓となり、海上の空氣は之れに比して氣壓が低い。それ故夕凪後は陸地から海の上へ風が吹く。之れが陸風である。暫くして日出後は陸地が暖まつて來る故、或る時刻に海上と陸上との空氣は等温となり、再び風が止む。之れが朝凪である。朝凪後は次第に陸地が熱せられて海風が吹き出す。好晴の日、特に夏には海岸地方に海陸風は必ず吹く。併し海陸風の範圍は狹いもので、平地では海岸線から十五粁位迄、高さは地上三百米位迄である。

夕凪（ゆふなぎ）

季題解説 海岸地方にて、晝間の海風より夜間の陸風に移り變る中間、一時風は全く絶え、木の葉さへ動かぬ、一種無風状態に還りたる時、氣界静穏となり、暑氣に耐へざることあり、これを夕凪と云ふ。夏日氣温の高きときに多し。

著名地方 長崎、關門、中國の夕凪など、有名なり。〔参照〕朝凪

例句

夕凪や行水時の裏通り　月斗（同人）

夕凪を南京町のにほひ哉　同（同）

夏の雨（なつのあめ）

古書校註

【栞草】五月雨をさみだれと云ひしことなれば、いへば夏の雨なれども、各一種の景

物となりたれば、たゞ夏の雨と云ふときは、其けぢめ(二)をたてゝ、常の雨の趣に、夏季のあへしらひ(三)あるべきなり。

註 (一)ふくめて。(二)區別。(三)とりあはす、取り添ふる。

季題解説 夏降る雨をいふ

實作注意 夏の雨といへば、夏季の雨の總稱なれど、陰鬱なる五月雨、車軸を流す如き夕立、その他特種のものにあらざる、普通の雨を云ふ。［參照］卯の花腐し　梅雨　五月雨　送梅雨　薬降る　虎が雨　分龍雨　夕立　喜雨　濯枝雨

例句

夏の雨

都さへ山水高し夏の雨　紹巴（大發句帳）
夏の雨蕣のまをなる岩木哉　宗長（宗長手記）
楢山や柴して戻る夏の雨　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
鮮ながら百合は臥けり夏の雨　雨邑（卯辰）
心すむ水ある上に夏の雨　闌更（半化坊發句集）
著ながらも洗濯したり夏の雨　一茶（句帖）
夏の雨忘れてゐれば日のあたる　青々（妻木）

卯の花降し　卯の花腐し

古書校註 【滑稽雜談】八雲御抄に曰、卯の花くだし、四五月の雨也。萬葉に春されば(一)卯の花くだしと讀めり。(略) 又堀川百首に、基俊の卯の花くだし五月雨ぞふる、とよめり。(二)今俗に四月の雨をいへり。

註 (一)春になると。(二)其說の自說也。

季題解説 陰暦四月に降る霖雨をいふ。卯の花の咲く頃、降り續くよりかく名づく。

實作注意 くだしはくたし也、くたし、くたすは腐し朽すの義。卯の花を此雨の腐らしむの意なるべし。［參照］夏の雨　梅雨　植物―卯の花

例句

卯の花降し

筍は伸びて卯の花腐しかな　虚子（ホトトギス）
月明り見せて卯の花下し哉　月斗（同人）
暮れてゆく池に卯の花降し哉　同（同）

梅雨

入梅　黴雨　入梅　梅雨　黴雨　梅の雨　黄梅雨　空梅雨

古書校註 【滑稽雜談】周處が風土記に曰、梅熟する時に雨ふる、之を梅雨と謂ふ。(略) (一)これ連俳には梅の雨といへり。俗につゆといふ。○(略)五雜俎に曰、閩人所謂入梅出梅と云ふは、乃黴濕之黴にして梅に非ず。(略) 時珍本草に曰、梅雨或は黴雨に作る。其衣を沾し及物皆黒黴を生ずるを言ふ也。(二)

間は本州が低氣壓の進路にあたる地方は凡て天氣が惡く、降りみ降らずみの陰鬱な日が續く。之れが梅雨の出來る譯である、暦面にも入梅の日と云ふのがあるが、之れは太陽の黄經八十度の日を指したもので氣象上の入梅とは關係が無い。梅雨は前述した理由で出來るもの故、何日から入梅であると云ふ定つた日は無い。出梅の日も同樣である。

時には北氷洋の氷の出來方、或は揚子江流域の日射の強さの加減で、三陸沖に高氣壓が出來なかつたり、揚子江流域に小低氣壓が發生しなかつたりする事がある。此の樣な時には梅雨を見ない場合もある。之れを空梅雨を稱する。

梅雨期は雨量も多いが濕度も多い故、特に黴を生ずる。故に梅雨の事を黴雨とも書く。又此の雨や曇天續きにて陰鬱に暗きを五月闇とも呼ぶ。

五月雨（さみだれ）

五月雨（さつきあめ）　皐月雨（さつきあめ）　梅霖（ばいりん）　さみだるゝ　五月雨傘（さみだれがさ）

古歌略註

【山の井】　さみだれはおのへ(一)の寺も水に近き樓臺となり、みやこの宮室も海中の龍宮城かとあやしまれ、庭の松も見る〳〵沖の藻にまがひ、井のうちの蛙も大海をしり、しよろ〳〵川も(二)大井川をあざむき、銀浪も地にうつすやうに、雲の波も軒をひたすかと思ふ心ばへ、はれまもあらずふりつづくていなどいひなす。

註　(一)峯の上にある。(二)小さい川の意。

季語注意

梅雨に同じ。陰暦五月に降る雨なるより五月雨とも云ひ、梅の實の熟する頃の霖雨なれば梅霖とも稱ふ

實作注意

五月雨を「さみだるゝ」「さみだれて」など自動に使ふもよし。夕立を「ゆふだつ」と使ふもよし。時雨を「しぐれけり」「しぐれよ」などもよし。然し、春雨・秋雨を、はるさめぬ、あきさめて、などは使へず。黄昏（誰彼）の名詞を、たそがれて、たそかるゝ、と動詞に使へるは、全然よろしからず。　參照　夏の雨（ナツノ）　梅雨（バイウ）　五月雲（サツキグモ）　五月闇（サツキヤミ）

例句

五月山

五月雨は汐風寒し磯の松　宗祇（大發句帳）

五月雨や日數の外の旅の宿　宗因（三籟）

五月雨は水草ならぬ草もなし　同（同）

五月雨に御物遠や月のかほ　芭蕉（續山井）

五月雨も瀬ぶみ尋ねぬ見馴河　同（大和順禮）

五月雨や龍燈あぐる番太郎　同（江戸新道）

五月雨に鳰の浮巣を見に行ん　同（笈日記）

五月雨にかゝれぬものや瀬田の橋　同（曠野）

五月雨は滝降うづむみかさ哉　同（信夫摺）

五月雨のふり殘してや光堂　同（烏の道）

さみだれのうつほ柱や老が耳　蕪村（句集）
さみだれや大河を前に家二軒　同（同）
さみだれや佛の花を捨に出る　同（同）
さみだれのかくて暮行月日哉　同（新五子稿）
五月雨や御豆の小家の寐覺がち　同（構文庵句會）
さみだれや名もなき川のおそろしき　同（遺稿）
五月雨や芋這かゝる大工小屋　同（落日庵句集）
五月雨の更行うつほ柱かな　同（同）
さみだれや夜明見はづす旅の宿　太祇（太祇句選）
五月雨や川うちわたす簑の裾　同（同）
さみだれの漏て出て行く庵かな　同（同）
さみだれや夜半に貝吹まさり水　同（同）
五月雨や頻に暮るゝ水の上　同（新選）
さみだれや船路にちかき遊女町　几董（井華集）
五月雨の猫も降べき小雨かな　同（同）
さみだれの夜け音もせで明にけり　同（同）
さみだれの石に鑿する日數哉　召波（春泥發句集）
五月雨や折〱出る竹の蝶　樗良（樗良發句集）
五月雨やひとりはなるゝ弓の弦　同（同）
さみだれや岸の山吹ふりしつめ　同（同）
さみだれがやめば屋ね掘る烏哉　士朗（枇杷園句集）
五月雨や一筋赤き沖の水　闌更（半化坊發句集）
五月雨やある夜ひそかに松の月　蓼太（蓼太句集）
さみだれや艪櫂にさはる蘆の音　同（同）
五月雨や田中に動く人一人　同（同）
五月雨の音を聞わくひとり哉　白雄（白雄句集）
五月雨や三味線かぢるすまひ取　大魯（五車反古）
五月雨や田舟の中になく蛙　存義（藏隨筆）
五月雨や昔井筒のありし跡　同（句鑑）
五月雨に眠らぬ臼の目切哉　鳥皮（續隨筆）
五月雨に結びわけたり繩簾　亀翁（雜談集）
五月雨や庭迯來る雲の脚　河星（新選）
五月雨や壁を力に立つしびり　夕市（北の山）
五月雨や思ひ直して玉櫛笥　歡夫（心一つ）
五月雨やけふもおくるゝ網の澁　温故（篇突）
五月雨やふくみ過たる筆の墨　鯉湖（鶉の音）
五月雨や茶碗にうつす酒の味　石語（同）
五月雨や蜈蚣のあがる緣柱　淩冬（心花）

さつきあめ

五月雨や蘆の上行淀の舟　太無　（太無庵句集）
五月雨や庭を流るゝ竹の皮　吟江　（心花）
五月雨や胸につかへる秩父山　一茶　（七番日記）
五月雨も仕廻のはらり／＼哉　同　（同）
五月雨や線香立したばこ盆　同　（同）
さみだれや屑など叩く火吹竹　同　（句帖）
五月雨の竹にはさまる在所哉　同　（嘉永板発句集）
さみだれの中に三度のけぶり哉　成美　（成美家集）
味噌水もさみだれくさくなりにけり　同　（同）
さみだれや苔かつしかは藪の陰　同　（同）
五月雨や西もひがしも本願寺　同　（同）
五月雨や葵のさくを見つゝ経る　同　（厚薄）
五月雨や旅に寐やぶる黒小袖　同　（谷風草）
五月雨や眞野の長者の菅を刈　巣兆　（曾波可理）
五月雨や枕もひくき磯の宿　蒼虬　（蒼虬翁句集）
五月雨やふしぎに烟る山の家　同　（同）
さみだれの果ぬ匂ひや茗荷竹　同　（同）
さみだれや薬守の神もおはす庭　乙二　（をのゝえ草稿）
髪はえて容顔青し五月雨　芭蕉　（続虚栗）
日の道や葵傾く五月雨　同　（猿蓑）
さつき雨たゞふるものと覚えけり　鬼貫　（鬼貫句選）
獨り居
篠木や人馬へだつる五月雨　其角　（五元集）
六尺も力おとしや五月雨　同　（五元集拾遺）
三味線や寝衣にくるむ五月雨　同　（同）
燕もかはく色なし五月雨　同　（同）
山鳥のほろ／＼なきや五月雨　嵐雪　（玄峯集）
伏見竹町
行燈で来る夜逃る夜五月雨　同　（同）
湖の水まさりけり五月雨　去来　（去来発句集）
つゞくりもはてなし坂や五月雨　同　（同）
空も地もひとつになりぬ五月雨　杉風　（杉風句集）
山きしに舟橋のこして五月雨　浪化　（浪化上人発句集）
二三日蚊帳にほひや五月雨　同　（同）
かれをの味なき中や五月雨　木節　（類題句集）
牛流す村の騒ぎや五月雨　蘭竹　（蕉翁俳諧集）
髪そりや一夜に錆て五月雨　凡兆　（猿蓑）
五月雨互ひにとはぬ壁隣　楚舟　（別座敷）
床低き旅のやどりや五月雨　蕪村　（新花摘）

うきくさも沈むばかりよ五月雨　蕪村（新花摘）
濁江に鵜の玉のをや五月雨　同（同）
小田原で合羽買たり五月雨　同（同）
閼伽桶に何の花ぞもさつきあめ　同（同）
あか汲て小舟あはれむ五月雨　同（同）

畫賛の圖に
昆布で葺軒の雫や五月雨　同（同）
さつき雨田毎の闇となりにけり　同（句集）
秉燭して廊下過るやさつき雨　同（蓮句會草稿）
湖へ富士をもどすやさつき雨　同（句集）
つれづれに水風呂たくや五月雨　太祇（太祇句選）
物あぶる染どのふかし五月雨　同（同）
旅人に曾我の里とふ五月雨　同（同）
鹽魚も庭の雫やさつきあめ　同（同）
一日はものめづらしき五月雨　同（同）
額にゝ蚋のしめりや五月雨　召波（春泥發句集）
笠に入燈うつりけりさ月雨　同（同）
鹽鮭のあぶらたるなり五月雨　曉臺（曉臺句集）
行方なき蟻のすまひや五月雨　同（同）
鳥の子の卵出しよに五月雨　同（同）
燐ともしでなつかしさつき雨　同（同）
ひとしたゝ鷺の白さよ五月雨　士朗（枇杷園句集）
ひたひたと著物身につく五月雨　闌更（半化坊發句集）
假そめに降出しけり五月あめ　白雄（白雄句集）
八專のうちぞともいふ五月雨　同（同）
降うちに降出す音や五月雨　玉東（明烏）
鹽貝の水の濁りや五月雨　嘯山（新選）
ぐづぐづと夜に入にけり五月雨　三笑（同）
寝かへれば壁こそ匂へ五月雨　素丸（百番句合）
夜の戸に槇の礫や五月雨　宗瑞（同）
漏刻の音もつるさし五月雨　太無（太無句集）
川へ來る沖の鷗や五月雨　同（同）
旅人や川筋のぼる五月雨　北雁（鶴の音）
鳥原の潟あみは遲し五月雨　都堂（京水）
篝火に門開見えたり五月雨　寶馬（句鏡）
貝わく藪もうらしや五月雨　一龍（故人五百題）
持溜とうしろ合や五月雨　一茶（七番日記）
衣の間へ毛抜かす也五月雨　同（句帖）

とふかく契りし人なれば其別れを悲みて、涙に雨をふらす。故に云ふ。（略）中華にも舜王の妃、娥黄・女英（一）、舜の別をしたひ、湘浦の竹を染て、涙の痕、斑となり、楊妃（二）が涙は凍つて、紅氷となるの説おもひ合すべし。

【栞草】虎は祐成討死の後尼となり、所の翁を案内にて、井手の屋形のほとり、祐成の最期の跡を見て、いとゞ歎きにしづみつゝ、露とのみ消にし跡を來て見れば尾花が末に秋風ぞ吹く　此歌曾我物語卷の十二に見えたり。

註（一）娥皇（黄は誤りて）と女英は共に堯の二女にして舜の二妃　（二）楊貴妃、唐の玄宗に愛せられ、安祿山の亂に殺さる。楊は姓、名は太眞、貴妃は女官の名

季題解説　陰暦五月廿八日に降る雨、之を虎が涙雨といふ。虎御前は大磯の遊女、和歌を巧みにす、曾我祐成と相親しむ　祐成仇を報じて死するに及び、尼となつて其の冥福を祈り、大磯の高麗寺に住せりと、即ち五月廿八日は祐成討死の日、虎の悲涙變じて雨となれりと傳ふ。〔季題〕夏の雨なり

例句

虎が雨

川留の伊東どのやな虎か雨　太祇（太祇句選）
つもるなら石に成べし虎が雨　殘馬（去來記）
思ふなら是程思へ虎が雨　如駱（小弓集）
澤瀉に降を泪か虎か雨　阿誰（新選）
夜の音は根に似たり虎が雨　成美（一閑）
石にしむ思ひは悲し虎が雨　同（同）
塗笠に浮しみ入るや虎が雨　同（同）
五月雨にひと日わりなし虎の雨　蓼太（蓼太句集）
雛が啼翌日はかならず虎が雨　巣兆（曾波可理）
降るもの ゝ中に浮名や虎が雨　一峰（類題發句集）

虎が涙

年ふれば虎もなみだや忘れ草　鬼貫（仏兄七車）
五月廿八日雨降らざりければ

分龍雨（ぶんりゆう）　隔轍雨（かくてつう）

季題解説　一に隔轍雨といふ。支那にて陰暦五月の驟雨の稱　漢書に、言二夏雨多至一、龍各分レ域、雨暘往往隔二一轍一而異也とあり。〔季題〕夏の雨なり

夕立（ゆふだち）　白雨（ゆふだち）　よたち　夕立雲（ゆふだちぐも）　夕立晴（ゆふだちばれ）　夕立風（ゆふだちかぜ）　初夕立（はつゆふだち）　白雨（はくう）

古書校註

【御傘】夕立を白雨と書く事は天滿の森、由己法橋、山谷が詩にあると申されしかば、丸が執筆の時書初し文字なり。

季題解説　よたちともいふ。夏の日一天俄かに暗く、墨を流せし如き雲（夕立雲といふ）の襲來して、盆を覆すが如く沛然と至る驟雨をいふ　多くは

晝間の暑熱に蒸發せる水氣の夕方の涼氣に凝縮して雨となるもの、夕だつ雨の意、略して、夕立と云ふ。而して間もなく晴るゝ特性を持てるもの、この晴れを夕立晴といふ。

實作注意 古來夕立に白雨の字を用ゐられ居るも、白雨は一に雹の義なれば用ゐざるをよしとす。 **參照** 夏の雨の

例句

夕立

夕立にことよせてとふ舍り哉　宗因（三籟）
夕立や隣在所は風吹いて　鬼貫（鬼貫句選）
夕立にやけ石涼し淺間山　素堂（俳諧五子稿）
ゆふだちに驚あつく鳴音哉　其角（五元集）
夕立にひとり外みる女かな　同（同）
牛島三圍の神前にて、雨乞するものにかはりて
夕立や田を見めぐりの神ならば　同（同）
夕立や法華かけ込むあみだ堂　同（五元集拾遺）
夕立や洗ひ分たる土の色　同（同）
夕立や籏ちひさき草の原　同（同）
ゆふだちや樂屋をかぶる傀儡師　同（同）
夕立や家をめぐりて啼く家鴨　同（同）
蓼の庵
夕立や障子かけたる片ひさし　嵐雪（玄峰集）
夕立に走り下るや竹の蟻　丈草（丈草發句集）
夕立や蓮開はづす日の夕　史邦（猿蓑）
夕立は晝にかゝる風の姿哉　越人（三歌仙）
夕立や川追ひあぐる裸馬　正秀（葛松原）
夕立のあと見て廻る山田哉　子珊（別座敷）
夕立にさし合せけり日傘　猶候（續猿蓑）
夕立や智惠さまぐ\の冠物　乙由（麥林集）
夕立やあるが中にも紙帳賣　立澤（向の岡）
夕立に見しや仁王の臂の穴　蟻道（伊丹生俳諧）
夕立や貴人乳母の雨やどり　許六（五老井發句集）
夕立や草葉を掴むむら雀　蕪村（續明烏）
雙林寺獨吟千句
ゆふだちや筆もかはかず一千言　同（句集）
夕立や見のはへたる明後　同（手紙）
夕立や若殿原のうつくしき　同（夜半叟句集）
夕立のはれゆく峯や上の町　太祇（句稿）
ゆふだちや落馬もふせぐ旅の笠　同（句選）
夕立や扇にうけし下り蜘　同（句選後篇）
夕だちや傘を惜す世は情　几董（井華集）
ゆふ立すよみかへりたる驛馬　同（同）

夕立

夕だちやけふのあゆみも未申　几董　（井華集）
（いふも亦牛の貝こ[illegible]）
ゆふだちや市の中ゆくさゝら波　召波　（春泥發句集）
君王のゆふだち疑ふ幸かな　同　（同）
夕立や只一押に野べの灰　曉臺　（曉臺句集）
見つゝゆけば夕立きえぬ清見潟　同　（同）
夕立や一棹岸へならぬ舟　同　（同）
夕だちや頓て火を焚藪の家　士朗　（枇杷園句集）
夕立ちや地には青田の篠をつく　蓼太　（蓼太句集）
夕立や日の照る山を目がけ行　同　（同）
夕立やひかり混らつ伊駒山　同　（同）
夕立に跡方もなし雲の峰　正白　（續明烏）
夕立に先だつ風の鳥かな　乘燭軒　（小弓俳諧集）
夕立や横川の杉の嵐より　事紅　（竪並）
夕立て野飼の牛の戻りけり　雲魚　（新選）
夕立や遠目に馬もぬれ鼠　存義　（句鑑）
夕立や梟も目のさめし顏　萬古　（同）
夕立のあとやきよろりと墓　米儀　（蝦隨筆）
夕立や盡開の蟹のかけ走　吟江　（行雲日記）
夕立や留守して家に只一人　同　（蓼占）
夕立に猶匂ひ出るうはら哉　不中女　（北の山）
夕立や花の流るゝ瓜畠　素影　（月影塚）
夕立にしばらく土の匂ひ哉　德爾　（明烏）
夕立に火を忘れし鵜飼哉　素行　（新選）
夕立や鉢巻したる渡守　仙化　（續虛栗）
夕立やいとしい時とにくい時　しづか　（玉藻集）
ゆふだちやまたあらために百日紅　成美　（成美家集）
（題　夜半明）
夕立や家こし車の雨そゝぎ　同　（同）
夕立や耳の底なる雞のこゑ　同　（同）
夕立にから臼しばし踏やみぬ　同　（厚薄）
（自らあはれむ）
夕立や老が袴の見ぐるしき　同　（同）
夕立や砂はねかゝる筵のくま　同　（いかにく）
夕立や加茂の社に人見えず　同　（手習）
夕立やいたゞく桶もぬけるほど　巢兆　（曾波可理）
待わびし夕立そたへたかりけり　蒼虬　（蒼虬翁句集）
ゆふ立の過るや森の夕神樂　同　（同）
夕立のあとで暮る〻弁の音　同　（同）

夕立雲　蓄積な雲を立のぼしめ哉　鼠卜（小弓俳諧集）
　島々をりゝみかくして夕立雲　月斗（同人）
夕立晴　風そひて夕立晴る野中哉　白雄（白雄句集）
　學校の唱歌聞えぬ夕立晴　月斗（同人）
夕立風　今切や夕立風の潮ざかひ　許六（五老井發句集）
　棹みむ餘所に夕立つあまり風　太祇（同）

參考　夕立は雷雨又は白雨、俗稱であつて短時間に豪雨を降らし電雷を伴ふ夏期に多い雨を云ふ。主として午後に降る故夕立の名が冠せられたのである。夕立の如く短時間に强雨を降らす樣な雨を村雨性の雨と云ふ。夕立は二時間以上も降る事は極めて稀で通常一時間以内で止む。

夕立は稀には冬季にも降ることはあるが、多くは晩春から夏期にかけて起る。夏期日射が强くなる結果として地面が熱せられる結果、其の上の空氣も暖められて上昇する。斯く上昇氣流が盛んになれば上空には雲を生ずるが、此の時に生ずる雲は夏期ならば特に日射が强いため積亂雲となる。さうして盆地の如き處は四圍の山腹からの輻射が加はるため特に熱せられ、其の結果として勢力の强い小低氣壓を生ずる。

此の小低氣壓が襲ふ所は即ち夕立を生ずるのである。此の低氣壓を生ずる時の上昇氣流は極めて旺盛であつて、上空に昇り冷却して水蒸氣が小さな水滴となつても未だ上昇を續けるため、水滴と周圍の雲との摩擦により帶電する。故に斯かる雲中には多量の電氣が蓄積される。而して此の電氣は遂に他の雲及び地面との間に放電して電雷を生ずる。夕立に雷を伴ふのは斯かる理由による。

通常日射の最も强い時刻は正午頃であるが、空氣が最高溫度に達するのはそれより遲れ午後の二時頃である。從つて夕立を伴ふ小低氣壓が發達するのは此の頃である。東京あたりでは甲府盆地、日光、上州方面に生じた熱源小低氣壓が襲來するのは大低午後四時から六時頃であつて、所謂夕刻である。夕立の名之れに依つて附せられたものであらう。

喜雨（きう）

古書校註　【滑稽雜談】　荊楚歳時記に曰、六月、三時の雨あり、田家以つて甘澤（一）となし、邑里（二）相賀す。故に喜雨と曰ふ。

註　（一）滿足する恩澤、有難い恩恵。（二）村里の人々の意。

季題解說　夏土用の頃は、多く旱天うちつゞき、草木生氣を失ひ、稻草ために枯死せんとすることあり。農家しきりに雨を望む時、沛然として降り來る大雨をいふ。雨を喜ぶの義なり。此時農家業を休みて喜びの酒など用ふ、これを雨喜び（人事）と云ふ。［參照］夏の雨（六ノ）　夕立（ユフダチ）

例句

沛然と喜雨至り芭蕉震ふ哉　月斗（同人）
喜雨一瀉地上のもの丶蘇り　同（同）
喜雨の田に一人も居らず休みけり　英介（同）

濯枝雨（たくしう）

古書校註　【滑稽雜談】周處が風土記に曰、仲夏濯枝(一)川を盪(二)す。註に云ふ、此節常に大雨あり、濯枝と名く。(三)是も五月雨の類にや、考ふべし。

(一)陰暦六月の大雨　(二)あらふ。川にみなぎり流るゝを云ふ。　(三)以下其諺の自説也。

季題解説　支那にて陰暦六月にある大雨を云ふ。漢書に、「六月有二大雨一名二濯枝雨一」とあり。　参照　夏の雨（ナツノアメ）、夕立（ユフダチ）

富士の初雪（ふじのはつゆき）

季題解説　毎年陰暦六月十五日頃に降る富士山の初雪。傳へいふ、富士の雪は六月十五日に消えて、其夜直ちに降るといふ。

實作注意　富士の初雪は日の限れるにあらず。雪解の其夜直に雪降るに限れるにあらず。實際を詠むべし。　参照　冬―雪（ユキ）

例句

富士の初雪
其夜降る鼠の鹽や富士の雪　旨原（分類俳句集）
其夜降る佛の御名や不二の雪　不言（米思）
米仲は六月望に歿す

夏の露（なつのつゆ）　露涼し（つゆすゞし）

古書校註　【年浪草】露は秋最も多し。故に連俳通じて秋となす。然れども、夏も亦有り、故に涼の字を加へて夏季となす。

季題解説　夏期の露をいふ。露涼しは、夏の朝草葉などに見て、露の涼しげなるに云ふ。

實作注意　俳句にて、露と云へば、秋季の定めなれば、夏のものには、夏を冠らしめ、涼しの語を添へて、詠ふべし。　参照　涼し（スズシ）　秋―露（ツユ）

例句

夏の露
東雲や西は月夜に夏の露　來山（續いま宮草）
宮城野や色なき風に夏の露　曉臺（しをり萩）
夏の露蓮が底の廣葉かな　盧子（ほとゝぎす）

露涼し
露涼しぬる間や夏の朝柏　宗長（宗長發句帳）
露涼し蹟の草の朝月夜　月斗（同人）
滿園の露涼し朝日山よりす　同（同）

夏の霜（なつのしも）

古書校註

【栞草】朗詠　月、平砂(一)を照らす、夏の夜の霜云云。この詩より、夏の月影を霜に見たてゝ(二)哥にもよめり。

【御傘】夏の詞入りては降物(三)たる可らず。是新式(四)の文意也。(略)此月の霜雪はかりに夏の季ならば、降物にあらずと筆を加へらるゝに付て知ぬ。秋にても同じ事也。夏秋は雪のふらぬときなれば、月の影の雪に似たるといふばかりにて、降物にならずと云へり。しからば夏秋の句にてあらずば、たとひ月の影の霜雪にまがひたる句なり共冬に成る。

註　(一)白居易の「江樓夕望」の一句。平ひらな砂原。(二)宇治百首「夏のよめむすへる霜とみゆるまで袖に涼しき月の影かな」(資季)、後撰集「今宵かく詠る袖の露けきは月の霜をや秋とみつらん」(讀人不知)。(三)天よりふりくる物、雨、雪等の類。(四)連歌新式の略。

季題解説　夏の夜の月の照りて、白々と霜の置きし如く見ゆるに、擬らへていへる詞。眞の結べる霜にあらず。参照　冬—霜（シモ）

例句

夏の霜

足跡のなきを首途に夏の霜　　一禮一周忌　鬼貫（俳諧七車）

降るにあらず消ゆるにあらず夏の霜　　闌更（半化坊發句集）

寐覺して團扇すてたり夏の霜　　青々（寶船）

夏の霧（なつのきり）

夏霧（なつぎり）

季題解説　單に霧は秋なり。夏の語をそへて夏季のものとす。

實作注意　夏の霧は主として高峰谿谷に生ず。忽として湧き飄と散ずるもの、その襲來凄愴にして咫尺を辨ぜす、濕度强く、寒し。又北海方面にては、夏期屢々濃霧に閉さるゝ事あり。方言じりと云ふ。参照　秋—霧（キリ）

例句

夏の霧

東の間に沼をつゝみぬ夏の霧　　雄勝峠を越ゆる時　天香（同人）

夏霧にぬれてつめたし白き花　　乙二（をのゝえ草稿）

夏霞（なつがすみ）

夏の霞（なつのかすみ）

季題解説　夏に棚びける霞。多くは春季のものより淡し。

實作注意　霞は四季に亙りてあれど、春に多く、從つて單に霞と云へば、俳句にては春の季とす。夏のものには、夏の字を冠らして季節を現はすべし。

例句

夏霞

夏霞飛魚光る海光る　　月斗（同人）

夏霞脚下に碧き吉野川　　同（同）

翠巒を湖の向ふに夏霞　　裸馬（同）

虹（にじ）　朝虹（あさにじ）　夕虹（ゆふにじ）　虹立（にじた）つ　虹の帶（おび）　虹の梁（はり）　虹の橋（はし）

古書校註

【三才圖會】　虹、地に下りて或は井を飲み、或は池を飲む。或は首を蓮（一）に垂れて飲食を吸ふと。（略）甚妄説也。天文書に云ふ、虹蜺（二）は日の氣下り垂れて地下の熱氣を吸動して則、旋洄（三）して起る。其處或は井に値り（四）池に値る。之を見る人以爲らく、虹能く水を吸ふと。實は水を吸ふに非ざるなり。

註（一）竹席、轉じて疊きしきもの。（二）にじ。（三）うづまきわき出づ。（四）あたる。

季題解說　夏季、驟雨の後などに最もよく大氣中に現はるゝ現象。反橋の如く七彩の半圓形に立ち、朝には西、夕には東と、太陽の反對方面に現はる美しき天象を云ふ。

實作注意　虹は春夏に多く立てど、夏季最も多く、依つて季とす。春季のものは、初虹、春の虹といふ。虹立つと云ひ、虹の帶、虹の梁と形容す。また「朝虹は雨、夕虹は晴」と諺にいふ。**參照** 春—初虹（ハツニジ）

例句

虹　虹たるゝもとや樗の木の間より　召　波（春泥發句集）
　　虹たちてなほ降る雨や嵐山　佳　村（ほとゝぎす）

參考　虹は半圓形の色帶で、太陽を背にして立つたとき前面の雲中へ現はれるものである。飛行機などで高空へ昇ると下の雲中へも虹を生ずるが此の時の虹は圓形の全貌が見られる。

雲は小なる球狀水滴が無數に集合して出來たものである。若し此の水滴へ日光が入射すると、水滴内で二回の反射をなし再び外部へ射出される。然も此の時三角稜へ入射して出た日光と同樣、水滴を出た光は日光のスペクトルたる七色に分れる。斯くして水滴を出た日光中最小の偏角を以て出た光が最も優勢であるから、其の其の方向に我々は強い光を見ることが出來る。此の方は各色の光により少し宛異る故我々は七色の光の配列した色帶を前面の雲中に見ることが出來る譯である。而して通常の虹は内側が紫色、外側が赤である。所が時には通常の虹の外側へ同心圓をな

した弱い光の二次虹が現はれる事がある。此の虹に於ける光の配列は通常の虹と逆になつてゐる。

雹(へう)　冰雨(ひさめ)

【季題解説】霰の層を重ね、結晶して堅く大なるもの。豆粒大を普通とすれど、時に拳大のものもあり。夏日雷雨に伴うて降ること多く、田畑の作物を損し、硝子屋根などを破ることあり。

【實作注意】雹を冬季とするもの、或は雹の古名は、冰雨(ひさめ)なるより、冰雨を霙の如き雨とし、冬季に詠める者あれど、否なり。雹は夏季のものとす。

【例句】
雹　雹いたる草木悲しき叫び哉　月斗(同人)
　　雹晴れて豁然とある山河哉　鬼城(ホトトギス)

【參考記述】雲中から降る氷塊である。主として雷雨に伴ふものである。大きさは豆大から卵大のものがある。雹塊を切つて切斷面を見ると中心には雪を壓し固めた樣な白色の核心があり、此の核を包む透明な氷層があり、更に固雪の如き不透明な氷層等、幾多の氷層が同心狀をなして交互に重なり、三層から五層位ある。而して透明な氷層も通常の氷の如く一つの連續した層でなく多くの小氷片の集合したものである。又不透明な氷層は粗な氷片の集合したもので中に無數の氣泡を含んでゐる。
元來空氣は上層に行くに從ひ低溫となるが、然し一樣なものでなく幾多の層狀をなしてゐる。即ち地上千米位迄は普通の空氣層であるが千米から三千米迄は水滴の浮遊してゐる層があり、三千米から六千米の間には氷點下に冷却された過冷却の水滴層があり、更にそれより上には雪粒が浮遊してゐる層がある。
地上から昇騰して行つた水蒸氣は途中で冷され凝結して水滴となり、更に冷され氷點下となつても容易に氷結せず、所謂過冷却の狀態となつて更に上昇してゆく。然し氷點下二十度以下に達すると遂に水滴のまゝでは居られず氷結する。通常此の氷結は六千米以上の雪層中で起るから此の雪が氷結した水滴に附着して固い氷塊となり落下して來る。此の落下して來る氷塊が過冷却の水滴層を通過すると其の水滴が氷塊に氷結し、斯くして雹を生ずる。故に斯かる種々な空氣層が多く存在する程雹塊を作る氷狀層の數も多くなる。雹は雷雨即ち夕立に伴ふ事が多いが、之れによつて農作物に被害を與へ時には人畜にも損傷を與へる。

雷(かみなり)　神鳴(かみなり)　いかづち　はたゝがみ　鳴神(なるかみ)　遠雷(ゑんらい)　とほがみなり　雷(らい)
迅雷(じんらい)　疾雷(しつらい)　雷雨(らいう)　落雷(らくらい)　雷火(らいくわ)　雷鳴(らいめい)　雷聲(らいせい)　雷轟(らいぐわう)　雷響(らいきやう)　雷神(らいじん)

雷公（らいこう）　雷霆（らいてい）　雷震（らいしん）　雷車（らいしや）　雷砰（らいはう）

季題解説　空中に於ける電氣の放電により生ずるもの、暗雲の裡に電光を閃かし、烈しき音響を發する現象。多くは突風を齎らし、豪雨を降らす。夏季に最も多し。いかづち・はたゝがみ・鳴神とも云ふ。遠雷は、その遠くに聞ゆるもの。迅雷は殊に烈しきもの、雷雨は、雨を作へる雷。落雷は地上へその放電の及べるものを云ふ。〔参照〕梅雨雷（つゆかみなり）　春　初雷（はつらい）

例句

雷　　雷に小屋は燒かれて瓜の花　　蕪村（句集）

雷のつかみさがしや田草取　　桃妖（題發句集）

涼しさや雷遠き夕開暮　　冬柏（續虛栗）

神鳴　　神鳴のひゞきに散かけしの花　　蕉笠（茂日記）

神鳴の上りし松や夏の月　　几董（井華集）

らい　　雷晴て暮まだ苦き氣色哉　　巣兆（曾波可理）

いかづち　　いかづちのあれて久しき夏野哉　　史邦（小文庫）

いかづちを遠く聞く夜の暑哉　　丸室（古今句合）

天明元年六月二日午后、二百年

けふの御法鳴いかづちも草の露　　曉臺（曉臺句集）

はたゝ神　　はたゝ神たしかに二つ落ちし哉　　月斗（同人）

鳴神　　鳴神のひゞきは雲の林哉　　友正（ふたつば）

こほ〳〵と鳴神遠し蟬の聲　　几董（晋明集）

迅雷　　迅雷に棚落しけん瓜南瓜　　月斗（同人）

雷雨　　大雷雨地下食堂に時移す　　同（同）

雷火　　古宮の榎を裂きし雷火かな　　同（同）

雷鳴　　雷鳴に蚊帳釣る女心哉　　國政（京水）

参考　雷は雲中に蓄積された電氣が他の雲或は地面との間に放電する際に生ずるものである。雷が放電する時間は極めて短かく通常千分の一秒位である。而して斯かる放電の際に生じた火花は雲と雲、雲と地面の間に飛ぶが其の長さは通常二粁乃至四粁位の長さである。此の電が通つた部分の空氣は壓しのけられ或は熱せられて非常に稀薄になる。而して電の通つた後では壓し除けられた空氣は急激に元へもどり其のために空氣中に波動が起り音を發する。之れが雷である。雷が殷々として響くのは音波が重り合つて干渉するためである。

雷が起つた時即ち放電の光は一秒三十萬粁と云ふ高速度さで來るが、音の方は一秒間に三百三十米と云ふ。光に比すると桁違ひに遅い。故に放電が起つてから雷鳴が聞える迄には可なりの時間がかゝる。即ち此の時間差によつて雷を起した雲迄の距離は概略算定される。例へば電を見てから雷が聞える迄に十秒を要したとすれば電の起つた雲迄の距離は三粁三である事が

判る。雷は雲中に電氣が蓄積されるために生ずる故、春から夏期にかけて日射強く、上昇氣流の盛んな時でなければ發生しない。（雲の峰或は夕立參照）通常雷には二種あり、一は夏期の雷雨に伴ふもので一は低氣壓に伴ふものである。前者を熱雷と云ひ後者を渦雷と云ふ。渦雷は冬季でもあるが熱雷は日射が強くなり始めた春先から始まる。此の頃は百蟲冬眠からさめて穴を出る頃故此の頃の雷を蟲出の雷と稱する。

梅雨雷（つゆかみなり）　梅雨の雷（つゆのらい）

季題解説　梅雨の明にある雷鳴をいふ。梅雨の期間は凡そ三十日、雷鳴ありて絶ゆと傳へらる。（參照　梅雨ツユ　雷カミナリ）

例句

梅雨雷　正直に梅雨雷の一つかな　一茶（七番日記）
吹降りの梅雨雷となりにけり　案山子（ほとゝぎす）
梅雨の雷　梅雨の雷山刻々と晴るゝかな　風骨（同人）

梅雨晴（つゆばれ）　入梅晴（つゆばれ）　五月晴（さつきばれ）　ついり晴（ついりばれ）　梅雨晴る（つゆはる）　梅雨晴間（つゆはれま）

季題解説　陰鬱なりし梅雨の降り了りて、晴れ上りたる天氣を云ふ。五月晴、ついり晴、また同じ。

實作注意　梅雨晴は、梅雨期の終りたる天候の稱なれど、期間中の晴天を詠ふも亦差支なし、梅雨晴間の語もあり。（參照　梅雨ツユ）

例句

梅雨晴　つゆはれのわたくし雨や雲ちぎれ　芭蕉（もとの水）
入梅晴　入梅晴やさゝめき立てる峰の松　蓼太（蓼太句集）
さつき晴　男より女いそがし皐月晴　也有（蘿葉集）
市に見る茄子の苗も五月晴　同（蘿の落葉）
雞の屋根に聲あり五月晴　李夫（新選）
十丈の井戸綱うちぬ五月晴　竺蘭（心一つ）
ついり晴　川べりに狐火立つやついり晴　史邦（小文庫）
露の葉を鳴出る蚊やついり晴　酒堂（類題發句集）
梅雨晴る　初蟬や梅雨の晴行朝嵐　孟遠（同）
梅雨晴間　人しらず梅雨は晴たり亥中月　龜仙（古今句鑑）
咲きのぼる梅雨の晴間の葵哉　成美（杉柱）
五月雨の晴間に大工遣ひ哉　江草（牧庵）
久々の星美しや梅雨霽間　草秋（ホトヽギス）

空梅雨（からつゆ）　涸梅雨（かつつゆ）　旱梅雨（ひでりつゆ）

季題解説　梅雨約三十日間、年によりて殆ど雨を見ぬ事あり、或は雨量甚だ

少なきことあり。之れを旱梅雨・空梅雨といふ。農事上順應ならざる天候とす。

實作注意 明治二十六年の如き顯著なる例もあれど、梅雨の來る曆面の梅雨期より非常に後れたるが如き、又殆んど降雨少く田植にことかく等をも詠じて差支へなし。【參照】梅雨ㇾ

例句

空梅雨　空梅雨の朝々曇り見せ[illegible]けり　月斗（同人）
　　空梅雨の四五日ためて降りにけり　伏兎（同　）
旱梅雨　恙なく夏蠶あがりぬ旱梅雨　水馬（ホトトギス）

卯月曇（うづきぐもり）　卯花曇（うのはなぐもり）

季題解説 陰曆四月、卯の花の咲く頃の、陰晴極りなく、曇り勝なるを云ふ。【參照】卯の花くだし（ウノハナクダシ）時候　卯月（ウヅキ）

例句

卯月曇　遠き森に花ある卯月曇り哉　月斗（同人）
　　苗賣や卯月曇の朝の町　同（　）

梅雨曇（つゆぐもり）　入梅曇（つゆぐもり）　五月曇（さつきぐもり）　ついり曇

季題解説 陰曆五月、梅雨期の、降りみ降らずみ曇りがちなるを云ふ。

例句

入梅曇　入梅曇思ひ古さぬ袷かな　富天（新選）
五月曇　樟の若葉光れる五月曇かな　月斗（同人）

五月闇（さつきやみ）　梅雨闇（つゆやみ）

古書校註 【年浪草】季沆が愁霖の歌に曰、葉破れ、苔黃にして、未滴るを休めず賦光（一）透り長ず、庭沙（二）の色。恨むらくは、長劍の一千仭、頑雲（三）を割き斷ちて、晴碧を看るなきを。（藏玉）さみだれの晴間も見えぬ空よりや月見ず月といひはじめけむ　顯昭。
註（一）なめらかなる光　（二）庭の砂　（三）晴れやらず、何時迄もとぢこめてゐる雲

季題解説 梅雨の頃、霖雨歇まず、晴るゝ間とてはなく、陰鬱として晝も猶暗きをいへるもの。梅雨闇ともいふ。

實作注意 闇は形容のものにして、晝間の暗さを極言したるものなり。木下闇・下闇の如きなり。也有の句に「木の下や闇を二重の皐月空」あり。春の闇の如く、夜の暗闇にあらず、古き歌俳に夜を詠へるもあれどとらず。

例句

五月闇　晴間なき雨の名殘や五月闇　宗養（大發句帖）

五月闇

五月闇折しもこもる宿り哉　玄仍（紹巴追善）
竹の尻を折節聞くや五月闇　其角（五元集）
舞阪や闇の五月のめくら馬　同（五元集拾遺）
何を音にすぼん鳴らん五月闇　同（同）
青梅に匂ひもあらば五月やみ　也有（蘿葉集）
たど／＼し峰に下駄はく五月闇　探志（[illegible]囊）
しら紙にしむ心地せり五月やみ　曉臺（曉臺集）
眞白に鹿の星毛や五月闇　楚舟（類題發句集）
梅の落つる音のするなり五月闇　蝶夢（同）
舟橋のゆさつく音や五月闇　蝸山（新選）
五月闇桃の蟲をもたらべけり　楸下（其袋）
子を食ふ猫とこそきけ五月闇　吏登（吏登句集）
おしあうて蛙鳴く也五月闇　蓼太（蓼太句集）

朝曇（あさぐもり）

季題解説　晩夏の頃の朝、霧ありて曇れる如き空合をいふ。正午前よりこの霧晴れて、炎暑烈しくなるを常とす。

實作注意　一部にて季題と定められたるものなれど、此天象夏期に限らず、季感薄弱なり。旱の朝曇りの詞あれど、寧ろ旱曇などあるべきか。

例句

朝曇

山が根に沈める霧や朝曇　泊雲（ホトトギス）

朝焼（あさやけ）

夕焼（ゆふやけ）　ゆやけ

季題解説　日出に東天の紅きを、朝焼と云ひ、日沒に西天の著しく紅きを、夕焼となす。夏土用旱天打ちつゞく時に多しと。

實作注意　此の天象、四季通じてあれば、季を定むべからず。夏の語を用ゐるか、其他季題を詠み込むべし。

例句

朝焼

朝焼や聖マリヤの鐘かすか　誓子（ホトトギス）

日盛（ひざかり）

日の盛（ひのさかり）

季題解説　酷暑の日の赫灼と照る日中の暑き盛りをいふ。

實作注意　夏一日中、最も日の照りつける時刻、二三時間をさしていふ。

例句

日盛

日盛や蜘に引かるゝ蠅の聲　蒼虬（蒼虬翁句集）
日盛や半ば曲りて種胡瓜　闌更（半化坊發句集）
日盛は煮え立つ蟬の林哉　露英（獺隨筆）

日の盛

日盛や此邊すべて漆の木　木丹（古今句鑑）
日盛や鐵氣したゝる岨の岩　津富（同）
日盛や山田もれくる水の音　芝水（同）
日盛の道中きよら雲の峯　立紫（增補莩環）
日盛や石も焼野のきりぎりす　沾峨（吐屑庵）
日盛や枝の蛙の落る音　秋房（古選）
日盛や樽の茶運ぶ瓜畠　理由（同）
日盛の岩よりしぼる清水哉　常牧（同）
日盛や蜘のゐ光る小松原　蒼狐（句選）
日盛に水やる畑の暑さ哉　瓜流（新選）
日盛や菜種油を煮る匂ひ　開古城（同人）
よき友のくすし見えけり日の盛　太魯（明烏）

炎天（えんてん）

古書校註【年浪草】纂要に曰、日、午に在るを亭午と謂ふ。（一）杜甫苦熱行に曰、祝融（一）南に来りて、火龍（二）に鞭つ、火旗（三）焔々として、天を焼きて紅し。日輪午に當りて、凝りて去らず、萬國紅爐の中に在るが如し。
【栞草】炎天、極暑の天を云ふ。
註（一）夏の神。（二）火炎の盛んなるを云ふ。（三）火炎。

季題解説　暑中赫々と日の照り輝ける、もゆるが如き空をいふ。

實作注意　炎は燃え上る、火光上る、焚く、熱し、熾なり。炎天は即ち夏のあつき空、夏のあつき日なたなり。支那の書に炎天は南方の天、とあれど、俳句では前述の義なり。

例句

炎天
某鉄行脚を送りて
炎天に歩行神つくうねり笠　丈草（丈草發句集）
炎天のくるしき數を便りせむ　闌更（半化坊句集）
炎天の鐘を覗て寒さ哉　南仙（[illegible]鑑）
炎天の海をさますや鐘の聲　東巴（同）
炎天やさしくる潮の泡の音　渡牛（新選）
炎天に樹濃く茂る住居哉　月斗（同人）
炎天にすこし生れし日かげかな　虚子（ホトトギス）
炎天や家に冷たき薬壺　青々（妻木）

脂照（あぶらでり）

油照（あぶらでり）

季題解説　夏の日どんよりと薄曇りして、風無く、蒸し暑く照りつくるをいふ。脂汗の滲み出づるやうな日和なり。

實作注意 多く油照りの字を用ゐれど、脂汗の出づる照なれば、脂照の方正しかるべし。炎天と趣を異にす。

例句

脂照　堤行歩行荷の息や油照り　沾涼（綾錦）
大阪や埃の中の油照り　月斗（同人）
油照かすれし聲に雞が鳴く　同（同）

日陰（ひかげ）　夏陰（なつかげ）　片陰（かたかげ）

季題解説 夏の日陰を云ふ。熾くが如き夏の日影も、午後三四時ともなれば、家の陰、木の陰、片陰をつくる。歩行にもそれに便るは、人の常なり、

實作注意 古くは夏陰とて木陰の涼しきを詠へるもの、今重に日陰、片陰にて作句す。

例句

日陰　餞別
見送るも夏は日陰や一里塚　李下（別座敷）
井戸水を浴びて涼しき日陰哉　月斗（同人）
夏陰　曉の夏陰茶屋の遲き哉　昌圭（春の日）
夏陰や聞て晝眠る鉦の聲　和川（三千化）
夏陰や蘇鐵は僧の後ロつめ　新眞（焦尾琴）
座敷まで屆かぬ夏の木陰哉　野坡（あらそ海）
片陰　片陰にぼつ〳〵宵宮參りかな　月斗（同人）

旱（ひでり）　旱魃（かんばつ）　旱空（ひでりぞら）　旱天（かんてん）　夏旱（なつひでり）　旱年（ひでりどし）

季題解説 夏日雨を見ず、照り打續きて、水乾上り、草木の枯死するに至ることあり、旱・旱魃と云ふ。旱天、はかゝる時の空合をいふ

實作注意 旱の現象は、四時に亙りてあれど、夏は水分の蒸發甚だしきにより、水の涸るゝ事多し、ために、俳句にては夏とす。旱年と云ふ語面白し。

例句

旱　子と眉とみつはくむなり夏旱　其角（五元集）
畠にてほし瓜となす日でり哉　日能（鷹筑波）
夕顔も眉をひそむる旱かな　久重（同）
負腹の守敏もふらす旱哉　蕪村（句集）
森にかゝる月赤々と旱かな　月斗（同人）
旱空　澎湃と輝く海や旱空　一果（同）
旱天　旱天の井水に鹽をふきにけり　月斗（同）

地理

夏の山（なつのやま）

夏山（なつやま）　夏山陰（なつやまかげ）

季題解説 夏期の山、夏期の姿にある山々をいふ。

實作注意 新緑滴る如きもの、青葉に深翠のもの、蔚々と茂れるものなど、その他三夏を通じて詠むべし。夏富士、夏筑波等、個有名詞に續けても詠まる。〔季題〕五月山（サツキ）　梅雨の山（ツユノヤマ）　五月富士（サツキフジ）

例句

夏の山

くつさめの跡靜かなり夏の山　野水（曠野）
夏の山しづかに鳥の鳴音哉　召波（春泥發句集）
大木を見てもどりけり夏の山　闌更（半化坊句集）
松杉のやに流れたり夏の山　同（同）
飼鳥の聲いなせ夏の山　樗堂（新十家）
やゝあつて又啼鳥や夏の山　班象（心一つ）
傘にあまりて見ゆる夏の山　成美（成美家集）

夏山

夏山は寐ざめの枕屛風かな　宗因（梅翁宗因發句集）
夏山や杉に夕日の一里鐘　芭蕉（もとの水）
なつ山や紙すく里は飯時分　同（同）
夏山に足駄を拜む首途かな　同（奥細道）
花をしむけふ夏山の柴車　鬼貫（俳諧七車）
夏山に我は御籠とる女かな　其角（五元集）
夏山を出てあかるしもとの江戸　沾徳（俳諧五子稿）
夏山や鶯啼て小六ぶし　支考（蓮二吟集）
夏山や神の名はいざしらにぎて　蕪村（新花摘）
夏山や京盡し飛ぶ鷺一つ　同（同）
夏山や通ひなれたる若狹人　同（句集）
夏山やうちかたむいてろくろ引　同（遺稿）
夏山や一足づつに海見ゆる　一茶（享和句帖）
夏山や熱によするる伊豆の海　成美（成美家集）
夏山を上り下りの七湯かな　子規（子規全集）

五月山（さつきやま）

[illegible]

季題解説 陰暦五月頃の山々をいふ。

實作注意 仲夏の山は青々と繁茂して暗く、梅雨雲[illegible]など變化多し、

【參照】夏の山　梅雨の山　五月富士　時候—皐月

例句

五月山

水上や雲井のはれま五月山　昌休（大發句帳）
沓雲に雄姿見せたり五月山　月斗（同人）
巖窟に水湛へたり五月山　同（同）
五月山啼鳥聲を深めけり　凡水（同）
五月山蓼々水を落す也　千燈（同）

梅雨の山

季題解說 梅雨期の山々。連日霽るゝ間なき陰霖に濡れそぼちゐる山を云ふ。【參照】夏の山　五月山　五月富士　時候—入梅　天文—梅雨

例句

梅雨の山

梅雨の山心までぬれてゐたりけり　月斗（同人）
梅雨の山鮎のなき日の鹽肴　同（同）
梅雨の山わらびぜんまい茂りゐる　同（同）

五月富士

季題解說 陰暦五月頃の富士を云ふ。

實作注意 富士は我國代表の名山として、初富士（新年）・春の富士・五月富士（夏）・富士の雪解（夏）・富士の農男（夏）・富士の初雪（夏）・富士詣（夏）・富士登山（夏）・秋の富士など季題となせり。又富士の句には季を用ゐずとも獨立するなど稱ふる月並者流あれど論ずるに足らず。【參照】夏の山　富士の雪解　天文　富士の初雪

例句

五月富士

目にかゝる時やことさら五月富士　芭蕉（芭蕉句選）
皐月富士に姥子の宿よ忘られぬ　辰生（ホトトギス）

富士の雪解

富士の雪解　富士の農男　富士の野鳥　富士の農鳥

古書校註 【俳諧歳時記】富士にて四五月の頃だん〳〵雪の消え殘りたるが、寶永山の方に人の形のごとく雪の消え殘ることあり、これを農男と稱す。この殘雪見ゆる年もあり。又見えざるとしもあり。田子（一）の土人云、農をとこ見ゆる年は五穀熟す。田子の田植わするな不二の農男　蓑笠隱居（二）。農男は四月のするにあるべし。

註（一）田子の浦の土着の人　田子の浦は、駿河國富士郡富士川の東。（二）馬琴。

季題解說 富士の雪は夏に入りて解け始む。初夏の頃、田子浦よりこれを望めば、寶永の邊、中凹みに殘る雪の、人の如き形に見ゆることありと云

ふ、之を富士の農男といふ。五穀豐熟の徴と傳ふ、或はまた富士の北面より見て、その殘雪の形、人より鳥になると云ふ、農男・農鳥と稱し、田植の好時季とせり。〔參照〕五月富士　天文―富士の初雪、春―雪解

例句

富士雪消　富士雪消寒ぐことなき爐なりけり　長船（ホトヽギス）
　　　　　富士雪解のあとすぐ乾く町の川　裸馬（同　人）
富士の農男　田子の田植わするな富士の農男　馬琴（羇旅漫錄）

夏野

夏の野　夏野原　夏の原　夏野路

古書校註

【栞草】百草の茂れるさま專要（一）なり。

註（一）專ら肝要である

季題解說　夏期の草茂れる原野を云ふ。

實作注意　逞しく百草の繁茂して、見ゆる限り茫乎と、日光の直射にあるなど、夏野の趣なり。〔參照〕卯月野

例句

夏野
松の色は藍よりもこき夏野かな　宗祇（大發句帳）
もろき人にたとへむ花も夏野哉　芭蕉（笈日記）
秣負ふ人を枝折の夏野かな　同（陸奥鵆）
馬ぼくぼく我を繪に見る夏野哉　同（[illegible]）
水ふんで草で足ふく夏野かな　來山（いまみや草）
青天にもの見の松に夏野かな　許六（五老井發句集）
順禮の棒ばかり行く夏野哉　重頼（[illegible]）
鮒ずしの便りも遠き夏野哉　蕪村（夏より）
討はたす梵論つれ立て夏野かな　同（新花摘）
おろし置笈に地震なつ野哉　同（句集）
行々てこゝに行々夏野かな　同（同）
實方の長櫃通るなつ野かな　同（新五子稿）
笈の身に地震しり行夏野哉　同（落日庵句集）
巡禮の鼻血こぼし行夏野哉　同（同）
重荷持丁身を泣夏野哉　同（同）
手ひらのむかしながらの夏野かな　同（夜半叟句集）
夏野ゆく村商人やひとへもの　召波（春泥發句集）
[illegible]かれし夏野おとろふけしき哉　曉臺（曉臺句集）
身[illegible]むかし戀せし人か夏野ゆく　成美（成美家集）
夏野行扇のはしもたよりかな　同（同）
雨にこそ[illegible]夏野哉　同（[illegible]）

夏野　鮎の尾の行方尋ぬる夏野哉　半睡（[illegible]）
日のはこぶ程は夏野に山もなし　一鐵（俳諧[illegible]）
草刈の笠のみ動く夏野哉　松水（あやにしき）
にはとこの生垣見こす夏野哉　胡龍（[illegible]香）
馬と鞍置者と夏野の行方哉　巣兆（曾波可理）
行く處水かさませし夏野哉　乙二（をのゝえ草稿）

卯月野

季題解説　陰曆四月、即ち卯月の野原を云ふ。

實作注意　此の頃の野は盛夏の炎天に晒されたる鬱々たる野色と異り、綠新しく、清新潑剌の氣あり。【参照】夏野

卯月野　卯月野や御陵遠き夕眺め　圭岳（同人）
卯月野を雞さげて戻りけり　樵青（同）

夏畠

夏の畑　旱畑

季題解説　夏の畑をいふ。

實作注意　夏野又は夏の田とは違ひ、季感は明瞭ならず、季題として一項を設くるものにあらざるも、旱畑と極限すればその點は救はる。【参照】日燒田

例句
夏畑　夏畑に折々うごく岡穗哉　嵐雪（玄峰集）
旱畑　人丈の花胡蘿蔔や旱畑　露泣（ホトヽギス）

植田

五月田

季題解説　稻苗の植附を終りて間もなき田を云ふ。やがて繁茂して青田となる。

實作注意　五月田は皐月頃の田の謂なれば、植田の場合もあり、或は青田に近き場合もあるべし。【参照】青田　人事——田植

例句
植田　我ものに植田の蛙啼つのる　曉臺（曉臺句集）
づらり〳〵うゑ田の緣の百からす　同（同）
鬧鵜や昨日植ゑたる田の濁　許六（韻塞）
しよん〳〵と植こ二日の田の面哉　安之（俳諧古選）
大雨に濁りかへせし植田哉　月斗（同人）
植ゑ痛み見えて濁れる山田かな　同（同）

青田（あをた）

青田道（あをたみち）　青田面（あをたおもて）　青田波（あをたなみ）　青田時（あをたどき）　青田風（あをたかぜ）

古書校註

【菜草】杜詩　七月青稻多く、千畦碧泉亂る（一）と作れる意にて、風景みるべし。

註（一）にぎやかに、小兒の聲の樣な音をたてて、碧の泉が流れゆく。

季題解説　植田の稻苗生ひ立ちて青々と繁茂せる田の面をいふ。

實作注意　別項植田よりやゝ後、先づ土用前より土用後までの間。見渡す限り、茫々と青一色の稻田を云へるにて、その頃を青田時（時候）、その翠を吹き渡る風を、青田風（天文）と云ひ、風の渡るに波立つ如きを青田波と云ふ。

〔參照〕植田（ウヱタ）　日燒田（ヒヤケダ）　人事―田草取（タクサトリ）

例句

青田

松風を中に青田の戰ぎかな　丈草（丈草發句集）

送許六
鳥鳴く跡も更なる青田哉　桃隣（古太白堂句選）

なつかしき津守も遠き青田かな　蕪村（落日庵句集）

菜の花の黄なる昔を青田かな　同（同）

塵塚の髑髏にあける青田かな　同（同）

山々を低く覺ゆる青田かな　同（同）

萬民雨を悦ぶ
喜雨亭に夕風わたる青田哉　几董（井華集）

むら雨の離宮を過る青田哉　召波（春泥發句集）

雨雲の垣鼻ふけば青田かな　士朗（枇杷園句集）

田野千里
道わたる雲もあるべき青田哉　曉臺（しをり萩）

當麻
青田さへよし染寺の右ひだり　蓼太（蓼太句集）

傘さしてふかれに出し青田かな　白雄（白雄句集）

延るほど鷺はみじかき青田哉　也有（蘿葉集）

涼風や青田の上に雲の影　許六（韻塞）

四五日の旅おもしろき青田哉　千山（故人五百題）

なか／＼に行ば道ある青田かな　百明（同）

草取の空に息つく青田哉　紫道（類題發句集）

日の入て夕影そよぐ青田哉　冶天（同）

一番も二番も草の青田哉　會北（同）

三日月の藪にはづるゝ青田かな　呼丁（西華）

畔豆も共に潤ふ青田かな　楚舟（[illegible]摩集）

二見まで一目につゞく青田哉　仙丁（月影塚）

[illegible]の[illegible]たすけ[illegible]青田かな　[illegible]（古今句[illegible]）

青田

郊外

都邊はいつともなしに青田哉　麗宥（五車反古）
行通ふ蓑新らしき青田哉　吟江（古選）
山風の一日遊ぶ青田かな　同（心の花）
ぬれ髪を吹かれに門の青田哉　汀鶏（焦尾琴）
背戸の不二青田の風の吹過る　一茶（旅日記）
茶仲間や田も青ませて京參り　同（七番日記）
ゆたかなる青田の中や宮參り　蒼虬（蒼虬翁句集）
のびあがり〳〵見る青田哉　同（同）
青田より少し高きや小笹垣　乙二（をのゝえ草稿）

春田時

加納にしばらくありける時

たのもしや何も加納の青田時　鬼貫（俳諧七車）

日焼田（ひやけだ）

旱田（ひでりだ）

季題解說　夏日、旱のために水涸れて、稻の葉など農作物の燒けいたみしたる田を云ふ。〔參照〕夏畑（ナツバタケ）　青田（アヲタ）　田水沸く（タミヅワク）

例句

日燒田

日燒田や時々つらくなく蛙　乙州（猿蓑）

旱田

旱田や土龍が盛りし畦くづれ　一果（同人）

田水沸く（たみづわく）

季題解說　夏日、强烈な日光の直射を受けて田の水の沸くを云ふ。

實作注意　「湯の如き田水に足を入れにけり」の句、沸くの文字なけれどよし。季題の文字あれども、實なきものよろしからず。たとへば藤の題にて「藤棚の倒れてゐるや古屋敷」の如きは藤の花の直覺なし。たゞ藤棚が朽ち倒れゐる樣より見えず。〔參照〕日燒田（ヒヤケダ）

例句

田水沸く

草刈るや青田の水の沸く匂ひ　迷斥（同人）
田水沸く草も三番となりにけり　月村（同）
湯の如き田水に足を入れにけり　朱由（同）

夏の川（なつのかは）

夏川（なつかは）　夏河原（なつかはら）

季題解說　夏期の河川をいふ。

實作注意　夏川は三夏の總稱なれど、五月川は別に說く。又旱續きの水涸に河原の廣きものも、その姿の一なり、夏河原の題あり。〔參照〕五月川（サツキガハ）

例句

夏の川

月の頃は寐に行夏の川邊哉　杉風（杉風句集）

夏川

夏川に藏より仕出す簀子かな　其角　(五元集拾遺)
夏川の音に宿かる木曾路哉　重五　(春の日)
夏河を越すうれしさよ手に草履　蕪村　(句集)
夏川や岸に漁火の燃殘り　闌更　(半化坊發句集)
夏川や馬繋ぎおくみたつくし　同　(同)
夏川や泡より輕き菜種殼　鶴志　(たこなみ)
夏川や流るゝものゝ美しき　宋阿　(續明烏)
夏川や水の中なる立話　子規　(全集)

夏河原

焼天もなぐさみらしや夏河原　馬光　(馬光發句集)

五月川

季題解說　陰暦五月、梅雨の頃の河川をいふ。

實作注意　梅雨期の河川は水量増加し、往々渡船渡渉を禁ぜらるゝことあり、川止め(人事)と云ふ　[illegible]　夏の川(地理)　梅雨出水(地理)　人事―川止め(地理)

例句

五月川

杖をはし雲に行へやさつき川　淡々　(淡々發句集)
假橋や人に抱つく五月川　宋屋　(新選)
五月川心細く水まさりたる　子規　(子規全集)
五月川生簀に錠を下しけり　うしほ　(ホトトギス)

梅雨出水

夏出水

季題解說　梅雨期の霖雨相次ぎて、河川の出水するを云ふ。

實作注意　單に出水を夏季とする書あれど、夏出水・秋出水と時季を冠らしめずば季感十分ならず。[illegible]　五月川(地理)　梅雨穴(地理)　天文―梅雨(天文)　秋―出水

例句

梅雨出水

田の上を小舟行くなり梅雨出水　月斗　(同人)
決水して堤守るや梅雨出水　同　(同)

梅雨穴

黴雨穴　梅雨入穴　墜栗花穴　梅雨の井

古書拔萃

【日次紀事】　立春後百三十五日、大概黴雨となり、諸物黴腐す。此節陸地處々水必涌出す。俗に津井穴と謂ふ。攝州矢田部丹生山田の庄、原野村辨財天祠の邊、毎年水必す涌きて期を愆らず。是則ち中將姫の姉白瀧の前を祭る者也。　墜栗花左衞門といふ者世々此に家す。

【滑稽雜談】　是も五月の雨を云ふ。此雨ふつて栗花落る故にいふか。攝河

一覽に云、津國矢田部郡山田庄原野村に毎年立春より百三十五日に當る比、靈水湧出す、此屋敷は隆栗花左衛門が跡なり、其先祖山田領主直勝（略）横萩豐成（一）の女、白瀧姫を勅によりて嫁せしむ、此姫一男を生じて、三年の後身まかりぬ。その骸を我家の東境に葬る。其上に廟塔を築しに、其後塚に植し栗の花落るとき、不思議の靈泉湧出る。（略）（二）此節ふる雨も此靈水湧出て後にふる故に、世上に通じて墜栗花の雨と称すといへり。

註（一）中將姫及び白瀧姫の父　（二）以下其説の白話。

【季題由來】梅雨期の頃、濕潤の地に思はぬ陥沒を生じ、時には水など湧き出でて溜めるもの、ついり穴とも云ふ。

【例句】

梅雨穴　梅雨穴や藪の稲荷の小廣前　月斗（同人）

梅雨入穴　納屋倉の横の梅雨葺梅雨入穴　同（同）

夏の水（なつのみづ）　夏水（なつみづ）

【季題解説】夏期の水の總稱。

【實作注意】水に親むもよし。飲んで清涼を覺ゆるもよし。唯春水・秋水の如き觀念に乏しきは、各別箇の季題に分類されたる爲也。清水・泉・滴り・瀑・水あび・氷水・水飯・打水・噴水等に別れあり。夏の水は自然これ等の他に求むべからず。古來句の少きもこゝに因するなり。なつ水の語面白からず。

【例句】

夏の水　御裳濯の月より淸し夏の水　宗春（三籟）

（内宮にて／諸國神詣）一文の錢いたゝくや夏の水　蚊足（續虚栗）

泉（いづみ）　泉川（いづみがは）　淝瀵（ひふん）

【古書校註】

【御傘】夏也。水に付くべからず。和泉國は水邊に非ず。黄なるいづみ（一）、黄泉といひて土中の事也。水邊にあらず。夏にもならず、後生の事也。

【年浪草】爾雅に曰、水の本を源と曰ひ、源を泉と曰ふ。正く出るを（二）濫泉と曰ひ、側出（三）を氿泉と曰ひ、涌出を濆泉（四）と曰ふ。出る所同じく、歸するの異るを淝と曰ひ、異に出て、同じく流るを瀵と曰ふ。〇釋名に曰、泉はいつる水也、いづるのるとみづのつを略せり。

註（一）黄泉なかく調める也、黄泉は地下の泉をも云へど、冥土、よみの國の義。（二）爾雅に正出は涌出なりと見ゆ、（三）側は傾、傾き出る也、（四）濆は小水をも云ふ、小水の涌く泉。

【季題解説】夏　地中より湧き出でし水の、湛へある清冽なるものを云ふ。泉川は泉の流れいでたる川。

實作注意 泉は、出づる水にて、清水とひとしく、たゞ量に於て多き直感を持てるなり。清水を湛へて池水の如きものなり。涼味萬斛なるを要す。

〔參照〕 清水、 滴り

例句

泉

底すみて玉わく庭の泉哉　宗祇（大發句帳）

さゝれ石もわきて泉の流哉　紹巴（同　）

結ぶより早歯にひゞく泉哉　芭蕉（都曲集）

縁わく夏山陰の泉かな　蓼太（蓼太句集）

寂としてくぬ木林に泉かな　青々（妻木）

氷より冷たき山の泉かな　月斗（同人）

山越の松明かざす泉かな　五工（俳星）

參考 泉は地下水の天然に涌出するもの。即ち地中に浸透せる雨水が、粘土層或は砂石層等の不浸透性の層に會し、これに隨ひて流動する内遂に地上に導き出さるゝものにして普通冷泉なれども又温泉あり。温泉は地熱の高温なる地帶を通過したるもの、然し一般に云ふ泉は冷泉を云ふ。多く山麓時に平地にも涌出し、木の茂れる山多き地方に多く、雨期に水量多し。

清水

眞清水　山清水　岩清水　底清水　苔清水　岨清水　磯清水

湧清水　寺清水　門清水　家清水　庭清水　淺清水　涸清水　清水

陰清水　清水源　清水結　清水堰　清水汲

古書校註

【御傘】 雜也、（一）結ぶ（二）といへば、夏なり。せく（三）も夏なり。

【年浪草】 〔清水源・同結・同覆・同汲〕說文に曰、水、山石の間に出るを灘と曰ふ、灘は清徹、水、石間にあるなり、是れ石泉、倭俗（四）所謂る清水なり。〔〕淮南子に曰、積陰の氣（五）水と爲る。（註）〇清水がもとは源の略也。

註（一）清水だけでは雜也の意（實作注、參照）（二）掌ですくひ飲む。（三）ふさぎ一通さず。（四）日本の風俗では。（五）聚り積つた陰氣化して水となるの意。

季題解說 山野いづれを問はず、天然に湧き出でて、清冽掬すべき冷たき水を云ふ、清水は其の湧出の狀態によりこれを現す字を冠して種々に分つ。眞清水　眞はまこと即ち純粹なるとき清水、山清水―山地の木陰等に流れ出づる清水、岩清水　岩石の間より流れ出づる清水、庭清水　低き處に湛へたる清水、磯清水―海岸の山のせまりたる所など清水多し、寺清水　寺院の境内に湧く清水、清水陰　清水出づる日陰、等多くの稱呼あり。

實作注意 古は掬ぶ。暑くの渇をせへて夏季とせしも、其後然らず、單に清水にて夏季のものとせり。夏日、暑熱甚しき時、山野に清水に會ふ、天惠な

り。旱天の際雨と共に盡くるなし。【[illegible]】泉・滴り[illegible]

例句

清水

手拭の雫もあかぬ清水かな　宗因　（梅翁宗因發句集）
むすぶ手に楢の葉動く清水哉　同　（[illegible]集）
結ぶ間に手もたゞまらん清水哉　宗春　（同　）
さゞれ蟹足はひのぼる清水哉　芭蕉　（續虚栗）
岐阜山にて
城あとや古井の清水先問む　同　（笈日記）
芋の葉に命をつゝむしみづかな　其角　（五元集）
髪を洗ふ女
顔あげよ清水を流す髪の長　同　（五元集拾遺）
抜ケたりなあはれ清水の片草鞋　嵐雪　（玄峰集）
目黒の瀧も人のまうでぬ日
底しみづ心の塵ぞしづみつゝ　同　（同　）
はきながら草履を洗ふ清水哉　北枝　（北枝發句集）
草を這ふ清水に立や笠の足　沾徳　（俳諧五子稿）
我跡へ缺口立よる清水かな　許六　（五老井發句集）
踏込て清水に恥つ旅衣　桃隣　（古太白堂句選）
蟹を見て氣の付く皿の清水哉　同　（同　）
結ぶ手にあつさをほどくしみづかな　千代女　（千代尼發句集）
おくらばや清水に影の見ゆるまで　同　（同　）
山のすそ野ゝ揺むすぶ清水哉　同　（同　）
青々と見えて根のあるしみづかな　同　（同　）
紅さいた口もわするゝしみづかな　同　（同　）
近道によき事ふたつしみづ哉　同　（同　）
靜かさは栗の葉沈む清水哉　柳陰　（猿蓑）
引き立てゝ馬にのまする清水かな　潦月　（あらの）
はら／＼と清水に松の古葉哉　長虹　（同　）
つれ數多またせて結ぶ清水哉　文瀾　（同　）
石切の鑿冷したる清水かな　蕪村　（新選）
落合うて音なくなれる清水哉　同　（句集）
二人してむすべば濁る清水哉　同　（同　）
我宿にいかに引べきしみづ哉　同　（同　）
水晶の山路更行清水哉　同　（蕪村と周圍）
石工の飛火流るゝしみづ哉　同　（遺稿）
しづかさや清水ふみわたる武者草鞋　同　（同　）
ひとり言いうて立ちよる清水哉　太祇　（句選後篇）
橋に見る根芹隠れを行く清水　同　（句稿）
山吹のわすれ花さくしみづかな　几董　（井華集）

清水

身の内の道を覺ゆる清水哉　麥翅（小弓俳諧集）
樋水に雙燕たる清水哉　一茶（句帖）
夜に入ればせい出して湧〳〵清水哉　同（七番日記）
三日月　清水守りておはしけり　同（同）
居風呂に流し込んだる清水哉　同（おらが春）
母馬が番して飲ます清水かな　同（同）
山里は馬にかけるも清水哉　同（句帖）
のら猪の眞葛わけ入しみづ哉　成美（成美家集）
山芋の蔓にひかるゝ清水かな　同（同）
見し人の鍋搔てゐる清水哉　巣兆（曾波可理）
ひや〳〵と川にはしりこむ清水哉　同（同）
里人のちらほら通るしみづ哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
麻かげを今日も流るゝ清水哉　同（同）
蕗の葉で清水のみけり馬の上　梅室（梅室家集）
笠の影終日たえぬ清水かな　同（同）
朝の間に見てゆく野路の清水哉　乙二（をのゝえ草稿）
妻と子が大事のしみづ濁しけり　同（同）

眞清水　山清水

眞清水やむすべば薄き掌　栗堂（古今句鑑）
すみかれて道まで出るか山清水　嵐雲（玄峰集）
鬼貫讃
錢龜や青砥もしらぬ山清水　蕪村（句集）
世に流れ出ては濁るか山清水　同（自畫讃）
このおくにしる人あれな山清水　成美（成美家集）
山の葉の匂ひこそすれ山清水　桐之（類題發句集）

岩清水

那須温泉
湯を結ぶ誓ひも同じ石清水　芭蕉（雪まるげ）
馬牛の汗や箱根の石清水　闌月（曉山）

苔清水

硯洗ふ智惠は出たり苔清水　芭蕉（もとの水）
芳野西行庵
いづちよりいづちともなき苔清水　蕪村（夜半叟句集）
村はづれ能寺建ぬ苔清水　同（同）
山寺や緣の下なる苔清水　几董（井華集）
佛が原にて
おもかげや佛酒賣苔清水　樗良（樗良發句集）
汲てくれ命にかゝる苔清水　曉臺（曉台句集）
菊洗ふ流の末や苔しみづ　同（同）
人の世の錢にされけり苔清水　一茶（七番日記）
松風に吹ちる程や苔清水　吟江（夢占）
源は氷か雪か苔清水　太無（句集）

蛭小島

	文覺が足洗ひけん苔清水	蓼太	（蓼太句集）
岨清水	里遠しいたゞく桶の岨清水	素推	（古今句鑑）
磯清水	何なりと一木ありたき磯清水	白雄	（白雄句集）
	蔦の葉に小貝によるや磯清水	成美	（谷風草）
湧清水	湧清水淺間のけぶり又見ゆる	一茶	（株日記）
寺清水	結ばめや片山陰の寺清水	蕭水	（父の恩）

滴り（したゝり）

滴る（したゝる）　山滴り（やましたゝり）　巖滴り（いはしたゝり）　崖滴り（がけしたゝり）

季題解説 夏季、懸崖絶壁等より滴々と落つる清冽なる水をいふ。

實作注意 雨後樹々の雫を滴らすものに解するは常らず。山水の滴り落つるを限りて季題とす。〔参照〕泉（いづみ）　清水（しみづ）

例句

滴り	松明に這入る巖屋の滴りや	月斗	（同人）
	滴りの巖山翡翠飛び去りぬ	同	（同）
滴る	絶壁の蔦を傳ひて滴りぬ	同	（同）

瀑（たき）

瀧（たき）　瀑布（ばくふ）　瀑壺（たきつぼ）　瀑道（たきみち）

古書校註 【御傘】唐の詩には山から落る瀧には瀧の名をばからず、瀑布と書也。日本には誤りて瀧（一）の字を書也。此字の心は水の長く流るゝ體、瀧の地上にはびあり、がごとくなるを書くと見えたり。さるによりて山より落るたきに、此字を一向用るは正義にあらず、たきの正字は瀑布と書がよけれ共いにしへより瀧の字を此國にかきつけならひ侍れば、結句瀑布と云ふ字をたきとは和訓せざる也。

註（一）瀧は雨のしとしとくふ貌、又はやせの義なるを誤り用ると也

季題解説 山中巖壁の高きより直ちに落つる水。瀑壺はその眞下に淵をなせるもの、何れも夏季のものとす。

〔参照〕人事・瀧殿、瀑浴（たきあび）

例句

瀑	暑雲の外瀑に奪るゝ人の色	嵐雪	（玄峰集）
	ころも更瀧へ飛込む心かな	桃隣	（古太白堂句選）
	山鳥の尾上に瀧の女夫かな	几董	（井華集）
裏見瀧	ことによし裏見てくゞる夏の瀧	蘭更	（全集）
瀑布	黒なれて静かに聞ふ瀑布かな	伏兎	（同人）

卯浪（うなみ）

卯月浪

季題解説 陰暦四月に浪高きをいふ。卯月の浪の約なり。

實作注意 一説に卯の花の風に戦ぐを形容して云へるの解あり、又、卯浪・さ浪とて、陰暦四五月、海又は河に立つ、早浪を云ふともあり。【参照】皐月波・土用波

例句

卯浪
楫音や外波も寒き鳴門沖　梅室（梅室家集）
　東にありてすみだ川に遊ぶ
都思ふ時や卯浪の薄曇　沂風（五車反古）
四五月のうう波さ波や時鳥　許六（宇陀法師）

皐月波（さつきなみ）　さ浪（さなみ）

季題解説 陰暦五月の波浪をいふ。この頃梅雨期にて荒南風などの強風あり、波濤高きを常とす。【参照】卯波・土用波・天文—南風

例句

さ浪
　日本海々戦回顧
さ月波興廢の旗檣頭に　天高（同人）
敵陣の進路を扼すさ波哉　同（同）

土用波（どようなみ）　土用の波（どようのなみ）

季題解説 夏の土用頃、太平洋に面したる海岸にのみ起る現象。炎熱灼くが如く、天氣晴朗にして風なきに關らず、波濤極めて高くうねりを起し、大船巨舶を惱まし、岸近くは一聯の波濤次々に寄せ來つて濱を洗ひ、巖に碎けて飛瀑の如く壯觀なるもの。二三日續くを常とし、後は忘れしものゝ如く平穩なり。俗に土用浪と云ふ。

實作注意 遠く太平洋に生ぜし低氣壓による巨濤の傳波となりて、うねり來るものなれば普通の波濤と甚だ異なれり。從つて日本海には之を見る能はず。【參照】卯波・皐月波・江島掃除波・時候—土用

土用波
土用波伊豆の大島見ゆるなり　月斗（同人）
山の尾をかくして土用波高し　月囚（同）
土用浪錨かゝりのわろきかな　岳東（同）
土用波に捲かれし鱶の寄せにけり　天高（同）
熊野浦の落日呑みぬ土用波　伏兎（同）

土用の波
廿諸島土用の浪が見ゆる哉　圭岳（同）

江島の掃除波（えのしまのさうぢなみ）　御掃除波（おさうぢなみ）

古書校註 【俳諧歳時記】相州榎の島窟辨天にこのことあり。かのしま、この月（一）

鵜のとまる杭の高さや夏の湖　青嵜（文車）

夏の庭(なつのには)　夏の園(なつのその)

季題解説　夏期の涼しげなる庭園をいふ。

例句

夏の庭　岩木にも心やつくる夏の庭　宗因（三籟）

たえやらぬ水なるかなや夏の庭　紹巴（大發句帳）

夏の園　太き道一筋夏の園に在り　虚子（ホトトギス）

お花畠(おはなばたけ)

季題解説　高山の頂近きにある、草本帯の平らにては、盛夏の頃、混生せる高山植物の一時に花を開き、妍を競うて甚だ美觀なり。お花畠と云ふ。

實作注意　高山の崇高清淨より御の字を用ゐての稱なり、卽ち昔高山の登山者は修驗者にして、山頂に社宇を作りて神佛を祀れり、而してこの高山にある花畠は神の畠なる故御を附し、後御花畠といへば專ら高山の花畠を意味せり。花畠等略して用ふべからず。参照　夏畠(なつばたけ)

例句

お花畠　朝月に露もつお花畠哉　青蛙（同人）

月白きお花畠に立ちにけり　綠荷（同　）

参考　山嶽は空氣・日光・温度・風力・雪等の關係に依り、麓より山頂に登るに隨つて植物の分布を異にすること、恰も緯度の高低によりて寒帶・溫帶・熱帶の區別あるが如し。卽ち山嶽は山麓地・山地・高山地と植物の分布を區別するを得。お花畑は此の高山地に存するものにして、緯度の高低に依りて多少異るも我國に於ては大體二千五百米以上の高山に多し。植物地帶の最高地に位し、矮少なる草本、蘚等が密生して夏期雪解を待つて一時に美花をつくるものにして、其の種類極めて多し。内地のお花畑

には北アルプス中の白馬嶽・五色ケ原・御嶽等有名なり。
左に主なる高山植物を掲ぐ。（俳句講座より）

桔梗科　姫沙參　千島桔梗　岩桔梗（以上何れも紫の小花をつく）
菊　科—高根母子　蝦夷父子（以上葉に毛茸あり花は白し）　兎菊（黄花にして菊の如く一莖一花）　深山薄雪草（葉に毛茸あり花は白）　富士薊（形大、紫紅花をつく）
敗醬科　白山女郎花（丈一尺、花は普通女郎花に似、葉は掌状）
忍冬科—リンネン草（婦夫花（フウフバナ）とも云ひ、淡紅色の芳香ある小花をつく）
狸藻科—庚申草　蟲取菫（何れも葉にて蟲を捕ふ、前者は淡紫紅色、後者は菫に似たる紫花）
龍膽科—當藥龍膽（花は、淡黄緑）　深山龍膽（花、青紫）
櫻草科—南京小櫻（花は、淡紅色）　雪割小櫻（花、淡紅小花）　大櫻草（花葉莖共に褐紅色）
岩梅科　岩梅（白梅花に似たる小花）　岩鏡（花紅く、葉は深紅緑色にして光澤あり）
石楠科　浦島躑躅（花淡紅にして小）　白珠の木（花、淡紅實、白色）　青の栂櫻（花、淡紅）　栂櫻（小花淡紅）　黄花石楠（花入淡紅）　石楠（花は白及び淡紅の二種あり）
山茱萸科—御前橘（花、白實、赤）
菫々菜科—黄花の駒の爪（黄花、駒の爪に似たり）　高根黄菫　大葉黄菫（何れも花は黄色）
岩高蘭科—岩高蘭（紫褐色の花小、實は紫黒色）
牻牛兒科—白馬風露（花紅）　千島風露（花紫）
薔薇科—高根薔薇（花淡紅）　羽衣草（小花、緑葉衣に似たり）　唐絲草（花紅）
罌粟科　駒草（我國高山植物代表的のものにして、莖葉小にて割合に大なる花をつく）　千島薺芥子（花小、芥子に似て淡黄緑色）
毛莨科—白山一夏（花白）　九十九草（葉は芹に似て花は淡黄色）　金梅草（花黄、梅に似たり）
石竹科—高根撫子花（花紅）
百合科—黒百合（花黒紫、四瓣）　車百合（花紅、葉、輪生車の如し）

雪　谿

季題解説　日本アルプス等の高山にて谿谷になれる所には、夏もなほ解けざる萬年雪の谿谷を埋むるあり、之を雪谿と稱ふ。夏日登山者の超ゆるに壯快を感じ喜ぶ所とす。**傍題**　お花畑

例句

雪谿　脚半しめて大雪谿を仰ぎけり　　綠荷（同人）

山火事（やまかじ）

山火

【季題解説】北海道、殊に樺太の山火事を云ふなり。消防困難のため、紅蓮ほしいまゝに白樺の林を舐め、被害往々にして数十里に及ぶと云ふ。多く夏季に火を發すれば、季題とす。【參照】人事・焚火止[illegible]

孟夏の旬　扇を賜ふ　扇の拝

古書校註

【滑稽雑談】四月一日（略）公事根源に云、是は天子夏冬の季あらたまるはじめに、臣下に御酒をたび（一）政をきこしめす（二）儀也。おほよそ旬には色々あり。（略）夏のはじめに行はるゝをば、孟夏の旬と申し、冬のはじめをば、孟冬の旬と申すにや。此夏冬のをば、二孟の旬とも申すなり。礼記月令に云、孟夏の月、天子夏を南郊に迎へ、還反して賞を行ひ、諸侯を封じ、慶賜遂に行はる（三）江家次第に曰、暑月扇を給ひ十月氷魚を給ふ。
【年浪草】年中行事歌合に曰、（略）四月の旬には内侍扇をもて上達部（四）に給へばひざをつきて請取る作法など有にや。

註（一）賜ひ。（二）御政務を行はせらる。（三）賜扇の項による。（四）公卿。

季題解説　公事根源に「陰暦四月一日、これは天子夏冬の季のあらたまる始に臣下に御酒をたび、政をきこしめす儀なり。大凡旬には色々あり、夏の始に行はるゝをば孟夏の旬と申し、云々」とあるが、「孟」は始といふ義「旬」とは年中行事歌合に、すべらきの政に臨み給ふ義なりとあり。この孟夏の旬には、二献の後、柳筥に入れて内侍の持ち出たる扇を群臣に賜ふ、故に扇の拝とも唱へり。此儀式は平安朝末期には既に絶えはてたることなり。

実作注意　冬の初めのを孟冬の旬と云ひ、夏は扇、冬は氷魚を賜はる例とぞ。〔季〕冬　孟冬の旬（ハッハ）

例句

扇の拝　庭の餘花扇の拝に躍り出つ　月斗（同人）

氷を供す　氷の貢　氷の御物　氷室の御調　賜氷節　氷餅

古書校註

【御傘】氷室の氷は、四月朔日より九月晦日迄献ずる物なれども、六月朔日を肝要と用ふる故に、夏の季に相定る義也。
【滑稽雑談】六月一日、毛吹草に曰、膠尾寺の氷餅（一）當世俗今日に至りて、舊臘雪水にて製したる搗餅、或は膠餅又は富士山より出る氷餅を祝ひ食し、今日を呼びて氷室の節句とす。禁裏并上には沙汰承らず。（二）或説に云　鎌倉将軍治世の時、富士の雪を取りて暑月に献ず。

【日次紀事】六月初一日賜氷節、昔日、今日丹波國に貯ふる氷室より氷を禁裏に獻ず。或は群臣に賜ふ。當時は御厨子所の大膳職氷餅を供す。是大炊寮の遺風なり。

【年浪草】公事根源に曰、主水の司、(一)四月一日より九月晦日まで、是(二)をたてまつる。(略)氷を貢する處々、延喜式に曰、山城國葛野郡徳岡の氷室・愛宕郡小野の氷室・栗栖野の氷室・土坂の氷室・堅木原の氷室・同郡石前の氷室・大和國山邊郡都介の氷室・河内國讃良郡讃良の氷室・近江國志賀郡龍花の氷室・丹波國桑田郡池邊の氷室、此十ケ所なり。(三)氷のおものとは、熱月なれば御膳にも氷を用るをいふ。氷水めすとは、源氏物語常夏巻にも見えたり。註に云、氷水、冷水也。ひやゝかなる水也云々。枕草子に曰、いみじくあつき日る中に(略)ひ水に手をひたして云々。

注　(一)以下年浪草の自註。(二)この事あると云ふ意をきかない。(三)禁中の御手水、御[illegible]、御湯殿等を司る役所。(四)氷を。(五)以上四月、以下六月に見ゆ。

季題解説　公事根源に「貢氷　主水司、四月一日より九月つごもりまで是れをたてまつる。事の起りなど氷様の所に申し傳りぬ」とあり。古へ、氷室の氷を四月朔日より九月末まで奉るを云ふ。「主水」をモンドと稱ふるは、元モヒトリの略語なり。古言、飲料の水をモヒと云へればなり。【参照】氷室。(夏)

例句

氷を供す

世の貢多かる中に氷のみつぎ　　白雄（白雄句集）
守る人と違ふ氷のつかひかな　　言水（俳諧五子稿）
六月の氷もとゞくみやこかな　　蓼太（蓼太句集）

参考　氷室の御調とも氷の御調とも云ふ。夏日御膳に氷を供御するを言ふ。文献に現れた最初は日本書紀仁徳天皇の巻六十二年五月の條に、額田の大中彦の皇子、大和の闘鶏の野に猟に出られた時、野中に氷室ありしを見、氷を取つて帝に献らせ給うたとある。後、主水司が天子諸王に四月朔日から九月晦日までの間毎日氷を献つて酒食の冷料に供したのである。この事は徳川時代にも行はれた事と見えて文献に残つて居る。

擬階(ぎかい)の奏(そう)

古書校註

【滑稽雑談】四月七日　公事根源に云、是は二月の列見の時の成選の短冊(一)を二省(式部兵部)よりもてまいれるを大臣の奏聞する義なり。列見延引の時は是ものぶるなり。事はてぬれば、短冊をもとのごとく櫃に入れて昇きて退出す。さしたることなし。(二)此の擬とは擬議也。誰々を加階(三)させられよと議するの奏聞の由也。

注　(一)冬の部参照。(二)これと云ふ程の事もない。(三)位の昇ること。

季題解説 往時朝廷にて行はれし儀式に定考（定考と書して「かうぢやう」と讀む）なる儀式あり、六位以下の官人の藝能・行狀等を選びて五位を授くる儀式にして八月十一日に行はる。此れより先、二月十一日、其の器量・容儀を見る列見の儀あり、後、四月七日に此の列見の時の成選の短册を大臣の奏聞する儀あり、これを擬階奏といふ。此の擬階の奏の擬は議の意にして、誰々を加階せられよと議することと「公事根源」に出づ。成選の短册とは、六位以下八位以上の人の藝能・行跡を選び上げたる人名錄なり。かくて八月に至りて其の選を定む。

例句

擬階の奏　国々に擬階の奏の噂かな　巣欣（俳句大観）

駒牽（こまひき）　夏の駒牽（なつのこまひき）

古書摘註

【滑稽雑談】公事根源に云、是は四月に侍る事なり。八月のも名はおなじけれど心はかはれり　天皇武德殿に幸す。王卿以下床下に着す。左右の御監、御馬の奏をとる。馬取、庭にわたり御馬を引渡す、白馬の節會（一）のごとし。近衛兵衛の射手南にわたり、四府騎射の文を奏す。左右大將是を奏聞す。近衛の少將以下番長以上六人東遊（二）を奏す。右近衛納蘇利（三）狛犬（四）を奏す、雅樂寮、蘇芳菲、駒形（五）を奏す。この駒牽は來月の騎射（六）の馬、射手人などを今日御覽ぜらるゝけしき也。貞觀の比より始めらる。延長五年は、五月三日に駒引ありとみえたり。（七）

註 （一）正月の部參照。（二）舞の名。（三）雅樂の名。（四）高麗の樂曲の名。（五）舞樂の名。（六）五月左右近の騎射の條參照。（七）當延喜式左右馬寮式に詳し、參照。

季題解説 中古朝廷に行はれたる御馬親覽の儀式にて、毎年四月二十八日及び八月に行はる。前者は五月に行はるゝ騎射の用たる馬寮、及び諸國にて飼養せる官馬を親覽せらるゝものにして、類聚國史に、天長六年四月天皇武德殿にて駒を覽たまひし事見えたれば、此の頃より此の儀式ありしを知るべし。式日には天皇親王以下群君を具して武德殿に臨ます。御着座の後左右馬寮御監御馬奏文を内侍に附して奏進し内寮の頭庭上に立ちて御馬の

引渡をなす。其の作法次第は白馬節會の時の如し。馬寮の馬は擬飼の馬と稱し、諸國の馬は國飼の馬と稱し、引渡の時は擬馬を先となし、畿内以下諸國の飼馬を後となし、馬寮の允、各々其の馬の御前に到る毎に其の國名等を奏上す。引渡終りて馬寮騎士及び近衛兵衛の官騎射の手たる者各々騎射を試み、近衛大將門衛府騎射の名簿を奏し、雅樂寮管絃歌舞を奏し、諸臣に祿を賜る等の式あり。國飼の馬は各國に割ふり、毎年五月五日以前に當國司をして寄進せしめし事延喜式に見ゆ。

【實作注意】駒牽には夏の駒牽と秋の駒牽（八月）とあり、後者は年々諸國の牧場より進奏する貢馬を御覽せらるゝなり。【參照】左右近の馬場の騎射　秋—秋の駒牽

奈良の犬狩　犬番　犬追棒　犬狩

【季題解説】毎年初夏に至れば、奈良に於て犬狩を行へり、此時期は鹿の分娩期にして、神鹿の兒の、野犬に害せらるゝを防ぐ爲めに行はれしものにして、奉行所より次の如き布令を出し高札を立てたり。

一、當節は鹿出産の頃に付、野犬見付次第追拂ふべし、畜生の事故立ち歸り候はゞ幾度にても追拂ふべし。

奈良市中にては犬を飼ふ事を嚴禁し、偶々犬を飼ふものあるも戸外に出さざるやうにせり、現今はかゝる事なし。【參照】動物—鹿の子

【參考】禁祕御抄に藏人が仰を承つて瀧口の武士に命じて犬を射させた事が見える。侍中群要にも此の事が見える。奈良の犬狩と言ふのは初夏神鹿の分娩期に犬を追ふ可き由奉行所より布令が出るのである。何時の頃より行はれたかは詳かで無い。

左右近の馬場の騎射　ひをりの日　左近の荒手番　右近の荒手番　左近の眞手番　右近の眞手番

【古書校註】【滑稽雜談】日本紀に曰、持統天皇三年七月壬子朔、丙寅、左右の京職及諸國司に詔して、射を習ふ所を築く。公事根源に云、五月三日は左近の荒手結（一）四日は右近の荒手結、五日は左近の眞手結（二）六日は右近の眞手結なり。昔は左右近の馬場にて騎射の事侍りしにや。射手などは大將の申定る事也。奥儀抄に云、ひをりの日は騎射の眞手結の日也。五月五日也。此日は褐（三）のしりを引折たれば、ひをりの日とは云ふ也とぞ。（略）荒手結の日も引をれりおぼつかなし。歌林良材に曰、（略）ひをりと云は隨身（四）のかちの尻を引折て着る故に、ひをりとはいへり、引をる心なり。荒手結も同じ姿なれど、それはならしなれば、かたのやうに引折る也（五）。これによつて、眞手結の日をむねと引折の日とはいふなり。（略）河海抄に云、左

近馬場は一條西洞院、右近馬場は一條大宮也。

注 (一)騎射の稽古の如きもの　(二)眞の勝負を爭ふ騎射　(三)褐色、(四)高貴の者に隨ふ從者。(五)習慣であるので、ほんの形式ばかりにひき折るのであるの意。

季題解説 昔五月三日より六日迄、一條西洞院の左近の馬場及一條大宮の右近の馬場に於て行はれたる騎射の式をいふ。公事根源「五月三日は左近の荒手結、四日は右近の荒手結、五日は左近の眞手結、六日は右近の眞手結なり。昔はまた左右近の馬場にて、騎射のこと侍りしにや。射手などは大將の申し定むる事なり」とあり。「手結」は二人相番ひて勝負を競ふこと、「荒」とは大略にする義にて、眞手結の下稽古の如きこと行はれ、後に眞の勝負なる「眞手結」行はれしなり。此日には隨臣、褐の尻を折て著る故に、ひをりの日といふなり。荒手番も同じさまながら、眞手番正日なれば、五月五日をひをりの日と云ふ。ひをりは引折の略言なり。参照 騎射

天中節

古書校註【栞草】〔提要抄〕五月五日午の剋を天中の節とす。

早瓜を供ず

古書校註【滑稽雜談】延喜式内膳司に曰、五月五日山科の園早瓜一捧を進む。若し實らずんば花根を獻す。又云、早瓜を營むは、一段種子四合五勺、總單功四十六人、地を耕す二遍、子を下す半人、二月。鋤を拂ふ十二人、壅并芸三遍、第一遍五人、三月上。第二遍四人、三月下。第三遍三人、四月。(略) 年中行事秘抄に曰、内膳司、早瓜を供ずる事内竪(一)を差して、常住寺に遣す、件の早瓜山城國御園の供する所也。而して件の御園は桓武天皇建て給ふ所也。又常住寺は彼の御願也、仍て之を遣す歟。常住寺は延喜式七。野寺の事なり 〇後拾遺集、左衛門の藏人に文遣しけるに、うとくのみ侍りければ、ちひさき瓜にかきてつかはしける　ならされぬみそのの瓜としりながらよひあかつきとたつぞ露けき　よし孝

注 (一)内侍(?)をつかはしてか

季題解説 中古朝庭の行事、毎年五月五日、山城の國の御園に栽培せし瓜の早熟のものを早瓜として朝庭に獻ずる習ひをいふ。若し瓜實らざる時は瓜の花を以て之に代ふる由延喜式に見ゆ。参照 端午

五月の鏡

百錬の鏡　天下鏡　水心鏡

古書校註【滑稽雜談】異聞集に曰、天寶中揚州水心鏡を進る、背に盤龍あり。五月

五日揚子江心（一）に於いて、之を鑄る、昔の龍鏡異なり。後大旱之を祠れば乃雨ふると。千寶が捜神記に云、金錫の性は一也。五月丙午の日、午時、鑄て陽燧となす。（略）時珍本草に曰、五月鏡は、高堂錄が云ふ陽燧、一名陽符、（二）火を日に取る。陰燧、一名陰符、水を月に取る。並銅を以つて之を作る。之を水火の鏡と謂ふ。（三）是水火を日月より取る鏡なり。此鏡を鑄る日、端午、丙午の兩説上に記するがごとし。此事和國に鑄り用ゆる沙汰承らず

【年浪草】 客齋隨筆に曰、（略）白樂天の詩に、江心の波上中舟に鑄る、五月五日午時に競ふ。昔に九五の天を飛ぶの龍あり、人々呼びて天子鏡となす。（略）藻鹽艸 江につなぐ舟の中にてむかし鑄みがく五月のかゝみなりけり。

註（一）揚子江の流の眞中で（二）陽のまもり札（三）其さへの白銅

【考證解說】 支那唐代に於て、陰暦五月五日（一説五月丙午）に揚子江の河中に於て鑄りて進めしといふ鏡。此の鏡の背面には蟠龍を畫く故、天子鏡ともいひ、又江水を取つて百錬千鍛せしを以て百錬の鏡ともいふ。

粉團(ふんだん)を射(い)る

菖蒲團(あやめだん)　水團(すいだん)　白團(はくだん)　澱粉團(でんぷんだん)　乾團(かんだん)

【古書校註】

【年浪草】 天寶遺事に曰、唐の宮中、端午毎に粉團角黍（一）を造りて金盤の中に釘す、（二）纖妙愛すべし。小角弓（三）を以て箭を架し、射る。粉團を射る者は食ふを得。蓋粉團滑膩（四）にして、射難きなり。都中盛に此戯を行ふ（歳時雜記に曰、端午に水團を作る、又白團と名く。或は五色の人獸花果の狀を雜ゆ。最も精なる者は滴粉團と名く。或は麝香を加ふ。又乾團、水に入らざる者あり。

註（一）ちまき。別項粽の條參照。（二）くぎで打ちつける。（三）小き角にてかざれる弓。（四）すべ〳〵して。

【考證解說】 陰暦五月五日、支那の古俗宮中端午毎に粉團（吾國の團子）、角黍（吾國のちまきの類）を造つて、之を金盤中に釘ぎし、小角弓を以て是を射、粉團に中りたるものは、之を取りて食ふ戯を云ふ。【參照】粽。

【[illegible]】 菖蒲團子とも言ひ、竹の串を四叉にし、其の枝毎に四つゝの團子を貫きたるもの、其の形「花あやめ」に似たるにより此の名がある。又絲切團子に餡をぬりたるものを言ひ、端午の日、團子を作つて射て中れば之を食ふのである。

騎(き)射(しゃ)

騎弓(うまゆみ)　流鏑馬(やぶさめ)　笠懸(かさがけ)　犬追物(いぬおふもの)

【古書校註】

【年浪草】 年中行事歌合に曰、五月五日豐樂院（一）にて、昔は騎射を御覽じ

ける也、是を馬弓といふ。天子群臣みなあやめのかつらを(二)冠にかけて、節會の儀式ありし也、續命玉給けるにや。いと興ある事にてこそ侍れ。

【滑稽雜談】五日(略)延喜式(四時祭式)に曰、五月五日騎射、前月、左右近衞、左右兵衞等の府各まさに射るべき人を試練し、簿(三)を造りて、省を移す。射畢れば即的を中る人數を錄し、官に申す。一的を中る每に布一端を給ふ。

注 (一)古へ禁中の宴會場、紫宸殿の西にあり。(二)役所なかへる。(三)帳簿即ち成績を記せる名札。

季題解説 陰暦五月五日宮中に於て行はせられし儀なり。此日天皇武德殿に出御なりて騎射を御覽せらる。左右近衞、左右兵衞等の府より人選して射手を出し、中的せるものに祿を給はりしよし延喜式に見ゆ、これを馬弓とも云へり。

實作注意 公事根源・年中行事歌合等に平安朝末期には既に絶えたりと見ゆ。

【參照】駒牽(夏)、左右近の馬場の騎射(夏)。

參考 步射に對して言ふ語である。更に詳しく言へば、馬弓など稱して、馬上にて弓射る式の名である。それは陰暦五月五日、朝廷でも武家でも行はれたものであるが、武家の場合には、流鏑馬・笠懸・犬追物などを總稱して居る。又享保以來、將軍家にて、騎射と名付ける式が別に起つた。これは古書の說明によると、丁度、流鏑馬の様なものである。天武天皇の八年、群臣に命じて騎射をしめたことが傳へられるのが初見である。

天師を畫く

古書校註

【年浪草】歲時雜記に曰、端午に都人、天師を畫きて、以て賣る。又泥塑天師を作り、艾(一)を以て頭となし、蒜を以て拳となし、門上におき邪を辟く。

【塒山の井】此國に紙に鍾馗をかきて賣り侍るを買ひて、門戸の前にたておく事、(三)此國ぶりにや侍らん。

注 (一)よもぎ。(二)[illegible]。(三)年浪草の引ける歲時記參照。

季題解説 支那の風習にして、陰暦五月五日天師を畫きたるものを門上に置きて邪を避く呪とせしを云ふ。我國にて端午に鍾馗を畫きたる幟を掲ぐると同じ意なるべし。參照 鍾馗を書く(夏)、[illegible]を見よ。

鍾馗を畫く

牡鍾馗

季題解説 五月五日、鍾馗の像を[illegible]と交へ、鍾馗を畫きたるものを門戸に貼れば邪疫家に入らずと云ふ。支那の俗なり。鍾馗は唐玄宗、夢に終南山の鍾馗、虛耗といへる鬼を逐ふを見て、之が像を吳道子に畫かし

めしに始まると傳ふ。

儀方を書く

儀方を書す　参照 天師を書く

季題解説 陰暦五月五日、支那の古俗に寸ばかりの紙に儀方の字を書き、これを家の四方に貼りつくれば、其年蚊蟲を退くと「五雜俎」に見ゆ。「博物筌」にも蚊を避る咒、「今日午刻、儀方の二字を書て家内の柱、やねうらなどに貼れば蚊を去る」とあり、一種の咒なり。参照 天師を書く

例句

儀方を書く　妹が子に宿の儀方を書せけり　青々（妻木）

鴝鵒の舌を去る

鸜鵒の舌を去る

古書校註【年浪草】零陵記に曰、鸜鵒、人多く之を養ふ。五月五日其舌の尖を去れば、則語をよくす。聲尤も清越（一）なり。鸚鵡と雖過ぐる事能はず。○時珍が曰、其舌人の舌の如し。剪剔すれば、人言を作す。

註（一）聲すみ、調子の高きこと

季題解説 鸜鵒は五月五日、其舌端を剪り圓からしめ、語を敎へ込む時は能く人語又諸鳥のまねを爲すとあり、人多く之を飼ふ。叭々鳥の事なり。形鵙に似てとさかあり、舌長く、先端爪の如く尖れるより、これを切るなり。

賞作注意 叭々鳥又八哥鳥、㖹々鳥とも書く。古來鸜鵒を黑鶫と間違へ來れり。

神麯製す

季題解説 本草綱目に一葉氏水雲錄に云、五月五日、或は六月六日、或は三伏の日、白麪（百斤）青蒿の葉汁（三升）赤小豆の米・杏仁（各三升）蒼耳の葉汁、野蓼の葉汁（各三升）を用ゐて、麪豆杏仁を和して餅に作り、麻の葉或は楮の葉に包み罨ふ、醬黄を造る法の如し、黄なる衣を生ずるを待ちて晒し、これを收む」とあり。主治に水穀・宿食・癥結・積滯を化すとあり。

梟の羹

梟の炙

古書校註【年浪草】漢史に曰、五月五日、梟羹を作り百官に賜ふ。其惡鳥なるを以つての故に、五月五日を以つて之を食ふ。古へは梟羹・梟炙を重んず、蓋其族類を滅せんと欲す。

【滑稽雜談】時珍本草に曰、梟は長ずれば則其母を食ふ。故に古人夏至之を磔（一）にす。其小なれば美好にして、長ずれば醜惡なり。狀母鶏の如

し、斑文あり、頭は鶉の如し。（三）肉甚美し。羹臛（二）となし。食ふべし。

注 （一）はゝつけ （二）やうかく、共にあつもの

季題解説 支那の古俗、五月五日に梟の羹を調理して百官に賜ふ。梟の事は本草に「此鳥長ずれば其母を食ふ、不孝の鳥なり、故に古人は夏至に之を磔にす。即ち梟字は鳥首木上に在るより來るとあり。此の如く梟は惡鳥として極端に嫌はれしかば、五月五日之を羹となし、これを食ふことを盛んにし、その種族を滅さんと欲するなり」と。

實作注意 古來梟字と鳬字と相似て而も同じ鳥類なるを以て種々混同せられ、梟を以て「ケリ」と訓ずるものあれど誤なり。鳬は（カモ）にして惡鳥とせらるゝものにあらず。

例句

梟の羹

口拭ふ梟の羹旨かつし　青・々（妻木）

守宮（やもり）を搗（つ）く

壁虎（やもり）の印（しるし）

季題解説 支那の古俗、端午に守宮を捕りて飼ひ、之に丹砂を食ましめ、翌年の端午に之を搗き、その血を女の臂に塗れば、いかに洗ひ拭ふも消失せざるも、若しその女にして男に接することあれば乃ち消ゆといふ。この守宮を井守とするは非なり。百番歌合に「疑ひしゐもりの跡はそれながら人の心のあせにけるかな」など見ゆ。

例句

守宮を搗く

守宮搗く王の秘事窺ひけり　青々（妻木）

賑給（きふ）

しんこふ

古書校註 【滑稽雜談】日本紀（注）に曰、天武天皇九年冬十月壬寅朔乙巳京内の諸寺貧乏の僧尼及百性を恤みて賑はせ給ひぬ（略）西宮記に云、東の手（一）は愛宕寺、北の手は右近の馬場、西の手は左兵衛馬場。公事根源に云、賑給はいやしき民に米塩などをたまふなり。京中の使里に路を分く。檢非違使（二）承りて、是をひく　米塩の勘文など申す事の侍る也。欽明天皇の御宇より始まるとぞ

注 （一）東の方面にて （二）檢察の役

季題解説 米塩を賜ひて窮民を救すこと。年中行事秘抄に「しんごう」と訓ずべき由見えたり。中古、鰥寡孤獨等の自存に耐へざるものは其の實を檢して朝によりて各々賑恤せることと國史に散見するも、中世以後朝政衰ふるに及びて賑給の制天下に普及せず、僅に京中の窮民に額を定めて米塩を施すに過ぎざるに至り、遂に此れを以て年中恒例の公事の一に加ふることとなれり。毎年五月中旬を選びて、先づ其の料として穀倉・大膳職等の米塩數

を摘出せしめ、各條里毎に派遣すべき使を定むるを例とせり。これを賑給定といひ、又其の使を賑給使といへり。而して其の賑給料は左京に米百八十石、塩十八石、右京に米百二十石・塩八石を充て、分給に當りては検非違使を差して糺行せしめたり。

例句　賑給　夏草に賑給の塩こぼしけり　青々（妻木）

参考　シンゴフと讀むのが讀み癖である。平安朝時代には陰暦五月に吉日を選んで京中の窮民に米塩を賜つた事で、検非違使が承つて之を貧窮の者に授けた。歴史は頗る古く欽明天皇の御宇に始まると言はれてゐる。鎌倉時代以後は廢れて行はれない。

着駄政（ちやくだのまつりごと）

季題解説　是れは中古五月検非違使の佐以下、東の市にて刑法を行ふ事なり、と公事根源に見ゆ。又「月齢の本文には盛夏の月にあるべしと見えたれど、四月は齋月にて神事こととしげければ、五月に及ぶなり」とあり。一著駄一の駄は鎖と同じく足枷にてカナホダシといふべき由、狩野氏の和名抄箋註に見ゆ。即ち盗犯及私鑄錢の徒に駄を著けて驅使することとなり。

忌火の御飯（いんびのごはん）

齋火（いんび）の御飯（ごはん）

古書校註

【滑稽雜談】　公事根源に曰、内膳司（一）より奉れるを大床子（御帳の）の御座にて供する也、景行天皇の御時より始る。忌火とは火をいむ心なり。神事などの時は不淨の火を打かふる事にや。是は月次神今食の御神事を今日よりはじめらるゝ成べし

【年浪草】　民間五月晦或は六月朔日、赤土を以て竈の外面を粧ひ、小鯛魚今朝羹に作りて之を食ふ。然らば則流疫痢疾を病まずと。云々

【日次紀事】　六月民間竈土を改め塗る。故に坊者（二）土を擔ぎ市中を巡り價をとり竈を塗る。

註　（一）宮中の膳部　（二）左官、壁を塗る人

季題解説　古、宮中に於て六月・十二月（一説、十一月も）一日未明に、内膳司より「忌火」の御釜にて調じたる御飯を、清涼殿大床子の御座にて、主上に奉れるを云ふ。忌火とは火を忌む心なるべく、此れが釜の名となりしものなり。

氷餅を祝ふ（ひもちをいはふ）

氷室（ひむろ）の節句（せつく）　氷室（ひむろ）の使（つかひ）

古書校註

【滑稽雜談】　毛吹草に曰、勝尾寺の氷餅、（一）當世の和俗今日に至りて舊

解斎の御粥（げさいのおかゆ）

季題解説 六月十一日、即ち神今食の次のあした、主上、神事の御潔斎を解かれ、常に復し給ひて後きこしめす御粥を供する式を云ふ。公事根源「御粥をはらけに盛る、和布の御汁物添へたり。三口めして御箸をたつ」とあり、この御粥は堅粥とて今の常の飯の如くにて、高く盛れるなれば、其御あまりに箸をつきさして置き給ふとなり。〔参照〕宗教―神今食（シンゴジキ）

水合の祓（みつあはせのはらへ）

水合（みつあへせ）

季題解説 往古、土用の入に陰陽師禁中に参り、内裏の井毎に祓を修すること、水合は、陰陽家にて井に向ひて行ふ一種の呪術なり。支那の風水家の説より出でしものならんといふ。

湯餅を進む（たうへいをすゝむ）

季題解説 荊楚歳時記に「六月伏日並に湯餅を作る、名づけて辟悪と為す。按ずるに魏氏春秋に何晏伏日を以て湯餅を食ひ、巾を取て汗を拭ふ、面色皎然乃ち粉を傳ふるに非らざるを知ると。即ち伏日の湯餅は魏より已來これあるなり」と。

雷鳴陣（かんなりのちん）

雷鳴（かみなり）の壺（つぼ）　雷（らい）の壺（つぼ）

古書校註 【滑稽雜談】公事根源に曰、此事あながち年中行事には入侍らず。（略）抑雷鳴の陣とは、昔雷の聲三度高く鳴り渡れば、大將以下近衛の次將まで、弓箭を帶して御殿の孫庇に催して（一）、御門を守護し奉りしなり。（略）大内の襲芳舍を雷鳴のつぼと申にや。（略）古今爲家抄に云、かんなりのつぼねとは襲芳舍といふ殿也。雷電の鳴る時帝おはします故なり。

註（一）うながす、催促し孫庇に集むるを云ふ。

季題解説 古昔、宮中に於て雷鳴激しき時、近衛の大將・次將・將監以下、蓑笠に身を堅めて、紫宸殿に候して主上を守護し奉れり、之を雷の陣と云ふ。此の時天皇行幸なる襲芳舍を雷の壺と名づく。延喜八年五月清涼殿に落雷して清貫希世等の朝臣、震死したることあり、怖ろしきためしもありし故、かゝる儀も行はるゝに至りしものと見ゆ。

参考 醍醐天皇の御時、清涼殿に落雷して震死の人があつたので起つたといふ。宮廷に於いて雷鳴大聲三度以上に及べば、武官武裝して護衛する。枕の草紙に「かみのいたく鳴る折にかみなりの陣こそいたうおそろしけれ」とあり、新儀式・北山抄・九條年中行事・公事根源などにも、夫々此の儀

式を說明してゐる。しかも北山抄に「近時不見之」とあるから、當時既に廢れてゐた儀式と考へられる。

徵兵檢査（ちようへいけんさ）　壯丁（さうてい）

季題解說 吾邦の徵兵檢査は、大抵四月上旬より始り、六月下旬に終る。當年徵兵適齡に達せる壯丁は、町村役場及び區役所に於て派遣されたる檢査員によりて體格の檢査を受く、之れを徵兵檢査といふ。

例句
徵兵檢査　徵兵檢査集る幼な馴染かな　薬草（同人）
痩せこけて徵兵檢査受けにけり　双葉（ホトトギス）

參考 全國の適齡者より現役兵を徵集する爲の檢査である。大朝上代の制、男子三丁毎に一丁を取つて兵士としたが、如何なる標準で採否を決したか明でない。後徵兵の制は中絶したが、明治六年徵兵令を發布してより、時に多少の變更はあつたが引き續いて今日に至つた。昭和六年度全國受檢壯丁數約七十三萬人、內甲種體格十七萬八千人。縣としては宮城縣最佳し。

メーデー　勞働祭（らうどうさい）

季題解說 五月一日をメーデーと稱し、全國の勞働者は其日を勞働祭となし集團して示威運動をなす。之れはもと英國に於て五月一日には花を飾れる柱（メーポール）といふ）の下に集つて踊り興ずる花祭の如きものをなす習慣ありて、英國の勞働者は此日を以て勞働祭となせしが、やがて世界各國の勞働者に及び、世界の勞働祭となれり。我國にては大正九年初めて之を行ひたり。

例句
メーデー　メーデーに兒負うて女加はりぬ　喜山（同人）
鬪はん我等の五月一日ぞ　三四郞（同）
勞働祭　勞働祭徒壇上に躍り出づ　螽斯（同）

海軍記念日（かいぐんきねんび）

季題解說 五月二十七日、此の日は我國曠古の大戰たる日露戰爭に於て、明治三十八年五月二十七日露國が最後の賴みとする强大なるバルチック艦隊を日本海に邀へ、空前の壯烈戰を演じ、遂に之を全滅せしめたる記念日なり。時の聯合艦隊司令長官東郷平八郎大將いかの有名なるZ信號「皇國の興廢此一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ」は戰鬪開始に當り旗艦三笠の檣頭高く揭げられたる也。三月十日の陸軍記念日と共に、永久に國民の忘

るべからざるものなし。

端午（たんご）　初節句（はつぜっく）

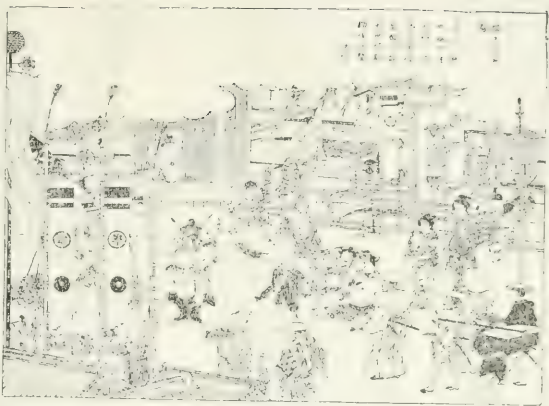
端午の節句　重五　端陽　菖蒲の節句　菖蒲の節會　菖蒲の日

古書校註

【年浪草】　五月五日端午の節なり。端は初也、午は古へ五の字に通用す。然らば則五月初の五日の謂なり。（略）○風土記に曰、仲夏の五日を端午と曰ふ。（略）月令廣義に曰、五月五日の故に重五と曰ふ。（一）

【滑稽雜談】　枕草子に曰、節は五月五日にしくはなし（二）さうぶ、よもぎなどのかぶりあひたるもいみじうをかし。

【日次紀事】　五月初五日、端五。今日端五の節なり。後世五の字を以つて午となすは、則誤れり。端は初なり。（略）今日より良賤各帷子を著る。（略）或は年に依り暑氣未だ到らざれば則良賤も亦綿服の上に之を著る表帷子と謂ふ。公家に於いて衣冠を著るの輩は此儀なし。（略）市中家々菖蒲艾葉を檐間に插む、各粽を造り、之を食し、或は互に相贈る。又細く菖蒲の葉を刻み、酒中に入れ、之を飲み、瘟を辟くと云ふ。凡中華の菖蒲と謂ふ者は石菖蒲也。本朝水菖蒲を以つて菖蒲となし、端五酒に漬るに用ふるは非也　（略）今夜大人小兒菖蒲枕を用ふ。京俗佳節毎に各赤小豆飯を食す、今日之を忌みて食はず、其謂を知らず。

【山の井】　あやめの節供は（略）西のこんぢも東の小路もさやめ（三）に、よもきふきわたす、軒のはなやかさ、ふきちり（四）のぼりたてならべしおほぢのさま、ちまきねぢきる家々の嘉例、くすだまやあやめのかづらつけまはる人々のけはひ、しやうぶ刀や小長刀もて、印地にまかる馬鹿者の氣色などすべし。

注　（一）五が重さなる、五月五日と重なるをいふ。　（二）まさつたものはない　（三）はつ

會に典藥寮より奉る菖蒲を盛りし案を「あやめのつくゑ」と云ひ、親王・公卿に菖蒲を頒ち配る女藏人を「あやめのくらうど」と呼べり。

實作注意　仁德天皇二十九年に初めて詔して菖蒲を獻ぜしめられしが、一時其事廢れ、聖武天皇天平十九年五月に「あやめのかつら」の御再興と共に菖蒲を獻ずることも復活せられしこと續日本紀に見ゆ。〔參照〕端午（ゴ）　菖蒲御殿（アヤメノゴテン）　菖蒲兜（カブト）

菖蒲御殿（あやめのごてん）

古書校註

【滑稽雜談】　公事根源に曰、五月三日六府菖蒲の輿を南殿（一）の階の東西にたつ。又時の花を折そへて、おなじくおく。

【年浪草】　○菖蒲御輿。（略）根菖蒲を連ねて棟梁となし、且細木を以つて柱となし、小殿の形を造り、檜葉並菖蒲を以つて殿字を蓋うて、衞士二禁裏に獻ず。

註（一）紫宸殿。（二）禁裏警固の士。

季題解說　宮中南殿の階の東西に、小さき殿を設けて、菖蒲の根を列ねて棟とし、細き木の柱を建てゝ、檜又は菖蒲の葉などにて屋根を葺きしものを「あやめの御殿」と云へり。故實拾要に「菖蒲の御殿とは菖蒲を以て小さき殿を作りし物にして之を獻ずるなり」とあり、又公事根源に「六府あやめの輿を南殿の階の東西にたつ」とあれば、菖蒲の御殿は、菖蒲の輿のことなるべし。〔參照〕端午（ゴタン）　菖蒲を獻ず（ケンズ）

菖蒲引く（あやめひく）

菖蒲賣（うり）　菖蒲刈る（あやめかる）

古書校註

【年浪草】　沼澤江地などにおりたちて、引く心など和歌によめり。○（寛正四）ふくやどはかはるあやめの原ながらおなじよし野に誰も引くらし　後花園院　○（文安三）まこもくさ末葉の露も五月雨にまさる水野のあやめ引也　資作。

季題解說　菖蒲は、古名「あやめ」又は「さうぶ」と稱へり。南天星科に屬する多年生草にして、時に丈け四五尺に及ぶ。根莖葉に特殊の芳香あり、本草學に於て此草を藥草なりとし、邪氣惡魔を拂ふと同時に火災を除くと云へる信仰に作ひ、端午の節句に艾と共に軒に葺かれ、湯に入れ、酒に浸して用ゐられ、又菖蒲と尚武と音相通ずるより武家時代に至りて殊に用ゐらるゝに至れり。是等端午用の菖蒲を刈り取るを「蒲菖引く」と云ふ。端午前となれば、菖蒲を引きて市中に賣りに出づるものあり、之を「菖蒲賣」といふ。〔參照〕端午（ゴ）

例句

菖蒲引く　菖蒲引く人沓はいて水邊なる　虛子（ホトトギス）

【三才圖會】艾、和名與毛木、俗に毛久佐と云ふ。（二）艾、江州伊吹山及下野標茅原の產最佳し。（四）今艾ノ嫩葉を摘みて、米の粉に和し、草餅を作り上巳の日、嘉例となす。

註（一）蓬のよもぎの（二）鈴鹿本注、五月四日主殿寮、內裏殿舍に菖蒲を葺くとある。（三）以省ぎる（四）い山に見える。（五）小、備の…の藤原定家のち、右近衛の中將に上る。（六）具平親王の自讃歌（七）小人許、又はふくべ

季題解說 五月四日夜、軒に菖蒲を葺くを云ふ。端午の節句に、菖蒲を屋根に葺くことは、菖蒲湯より少し後れ、平安中期より行はれし行事にして、西宮記に五月四日主殿寮の人々、內裏殿舍の屋根に菖蒲を葺きしことと見ゆ。之れ火災を避くる呪にして、一に蓬一艾づゝに艾を添へて葺くを常とす。此風習は宮中のみならず武家民間にも傳はり今にその風習を存す。

艾葺く 端午の節句に艾を以て軒に葺く事にして、古來艾は菖蒲に添へて葺くを常とせり。

楝葺く 菖蒲に替へて楝を葺くを云ふ。證類本草に「五月五日俗人、楝葉を取て之を佩ぶ、惡氣を遠く」とあるによる。

かつみ葺く 陸奥にては、五月四日「且美（勝見）」を葺くことと古きならはしなりと云へど、かつみの正體詳ならず、或は菰なりと云ひ、或は「田家草」なりと云ひ、或は野生の花菖蒲なりと云ふ。古より「安積の沼の花がつみ」と稱せらるゝは實方中將の故事によるものにして、今鏡に「あさかの沼の花かつみといふものあり、それを葺けとの給ひけるより、こもと申すものをなん、葺き侍るとぞ」とあり。

實作注意 菖蒲と、花菖蒲と混同すべからず、花菖蒲は鳶尾科に屬し燕子花に似たる花を開くものなり、菖蒲は、肉穗花序の寧ろ穗と云ふべき黄色の花を開くものなり。新造の家、又は罪とりたる家は、三ヶ年間菖蒲を葺かすといひ、又喪家には之を葺かずとの說あれど、菖蒲葺くことは火災を除く爲めにして、家の飾りにあらざれば、かゝることを憚らずと云ふ。**參照** 端午ノ植物―菖蒲（シヤウブ）

例句

菖蒲葺く

あやめふく御射山なれやあやつり場	沾徳	（俳諧五子稿）
雛が塒もあやめふきにけり	鬼貫	（俳諧七車）
此軒にあやめ葺らん來月は	同	（鬼貫句選）
屋根葺と並にふける菖かな	其角	（五元集）
しだり尾の長屋／＼に菖蒲哉	嵐雪	（玄峰集）
葺事ぞ何のあやめもしらねども	來山	（續いまみや草）
ほり上てあやめ葺けり草の庵	太祇	（太祇句選）
鳥籠にさうぶ葺居る童かな	白雄	（白雄句集）
小菖蒲に素莚の我家なつかしき	同	（同　）
かくれ家やそこらむしつてふく菖蒲	一茶	（七番日記）

あやめ葺日にさへたれは雨かな　梅室（梅室家集）
あやめふけ日白の不二の暮ぬうち　乙二（松のゝえ草稿）
このやうにあやめ葺ても寒哉　同（同　）
戸あくればけさの影さすあやめ哉　同（同　）
をかしやな雀の中にふくあやめ　成美（成美家集）
人の妻の菖蒲葺くとて梯子哉　子規（全　集）
用る時の傘に落ちたる菖蒲哉　同（全　集）
菖蒲葺く長き庇のたゞ中に　虚子（ホト、ギス）
遊園や菖蒲葺きたる屋形船　花蓑（同　）
むつまじのあらむつまじの軒あやめ　白雄（白雄句集）
軒あやめ市に牛かる思ひあり　同（同　）
十萬の軒やいづこのあやめ縁　闌更（半化坊発句集）
草の戸のくさより出て蓬ふく　暁台（暁台句集）
松かざりせねど蓬は葺にけり　蒼虬（蒼虬句集）

[illegible]　五月五日菖蒲を屋根に葺く事は、天平五年以來見えてゐる事である。西宮記に「五月四日夜主殿寮内裏殿舍葺菖蒲」ともある如く其の後も枕草子・かげろふ日記にもみえて居る。何故菖蒲を葺いたのかといふ事は古來諸說紛々で、閑窓瑣談には「此の日より盛夏になりて毒蟲多く生じ人家に入らむとする故軒端に蓬菖蒲その他蟲を除く[illegible]草木を軒に葺く事也。菖蒲に[illegible]もしものに[illegible]らず。然れば古歌にも菖蒲・蓬・樗などあり。凡そ五月[illegible]の草は諸の毒蟲を除き其の效能多し」と說明してゐる。[illegible]惡鬼をはらふ爲に毒蟲除けの菖蒲を屋根にふいてこれが爲を未然に防いだものである。同樣の意味から樗の葉を屋根に葺く所あり、これを樗葺と言ひ、又陸奧には菖蒲なき爲花がつみ（眞菰の花）を代用して屋根に葺くのであるが之をかつみ葺くと言ふ。

菖蒲の占

[illegible]

【[illegible]草】〔三[illegible]草〕　女兒の戲にあやめを結び、唱へていふ、おもふこと軒のあやめにことゝはんかなはゞかけよ、かねの緒（二）其如く、いひて一[illegible]る。願ふ所成るものは、[illegible]あつて網を菖蒲のうへに曳くと云々

[illegible]

季題解説　菖蒲を以て占ふ女兒の戲れなり。菖蒲を結びて軒にさし、思ふことを祈るとき、若し其菖蒲の上に蜘蛛の網を曳く時は、所願成就の兆なりと云ふ。[illegible]端午。

例句

菖蒲の占　しるしなき菖蒲の占を恨かな　青々（妻木）

菖蒲の根合　菖蒲合せ　根合せ

古書校註

【年浪草】和歌にながき根とよめるは、あやめの事也。（一）根のながきものにて、永承六年五月五日にあやめの根合といふ事あり。其式歌合の儀の如し。左の根一丈一尺、右の根一丈二尺のよし、古今著聞集に見えたり。是は後冷泉院の御時なり。又郁芳門院の根合などいへる事は、八雲御抄にも載せ玉ふにや。

註（一）あやめ草、ながき根と云ふとの意。

季題解説

中古我國禁中に於て行はせられし行事にして、扶桑略記・古今著聞集等に其事見ゆ。菖蒲は「長き根」と稱し、古來其根を貴び、支那にては殊に一寸九節のものを良しとせり。內裏に行はせられし菖蒲合せは、その根の長き方を以て勝ちとせり。

實作注意

菖蒲は其根を賞するより、「あやめぐさ」はねにつゞく枕詞として用ゐらる。例へば「あやめ草ねたくも君がとはぬかな今日は心にかゝれと思ふに」の如し。〔參照〕端午

例句

根合せ

根合や御池にひたす花筐　其角（五元集）

菖蒲の案　菖蒲の御案

古書校註

【年浪草】延喜式典藥寮式に曰、凡五月五日、菖蒲・生蘄・黑木の案（一）四脚（略）を進る。

註（一）皮を削らぬ木材で作つた机。

季題解説

五月五日禁中の節會に、典藥寮より奉る菖蒲を盛る案を云ふ。延喜式典藥寮式に「凡五月五日菖蒲・生蘄・黑木の案四脚、苧六兩、黑葛四斤を進る、省輔以下寮頭ともに、執る人進み終りて卽ち退出す、輔留りて之を奏す」と。〔參照〕端午

菖蒲の枕

古書校註

【栞草】續拾遺　あやめぐさひと夜ばかりの枕だにむすびもはてぬ夢のみじかさ、前中納言雅具。後水尾院當時年中行事あやめの枕（薄やう（一）につつむ）一對ゆひ、御枕もとにあり、うすやうは極藹調進す、御枕は勾當の內侍よりいだす也。其樣あやめをたけ五六寸ばかり切て、五寸廻ばかりにあとさきを紙ひねりにて結びて、兩方の小口にさしはさむ。云々

【日次紀事】五月初五日、菖蒲の御枕、六位藏人より禁裏院中に獻ず。

【同】 五月初五日（略）今夜大人小兒菖蒲枕を用ふ。

註（一）紙の一種。とりのこ紙の薄きもの、又は皮紙の薄きものも云ふ。

季題解説 藥草にして、邪氣惡魔を拂ふとせられし菖蒲を、端午の夜枕の下に敷きて寝るときは、また克く邪氣を攘ふ呪なりとせり。菖蒲の蘰を用ゐしと同じ意なり。之れも平安中期より行はれし行事にして、中納言雅賴の歌、千載集などに見ゆ。又吾妻鏡には嘉禎四年將軍賴經、金銀を鏤めたる菖蒲枕を朝廷に獻じたることを載せたり。菖蒲枕は御水尾年中行事によれば、そのさま菖蒲を丈け五六寸許に切りて五寸廻計に跡先を紙ひねりにて結びて兩方の小口によもぎをさしはさむ由あり、［illegible］端午

例句

菖蒲枕　あやめかけて草にやつれし枕かな　曉臺（曉臺句集）

きぬ〴〵にとくる菖蒲の枕哉　青々（妻木）

參考 菖蒲は文目の義と云ふ。菖蒲の枕は古今要覽の所說によると「按ずるに近來は六日に浴湯あり。禁中にては、五月五日の夜の菖蒲の御枕を六日に出され、釜殿役人御湯に入れ奉る也」とある如く、端午の節句の夜菖蒲を枕にして寢たのである。ある書に「菖蒲を以つて枕にしく事は中むかしより始まれる事なり。之を菖蒲の枕といふ」と云つてある如く、一般下賤の者までもこれを行ひ、疫病災難を除き去つたのである。吾妻鏡にも將軍家から公家に菖蒲の御枕を獻つたことが見えてゐる。

菖蒲帷子　菖蒲浴衣

古書校註 【俳諧歲時記】 京師の俗、端午に菖蒲浴衣・同帷子を與ること必家々にありとぞ。官家には、菖蒲重とて朝服（一）あり。花田萌黄のよし。根菖蒲といふは、表白、裏紅。又楝衣といふは、五月五日着する所の常の浴衣帷子を菖蒲浴衣・菖蒲帷子といふのみにて、當季の色を用るにあらず。

註（一）官服、公に着る衣服。

季題解説 昔、五月五日より、同月中著る帷子を菖蒲帷子と稱せり。之は晒しの布を紺地に染めて、五月中著するなりと。之に倣ひ、德川時代に於て端午の節句に幕府へ出仕の諸士は染帷子を着して見賀を述ぶるを例とせり。民間に於ては菖蒲草に「京師端午には必ず奴婢に菖蒲浴衣、菖蒲帷子を與ふること家々のならはしなり。之れ五月五日に常用の浴衣、帷子を云ふのみにて、當季の色を用ふるにあらず、所謂節小袖といふに同じ」と。［illegible］端午

例句

［illegible］　蓑つ香をけふは浴衣に菖蒲哉　也有（［illegible］）

參考 菖蒲帷子は此の日に着する常用の浴衣帷子を言ふのみにて、當季

の色を用ゐるのでは無い。所謂白小袖といふに同じく、京都にては端午には必ず奴僕に菖蒲浴衣・菖蒲帷子を與へるのが常例である。

菖蒲縵（あやめかづら）

古書校註

【年浪草】續日本紀に曰、聖武天皇天平十九年五月、詔して曰く（一）今よりして後菖蒲の縵に非る者は宮中に入る事勿れ。云々

【日次紀事】五月朔朗日（略）女兒菖蒲を頭髪に挿む。

註（一）昔は五月の節に必ず菖蒲を用ひ縵となせしが此頃此例廢せられしを嘆ぜられて、此物があつたと云ふ。公事根源にも記す

季題解說　五月五日、未明、禁中に縫所より獻ずる所の菖蒲縵を、天子かけ給ひて武德殿に御幸ましまし、端午の節會を行はせられ、羣臣一同も其冠をかくるを例とせり。此菖蒲を用ゐるは、惡氣を拂ふ呪にして、其體、細菖蒲草六筋を用ゐ、短き筋を以て巾子に當て、前後二筋、長き二筋を以て巾子を廻て前後に充つと。菖蒲を縵にすることは、この信仰の最も重大視さるゝところにして、鬘を頭に卷く事は、古へより行はれ、或は蔦かづら、日陰のかづら等を卷き、身の淸らかなることを示せる思想に基くものなり。〔參照〕端午（ゴタン）

例句

菖蒲縵　古妻やあやめの冠著たりけり　乙二（たのゝえ草稿）

菖蒲（あやめ）の鉢巻（はちまき）

季題解說　五月五日端午の日、菖蒲を三つ打の繩にし、兒童等之を鉢卷となし、菖蒲打などの遊戲をなす。菖蒲鬘の遺風なり。むかし〳〵物語「五月の初・ときん・すゞかけ・ほら・菖蒲刀をうりありく、それを子供求て五月四日に、子供しやうぶにて鉢卷し、ときんをかぶりたすきをかけ、菖蒲刀をさしほらを吹く云々」〔參照〕端午（ゴタン）　菖蒲刀（シヤウブガタナ）

菖蒲（あやめ）の冑（かぶと）

飾冑（かざりかぶと）

古書校註

【滑稽雜談】續日本紀に曰、光仁天皇寶龜十一年五月辛未、京庫及諸國の甲六百領を以て且鎭狄將軍の所に送る。已卯、勅して曰、狂賊亂し、常に邊境を侵擾す（略）征討せしむと。（一）是此年（或は天應元年と謂ふ）異賊退治のため、將軍發向の時、朝廷より甲冑を賜ふ。その日五月五日也。（略）此儀を後世學びて、板紙をもて冑をつくり、民家に今日立飾るといへり。又歳時雜記に云、土にて張士師を作り、艾を鬚とし、蒜を拳として、門戸におくの遺意なりと年齊拾唾にかけり。

柳木一作二大小刀一、其體二菖蒲刀一、横二之於腰一著二頭巾一倣二山伏體一」とあり、寛永・享保頃までは、菖蒲刀は兒童の帶び歩きしものなりしが、其後冑も刀も單に飾物となり、從つて木を以て作り、金銀を鏤めたる華美なるものを造るに至れり。［季題］端午 菖蒲冑 菖蒲打 印地打

［例句］

菖蒲刀　一刀見せんあやめの九節　嵐雪（玄峰集）

菖蒲太刀　菖蒲太刀芝居に近き家かへむ　几董（井華集）

昔か代や菖蒲編へ鯉菖蒲の太刀　子規（全集）

菖蒲に刀添る人每にきりかゝる　圭岳（同人）

［參考］菖蒲を刀の形に作りしもの、又木刀に彩色せる布紙等を卷いたものをも言ふ。藤森社緣起の説明によると「刀等以二菖蒲一飾レ之、稱二菖蒲刀一、是則當社祭禮供奉行粧也」とあり、和漢三才圖繪にも同樣の説明がある。以上三說あるも菖蒲を刀の形に作りしものを言ふのが最も溯源的であり、次いで變化を生じたものと考へられる。

菖蒲打（しやうぶうち）

菖蒲縄 菖蒲たゝき

［季題解說］五月五日は男兒の節句なりとして、男兒は此日を我物の天下の如く遊ぶを常とせり。菖蒲打も端午に於ける男兒の遊戲にして、菖蒲の大いなる太き三つ打の縄を造り、之を以て地をたゝき音を發する遊びなり、激しく大いなる音をたつるを良しとす。中古風俗志に、享保の頃まで此事行はれし由見ゆ。

［實作注意］菖蒲打はまた「印地打」のことをも云ふ。參照 端午 印地打

［例句］

菖蒲打　御城下やこゝの辻にも菖蒲打　水巴（曲水）

印地打（いんちうち）

菖蒲印地 菖蒲切 印地切

［古書校註］【日次紀事】五月初朔日 端五（略）兒童、冑鎗長刀胞衣旌旗を門楣（二）に飾り又柳木を以つて大小の刀を作る、是を菖蒲刀と謂ふ。男兒之を腰に横へ、頭巾を著し、山伏の體を倣し、晩に及び一鴨河邊に出で、左右に分列し、礫を擲げて、相戰ふ。是を印地と謂ひ、又催と稱す、東國通鑑記す所の石戰戲是也。（略）晩景に及び、或は大人も亦相雜り至り、刀を以て相撃つ。近世一切之を禁ず。

【滑稽雜談】印地五日世諺問答に云、（略）むかし左右近衛の馬場にて馬に乘りて弓射し事の侍る也。ひをりの日なども申にや。これらをやいんちの始とは申べからん。（略）傳聞に、寛永の比迄は京都三條河原今出川にもありし。そいむかし紫野には正月の頃も侍りしと也。諸國ともに五月五日に

は印地侍る。推古天皇の御宇より始ると云ふ、猶可考。此事寛永の比より諸國一統に停止せらる。

註 (一) 門の南より北じ、單に門第、門戸をさす。我國では門戶の上の横の梁を云ふ

【參考解説】 昔、端午の節句に行はれし兒童の遊戲にして、河原などに集り左右に分れ、互に礫を打ち合ふを云ふ。印地は「石打ち」の轉なりとも云ひ又、地によりこの地と印を立て戰をなす故に、印地打と云ふとも云へり。寛永以前には京都藤の森の祭の歸り、又は賀茂競馬の歸りに此地に於て印地行はれしが、多くの人々傷きたるを以て寛永中禁止せられしと。年中故事「往昔古都の童、柳の木刀を腰に横へ、頭巾を著し、各左右に別れて除をなし、左右一同礫を打合て相戰ふ、是を印地打と云ふ、或は地上に印を附、界を分け、彼柳の木刀にて打合ひ、戰ひ勝つて相手の境に入るを吉とす、吾境を出るを惡しとす、故に印地の名あるか、又石打か」とあり、兒童は菖蒲冑・菖蒲刀を著して石合戰を行ひ武士的遊戲をなせしなり。雍州府志に「端午石戰戰後、多以菖蒲刀相戰、是謂菖蒲」とあり、印地打の後に於て、菖蒲刀を以て接戰するを「菖蒲切」と云へり。

【實在證言】 古來端午の節句は、男兒の節句となし、其日の遊戲は菖蒲(尙武)に因み種々武張りたる遊戲行はれたり。即ち印地打は以前より寛永頃まで行はれ、之が禁止せられてより、菖蒲打行はれ、享保頃まで全盛を極めしが之も文政頃には廢れたりと。【[illegible]】端午ヨリ 宗教 藤森祭ニ起リ

【例句】 印地打 おもふ人にあたれ印地のそゝ礫　嵐雪 (玄峰集)

【[illegible]】 兒童左右に打合ふ戲にして、各旗をさし冑を冠り、紙幟を押し立て、小弓を射、菖蒲刀をさしつれて戰ふさまをなすのである。年中行事大成を見るに京師の兒童、柳の木刀を腰に横たへ、頭巾を着し山伏の體に擬ひ、晩に鴨川の邊に出で、各左右に分れて除をなし左右一同に礫を打ち合ひ相ひ戰ふ、之を印地打と言ふと說明してある。德川家康が少年の時石合戰を見た話は有名である。

菖蒲酒(しやうぶざけ)　あやめざけ　菖蒲の盃(さかづき)

【古書纂要】 【[illegible]】 [illegible]に曰、菖蒲を用ふるは、昔平帝王臣下を殺す。其臣眼を合せ毒蛇と成る、[illegible]、後の蛇は、頭は赤く、身に青し。菖蒲に似る、其體を刻み、酒に入れ呑み、或は身に纏ひて降伏すべき也。[illegible]に云、[illegible]しやうぶとて、一寸に九節ありとぞ菖蒲の根、[illegible]をいのすといへり、されば百節なけれども是をいはひ侍るなり。

【[illegible]】 [illegible]に曰、端午に菖蒲の山澗中に生ずる、一寸九節の者を以つて、或は鏤し、或は屑として、湯に泛べて以つて瘟氣を辟く。〇本

草に曰、(一)石菖蒲、一切の惡を除く、端午の日菖蒲を切りて酒に漬けて之を飲む。

註 (一)は寸に一寸九節あるは良しと云ふ

季題解説 菖蒲の根を漬けし酒を云ふ。菖蒲の根七莖各長一寸のものを酒中に漬けて、之を五月五日に服する時は、瘟疫或は蛇蟲の毒を避くると云ひ殊に百節のものは萬病を治すと傳へらる。此思想は支那より傳はりしものにて、本草等に、菖蒲は水草の精英、神仙の靈藥として太祖皇帝は常に菖蒲を嚼んで水を飲み腹痛を却けしと云ふ。【參照】端午

例句

菖蒲酒

世をまゝに隣ありきやさうぶ酒　白　雄（白雄句集）

いざやとて燗酒に交し菖蒲酒　同（同）

相伴に敢も騒ぎけり菖蒲酒　一　茶（句帖）

菖蒲酒鄰の主招じけり　藤　女（同　人）

參考 菖蒲酒は菖蒲の根の一寸九節のものを取りてこまかに切り、縷の如くになして酒に浸して五月五日に飲めば、瘟氣あるひは蛇蟲の毒をさくる由、和漢共に所見あり。拾芥抄に「取二菖蒲根七莖各長一寸一漬二酒中一服レ之」とある。此の一寸九節のもの最も效驗ありとか。

菖蒲湯（しやうぶゆ）

菖蒲風呂（しやうぶぶろ）　菖蒲の湯（あやめのゆ）

古書校註 【栞草】後水尾院當時年中行事 五月五日の條に云、けふはさうぶの御湯まゐる。よべのさうぶの御枕一對をうすやうに、つゝみながら、寵殿紙ひねりを引ときて、御湯に入る。

季題解説 菖蒲の根葉を刻んで入れたる湯にして、端午之に浸れば心身を清め健やかなりと云ふ。この起源、室町時代よりと傳へ、閻屋闕白記に延長二年五月四日、今日葺二菖蒲一如レ例、五日浴二菖蒲湯一。とあり。【參照】端午　蘭湯（らんたう）

例句

菖蒲湯

錢湯を沼になしたる菖かな　其　角（五元集）

朝湯より傾城匂ふあやめ哉　言　水（俳諧五子稿）

さうぶ湯やさうぶ寄くる乳のあたり　白　雄（白雄句集）

菖蒲湯も小さ盥ですましけり　一　茶（七番日記）

さうぶ湯やぬれ手に受る雨三粒　乙　二（松のゝえ草稿）

御湯殿に菖蒲投げこむ雜仕哉　子　規（全　集）

菖蒲湯に男の子抱ける母若し　月　斗（同　人）

菖蒲湯や囲五人連れの男の子　山　和（同）

鉢巻にしたる菖蒲や欒屋風呂　心三郎（ホトヽギス）

菖蒲湯の菖蒲かざせし女かな　濱　子（同）

参考 日次紀事に「五月初六日、菖蒲御湯自二釜殿一獻之云々、良賤各浴二菖蒲湯一」とある。つまり菖蒲の根葉をきざみて湯に入れ端午に浴する事である。これも菖蒲が邪氣を拂ふといふに因るものであらう。

蘭湯（らんたう）　蘭の湯（らんのゆ）　蘭湯に浴す（らんたうによくす）

古書校註【滑稽雜談】大戴禮に曰、五月五日蘭を蓄て沐浴となす。楚辭に云、蘭湯を浴し、芳華を沐す。(一)和において菖蒲をもつて浴する事、いまだ出書をしらず。中華の蘭湯を浴するの類なるべし。

註（一）我國の自稱也。

季題解説 端午蘭の葉を入れたる湯に浸れば邪氣をはらふとて古く支那に行はれたり。菖蒲湯の濫觴なりと傳ふ。（日次）端午ニ菖蒲湯

例句

蘭湯　蘭湯や女がくるゝ浴巾（ユアミヌグヒ）　青々（妻木）

参考 蘭湯と言ふのは大戴禮に「五月五日蓄レ蘭爲二沐浴一」ともあり、又楚辭に「浴二蘭湯一兮沐二芳華一」と見え、又詩には浴蘭・蘭湯などと見えて居る事から菖蒲湯と同樣の事である。

菖蒲人形（あやめにんぎやう）

古書校註【俳諧歳時記】菖蒲人形も菖蒲を以て飾るゆゑの名也。此人形は力士の形を摸して、作れる多し。江戸にて元祿の比までは市中を賣ありきしにや。其角が五月雨や傘に付たる小人形、などいふ發句あり。今は十軒店人形町その外便りよき街にて、是を賣る也。但、雛の吹流しにすといふちいさなる紙製の幟は、今も賣りありく也。又江戸の端午に、餻を製し、裏に餡を裹み、槲の葉を以てこれを覆ふ、名づけてかしは餅といふ。

季題解説 昔端午の節句に、紙、又は板にて作りし人形を戸外に立て、之を菖蒲人形と稱へしが、後には室内に飾るに至り、遂に今日の武者人形の基を成すに至れり。日本歳時記に「むかしは厚き紙に人形をはり付、薄き板を背の骨にこしらへ、或は蕪の葉にて馬を作り、或は木を[illegible]長刀のごとくけづりなどして戸外に立侍りしが、近年は風俗美巧をこのみて木をもつて人形の形をきざみ、又はりこにして綵色をほどこし、或は甲冑をきせ、鎗長刀または戰鬪の勢をなさしめて戸外にたて侍る」とあり、此頃まで戸外に立てしが、人形を室内に飾るに至り、人形師の手によりて造られ十軒店、人形町等にて賣らるゝに至れり。かくして愈々美巧を凝らしさま〴〵の贅を盡すに至りしかば、雛人形と同樣に屢々禁令を發布され、ある制限を附せられしも顧みられなかつた。[illegible]

【例句】　菖蒲人形　かくやあらぬ作る菖蒲の小人形　青々（妻木）

武者人形

五月人形　冑人形　甲飾る　武具飾る　馬具飾る

【古書摘註】【三才圖會】五月五日家舍に旗及甲冑刀等の兵器（[illegible]）を立つ。其刀菖蒲を以つて之を飾る。仍て菖蒲刀と號する也。荊楚歳時記に（註）艾を採り人に爲し、門上に懸け毒氣を禳ふ。此小冑人形と趣き相似たり。相傳ふ光仁天皇天應元年蒙古の賊來る。早良太子をして之を討たしむ。太子藤森の社に禱て出陣し玉ふ。時に五月五日忽ち神風吹きて敵船を覆へし、立處に皆敗走す。戰はずして勝給へり。此因緣に因りて今に至るまで五月五日の祭皆兵器を用ふ。民家も亦然り。藤森の社（一）は山州紀伊の郡に舍人親王之祠あり。弓矢の政所と稱す是也。蓋其此蒙古の襲ひ來るの事嘗て國史に見えずと。

註（一）別項藤森祭の條參照。

【季題解説】五月五日端午の節句に飾る武者人形にして又「冑人形」とも云ふ。古への菖蒲冑より起りしものにして、菖蒲冑につくり付けし紙の人形のみ冑より出で獨立し冑と人形と別々になりしものなり。武者人形は菖蒲人形が内飾りとなり、發達し來りしものにて、今は神功皇后・武内宿禰・八幡太郎・義經・辨慶・川中島合戰・淸正・金太郎・鍾馗などの人形を飾り、之に内幟・毛槍・長刀など立添へ、大鼓・太刀・飾冑・具足など添飾るもの多し。【參照】端午　菖蒲の冑　菖蒲人形　宗教—藤森祭

【例句鑑賞】武者人形　武者人形にまじる浦島太郎哉　凡水（同人）

【參考雜著】冑人形とも武者人形とも云ふ。つまり神功皇后・武内宿禰・鍾馗大臣・金太郎などの人形である。併し極く始めの形は菖蒲にて武人・力士などの形を作つたもので、後漸く土で作るに至り、元祿時代には土で作つた原始的なものを江戸市中賣り歩いたとの事である。それが次第に美術的に進步して今日の樣なものとなつたのであらう。端午の節句には單に人形のみでは無く、武具をも飾るので兜飾る・鎧飾る・武具馬具飾ると言ふ語もある。

幟

皐月幟　五月幟　外幟　鯉幟　鍾馗幟　門幟　内幟　座敷幟　紙幟
[illegible]幟　初幟　幟竿　幟杭　幟風　幟見

【季題解説】五月五日端午の節句に立つる幟を云ふ。幟は多く武家出陣の模樣を擬したるものにして、定紋つきの幟を立て、之に馬印・槍・長刀などを

添ふ。これ藤森神社の武者行列或は戰の時に用ゐし旗印より變化せしものなり。始めは戸外に立てしものにて之を「外幟」と云ふ。其後室内に之を立つるに至り、之を「内幟」又は「座敷幟」といふ。「紙幟」は寛永の頃より民間にて建てられし武者繪の板すり等を摺りし幟にして、時には鍾馗の繪等を摺りしこともありき。其後次第に布を用ゐるに至れり。紙幟は武家にては決して建てられざるものにして、又町家にては決して吹流しして建てずして四半に鍾馗を畫きしものを建つる俗なりき。

實作注意 初幟は男兒生れて初めての端午に建つる幟を云ふ。幟竿・幟杙・幟風等の語亦用ゐらる。端午に幟を建つるは、元寇の際大勝を得たるが五月五日なりしに依るとも云ひ、又尊氏が天下を統一せし日が五月五日なりしに依る等の説あれど定かならず。〔參照〕端午[タンゴ] 吹流し[フキナガシ] 矢車[ヤグルマ]

例句

幟 はゝ木々の夜猶寒き幟かな　沾德（俳諧五子稿）
大幟山を出ぬ蚊もまねくべし　同（同）
幟出す南はせかず和田恩地　來山（續いま宮艸）
幟立長者のゆめや黒牡丹　其角（五元集拾遺）
幟綱沖には幾つ帆かけ舟　同（同）
ものゝふの幟中や庫のうち　同（同）
疱瘡のあとは遙かに幟かな　同（五元集）
こがらしにあらぬはけふの幟かな　言水（俳諧五子稿）
幟立つ軒端や雪の朝景色　支考（蓮二吟集）
松風ときけば浮世の幟かな　同（同）
さ月まち紺屋に横の幟かな　也有（蘿葉集）
影法師を寺にも建る幟かな　同（同）
子を捨ぬ世とて藪にも幟かな　同（同）
山は雲町は八重たつ幟かな　同（同）
いきかひに姉はまけたる幟かな　同（同）
結び付てうごかぬ御代の幟哉　同（同）
紙ひとつ夕日の殘る幟かな　也有（鶉の落葉）
木がくれて名譽の家の幟かな　蕪村（新花摘）
家ふりて幟見せたる翠微かな　同（同）
薄とゝと幟立けり朝のさま　太祇（太祇句選）
古き代を紋に問るゝのぼりかな　同（同）
幟たつ時なし遊女なりけらし　同（同）
齋に寄て幟をかゝむ小借かな　召波（春泥發句集）
ことしまだおもふらりけん幟數　同（同）
一町の貸家見たてのほりかな　曉臺（曉臺句集）
門の木にくゝし付たる幟かな　一茶（七番日記）

幟

三尺に足らぬ幟も御客かな　一茶（句帖）
幟から引つゞくなり田のそよぎ　同（同）
乞食町とは見えさりし幟かな　同（同）
野の末や幟のうへの鳶からす　蒼虬（蒼虬翁句集）

門幟

山風のがつくり落ちや門幟　一茶（句帖）

紙幟

梓弓谷中にたつや紙幟　宗因（梅翁宗因発句集）
潜たる龍はうらにか紙幟　沾徳（俳諧五子稿）
笈も太刀も五月にかざれ紙幟　芭蕉（奥の細道）
なよ竹の末葉のこして紙のぼり　其角（五元集拾遺）
隠居家にかくし子鳴くや紙幟　也有（蘿葉集）
うら店や青葉一鉢帋ののぼり　一茶（享和句帖）
御ふくろの細工か曾我の紙幟　梅室（梅室家集）

初幟

一際に田も引立ちぬ初幟　一茶（句帖）

幟風

六日から松にもどるやのぼり風　同（同）

幟見

幟見の果はありけり帆懸松　蓼太（蓼太句集）

参考補考　端午の節句に民間戸毎に幟及び冑鎧等の兵器を立てる。しかし冑鎧の兵器を立て木偶・菖蒲刀・薙刀などを飾るは、古來の習慣であつたが幟をたてる様になつたのは餘程後の事である。貞丈も節句に幟立つる事は古くこれを見ず、即ち光仁天皇天應元年外敵襲來の際山城國藤森の社にも御祈りありし爲、敵が降服したので五月五日民間でそのさまを寫した幟を立て、これが今日まで傳つたと年中風俗考を引用して考證して居る。又幟をたてるのも最初は關東の武家であつて、後京都の公家にまで及び最後に一般民間にも立てるに至つたのである。幟の種類には、外幟（小庭などに立てる）内幟（又座敷幟とも言ふ）更に紙幟・鯉幟・鍾馗幟・吹流しなどいふのがある。

吹流し（ふきながし）

鯉の吹流し（こひのふきながし）　五月鯉（さつきごひ）　鯉幟（こひのぼり）

季題解説　五月五日端午の節句に建つる吹流しは旗の一種にして、竹を半月形に撓めて長き布を張り竿に附けたるものにして、軍用の旌旗を擬したるものなり。從つて昔は之を建つるは武家に限られ町家にては決して之を建つることなかりき。德川時代に入り町家にては吹流しにならひ紙にて造れる鯉の吹流しを建つるに至れり。之を「五月鯉」と云ひ、今俗に呼んで「鯉幟」といふ。幟は出世魚なりとして之を祝ひ、竿の先に「矢車」を附くるを普通とす。今は多く布製の鯉を用ふ。紙鯉を竿頭にあぐることは、昔楚の屈原、五月五日に身を汨羅に投じて死せし爲めに、楚人之を哀み、筒米を設け、紙鯉を作りて之を祭りしに始まると云ふ傳へあり。

實作注意　五月鯉は亦「鯉の吹流し」とも云ふ。「江戸ッ子は、さつきの鯉の吹き流し口ばかりにて腸はなし」といひなせるなり。近く「鯉幟」といふ

何ごとに咲きて、かならず、五月五日にあるもおかし。年中行事に云、五月五日棟の葉を取て、髻にはさむ事有り。これは蚊をしりぞけんがためなり。若は棟の葉をとりてはさむは、疫氣をさけんがため、或は葛蘽など戶の外にかける事は蛇をいまんがためなりと、風俗志に載てあり。(一)これらの葉も都には今沙汰なし。鄙には所によりて有とかや。

【増山の井】今も片田舍には、端午に棟葉を軒にふく所侍り、今せんだんの木といふものなり。

註 (一) 其著の自說也。

季題解說 五月五日、棟、或は艾などを頭に著くれば惡疫を遁るると云ふ支那の古俗なり。本草に「五月五日、俗人取二棟葉一佩レ之、遣二惡氣一」とあり、棟の木の葉は猜蟲を殺し蛔蟲を殺すと云ふ。【參照】端午、艾虎、菖蒲葺く。

例句 棟佩てわざとめかしや芝肴　嵐雪（玄峰集）

桃印符（たういんぷ）

桃符（たうふ）　桃印（たういん）

古書校註

【増山の井】五日色どれるかとり(一)のきぬに篆文(二)の符を書て屛風・几帳・扉などに置きて惡氣をやむるわざする事を、桃印といへり。

【年浪草】續漢書に曰、劉昭が云、桃印は本と漢の制、以って惡氣を止む。今世、端午に綵繪篆符を以つて相問ひ遺し、亦以って屛帳の間に置く。(略)典術に曰、桃は西方の木、五木之精、仙木なり。味辛く、氣惡き故に能く邪氣を厭伏し、百鬼を制す。今人門上桃符を用ひて邪を辟く、此を以て也。

註 (一)こまやかに織れる絹布の名　(二)篆の書體で記したしるし

季題解說 支那にて門戶に施して惡鬼を避くるもの。桃の木の札に文字を記せるものにして、朱子は所居の桃符に「愛二君希一道泰、憂レ國願二年豐一」と書し、又竹林寺の桃符に「道迷二前聖統一、朋誤二遠方來一」と書せりといふ。これを揭ぐるには、畫雞を戶上に貼り、葦索を其の上にかけ、桃符を其の傍に挿む由、荊楚歲時記に見ゆ。山海經に「海中の度朔山に桃の木あり、桃下の二神よく百鬼を啖ふ。故に桃符の俗出でし」と記し、桃が邪氣を厭伏する木なることは本草にも出づ。

實作注意 此の行事支那にては專ら歲旦に行はる、然るに本邦の諸書には五月五日に多く出づ。我國にては此日行はれしならん。【參照】新年「桃符」。

赤靈符（せきれいふ）

古書校註

【滑稽雜談】抱朴子に曰、或人五兵(一)を辟るの道を問ふ。曰く五月五日

【參考】舟くらべの事である。倭名類聚抄に「競渡、金谷園記云、今之競渡……楚國風也」と見え、長崎ではパイロンといふ。年々五月五日六日の二日に行ふ行事である。我が國でもかなり古くから行はれてゐたと信ぜられる。

神水　藥降る

【古書校註】

【俳諧歳時記】重五の日、午の時雨あるとき、急に一竿竹を破れば、竹節の間に必神水有り。瀝し取りて、獺の肝を以つて丸とすれには、心腹の積聚(一)を治す。金門記　今月雨ふるときは來年大に熟す。紀曆撮要　(二)愚按ずるに本邦の俗端午の夜甘露藥水雨ふりすといふものは金門の說を訛り傳へたるものか。

註　(一)なりあつまつた病　(二)以下馬琴の自說。

【季題解說】陰曆五月五日午時に雨ある時、急に一竿の竹を破れば、竹の節の中に必ず神水あり、瀝り取つて、獺の肝を丸藥とすれば、心腹の積聚を去ると稱せられ、此日雨降るを藥降ると稱せり。【參照】六日の菖蒲（むいかのあやめ）　天文　藥降る（くすりふる）

【例句】

藥降る

藥園に雨降る五月五日哉　蕪　村（新花摘）

我眼にはくすり降日も雨の露　乙　二（たのゝえ草稿）

六日の菖蒲

【古書校註】

【年浪草】京師、屋檐に所ㇾ葺の菖蒲を取て、六日に爲₂菖蒲湯₁。是五日夜の露を受けたる物を用ふ。彼の金門記にいへる神水(一)の說による。

註　(一)神水の條參照

【季題解說】端午の節句に檐に葺けるところの菖蒲を取つて六日に菖蒲湯となす、是れ五日の夜の露を受けたるものを用ゆる意にして、彼金門記にいへる神水の說によれるものなり。

【實作注意】「むいかのあやめ」と世俗に云へるは、五月五日の翌日の菖蒲、即ち時機に遲れて役に立たざることを云ふ。【參照】菖蒲葺く（アヤメフク）　神水（シンスイ）

蒼朮を燒く　うけらやく　をけらやく

【季題解說】蒼朮の根をくすぶれば濕氣を拂ふより、五月雨の頃之を燒きて室内の濕氣を拂ふ。をけらは古名なり。

【例句】

蒼朮を燒く

蒼朮を鄰たきゐる匂ひ哉　月　斗（同　人）

【參考】ヲケラ又ウケラとも云ふ、大同類聚方に山地に自生のものがよろしと記してある、出雲國意宇郡・島根郡・秋鹿郡・楯縫郡・飯石郡等に産する事は出雲國風土記に見えてゐる。又延喜式典藥寮式には山城・大和・尾張・三河・駿河・安房等十三國より貢獻した事が見えてゐる。古今要覽の著者は「萬葉集にむさし野のうけらが花とあり、又此の國にも至つて多く、かつ「色にづなゆめ」と云ふ歌意を案ずれば卽今の白色のものと知らる。又「アカヲケラ」とて稀には赤いものもあつたと言はれてゐる。又日本書紀以下延喜式等白朮をあげて蒼朮を載せず、是に因れば當時未だ蒼朮の名を立てられざりしにや」と述べてゐる。又和漢三才圖會には蒼朮・赤朮・仙朮・山薊・山精の字をあげて、古來蒼朮と白朮との差異分別がやかましかつたと見える。橘千蔭の歌集「うけらが花」は序の語る如く花質ならぬうけらさへ云々の意味から付けられたものである。此の物藥性あるにより、乾燥したものを焚いて濕氣を拂ふのである。

五月忌（さつきいみ）

【季題解說】五月は、忌月なりとしよろづを慎み殊に婚を忌む風習あり、之を五月忌と云ふ。これ等のことは伊勢物語・宇津保物語に見えた。嬉遊笑覽に「今世も正五九月に婚姻を忌む、是を齋月といふ」とあり。又五雜俎に「正五九月は官に上さず、唐より以來此忌有り」とし其頃支那に於ても既に三齋月の行はれしと見ゆ。

【例句】

兎角して年を過しぬ五月忌　廿雨（同人）

【參考】［illegible］王の歌に「神代より忌むといふなるさ月雨のこなたに人を見るよしもがな」又檜垣嫗集に「人のいむこの月なみを立てゝこそ思はずならん事も恨みめ」の歌にみゆる如く、五月婚嫁をいみし事を言ふ。

川止（かはどめ）

【季題解說】梅雨の候河川增水し、ために渡船・徒渉を禁止することを言ふ。

【實作注意】今日にては［illegible］の事少し、德川時代には政策上或は技術上［illegible］等にて、交通頻繁なりし河川にも橋を架せず故に此の事繁く有り。東海道大井川・天龍川等の川止め名高し。【參照】天文―五月雨（サツキアメ）

【例句】

川止や晴き［illegible］に寄る［illegible］役者　凡水（同人）

掛鯛下す（かけだひおろす）

【季題解說】江戸時代、元日に［illegible］を竈神にてくゝり、［illegible］として［illegible］、六月一日に取り下ろし食ふを云ふ。かくす

れは瘟疫を避くると云ふ　〔二季〕新年―掛鯛

【參考】 正月の儀式に門松の上に掛けた二疋のほし鯛を陰曆六月一日にとりおろすのである　「門松の内は眞次兵衛にはおろさずにかけ鯛」とあり、今も京阪關西の地方には新年にこれを竈近きに使用するもので、それをとるのである。鯛は赬鰲魚・赤鯮・黄山魚・平魚とも書く

【例句】

掛鯛下す　紳棚の燈に掛鯛を下ろしけり　子角（同　人）

川開き（かはびらき）

【季題解說】 東京隅田川兩國橋上下にて毎年八月一日前後の一夜花火を打揚げて川開きと爲す　川沿ひの茶屋その他の家々棧敷を構へ、提燈を吊し、水陸雜踏を呈す。この事遠く享保十八年の頃に始まる、花火の家元玉屋・鍵屋の二軒ありしが今は鍵屋のみ存せり。【關聯】秋―花火

【例句】

川開き　兩國の花火（はなび）

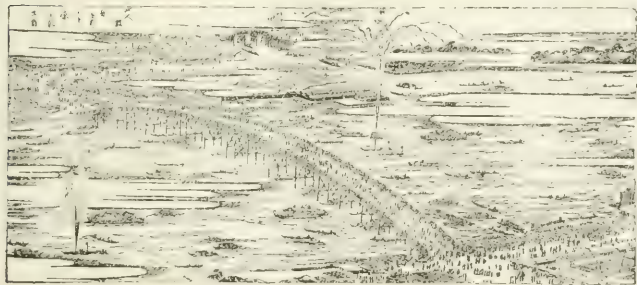
川開き　川開き果てし軒端の螢籠　只　仝（同　人）

【參考】 川開きと云へば直ちに兩國を聯想するが、「京都四條河原に六月七日から晦日まで行はれる納涼の風俗は祓の遺意なるべし」とは谷川士淸（和訓栞）の說であるが、さうかも知れない。此の事は都名所圖繪にも在京日記（本居宣長翁）にも更に又本朝文鑑にも見えてゐる。都名所圖會には「貴賤群をなして遊宴するも、御祓の例にして云云」とある。祓の遺意と言ふ事が穩當を缺くならば、納涼の遊樂化した形と見ておいてもよい。ともあれ、江戸名所圖繪・東都歲事記などに見える兩國の河開の解說では何時と確實な年代を知り得ぬまでも五月二十八日から八月廿八日まで行はれた行事は、酷熱の市井からのがれる唯一の安住地として市民の爲の樂しい一つであつた。

川明き（かはあき）

鮎漁解禁（あゆれふかいきん）

【季題解說】 陰曆六月一日。鴨川にて、今日漁をすることを許すといふ札を立つ。之を川明きと稱せり。

實作注意 川開きと混同すべからず。（一參照）川開き（カハビラキ）

例句
川開き　川明きや鮎釣竿の觸るるごと　可竹（同　人）
　　　　川あきや鮎の相場を耳打ちす　松亭（同　）

參考 陰暦六月一日漁獵の解禁を示す制札を鴨川に立てる事をいふ。今毎年六月一日鮎獵の禁を解く類もこれに準ふべきである。

四條河原の納涼（しでうがはらのすずみ）　河原納涼（かはらすずみ）

古書校註
【日次紀事】凡六月七日の夜より十八日夜に至るまで、四條河原、水陸寸地を漏さず、床を並べ席を設けて、良賤般樂（一）す。東西茶店挑燈を張り、行燈を設け、恰も白晝の如し。是を涼と謂ふ。其中十三日の夜に至りて殊に甚し。是夜宮に因て也。

註（一）あそびたのしむ。

季題解説 京都賀茂川、四條ほとりにて七月より納涼をなす。これを、昔より、四條河原納涼、又は單に河原納涼と言ふ。江戸兩國の川開きと共に古くより名あり。（參照）納涼（スズ）川開き（カハビ）川床（カハユカ）

例句
河原納涼　河原納涼弟子つれて來し江戸役者　二月堂（同　人）

參考 「都名所圖會にそのなまめかしき樣を叙し、一御祓川の例にて小蠅なす神を退散し牛頭天皇の蘇民將來に教へ給ふ夏はらへの遺法なるべし」と記してあるが今にはかに從ひ難い。

川床（かはゆか）　床（ゆか）　床涼み

季題解説 京都四條河原の涼み臺にて、木屋町、先斗町の青樓旗亭等の座敷より川へつき出せる桟敷を言ふ。京都獨特のものなり。往昔、四條河原の夕涼みとて、流れに床几を置き涼をとりたりしが、現在の川床に變遷せり。京の舞子等これに乘りて、燈ともし時より繪の如き情景を表はすなり。

【實作注意】「川床」は「河床」のことにて、川床の地盤の意なれば混じ易し。京にては必ず「ゆか」と稱するなり。【參照】四條河原の納涼。

涼み

【例句】

川床　川床に憎き法師の立居かな　蕪村（句集）

河床や蓮からまたぐ便にも　同（同）

川床や夕焼雲の東山　月斗（同人）

下川床に蓮の客ある簾かな　洛山人（ホトヽギス）

床涼み　床涼笠置哥のもどりかな　蕪村（五車反古）

時の記念日　時の日

【季題解説】天智天皇の御代、宮中に肇めて漏尅を置かれし日を以て　近時、時の記念日となす、即六月十日なり。時の宣傳とて、時間の觀念を與へ規律を正しくせんとするなり。

【例句】

時の日　時の日の鐘鳴らしゐる野寺哉　月斗（同人）

嘉定喰

嘉祥喰　かつうの祝　かつう　嘉定錢　嘉定菓子　嘉祥頂戴

袖直し　袖止　嘉定縫

【古書校註】

【滑稽雜談】鴨長明四季物語に云、嘉祥は仁明のすべらぎ（一）承和の頃ほひに、御代のさか行く事を、いのらせおはして、賀茂の上の社に奉りて、御救なとなしそめ給ひたまへり。六月十日あまり六日なん、吉日なる由御うらの人々からうがへ申すをばとて、其日おこなはれ、年號をも改めて嘉祥とものせしかば、ながく此事嘉祥と年號によりてさだめられしと。（略）羅浮子が說云ふ、近頃世俗に云ひ傳るは室町家大樹の時に、六月納涼のために楊弓を射て賭とし負たる者、嘉定錢拾六文を出して食物を買て勝たる者を饗なす也。嘉定は宋の寧宗の年號にて（略）鑄たる錢に元年より十六年までの印あり。

【山の井】禁裏をはじめ、公家かたにも、嘉定食物せさせ給へるとなり。しもよりのしも〳〵のならはしは、嘉定の錢とて十六文あるをそれにてすき〴〵のくだ物など、とゝのへて、人にもすゝめ、みづからもくひぬ。

【日次紀事】六月十六日今日公家武家同く嘉定の祝儀あり。中古より今日まで良賤嘉定錢十六枚を以て食物を買ひ、之を食ふ。（略）禁裏五色團子并諸品の肴を土器兩個に盛り、各白紙を以つて之を裹む。（略）水引を以て之を結び群臣に賜ふ。武家も亦杉原紙を以て菓子を裹み、之を賜ふ。（略）諸

家も亦此儀あり。或は孔方兄十六枚或は米壹升五合、家禮者に與ふ。其人是を以て、雜品菓物を調へて、之を獻ず。又土器杉葉を敷き、大饅頭三箇を盛り、杉原紙を以て之を包む。

【年浪草】 世諺問答に曰、六月十六日嘉祥は仁明天皇二年六月十六日、豐後國より白き龜を獻ず、以て吉兆としてこれをいはふ。これよりこのかた嘉祥の儀あり。此事更に本說なし。たゞ彼錢の銘に嘉定通寶と侍れば、勝といふみやうせん(三)を賞翫するよし也。

註 (一)仁明天皇。(二)賤く〳〵身分賤しい人々。(三)名詮、名前

季題解說 往昔行はれたる行事。民間にては「嘉祥喰」ともいひ、女房詞にては「かつうの祝」ともいふ。毎年六月十六日菓子を食して疫を碎く風習にして、其の菓子を嘉定菓子といへり。此の日德川幕府にては嘉祥頂戴と稱して、拜謁以上の諸士に大廣間に於て菓子を賜ふ。菓子は白木の片木に杉の青葉を布き、其の上に菓子をのせて隨意一箇とらせたり。菓子の數は天明頃までは七種なりしが後八種と定まれり。又民間にては此の日嘉定通寶十六文を以て、餡餅十六箇を購ひ、これを一人にて無言に食するを例とせり。又此の夜十六才の女は振袖を切りて詰袖にし、嘉定菓子の饅頭の眞中に孔を穿ちて月を見る習俗あり、これを「月見」といふ。この袖を詰めるを、袖直し、袖留、嘉定縫ともいふ。此の俗の始めは、室町時代に始まると傳へられ、安政文久の頃まで續ける嘉定通寶は支那宋の嘉定中に鑄造せられし貨幣にして、往昔は其の元年より十六年までの印あるものを揃へて、其日のもてなし物の代に定めたりといふ。故に此の錢を嘉定錢ともいひ、又嘉定通寶を略して「かつう」ともいへり。

例句

嘉定食　子のぶんを母いたゞくや嘉定食　一茶（新集）
　　　　寐腹ばひて月見まもりつ嘉定食　綾華（ホト、ギス）
嘉定菓子　爪紅の指でつまむや嘉定菓子　許六（半化坊發句集）

參考 嘉定は又嘉祥とも嘉通とも書く。嘉定食は又嘉定錢とも嘉定菓子とも言ふ。何れにしても字義から意味を解釋する事は困難な樣である。併し古來の行事から推定して大體左の三通りの說明が可能である。卽、仁明天皇の御宇承和十五年五月豐後國から白龜を獻じたるをめでたしとして改元ありて嘉祥元年となる。其時六月十六日であつたので皆十六の數を以つて下々まで物を賜はり又好む所の品を賜へ食ひて嘉祥食ひと言つたと云ふのがその一つである。次は後嵯峨天皇いまだ卽位し給はざりし時、六月十六日に其の嘉定錢十六文を以つて食物を買ひて御膳に供したる例により踐祚の後も六月十六日に餅などを奉ると云ふのがその二である。最後に室町時代納涼の遊びに楊弓を射て賭をなす。負けた者は嘉定通寶の錢十六文を出して何にても喫物を買ひて勝ちたる者に饗するといふのである。以上三說何れも同巧異曲で今遽に是非の判斷を下す譯にはゆかない。

蟲干（むしぼし）　蟲拂（むしはらひ）　土用干（どようぼし）　曝書（ばくしよ）

古書校註

【日次紀事】六月土用中諸神社、諸佛寺靈寶蟲拂ひ、和俗六月土用中、天日の晴るゝを俟ちて、衣服書幷書藥物之類之を曝す是を涼を取ると謂ふ、又土用乾と謂ふ。又書畫衣服の蠹蟲を執り棄つ。（略）此月晴天を待ちて、樂器を紫宸殿に曝さる

季題解説　夏の土用に書籍衣類調度品などを日に干し或は風に當て曝して、黴、蟲などを防ぐことを蟲干又は土用干と云ふ。曝書は書畫書籍の蟲干にして、貝原益軒の曝書の心得に曰く、「梅雨霽て後、書を日に晒すべし。新薦をひろげ、表紙を下にして乾す、苧繩にかけて晒さば表紙損ず。天氣よき日なりとも一日に一度なるべし。朝より晒し、午未の時收む。（中略）屋根下にならべて熱をさまし、一夜經て明朝箱に納む。（中略）屋中に久しく晒さんよりはやくが如き烈日に一度晒したるが蟲ばまず、云々」

實作注意　神社、佛寺の寶物の蟲拂ひは一つの行事。日の式にして今もなほ其慣行を正しく傳へるものもあり。書籍、衣服調度を烈日にさらすはよろしからず。陰干しをよしとす。

例句

蟲干

蟲干や辰巳をうけて角屋舖　蕪村（夜半叟句集）
蟲干や甥の僧訪ふ東大寺　同（句集）
むし干やむかしの旅のはさみ箱　太祇（太祇句選）
蟲ぼしや片山里の松魚節　同（同）
蟲ぼしのすゞしさかたれ角櫓　同（同）
むし干や拔身をさます松の風　同（同）
蟲干や菴に久しき松ふぐり　白雄（白雄句集）

蟲拂

贋物のいく代めでたし蟲拂　几董（井華集）
譬喩品の蟲殺さじと拂ひけり　同（同）
筆のもの忌日ながらやむし拂　召波（春泥發句集）
上野や足利代々の蟲拂　同（同）

土用干

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉（猿蓑）
かけて置く拂子は智惠の土用干　同（芭蕉句選拾遺）
夜着を着てあるいて見たり土用干　其角（五元集拾遺）
うたゝ寝や揚屋に似たる土用干　同（同）
よめりせし時の枕か土用干　同（同）
鎧着て疲ためさん土用干　去來（去來發句集）
土用干久しき物やめづらしき　杉風（杉風句集）
一竿は死裝束や土用干　許六（五老井發句集）
土用干や袖から出たる卷鰯　也有（蘿葉集）

いさゝかな料理出さん土用干　蕪村（夏より）
着すぐれぬ伯母の小袖や土用干　几董（井華集）
須磨寺に女客あり土用干　梅室（梅室家集）

【參考】一介にも曝涼するといふ事みえたれば風入といふはよしあるに似たり」と後松日記にみえて居る。川柳に「武者一人叱られて居る土用干」とあり。

施米（せまい）

【古書校註】【滑稽雜談】續日本紀卷五に曰く、元明天皇、和銅五年二月戊午、詔して京畿の高年鰥寡惸獨(一)の者に絶綿米鹽を給ふ。冬有レ差。高年の僧尼も亦同じく施す。西宮記に云ふ、九條殿年中行事に云ふ、施米、東の手は愛宕寺に於いて之を給ひ、北の手は右近の馬場に於て之を給ひ、西の手は右兵衛の馬場に於いて之を給ふ。

註（一）老いて妻なき男、老いて夫なき女、兄弟なき獨り者、子孫なき獨り者。

【季題解説】古六月、京にて貧窮孤獨なる僧侶に官より米鹽を施したるを云ふ。公事根源に「施米、東山西山北山などいふ所の山寺に傳るたつきなき法師ばらに、米鹽を施さるゝことなり、云々」【參照】賑給シンキフ

【例句】
施米
腹あしき僧こぼし行く施米哉　蕪村（夏より）
腰ぬけの僧扶け來る施米哉　召波（春泥發句集）
北山へ施米もどりの夜道哉　青々（妻木）

【參考】公事根源に「六月、施米は皆貧窮孤獨の者に賜ふなり」とある如く米を施し與ふる事を意味し同時にその米自身をもさして言ふ。

暑中休暇（しよちゆうきうか）　夏休（なつやすみ）　暑中休（しよちゆうやすみ）

【季題解説】夏期に於ける、諸官衙學校等の定期休暇を云ふ。長きは七月初より九月上旬に至るものあり、或は歸省に、旅行に、或は海岸温泉場等の避暑に赴く、又夏休みと云ふ。【參照】避暑、歸省キセイ

【例句】
夏休
下宿屋の西日の部屋や夏休み　虚子（ホトトギス）
午後からの掃除日課や夏休み　無聲（同人）

避暑（ひしよ）　避暑地（ひしよち）　避暑の宿（ひしよのやど）　避暑客（ひしよきやく）　避暑の旅（ひしよのたび）　避暑旅行（ひしよりよかう）

【季題解説】暑中市塵の暑熱を避けて、高原又は山間高涼の地に旅行し、或は湖畔等に涼しき一夏を過ごすを云ふ。又北海道、樺太へ消夏の目的を以て

旅行することを避暑旅行と云ふ。【參照】暑中休暇 冬—避寒

【例句】
避暑　避暑戻り糸瓜の花の闇落す　句佛（寒葵）
避暑滞し夜は村人と語りけり　苔水（同人）
避暑の宿　避暑の宿達餉の前の第一夜　柳水（同 ）
あまた合すものを枕や避暑の宿　たけし（ホト、ギス）

歸省　歸省子

【季題解說】學生・官吏・會社員等の暑中休暇を利用して、歸鄉するを云ふ。
【參照】暑中休暇

【例句】
歸省　やうやくに倦みし歸省や青葡萄　秋櫻子（ホト、ギス）
歸省子　歸省子の釣瓶の水にかゝりけり　二水（同人）

暑中見舞　土用見舞

【季題解說】我國の昔よりの風習として、暑中には互に物品を相贈答して起居動靜を伺ふ、之を土用見舞又は暑中見舞と云ふ。又遠く相隔るものば見舞狀を交換して起居を伺ふなり。

【例句】
土用見舞　筑波から土用見舞の夕立哉　梁直（新選）

林間學校　林間學舍　林間教授

【季題解說】暑中休暇を利用して、山間清涼の地或は海濱青松の域を選びて男女の小中學生徒を轉地させ一定の日課を行ふ外、體操・遊戲・水泳・深呼吸・冷水摩擦其他の運動を行はしむるを云ふ。其效果は身體敎育を良好に導くものなり。これは歐米のフェリエンコロニー（夏期移住林間學校）制度の發達に預るものにして我國に於て既に明治三十年頃、故小兒科醫小原頼之氏など關係して九段精華學校の生徒を妙義山に轉地させ、同時に時事新報社が、四谷鮫ケ橋小學校の兒童を夏期轉地させたるを始めなりと云ふ。

【例句】
林間學舍　夕燒に唄ふ林間學舍かな　凡水（同人）

夏期講習會　夏期大學

【季題解說】暑中休暇を利用して諸學校にて開かるゝ講習會を云ふ、短きは一週間、長きは三週間乃至一ケ月に渡るあり、諸種の學藝の講演或は實地指導等行はる、各地方の中心地たる都會に於て行はるゝ外、輕井澤・箱根・日

例句 光・高野・叡山其他海岸温泉地等の避暑地に於て開かるゝもの多し。

夏期講習會　講習地去るや近郊の夏も見て　鹿語（同　人）

水防出初式（すゐばうでぞめしき）

季題解說 七月六日、東京濱町の大川河岸に於て水防出初式を行ふ。消防出初式の梯子乘りの演技に對して角乘行はる。水防夫何れも三十人宛に分れて一組となり、各一本の材木を鈎にて引出し、演技は足駄を履きて突然その上に飛び乘り、棹もて、材木は心の儘に轉轆する樣、まことに鮮なり。之について、更に水面に漂ふ材木の上に一挺の梯子を立つるや壯者直ちに猴の如く攀ぢ上り、色々の曲藝を行ふなり。猶此他、竿乘り競泳等を行ふ。

參照 新年――消防出初式（セウバウデゾメシキ）

始政記念日（しせいきねんび）

季題解說 毎年六月十七日を、臺灣の始政記念日となし、この日臺灣神社にて祭典を行ふ。明治二十八年六月十七日、臺灣總督府に於て、臺灣の始政式を擧げたるを記念するなり。

獨立祭（どくりつさい）

季題解說 北アメリカ中部に於けるイギリスの植民地十三州が聯合して、母國に對して獨立運動を起し、一七七四年七月四日、フイラデルフイアの國會は遂に獨立を宣した。後此の日を記念日として祭典を行ふ。

更衣（ころもがへ）

四月朔日の更衣（しがつついたちのころもがへ）　更衣の節會（ころもがへのせちゑ）　衣着換る（きぬきかへる）

古書校註

【山の井】ころもかへは、宮中所々の御装束御殿の御帳のかたびらまで、夏の御よそひにあらため侍る事となれば、女御も、けふは更衣かなとも、高位にもまじはるやなどもいへり。又花衣ぬぎかへて、はらわたもたつとも、春と夏の季かはるなどもいひ、地虫も蟬の衣がへ、わたぬく鯛も衣かへともし侍し。

【日次紀事】四月朔日更衣今日更衣の節と稱し、禁裏諸家今日より夏袍を著せらる。今日より紫宸殿清涼殿御装束改む。（略）几帳等單紗を用ふ。地下の良賤も亦綿服を改め、袷衣を著し互に相賀す。

【年浪草】ころもかへと調ずべし。更衣と書にいふは女官の名なり。

季題解說 陰暦四月一日。昔宮中に於て夏に移るために、御装束を更められ

さらに室内の装飾より几帳壁代の類まで取替へられ、御疊なども新しきに敷きかへられたり。又、江戸時代に於いては、宮中の卯月朔日の更衣にならひ、陰暦四月一日に綿入を脱ぎて、袷となり、五月五日帷子に更ふる風習あり。更に十月朔日に綿入に更ふ。之を「後の更衣」と云ふ。綿入を脱ぎ捨てて袷に更ふるは身心の輕快を覺ゆると共に、夏の來りし意識を明瞭ならしむ。四月一日と書き「綿ぬき」と訓む苗字あり。更衣より洒落し名ならん。

【實作注意】中古は、單衣は公の服裝に用ゐられず、更衣は、綿入より袷に替へらるるなり。【參照】服裝を更ふ　冬　後の更衣

【例句】

更衣

寐道具もかりのやどりや更衣　宗因（梅翁宗因發句集）
春と夏と牛さへ行かふ更衣　鬼貫（鬼貫句選）
我はまた浮世をぬかへころもかへ　同（同）
戀のない身にも嬉しや衣かへ　同（同）
衣がへあれば明石路須磨の浪　來山（續いま宮艸下）
何所ひとつかたはでもなし衣がへ　同（同）
更衣まだ朝晩はかへぬなり　同（同）
たたみながら見やつたばかり衣がへ　同（いまみや艸）
ひとつ脱でうしろに負ち更衣　芭蕉（曠野）
とした氣で伊勢まて誰か衣かへ　其角（五元集）
越後屋にきぬさく音や衣更　同（同）
ぬかてやは千手觀音衣かへ　同（五元集拾遺）
法體もしまの下著やころも更へ　同（同）
白禿もなほる計りそころもかへ　同（同）
鹽魚の裏ほす日なり衣かへ　嵐雪（玄峰集）
痩肌やうゐ／＼しくもころもかへ　杉風（杉風句集）
重著も上は作法の更衣　同（同）
飛で見て蝶にくらべむ更衣　浪化（浪化上人發句集）
八疊に爐疊靑し更衣　浪化（同）
つつがなき母の便りや衣がへ　支考（蓮二吟集）
鶴に乘る支度は輕し更衣　同（同）
世の中をうしろの皺やころも更　同（同）
西行は娘もちてやころもがへ　同（同）
上ひとつ脱で大工の衣がへ　許六（五老井發句集）
物嗅き合羽やけふの更衣　桃隣（古太白堂句集）
更衣かへぬもつらし夜著蒲團　同（同）
綿帽子をのこんの雪や更衣　也有（蘿葉集）
まだ拔かぬつばなの綿や衣かへ　同（同）

けふぞとも臍はしらずや衣がへ　同（同）
荷のとゞく其日や旅のころもがへ　同（同）
いろむ名の麥ははだかや更衣　同（同）
今種をまく綿もありころもがへ　同（同）
菊までと綿に別れや衣がへ　同（同）
すがたみにうつる月日や更衣　同（同）
花の香にうしろ見せてや更衣　千代女（千代尼發句集）
脱捨の山につもるやころもがへ　同（同）
おもたさの日にあつまるや更衣　同（同）
冬からの皺をぬかはや更衣　同（同）
衣がへ人も五尺のからだかな　蕪村（夏より）
更衣身に白露のはじめ哉　同（新花摘）
ころもがへ母なん藤原氏也けり　同（同）
更衣矢瀬の里人ゆかしさよ　同（同）
辻駕によき人のせつ衣がへ　同（句集）
絹著せぬ家中ゆゝしや更衣　同（同）
大兵の廿チあまりや更衣　同（同）
ころもがへ印籠買に所化二人　同（同）
更衣野路の人はつかに白し　同（同）
痩臑の毛に微風あり更衣　同（同）
御手打の夫婦なりしを更衣　同（同）
更衣いやしからざるはした錢　同（同）
更衣金ふく輪の鞍置ん　同（新五子稿）
更衣むかしに遠きやみ上り　同（同）
一渡し越べき日なり衣がへ　同（同）
かりそめの戀をする日や更衣　同（題苑集）
更衣いわけなき身の田蟲哉　同（遺稿）
ころもがへうしと見し世も忘貝　同（同）
二十五のあかつき起や更衣　同（同）
もゝくるる人來ましけりころもがへ　同（同）
更衣布子の恩のおもさ哉　同（同）
更衣狂女の眉毛いわけなき　同（同）
更衣團うち拂ふ朱の沓　同（同）
衣がへやをら力はあるものを　同（書翰）
物がたき老の化粧や更衣　太祇（太祇句選）
いとをしい痩子の襟や更衣　同（同）
さむかふ襖間代りや更衣　同（同）
布子質[illegible]とよころもがへ　同（同）

年よればは病もたかし更衣　太祇（太祇句選）
五斗俵の地をはなるゝや更衣　几董（井華集）
病む人のうらやみ顔や更衣　同（同）
町内に家振舞ありころもがへ　同（同）
遺唐のいとま賜ひぬ更衣　召波（春泥發句集）
更衣ひそかに綿を着しますす　同（同）
親殿の御物めかしや更衣　同（同）
ころもがへ鳥はくろく鷺白し　樗良（樗良發句集）
春をおしむ心の外に衣がへ　同（同）
かへをしの衣や苔の露しくれ　曉臺（曉臺句集）
更衣ひとり笑行座頭の坊　同（同）
更衣いきたうなりし隅田川　同（同）
更衣まつ宗長の塚に詣つ　同（同）
酒飲の膝書過ぬころもかへ　同（同）
幸の謡講なりころもかへ　同（同）
むかふ歯のひとり落たり更衣　同（同）
玉川の浪かけてけりころもかへ　同（同）
更衣人のけしきにおどろきぬ　士朗（枇杷園句集）
けふこそは父のもの著ん更衣　同（同）
更衣我にも著する主かな　蘭更（半化坊發句集）
きれぐの綿流さばや衣がへ　同（同）
書過や何もせぬ身の更衣　同（同）
橋ひびろ出懸に寒しころもかへ　蓼太（蓼太句集）
いさ嵯峨も廻らばまはれ衣かへ　同（同）
先門の姥に用ありころもかへ　同（同）
更衣籐のほつれそれもよし　白雄（白雄句集）
かへるさや胸かきあはすころもかへ　同（同）
衣かへぬき贄の水ぞいまめかし　同（同）
馬とりの込に入けりころもがへ　同（同）
たがはじな此日を清のころもがへ　同（同）
更衣しばし虱を忘れたり　一茶（句帖）
うつる日や心のまゝと更衣　同（享和句帖）
其松をいぢり枯すな更衣　同（旅日記）
更衣いで物見せんとはかりに　同（七番日記）
何をして腹をへらさん更衣　同（同）
能なしもどうやらかうやら更衣　同（同）
下谷一番の顔してころもがへ　同（同）
更衣よしなき草をこすしりけり　同（同）

四ン月のしの字嫁ひや更衣　同（同）
更衣寐て見る山をつくねけり　同（同）
うしろから見れば若いぞ更衣　同（同）
貧乏が追うても來ぬぞ更衣　同（同）
のらくらも御代のけしきぞ更衣　同（同）
年とへは片手出す子や更衣　同（同）
其門に天窓用心更衣　同（おらが春）
衣更て坐つて見てもひとりかな　同（句帖）
おもしろい夜は昔なり更衣　同（一茶句集）
けふの日や替てもやはり若衣　同（同）
人らしく替もかへたり若衣　同（文政版發句集）
世ませのこゝろともなれころもがへ　成美（成美家集）
更衣膝にまづおくひなり哉　同（同）
耳のなることもわすれてころもがへ　同（同）
我まへに雲行影やころもかへ　同（同）
山寺や蜂にさゝれてころもがへ　巣兆（曾波可理）
赤貝にひかるゝ裾やころもがへ　同（同）
したしげに鳩の啼日や更衣　蒼虬（蒼虬翁發句集）
鯛賣のこゑを景氣に更衣　梅室（梅室家集）
太良より次郎がさきに衣かへ　同（同）
ころもがへ根つからぬ恐ぞものたらぬ　乙二（たのゝえ草稿）
着かへても父同じ名や藤衣　也有（蘿葉集）

衣更ふの

参考 古四月朔日、十月朔日、天皇御装束を代へ、御疊御帳臺等を改めて、南殿に出御し節會を行ひ給ふ。催馬樂に「一ころもがへせんやさきんだちや」とあり。源氏物語に「四月になりぬ衣更への装束御帳の帷子など由あるさまにし出づ」と見える。

服装を更ふ

季題解説 六月一日より軍人・警察官・學生等各一齊に夏服に更むることを云ふ。

作法注意 冬服と夏服との二種の生活状態にある人々の更衣を云ふのである。外國にても中産階級以上にあらざれば合服を持てるもの尠し。軍人の禮服に冬服にのみ存して夏服にはあらず。【三夏】更衣　夏服(二)

撫子衣（なでしこころも）

撫子襲（なでしこがさね）　白撫子（しろなでしこ）

古書解註 【滑稽雑談】かさね、紅、裏青紫。（一）

註　（一）夏五月の部に見ゆ。滑稽雑談草による。

季題解説 装束の名にして、初夏の衣服なり、撫子に襲の色目の名にして表は紅梅、裏は青なりと云ひ、又一説に表裏共に紅なりとも云ふ、年少より三十歳位まで用ゆ。

実作注意 紫のかゝりたる紅色、紅梅ともいふべきをなでしこ色と記せるもあり。白撫子は表は白、裏は濃紅にて、同じく夏季に用ゆ。［参照］更衣（ころもがへ）

卯の花衣（うのはなごろも）

古書校註

【滑稽雑談】裏表白し。或は表白く裏青き有り（一）

【年浪草】桃華御説に表白く、裏青　柳（二）に同じ。逍遙院殿の御抄に柳（二）に同じ云々、四月之を著す。

註（一）夏四月の部に見ゆ。正徹記による。（二）柳襲の略。

参考 卯花衣は四月之を著るとあり、又桃華御説に表白青柳に同じ」とあり、夏の初に著用する衣服にして表白く、裏青きものを云ふ。年少より三十歳位迄の者之を用ふ。［参照］更衣（ころもがへ）

牡丹衣（ぼうたんごろも）

古書校註

【滑稽雑談】表白、裏紅梅。かさねとあるべし。（一）

註（一）夏四月の部に見ゆ。正徹記による。ほうたんの衣。「かさねとあるべし」とは牡丹襲として用ふべしの意。

季題解説 昔の服装襲の色目にして表白、裏紅梅なり、四月之を着用す（口傳抄）。又一説に満佐須計装束抄に「ほうたんおもてみなうすきはう、うらみなしろし、すゞしのひとへ」とあり。［参照］更衣（ころもがへ）

若楓衣（わかかへでごろも）

古書校註

【滑稽雑談】表薄蘇青、裏薄紅梅。

註 夏四月の部に見ゆ。正徹記による

季題解説 若蝦手とも記す、中古服装襲の色目にして、撫子とも記す、雑事抄「表は紅梅、或は薄色、裏は青、五六月頃或は夏著用、年少より三十歳位まで用ふ」［参照］更衣（ころもがへ）

杜若衣（かきつばたごろも）

古書校註

【滑稽雑談】表薄紫、裏薄紅梅。

註 夏四月の部に見ゆ。正徹記による。

季題解説 仲夏に用うる装束の名なり。蒲佐須計装束抄に「かいつばた、うすいろにほひて三。あをきこきうすきくれなゐのひとへ、つねのことなり」〔季題〕更衣へ

藤衣（ふぢごろも） 藤かさね

季題解説 装束の名、表うす紫にして裏青なり、初夏に用ふ、西三條装束抄「藤面薄紫、裏青、三四月著之」一説に表は經青・緯黄・裏は萌黄（桃華蘂葉）〔季題〕更衣へ

例句

襟足の濃き白粉や藤衣　涼舟（同人）

装束納（しやうぞくをさめ） 衣服納

古書校註 【日本歳時記】四月、天気よき時、書畫等を日に晒して取納め、箱に入れて、紙に糊をつけ、すき間をはり置きて、梅雨の後是をひらく、如此すれば、黴いです、と月令廣義に見えたり。衣服も亦同じ

季題解説 夏期に入るにつけ、能装束を納むること及び、その期に行ふ能楽をいふ。

木布 生平 木平 生布 麻布 太布 葛布 芭蕉布 生平嚢

古書校註 【年浪草】麻布葛布藤布等の未だ曝さゞる者を生平と日ふ。木布、生布に同じ。

季題解説 麻・葛・芭蕉・藤等、草木の纖維を以て織りたる布を云ひ、夏季の著尺地に供す。麻布は麻にて織りたる布にして、未だ曝さゞるを生平と云ひ、奈良縣に多く産す。曝して雪白ならしめしものを晒布と云ふ。葛布は葛の蔓を莩として織れる布なり。能く水に堪ふるを以て雨衣とし、袴とす、遠州掛川より出づるもの名高し。太布は藤蔓又は穀の木、或楮の皮等より造り、芭蕉布は芭蕉の皮より織りたる布にして琉球・大島等に多く産し、經緯共に芭蕉の纖維を以て織製したる淡茶無地又は濃茶絣の織布なり。〔季題〕晒布　縮布　上布　帷布

例句

芭蕉布を著て夕さに訪れにけり　月斗（同人）

國の主人が著たる葛布哉　同（同）

実用知識 生平はその一種奈良縣に産し奈良晒はこれを晒したものである。上布、縮、生平布等は高等なる衣服の料となつてゐる。

曬布　晒　奈良晒　晒布賣　晒時　晒川　生平

古書校註

【三才圖會】曝布は和州奈良より出る布の上品也。羽州最上の苧麻を績んで（一）布となす。細緻絹の如し。之を煮て舂き晒す事數回にして潔白雪の如し。山州木津の曝之に次ぐ。其未曝さざる者を生平と曰ふ。黯色にして細緻なり。江州高宮より出る者を上となす。（略）賀州高岡、同じく石動の八講布は紵麻にて共に色雪の如く、奈良曝に亞ぐ。

註（一）つむぐ。績ぐ。

季題解説

麻、苧麻（ラミー）木棉布等を日光にさらして、雪白ならしめたるもの。最初灰汁に浸け置きそれをよく洗滌して積等の曬場にて日光に曝すなり。今は藥品・電氣等にて之をなす。 参照　木布[ハキヌ]

例句

晒

晒見てなを惜まるゝ月日哉　蓼太（蓼太句集）

川風に水打ながす晒かな　太祇（太祇句選）

縮布　白縮　縮　縮賣

季題解説

縮は緯絲に左右強撚絲を織り込みて仕上げたる著尺地にて、明石縮・阿波縮等絹・綿兩種あり。總じて輕く肌ざはり爽かなれば襦袢甚平などにして著るも良し、近時クレープシャツの流行を見る。 参照　夏衫汗[ヤツシ]

例句

縮布

更科や伯母の手織の縮ちゝみ　露草（江戸辨慶）

上布　薩摩上布　越後上布

季題解説

上布は麻織物の著尺地にして亞麻、苧麻の細絲にて製織したる高級品にして越後上布、薩摩上布等最も有名なり。 参照　木布[ハキヌ]

例句

上布

母の形見に一枚殘る上布哉　丘峰（同人）

帷布　貲布　太布　さいみ

季題解説

一名太布・藤蔓などの木の皮の纖維を績みて織りたる布。後には麻布の晒さゞる物をも呼べり。別名、さいみ。 参照　木布[ハキヌ]

袷　綿拔　初袷　袷時　絹袷　素袷　袷衣　袷小袖　式袷

古書校註

【三才圖會】袷は絮（一）なき衣なり。（略）凡四月朔月、更衣をなし、此日より袷を用ひ、端午に至りて、布衫を用ふ。九月朔日復袷を用ひ、重陽以

後架衣を用ふ。蓋此れ士庶人の通禮なり。

【栞草】　綿拔、更衣に布子(一)の綿を拔去りて袷とするをいふ。

【滑稽雜談】　俗に綿ぬきといふ。四月一日より着用すれば秋月にも、又用ゆれども、初を以て正季として、袷と斗は夏也。綿ぬき又おなじ。

註 (一)綿入。(二)綿入。

季題解説　夏、表合はせたる衣服を略して「あはせ」と云ふ。綿を入れざるものにして、始めより綿を入れずして仕立つるものと、布子の綿を拔きたるものあり、故に「綿拔」の名あり。昔は四月一日を夏衣とし此日より冬着を脱ぎ袷を用ゐたり。四月朔日とかきて「わたぬき」と訓ましむる姓あるは之れによる。　參照　更衣(コロモガヘ)

例句

袷

一日で花に久しき袷かな　鬼貫　(鬼貫句選)
袷出せ花さへ芥子のひとへなる　來山　(いまみや艸)
大酒に起きてものうき袷かな　其角　(五元集)
腸は野に捨たれど袷かな　嵐雪　(玄峰集)
奉公ぶり親に見せたる袷かな　也有　(蘿葉集)
紋所かはる座頭のあはせかな　同　(同)
花已に去るもののことに袷かな　同　(同)
芳野をも見ずに今年も袷かな　同　(同)
開帳も四五日かゝる袷かな　同　(同)
二日三日身の添かぬる袷かな　千代女　(千代尼發句集)
袷著て身は世にありのすさび哉　蕪村　(忘れ花)
小原女の五人揃うてあはせ哉　同　(新花摘)
たのもしき矢數のぬしの袷哉　同　(句集)
橘のかごとがましきあはせかな　同　(同)
那須七騎弓矢に遊ぶ袷かな　同　(新五子稿)
ゆきたけもきかで流人の袷かな　同　(同)
西行は死そこなうて袷かな　同　(落日庵句集)
思案して旅の袷にうつりけり　太祇　(太祇句選)
かしこげに著て出て寒き袷哉　同　(同)
行女袷著なすや憎きまで　同　(同)
旅立を人もうらやむ袷かな　同　(同)
用意せし袷出す日や薄旅籠　同　(同)
袷著てむかしごころや花の塵　几董　(井華集)
馬の脊にかろく騎る袷かな　同　(同)
小褄より針ひねり出す袷かな　同　(同)
[illegible]見して袷ぬき合すあはせ哉　同　(同)
[illegible]の背中ふくるゝ袷かな　召波　(春泥發句集)

袷

袷買ら下京を出たり姿もの　暁臺（暁臺句集）
寝て見れは欅のかたき袷かな　闌更（半化坊発句集）
袷著て卯の花折んこゝろかな　白雄（白雄句集）
あたらしき袷に今朝のあさ日哉　同（同）
武士の矢はせに立て袷かな　蓼太（蓼太句集）
袷きる度に年寄ると思ふ哉　一茶（句帖）
たちまちに寝皺だらけの袷哉　同（同）
春日野の鹿に嗅るゝ袷哉　同（発句集）
道づれが袖の塵とるあはせかな　梅室（梅室家集）
橋銭を袂にならすあはせかな　同（同）
袷著てまゐり居るなり文使　乙二（をのゝえ草稿）

綿抜

綿ぬきや蝶はもとより軽々し　千代女（千代尼発句集）
綿ぬきやはじめて夜著のおそろしき　同（同）
綿脱やまた朝々にうそもあり　同（同）
我に綿ぬきすまさせて寒きかな　蓼太（蓼太句集）
綿脱ておます施主有旅の宿　太祇（太祇句選）
綿ぬかん／＼とて四月二日かな　白雄（白雄句集）
抜し綿や鼠の巣ともなさばなせ　闌更（半化坊発句集）
買人が綿引ぬいてくれにけり　一茶（七番日記）
南無あみだどてらの綿よひまやるぞ　同（文政板発句集）
立ながら綿引抜て出たりけり　同（七番日記）
綿ぬきのいつ下に掃や鼠の巣　蒼虬（蒼虬翁発句集）
綿ぬいてほすもうるさしまのあたり　梅室（梅室家集）

初袷

初袷しなのへ嫁がござるげな　一茶（七番日記）
たち咄するうち寒しはつ袷　梅室（梅室家集）

袷時

鶯に逢ぬ日はなし袷時　乙二（をのゝえ草稿）

参考　文選秋興賦に「御袷衣」倭名類聚鈔に「袷音古洽反、袷衣和名阿波世之岐奴。李善曰、袷衣無絮也。」萬葉集作者未詳の歌「橡の袷の衣の裏にせば吾しひめやも君が来まさぬ」

清涼著（せいりやうぎ）

清涼衣（せいりやうい）　簡易服（かんいふく）　簡単服（かんたんふく）　アッパッパ

季題解説　腰のあたりまである長き続き服にて、下方はスカートの如くひろし。俗に所謂アッパッパと称するものなり。婦人にのみ用ゆ。

例句

簡易服　村一番の娘ときくに簡易服　哲茶（同人）
アッパッパ　アッパッパ著て女房の日本髪　諸人（ホトトギス）

夏衣（なつごろも）

夏著　なつぎぬ

季題解説　夏期に著用する衣服の總稱にして、木棉物より、絹物・麻類・上布

類・透綾・等すべてに亙りて云ふ。古の夏衣は多く片絲にて織りたるものにて裂したりとぞ。夏衣は片織の約なる力とりにかけて用ゐ、又ひとへうすしにかけ或はすべて衣の緣語の裁つ、着、紐、裾、裏などにもかけて用ゆ、古錄「蟬の聲きけば悲しな夏衣、うすくや人のならんと思へば」の如し。

例句

夏衣

なつ衣いまだ虱をとりつくさず　芭蕉（小文庫）
老ひとつたれを荷にして夏衣　嵐雪（玄峰集）
旅涼しうら表なき夏ごろも　几董（井華集）
夜をこめて村や淺黄の夏衣　巢兆（曾波可理）
腹卷の旅銀重たし夏衣　月斗（同人）

参考

枕詞に多く用ゐられる、片絲にて織りたるもの故かとりにかけて言ふ。「明けぬるかはやかげうすし夏衣かとりの浦のみじか夜の月」（新葉集）又ひとへにて薄き故に「ひとへ」「うすし」にかけて言ふ。「蟬の聲きけば悲しな夏衣うすくや人のならんと思へば」又裁つにかけ更に著・ひも・すそ・うら等にかけて言ふ「夏衣たつた河原の柳影すゞみに來つゝならす頃かなー」（後拾遺集）

白重（しらかさね）　白襲（しらがさね）

古書校註

【滑稽雜談】　清岩正徹の記に云ふ、しらがさねといふは、更衣の事也。卯花の心か。（一）面しろく裏おなじ。或記に云、惣而四季に隨に衣を更る事あり。卯月一日よりあはせを用ゆ。寒ければ、下小袖を着す。是をしらがさねといふ。五月五日より帷子を用ゆ。涼しき時は下衣を着す。是を一重がさねといふ。夏なれど帷をふたへ着る作法にや。八月十五日に綿入ざる生絹（二）を用ゆ。九月九日より綿入たる衣也。是を紅葉衣とも菊重共いふ。又十月一日よりねり衣を用ゆ。是を冬の更衣といふ也。けふといへば大宮人のしらがさね夲の色こそ立かはりけり。

註（一）卯の花の如く白き意味で白重と云ふのであるかの意　（二）ねらぬ絹絲

季題解説

卯月一日の更衣の時、上下に著する表裏共白き平絹の袷を云ふ。

例句

白重

すゞりする傍にうつくし白かさね　嵐雪（玄峰集）
すき立て猶黑髮や白かさね　蓼太（蓼太句集）
白かさねにくき脊中に物かゝん　同（同　）

單衣（ひとへもの）

ひとへぎぬ　ひとへごろも　ひとへもの

古書校註

【年浪草】（單衣）和漢三才圖會に曰、[illegible]單衣は無裏者也。（略）端午布衫を用ふ。九月朔日復た袷を用ふ。

季題解説　裏のなき衣服にして略して「ひとへ」とも云ふ、夏季著用す。もとは麻纎の單物、特に帷子を稱へしが今は輕く涼しきを主としたる、木綿縞絣・白絣・絣縮・銘仙・メリンス・縮緬等種々を總稱す。

例句

單衣

絶頂に上れば寒しひとへもの　子規（全集）
怪談の座にはべるなる單衣かな　辰彌（ホトヽギス）
縁に來てちらつく蝶や單衣裁つ　いち子（同）
單衣にも町家の子弟帶硬き　月斗（同人）
酒燒の胸男らし單衣　一哉（同）

參考　萬葉集に「つるはみの一重衣の裏もなくあらむ子故に戀ひ渡るかも」とある。

帷子（かたびら）　黄帷子（きびら）　白帷子（しろかたびら）　染帷子（そめかたびら）　繪帷子（ゑかたびら）　木平（きびら）　辻が花（つじがはな）

古書校註

【御傘】つじが花はつゝじか花といふ事を中略したる名なれども、あかきかたびらの名に成たれば、春の季にならず、かたびらにひかれて夏の句に成なり。

【日次紀事】五月初五日より、良賤各帷子を着る。倭俗、布衣を帷子と謂ふ。或は年により、暑氣未だ到らざれば、則良賤亦綿服の上之を著る。表帷子と謂ふ。

【年浪草】和漢三才圖會に曰く、通俗夏日必用ふるの衣、凡帷子と名く。端午より之を著る。淺黄色を用ふ。七夕八朔（一）には白帷子を用ふ。（略）○中華古代葛を以つて製す、本朝も亦同じ。今諸國精麤の布（二）最多し。（略）射手裝束日記に云ふ、紅入らざる辻が花の白帷子云々。然れは紅染にも拘らざるにや。

註　（一）陰曆八月朔日。（二）こまやかなる布とあらき布。

季題解説　今帷子と稱するは專ら麻・苧等の單衣を云ふ。麻衣は昔は賤者の衣服なりとせられしが、夏季の著衣として暑氣を凌ぐに適するより、終には貴人も密に家内にて著用するに至り、徳川時代には上下一般に之を用ゐ、端午には淺黄の染帷子を著し八朔には白帷子を用ゐる習慣となれり。帷子は元來几帳などに帖りし生絹の帛を云ひ、麻にはあらざりしが、中世に至り夏の單衣の名となり、菖蒲帷子といはれしが更に降りて專ら麻衣・苧衣を稱する名となれり。

實作注意　辻が花は紅き生絹などの衣を著けたる少女が、街頭にあるを象りて花に見たてたるなるべし。貞徳は「つゝじが花といふことなり、赤き帷子のことなれば夏なり」とあれど、犬追物秘傳抄には「紅入らざる辻が花の白帷子」ともあれば、あながち紅染とも限らざるべし。

例句

帷子

帷子にあたゝまりまつ日の出かな　丈草（丈草發句集）
帷子の願ひは安し錢五百　支考（蓮二吟集）
かたびらの無理な節句や傘の下　太祇（太祇句選）
帷子や蝿のつといる袖のうち　同（同）
かたびらの癖はつきよき曉まくり　同（同）
帷子や明の別のすそかろき　同（同）
かたびらのそころ縮て晝寐かな　同（同）
わすれゐし帷子ありぬ妹が許　几董（井華集）
かたびらや浴して來し人の貌　召波（春泥發句集）
かたひらに松葉さゝるゝ空寐哉　曉臺（曉臺句集）
帷子やぬけは風もつ物ながら　蓼太（蓼太句集）
青空のやうな帷子きたりけり　一茶（七番日記）
帷子を眞四角にぞきたりける　同（同）
かたびらにまばゆくなりぬ廣小路　梅室（梅室家集）
帷子を着て寒がりぬ御僧達　乙二（をのゝえ草稿）
かたびらや風のそばへる舟のうへ　同（同）

繪帷子

夜涼や露置く萩の繪帷子　几董（井華集）
新尼の著つゝをかしや繪かたびら　召波（春泥發句集）

木平

いやしさの見えて身安き木平哉　沾德（沾德五子稿）

辻が花

うかれ出る色や阪田の辻が花　桃隣（古太白堂句選）
辻が花目なくなりたき思ひあらむ　曉臺（曉臺句集）

羅（うすもの）　綾羅（りようら）

古書校註

【栞草】細布にて、めの細かき布。越後縮のたぐひ云々○すべて、薄絹の絹布をいふと心得べし。

季題解説　薄織の絹布にして、絽又は紗或は越後上布の如きものにて作りたる單衣の衣類を云ふ。

例句

羅

螢見や羅寒き舟の中　珊雫（新選）
羅や水の滴る女形　千燈（同）
まろき肩包む羅黒きかな　月斗（同人）
羅に洗ひ朱の帶艶なりき　同（同）
涼しさに黑き羅つけにけり　初子（同）

參考　薄機の義である。この服料は隨分古くから用ひられたものとみえ日本書紀などにも見え延喜式などにも屢々現はれてゐる。萬葉集竹取翁の

歌の中に「羅の似つかふ色になつかしき紫の大綾の衣」とある。

浴衣（ゆかた）

湯帷子（ゆかたびら）　浴衣掛（ゆかたがけ）　浴衣地（ゆかたぢ）　染浴衣（そめゆかた）　貸浴衣（かしゆかた）

季題解説 浴衣はもと湯帷子の略にして、入浴の時に用ゐる衣服の意なりしが、今は夏日用ゆる主に白地の木綿着を普通に浴衣と稱し、略儀の衣服となす。地質には眞岡木棉・木棉縮・瓦斯縮の類・普通に用ゐられ一般には中形染に作らる。浴衣のみを著用したる寛ぎたる姿を浴衣掛と云ふ。

實作注意 浴衣は古來木棉のみを用ゐしが、近來は浴衣を着て外出すること一般の風俗となりてより木棉のみならず、婦人中には縮緬の浴衣をさへ用ゆるもの少からず。

例句

浴衣

浴衣著て瓜買ひに行く袖もかな　其角（五元集）
鵰次郎の手拭ついて浴衣哉　月斗（同人）
白き浴衣に揮毫の墨を飛ばしけり　同（同）
浴衣著て遊びに來る巡査哉　蒼壺（同）
人ごみに煙草つぶれし浴衣哉　二月堂（同）
浴衣著て今宵何やらほゝ笑まし　凡水（同）

參考 狂言、水論聟に「踊の稽古・・・ゆかたを揃へる。」又一代男に「あがり湯のくれ樣、ちらしを呑ませ浴衣の取揃へ」「鶉衣に一春は乘りかけの鈴鳴りて浴衣染の花やかなるは參宮の都道者か」などある

セルの單衣（ひとへ）

セル　ネルの單衣（ひとへ）　ネル

季題解説 セル地は薄手にして觸感輕き爲め單衣に用ゐらる、セルの單衣は初夏の候著用せらる。ネルはフランネルの略にして、平織の和らかき手織物なり、肌觸り、通風共によく、單衣物の地質に適す。

實作注意 セル・ネルは尚ほ縮紗。ふくりんと云ふ如く服地等として單に衣服の材料たるに過ぎず、故にセル・ネルを以て獨立の季題とせるは妥當ならず、必ず、セルの單衣ネルの單衣たることを明瞭に表現せざる可らず。但しセル・ネルとのみ言ひても、それ等の單衣の意と知り得るやうに詠じ得れば咎めず。セル・ネルの單衣は秋にも着すれど、單に袷を夏とするが如く、之等を夏とす。

例句

セル

セルをきて見合の席へ出たりけり　大寒（同人）

夏服（なつふく）

白服（しろふく）　夏洋服（なつやうふく）

季題解説 夏の洋服を略して夏服と云ふ、薄く輕くして涼しきを好む。故に

薄ラシヤ・セル・アルパカ・リンネル・麻・絹洋服地等を用ふ。アルパカ織はアルパカゴートと稱するラマに類似せる獸の毛の平織と斜子織なり。

例句

夏服　夏服の膝たぶ〳〵になりにけり　香苗（同人）

夏服や孜々と勵みて利にうとき　茎里（同）

夏洋衫（なつしやつ）　クレープシヤツ　網シヤツ

季題解説　夏期に著用するシヤツにして、麻・縮・棉クレープ・絹クレープ等薄手にて製す、夏シヤツの一種に網シヤツ（網洋衫）と云ふものあり。

例句

夏洋衫　夏シヤツに毛深き胸を包みけり　黄櫨（同人）

汗衿（あせえり）　竹襦袢（たけじゆばん）　管襦袢（くだじゆばん）　編襦袢（あみじゆばん）　紙捻襦袢（こよりじゆばん）

季題解説　夏季汗の直接衣服に透らざるため、之を防ぐ目的を以て衣服の下に著用する下著にして、多くは麻・縮みにて作り、稀には竹・籐などにて造れるものあり。其種類多く、材料により種々の名あり。竹襦袢は篠竹を細く削り編みて造れるものなり。管襦袢は細き竹管に絲を通し綴り合せて造る。編襦袢は棉絲を以て網の如く編める襦袢。紙捻襦袢は紙捻を以て網の如く、目を荒く編みたる襦袢なり。

例句

汗衿　汗とりや弓に肩ぬぐ袖のうち　太祇（太祇句選）

竹襦袢　汗に朽は風すゝぐべし竹襦袢　嵐雪（玄峰集）

竹襦袢米屋と見へて腰に差　耕雨（同人）

日毎着て形馴れけり竹襦袢　伏兎（同）

夏羽織（なつばおり）　薄羽織（うすばおり）　單衣羽織（ひとへばおり）　一重羽織（ひとへばおり）　麻羽織（あさばおり）　絽羽織（ろばおり）

古書校註　【年浪草】絹布の單（一）或は羅を用ふ。近來の俗服なり。

註（一）ひとへ

季題解説　夏、單衣羽織の總稱にして、絽・紗・棉絽等の羅を以て造る。故に薄羽織、單衣羽織とも云ひ、又用ゐたる布地により、紗の羽織・絽羽織・絹・綿縮等の名あり。男ものは黑色多く、婦人用には、涼しき色ものゝ美しき多し。

例句

夏羽織　別れぱや笠手に提げて夏羽織　芭蕉（白馬集）

[illegible]に置て着ぬ[illegible]や夏羽織　太祇（太祇句選）

手に持ば手にわづらはし夏羽織　几董（井華集）
何と羽織縮緬は重し紗は輕し　其角（五元集拾遺）
薄羽織　なき人のあるかとぞ思ふ薄羽織　蕪村（蕪村遺稿）
交れは世にむつかしや薄羽織　召波（春泥發句集）
一重羽織　身にからむ一重羽織も浮世かな　其角（五元集拾遺）

甚平（じんべい）

じんべ　袖（そで）なし　チヤンチヤンコ

季題解説　麻木棉等にて造れる單衣の陣羽織の如きものにして夏期著用するものなり、大阪にて之を甚平と云ひ、東京にては「袖なし」又は「チヤンチヤンコ」と云ふ。甚平と云へるは人名より來るものなるべきも詳かならず。

例句

甚平　酒に貌染めて甚平のあるじ哉　圭岳（同人）
甚平を藏の戸前にかけにけり　朝冷（同　）

參考　皇都午睡に大將の著る陣羽織の代りに、兵卒の着るものを陣兵羽織と言つたとある。甚平は蓋しこれであらうか。

夏合羽（なつがつぱ）

季題解説　夏季用ゐる合羽なり。塵塚談に「男子も近年は夏合羽とて葛布、芭蕉布の數を以て作る、富饒の人は礁珀、呉路服、連等にて拵へ著る」と。

例句

夏合羽　ふくりんの黒襟つけぬ夏合羽　月斗（同人）

夏頭巾（なつづきん）

麻頭巾（あさづきん）

季題解説　夏かぶる頭巾を云ひ、絽又は紗を用ゐて作る、昔は專ら麻にて製したりといふ。參照　冬―頭巾（ヅキン）

例句

麻頭巾　うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾　其角（五元集拾遺）
薄柿のにほひもかろし麻頭巾　浪化（浪化上人發句集）
麻頭巾蓮見にまかる小舟哉　召波（春泥發句集）

參考　安永天明頃花街に通ひし者の常用せしもの。男色大鑑「若衆みなみな丸袖の羽織をかくし夏頭巾の山は云々」とある。

編笠（あみがさ）

臺笠（だいがさ）　菅笠（すげかさ）　藺笠（ゐかさ）　篠笠（たけのかはがさ）　檜笠（ひのきがさ）　綾藺笠（あやゐかさ）　饅頭笠（まんぢうかさ）　網代笠（あじろかさ）　塗笠（ぬりがさ）　市女笠（いちめがさ）　女笠（をんながさ）

古書校註　【三才圖會】按る（略）今莞草（一）を編みて之を作る。竹骨を用ひず。呼て

市女笠の圖

編笠と曰ふ。以て暑を禦ぐべし。(略)今多く勢州多氣郡より出づ。(略)江州の愛智郡より出づ。(略)其笠深大なる者を熊谷笠と名く。

註（一）ゐ、まるがま([illegible]蒲)

季題解說 編笠は、菅・藺・筍皮・麥稈・檜皮、又はへぎ板・鉋屑・剝竹・等の草木の莖或は皮等を用ひて、之を編み、輕く造れる笠にして、暑を避くるに用ゆ。その種類頗る多し。菅笠・藺笠・簟笠・檜笠等あり。又形其他により種々の名あり。綾藺笠は藺を編みて綾に織りたるものを云ふ此笠は田樂法師これを用ゐ、流鏑馬に用ふ。されど、流鏑馬の綾藺笠は、藤かづら、麥稈にて作り藺を用ゐず。饅頭笠は其形饅頭に似たるより此名あり、剝竹を編み、或は厚紙等を心として其上に木綿、羅紗等を張付けたるものなり。網代笠は剝竹或は檜の剝ぎたるを網代形に編みたるものなり。塗笠は薄き板にて作る、その上を黑漆にて塗りしものなり。市女笠は婦人の用ゐるものにして、又女笠とも云ふ、古へ婦女道を行く時此笠を冠りたり。

例句

編笠　編笠や刈草よする日の眞下　鈍刀（南村）

參考 菅で編んだ編笠、卽菅笠は古くから見えてゐる。萬葉にも「我刈りて笠にも[illegible]まず河の瀬菅」と見えてゐる。その後時代に依り材料や製法に變遷があつたものである。

夏帽子（なつばうし）

夏帽（なつばう）　麥稈帽子（むぎわらばうし）　經木帽子（きやうぎばうし）　パナマ帽子（ばうし）　臺灣（たいわん）パナマ帽（ばう）　淡水（たんすゐ）パナマ　タスカン帽子（ばうし）　ナポレオン帽子（ばうし）　海水帽（かいすゐばう）　ヘルメット帽（ばう）

季題解說 夏季用の帽子の總稱にて、麥稈帽子、パナマ帽子、經木帽子、タスカン帽子、ナポレオン帽子等種々あり。麥稈帽子は麥稈を漂白して眞田に組みたるもの、經木帽子は木材を削りて作れるものなり。パナマ帽子は南米に產するスクリユーパインと稱する植物の葉の未だ開かざるを取りて製せるものにしてパナマ地方より多く產せしを以て此名あり、臺灣パナマ帽といへるは臺灣及琉球に產するダンと稱する植物の葉を以て製せるもの、臺灣パナマを漂白せるものを淡水パナマと云ふ。タスカン帽子とは伊太利麥と稱するタスカンストローを編みて製せしものなり。海水帽は海水浴に用ゐる帽子にして、木棉・毛絲・護謨防水布等を以て製す。

例句

夏帽子　夏帽子人歸省すべきでだち哉　子規（全集）

夏帽　二三日頭に慣し夏帽子　月斗（同）
夏帽も取りあへぬ辞儀の車上哉　子規（全集）
夏帽の人見送るや蚕が子等　同（同）
夏帽を水に飛ばしぬ舟遊　月斗（同）

夏襟（なつえり）

紗襟（しやえり）　絽襟（ろえり）

季題解説　夏襟は薄くして織目の透きたる絽織の襟多し。平絽・絽縮緬・紋紗等もよし。紗は織目疎にして輕く薄き生絹の織物なり。色專ら淺くして涼しく美くし。

例句
夏襟　夏襟はふくよかな首包みゐる　月斗（同人）

夏手袋（なつてぶくろ）

季題解説　夏手袋は夏向きの爲め特に薄地のメリヤス・麻絹等にて作る、近頃絹目のものも出づ。**參照**　冬—手袋（テブクロ）

例句
夏手袋　夏手袋の小指そらせつ遠眼鏡　路千（同人）

汗手貫（あせてぬき）

季題解説　籐或は馬の尾、鯨のひげ、生絲にて手貫を作り、夏日汗の爲めに袖口の汚れざる爲めに用ゐる具なり。これはもと朝鮮の吐手と云へるものにして韓土より傳はれものなりとか。僧侶、老人など用ゆ。

例句
汗手貫　汗手貫金光教の教師かな　二月堂（同人）

單袴（ひとへばかま）

夏袴（なつばかま）　麻袴（あさばかま）　絽袴（ろばかま）

季題解説　夏用ふる袴をいふ。薄織の絹織物例へば絽の如きもの、或は麻布芭蕉布など用ひらる。

例句
夏袴　へつらへる心ぞあつき夏袴　越人（小弓俳諧集）
夏袴羅にしてひだ正し　虚子（ホトトギス）
麻袴　形代に脱いで捨てけり麻袴　成美（いかに〳〵）
絽袴　哭北渚を訪ふ小竹や絽の袴　月斗（同人）

汗拭ひ（あせぬぐひ）

汗拭き（あせふき）　汗巾（なふき）　汗手拭（あせてぬぐひ）

季題解説　白布にて作る。近來ガーゼにて作りしものあり。汗巾（ハンカチ

ーフ）には麻或絹等にて美しき模様を染めたるもあり。参照 汗（あせ）

例句

汗拭ひ　生の松いかに忘れむ汗拭ひ　其角（五元集拾遺）

ちんじやうの和巾さはきや汗拭　嵐雪（玄峰集）

汗ぬくひ小松に干て沖津風　同（同）

けふはたゝ目こそつかへ汗ぬぐひ　也有（蘿葉集）

目ざましに水ひてゝ來よ汗拭　召波（春泥発句集）

青雲と一つ色なり汗ぬぐひ　一茶（七番日記）

汗拭き　汗拭や左祖ぐ夏芝居　几董（井華集）

参考 靈異記に、巾と言ふ字の割註に巾太乃己比とある。手拭の義である、下學集には手巾とあり、運歩色葉集には手拭とある。

腹當（はらあて）　寝冷知らず（ねびえしらず）

季題解説 夏季寝冷を防ぐために、毛絲編フランネル等を以て腹部を包み置くもので、小兒用のものは多く頸より吊りて紐を付けて背にて結び置くを常とす。参照 寝冷（ねびえ）

例句

腹當　腹當の子やすでにして土佐訛　南國子（同人）

夏帶（なつおび）　單帶（ひとへおび）　一重帶（ひとへおび）

季題解説 夏締める帶にして、單なるもの故又之を一重帶と云ふ。紹珍・博多・風通等、又絽の丸帶・紹の名古屋帶等を多く用ゐ、近頃名古屋帶の手軽き仕立流行す。夏帶を締める時帶下の汗の爲め汗取に絲瓜の綱を楕圓形に延せしものに晒木綿を縫合せ用ゐしが近來は、防水性の布を用ふ。

例句

夏帶　夏帶やあく事やすき淺はなだ　一晶（蓑木柱）

單帶　思ふまゝに結べてうれし單帶　千々（同）

一重帶　塗下駄のかろき運びや一重帶　竹香女（同）

下帶（したおび）　附帶

古書校註

【下濃草】 御湯殿記に曰、五月五日より女房（一）上下かたびら、色々に染て[illegible]也、是は洞中の御事なり、卑俗にも夏白かたびらに下帶を用ふ、四月よりも下帶を用ふ。[illegible]下帶[illegible]（二）の頃之を用ふ。[illegible]夫木 折しもあれえやは心をかけ帶の思ひはむねの隔なるべし。信實。

註（一）宮中に仕ふる女官[illegible]　（二）[illegible]になる[illegible]

季題解説　婦人の禮服に絹の廣さ鯨尺の八歩なるを後に結びて垂せるなり。昔洞中に於ては五月五日より女房上下かたびら色々に染て著し附帶したり。地下に於ても地白、かたびら下帶を用ゐる、又四月よりも下帶を用ゐたり。今は全く廢れたり。

例句

下げ帶　下げ帶の女房花に灌ぎけり　月斗（同人）

參考　帶の結び方の一種で、もと季はなかつたものである。夏期暑いので帶を狹く仕立てるより夏季となつたのであらう。

白靴（しろぐつ）

季題解説　ホワイトシューズにして、夏日は靴の爲め足先の蒸さるゝこと多きを以て輕目のヅック製白靴を穿くもの多し、又革製のものもあり。

例句

白靴　白靴の汚れが見ゆる疲れかな　月斗（同人）
白靴やオリンピックの選手達　雀孫（同）
白靴に美しき脚組みにけり　二月堂（同）

夏足袋（なつたび）

單足袋（ひとへたび）　麻足袋（あさたび）　縮足袋（ちゞみたび）

季題解説　キヤラコ、縮、絹、麻、メリヤス、寒冷紗等の單足袋をいふ。

例句

夏足袋　夏足袋の足に眼を落しけり　朝茶の湯　久美女（同人）
單足袋　單足袋に添へて小菊の懷紙かな　露甜（同）

衣紋竹（えもんだけ）

衣紋竿（えもんざを）　帷子竿（かたびらざを）

季題解説　竹又は木にて造れる衣紋掛にして、夏日衣服、襦袢など汗に汚れたるを乾かすために用ふる長さ二尺許りの竿なり、朱漆又は黑漆塗のものあり、袖口を竿の左右に通して室内又は軒下などに吊り下ぐるものなり。

例句

衣紋竹　衣紋竹に留守なる人の浴衣哉　英子（同人）
かくれ家や雨沁む壁の衣紋竹　千燈（同）
衣紋竿　衣紋竿に女の著物扱長き　月斗（同）

參考　衣架よりは又手輕になりたるもの、衣紋は海人藻芥に「凡裝束の衣紋、上代は沙汰に及ばず、鳥羽院の御代より强き裝束を用ゐる故に衣紋の沙汰出ぬるなるべし」とある。又世繼物語に「此の大將殿は殊の外衣紋を好み給ひて」云々とある。併し後には衣服の襟を交へ合す所の種に用ゐて居る。

水玉（みづたま）

季題解說 硝子製の玉の中に水を入れたるものにして、夏季兒女の簪となし或は小さく色付けしたる瓢形に造り、之を浮ばせなどして弄ぶものなり。

例句

水玉　水玉や小町娘の浴衣がけ　凡水（同人）

新酒火入（しんしゆひいれ）　酒煮る（さけにる）　煮酒（にざけ）　樋圍ひ（おけがこひ）

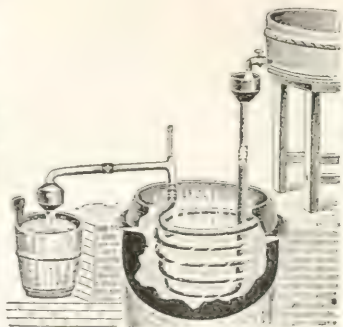
季題解說 冬春製造したる淸酒は尙、微生物を含み之を貯藏するに適せず、故に五月に入て六十度位の溫度にて加熱す。此の溫度にては完全なる殺菌は行はれざるも、尙能く微生物の生育を止むる效あり。火入は從來後釜を用ゐ、その內面に漆を塗れり。火入を終りたる時は速に貯藏桶に移し密封して貯藏す。其の間に漸次成分變化し、又杉材より揮發分浸出して淸酒の香氣を良好ならしむ。（參照）初呑（ハツノミ）　酒煮の祝（イハヒ）　秋　新酒（シンシユ）

例句

酒煮る　酒を煮る家の女房ちよとほれた　蕪村（新花摘）

小角力が舊きにかへる酒煮哉　几董（井華集）

酒煮して草臥見ゆる三王軒　靑々（妻木）

參考 倭名類聚抄に「一食療經云酒（和名佐介）五穀之華味之至也。故能益人亦能損人」とある。八醞折酒、甜酒等を醸造したる事、文獻に見えるから、古く神代から行はれて居たと知る事が出來る。而も其の方法は應神仁德の南朝大陸文化の移入を契機として進步發達したものである事も容易く推定し得る。特に新酒と名付けた所以は、醸造するのに時を以つて分つたので、秋季のものを新酒と言ひ、寒前に於てするのを寒前酒と言ふ、兩者の中間に於いて醸するものには、これを間酒と云ひ、寒中に造るのを寒酒と言ふのである。而も其の酒の性質も次第に純精を加へ、今日の如きものになつたのは近く德川幕府の時と云はれてゐる。酒にさくる也、風寒邪氣をさくる也と言ふは日本釋名の說であるが、これは信ぜられない。酒は榮の義かと說くのは俗說である。さて新酒口入れを行ひて圍ひ桶と言ふ淸酒貯藏專用の桶に移すのである。

酒煮の祝

古書校註
【年浪草】本邦に於ては、夏日酒の氣味を失はざる爲に、煮酒の法を用ふ。京師之を酒煮と稱し、此日酒肆親疎をえらばず、價を得ず、恣に酒をのましむ。是を酒煮の祝と云ふ。故に下戸の者放に、（一）分にすごして酒狂に及ぶとなり。

註（一）ほしいまゝに、勝手に。

季題解説
酒を煮る日、古く酒店釀造家等にては親疎によらず、人々に思ひのまゝ酒を飲ましめて祝ひしなり。【參照】新酒の火入（シンシユノヒイレ）

初呑

新口（あらくち）

季題解説
造酒家の語にして、新造酒の夏期火入れの濟みたる後初めて呑口を開くを云ふ。即ち造り酒家に於ては初呑と稱し、平生取引ある得意先を招きて、呑口を開きて飲ましめ、利酒をなさしめ、得意先をして氣に入りたる桶の酒を豫約せしむる風習あり、利酒に似たるものなり。釀造したる酒を初めて桶より酌み出し飲むを新口と云ふ。【參照】新酒火入（シンシユヒイレ）秋―新酒（シンシユ）

例句
初　呑　初呑や樽が吸ひたる酒の減り　甘雨（同人）

梅酒

梅燒酎（うめせうちう）

季題解説
燒酎一升に對して實梅一升、氷砂糖一斤の割にて壺又はガラス瓶に貯ふ。琥珀色を呈すればよし。古きもの尙尊ばる。夏日、そのまゝに又は水を加へて飲料として佳なり。暑氣中り、下痢などに用ひて效あり。

例句
梅　酒　床下やかくせる錢と梅酒と　崇朝（同人）
梅燒酎　老刀自がたしめる飲ンや梅燒酎　月斗（同）

冷酒

冷し酒（ひやしざけ）　冷酒（れいしゆ）

季題解説
夏日には暑氣甚しきを以て酒を冷し用ふを云ふ。冷酒はあとより利くものにして、冷酒と親の異見はあとの藥一なる諺あり。

實作注意
日本酒は燗をして用うる爲燗せぬを冷酒といふ。これは無期なり。又、冷し酒は必ず、あつく燗を爲したるものを冷し用うるなり。

例句
冷　酒　ひや酒やはしりの下の石疊　其角（五元集拾遺）

冷し酒

冷酒や一順果し廻りはな　曉臺（曉臺句集）
鵜鳥の齒にこたへたり冷しさけ　同（同　）
冷し酒旅人我をうらやまん　白雄（白雄句集）
うかうかと過ごせし醉や冷し酒　月斗（同　人）

燒酎

燒酎　燒酒　泡盛　粟盛　甘藷燒酎　麥燒酎　黍燒酎　粕取燒酎　醪取燒酎　酒取燒酎　燒酎賣

季題解説　我國火酒の一種にして、米・麥・稗・粟・玉蜀黍・甘藷等の澱粉質物を蒸煮し、水を混じて麹菌又は麥芽を作用せしめ、酵母の作用により酒精醱酵を起さしめしアルコール性飲料なり。又清酒粕を其儘蒸餾しても得らる、或は腐敗酒・腐敗醪を蒸餾しても得らる。主として味醂其他の混成酒製造の原料に供すれど、一種の強烈なる味と芳香は一部の嗜好に適し、暑氣拂ひなどゝ稱へて其儘飲料に供す。

實作注意　和訓の栞に「せうちう」を燒酒に作り、武備志に「からざけ」と譯せり。燒酎はその原料の性狀形態により、甘藷燒酎麥・燒酎・黍燒酎或は粕取燒酎・醪取燒酎・酒取燒酎等の名あり。琉球特産の泡盛は燒酎の一種にして、米麹又は粟麹に水を加へ甕中に醱酵せしめ、次で之を蒸餾せしものにして特異の芳香を有す。

例句

燒酎　燒酎を飲む肌蚊火に光る也　月斗（同　人）
罵つて燒酎ふくむ火の如し　伏兎（同　）
燒酎賣　夏の夜は燒酎賣のひと聲に　成美（成美家集）

參考書　燒酎暴飲の果煙草をのみ黒こげになつた男二人ありとて「此の話はある官醫のまのあたりみもし聞もせしことなにとかや」と云つて「燒酎は燃性のものなれば多くのみたらん後は烟草を吸ふ事は必しもつゝしむべき事にこそ―」と三養雜記にいましめてある。

麻地酒

淺茅酒　朝生酒　土かぶり

古書校註

【毛吹草】　豐後麻地酒又朝生酒とも書く。或は土かぶりともいふ。
【三才圖會】　南都の淺茅酒、其名得て以つて上饌（一）に備ふ。
【滑稽雜談】　和酒方書に云ふ、麻地酒は、豐後或に肥後國より出る者也。造法に云、糯米粳米等分に合製して、冬月寒水を用て、是を釀し、土中に埋て、草茅の類を以て是を覆ひ埋むと也。此酒冬春を得て、夏月土用に至りて、則土中より是を出すに既に熟[illegible]せり。以て夏日の飲となし、賞翫するならし。

註　（一）上[illegible]の[illegible]（二）なれること[illegible]

【季題解説】豐後或は肥後の國より產する酒の一種にして、其製法は糯米粳米等分に合製し、冬月寒水を以て是を釀し、土中に埋め草茅の類を以てこれを覆ひ埋むと云ふ。冬春を經て夏日土用に至つて土中より之を出し、夏日の飲料として賞翫す、故に之をまた土カブリとも云ふ。

【例句】

麻地酒　爺婆の晝開游びや麻地酒　闌更（半化坊發句集）

【參考】豐後國にて作る。朝生酒とも書す。又の名土かぶり。寛政武鑑に「細川越中守齊茲肥後熊本時獻二上麻地生酒一」とある。

麥酒（ビール）　冷し麥酒（ひやビール）　ビヤホール　生ビール（なまビール）　黒ビール（くろビール）　スタウト

【季題解説】主として麥芽、ホップに酵母を加へて釀造せるものにして、特有なる爽快の香味を有し夏季の飲料に適す。ビールの起源は極めて古く、青史によれば埃及に其濫觴を發せしもの丶如し。今日に於ける隆盛の基礎を造りしは日耳曼人なりと云ふ、白・黒あり。ビヤホールに冷えたる生ビールを鯨飲するも夏の夜の趣なり。スタウトも淡々として夏日の飲料なり。

【例句】

ビール　ビール遂に泣くまで醉うて來りけり　凡水（同人）

ビヤホール　ビヤホール川風が蛾を落すなり　三稻（同）

スタウト　スタウトと苺ミルクを註文す　二月堂（同）

甘酒（あまざけ）　醴（あまざけ）　こざけ　一夜酒（ひとよざけ）　甘酒賣（あまざけうり）

【古書校註】

【滑稽雜談】延喜式（造酒司式）曰、醴酒は（略）日に造ること一度。六月一日に起りて七月三十日に盡く。日に供す六升。（略）公事根源に云、一夜酒とはけふ造れば、明日は供するなり。一夜をへだつる竹葉の酒なれば、一夜酒と申也。又はこざけとも或文に侍り。

【三才圖會】醴酒（略）米一斗飯に蒸し、麹一斗、水一斗二升和合（一）して成る。醉さずして、之を飲む。

註（一）まぜとゝのふ。

【季題解説】酒精分を含まざる甘き飲料なり。糯の粥に麹を加へ、六七時間とろ火にて温む。然る時は麹中の化糖母の作用にて糖分に變化す。これにて甘酒となるなり。このとき更に温度を高めて殺菌す。これを甘酒の酛と云ひ、これに湯を交へしもの、普通の甘酒なり。これ未だ酒精醱酵を起さざるため、ただ甘し。市中に賣歩くもの甘酒賣なり。熱さ舌を燒く甘酒の盌を、吹き乍ら汗して啜るも夏日の涼味なり。

【例句】

甘酒　あま酒や盆に居並ぶ父と母　召波（春泥發句集）

醴

あま酒の地獄もちかし箱根山　蕪村（句集）
甘酒や宵宮更けたる臺所　月斗（同人）
能き人や醴三たび替にけり　蕪村（落日庵句集）
愚痴無智の醴造る松が岡　同（夏より）
醴や舊街道を箱根越　蘇北（同人）

一夜酒

川越が富やふりものひと夜酒　宗因（梅翁宗因発句集）
百姓のしぼる油や一夜酒　其角（五元集拾遺）
御佛に晝備へけりひと夜酒　蕪村（句集）
村中にうからやからやひと夜酒　巣兆（曾波可理）
甘露降る世もそつちのけの一夜酒　一茶（句帖）

参考　甘酒はむかしよりあり、もとは冬夜賣り歩きたるもの。文化の頃より四季共に賣り歩くに至つたのである。曲物に入れて賣り歩くは天明の頃からである。江戸日本橋横山町三丁目ゑびす屋を祖としてゐる。

新茶（しんちや）　走り茶（はしりちや）　新茶賣（しんちやうり）　茶詰（ちやづめ）　壺倉（つぼくら）

古書校註　【日次紀事】四月茶を製す。家々茶を蒸す。且茶を擇ぶ（略）葉を擇ぶ。村婦の老少各、茶人の家に行く。早朝より暮に及ぶ。其料（一）、米を以つて之を償ふ。凡製茶前後之次第あり。故に摘茶の時、蒸茶の時、焙爐の時、擇茶の時と謂ふ。凡製し畢る後、東武の御壺に詰む。始十一家の茶人新茶數種を柳營（二）に獻ず。是を御試茶と謂ふ。（略）御壺詰め終りて諸家の壺を詰む。凡其内善なる者を袋茶と謂ふ。（略）（三）五月中下旬の間、宇治製茶了りて諸方の人、壺を携へ、新茶を領納し、然る後に、壺を山谷清冷の地に寄せて、盛夏土用の暑濕をさくる也。洛外愛宕山を宜しとなす。

【年浪草】古茶とは新茶に對するの名、故に新古共に夏季となる也。

【雍州府志】愛宕山は清涼の地也。故に各院別に庫倉を造る。是を壺倉と稱す。初夏良賤茶壺を宇治に遣り、茶を納め、了て壺を此地に藏し、盛夏土用過て、之を取る。諸國高山之に准する所亦之あり。

註（一）給金。（二）幕府。（三）以下五月の部より引用す。

季題解説　今年摘みて製造したる茶を新茶と云ふ。初夏新茶出づれば、前年のものは古茶と云ふなり。山城宇治の茶を最とす、靜岡產又製量多し。玉露、煎茶、ひき茶、番茶の數類多し。新茶の香味、太だ愛すべし。〔参照〕夏切茶〔二〕　古茶〔三〕

例句

新茶

靈前に新茶そゆるやひとつまみ　浪化（浪化上人発句集）
宇治に似て山なつかしき新茶かな　支考（蓮二吟集）
嵯峨の柴折焚宇治の新茶哉　蓼太（蓼太句集）

新茶〳〵む朱泥の急須出のましき　　月斗（同人）
札貼りし新茶の壺の並びけり　　雪明（同）
祝儀値に手打ち出來たる新茶かな　　雪後（同）
走り茶　結界に水する走り玉露かな　　同（同）

参考　倭名類聚抄に「茶茗、爾雅集注云茶（宅加反字亦作荼）小樹似二支子一、其葉可二煮爲一レ飲、今呼二早採一爲レ茶、晩採爲レ茗（音名）茗一名荈（音舛）風土記云荈者茗老葉名也。」と記してある。又木芽說に一茶といふものいとも上津代にはありとも聞えず、いづれの頃よりか吾御國には植ゑそめけむ。さだかに記し傳ふるものなし。類聚國史に嵯峨のみかどの弘仁といふ年のむとせの夏近江國にみゆきましまして滋賀韓崎見そなはし給ふ、みちのたよりにちかきわたりの寺々にわたらせおはしましける時、梵釋寺の永忠大僧都手づから茶を煮て奉られしに、みかどこれをいみじくよろこび給ひてかづけものなど給はせつ」と見えてゐる。

夏切茶（なつきりのちや）　夏切壺（なつきりつぼ）　夏切（なつきり）

古書校註　【日次紀事】六月初、宇治の茶人、新茶を新壺に盛りて、常に茶を賣る所の良賤の家に贈る。是を夏切壺と謂ふ。凡壺の蓋糊を紙に貼りて緊く之を張り、風濕を壺内に入れしめず。茶を用ふる事あれば、小刀を以つて截りて茶を出す。是を壺の口を切ると謂ふ。（略）冬口を開く所の壺、處々の山林清涼の地に置く。故に夏中用ふる所の茶先づこれを贈る。故に盛夏の開これを夏切壺と稱す。

季題解説　毎年六月、宇治の茶家、新茶を壺に盛りて諸方へ贈る、茶の濕を防ぐために壺の口にめばりの紙を貼る故に、之を用ゆる時は貼紙を切りて茶を出す。この茶を夏切茶といひ、壺を夏切壺といふ。［参照］新茶（シンチヤ）

例句
夏切壺　三ふくの夏切あやし大茶壺　　當信（鷹筑波）

古茶（こちや）　陳茶（ひねちや）

季題解説　今夏の製にあらざる茶を新茶に對して云ふ。［参照］新茶（シンチヤ）

例句
古茶　壺の古茶拂うて臼にかけにけり　　子角（同人）

風爐茶（ふろちや）　風爐手前（ふろてまへ）　朝茶の湯（あさちやのゆ）

季題解説　風爐は茶の湯の席にて、湯を沸かす爐なり。形圓く緣の一方を缺きて風を入るゝやうにしたるものなり。此の風爐により茶を立つることを風爐手前と云ふ。

【實作注意】 三月迄爐の茶を服し、四月一日以後は風爐の茶を喫す、總じて風爐の茶は朝茶湯多く、適には晝もあることとなり、と茶湯秘傳抄に見ゆ。

【参照】 新茶（シンチャ） 夏手前（ナツテマヘ） 春―爐塞（ロフサギ） 木地爐縁（キヂロブチ） 冬―爐開（ロビラキ）

【例句】
風爐手前 風爐手前主人の脚のしびれ哉　月斗（同人）
風爐手前石州流の癖ぬけず　女房（同）
風爐手前汗ばみし手に袱紗持つ　女々（同）

【参考】 延喜式、加茂初齋院井野宮裝束に「白銅風爐一具料、白銅大三斤、炭四斛、油一合五勺、信濃布七尺五寸、長功十人、中功十二人、短功十四人」とある。夏向きの茶席立方を言ふのである。

夏手前（なつてまへ） 水手前（みづてまへ） 盆手前（ぼんてまへ）

【季題解説】 春の木地爐縁、爐塞より、夏の風呂茶、朝茶の湯になるなり。夏手前、又盆手前は、火を室中に置かず、塗板などに茶器を揃へて、簡單にお手前するなり。水手前は水にて入るゝなり。【参照】風爐茶（フロチャ）

【例句】
盆手前 盆手前水さしに露おちにけり　二月堂（同人）

麥茶（むぎちや） 麥湯（むぎゆ） 麥茶冷し（むぎちやひやし） 麥湯冷し（むぎゆひやし）

【季題解説】 炒りたる大麥を煎じるなり。香味輕くして野趣を存す。冷却して用ゆる事多し。麥湯冷しは普通金屬性圓錐形の容器にして井戸水等に吊りさげ冷やす也。

【例句】
麥茶冷し 麥茶冷し井戸より揚ぐる音すなり　圭岳（同人）

蓮茶（はすちや）

【季題解説】 煎茶の濃く煮えたちたるを蓮の花の中に注ぎ入れ、花蕊を寄せ合せて紙撚にて結びおき別に薄く煎じたる茶に少し宛入れて用ゆなり。香を愛すなり。蓮飲とて蓮の葉に酒を注ぎて飲むもあり。【参照】植物―蓮（ハス）

【例句】
蓮茶 生玉の旗亭によりて蓮茶哉　月斗（同人）

冷し紅茶（ひやしこうちや） コールドテイ

【季題解説】 紅茶湯を冷却したる冷飲料にして、コールドテイとも云ふ。これに砂糖を入れ、又レモンの輪切、氷塊等を入れて夏の飲料とす

【例句】
冷し紅茶 冷し紅茶支那服を著し女の子　凡水（同人）

冷し珈琲（ひやしコーヒー）　コールコーヒー

季題解説　コールコーヒーとも云ふ。ブラジルはコーヒー局直營のもとにティルームを我國にも設け、發展を期せり。涼しき火影にコールコーヒーを喫むもよし。プラットホームにてアイスクリームと共に冷しコーヒーを賣る、女子子供らの好む處なり。

例句
冷し珈琲　立飲みをしてゆく冷しコーヒ哉　涼舟（同人）

振舞水（ふるまひみづ）　摂待水（せったいみづ）　水振舞（みづふるまひ）

古書校註　【栞草】夏日市井の間に瓶をわたして、これに柄杓及び茶碗等を添へ、往還炎暑に苦しむ人をしてこれを飲しむ、是を振舞水といふ。

季題解説　暑中に通行人に施し飲ましむる水にして、炎暑の頃、市井の間に桶或は瓶に水を滿たし、之に茶碗・柄杓等を添へ往來の人の飲むに任すものなり。葛根湯・枇杷葉湯などの薬湯を門前に出したる奥床しきもあり。

例句
振舞水　まはらは廻れ振舞水の下向道　其角（五元集）
町あつく振舞水の埃かな　召波（春泥發句集）

薄荷水（はくかすゐ）

季題解説　砂糖水に薄荷油丁幾二三滴を加へたるものを云ふ。薄荷油は、薄荷の莖葉を水蒸氣と共に蒸溜して得らるゝ液にして、淡黄色を帶ぶも精製したるものは白色なり。强き香氣と辛味を有し、之を口にする時は味灼くが如く、固有の薄荷香を放ち、清涼を感ずるを以て夏の飲料に用ゆ。本邦産の薄荷は和名「めぐさ」と稱し、他國品に優り多量の薄荷腦を含有し、日本薄荷油の名を世界に傳播せり。

例句
薄荷水　因幡薬師の夜店に買ひぬ薄荷水　子角（同人）

參考　薄荷は唇形科の植物、特異の香氣を有する薬用植物であつて世界各地に栽培す。我國では山形縣秋田縣北海道にて栽培す。大和本草に、「生葉を刻み膾に加へ、又煎茶喫酒に和して飲む。本艸にも茶に代へて飲むと言へり。痩弱の人久しく食む可らず。猫食へば醉ふ。猫の酒なりと言ふ。猫の咬みたるに汁をぬるべし。相制する也。蜂蛇にさされたるに葉をもみて付べし」とある。

葛水（くずみづ）

古書校註

【年浪草】和漢三才圖會に曰、吉野暴葛最上となす。西國も亦之あり。（略）白き粉（一）を以て上となす。其次は灰白色の者。野人食に充つ。（　）大和本草に曰、葛粉、夏、冷水に入れ、かきたてゝ飲む。能く渇を止め、胃を傷らず。功尤多し。（略）（二）葛と倶に冷水に入れ、かきたてゝ飲む。夏日必用の飲とするなり。

註（一）白き粉。（二）砂糖についての説明也。

季題解説

葛粉を冷水に入れ溶てゝ飲む、之を葛水と云ふ。〔參照〕葛餅（くずもち）

例句

葛水

葛水に玖珠といふ名の面白し　支考（蓮二吟集）
葛水は蓮もきらはぬ濁かな　也有（蘿葉集）
葛水や鏡に息のかゝる時　蕪村（葛の扇）
葛水に見る影もなき扇かな　同（同）
宗鑑に葛水給ふ大臣かな　同（句集）
葛を得て清水に遠きうらみ哉　同（同）
葛水や入江の御所にまふずれば　同（新五子稿）
葛水にうつりてうれし老のかほ　同（同）
葛水や王敦を憎む女あり　几董（井華集）
くず水やうかべる塵を爪はじき　同（同）

參考

葛は荳科の多年生蔓草、諸國山野自生最も多し、琉球臺灣にも産す。又若狹の小濱紀伊の田邊等より葛粉を産す。古來大和の吉野の産を上品として吉野葛と言ひて名産とす。一說に葛の名は國栖より來れるものと言ふ。

蜜柑水（みかんすゐ）　氷蜜柑（こほりみかん）

季題解説

水に蜜柑の液汁を入れ、砂糖蜜を加へたる飲料なり、又蜜柑香料を用ゐたるもあり。

例句

蜜柑水

みかん水活動小屋の軒端哉　涼舟（同人）

肉桂水（にくけいすゐ）　につけ水

季題解説

につきすゐとつめて云ふ、桂皮水を水に薄め蜜にて味をつく、紅黄は緑の色素を加へ、硝子製・人形型等の薄きガラス壜に入れたるものをもみ殻の箱の中に並べたり、多く一文菓子屋の店頭に見受く。子供等夏祭の夜など、買ひ來りて喜ぶなり

肉桂水　蛔蟲に蟲を出す子や肉桂水　月斗（同人）
よその子が持つて買はすや肉桂水　月村（同）

砂糖水（さたうみづ）

季題解説 コップに砂糖を入れ冷水をそゝぎて飲む清涼飲料なり。

例句 砂糖水
勾當の供にすゝむる砂糖水　濱子（ホト・ギス）
山の井を汲み来りけり砂糖水　月斗（同人）
蟻一つ浮び上りぬ砂糖水　夜臼（同）

參考 我が國にて甘蔗を栽培するは慶長年間に始まる。甘蔗糖の渡來せしは奈良朝の末に溯ると雖、いまだ世に普く無かつた。砂糖なき以前は、甘味を附するに甘葛を用ゐた。

檸檬水（れもんすゐ）　冰檸檬（こほりれもん）

季題解説 檸檬の果皮より取りたる揮發油を檸檬油と稱す。これを蜜又は砂糖水に點じてレモン水となす。

例句 レモン水
レモン水レモンを月と浮べけり　青峯（同人）

葡萄水（ぶだうすゐ）　葡萄液（ぶだうえき）　冰葡萄（こほりぶだう）

季題解説 葡萄をしぼりてとりたる液に砂糖、冰を加へたるもの、或は葡萄酒に水、冰等を入れたるものなり。

例句 葡萄液
美しき籠の飾や葡萄液　月斗（同人）

平野水（ひらのすゐ）

季題解説 兵庫縣下平野に湧出する炭酸を含める鑛泉により製したるに依りこの名あり。

例句 平野水
平野水の一人惚れられ囃されし　冬籌（同人）

冰水（こほりみづ）　削冰（けづりこほり）　夏冰（なつごほり）　こほり　冰店（こほりみせ）

季題解説 冰を鉋にて削り、夏日飲用するものにして、或は砂糖水・苺水・レモン水・葡萄水・茹小豆等を加へて用ゆ。冰水を賣る店を、冰店と云ふ。玻璃の管簾、白き麻暖簾などかけ涼しげに店を飾れるもの多し。

實作注意 源氏物語・枕草紙等に見ゆる冰水は今の冰水にあらず、冰室の

氷の解けたるをいふ。一茶に「冬　氷コホリ」

例句
冰水　此論は一荷になへ冰水　其角（五元集拾遺）
夏冰　朔日の御内わたりや夏冰　白雄（白雄句集）
　　　拝領を又拝領の冰哉　一茶（九番日記）
　　　箸つけていたゞかせけり夏冰　梅室（梅室家集）
冰店　禪寺の前に一軒冰店　虚子（ホト、ギス）

炭酸水（たんさんすゐ）　沸騰散（ふつとうさん）

季題解説　液化炭酸瓦斯を水に溶解したる無色透明なる清涼飲料なり。沸騰散は粉末或は錠形のものあり。水に投じ用ゆ。又用に臨みて調製する場合あり。

例句
炭酸水　看護婦等炭酸水を作りけり　凡水（同人）

参考者　清涼性飲料で緩下剤の效を兼ねてゐる。

ミルクセーキ

季題解説　雞卵・ミルク・冰・砂糖・香料等を攪拌冷却したるものなり。

例句
ミルクセーキ　玉簾ミルクセーキを廻す音　千燈（同人）

シトロン

季題解説　普通佛手柑のエッセンスを炭酸水に入れたるものなれど、香料のみを入れたるものもあり。

例句
シトロン　銀盆にシトロンの泡流れけり　此玄（同人）

ラムネ　沫ラムネ

季題解説　ラムネは英語のレモナーデの訛りなり。水に炭酸瓦斯酒石酸又は枸櫞酸等の如き酸を溶解し、糖を加へたる夏季の清涼飲料なり。元來レモナーデは糖分を含有する酸性飲料の通稱なり。

例句
ラムネ　巡査つと来てラムネ瓶さかしまに　虚子（ホト、ギス）
　　　勝つて泣く選手にラムネ抜きにけり　四翠（同人）

サイダー

季題解説　リンゴのエッセンスを炭酸水に加へたるものなり。

例句　サイダー

サイダーや含めば消ゆる氷屑　宵曲（ホトヽギス）

アイスクリーム　氷菓子（こほりぐわし）

季題解說　卵の黄味に砂糖を混ぜ、泡立器にて攪きまぜつゝ、別に煮立て置ける牛乳を少しづゝ混ぜたる後、之を冷し、レモン等の香料を一二滴落して、アイスクリーム器に入れ、氷と鹽とをその筒と桶との間に入れ、ハンドルを以て十分に廻轉しつくる。

例句　アイスクリーム

アイスクリームとけぬ文學論じゐる　二月堂（同人）

ソーダ水（すゐ）　曹達水（さうだすゐ）　プレンソーダ　レモンソーダ　オレンヂソーダ　苺（いちご）ソーダ　アイスクリームソーダ

季題解說　プレンソーダは無色透明の炭酸水なり、レモンソーダ・イチゴソーダ・オレンヂソーダ等はその果汁を入れ、紅・黄・綠の色素に染めて美くし。

例句　ソーダ水

ソーダ水のくれないうすし夕心　宵曲（ホトヽギス）
レコードは關屋敏子やソーダ水　こうみ（同人）
ねたまるゝ二人の中やソーダ水　涼舟（同）

水の粉（みづのこ）

季題解說　こがし（焦）を冷水と砂糖とに和して喫む。之を成る可く焦さずして磨いて粉となせるものを更に水簸して製したるものなり。〔參照〕麨（はったい）

例句　水の粉

水の粉もきのふに盡るやどり哉　蕪村（夏より）
水の粉やあるじかしこき後家の君　同（句集）

飴湯（あめゆ）　飴湯賣（あめゆうり）

季題解說　飴を湯にて融かしたるを飴湯と稱し、毎年夏に至れば之を鬻ぐ者市中に出づ、甘酒賣と同じく箱擔ひにて一方に釜を備ふ。飴湯は腹藥なりと唱へ專ら夏季の飲料となす。

實際知識　飴は古書に阿女と訓じ、神武記には多加禰（たがね）と訓ず。現今は麥芽を以て蒸煮穀類を糖化して造る

例句　飴湯

更けて涼しいつもの飴湯來りけり　月斗（同人）

苺ミルク（いちごミルク）

【季題解説】 苺に牛乳・砂糖をかけたる初夏の食物にして眞紅の苺、純白の砂糖とミルクの取合せは食後のテーブルを引き立たせるなり。苺は鹽水につけて水洗し、ヘタを取りたる後、硝子器又は小型の果物皿に盛る。苺は元來酸味多き爲之にミルクをかける時は、酸化されてヨーグルドとなり榮養分を作り、苺の食べ方としては最も適するものなり。【參照】植物　苺（イチゴ）

【例句】
苺ミルク　テニスやめて苺ミルクに集りぬ　二月堂（同人）

冷瓜（ひやしうり）

【古書校註】
【日次記事】 古、二條殿（一）に池水有り。甚淸冷。是世の所謂る二條殿の御池也。夏日甜瓜を浸し、禁裏に獻ぜらる。今（二）に至りて其例を逐ひ、土用中奈良瓜を獻ぜらる。今二條室町の御池町は古の二條殿の池水の有りし所にして、其池廣く今の兩易町久米氏某の後園の池水に纔に殘る。
【日本歲時記】 夏日内に伏陰（三）あり。冷水をのみ、瓜桃、生冷の物宜く少く食ふべし。かくのごとくすれば、秋冬瘧痢をわづらふ事をまぬかる。（四）

註（一）京都にあり。（二）延寶年間。（三）身内にひそめる陰の氣。（四）孫眞人の言

【季題解説】 眞桑瓜を冷水に浸し冷したるものを云ふ。

【作法注意】 俳句にて單に「瓜」と云へば「まくはうり」を云ふなり。他はしろうり・あをうり・きうりなど各名を附するなり。尙「豆」と云へば豌豆に限るが如し。【參照】植物—瓜

【例句】
冷瓜　湧く水につけたる眞瓜まはりけり　大石（同人）

冷し西瓜（ひやしすゐくわ）　氷西瓜（こほりすゐくわ）

【季題解説】 西瓜を冷水、又は氷にて冷やしたるもの。八百屋の店に桶に浮きたるとフルーツパーラにて試みると共に涼味あり。西瓜の季題從來は秋とせり。【參照】植物—西瓜[illegible]

【例句】
冷し西瓜　西瓜より冷たきものゝ上りけり　虛子（ホトヽギス）

煮梅（にうめ）　靑梅煮る（あをうめにる）

【季題解説】 梅の實を砂糖にて、煮つめたるものなり。【參照】植物—靑梅（アヲウメ）

例句

煮梅　青かつし色ともなき煮梅かな　几董（俳句大全）

青梅煮る　露入れて青梅煮るや寺料理　一茶（同　）

梅干

梅漬ろ　梅干す　梅筵　梅剝く

古書校註

【三才圖會】　白梅一名鹽梅又霜梅と名く。（略）俗に云ふ梅脯なり。豐後の產肥大にして、肉厚く、味美し。

【滑稽雜談】　按るに、俗に梅干と云ふを、白梅又は梅諸（前に通ず）などいへり。勿論雜也。但梅を干、梅を漬、梅をむきなど當時製する心ある句は、夏なるべし。

【年浪草】　梅剝とは皮肉共に剝ぎかけ晒し乾して梅酸（一）となすなり。

註（一）うめず、鹽漬の梅の實の汁。

季題解說

梅は梅雨の候に熟す、未だ十分に熟せざる實を取り、水に浸すこと一二時間して後、梅一斗に鹽三升の割にて漬け、輕き壓を加へ、中途にて紫蘇を加へ三週間を經たる時、之を筵の上に干し擴げ日光に曝す。俗に之を三日三晚の土用干しと云ひ夜露に當つるをよしとす。かくして干しあげたるものを梅干と云ふ。〔參照〕植物―青梅（アオメ）

例句

梅漬る　梅漬にむかしをしのぶ眞壺哉　召波（春泥發句集）

梅干　火の如き瓦踏まへて梅干しぬ　靜緒（同　人）

梅を干すあつき匂ひに戾りけり　一果（同　）

粽

粽　茅卷　角黍　粽結ふ　粽とく　錐粽　菱粽　筒粽　秤錘粽

秤槌粽　百索粽　九子粽　飾粽　笹粽　繭粽　菰粽　菅粽　蘆粽

飴粽　道喜粽　徽粽　粽笹　卷笹　卷笹賣

古書校註

【三才圖會】　粳の粉をこねて、狀、芋の子の如くし、蘆の葉を以て、之を包み、復菰葉を以て之を裹み、菅或は燈心草を以て縛り卷きて十箇を一連となして、之を淪る。又肥前長崎の粽は棕を以て之を包む。

【年浪草】　風土記に曰、端午に鶩（一）を烹て、筒糉を進つる。一名、角黍。菰の葉を以つて黏米・粟・棗を裹み、灰を以て煮て熟せしむ。陰陽包裹して未散ぜざるの象に取る。〇月令廣義に曰、九子粽即角黍同類也。唐の時、才節端午に粽子の名品甚多し。形制も一ならず。角粽・錐粽・茭粽・筒粽・秤錘（或は秤槌に作る）或は百索粽・九子粽等之あり。（略）續齊諧記に曰、屈原五月五日汨羅江に投ず。楚人之を哀みて此日に至る每に、竹の筒を以つて米を貯へ、水に投じて之を祭る。漢の建武中に長沙の歐回白日に一人を

見る自ら三閭の大夫(二)と稱し、囘に謂て曰、祭らるゝ事甚善し、但蛟龍の爲に竊らるゝ事を苦しむ。今若し惠あらば、楝葉を以つて其上を塞ぎ、五綵の絲を以つて之を縛すべし。此二物蛟龍の畏るゝ所也と。今人粽子を作り綵絲及楝葉を帶ぶ。蓋其遺風也。(略)壒囊抄に云、粽の形は蛇に似せて卷く。これを服して毒蟲を殺す事を表すと見えたり。(略)〔飴粽〕本朝食鑑に曰、一種飴粽と云ふ者あり。糯米を用ひ蒸し熟し擣て餅を作り、稻草に包み、外は稻草を以つて縛ひ定めて甑の中に蒸し熟し、取出して稻草を剝き去れば則黃白色、飴の色の如し。故に名く、味美也。微香あり。すべて粽の類市人道喜と云ふ者巧に之を造ると謂ふ。故に道喜粽と稱す。今京師の市上專此粽を用て嘲笑の物となす。(略)「節粽」(略)拾遺十八の詞にかざりちまきと見えたり　今も大內には五色の絲にて飾わたる粽をさゝぐる也。

註　(一)あひろ　宗鴨　(二)屈原、戰國の時、楚に仕へ、三閭大夫となる故にかく云ふ

季題解說

往時は茅の葉を以て團子を卷きたる故茅卷と云ふ、端午の節供に用ゆ。又蘆・蒲・筵などをもて卷くあり、普通の製法は糯米を蒸して擣き又は米の粉を水にて練り蒸して擣き適當の大きさと形に作るなり。地方によりてその製法形等、種々あり、江戸時代には諸侯より將軍に獻じたる事ありと。粽筵は粽を造るに用ふる筵なり。此を賣り步くを卷筵賣と云ふ。

例句

註

葦原や豐の粽の國津風　鬼貫　(鬼貫句選)
戀しらぬ女の粽不形なり　同　(同)
どれみてもゆびのならひの粽かな　來山　(續いま宮艸)
あすは粽難波の枯葉夢なれや　同　(六百番發句合)
蘆田鶴の香をかぎ出す粽哉　言水　(俳諧五子稿)
粽かはん驛にとめて鈴のぼり　其角　(五元集拾遺)
粽もつ扱はうつゝの艸むすび　嵐雪　(玄峰集)
文もなく口上もなし粽五把　同　(同)
最もつとて笹といはれぬ粽哉　也有　(蘿葉集)
蟬よりは先へもぬける粽哉　同　(同)
櫛の齒もいれぬ六日の粽かな　也有　(蘿葉集)
粽はけた淀ののあらしわたる哉　曉臺　(曉臺句集)
分越し筵を粽に見る日かな　闌更　(半化坊發句集)
十ばかり筵にならべる粽かな　一茶　(七番日記)
御袋が手本に投るちまき哉　同　(同記)
けしきあるものや粽の朝使　若虬　(若虬翁發句集)
淺茅生を筵に並べてゐる粽　梅室　(梅室家集)
これ提けて面見に立つ粽二把　乙二　([illegible])
粽結ふかた手にはさむ額髮　芭蕉　(猿蓑)
粽ゆふはさみや蘆の葉分け蟹　其角　(五元集拾遺)

粽ゆふ中や晝寐の草まくら　也有（蘿葉）
江に添ふて家々に結ぶ粽かな　巢兆（曾波可理）
粽ゆふ小冠者に戀のこゝろあり　成美（成美家集）
親ごゝろかたちよかれとゆふ粽　梅室（梅室家集）
粽ゆふ手ばかり見ゆる簾哉　同（同）
むつかしや粽とく手も桑門　言水（俳諧五子稿）

粽とく

粽解いて蘆吹く風の音聞かん　蕪村（句集）
なぐさめて粽解くなり母の前　太祇（太祇句選）
うれしさにいくらもほどくちまき哉　士朗（枇杷園句集）
草の戸や粽をほどく夜の露　白雄（白雄句集）
粽ほどくそれにつけても草の宿　成美（成美家集）
こそ／＼と夜舟にほどくちまき哉　巢兆（曾波可理）
ふるさとを思はぬふりで粽とく　乙二（をのゝえ草稿）
粽とかで雄島の僧はいなれける　同（同）
かつてこの粽ときしがちまきとく　同（同）

笹粽

子に世話を狂人ともいへ笹粽　言水（俳諧五子稿）
山笹の粽やせめて湯なぐさみ　其角（五元集拾遺）
幟とも竹のよしみや笹粽　也有（蘿葉集）
此殿やむかしながらのさゝ粽　士朗（枇杷園句集）
投げ込んで見たき家なりさゝ粽　乙二（をのゝえ草稿）

菰粽

賴政がはね箸したり菰粽　來山（續今宮艸）
妾が家は江の西にあり菰粽　太祇（太祇句選）

黴粽

草の戸やいつまで草のかび粽　其角（五元集）

粽笹

草籠に入れて戻りぬ粽笹　夜臼（同人）

【参考】類聚名義抄・新撰字鏡・和名類聚抄等にも見えて居る。千有餘年以前から用ゐて居たもので國史・式等には見えぬ所から推すと當時供御にはそなへなかつたものと考へる。ちまきは茅卷巴と言ふ說は、契沖阿闍梨・賀茂眞淵・山岡明阿の說である。又續齊諧記には楝の葉をもてまとひ五綵の絲をもて縛すと見え、この意味の粽は、伊勢物語に「人のもとより飾り粽をおこせたりける返り事に、あやめかり君は沼にぞ惑ひけるわれは野にいでてかるぞわびしき」とある。

柏餅（かしはもち）　おかしは

【古書校註】

【栞草】〔才事拾遺〕五月五日、米の粉をこねてひらめ（一）、中に餡を入れて合すること編笠の形の如し。槲の葉を以てつゝみ、蒸し、これを槲餅と云ふ。畿內にはさのみ用ひぬ事なり。

註（一）平にして。

季題解説 五月の節句に用ゐるものにして薯蕷粉を湯にて固く練り、布巾に包み蒸籠にて蒸したる後、適當の大さにちぎり、之に餡を入れ、柏の葉にて包みて更らに蒸して製す、柏餅の起源とも見べきは荊楚歳時記に「蛟龍楝を畏る、故に端午に楝葉を以て櫻を包み江中に投じて屈原を祭る」とあり、本邦にて柏葉を用ゐるは、楝より轉じたるものなるべし。現今にてはうるちの粉を搗きたる「シンコ餅」又は糯米製・道明寺糒製などあり。柏餅は江戸時代よりあり、京阪地方にては小兒の初端午には粽を祝ひ、二年目よりは柏餅を贈る習慣なり。

例句 柏餅

柏餅眼鏡はづして茶を入るゝ　梅枝（同人）

柏餅虎屋が店の總がゝり　廿雨（同　）

參考 世事百談に、端午の日に柏の葉に餅を包みて互ひに贈るわざは江戸のみにて他國には聞えぬ風俗にしてものに見えたるものなし。徳元が俳諧初學に五月の季に見えず。かゝれば寛永の頃より後の事か。寛文年間のものと思はるる酒餅論と言ふ雜誌に、「彌生は雛の遊びとてよもぎの餅也、端午にはちまきの餅也、柏餅、水無月はじめの氷餅、嘉祥の餅云々云々といふ事あり」云々と云ひ、豐前中津・武州秩父・大隅の片里にも此の俗あるを考證し、更に地錦抄を引用して菝葜の葉と言ふを「荊也、柿の葉の小さき如くにて葉中に三つの筋あり、冬葉落ちて春出づ、秋あかく實あり、俗にサンキライと言ふ。」と説明しいづれの葉にもあれ、餅つつみたらんはかしは餅ととなへんも難なかるべしと結んでゐる。

心太（ところてん）　石花菜（ところてん）　こゝろぶと　心太賣（ところてんうり）

古書校注 【俳諧歳事記】正字は石花菜、豫州宇和島の産を上とす、又勢州明星の茶店、冬といへども心太を鬻ぐ也。その製、熱湯を以てこれをそゝぐ。これ又他州にあらざるもの也。

季題解説 心太は石花菜と云ふ海藻より製したる食品にして、石花菜は普通心太草と稱せられ、暖地の海岸に生ず。夏土用に採るを最も佳なりとす。心太を製するには、天草を平地・堤防等に撒布して數日之を曝し、更に水に浸して舂きて介殼砂石を除き、簀の上に攤げて乾したるものを煮て溶かし、[illegible]嚢に一搾りて凝結せしめたるもの即ち心太なり。心太は突出し具にて突き出し、細長くしたるものに砂糖・醬油或は酢をかけて食す。

例句 心太

心太や祇園林にむらがらす　宗因（梅翁宗因發句集）

一口や御爲に殘すところてん　同（同　）

清水門や民のとゞまるところ天　同（同　）

五文字やけふは水はく心太　同　（同　）
清瀧の水汲よせてところてん　芭蕉　（笈日記）
順禮のよる木のもとやところてん　其角　（五元集拾遺）
皿鉢に駒のけあけや心てん　同　（五元集）
しら絲の瀧やこゝろに心太　桃隣　（古太白堂句選）
買手には錢つかせけり心太　也有　（蘿葉集）
ところてん逆しまに銀河三千尺　蕪村　（句集）
かゝる日や今年も一度心太　太祇　（太祇句選）
水の中へ錢遣りけらし心太　同　（同　）
もとの水にあらぬしかけや心太　同　（同　）
旅人の買はじめけんところてん　召波　（春泥發句集）
心太酒の肴にたうべけれ　同　（同　）
心太から流けり男女川　一茶　（七番日記）
心太芒もともにそよぐぞよ　同　（同　）
逢坂や牛の上からところてん　同　（九番日記）
旅人や山に腰かけて心太　同　（發句集）
軒下の莚へ瀧や心太　同　（新集）
川風のちどり思ふやところてん　乙二　（をのゝえ草稿）
書がほのはても見へけりこゝろ太　許六　（五老井發句集）
君めして突せられけりこゝろぶと　太祇　（太祇句選）

参考　倭名類聚抄には大凝菜に古古呂布度（こゝろぶと）の訓を掲げ、又凝海藻に古留毛波（ルモハ）の訓を掲げてゐる。延喜式などにも伊勢國凝菜卌（中略）志摩國大凝菜卅四斤白玉千顆等見えてゐる。又出雲風土記にも凡北海雜物（中略）凝海藻とある。又續修東大寺正倉院文書後集四十、寫經司解申錢用事、合所請錢貳千文とあり、心太一村と見えてゐる。七十一番歌合せに心太賣を「うらぼんのなかばの秋のよもすがら月にすますや吾心てり。」

ゼリー

季題解説　ゼリーは果物の搾り汁或は果肉と、ゼラチン又は寒天とを煮合せ、之を冷し固めて製したる菓子にして、半透明の寒天質の中に鮮紅の苺を含み、恰も花氷を見る如く清潔の感を與ふ。

例句　ゼリー

青き燈に光るゼリーや匕入るゝ　千燈　（同　人）

葛餅（くずもち）

葛練（くずねり）　葛切（くずきり）

季題解説　葛粉を水に溶きて、砂糖を入れ煮て練りたるもの。うどんの如く切りたるを葛切と云ふ。**参照**　葛水（くずみづ）　葛饅頭（くずまんぢゅう）

麨（はつたい）

古書校註　麦炒粉（むぎいりこ）　むぎこがし　こがし　麦焦（むぎこがし）　麦香煎（むぎかうせん）　麦の粉（むぎのこ）　煎茶

【三才圖會】麦を炒り、磨て細末にし、篩羅て、冷水に浸し、之を喫る。砂糖を和して食作し。紀州宮崎泉州貝塚より出る者最良し。

季題解説　麨は新麦を炒り碾きて粉に製したるものにして、ハタキイヒの略語なりと和漢三才圖會にいへり。俗に麦こがしと云ふ。その儘砂糖にまぜて食ふもあり、又冷水に和して食ふ。糗茶は糗を入れたる茶を云ふ。

〔参照〕麦落雁ラクガン

例句
麨　麨や子に逢ひにくる預け親　子角（同人）
麦の粉　むせるなと麦の粉くれぬ男の童　召波（春泥發句集）
むぎこがし　麦こがしふくみにければ噤みけり　椎花（ホト、ギス）

参考　こがしは雑事通考に、江浙地方の民衆で麦及び粳米をいつて磨り、これを芳茶霜と名付ける、と書いてある。倭訓栞によると、初田餐であると言つてある。

麦落雁（むぎらくがん）

季題解説　麦こがしを固めて作れる干菓子、夏季の菓子。〔参照〕麨ハツタイ

水羊羹（みづやうかん）

季題解説　水にしたる羊羹の意にして夏季の食品とす。小豆餡寒天にて製し櫻の青葉に載せ或は包みて出すを普通とす。

例句
水羊羹　とけてゆく水羊羹を含みけり　清風（ホト、ギス）
水羊羹眠氣ざましに出しにけり　甘雨（同人）

参考　宋書の毛脩の傳に據れば、脩が羊羹を虜尚書といふ人物にすゝめたとあり、これは羊肉のあつものであつた様に思ふ。菓子の羊羹は羊肝糕であり牛皮も元來は牛皮羹であつたと見える。獸を不潔とする故これ等を求皮と書きしなるべし　併し羊字を變へざるは如何。又羹と糕とは同音故に糕といふ可きものを誤りて羹と書けり。以上は嬉遊笑覽の説である。

金玉糖（きんぎよくたう）　金玉羹（きんぎよくかん）

季題解説　寒天と砂糖とを煮て煉り合せ製したるものの上に、ザラメ糖をまぶしたる菓子なり。ザラメ糖をまぶさゞるものを金玉羹と云ふ。

例句
金玉糖　舌の上に金米糖のつぶら哉　不苦子（ぬかご俳句集）

沫雪羹（あわゆきかん）　淡雪羹（あはゆきかん）

【季題解說】水羊羹の一種にて、寒天を煮て十分に溶けたる時白砂糖を入れ、よくかきまぜ毛篩にて他の鍋に漉し、再び煮たる後人肌の温度に冷却したるものに鷄卵を加へ、よく攪拌して適當の箱に流しこみたるものなり。

青ざし（あを）

【季題解說】青ざしは、青麥を炒りて臼にてひき絲の如く撚りたる菓子なり。夏山雜談に「青ざしといふものは、青麥にて製したる菓子なり、古へは高貴のかたもめされたるものなり、今民間に用ふる青ざしもこれなるにや」とあり。枕雙紙・春曙抄に青ざしの文字あり。

【例句】青ざし

青ざしや草餅の穗に出つらん　芭蕉（虛栗）

青ざしやとみに生みたる子を思ふ　青々（妻木）

【參考】大和故事に「青麥をいりて臼にて磨り糸の如く捻りたるもの」と見ゆ。淸少納言の枕の草紙、兼好の徒然草等に見えたり。されば古く行はれしものなるべし。

土用餅（どようもち）

【季題解說】元氣を增し或は暑氣中りを避くる等の言傳へにより、古來土用には小豆餅を食ふ習あり、これを土用餅と云ふ。【参照】時候「土用」

【例句】土用餅

朴の葉に包みて賣るや土用餅　青蛙（同人）

肩入れてよばれに行きぬ土用餅　雪明（同）

冷索麵（ひやさうめん）

冷素麵（ひやさうめん）　冷麵（ひやめん）　片栗麵（かたくりめん）　五色索麵（ごしきさうめん）　平索麵（ひらさうめん）　紐皮（ひもかは）　煮麵（にうめん）　饂麵（たひめん）　索麪冷す（さうめんひやす）

【季題解說】索麵の茹でたるものをよく洗ひ、冷水に浸し煮汁を付けて食ふ、之を冷索麵と云ふ。索麵は漢字の索音にして、索の如き麵の意なり。我國にては延喜式に索餅の名見え、七月七日内膳司より禁中に奉れりと。又夏季之れを冷麵として食ひしこと、文安元年の康富記にあり。

【作句注意】俗に索麵と書く、索麵は産地と製法とにより品位と名稱を異にす、世著名なるは大和三輪索麵なり。片栗麵は馬鈴薯澱粉に小麥粉を混ぜたるもの、五色索麵は彩色を加へしもの、平索麵は少し太く平たく製したるものにて、俗に紐皮と云ふ。冷索麵のことを俗に冷麵と云ひ、又温き內に食ふものを煮麵と云ふ。これに鯛の肉を混ぜたるを鯛麵と云ふ。

例句

煮麺　煮麺に閑づ蒲鉾入れにけり　月斗（同　人）
煮麺　煮麺や貰ひ祭の晝の酒　同（同　）
素麺冷す　そうめんを冷す泉やさゞれ石　参牛（同　）

冷麦（ひやむぎ）

冷し麦（ひやしむぎ）　切麦（きりむぎ）　湯餅（たうはう）

古書校註
【滑稽雜談】　青箱雜記に云、湯餅は温麺也　凡麪（一）を以て食となす、之を煮る。皆之を湯餅と謂ふ。（略）（二）これらは皆尋常に賞すれど、殊に夏月新麥を收て麪とし、暑を除ふ冷食とするなり、依て夏とす。
註（一）麥粉（二）以下其角の自記。

季題解説
小麥粉を饂飩の如く製して細く切り、茹でて水に冷やし用ゐるものなり、夏時の食料とす。本朝食鑑「冷麥は亦饂飩を造る法の如くして極て細く之を切り緒の如くす、故に俗に之を切麥と稱す、煮熟して取出し洗淨、冷水に浸し氷の如くして之を食す、亦饂飩の諸汁を用ふ　特に芥子泥を加へて佳と爲す」。参照 植物—新麥（シンムギ）

例句
冷麦　酒の瀑布冷麥の九天より落るならむ　其角（五元集拾遺）
冷麦　冷麥や嵐のわたる膳の上　支考（類題發句集）

参考
易林節用集に冷麪とある。
大上﨟御名之事女房ことばに「一、ひやむぎ、つめたいぞろ」とある。

冷奴（ひややつこ）

冷豆腐（ひやどうふ）

季題解説
豆腐を冷水に浸して一寸位の賽の目に刻めるものを、醤油にて食ふ。藥味には生姜・紫蘇・蓼の葉揩等を用ふ。夏日の食物なり。

實作注意
奴は「ひやつこい」の轉訛なりとの說あれど、江戸時代武家に仕へし中間を奴と稱し、四角なる紋を著けしより、四角に切ることを奴にすると云ひしものならん。

例句
冷奴　冷奴蓼の葉嚙めば倘淺し　月斗（同　人）
冷奴　老師此頃酒用ひずよ冷奴　同（同　）
冷奴　ほどゝゝにたしなむ酒や冷奴　妙子（ホトヽギス）

冷汁（ひやじる）

冷し汁（ひやしじる）　煮冷し（にびやし）

古書校註
【滑稽雜談】　是和俗の羹類を喰ふに、夏月に至てその羹類を調味料理して、是を冷水に浸し、又は濕地に至して寒冷となして、冷汁或は煮冷と稱す。其製一ならず。尤夏月に賞する所なれば、季に用るならし。

【季題解説】夏日、調理したる汁物を、其器と共に冷して食ふ、之れを冷汁・冷し汁又は姿冷しと云ふ。

【例句】
冷汁　ひや汁にうつるや谷戸の竹林　來山（續いま宮艸下）
冷汁の筵引ずる木陰かな　一茶（句帖）
冷汁に鯨の脂浮きにけり　月斗（同人）
冷し汁　冷し汁云はるゝまゝにかへにけり　同（同）

【参考】今川大雙紙に一何とうまき二汁ひや汁共かけてくふべからず一とある。江家次第にも一次ニ獻冷汁次ニ獻熱汁或及ニ四五獻」とある。大饗次第にも冷汁の事が見える。

あつめ汁（じる）

【季題解説】陰暦五月五日・蠶豆・焼豆腐・干あはびなど、さまざまの物を汁に煮て食ふ、これを集め汁と云ふ。

【例句】
あつめ汁　草堂事一時に到るあつめ汁　蝶衣（俳句大全）
人三五草堂にありあつめ汁　死酒（同）

【参考】五月五日に之を用ゐるのはやはり邪氣をはらふ信仰に基くと思はれる。

鮔（ごり）汁（じる）

【季題解説】鮔を入れた味噌汁を云ふ。京都高野川のもの有名なり。

【實作注意】鮔の文字は鰉（ひがひ）の文字に對して作られし國字なり。鰉は琵琶の湖魚にて明治大帝御嗜好ありし爲、魚偏に皇の旁を加へしなり。皇に對して臣を附けしもの鮔の品位知るべし。

【例句】
鮔汁　鮔汁や窗前山の連なれる　涼舟（同人）

夏料理（なつれうり）

【季題解説】涼味を多量に持たせたる、輕き夏の料理一般の意なり。

【例句】
夏料理　交りのさめて又よし夏料理　其角（花摘）

【参考】増鏡おどろの下に、「夏の頃水無瀬殿の釣殿にいでさせ給ひて、氷水召して水飯やうのものなど若き上達部殿上人どもに賜はさせて大御酒まゐるついでにも、さはれ古の紫式部こそはいみじくはありけれ、かの源氏物語にも近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの、御前に調じて、と書けるなむ、すべてめでたきぞとよ、只今さやうの料理つかまつ

りてむかなとのたまふに、某のなにかしと云ふ御随身、高砌のもと近く候ひけるが、承はりて、池の汀なる笹を少し敷きて、白き米を洗ひて奉れり、「ひろはゞ消えなむ」とにや、これもけしかるわざかな」とて、御衣ぬぎてかづけさせ給ふ。」

乾飯（ほしいひ）　糒（ほしいひ）　道明寺（だうみやうじ）　引飯（ひきいひ）

古書校註

【三才圖會】 糒・乾飯・俗引飯・和名保之以比　糒・乾飯也　糒を（略）用ふ。夏月冷水に浸し、之を喫る。奥州仙臺河州道明寺に作る所の者最佳し。

【滑稽雑談】 此者和漢ともに蓄へて、軍旅の糧となす事史記にも侍る。伊勢物語等にかれいひと云ふも、乾飯にて、此糒の類なりと云ふ一說侍る、和俗又糒を引飯又は道明寺と稱す。引飯は磨成（一）する故也。道明寺とは、河州道明寺の比丘尼是を製して寺料となす、尤世上に流布す。故に名とす。（略）夏月冷水に浸して、專ら賞す。故に季に用ふ、仙臺の製又侍る、

註　（一）ひきわりにする。

季題解説

和名抄に「糒、保之以比、乾飯也」とあり、夏日冷水に浸して之を食ふもの。奥州仙臺、河州道明寺にて作るところのもの最も佳なり。乾飯の粗きを軍用とし、中を普通道明寺と稱して賣る、細かきは微粒粉となす、

實作注意

こゝに云ふ糒は、常食の飯粒を乾したるものにあらず。故らに製造し、夏日冷水に浸して食ふものを云ふ。

例句

乾飯　乾飯籠忍の釘に吊りにけり　紫江（玄峰集）

道明寺　水むけて跡とひたまへ道明寺　芭蕉（江戸廣小路）

蛋の子にたうとからせん道明寺　嵐雪（玄峰集）

参考

糒の字も餉も兩々用ゐる、糒と餉とは大同小異である。河内國道明寺、陸奥國仙臺の產最も盛である。餉がかれいひで糒がほしいひである様に區別してゐる書が多い。靈異記にも餉可禮意比としてある。古く旅中の辨當に用ゐた。萬葉集山上憶良の歌に「常知らぬ道の長手をくれぐ〳〵といかにかゆかむ乾飯はなしに。」

水飯（すゐはん）　洗ひ飯（あらひめし）　水漬（みづづけ）　水飯（みづめし）

古書校註

【滑稽雑談】 大和本草に曰、（一）飧飯は則湯漬飯、水漬飯也。時珍が所謂熱食するは湯漬飯也、又冷食すれば水漬飯也。（略）源氏物語常夏卷に云、れいの大殿の君達中將のあたり尋てまゐり給へり　さう〴〵しく（二）、ねぶた

かりつる折、よくもめし給へるかな迚、おほみき参り、ひめしで、すゐはんなどとりんゝに（三）さうときつくろふ（四）宗祇注云、水飯は干飯也、一説湯漬花鳥余情うつほの十二宮おとゞなど、鞠け給て後、すゐはんして、参らせたる事あり。今案るに水飯は今の世にひめと名付て喰ふ物也。狭衣物語に加茂川のほとりにて水飯などの所、水漬、花鳥の義有り（略）

【年浪草】或説に曰、すいはんとて、ひめともいふ。飯をあつくしてあらうてくふ物也。云々　是炎暑の食用なれば、俳には水漬可ならん。

註（一）以下凡て[illegible]引く　（二）原書には文末にあれど今文首に改む。（三）さはしく。（四）さつそく

【季題解説】水漬にしたる飯をいひ、夏日用ゆ。昔時は乾飯を冷水に浸し食ひしなり。後世は柔く炊ぎたる飯を、更に洗ひ冷げたるものなり。みづめし「源氏「人人にすゐはんなどやうのものくはせ」又常夏巻に「おほみきまゐり、ひめしで、すゐはんなど、とりんゝにさうときつくろふ」とあれば平安朝頃にも既にこれを賞味したるものなり。

【例句】

水飯

水飯やあすは出ゆくくさの宿　乙二（たのゝえ草稿）
水飯や日まひ止みたる四ッ下り　子規（全集）
水飯や美人朱[illegible]を巻きに立つ　月斗（同人）
水飯にことなき日々を過しけり　春江（ホトトギス）
[illegible]や雀に布施や洗ひ飯　双葉（同）

【参考】源氏物語「中将こゝにおはしたり（中略）あまたさうじ口に木丁たてゝたいめんし給ふ。（中略）人々にすゐばんなど様のもの食はせ」云々。統草紙に「所々の御前ともするゐばん食はむとてさじきのもとに馬ひきよするに」云々等みえ、其の他今昔物語・[illegible]・明月記等にも現れてゐる。

豆飯（まめめし）

【季題解説】蠶豆又は豌豆の青き実を剝ぎて粒を出し、白米に交ぜて釜に仕掛け、適當に鹽を施して炊きたるものなり。〔参照〕植物　蠶豆・[illegible]

【例句】

豆飯

釜のまゝ出されてぬくし豆の飯　百迷（同人）
豆飯があるとて田から戻りけり　月村（同）

筍飯（たけのこめし）

【季題解説】筍は京都近傍産を以て、最善のものとす。筍飯は孟宗竹の筍を短冊形に小切にし、米と共に炊込むなり。醤油にて[illegible]。東京その他の地方にては、筍と別に煮て[illegible]あり。

【[illegible]】[illegible]を[illegible]に炊込むなり。[illegible]飯・[illegible]飯も米と共に煮るなり。

豆飯・栗飯は其のみにて加減す。すべて野菜の色飯は京阪の材料嘆味のものたるを以て、調味料を待つ事薄し。〔參照〕植物―筍

例句

筍飯　山寺や筍飯に一宿す　月斗（同人）
　　　二十男筍飯を空腹に　凡水（同）

蓮飯

季題解説　蓮の卷葉を纖に打ち、鹽もて揉みやはらげ、よく絞りしものを火を引く前、飯にふり込みてそのまゝ蒸したるものなり。又細くきざみし蓮の葉をうら漉にしてその汁をとりて炊ぐ法もあり。蓮の葉の香氣移りて風味あり。〔參照〕植物―蓮の葉

例句

蓮飯　蓮飯に朝茶の會を約しけり　月斗（同人）
　　　蓮飯や浦江の旗亭ありやなし　同（同）
　　　風流の二三子蓮茶蓮飯に　同（同）
　　　蓮飯やむせぶばかりの悲みに　五彩（同）
　　　蓮飯や心覺えの鹽加減　さと女（同）

麥飯

新麥飯

季題解説　普通米七分麥三分、又は半々に交へ炊ぐ。單に麥飯と云へに、常食なれども、夏は脚氣に罹り易く、又胃腸を害し易き關係上、これを食ふ事多きにより季感ありと知るべし。〔參照〕植物―麥

例句

麥飯　麥飯をごそとへらせし下僕かな　涼舟（同人）

飯饐る

汗の飯　饐飯　煮物饐る

季題解説　夏日米飯の正に腐敗せんとして粘り氣を持ち、臭氣を放つ狀態となりたるを飯饐ると稱す。恰も飯粒が汗をかきたる如きを以て汗の飯とも云ふなり。魚類の野菜等の煮たるも夏日饐ゑ易し。

例句

饐飯　饐ゑし飯の糊が匂へる浴衣哉　月斗（同人）
　　　饐ゑし飯を水糊桶にあけにけり　蓼井（同）

鮓

鮨　鮓文字　おすもじ　馴鮓　握り鮓　五目鮓　ちらし鮓　早壓
鮓　早鮓　一夜鮓　柿鮓　飯鮓　月夜鮓　鮓壓す　鮓漬る　鮓熟る
鮓の石　鮓桶　鮓見世　鮓賣　雀鮓　宇治丸　鰻鮓　釣瓶鮨　鮎鮨

【古書摘録】

はたはた鮓　蛇鮓（へび）　鯖鮓（さば）　鱒鮨（ます）　鰺鮓（いさき）　鮒鮓（ふな）　鰤の卷鮓（ぶり）

【三才圖會】酢を釀る法は、鹽を少し糝し、之を壓する事一夜、水氣を拭淨し一冷飯を用ひ、桶に藏す。（略）夏秋は一二日にして熟る。凡江州の鮒、濃州の鮎、和州吉野の鱗（釣瓶鮓と名く）城州宇治の鰻鱺、攝州福嶋の小鯔（雀鮓と名く）和州今年の鮨皆名を得たる者也。一種柿鮓と云ふ者あり。

【毛吹草】「雀鮓」攝州福島の雀鮨、是江鮒と云魚也。其大きさ雀ほどありて、魚腹に飯をおほく入たるが膨かにてよく雀の形に似たり。仍て名とす。「釣瓶鮓」和州吉野釣瓶鮓は鮎なり。曲物に入れ藤にて手を付る、其形釣瓶のごとし故に呼也　一説此鮓は鮎を取りて鮓となし、此曲物（一）に入一吉野川の水中へ沈め置きて、熟する期ありて出す。故にいふ由侍る、只鮎鮓も夏也。「はたはた鮓」羽州秋田はたはた鮓。是鯮に似たる魚也。「蛇鮓」越中松波鮓。世俗に蛇の鮓と云ふ。龍に似たる魚といふ。「早鮨」又一夜鮨などいふ　おほくは此製魚其數種を細截して、醞釀す。故に柿鮓とも云ふ　其熟する事はやし、依て早鮓と名け侍る。（二）

【日次紀事】「飯鮓」四月紫藤の花開くを待ちて、西本願寺より六條飯鮓並紫藤花を禁裏院中に獻ぜらる。飯鮓、先飯を緊固し、其後又飯を以て之を包裹する者也　是を月夜と曰ふ。其色共に（三）白きを以て也。「宇治丸」鰻鮓、是宇治丸と稱す　此川（四）の鰻、其形肥大にして圓長なる故此號あり。「雀鮓」攝州尾崎の人小鱸魚を以つて之を鮓藏し、京師に贈る。其鮓の形雀に似たるを以て世雀鮓と稱す。「鱗鮨」五月鱗魚、鮨となす。美濃岐阜の鱗鮨並越前引田今庄の鱗鮨之を賞す。

【滑稽雜談】世俗また夏月に是を賞翫する者也　其製多しといへども、精選なる者は京の六條、南都の製に限る也。（五）

註（一）まげもの、薄き板をまげて、圓き器を作れるもの　撓物とも云ふ（二）以上「滑稽雜談」所引を便宜上集む（三）みな、全く（四）宇治、伏見の宇治川などより（五）飯鮨の略圖也

【筆者附記】昔の鮓は、數日漬け込みしものにて、多くは魚の腹に飯を詰め、數日壓を置き、自ら酸味を帶びたる時、食ひしものなり、江戸の鮓と雖も京阪より傳はりし押鮓のみにして、初は握鮓はなかりしなり。江戸にて握鮓の起りしは文政の年にして、本所與兵衛案出し市人の嗜好を呼ぶに至れり、海苔卷・玉子卷は握鮓より早く天明頃に初まりしと云ふ。壓鮓は魚肉を薄く切て、箱の底に竹の皮又は熊笹を敷き、これに鮓飯をのべて壓板をはめ壓石を一日許り加ふ、早漬鮓又は早鮓と云ふ。或は一夜鮓、柿鮓などとも唱ふ。鮓に用ふる魚によりて、鯖鮓・鱒鮓・鯛鮓・鯵鮓・鮒鮓・はたはた鮓等の名あり。釣瓶鮓は名物にて、曲物に入れ、藤にて手を付け釣瓶の如き形をなせるによりての名あり、又一説に此鮓は鮎を原料とし、この曲物に入れて、吉野川の水中へ沈め置きて、熟するを待ちて出す故に釣瓶鮨といい

ふと、雀鮨は、鮒を用ゐ、その魚の腹へ飯を多く入たるが雀の形によく似たるを以て名とす。昔は攝津福島にて、これに稲荷鮨・信田鮓は油揚を二つに切り、その中に飯を詰めたるもの、共に狐に因みたる名にて大阪にては狐鮓と云ふ。

實作注意　和漢三才圖會にも「春冬は四五日、夏秋は一二日にして熟すとあり。」鮓は古く延喜式に見えたり、こは魚のみの鮓にて、慶長の頃に至り飯を混和せり。徳川時代に入り早鮓の名諸書に見ゆ。

例句

鮓

眞しらけのよね一升や鮓のめし　蕪村（新花摘）
桌上の鮓に目寒し觀魚亭　同（同　）
木の下に鮓の口切るあるじ哉　同（遺稿）
酒呵る人もや鮓に小盃　召波（春泥發句集）
蓼に露持せて長しすし一夜　蓼太（蓼太句集）
柴の戸や鮓のおもしの米瓢　一茶（新　集）

早鮓

はや鮓の盞とる迄の唱和かな　太祇（太祇句選）
早鮓に平相國の鱸かな　同（同　）
早鮓に王思は飯をあふぎけり　召波（春泥發句集）

一夜鮓

夢さめてあはやとひらく一夜鮓　蕪村（遺稿）
一夜鮓なれて主の遺恨哉　同（落日庵句集）

鮓壓す

鮓おしてしはし淋しきこゝろかな　同（新花摘）
鮓を壓す我れ酒醸す隣あり　同（同　）
鮓をおす石上に詩を題すべく　同（同　）
鮓壓て我は人待男かな　召波（春泥發句集）
鮓壓の足に寢るかよ蝸牛　一茶（新　集）

鮓漬る

鮓漬て誰待としもなき身哉　蕪村（句集）
鮓つけてやがて去にたる魚屋かな　同（新花摘）

鮓熟る

寂寞と晝間を鮓のなれ加減　同（同　）
なれ過ぎた鮓をあるじの遺根哉　同（句集）
今少しなれぬを鮓の富貴哉　几董（井華集）
なれきとやいざとけ眞木の杜鮓　同（同　）
鮓なれよ松をかざへてくゞるうち　乙二（たゝのえ草稿）

鮓の石

鮓の石に五更の鐘のひゞきかな　蕪村（新花摘）

すし桶

すし桶を洗へば淺き游魚かな　同（同　）
鮓桶をこれへと樹下に床几哉　同（句集）

鮓見世

鮓見世や水打かける小笹山　一茶（七番日記）

雀鮓

蓼の葉を此君と申せ雀鮓　蕪村（句集）

鮒鮓

鮒ずしや彦根の城に雲かかる　同（新花摘）

鯖鮓

下部等に酒もり過ぎて鯖の鮓　几董（井華集）

る。（略）大抵七十五日にして成る。

註（一）けづりそぐ。（二）越瓜の少し青き者。

【季題解說】胡瓜・越瓜・青瓜等を鹽漬或は糠味噌漬としたるものをいふ。漬物に用ゐる瓜を漬瓜と云ふ。【參照】瓜揉り　茄子漬。

【例句】

瓜漬　瓜漬に麥飯喉を辷るなり　一央（同人）

乾瓜（ほしうり）　雷乾（かみなりぼし）

【古書校註】【三才圖會】新瓜（一）を用ひて、縱に八つに切り劈き、瓤をさり、鹽を糝し、暑熱石上に於て晒し乾し、六七日能く乾し、磁器に收め入れ、用る時鹹沙を洗ひ去り、切片を酒に浸し食ふ。

【日次紀事】六月曇華院乾瓜を禁裏院中及高貴の家に獻ぜらる

註（一）越瓜の新瓜也。

【季題解說】鹽水に漬け乾したる瓜をいふ。香の物となす。製法越瓜を縱に割り、鹽をまぶし、炎天に乾し能く乾きたる時、水に浸して鹽を拔き、酒に浸して食ふ。又越瓜を丸のまゝ、小口より渦旋狀に切りて紐の如く長くなし、鹽をまぶし乾したるものを適宜の長さに切り三杯酢にて食ふものあり、之を雷乾と云ふ。

【例句】

干瓜　干瓜の忘れてありぬ庭の石　すゞえ（ホトトギス）
雷干　雷干をたど／＼しくもして見たり　枴童（同）

茄子漬（なすづけ）

なすび漬　淺漬茄子（あさづけなす）

【季題解說】茄子を鹽漬又は糠漬として、夏日の食膳に供す。茄子・胡瓜などは一夜漬のものを愛す。「色で迷はす淺漬茄子」の諺あり。【參照】植物—茄子。

【例句】

茄子漬　物ごとに妻なき家の茄子づけ　嵐雪（玄峰集）
その白き鹽に染みしか茄子漬　魚兒（其袋）
人妻のこれを饗應す茄子漬　召波（春泥發句集）
弱寢して色變りけり茄子漬　月斗（同人）

茄子の鴫燒（なすのしぎやき）　鴫燒（しぎやき）

【季題解說】新茄子を皮のまゝ或は皮を剝き二つ割となし、竹串に刺して胡麻油を塗り、火にて燒き切面の方に赤い味噌を塗りて再び燒きたるものな

洗ひ鯉（あらひごひ） 生作り（いけづくり）

【季題解説】 鯉・鯛等にかくり冷水を以て洗ひたるものにして、専ら夏季の料理に用ふ。皿には青々の葉を敷き、其上に鯉の洗ひを並べ、簾の下に生氷を添ゆ。生作りは、活きたる鯉をそのまゝ卓上に運び、腹部の作り身を食ふなり。〔参照〕洗膾、洗鱸、

【例句】
洗ひ鯉
百日のそれゝらら戀しやあらひ鯉　其角（五元集）
葦捨を暮上けたりあらひ鯉　支考（蓮二吟集）
洗ひ鯉淵上の夜月秋に似し　月斗（同人）
生作り
面りミ尺の鯉の生きづくり　同（同）

土用丑日の鰻（どようのうしのひのうなぎ） 鰻の日（うなぎのひ） 土用鰻（どよううなぎ）

【季題解説】 土用丑の日に鰻を食すれば、夏病をせずと稱し、此日鰻を食ふ風習あり。

【例句】
土用丑日の鰻
土用丑と鰻酒したゝか甚暑し　月斗（同人）
土用鰻
土用鰻ミ百貫も賣る覺悟　蘆竹（同）

【参考】 うなぎ科に屬する魚の名。古くはむなぎとも言ふ。土用丑の日に鰻を食すれば暑氣に冒されぬとて多く食ふのは、燕石雜志に「人家常に鰻鱺を燒けば諸蟲を避く、鰻鱺店に蠅なきはこの故也」とある。この書は文化六年に瀧澤馬琴の誌した所であるから江戸人の民間信仰として廣く行はれた所ならんも、何故に鰻に其の性があるかは詳にし難い。元來精力を増す食物であるから、斯樣な事を云ふのであらうか。萬葉集卷十六、大伴家持が痩せたる人を嗤笑する歌に「石麻呂に吾物申す夏痩によしとふ物ぞ鰻取り食せ」「痩す〳〵も生けらばあらむをはたやはた鰻を取ると川に流るな」とあり、當時から鰻が夏痩に利くと信ぜられてゐたものと思はれる。

鰌鍋（どぜうなべ） 泥鰌汁（どぜうじる） 柳川鍋（やながはなべ）

【季題解説】 開き鰌と笹掻き牛蒡とを共に鍋に入れて煮たるものを鍋のまゝにて食膳に上すものを云ふ、又鰌の丸煮を用ゐるものあり、又之に卵を割り入れたるものあり、柳川鍋といふ。柳川鍋の稱は、慶長年間、筑後柳河に於て始めて製せし土器を柳河燒と稱す、これにて泥鰌を煮たるより、名つく、又筑後柳河は、水郷にて、鰻・鰌多し

【例句】
鰌鍋
堀川の舟見下ろしつ鰌鍋　珉樓（同人）
柳川や名物の蚊と鰌なべ　月斗（同）

南座の芝居戻りや鮒鍋　同（同）
鮒鍋御靈祭の夜官哉　同（同）
柳川鍋
蓋に露柳川鍋やさめぬ内　同（同）
鰌汁
鰌汁額に汗をうかべゐる　五峰（同）

沖膾（おきなます）　背越膾（せごしなます）　鱚のせごし

古書校註

【年浪草】沖膾・セゴシ膾は鯵を用ふ。鯵のせごしと云ふ。沖膾大低同じきにや。

【栞草】貞享式　此名は俗習なり。或は海邊の別莊か或は船遊の時に、魚のあたらしきを稱すれば、決して極暑の名目にて、これらを例の賞玩と云べきなり。○青藍日、沖にて漁りたる魚を、直に酢に和して食ふを沖膾と云ふ。○セゴシとは鯵などの大きくならぬを背のまゝにて切たるを、南海にて、せごしなますといへり。是なるべし。

季題解説　鰮・鯵等の海魚の丸作りにして蓼・紫蘇など粗く切り入れ、酢を加へて食す、鯵等の魚類を骨つきのまゝ背より切りたる膾を背越膾と云ふ。

例句

沖膾
酢陶を水主あやまちそ沖膾　几董（井華集）
沖なます早きをもつていさぎよし　曉臺（曉臺句集）
漁人の凱陣よりぞ沖なます　蓼太（蓼太句集）
腸の塵を洗はん沖膾　子規（全集）
沖膾都の鯛のくさり時　同（同）
沖膾木更津邊は灯りけり　龜童（ホトヽギス）
沖膾一醉潮を浴びにけり　月斗（同人）
みち潮に鰮飛ぶ見ゆれ沖膾　涼舟（同）
背越膾
喜雨やよし背越膾に一醉す　同（同）

和雜膾（わざふなます）

季題解説　洛陽集に「和雜なます、蓼の酢たゞへて藍の如し」とあれば蓼酢を用ゐたる膾なるべし。

新節（あらぶし）

季題解説　今年つくりし、新らしき鰹節を云ふ。【參照】生節（なまぶし）　鰹節製す　鰹釣（かつをつり）　動物—鰹。

生節（なまぶし）

生り節（なまりぶし）　なまり

古書校註

【俳諧歲時記】鰹をいまた晴（　）となさゞるものなり也。江戸の俗、これをな

まりぶしといふ。その皮色、鉛のごとくなるゆゑにいふか。但生節の訛言か。

註（一）鰹節。

【季題解説】鰹の肉を煮たるのち、これを乾しわづかに水氣を殘せしものなり。蒸し、或は再び煮て、食ふ。【參照】新節（ブシ）　鰹釣（ツリ）　動物—鰹

【例句】

生節　猫の妻かの生節を取畢　太祇（太祇句選）

生節の酒に供案を返しけり　士喬（同　）

煮取（にとり）　煎脂（せんじ）　煎汁（いろり）　鰹エキス　鰹いろり

【古書校註】

【采草】〔三才圖會〕鰹節を造る時、其液の滯るものを取て、これを收む。黑紫色、味甘美。

【季題解説】鰹節を製する時、其煮汁を集め、フランネル・布にて濾化し更らに之を煮詰めてエキスとしたるもの、貯へ置きだしに用ふ。之を煮取又は煎脂（せんじ）といふ。煎脂は煎ずの假體音なり。煮取はかつをエキス・かつをいろり・煎汁等の名あり。

【實作注意】別に阿波地方の方言にて鰹節の鹽煮にしたるものを煮取と云ふ。

【參照】新節（ブシ）　鰹節製す（カツヲブシセイス）

【例句】

煮取　煮取たく炎でも御僧愚なり　嵐雪（俳句大全）

水鰹（みづがつを）

【季題解説】鰹をその姿のまゝにて湯煮したる後、清水に浸して冷却せしめ、食膳に供するものを云ふ。【參照】動物—鰹（カツヲ）

水鱧（みづはも）

【三才圖會】海鰻（一）西南海に多し。唐の東海に當る東北全く之無し。うなぎに似て大なり、（略）肉白く脆からず、之を割きて、皮を連ね、醬油を傳て、炙り食ふ。脂少く、うなぎより味美なり。

【滑稽雜談】今云ふ水はむは鱧魚なり、乾して、俗にごんきりと稱す。形容、風味鰻（二）に相類す　諸處に産すといへども、泉州堺浦、攝州西の宮の者上品とせり。夏月專ら賞して味美也。

【年浪草】春耕が糸切歯に日、五月頃天水多き時節、潮も自然と多し。此時磯邊へ寄るを綱を以て取る、是を水鱧と云ふとぞ。鱧は切流漬流（三）にはせぬにや、不見及。一説、鱚（三）鱧の兩種を大阪より大和へ送るに、桶に水を湛へ魚を漬け、大和川を舟にて與のぼる。大和の土人鱚を第一に賞して鯛より勝れりとす。彼水に浸し、大和へ送る故名とすと。

註 （一）和漢三才圖會、鱧の字を用ふるは誤なりとし、鱧は八目鰻と記す （二）水鱧の條、【年浪草】引用參照。（三）えそ・水鱧參照。

季題解説 初夏の頃、鱧の出初めし時の小さきものを水鱧と稱す。近海にとれたるものにて、生きたるを直ちに割き、湯水に通す故この名あり。多き者、くちり鍋にして賞味す。 參照 干鱧 鱧の皮 動物—鱧

干鱧（ひはも） 五寸切（ごすんぎり） 小鱧（こはも）

古書按注

【三才圖會】 風海鰻（注二） 海鰻十頭相聯ね、白鯗（一）に作り、形片板の如き者、夏秋、之を賞す、纖く之を刻み、酒醬に和して、膾に代ふ。

註 （一）白乾 鯗は何も添へず、そのまゝに乾すこと。素乾。風乾

季題解説 鱧の小さきものを日乾にしたるものにて、形片板の如し、細かく刻み、酒、醬油に和して膾となす。五寸切とも云ふ。 參照 水鱧 鱧の皮 動物—鱧

鱧の皮（はものかは）

季題解説 鱧の皮、多くは蒲鉾製造につぶしたる殘りの鱧の皮を云ふ。これをきざみて三杯酢或は、胡瓜採みに加へて用ふ。夏季の調理として上方獨特のものとす、 參照 水鱧 干鱧 動物—鱧

例句 鱧の皮

丹念に刻み了んぬ鱧の皮　月斗（同人）
鱧の皮を入れて祭の鮓の山　同（同）
鱧の皮日毎に買うて戻りけり　山堂（同）

水鱠（みづなます） 切流し 漬流し

古書按注

【三才圖會】 按るに惠崎魚、狀鰡（一）に類して灰色黃を帶び、頭は略蝮蛇の如し。（略）之を炙り、或は蒲鉾となし、食ふに、微腥氣あり。佳ならず。常に海濱水汀に遊び、好んで人の臭肉を食ふと云云。蓋頭形醜きを以て、女童も之を賞せず。但和州の人饗應に必用の美肴となす。

【年浪草】 春耕が糸切膾に曰、水鱠、水鱧、此節を賞し、（二）ひらき割て潮に浸し、一夜を越て、生膾とし用ひ、又潮に漬けたるを其儘用ゐるを、畿内に切流・漬流と云ふ。是を水鱠と云ふとぞ、

註 （一）こち。（二）夏季生物上、[illegible]

季題解説 鱠（又はえそ）は、喉黒類の魚にして、鱠の長さ三尺餘り、口は濶くして細かき齒を生じ、背部は腹赤黑色にて、腹部は銀白色なり、此魚を開き割て一夜潮水に浸し置き、生膾として用ふるものを水鱠と云ふ。味美ならず、蒲鉾の材料に用ゐる。

實作注意 鱠の字は古来[illegible]を用ゐられ、[illegible]（蓮華色集）、鯛（下學集）、鱧（林

逸節用ヘ、鰯按魚ニ、享保得言ニ、「こんもく」、「しらなみ」とも云ふ。海遠き大和地方にては水鱠を賞する事あり。切流し、潰流しなど云ふ。

刺鯖（さしさば） 差鯖（さしさば）

季題解説 鯖の背を切開き鹽漬にしたるを二ッ重ね竹にて挾めるもの。昔は盂蘭盆の贈物とせしが現今にては殆んど行はれず。〔參照〕秋―盂蘭盆ボン

船生洲（ふないけす） 生簀船（いけすぶね） 船料理（ふなれうり）

古書校註 大阪にて行はるる船料理の名なり。（街の噂）「船生州といへるを此地の名物にして、（中略）船を水中につなぎ、船中を二疊、三疊位づゝ、幾つとなく仕切りて客を迎るなり。大なるに至りては四方へ幕をはる。料理を船中にて調味して出せり。（中略）船の造りかた江戸と異り、常の船には縁側ありて其上にのぼりて漕ぐなり」、

實作注意 川の大阪水の大阪も現時は川狹ばまり、水濁りて船生洲も不手なり。鰻・鯉・鯽・鱸・鮎・鱒・諸子・鼈の、潮魚・川魚を主とし、瀬戸内海の鮮魚料理に食ひ倒れの大阪を船料理にも表はす事なり。船は四疊半・六疊位の座敷造りを連られて岸に繫けり。

例句

船生洲　船生洲涼みの舟が上り行く　月斗（同人）

船料理　船料理果して彼と居たりけり　野呂（同　）

參考資料 日本書紀仲哀天皇卷八年正月壬午の條に「幸二筑紫一時、（中略）皇后別船、自二洞海一洞此云久岐入之、潮涸不レ進。時熊鰐更還之。自レ洞奉レ迎二皇后一、則見二御船不一レ進、惶懼之、忽作二魚沼鳥池一、悉聚二魚鳥一。皇后看二鳥魚遊一而忿心稍解」とある。又兵庫生洲と言ふ語がある。當津南濱今在家町にある。長さ十三間巾四間許り、四方を圍みて云々と其の狀を說明し禁裡調進の振當にしたと傳へてゐる

身缺鰊（みかきにしん） かきわり 厄身缺（やくみかき）

季題解説 生の鰊を干す事二三日の後、小刀を以て腹部と脊骨とに分ち、又乾す事二十日餘りにして背部のみを取揃ふ、之を身缺鰊と云ふ。夏の初め出來上るを以て夏季とす。灰水又は米の磨汁に浸す事五六日、よく柔かくし、油を抜きて味噌煮又は甘露煮となす。又、鰊産地の北海道・樺太にて、倉庫に藏せる舟鰊を、夏季日光に晒して、かび蟲を防ぐを厄身缺といふ。

實作注意 鰊は、三四月頃産卵の爲め沿岸に群來するを漁獲す。卵巢は即ち數の子にして、干して製す。〔參照〕春―鰊ニシン

例句

身缺鰊　潰の子や身缺鰊を盜み食ひ　地燭（同人）

水貝　水介　生貝

季題解説 蚫を鹽にて揉み五分角程の骰子の目に切り、冷水に浸し、胡瓜・果物など適當に添へて器に盛りて出す。

例句

水貝　水貝や母と二人の避暑の宿　二月堂（同人）

參考 生貝とも云ふ、催馬樂我家に「我家（ワイヘン）はとばり帳をも立てたるを大君來ませ聟にせむ、み肴に何よけむ、あはび榮螺か、かに善けむ。」

鹽烏賊（しほいか）

季題解説 【滑稽雜談】藏器拾遺本草に曰、海人の云ふ、是秦王東遊せし時、筭袋を海に棄つ。化して此魚となる故に、形猶之に似て、墨尙腹にあり。大明日華本草に云、魚兩鬚あり、風波に過ふ時は卽鬚を以て下矴す。或石に粘するこ と纜の如し。故に纜魚と名く。乾せる者は鯗と名く。蘇頌圖經に曰、陶隱居が言ふ、此は是鷃烏化する所、今其口腹具に存す。猶頗相似たり。（略）又南越志に云、其性烏を嗜む。每に自水上に浮ぶ。飛烏之を見て以て死せりとなして、之を啄む。乃卷き取りて、水に入れて、之を食す。因て烏賊と名く。言ふ心は烏の賊害をなす也。（略）時珍本草に曰、案に羅願が爾雅翼に云ふ九月寒烏、（一）水に入り化して此魚となる。【年浪草】京畿、生烏賊暮秋より冬に至りて、多く出づ。春夏の間は、鹽烏賊を用ふ。俳書に夏となすこと以て知るべし。關東は春、生烏賊多し。其賞する所尤異なるなり。

季題解説 註（一）冬の鴉。

烏賊の鹽漬にせるものを云ふ。參照 烏賊釣り（イカツリ）

參考 烏賊・墨魚・纜魚・烏鰂・鰾鮹魚等の字を當てゝゐる。海に產する軟體動物である。南越志に「烏賊常自浮水上烏以爲死。啄レ之乃卷ニ取之一以名レ之」とある。

冷凍魚（れいとうぎよ）

季題解説 魚類を冷却氷結せしめたるものなり。多く北海、或は朝鮮等の大漁場にて行はるゝものにして、捕獲したるものを船中にて直ちに凍結せしむるものと、一度陸上して、所定の冷凍室に搬入して行ふものとあれども、普通前者に依るなり。

膳に露（つゆ）打つ

季題解説 塗りの膳に霧水を打ちて濡らし用ゆ。涼味通ふなり。

打つ露

師の坊の膳に露うちまゐらする　月斗（同人）

露うつや根來の膳のうす曇り　朝冷（同人）

夏館（なつやかた）

サンマー・ハウス

【季題解説】夏向の裝ひなせる家構を云ふ。海濱などの別莊の如く庭内廣く、開放的に建設しあるものなど。これの簡易にして、アパート式なるを、サンマー・ハウスと言ふ。【參照】夏座敷（なつざ）

【例句】

サンマーハウス

マンドリン、ハーモニカ、サンマーハウスの夜　崇朝（同人）

夏座敷（なつざしき）

【季題解説】夏期、襖障子等を取り外して風通よくしたる座敷をいひ、室内の調度品裝飾等すべて夏の裝ひを施したるさまを云ふ。【參照】夏館（なつやかた）

【例句】

夏座敷

芝といふものの候夏ざしき　宗因（梅翁宗因發句集）

山も庭もうごき入るゝや夏座敷　芭蕉（雪まろげ）

樹も石も有の儘也夏座敷　桃隣（古太白堂句選）

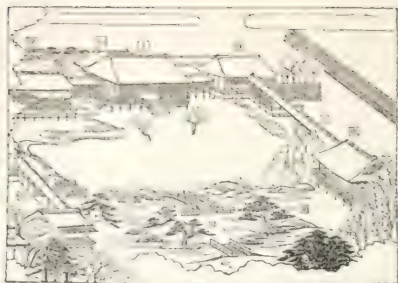
松陰や寐莫蓙一つの夏座敷　一茶（おらが春）

鼠壁を日出度がるなり夏座敷　同（新年）

泉殿（いづみどの）

泉殿（みづどの）　釣殿（つりどの）

寝殿造の圖

イロハニホヘトチリヌルヲワ

【古書校註】【年浪草】源氏松風卷に曰、泉殿、瀧殿の事。たきどのの心ばへなどおとらずと云々（一）花鳥餘情に曰、瀧殿は泉殿といふが如し。大覺寺にも瀧殿あり、栖霞寺にもあり。（略）（一）吳江人楚に曰、泉殿・瀧殿、同事也。詩に飛泉、瀑泉など作る也。差別無き也。云々（一）天子の御涼所をも泉殿瀧殿などいふよし。

註 （一）腕文の自說也。

【季題解説】夏月納涼の爲めにもし、專ら魚を釣べき處に設けられたる屋形をも云ふ。「廊をつゞけて池水の上に四方なる屋を作る、すみかをかけたる板敷なり」と嬉遊笑覽

に見ゆ。又泉殿といふも大やう同じ事なり、是は泉の湧出る處に造りしなるべし。藤原氏時代の建設法によれは、一家一構の内中央に正殿あり、これを寢殿と云ふ、南面し其東西若しくは南北に對屋といふものあり、又對屋より通ふ廊あり、其廊の端に一屋を構ふ、之を釣殿・泉殿といふ、庭中の池に臨めり、水面へつりおろしたる故、または釣を垂るゝ料に設けたる故に此名ありともいふ。泉殿といふは釣殿の如く池に臨み四方に野なく、納涼の爲めに造りたるものなり、又瀧殿ともいふ。花鳥飾情に瀧殿は泉殿といふが如し、大覺寺にも瀧殿あり、栖霞寺にもあり。水殿は水に近く建てられたる殿閣をいふ。〔參照〕瀧殿（タキドノ）　地理—泉（イツミ）　淸水（シミヅ）

〔例句〕

泉殿　深くる夜に母の使や泉殿　赤羽（新選）
泉殿に朗詠うたふ聲更けぬ　子規（全集）
泉殿急雨に魚の飛ぶ見ゆる　月斗（同人）
水殿　水殿の翠帳燕子覗くなり　同（同）
釣殿　釣殿や水澄みあやめ杜若　千燈（同）

〔參考〕　東鑑「泉屋」、百練抄「水閣」とあてゝゐる。家屋雜考の説によると「室町御所・小川御所、又古くは義經の堀川御所などにも泉殿といふ所見えたり」とある。

瀧殿（たきどの）

〔季題解説〕　瀧のあたりに作りたる納涼の建物。〔參照〕泉殿（イヅミドノ）　地理—瀧（タキ）

〔例句〕

瀧殿　瀧殿や葉のしたゝらぬ樹々もなし　嘯山（類題發句集）
瀑殿や風のしぶきに橋がかり　月斗（同人）

噴水（ふんすゐ）

吹上げ（ふきあげ）

〔季題解説〕　水を高處より引き或はポンプ裝置により、庭園・公園等の池中に高く噴き上がらしむるものを云ふ。或は散りて飛沫玉の如く、或は水條垂れて簾の如く、細霧四邊を濕ほし涼味掬すべきを以て夏の季とす。

〔例句〕

噴水　噴水や折れ疊み落つ音涼し　月斗（同人）
噴水の脚見えぬ迄暮れにけり　太郎（同）
噴水に日傘さしつれ來りけり　蝶夢（同）

井戸替（ゐどかへ）

晒井（さらゐ）　井浚へ（ゐさらへ）

〔古書校註〕　【年浪草】倭俗、六月浚井（略）瘟疫（一）を去るの遺意か。○さらし井、六月ゐのもとをさらゆるをいふ。紀州の名所にさらゝ井といふあれど、夏に

はさらゆる心也。○夫木 松がねにけささらゝゐを手にうけて、思はぬ外の秋をしるかな。定家。

註 （一）流行病、おこり。

季題解説 井水を清むるため、水を汲み乾して底に沈める塵埃を浚ふ事を云ふ。漢書禮儀志に「夏至井を浚へば水を改め、冬至に燧を鑚て火を改れば、癘疫を去るべし」とあり、昔より井戸替は夏日行ふ。

例句

晒井　新しい水湧く音や井の底に　一茶（七番日記）
さらし井や雫聞かるゝ宵のほど　蓼太（句集）
晒井の水湧く音の遠きかな　月斗（同人）
庭の井を晒して朽葉上げにけり　同（同）
井戸替　井戸替やのれんを外す通り庭　王岳（同）
朝の間に井戸替しけり七日盆　夜臼（同）

參考 上古は自ら泉流する水を引きてこれを貯水し、井又は走井など稱す。後漸く穿鑿して造れるものがある、その構造によつて板井・筒井・石井の別あり、近世また堀ぬき井戸がある。又我國最古のものは伊勢神宮の御井である

古事記の天の眞名井は蓋し井の初見であらう。古事記傳の説明に因ると書紀一書の天の渟名井と共に水を湛へたる所であると言つてある。晒井は常陸國風土記に見え、萬葉の歌にも常陸の眞名井を詠んで「三栗の那賀に向きたる晒井の止まず通はむ其處に妻もが」とある。

青簾（あをすだれ）

竹簾（たけすだれ）　葭簾（よしすだれ）　伊豫簾（いよすだれ）　玉簾（たますだれ）　繪簾（ゑすだれ）　管簾（くだすだれ）　簾賣（すだれうり）

季題解説 一般に夏季用ふる新しき簾の類を總稱して云ふ。あけ放ちたる家内の見透しを塞ぎ或は日光を遮り、或は涼味を添ふる爲めに用ゆ。古くは簀も簾も共に「す」と云ひ、古歌にも「小簾」と訓めるより見れば、簀發達して簾となりしものと見ゆ。青簾の名は四月一日宮中に於て新しく掛けられたる青葉の簾、又翡翠の簾と云へる名稱を汎く傳へられたるものならん。玉簾は簾の美稱、葭簾は葭の莖にて編みたるもの、俗に葭簀と云ふ。伊豫簾は伊豫の名産にして細き篠にて編み最も上品なるものなり。管簾は短く切りたる細き竹の管に絲を通して垂れたるもの。（參照）青葉簾

例句

青簾　今日にかはる淨瑠璃障子の青簾　其角（五元集拾遺）

能答ふわか侍や青すだれ　太祇（太祇句選）
よし吹やわか葉ながらの青簾　几董（井華集）
薄くれや酒けしめさる青すだれ　白雄（白雄句集）
うら表おもてはわきて青簾　同（同）
青簾白衣の美人通ふ見ゆ　一茶（句帖）
むら雨のかゝれとてしも青簾　同（享和句帖）
岩くらやさもなき家の青簾　同（旅日記）
一人呑む茶も朔日ぞ青簾　同（七番日記）
爪さきを戀のはじめや青簾　蓼太（蓼太句集）

【参考】簾は古くは玉垂と云つて、玉を緒に貫いて並べ下げること、今日氷屋などで見掛ける品の如くであつた。後、葦竹などを編んで今日の製の如くなつたのである。翠簾師といふ者、崇神天皇の御代にありと人倫訓蒙圖彙に見える。

青葉簾（あをばすだれ）　翡翠の簾（ひすゐのすだれ）　四月一日の青簾（しぐわついちじつのあをすだれ）

【古書校註】

【滑稽雜談】四月一日藻鹽草に云、青葉の簾とは、翡翠の簾とて四月一日新らしき御すだれを掛る也。（一）此説は更衣に御殿の翠簾を掛かへらるゝなりといへり。（二）又一説夏山の翠なるを云ふともいへり。兩説捨つべからず。（略）初夏の古詞に云、簾は纖に、細雨は正に、黄梅の景は尙く、淸和の風自ら涼し。又暖幕・晴簾などいふ語もみな孟夏（二）の天氣をいへり。是夏山の景を青簾と云ふに相當せりや。

【年浪草】一說加茂の葵を四月朔日翠簾に掛らるゝゆへ、青葉簾と云ふ。○御湯殿記に曰、加茂祭より葵を獻ず。これを御殿の四方に掛る也。葵を七くさり、桂の枝さけて簾のこまるの輪に指し入るなり。（略）（三）賀茂松尾の社司よりまへの日、しかるべき所へ奉る。又諸道具へも葵をかくるゆへに、榮雅の歌にけふといへば簾のみかはあふひ草ふるき文にもまきそへてけり。○徒然草に云、祭過ぎぬれば、後の葵ふようなりとて、ある人のみすなるを、みな、とらせられしが、色なくおぼえ侍しを、よき人のし給ふことなれば、さるべきにやとおもひしかど周防内侍が　かくれどもかひなき物は諸ともにみすの葵のかれはなりけり、とよめるも母屋のみすに、あふひのかゝりたるかれはをよめるよし、家の集にかけり。ふるきうたの詞書にも、かれたる葵にさしてつかはしけると侍り、枕草子にもこしかたこひしき物はかれたる葵とかけるこそいみじくなつかしうと。

【註】（一）以下共藻の自說也。（二）年浪草には雅談のこの語をあげ、靑葉の簾は、夏山の景を云ふにあらずと否定せり。（三）徒然の自說也。

【季題解説】古、四月一日、宮中に於て新しく掛けられたる簾と云ふ。藻鹽草に「靑葉の簾とは翡翠の簾とて四月一日、新しき簾を掛るなり、一說に

加茂の葵を四月朔日翠簾に掛らるゝ故、青葉の簾と云ふ」とあり、青簾はもと宮中の御儀なりしが、それより一般にも四月一日に掛くる風習となれり。歳時記栞草に「青藍云、元祿年間の句に　客は誰乳母が所に青簾、などいへるたぐひの作例あれば、天子の御簾をのみいふといへる說はなづめり」と。【參照】青簾

【例句】

四月一日の青簾　よく答ふ若侍や青簾　太祇（太祇句集）

五位六位色こきまぜよ青すだれ　嵐雪（玄峰集）

葭戸（よしど）

【季題解說】　葭障子（よししやうじ）　葭屛風（よしびやうぶ）　簀戸（すど）

蘆を以て編みしものを張りたる風通しよきものにして夏用ゆ。葭屛風は葭を以て編みたるものを嵌め込みたる屛風を云ふ、方今は葭の外細く削りたる竹を以て作れる衝立などあり。

【例句】

葭戸　夕立風葭戸衝立倒しけり　月斗（同人）

玄關にすぐ人の居し葭戸かな　虛子（ホトトギス）

葭障子　この部屋は西日があたる葭障子　月斗（同人）

綟障子（もぢしやうじ）

【季題解說】　綟屛風（もぢびやうぶ）　網障子（あみしやうじ）　網窓（あみまど）

綟とは麻絲にて目を粗く織りたる布にして、簀戸の類に張りたるものを綟障子と云ふ。綟屛風は同じく綟を張りたる屛風にして共に夏季に用ふ。又金網にて張りたる網障子・網窓等あり。

【參考】　綟、倭訓栞に「布にもぢと言ふは綟を訓めり、集韻に麻綟と云へる是なるべし。多識編に纙をよみ、今浙兵制緣には紗を譯せり、大雙紙に、もぢさいみかりそめにも殿中へはきすと言へり」とある。

【例句】

綟障子　綟障子薄き蚊やりの流れけり　月斗（同人）

麻暖簾（あさのれん）　夏暖簾（なつのれん）

【季題解說】　夏季專用の暖簾にして、目の粗き麻布にて作るを麻のれんと云ふ。淺黃色の涼しき模樣ある木棉にて作れる夏のれんもあり。

【例句】

麻暖簾　麻暖簾淸書き見ゆる老舖哉　月斗（同人）

麻暖簾食あたりして家にゐる　喜一（同）

板塞をかつぎこみけり麻暖簾　千翁（同）

夏暖簾　塵盛りて入りし女や夏暖簾　舍利弗（ホトヽギス）

寐莚（ねむしろ）　寐茣蓙（ねござ）

季題解説 午睡に用ゐ、床に用ゐる、茣蓙をいふ。

例句

寐茣蓙

蚊帳吊つて寐茣蓙を二本投げ入れぬ　月　斗（同　人）

雨近き風のしめりや寐茣蓙まく　山　雯（同　）

簟（たかむしろ）　竹席（ちくせき）

古書解説 【三才圖會】簟、太筋竹之名、蓮筵。簟は竹莚（一）なり。周公始て之を作る。切韻に云ふ、竹を織りて席となし　暑月之を鋪く。按るに近世は籐竹の席なり。

註（一）竹であんだむしろ。

季題解説 簟は竹莚なり、竹を細く割りて編みたるもの。夏日涼味を呼ぶため之を敷き用ふ。

實際知識 簟は組方にも大きさにも種類あり。唐趣味、茶趣味のものたり。價、廉ならず。〔參照〕寐莚　蒲莚

例句

簟

窗形に晝寐の臺や簟　芭　蕉（續猿蓑）

漣やあふみ表をたかむしろ　其　角（五元集拾遺）

ひとりでに風まきかへす簟　浪　化（浪化上人發句集）

弓取の帶の細さよたかむしろ　蕪　村（夏より）

細脛に夕風さはる簟　同（新五子稿）

緣ばなへ世を遁れけりたかむしろ　同（全　集）

晉人の尻べた見えつ簟　同（同　）

浴して且うれしさよたかむしろ　召　波（春泥發句集）

もろこしの夢はさめたり簟　同（同　）

廬山寺の僧似合しや簟　曉　臺（曉臺句集）

胸毛に風こそわたれたかむしろ　蓼　太（蓼太句集）

たかむしろしたしむ事を禁じけり　白　雄（白雄句集）

行水にうちまたがせよたかむしろ　同（同　）

參照考 新撰字鏡竹「田點反席也阿牟志呂」とある。これの用法に就いては、延喜式に「元日供奉威儀掃部二人分ニ列左右一。（中略）官人率ニ掃部一昇ニ豐樂殿一供ニ御座一、南廂西第二間敷ニ簟四枚一爲ニ御酒臺下敷一」と見え、又江家次第元日宴會にも「南廂西第二間差南去東西行鋪ニ簟四枚一近例依レ無レ籠鋪レ莚識也、亦唯有ニ二枚一」とも記してある。本朝麗藻に「敷レ簟待ニ客來一」とある題下に「夏天敷レ簟立徘徊、終日相期待ニ客來一、且掃ニ門前一當レ月展、預空ニ

吊床（ハンモック）　吊床（つりどこ）　寐網（ねあみ）

季題解説 太き丈夫な絲にて粗く編み、立木・柱又は船中などに釣り寐床とする網なり、中央幅廣く兩端に至り次第に狹く藥研形をなす。夏日は之を綠蔭などに釣りて暑氣を避け讀書或は午睡を取るによく、此種のものを以て夏の季となす。

實作注意 船中などにありて四季用ゐるものは夏の季題としてのハンモックにあらず。

例句 ハンモック

ハンモック入日にたゝむ松林　月田（同人）
樹に括る日除の傘やハンモック　朱由（同）
ハンモック涼しき居間に吊りかへぬ　雲龍（同）
ハンモック繪本落して眠りけり　木牛（同）
垣の外通る人ありハンモック　炭子（ホトヽギス）

參考 原語 Hammock はもと Hamock と言ふ木の名より出で、初めブラジルの土民はこの木の皮を編みて作り、夜間これを樹枝にかけた。コロンブスの新大陸發見時代にはカリブ族の間に行はれ、草又は植物の纎維を編んで作つたもので、今も熱帶地方では諸種の草を以つて作るといふ。

夏座布團（なつざぶとん）　革布團（かはぶとん）　麻座布團（あさざぶとん）　藺座布團（ゐざぶとん）

季題解説 夏期用ゐる座布團はすべて涼しげなるものを用ゐ、皮・麻布・藺・油團等にて作る、或はキヤラコ等の白布を覆ひたるものを用ゆ、その用ゐたる材料によりて、革布團・麻座布團・藺座布團等の名あり。〔參照〕夏布團（ナツブトン）　冬—布團（フトン）

例句 革布團

革布團青き疊に浮みけり　虛子（ホトヽギス）

夏布團（なつぶとん）　夏衾（なつぶすま）　麻布團（あさぶとん）

季題解説 夏布團は棉を薄くし、絹布・麻布・棉布・平絽・友染等の如き觸感輕き材料にて仕立つ、最も適するは麻布にして之を麻布團と云ふ。

實作注意 蒲團は蒲を編みて作れる坐用のものにて圓座の類をいふなり。布團の文字を用うべし。歐陽脩の詩に「草席蒲團不レ掃レ塵。松間石上似レ無レ人」〔參照〕夏座布團（ナツザブトン）　冬—布團（フトン）

例句 麻布團

曉の足にさぐるや麻布團　月斗（同人）
寢冷して寢する子や麻布團　滴水（同）

敷紙（しきがみ） 敷紙賣（しきがみうり）

季題解説 夏日、用ゐる敷物にして、紙を以て製し之を糊にして厚く貼り、澁など塗りたるものなり。

例句
敷紙
敷紙に蘭ぼと〱とこぼしけり　大瓦（愛吟）

油團（ゆとん）

季題解説 和紙を貼り合せて油・漆をひきたる敷物を云ふ。表面なめらかにして、冷たければ、夏日の部屋に愛用せらる。

例句
油團
のふれんによき風があるゆとん哉　月斗（同人）
先代が拭き光らせし油團かな　同（同）
わびしさや油團の皺が破れ來し　同（同）
一席の烏鷺鬪はす油團かな　露秖（同）

圓座（ゑんざ） 圓座褥（ゑんざしとね）

季題解説 藁・蒲・藺・菅などの莖葉にて渦の如く平たく編みたる圓き褥なり、端居の廣縁に緑陰の庭上に、圓座を布きたる、初夏の風趣深し。

實作注意 圓坐と書けば一まとゐ一なり、圓座と書すべし。坐はすわるなり、座は席なり。

例句
圓座
一間の廣縁よろしく圓座敷く　月斗（同人）
禪堂に蓮の浮葉の圓座哉　同（同）
松陰に運ぶ浮爐と圓座哉　滴華（同）
箕冷々と圓座置かれけり　郷人（同）

籠枕（かごまくら） 籐枕（とうまくら）

季題解説 竹又は籐にて編みたる枕をいふ、中空にして風通しよし、籐製にて作りたるも涼しく夏に用ふべし。［参照］竹夫人（チクフジン）

例句
籠枕
涼しさや夢もぬけ行籠枕　乙由（麥林集）
五月雨や大工のそばに籠枕　乙貴（三千化）
心にも墨繪の日や籠枕　來山（古今句鑑）
籠枕何の苦もなき鼾かな　瑞々（同人）
籠枕淋しき夢のまゝはりぬ　百遊（同）

水枕（みづまくら）

【季題解說】夏季暑さ激しき時水を滿たせる枕を用ふ、之を水枕と云ふ。護謨又は防水布にて作る。

【實作注意】病人に水枕を用ふることあれど、之れは夏と限らず。

陶枕（たうちん）

磁枕　青磁枕（せいじちん）　白磁枕（はくじちん）　金枕　石枕　[illegible]磁枕　竹枕　木枕　瓦枕　[illegible]枕　皮枕

【季題解說】陶磁にて、つくれる枕なり。夏日の午睡に愛すべし。形狀、種類多し、支那製、日本製あり。德大寺右大臣公能が、獅子の形に造りたる茶盌の枕を女房の許へ贈りし事、十訓抄に見えたり。茶盌の枕とは即ち磁枕なり。

【實作注意】枕の種類多き事驚くべし。金枕・石枕・竹枕・木枕・瓦枕・皮枕等多し。

【例句】

陶枕　陶枕に觸れて耳輪の鳴りにけり　朝冷（同人）
　　　陶枕に火照りし頬を當てにけり　秋津女（同）
磁枕　長崎より家祖求め來し磁枕哉　月斗（同）
　　　風爐の鉢と並べし磁枕かな　同（同）
　　　見殘せし夢惜まるゝ磁枕哉　二月堂（同）

竹夫人（ちくふじん）

竹婦人（ちくふじん）　抱籠（だきかご）　添寢籠（そひねかご）　竹奴（ちくど）　青奴（せいど）　脚馬（きやくば）

【古書校註】

【滑稽雜談】劉熙が釋名に曰、竹几又竹夫人と曰ふ（一）。（略）（二）和俗青竹を以て籠を作る。一圍にして長さ五六尺、短き者三四尺圍も、又小き者有り。夏日晝夜風寐の時身に抱きて涼を取る、名附て抱籠と稱す、是竹夫人ならし。和においても中古の涼具なり。

【増山の井】竹奴、竹婦人は竹の籠をいだき或は是をもたせなどして、涼しからしめんための器也。（略）脚馬もおなじたぐひ也。

註（一）此條に黄山谷の詩集を引き、竹婦人を青奴・竹奴と呼べる文意也。（二）「參考」の部參照、以下其書の自說也。

【季題解說】竹又は籐を編みて造れる籠を抱き或は足をもたせなどして夏日涼を取るものなり、故に抱籠又は脚馬とも云ふ。支那傳來のものなり、竹夫人の名は張文潛竹夫人傳に見ゆ、即ち「元符中漢孝武帝署を甘泉宮に過ぐ、上皇后等に謂て曰く、吾、汝等を愛せざるに非ず、願ふに以て從することとなし、我暐適にして善良、節有りて隱さゞるものを得て親しまんと思ふと、是に於て竹氏を薦め、拜して夫人と爲す」と。【參考】籠枕（カゴマクラ）

竹夫人はまた、添寐籠・竹奴・青奴・脚馬等の名あり。

【實作注意】

【例句】

竹夫人　宴居士はかたい親父よ竹夫人　蕪村（句集）

竹婦人　天にあらば比翼の籠や竹婦人　同（高徳院發句會）

阿古久曾を夢の行衛や竹婦人　同（夜半叟句集）

青きよりおもひそめけり竹婦人　蓼太（蓼太句集）

蓬生や手ぬぐひ懸て竹婦人　同（同　）

淋しさやいくさの留守の竹婦人　子規（全集）

來山の人形より涼し竹婦人　月斗（同人）

抱籠　抱籠や遠か〻へてきのふけふ　其角（五元集拾遺）

抱籠や夢に涼むる竹の陰　也有（蘿葉集）

抱籠やひと夜ふしみのさゞめごと　蕪村（全集）

抱籠や誰に倦れて拂もの　召波（春泥發句集）

添寐籠　夕風が嗅とよばん添寐かご　杉風（杉風句集）

竹奴　涼風に夢がぬけゆく竹奴かな　千燈（同人）

【參考】一名を竹夫人と言ふ。詳しい説明は陔餘叢考に見えてゐる。三才圖會にも「抱籠[illegible]接[illegible]三才圖會云、抱籠俗謂二竹几一、夏日晝寐抱レ之以取レ涼、因得二夫人名一」とある。文晁畫談の中に「山谷云、趙子克示二竹夫人詩一、乃涼寢竹器、然憩レ臂休レ膝、似レ非二夫人之職一、而冬夏青々、竹之風レ上、[illegible]爲名曰二青奴一、東坡志林、坡公寄二柳子玉一云、聞道床頭惟竹几、夫人應レ不レ解卿々、又謂二竹几一與二謝秀才一云、留レ我同行床上座、贈レ君無レ語竹夫人、皆俗以二竹几一爲二竹夫人一」と竹夫人は竹のオシマヅキなり。又趙伯成詩餘話云、「倚之清霄、山谷以二竹夫人一爲二竹奴一」とある。

籐椅子（とういす）

籐寢椅子

【季題解説】籐にて編みつくれる椅子。大形にして仰臥し得べきものを、籐寢椅子と云ふ。夏日、室内、或は庭園等に置きて、これに憩ふ。【季】竹床几（二）

【例句】

籐寢椅子　歸り來て籐椅子に凭る雷す　月斗（同人）

籐椅子に倚る夢月に通ひけり　子角（同　）

籐椅子や[illegible]に[illegible]得し　凡水（同　）

【參考】籐は棕櫚科の蔓生植物で、印度の産である。莖は蔓生にして枝を分たず、太さは一寸位、節と節の間[illegible]延長して長さ數十間にも及ぶ。葉は羽状複葉にして[illegible]、葉柄の上端は葉の先端に於て長く伸長して[illegible]、小葉は長さ一尺乃至一尺二寸幅七八分あり、[illegible]花は[illegible]穗状花序をなす。

花序の外部に數箇の苞あり、植物の皮莖肉共に帽笠等の製作に用ゐられ小刀傘等の柄を卷き、又は皮のつきたるまゝにて砂糖俵を結束し、又小屋の建築其の他結束材料として用途頗る廣い。

竹牀几（たけしやうぎ）

季題解説 竹にて作れる牀几なり。夏日これに凭りて涼し。〔參照〕籐椅子（イス）

例句 竹牀几

竹牀几貰ひ祭の宵の門　月斗（同人）
目かくしす柔かき手や竹牀几　同（同）
竹牀几犬の泥足もて餘す　五味子（同）
竹牀几人の手紙に顏よする　正史（同）
竹牀几老いて天下を靜觀す　凡水（同）
鼠花火が走つて來たり竹牀几　千燈（同）
竹牀几主人と居りて氣づまりな　二月堂（同）

露臺（ろだい）

バルコニー　バルコン

季題解説 屋根なき臺のこと。多く洋式建築物の平かなる屋上などにしつらふ。バルコニーに同じ、夏の夕、植木鉢等に打水したる涼し。

例句 露臺

夕づゝの光親しむ露臺かな　草城（ホト、ギス）
いつまでも一人に暗き露臺哉　竹雨（同）

日除（ひよけ）

日覆（ひおほひ）

季題解説 炎天、日盛りの日影を遮ぎる白布・簀その他の日覆を云ふ。商店街の屋根より屋根に渡したる日覆、西日を受けたる旅籠の窗を覆ふ古幟の色はげたるは侘びしくも昔めきたり。水樓にはためく白き日覆は涼風に駕する趣あり。松原の茶店に立てたる葭簀の日覆は芝居の道具立ての如し。

例句 日覆

藤棚の端に足したる日覆哉　月斗（同人）
海の西日日覆の中のほめき哉　同（同）
庭の木の翠うつせる日覆かな　朝冷（同）
日覆して馬登り行く山路かな　蘇川（同）

日傘（ひがさ）

繪日傘（ゑひがさ）　ひからかさ　青傘（あをがさ）　砂日傘（すなひがさ）

古書參註 【年浪草】夏日、日を禦ぐの傘は白紙或は青紙を以つて之を張り、荏の

油(一)を注ぐ事を用ず。之を日傘と謂ふ。

【三才圖會】 (三)堺の納屋助左衛門三年呂宋より還り來て土産の傘、蠟燭を獻ず。今の傘の制乃ち是也。

季題解説 さしがさの一種にして、紙又は絹にて張り、夏日日光を遮ぎる爲めに用ふる傘をいふ。之に彩色繪を描きたるものを繪日傘と云ふ、小兒婦女子の用ゆるものなり。田舍にては「日唐傘」といふ由。

註 (一)紫衞の一種の實たしぼりことれる油。(二)傘の由來を述ぶ

例句

日傘

木母寺が見ゆる〳〵と日傘哉　一茶（享保句帖）

夕陰や煎じ茶賣の日傘　同（新集）

青天と一つ色也日傘　同（九番日記）

荒き雨堤の日傘走りけり　月斗（同人）

砂日傘

砂日傘濱茶屋のほとりまで　東子房（ホトヽギス）

砂日傘小犬がくゝりあるばかり　たかし（同）

參考 事物起源によれば後魏の世に始るといふ。職員令に「掌ニ供御輿蓋笠翳扇ニ云々とあるが、蓋は繊物製の傘である。又和名抄にも畔織とある。昔は日傘をさすは高貴の人に限つてゐた。後竹を骨とし紙を貼るからかさの製法となり、徳川時代に入りて天和の頃小兒始めて用ゐ、正德享保の頃に儒醫など之を用ゐ、寶曆明和の頃は青紙をはりて專女子の料となつた。又小兒祭禮の時にさすものは柄長く鈴又は綱を付ける。

夏洋傘　パラソル

季題解説 洋傘の一種にして主として日の直射を遮ぐる爲めに用ゐらるゝものにして、白色の毛繻子、綿布、白巾、綿紗、或は繻子等を以て張りたるものなり、或は裏に青色の布を張りたるもの等あり。

實作注意 パラソルは日傘にて專ら婦人用のものにて彩色清新花の如きものなり。アンブレラは雨傘にて無季なり。〔參照〕日傘。

參考 慶應三年の頃始めて我國に行はれ、當初は武士の專用であつたが、伴しその後男女共に一般に之を用ゐるやうになつた。

扇

扇子　檜扇　絹扇　白扇　浮れ扇　扇賣

古書校註

【三才圖會】 按ずるに、或書に云ふ、神功皇后、三韓征伐の時、鶴鵆の羽を見玉ひて、始めて扇を作り玉ふ。今軍中にて用る所の扇は、大概一尺二寸、片面の紙金色に朱を以て日輪を畫き、片面の紙は朱色に金を以て月輪を畫く、骨竹骨八枚、或は十六枚、紐の長さ六寸。

【増山の井】 扇車、扇引、扇すまひ。

季題解說　煽ぐために用ゐらる、扇の古名―かはほり―と云ふは、その形蝙蝠に似たるより名づけらる。河海抄に「蝙蝠を見て扇を作りそめけるなり」とあり、依て夏の扇の名物なり」とあり、又、扇は末廣と云へるは、その開きたる末の方擴がるによる。種類多し。又、扇は日本の創造にかゝるものにて、輝揚支那にては、明時代にこれを換造したるなり。卓上小刀、肉叉を使用する殺風景に對して、二本の箸を使ふ日本式簡明なる、扇子が日本の發案たるは宜なるかなである。

實作注意　暑氣を拂ふ爲の扇子を夏季とす。年中用ゐる祝儀用扇子又は舞扇の類は夏季とは定まらず。〔參照〕團扇（ウチハ）　秋―扇置く（オク）

例句

扇

手すさびに旅の跡見むあふぎ哉　宗因（梅翁宗因發句集）
水の粉に風の垣なる扇かな　其角（五元集拾遺）
維光が後架へ持ちし扇かな　同（五元集）
童べにあふぎとらせん松の陰　嵐雪（玄峰集）
なぐさみもあふぎくらぶる斗也　杉風（杉風句集）
文字摺の石の幅知る扇かな　桃隣（古太白堂句選）
主しれぬ扇手にとる酒宴哉　蕪村（夏より）
暑き日の刀にかゆるあふぎかな　同（高徳句集院發句會）
日に嬉し戀君の扇眞白なる　同（題苑集）
有と見て扇の裏繪おぼつかな　同（句集）
とかくして笠になしつる扇哉　同（同）
渡し呼草のあなたの扇哉　同（同）
戀わたるかま倉武士の扇哉　同（遺稿）
ゆくすへはあくたにふれる扇かな　同（全集）
松かげにみるや扇の道中記　太祇（太祇句選）
貯ともなくて數あるあふぎ哉　同（同）
花鳥もうら繪はうすき扇かな　同（同）
暗がりへ要のはしるあふぎ哉　几董（井華集）
流れ來てなでしこにちる扇かな　同（同）
夜歩行の露にとぢたる扇哉　同（同）
厠なる扇も食らふ鼠かな　同（同）
面頬をはづして將の扇哉　召波（春泥發句集）
わすれめや扇にむすぶ文の數　樗良（樗良發句集）
片手綱馬上に扇見事なり　白雄（白雄句集）
聽問の跡は扇のあらしかな　蓼太（蓼太句集）
いはけなき子にとられたる扇哉　同（同）
海の月扇かぶつて寢たりけり　一茶（享和句帖）
立しなに借下されの扇哉　同（七番日記）

例句

あをによし白き團扇とならうちは　來山　（續いま宮艸下）
紅にうちはのふさの匂かな　其角　（五元集）
腰かけて休むなるべき大うちは　同　（五元集拾遺）
晝寐して手の動きやむ團扇哉　杉風　（杉風句集）
雪隠に去年ながらのうちはかな　也有　（蘿葉集）
畔に團扇さしたる亭主かな　蕪村　（新選）
後家の君黄昏顔のうちはかな　同　（題苑集）
簀ごしに柄から參らすうちはかな　太祇　（太祇句選）
書棄し歌もこし折うちは哉　同　（同）
扇とる手へもてなしのうちはかな　同　（同）
秋ならぬ閨の團扇や君と我　几董　（井華集）
金銀のうちはつらなる小舟哉　闌更　（半化坊發句集）
雨の手にうちは遣ふや小傾城　蓼太　（蓼太句集）
植つけの田づら見てゐる團扇哉　同　（同）
大猫のどさりと寐たる團扇哉　一茶　（七番日記）
印引が印とねまりて團扇哉　同　（同）
團扇の柄なめるを乳のかはり哉　同　（新集）
山ひとつあなたへ行ぞ團扇こせ　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
裸身や團扇をしほの遠歩行　同　（同）
鎗もちの小擧を取て團扇かな　梅室　（梅室家集）
あふぎける團を腕に敷寐かな　太祇　（太祇句集）
回國の笈にさし行團かな　同　（同）
うたゝねの夢想書とる團かな　几董　（井華集）
前帶の女むつまじき團かな　召波　（春泥句集）
まらう人へ團まゐらせん白き方　同　（同）
軒に立て裾叩きいる團かな　闌更　（半化坊發句集）
うつくしき團持けり未亡人　一茶　（享和句帖）
團もてあふがん人の背つき　芭蕉　（笈日記）
いそがしきから白ふみの團かな　許六　（五老井發句集）
もの書て尻に敷れぬ團かな　也有　（蘿葉集）
手ずさみの團畫ん草の汁　蕪村　（新選）
木刀を請へる猛者の團かな　同　（落日庵句集）
突さして團わするゝ俵かな　同　（新五子稿）
うす雲に歌や望まむ白うちは　召波　（春泥發句集）
繪團のそれも清十郎にお夏かな　蕪村　（句集）
水うつてあふぐもよしや澁團　闌更　（半化坊發句集）
滿月の雫を受けん水團扇　子規　（全集）

白團扇
赤團扇
澁團扇
水團扇

【例句】團扇賣　せみ啼や木のぼりしたる團扇賣　其角（五元集）

【[illegible]】倭名類聚抄に「團扇、唐令日、團扇方扇、團扇宇知波。」和訓栞には搨羽の義。蚊蠅を撲拂ふ意であると說明してゐる。嬉遊笑覧には團扇に關する種々の習慣を紹介してゐる。

扇風機（せんぷうき）　電氣團扇（でんきうちは）

【[illegible]】電力によりファンを回轉せしめ、風を生ぜしむる裝置を云ふ。前後左右に首を振るやうに裝置せるものあり、天井に取りつけし大扇風機はシャンデリヤと同時に夏日の必要具たり。然も冷房裝置の大に發達を見ば扇風機も影を隱す時代の來る事たり。【參照】扇（アフギ）、團扇（ウチハ）

【例句】扇風機　扇風機とめて話しぬ夜の雨　月斗（同人）

何もなき袂吹かれぬ扇風機　草城（ホトトギス）

キヤマン　カツト・グラス　切子（きりこ）　ギヤマン切子（きりこ）

【[illegible]】昔時、オランダ渡りと稱せられし、硝子製器の稱なり。側面を刀を用ゐて細かく切り刻りたる如きものを、切子或はカツト・グラスと云ふ。酒瓶・菓子鉢・壺・皿等に多く製し、見るからに涼し。

【例句】切子　古渡りの切子[illegible]境そのものと　月斗（同人）

硝子の鉢　硝子皿

【[illegible]】硝子にてつくりたる食器類にして、光澤の涼しげなるが故に、昔より夏時に多く用ゐられたり。鉢・皿・菓子鉢等に造る。

【[illegible]】近時、硝製にて、煙草セット・茶瓶・盃・徳利・花瓶等のもの多く見られども、特に夏時に用ふるものに非ざれば、無季とす。

【例句】硝子鉢　鮮[illegible]を盛並べたる硝の鉢　月斗（同人）

金魚玉（きんぎよだま）

【[illegible]】金魚を硝子にてつくれる圓き器に入れたるものを云ふ、窗枠に置き搭端等に吊して涼しく美くし。【參照】金魚賣（キンギヨウリ）　動物―金魚（キンギヨ）

【例句】金魚玉　金魚玉に昔一すぢや誰か入れし　月斗（同人）

風鈴（ふうりん）　風鐸（ふうたく）　鐸鈴　風琴　鐵鐸　風鈴賣（ふうりんうり）

【[illegible]】鐘の形に似て小さき金屬を以て造りしものにて、内に舌を垂れ、其

香に煩勝なとをつけて簷などに吊り置き、風に觸れて音を發せしむ。其音蟲の音に似たりとて、松蟲・鈴蟲等の名を附せしものあり。夏日涼を入るる時、その風を受けて鳴る音を賞美するものなり。近來球狀の玻璃にて造れるものあり、風趣之に及ばず。

【類語】釣馬・鐵馬と云ふ。風鐸より來りしものか。

【例句】

風鈴　風鈴や花にはつらき風ながら　蕪村（全集）
風鈴に一聲さはるつばめかな　也有（蘿葉集）
潤上月あり風鈴の綱に凭る　月斗（同人）

【參考】簷鐸々として琴の如き故に風箏とも言ふ。祖庭事苑に「它日風鐸ニ其殿ノ角鈴ニ、忽然有レ聲、復問曰、鈴鳴耶、風鳴耶。答曰、非レ風非レ鈴我心鳴爾」と面白い問答が載せてある。又閑田次筆に「又或人風鈴の詩を話す、通身是口懸ニ虛空ニ、不レ管ニ東西南北風ニ、一等爲レ談ニ般若ニ、滴丁東了滴丁東」此滴丁東の字チチンツンと言ふ唐音也了はリヤンと訓むすべて其の聲を言へりとぞ」とある。興味のある詩である。

吊忍（つりしのぶ）　釣忍（つりしのぶ）

【季題解說】忍は忍草の略稱なり、此草は多年生草本にして、根莖は黑褐色の鱗片を密生し匍匐性を有す、その性質を利用して忍草を集め、その根莖を綰ねて種々の形に作り軒前などに吊す。〔參照〕植物—忍ノ

【例句】

釣忍　釣しのぶ樹にまはらぬ住居かな　蕪村（句集）
蛾々も今酒壷軒に釣忍　闌更（半化坊發句集）
釣忍いづくの岩を離來し　同（同）
忍ぶ釣軒に寄添ふ女かな　同（同）
水かけて夜にしたりけり釣忍　一茶（七番日記）
釣忍落合川の濱座敷　月斗（同人）

走馬燈（そうまとう）　又は廻り燈籠（まはりどうろう）

【季題解說】筒形の枠を作り紙又は薄き布を貼り、内部には黑紙にて筒を作り人・馬・蝶・鳥等種々なる形を切り拔き上部に薄板にて風車を作り心棒を立て、外部の框に取附け廻轉を自由にす、心棒の横に小さき油皿或は蠟燭を立て燈を點じ、その火氣により廻轉せしむ。内側の切り拔きの縮形外部の紙に映り恰も馳驅する如く見ゆる裝置なり。軒に吊して夜の涼趣を添ふなり。〔參照〕秋　燈籠ノ

走馬燈　涼風に火皿飛ばしつ走馬燈　千燈（同人）

岐阜提燈（きふちやうちん）

季題解説 岐阜地方の名産なり、長卵形の提燈にして吉野紙・美濃紙などにて貼り、秋草・鵜飼等涼しげなる繪模樣を畫き金色の金具を打ち美しき總などを垂れたり。夏の夕、軒端に吊して納涼を添ふ。近年盛んに海外に輸出せらる。

例句 岐阜提燈

燈を入るゝ岐阜提燈や夕樂し　虛子（ホト、ギス）

岐阜提燈ほのめきなほる明るさよ　蓼風（同）

夏の燈（なつのひ）

季題解説 夏の燈火を云ふ。

實作注意 暑しとも涼しとも感ずるなり。春の燈の如き感情特色に乏し。

例句 夏の燈

夏の燈に旅行案内くりにけり　千燈（同人）

水盤（すゐばん）

季題解説 水を湛ふるに用ゐる薄き陶器にして、丸型、角型等あり、夏日之に水を滿し、中に水石を置き或は水草・蘆などを植ゑ涼味を專らとせるものなり。近來絹絲草を植うること流行せり。［參照］稗蒔、絹絲草、

例句 水盤

水盤に張る水はねし卓かな　煤六（ホト、ギス）

飯笊（めしざる）

季題解説 夏時、飯の饐ゆるを防ぐために用ふる、笊の飯器なり。多く竹にて製す。蓋あり。

例句 飯笊

飯笊に蚊は鳴いてゐるいとゞかな　青々（妻木）

花氷（はなごほり）

氷細工

季題解説 氷塊の中に美しき草花又は金魚などを凍らしめたるものにして、夏日室内の空氣を冷涼ならしむると共に裝飾用となす。

例句 花氷

花氷夜風當つて傾きぬ　月斗（同人）

花氷噴水として花涼し　[illegible]月（同）

冰室　冰室守　冰室の雪　冰室山

古書校註

【滑稽雜談】　冰室の數、仁德の始には卅四所也。後に廿七字也。山城に十七字、大和に四字、丹波に六字也。いづれも山陰の日影さゝぬ所に、穴を堀り、薄のほどろ（一）を敷きて、氷を納め置く也。然れども山頬にあらず、外邊のみなり。

【山の井】　むかし額田のおほいきみ、闘雞といふ所に狩し給けるに、野中に冰室のあなるを（二）見つけて、やがて帝へ其氷を奉り給ひしより、國々所々に冰室をこをかれて、熱月に用ひおはしましける。是ひむろの御調の（三）權輿とかやいへり。

【年浪草】　冰室の名所、（四）宇多野・松か崎・栗栖野・闘雞野・大野・長坂山。謠曲には丹波の國桑田郡に作れり。その外にも所々見えたり。冰室は山陰の日影さしこまぬ、風よくあたる所に、穴を掘り、わらびのほどろに冰を納めて置き、又冰を雪にて結てをくともいへれば、おのづから（五）雪の消殘りたるもあるべく、深山幽谷には自然に殘りたる雪も有もの也。

【栞草】　（五）冰室の雪とは、冰室にかこひおきたる雪をいふ也。

註　（一）薇の穂ののびたるもの　（二）あるなるを、あるのを。（三）おこり、始り　（四）日本書紀に出づ。（五）年浪草と栞草の說ことなる也

季題解說

古四月一日より九月盡まで宮中に奉る冰を蓄ふるため、山陰に冰室を造り、冬季の冰を夏迄收藏せし處を云ふ。冰室守は冰室の番人を云ひ、冰室の雪は冰室に貯藏せる雪を云ふ。〔參照〕　冰を供ず　植物・冰室櫻

例句

冰室

水の奥冰室尋ぬる柳かな　芭蕉（奥細道拾遺）

開く日も裏白そよぐ冰室かな　梅室（梅室家集）

冰室守

六月の蜜柑見せけり冰室守　言水（俳諧五子稿）

先達や今朝の御山を冰室守　同（同　）

冰室守竜に倦れしはなし哉　曉臺（曉臺句集）

六月を櫻に知るや冰室もり　蓼太（蓼太句集）

參考

夏まで涼を保つ爲山陰に室を穿ち貯藏した所で、「水むすぶ夕よりなほ涼しきは冰室に向ふ松の下蔭」と云ふ古歌もある。謠曲にも冰室の故事と冰の貢捧ぐるさまとを神に寄せ祝言に寄せて述べたものがある。日本書記仁德天皇六十二年五月の條に、額田の大中彥の皇子が大和の國山邊の郡闘雞野にて冰室を御覽になつた事が傳へられてゐる。

冷藏庫　冷藏器

季題解說

夏季冷藏法により、飲食物又は其他變化し易き物質を貯藏する

ものをいふ。古代に於ては洞穴に飲食物を貯藏せり、今日猶ほ地下室に貯藏を行ふ例乏しからず。現今に於ける如く冷却劑として氷を使用せるは十九世紀以來の事なり。家庭用冷藏庫は冷藏箱の上部又は周圍に氷塊を置き室の空所を冷藏場所に充つ。大規模のものに至りては機械式起寒法の發明あり、製氷機に依て冷却せる鹹水を冷藏室に於ける長き鐵管に通じ室の冷却を行ひ、又は冷却せる空氣を直接に室内に送りて冷却するに及び冷藏法は完成するに至れり、今は極めて小規模のもののみ冰塊を用ゆ。

實作注意 冷藏庫は又冷藏器と稱し主に鳥獸肉類・魚類・鷄卵・牛乳・牛酪・果物・野菜・清涼飲料の貯藏に用ゆ。大規模のものは近來アムモニアを起寒用劑として使用する外、炭酸式或は亞硫酸式製冰機等あり。**參照** 冷房(レイバウ)

例句

冷藏庫　冷藏庫につかへて入らぬ西瓜かな　凡水（同人）

冷房(れいばう)　冷房裝置(れいばうさうち)

季題解說 普通液體アンモニヤの氣化による方法を用ゐて、冷寒なる空氣を造り、各房に送るなり。扇風器は局所的に風を起し氣溫の低下に人を誘へども、冷房裝置の如く寒暖計の指度を下げて、炎暑の候よく、冷かさを保たしむる事能はざるなり。燒くが如きアスファルトの鋪道より一步屋内に入れば流汗忽ち解消して、五月、或は十月の候に在るを覺えしむ。**參照** 冷藏庫(レイザウコ)

例句

冷房　冷房や露を結べるシャンデリヤ　禿刀（同人）

冷房や机上の花のしほれずに　月斗（同）

ドライアイス

季題解說 炭酸瓦斯に強大なる壓力を加へ冷却する時は炭酸瓦斯は液體と化す。其の壓力下に於ける液體炭酸瓦斯は鐵製の容器に蓄へ置かるべし。之を一旦、大氣中に放出する時は（即ち氣壓を減ずること）空中の熱を奪ひて凝結（水が氷結すると同樣の理にて）し、白色不透明なる固體となる、之をドライアイスと稱す。冰が水になる時（即ち液體となる）は融解潜熱を要し、更に其の水が蒸氣になる（即ち氣化する）場合は氣化潜熱を要すれども、此のドライアイスは斯る順を經ず直ちに氣化するを以て非常に冷く觸るゝ時に直ちに凍傷すべし。用途、冷却用、近時生魚、野菜の冷藏用に使用せらるれども、生産原價廉ならず、一般の經濟的使用價値なきを憾とす

打水(うちみづ)　水撒き(みづまき)　水打つ(みづうつ)　撒水(さんすゐ)

季題解說 庭先又は露路・街路などに水を撒くをいふ、夏日は土乾燥して

塵埃起り易きのみならず、乾燥して暑氣甚しきを以て水を撒きて涼味を呼ぶなり。

【作法注意】涼味を加ふる爲めの打水を以て主とす、單に塵埃への目的のみを以て水を撒くものにあらず、街路の撒水車の如きは四時之を用ふ。

【例句】

打水　打水にひとるすゞみや陰の中　丈草（丈草發句集）
うち水やあらし集る樹々の中　梅室（梅室家集）
水打つ　水打て露こしらへる門邊哉　卜紙（未來句選）
水打て修竹涼を呼はふ也　月斗（同人）
水打つてむくれし苔を鎮めけり　樵青（同）

行水（ぎやうずゐ）

【季題解説】行水は夏期に行はるゝ簡易なる湯浴みにして、庭先或は背戸などに於て盥に湯を湛へて浴するを云ふ。

【作法注意】行水名殘は秋なり。〔一〇三〕秋―行水の名殘

【例句】

行水　行水も日までになりぬむしのこゑ　來山（續今宮艸）
行水や白粉花に肌ふるゝ　月斗（同人）
行水に留か木の枝ゆさぶりぬ　一央（同）

納涼（すゞみ）

涼む　門涼み　涼み人　下涼み　橋涼み　川涼み　舟涼み　川原涼み　屋根涼み　小涼み　端涼み　河岸涼み　土手涼み　門涼み　庭涼み　床涼み　朝涼み　晝涼み　夕涼み　宵涼み　夜涼み　小夜涼み　寺涼み　涼み風呂　涼み寢　涼み臺　涼み舟　涼み床　涼み將棋　納涼茶屋　納涼衣　一と涼み　初涼み　大涼み　前涼み　後涼み

【古書校註】【年浪草】開元遺事に曰、長安の富人、暑伏の中に至る毎に、各林亭の内に於て、晝柱を植て、錦を以つて結て涼棚となし、（略）避暑の會をなす。（略）（倭俗納涼の遊をなすこと、開元遺事の避暑會と謂ふがごとし。

【季題解説】暑をさまし、忘れん爲めに、川邊に橋上に又河畔等の涼しき場所に出で一味の涼を掬し或は風に當るを云ふ。場所により「橋涼み」「川涼み」「川原涼み」「舟涼み」「屋根涼み」「緣涼み」「門涼み」「河岸涼み」「床涼み」「寺涼み」等あり、又時間によりて「朝涼み」「晝涼み」「夕涼み」「宵涼み」「夜涼み」「小夜涼み」等あり、又涼みの手段によりて、「涼み風呂」「涼み寢」「涼み臺」「涼み舟」「涼み床」「涼み將棋」「涼み淨瑠璃」等あり、「納涼茶屋」は納涼の客を迎へる爲めに海濱、川端などに造られたる茶屋を云ふ。昔は六月七日の

涼む　下涼み　橋涼み　川涼み　涼み舟　床涼み　端涼み　門涼み　庭涼み　朝涼み　晝涼み　夕涼み

涼まんと月夜になればざれありく　杉風　（杉風句集）
松の葉もよみつくすほど涼みけり　千代女　（千代尼發句集）
涼まんと出れば下に下にかな　一茶　（七番日記）
命なりわづかの笠の下涼み　芭蕉　（芭蕉翁全傳）
百里來たりほどは雲井の下涼み　同　（同）
高砂のゆかりや松の下すゞみ　支考　（蓮二吟集）
千人が手を欄干や橋すゞみ　其角　（五元集）
まし水にあやうき橋を涼かな　太祇　（太祇句選）
川涼み顔に泥ぬる泳きかな　其角　（五元集）
うき草のかさなりもあへずすゞみ川　蕪村　（落日庵句集）
つゝ立て帆になる袖や涼みぶね　丈草　（丈草發句集）
涼舟袖にたちつくす列子哉　蕪村　（遺稿）
我を招く玉むし出よ涼ぶね　几董　（井華集）
涼舟いとし若衆の小鼓は　召波　（春泥發句集）
東路の毛髄恥かし床すゞみ　芭蕉　（ばせを翁）
人にまた暑い顔あり端涼み　其角　（五元集）
自剃して涼とる木のはし居哉　蕪村　（書翰）
梳る人もありけり門すゞみ　白雄　（白雄句集）
門涼み人の葬咲にけり　一茶　（嘉永板發句集）
門涼み夜は煤くさくなりにけり　同　（七番日記）
此松にかへす風あり庭すゞみ　其角　（五元集）
結髪や鏡になれて朝すゞみ　鬼貫　（俳諧七車）
わかれ場や川の處で朝すゞみ　浪化　（浪化上人發句集）
うか／＼と南草に醉ふや朝涼　召波　（春泥發句集）
草臥の根ぬけや澳の晝すゞみ　丈草　（丈草發句集）
破風口に日影やよはる夕涼　芭蕉　（三日月日記）
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　同　（繼尾集）
瓜作る君かあれなど夕すゞみ　同　（栞集）
めしあふぐ嬶が馳走や夕すゞみ　同　（笈日記）
川かぜや薄がきたる夕すゞみ　同　（己が光）
たがために朝起晝寐ゆふすゞみ　其角　（五元集）
夕すゞみよくぞ男に生れける　同　（五元集拾遺）
寐たろぢを子とも起すな夕涼　同　（同）
此舟に老たるはなし夕すゞみ　同　（同）
町すじは祭に似たり夕すゞみ　去來　（去來發句集）
夕すゞみ疝氣起して歸りけり　同　（同）
夕涼み妬しや湖のあり所　言水　（俳諧五子稿）
あら壁や水で字を吹く夕すゞみ　丈草　（丈草發句集）

闇の火のあなたこなたを夕涼　支考（蓮二吟集）
牛になる合點ぞ朝寐夕涼　同（同）
山伏の髮すきたてゝ夕すゞみ　許六（五老井發句集）
おもひ出や花なき隅田の夕涼　桃隣（古太白堂句選）
丈山の口が過たり夕すゞみ　蕪村（句集）
殿原は細工めさるや夕すゞみ　同（新五子稿）
似た僧のしばしとてこそ夕涼　同（全集）
殿原の綱にあさるや夕すゞみ　同（落日庵句集）
酒ゆるす醫師も見えてゆふ涼　几董（井華集）
こよろぎのいそ魚買んゆふ涼　同（同）
水練を舟の御遊や夕涼　召波（春泥發句集）
はだか子に乳の毛ひかれて夕涼　曉臺（曉臺句集）
夕すゞみ糺の岸や崩らむ　同（同）
草の戸や柳すかして夕すゞみ　同（同）
とし寄の多さよ木曾の夕すゞみ　士朗（枇杷園句集）
岩つたふうつり心や夕すゞみ　蓼太（蓼太句集）
舷に蓼摺小木や夕すゞみ　白雄（白雄句集）
川中に床几三ツ四ツ夕すゞみ　一茶（句帖）
芭蕉樣の臑をかぢつて夕涼　同（七番日記）
犬ころが火入の番や夕涼　同（同）
何事もむかしになりぬゆふすゞみ　成美（成美家集）
皿鉢もほのかに闇の宵すゞみ　芭蕉（其便）
夜涼みや大僧正のおどけ口　一茶（九番日記）
陸奥殿の涼臺より千松島　曉臺（曉臺句集）

宵涼み
夜涼み
涼み臺

端居（はしゐ）　夕端居（ゆふはしゐ）

季題解説 初夏の端居なり。きのふ迄襖障子閉ざしたる部屋も、或は開け、或は取り外し、調度も夏になりたる時、緣近く端居して、すが〳〵しき外氣に觸れ、庭面の若芽、若葉、あるは垣薔薇或は八重の餘花などの庭に親しむの端居なり、初袷の夕端居、緣に夕餉をしたゝむるなども初夏の風味なり。

實作注意 一般の歳時記は暑を避くる爲とあるは全然の誤りなり。涼をとるの端居に、端涼み、緣涼み也。誤まらるる勿れ。【參照】納涼（すゞみ）。

例句

端居
慈姑に日をつくまでの端居哉　來山（續今宮草）
端居して池を淺へん心あり　月斗（同人）
端居する我を知らじな立話　圭岳（同）

端居

端居して話少き夫婦哉　伏兎（同　人）
しやひ足に蚊かされし端居哉　久美女（同　）
端居して相うつ心二ッかな　麥門冬（同　）

夕端居

夕端居菖蒲は水に影さしつ　曲荳（同　）

蚊帳（かや）

蚊幮（かちゅう）　蚊幬　近江蚊帳（あふみがや）　奈良蚊帳（ならがや）　蚊帳賣（かやうり）　枕蚊帳（まくらがや）　母衣蚊帳（ほろがや）　幌蚊帳

蚊帳賣の圖

[illegible]

【年浪草】南史に曰、崔祖思が傳に、張妃の房惟(一)碧綃(二)の蚊幬と云々(略)蚊幬は即本邦蚊帳是也。

【滑稽雜談】紗の類・生絹の類を以て製す。其布を以て製する者、洛都の三條又は江州八幡鄕よりおほく製して商ふ也。和俗初夏にいたつて蚊帳を釣り初るに、申の日を以てす。是蚊を去の義にや。餘意考ふ可し。

註（一）閨房の帷。（二）碧の絹織物。

[illegible]　夏季蚊を防ぐに用ふる具にして蚊屋を意味し、最上のものは絹、紗にて作れるものあれども通常は麻木綿の萌黄色又は白を多く用ふ。小兒の午睡などに用ひる「母衣蚊帳」、割竹又は針金を列べ、之を撓めて弓形となし、蚊帳地を張れり、「枕蚊帳」とも云ふ。「面蚊帳」は劍道に用ふる面の如き形をなし、面部のみを覆ふて蚊を防ぐ具なり。蚊帳の產地としては近江最も有名なり。奈良蚊帳も名あり。もとその仕立は盡く手縫なりしが現今は器械を以て仕上げ「縫目なしの蚊帳」など現はるゝに至れり、「蚊帳賣」蚊帳を賣り步く商人を云ふ。一[illegible]　紙帳（秋）　秋の蚊帳（アキノカヤ）

[illegible]

蚊帳

蚊帳の香けふめづらしと宵寐かな　來山（續今宮艸）
起臥ににほふ蚊帳も破れぬべし　惟然（惟然坊句集）
花鳥の中に蚊屋釣る繪の間哉　支考（蓮二吟集）
もてなしも見えすく蚊屋の一重哉　也有（蘿葉集）
なきからに一夜蚊屋釣る名殘かな　同（同　）
こぬ人につられて廣き蚊帳かな　同（同　）
あら涼し裾吹蚊やも根なし草　蕪村（高徳院發句台）
草の戶によき蚊帳たるゝ法師かな　同（同　）
僧とめて嬉しと幮を高ふ釣　同（新五子稿）

蚊帳　人もなき蚊帳に日のさす宿屋かな　梅室（梅室家集）
蚊屋つれば蚊もおもしろし月に飛　同（同）
近江蚊帳　近江蚊帳汗やさゞ波夜の床　芭蕉（六百番發句集）
蚊帳賣　かや賣の一聲村にあまりけり　一茶（新集）
枕蚊帳　顔白き子のうれしさよまくら蚊帳　蕪村（新花摘）

【參考】倭訓栞に「蚊を幬を言ふは蚊屋也、日本紀に見えたり。儀式帳に蚊屋帷とも見ゆ」とある。序に日本書紀の本文を引用してみると、應神天皇四十一年二月の條に「是日、阿知使主等、自レ呉至二筑紫二中略既率二三婦女一以至二津國一、及二于武庫一而天皇崩之不レ及、卽獻二于大鷦鷯尊一、是女人等之後、今呉衣縫蚊屋衣縫是也」と見えて居る。更に播磨風土記、飾磨郡「賀野里、幣丘土中上、右稱二加野一者、品太天皇巡行之時、此處造レ殿、仍張二蚊屋一、故號二加野一、山川之名亦與レ野同」とあり、古くから行はれゐた事が知られる。

紙帳（しちやう）　紙帳賣（しちやううり）

【季題解説】紙を張り合せて作りたる蚊帳。寛文・延寶の頃は三都共に之を賣歩きしと云ふ。富民は白紙に墨畫等を描き所々窗の如く切除き紗などをもて貼りふさぎしを用ゐしもありき。昔時賣歩きしは狹く下廣きものなりしが自家製には上下同尺のものもあり。普通は貧民の用ゐしものなりとぞ。

〔參照〕蚊帳ヵ

【例句】
紙帳　夜早ねん紙帳に風を入るゝ音　其角（五元集拾遺）
朝日さす紙帳のうちや蚊の迷ひ　丈草（丈草發句集）
霧雨に木下闇の紙帳かな　嵐雪（玄峰集）
雞鳴や柱踏ゆる紙帳ごし　惟然（惟然坊句集）
我庵は紙帳かぶせて置うよや　蓼太（蓼太句集）
業平の知つて居らるゝ紙帳かな　同（同）
竹ならぬ人雪に寢る紙帳かな　也有（蘿葉集）
影釣て置て月まつ紙帳かな　同（同・）
子が出來て今年は早き紙帳かな　同（同）
下陰や紙帳の中に鉦の音　闌更（半化坊發句集）
ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉　一茶（おらが春）
留守中も釣り放しなる紙帳かな　同（同）

蚊遣火（かやりび）

蚊遣　蚊火　かいぶし　蚊燻へ　蚊除　蚊遣木　蚊遣草　蚊遣香　蚊遣粉　蚊燻べ粉　蚊火種　蚊をやく　蚊除け香水

【古書校註】【滑稽雜談】順和名に曰、蚊火新撰萬葉集の歌に云ふ蚊遣火、今按るに蚊

火也。出る所未詳。但し俗說に蚊、煙に遇へば則ち去る。仍て夏夜庭中に火を燻し、煙を放つ。故に以て之を名く。

【日次紀事】五月(略)民間榧木(一)の斷を買ひ、之を燒き、蚊子を薰す、是蚊遣火と謂ふ。

註（一）カヤの木。

季題解說 物を燻べて烟をあげ、蚊を追ふものを云ふ。之に用ゐるものには、青葉・鋸屑・榧の葉・楠の木片・除蟲菊・陳皮・線香等種々あり。昔は、榧の葉を燻べる時は、その烟にて蚊の嘴曲ると稱せられ多く用ゐられしが、近年除蟲菊の最も有效なること認められ、之が栽培盛んとなりしより之を原料とせる各種の蚊遣香製造せらるゝに至れり。蚊遣香の原料の配合は各秘密にて異れども、大體左の原料を混合し、熱湯を注ぎて十分に捏り、之を壓搾器に入れて線狀に絞り出す。原料は杉粉・除蟲菊粉末・生麩等なり。蚊燻べ粉は除蟲菊の花及莖を粉末にしたるものなり。之等を用ゐる爲めに近來種々なる器具考案されたり。

實作注意 蚊除け香水は、同じく蚊を防ぐ目的を以て製せられ、酒精にレモングラス油若しくはユーカリ油を溶解したるものにして、之を皮膚に塗布すれば蚊は此香氣を嫌ひ寄りつかず。【參照】動物―蚊。

例句

蚊遣火

かやり火や蚊屋つる方に老獨り　其角（五元集）
蚊遣り火に夕顏白し燈は　同（五元集拾遺）
蚊やり火に鉄箱から團扇かな　同（同）
蚊遣火や葵簾にむせる嫁の聲　許六（五老井發句集）
蚊遣火や柴門多く関似たり　蕪村（新五子稿）
かやり火のうたたのこるや夜の雨　太祇（太祇句選）
蚊遣火もみゆや戸さゝぬ門並び　同（同）
蚊遣火やうらやましくも松の月　蓼太（蓼太句集）
蚊やり火に佛なぶらん青松葉　也有（蘿葉集）
かやり火や螢も草は燃せとも　同（同）
蚊遣火のけぶりの末に鳴く蚊哉　白雄（白雄句集）
蚊遣火に并べて行くや一意利　蒼虬（蒼虬翁句集）
香つくり藥打つ宵の蚊やりかな　其角（五元集拾遺）
眞れとより外には見えぬ蚊遣かな　嵐雪（玄峰集）
大齋に外は風在る蚊遣かな　青水（碧落子稿）
燻覧して香わろき草の蚊遣かな　去來（去來發句集）
蚊遣にはなさで香たく悔かな　同（同）
弘法を煙にしたる蚊遣かな　支考（蓮二吟集）
佛光をあちら向かせる蚊やりかな　也有（蘿葉集）
お供へも煙の末をかやりかな　同（同）

蚊燻

蚊遣

時は今宗祇の髭もかやりかな　也有（蘿葉集）
しはらくは亭主も逃げる蚊やりかな　同（同）
晝中の下女に蚊やりの匂ひかな　同（同）
食ひ殘す一把を半のかやりかな　同（同）
隼隱の小城を責める蚊やりかな　同（同）
もやすでも消すでもなうて蚊やり哉　同（同）
捨てた身を食ふまいとて蚊やり哉　同（同）
蚊はこちへはいる隣のかやりかな　同（同）
わが宿の蚊やりへ戻る大工かな　同（同）
たく内も蚤にくはるゝ蚊やりかな　同（同）
辻番の我身ひとつもかやりかな　同（同）
高き家の御製の外に蚊やり哉　同（同）
所化寮の窓に夜明の蚊遣哉　同（同）
骨折をくつて木挽のかやりかな　同（同）
纜つる舟に蘆開の蚊やりかな　同（蘿の落葉）
垣越えて蟇のにげ行くかやり哉　蕪村（句集）
蚊やりしてまいらす僧の坐右かな　同（同）
三軒家大阪人のかやりかな　同（同）
腹あしき隣同士の蚊遣かな　同（新選）
浴して蚊やりに遠きあるじかな　同（連句會草稿）
燃え立つて皃はづかしき蚊遣哉　同（同）
蚊遣して宿りうれしや草の月　同（新五子稿）
學する机の上の蚊やりかな　同（同）
いざさらば蚊遣のがれん虎溪まで　同（同）
いとまなき身に暮れかゝるかやり哉　同（遺稿）
一日のけふもかやりのけぶりかな　同（同）
雨にもゆる鵜飼が宿の蚊遣哉　同（同）
歸り來る夫の咽ぶ蚊やりかな　太祇（太祇句選）
宗鑑が竹の挽香を蚊遣かな　几董（井華集）
雞の寐つかぬ宿の蚊やり哉　同（同）
蚊はつらく蚊遣いぶせき浮世哉　同（同）
吹折て蟇のむせびしかやり哉　同（同）
隼隱に信玄おはす蚊やり哉　召波（春泥發句集）
世やうつりかはらの院の蚊遣哉　同（同）
蚊やりして武士守りぬ崩レ塀　同（同）
開車の子の門に泣きゐる蚊遣哉　闌更（半化坊發句集）
蓬生や君がためとて焚蚊遣　同（同）
隱家の暮れて葉に洩る蚊やり哉　蓼太（蓼太句集）

上に紗の切れを以て蠅のたかるを防ぐものなり。【參照】蠅叩　蠅帳　蠅捕器　動物—蠅

【例句】

蠅除　蠅除に網鹽辛の小壺かな　千燈（同　人）

蠅叩　蠅打

【解説】蠅を叩きて殺す具。棕櫚の葉、或は厚紙等にてつくる。又針金・金網らにて造りたるもの坊間に販賣せり。【參照】蠅除　蠅捕器　蠅帳　動物—蠅

【例句】

蠅叩　蠅叩持て家中廻りけり　月斗（同　人）
蠅叩大福帳の表紙かな　同（　）
一日でゆるんで來り蠅叩　千燈（同　）
潔癖の質にて蠅を叩くなり　女々（同　）
蠅打　蠅打ちを持ちて出てくる主かな　虛子（ホトトギス）

蠅捕器

蠅捕紙　蠅捕りボン　蠅取瓶

【解説】蠅の好めるものを以て蠅を誘ひ之を捕るものにして、明治頃よく行はれしは、蠅取瓶なり。その他蠅捕りボン・蠅取紙・或は竹皮に黐を塗れるもの等をも用ふ。【參照】蠅除　蠅叩　蠅帳　動物—蠅

【例句】

蠅取紙　蠅取紙蠅眞黑に小氣味よし　凡水（同　人）
蠅取りボン　薬局に吊りし蠅取りボンかな　涼舟（同　）

蠅帳

蠅入らず

【解説】蠅のたかるを防ぎ且つ風を通すため、食品を入れ置く小さき厨子の如き形をなせるものにして、四方又は三方の框に紗又は金網を張れるものなり。蠅入らずとも云ふ。【參照】蠅除　蠅叩　蠅捕器　動物—蠅

【例句】

蠅入らず　蠅入らずより殘肴を出しにけり　涼舟（同　人）

退蟲の呪

【[illegible]】

【俳諧歳時記】（四月八日）江戸の俗、四月八日に著の實を莖ともに採り、番椒（一）ともに糸もて結びこれを行燈のうちへ釣りおく也、かくすれば、夏蟲を

せんとする比より、街頭をうりありく也。これを夕河岸といふ。炎暑の時、魚るゐ多くは腐臭す。ゆゑに、夕河岸の魚をよしとす。

註 (一)江戸名所圖會の魚市の條に、「船町・小田原町・安針町の間、悉く鮮魚の肆なり」と見えてゐる。
(二)夕方の獵、卽ち午後とれた魚。

季題解說 東京にて毎年盛夏の頃、夕河岸と稱し、魚河岸に於て夕方の市場立つ。是れ暑中は魚類腐敗し易きを以て相州或は房洲方面より日中に著船したるものは直ちに賣場に並べられ鬻がる。大阪にては多く泉州ものの小魚をのぼすなり。晝網・晝市と云ふ。夕河岸に到著する魚は、主として鰺・鰯等の小魚より小鯖・鰹の類なり。夕鰺と云へるは夕河岸に賣らるゝ鰺を云ふ。

例句

晝網　晝網や雨そぼつ町呼び走る　月斗（同　人）
晝網や焼けつくやうに賣り歩く　同（同　）

參考 清元三社祭の歌詞に「網のひかりは夕鰺や晝網夜網に凪も良く乘り込む河岸の相場にきけば生貝生鯛生鰯（下略）」。夕河岸は多く近海の漁獵でこの日の漁獲を市によせる。江戸人はこれによつて新鮮の魚味を賞したものである。

釣堀（つりぼり）　箱釣（はこづり）

季題解說 天然の沼池又は穿ちたる池に、鯉鮒等の魚類を放ち料金を徴して、釣らしむるを云ふ。夏季に至れば處々の釣堀開始す。これの一種にして、町中に於て大いなる木製の水槽を備へ、之に魚を放ち、餌を用ゐずして鉤を以て釣らしむるものあり、之を箱釣と云ふ。參照 動物—金魚（キンギヨ）緋鯉（ヒゴイ）

例句

釣堀　釣堀に飽かず夕となりにけり　犀州（同　人）
釣堀や辨當腰にうちならび　千代子（ホトトギス）

筍釣　筍釣に大きな鯉を敬遠す　正克（同人）
　　　筍釣の造り柳に灯れり　霜穗（ホトヽギス）

按摩の夜店（あんまのよみせ）

【季題解説】 盛夏の夕丹波福知山を流るゝ由良川に架せる音無瀨橋畔の堤上には納涼の人多く集る。牀几に腰を下して川風に吹るればいづこより來りしか、身なり醜くからぬ按摩挨拶もせず肩を採む、いなむれば又一人來りて肩を採む、稍執拗なる嫌あるも肩を採ましなから涼を入るゝもの堤上三三五々、遠くに聞ゆる福知山踊の音頭を聞きつゝ夜を更すものあり、これを按摩の夜店と云ふ。

【例句】
按摩の夜店　按摩の夜店猪崎新地の踊り聲　夜臼（同人）

地紙賣（ちがみうり）

【季題解説】 江戸時代の夏の頃、扇面の地紙を賣り歩るきし人を云ふ。

水賣（みづうり）

【季題解説】 江戸の俗、涼しげに飾りたてたる屋臺を荷ひ砂糖水など賣り歩きしなり。〔参照〕砂糖水（夏）

【例句】
水賣　一文が水を馬にも呑せけり　一茶（九番日記）
　　　江戸住や錢出た水をやたらうつ　同（同）
　　　水うりや聲ばかりでも冷っこい　同（句帖）

氷賣（こほりうり）

【季題解説】 氷を賣り歩くなり。屋臺車を曳きゆくもあり、或は桶を擔ひて呼び賣るもあり、近來都會にては影をかくしたり。

【例句】
氷賣　けふに逢しなのゝ雪の賣られけり　一茶（九番日記）

苗賣（なへうり）

【季題解説】 初夏の候・茄子・胡瓜・朝顔・桔梗・絲瓜・夕顔などの苗を賣りに來るものを云ふ。獨得の呼び聲面白く張り上げて賣り來り、美音に餘韻長く引き初夏の情緒深きものなり。東京に限れるものの如し。

【例句】
苗賣　東京の苗賣來りふたりづれ　みづほ（ホトヽギス）

苗賣　苗賣や[illegible]月殘る裏通り　秋海棠（同　人）

金魚賣（きんぎよかうり）

【季題解說】金魚を桶に入れたるを擔ひて目拔き市中を賣り歩くなり。その呼聲一種の間延びたる趣きありて薄暑の町に興味をもたらすなり。又緣日・夜店等に盥又は船方桶に金魚を入れて、捕らせ賣れるなどもあり。【參照】動物　金魚。

【例句】
金魚賣　金魚賣長屋を通り拔けにけり　芥　川（同　人）
金魚賣に京は祭が近づきぬ　二月堂（同　）

螢賣（ほたるうり）

【季題解說】曲物や框等に紗を張りたる螢籠を夕の町に賣步く。【參照】螢狩（ホタルガリ）螢籠（ホタルカゴ）動物—螢（ホタル）

【例句】
螢賣　ほたるうりすゞしの頭巾着たり兒　曉　臺（曉臺句集）

定齋賣（ぢやうさいうり）　定齋屋（ぢやうさいや）

【季題解說】夏に至り延命散と稱する散藥を賣り步くを云ふ。その行裝は、表具を雕めたる藥櫃を天秤棒にて擔ぎ、藥櫃に付けたる環を鳴らしつゝ行商す。暑氣拂ひの腹藥にして、昔は、定齋の效能として炎天に頭を晒すも暑氣に中らぬと稱し、定齋賣は如何なる暑熱の日と雖も笠を戴かざるを例とせり。

【例句】
定齋賣　定齋賣宮の木蔭に憩ひゐる　喜　山（同　人）

【參考】明國の沈惟敬といふ者、朝鮮を經て本朝に來たる蠻藥の法を秀吉公に獻じた。それで大阪藥種屋定齋と云ふ者天性俳優を好み秀吉公猿樂を催さるゝ時必ず定齋を召してわざをぎをなさしむ。因つて御意に應じかの惟敬が名法を授けられ家產とすべしとなし、その名を呼びて定齋藥となす。此の藥諸病を治する事明也。今京東洞院青木屋は其の裔也と近代世事談にのせてある。

毒消賣（どくけしうり）

【季題解說】毒消と稱する中毒を消す一種の解毒劑を賣りにくる行商人にして、殆んど女のみなり。每年夏に至れば、紺絣の筒袖に紺の手甲・脚半をつけ、手拭を冠り、黑木棉の大風呂敷に荷を背負ひて、戶每に賣り步くも

のにして越後より來る。

【例句】 毒消賣　暮れに毒消賣が來りけり　喜山（同人）

孫太郎蟲賣（まごたらうむしうり）

【季題解說】 孫太郎蟲は「へびとんぼ」と稱する脈翅類に屬する昆蟲の幼蟲なり。體長一寸五分位の圓筒形にして、三對の胸肢を有す。之を捕へて串にさし、乾燥せしめたるものは、小兒の疳藥として用ゐらる。これを賣り歩くもの夏季白股引に羽織を著けて「奥州サイ川名產孫太郎蟲」と呼びつゝ、市中を行くなり。【參照】動物―孫太郎蟲

鹽辛賣（しほからうり）

【季題解說】 鹽辛は、烏賊或は鰹の肉・腸等を鹽漬にしたるものにて、夏季の食料なり。これを市中に賣り歩く者を、鹽辛賣と云ふ。多くは女にして、紺の筒袖、紺の脚半に草鞋を穿き、籠或は塗樽を擔ひ歩く。

松前渡る（まつまへわたる）

【出典考證】 【年浪草】是は南部津輕等の商人、產物交易の爲に、蝦夷松前へ渡るを云ふ。北海道、凡冬春の間、寒氣強く、波濤穩かならず。故に、四月始て出帆し、九月を限りに歸國す。依て渡るを夏とし、上るを秋とす。（藻鹽草）（略）蝦夷松前の昆布其大なる者は一株にして林を爲し、葉の長さ二三丈、之れを長昆布と謂ふ。石に附て生ず。

【季題考證】 南部・津輕等の奥州商人等、蝦夷松前の地へ渡るに、冬春の間は寒氣強く、北海の波濤荒きを以て陰曆四月即ち初夏の候に至るを待ちて渡り、歸國は陰曆九月を以てせり、故に松前に渡るを夏とし上るを秋とす。

【作句注意】 必しも松前渡ると云ふに及ばず、松前に渡る意味句面に現はるれば可なり。【參照】秋―松前歸るへ

【例句】 松前渡　蝦夷人の望む渡りの帆十分　碧梧桐（俳句大全）
海鳥の呼ぶ北門の渡りかな　同（同）

【季題解說】 北海冬季の間は寒氣強く波濤穩ならずして船を出す事が出來ず、陰曆四月始めて出帆し同九月を限りて歸國する。依つて渡るを夏とし歸るを秋とするのである。

蛇籠編む（じやかごあむ）

【季題解說】 割竹を以て圓長き籠を作り、これに石を填充したるを蛇籠と云

ふ。直徑一二尺、長さ一間以上五間に及ぶもあり。夏季出水を防ぎ或は灌漑引水の爲川岸等に積上ぐる也。

例句

蛇籠編む　砂燒けてほめく河原や蛇籠編む　涼舟（同人）

茶詰

季題解説　新茶を壺へ詰めることを云ふ。【參照】新茶

納豆造る

京納豆　濱納豆　一休納豆　大德寺納豆　鹽辛納豆　唐納豆　寺納豆　薪納豆

出典校註

【年浪草】（一）大德寺の中、眞珠庵の製する所一休和尙の製法に傚ふ。故に一休納豆と謂ふ。又聚樂淨福寺・蓼倉法雲寺・嵯峨淸涼寺の製を佳となす。又一方金山寺味噌と稱する者あり。

註（一）雍州府志による。

季題解説　夏期に造る納豆は、唐納豆・京納豆、卽ち一休納豆の類をいひ、普通納豆を云ふにあらず。味噌醬油篇に此品は夏期に製造するを最も良好なりとすとあり。大豆壹斗を味噌の加減に煮烹し又別に大麥一斗を克く舂き、一夜水に浸漬して抄ひ揚げ、蒸籠に上し、次で日光に乾し、火にて炒りたる後挽割り、右二品を混合し、永く放置し、十分熟成するを俟ちて澁紙の上に取り、擴布して日に乾かし之を碎粉し、尙ほ山椒五合を粉末となし粉碎する際に之を混合し鹽三升を各六升にて煮沸し溶解して合したるものを注ぎ、能く調合し堅く壓しつけ置き、一週間每に臼を以て搗き三週間にて終はり、貯藏すること五十餘日にして始めて食用に供す。

實作注意　夏造る納豆は豉にして、濱納豆・一休納豆・大德寺納豆・鹽辛納豆・唐納豆・寺納豆等の製法皆是れより先づ。白大豆を煮又は蒸し藁苞に包みて溫室に入れ醱酵せしめて造れる苞納豆・絲ひき納豆とは異る。

例句

納豆造る　松風の納豆仕込む精舍かな　紅葉（紅葉句集）

參考　大豆にて製した食品の一種。支那で豉と言ひ我國では古は久岐と稱へたものと、又は未醬納豆又は豆腐屋納豆と稱するものとがある。二者共に原料は大豆なれど味異る。夏日爲込むのは豉の方である。支那の豉は鹹豉と淡豉の二種あり。製法本草綱目に詳である。現時の濱名納豆・唐納豆・寺納豆・一休納豆・薪納豆・大德寺納豆・鹽辛納豆は鹹豉から出たものらしい。普通の納豆は未醬納豆又は豆腐屋納豆である。

酢造る

季題解説　酢卽ち食酢の我國固有の製法は、酒或は其原料たる米より製した

る米酢、或は其副産物たる酒粕より製したる粕酢なり。米酢は變敗の徴ある清酒を原料として醋酸菌を繁殖せしめ生成するものにして、關西地方に多く用ゐらるゝと雖も其風味は關東地方に賞用せらるゝ粕酢に遠く及ばず。粕酢は二三年開緘間せる桶に貯藏せし古粕を以て上等の原料とす。灘地方に於ける酒粕の價格は、酢としての原料相場に依て支配せらるゝと云はる。酒精醋酵を完成せしむる關係上、酢は夏季之を造るを最もよしとす。

例句
酢造る
酢作るや細々として落る花　青々（妻木）

醤油造る（しやうゆつくる）

古書校註
【三才圖會】醤油、倭名比之保、本邦俗に油の字を加ふ。其未搾らざる者を醤となす。（略）鹽一斗、水二斗五升を用ひて煎沸（一）して、冷し定め、桶に盛り、豆麥の麹を投じて、毎日撹杖（二）を以て之を攪く。夏七十五日冬百日にして成る。之を搾りて油を取る。
註（一）煮ること　（二）かぶら

季題解説
醤油は、大豆及小麥を原料となし、之に麹菌を發育せしめて製したる醤油麹を食鹽水に仕込み、數ヶ月乃至數年の後壓搾して製す。醤油麹に食鹽水を加へたる醪仕込中に於て、澱粉は糖類に變化し、次で酒精に醗酵せられ、更に一部はエスター及酸に變化す。この醪中成分變化の旺盛なるは夏期にして冬期は殆んど休止す。故に醪の熟成には夏期を經過することを要す。是れ醤油造るを夏の季題とせる所以なり。

實作注意
醤油の一種に「溜」と稱するものあり、之は大豆のみを原料として製したるものにして、蒸熱したる大豆を練り合せ、味噌狀の塊となし、醸造場の二階に廣げ、自然に麹菌を繁殖せしめたるものなり。愛知・岐阜・三重の産とす。【参照】醤造る（二三二）

例句
醤油造る
醤油造る庭に麹の花粉かな　可竹（同人）

参考
我國固有の調味品である。醤は正倉院文書にも見え、それが發達して醤油になつたと考へられる。

醤造る（ひしほつくる）

古書校註
【年浪草】醤珍[illegible]用、（略）其法豆を碾ひて炒磨し、粉と成し、一斗に麹三斗を入れ、和し匀へ、（一）切り片き、暴ひ黄にし、之を晒す。毎十斤に鹽五斤を入れ、井水、淹過し（二）晒し成り、之を收む。
註（一）ととのふ　（二）ひたし漬す

季題解説
醤とは味噌に類する一種の食料品にして、大豆を熬り、皮を去り

たる後小麦又は裸麦と共に水に浸して麹に製し、塩水に混じ、夏、天日に乾して熟するものなり。なめものと称し其儘食すれど、又之に瓜・茄子など漬けても食す、和名抄に一醤、比之保、豆醢也一とあり。【参照】醤油造る

奈良漬製す

【古書校註】【三才図会】六月土用の中に、鮮しく青色の者を採りて、之を破り、（略）酒糟を用ひて、蔵瓜（一）を包む【滑稽雑談】今按に和州の南都（二）、往昔より酒の名家あり。糟漬の香物を製して、将軍家へも献ずる事侍る。是を奈良漬と称する故糟漬を都にてなら漬と云ならし（三）此等の類四時蓄へ用るなれば、句作にて雑にもなるべし。作者心得べし。

【註】（一）貯蔵する瓜。（二）今の奈良市をさす。（三）其磧の自説也

【季題解説】奈良漬は糟漬の一種にして、越瓜・茄子・大根・西瓜などを酒の粕に漬けたるものを云ふ。之を製するには、夏土用中、越瓜を二つ割にして種を去り、酒の粕に適当の塩を合せたるものゝ中に漬け込み、蓋を固くして封じ置くなり。此二つ割にしたるものゝ一片を一舟と云ふ。茄子其他のものも同じ例にて漬け込む。もと大和国奈良より製し始めたるより云へるが、醒睡笑には「瓜の糟つけ、奈良づけといふ事は、かすがのあればよいといふ縁なり」とあり。

雲雀鷹

【古書校註】【滑稽雑談】一説云、ひばり鷹とは、鷹の一種の名にあらず。是毛をかふることを云ふ也。夏に至りてねり雲雀とて毛をかふ、其の雲雀におなじく鷹も毛をかふれば云ふ也。（一）

【註】（一）此の説誤れり、練雲雀の項参照

【季題解説】陰暦六月頃雲雀毛を易へ、所謂練雲雀と呼ばる。此の頃飛揚敏ならざる故に鷹を放ちて之を捕ふるによし、乃ち鷹による練雲雀狩のことをかく云ふ。【参照】動物－練雲雀ネリヒバリ

水雛笛

【季題解説】これを吹きて水雛を誘致するなり。呼笛と答笛とあり。径四分、長さ一寸八分ばかりの竹孔を穿つ。「ピョウ〳〵〳〵ピョッ〳〵〳〵〳〵〳〵」と吹きつづけて一息やすみ、更に前より少しく長く吹きつづく。答笛は「クル〳〵〳〵〳〵」と吹く。五月より七月迄の間、朝夕に吹く。猟者は此二笛を携へをれり。【参照】動物－水雛クヒナ

兄弟のさつお中よきほぐしかな　蕪村（新花摘）
火串ふつて獵矢そゝぐ小瀧かな　白雄（白雄句集）
もえさしの火串に鹿の血かな　同（同）
曉は土にもえ入火串かな　闌更（半化坊發句集）
角も牙も今朝哀なる火串哉　同（同）
松の葉の散るさへ移る火串哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
谷木の鬼なおそれそともし笛　其角（五元集拾遺）

照射笛

【参考】倭名類聚抄に「照射、續捜神記云、聶友小時家貧・常照射・見二一白鹿一中レ之、明晨尋二蹤血一矣。（今按俗云照射以毛之義血波利和）」とある。ともし・ほぐし・ねらひがり共に同事異名。藤原顯綱の歌に「五月やみ茂き端山にたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるゝ」（千載和歌集）。

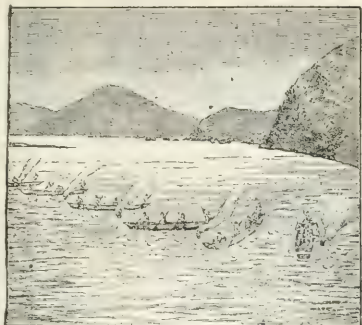
鵜飼

鵜飼火　鵜篝　鵜松明　鵜川　鵜匠　鵜遣　鵜飼船　鵜船　鵜
鵜繩　鵜籠　荒鵜　勞鵜　歩行鵜　放鵜

【古書校註】

【滑稽雜談】或書に云、鵜を飼ふ事は、唐土の濟龍と云し人、始て此道を始めたり。我朝にては、一條（イ、花山）院の御宇、賴政朝臣始て鷹を飼ひ、鵜を飼ひ給ふ也。然ども萬葉にもおほく鵜川の事を讀り。

【御傘】夜川たつなどは鵜つかふ事也。名所の横川の事にあらず。

【年浪草】或説に云、岐阜長良の鵜飼、六月暑を避け納涼の爲に近國より來て見物す。所謂上川七艘、下川七艘とて、舟數十四艘なり。長良渡より小瀨の渡まで、三里の間を上川と云ひ、長良より川下三里を下川と云ふ。上川の鮎を上品とす。舟一艘に鵜十二羽、鵜遣一人、舳當一人なり。舟の舳先に鐵綱を下し、篝火を燒く。十二の鵜を左の手に、鵜繩を脂の股に分け持つ。（略）月の入より舟を下し、月夜の間は遣はず。鵜遣に腰蓑と云ふをかけ、小き笠を着る。凡三四月に始り八月晦日を限とす。

【季題解說】飼ひ馴したる鵜を使ひて魚、殊に鮎を捕らしむるを云ふ。鵜飼は各地にて行はるれど美濃長良川の鵜飼最も名高し。此處の鵜飼は古くより行はれ、醍醐天皇の御宇、既に鮎を獻ぜし事文獻に見ゆ。江戸時代には御三荷と稱し每年香魚を獻

じ、明治時代に入りては宮内省より御獵場を定められたり。鵜飼は毎年初夏五月十二日より始り、秋季十月十二日に終る。月明を厭ふを以て暗を待ちて舟を泛ぶ、卽ち上弦の夜は月の落つるを待ち、下弦の夜は日の暮れぬ程に上流に遡り飼下ろす。「鵜舟」は一組五艘又は七艘とし、船一艘には鵜匠一人、中鵜使一人、船夫二人乗り込み、各船毎に篝を點じ、影水に映じて頗る美觀なり。鵜匠は烏帽子・腰蓑の古風な裝ひにて、舳先に立ちて鵜十二羽を使ひ、中鵜使は中央部にゐて四羽を使ふを例とす。鵜は「手繩」に繋がれ、水中に放たる。鵜匠は、ほう〳〵と聲を揚げて勢をつけ、舸子は舷側を叩いて鵜を勵ますれば、鵜は鮎を追うて水中を縱橫に潛るを、鵜匠は巧みに手繩を操り捌きて亂れしめず、やがて鵜數尾を啣む時は波上に浮ぶ、鵜匠は繩を引き鵜の呑みたる鮎を吐かせ、再び水に追ひ入る。觀覽船は鵜船と共に下りながら此光景を見る。

實作注意 鵜川・鵜飼船・鵜舟・鵜繩・鵜遣ひ・鵜匠・荒鵜・離鵜・鵜繩船・鵜松明（鵜飼が雨中に用ふる松明、樹の皮を用ゐて造ると云ふ）等、何れも鵜飼をあらはす季題なり。〔[illegible]〕動物—鵜ウ

例句

鵜飼

中食に鵜飼のもどる夜半かな　浪化（浪化上人發句集）
老なりし鵜飼ことしは見えぬかな　蕪村（句集）
鵜飼見てもどれば宿のみだ佛　同（落日庵句集）

鵜飼火

むら雨の鵜の火に過る光かな　同（同）
列立て火影行鵜や夜の水　太祇（太祇句選）
早瀬とは鵜の火に見ゆる遙也　召波（青泥發句集）
鵜の面に川波かゝる火影哉　闌更（半化坊發句集）

鵜篝

鵜もふれぬ煙まとうて過にけり　梅室（梅室家集）
吐ぬ鵜のほむらにもゆる篝哉　其角（五元集）
曉は寒いやうなりうのかゞり　曉臺（曉臺句集）
山本や鹿の子迷はす鵜のかゞり　同（同）
山風や是迄と見る鵜のかゞり　蒼虬（蒼虬翁發句集）
落來るやむしも松葉も鵜の篝　同（同）
鵜のかゞり消て長良に灯の一ツ　士朗（枇杷園句集）

鵜川

あまつさへ經木踏行く鵜川かな　言水（俳諧五子稿）
葎に住みて淫流るゝ鵜川かな　蕪村（夏より）
闇風に吹さましたる鵜川哉　同（新五子稿）
鬢頭の名護屋顏なる鵜河かな　同（新花摘）
只一人鵜河見にゆくこゝろ哉　同（落日庵句集）
なき魂の飛ぶ夜まゝ有鵜川哉　同（同）
目ふたいて僧の過行鵜川哉　同（同）
おふたちの月に成ゐる鵜川ねな　太祇（太祇句選）

底見えて鵜川あさまし夜の水　太祇（太祇句選）

篝の集の火風によはる鵜川哉　梅室（梅室家集）

鵜匠　燻けたる鵜匠が顔や朝朗　桃隣（古太白堂句選）

鵜匠らがひたと溝たり小夜嵐　乙二（をのゝえ草稿）

鵜遣　鵜遣ひを見に来し我をあさましき　樗良（樗良発句集）

鵜つかひや其子に譲るにふつゝ　蓼太（蓼太句集）

鵜つかひの目にはすごし螢ごし　梅室（梅室家集）

鵜飼　面白うてやがて悲しき鵜船かな　芭蕉（曠野）

夜やいつの長良の鵜船曾て見し　蕪村（遺稿）

鵜船みる岸や闇路をたどりたどり　太祇（太祇句選）

曲り江にものいひかはす鵜船哉　召波（春泥発句集）

待ほどもなくて過ゆく鵜船哉　士朗（枇杷園句集）

草の風やがて出て来る鵜船哉　蒼虬（蒼虬翁発句集）

鵜縄　川風や鵜縄つくろふ小手の上　几董（井華集）

吐す鵜と放つ鵜縄のいとまなみ　召波（春泥発句集）

歩行鵜・放れ鵜　見物の火にはぐれたる歩行鵜哉　去来（去来発句集）

はなれ鵜の火を得さらぬも泪かな　暁臺（暁臺句集）

荒鵜　舟梁に細きぬれ身やあら鵜共　太祇（太祇句選）

舟ばたに心はなさぬあら鵜かな　梅室（梅室家集）

労れ鵜　労れ鵜や遠寺の鐘も木の間より　蓼太（蓼太句集）

【參考】鵜の本邦に産するもの「通常のう」「しまつ」（島津）「ひめう」（姫鵜）「ちしまう」（千島鵜）の四種としてゐる。鵜飼は漁法の一種で又これを「うがは」（鵜河）又「うづかひれふ」（鵜使料）とも言うてゐる。此の鵜飼の歴史は、遠く神武天皇以前に遡り得る事は、日本書紀同天皇の巻に養鵜部のあるにても知られる。萬葉集にも大伴家持の歌を始め其の他かなり多く存して居る。現在では美濃國長良川等にその面影をとゞむるのみである。

鮎狩（あゆがり）　鮎釣（あゆつり）　鮎漁（あゆれふ）　鮎掛（あゆかけ）　鮎舁（あゆかき）　囮鮎（をとりあゆ）

【季題解説】鮎を獲るを鮎狩・鮎漁と云ふ。方法種々あり、鵜を用ゐてとる長良川の鵜飼の如き（鵜飼の項参照）、葦集せる鮎には掩網を用ゆる如き、鈎の基部（鈎本）に羽毛を結びて、蟲の餌に擬したる蚊針にて釣る如き、或は又天蠶絲に囮鮎を結び、其尾に近く鈎を付け、鮎は互に體を磨りつけ合ふ習性を利して、その鈎にてひつかけ之を獲る如きこれなり。【參照】鵜飼（ウカヒ）

動物―鮎（アユ）

【例句】

鮎舁　鮎舁や笠脱ぎあへず水換ゆる　子角（同人）

囮鮎　囮鮎囮ひ疲れ腹見する　青水（同　）

網舟（あみぶね）

季題解説 港湾・湖川等にて投網を打ちて魚を獲る小舟を云ふ。普通船頭と網打の二人乗なり。投網の風を孕みたる、青蘆に囁き寄する小波等、涼味掬すべきものあり。

例句
網舟

網舟や夕汐鰡の飛ぶ頻り　月斗（同人）
網舟や夕の橋の人だかり　同（同）

川狩（かはがり）

毒流し（どくながし）　投網（とあみ）　扠網（さであみ）　扇網（おほぎあみ）　川干（かはぼし）し　瀬干（せぼ）し

古書校注

【日次紀事】六月賀茂川・吉野川・八瀬川・嵯峨大井川・梅津桂川・吉祥院村鳥羽淀川・宇治川・處々良賤川狩。扠網或は扇網（一）を以て之を執る。或は簗を設け、又夜に入りて、炬を燃し、魚を驚かして之を執る。是を夜振と謂ふ。或は鵜を放って、之を執る。是を鵜飼と謂ふ。賀茂川鰷魚鮠魚鮎魚并大井川丹波川の鰷魚味殊に良しとす。

（一）扇の形をせる網、扠網はさで也

季題解説 夏日川に魚を捕獲するを云ふ、川干し・瀬干しは川の二股に流るゝ支の一方を塞ぎて水を干して魚を漁獲するを云ひ、毒流しは、魚に対する毒物例へば橘・山椒の皮等を煮きしものを流し之に酔ひて浮び上る魚を捕獲するを云ふ。今官禁なり。川狩に用ゐる具には扇網（[illegible]）又すくひ網、四手網、唐網、持網、笯網打等あり。（一二三）夜振、魚簗、鵜飼。

例句
川狩

川狩や帰去来といふ声す也　蕪村（夏より）
川狩や楼上の人の見しり貌　同（句集）
川狩や夜目にもそれと長刀　太祇（太祇句選）
川狩や身にそふ陰間かたらひぬ　召波（春泥句集）
川狩す魚串立てる石の間　闌更（半化坊発句集）
川狩や君と飼置岩の上　同（同）
川狩や[illegible]の篠　白雄（白雄句集）
川がりや地蔵のひざの小脇差　一茶（七番日記）
川狩[illegible]木立　同（[illegible]集）
川狩やしきりに痒き蛭の口　子規（子規句集）
月に対す村に唐網の水煙　蕉村（句集）
匱[illegible]買人[illegible]白し　几董（[illegible]集）
えものある網やうれしきひそみ声　同（同）
水[illegible]　召波（春泥発句集）

川干　　川干、黄顙魚に歩をさゝれけり　　赤蓼（同　人）

【参考】川狩の中、毒流の事を禁じた文献が類聚三代格の太政官符に「一應ﾚ禁ﾆ流ﾚ毒捕魚事」と見え、又吾妻鏡八巻にも殺生を禁断すると共に焼狩毒流の事を停止した旨の記事がある。漁獵の僣行を禁じたものである。

夜振（よぶり）

川鵜灯（かはともし）　夜振火（よぶりび）

【季題解説】夜に入りて松明を點じ、魚を獲るを云ふ。魚は火を戀ひ寄る習性を利したる也。普通唐網にて、鯉・鮒・鯰等を捕る。鰻は特に魚扠にて突きとるなり。山村の溪流などにては銛にて打ち押へ捕ふるなり。【参照】川狩

【例句】

夜振
雨後の月誰そや夜ぶりの脛白き　　蕪村（句集）
藻の花に鯰押へし夜振かな　　子規（全集）
獺の水濁されし夜振かな　　一央（同人）

箱眼鏡（はこめがね）

【季題解説】底を硝子張にしたる普通高さ一尺五六寸、一尺四方位の枡形の箱にして、これにて水中を覗きつゝ魚類を捕ふる也。

【例句】

箱眼鏡
箱眼鏡海の神秘を覗く可く　　崇朝（同人）
箱眼鏡にうつる魚影なかりけり　　五峯（同）

水中眼鏡（すいちゆうめがね）

水眼鏡（みづめがね）

【季題解説】夏季游泳の際、或は鮎突等に水中に潜る時用ふる、水の浸入を防ぐやう作りたる眼鏡なり。

【例句】

水眼鏡
水眼鏡黒き面にかけにけり　　千燈（同人）
水眼鏡拉かはけに又潜る　　凡水（同）

魚簗（やな）

簗打つ（やなうつ）　簗さす（やなさす）　簗の瀬（やなのせ）　簗瀬（やなせ）　簗番（やなばん）　簗守（やなもり）

【古書校註】

〔御傘〕魚梁うつ、夏也。(一)

【栞草】魚簗とばかりいへば、夏(二)なり。上り簗を春とし、下り簗を秋とす。(略)と貞享式にあり。

註 (一)今四月の季とす。魚梁は魚簗也。(二)六月の季として用ふ。

【季題解説】川瀬などに裝置して魚を捕ふる具を云ふ。その法、川の中に杭を打ち竝べて水を堰き、一部を明け、そこに流れくる魚を簗簀に承けて捕ふ

る設備を云ふ。簗打つ・簗さすは魚梁を設くるを云ひ、簗瀬・簗の瀬は簗を設けある瀬と云ふ。

實作注意 魚梁とばかり云へば夏にして、上り簗下り簗は他期なり。〔參照〕春―上り簗ノボリ　秋―下り簗クダリ

例句

簗　日通りの岡の榎や簗さかひ　其角（五元集）
　手に足に逆まく水や簗つくる　泊雲（ホトトギス）
　見守れる簗に濁りのますばかり　牧青（同　）
簗打　簗打や罪の淵瀬をしらぬ人　浪化（浪化上人發句集）

參考 唐韻には「取レ魚箔也」とある。倭訓栞には簗を訓んでゐる。萬葉時代の古傳説に、吉野人味稲といふ者、吉野川に魚簗を掛けて魚を捕つてゐた處、拓（桑の類）の枝が流れて來てこれに掛り、それが美女と化して味稲と契つたといふ話がある。

鯖さば　釣つり

鯖火さばび　[illegible]　[illegible]

古書校註 【三才圖會】 [illegible]（二）に類して、鱗無くて細し。（略）背、正青色の中、蒼黑の微斑文あり。或は縄の纏るが如し。（略）能登の海上四月中、多き時數萬浪の爲めに漂はさる。釣せず、網せず、亦獲可し。

註（一）あめの魚。

季題解説 鯖は年を通じて漁獲さるゝも、普通四月より十月迄を漁期とす。殊に舊七八月頃最も盛なり。晝はしばり網、夜は焚入網又は焚釣を以てす。焚釣は瓦斯ランプ或は篝を用ゐて一艘に四五人にて舟多く出すため甚だ壯觀なり。深さ二三十尋の海にて七八尋に針を下す。餌は生鰯或は鯖の肉を切りたる共餌とす。多くは手釣なれども、群集して水面に湧く時は篝屑に飛びつくことあり、其時は長

き五尺程の強き竿にて釣る。一人にて四五百匹釣ることも珍らしからず。

【實地注意】　鯖は洋海に棲息する魚なれど、夏秋の頃内海灣内に來る。常に群をなして中層を遊泳す。産卵期は五月より七月の間に在りて、九月以後は深所に至る。産卵期の畢末を以て季と定めたるなるべきも、體肥滿し脂の乘りて味よきは秋なり。【參照】動物―鯖

【例句】

鯖釣

鯖釣や淡路を出でて舟世帶　　　會北（類題發句集）

鯖を釣る撒き餌ひろごり流れけり　　　胡月（同人）

べら釣（つり）

【季題解説】　鱚釣の梅雨期に尺八鱚に交りて組べらが時々掛ることは釣人の忘れ得ぬ樂みなれど七月に入りて照り込みの後、藻が拔けてべら釣の時期に入れば十尋十五尋の場所にて釣れるはつれる、正にはめ食ひの狀態にて餌をさすことに追はれ、赤べら・青べら取交ぜて素人にても三百を上げ得るは誂らしき實にて正にべら釣りオンパレードと云ひつべし。且つべらは生きの強き魚なれば夏釣りには見逃すべからず。

鱚（きす）釣（つり）

鱚船（きすぶね）　鱚子釣（きすごつり）

【季題解説】　鱚は內海、沿岸の砂底四十尋前後に棲み、春、暖潮に從ひて、海岸の淺きに寄り來る。大阪灣にては五月上旬より、東京灣にては下旬より釣れはじめ、六七月の頃最も盛にして、よく百尾以上を得。これに用ゆる船を鱚船と云ふ。釣の最好時は大潮後の數日を以て良とす。多く未明より船を出して正午まで釣る。餌にはゴカイ・海エビ等を用ゐ竿釣よりも手釣の方多し。【參照】動物―鱚（スキ）

【例句】

鱚釣

鱚釣や三里漕ぎ出て日出づる　　　日囚（同人）

鱚釣やみな默しゐる釣れざかり　　　玄洋（同　）

烏賊（いか）釣（つり）

烏賊船（いかぶね）

【季題解説】　夏季多く行はる。其方法は烏賊の種類により一に異なるも、一本鉤を使用するを普通とす。日中は海底深きにひそみ日暮るゝに從ひて、漸時表層へ浮び上るものなれば、釣の時間によりて釣絲の長さを異にす。餌釣は稀にて、各地とも擬餌鉤により引かけ釣揚ぐ。その釣竿三尺に四五寸の柄あり。天蠶絲をのばし末端に鉤を附く。一艘の舟に四人乃至六七人にて、三四浬の沖に出づるなり。【參照】烏賊干す（イカホス）

【例句】

烏賊船

烏賊船の燈點々と浪がくれ　　　凡水（同人）

して水中に投じ徐々に竿を動かして、鰮を自由に游泳せしむ。これに鰹がかゝるなり。若し海天晴れ、風軟かなる時は、釣影水に落ちて、ために鰹が餌に付かざるの故に、「かゐべら」なるものをもつて海水を攪亂す　かゝる間、漁夫一人は船の中央にありて絶えず鰮を船の周圍に投入す。この事非常に熟練を要し、鰹をして遠くより寄り來らしむるは、全くこの巧拙にありとす。鰹船に用ゆる漁舟は一定せず、土佐伊勢等の如きは大抵十人乘りと定め外部に彩色を施し、記章等を描く。但し最近にては各地に發動機漁船普及したれば、多くこれに依れども、釣法は前日に同じ。[參照] 初鰹(ハツガツヲ)　鰹(カツヲ)　鰹節製す(カツヲブシセイス)

例句

鰹釣　やあしばらく夕べのかね澤釣鰹　宗因（梅翁宗因發句集）

鰹釣鱶怖ろしくなりにけり　涼斗（同人）

松魚舟　松魚舟おくれさきだつ勢ひ哉　子規（全集）

高波をえいや〳〵と鰹舟　素遊（ホトヽギス）

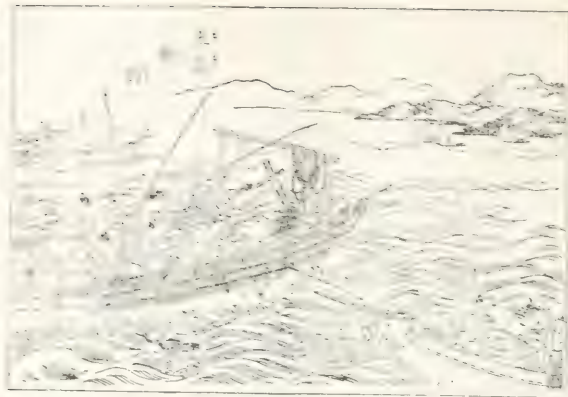
鰹節製す(かつをぶしせい)　身卸(みおろし)　身割(みさき)　黴附(かびつけ)　一番黴(いちばんかび)　二番黴(にばんかび)

季題解説 鰹節は水產製造品の一にして製造法地方によりて多少の相違あり、關東及び東北は伊豆節に、伊勢以西及び四國は土佐節に、九州は薩摩の節に準ずるが如し。先づ庖丁にて頭を切り落し內臟を除き兩肉と中骨の三枚に縱裁す。これを身卸と云ふ。次で身割とて身卸にて兩分せられたる肉を更に各々二枚に縱裁し、結局四枚の肉片とす、これを煮籠に列べ豫め沸せし釜に入れ鰹の大小、良否等に依り適當に煮たる後冷水をかけてよく冷却し、小骨を拔き焙爐にて水分を蒸發せしめ、火乾と日乾を併用する事四五日にして一日中止し、再び隔日に四、五回火乾をなし更に四五日、日に曝せし上、削りて形を整へ樽に入れ密閉しおけば一週間にして二番黴を生ず。これを一兩日、日光にあてゝ黴を除き前の如く樽に入れおけば再び稍々白き黴を生ず。かくすること再三再四、殆んど黴を見ざるに至りて終るなり。

小鰮網(をぼこあみ)

季題解説 小鰮とは鯔の稚魚二三寸なるを稱する東京地方の呼名なり。鯔は其生長によりて名を異にす、をぼこ・いな・ぼらなり。德川時代には、芝浦に於て陰曆六月十四日まで小鰮を漁することを禁ぜられ、十五日より小鰮網の使用を許されしと云ふ。[參照] 秋―鯔(ぼら)

海扇曳(ほたてひき)　海扇獵る(ほたてとる)　帆立塚(ほたてづか)

季題解説 海扇貝は青森、北海道の海に多し。北見猿拂村沿岸殊に名高し。漁は七月一日より始む。貝殼は小鍋用にす。帆立塚とは、この漁期中、海岸に不用の貝殼堆く塚をなすをいふ。

海月取（くらげとり）　海月取る（くらげとる）

季題解説 食用の海月は主として本邦西東海に産し夏日之を取りて、明礬に漬け、多く酢の物として食用にす。

實作注意 俗に前の文字のつく國の海月は食ふべしと云ふ、肥前・筑前・備前等聞ゆ。［参照］動物—海月

例句 海月取　艪を押すも眠たさうなり海月取　雨銘（類題發句集）

烏賊干す（いかほす）

季題解説 夏日海岸にて烏賊を干すことを云ふ。即ち鯣を製するなり。烏賊舟より陸揚げしたる烏賊を直に割き、内臓を除去して之を薄き鹽水にて洗ひ、よく水切を行ひて日に干すなり。［参照］烏賊釣（イカツリ）

例句 烏賊干す　磯一松に縄めぐらして烏賊干しぬ　地燭（同人）

牛馬を冷す（うしうまをひやす）　牛馬を洗ふ（うしうまをあらふ）

季題解説 暑中は使役する所の牛馬汗をかき、又疲勞すること著しきを以て、河海に入れてその蹄を冷却せしめ、體軀を洗ひ清めて保護す。

例句 牛馬冷す　洗ひたる馬にまたがり歸りけり　樂南（ホトトギス）

湯華搔く（ゆのはなかく）

季題解説 湯の華は温泉地方の巖面に噴出する石灰質、又は硅質の粗鬆なる沈澱物にして、夏日之を採集し、市場に出す。これを湯華搔くと云ふ。

果物の袋掛（くだもののふくろかけ）　袋掛

季題解説 初夏の候、果實類の未だ嫩にあるものゝ蟲害を防ぐため、一つ一つに紙袋をかぶらすことにあり、之を袋掛と云ふ。桃・梨・葡萄等に殊に多し。

實作注意 單に袋掛のみにては意通せず、果物の袋掛なる事明かにすべし。

例句 果物の袋掛　吉野川[illegible]て葡萄の袋掛け　洗川（同人）

瓜番（うりばん）　瓜小屋　瓜守

季題解説 甜瓜又は西瓜などの熟する頃、夜間よく盗まるゝ、これが警戒に備

ふる人を瓜番と云ふ。瓜畑のほとりに瓜番の休むに、又は雨などを凌ぎ雨露を防ぐ小さき小屋を瓜番小屋と云ふ。〔参照〕甜瓜・西瓜

例句

瓜番　瓜番や上らずなりし遠花火　雨朝（同人）

鳥黐搗く（とりもちつく）

考證

【三才圖會】 木の葉、女貞に似て、薄く光澤あり。四時と雖凋まず。（略）五月、細白花を開き、子を結ぶ。（略）其木の皮を剝ぎて、水に浸し爛し、之を舂き、流水にこして、皮滓をされば、麪の如くにして、甚稠粘る。人用ひて鳥雀をさす。（略）紀州熊野より多く之を出す。

季題解説 黐（細葉冬青）の樹皮を剝ぎ之を水に浸漬して搗碎し、木纖維を除去して黐を造る。黐の木は、暖帯各地方に産し又庭園に栽培せらるゝ喬木にして、樹皮は已成鳥黐を含有するものなり。鳥黐は彈性及靱性を有し且つ粘著性を有する淡灰色の軟塊にして其主成分は蠟護謨及樹脂用物質の混合物なり。

代搔く（しろかく）　田搔く　田の代搔く　馬鍬搔　田搔馬　代搔牛

季題解説 田を植ゑる前、鋤き起したる田へ水を入れて牛・馬をもつて搔きならすを云ふ。馬鍬とて三四尺に七八本の金の爪ある犂樣のものにて同じ所を數回も搔き廻すなり、その後にて熊手をもつてこれを均らし濁りの去らざるうちに插秧するをよしとす。〔参照〕田植

例句

代搔く　代搔くや馬にさゝやく水不足　其北（同人）

水番（みづばん）　夜水番　水番小屋

季題解説 夏季は田の水不足すること多く、田に引く水は少しも忽せにせず、自村の用水を他村の田へ引き奪はるゝを防ぐため見張りの番人を置く

ふる人を瓜番と云ふ。瓜畑のほとりに瓜番の住む[illegible]雑草又は藁などを覆ひ雨露を防ぐ小さき小屋を瓜番小屋と云ふ。【参照】甜瓜、西瓜

例句

瓜番　瓜番や上らずなりし遠花火　雨朝（同人）

鳥黐搗く（とりもちつく）　もちつく

典拠

【三才圖會】木の葉、女貞に似て、薄く光澤あり。四時と雖凋まず。（略）五月、細白花を開き、子を結ぶ。（略）其木の皮を剝ぎて、水に浸し爛し、之を舂き、流水にこして、皮流をされば、黐の如くにして、甚稠粘る。人用ひて鳥雀をさす。（略）紀州熊野より多く之を出す。

季題解説

黐（細葉冬青）の樹皮を剝ぎ之を水に浸漬して搗碎し、木纖維を除去して黐を造る。黐の木は、暖帶各地方に產し又庭樹に栽培せらるゝ喬木にして、樹皮は已成鳥黐を含有するものなり。鳥黐は彈性及韌性を有し且つ粘著性を有する淡灰色の軟塊にして其主成分は蠟護謨及樹脂用物質の混合物なり。

代搔く（しろかく）

田搔く（たかく）　田の代搔く（たのしろかく）　馬鍬搔（まぐはかき）　田搔馬（たかきうま）　代搔牛（しろかきうし）

季題解説

田を植ゑる前、鋤き起したる田へ水を入れて牛・馬をもつて搔きならすを云ふ。馬鍬とて三四尺に七八本の金の爪ある犂樣のものにて同じ所を數回も搔き廻すなり、その後にて熊手をもつてこれを均らし濁りの去らざるうちに插秧するをよしとす。【參照】田植（タウヱ）

例句

代搔く　代搔くや馬にさゝやく水不足　共北（同人）

水番（みづばん）

夜水番（よみづばん）　水番小屋（みづばんごや）

季題解説

夏季は田の水不足すること多く、田に引く水は少しも忽せにせず、自村の用水を他村の田へ引き奪はるゝを防ぐため見張りの番人を置く

之を水番と云ふ、その den せる小屋を水番小屋と云ふ。

【例句】
水番　水番のおうと答へて燈動く　牛歩（ホト、ギス）
水番が四五匹哭れぬ手長蝦　谷笑（同　人）
水番の疲れ萍白みけり　山夜（同　）

水論（すゐろん）　水争（みづあらそひ）　水喧嘩（みづげんくわ）

【季題解説】夏期は旱魃打ちつゞき用水缺乏することあり、而も此時期に於ては稲田に灌水を要する時にして農夫は用水に苦しむことあり。各村各々我田引水を専ら努め用水の分配につきて争論を生ず、竹槍・蓆旗・鎌・鍬の類を携へて水争ひの爲めの闘争を惹起すること屢々あり、之を水論と云ふ。

【例句】
水論　水論や欠びを噛んで威勢づけ　雨朝（同　人）
水喧嘩　水喧嘩覗いてゐるや田の鼠　桑陽（同　）

【参考事項】水論争と言ふ能狂言の一種がある。聟と舅とが己れの田へ水を引かんと争ふのである。水論は、古代水田耕作の行はれたと共にこれがあり、播磨國風土記の神話にも見える。又古事記や祝詞にある天つ罪のうち樋放・溝埋めの類は、皆水を争うて暴行をする罪である。

誘蛾燈（いうがとう）

【季題解説】夏の夜、田圃・果樹園等の害蟲を誘致して捕殺或は焼殺する爲めに野に於て點ずる燈火を云ふ。普通に行はるゝ方法は、四方を玻璃にて圍ひたる装置の中に火を點じ、燈火の下には石油を灌ぎたる水を湛へし容器を置きて、浮塵子・螟蟲等の害蟲を誘ひて、其容器中に陥れて殺すこのなり。［一類］動物―夏蟲（ナツムシ）　火蟲（ヒムシ）

【例句】
誘蛾燈　誘蛾燈一村の闇深めけり　初紅（同　人）
水足りし田の宵闇や誘蛾燈　上居（同　）

蠶の上簇（かひこのじやうぞく）

［一類］上簇　上簇子　［illegible］

【字源解説】【上簇】五月の頃、首に繭を作らんとする時、［illegible］之に［illegible］、蠶を食はず、身白色透明となり、［illegible］中に［illegible］、先頃我に［illegible］を出して［illegible］となす。

［illegible］

【季題解說】 蠶は春季に孵化し、成育して、十分生長し、初夏の候、繭を作る。その繭を作らんとする時食を止め、身體透き通るに至る、此時藁などわれ入れたる蠶簿の中に蠶を移し入れて繭を作らしむ、これを上簇と云ふ。上簇に入れば大半養蠶の成功を遂げたるものにして養蠶家は上簇祝ひとて、團子・お萩・豆煎など造りて神に供へ、親戚知友に配りなどして祝ふ所あり。蠶簿はえびら又は蠶のすだれと稱し、蠶席に藁・木の小枝・菜種殼など入れて、繭を作り易くせしものなり。

【實作注意】 上簇に入るべき蠶を「上簇の蠶」と云ふ。【參照】絲取（イトヒキ）　夏引の絲（ナツビキノイト）　動物―繭（マユ）　蠶蛾（サンガ）

【例句】
蠶の上簇　昔からの天氣に上簇る蠶かな　小海老（ホトトギス）

繭（まゆ）

白繭（しろまゆ）　黃繭（きまゆ）　玉繭（たままゆ）　新繭（しんまゆ）　雙繭（ふたつまゆ）　屑繭（くずまゆ）　種繭（たねまゆ）　繭買（まゆかひ）　繭問屋（まゆどんや）　繭市（まゆいち）
繭賣る（まゆうる）　繭掻（まゆかき）　繭籠（まゆかご）

【季題解說】 蠶の繭を云ふ。上簇の蠶は、適當の位置を見定めて、自ら口より絲を吐きて楕圓形にて中央のくびれたる繭を作り、その中に籠る、之を繭籠りと云ふ。而して繭の中にて蛹となり休眠す、繭の中の蛹のことを繭兒と云ふ。蛹時代を經過したる後成蟲の蛾となりて繭を破りて出づ。破られたる繭は製絲に適せざるを以て、成蟲とならざる前に蛹を殺すために日光に干す、之を繭干と云ふ、或は乾燥器を用ゐて殺蛹す。種繭には之を行はず繭の成りて十分堅くなりたる時は、蠶簿より繭をもぎ取る、之を繭掻と云ふ。掻きたる繭は白き布の袋に詰め市場に出す。之を買集むる者を繭買と云ひ、之を取扱ふ店を繭問屋と云ふ。近來直接製絲家の買出に來るもの多し。繭には白繭・黃繭あり、黃繭より取る絲は同じく黃色なり。尚ほ蠶一匹にて一つの繭を作るが普通にして之を匹繭と云ふ、時に二匹にて共同に一つの繭を作ることあり、形大にして、圓形に近きを以て玉繭と云ひ、或は孖繭（ふたつまゆ）と云ふ。之れより取る生絲は良質ならず。屑繭は、絲量足らざる薄繭又は汚れたる繭などを云ひ、良質の製絲原料とならざるものを云ふ。屑繭より取れる生絲は富士絹の原料となる。

【實作注意】 繭を作る昆蟲は蠶の外柞蠶・野蠶等大小厚薄種々あれど、單に繭と云ふ時は家蠶の繭に限る。其他の繭を詠はんとする時は、其名を冠して作るべし。【參照】蠶の上簇（カヒコノアガリ）　絲取（イトヒキ）　夏引の絲（ナツビキノイト）　動物―繭（マユ）　蠶蛾（サンガ）

【例句】
繭　繭安し山村の兒は餓にある　一樹風（同人）
繭買　繭買の兄弟似たりどちがどち　月斗（同）
繭買に町の浴衣を賴みけり　凡水（同）

雨乞（あまごひ）　雨の祈　雨祈禱　雨乞の使

【古書校註】

【日次紀事】貴布禰[illegible]丸山吉水吉田池叡山横川龍池其（一）方土に隨て民人鐘をうち、鼓をならして、踴躍して、或は笠を戴き蓑を著け、又装の雑（二）をなして、之を祀す。大徳寺中龍翔寺の天童の像（略）雨を祈れば、則必ず應あり。（三）又鳴瀧[illegible]山上、池あり。旱歳此處に雨を請ふ。并に龍安寺境内に住吉社・下賀茂龍王宮も亦然り。乙訓寺並に雨園迎稱山福田寺に龍王像あり。村人雨を祈る。（略）凡村落、氏神なきの地、愛宕山に登り、神前の火を取り、食を調へ、各雨を請ふ。

註（一）其地方々によつて（二）[illegible]のいでたち

【解説】

夏日旱天打ち續く時は、農事の妨げ大なるより古昔より請雨の法を修して天に雨を祈る、これを雨乞と云ひ、朝廷に於ても屢々之を行はせられしこと文獻に見ゆ、民間に於ては、山に登りて火を焚き、或は鉦太鼓を鳴らし、或は唄ひ或は踊り、又は蓑笠を著て恰も雨中に於けるが如き態を爲して之を祈る。又牛馬をほふりて神に雨を乞ふなどあり。雨乞は支那より傳はれる風習にて、月令に董子に古記あり。〔參照〕天文・喜雨

【例句】

雨乞に[illegible]　丈草（丈草發句集）
大粒な雨はいのりの奇特かな　蕪村（夏より）
雨乞に曇る國司のなみだ哉　同（句集）
負腹の守敏も降らす旱かな　同（同）
雨乞や國主の母も餘所ながら　蕪村（落日庵句集）
松明に雨乞行やよるの嶺　太祇（太祇句選）
雨乞にひと夜經よむ僧徒哉　召波（春泥發句集）
我雨と觸れて歩くや小山伏　一茶（七番日記）
雨乞や導師血書の普門品　樵青（同人）

【參考】

小野小町が神泉苑で雨乞をした故事は最も有名である　雨乞の使は、神泉苑で雨乞の五龍祭を行ふ時、朝廷より遣はされる使者で、六位の藏人これを勤む。月詣集に「藏人にて侍りけるに雨乞ひの使にて雨ふらして大内にまゐりければ」と見える。

土佐の蟲送（とさのむしおくり）　蟲送（むしおくり）

【古書校註】

【栞草】年に依って、田蝗害をなす時、人民鐘太鼓を撃ち野外に送る、これを蟲送りといふ、凡旱歳に五穀の枯萎むを燒けるといふ、茄の根の枯るゝを上るといふ、瓜の蔓の枯るゝを舞ふといふ、これ民間の詞なり。

茄子植う　茄子苗植う

【[illegible]】苗床に蒔きたる茄子は、發芽後適當に生育したる時、之を茄子畑に移し植う、移植の時期は大抵五月十日前後をよしとなす。【參照】植物─茄子

【例句】
茄子植う　茄子植うや雨降りたりし門畠　戸千（同人）
茄子苗植う　茄子苗を植ゑ急ぎゐる日暮かな　石人（同）

芋植うる

【[illegible]】種芋の植込みを云ふ。五月にして後るゝ時は結果よろしからずとなし、初夏に多く行はる。その方法、種芋の芽の確かなるを選びて、株毎の距離を一尺とし、乾草又は厩肥の類を株間に入れ、少し芽を生じたる時培土し、塵芥・乾草の類を畦の間に撒し後之を鋤込む、かくする時は旱魃を防ぎ、土地を肥沃ならしむる效あり。【參照】植物─根芋

【例句】
芋植うる　草庵や空地あれば芋を植ゑ終ぬ　虚子（ホトヽギス）
　芋植ゑて圓かなる月を掛けにけり　同（同）

豆植うる　菽蒔く　豆蒔く　豆植庖丁　豆植車

【古書校註】【三才圖會】大豆大抵夏至の十日以前に種を下す。諺に曰、夏至の鳥脚（一）と言ふ心は既に生れ出る形、鳥脚の如きなり。【滑稽雜談】（二）大和本草に曰、大豆其品多し。黄大豆秋熟す。近江の產最佳也。黑大豆・栗大豆・鵜大豆・鞍掛豆・稻豆の一種は、掞切豆と云ふ野豆也。

註（一）大豆の若芽について云ふ也。（二）九月菽引の條に出づ。

【[illegible]】荳科植物に屬する、植物の中、大豆・赤小豆・黑豆・大角豆などを汎稱して豆（菽）と云ふ。又大豆（黄大豆）の異名としても用ゐらる。豆を蒔くは大抵夏至前後とす。

【[illegible]】豆蒔くは單に大豆とは限らず、一般の豆類を蒔くものと心得て然るべし、特に區別を望む時は、大豆蒔く小豆蒔くとすべし。又豆を蒔く事を、豆植うるとも云ふ「豆を植ゑて稗一の諺あり。豆を植うるに用ふる庖丁用の農具を「豆植庖丁」と云ふ。豆蒔車は豆を蒔く時用ふる農具にして太鼓狀にて孔ある車なり、之を推し行けば、その穴より豆の落つる樣に造りしものなり。【參照】秋─豆引く

【例句】 豆蒔く 豆蒔くや物の序の暮間際 梅志（ホトトギス）

草肥（くさごえ）

【季題解説】 雑草篠竹樹木の生葉藻類を田植前に元肥として田に踏み込むを云ふ。又桑畑煙草畑等に肥料と、乾燥とを防ぐとを兼ねて敷き込むを云ふ。

【例句】 草肥 草肥の人道横や赤蜻蛉 夜白（同人）

溝浚へ（みぞさらへ）

【季題解説】 田の灌漑を容易ならしむるため、溝を浚へることとなり。田植前之を行ふ。

【例句】 溝浚へ 蘆の根に鰻おさへぬ溝浚へ 涼舟（同人）

田植（たうゑ）

田植始（たうゑはじめ） 早苗開（さなへびらき） 田植歌（たうゑうた） 田唄（たうた） 田植笠（たうゑがさ） 田植定規（たうゑぢやうぎ） 田植酒（たうゑざけ） 田植燈（たうゑどうろう） 田植船（たうゑぶね） 早苗舟（さなへぶね） 早乙女（さをとめ） 田植女（たうゑめ） 植女（うゑをんな） 五月乙女（さつきをとめ） 五月女（つきめ） 早女房（さにようぼう） 早苗取（さなへとり） 苗取（なへとり）

【古書校註】

【日次紀事】 凡五月尾より六月首に至りて、苗稗生長す。民間苗代と称す。之を植る前に先之を抜く、早苗取と謂ふ。農民男女混雑して、野歌苗を挿む。是を田植と称す。女子苗を種る者を早乙女と謂ふ。各音を揚げて歌ふ。是を田歌と曰ふ。或は児童太鼓を撃ちて、之を勧む。凡苗を種ること夏至の前にあり。

【年浪草】 若苗は未長ぜざるの苗也。（玉苗とは（略）玉は称美の詞なるべし。

【季題解説】 苗代に蒔付けたる稲の苗を採りて、田に移し植うるを云ふ、我国内地にては、早きは五月下旬、晩きは七月上旬頃までを田植の時期とすれど、普通霖雨期なる梅雨前後を以て最も盛んとす。晩春苗代田に蒔かれたる籾は発芽後三四十日を経れば、苗の長さ凡そ七八九寸に達す、之を「早苗」と称し、水田へ移す為めに抜き取るを「早苗取」と云ふ、抜き取りし苗は適宜にたばねて本田に運ぶ、之を「苗運び」と云ふ、苗を入るる籠を苗籠と云ふ。田植に水を湛へたる本田に縄を引き、列の乱れざる様に井然と植うるを普通とし、苗数本を一株として植ゑ付く、これを正條植と云ふ。農業国なる我国は、農を以て立国の基本となし、田植を以て農民年中行事中最も重要なるものとなす、されば昔は殊に賑はしく行ふを以て収穫多しなどとの言伝へありて、陽気に「田植歌」「田歌」を唄ひ囃し、賑やかなり、而して田植は婦女子のこれをなすもの多く之を「早乙女」と云ふ。【参照】 田植布子

〔參照〕田草取　植物―早苗

田植

田一枚植て立去る柳かな　芭蕉　（信夫摺）
田植まで水茶屋するか角田川　其角　（五元集拾遺）
松影をうしろにしざる田植哉　支考　（蓮二吟集）
参宮の笠着て出たる田植哉　同　（同）
産月の腹をかゝへて田うゑかな　許六　（五老井發句集）
田うゑ等がむかし語や衣川　桃隣　（古太白堂句選）
つれよりも跡へ／＼と田うゑかな　千代女　（千代尼發句集）
けふばかり男をつかふ田植かな　同　（同）
離別たる身を踏込で田植哉　蕪村　（新花摘）
けふはとて娵も出たる田植哉　同　（同）
泊りがけの伯母もむれつゝ田植哉　同　（同）
参河なる八橋もちかき田植哉　同　（同）
をそを打し翁も誘ふ田植ゑかな　同　（同）
鯰得てもどる田植の男かな　同　（同）
雨ほろ／＼曾我中村の田植哉　同　（新五子稿）
おくひなり席がましき田植哉　同　（同）
戀草に戀風も吹く田植哉　同　（落日庵句集）
寺からも姿を出されし田植哉　太祇　（太祇句選）
やさしやな田を植るにも母の側　同　（同）
漣にふしろ吹るゝ田植哉　同　（同）
湖の水かたぶけて田植かな　几董　（井華集）
けふも又田植あるやら竹の奥　召波　（春泥發句集）
鷺のたつ跡もにごして田植かな　也有　（蘿葉集）
田を植るひともかへりぬいざさらば　士朗　（枇杷園句集）
蛭游ぐ中にも馴れて田植ける　闌更　（半化坊發句集）
蕗の葉にいわしを配る田植哉　一茶　（七番日記）
菴の田は朝のまぎれに植りけり　同　（同）
木がくれて猶なつかしき田植哉　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
泥足で禪寺ぬける田うゑかな　梅室　（梅室家集）
乳をかくす泥手わりなき田植哉　同　（同）

田植歌

風流のはじめや奥の田植歌　芭蕉　（信夫摺）
かつらぎの皇子よりや奥の田植唄　曉臺　（曉臺句集）
みちのくや判官どのを田うゑ歌　一茶　（七番日記）
信濃路や上の上にも田うゑ歌　同　（嘉永版發句集）
勿體なや晝寐して聞く田植唄　同　（句帖）
田うゑ唄よしたもあるに道すから　千代女　（千代尼發句集）

田植哥中〳〵古き詞有り　闌更　（半化坊發句集）

田歌

山陰や人日おもはて田植歌　蓼太　（蓼太句集）

午の貝田うた音なくなりにけり　蕪村　（新花摘）

日本には我等ごときも田唄哉　宗因　（梅翁宗因發句集）

雁はれて老なるゆひが田歌かな　几董　（井華集）

田植笠

我影や田植の笠に紛れ行　支考　（蓮二吟集）

鳰の巣に吹とらるゝな田うゑ笠　曉臺　（曉臺句集）

遠里や二筋三すぢ田うゑ笠　蓼太　（蓼太句集）

おのが里仕廻うてどこへ田植笠　一茶　（句帖）

田植酒

木のもとや松葉にちぎる田植酒　白雄　（白雄句集）

田植樽

柴つけし馬のもどりや田うゑ樽　芭蕉　（芭蕉翁全傳）

早苗舟

つまなしのさす手引手や早苗舟　曉臺　（曉臺句集）

植どめはどう押廻す早苗ぶね　梅室　（梅室家集）

早乙女

早乙女にゝて取たる菜飯かな　嵐雪　（玄峰集）

早乙女や黒髪山を笠の影　支考　（蓮二吟集）

早乙女の見に行宵の鏡かな　言水　（俳諧五子稿）

早乙女のわかな摘たる連も有　千代女　（千代尼發句集）

早乙女やつげのおぐしはさゝで來し　蕪村　（新花摘）

早乙女や先へ下りたつ年の程　太祇　（太祇句選）

早乙女の下りたゝあたこの田哉　同　（同）

早乙女やひとりは見ゆる猫背中　召波　（春泥發句集）

早乙女の菅の葉ふいこむ山田かな　白雄　（白雄句集）

葛飾や早乙女かちの渡し船　一茶　（花實發句集）

早乙女に祝ふ詞もありぬべし　蒼虬　（蒼虬發句集）

田植女

田うゑ女のころびて獨かへりけり　曉臺　（曉臺句集）

植女、

ひるがほに足投かけし植女かな　巣兆　（曾波可理）

五月乙女

五月乙女に仕方望まんしのぶ摺　芭蕉　（雪丸げ）

五月女

五月女に土器投ん淺香山　桃隣　（古太白堂句選）

早苗籠

早苗とる手もとや昔忍ぶずり　芭蕉　（小文庫）

汁鍋に笠のしづくや早苗取　其角　（五元集）

木曾の湯のこう

しばしとや早苗より見る寺の門　其角　（五元集）

小便はよその田へして早苗とり　也有　（[illegible]集）

刈るときに住む眼もあり早苗取　同　（同）

海士が業濱田のさなへとりにけり　曉臺　（曉臺句集）

山の日を襷にかけてさなへ取　梅室　（梅室家集）

すてゝある苗やおぼえのたばねぐせ　[illegible]　（[illegible]）

苗束も植ゑるもひとり子もひとり　乙二　（[illegible]）

田植布子

季題解説　田植の時季は入梅時にして、這日降雨の爲め寒きことあり、一度篭笥、行李に收めし布子を取り出して著用することあり、これを田植布子と云ふ。「田植布子に麥藁裸」の諺あり。田植の時布子を著る程寒く、十月麥藁の時候にして裸になることあるよりの諺なり。〔參照〕田植〔(ゅ)〕天文梅雨・植物早苗。

例句　田植布子

かき餅を炙りつ田植布子哉　　具圓（同　人）

老の身に田植布子や七日縞　　夜臼（同　　）

田草取

田の草取　田草引　一番草　二番草　三番草　沼搔き

古書校註

【年浪草】本朝食鑑に曰、種て（一）後二十日前後、田の雜草を除き去り以つて其根を固くす。蚤く田草を除けば、則ち再び除くの勞なし。云云

【俳諧歲時記】夏より秋にいたりて、三度、田草をとる。一番草二番草といふなり。

註（一）稻を植ゑて。

季題解説　田植終りたる後、田に生ずる草を取るを云ふ。田草を取ること普通三度となし、初めを一番草と云ひ、次を二番草、後を三番草と云ふ、大抵土用前より土用後までの間に行ふ。地方によりてはヌマカキ（沼搔き）ともいふ。〔參照〕田植〔(ゅ)〕

例句　田草取

燒鎌の背中にあつし田草取　　其角（五元集拾遺）

山一つ背中に重し田草取　　蓼太（蓼太句集）

秋の來る道つくるらん田草取　　同（同　　）

物いはぬ夫婦なりけり田草取　　同（同　　）

葉ざくらの下陰たどる田草取　　蕪村（新花摘）

藻の花はは池にきかせ田草取　　也有（蘿葉集）

小溝落つる水の濁りや田草取　　月村（同　人）

朝に來る小さき蛙や田草取　　月斗（同　　）

參考　新古今集に「賤の男は繁る稻葉のさみだれに晴間をみてや田草引くらん」ともみえてゐる。萬葉にも田草引く妹とある

雁爪

季題解説　金屬にて製せし圓筒形の先に爪形あり。田草取が手の指に嵌めて雜草を搔き、土中深く埋むるに便とす。又指の痛みを防ぐによろし。

例句　雁爪

草の蔓に雁爪通しもどりけり　　夜臼（同　人）

雁爪をはづして休む木陰かな　　同　（同　）

早苗饗（さなぶり）

季題解説　植付のすみたる後、一家又は本家分家等の家族婢僕相集ひ又は手傳衆を招じ、神棚に清く洗ひたる早苗を供へ鍬鋤などの農具を飾り、酒肴を調へ豆の飯など炊ぎて隔てなく一日を樂しみ、祝ひ休むを云ふ。〔參照〕　田植（タウエ）　植物―早苗（サナヘ）

例句
早苗饗　さなぶりや水足らぬ田はそのまゝに　　亞志路　（同　人）

龍骨車（りうこつしや）

季題解説　臺灣にて、灌漑に使用する水車のことなり。夏期最も多く用ふ。

椿挿す（つばきさす）

椿接（つばきつ）ぐ、

季題解説　椿は、實蒔・接木。挿木の何れによるも繁殖容易なれども、普通挿木によるもの多し。時季は入梅過ぎを最も可とす。

例句
椿接ぐ　椿接いで水うち潤す雲の峰　　青　々　（俳　鳴）

挿菊（さしぎく）

菊挿（きくさ）す

季題解説　五月雨の降りしく時にすくすくと延びたる菊の莖を剪りて二三葉を殘して插すことを插菊といふ。芽は弱く、根芽は切るに及ばざればその中間を利用す。尊ら大菊中菊栽培に用ふるものにして、懸崖作りの實生等には適用されず。芽は初め葉の元よりの白き肉狀をふくみて、後白き鬚根を下す、新芽は此時既に其小さき延びを見す。插菊當を得れば、大輪を咲かし得て一段の面白味あるものなれば菊作りの人々は屋上に並べる鉢に年々之を繰返すなり。〔參照〕　春―菊の根分（キクノネワケ）　秋―菊（キク）

例句
菊插す　菊插すや砂をまぜたる溝の土　　涼　舟　（同　人）

粟蒔（あはまき）

粟蒔（あはま）く

古書校註
【三才圖會】　中古粟を眞心て、近世は皆粱と識して、大穂なる者を粱（もちあは）となし、粘らざる者を粟となす。（略）穗小にして、毛短く、粒細なる者を粟となす。早中晩の三種あり大抵、早粟は皮薄く米實す、晩粟は皮厚く米少し。

註（一）[illegible]

季題解説 粟は五穀の一にして温暖、高燥なる日當りよき畑に適す。五、六月頃淺き條溝を作りて種をまく。〔季題〕秋　粟

例句

粟蒔く　粟まくやわすれずの山西にして　乙　二（をのゝえ草稿）

粟蒔や踏む畑土の濕りよし　一　央（同　人）

季題参考 粟は禾本科に屬する一年生の草本、五穀の一。萬葉集東歌に「足柄の箱根の山に粟蒔きて實とはなれるをあはなくもあやし。」

胡麻蒔（ごままき）

胡麻蒔く（ごままく）

古書校註

【滑稽雜談】 時珍が曰、漢張騫を使して、始めて大宛より油麻の種を得來る。故に胡麻と名く。遲早の二種、黑白赤三色あり。（略）是亦當月（一）まく、苅は八月也。俗に云、胡麻は蒔人刈人と途中に相逢ふと。是は遲速ある義也。

【三才圖會】 三色あり。共に夏至半夏生の交に種を下し、六月花を開き、七月實熟す。

註（一）五月

季題解説 胡麻は大抵五・六月蒔き秋收獲す。〔季題〕秋—胡麻ュ　胡麻刈ュ

例句

胡麻蒔く　胡麻蒔くや交り穗の麥苅り後れ　一　果（同　人）

黍蒔（きびまき）

黍蒔く（きびまく）　稷蒔く（きびまく）

古書校註

【滑稽雜談】 時珍が曰、三月種る者、上時（一）となし、五月即熟す。四月種る者中時（一）となし、七月即熟す。五月種る者下時（一）となし、八月乃熟す。

【三才圖會】 稷、古は飯となし、毎に食ふ。今は唯磨き、團子餠となし、賤民の用ふる所なり。

註（一）早稻、中手、奥手の意。

季題解説 稷の下種は小暑までと稱せられ、夏日之を蒔き秋の末成熟す。又立夏前に種を下し初秋に至り收むる地方もあり。〔季題〕秋　黍

季題参考 禾本科に屬する一年生の草木。五穀の一。

例句

黍蒔　心ゝ止めて畑へ移すや黍の苗　夜　臼（同　人）

稗蒔（ひえまき）

稗蒔く（ひえまく）

古書校註

【滑稽雜談】 時珍本草に曰、稗は乃不粘の稱なり。山東、河南亦五月之を種ふ。（略）按に多く稗の字を用ゆ。稗に兩種侍る。野生して、首を亂すも

のを稗といへり。

【[illegible]】田圃に栽培して其種子を食用又は家禽の飼料とす、之が播種は大抵六月頃にして、七八月頃に到り穂を出す。

【[illegible]】稗は漢名、稗子、別に官庭式のものに稗蒔きあり、混同すべからず。〔參照〕稗蒔(二七七) 秋 稗

【[illegible]】稗蒔の萌えひろがりし縁かな　羽公（ホトトギス）

【[illegible]】稗の初見は、例の保食の神が死なれた際其の五體九孔に穀物が出來たといふ傳へに眼中に稗を生ずといふのがある。

綿蒔（わたまき）　綿蒔く

【[illegible]】【三才圖會】中古草綿の始まる事（上略は事成の前出華に宋の末）中華より先づ凡二百年ばかり、（略）早晩あり、早き者八十八夜（一）以後麥苗の際に於て之を撒く。晩き者は四月麥を苅て、株の傍に穿て之を撒く。

註（一）立夏より八十八日目の日、陽暦五月一、二日頃にあたる。

【[illegible]】綿の植付は其土地に應ずる適當の時期を選ばざる可らず、我國にては夏之を蒔き秋收穫す。播種するには先づ土地を十分に耕し五尺乃至六尺の間隔を保ちて畦を作り、其頂上に種子數個宛を播く、發芽するに至り其數個の根を順次に別ちて一個宛盛土となす。〔參照〕冬 綿

【[illegible]】綿蒔く　綿蒔くや濱まで遠き綿畠　綾石（同人）

【[illegible]】綿は葵科に屬する一年生の草で高さ三四尺に達す。我國にては延暦十八年崑崙人三河國に漂着せし時齎せし種子を翌年植ゑしもの。それから文祿年間再び渡來せりといふ。原産地は東印度及びアラビヤである。然し恐らくは奈良朝時代既に九州等で栽培してゐたものと考へられる。

新眞綿（しんまわた）

【[illegible]】今年の夏、新しき繭より製したる眞綿を云ふ。眞綿は繭を引き延ばして作れるものにして、中に屑繭よりとり、白くして光澤強く、柔かにして輕し、衣に入れ其他種々の用に供す。〔參照〕冬 綿

【[illegible]】新眞綿　新眞綿課長の宅へ屆けけり　涼舟（同人）

木の枝拂ふ

【[illegible]】夏日、庭園の樹木の鬱閉しきまで繁茂したるを、適當に枝伐拂ひて、明るくするを云ふ。

【例句】
木の枝拂ふ　木の枝拂ふ座敷に簾下ろし置く　甘雨（同人）
枝を拂うて星影しるき庭木哉　凡水（同）

焚火止

【季題解説】北海道、樺太にては山火事を防ぐために山中にて焚火をするを禁ずるなり。【參照】地理―山火事

草刈

草刈る　乾草刈る　朝草刈る　草干す　干草

【季題解説】夏季は雜草至る所に繁茂し、道を埋め、原野にはびこるを以て是等の草苅をなす、家畜の飼料たる干草を作るため、夏の朝の間の涼しき時を選ぶこと多く、これを朝草刈と云ひ、刈りたる草を朝草と云ふ。

【例句】
草刈　草苅の背中の葵蓙や風はらむ　月斗（同人）
草苅りに朝からむせる日なるかな　白童（同）
朝草刈る　朝草を田水見に來て刈りにけり　夜臼（同）

藍刈

藍刈る　一番藍　二番藍　藍玉

【古書校註】【三才圖會】四月苗を植て（略）凡七十日許未だ穗をなさゞる時、晴且に露に乘じて拔採り曝し乾し、根莖を去り、葉を用ひて薦に裹む。（略）京洛の藍は葉を苅り、根莖をつけざる故、採まずして亦之を用ふ。
【滑稽雜談】六月或は五月に苅を一番とし秋月又二番三番を苅る。

【季題解説】藍は二月頃種子を下ろし、其五六寸に延びたる時、他の畑に移植す、之を中植と云ふ、六月頃其開花に先ち刈採るを一番藍といふ。後その株より發芽して三四十日を經たるものを二番藍と云ひ、其の葉を天日に乾燥したる後、土藏内に積み時々水をかけて醱酵せしむ、然る後之れを搗碎きて塊となしたるものを俗に藍玉と稱す、琉球藍は藍の一種にして、莖に節あり、葉は大にして對生し、紫色の花を開く、熱地に適す。

【[illegible]注意】本邦に從來栽培せられしものは、蓼科に屬する蓼藍にして、沖繩・鹿兒島地方に産するは水蓑衣科にして琉球藍又は山藍と稱す。【參照】秋―藍の花（アヰノハナ）

【例句】
藍刈る　藍刈るや鎌の刄さきも淺黄色　風葉（類題發句集）

菜種刈

菜種刈る　菜種干す　菜種打つ　菜種殼　菜種の殼燒き

【季題解説】菜種菜卽ちあぶら菜を刈ることにして、菜種は春開花して實を

に打ち、硫細となし、海舶必用之具なり。以て加賀苧に亞ぐ。又繭席の縦（一）となり、甚勁強にして截斷し難し。

註（一）縦緯とする也

季題解説　いちびと稱するものに二種あり、一は商麻にして、キリアサとも云ふ、春種を下し高さ六七尺に達したる時之れを刈る、皮を剝ぎて縄となす、他の一は黄麻にして、シナノソ又はツナソとも云ふ、丈三四尺許り、同じく夏日之を刈り採りて、皮を剝ぎ、船綱に作り又疊を刺す絲を製す。

參照　植物―商麻イチビ

薄荷刈（はくかかり）

薄荷刈る（はくかかる）

季題解説　薄荷を採取するを云ふ、薄荷の栽培の最終目的は油腦分を多量に含有せる生草を多量に産出するにあり、故に其刈取の時期を重んずることは普通作物の比にあらず、生草の最も能く繁茂せし後尙ほ莖葉中に漸次油腦分の比率を增進し來りし時期を認定して刈り取るなり。一番刈は夏期土用に當り、此際は葉色黄味を帶び、下葉の裏面に葉澁の附着し始むるを以て徵候とす。二番刈は開花の盛時、卽ち秋の土用に行ふ。刈取る時は天氣晴朗にして生葉乾燥せる時を選ぶ。

眞菰刈（まこもかり）

眞菰刈る（まこもかる）　菰船（こもぶね）　眞菰刈船（まこもかりぶね）　眞菰賣（まこもうり）

古書校註　【三才圖會】葉、蒲葦の雚の如く、刈て以て馬を飼ひ、薦を作る。春の末に白茅（一）を生ず。（略）其葉を刈り去りて、便ち耕蒔すべし。久蒔田と名く。八月莖を抽きて花を開く事葦の如し。

註（一）茅の樣な白い穗。

季題解説　菰は禾本科菰屬の多年生草本にして高さ五六尺に達す、池澤中に生じ、葉は蓆の料に修す、其最も繁茂せる盛夏の頃刈るを好時期とす。

實作注意　菰を刈る舟を薦刈舟又は眞菰舟といふ。菰はかすみぐさ、ふししば、よどのふしば等と和歌に用ゐられたるものあれど、俳句にては是等の異名を用ゐし例を見ず。かつみ、はながつみを以て菰の異名なりとする說あれど定かならず。

參照　植物、眞菰マコモ

例句

眞菰刈　おどろかす螢の夢や眞菰がり　也有（羅葉集）

水深く利鎌鳴らす眞菰刈　蕪村（句集）

眞菰賣　戻りには棒に風なし眞菰うり　也有（羅葉集）

とし毎に粽は食はず眞菰うり　同（同）

參考　眞は接頭語。禾本科に屬する多年生の草。萬葉「眞こもかる大野河原のみごもりにこひこし妹のひもとく吾は。」

藺(ゐ)刈(かり)

藺刈(ゐかり)る　藺干(ゐほ)す

古書校註【増山の井】植るは十一月云云。

季題解説 藺は燈心草にして、高さ一二尺より四五尺に達す、我國山野に自生し又藺田に栽培す、夏日之を刈り取りて、疊表・花莚・藺笠等の料に供し、又莖の心を燈心と稱して燈用に用ゆ。[参照] 植物－藺。

例句 藺刈る

備後路は藺を刈り干せり南風　雲山（同人）

刈あとの藺田の濕りや眼子菜(ひるむしろ)　夜臼（同）

荒布(あらめ)刈(かり)

荒布(あらめ)刈(か)る　荒布干(あらめほ)す　黑菜(くろめ)刈(か)る　荒布船(あらめぶね)

古書校註【三才圖會】本綱、海帶は東海水中の石上に出づ、海藻に似て粗く、柔韌にして長しと、（略）按ずるに海帶は狀昆布に似て狹く黑色、（略）乾けるは小刀の欛となる。其葉、煮て食ふに宜し。

【滑稽雜談】此者、外の和布(一)より粗大なる故、荒布といふなるべし。夏月、采て乾し貯へ、民用夏に利あり。

註（一）ワカメ也。石蓴。又弱布。

季題解説 荒布を夏日刈り採るを云ふ。荒布は海藻の一種にして形狀昆布の小なるに似、海中の石に附着にして生ず、その色褐色なれども乾燥すれば黑色に變ず、之を刈り採りたるものは、日光に曬したる後貯へて食用に供し、或は肥料に、或はヨード製造の原料となす。[参照] 植物－荒布。

参考 褐色藻類に屬する海草、海底の石に著生す。一根より叢生す。肥料沃度製造の原料く食品に供す。

菅(すげ)刈(かり)

菅刈(すげか)る　菅干(すげほ)す

古書校註【三才圖會】今六ッ須介は葉に劍の背ありて硬く靭はず。（略）六月葉を苅りて、乾せば、白色、笠に縫て美なり、加州の金澤・播州の深江・勢州の[illegible]宮より多く菅笠を作り出す。

【年浪草】日光山緣起に曰、往昔勝道上人二荒山の巓を究めんとなし、彼處に至る、[illegible]に一大河あり、（略）深沙大王（一）（略）二蛇を放ち、（略）忽橋を作る、[illegible]人此を渡る（略）云々　此橋の上山菅を生ずる故に山菅橋と名く。云云

註（一）[illegible]の[illegible]に[illegible]、[illegible]人[illegible]、[illegible]らしむと

参考 [illegible]・蓆・笠等を造るに用ゐる菅は、夏日成熟したるものを刈り取る。菅には[illegible]、[illegible]（くぐ）は[illegible]に[illegible]似せる海草にして、

蓑・繩・席・馬具等の材料となり、薹は田に栽培せらるゝ水草にして葉の緣鋭く、之に觸るゝ時は傷く事あり、莨久は笠に造る、加賀の産最も有名なり。

例句

藻刈る　臥頃にからね[illegible]菅や一ト構　桃隣　（古太白堂句選）

藻刈（もかり）

藻刈る（もかる）　刈藻（かりも）　藻刈船（もかりぶね）　藻舟（もぶね）　藻切（もきり）　藻刈衣（もかりぎぬ）

古書校註

【三才圖會】　海藻は乃海島に生ずるの藻なり、黑色亂髪の如し、（略）海人繩を以て腰に繫ぎ、水に浸して之を苅る。（一）

註　（一）此藻苅の爲にのり、苅かし藻をつむ舟を藻舟と云ふ

季題解説

水中に生ずる隱花植物を總稱して藻と云ふ。春生じ夏繁茂するを以て、夏日船に乘り藻切と云へる鎌用のものを以て之を刈り、或は水中に入りて之を刈る、藻を刈るに用ゆる小舟を藻刈舟と云ふ。參照　植物―藻

例句

刈藻　自らわがね浮きたる刈藻かな　青畝　（ホトヽギス）

藻刈舟　藻刈舟眚餉に二つ相寄りぬ　溪聲　（同　人）

藻刈舟つなぎ上りし眚餉かな　虚子　（ホトヽギス）

昆布刈（こんぶかり）

昆布刈る（こんぶかる）　昆布干す（こんぶほす）　昆布舟（こんぶぶね）

季題解説

昆布は褐藻類に屬し、我國に於ける水産植物中最も重要なるものなり、太平洋、大西洋の北部に播布す、北海道に多し、種類多く我が國のみにも十二、三種を下らず　大なるものは十二三尋、小なるは、二三尺あり、濃褐色、濃綠色、黑褐色、淡褐色などあり、昆布を刈る時季は大概土用にして、場所は遠きは岸より千間に及ぶ事あれど百間乃至三百間の事多し、縣鉤、引鉤、鎌等にて採集す。古來、北海道の昆布を北前船頭（日本海航路）により、大阪に入港し、大阪問屋より江戸、中國、九州等へ送りたるなり。昆布を食料調味料に使用する事、京阪より傳はりたり。昆布を種々に製したるもの等大阪名物の一つなり。

例句

昆布刈る　昆布刈るに松前富士の晴れにけり　子角　（同　人）

麥刈（むぎかり）

麥刈る（むぎかる）　麥打（むぎうち）　麥叩き（むぎたたき）　麥搗（むぎつき）　麥搗歌（むぎつきうた）　麥唄（むぎうた）　麥薙（むぎなぎ）　麥の音（むぎのおと）　麥打臺（むぎうちだい）　麥板（むぎいた）　麥埃（むぎぼこり）　麥ぬか（むぎぬか）

古書校註

【三才圖會】　大麥は數種ありて早き者は、九、十月に種を下す。晩き者は十一月種を下す。皆四月に黃熟す。（一）其苅る事立春より百二十日に至るを旬となす。故に諺に曰、麥は百日の中に蒔く可し。三日の中苅るべし。

（略）小麥は（略）種を下す十月を準となし、大麥と時を同じうし、其黄ばみ熟して、苅り收る時は、大麥より遲き事十日許りなり。

註 （一）動物、かんこ鳥の條參照。

季題解說 初夏の候麥の黄熟したる時、之を刈り取るを云ふ。むぎなぎとも云ふ。麥刈の好期は古來立夻より百廿日前後なりと稱せらる。刈りとりたる麥は扱き更に殼竿にて穗を打ち實を落とす、麥打ちなり。或は麥打臺に刈りたる麥を打ちつけて實を落とすもあり。又麥を打つ具即ち殼竿のことを麥打とも云ふ。麥の音、麥を打つ音を云ふ「若竹や村百軒の麥の音、蕪村」。麥藁、麥の實を打ち落したる殼を云ふ。麥打藁、四角の木の框に割竹の棧を竪に並べたる四足の臺なり、麥扱、麥の穗を引きかけてこき取ること並にその用具を云ふ。麥うつに唄ふ歌を云ふ。麥搗、麥搗くこと。麥打、麥を打つ鐵にて齒を造り大なる櫛の形をなす。麥搗、麥搗歌の略にして麥を時立つ埃を云ふ。

實作注意 殼竿は、麥打に用ゆる具にして、頭に樞のある棹に他の棹をつけて廻し打つものなり。麥のみならず稻の穗を打つにも用ゆるを以て殼竿のみにては麥打の句とならず、必ず「麥の殼竿」たることを明かにするを要す。〔參照〕新麥（植物）麥藁（植物—麥）

例句

麥刈

貰うよ玉江の麥の刈仕舞　惟然（惟然坊句集）

麥刈や近道來ませ法の杖　蕪村（句集）

麥刈て瓜の花まつ小家哉　同（新花摘）

麥刈て遠山見せよ窓の前　同（遺稿）

麥刈に利き鎌もてる翁哉　同（同）

麥刈の不二見所の榎哉　一茶（享和句集）

麥打

蟬鳴や麥をうつ音[illegible]　嵐雪（玄峰集）

麥打に三女夫並ぶ榮へかな　太祇（太祇句集）

麥を打ほこりの先に聟舅　同（同）

麥搗

麥つきやむしろまとひの俄雨　鬼貫（俳諧七車）

門さきの月を見かけて麥をつく　一茶（七番日記）

麥搗に大道中の[illegible]哉　同（[illegible]集）

麥唄

麥うたや誰と明して睡た聲　移竹（俳句大觀）

麥うたや[illegible]も交へつゝ　几董（[illegible]）

麥野の畔まね行や菩提法師　同（同）

麥ぬか

麥ぬかの流の末の小な[illegible]　一茶（享和句帖）

新麥（にひむぎ、今年麥）

古書校註 【本朝食鑑】小麥は[illegible]に同、早き者は三四月熟し、晩き者は五六月熟す。是

れ新麥の候なり

【季題解説】今年收穫したる麥を云ふ。新麥出づる時は去年以前に收穫したる麥を陳麥と云ふ。【参照】麥刈（むぎかり）　陳麥（ひねむぎ）　植物―麥（むぎ）

【例句】

新　麥　　新麥や筍時の草の庵　　許六（俳句大全）

　　　　　新麥や幸月の利久垣　　一茶（同　）

陳麥（ひねむぎ）

【季題解説】前年に收穫したるふるき麥なり

【實作注意】陳は他の穀にも云ふ、陳米の如し。【参照】新麥（しんむぎ）　植物―麥（むぎ）

【例句】

陳　麥　　ひね麥の味なき空や五月雨　　木節（俳句大全）

麥稈（むぎわら）

麥藁（むぎわら）　麥稈籠（むぎわらかご）　麥稈時（むぎわらどき）

【季題解説】麥の莖なり。これを漂白し、染色し、眞田・帽子・玩具等を造る。近來ソーダー水等の飲料に添ふるストローも産出多しと。【参照】麥打（むぎうち）　新麥（しんむぎ）　植物―麥（むぎ）

【例句】

麥稈籠　　灯の下に麥藁籠の出來にけり　　綠葉（ホトヽギス）

　　　　　編みくるゝ麥稈籠や夕明り　　虛子（同　）

夏麻引（なつそひき）

夏麻引く（なつそひく）

【季題解説】夏季麻畑より麻を引きて取るを云ふ、夏取るものを夏麻と稱す。而して、夏麻を引く畑と畦といふ意にてうねの轉なるうなにかけて云ふ枕詞なりと云ふ。萬葉集「なつそひくうなかみ潟の沖つすに舟はとゞめむさ夜ふけにけり」

亞麻引（あまひき）

亞麻引く（あまひく）

【季題解説】亞麻は一年生草にして、二尺乃至四尺の直立したる莖を有し、葉は細く互生し、花は紫碧色にして美なり。四月下旬種子を散播し、七月下旬種子の十分熟せずして莖の下部少し黄味を帶びたる時之を拔き取る、次に根を斷ち地上に乾燥せしめ水に浸したる後醱酵法により亞麻絲を取る。

蠶豆引（そらまめひき）

蠶豆引く（そらまめひく）

【古書校註】【滑稽雜談】時珍本草に曰、蠶豆、豆莢の狀老蠶の如し。故に名く。王禎が

して、其時期によりて其名を異にし品質の等差を設く、即ち上邊とて六月中旬より七月上旬頃（半夏生頃）までに得たるを上品とす、それより九月の末頃迄のを末邊又は遲邊と云ひ、其以後に採りたるを秋物と稱す。漆搔きの方法には養生搔と殺搔とあり。養生搔とは樹勢を害せざるやうに少しづゝ採取し數年間之を繼續するを云ひ、殺搔とは採取の期間に極力漆汁を搔き取りて漆樹を伐採するを云ふ。其方法は樹幹の大小により同一ならざれども、目通り一尺五寸位までの樹にありては、二腹立てとて、幹の表裏兩面に搔鎌を以て搔傷を附す、之を目立てと云ふ。而して之より滲出する漆液を搔箆にて搔き集む

實作注意 漆搔くは年浪草には秋とすれど、生漆の上質のものは夏季に採取せらるゝを以て夏とすべきなり。（一二） 植物 漆の花（夏）、秋 漆紅葉（秋）

例句 漆搔く

漆搔く手勝手わろし懸梯子　夜白（同人）

漆かくや箆をくわへつ汗拂ふ　若水（同　）

藥狩（くすりがり）

藥の日（くすりのひ）　藥草摘（やくさうつみ）　藥獵（やくれふ）　競ひ狩（きそひがり）　競ひ驅（きそひがり）　百草摘（ひやくさうつみ）

古書校註

【滑稽雜談】 日本紀に曰、推古天皇十九年夏五月五日、兎田野に藥獵す。（略）荊楚記に曰、是の日（一）雜藥を競ひ採る。（略）（二）此說和漢ともに今日藥草を取る。和におゐて競駈と稱す。（略）又此日を藥日と稱するもこれらの謂也。（略）宗祇萬葉抄云、きそひかりするとは、四月五月に藥狩とてする也。

註（一）五月五日（二）以下其說の自說也。

季題解說 世諺問答に「五月五日を藥の日といひて、この日一切の藥草をとるなり。」これを「藥狩」、又は「百草摘」「藥草摘」或は「競駈」等と稱せり。この風習は支那より傳來せしものにて、天台訪隱錄に「以二端午日一入二天台山一採レ藥」との故事あり。又、推古帝の十九年、帝大和國菟田野に親臨せられて遊獵を天覽あらせられんとせし時、聖德太子は御諫奏せられ、殺生の罪は佛の敎の最も戒むるところなることを力說せられ、爲めに藥狩に變更せられしと云ふ。

例句 藥狩

古圖に見ゆ大和菟野の藥狩　月斗（同人）

神農の舌のしびれや藥狩　富竹雨（同　）

參考 五月五日に藥を取り集めるにより斯く云ふ。上代五月五日に採取した藥に特に效驗があると信ぜられてゐた。藥とは人又は動物の疾病を直接又は間接に治し輕減し若しくはこれを豫防する物質を言ふ。又藥の分類も立場の相異によつて種々たてられるものなるも、化學的製產物あり、化學的純合成物あり、又天然物たる草根木皮もある。藥の日に採取したの

は主として天然物であつた事は今更言ふまでもない事である。五月五日藥を採取したことの文獻に現はれた最初は、日本書紀推古天皇十九年夏五月五日菟田野の藥狩がそれである。この藥狩は鹿を獲てその袋角を取つて藥としたのである。

心太草取（ところてんぐさとり）

心太草取る　石花菜取る　天草取る

季題解說 心太草は隱花植物紅藻類に屬す、我が國各地の淺海に生じ、紫紅色にして稍々灌木狀をなし四、五寸餘に長ず、軸部は細長くやゝ扁平にして多數の枝を出し、各枝より更に小枝も羽狀に排列す、乾燥すれば深紫色を呈し彈力あり、これを晒して寒天・心太等の原料とす。夏季之を採集す、〔參照〕心太

例句
天草取る　天草桶たゞよひをれる岩間哉　帆　千（ホトヽギス）
青潮に石花菜の花は深けれど　誓　子（同　）

蕗伐（ふきり）

蕗伐る

季題解說 蕗の名物、秋田地方の山近き村々にては田植過ぎのころ、近き二里三里の山中へ入つて蕗伐りを行ふ。それらの人々は年經し大杉林の木陰に育ちし蕗にあらずば、蕗伐せる氣持をせずと云ふ。彼等は曉明山へ出掛け、山の濕り、下にかゝる夏霧に觸れて、山々にて蕗を切る。一抱つゝを一把として、藤蔓にて縛るなり、〔參照〕植物－蕗

蒜の根（にんにくのね）

蒜根（ひるね）

古書校註 【栞草】本草、葫蒜、夏月根を食。これを旅途に携ふる時は、炎風瘴雨加ふることあたはず。○和俗、土用に入る日、蒜及小豆を食するは、瘟疫を避んが爲なり。

季題解說 夏の土用に蒜と小豆を食へば瘟疫を除くと云ふ俗說あり、又ある地方に於ては、蒜の根を引き出入口の梁に吊し置けば夏季の疫癘を防ぐとてこれを行ふ處あり。

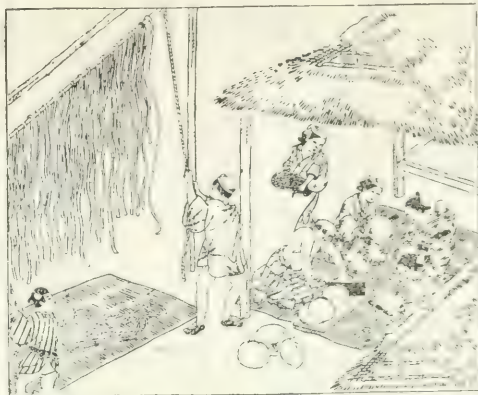
例句
蒜の根　蒜を擣りつゝ音韻つやゝかに　子　角（同　人）

干瓢剝く（かんぺうむく）

干瓢剝（しんかんぺう）

古書校註 【三才圖會】乾瓢、土用の中之を取り、横に切片き皮を去り、白肉を

用ひて、薄く剝き連て、一二丈紙帯の如く、架に掛けて晒乾す。

【年浪草】信州尾州河州攝州に多し。

季題解説　夕顔を厚さ一寸餘りに輪切となし、外皮を去りたるものを庖刀を以て一分位の厚さに剝き、引き延して干す、故に干瓢と云ふ。干瓢を製する時季は七月下旬より八月中旬頃までを好季とす、蓋し一日に干し上ぐるをよしとし、曇天等の爲め一日に干し上らざる時は黴を生じ品質劣るなり。

往時は大阪三津寺前より、多く干瓢を出だす。今は其地町家となりぬ。後には其南の一村木津の里人これを作り、その産多く、攝州木津の干瓢として、名産の名高かりし。

例句

新干瓢　垣間見や干瓢頃の松ケ岡　露沾（錢龍賦）

梅剝（うめむき）

梅剝（うめむ）く

古書校註

【年浪草】梅剝きは皮肉と共に剝掛け、晒し乾かして梅酸とするなり。

季題解説　青梅の生まなるを剝きかけて、簀の子又は板の上などに竝べて晒す。これを水に出して染などに用ふ。

例句

梅剝　梅むきや笊のかたぶく日の面　望翠（俳句大全）

海蘿干（ふのりほし）

海蘿干（ふのりほ）す　布海苔（ふのり）干（ほ）す

季題解説

【三才圖會】鹿角菜（ノノリ）和名豆乃米太本草綱目、（略）長さ三四寸鐵線の如し。分るゝこと鹿角の狀の如し。紫黄色、土人采りて曝し貨（ウ）り、海蹈となし、水を以て洗ひ、醋に拌れば則張れ起りて、新しき如し。味極て滑かに美なり。（略）按るに（略）海蘿の生なる者、醋未醬に和して、之を食ふ。生海蘿と稱す。處處多く之を出す。石花菜（一）に似て黄紫色（略）曝し乾して用る時之を煮

て糊となす。紙工家用ひて紙を治め、或は石灰に和して壁となし、城樓の壁を塗る。

【滑稽雜談】此者夏日採りて干し貯ふに宜し。故に近来俳書夏とするか。

註（一）ところてん也。

季題解説 海蘿は丈二三寸乃至五寸にて、鹿角形に分岐したる飴色の海藻なり。その種類多し。採集したる原料海蘿を、よく洗ひ藁莚の上にひろげ、日光に當てつゝ、十分間毎に如露にて撒水し、約二時間之をつゞけて、漂白せしむ。これを海蘿干すと云ふ。「ふのり」の用途は主として糊料なれどその他婦人の髪洗ひ、また細菌研究上の培養基として、必要缺くべからざるものなり。生産地方にては、生の儘味噌汁等に入れて食用に供す。

例句

海蘿干　門口も磯の匂ひやふのり干し　利牛（類題發句集）

海蘿干す　海蘿干すや日がでるにつれ薄紅に　文方（同人）

參考 海蘿は、布海苔・布苔の字をあて、紅色藻類に屬し海岸の岩に付着して生ず。紙の如くにして貯ふ。古くは食用に供せられたが、今日では干したのを煮て湖の用に供してゐる。

囲ひ船（かこひぶね）

船圍ふ（ふねかこふ）　番屋閉づ（ばんやとづ）

季題解説 鰊漁終へたる船を濱に曳上げ、来期まで保存するために圍ひ置くこと。北海道、樺太特有のものなり。又は鰊漁期過ぎて漁家の倉庫、番小屋を閉塞することを云ふ。**關聯** 春—鰊漁（ニシンフ）

五月場所（ごぐわつばしよ）

夏場所（なつばしよ）　五月大相撲（ごぐわつおほずまふ）

季題解説 毎年五月東京本所國技館にて行はるゝ大相撲の本場所を云ふ。もとは本所回向院にて行はれしが國技館の創立以来此處に移れり。而して回向院時代には晴天十日間の興行なりしが、國技館に移りてより晴雨に拘らず十日間の興行とし、後十一日間の興行となれり。一月及五月の兩場所は各力士の成績を取り番附編成の標準となすを以て之を本場所と云ひ各力士とも懸命の競技を闘はすを常とす。**關聯** 新年—春場所　ハル　秋—相撲（スマフ）

例句

夏場所　夏場所や控へ力士の汗の瀧　子角（同人）

參考 相撲の歴史は甚古い。垂仁天皇七年七月七日野見宿禰・當麻蹴速に命じて相撲せしめ給ふ。後毎年七月天皇宮廷に於いて相撲を見給ひ、群臣に宴を賜ふのである。是は當に娯樂のためのみならず、又武力の鍛錬を旨としたのである。それで醍醐天皇延喜兵部式に七月相撲の節に不參の者を正月の射禮五月の騎射に不參の者と同様懲罰を課せられた。史上相撲の節の見えたのは、聖武天皇の天平六年を以て初見とする。これが名稱はすまひが轉じてスマフとなつたのである。兩人相ひ對して力を角するので

ある。故に又角力とも書く。これにも種々ある。即、神祇相撲・勸進相撲・稽古相撲・辻相撲等である。神祇相撲は神社の祭祀に行ひ、勸進相撲は社寺の堂塔又は道路橋梁等を改築修繕する爲に興行する所にして其の資を募集するの謂なれども後には轉じて相撲人が興行するものも勸進相撲と稱する事となつた。稽古相撲は師家に演習するもの、市相撲は巷路街頭に於いて市人相集りて相撲するを云ふのである。夏五月兩國國技館で行はれる五月大相撲は、春興行卽春場所に對して言ふ名稱で、勸進相撲が發達して今日に及んでゐる。

皐月狂言（さつききやうげん）　曾我祭（そがまつり）

季題解説　陰曆五月に興業する狂言を云ふ。昔は大抵五月五日を初日に新狂言を出せり、この二番目狂言には曾我を出すを例とす。元は此月二十八日曾我の忌日に曾我祭を樂屋にて行ひ、一同酒宴をなす例なりしが、寶曆六年江戸市村座の春狂言「梅若菜二葉曾我」が非常の大入にて、十月まで一つ狂言を打通したる時、それまで樂屋にて行ひし曾我祭を狂言に仕組み、毎日舞臺にて行ふことゝなり、神輿を本舞臺に舁ぎ出したることあり。

參考　夏芝居の初まりで五月五日新狂言の變り目である。劇場年中鑑にも見えてゐる如く暑さも劇しく從つて夏衣裳にて出來る狂言か水仕合、雨の降る狂言を組んで出す。二番目狂言は曾我を出す事になつてゐる。春狂言が評判よくうち續いて大當りの時は、樂屋に於いて祭禮を行ひ總座中酒宴を催したのが初めで、今は曾我狂言を舞ひ納めて後樂屋にての祭事を影祭と言ふ。此の曾我祭を舞臺で行つた始は、寶曆六年市村座にて春狂言大名題「梅若菜二葉曾我」を出し、十月まで通して興行したと劇場新話に見えてゐる。誠に前代未聞の大當りにて、これひとへに荒人神の神慮にかなひたる事有難しとて、今まで樂屋に行はれた神事を改め、此の時始めて舞臺にて神すゞめの大踊り諸藝盡しを始めたのである。

夏芝居（なつしばゐ）

季題解説　夏季中の演劇を云ふ。別項に掲げし水狂言の如きを多く興行す。

[參照]　皐月狂言（サツキキヤウゲン）　土用芝居（ドヨウシバヰ）　水狂言（ミヅキヤウゲン）

例句

夏芝居
汗拭くや左袒く夏芝居　几董（井華集）
夏芝居簾のかげの濡れ場哉　靜江（同人）

土用芝居（どようしばゐ）

季題解説　夏土用休みに座頭立女山等を除き、若手俳優にて興行する事あり。席料を減ずるにより安芝居など云ふ。[參照]　夏芝居（ナツシバヰ）　水狂言（ミヅキヤウゲン）

〔例句〕
土用芝居　浴衣がけ土用芝居の切落し　甘雨（同　人）

水狂言（みづきやうげん）　水藝（みづげい）　娘水藝（むすめみづげい）

〔季題解説〕水を使ふ芝居にして、暑中の興業なり。行はれしものは水中の鯉摑み・水中早替等より、四谷怪談・小幡小平次等の怪談物或は天竺德兵衞等の狂言多かりき。中にも市川右團治の家の藝となれる「鯉摑み」は水芝居の上乘のものにして、花道かけて一ぱいの本水を泳いで鯉退治を仕組めるものなり。水藝は、寄席藝人の、水からくりにして、やはり夏のものなり、娘水藝は女太夫の肩衣・袴、又は髪の中・手足の先きより本水を噴き出すなどをいふ。〔參照〕皐月狂言（サツキキヤウゲン）　夏芝居（ナツシバヰ）

〔例句〕
水狂言　瀑布を落す水狂言の終り哉　凡水（同　人）

夏枯（なつがれ）

〔季題解説〕酷暑のため遊廓・芝居・寄席・旗亭等に客足が減りてさびれたる貌なるを夏枯といふ。

〔實作注意〕旱天のため稻田・草木の枯れたると混同せぬ樣注意あるべし

〔例句〕
夏枯　夏枯の廓淋しや門涼み　月斗（同　人）
　　　夏枯を涼み顏なり芝居茶屋　一史（同　）

涼み浄瑠璃（すゞみじやうるり）

〔季題解説〕大阪は浄瑠璃の本場なれば素人浄瑠璃も天狗が多く、個人の宅・席貸・倶樂部等にて盛んに會を催す。この會の夏に催されるを涼み浄瑠璃と稱し、太夫と三味線彈は絹の肩衣をつけ、聽衆の座には處々花氷を据ゑ表格子等外して涼味を取るなり。又時には屋外に掛小屋の床をしつらへ星を頂き乍ら莨盆床几に涼みがてらに聞くもあり。藝題はさわり等にて前受のよきを選び催す多し。

〔例句〕
涼み浄瑠璃　涼み浄瑠璃主人は御簾をかたりけり　圭岳（同　人）

座頭の納涼（ざとうのすゞみ）

〔古書抜粋〕
【日次紀事】[illegible]人納涼會、是を涼といふ、在京の檢校（[illegible]）勾當（[illegible]

上首一人清聚菴に會し、各心經を轉讀す 頭人檢校、饗應を設け、六派の中、聖者四人を撰て、平家を談せしむ（註二）其外都て二月十六日の式に同じ。

註（一）瞽の盲人の官名。（二）（一）に同じ

季題解説 徳川時代、檢校・勾當等の盲人が會して、心經を轉讀し、又平家を談ず。〔參照〕納涼（スズミ） 秋 積塔會（シャクタフヱ）

例句 座頭の納涼

くらがりに座頭わすれて涼みかな　也有（蘿葉集）

參考 座頭の初として知らるるのは性佛といふ者で、此の者始めて禁中に平家を語つたと言はれてゐる。更に城一といふ者又之を襲ぎ、其の兩弟子兩派に分れ、一はその名に一の字を付し、他は城の字を用ゐた。徳川時代に幕府の保護大いに加はり、檢校・總錄などいふ位階を與へた。斯うした座頭はその不具なる性により音曲・按摩等を行うて渡世せしめたので、それ等が會して納涼を催し、平家などを語つたものである。

袴能（はかまのう）

季題解説 登場者一同、紋服に袴を著用したるのみにて演じる能を云ふ。暑中にて裝束を著用しがたき故なり。但し、藁屋・車などの作物・太刀・杖・珠數等の小道具はこれを略することとなし。

實作注意 所定の裝束調はざる場合のことも、袴能と云ふなれど、俳句にては袴能は夏季と定む。袴能は面を著けず。

例句 袴能

袴能老師が容涼しけれ　子角（同人）

鴨川踊（かもがはをどり）

季題解説 五月一日より二十四日まで京都先斗町歌舞練場に於て先斗町藝妓の公演する舞踊を云ふ。祇園の都踊に對して之を鴨川踊と云ふ。先斗町は寛文十年賀茂川に添ひて石垣等の普請あり、始めて揚屋茶屋を許され、文化十年に歌舞の技藝にて遊客に待するに藝妓の名目を公許さる。これ先斗町席の起因なりと。大正十五年歌舞練場を改築し昭和二年より引續き五月之を開演せり。開演中點茶席を設くること都踊に同じ。

例句 鴨川踊

鴨川踊翠嶂ゑがく舞臺哉　二月堂（同人）

住吉踊（すみよしをどり）

古書校註 【日次紀事】六月攝州住吉の乞食法師、或は四人或は六人以上の笠の擔（一）

例示句

登山　朝靄を衝く一隊の登山かな　涼舟（同　人）

天幕生活（テントせいかつ）　キャンプ　キャムピング　天幕村（テントむら）　バンガロー

季題解説　夏季・海濱・山岳・林中等に天幕を張り、自然に親しむ生活をなすを、天幕生活・キャンプ・キャムピングと云ふ。天幕村は、集團的キャンプ生活、バンガローは移動式簡易家屋なり。

例示句

キャンプ　瀑音の洋燈ゆすぶるキャンプ哉　千燈（同　人）

キャンピング　山の神秘星の神秘やキャンピング　凡水（同　）

瀑浴（たきあび）　瀑に打たる

季題解説　暑中涼をとる爲瀑水を浴びるを云ふ、水泳の如くにして身神爽快を覺ゆ。

實作注意　信仰により瀑を浴びるを瀑垢離といふ、こは四季共に行ふにより無季なり。尚「瀧」の字は奔瀧、川の名、雨の降る様にて、たきに使ふは面白からず。「瀑」は懸泉・飛泉にてたきの字なり。參照　地理—瀑（タキ）

例示句

瀑浴　瀑浴びて醉へるが如くなりにけり　渡石（同　人）

大矢數（おほやかず）　矢數（やかず）　通し矢（とほしや）　總一（そういち）　弓の天下一（ゆみのてんかいち）

古書校註

【栞草】洛東三十三間堂、蓮華王院といふ。いにしへの後長壽院の邊也。同所の池の中、杜若を觀壯とす。凡此所の矢數、毎年四五月永日（一）のうち、晴天を候ひてなす。射人堂前に居て、今日の昏より翌日の暮に至て、通す所の矢數（二）、他に超過するを天下一とす。

註（一）長き日、長閑けき日。（二）通し矢數千以上は合圖に白幟、赤幟を出し、次に銀麾を振り、前の記録を破る時は金麾を振ると　又慶長十一年淺岡某五十一矢を通すを始とも、永祿八年頃より始るとも傳ふ　貞享三年紀州の和佐某、一萬五千矢を放ち八千百三十三を通す。

季題解説　陰暦四五月、京都三十三間堂に於て行はれし「通し矢」の數を試みし事を云ふ。これは弓術の達人が其手練を試みしものにて、堂の長さ六十四間を射通し、その矢數の多きものを以て誇りとせり。矢數は昏より翌日の暮に至て通す所の矢數を算し、他に超過するを天下一とす。貞享三年、紀州和佐大八、通矢八千百三十三（總矢數一萬五千）、近年に於ては明治二十八年五月に若林素行四千四百五十七本を射たるを最後に興行者絶えたり。射手は堂の西側緣の南に坐し北向にて射る、本堂の長さ六十六間あり、二間毎に柱があるを以て三十三間堂と云ふ。その興行の有樣をうかが

ふに、總通し矢を數へる役人は金銀の日の丸描きし扇を以て麾き、他の二人は紅白の麾を振つて通し矢の適中を示す。矢五百本目に白絹の幟にその旨を書けるを射垜の側へ立て、千本目には赤幟を樹つ。射手の傍には力者多くゐて矢を放つ毎に唄の聲をあげて勵ます、見物も亦之に應じて囃す。夜は大篝火を焚き、西手の芝には矢來を結いて、その外側に棧敷を並べ、高張を列ね、諸家の武士威儀を正して見物し、民衆も土間に莚を敷きて見物すると云ふ有様にて、極めて勇壯なる練武なりき。尚射垜を越えし箭のある時は拾ひ歸り、家の棟に刺し、厄除けとする習慣なりき。

例句

大矢數　大矢數弓師親子もまゐりたる　蕪村（新花摘）

矢數　ほのぼのと弱にあけゆく矢數かな　同（同）

少年の矢數問寄る念者ぶり　同（同）

若楓矢數の篝もみぢせよ　同（同）

參考　武用辨略に、東山今熊野觀音堂の別當、元來武家の後裔たるに因つて射藝を好んで居た。折々八坂の青塔を射て歸るさに三十三間堂に休み、初めて繰矢を射た。これが矢數の始めである。矢數を射る模樣は、今日の暮より射始めて明日の暮に終るので、夜中は矢先に篝火を焚き、さて總矢數何程の内、通矢幾何筋と定るのである。之を大矢數と言ふ。日の内計り射るのを小矢數といふ。矢先の芝にゐる人采配を振つて矢の飛ぶ毎に聲を立てる。これを芝旋と言ふ。又送聲とも言つて射前に居て射る度毎に聲をあげる人が七八人居る。更に堂見六人、檢一人あつて通矢何程と記せるを立證するのである。通矢の數が前の者に勝つたのを總一又は天下一と云ひて堂に額を揚げ、前の額を下すのである。天下一の矢數は次第に增加し、寛文八年尾張の星野勘左衛門六千六百餘本、同八年紀伊の葛西園右衛門七千七十七本、翌九年又星野勘左衛門八千餘本、貞享四年紀伊の和佐大八八千百三十三本で最後になつてゐる。

夜能（よのう）

季題解説　盛夏の夜催すところの能樂なり。日中は炎熱のために暑さ甚しければ、特に夜をえらびて行ふなり。

例句

夜能　逢れむ日に細川様の夜能哉　千燈（同人）

百草を鬪はす（ひやくさうをたたかはす）　草合せ（くさあはせ）

古書校註

【荊楚歳時記】五月五日、四民並に百草を蹋むの戯あり。月令廣義に曰、端午の時、日未出さる時に百草を採り、汁を搗き出し、石灰に和

し、餅となし、陰乾し、一切の金瘡(一)を治す(略)(二)和俗もけふ百草を摘み、(三)艾を取る。殊更に紀州伊吹山には、藥草おほく生ず、毎年今日前夜より不用の使、山上に入り、未明に藥草、ことに艾を取る。領内の民は領主の溥(四)を請けて、山に入りて、艾を取り賣るとぞ。紀州伊吹もぐさこれなり。

【年浪草】劉公嘉話に曰、唐の中宗の朝、安樂公主五日百草を闘しむ、其の物を廣きを欲して馳驛して之を取らしむ。又它の爲に得られんことを恐れて、因りて其の餘を剪り棄つ。故に黄朝英が云、唐家公主の駃(五)は因て預め驛をして祇洹を剪らしむ。(略)世諺問答に曰、五月五日をば藥日といひて一切の藥をば此日取なりと云云。闘草の戯れも藥獵より起るにや。

參照 藥狩(くすりがり)

註 (一)刀きず。(二)以下其諺の自說也。(三)よもぎ。(四)領主の許可證。(五)勇しく進み行く宿驛の馬の意。

千住の綱曳(せんじゅのつなひき)

季題解説 昔江戸千住大橋にて陰曆六月十日行ひし綱曳を云ふ、今は行はれず。東都歳時記によれば、小柄原天王の祭禮に、千住大橋の南北にて大綱をひき合ひ其年の吉凶を占ひけるが、やゝもすれば闘爭に及びし故兩村言ひ合せて此事を止めたりと云ふ。

參考 神事に關して綱曳の行はれるのは諸國にある。綱曳によらず神前に行はれるすべての勝負事は、その年の豐凶を占する意味のもので、勝つた方が豐穰を得ると云ふのである。千住の大橋にて行はれるのは陰曆六月十日南北に大綱をひきあひ兩村が喧嘩をする事もあつたと傳へられて居る。今は行はれてゐない。

西瓜提燈(すゐくわぢやうちん) 瓜提灯(うりぢやうちん)

季題解説 西瓜又は瓜を刳抜きて中に蠟燭を立て燈を點じ綵にて吊るし柄を附したるものなり、野趣ある子供の玩具なり。參照 植物―西瓜(スヰクワ)

例句

瓜提燈　里の子や瓜提燈に宵遊び　凡水(同人)

麥藁笛(むぎわらぶえ) 麥笛(むぎぶえ) 麥幹笛(むぎがらぶえ)

古書校註 【年浪草】和漢三才圖會に曰く、稍、俗云麥藁笛卽麥莖也。大小麥共に中空。(略)小麥稍厚く硬し、(一)小兒用て以て笛を作り之を吹く。之を麥藁笛と謂ふ也。

【栞草】 夫木うなゐご(二)がすさびにならす麥笛の聲におどろく夏の日ぐらし　西行。

註 (一)以下和漢三才圖會に見えず (二)童、子供

季題解說 麥の莖に二種あり、一は麥の黑穗の莖をとり笛となすもの、他は既に麥藁となりたるものをとりて笛となすものとあり。參照 植物―麥(ムギ)

例句 麥藁笛

むら雀麥わら笛にをどるなり　一茶(七番日記)

麥笛や故鄕の歌の自ら　蛭兒(同人)

花火線香(はなびせんかう)

玩弄花火(おもちやはなび)　鼠花火(ねずみはなび)　手花火(てはなび)　線香花火(せんかうはなび)

季題解說 線香花火は發光劑を煉りて、これを四寸許りなる劑の一片に附したるもの、紙型のものもあり。その尖端に點火すれば、即ち星の如き或は芒の如き火花を散らす。鼠花火は紙に煙硝を撚り込みたるもの。これに點火すれば箭火を吹きつゝ鼠の如く走り、最後に破烈す。其他稱類多し。共に夏の夕の兒戲なり。參照 秋 花火(一)

例句 花火線香

花火線香に暗き巷よ玉造　崇朝(同人)

箱庭(はこには)

盆景(ぼんけい)

季題解說 箱の中に造れる庭園又は山水の模樣にして、箱に土を盛り、之を草木花卉の類を植ゑ更に石を配置して、山水の景を模したるもの也

例句 箱庭

箱庭や今日も一石置き代へぬ　城山(ホトトギス)

稗蒔(ひえまき)

稗蒔賣(ひえまきうり)　絹糸草賣(きぬいとさううり)

季題解說 野稗の種子を鉢又は箱などに蒔きて芽の出づるを、青田の狀に見するものにして、之に土製の鷺・農夫・蟹・蛙・橋・帆掛船など配置して田野の風景を模して觀賞す。涼しげなるものにして初夏の候之を行商す。之を稗蒔賣と云ふ。近時稗蒔廢れて、絹絲草に代るに至れり。絹絲草は水盤に綿を敷き其上に蒔くなり。參照 稗蒔―植物―絹絲草(一)

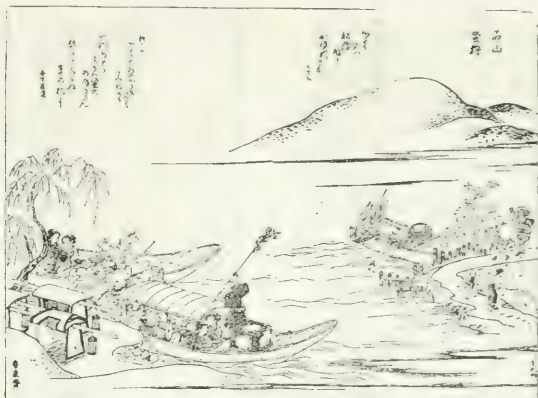
例句 稗蒔

稗蒔や赤笠案山子丹頂の鶴　福助(ホトトギス)

螢狩(ほたるがり)

螢見(ほたるみ)　螢舟

古書校註 【三才圖會】 江州石山寺の溪谷(試の谷と名く)螢多くして長さ常に倍なり。因りて

其處を呼びて螢谷と名く。北は勢多の橋に至り二町許南は供江の瀬に至る。五町許二十其間群り飛ぶ事高さ十丈許り火焔の如し。或は數百、塊をなす。毎芒種の後五日より夏至の後五日に至り凡十五日盛りとなす。風雨なく甚暗からざる夜愈多し。但し北は橋を限り、東は川を限り嘗つて之有らず。又時節を過ぐれば、之なし。其螢下は山州宇治川に至り約三里許夏至小暑の間盛りとなす。然ども石山の多きに如かず。此も亦西は宇治橋を限りて下らず。俱に一異なり、(略)俗に以つて源頼政の亡魂となすも亦笑ふべし。此時や螢見の遊興(一)群集するは天下の知る所なり。

【日次紀事】小滿の後四日五日也間江州勢田并宇治川、西賀茂、北宇喜田社水上村螢多く出づ。是亦一時之壯觀也。

註（一）遊興の人の意。

季題解說　螢を捕ふるため夕暮より川ほとにり遊ぶを云ふ。關西にては、宇治石山・保津・守山等、關東にては武藏大宮公園等名高し、螢狩、或は螢見と云ふ。〔參照〕螢賣　螢籠　動物—螢

例句

螢狩　夜あけて骨折見えず螢がり　也有（蘿葉集）

うき舟や痞おさへてほたる狩　几董（井華集）

螢見　螢見や松に蚊帳つる昆陽の池　鬼貫（鬼貫句選）

螢見や神が意のまゝあやつれず　晔燈（同人）

螢籠（ほたるかご）

季題解說　竹木の框又は曲物に紗を張りたるもの、又、金網にて作りたるもの等あり。捕へ來し螢を町辻等に立ちて賣るを螢賣と云ふ。緣日、夜店等に多く出づ、初夏の夜の一情景なり。〔參照〕螢賣　螢狩　動物—螢

例句

螢籠　袖口を照らしてゐるや螢籠　千燈（同人）

蓮見

蓮見舟　蓮葉宴

季題解說　沼、池、堀等に咲きたる蓮の花を觀賞するを云ふ。多くは朝早くより出で花の正に開かんとするを見るなり。蓮見の爲め仕立つる舟を蓮見舟と云ふ。〔參照〕植物　蓮

例句

蓮見　とく起よ花の君子を訪日なら　召波（春泥發句集）
　　　夙に起て蓮見ん爲ぞ夜訪し　白雄（白雄句集）
　　　さむしろのはしに蓮見の小脇差　蒼虬（蒼虬翁發句集）
　　　腰かけて蟻にさゝるゝ蓮見かな　同（同）
　　　しほがらきもの、食たき蓮見哉　同（同）
蓮見舟　わけ入や浮葉乘越蓮見舟　几董（井華集）

參考　蓮は睡蓮科の多年生草本で「ハチス」とも言ふ。熱帶アジヤの原產で世界各國に栽培してゐる。蓮葉宴は蓮池に臨み蓮葉を賞して宴するを云ひ、續日本紀寶龜六年八月の條に「始設二蓮葉之宴一」と見える。

水馬

馬渡し　水馬教練　水馬上覽

季題解說　江戶幕府時代に於て行はれたる水中の馬術を云ふ。人馬に水練を仕込むと共に武道獎勵の意味を以て行はれしものにて、嬉遊笑覽には「江戶にて士人の水練する始は近き事にて寶暦五六年の頃十人ばかりも出て兩國橋の下元柳橋の處にて稽古したり。又深川越中島橋際には未熟の者出たり。其頃は馬に乘て渡るも乘こみ乘あげとも附添ものはなかりし、今の如き見分あしく馬と舟とを便にして渡すことは更になしといへり。それより淺艸川にも場所を設て近ごろは甲冑を着て馬に乘て渡る。九歲十歲ばかりの者もするなり、水馬功者になれりと見ゆ。寶暦頃には甲冑着て馬わたし又幼年の者馬渡しはなかりしとぞ。今はその場所淺草駒形町元柳橋大川橋の三所にて馬渡有り」と。尙ほ當時將軍の臨檢あり、之を「水馬上覽」と稱し朱塗の御用船をして警固せしめたりと。

實作注意　現今も陸軍にて「水馬教練」とて夏日、河海にて、水中馬術を練れり。騎兵輜重兵の如き乘馬隊の野外教練の一つとなり居れり。

例句

水馬　一合に海かき濁す水馬かな　苔水（同人）

參考　徳川幕府年中行事の一である。馬渡しとも言ふ。水馬上覽と言ふ事がある。それは水馬を將軍が臨檢するのである。水馬上覽の始めは享保二十年七月十三日將軍吉宗が大川筋でやつたものである。

水鐵砲

季題解說　水を押し出す玩具にして、喞筒の理を應用したるものな

り。一端に節ある竹筒を用ゐ、節に小穴を穿ち、先に布切を卷きたる棒を挿入し、水を吸ひ入れ、水を出す。之を水鐵砲と稱し、夏日小兒の玩弄となす。

例句

水鐵砲

日向水水鐵砲の浮びをり　草雨（同人）

水鐵砲の無中の兒等よ夕日影　岳南（同）

浮人形（うきにんぎやう）　浮いて來い

季題解説　夏季、水中に浮かして遊ぶ小兒の玩具なり、人魚・龜・汽船・鳧・雁などの形に作れるもの多く、昔は樟腦に黄蠟を混へて作り其活用により水上を自然に走るものありしが、近年此種の玩具にはセルロイド製のものあり。嬉遊笑覽「今びいどろかんざしに水を貯へ蠟味を和て金魚に作り入たるあり、今はひろうどのはりかねして猿を作り小船をこがせ線香花火をもたせ、又は蠟引の紙にて鴛鴦を作り火をともして水に浮す。」

例句

浮人形

浮人形の腹をかへして搖れ合へる　月二郎（ホト、ギス）

水面にぶつかり浮む浮人形　立子（同）

子は濡れて浮人形と遊びゐる　涼舟（同人）

水機關（みづからくり）　水絡繰（みづからくり）

季題解説　水を利用して物をあやつる裝置にして夏日小兒の玩具なり。高き所に水を滿たせる桶を置き、之れより細き管にて水を引き噴出せしめ、其力にて人形を動かし、或は水車など廻はし、球などを廻轉せしむるものあり。

例句

水機關

あつき日に水からくりの濁かな　太祇（太祇句選）

水からくり外で遊ばぬ男の子　千燈（同人）

福助の水からくりを買ひにけり　大甫（ホト、ギス）

水中花（すゐちゆうくわ）　酒中花（しゆちゆうくわ）

季題解説　木の削片、山吹のしん等に細かき彩色を施し、之を極度に少さく壓搾したる玩具なり。之を水中に投ずれば忽ちにして、花の如くうちひらき、美しき人物、花鳥となりて現はる。夏の縁日夜店等にて、ひさぎゐるなり。

例句

水中花

水中花忍吹く風に片寄りぬ　梅城子（懸葵）

うたかたの銀がのぼりぬ水中花　三重史（ホト、ギス）

参考 面白くほどけかゝりぬ水中花　羽山（同人）

酒中花　ともいふ。よく縁日・夜店などで見懸ける。

樟腦船（しやうなうぶね）　活動船（くわつどうぶね）

季題解説 夏日小兒の弄ぶものにして、セルロイド製の小さき舟の端に樟腦の一片を仕かけ、之を水に浮べて、樟腦に點火する時はその燃ゆる力にて舟が旋轉を初むるものなり。

例句 樟腦舟　樟腦舟に息吹いて波起しけり　千燈（同人）

目高合せ（めだかあはせ）　うきた合せ

季題解説 緋目高（緋丁斑魚）の牡を集めて、相鬪はしむるを云ふ。勝ちたるものは、負けたる魚を得る勝負にして名古屋地方にて行はるゝ遊戲なり。目高は牡のみを同じ容器に入るゝ時は鬪爭性を發揮し、身を屈め、鰭を怒らして互に打ち合ふものなり。故に互に強きを選びて之を飼ひ勝負を爭ふ。ウキタ合せとも云ふ。京都にては目高を「うきんちよ」と云ふ。大阪にては「こまんぢやこ」「ばんだい」と云ふ。（參照）動物—目高

参考 目高は京では、めゝざこ、また、うきんじよ、また、だんぎほう、大和ではてめんじやこ、南部ではめたゞき、大阪東南ではうきた等夫々異名が多い。物を合せてその優劣を爭ふのは、古來から行はれた事で、支那の鬪草に基き、我が國でも草合（女郎花、瞿麥）蟲合の類が多く行はれた。

水遊び（みづあそび）　水鬪（みづたたかひ）　水戰（すゐせん）　水掛合（みづかけあひ）　水浴せ（みづあびせ）　水合戰（みづがつせん）

古書校註 【年浪草】通俗志に之を出す。是は水邊にて、卑賤の者、夏日（略）大勢集りて、其興に乘じて二手左右に分れて、互に水をあぶせかけて、勝負を爭ふを云ふ

註（一）漢語の面白きを得て、興に乘ずるの意

季題解説 夏日小兒等の水をもてあそぶことを云ふ、單純なる水いたづらより水合戰等孰れも水遊びに屬す。水浴せ、水掛合は夏日水邊にて左右に分かれ、互に水をあびせかけて勝負を爭ふことにして、又水戰とも云ふ。

實作注意 正月の水掛（みづあびせ）と混同すべからず、これは、新に娶りし男に歳首若水の祝を浴びすることにして「水祝」と云ふ。

例句 水鬪　水鬪惡童よつて人通さず　二月堂（同人）

船遊（ふなあそび）

船逍遥（ふなせうやう）　船遊山（ふなゆさん）　船遊船　游船（いうせん）

古書校註

【年浪草】　江戸・大坂、多く樓船（一）を泛べて、避暑會をなす。之を涼風と謂ふ。凡日午より舟を出して曉に及びて歸る。各妓女及酒食を携へて、歌舞最興あり。

註（一）二階づくりの大船。

季題解說

船を乘り廻して遊ぶことを云ふ。夏日は炎熱激しきを以て河川又は湖海に船を泛べ暑を避くるもの多し。江戸時代隅田川の船遊びは大掛りのものにして、長さ七八間の屋形船を造り、船の名も川一丸、關東丸、山一丸、熊一丸、大關丸、十一丸等あり、大身の者も是に乘つて善美を盡し、數本の鎗を艤にもかけ並べ豪奢を誇りしことありき。

實作注意

舟遊は四季共にありて各趣を異にすれど、花見船、汐干船は春の遊びにして、月見船、雪見船は秋冬なり。こゝに云ふ船遊びは夏季納涼をかねての舟遊を云ふ。水鳥の遊びは殊こ夏に多く限らるゝを以て單に船遊びと云へば夏と心得べし。

例句

船遊
羅や江の露寒き舟遊び　青々（妻木）
舟游や橋をくゞるに皆かゞむ　月斗（同人）
島山の夕影涼し舟游ひ　凡水（同）

遊船
遊船や毛布の上の釣道具（箱根蘆の湖）　虛子（ホトトギス）
游船や殘る螢に夜の水　月斗（同人）
游船の屋根に篠つく夕立哉　伏兎（同）

水泳場開始（すゐえいばかいし）

季題解說

各地の水泳場多く七月一日よりこれを開始す。當日安全を願ふ祈禱等行はるゝあり。其他、諸遊戲準備等も整ひて、これより爽快なる海

濱風景を展開す。【參照】水泳

【例句】

水泳場開始　水泳場開きの西瓜屆きけり　石　龎（同　人）

水泳

泳ぎ　水練　游泳　競泳　遠泳　川浴び　泳ぎ船

【例句】吾國は四面海を以て圍まれたる關係上、古來水練の術發達し、古く水府流・觀海流等の流派あり、その他なかなかに古式の泳ぎ多し。往時は殆んど男のみなりしが、近來は女も亦之を行ふに至れり。時代の反映とは云へ當然の事と云ふべし。競泳は泳ぎの速さを競ふ技にして、我國に於ける競泳術の發達目覺ましく、昭和七年アメリカに開催せられたる第十回オリンピック、競泳に於て六種目中百米自由型・千五百米自由型・八百米繼泳・百米背泳・二百米平泳の五種目に選手權を獲得し壓倒的大勝を博し世界一を自負せしアメリカをして我が脚下に伏せしめたるは近來の會心事と云ふべきなり。【參照】水泳場開始　海水浴

【例句】

泳ぎ　夜の海泳げる影の見えにけり　月　斗（同　人）

十年も泳がす海に心なし　同（同　）

泳ぎつかれてうねりにまかす此身哉　眉　山（同　）

遠泳　遠泳や押し流さるゝ潮狂ひ　涼　舟（同　）

【參考】これが起源は記紀に現れた鹽土神無目籠を作りて海に沈みし事を教へたとあるので、因つて水泳の神として鹽土神を祀る者がある。日本書紀崇神天皇卷六十年七月の條に「兄謂レ弟曰、淵水清冷、願欲二共游沐一、弟從二兄言一、各解二佩刀一置二淵邊一沐二於水中一云々」とある。これが水泳の書物に於ける初見である。平安朝時代には專ら武技として使用せられ水泳によつて名をなした勇士が多い。水泳に關する種々の方法を案出したのは、天正年間熊本藩士に河井半兵衛幸篤と云ふ者有り、水泳を一組織下に綜合し一流を立て秩序的教授法を試みた最初の人である。それで河井流の元祖であると同時に又我國水泳術の開祖である。現今行はれてゐる拔手は其の考案になると言はれて居る。

海水浴

潮浴　潮湯始　海水着

【季題解說】夏季海水に浸り之を浴びるを云ふ。海水浴びたることは我國に於ては既に平安朝の頃、難波の海邊などにて行はれし事傳へらるれど、其様式沿革等も詳ならず。今日の如き一般的海水浴の行はるゝに至りしは海外より其效能傳へられし以來の事なり。吾國に此風習の輸入せられしは明治二十年、松本順氏が始めて大磯に禱龍館なる海水浴場を開設したるを始めなりと傳へらる。【參照】水泳

【例句】
海水浴　海水浴第一日の日燒かな　山堂（同人）
潮浴　潮あびの子等入る木戸や瓜の花　虚子（ホト、ギス）
朝の潮を浴び居るに日が流れくる　月斗（同人）
海水着　泡浪を蹴立て上りぬ海水著　秋櫻子（ホト、ギス）

裸（はだか）　赤裸　素裸　丸裸　裸子　裸體　赤身

【季題解説】夏期暑き爲め衣類を脱し、全身の膚を露出す。裸は肌赤の意なり、裸體・赤裸・赤身・丸裸と云ふ。近來ドイツ等にては裸奬勵の聲高きは面白し。

【實作注意】暑氣の爲めに裸になるより季感を伴ふものにして、職業或は身輕等の爲めに裸になる裸を云ふことにあらず。又無一物なるを裸と云ひ、嫁入するに何等の支度なきを裸と云へども、こゝに云ふ季題の裸にあらず。

【例句】
裸　酒のみは酒で光れる裸かな　月斗（同人）
大雨にうたれに出たる裸哉　千燈（同）
背中まで酒廻りきし裸かな　双榎（同）
門畑の月に出游ぶ裸かな　凡水（同）
裸子　芥子は實に朝の畑に裸哉　同（同）
裸子のうごきやまざる秤かな　閒古城（同）

肌脱（はだぬぎ）　片肌脱

【季題解説】裸の前置なり。裸と共に夏日室内のくつろぎなり。【參照】裸ハダカ

【例句】
肌脱　酒の色出て來し肌をぬぎにけり　麗々（同人）
肌脱を入れて佛飯參らする　爽雨（ホト、ギス）

髪洗ふ（かみあらふ）　洗ひ髪

【季題解説】婦人が髪の毛を洗ふこと。夏期は殊に汗のため、頭髪に臭氣を發するため、髪を洗ふ事多し。

【例句】
髪洗ふ　干物のかわくに閒あり髪洗ふ　ひろし（ホト、ギス）

汗（あせ）　汗水　玉の汗　汗の玉　汗みどろ　汗の香　發汗　流汗

【古書校註】【三才圖會】汗、本、心より出づ、內に在れば、則血となり、外に在れば

実作注意 連日降雨なき爲め池・水田などの水涸れ、又旱魃の爲めに草木の凋死することを同じく日焼と云ふ、日焼田の如し。俳句にて日焼と云へば人間の日焼をのみ云ふ。

例句 日焼

親にかくれて水泳ぐ子の日焼かな　月斗（同人）
旅衣ぬぐに筑紫の日焼かな　同（同）
家をあげて故國に日焼したりけり　伏兎（同）

晝寐

午睡　晝寐起　晝寐覺　晝寐人　三尺寐

季題解説 夏日は夜短く、暑きを以て熟睡の時間少く、晝間睡りを催すこと多く、且つ日中は暑氣堪へ難くして仕事に倦み易く午睡するもの多し。三尺寐とは、三尺にも足らぬ狹き場所にて晝寐をむさぼる義にして、大工左官等が晝餉休みに仕事場の狹隘なる場所にて三尺寐をむさぼること多し。又一説に日脚が三尺移る間晝寐するを三尺寐と云ふと。

例句 晝寢

糊ごはな帷子かぶる晝寐かな　惟然（惟然坊句集）
蝿いとふ身を古郷に晝寐かな　蕪村（句集）
親方の見ぬふりされし晝寐哉　一茶（享和句帖）
逢坂や荷牛の上に一晝寐　同（七番日記）
十露盤を肱につッ張る晝寐哉　同（同）
五六人二番晝寐の御堂哉　同（同）
庭草もむしりなくして晝寐哉　同（句帖）
田のくろや菰一枚の晝寐小屋　同（句帖）
蝿よけに孝經かぶる晝寐哉　同（新集）
よき智恵がどし／＼ぬける晝寐哉　月斗（同人）

午睡

方丈は桐の茂りに午睡かな　同（同）

参考 論語に「宰予晝寢、子曰、朽木不レ可レ雕也、糞土之牆不レ可レ杇也」とあるは、古來有名な晝寢である。

香水

季題解説 植物性の香料を酒精にて溶解したる化粧品なり。香料はそれより發散する微量の瓦斯蒸氣又は微粒子が人の嗅官を刺戟して快感を與ふるものなり。或ものは爽快、或ものは濃厚、或は温和、或は強烈、其他種々なる香を感ぜしむ。香料にはローズ・ジヤスミン・ヴアイオレツト・リリーなどあり。其適當なる調合によつて得らるゝ香水は近代人の薫りに對する感覺趣味に適する爲め、在來の麝香・匂袋等に代りて用ゐられ、夏季殊に惡臭を消す爲めに多く用ゐらる。近年天然香料の成分研究せられ、之が合成

の研究進歩するに及び、人造香料の製造を見るに至れり・人造薔薇油の如し。〔参照〕掛香

例句

香水　香水の豆瓶帯にはさみけり　静枝（同　人）
香水の人に隣りて坐りけり　雀子（同　）
香水の移り香を抱く人形かな　旭水（同　）

掛香（かけかう）　匂ひ袋（にほひぶくろ）　たそで　誰が袖（たがそで）　花袋（はなぶくろ）　浮世袋（うきよぶくろ）

古書校註

【日次紀事】五月禁裏より匂袋を院中親王宮門跡攝家に進めらる。又女中等に下賜す。

【年浪草】雍州府志に曰、懸香は香劑を各麁抹（一）して調合す。各種輕重多少の謂あり。之を滾合して、絹帒に盛り、帒の兩角に緒を着けて衣領（二）に繫く。

註（一）麁抹　あらく粉にする。（二）衣の襟。

季題解説

龍腦・麝香・白檀・丁子等の香料を調合して袋に入れ衣服に著くるものにして、今の匂袋なり。夏日に用ふ。

誰が袖とは用捨箱に、「誰袖は匂袋なり、紐をつけて二つ連ね、今袂落しと云ふものゝ如くして持ちし故、古畫の誰袖に紐のつかざるはなし、是はもと、色よりも香こそあはれとおもほゆれ、誰袖ふれし宿の梅ぞも」といふ古今集の頭にて名づけしなり。」

浮世袋は昔遊女の宅前に吊し置きたる三角の匂袋なるべしと種彦は云へり。花袋も種彦の説にて、萬治頃に用ゐられたるものにて匂袋なるべしと。

〔参照〕香水・薫衣香

例句

掛香　掛香や何にとゞまるせみ衣　蕪村（句　集）
かけ香やわすれ貌なる袖だたみ　同（同　集）
掛香や啞の娘のひとゝなり　同（新　選）
かけ香や幕湯の君に風さはる　同（全　集）
掛香の袂で人をうちにけり　月斗（同　人）
匂ひ袋　戀文と襲ねおく匂ひ袋かな　凡水（同　人）

参考

雍州府志に「一盛絹囊兩囊左右有緒繫頂懷其袋故元稱掛香今多無其儀」と記してある。

薫衣香（くのえかう）　薫衣香（くのえかう）　百和香（ひやくわかう）　[illegible]香（たいしんかう）　黒方（くろぼう）

古書校註

【年浪草】源氏梅枝卷に曰く、くのえかう（一）のにほうの、すぐれたるほど

云々、又百歩香といふ方もあるよし、(略)花鳥餘情に曰く、百歩の方といふはおほよそ香氣の遠く聞ゆるをもて、百和とはいふべし。(略)薫衣香、一名黑方。元と薫衣香もたきものゝ方より出たるなるべし。俗に匂ひ袋といふ。其方數種あり。(二)(略)(□)奢州府志に曰、熏香は香劑を各麁抹(三)して調合す。各種重多少の謂あり。之を湊合して、絹帛に盛り、帶の兩角に緒を着て衣領(四)に繫ぐ。

註 (一)薫物の名。薫衣香。年浪草くのえかうとあれど源氏物語にはくんえかうとす。(二)花鳥餘情による。(三)麁抹 あらく粉にする。(四)衣の衿。

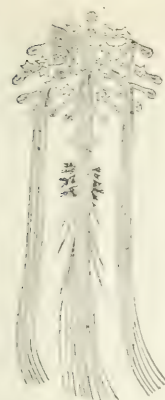
季題解說 衣を薫らす料の香。甲香(ヘナタリ)・丁子香・白膠(ヌルデ)・沈香・蘇合香・甘松・麝香・白檀・薫陸香を煉合せて作れる薫物を云ふ。又、黑方と稱し、匂ひ袋のことを云ふ。【季題】香水(夏) 掛香(夏)

例句 薫衣香

抱かれし祭の稚子の薫衣香　月斗(同人)

藥玉(くすだま)　五月の玉(さつきのたま)　五月玉(さつきだま)　續命縷(しよくめいる)　長命縷(ちやうめいる)　五彩絲(ごさいし)　五色縷(ごしきる)

季題解說 【滑稽雜談】天曆御記に曰く、延喜十三年五月五日丙午糸所より藥玉を供奉する事常の如し。去年の九月の茱萸(一)を徹す、藥玉を以つて懸け替て御柱の前に着くる例也。枕草子に云、五月五日には縫殿より御藥玉とていろいろの糸を組さげてまいらすれば、御几帳奉るも屋の柱の左右に付たり。九月九日の菊を綾と生絹のきぬに包みてまいらせたるおなじ柱に、ゆひ付て月比ある藥玉とりかへて、すつめる(略)雲州消息に云ふ、今朝或所より藥玉一流を給ふ。作るに百草の花を以つてし、貫々に五色の縷を以つてし、草虫の形を其花房に栖ましむ。(略)河海抄に云、くす玉、續命縷・靈糸 綵糸・綵索など書けり。(二)或說には藥を中へ入れて、生絹などにて包みて其上を五色の糸にて卷く。それを菖蒲などに付て送る事也といへり。然ども諸書を見るに他の藥種を用る說なし。只あやめの外草花を取添るやうにみえたり。歌にはくすりの玉又さつきの玉などよめり。當世又民間の女子五日の節に、糸紙にて草花を造り、或は靏龜松竹の、めて度物を紙上に貼して、ただ花と稱す。これ又藥玉の遺風ならし。【日次紀事】三月初五日、女兒長命縷を背後に繫ぐ、凡高貴の長命縷は今日

之を用ひて後修驗道の山伏先達に命じて大峰に納めしむ。【年浪草】公事根源に曰く、五日節會に群臣に藥玉をたまふと云々。(長命縷辟兵繒、續命縷、五綵絲、朱索、條達)風俗道に曰く、五月五日綵絲

を以って臂に繋れは、鬼及兵を辟け、人をして瘟を病まざらしむ。一名長命縷、一名辟兵繒、一名五色縷、一名朱索。

註（一）かはじかみ　九月九日重陽の節に用ふ、秋の部參照。（二）以下其語の自説也

季題解説　陰暦五月五日、種々なる香料を調合して玉となし、之れに撫子花、杜若花、つつじ、紫陽花などを結びつけて圓球となし、五色の絲の八尺許りなるを垂らしたる物を藥玉と稱し、柱、簾帳などにかけたるものなり、以て不淨を攘ひ、邪氣を避くるとなせり。此風習は漢土より起りて我朝に傳はりしものにて、鬼及兵を辟け、人をして瘟を病まざらしむ、一名長命縷、辟兵繒、五色縷、朱索とあり。

江戸時代、民間に於ては、剰絲を以て花枝をつくり、白紙上に貼りしものを作り、これを女兒の背にかけると穢を攘ふといひ、その末は山伏に乞ひ大峰へ納めたりき。

例句

藥玉
　藥玉や燈の花のゆらぐまで　言水（俳諧五子稿）
　藥玉やむすびてひさぐみだれ箱　曉臺（曉臺句集）
　藥玉のゆれ靜まりぬさら／＼と　虚子（ホトヽギス）

季題由來　續日本後紀嘉祥二年五月戊午の條に「五月五日爾藥玉乎佩天飲酒人波命長久福在止奈毛聞食須、故是以藥玉賜比御酒賜波久止宣」と見えてゐる。後貞丈雜記などの言ふ所によると、五月五日宮中にて用ゐられるのは、香ふ藥を袋に包みて玉にして、蓬菖蒲や作り花をも結び付けて五色の糸を長くたれさげたるものである。これは漢土より移つたもので、惡疫を除き壽命を延ぶる呪として行はれたものである。

炮烙灸（ほうろくきゆう）

季題解説　土用丑の日、東京市中に於ける日蓮宗の各寺院に於ては炮烙灸とて、炮烙に艾を入れ之に點火せるものを頭上に載かしめ頭痛逆上の咒の祈禱を行ふ。一名、土用灸といふ。

土用灸（どようきゆう）

季題解説　夏の土用に灸治をするをいふ。效能平常より著しと。

關係季題　二日灸は二月二日、八月二日の灸をいふ。季題の二日灸は二月二日をいふ也。すべて春秋又は年二回のものは兩方のものを季題とせぬもの多し。藪入・出代・彼岸・[illegible]・峯入・更衣・袷・大祓・伊勢參宮の如し。

〔參照〕炮烙灸（ハウロクキウ）　春—二日灸（フツカキウ）

例句

土用灸
　土用灸眼の病を焼き捨てん　南岡子（同人）
　大蒜の一片貼りぬ土用灸　蘇北（同）

蚤取粉（のみとりこ）

【季題解説】蚤を斃死せしめる黄色の粉なり、除蟲菊にて製す。動物―蚤、植物―除蟲菊

【例句】
蚤取粉　蚤取粉隈どる疊掃きにけり　一　果（同　人）

天瓜粉（てんくわふん）　天花粉（てんくわふん）

【季題解説】藥品の一種にして黄烏瓜の根より製したる白色の澱粉にして、あせもなどの藥として用ふ、現今の製品は多くは亞鉛華を用ふ、之れは瘡面又は潰瘍に撒布するときは乾燥作用を呈し分泌を抑制する效あり、シッカロールは其類なり、天花粉とも書く

【例句】天瓜粉
小さき子人形にうちぬ天瓜粉　月　斗（同　人）
天瓜粉宵宮の町の女の子　同（同　）
天瓜粉の顔押しつけて來りけり　千　燈（同　）
天瓜粉ちりて鏡を曇らしぬ　初　子（同　）
次々にもて來る顔や天瓜粉　泰　女（ホト、ギス）

暑氣拂ひ（しよきばらひ）　暑氣下し（しよきくだし）　暑さよけ

【季題解説】藥を服して暑さを拂ふことにして、又其藥を暑氣下し、又は暑氣拂ひとも云ふ。

【實作注意】藥以前のものにて暑さを拂ふことを、また「暑氣拂ひ」又は「暑さよけ」とも云ふ。例へば暑氣拂ひに酒を飮むがよいし、藥の暑氣拂ひとは別に考ふべし　【參照】暑氣中り

【例句】
暑氣拂ひ　日曜は朝から酒や暑氣拂ひ　閑　去（同　人）

香薷散（かうじゆさん）

【古書抜註】
【滑稽雜談】時珍本草に曰、香薷は乃夏月解表（一）の藥、冬月の麻黄を用ふるが如し、氣虚の者は尤多く用ふべからず、今人、暑の元氣を傷ることを知らず、有病無病に拘はらず、槩ね用て茶に代ふ。謂く暑を避くと。（略）（二）和俗また夏月の服藥とす。
【日次紀事】六月諸醫家、香薷散を高貴の家に獻じ、及地下の良賤に贈る。
註（一）表を除く藥　（二）其角の自記也

【季題解説】藥の名にして、夏日解毒、暑氣拂ひの爲めに用ゆ。製法は香薷百

内の涼しき場所に運び帯をゆるめ、胸を開き、團扇等を以て風を入れ、冷水に浸せるタオルを胸部にあて、場合によりては強心劑の注射を要す。

例句

日射病

番小屋に寝させてあるや日射病　　子燈（同人）

日射病若き巡査の來りけり　　二月堂（同）

暑氣中（しよきあたり）　暑さにあたり（あつ）　中暑（ちゆうしよ）

季題解説　夏は暑氣の爲め身體衰弱し、殊に消化器弱るため、僅かの原因にて胃腸を害し食慾不振に陥る、或は下痢などを起して身體の倦怠を覺ゆ。之を俗に暑氣中りと云ふ　（季題）暑氣拂ひ

例句

暑氣中

暑氣中り口に合ふものなかりけり　　山學（同人）

暑氣中りごそと圍みし眼かな　　夜臼（同）

暑氣中り好める酒の鼻につく　　玄洋（同）

夏痩（なつやせ）　夏負（なつまけ）

古書例証

【日本歳時記】夏月、暑に傷られて、身體はなはだ痩する人あり　俗にこれを夏痩といふ。其病症によりて、藥を服すへし　又萬葉集十六卷、大伴家持、痩人を嗤咲（一）る歌に「石麻呂（二）吾物申、夏痩爾、吉跡云物曾、武奈伎（三）取食」鰻魚（四）の夏痩を治する事、醫書には見え侍らねど、げにさも有るべき事なり。

註（一）別に咲とあり　嗤咲はあざける　（二）一本いそまろにともあり　石麻呂は痩人に當る。（三）鰻。うなぎ。（四）一首の讀方は「いしまろにわれものまをすなつやせによしといふものぞむなぎとりめせ」、であり又、「やせやせ（又はやす〳〵）もいけらばあらむをはたやはた、むなぎをとるとかはにながるな」と同所に同じく家持の作あり。

季題解説　夏まけしたて痩することを云ふ。夏は暑さの爲め食慾を減じ暑氣にあてられて痩する者あり。殊に我國の夏は氣溫高き外水温度頗る高き爲め、皮膚よりの蒸發を防けられ非常に苦痛を感ず、その爲めに疲勞衰弱して食慾を害し身體の痩するもの少からず。（季題）土用丑日の鰻（ドヨウウシノヒノウナギ）

例句

夏痩

夏痩やさしたゆふべの食好み　　几董（井華集）

夏痩のわがほねさぐる寝覺哉　　蓼太（蓼太集）

若竹のそれの如くに夏痩す　　月斗（同人）

夏痩や商家に生れ詩に敏き　　冬籬（同）

夏痩の翡翠夫人といはれけり　　露甁（同）

夏痩の捨てられたりし女哉　　凡水（同）

參考諸話　萬葉集の大伴家持の歌にも夏痩を詠じてゐる。（前揭、日本歳時記を見よ。）

蒸すべたりと云ふ。

例句

水虫を煮る火に水蟲の痒さ哉　朱由（同人）

夏沸瘡（なつぼし）　髮沸瘡（なつぼし）　夏むし　夏ぶし

季題解說

【年浪草】雜談抄（一）に髮沸瘡とす、未其出處を知らず、京畿俚諺に小兒に炎暑中頭瘡の發したるを夏ぶしと云ふ、熱毒の發する者か。

【栞草】江戸の俗訛りて夏ぼしと云ふ。

註（一）滑稽雜談、名稱のみ載せ、註記なし

季題解說

暑中に生ずる、小兒の頭瘡にして、夏ぶしとも稱へ、暑さの爲め汗をかくより生ずるものなり。汗疹の化膿して紅く膨れ上りしものにして、大きさは小指頭大又は拇指頭大等種々あり、押す時は痛みを感じ、日を經て口を開き膿を出して治癒す。

實作注意

夏ぼしは小兒の眼瞼などに生じ、膨れて眼の塞がることとあり、京、大阪俗に「夏むし」「夏ぶし」といふ。

例句

夏ぶし　夏ぶしに顏も曲らずなりにけり　月斗（同人）

よく泣く子夏ぶしいきり出しにけり　同（同）

虎列刺（コレラ）　ころり　虎列刺船（コレラぶね）

季題解說

「コレラ」菌によりて發病する傳染病なり。其病狀は頗る劇烈にして頻繁なる嘔吐下痢を起して忽ち衰弱し、死亡率平均半數以上に達す。印度より支那を經て我國に病源の傳はりしものにて、印度にては年中流行すれど、支那及我國にては主として夏期に流行す。我國へは支那より移入すること最も多きを以て、本病流行期には大阪以西の諸港に於て嚴重なる檢疫をなし警戒するを常とす。我國には安政六年大流行ありしを始めとし爾後數々流行を見、世人之を「コロリ」と稱し痛く恐れたり。

實作注意

虎列刺船は、コレラ患者の發生したる船を云ふ。檢疫船と混同すべからず。又漢方醫の霍亂と云ふは「コレラ」と急性胃腸加答兒とを併稱したるものなり。**參照**　霍亂（クワクラン）

例句

コレラ　コレラの家を出し人こちへ來りけり　虛子（ホトトギス）

コレラ船　コレラ船いつまで沖に繫りゐる　同（同）

參考

急性傳染病の一。これ印度の地方病でその源泉地はガンガ河の三角洲上にして其の發生甚だ遠く、國外に出でしは西紀一八一七年なりしといふ。一八三〇年支那に入りその翌年ペルシヤ・アラビヤ・エジプトに渡り一八三二年シリヤ・ハレスチナ・カスピ海沿岸に漫延したといふ。我國に

始めて輸入せられしは、文政五年で後三十六年安政五年にはコレラ防止を
祈願して「神いさめ」と稱し、諸人花萬燈を携へ群をなして社頭に詣でた
と云ふ。明治に入りても流行あり、猖獗をきはめたのは明治十九年全國に
わたりて流行した。昭和四年中内地に於ける患者數二〇五人、うち死亡數
一一六人。

赤痢(せきり)

【季題解説】赤痢菌により發病する傳染病なり。下痢及發熱を主たる症狀と
なし、下痢便中に血液と粘液とを混ずるを特有とす。流行は五六月頃より
十月頃にして死亡率は十六％乃至三〇％なり。赤痢に似て粘液及血便を排
泄する病氣あり、赤痢菌に因らずして「アメーバ」と云ふ微生物に因る故
「アメーバー赤痢」と稱す。「アメーバー赤痢」に二三週間の急性期を過ぐると
きは、それより慢性となり一年以上もつゞくことあり、普通赤痢の重症の
ものにても三四週間にて全快するものとは大に異るを知るべし。

【例句】
赤痢　[illegible]南や赤痢に鎖す漁師町　靜柳（赤壁）

霍亂(くわくらん)　濕霍亂(しつくわくらん)　乾霍亂(かんくわくらん)

【古書[illegible]】
【年浪草】萬病回春に曰、霍亂は濕霍亂あり、乾霍亂あり(略)心腹疼痛
し或は上に吐し、或は下に瀉し、或は吐瀉共しく作り撩亂すること不安
(略)此を濕霍亂と名け、俗に虎狼病と云ふ(略)乾霍亂と云ふ者あり、最
治し難し、死する事須臾にあり、俗に攪腸沙と云ふ。
註（一）一寸の間。

【季題解説】漢方醫の稱へし病名にして、「コレラ」と急性腸胃加答兒とを
併稱したるものなり。夏日飲食物の中毒によりて嘔吐下痢を起し「コレラ」
に似たる症狀を呈する病氣あり、之れは急性胃腸加答兒にして「コレラ」
とは區別すべきなり。症狀亦劇烈にして「鬼の霍亂」といふ諺を生せり。

一[illegible]　虎列剌[illegible]

【例句】
[illegible]　霍亂で[illegible]は[illegible]に水を呼ぶ　南下（同人）

【季題[illegible]】[illegible]病名に非ず　病者の狀態によりて名付け
しなり。[illegible]也。揮霍撩亂して身をもだえて手足をふりまは
す樣な[illegible]なり、[illegible]内實痛むが如し。
日[illegible]悶[illegible]してまことに堪へ難し、と他
の書にもある。

瘧（ぎやく）　おこり　わらはやみ　麻剌利亜（まらりや）

【季題解説】麻剌利亜と称せる病氣を、瘧、又はおこり、或はわらはやみといふ。麻剌利亜胞子虫と称する微生物が、血液内に侵入するために發病するものにして、蚊の媒介によつて傳染するものなり。主なる症状は、突然惡寒、戰慄が一、二時間續き、之について、四時間高熱を發す、この事を發作といふ。かゝる發作は間隔的に同じ時刻に起り、發作と發作との間は無熱なり。本病の治療法としては「キニーネ」最も有效なり。

【例句】

マラリヤ　マラリヤや熱の出鼻の目の眩み　涼舟（同　人）

脚氣（かつけ）　はれ脚氣（かつけ）　しびれ脚氣（かつけ）　衝心脚氣（しようしんかつけ）　乳兒脚氣（にうじかつけ）

【季題解説】脚に倦怠、痲痺を感じ、水腫を起す病氣を一般に脚氣と称す。脚氣には浮腫性（はれ）脚氣、神經性（しびれ）脚氣、心臓性（衝心）脚氣等の種類あり、四季を通じて存在し得れど、夏季に於て最も多しとす。脚氣の原因は昔は不明にして傳染病説、白米中毒説など唱へられしが、近年の研究により主として「ヴイタミン」Bなる營養素の缺乏に因ること判明し、之に季節或は生活狀態等の副因加はり起るものなること明かとなれり。脚氣の治療法は「ヴイタミン」Bの攝取と安靜にあり。俗間傳へらるゝ所の治療法たる、かの早朝に草の露を踏むことは合理的にあらず、轉地は環境を一變させる外に田舍などの加工せざる食物を取ることに於て有效ならん。

【類題解説】脚氣の母親の乳にて育てられたる乳兒にも脚氣を見る、之を乳兒脚氣といふ。

【例句】

脚　氣　脚氣病みて散歩に草を踏みにけり　文　方（同　人）

しびれ脚氣　我身とは覺えぬしびれ脚氣かな　杉　風（同　）

【參考】日本の外東印度諸島殊にスマトラ島、その他ブラジル及びアフリカ洲の二三の海濱に主として蔓延する疾病。支那には晉唐時代すでに此の病行はれたりと傳ふ。晉以前の書に、腫重腿・背盛流腫・痿厥・厥・濕痺・緩風・脚弱等の名稱を有せる病あり、これが脚氣と同一なりや否やは疑問である。此の稱呼は晉唐の時代に始る。その症候は隋の巣元方の病源候論に詳である。我國にては日本書紀　續日本紀に此の名目をかかげ、宇都保・源氏物語に「かく病」の事をあげ、脚氣の字は日本後紀大同三年藤原緒嗣の上奏文中に「復脚氣を患ふ」と言ふ句がある。又枕草紙和名抄にあしの氣と讀んである。源順集に「今は草の庵にあしの氣にのみわづらひてこもり侍れは」、萬葉集にも、伴田主が患へたのも此の病氣であらう。

宗教

祭（まつり）　御祭（おまつり）　神祭（かみまつり）　夏祭（なつまつり）　陰祭（かげまつり）　浦祭（うらまつり）　里祭（さとまつり）　夜宮（よみや）　宵宮（よいみや）　忌竹（いみだけ）　忌さす（いみさす）
榊さす（さかきさす）　榊採る（さかきとる）　楽車（だんじり）　地車（だんじり）　山車（だし）　神輿（みこし）　鳴御輿（なるみこし）　神輿渡御（みことぎょ）　祭鉾（まつりほこ）　祭太鼓　祭幣　祭提燈　祭笠　祭客（まつりきゃく）　祭見　貰ひ祭

古書校註

【年浪草】おし出して祭とばかり云ふは加茂祭の事也。加茂によりて、無名の祭を夏とす、故に祭に加茂、連歌に付句を嫌ふと也

【栞草】忌さす、榊取、榊さす、是加茂祭を云なり、（略）貞享式 そもや四季にわたるものは、祭と鷹の類なれど、いづれも其季の名目をそへて、四季の定例をなせりけり。されど、祭の一字にも御祭といへば秋になり、御祭といへば冬になり、ましての諸社の臨時の如き、名目あるもまぎれやすからん。おもふに、祭の用たるや、貴賤にわたり、寒暑にうつり、禮につゝしみ、和に遊び、節供節日の式よりも、俳諧には多用なれば、是は一世の衆議に及はず、其時其句の季につれて、決して四季に用ふべし、（中略）祭といひ鷹と云類は、一句にはなれてよるときは、夏と冬との名目にして、今式とても其通りなり、忌さすとは「袋枝折」卯月の忌さすとは、賀茂の神事に有、いみ竹にさしこめて、春の歸るをとめたき心によめり、神事にこもる人、身をきよめ、松竹などにしめはりて、門にさしこもりゐる事なり。（）榊取「後拾遺」榊とる卯月になれば神山のならの葉がしはもとつはもなし、神山は賀茂の神山を云なり。

季題解説 夏行ふ諸社の祭を云ふ。

實作指導 元は俳諧に「祭」と云へば山城の加茂祭（葵祭）を意味し、それ以外の夏季に行ふ神社の祭は夏祭と稱せしも、現今にては一般諸社の夏の祭事を云ふ。

陰祭は例年の祭よりも質素なる祭なり。夜宮・宵宮は祭の前夜に祭事を行ふを云ふ。忌竹・忌掛・榊さすは神祭に竹・榊・松に幣をつけたるを挿し、神事に備ふることを云ひ、榊取は祭前に榊を取りて神事に用ゐることを云ふ。樂車・地車は祭禮の時市中を曳き廻る破風造りの屋根を持てる壯麗なる車にて中に鉦・太鼓を囃す。山車は祭禮に引き出す飾物にして山・人物・草木、鳥獸などを美しく作りたる車に飾りし物を云ふ。神輿は御神體を遷して奉じ、其他祭太鼓・祭笠・祭提燈等あり。貰ひ祭は隣町の

冬祭[illegible]體むをいふ。[illegible]賀茂祭[illegible]春[illegible]秋[illegible]秋祭[illegible]

例句

祭

乙松やことし祭の赤扇　一茶（七番日記）

樹々深く祭[illegible]の[illegible]曲突哉　白雄（白雄句集）

老たりといふや祭の重鐘　太祇（太祇句選）

酔ひふして・村起す祭かな　同（　）

松原に田舎祭や[illegible]すゞみ　其角（五元集）

夏祭

夏祭[illegible]蜻[illegible]市場　月斗（同人）

祭太鼓

陰にも[illegible]まつりの太鼓哉　樗良（樗良發句集）

神輿渡御

御旅所に渡御著く頃や一夕立　月斗（同人）

參考 凡そ祭には之を大別して四時祭と臨時祭との二つとす。四時祭とは年中恆例の祭祀を言ひ、臨時祭とは常祀の外臨時に行ふ祭祀を言ふ。また祭には、毎年行ふものと隔年に行ふものとの二つあり。毎年行ふものには年に一回行ふものと、二回行ふものとあり。二回行ふものには、今夏季に行ふ祭祀に就いて之を言へば、四月と七月に行ふ廣瀬龍田祭（二に龍田風神祭とも稱す）・四月と十一月に行ふ山科・平野・松尾・杜本・當麻・當宗・梅宮・日吉・中山・吉田等の祭、四月と十二月に行ふ大神祭、六月と十二月に行ふ月次・大祓等の祭の如し。又隔年に行ふものに、一社の場合と二社を交替して行ふものとの二種あり。例へば、五月十八日の淺草祭は一社の場合にして、六月十五日の日枝山王祭と九月十五日の神田明神祭とを隔年に行ふが如きは二社交替の場合なり。次に四時祭には一定せるものと一定せざるものとの二つあり。一定せるものは、例へば、廣瀬龍田祭は四月・七月の四日、伊勢神衣祭は四月十四日、新日吉祭は四月三十日、紫野今宮祭は五月九日、月次祭は六月・十二月の十一日、祇園御靈會は六月十四日、同臨時祭は六月十五日、大祓は六月・十二月の晦日等の如し。又一定せざるものに、十二支に據りて定むるものと、臨時に卜定して吉日を擇ぶものとの二つあり。十二支に據るものには、例へば四月の大神・稲荷の兩祭は上卯日、山科は上巳、平野・松尾・杜本・當麻等の祭は上申、當宗・梅宮の兩祭は上酉、日吉祭は中申、賀茂祭は中酉、吉田祭は中子日を用ふるが如し。又臨時に卜定して吉日を撰ぶものには、四月の三枝祭、七月の祈年穀奉幣等の如きあり。

次に祭祀には祭に與る者の齋戒の日數を基準として、大祀・中祀・小祀の別あり。即ち、一箇月間齋するを大祀と言ひ、三日間齋するを中祀、一日のみ齋するを小祀と云ふ。大嘗祭は即ち大祀にして、祈年・月次・神嘗・賀茂等の祭は中祀、大忌・風神・鎭花・三枝・松尾・平野等の祭は小祀なり。又祭祀は祭祀料を獻ずる官衙を基準として、官祭・國祭の別あり、之に與ることを得ざる神社の祭祀を私祭と稱す。即ち官祭は神祇官より幣帛を奉りて祀り、國祭は神社所在の國衙より祭料を獻じて祀るなり。

以上記せる祭祀の外に、民間にて行ふ日待・月待等の神事は、後世、正・五・九の三月に行ひ、又毎月一日・十一日・十五日・二十一日・二十八日を三首日と稱し、或る地方にては一日・十五日・二十八日を三日と稱し、共に是日神前に神酒を供し、神社に參詣したり。

以上概說したる祭祀の大半は、奈良平安朝時代に於ける大寶令や延喜式等の制定に據るものにして、是等の諸祭中には、鎌倉・室町・江戸等の各時代を經るに從ひて或は廢絕し、或は中絕せるものありき。然るに明治維新に至り、王政復古の大業成就するや、畏くも明治天皇におかせられては祭政一致の大御心を以て、是等諸祭を御再興あらせられ、又新に創設せられたる祭祀も交れり。後ち明治四十一年に至り、皇室祭祀令を制定せられ、更に大正三年には神宮祭祀令及び官國幣社以下神社祭祀令を發布せられ、玆に始めて祭祀の統制を見るに至れり。即ち、皇室の祭祀には大祭と小祭とあり、兩祭共に宮中三殿に於て天皇親ら御祭典を行はせらるゝものにして、例へば、大祭は皇靈殿にて行はせらるゝ四月三日の神武天皇祭・十二月二十五日の大正天皇祭、小祭は同殿にて行はるゝ四月十一日の昭憲皇太后祭の如し。次に神宮の祭祀には大祭・中祭・小祭あり。共に伊勢神宮にて行はるゝものにして、例へば、大祭は五月十四日の神御衣祭・六月十六日の月次祭、中祭は五月十四日の風日祈祭、小祭は五月一日の神御衣奉織始祭・同十三日の神御衣鎭謝祭・六月十五日の興玉神祭等の如し。次に官國幣社以下の神社の祭祀にも大祭・中祭・小祭あり。例へば、大祭は祈年祭・新嘗祭・例祭・遷座祭・臨時奉幣祭、中祭は歲旦祭・元始祭・紀元節祭・天長節祭、及び神社に特別の由緒ある祭祀、小祭は大中祭以外の祭祀なり。

以上を以て夏季に行ふ主たる祭祀の概略とす。就中中古以來京都にて行ひし賀茂祭及び祇園祭は關西に於ける名高き祭にして、江戸にて行ひし日枝山王祭及び神田明神祭と共に東西の祭祀を代表し、以て今日に至れり。尙詳しくは各條に就きて看るべし。

安居（あんご）

夏行（げぎやう）　夏籠（げごもり）　夏勤（げづとめ）　前安居（ぜんあんご）　中安居（ちうあんご）　後安居（ごあんご）　夏百日（げひやくにち）　一夏（いちげ）　結夏（けつげ）　夏入（げいり）　結制（けつせい）　夏の始（げのはじめ）

[illegible]

【年浪草】佛者四月十六日より七月十六日に至りて一夏、九旬の間禁足し（安居す。）既に入るを之を結夏と謂ひ、既に終るを之解夏と謂ふ。又七月十六日より十月十六日に至るを之を自恣と謂ふ。（略）、左傳註に曰、（略）農之隙（ごに方りて外に出ては、恐くは草木蟲蟻を破らん、故に九十日安居す、禁足也。）本邦推古天皇十四年始て寺毎に四月八日より七月十五日まで、齋（を設く、是修夏の始也 云々

【滑稽雜談】[illegible]に云、（略）夏を結ぶ日異說多し、延暦寺には四月

夏書

傾城の夏書やさしやかりの筆　其角（五元集拾遺）

味噌汁を食はぬ娘の夏書かな　蕪村（新五子稿）

夏書

たゝとして持ふ夏書の机かな　蕪村（新五子稿）

なつかしき夏書の墨の匂ひ哉　同（桐の影）

日を以て數ふる筆の夏書哉　同（句集）

手水して罪輕き身の夏書哉　同（落日庵句集）

ゐかしさよ夏書を忍ぶ後ロ向　太祇（太祇句選）

楠のかたへや衣に夏書せん　几董（井華集）

しのぶ草額に墨つく夏書哉　同（同）

人しらぬ不犯誓うて夏書哉　召波（春泥發句集）

似合しき僻おもふ身の夏書哉　同（同）

夏書さへ畫に成けり妾　同（同）

上むきの夏書と見ゆる簾哉　一茶（句帖）

よそ目には夏書と見ゆる小窗哉　同（新集）

眉かけにはけまされたる夏書哉　同（嘉永板發句集）

夏花

鐘つきの妻にすゝむる夏花哉　白雄（白雄句集）

水二筋夏花そゝぐと田へ行くと　乙二（左の〻え草稿）

花摘

花摘みや先行人は兒の母　言水（俳諧五子稿）

ゐさむふや少おくるゝ夏花摘　一茶（旅日記）

花つむや扇をちよいとぼんのくぼ　同（同）

夕陰や駕の小脇の夏花持　同（發句集）

夏念佛（なつねんぶつ）

なつねぶつ

【季題解説】寒念佛に對し、夏の土用に念佛を唱へて修業することと、なつねぶつともいふ。[illegible]安居、夏籠り、冬―寒念佛、[illegible]

【例句】

夏念佛

紙合羽かろしやうき世夏念佛　其角（花摘）

手まはしに朝のま涼し夏念佛　野坡（續猿蓑）

夕顔や暮て月待つ夏念佛　吟江（夢占）

隱元忌（いんげんき）

【季題解説】陰曆四月三日、山城宇治黃檗山萬福寺にて行ふ開山隱元の忌なり、隱元は明國福州福清の人、性は林、諱は隆琦、若年にして普陀山に至り、觀世音を拜して崇佛の念を起し、黃檗山の鑑源に就きて佛門に入り、精進して遂に臨濟宗の正傳を得て、山主費隱の後を受く、後光明天皇承應元年、長崎興福寺の僧逸然、將軍家綱の台命をうけ、東渡して隱元を招聘せんとす、懇請する事四度に及び、禪師その熱誠に感じ、山を慧門に讓り來

朝す、萬治元年十一月家綱に謁す、寵遇最厚し、列侯の歸依するもの多く終に地を山城宇治に賜ひ、寛文元年五月黃檗山萬福寺を創す。是本邦黃檗宗の始めとす、後水尾法皇深く禪師を信じたまひ度々勅して法要を問はせ給ふ。延寶元年四月病篤きを聞き給ひ特に大光普照國師の號を賜ふ。尋で示寂す。年八十二。

【例句】

隱元忌　　甃花塵止めず隱元忌　　月斗（同人）

肖柏忌　牡丹花忌

【季題解説】

肖、四月四日歌人肖柏の忌日なり。久我氏字は夢庵弄花軒、牡丹花と號し、牡丹花肖柏といふ。堺の人、太政大臣源具通の裔なりともいふ。若くして連歌を宗祇に據り蘊奥を極め、伊勢物語の註を撰し、後土御門帝に獻じ、亦文龜年間勅を奉じて新古今按を述べて法式を制定す、居を北攝池田に定め、牡丹花を號して「三愛記」あり、「花咲かぬ花の心や深見草」の味あり、連俳これより牡丹を夏と定む、池田大廣寺山内「牡丹花隱君遺愛碑」には大永七年四月四日卒　年八十五、とあり、これは扶桑隱逸傳に據り備者田中桐江の選する處なり、亦大正十五年其木像を安置せる大廣寺にて四百年忌を修せり。

【例句】

肖柏忌　　ぼうたんに酒そゝがばや肖柏忌　　天哉（同人）

佛生會　龍華會　灌佛會　浴佛會　誕生佛　灌佛　浴佛　花御堂　花祭

【古書校註】

【栞草】四月八日（）凡諸寺院灌佛會を修す、諸品の花を以て、小堂を飾る、是を花御堂といふ。其内に小さき釋迦の像を安置し、甘草等の香水を灌ぐ。是を甘茶と云ふ。〔事文類聚佛運統記〕周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺國（一）淨飯王の妃摩耶氏、太子悉達多を生む　云々（略）（）龍華會〔彌勒下生成佛經〕時に菩提樹あり、名て龍華といふ、慈氏（彌勒を譯して慈氏といふ）大悲尊下（三）において正覺（三）を成すと　云々、是は龍華樹といふ木の下にて、彌勒（四）始て正覺をとなへ給ひ、此處に三度、說法の會あり、是を龍華の三會といふなり　四月八日は釋迦降誕の日なれば、釋尊を浴し奉り、當來彌勒に逢奉る結縁とすれば、四月八日をすぐに龍華會といふなり。

註（一）印度をいふ。（二）釋迦の父。（三）佛の覺り。（四）彌勒菩薩即ち釋尊の高弟。

【季題解説】

佛生會は釋迦の誕生日即ち四月八日なり、元來陰暦に定まりゐしが、近時陽暦を用ふるあり、即ち全國の諸寺院に於ては小さき假堂を造り、種々の草花にて裝飾し、花御堂と稱す、藍毘尼林の花園を表象するなり。その堂内には誕生佛の小金像を安置し、下には灌盆を設け、之に甘草

等の香水、叉甘茶などを入れ、參詣人小杓にて立像の頂に灌ぐ。これ釋迦の誕生に天龍降りて甘露を灌ぎし故事に擬するなり。故に「灌佛」又は「浴佛」と稱し、此の佛事を「浴佛會」、「佛生會」、「龍華會」ともいふ。又近年淨土宗の寺院にては花祭と稱して法會を修し、街頭に造花の徽章を賣り、朝來象の飾り等の練物を公園等に出す。[illegible]　甘茶（アマチャ）　竿躑躅（サオツツジ）

【例句】

佛生會

手つだひの肌ぬぎ寒し佛生會　浪花（浪花上人發句集）
生れ子は佛も赤きつゝしかな　同（同）
あんな子をほしひでもなし佛生會　也有（蘿葉集）
佛さへ生れた時は木下やみ　同（同）
御母の名は人もしる佛生會　白雄（白雄句集）
御父の名はおろ覺佛生會　同（同）
雲の歩み水の行かたや佛生會　同（同）
卯月八日死んで生るゝ子は佛　蕪村（新花摘）
新茶煮る曉おきや佛生會　太祇（太祇句選）

誕生佛

御佛や蝦夷が島へも御誕生　一茶（七番日記）
誕生佛お月さまいくつおじやるげな　同（同）
御指に錢が一文誕生佛　同（同）
長の日をかはく間もなし誕生佛　同（同）
濱風に色の黑さよ誕生佛　同（句帖）
御佛や生るゝまねに錢が降る　同（新集）
御佛や錢の中より御誕生　同（同）
御ほとけの生れし今朝や不仁の山　乙二（をのゝえ草稿）

灌佛

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな　芭蕉（曠野）
灌佛や墓にむかへる獨り言　其角（五元集拾遺）
佛法をはだかにしたる産湯哉　許六（五老井發句集）
灌佛や靑物店の朝あらし　支考（蓮二吟集）
灌佛や蔦の若葉もあゆみそめ　千代女（千代尼發句集）
灌佛のけふも地藏は地藏かな　蕪村（落日庵句集）
灌佛は裸をしめすはじめ哉　同（同）
灌佛やもとより腹はかりのやど　同（新花摘）
灌佛や假りに刻し小刀目　太祇（太祇句選）
灌佛や二月はなかでほとゝぎす　也有（蘿葉集）
灌佛や寺へ花見の禮ながら　同（同）
産湯かけし佛にうつる朝日哉　闌更（半化坊發句集）
灌佛や門を出れば茶の木原　白雄（白雄句集）
灌佛や芍藥園を見すかして　同（同）
灌佛や雲慶閑に刻けん　召波（春泥發句集）

花御堂

灌佛やわらぢも許す堂の椽　同　（同　）
灌佛は指切をする手つき哉　一茶　（新　集）
灌佛や盥のはしに啼すゞめ　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
灌佛や尼の子尼になりにけり　子規　（全　集）
蚊屋つりの草もさげてや花御堂　千代女　（千代尼發句集）
父が漏ると數ふる指や花御堂　也有　（蘿　葉　集）
燕々も來て乳を吸ふや花御堂　同　（同　）
山寺や五色にあまる花御堂　蓼太　（蓼太句集）
花御堂賣僧がえみ凡ならず　曉臺　（曉臺句集）
花御堂八瀨のさと人並びけり　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
藤棚も今日に逢ひけり花御堂　一茶　（旅　日　記）
へぼ蜂が孔雀氣どりや花御堂　同　（同　）
花御堂月も上らせたまひけり　同　（同　）
二三文錢もけしきや花御堂　同　（同　）
鶯のほゝと覗くや花御堂　同　（發　句　集）

參考　陰曆の四月八日は即ち釋迦佛の降誕日にして、是日信者等各寺院に集りて佛像を灌浴す。故に灌佛・浴佛會と云ひ、又龍華會とも稱するなり。佛を浴する事は、釋氏要覽に據れば、衆人諸種の香湯或は淨水を以て其像を洗ひ、その洗ひたる水を自の頭上に戴きて諸の濁より離れて淸淨となり、法身の如く淨からんことを願ふと記され、必ずしも誕生佛を指したるには非ざれども、香湯に准じて佛の功德を念じ灌佛するものとも解し得べし。當日各寺院にては小さき假堂を造り種々の花にて飾る、是を花御堂と稱す。又堂内に釋迦の立像を安置し、其の下に灌盆を設けて甘茶及び正式には五種の香水を供へ置く。參詣者は小柄杓にて立像の頂より灌ぐなり。是の甘茶を持ち歸りて硯に注ぎ「千早振る卯月八日は吉日よ、かみさけ蟲を成敗ぞする」の歌を記し、柱・壁に貼りて蟲除の呪とし、又八大龍王茶と書きて天井に貼る時は、雷の災を免るなどと信ぜられたり。是は京都にては、町家の門並に躑躅の花を竿の先につけて立て、之を竿躑躅と稱す。

我が國に於いて灌佛會を修する事は、推古天皇十四年四月に、元興寺に於いて齋を設けられたるを始とし、それより毎歳行はれ、仁明天皇、承和七

年三月には公事の一となり、清涼殿にて其儀を行へり。降つて德川幕府に及びては益々盛となり、大奥の長局に花御堂を造りて、寺院に於いて執行するものと、少しも異なることなかりきと云ふ。然るに維新後は殆ど廢れて、僅かに面影を存するのみとなりしが、近年に至りて漸次復興し來り花祭り等と稱して各寺院にて毎年舉行せられつゝあり。

甘茶（あまちや）

五香水（ごかうすゐ） 五色水（ごしきすゐ） 佛の産湯（ほとけのうぶゆ）

古書校註

【栞草】四月八日 〔浴佛功德經〕清淨慧菩薩（一）佛に白して言く、世尊若し佛在世及び滅度未來世（二）の中、諸の衆生如何でか佛を浴せん。佛言く我汝が爲に浴佛の法を說ん。諸の供養の中、最殊勝とす。衆の香湯を爲り淨器の中に置き、先方壇を作りて、妙牀座を敷き、上に佛を置き、諸の香湯を以て次第にこれを浴し、香水を用ひ畢て復淨水を以て、其像を淋洗し、人各洗像の水を少しばかり取て、自らの頭上に置く、初像上に水を淋ぐの時に此偈（三）を誦して云なり、我今諸の如來を灌浴す淨智功德莊嚴、五濁の衆生（四）而垢を離れしめて願くば如來の淨法身を證せん云々。

註（一）釋尊の高弟。（二）死後の未來世。（三）我今以下をいふ。（四）五の汚濁の中の衆生。五濁は五濁惡とも云ひ、劫・見・命・煩惱・衆生をさす。

季題解說

四月八日に、佛を灌ぐ事を佛の産湯と云ふは釋尊の此日誕生せしなれば産湯のこゝろなり、灌ぎ水につきては昔は五種の香よりとれる五香水を、同じく香料より作れる五色水とて靑赤白黄黑の五種の水を佛に奉りしが、近時は甘茶を以てこれに代ふ、甘茶は木甘茶又は蔓甘茶の煎汁にして黄色を帶び甘味あり、されば香湯のほかに院內にてはこれを諸人に施す。小兒等は器物を持ち來りて競ひて貰ひ歸るなり。〔參照〕佛生會（ブツシヤウヱ） 竿躑躅（サヲツヽジ）

例句

甘茶

雀らがざぶ〳〵浴る甘茶かな　一茶（七番日記）

水ざぶり佛なりやこそ天窗かな　同（句帖）

蛙にもちよとなめさせよ甘茶水　同（同）

雀子もおなじく浴る甘茶哉　同（嘉永板發句集）

竿躑躅（さをつつじ）

花の塔（はなのたふ） 貧頭花（ひんとうくわ）

季題解說

京大阪にては、佛生會の日に、竿頭に樒の枝・躑躅・石楠の花を三股にくゝりて挾み、門戶に高く建てて釋尊に供す、竿躑躅又は花の塔と云ふ。〔參照〕佛生會（ブツシヤウヱ） 甘茶（アマチヤ）

例句

竿躑躅

かくれ家にかくれぬ竿のつゝじ哉　金波（類題發句集）

雨御堂見えぬ曇りや貧頭花　子角（同　人）

或説に云、今案に率川、三枝は別社也。率川社の南、三枝御子社あり。諸神記に云、件の社は、右大臣是公（一）建立也。玆により南家の苗裔（二）、此祭を行ふ。公事根源に曰、此三枝の祭は率川祭をいふよし、神祇令にのせたり。三枝の花を折て、酒樽をかざるゆへに、三枝の祭とは申也。（略）（二）率川祭は右大臣是公の建立と申す口傳はべれど、おぼつかなき事なり。此故は令と申す書は、淡海公（四）の撰れて、養老年中に奏覽せらる。是公の大臣は淡海公の曾孫なり。すでに令に率川社と侍なれば、是公の建立には有べからざるにや。（略）顯昭が歌の抄に云ふ、三枝はからすあふぎ也。彼草末廣ければ祝によす也。

註（一）藤原是公（これとも）。（二）子孫の言ひ傳へ。（三）以下其諺の自說也。（四）藤原不比等。

卯の葉の神事　卯の葉の祭　卯の日の祭　卯祭　卯の葉女

古書校註

【日次紀事】四月初卯日、攝洲住吉祭。相傳ふ卯日此所に垂跡（一）す。故に神輿一臺、瑞籬より外、山門に到り則還幸す。神主及禰宜各卯杖（是を忘草と謂ふ）を持ち神輿の前後に供奉す。

【年浪草】攝津風土記に曰、所謂住吉と稱するは、昔息長足比賣天皇の世に、住吉の大神現出して、天下を巡行し、住む可き國を覓め玉ふ時に、沼名掠長岡の前に到り、（略）乃謂へらく、斯れ實に住む可きの國なり。遂に之を讃稱して、眞住吉の國と。是に神社を定む。今の俗之を略してたゞ須美の叡と稱すと云々　未だ是の日卯に當るや否やを知らず。祭日竹馬煎餅を商ふ者多し。

註（一）佛が救の爲に種々の化身となりて現出するを云ふ。

季題解說　五月上卯の日、大阪住吉大社にて行ふ祭事にして住吉神社の鎭座は神功皇后の攝政第十一年四月上卯の日なるが故鎭座の日を偲び奉るの祭儀なり。神職以下供奉の諸員は空木の小枝に木棉を附したるものを簪とし、又、卯の葉女は之を手に捧げて、本殿に参進し玉串として献ずる御祭典あり、卯の葉女は堺龍神遊廓より奉仕す。卯の葉の祭・卯の日祭、俗に卯祭とも稱ふ。（昭和八年再興す）

例句

卯の葉の祭　玉串のそれは卯の葉の祭哉　千燈（同人）

武徳祭

季題解說　五月初旬、五日間、京都岡崎平安神宮境内の武德殿（古へ禁裏にありしものを摸したるもの）にて行ふ祭典。この祭には全國の武術者相寄りて劍法・槍術・弓術・馬術等の試合をなす。

例句

武徳祭　武徳祭老劍客の髯白し　千燈（同人）

參考　毎年五月四日京都平安神宮の武徳殿にて行ふ祭祀。初め明治二十八年京都市に於いて、桓武天皇平安奠都一千百年の記念祭を擧行するに當り、天皇の御偉業を追慕し、新に同市上京區岡崎町に官幣大社平安神宮を造營し、其の社殿を大極殿に擬す。其の西方に演武場を設け、舊號に因みて之を武徳殿と稱す。毎年五月四日より八日迄五日間に渉り、全國の武術家を招集し、神宮神前に於いて祭典を執行し、武徳殿に於いて大演武會を擧行す。其出演者は數千人に及び、撃劍・弓術・柔術・馬術等我國古來の武術の粹を集め、鬪士の意氣は蓋し、天下の壯觀を極むと謂ふ。

向日明神祭

古書校註

【年浪草】神社啓蒙に曰、向日神社は山城國乙訓郡西岡邊にあり。祭る所の神一座、向日神。○神名帳に曰く、註、素盞嗚孫、大歳子（一）也。母は須知比女。云々例祭、四月辰日。土人、産沙神と爲す。（略）○西岩倉金藏寺緣起に云、開山隆豐禪師は人皇四十三代元正天皇の御宇（略）一時靈夢によりて此岩倉山に（略）登て箭を携る翁に逢ふ。（略）翁云ふ、此山を以て師に授く。我又擁護すべし。又箭を放て此箭のとどまる所を（二）坐とせんと。然るに今の向日山にとゞまる。遂に其處に行在あり。是向日明神也。云々當社祭禮以前社人先岩倉山三重院へ行て垢離をなし、又祭日必ず神馬を此瀧に牽くなり。是出現の地のゆゑにや。雍州府志に曰、一説日に向ふは月也。然る時は則月讀尊を祭る所の者か。

註（一）[illegible]（二）翁の居る所とせよ　翁を祭る社を建つる場所とせよ。

季題解説　五月中辰の日（月の中に辰の日二日あれば初めの日、三日あれば中の日）京都府向日町、向日明神の祭禮なり。祭事は寅の日神輿を旅所に渡し、卯の日の夜、丑の刻、村より馬上の童を出し、もしこれを見たるものは祟ありと云ふ。中の辰の日神輿還幸、氏子の村々より十歳位の子と馬とを出し、子供に振袖を著せ花笠を被らしめ、馬の側に割竹を持たし者數人從ひ、神前にて聲をあげ割竹を叩きて馬を狂はしめ馳せしむる行事あり。

御靈祭

御靈の神事　御靈の御出

古書校註

【[illegible]】【紀事】午後に神輿二基中の雜宮を出て、幸の鉾八本・兒鉾を床上に建て、（略）別當ならびに氏子供奉御旅所より（略）本社に入る。

季題解説　京都、寺の内烏丸に上御靈神社あり。寺町丸太町に下御靈神社あり。兩社共その祭神を同くし、各々八靈を祀る。

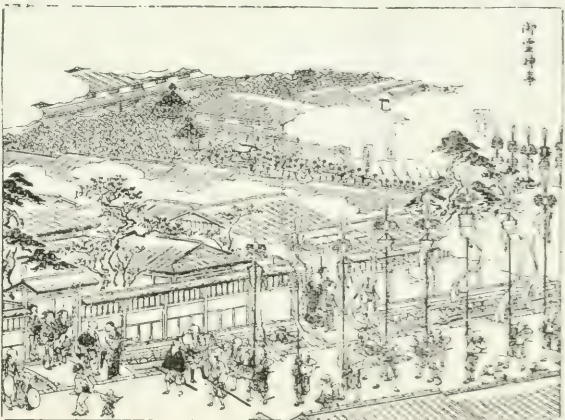
崇道天皇（桓武天皇皇太子、早良親王）伊豫親王、（桓武天皇皇子）藤原夫人（伊豫親王御母）藤原廣嗣（遣唐使）橘逸勢（同）文屋宮田麻呂、吉備内親王、菅原道眞（火雷天神）

これを八所御靈と云ふ。何れも事に坐して、寃罪裡に薨逝せられしを、清和天皇、貞觀五年、勅して大に御靈會を行はれし事に發す。現今にては之を御靈祭と稱し、兩社何れも、五月一日より、十八日までの間執行さる。往者は御旅所ありたれども、今は無く、一日神行祭より、十八日還幸祭迄の間、兩社の拜殿に神輿を安置し、人々これに參詣するなり。

例[illegible]句

御靈祭　羽織者て染屋が御靈祭かな　子　角（同　人）

神泉苑祭（しんせんゑんまつり）

古書校註　五月一日、京都御池通大宮四、神泉苑の龍王祠の祭禮なり。祭神は善女龍王にして傍に辨財天を祀る。往古は八月一日なりしため八朔祭、八朔參と稱したり。祭事は神佛混淆を以て行はれ、神輿三基の神幸に稚兒・僧侶の供奉あり。一時廢絶されしも、明治三十年再興せられたり。現今の神泉苑は疆域僅かに四十間ばかりの小苑なるも舊地は地域廣く、南北四町、東西二町の御苑にして、平安第一の林泉なりき。その中に大いなる泉池ありて山を築き石を配し、水邊に閣及び亭榭を構へ、龍舟を浮べ畫橋を架し、天皇御游覽の地なりき。弘法大師こゝに天竺の善女龍神を勸請して小社を建つ。小町は和歌を詠じて雨をふらし、鷺は宣旨に從ひて五位の爵を賜りし神苑なりき。爾來星移り物換り、建保の頃大廢に及び、承久の亂後に修造ありしも、其後、又々荒蕪に歸し、天和中、僧覺雅、幕府に請うて池中に一小祠を建て、その舊跡を存し、爾來（今日に至るまで）東寺の管下にある眞言の精舍なり。

【例句】神泉苑祭　神泉苑木深く在す神輿哉　子角（同人）

諏訪御柱祭（すはおんはしらまつり）　諏訪祭（すはまつり）

【季題解説】信濃國諏訪郡にある諏訪神社の祭禮なり。上下二社あり、上社は中洲村にあり、下社に對し上の宮と稱し、健御名方命を祀り、下社は下諏訪町に在りて春宮、秋宮の二宮あり、下の宮と稱す、八坂刀賣命を祀る。併稱して諏訪上下社ともいふ、又、法性大明神、南宮大明神とも稱ふ。上諏訪社には拜殿ありて神殿なく、後方の石窟を以て神の坐する處となし、其四隅に大なる柱を立てこれを御柱といひて宮に擬す。かゝる柱を建つる祭事を御柱祭と稱し、上下兩社とも行ふ。上社は五月四日より下社は同五日より神殿の四隅に樅の木材を建つ。上社は八ケ岳の御料林より十八ケ村にて、下社は東俣御料林より二町四ケ村にてこれを曳くなり。

賀茂の競馬（かものくらべうま）　競べ馬（くらべうま）　勝馬（かちうま）　負馬（まけうま）　空走（からはしり）　足揃（あしぞろへ）　眞手結（まてつがひ）　荒手結（あらてつがひ）

【古書校註】【日次紀事】［賀茂足揃］五月初朔日　舊例に依て、京兆尹、（一）馬一匹出さる。其外武家類ふ所あるの人も亦假して、之を騎せしむ。其騎者は上賀茂の氏人の年少の者二十人を擇ぶ、各祿を與ふ。又端午に騎する所の者は氏人壯年者二十人を擇び、各祿物を與ふ。凡馬員二十走。今日騎する所の者は烏帽子淨衣を着す。社司各埒外に座す。初め先一人毎に一馬に乘り、[illegible]覽せしめて其遲速を考へ、執筆者をして之を記さしむ。其後馬の遲速同じき者は之を比し、二人をして騎馬せしむ。故に是を足揃と謂ふ。古所謂荒手結（二）なり。

【滑稽雑談】［賀茂足揃］是洛北賀茂の神事也。五日に十番の競馬侍る。此競馬二十走の馬の足を試てつがふと云ふ義也。神人是に騎す。しかれども五日の競馬勤る人にあらず。一段にはわかき神人折烏帽子に黄衣を着してのる。けふは何度も乘直して競ふ。故にいと興あり。此馬の内に所司代より引るゝ者、騎競等奇麗をなす。（三）これは素走とて競はず、獨走する也、古人傳へて、競馬は馬を競て、人を競ふ事にあらずとて、たとへ人は落馬しても馬先を駈れば、勝とす、ふるきためし侍れば、第一馬の足を揃へて、遲速を試るもさもあらんかし

【滑稽雑談】［賀茂競馬］詞林采葉に曰、或る記に云ふ、[illegible]欽明天皇の御世に、天下國土暴風吹き雨荒り、時に卜部伊吉若日子に勅して卜せしむ。乃ち卜して奏すらく、賀茂神の祟なりと。仍て四月吉日を撰びて、馬に鈴を懸け、人、猪影を蒙り駈馳して、以て、祭祀をなし、能く禱祀せしむ。之に因りて、五穀成就、

天下豐平なり。乘馬此に始るなり。注進略記に曰、五月五日の競馬は人王七十二代堀川院寛治七年、五穀成就、天下安全の御祈禱の爲に始る。(略)詞林采葉にいふは、五日の儀にはあらず。惣て神祭に馬を獻ずる始也。今葵祭の走馬又はけふの競馬などもさやうの遺意ならし。今世に至りて絶る事侍らず。當社の神官七日の開神事潔齊をして競馬に乘る也。左右各十番二十疋也。(二)東西に埒をかまへ、南北に櫻楓の二木を植ゑ、勝負の木と定め、武衞(京都所司代)の警固により、巍々として社家の檢證鉦太鼓をならし、左右の勝負を決す。此に植たる楓の木の前を過る遲速を以て、勝負を論ず。いと興ある事也。

【日次紀事】〔賀茂競馬〕　五月初五日。上賀茂競馬。音樂あり。午の時競馬あり。斯の處の競馬は、近衞院康治年中始めて行はる。然ば其始は臨時に執行す。後世五月五日式日となす。(略)乘る所の氏人二十人。今日各冠を着け、纓(四)を卷き、緌(五)を附け　左方は赤袍を著し、右方は黑袍を著す。(略)始め先第一番左右馬一疋毎に馳す。是を空走と謂ふ。其後各双べ馳りて遲速を爭ひ勝負を決す。是則古所謂眞手結(六)也。(略)黑袍の人勝てば、則鐘を鳴し、赤袍の人勝てば則ち鼓を鳴らす。

注　(一)京都所司代、(二)あらそつかひ。(三)馬の鞍や鐙等立派なるをきそふ。(四)冠の紐。(五)綏、綏纓。(六)六まてつがひ。

季題解說　五月五日(今は六月五日)京都上賀茂神社々前の馬場にて催す競べ馬の神事なり。堀川天皇寛治四年五穀成就、國家安泰の祈禱として行はれたるを初めとす。(同七年九月臨時祭の時武德殿の乘馬の儀を寫し奉納ありしを濫觴なりとの一說あり)爾來全國四十八所の莊園より一頭づゝ馬を出して盛に行はれたり。一日に足揃の式あり、即ち競馬に出場する馬の遲速を檢し、早きは早き、遲きは遲きとひとしき馬にて左右の番組を定む。四日、騎者、各、下賀茂、上賀茂社に詣で、五日巳の刻より神事始まり午の刻より先づ飾り馬を出す、一番太鼓により騎者(乘尻)左右十人宛、各冠をつけ纓を卷き緌を付し、左方は緋袍・緋の裲襠、右方は黑袍・青の裲襠、共に萠黃・兩面錦の袴をうがち、競馬太刀を尻鞘に嵌め、鞭を手にす、各、腰に菖蒲を佩ぶ。騎者は左右に分れ、二の鳥居外にて乘馬、即ち第一番を始む、左右一騎毎に競ふ、一番は必ず左方を勝しむ、これを空走(むだばしり)といふ。第二番以下を實の勝負とし順次九番の遲速を競ふ。東西の埒外に審判者(念者、階下といふ)あり、左方勝つ時は太鼓、右方勝つ時は鐘を打つ、又東西の幄舍よりは左勝つ時は朱の丸の扇、右の時は白丸の扇をあぐ。勝者は纏頭の白絹を受け頓宮(かりみや)に至り拜す。

實作注意　俳句にては競馬と云へば賀茂の競馬の事にて、今時各地に行はる競馬と混同すべからず。日本の競馬の濫觴は此の競馬とすべきも、今日目黑・鳴尾・函館・滿洲等で行はるるものは全く神事から離れて、英國あたりの競馬會の影響を受けしものなり。〔參照〕賀茂祭　人事―競馬

例句

競馬

競馬埒に入る身のいさみかな　其角（五元集拾遺）
くらべ馬顔みへぬ迄響にけり　太祇（太祇句選）
毘黑の上手父出よくらべ馬　几董（井華集）
凄哉競馬左右の負合せ　召波（春泥發句集）
君が代や埒たてかぎるくらべ馬　樗良（樗良發句集）
くらべ馬神たのみとぞみえにける　曉臺（曉臺句集）
狩明て日の塵はらふ競馬哉　同（同）
翠簾越の誰に落けんくらべ馬　蓼太（蓼太句集）
贊つゝは老もわかずよくらべ馬　白雄（白雄句集）
むつまじきつれをば何とくらべ馬　同（同）
我思ふ人は落にきくらべ馬　梅室（梅室家集）

足揃

落たるかことに目立やあし揃　嵐雪（玄峰集）

參考　毎年陰暦五月五日京都の官幣大社上賀茂別雷神社境内の馬場にて行はるゝ競馬。賀茂の競馬は執行に先ち、朔日に、各自馬の遲速の足試しを行ひて一二の番を定む、是を足揃と云ふ。五日に到りて競馬あり、一にくらべうまと稱し、或はきそひうま、又きほひうまとも稱す。其儀式、騎士廿人裲襠に冠の纓を卷き緌を付け、左方は赤袍、右方は黑袍を著す。一同休息所に勢揃し、列を正して境内に入り、勝栗と神酒を賜ひ、神職にて奉幣す。後ち埒内に入りて一の鳥居外にて乘馬し、馬場の末より馬場本に至りて一番をはじむ。左右一匹毎に馳す。是を寄走と云ふ。其後各自の勝負を決す、念人と稱する者あり、馬場の左右の埒所に坐し、赤黑の扇に標して勝敗を標示す。又勝負の木とて馬場の左に楓の木あり、是より内にて落馬し、乘り遲れたるを負とす。愈々勝負决する時、勝る者は[illegible]なるは立上り、立たるは馬場に乘出し、手に持つ竹枝にて馬の

跡に立ちて道をたゝき、父枝にして飛び上りて走る馬を望觀す。或は群衆の中へ馳せ入れ、馬は驚きて逆立ち、騎手は落ち、見物中に幾多の怪我人を出す等の不祥事をも出來せしこともありき。抑此儀の起原は、堀河天皇の寛治七年五月五日にして、是の日天皇、五穀成就、天下安全の御祈あらせられし時、初めて十番勝負に對する二十疋の馬料を寄進せられたるより始まり、衛來各國の庄園より一頭の馬を出し、毎年行はれたりしが、應仁の亂後廢絶し、後ち徳川氏の世となりて再興せられ、今日に及びしものなり。

生玉の走馬祭　生玉の流鏑馬

古書校註

【年浪草】神社啓蒙に曰、生玉神社は攝津國東生郡天王寺の邊にあり。祭る所の神、一座、天生玉神也。（略）○社家註進に曰、（略）明應年中、本願寺の僧、此所に來りて、寺院を創め、神地を以つて境内に接す。斯により神不潔を惡み、彼僧を罰する也。時に神殿造替の宿禱（一）をいだきて、神主藤原吉勝をして願辭を告けしむ。數日の後、寢床を進つ。遂に神殿を遷し替へ奉る。[illegible]其後信長の兵燹の日、殿閣悉く灰燼となり、纔に神璽を以つて別所に遷すのみ。慶長年中秀吉城郭を築くの序に、今の神地に遷す。○紀事追加に云、今日（五月五日）午刻流鏑馬あり。神前の門外より鳥居の方へ馳る。其裝束は腹卷陣羽織を著し、一參にして止む　○日本軍器考に曰、流鏑馬は神事に用ひらるゝ射術也　二町の内に馬場殿を作り、三的とて、的の四半の如くなる物を三つ立る也。射人は馬に騎り、（略）鏑矢（二）を以て射る事也。

註（一）かねぐ〜思ってゐる願ひ（二）かぶらや。

季題解説　五月五日、大阪生玉町、官幣大社、生國魂神社の祭事なり。祭神は生島神・足島神を祀る。生國魂神社は「いくくにたま」神社と云ひ、俗に「いくたま」神社と稱ふ。昔時流鏑馬ありて午の刻社家羽折腹帯を著して馬場を馳せしも民家建つまりて行ふ場所なきため、維新後これを廢し、現今は走馬祭と稱へて神官、境内を騎乘するにとゞまり、僅かに往古の風趣を偲ぶのみになりぬ

例句

生玉の走馬祭

生玉や町見下ろしつ走馬祭　千燈（同人）

水屋の能　水谷の能　水屋鎮花祭

古書校註

【年浪草】紀事（一）に曰、南都（二）水屋川の南に水屋の社あり。祭る所の神二座、素盞烏尊、稲田姫云々なり、此祭は、伏見院の御宇、疫病流行に依りて、始めて行はる。古へは神樂を行はれけるにや、今は申樂四番あり。

四座の者(三)勤るに非ず、地人能藝を施す也。四月四日五日(四)にあり。

【増山の井】南都春日にあり、三日四日五日。

註(一)日次紀事の略。(二)奈良。(三)觀世・寶生・金春・金剛の能の四座に屬する玄人が演ずるのでなく土地の素人が演ずるの意。(四)日次紀事・増山の井其他、三日四日五日の三日間とす。

季題解説 水谷の社は奈良市春日野町、水谷川のとりに在り。祭神は素盞鳴尊、外二柱にして春日神社の攝社なり。往古は四月四日、五日の兩日に水邊の芝生にて素人能樂を催し、疫氣を祓ふ祭をなす　これを水谷の能と稱せしも、今は五月五日鎮花祭として疫神を鎮むるの祭事のみを行ふ。

参考資料 陰暦四月四日・五日の兩日、大和國水屋河水屋社に於いて行ふ儀式なり。即ち境内の杉樹の下に疊を敷き、春日神社の禰宜相集りて謠曲をうたふものにして、疫病を除く爲なりと稱せらる。江戸初期に中川喜雲の著せる案内者に、「春日の禰宜百六十人、いづれも藝能をたしなみ、社頭にばんをつとむる時も、ことさら寒夜のあらしはけしきに、冷あかりて蝶涕をながしながらも、憚かる所なく聲うちあけて謠をうたふ、日ごろつかひ入たること是なれば、いづれもノヽよくうたふとかや、禰宜のあつまりて水屋の能はつとむる事なり」と見えたり。

府中祭（ふちゆうまつり）　暗闇祭（くらやみまつり）　六所祭（ろくしよまつり）

季題解説 五月五日、東京府下府中町官幣小社大國魂神社にての例祭なり、景行天皇四十一年武藏國大國魂神を祀る。孝德天皇の時武藏國府の齋場に兼用せらるゝにあたり、國司の奏請により國内諸神の神座を設け、國幣の典儀を行はるゝに及び武藏總社と稱ふ。又、國内六所の神社(一ノ宮、小野神社、二ノ宮、小河神社・三ノ宮、氷川神社・四ノ宮、秩父神社・五ノ宮、金佐奈神社・六ノ宮、杉山神社)を配祀せらるゝにより六所宮とも稱ふ。祭事はその夜十二時を期し、全町悉く燈火を滅し、闇黒の内に神輿の渡御あり、式終つて燈を點す、この祭禮を暗闇祭ともいふ。

新宮祭（しんぐうまつり）　大津新宮祭（おほつしんぐうまつり）

古書校註

【年浪草】新宮祭。五月三日 三井山中(一)にあり。社祭る所の神、新羅明神也。元亨釋書に曰、新羅明神は天安二年圓珍師(智證大師)舶を泛べて、唐より歸る。洋中忽に老翁有て、船艦に現じて曰、我は是新羅國の神也。誓て師の教法を擁護して、慈氏の下生に至らん(二)。語を畢んで見えず。今日三井山下の土人、新羅明神の祭祀を修す。之を新宮祭と謂ふ。

【俳諧歳時記(三)】大津祭を祭るきはゐにこれを關祭と誤り、おぼへる者あり。關祭は九月廿四日一名逢坂祭といふ。或は關祭と稱するものは貴船明

神の祭（三）也。貴船の祭・明神の祭ともに逢坂山にありとその說迭に異也。猶考ふへし。【參照】秋—逆髮祭（一）

註（一）[illegible]に在り。（二）傳、[illegible] 傳のしもへとならう。（三）別項貴船祭參照。

手安天神祭（てやすのてんじんまつり）

古書校註

【年浪草】江洲野洲郡江邊庄土安明神并天滿宮の社あり。（略）永原村・北村・中北村三ケ村の氏神とす。社說に云、鎭座年歷不詳。（一）凡明和年中まで七百有餘年と云ふ。（略）京極佐々木（二）の同流永原に住す。依て產沙の神となす。四月午日祭禮神輿二基渡御あり。例正月十一日より十三日に至て連歌千句興行あり。卷頭は時の地頭の句を定例とす。此處北村季吟出生の地なり。又平相國淸盛公愛妾岐王（三）出生の地と云ふ。故に平家の奉行人裏書の判物の大繪圖、氏子三ケ村に傳來と云ふ。

註（一）明和年中まで七百餘年經ると云ふの意。（二）東極氏佐々木氏の二氏。（三）妓王の誤か。

季題解說　五月五日（もと陰曆四月上午日）滋賀縣野洲郡祇王村々社菅原神社の祭禮なり。祭神は菅原道眞公にして、地主の神に土安大明神あり。手安の名これより出でしといふ。祭禮には神輿二基出でゝ渡御す。

菅宮祭（すけのみやまつり）　小津祭（をづまつり）・長刀祭（なぎなたまつり）

古書校註

【滑稽雜談】四月中午日　神社啓蒙に曰、小津神社は近江國野洲郡にあり。祭る所の神三座、所謂大宮・二宮・三宮是也。（略）神名帳頭註に云、玉津正一位、小津神社は宇賀魂也（略）按るに祭賀必す午の日を用ふ。又稻荷同體（一）と稱するは　則玉津の二字、蓋し據る有るか。

註（一）小津神社祭神と稻荷明神と同じであるとの意。

季題解說　五月五日近江國野洲郡小津村、縣社小津神社の祭禮なり。祭神は宇賀之御魂神・建速須佐之男神・大市姬神・地主の神は小津君なり。祭事には太鼓・小鼓・鉦等の合奏に依り長刀を振り踊るの事あり、因つて長刀祭ともいふ。

一乘寺祭（いちじようじまつり）

季題解說　京都一乘寺村（現今京都市へ編入）、八大神社の祭禮にて五月五日に行はる。祇園神社の分れにして素盞鳴尊を祀る。祭に先だちて四月三日、御弓の儀とて、神前にて弓道の武技を奉納す。祭禮當日氏子總代三十數名の供奉諸役何れも鎌倉時代の禮裝嚴しく、御輿（八角なるが特徵）に隨ひ御旅所曼殊院に到りて晝食の後本社に還行す。又八丈に餘る鉾三本を持

ち、氏子內を練り步く。古來は陰曆三月五日に執行、昔は七里祭と稱し、八瀨・大原・一乘寺・修學院・山端・高野・上鴨の七ケ村なりしが、今は別々に行ふなり。明治中葉まで競馬の神事ありたれども今は行はれず。

例句

一乘寺祭　早蟬し祭賑ふ一乘寺　子角（同人）

地主祭（ぢしゆまつり）

古書校註

【年浪草】 神社考に曰、本地は文殊、大己貴の垂跡と云々 洛東清水地主權現と號す也。○康富記に曰、文安四年四月九日庚午、淸水地主權現祭也。神輿午刻還向有り。其後猿樂舞すみ、田樂等舞了す。云々（略）○雍州府志に曰、地主古へ旅所白山通五條の北にあり。今右地藏の存する所也。祭の日暫く神輿を經書堂の前に居ゆ。是旅所の儀を表する也。○當寺緣起に云、祭津田村將軍の靈也。弘仁三年四月延鎭（一）奏して淸水寺の鎭守となせり。

註（一）京都淸水寺の開山。延暦十七年坂上田村麿東山に寺を移し、淸水寺と改め、開基に住持す。寂年不詳。

季題解說

五月七日京都淸水寺境內、地主權現の祭禮なり。祭神は大己貴命とも手力男命とも田村麿とも云ひ、淸水寺の鎭護神なり。古くは渡御の祭事ありしも現在は居祭にして頗る閑かなる祭禮なり。

例句

地主祭　景淸は地主祭にも七兵衞　たかし（ホトトギス雜詠選）

押あふて車やどりや地主祭　瓜流（新選）

松本祭（まつもとまつり）

古書校註

【年浪草】 淡海志に曰、江州大津松本村に神社あり、祭る所の神、平野大明神なり。人皇十七代仁德天皇の廟也、難波の平野を移し奉ると云々。本宮は往昔六七丁、南の山、狐谷にありと云ふ。慶長に此處に移す。例祭五月朔日、神輿一基あり。今傍に精大明神を並祭る。

季題解說

五月七日滋賀縣大津市松本に鎭座する鄕社平野神社の祭禮なり。祭神は大鷦鷯皇命を祀る、相殿に精大明神（猿田彥）を祭る。蹴鞠の神なり。神輿渡御の神事あり。

山崎祭（やまざきまつり）

古書校註

【滑稽雜談】 神社啓蒙に曰、山崎神社は山城の國乙訓郡山崎（一）に在り。祭る所の神一座、大山咋の命（二）明月記に云、建仁二年四月八日午の時（三）許り、水無瀨殿に參上す。未の刻（三）出御。此の還、辻祭（三社祭禮）御

前を渡らる。其中一方、頗る田業等の供奉を闘ふ。土民等毎年此事を營む(田)。此祭を俗に童使と云ふ也。當代此二社、東を東天王八王子と稱し、西を天神八王子と稱す。傳て云ふ、天王とは素盞嗚尊にて、養老三年四月八日始て影向といへり。今日祭る所、天王と酒解と合せて祭るならし。童使と云ふも、此神影向の時の儀式など云ひ傳ふ。近世はたゞ形の如くの祭侍る也。

【俳諧歳時記】今日此使に童使といふことあり。今式に日の使の所に記すは誤也。

註（一）嵩宮八幡の傍にあり（山城名勝志）。大山崎北山上にあり（山城名勝志）。（二）午後十二時（三）午後二時（四）以下其社の自記也。

季題解説　五月八日、京都府乙訓郡大山崎村天王山の酒解神社の祭禮なり。創立年代不詳（維新の際、兵火に罹ひ記錄燒失）、祭神は大山祇命・素盞嗚命・櫛稻田姫外五男三女十一柱なり。古來より山崎の里の産土神なれば山崎社といふ。往古は少將代童使・榊鉾・神宮の秘曲を奏し、神官勾當の湯を捧ぐ等、二日に亘りて莊重なる神輿渡御の祭典ありたり。現時のものは大正十年再興の行事にして、古き御輿は國寶なれば、新しき御輿を以て八日旅所に神幸あり、翌日還御あるなり。

例句
山崎祭　燕飛んで水の山崎祭かな　子角（同人）

筑摩祭（つくままつり）　鍋祭（なべまつり）　鍋被り（なべかぶり）　筑摩鍋（つくまなべ）

古書校註

【滑稽雜談】一日（四月）或は初午日、神主啓蒙に曰、筑摩神社、近江國坂田郡にあり。祭る所、御食津神（或は八雲御抄に曰、つくまのなべ、是は近江のつくまの明神祭に、男のかずに（一）、土にてなべをつくり、たてまつるといへり。或說には、此神の祭祀に、女のあふたる男のかず程、鍋をかづきて（二）ねるといへり。

【年浪草】雜話集に俊頼の日、近江の國つくまの明神と申す神おはします、其神の御ちかひにて、女の男したる數にしたがひて、なべを作りて、其祭の日たてまつる也。男あまたしたる人は見ぐるしかりて、少し奉りなどしつれば、物のあしくてそみなどしてあしければ、數のごとくしていのればなほりなんどする也。（伊勢物語に日、むかしおとこ、女のまだ世をへず（三）とおぼえたるが人の御もとへ、しのびてもの聞えて後、ほど經て　あふみなるつくまのまつりはやせなんつれなき人のなべの數見む。（）家集寄社戀　夜とともに溶そのみこそれ、さす哉つくまの鍋にいらぬものゆゑ　淸輔。

註（一）男に接した數だけ（二）頭に冠つて（三）まだ世なれてゐないと思はれる女の許への意。

季題解說　五月八日（昔は四月八日）近江國坂田郡米原町大字朝妻に在る鄉

社、都久麻神社の祭禮なり。古は大膳職の御厨の地にして大御食津の神を祭る。相殿は大市姫神、大年神なり。古昔、村婦は男に許したる數だけの鍋を戴きて神幸に供奉するの奇習あり、若し虚の事あれば鍋自ら破れるといふ。いつの程よりか廢れて、今は下げ髮に狩衣緋の袴の如きものを著し、紙製の鍋を戴きし少女八人が供奉して、唯その面影を存するのみとなりぬ。鍋被りとも稱す。

季題解說

筑摩祭　君が代や筑摩祭も鍋一ツ　越人（猿蓑）

鍋祭　ころんだを簡に見て久し鍋祭　乙二（をのゝえ草稿）

鍋被り　割竹をつく鍋稚子の警護哉　紅山（新[illegible]）

[illegible]考

毎年陰曆四月朔日、近江國坂田郡筑摩神社にて行ふ祭なり。本社の祭神は舊く文德實錄に近江國筑摩神と見え、西宮記には内膳筑摩御厨と見えたれば、元と大膳職の御食津神を祀れるものゝ如し。此の神は食物を掌り給ふ神なるが故に、祭日には村婦、他夫に會ひたる其の男の數ほど土鍋を作りて頭に戴き、神輿の後に從ひて渡る、若し男に會ひたる數を隱す時は、忽ち神罰を蒙ると云ひ傳ふ。因て此の祭を一に鍋祭、又は鍋被りと稱す。伊勢物語下に「むかし男、女のまだ世經ずとおぼえたるが人の御もとにしのびてものきこえて後ほどへて、あふみなるつくまのまつりとくせなむつれなき人のなべのかずみむ」と云へるは即ち是なり。後世祭日を八日とし、儀式も本義を失ひて形式化せるものゝ如し。即ち諸國圖會年中行事に四月八日の條に「今は今日十二三歲ばかりの少女、各下髮に狩衣緋の袴の如きものを著し、紙をもつて造りし鍋を戴き、手に鍋取を提る者十二三人、筑摩の里より出て、四五町ばかりなる本社に詣で、未の刻ばかり神輿渡御の供奉をなす。此時村中壯客、警固を置て其後に從ふ、是を見むため遊人群をなし　或は湖上に數百の舟を泛へ、村中よりこれを見る、是亦一時の壯觀なり」と見えたり。

宇治祭（うちまつり）　ぎんかり祭　大幣神事（おほぬさしんじ）　傘御幣（かさごへい）

古書校注

【年浪草】離宮社、山城國宇治郡宇治の里にあり。祭る所の神三座。[illegible]宇治舊記に曰、離宮大皇、兎道稚郎子、仁德天皇。當社、兎道[illegible]の北にあり。關白賴通、平等院を建立し、離宮を南に移し、平等院に向かしむ。此寺の鎭守の神と仰ぎ[illegible]。[illegible]曰、離宮は祭る所の神一座、藤原忠文[illegible]承平三年平將門誅伐の功を以て恩賞を行はるゝの日、小野宮實賴、忠文を以て賞列に入れず。故に忠文深く小野宮實賴を恨み、遂に宇治河に沒す。其靈、崇をなし、百姓[illegible]。是を以て宇治の離宮と[illegible]。[illegible]宇治離宮の御神事は[illegible]祭禮に非ず、[illegible]に[illegible]して

天下大平、國土安穩、萬民豐饒、五穀成就の祈に太陽の神事を平等院に執行さる(略)云々。土人云ふ、五月八日未の剋(二)の頃より已の刻に至りて、之を修す。大平の御神事と曰ふ。青梅、苜の兩種、神饌に必ず之を備ふ。

【滑稽雜談】 此社の神傳(三)兩說あり、識者明らむべし。當世又ぎんかり祭と稱す。見るに圓木を長さ數尺の者に切、木口に笠を被らしめ、是を捧て、衆人ぎんかり又は御ぎんかりとはやす。俗云ふ、此神は孝謙天皇の靈にてぎんかりは彼弓削道鏡が馬陰過量の表れにて、神をいさむなどいへり。いまはしき說なり。只金銀の幣の義をあやまるならし。此祭の日限、昔はおほかた八日也。延寶年中、嚴有院殿の御他界よりおほくは十五日なり。(略)また近年は五月廿六日定むともいへり。

【雍州府志】 傳へ言ふ、祭る所藤原忠文也と。然ども謬傳か。(略)祭の日、金銀幣を奉る。供奉人誤りて、金銀幣有るを義年賀利々々と謂ふ。

註 (一)宇治 (二)未の刻、午後二時 (三)應神天皇其他を祭る說と忠文を祀る說との二あり。雍州府志は忠文を誤かと疑ふ。(四)以下其諸の自說。

季題解說 陰暦五月八日、今は陽暦の日、山城國宇治町宇治神社の祭禮なり。神社は古く稚郎子皇子の宮居し給ひし舊地にして、仁德天皇の御宇鎭座ありしものなり。下宮の祭神は菟道稚郎子皇子とし、式內鄕社にして宇治町の產土神なり。上宮は延喜年中の建造にして俗にチヨンノ造なり。應神天皇、仁德天皇、稚郎子皇子を祭る。櫻樹多く、式內村社にして、槇島村の產土神なり。因みに宇治神社を離宮八幡ともいふ。

當日神輿渡御に先だち、大幣神事行はる、幣の高さ一丈二尺、上に布張の傘あり、上部に棚をまうけて其上に大幣田より取來りし松を立つ。幣帛は一丈六尺の布にして小さき幣を千枚あまり附し、四人にてこれを捧げ、祓を修し縣神社に到り神供(梅、若布)あり、了つて宇治橋より川へ投ずるの行事あり。この神事を傘御幣とも云ふ。

例句

宇治祭　古顏の手品師も來て宇治祭　芳河士　(明治新題句集)

譽田(ほんた)の樂車祭(だんじりまつり)

譽田祭(ほだまつり)　樂車祭(だんじりまつり)

季題解說 五月八日河內古市村、譽田八幡宮の祭事なり。往時は譽田の樂車祭として樂車を曳き出し、盛んなる祭なりしが、現時は地車(だんじり)を出さず祭日境內にて地車囃に興を上ぐ。

例句

樂車祭　麥の穗にひゞく樂車祭かな　千燈　(同人)

花(はな)の撓(とう)の神事(しんじ)

花(はな)の撓(たう)　豐年祭(ほうねんさい)

季題解說 五月八日、尾張國名古屋熱田神宮の行事なり。この日神宮社內に

米作棉作に關する造り物を拵へ置く、里人これに依つて其年の米・棉の出來をトすといふ。當日は田家に卯の花を挿すの事あり。

道頓忌（だうとんき）

季題解説 安井道頓、諱は成安、市右衛門と稱し薙髪して道頓と云ふ。河内の人なり。遠く足利の支裔より出づ。その後水運の便を思ふの大計より現在の道頓堀の工事に着手したりしが、慶長十九年徳川家康大阪城を攻るや道頓、太閤の恩に感じ奮然大阪城に入り、元和元年五月八日落城の砌、殉難す。從弟道卜等其遺業をつぎ道頓堀を完成す。道卜、寛文四年十月十七日、八十三歳にて死す。大正年間道頓・道卜共に從五位を贈らる。日本橋々畔に道頓の碑石を建つ。時の知事大久保利武撰文す。道頓堀の名は松平忠明に依り命名せられたりと云ふ。昭和八年夏、道頓歿後三百二十年を期し、道頓堀今日の繁榮を齎したる功績を讃へ、盛大なる祭典を催したり。道頓堀は東京淺草、京都新京極等と共に、殷賑を極む。北岸は宗右衛門町の花街なり。

例句

道頓忌

大江丸をしのぶにつけて道頓忌　（[illegible]國に道頓の裔なり）　月斗（同人）

繁昌を映せる水や道頓忌　胡月（同　）

八瀬祭（やせまつり）

古書校註

【滑稽雜談】洛北八瀬郷に祭る所、二座、日吉神社一座（八王子の神也）、天滿天神一座。雍州府志に曰、（一）世に傳ふ、菅神（二）、少年の日、叡山法性房の室に入り文書を學ぶ。往來の次で、此村に憩ふ。因りて社を建て之（一）を祭る。（二）一説菅神左遷の後、天下に根を顯さんと思召し、尊意の室（三）に來り給て、僧正と不快の說諸書にいへり。此崇を鎭んために尊意の勸請し給ふと傳ふ。當代におゐて毎歳祭る所、此二神也。神輿二基をいさめ郷人十人競馬の裝束を着す。其餘數十人紙を以て裝束とし、社前の馬場にて競馬をいどむ事三度なり。神輿もまた此馬場を神幸するに、往返三度いと興ある祭禮也。

【年浪草】上人祭の上、大竹を切て、其技に五色の扇挑灯等の物を釣りさげ、持て囃しながら持ありく也。其拍子俚語を以て云ふ。又一興なり。

註 （一）昔の道眞也、（二）雍州府志による。（三）前記の雍州府志に記す、法性寺の住持也。

季題解説 五月九日もと（四月上辰日）京都府八瀬村日吉八王子天神社の祭禮なり。賀茂祭の競馬の如き走馬の行事あり。神輿二基の渡御に少年風流人形樣のものを著け踊り從ふ。

例句

八瀬祭　八瀬祭里子の仕著せ褒め合ひつ　子角（同人）

今宮祭（いまみやまつり）

古書抜註

【滑稽雑談】　十五日　諸神記に曰、正暦五年甲午六月廿七日、疫神を船岡山に安置せらる。長保三年五月九日疫神を紫野に、安置せらる。（略）靈夢の告による也。（略）公事根源に云、紫野今宮祭、これは疫癘の神（一）なり。正暦五年、長保二年天下しづかならざりし時、此神社をまつらる。藤原長能に首を詠じて奉りけるとかや。○拾遺　白妙のとよみてくらをとりもちて、いわひぞ初る紫の野に　藤原長能　同　今よりはあらぶる（二）心ましますな。花の都に、社さだめつ　同（略）當世は十五日に、氏子より、祭禮を行ふ。舊例によつて、京兆尹より米五石をよせられて、祭禮の資料とす。去る四月晦日神輿洗（略）五月七日に至て本殿より旅所に（宮通北門下松といふ所）神幸。十五日に祭禮なり。此神輿三基の内、往昔山門の神輿振の舁輿（三）あり。神輿の上、金鳳の翼下延暦四年五月九日并作者の名を彫る者侍る也（並州行正之を記す）十八日又以つて神輿を洗ふ。去る晦日におなじ。世に云ふ、當社の氏子をおへことと稱する事、此神は幣を以て神體とす。故に御幣子といふ也。

【日次紀事】　十五日。午時神輿二基相殿の宮車各々旅所に出づ。相殿の宮は一説愛宕宮也。古愛宕權現、鷹峰東北山上にあり。（略）斯社を今の愛宕山に移す。（略）愛宕本社地主神也。故に攝社（三）となす、神幸の日、鉾十貳本あり。凡鉾を出すの町處々にあり。（略）神幸小河通を出て、舊誓願寺通より大宮通を過ぎ、船岡山の北麓を歴て本山に入る。

註（一）疫病神。（二）あらあらしい心。（三）かはりの神社。

季題解説

五月十日、京都今宮神社の私祭なり（十月九日官祭・四月十日安良比祭）、往古一條天皇、正暦五年六月初めて疫神を船岡に鎮座し長保三年靈夢に因り現今の紫野に遷す。祭神は三座、大巳貴命・事代主命・稲田姫なり。この祭の前儀として、五日氏子行列を整へ、神幸ありて大宮頭の御旅所に神輿を渡御す。その神幸次第數町に渡り、種々の鉾數本あり、氏子町中を巡幸すること宛も賀茂祭の如し。鉾は各町鉾先の飾を異にし、その飾により蝶鉾・蓮鉾・劍鉾・龍鉾の名あり。十五日御旅所より社頭に還幸嚴肅、且、美麗なる祭事なり。〔参照〕春　安良比祭（やすらひまつり）

例句

今宮祭　鮓切るや劍鉾來るを心待ち　子角（同人）

賀茂御蔭祭（かもみかげまつり）

御生祭（みあれまつり）　御生の日（みあれのひ）　御蔭山祭（みかげやままつり）　芝切神事（しばきりしんじ）

古書抜註

葬る。

例句

北枝忌　北國の涼しき夏や北枝か忌　月斗（同人）

室祭（むろまつり）　室明神祭（むろみやうじんまつり）

古書校註

【滑稽雜談】先代舊事紀に云ふ、針間國室戸神社、浮穴宮天皇の時、味鉏彦根大神出現鎭座す、（中）播州室津に祭る社也。當月（一）十三日、土人是を祭る。此所の遊女共風流など催する也

【俳諧歳時記】十三日。播州室の津に大社あり。祭る神、上加茂に同じ。例祭五月十三日。是より先洛の上加茂の氏人兩人播州に下向して、神事を司ると云ふ。（略）神饌、神酒を供す。（この間兵ければ臨す）神樂を奏し、次に室の津（二）の遊女棹の歌を發す。（略）遊女十二人、三日潔齋（三）にて神事に出づ。內五人は男子の姿となる。

註（一）五月也。（二）兵庫縣室町。（三）みそぎ　いみ清める也。

城隍祭（じやうくわうさい）　城隍爺生（シエンオ・ヤアンイ）

季題解說　五月十三日臺灣各地にて執行さる城隍神の祭禮なり。祭神は、土地の名官賢卿なり。その盛大なること臺灣の祭禮中第一なり。城隍の偶像を舁ぎて市中を練り、これに音樂團・武將變裝團・神具捧持團・乘馬團等續き、或は額に隈取をなして神輿に從ふ等、本土に於ける祭禮とは事かはり異彩あるものなり。

例句

城隍祭　城隍祭內地產業視察團　千燈（同人）

關帝祭（くわんていさい）　關羽祭（くわんうさい）

季題解說　五月十三日、支那三國時代の蜀の名將關羽を祭るの日なり。關羽字は雲長、解の人、容貌魁偉膂力人に優れ、武勇を以つて高し。呂蒙の將、馬忠に害せらる、後人これを崇敬して關帝廟を立て、每年春秋二季の祭祀あれども、五月十三日は關羽弑せられし日と

傳へらるゝに依り別に祭るなり。我國にては神戸・横濱・長崎等に關帝廟あり。

例句 關羽祭

動亂の覗き眼鏡や關羽祭　雨石（ホトヽギス）

神田明神渡御祭（かんだみやうじんとぎよさい）　神田明神神幸祭（かんだみやうじんしんかうさい）

季題解説 五月十五日より十九日まで神輿の渡御を行ふ。祭禮は九月十四日十五日の兩日なれ共、明治十七年頃九月に大暴風雨あり、且惡疫流行したる故を以て氣候よろしき五月に定めたり。現今氏子町内にては五月が大祭の如く賑へり。

實作注意 神田明神の祭禮は九月十四日・十五日にして（隔年大祭）昔時、將軍家の上覽ありしは秋の本祭に限りたり。〔參照〕秋・神田祭（カンダマツリ）

練供養（ねりくやう）　當麻練供養（たいまねりくやう）　來迎會（らいがうゑ）　迎接會（かうせふゑ）　曼陀羅會（まんだらゑ）

古書校註 【滑稽雜談】四月十四日元亨釋書（寺像）に曰、和州禪林寺は俗に當麻寺と號す。（略）天平寶字中に、優射（ ）藤橫佩、女あり、專ら安養（一）に志す。七年六月寺に入りて髮を薙り、誓て曰、我彌陀の眞身を見ずんば、寺門を出でず。其の志確乎として拔けず。數日にして一比丘尼至る。（略）曰、我汝をして淨土を見せ、彌陀を觀せしめん。宜く百駄の蓮莖（三）を集むべし。是に於てか、新尼朝に奏す。詔使蓮莖を送らしむ。（略）化尼自ら莖を折り絲を取る。又數日して一女來る。（略）絲を得て殿の西北角に、之を織る。（略）曰、我豈異人ならんや。西方教主也。（曰）向の女は觀音大士也。（略）新尼是より精修益々勤めり。寶龜六年三月十四日、安坐念佛して逝く。（略）（當麻供養縁起に云、此來迎引接の法事は、惠心僧都（五）の成し置たまふ（略）當寺護念院、もとは紫雲院とて、法如比丘尼の草庵の舊跡也。寛弘元年一條帝の頃、僧都弁道印供奉と共に此處に來り、來迎の本尊又二十五菩薩の假面を彫て、同二年三月十四日、法如の往生の日を以て迎接會を行ひ給ふ。（六）此儀に遵ひて當代は四月十四日に行ふ。一說に云、惠心僧都の始て行ひ給へる月日なりといへり。（略）此所の土人、菩薩の假面裝束を帶して、來迎引接の行粧をなす。是を練供養と申侍る也

【日次紀事】四月十四日南都當麻松嶺山中將姬曼陀羅會、今日より明日に至る。（一）當麻に中將姬の會講串あり。四月練供養あり。

註 （一）[illegible]の左右大臣に當る。（二）佛道に歸依し、安心求めることを志す。（三）百頭の馬に積む程の莖。（四）今一人の曼陀羅織る女をさす。（五）大和の人、平安朝時代の天台宗の學匠、[illegible]の惠心院に住む。（六）以下[illegible]の自說也

季題解説 五月十四日、大和國北葛城郡當麻村二上山の麓にある眞言・淨土二宗兼學の當麻寺にて行ふ供養なり。本尊は彌勒菩薩なり。聖德太子の弟

なる麻呂子王の創立なり。中將姫の稱讃の大曼陀羅にて名高し。練供養の次第に、曼荼羅堂を極樂とし、數十間離れたる一山堂を娑婆堂とし、中將姫命終らんとする時二十五菩薩御來迎ありしを擬して、預め娑婆堂に輿して中將姫の像を奉持し置き、奏樂嚠喨たる中に二十五人の人々、二十五菩薩の面を被り、金色の光背燦と、粉裝美々しく、可憐なる稚兒を引連れて長き渡廊を娑婆堂に練り進み、姫の像を來迎し、攝取の狀を擬して諸人に佛果の有難きを面り見せしむ。これを來迎會或は迎接會ともいふ。因みに中將姫は、横佩右大臣、藤原豐成の女にして父豐成の讒によりて大宰府員外帥に貶せらるゝや、大いにその寃罪を嘆き當麻に入りて深く佛道に歸依し生身の彌陀を拜せんことを願ひ草庵を結びて念佛三昧に入る、一尼化現して百駄の蓮華を集めしめ、莖を折り絲をとり濯ぐに五色燦然たり、染殿の井と稱へ（現に石光寺境內にあり）。又、一人の化女來り堂の西北隅（織殿として現存す）に機を構へ、曼陀羅を織つて極樂の體相を示して西方の雲に入る。後、姫、益々修精につとめ寶龜六年三月十四日、宿願の如く諸佛來迎の中に寂す。時に年二十九歳なりといふ。

例句

練供養

ねり供養まつり貝なる小家哉　　蕪　村（新花摘）

練供養稚子は笑うてよそ心　　一　央（同　人）

參考 每年陰曆四月十四日、大和國北葛城郡城當麻村大字當麻の當麻寺に於いて行ふ法會なり。此の日は日本三曼陀羅の一として名ある當寺の當麻曼陀羅を奉納せる中將姫（法如尼）の忌日にして、卽ち姫の爲に迎接會を行ふなり、其の式、土地の人々寺內に集りて、廿五菩薩の面を被り、佛の粧をなす。又僧徒等美衣を纏ひて音樂を奏し、牀を結構して高き所を通行するなり。先づ散花ありて、廿五菩薩の中、觀音と勢至とを先導として本堂より遶出す。こゝに比丘尼方より中將姫の像を持ち出す。之を第一觀音の持し蓮華臺へ載せ、本堂へ向ひて遶込むなり。是れ極樂往生なりと云ふ。是に於いて式を終るなり。此の廿五菩薩に扮する者の中、觀音・勢至は最も大役にして、高齢者專ら之を務む。又何れも面を片手に持ちて、酒肴を喰ひ、章魚の足を口に入るゝ等、形は佛、頭は奴、名前を呼ぶには、觀音の六兵衞、地藏の八介等と云ふも可笑しく、當日三里四方の農民は業を休みて客を迎へ、祭禮の如き賑ひありと云ふ。

出雲祭（いづもまつり）

季題解說 五月十四日出雲杵築町、官幣大社、出雲大社の例祭なり。祭神は出雲大社記に「本社、卽日隅宮是也、祭二大巳貴神一、天井畫二八色雲一、中略 素鵞宮、卽出雲社、合二祭素盞嗚尊・稻田姬命・大巳貴命三神一下略」例祭には

鳥餘情云、みあれは、玉依姫の別雷神を生給ふ所を云ふにや。秘説云、實は御生は申日也。酉の日は御生を祝ふ義也　五社百首　餘所ながらけふの日吉の祭にも加茂のみあれはあふ日なりけり　俊成卿　（略）　公事根源に云、未の日先上卿陣に着て、六府（一）をめして、警固のよしを仰す、當日の使は、近衞の中少將つとむ。昔夢の告侍りしより、けふ人々葵桂の蘰（二）を掛る也、賀茂・松尾の社司、前の日よりしかるべき所々へたてまつる。欽明天皇の御宇より、此祭ははじまる。下鴨の御祖・上賀茂の別雷ふたつの神の祭なり。此御祖をば玉依姫と申す。賀茂建角身命のむすめ也。あるときせ瀬見の小川のほとりに遊びけるに、川上より丹塗の矢一筋流れくだる。玉依姫、此矢を取て我家の屋根に挿む。それよりして程なく孕て、男子をうむ。然ども、父を誰ともしらざりき。或時、謀り事に酒盛をして、いまの兒に盃をもたせ、汝が父にさせとをしへければ、兒その盃をば虚空になげて、家の屋根を蹈やぶりて、我は天神の御子なりとて、天上をさしてぞのぼりける。則別雷の命是なり。今の丹塗の矢は、松尾大明神と後顯れ給ふにや。（略）此祭も、下鴨におなじく、元祿年中公方家より再興あり。往昔の遺風ども侍るなり。

【同】〔御生祭〕午の日は下鴨の神の御生祭、酉日は上鴨の神の御生祭といふならし。（略）又兩日と（午酉）もに葵祭ともいふべきか。葵桂を蘰にかける義、侍れば也。抑此祭久しく絕え侍るに當將軍家は葵を以て家紋に用らるゝ事、神慮に相應まします故に、綱吉君の御治世元祿七年甲戌四月十一日午日十四日酉日再び舊きにかへる。

【年浪草】御生とは玉依姫の別雷神を産玉ふ日と云ふ儀なり。實は申日生れ給ひ、酉日は神の生れ玉ふ事を祝奉る儀とも云ふ。御生祭御影祭を同祭と云ふ人あり。別の祭なり。御影祭は三日以前、午日にあり。御影社は洛北高野川の東御蔭山に社あり。卽下鴨の末社也　○康富記に曰、嘉吉三年四日二十一日丙午鴨御蔭山祭云々　是酉日に非ず。午日別祭と知るべし。

【日次紀事】中酉日上賀茂葵祭　貴賤も亦之を修す。酉前午日、西賀茂黃衣者榊井辨松を供へ、御生所、假宮井齋宮の（三）握屋及大宮、假宮を構ふ。（略）未日假宮に遷宮。申日古へ關白詣。當日音樂あり。祭の翌日、社司葵蘰井桂枝を禁裏、仙洞及高貴家に獻ず。則御簾にかく。賀茂の地人悉門戸にかく。然則夏天（四）霹靂之災なし。祭日官家人各葵蘰を（五）衣領にかけらる。賀茂の地人各是を頭髮に挿む。今日葵蘰、桂枝是を諸蘰と稱す。

【滑稽雜談】〔賀茂國祭〕公事根源云、（六）欽明天皇の御宇に、四月に吉日を選て、祭らるゝ由所見あり。（七）又和銅に詔ありて、山城の國の國司是を檢察すと見えたり、けふの國祭は加茂の本祭なるべきにや。酉の日の祭は、公家より使を立られ、走馬を獻ぜらる。あひかはるべき也。（八）〇岷江入楚に曰、賀茂太神は山城國の地主にておはしませば、中の申の日は國よりたてまつる祭也、中の酉の日は內裏よりの祭也。物語におほくかけるは

此祭の事當代には沙汰なきよしなり、六百番歌合　けふ祭る神のめぐみはかねてより卯月のいみのさしてしりにき　季經。

註（一）六衞府の意。（二）葵桂ここに作る譌。（三）幄屋假屋（四）葵雷（五）禪（六）續日本紀にも出づ。（七）神中抄參照（八）酉の日の祭本祭となり、賀祭本祭ならざる故かく云ふ。

季題解説　五月十五日（もと四月中酉の日）京都賀茂大神の莊嚴なる祭禮にして古來祭といへば、この祭事を指すの盛典なり。京都府愛宕郡上賀茂村の賀茂別雷神社及京都市上京區下鴨町賀茂御祖神社の二社にして何れも官幣大社なり。前者は即ち上の社にして別雷命、後者は即ち下の社にして別雷神の御母玉依姫命及外祖鴨武津之身命を祭る。この祭儀を葵祭と稱へ、祭日には社殿、擬、末社翠簾に皆葵桂をかけ、又、賀茂の家々にても門戸に之を掛く。式典に隨行する神人一同冠に葵を插す雅習あり、古は社家葵桂を内裏・仙洞に獻じたり。

當日、勅使内藏使・山城使・檢非違使・舞人等みな舊公卿これを勤め、すべて皇居に參集、裝束の上、午前八時宜秋門より出で、南門前を過ぎ、淸和院御門を東へ梶井町を北に、出町より葵橋を渡りて下社に著、こゝにて祭典あり、終りて再び葵橋を渡り、賀茂堤を經て御園橋より上社に至り、こゝにても祭典あるなり。此祭列を拜するには、葵橋を渡りたまふを、拜觀するを便とす。行列は看督長代、檢非違使代・火長・檢非違使・調度係・童・鉾持・山城使・馬副・手振・雜色・御幣櫃・内藏寮史生・馬寮使・御車（牛車にて車に牛をつけ）・牛飼の童・口取・白丁・和琴・舞人・楓・勅使・舍人・居飼・隨身・等の順序にして繪卷物を展するが如く絢爛なる祭儀なり。社内には駿河舞あり、又、馬場にて競べ馬の行事ありて賑ふ。

實作注意　祭禮に用ふ葵を賀茂葵と稱し、衣服頭髪に插すを葵かづら・葵鬘と云ひ、雷の災を免るゝ呪なりと云ふ。（葵祭）祭り・賀茂御蔭祭・賀茂の競馬・關白賀茂詣

例句

賀茂祭

賀茂衆の御所に紛るゝ祭かな　召波（春泥發句集）

足さばき濟々しき稚子や賀茂祭　木牛（同　人）

行列の戻り亂れて賀茂堤　兎月（ホトトギス）

呉竹のまゝにあふひの祭かな　帶良（帶良發句集）

葵祭

下々の下のかざしもあふひ祭かな　曉臺（曉臺句集）

あふひ祭おなじ雲井を時鳥　梅室（梅室家集）

祭

乳のめば清水がもとの祭り哉　其角（五元集）

祭客我ほど黒き顏もなし　支考（蓮二吟集）

瓜食うて酒飲む腹は祭り哉　同（同　）

五十間幟を目黒の祭かな　桃隣（古太白堂句集）

酢賣も人におさるゝ祭かな　也有（蘿葉集）

祭

草刈の手に殘りけり祭笛　也有（蘿葉集）

たれこめて祭見る家や薫十す　几董（井華集）

草の雨祭の車過ぎてのち　蕪村（句集）

帷の幕にかくるゝ祭かな　太祇（太祇句選）

酔顔に葵こぼるゝ匂ひかな　去来（去来發句集）

葵鬘

葵かけてもどるよそめや駕の内　太祇（太祇句選）

追もどす坊主が手にも葵かな　同（同）

葵艸むすびて白きあそび蔵　樗良（樗良發句集）

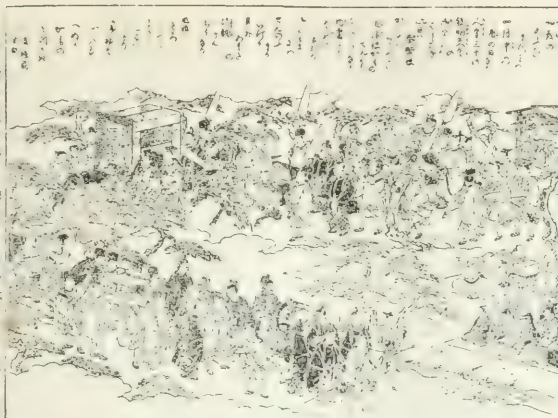
神の葵地にかへされぬ後宴哉　闌更（半化坊發句集）

髭づらに葵かけたる祭かな　同（同）

諸鬘

げに僧は木のはしとこそ諸鬘　蓼太（蓼太句集）

冠に葵桂のぶらさがる　夜半（ホトヽギス）

參考　每年五月十五日官幣大社・上社賀茂別雷神社、同下社、賀茂御祖神社の兩社に於いて行ふ祭なり。舊くは陰曆四月中の酉日に行ふ。二酉の月は下の酉日を用ふ。一に葵祭と稱す。或は是をみあれと云ふ。みあれとは鮮明の義にして、此の祭の華美を競ふ狀を稱するに因るか、又男山八幡宮の九月十五日の祭を南祭と稱するに對して此祭を北祭と云ひ、單に祭とも稱せり。是れ恰も、京都にて山と云へば比叡山、川といへば賀茂川の稱と爲れるが如し、以て其の盛大なるを知るべし。さて祭禮執行に先ち、宮中に於いて前驅の人及び御禊の地を定む。其の後午或は未の日を卜して齋王齋院より鴨の河原に出でゝ御禊あり。御禊の後六衞府をして戒嚴せしむ、是を警固と云ふ。祭の當日、朝廷より奉幣使以下を發し齋王に供奉せしむ。齋王腰輿にて齋院を出で、下社に參向し給ふ、是より齋王幄に入りて淸服を着け、社前を歩行し、拜殿に著く、供奉員亦社に入つて座に著く。此に於いて詞奉幣あり。終りて次に上社に向ふ其式全く前條に同じ。祭の翌日齋王神館を出で齋院に還り給ふ。此の日警固の陣を解く、是

を解障と云ふ。其行列盛大にして極めて華麗なり。即ち供奉員皆車・服を装飾し、古例に據り葵の葉を衣冠に附け、社前を飾り車簾に懸く。即ち一に葵祭と稱せらるゝ所以なり。實に當時の諸祭中第一の壯觀にして、上下競ひて是を見んと欲し、或は車を路上に構へて往來を妨け、或は爭鬪を引き起す等、その雜踏目に餘るものあり。故に朝廷にては發令して衣服の奢侈を禁じたれども、遂に阻止すること能はざるに至る。此の祭典は欽明天皇の時に始り、後陽成天皇の建武三年八月以後齋王廢せられし後も、尙ほ奉幣使の行列は行はれたり。然れども應仁の大亂を經て後に中絕し、東山天皇の元祿七年四月再興せられたれども往時の盛大なるには及ばざりき。

西園寺殿妙音講（さいをんじどのめうおんかう）　妙音講（めうおんかう）

古書校註

【年浪草】　體源抄に曰、妙音院相國（師長）臣妙音天を四條北室町東に造らしめ給ふ也。毎月十八日妙音講を行はる。○按ずるに妙音天と辨財天とは同體也、修義行明讚拜文に、日本鎭國妙音觀世音菩薩妙音同一體と云ふ。

【日次紀事】　四月十八日妙音講、西園寺家妙音講を修せらる。今日種々の珍菓を家内の妙音天像の前に供す。堂上拜樂人出樂り管絃を修す。西園寺家の外の琵琶を彈ずるの家も亦祖此式あり。近世故ありて、十六日之を修す。

千團子（せんだんご）　千團子講（せんだんごかう）　千團講（せんだんかう）

古書校註

【增山の井】　四月十六日三井寺の鬼子母神に供ふまつる也。だんご千奉る。

【滑稽雜談】　鬼子母神は一千の鬼子あり。この鬼子ども、各數萬の鬼を從ふ。しかも人民を噉ふ。佛在世の時、佛、阿難に命じて一子を取て隱す。鬼子母神に千子、皆で立て惡業を止め、佛法の守護神となれり。一説に又此神は昔の因緣によりて（一）兒女を守り、婦人の孕産を護れり。故に世俗かの千鬼子に千の團子を供して所願を祈るに求むといふ事なし（二）。

註　（一）によつて也。（二）願が掛けられぬことはない。

季題解說

五月十六日（もと四月十六日）近江國大津、三井寺の護法善神堂に安置せる鬼子母神の祭禮なり。この日參詣者、各團子一千を本尊に供ふ。印度古來の神話に、鬼子母は一千人の子の母にして佛に小兒の擁護を誓はれし神なりといふ。故に諸人は我子の病厄を拂ひ、息災延命を祈りて團子を信ふなり。堂前には柘榴の紋を畫きたる高張提灯などを樹つ。參詣は多く婦人にて賑ふなり。この鬼子母神參りを一般に千團子或は柘榴講と呼びなすなり。

例句

千團子　其外に漏るゝ實あり千團子　文素（三國名勝集）

千團子
子供等よ戻りにくれん千團子　成美（谷風草）
鬼の子の數よむ千の團子哉　同（同）

士朗忌（しらうき）　枇杷園忌（びはゑんき）　朱樹叟忌（しゆじゆそうき）

季題解説 五月十六日、士朗の忌日なり、姓井上氏、名正春、稱專庵、枇杷園、朱樹叟等の號あり、曉臺の門にして名古屋の人、醫師なり。國學を宣長、繪を范古に學び、墨竹に巧にして尾張五老の一人たり。文化九年歿す。今に名古屋に「朱樹會」ありて毎年此忌日に其遺芳を展き追遠す。

例句
枇杷園忌
墨竹の畫贊潸々たり枇杷園忌　月斗（同人）

四明忌（しめいき）　重麗忌（ぢうれいき）

季題解説 五月十六日、中川四明の忌日なり、京都の人、名は重麗、明治文壇には霞城の號よく知らる。二條の城を霞ヶ城といふより、號とす。紫明とも云ひ四明と稱す、（叡山の四明嶽より來る）。もと下田氏、生後中川氏（北城番組與力）に養はる。若きより專ら獨語を學び明治二十年六月日本新聞社へ入社、京都中外電報社、大朝、京都繪畫專門校等に歷任す。此間明治二十九年九月當時在洛の寒川鼠骨及び大阪の水落露石らと京阪俳友滿月會を組織して日本派俳會の端を開き、子規歿後の同三十六年二月俳誌「懸葵」の創刊に主として與かりたり。大正六年此日病を以て歿、行年六十八歲、骨を西院なる高山寺に埋め、墓は光林寺（太祇の墓ある寺）に建つ。俳諧に關する著書に俳諧美學、四明句集、觸背美學等行はる。

例句
四明忌
四明忌や生き殘る我も鬚白く　鳴雪（懸葵）
四明忌を旅に不參の我ぞうし　句佛（同）
四明忌や花なき葵影つくる　小鮎（同）

四方太忌（しはうたき）

季題解説 五月十六日、阪本四方太の忌日なり（四方太の號は實名四方太を音讀すべしと子規の命ぜし處なり。鳥取の人、早くより東都に遊學、明治三十一年文學士となる。これより先、早くより子規の根岸草廬に參し、露月、紅綠と共に相伍し異彩を放つ。又子規の唱ふる寫生文に意を用ゐ、寒川鼠骨と共に子規の寫生文系の兩翼となる。資性溫潤にして而して恬淡、大正六年東京にて病を以て歿。

例句
四方太忌
四方太忌や耳に親しき國訛　蓼江（懸葵）
四方太忌や未だ青雲の志　寒樓（同）

和歌祭　和歌浦祭　雑賀祭　雑賀踊

古書校註

【滑稽雑談】四月十七日　是は紀州和歌浦に鎮座ましします所の東照宮を祭り奉る也。此所の名を呼て、雑賀祭と稱す。（略）山鉾（一）あり。其外相撲・鏑矢馬くさいか踊とて風流など侍る。

【年浪草】城下士人刀を佩き、さゝら（三）をすりて、踊躍す。是を雑賀踊と云ふ。又今日神事必用の食あり。蒟蒻を剃刀の如く切なして、（略）味噌を用ひ、（略）大豆粉を付く。

注（一）馬上騎せながら矢を發して的を射る　（二）鉦、田樂などに舞人のもつた具。

季題解説

五月十七日、紀州和歌山東照宮の祭禮なり。徳川頼宣其父家康を祀りし社なり。もとは陰暦四月十七日にして山鉾・相撲・流鏑馬等あり、又城下の諸氏刀を佩しササラ舞をなす、これを雑賀踊と稱ふ。その祭儀は和歌の浦の風光と相俟つて莊麗なりしも、現今は神輿の渡御に些かその面影を偲ぶにとゞまれり。

例句

和歌祭　磯臭きかんから店や和歌祭　朱由（同人）

淺草祭　三社祭　拍板の神事　拍板踊　簑市

古書校註

【栞草】十八日○人皇三十四代推古天皇の御宇、進中臣と云もの過ち有て、武藏國淺草に左遷せらる。その臣檜熊・濱成・武成と云ふ三人の兄弟主人の跡をしたひきて、中臣に仕へ漁して世わたりとす。時に推古帝三十六年三月十八日。件んの三人、宮戸川の沖に網を下すに、あやしきものかゝれり。月影にみれば觀世音の靈像なり。即ち草を結びて堂となし、この靈像をおく、今の淺草寺觀世音是なり。そのゝち三人の兄弟を祀りて三社大權現と崇む。今日則三社權現の祭なり、先づ祭の前日、三社の神輿三基を本堂に移し、堂前にて伴僧あり、これをびん簓と云ふ、この日氏子の町々邌物（一）等の勢揃へあり、翌十八日祭禮當日は町々の引出ねりもの等を粧ひ先づ淺草見付を外に來り集り、次第を定めて御成前より諏訪町並木町を過ぎ、觀音の境内に入る。神輿の前にてをの〳〵藝を施し、隨身門を出づ。件の邌物歸り等渡り畢て、神輿三基本堂を出て、氏子の町々を渡御、淺草御門の外に至りて、神輿を舟にうつし、淺草川を溯上り、一の權現へ上げ奉る。今日の船は、品川の西大森村の漁人祭禮毎に出すなり。是往古宮戸川に在し漁人の、後に大森に移るを以て、今日の事古へを忘ざる遺意なり。神輿はこれより陸地を本堂へ還御なり、今日淺草雷神門の邊にて一簑を賣る。これを淺草の簑市と云ふ。

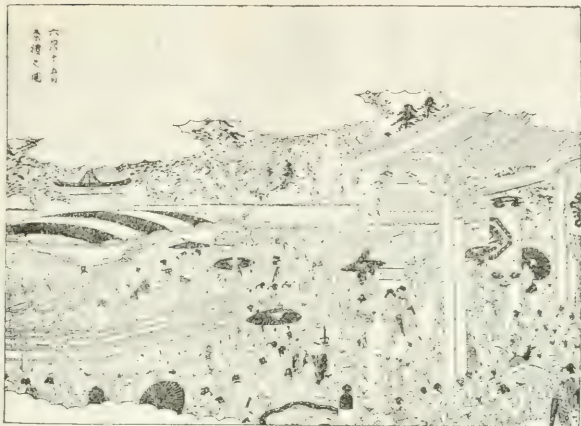
注（一）行列のことを云ふ。

季題解説　五月十七、八日（もとは三月十八日）東京浅草寺の東北に在る浅草神社の例祭なり。推古天皇三十六年三月十八日土師臣中知、其臣濱成・武成と宮戸川（隅田川の古稱）にて漁網を下せしに一寸八分の黄金觀世音かゝりければ、主從謀りて之を一宇に安置せり、即ち浅草寺の創始なり（一說に檜熊・濱成・武成の兄弟とも云ふ）徳川家光この三人を祀り、浅草の惣鎮守、三社權現と稱す。故にこの祭禮を三社祭ともいふ。明治五年郷社に列し、同六年浅草神社と改稱す。祭日は神前に舞臺を設け、獅子舞を奉納し又柏板の神事（數十枚の小板を平面に重ね綴りて、その板と板とを相撃つて音を出すもの）の執行あり。又古くは浅草川を渡る神輿の渡御ありしも、現時は町々を廻りて還御す。

例句

三社祭

水つぼき苺食うべぬ三社祭　　隅川子（石楠）

参考　毎年五月十八日、東京市浅草寺境内三社權現にて行ふ祭なり。舊くは陰暦六月十五日に行はる。一に三社祭とも稱す。花園天皇の正和元年神託に據りて始まる所なりと云ふ。此の祭は隔年に執行され、儀式は未刻に田樂踊ありて五人の舞人烏帽子直垂を著け種々の面を被り、馬に乗りて先導し、次に神事舞の大夫、烏帽子狩衣にて幣を持つて從ひ、田樂の舞人、柏板持三人、笛吹一人、太鼓打二人皆綸笠を冠る、次に大太鼓等列をなして本坊を出で是より本堂前の舞臺に登りて柏板踊を行ふ。柏板とは百八枚の小札を平面に相合せ絲にて綴り、相撃ちて音を出す一種の樂器なり。次に騎馬の者馬を下りて舞ひ終に、三人大刀を拔きて舞ふ（世に是を柏板の舞とも言ふ）次に神輿の渡御あり、即ち浅草見附より船に移し奉り、浅草川を漕ぎ上りて還幸す。此の祭典は年に二回擧行し、春季は三月十七・十八兩日に行ふ。此日雌雄の獅子頭獅子舞をなす。尙此の日雷門の邊にて蓑を賣る、是を蓑市と稱す、即ち近郷より蓑を持ち出し

註（一）九月の條にあり

季題解説 五月二十日（もとは九月二十日）京都市高辻室町にある婆利女社の祭禮なり。宇治拾遺物語に見えし長門前司の女の塚、いつしか社となり、遂に婆利女の社となり、更に轉訛して繁昌社と云ふに至れり。現今この日午后十時過に神輿渡御あり、舁丁は白の絆纏姿なり。往時は赤裸にて奉舁せしといふ。

例句
婆利女祭　ひそやかなおはんじよ様の祭哉　千燈（同人）

聖靈節　花の說教　白き日曜

季題解説 キリスト復活の日曜日より第七の日曜日、聖靈の降りしを記念せる祭典なり。教會にては新しく洗禮を受けし者、復活祭よりこの日迄、白布を著く、終の日曜日なれば白き日曜といふ。その翌日說教あり。聖カザリンクリー寺院にて來聽者皆花を携へ來りて祭壇に捧げたるに倣ひて花を持寄り、說教終りて病院へ寄贈するの例なり。参照 春—復活祭

富士垢離　富士行　富士小屋

古書校註 【日次紀事】五月廿五日 今日より六月二日に至りて、富士の行人（一）、毎日河邊に出て、富士垢離（二）を修して、富士權現を遙拜す。是則ち富士參詣に同じと云ふ。其間男女、行人にたのみ或は病を祈り、福を索む。行人其求る所の紙符を願主人に授く。又願ふ所ある人は、自ら行人に雜りて、垢離を修す。首長を先達と稱す。其會する所を富士小屋と稱す。近世聖護院門主に屬す。

註（一）修行人と同じ。（二）こりは汚れを落すことより修行をいふ。

季題解説 陰曆五月下旬、富士詣の行者達が垢離と稱して水等にて身を淨め富士を禮拜するを云ふ。富士小屋と稱するは、これ等行者の屯するところなり。参照 富士詣

例句
富士垢離　富士垢離や遠くにひゞくはたゝ神　千燈（同人）

参考 富士山崇拜者の團結したる講社に富士講と云ふものあり。陰曆五月廿五日より六月二日に渉り、信徒達は何れも白衣を着け、鈴を振り、口々に大祓・禊祓・又は般若心經・呪文・陀羅尼等を讀誦して富士山に登る。富士垢離とは是等信徒の神拜式の稱にして、水浴の行を修し、或は單に鹽嗽洗手して富士山を拜し、次いで他の諸神に及ぶ行事なり。先達及び行人は登山の數多きを以て、世に祈禱の神驗を得ること益々大なりと信ぜられたり。

閻魔堂狂言　閻魔堂念佛　千本念佛

季題解説 五月二十一日より二十日間、京都千本通閻魔前町、光明山、引接寺にて行はるゝ念佛行事なり。後一條天皇寛仁年中、定覺上人の草創なり、昔時、堂前の普賢像櫻の花時を期とし、寺僧一枚を京所司代に献じ、七日間の融通念佛の料として米三石五斗を賜りしといふ。現今は五月下旬より大念佛會を行ふ、狂言は、壬生・嵯峨のそれに似たれど此處は言語を發するなり。使用の面五十餘あり。この狂言は定覺上人の創意にして古雅掬すべきものなり。

例句

閻魔堂狂言　狂言の聲も眠たし閻魔堂　子角（同人）

嵯峨祭

古書摘注 【滑稽雑談】神社啓蒙に曰、愛宕神社、丹波國桑田郡水の雄の北にあり。祭る所の神、二座、伊弉並尊一座、火彥靈尊一座。（略）按ずるに例祭の神輿二具清涼寺に侍りて、祭日の送迎も此地よりなす。寺は山下に有るといへども、神地に屬す。故に清涼寺の樓門に傾して愛宕山と言ふ。蓋し故あるか。此日一基の神輿に冠する金鳳に、愛宕山上より下す。此金鳳下るを期として、神幸を催す。一基は、野宮明神と申て、野宮に遷幸し給ふ。いづれも土人產砂神として是を祭る。近代は田傘鉾を引き或は風流をなす者也

【年浪草】山を朝日嶺と名け、白雲寺と號す。

季題解説 五月二十三日（もと陰暦四月中亥の日）京都の西北愛宕山の愛宕神社及嵯峨の野々宮の祭禮なり。愛宕神社の祭神は稚産日神、伊弉册尊、迦遇槌命等を祀り、野々宮は昔天皇の内親王伊勢に奉祀せらるゝ齋宮の禊齋所の社なり。この祭禮には神輿二基を清涼寺の内に祀る、一は愛宕、一は野々宮のものなり。昔は大覺寺門跡これを司られ、神輿は野々宮に据ゑて奉幣、後寺内に遷幸ありたり。現今は午後二時に執行、榊・太鼓・獅子頭・劍鉾・傘鉾・御輿等、清涼寺前の御旅所より中院野・々宮・天龍寺、渡月橋に出で還御せらる

例句

[illegible]　鼓の音に神輿崇るゝや嵯峨祭　子角（同人）

丈山忌　六六忌

季題解説 五月二十三日石川丈山の忌日なり。三州の人、名は凹、別號に六六山人・四明山人・凹凸窠・大拙・東溪等あり。大阪の德川家康の麾下に

在り、見るべき遺跡ありしが僅かに遺址を以て顕けらる。後三十七歳の時、洛北一乘寺村に來り、詩仙堂成る、閑居三十年、其中、後水尾天皇、其高風を聞召して御召ありしも「せみの小川」の一首を捧げて拜辭せり、世に知らる。園中十二境を選びての詩賦尤も著はる、而して詩仙堂の此日はそれらの扁榜・六物・名器・墨蹟の悉くを展觀し、參集の有志家當番となりて忌日の饗應供養の茶席が設けられ種々の雅事あり。而して扁額中「六勿銘」亦顯はる。寛文十二年歿、壽九十。

例句

丈山忌

碧を搨つてをりけり丈山忌　碧城（ホトヽギス）

麥秋を我も行くなり丈山忌　四明（同人）

兩社祭（りやうしやまつり）

坂本兩社祭（さかもとりやうしやまつり）

行事縁由

【年浪草】江州下坂本に社あり。下坂本より唐崎に至るの路傍に兩社(一)在す。南は若宮權現、北は酒井大明神。例祭は五月廿三日神輿二基遊行す。【滑稽雜談】此兩社は山王二十一社の隨一也。此社へ山門の僧徒衆會して、法華八講を行はるゝ也。此兩社を貴み祭る也(二)

註　(一)春の部日吉祭の條參照。(二)續大書酒竹本になし、上野帝國圖書館、圖書刊行會本によつ。

蟬丸祭（せみまるまつり）

蟬丸忌（せみまるき）

季題解説　五月二十四日、大津市滿水町、上片原町二箇所にある關の蟬丸祭なり。此社は嵯峨帝御宇弘仁十三年近江守小野岑守逢坂山の山上山下に分祀して坂神と稱せしが起原にて、後文德帝御宇天安元年初めて逢阪の關を開設し當社を關所の鎭護神とせられ、降つて朱雀帝御宇天慶九年九月詔を奉じ蟬丸靈を二所に合祀し茲に關大明神蟬丸祭と稱するに到れり。而して、後、圓融帝御宇天祿二年五月綸旨を給ひ當神社を音曲藝道祖神とせられしことゝ亦其由緒記にとゞむ。此一事衜に逢阪山の悲曲の御靈を慰め給ひしことなるべく、謠曲「蟬丸」の哀詞もしのばるゝなり。往古九月二十四日の祭祀たりしも今は五月二十四日とす。祭神猿田彥命、豐玉姫命二柱の渡御の御儀あり。大谷町に分社あり三社同日に祭典行はる。蟬丸靈は三社何れも相殿にしてしかも名著はる。

例句

蟬丸忌

蟬丸忌逢坂山の遲櫻　七步（ホトヽギス）

楠公祭（なんこうまつり）

湊川神社祭（みなとがはじんじやさい）

季題解説　湊川神社は楠正成を祭る別格官幣社にして、神戸市多聞通にあ

り。「嗚呼忠臣楠子之墓」にて名高し。五月二十五日は神幸式にて、鳳輦の渡御あり、十六武者、騎馬、稚兒武者の供奉あり。御旅所湊川公園に駐輦ありて、正午嚴かに祭典を行はせられ還幸の例なり。

例句

楠公祭　風死して楠公祭暮れにけり　子角（同人）

有無日（ありなしのひ）

古書校註　【滑稽雜談】　廿五日。帝王略圖に曰、六十二代村上天皇、諱は成明、醍醐帝第十四子也（略）在位二十一年。康保四年五月廿五日崩ず。六月四日村上の山陵に葬る。春秋四十二。公事根源に云、これは村上天皇の御國忌なり。宮中に有なしの日とや申にや。廢務日にあらざれども、政おこなはれ侍らず。又急事などあれば、俄に政事有り。さて有なしの日とは申也。

季題解説　陰曆五月廿五日は、村上天皇の御國忌にして、此日を宮中にて有無の日と申し、廢務日にあらざれども、政行はれざる趣、公事根源に見ゆ。尤も急事などあれば俄に政事あり、故に有無の日と云ふと。村上天皇は醍醐帝の第十四王子にましまし、朱雀帝の同母帝なり、天慶九年四月二十八日御卽位、在位二十一年にして康保四年五月二十五日崩御あらせらる。御遺詔によりて國忌を置かれざりしが、天下聖主の御遺德を仰ぎ、餘風を思ひ奉るに依りてか、國忌と定められずと雖も、此日政事を行はれず、是國中の故實なる由、中右記にも記せり。

參考　中古朝廷に於いて五月廿五日を呼びし異稱にして、村上天皇の御國忌なり、此の日宮中に於いては廢務に非ねども朝政行はれず、但し急事あれば俄に政を執る。故に有無日と稱するなり。中右記嘉承三年五月廿五日の條に「今日宮中號二有無日一强無二結政一、或又有二急事一者、可レ行レ政歟、依レ稱二有無一、是宮中故實也、是村上先帝御忌日也、本雖レ不レ置二國忌一、我朝聖主後人戀二遺德一、依レ爲不レ行二政歟一」と見えたり。

賴政忌（よりまさき）　源三位忌（げんざんみき）

季題解説　五月二十六日、源三位賴政の忌日なり。攝津守賴光より五代の孫にして源仲政の子なり、祖賴光の勇武を繼ぐことに、高倉帝御惱の時射に於て鵺退治の譽あり、久壽二年兵庫頭拜任より正五位下に敍し昇殿を許されしは二條帝御宇なりき。而して正四位下に進みし時平治の亂はあり、義朝に背き清盛に歸す。合戰に功なく、治承二年平相國清盛に奏請して從三位に敍せらる、武門にして三位に上りしもの平氏の外は古へより例なきことなりといふ。然れども平家の横逆を見て堪へ難たる爲にや、遂に以仁王の令旨を奉じて兵を舉げしも、事漏れ、且背きし僧兵ありて事成らず、宇治に

敗戰、平等院にて自殺せり。其辭世「埋木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞ哀れなりける」の一首をとゞめ、池の水に手を清め、西に向ひて念佛し、從容として世を終る、歳七十七。其場處は「扇の芝」とて鳳凰堂を前にした扇形の芝生にして今も殘れり。傳曰、手にせる扇子を敷きて坐して終りしとは何等の雅懐ぞや。時に治承四年なり。

例句　頼政忌

宇治川のほとりの寺の頼政忌　東洋（ホトトギス）
風雨たゞ知れる治承や頼政忌　青々（妻木）
鳳凰堂のうちも拜みて頼政忌　伏兎（同人）

禮拜講（らいはいかう）　天臺禮拜講（てんだいらいはいかう）　本禮拜講（ほんらいはいかう）　新禮拜講（しんらいはいかう）

古書校註【滑稽雜談】台家僧の說に曰、後一條の御宇、萬壽二年三月、大宮權現の御託宣に依り、法華八講を大宮寶前に修す。爾來每歲三月十二日・十三日之を行ふ也。之を本禮拜講と謂ふ。新禮拜講は同月二十四日・二十五日、十禪寺の社前に於て之を行ふ。是又後堀川帝の天仁元年、慈鎭和尙（叡山六十二代座主）の本願也。（略）此社（一）へ山門の僧徒衆會して、法華八講を行はるゝ也。これを天台の禮拜講と云ふ。古俳書に八王寺の拜殿にて行ふと侍るは、僻言也。

註（一）日吉兩社なり。

季題解說　現時五月廿六日比叡山延曆寺にて執行せらるゝ法華八講なり。本禮拜講と新禮拜講の二事あり。後一條院萬壽二年權現の託宣により法華八講を修し、明治に至るまで續きたるものを本禮拜講と稱し、每年陰曆三月十二、三日東塔五谷の大衆日吉大社の拜殿にて行ひしものなり。新禮拜講は陰曆四月二十四五日、後堀川院元仁元年より慈鎭和尙の本願に依り、十禪師社前にて行ふを云ふ。禮拜講の起源に、大衆驕奢に耽り、出家の法に背けるを山王の神歎ぜられ、昇天せんとの託宣あり、一山の草木悉く黃に變ず、大衆驚いて東塔五谷の衆徒大宮の拜殿にてこれを行ひしに基くとの說あり。

大原志（おはらざし）　甘酒祭（あまざけまつり）

古書校註【年浪草】神社啓蒙に曰、大原の神宮、丹波の國桑田郡にあり。祭る所の神、一座、伊弉並尊、（略）（一）紀事追加に云、世俗參詣の地、向ふ山はすべてさすと云ひ習はせり。是は丹波の國大原の社へ詣づるを昔よりをばらさしと云ふ。蠶娘（一）を守護し玉ふと云、蠶飼する者別して、崇敬すと云ふ。（略）蠶養のみならず、耕作共に守護せさせ玉ふなれば、百姓最も信ず

べき也。三月廿三日春ざしとて参詣し、此時社内の小石を申請て持歸り、飼屋(二)の棚におくときは、鼠の害なしとて、此石を猫ゝ稱す。九月廿三日秋ざしとて、参詣の時、右の石をかへし納むと云。此祭は醴を釀して、神にも供し、客の饗にも又唐屋の商ふ物ともするゆゑ、世俗甘酒祭と云ふとぞ。

註 (一) さんやう。養蠶と同じに一蠶を飼ふこと　(二) 蠶を飼ふ家。

季題解説 陰曆五月二十八日、古、丹波國桑田郡大原神社の祭禮なり。祭神は伊弉冊尊にして養蠶を守り給ふとて遠近の農民多く詣ず。これに参詣するを「おはらざし」といひ習はせり、大原神社へ志すといふ意なるべし。又春志三月廿三日、秋志九月廿三日にも祭禮あり、等しく蠶業の守護を祈る。この日甘酒を神に供へ客にも饗し又之を商ふものあり、故に甘酒祭の名あり。今行はれず。

例句

大原志
手の荒れた参詣多し大原志　有光 (俳句大觀)

業平忌(なりひらき)　在五忌(ざいごき)

季題解説 五月二十八日在原業平の忌日なり。業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子にて兄行平と共に在原姓を賜ふ、世に在五中將、在五の君と稱せらる。和歌に巧みにして容貌閑雅、才幹亦人にすぐれ、曾て貞觀中右馬權頭に任ぜられ、勅を奉じて鴻臚館に渤海國の使臣を接待せるに徴しても當時の外交官にも適せるを見るべし。惟喬親王と親交あり、親王の位に即かんとせしも藤原氏の爲めに望を擲ち、後事毎に藤氏に制せられ放縦に轉じ遂に好色を以て目さるゝに到りしも、其後の文學行の優麗なる遺事今に多く傳はる。元慶年間に至りて、相模及美濃權守に任ぜられしも同四年此日五十六才を以て卒す。

例句

業平忌
美男とのみ知る業平をいたみけり　稍女 (ホトトギス)
紫陽花さかり過ぎけり業平忌　梁村 (同)
このよしをひろ子に告げよ業平忌　虚子 (同)

伊勢の御田植(いせのおたうゑ)　山田の御田植(やまだのおたうゑ)　御田植(おたうゑ)　お御田祭(おみたまつり)

古書校註

【年浪草】是は伊勢山田太神宮の御田植なり。〇今式に曰、先太神宮の賽前にて、神事修行一扇あり。是を以て田を仰ぐ、風情(一)をなす。是を御田扇と云ふ。虫々生ずる事なしとて、農家も亦此扇を求めて、田向ふ庭の柱に掛ればは縁ありて害なしと。虫の障なき事なるへし。〇御田扇五月廿八日といへども日不定、下旬日を撰びてあり。當日禰宜数輩、御子、雜子(二)之を勤む。御田は高倉山の麓豊受宮の前にあり。是御供田なり。右の役人此所に到て、御子雑子早苗を植るまねび(三)をなす。(國)素襖を着たる

者、大扇(長六尺許)を捧て、參詣の諸人に戴かしむ。又一說に丸山と云ふ者の土人六人女の姿となり、(略)扇にて仰ぎ舞なり。內宮外宮同じことなり。然ども山田の名、世に高し。其の扇を携して參詣の諸人に與ふるには、內宮は七本骨、外宮は六本骨なり。稻を負たる馬の畫、鯛を釣る人形の畫或は鶴龜等をゑがくものなり。是を長官宅にて其日の朝與るなり。

註 (一)儀式。(二)巫子と見えはり役のもの。(三)まね、眞似

季題解說 往古五月廿八日伊勢山田、大神宮の田を植ゑる祭事、先づ神職祓を修し、御子良子は車にて笛太鼓の調子につれて神樂歌を謠ひつゝ御田に到る。この時素袍をきたる者、長さ六尺餘の扇を擔ひ來りて參拜者に之を戴かしめ、又田を扇ぐ風情をなす、これ害蟲を扇ぎ追ふの意にしてこれを模したる小扇を諸人に頒與す。これを柱にかくる時は安產すと。これを御田扇と云ふ。現今此行事行はざるも、大正十三年より古式御田植の神事を再興し、六月中日を定めず、大神宮の御饌料田なる度會郡四鄉村楠部にて植初の式を執行、古式の田樂あり、これをお御田祭と稱す。

例句

伊勢の御田植

伊勢

御田植の酒の泡ふく野風哉　白雄（白雄集）

最勝講（さいしようかう）

古書校註 【年浪草】今月(一)吉日を撰て行はる。元亨釋書(寶治)に曰く、永延皇帝(一條)寬弘六年六月、十九名德を宮中にひきて、最勝王經を講論すること五日。(二)立て、式となす。(略)○公事根源に曰、先かねて日をさだめらる、四ケの大寺(東大寺興福寺延曆寺園城寺)最も稽古の聞えあるをえらびてさだむ　證義講師聽衆などあり。最勝王經を淸涼殿にて講ぜらる。云々

註 (一)六月。(二)宮中の公式の儀式と定められたの意。

季題解說 五月中、五日間宮中の淸涼殿に於て最勝經を講讀し、皇祚の無窮と國家の平安を祈る佛事にして、東大、興福、延曆、園城の四箇の大寺より稽古の聞え高き僧を選び講ぜらるゝものにして、僧侶の位階昇進の道として重大事されしものなり。

下丹生川上祭（しもにふかはかみまつり）

季題解說 六月一日奈良縣吉野郡丹生村、下丹生川上神社の祭禮なり。丹生川上神社は上下二社にして(上社、同郡川上村、祭禮、十月八日)官幣大社たり。祭神は上社、高龗神、下社、闇龗神とて何れも水神なり。往古此神、敎示して曰く「人聲の聞えぬ御山、吉野丹生川上に我宮を造りて仕へ奉らば甘雨をふらし霖雨を止めん」と、仍ち社を營みて祀る、時に天武天皇、白鳳四年なりと云ふ。曆朝の尊崇篤し。この社もと丹生川上にあ

貴船祭（きふねまつり）　御更祭（ごかうまつり）　虎杖祭（いたどりまつり）

季題解說 京都府貴船にある官幣中社貴船神社の祭にて、昔は四月及び十一月に行はれたりしも、現今にては六月一日なり。官幣中社例祭の公式によりて奉仕す。俗に虎杖祭と云ふは、このころ當社の山間に虎杖叢生する故にこの名あるなり。

例句
貴船祭
柴を積む軒も貴船の祭哉　子角（同人）

參考 毎年六月一日、山城國愛宕郡鞍馬村官幣中社貴船神社に於いて行ふ祭なり。古は四月・十一月の朔日に行はれ、御更祭と稱す。貴船祭は執行に先ち、禰宜の邸に於いて神饌庖丁の式あり。卽ち禰宜・祝以下神饌を辛櫃に籠むる儀にして、後ち祝儀の盃あり。祭の當日賀茂の神主を初め、貴船の禰宜・祝・代官・所司・目代・歌役・家の子・神部・大行事等辛櫃を捧持して貴船社に參向す。神主以下束帶にて拜殿に着座し、鬘掛を附く。先づ代官庭上の辛櫃を開き、祝御扉を開く、尋いで内外兩陣の神饌あり、首附鳥を取て御戸に寄立つ。次に神主の奉幣、禰宜・祝の祝詞ありて、神饌及び首附鳥を撤し御扉を閉づ。是にて式を終り神主以下淨衣に改めて奥宮小社等の巡拜奉幣をなし、歸路山の殘花を折りて頭に插し、野中村歌連馬場にて歌役馬上より祕歌を歌ふ。卽ち

葦原田を取繕ひてよく植ゑて足引のあはれ駒なり（四月祭）
紅葉葉に木綿四手鬘取添へて祈る心の色そみてける（十一月祭）

畢りて各々退出するなり。是を俗に虎杖竹祭と稱す。思ふに當社に近き山間に虎杖竹繁生し、六月の祭禮頃最も盛なるによりて斯く祭の稱號となれるなるべし。

以上の如き祭禮は維新以後全く斷絕し、現今は、六月一日を例祭と定め、官幣社例祭の公式によりて奉仕するに留まる。

江戸淺間祭（えどせんげんまつり）　淺草富士詣（あさくさふじまうで）

古書校註
【栞草】六月朔日（一）江戸淺間の社は、淺草砂利場の後にあり、是を淺草の富士と云ふ。又駒込にも淺間の社あり、又本所六ツ目及高田馬場（一）、又鐵炮洲等にも同社あり。祭る所いづれも駿河（二）におなじ。今日麥藁にて龍蛇を作り、是を篠にかけて鬻ぐ（三）もの多し。**參照** 駒込富士詣

註 （一）（俳諧歲時記）此社を新富士と稱すと云ふ。（二）靜岡縣駿河富士山麓大宮町に官幣大社淺間神社あり。木花咲耶姬を祭る。（三）賣る

光琳忌（くわうりんき）

季題解說 六月二日、尾形光琳の忌日なり。法名を方祝、別號を澗聲・青々・

青々齋・道崇・長江軒、俗稱雁金屋藤重郎、京都の人家富裕にして性濶達、豪華を衒ふ。官に知れ、京を逐はる。江戸住一年にて歸京。弟の乾山亦名あり。金の光琳、銀の乾山と併稱さる。彼の親、宗謙の祖母は本阿彌光悅の姉なり。光琳は光悅・俵屋宗達に私淑し、終に燦然たる元祿藝術の代表者となれり。光琳の筆意洗練巧妙、草木の微、禽鳥の纖と雖も何れも寫生一點に階せず創意濶達を極む。光琳の美術界・工藝界に殘せし功績非常に大なり。嘗てロンドンの日英博覽會、即ち白亞都城の日本美術品中、光琳の「波の屏風」の前に立ちたる彼土美術家の讃美の辭は甚大のものなりき。享和元年歿、壽五十九。百年後、文化十二年、光琳崇拜者たる酒井抱一は「光琳百圖」をつくり、京都上京小川頭妙顯寺中本行院の墓を修理し法要を營むこと三十日間、日に五客を限る攝待を行へりと。

例句　光琳忌

光悅を更にしのぶや光琳忌　江戸庵（江戸庵句集）
光琳忌光琳團扇忍びけり　月斗（同人）
羅の光琳模樣この日とて　同（同）
光琳忌夏の草花何々ぞ　同（同）
光琳忌光琳畫譜に垂涎す　同（同）
元祿の花の法橋光琳忌　同（同）

龍王祭（りうわうさい）

季題解說　舊曆六月十三日、淡路由良八幡の祭事にして、此の日社僧、由良の港南西の海中にさし出したる平らなる大石の上に供物を獻じ、祭儀を修す。この時數萬の魚群集まりて海上を塞ぎ祭事終るまで去らずといふ

例句　龍王祭

龍王祭波が吹きつける巖の上　千谷（同人）

傳教會（でんげうゑ）

傳教大師忌　六月會（みなづきゑ）　長講會（ちやうかうゑ）

古書校註　【年浪草】或は傳教會、長講會と稱ふ。六月四日之を行はる。○公事根源に曰、是は傳教大師（一）の忌日なり。勅使登山の儀あり。（三）○山家の記に、六月會は弘仁十四年始めて行はる。延暦三年勅して御齋會に准せらる云々。宣命使あり。（略）此會式叡山各々論義あり。會場一院を充て年番あり。（二）

註（一）[illegible]近江の人、天台宗開祖、比叡山延暦寺開山　（二）叡山の諸[illegible]

季題解說　六月四日、比叡山延暦寺にて營む傳教大師の忌日法會なり。最澄（傳教大師）は天台宗の開祖にして、俗姓は三津首と稱し、近江國滋賀郡の

人、若年にして佛門に入り、二十歳にして既に具足戒を受く。延暦二十一年、桓武天皇の勅を奉じて唐に渡り、諸宗の秘旨を授け、二十四年歸朝、所傳の經書二百三十部、道具圖様等を朝廷に奉獻す。天皇御叡感淺からず。崩御後、平城・嵯峨兩天皇の御歸嚮彌々渥く、弘仁四年始めて宮中に於て後七日の密法を行ふ。弘仁十三年中道院にて入寂す、年五十六。貞觀八年勅して大師號を贈る。この日延暦寺に於て法華經の論義を嚴修す。古は六月會と稱し法華十講ありしも、維新後は五年目毎に十一月一日より五日乃至七日まで（人數の都合に依る）霜月會と合せ修す。

例句

傳敎會

叡山の杉千年や傳敎會　二月堂（同　人）

大師忌や老鶯しけき延暦寺　子角（同　）

縣祭（あがたまつり）

本題解説 六月五日、縣祭なり。神社は洛南宇治町にあり。祭神は社の略縁起よれば木花咲耶姫、又の名あだ姫なるが爲に、訛して「あがた」と稱すといふ。亦他に左大臣頼長、甚しきに道鏡なりとかいふも取るに足らず。當日未明に行はるゝ渡御は、其御神靈の大榊の幣（宇治、名家にて作る）を先づ撒入し、神靈を移し燈明を獻じ、社内の假舍一杯に安置されあるを御旅所なる宇治神社へ移し奉るなり。此の日境内は參詣人にて前夜から充滿し、其渡御を拜す人々は其道筋の當夜開放の人家や路傍に陣取つて、これまた身動きもならぬ程なり。午前二時頃お渡りに際し、家々は一齊に電燈を消し黑暗々の世界となり、殘月の微光に渡御を拜するなり。今は青年團や交通巡査の馳驅に道路の整理が成るといふ鹽梅。闇中の一夜、縱横無盡の事なりし由、昔のあがた祭と云へば男女の開放日なり。今も女が多く拜觀に出るといふ一奇習が殘りて、いかにも女に何か御利益がありさうな祭なり。

例句

縣祭

宇治船に寐惜む縣祭かな　春雨（ホトトギス）

新茶買ふや縣祭の泊り客　橡面坊（同　）

五日月縣の森は祭かな　子角（同　人）

榮西忌（えいさいき）　建仁寺開山忌（けんにんじかいさんき）

本題解説 六月五日（もと陰暦七月五日）建仁寺開山榮西の忌日なり。榮西は明菴・葉上房等と號し、後に千光國師と稱す。禪宗臨濟派の開祖なり。備中國吉備津宮の人、賀陽氏、薩摩の守貞政の曾孫なり。十四歳にして佛門に入り、十九歳叡山に登り、有辦に師事して天台の教理をさぐり、伯耆

大山、基好に就て密教を究む。仁安三年入宋天台山に參ず。文治三年再入宋、萬年寺に於て虛庵に參禪し、臨濟の法脈を相承して歸朝、臨濟禪を弘法す。建仁二年源頼家建仁寺を京都に建立するにあたり榮西を請ず。建保三年實朝に招ぜられ壽福寺を建て、初めて鎌倉に禪宗を傳ふ。後東大寺再建、法勝寺九重の塔の再建等の功に依り、紫衣を賜ひ、建保元年權僧正に補せらる。同三年七月五日建仁寺に入寂。建仁寺は京都繩手建仁寺町にあり、京五山の第三位の本山にして、我國禪寺の最初なり。興禪護國院は開山榮西の墓所にして影堂にその像を祀る。寺中には赤松圓心・武野紹鷗・織田有樂の墓あり。同寺の垣は割竹を用ゐし風雅なるものにして、世上これを建仁寺垣と稱し、竹の雨蓋あるを眞の建仁寺垣と稱し、雨蓋なきを草の建仁寺垣といふ。日本式庭園に用ゐらるゝ多し。

例句

榮西忌

鼎茗の老宗匠や榮西忌　月斗（同　人）

建仁寺抜ける雛子や開山忌　同（同　）

藤森祭（ふぢのもりまつり） 武者（やくしや）人形の稚子（ちご）

古書摘註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、藤森の社は山城國紀伊郡深草山の南にあり。祭る所の神一座舍人親王（天武天皇の子、淳仁帝の父）（略）又一説云ふ、此神は延喜式にいへる眞幡寸の神社なり。日本後紀に鴨別雷神の別也といへり。其後又三所の皇子をも祭る「早良親王・伊豫親王・井上内親王也。（略）（一）光仁天皇天應元年夏蒙古の兇賊吾朝に來る。早良親王（光仁第二子）に詔して追討の大將軍とす。親王、當社に參詣し、五月五日出陣し玉ふ。神感しるし有て、俄に大風吹來て、大海浪を飜し、異賊の船をくつがへし一戰にもおよばずことごとくほろびにけり。これ當社の神力也。今例祭、神幸に甲冑を帶し、或は競馬を行ひ、其騎馬の列に屋形口追手口といふ名侍る。皆是異賊退治の表示、天下泰平の義也。（略）往昔の鎭座藤尾といふは今の稻荷の社地也（略）稻荷社を山上三峰より今の地にうつす、故に藤尾天王社を深草藤森の地に遷す。（略）毎歲五日の競馬、稻荷の社へ駈入る事此因緣なり。或は當社御旅の假宮にましますの間、藤森の土人稻荷に來り、地返せ〳〵と唱へて社殿を敲き侍る事など、その由來なるべし。

【日次紀事】五月朔五日　藤社神事。神輿遊行。社家藤野井氏甲冑を著し、馬に乘りて供奉す。祈願ある人も亦各甲冑を著し、乘馬供奉す。路次各稻荷社の樓門の西并藤社の馬場を馳驅す。之を見る者群集す。

註（一）此蒙古は誤傳かならず。端午の節甲冑等は亦此の故事を傳ふと云ふ。甲冑の項參照

季題解說

六月五日、京都深草なる藤森神社の祭を云ふ。當日の宵宮に男兒ある氏子の家より各々鎧一具を神前に奉供し、神官これの甲乙を定め、第一に當りたる家の兒を走馬の一番となす。以下これに準じ其數七八人に及

粧、これを屋形の稚兒と云ふ。

當日朝渡の儀あり。屋形の稚兒等甲冑騎馬にて本社に詣で、鎧武者これに從ふ。それより藤森馬場にて走馬を行ふなり。其行列は甲冑武者先驅をなし、これに屋形の稚兒順を追ひて從ふなり。其他供奉の武者武具等の從ふありて、其狀さながら王侯の行列の如し。走馬の數は三百騎に及ぶと云ふ。夕神幸あり。神輿三基行列を從へて、氏子内を渡御し、本社に還行す。沿道の町家神燈を星の如く點じてこれを拜す。

【參照】人事・飾冑(カザリカブト)

【例句】

藤森祭　下手乘せて馬もあそぶや藤の森　太祇（太祇句選）

巴人忌(はじんき)　宋阿忌(そうあき)

【季題解說】六月六日、巴人の忌日なり。巴人姓は早野氏、通稱新七郎、下野那須郡烏山藩士なり。初め竹雨と稱し、其角の門人、後嵐雪に從ふ。別に鄢月泉・宋阿・夜半亭の號あり。もと江戶住みなりしが中年京都に移り、老後再び江戶に復す。蕪村は實に此門（始め檀林の沾山門）より出でし人にして、彼が師の磊乎たる風趣を慕ひしこと其著「昔を今」に詳かなり。其他、几圭・宋屋・盛住・隨古など皆此巴人の門に游ぶ。寬保二年歿す。著書「一夜松」「經讀鳥」「桃櫻」「夜半亭發句帖」あり。

【例句】

宋阿忌　宋阿忌やかつて蕪村に聞て曰　月斗（同人）

品川祭(しながはまつり)　品川天王祭(しながはてんわうさい)　河童天王祭(かつぱてんわうさい)

【季題解說】六月七日、武藏國品川天王二社（品川神社、荏原神社）の祭禮なり。前者は北天王、後者は南天王又は河童天王と稱す。當日神輿町々を神幸後、滿潮の海中に舁き込む盛儀なり。神輿の海中渡御の間は數十隻の傳

馬これに供奉し、多數の迎へ船鼓を擊つて囃し、殷賑壯觀を極む。

例句

品川祭　穩かな波に品川祭かな　子角（同人）

須賀祭（すがまつり）

團子天王祭（だんごてんわうまつり）

季題解説　六月八日、東京淺草藏前、須賀神社の祭禮なり。祭神は素盞嗚尊。當日氏子より神に團子を供したるを神社に奉献せしめ、これをまく、諸人傍にすがりて爭ひ取るの事あり、厄除の守とす、これを笹團子と稱し、社を俗に團子天王といふ。

吉野の蛙飛（よしののかはづとび）

古書校註

【栞草】九日當山の蓮花會なり、吉野郡の内、蓮池と云處より、毎年蓮花を藏王權現へ奉るなり、この花を堂に植て幟をかけ、九日の早旦に、神輿を舁くごとくして、山中を持あるく。つづけて在家のものの子供に母衣を負たるねり物を渡す。夜に入て、當山の僧徒、藏王堂の前にて行法あり、其刻下づかひのものに、蛙の形を作らせ、堂の後に入おく、その形眞に蝦蟇のごとし。行法をはりてかの僧四人檜扇にて先の蛙をまねけば、堂後より飛出て、四人の僧の膝もとをめぐり飛ぶ。是を強く祈り責るに、次第にせめられて、堂内を迯ありくを、終に祈り殺す。其後戸板にのせて堂外へ舁出し、湯水をかくれば蘇生すと云

季題解説　陰曆六月九日、吉野藏王堂の蓮花會を修したる後、夜に入りて行はるゝ行法を云ふ。但し現今にては行はれ居らず。〔季題〕春—吉野會式

例句

蛙飛　蛙飛の呪文響くや吉野山　子角（同人）

北野の九度參（きたののくどまゐり）

九度參（くどまゐり）　宮渡祭（みやわたしまつり）

古書校註

【栞草】九日〔神社考〕北野の南廟は天慶三年七月十六日右京七條坊の婢文子に託して、右京の馬場に棲んと欲す、其女甚だ賤しくして營構（一）すること能はず、家の側に祠す。天曆元年六月九日始て北野に移す〔滑稽雜談〕當世にては俗說、今日九度詣と稱して、南門の外鵜殿松の邊、或は東向觀音の堂前より[illegible]まで往還九度して、[illegible]をなせり、是聖廟此地に遷座の日なるによれり、九度は九日の義を用ふるにや。

〔註〕（一）つくりかまへる、即ち家を營む

季題解說 六月九日、京都字北野、北野神社社内、東向觀音堂より本社へ參ること九度なれば、平日の百度に當るとて參詣人雑沓す。この日神社に宮渡祭あり。

例句
北野の九度參　偖うどん食うて北野の九度參　子角（同人）

源信忌（げんしんき）

恵信忌（ゑしんき）

季題解說 六月十日、天台の碩學源信の忌日なり。源信は比叡山横川の恵信院に在りしを以て恵信僧都といふ。大和葛城の人。母、白玉を授かると夢みて懐胎、源信を生む、卜部正親の息なり。慈恵大師に師事して深く天台の教理をさぐり、最も淨土門に意を傾く。長保五年、天台の疑義二十七ヶ條を、宗の南湖・知禮に糺し、答釋を得るに及んで名聲一時に高く、來り從ふもの多し。永觀二年著名なる往生要集を撰し、寛仁元年六月十日、七十六歲にて入寂す。研學の傍ら繪畫彫刻をよくし、著述と共に世に殘るもの多し。

例句
源信忌　涼しげにたつる蓮華や源信忌　青々（妻木）

神今食（じんこじき）

かむいまけ　大忌の御湯（おほいみのおゆ）　小忌御燈を供ず（をいみのみあかしをくうず）

古書校註
【栞草】〔江次第〕六月十一日、神今食。其式略す　行幸あるときは中和院にて行ひ、行幸なきときは神祇官に於て行はる、〔公事根源〕神今食年に兩度なり。

季題解說 古、六月十一日、中和院の神嘉殿に於て主上自ら社稷の神を祭り給へり。月次祭と同日ながら、彼れは日中に行はれ、これは夜に入つて行はる。戌の刻に行幸あり、先づ「大忌の御湯」をめす。次にもとの火を消して「小忌の御燈」を點ずるなり。公事根源に「此の神今食の義は、年に二度なり（六月、十二月）、伊勢天照大神を勸請申されて、天子御みづから神饌を供ぜさせ給ふにや、靈龜二年六月より始まる」とあり。参照 人事―解齋の御粥（ゲサイノオンカユ）

寫經會（しやきやうゑ）

季題解說 泉涌寺の寫經會は六月十二・十三・十四に亙り營まる。後圓融天皇の御歸依により聖皐上人の時に修したるに始まり、明治十七年に再び結縁のために再興し今に到る。比叡山横川の中堂にては七月八日より十四日まで七日間、法華經十卷・無量壽經十卷・觀普賢經十卷の寫經會を修す。

例句
寫經會　寫經會や香染かをる夏衣　三幹竹（懸葵）

寫經會や一花投げては一字書く　　同（同　）

住吉神輿洗神事（すみよしみこしあらひのしんじ）

住吉のおゆ（すみよし）

季題解説　陰曆六月十四日、夏越の祓に泉州堺開口の頓宮へ神幸の儀に用ふる神輿を、社頭西方長峽浦に出し、海水にて清めるの神事なり、前日の夕刻に長峽浦に出し、神輿洗式を修し、住吉公園内の御旅所に安置す。この神事の際潮水に浴するときは百病平癒の呪とて海水に浴するもの多し。これを俗に「住吉のおゆ」と呼ぶ。又、此日紀州熊野浦の潮流に乘つて大鯨の大阪灣に游び、住吉に來るといふ口碑あり。

例句

住吉御輿洗神事　　住の江や御輿を洗ふ夕日影　　千　燈（同　人）

杉風忌（さんぷうき）

鯉屋忌（こひやき）

季題解説　六月十三日。杉風の忌日なり。杉山氏、名元雅、通稱鯉屋市兵衛、人呼んで鯉屋杉風といふ。採茶庵、五雲亭、茶舍、蓑翁、蓑杖、鶴歩、一元の號あり。狩野派の畫をよくし、芭蕉門、江戸人。幕府御用御納屋にして富めりしかば、よく師翁を見、深川の芭蕉庵は其造る處なり。享和十六年歿、享年七十六。築地本願寺に葬る、

例句

杉風忌　　杉風忌杉風肥て暑からん　　月　斗（同　人）

明智風呂（あけちぶろ）

季題解説　六月十四日、京都花園妙心寺に於て施行し諸人に浴せしむる風呂なり。天正十年五月、信長の辱めをうけし明知光秀は意を決して本能寺に主君信長を弑す、時に秀吉中國に在り、變を聞きて馳せ上り、山崎に光秀と戰ひ大いに之を破る、光秀遁れて坂本城に入らんとするの途、その身に禍あるを前知し、金七千兩を妙心寺に寄進す。光秀兵を擧けしより僅に十三日にして小栗栖に殺さる。後、妙心寺末寺、大嶺院住持密宗和尙、經藏と浴堂を妙心寺に設け、光秀の冥福を祈り、毎年その忌日に風呂を焚きて諸人に施行せしといふ、今行はれず。

例句

明智風呂　　百姓が念佛申しつ明智風呂　　凉　舟（同　人）

參考　陰曆六月十四日、妙心寺に於いて施行の爲め風呂を焚て入浴をさす、是を明智風呂と稱す。年中故事　に、一傳曰、明智光秀信長公を殺し、其身全からざるを察し、黃金を當寺へ寄附し置く、寺僧此料にて營むことゝ今にたえずといと見え、其の由來を記されたり。卽ち明智光秀は天正十年六月十三日、小栗栖にて土民の爲めに殺されたれば、光秀追善の施行ならん

か。

津島祭　天王川船祭　天王祭　葭の神輿　津島の御葦流　車樂舞　津島笛　提燈鉾

古書校註

【年浪草】津島牛頭天王社は尾張國海部郡内間の庄藤波の里にあり。（略）○神祭記に曰、當社夏祭は、此神、嶋に鎭座の後、神、民の夏日湛ざるを暗に憐み玉ひ、避暑の爲とて宵祭より第一に諭し敎へ玉ひ、船の上の樂には、殊に車樂（一）一成の舞曲、妙音の笛、聲別調を神製し給ひしより此樂の一成を車樂舞、津島笛と喚び初めける。

【滑稽雜談】種々の山鉾（一）風流いづれも船上にて渡す也。尤神輿の御幸も船にてある事也。第一に御葦流（二）の神事は、毎歳今日行はるゝ葦敷千を束ねて、鎭疫の神事の具とす。（略）是を津島の御葦流と云ふ也。

註（一）だんじり（二）これを芦輿と稱す。但芦神輿の事古記典據なしと云ふ

季題解説　愛知縣津島町縣社津島神社の祭祀。天王祭又は天王川船祭とも云ふ。六月十四五の兩日にして、六月一日手斧始とて山車の修造をなし、八日より十二日まで各町に於て網打を行ふ。十四日宵祭は日沒より試乘の山車を乘せたる祭船五艘を天王川に浮ぶ。其祭船は、船二艘を結びこれに山車を乘せるなり。數百の提燈をかゝげ、山車の中段に囃子をなす。兒船多く之に從ひ鎗薙刀長柄の傘等を飾る。翌十五日は、これに能人形を置き綵花を飾り、鼓笛相和して水上に浮ぶ。

例句

津嶋祭　津島ばかり都にはぢぬ試樂哉　長重（洗濯物）

住吉の御田植　御田　御田植　神植　風流武者　八乙女の田舞　棒打合戰

古書校註

【年浪草】攝州住吉神社の御田植五月廿八日。○攝陽群談に曰、神田を植る故に神事あり。相傳ふ、神功皇后三韓を征したまひ、御歸陣の時、長門國より植女を召て、五穀農業の事を世に廣くし玉ふ。後世、末葉（一）乳守の遊女と成んぬ。又玆に因りて傾城今に早乙女を勤むといへり。○紀事追加に曰、泉州堺乳守の（二）岐女の內、約する處の奉公、年季明たる女三人來りて之を植ふ。今日神田を植て後は岐院（三）の暇を出すと。云云　乳守妓女早乙女となること此外にも書傳ふる書あれども信用し難し。按るに神事祭禮の時、妓女の出る事珍からず。京師祇園の神輿洗には祇園町縄手の遊女、邀者に出づ。播州室祭には室津の遊女神幸の供奉する等の例あり。

なりしが、後ち附近の農民等に據つて行はれ、今は漸く其の影を存するのみとなれり。

竹生島祭　竹生島蓮華會

古書校註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、竹生嶋神社、宇賀御魂神座一聖武帝、天平三年辛未、竹生嶋の神、形を現す。（略）○一書に曰、夫弁才功德天とは本地法身（一）の大士にして、音樂を好む。故に妙音天と名く。（略）○平家物語に曰、但馬守平經政此嶋に詣て、上玄石上（二）の祕曲を彈ぜられしに、白龍袖に現はすと云ふ。

【日次紀事】六月十五日是を法華會と謂ふ。湖上舟を浮べ、音樂を奏し、神輿船、湖面に浮ぶ。

註（一）琵琶の曲名。

參考　陰曆六月十五日、近江國東淺井郡竹生島に於いて行ふ祭禮なり。一に蓮華會と稱せらる。其の儀、六月一日神像を淺井郡の頭人の家へ奉遷す。是を旅所と云ふ。十五日に至りて、神像を神輿に乘せて早崎に至り、此處より更に船に乘せて還幸す。其の船を島船といひ、大船二艘を舫ひ、大竹に五色の幣を立て、幕を張り、其の中にて管絃を奏す。其の他客船警固の船等十數艘之に從ひ、笛・大鼓にて島渡りあり。又島にては神事舞樂あり。卽ち兒四人て舞ふ。此の神事は、聖武天皇の神龜三年六月十五日、勅使藤原房前參向して行ひしに始まると云ふ。此の祭式を一に蓮華會と稱するは蓮華を多く用ふるにより、蓮華會の名號を生じたるなるべし。

山王祭　日枝祭　天下祭

古書校註

【俳諧歲時記】十五日。神社、江戸永田馬場にあり。祭る所近江の日吉の神（一）と同じ。（略）いにしへは入間郡川越仙波といふ所にあり。（略）太田道灌江戸の城を築くの後、文明年中仙波村の山王を勸請して、江戸の城隍神とす。その地今の紅葉山なりといふ。御當家、（二）御在城となし給ふにより て、城西の貝塚に遷さる。明曆回祿（三）の後、ふたゝび溜池の上にうつさる。是今の社地也。（略）祭禮六月十五日官祭也。神田明神と隔年に行はる（略）神輿三基祭禮の番組、四十餘番。各花ごし山鉾の類也一本、練物等出す。（略）糀町より朝鮮人來朝の形に出立ち、布にて造りし大なる象の練（四）を出す。

註（一）近江坂本にあり、祭神大山咋神（二）徳川將軍家をさす（三）火災（四）練物の意。練物は祭禮に巡り歩く車樂山鉾等の行列の類を云ふ。

季題解說　六月十五日、東京麴町區永田町に在る官幣大社日枝神社の祭禮なり。祭神は大物主ノ神、大山咋ノ神を祀る。延曆寺第二世の座主、慈覺大

師佛法弘通のため三吉野（今の川越）に至りて星野山を拓き鎮守として日吉神社の神靈を奉せしに創る、因つて山王と稱す。後土御門帝文明年間、太田持資江戸城の鎮守として城内に勸請す。後陽成帝天正十八年、徳川家康江戸城に入るや社殿を紅葉山に移し産土神とす。寛永七年、承久元年、社殿の造營ありしも後西院帝明曆三年炎上、殿宇悉く烏有に歸す。後赤坂溜池の上松平忠房の邸地を社地とし再建、萬治二年遷座、即ち現在の所なり。二度の祝融を經、明治二年に至り日枝神社と改稱す。

祭禮は隔年に大祭を行ひ、神田明神の神田祭に對して山王祭と稱し、江戸の代表的祭禮なり。維新前までは南は芝、西は麹町、東は靈岸島・小網町・堺町、北は神田に至る、町數凡そ百六十餘町に及ぶ氏子を有し、各町より出す山車練物等の番組四十餘に及び殿儀を極め、神輿渡御の壯觀は各大名方より供奉、長柄或は曳馬・警固等を出し、御神幸の通り筋は往來止めをなし、又、二階より見物を許さざる等、嚴肅且豪華なるものなりき。現今は只祭禮の賑ひに昔を偲ぶのみとなりぬ（徳川時代江戸城を氏子に持ちしを以て天下祭ともいふ）

例句

山王祭　山王は武士の見るべき祭哉　元　[illegible]（京　水）

天下祭　我等まで天下祭や土くるま　其　角（五　元　集）

參考

六月十五日、東京市麹町區永田町官幣大社日枝神社に於いて行はるゝ祭なり。一に日吉山王の祭と稱し、その規模の雄大、催し物の豊麗なるは蓋し關東第一なり。當日は神輿行列の通る、一般人の通行を禁じ警固の壯士行列を作りて之を嚴にす。神輿行列には、大小の幟・大纛・榊枝・田樂・獅子頭・笛吹等を先にし、之に神馬の神主、素袍烏帽子下の町人等約二百人續き、その間に神輿數座して之に五十人の昇手附き、其の他供奉の人々夥しく連なる。又氏子地たる芝・麹町・靈岸島・神田等四十五番の各町の氏子共、皆花車を造り、之を牛に曳かせ、或は[illegible]、或は壽御前・熊坂人形・神功皇后・寶船・牛若人形等皆各意匠を競ふ。又山王祭と踊くる踊り・邌物・曳物等を出して、趣向をこらし、その豐麗華美を誇る樣は、筆紙に盡し難し。

先づ未明に練物山下門を入り、日比谷門の堀端を過ぎ、櫻田門、黒田家屋敷の南番付坂を登り、山王社の前より、半藏門・常磐橋・大傳馬町・堀留・小舟町・小網町・茅場町に出でゝ御旅所に至り、[illegible]・獻供の後、尾張町山下町に出でゝ元の如く御本社へ還輿あるなり。此祭祀は、昔時、毎年六月十五日に、神輿を[illegible]の日より繩に乘せて勤祭を行ひしが、後ち之を廢し元和以後は專ら舊例を遵奉するに止めたり。寛永十一年に至りて祭儀漸く完備し、天和以來は神田祭と隔年に行ふこと、なれり。然るに正德三年に至り更に山王・根津・神田の三祭を三年に一度とせしが再び舊に復し神田祭と隔年に行ふ事となれり。

札幌祭

季題の解説 六月十五日北海道官幣大社札幌神社の例祭なり、社は札幌市の西端にあり、北海道開拓の守護神として大國魂命・大己貴ノ命・少彦名命の三神を祀る。

例句

札幌祭　北門を鎮めの宮の御祭　月斗（同人）

季吟忌　拾穗軒忌

季題解説 六月十五日國學者北村季吟の忌日なり。近江野洲郡北村の人、名を信澄、通稱久助、盧庵の號は家業醫師の名なり。而して自著には、多く拾穗軒・湖月齋・七松子等の雅號を列記せり。季吟醫を喜ばず京に出で、新玉津島社に住みて國學を修む。且つはじめ貞室のち貞徳に從ひ和歌俳諧を學び究む。元祿二年幕府に被レ召レ出新規二百石にて醫員に准し歌學所出仕となり、子湖春も扶持せられ共に江戸に赴任す。後五百石となり、同十二年には再昌院と號し、越えて寛永二年別墅を小石川關口に設け疏儀莊と名づく。同六月此日卒。年八十二、下谷七軒町正慶寺に葬る。著書、土佐日記抄・伊勢物語拾穗抄・源氏物語湖月抄等の國學書、山の井・新筑波・俳諧合・埋木等俳諧書の類何れも後世益する所多し。

例句

季吟忌　季吟忌や六十卷の湖月抄　月斗（同人）

鵜坂祭　尻打祭　笞太刀祭　鵜坂の杖

季題解説 六月十六日（もと七月二十三日）越中國鵜坂の縣社、鵜坂明神の祭禮をいふ。その儀式は神宮神前に祭詞を奏するや、一郡の婦女を蒐め、各々その婚したる數をいはしめ、その數に從ひて禰宜は龍眼木を以てその尻を打つなり。若し婦女その數を僞りいふ時は神罰忽ち至ると信ぜられしと。近時はこれに替ふるに神馬を笞うちつゝ神宮附添ひ、社内を一周する事にてこの行事を偲ぶのみとなりぬ。

參考 鵜坂祭をこの行事に因りて尻打祭・笞太刀祭と云ひ、又、この楉を鵜坂の杖といふ。

例句

鵜國祭　惜まるゝ女尻打祭かな　千燈（同人）

志度寺祭　志度寺八講　十六度會

古書校註

【俳諧歳時記】（十五日より十七日り）讃州寒河郡補陀落山清光院志度寺（眞言宗）（略）の本尊の御衣木は、繼體天皇十一年近江國高島郡三尾崎山白蓮花谷より流れ出で

湖水に漂ひ（略）海中に流れ出で（略）推古天皇二十三年當浦の高崎といふ小島の磯邊に流れ寄る。蘭千尼智法といふ者、かの木に瑞光あるを見、引上げて旬日を經たるに觀音童子化現し、十一里の尊像を刻む。（略）縁起寺説にこの堂は、藤原不比等（淡海公）當浦の海人に契を結び、不昔の珠を龍宮城よりとり返し給ふ。その海人の死骸を葬りし所也。故に志度寺いにしへは死度寺といふ。（按ずるに、[illegible]）天武天皇十一年その墓に精舍（一）を建立し、死度道場と名づく（略）房前公當浦に下り及ふ時、庶民に慈悲をたれ給ふの故に、庶民その恩徳を報ぜん爲、六月十五日より十七日迄三日夜の間、かの海人の墓に於いて、水祭をなす。此日諸人交易して市をなす。

註（一）寺。

これを祭といふ。

季題解説 陰暦六月十六日讃岐大川郡志度寺にて法華八講を營みしが廢れたり。現今にては同日を十六度會と稱し參詣者多し。

相國寺懺法（さうこくじせんぼふ）

古書校註

【滑稽雜談】 六月十七日（略）觀音懺法なり。每年六月十七日或は十八日に行ふ事相國寺に限らず。（略）唯相國寺の山門懺法のみ、世俗の稱するは、當山にある松風の鈸小狐の鈸（或は鐃也）と云ふ名器を取出して、今日の法會に、是を鳴らしむ。世人之を賞して、聽衆群をなす故なり（二）。

【年浪草】 南方紀傳に曰、永德三年七月廿九日、義滿將軍、相國寺を造る。至德二年十二月廿日佛殿供養[illegible]法皇外記に曰、住持[illegible]（一）東石を推（二）して始祖と爲す。[illegible]當寺供[illegible]日記に曰、明德三年歲次壬申八月廿八日今日萬年山相國承天禪寺供養、[illegible]懺法の起に曰、原るに夫[illegible]梁武帝、嘗て此法を修し、后宮玨蟒の身を救ふ。蓋し是れ權輿か。（略）其後唐朝悟達國師、積世の寃に因りて、人面瘡を患ひす。自備、日夜此法を[illegible]誦す。大宋[illegible]咸平四年に至りて、天台遵式法師、諸觀音消伏毒害懺儀を治定す。

註（一）普明國師。（二）夢想國師。

伊勢の祭禮（いせのさいれい） 神宮月次祭（じんぐうつきなみまつり） 御祭（ごさい）

古書校註

【年浪草】 外宮十六日内宮十七日之を行はる。京師より御奉納の[illegible]寶を神主神殿へ捧る[illegible]、宮殿の御戸を開く、是を拜せんとて、諸人群參するなり。（略）今日出家[illegible]（一）[illegible]して、[illegible]なさしむといへり。

註（一）[illegible]

季題解説 每年六月・十二月の各十七日に執行せらるゝ例祭にして十月十七

日の神嘗祭とともに三節會と稱し最も重んぜらる。この祭典を御祭と云ひ因つてその頃吹く東北風をも御祭・御齋といふ。【[illegible]】伊勢御田植・伊勢神御衣祭（[illegible]）天文　御祭風（秋）伊勢御遷宮（[illegible]）

【季題解説】毎年陰暦六月十六・十七の兩日、伊勢國度會郡宇治山田市に鎭座せる伊勢の兩神宮に於いて行はせらるゝ月次祭にして、九月十六・十七日の神嘗祭、十二月十六・七日の月次祭と共に、三節祭と稱して最も嚴肅なる祭禮なり。先づ十六日に豐受宮を祭り、十七日に皇大神宮を祭るなり。其儀、五月の晦日に齋王竹川に於いて御禊あり、神官等は度會河にて大祓を行ふ。六月十五日に河原木御崎に於いて御贄を採る、之を贄海神事と云ふ。是の夜御占神事ありて、神饌及び神官の穢の有無を卜ふ。十六日に河原の大祓、神饌の裝飾、御饌の調理等ありて、亥時に夕の御饌、丑時に朝の御饌を供ふ。是を齋忌の御饌と云ふ。十七日に齋王神宮に參向して拜禮を行ひ給ふ、朝使、宮司の祝詞奉讀あり、又幣帛を東寶殿に納め、齋王以下の神拜ありて儀式を訖る。是に於いて一同直會殿に二獻を賜ひ、倭舞・五節舞・鳥名子舞等を奏するなり。十六日豐受宮に於ける儀式も之に同じきなり。此の祭禮は古くより行はれしが應仁元年の京都騷亂以後は朝使の發向廢絶せり。

嚴島祭（いつくしままつり）・嚴島管絃祭（いつくしまくわんげんさい）

【古書校註】

【年浪草】藝州佐伯郡宮島にあり。祭る所の神三座　市杵島姫神　[illegible]　或書に曰、推古天皇の朝（略）恩賀島に紅帆の船來る。船中に瓶あり、瓶の中に（略）三女あり。容粧端正、告げて曰、我皇降、守護の爲に來現す。宜く寶殿を恩賀島に造るべし、云々（略）叡聞に達し、社を營み、嚴島大明神と號す。初の名は恩賀島、後市杵島の神號を用ゆ（略）（[illegible]）地の御前、同國安藝郡にあり。此嚴島と同神體也。每六月十七日の夜、嚴島神輿乘船舞樂を奏して此に渡る。此を清會と謂ふ。

【滑稽雜談】十七日　道芝記曰、六月十六日（略）神前御池にて、船管絃の御船（一）を組なり。（略）十七日申の刻（二）に其の御船を大島居の正面より乘す。（略）管絃を始む　それより外宮（三）に渡れたり、（略）亂聲其外樂さまざま。（略）其後御船、嚴島へもどす。渡り中にて樂をなす。是を流中の音樂と云ならはせり。（略）みな月一旬より諸方の商人もあつまり、十三日より町入として、人の群集夥し。

註（一）管弦の樂師を乘せた船　（二）午後四時。（三）地の御前をさす。

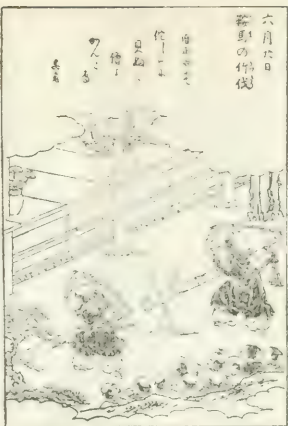
【季題解説】六月十七日安藝國嚴島町官幣中社嚴島神社にて行はるゝ祭典なり。祭神は市杵島姫命及三女神を祀る　市杵島姫命をいつの程よりか、沙竭羅龍王の女として附會するに及び常に琵琶を抱ける音樂の神なる辨財天を祭る意にてこの神事あり。

十六日の夜、幔幕を張り玉鉾を立て榊の枝に鏡を立てし樣々の彩色提燈を

左右に分列して、同時に鞸を舉げて、奔走し、山刀を拔き、之を截る、僧俗麁惡刀を以て恣しいまゝに山本を伐る、是れを山刀と稱す、(略)速なる者賢を得たりとなす、(一)然る後各其竹を以つて毘沙門堂前に來りて、段段に之を截る、是を竹切と謂ふ、蓋是れ蛇を斬るの遺意なり、

【滑稽雜談】堂寺緣起に曰、招提寺鑑禎(略)和尚、寶龜中居を此に占ふ、雌雄の大蛇あり。和尚持念す。故に一蛇忽に死す。頓、一蛇に向ひて云ふ、北山水乏し。水を施すべし、蛇誓て去る、俄にして清泉湧出す、今の閼伽井是也。寺家僧語て曰く、六月廿日竹伐の事具には蓮華會と云ふ、是中興の峯延和尚の咒力にて大蛇を段々となすの遠忌會也、夜の修法(略)護法附と云ふ。是開山鑑禎和尚の一蛇を救ひて、閼伽を得玉ふ故、かの一蛇護法神となる。(略)(三)竹切の夜、戌の刻(四)ばかりに及て、堂內の燈明を滅し、衆僧闇中にかの贄に備ふる下僧を座間におゐて、おの〳〵陀羅尼・神門等を高聲に唱へて、一時ばかりに贄の下僧伏死す。(略)大桶七桶半の水をそゝぎ流す。(略)頓にして蘇活(五)する也。(略)又昨十九日の夜當山の巽に左義長谷と云ふ所へ彼僧六人行きて爆竹をたてゝ是を燒けり、是蛇を弃るの地也。(略)今世は只松明の如くして燒と云ふ。

註 (一)斷片。(二)北竹切に勝った組の冊が其年は豐作を得ると傳へてゐるのである、(三)以下其諺の自記也、(四)午後八時、(五)生きかへる。

[illegible] 六月二十日、洛北鞍馬寺に行はるゝ行事なり。この會式は峰延上人が、毘沙門天王の神呪によつて大蛇を退治せられたといふ故實に依つて行はるゝものにて上人を呑まんと毒焔を吹きし大蛇に尊天の神呪を誦され忽ちに退治さる、これ雄蛇なり、次で雌蛇は上人の說法に服しその上に鞍馬山の尊天に供する閼伽水を永久の守護を誓ひて許されやがて清泉湧出、閼伽井護法善神はその因由にて竹伐りは卽ち其遺事を象るものにて雄竹を雄蛇とし根元から伐りし大竹を用ゐ、雌竹は雌蛇とし細き竹それも根そぎに引き來りしものを用ゆ、行事の大體を舊記に據り摘記すると、

一、每年六月二十日竹伐會古式執行の事、一、祈念、今上皇帝寶祚長久、天下泰平、五穀成就、院內安全、佛法興隆、一、六月十六日、護法善神社參之事、水場注連張之事、加持作法之事、護法靈加持の事、一、六月十八日、竹釣之事、近江方東之方雌雄竹四本、丹波方西之方雄雌之竹四本、一、十九日夜儀、大松明之事、蛇捨の秘事、古實口傳、一、二十

參向あり、祭儀の後氏子等弓術等を奉納す、故に尙武祭の名あり。

李由忌（りゆうき） 亮隅忌（りやうぐうき）

【季題解説】 六月二十二日、李由律師の忌日なり。河野氏、名は亮隅、字を買年、諱を通賢と稱し、早く蕉門に歸す。近江平田、明照寺住職にして去來と親しく相往來す、俳號を四梅廬と號し芭蕉に贄を執ること二十餘年に及ぶ。寶永二年此日歿す、行年四十四歳。嗣孫二代亦蕉風の俳諧に遊び、十三回忌以降三十三回忌皆その手にて行はれそれ〴〵追善集を輯成せり。

【例句】

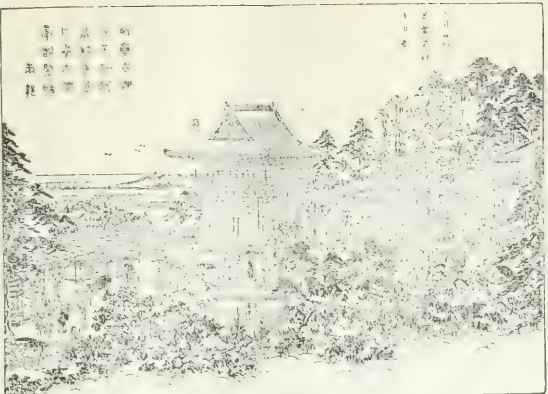
李由忌　李由忌や夏花に切りし蓮の花　月斗（同人）

愛宕の千日詣（あたごのせんにちまうで） 芝愛宕の千日詣（しばあたごのせんにちまうで）

【季題解説】

【滑稽雑談】 廿四日 神社啓蒙に曰、愛宕神社、丹波國桑田郡水雄の北に在り。祭る所の神二座、伊弉並尊。一座。火産靈尊。

【日次紀事】 六月廿四日 愛宕詣。今日愛宕詣は平日の千度に當る。俗千日詣と謂ふ。男女混雜す。（略）寺僧六坊（一）（略）にて坊人酒食を饗す。是を坊着と謂ふ。則火札を買ひ、歸路樒の枝を求め、粽を着け、之を肩にして歸り、苞苴（二）となす。○樒枝は各竈上に挿す。此若くは則火災を免ると云ふ。凡六坊州毎に檀越（三）あり。（略）毎年中衆をして札を送り、贄を贈らしむ。此使を勤る者を中衆と謂ふ。

註 （一）坊は下寺、即ち六つの下寺。（二）おくりもの 土産物。（三）檀下。

【季題解説】 七月三十一日（もと六月廿四日）山城愛宕山の愛宕神社に詣する時は千度の參詣に當るとて參詣者多し。その夜、松明に火を點じて登山す。遠くより之を望めば螢火の上下するの壯觀にして拂曉に及ぶ。また東

京の芝愛宕神社に於ても、毎年六月二十四日、同じく愛宕の千日詣とて參詣人雜踏す。

橋立祭（はしだてまつり）

[illegible]

【俳諧歳時記】 廿五日 丹後國與佐郡具の方に（略）天の橋立あり。（略）又久志濱或は志久の濱と名づく、〔風土記〕 智恩寺はこれ切戸の文珠安置の道場なり。（略）文珠會、橋立祭同事也 ○天橋立智恩寺は延喜四年甲子勅して山號寺號を賜ふ。（略）文珠堂に巽に向ふ。明曆中改造る所也。（略）○橋立明神は本社豐受太神、（略）天の橋立に（略）二町ばかりの舟渡あり、是を久世渡といふ。世に切戸の文珠といふも是也。（略）龍灯の松は泪が礒の道邊にあり。

大山祭（おほやままつり）

大山詣（おほやままゐり） 石尊詣（せきそんまゐり） 初山（はつやま） 盆山（ぼんやま） 納太刀（をさめだち） 大山臼（おほやまうす）

[illegible]

【栞草】 六月廿八日より江戸及近國の僧俗、相州大山石尊大權現へ參詣す。これを初山と云ふ。又七月盆中に登山するを盆山と云ふ。志願あるものは、大小の木太刀を擔行て、これを納む。その木太刀に、必大願成就の四字を書く。これを納太刀と云ふ。

[illegible] 相模國大山町阿夫利神社は古、石尊大權現といひ、眞言宗の巨刹なりしが今は縣社に列せらる、俗に大山不動ともいふ。鎭座せる[illegible]山を阿夫利山といひ近世、雨降山とも書す。山姿秀麗にして西北、丹澤山に連り山脈中の一秀峯なり。麓に大山町ありて、常に參詣者の爲に賑ふ。祭神は大山祇命、[illegible]は一個の巖石（一石尊ともいふ）にして、日本武尊、東征の折、この巖に憩ひ給ひしといふ。毎年陰曆六月廿八日東京及近在より白裝束にて參詣する者多し。その六月の參詣登山を初山、七月十四日より十七日までに登るを盆山といふ。參詣者木太刀に「大願成就」の四字を書して納め、他の納めたる木太刀と代へて持ち歸り護符とす。又餘の太刀をかつぎゆく者もあり。これらの太刀を納太刀といふ。又、境内にて臼杵の玩具を土産に賣る、これを大山臼と稱す。

[illegible]

納太刀かつぐ背中や汗にじむ　下燈（同人）

名越の祓

夏越の祓、夏祓、六月の祓、荒和の祓、御祓、夕祓、御祓川
[illegible]

[illegible]

【[illegible]】 四月 名越會に同、名越とは、名は夏の[illegible] 夏越の義なり。

言ふ心は不祥を解除し、夏をこし、將に千秋に至らんとするの意也。清輔奥儀抄に云、たとへば夏のはへのちりみだれたるやうに、あしき神(一)のある也。これをはらへなごめむ(二)とて、六月祓はする也。萬葉には和儀祓とかきて、なごしのはらへとよめり。八雲御抄云、六月祓は邪神をはらひなごむる祓ゆへになごしと云也。(略)(三)なごしを荒和共云ふ。心得へし、【年浪草】此荒き神を和備るの心にて、荒和と云にや。〔形代・撫物・贖物〕釋日本紀に曰、人形は所謂素盞烏尊の濫觴(四)手足の爪を拔き、其罪を贖ふ。身代の義也。(略)○源氏東屋卷に形代撫物の事見えたり。形代(五)は人形也。撫物と云は人形を撫で、吾身にそへて、萬の災殃を移して流す物なり。(略)贖物とは罪を贖ふ物なり。撫物も亦此意なり。〔麻葉流・祓草〕麻の葉を切て、幣とするゆへに、祓する川には流す也。祓草といふも麻の事也。麻のはにてしでをす、故に名づく。

註 (一)さばへなす神と云はれる。(二)和む、心をおだやかにする。(三)其證の自說也。(四)始まり。(五)麻又菅或は蕭茅の類にて造る。

季題解説　六月晦日、或は七月晦日諸社に行はるゝ神事にして古、禁裏にて百官悉く朱雀門に集りて大祓をなせし遺意なるべし。「名越の祓」は「夏越の祓」とも書き「夏祓」「六月の祓」ともいふ。又一に「荒和の祓」ともいふは荒魂をなごむる心なるべし。又單に「御祓」とも云ふ。(御祓と云へば他の月にも行はるるも俳諧にては御祓と云へば夏祓をいふなり)。「夕祓」とは夏祓の夕刻に行はるゝを云ふ。「川社」とて水邊に齋串(五十串)を立てし假社にて神官の祓の式を行ふを「川祓」と云ひ、川祓をなす川を「御祓川」と稱ふ。この日白紙を人の形に裁ち剪りて人々その名を認め各々の體に觸れしめて御祓川に流す、これを「形代」又は「贖物」と云ひ、觸穢を祓ふの儀とす。或は祓の時麻の葉を切りて幣として流す事あり(麻の葉流す又は祓草といふ)。此日「茅の輪」を社前に設け諸人をくゞらしめ穢を祓はしむるの神事あり。(祓はハラへ・ハラヒ何れにてもよし)〔参照〕茅の輪　夏神樂　大祓　小蠅なす神　加茂の水無月祓　上難波の御祓

例句

夏祓

夏祓御師の宿札尋ねけり　其角(五元集拾遺)
いくばくの溜息つきて夏祓　嵐雪(玄峯集)
なつはらひ目の行かたや淡路島　同(同)
灸のない背中流すや夏はらひ　蕪村(句集)
出水の加茂に橋なし夏祓　同(同)
草の戸や疊かへたる夏祓　大祇(大祇句選)

御祓

吹き降りの合羽にそよぐ御祓哉　其角(五元集)
つくばうた禰宜でことすむ御祓哉　蕪村(句集)
禰宜ひとりみそぎするなる野河哉　几董(井華集)
見つれて法師ののぶ御祓かな　召波(春泥發句集)

白幣のはや西を吹くみそぎ哉　同（同）
泪して命うれしき御祓かな　樗良（樗良發句集）
御祓してはや花色の袂かな　士朗（枇杷園句集）
たゞこゝろ門の流も御祓の夜　白雄（白雄句集）
海川や御祓のあとの雨の聲　同（同）
川ぞひを戻るもよしや御祓の夜　同（同）
旅鳥江戸の御祓にとしよりぬ　一茶（七番日記）
夕されば〳〵草も御祓哉　同（同）
蟾どのゝ通出し給ふ御祓かな　同（句帖）
燈籠のやうな花さく御祓哉　同（嘉永板發句集）
呑屑の袂をぬける御祓哉　成美（成美家集）
夕かぜのむかふへまはる御祓哉　梅室（梅室家集）
風そよぐ女房達の御祓かな　同（同）
雨雲の鳥帽子に動く御祓かな　子規（全集）

夕祓

夕はらひ竹をぬらして濟すなり　一茶（旅日記）
夕祓鴨十ばかり立にけり　同（七番日記）
蛙等も何かぶつくさ夕はらひ　同（同）
萩もはや色なる波ぞ夕祓　同（同）

御祓川

人並の輪をもこえけり御祓河　宗因（梅翁宗因發句集）
押はなす氣を舟頭や御祓川　沾徳（俳諧五子稿）
年もはやなかば流れぬ御祓川　素堂（同）
ゆふがほに秋風そよぐみそぎ川　蕪村（句集）
木葉の袋流るゝ御祓川　同（遺稿）
又兵衛も家鴨流せよ御祓川　同（落日庵句集）
いぐし奪ふ人の羽音や御祓川　几董（井華集）
葛に汲む水の行衛や御祓川　也有（蘿葉集）
人去て蔵見えけり御祓川　蓼太（蓼太句集）
白鷺に鳥帽子着せばや御祓川　同（同）
筒けしてそれも流すや御祓川　白雄（白雄句集）

形代

形代やとても流れは西の方　一茶（七番日記）
やよそこの形代ふむな[illegible]鳥　同（同）
形代に風おぶせて流しけり　同（[illegible]）
形代も吹けば飛ぶなり軽い身は　同（句帖）
かたしろは明見すほめて流れ鳥　同（同）
形代にさら〳〵とすそ子かな　同（嘉永版發句集）
形代に赤きべゝきせる娘かな　同（同）
形代をとく〳〵吹ふる[illegible]芒　同（同）

麻の葉流す

麻の葉に借錢書て流しけり　同（七番日記）

疫病神蚤も負せて流しけり　一茶（おらが春）

茅輪（ちのわ）　菅貫（すがぬき）　菅抜（すがぬき）

【考證】

【俳諧歳時記】　素盞烏尊（略）宿を蘇民に借る、（一）（略）後その德を報ぜんとて、よりて蘇民にをしへて茅輪をつくらしむ。その年疫病大に行はれて人民死するもの數をしらず。只蘇民が家獨り免るゝことを得たり、こゝに於いて、尊告て云ふ、（略）今より後疫病もし起らば、蘇民將來が子孫也といふて茅の輪に係りてその災を脱すべし。神社考、晦日夜に入りて輪に入ることあり。ちがやにて作る也、人やうは麻の葉を、紙にて包み（二）、左の足より入り右の足より出る、以上三度あり。（略）御湯殿記　今は中を藁にてする。上を杉原紙にて包み、引さき紙にて縛る。七月朔日の朝、荒神河原桂川へと捨る也。（略）菅貫も茅の輪と同物也。茅菅木を以つくるゆゑの名なり。

【註】（一）尊、南海に旅して一夜宿す時、此說あると　（二）此紙に數等ありと。

【季節解說】　六月晦日に諸社にて淺茅を以て輪形を作りて茅の輪又は菅貫と稱へ諸人をしてこれを潛らしめて祓を修す行事なり。傳へて云ふ、大古、素盞烏尊南海の女子に通じ給ひ、日暮して宿を求むるに二人の兄弟あり、富める巨旦將來にこひ給ひしに肯ぜず、卽ち貧しき蘇民將來にこひ給ひしに留申して粟の飯を奉る、後八年を經て尊、蘇民を訪ひ給ひてその德に報いんと茅の輪の造り方を敎へ給ふ。偶々疫病起りて蘇の家のみは災を免れしと云ふ。茅の輪は茅にて大なる輪を拵へ、上を杉原紙にて卷く、これ天地一圓相の間を越え火剋金を免るゝ所以なりと云へり。その越え方は先づ左の足を踏み入れて口の内にて「水無月の和儺の祓ひする人は千とせのよはひ延ぶといふなり」と誦し終りて右の足を踏み入れて潛り遞し、又初めの如く、左の足より踏み入れて歌を誦する事前の如く、かくする事三度の後右の手に持ちたる茅麻を以て總身を祓ひ清むるなり。【參照】名越の祓（ハラヒ）へ

【例句】

茅輪

しら雲や茅の輪くゞりし人の上　乙二（をのゝえ草稿）
えぼし著た心でくゞる茅の輪かな　梅室（梅室家集）
御袋は獄をも連れてちのわかな　一茶（新集）
髪のない頭も撫でる茅の輪かな　同（句帖）
茅の輪かな手引て潛る子があらば　同（同）
一番に乙鳥の來る茅の輪哉　同（同）
母のぶんも一ツは潛るちの輪かな　同（同）

夏神樂（なつかぐら）　夏越（なごし）の神樂（かぐら）　川社（かはやしろ）

【古書校註】

【滑稽雜談】　奧義抄に云、夏神樂の庭火には、川やしろ、しのにをりはへ

ほす衣いかにほせばか七日ひざらん、といふ歌をうたふ也。(略)(二)清輔奥義抄曰、川やしろのことさまぐ\に申すめれど、みな僻事(一)也。是は夏神樂のこと也。神樂は冬することを、をのづから、假なることにて、夏などする時には、きよき川のほとりにてする也。河の瀨に榊四本を立て、それを柱にて、篠竹を棚にかきて、それに、神供をそなふ。是を川社と云ふ。

注 (一)川社の説に見ゆ。(二)間違ひであるの意。

季題解説 名越の祓を行ふ時に奏する神樂、此の時臨時に川邊にしつらへし假社にして、榊を立て篠竹をもて棚を作り、神樂を奏して神事を行ふ處を河社といふ。

實作注意 單に神樂と云ふ時は俳句にては冬季(十一月中の諸社の行事)に屬するを以て夏の字を被らしむ。**參照** 名越の祓(ナゴシノハラヘ) 冬―神樂(カグラ)

例句

夏神樂
秋ならすさゝら太鼓や夏神樂　其角　(五元集拾遺)
禰宜呼に行ば日の入る夏神樂　桃隣　(古太白堂句選)
若禰宜のすがぐ\しさよ夏神樂　蕪村　(新五子稿)
裸身に神うつりませ夏神樂　同　(句集)

河社
柏手に魚のよりけり川社　日尼　(類題發句集)

小蠅なす神(さばへなすかみ)　五月蠅なす神(さばへなすかみ)

古書校註 【滑稽雜談】奥儀抄曰、さばへなすと云事(略)たとへば夏にはへのちりみだれたるやうにあしきかみのある也。是をはらへなごめむとて六月祓はする也。さばへとは、ちいさきはへにや。

季題解説 伊弉諾尊が素盞嗚命をして海原を治めしめ給ひしに所命の國を治めず、常に哭泣して青山を枯山にし河海みな乾き國民夭折す。親神これを憂へ、汝甚だ無道なり、宇宙に君臨せしむべからずとて遂に根の國に放逐し給ふ。この尊の意りに依り夏の蠅のむらがる如く惡しき神騷ぎたる故事によりこれを祓ふの意なりと。現今は六月晦日(或は七月晦日)に行ふ諸社の行事なり。

例句

小蠅なす
小蠅なす神に白幣振ひけり　千燈　(同　人)

駒込富士詣(こまごめふじまうで)　麥藁の蛇(むぎわらのへび)　富士團扇(ふじうちは)

季題解説 江戸駒込なる富士淺間社境内に富士の假山あり。六月三十日七月一日の兩日行はるゝ祭祀に詣づるを駒込富士詣と云ふ。境内に麥藁の蛇・富士團扇・獸等を賣る店多し。古へにはこの日遙かに富士を拜する風習あり

しも、現今は廢れたり。尚この富士詣は全國各地の淺間神社にて行ふなり。淺草富士詣等の如し。〔[illegible]〕江戸淺間祭とも、富士詣ともいふ。

［俳句］
富士詣　駒込や子供が遊ぶ富士詣　　千燈（同人）

賀茂水無月祓（かものみなづきはらへ）　水無月能　御手代會　七人猿樂

［由來記事］
【日次紀事】六月晦日、今夜上賀茂、神事音樂あり。則祓を修す。地下人今日茅輪を脱出し、又精進の儀を以て之を傳へ、作り、之を河水に投ず。今日水無月能、丹波矢田山大夫之を勤む。是を御手代會と謂ふ。（略）能一座の役者、七人、交々其藝を勤む。故に世七人猿樂と謂ふ。

［[illegible]］もと陰曆六月三十日、京都上賀茂の賀茂別雷神社の大祓なり。水邊に五十串を立てゝ祓を修す。この日夜前日にかけて能を催す。これを水無月能と稱へしも今は廢されたり。〔季題〕賀茂祭に、夏祓とも。

［俳句］
水無月祓　樂の音の澄める糺の御祓かな　　子角（同人）

住吉祭（すみよしまつり）

［[illegible]］六月三十日大阪住吉官幣大社、住吉神社の大例祭にして祈年祭（二月十七日）新嘗祭（十一月二十三日）の兩大祭と共に勅使參向のある嚴肅なる典儀なり。昔より大社として崇められ賽者絶ゆる事なく、住吉詣の名世に傳へらるゝなり。社域約二萬三千坪、社殿は世に言ふ住吉造にして莊嚴、攝津第一の社として尊敬せらる。

三韓征伐の時[illegible]路皇軍を守護し給ひより、渡航者は必ず奉幣して其無事を祈らざるものなしと云ふ。又、中古以來、和歌の神と稱し、紀州和歌浦なる玉津島明神と相並び歌人の最も尊敬する處なり。浮世草子作家にして談林の俳家、井原西鶴は延寶二年、二萬三千句の獨吟をなし二萬翁二萬堂と稱するに至りしもこの社前の事なりき。〔[illegible]〕住吉御輿洗［illegible］

［俳句］
住吉祭　住吉祭松に響ける笏拍子　　千燈（同人）

上難波の御祓（かみなにはのおはらへ）

［由來記事］
【年浪草】攝州大坂東成郡高津宮は生玉の北にあり。（略）仁德天皇舊跡を崇め玉うて、都を此に遷し、高津宮と號す。（略）社司木津川より出で祓を修す。〔季題〕夏祓ともいふ。

大祓（おほはらへ）　おほはらひ

古書校註【諸禮雜談】三十日（略）公事根源曰、大はらへといふは百官ことごとく朱雀門に集りて、祓をし侍る也。六月十二月二度ありて、天武天皇の御時よりはじまる。解除は觸穢などの時も有り。神事を行ふ時は臨時にも常にあれども、此大祓は百官一同に集りて祓をする也。或は云ふ、天武の時を始とも見へず、神武天皇の御時、天罪國罪の解除有り、神功皇后の御時國の大祓あり、

【山の井】いまのよもつごもりの日、（一）あやしのふせやまで、瓜やなすび[illegible]にたむけて、こもちがもがさも、やせごのはすて（二）も、わが身の宿の貧乏神をもはらひすて侍る。

語（一）賤しい小屋。（二）小兒の一種の瘡。やせた子供の瘡もの意。

參考　毎年六月、十二月の晦日に百官以下天下萬民の罪穢を祓ひ除かん爲朝廷にて行はるゝ重要なる神事にして、起源は遠く伊弉諾命が筑紫の日向の橘の小門の檍原に於て黃泉の國の穢れを祓ひ給ひしに始まり、その後消長あり、明治四年六月に至り大祓式を復興せられ舊儀に歸し、天下一般にも修行せしむるやう布告せられ現今に至れり、「おほはらひ」とも云ふ。宮中にては賢所前庭の神樂舍を以つて祓所にあてられ。地方にては適宜の祓所を設くる也。六月祓・夏祓・夕祓等の名あり。［參照］夏越祓（なごしのはらへ）　節折　冬—年越祓（としこしのはらへ）

節折（よをり）　宮中（きうちう）の六月祓（みなづきはらへ）

古書校註【公事根源】公事根源に曰、晦日の夜、御贖物まいる（略）次卜部竹のよ（一）を、庭中の席の上にをく。節折の命婦、竹をもて參りて、御長より始て、所々の寸法を取果て、宮主にきりあてがはせて、御はらへをつとむる也。（略）この節折をば、よをりといふ竹にて御長の寸法を取て其程に折りあてがへば也。

語（一）節と節との間（二）以下其書の自說也

參考　毎年六月・及十二月の晦日、禁裏の大祓の時天皇、皇后及東宮の爲に行ひ給ふ特別の祓なり。節とは竹の節の間にて、荒世・和世の九枝の竹を以て御身丈、兩肩より兩御足まで、左右御手、胸中より御指末まで又左右御腰より御足指に至るまで量り給ひ、これにて祓を行ふの式典なり、この儀式は天皇の頃より始れると見え清涼抄に初見す、［參照］夏越祓、大祓（おほはらへ）

道饗祭（みちあへのまつり）　四角四堺の祭

古書校註【續日本紀】續日本紀三十に曰、高野天皇（一）寶龜元年六月壬辰の朔甲寅、

疫の神を京師の四隅、畿内の堺に祭る。（略）公事根源云、是は疫神の祭なり、毎年に必ず行はるべき事也。近比は絶て侍るや、鎭火道饗の祭をば、四角四堺の祭とも申也。（二）宮城の四角四堺とは和邇堺、會坂堺、大枝堺山崎堺をいふ。

註（一）光仁天皇　（二）[illegible]の自註也。

季題解説　大寶の制、六月十月の晦日大祓の後、鬼魅の外より來るを城内に入らしめざらんため、京城の四隅の道上にて行はるゝ祭事にして、八衢比古、八衢比女、久那斗の三神を祀り供物を[illegible]るなり。令義解に鬼魅の心を和げしむるため、預め道に迎へて饗す[illegible]へ[illegible]道饗の名これより起る。卜部氏これを司り、疾疫起る時は諸國にこの祭事を行はしめたり。足利時代まで盛んなりしも今は廢して行はれず。參照 鎭火祭（チンクワサイ）

例句　道[illegible]

道饗の供物にかゝる埃哉　百合女（俳句大觀）

道饗の祭や今年雨多き　酒石（同　）

鎭火祭（ちんくわさい）　ひしづめまつり

古書校註【年浪草】公事根源に曰、卜部氏の人、火をうちて、宮城の四のすみにて（一）祭る事あり。火災をふせがんの爲とかや。此祭禮のあいだ秘術おほく侍る。

註（一）四すみ、道饗の祭の條參照。四角の祭四堺の祭とも云ふ由なり

季題解説　古、六月、十二月の晦日の夜、宮城の四隅にて行はるゝ防火の祈なり。迦具土神（火之夜藝速男神）とて火を司り給ふ神、伊弉諾尊の御子を祭りて火しづめの祓をなす。卜部氏之を司りしと公事根源に見ゆ。參照 道饗祭（ミチアヘノマツリ）

勝鬘參（しようまんまゐり）　愛染參（あいぜんまゐり）　勝鬘會（しようまんゑ）

古書校註【年浪草】元亨釋書に曰、（略）太子（聖徳）御に對して勝鬘經を講ず、（略）當寺勝鬘院の號は太子此道場に於ても亦此經を講じ給ふ。故に寺號となる也。攝州四天王寺の西門西北百歩許にあり。本尊愛染明王、毎年六月朔日開帳、諸人群參す。之を勝鬘の愛染參と謂ふ。

季題解説　七月一日（もと陰暦六月一日）大阪天王寺夕陽丘にある勝鬘院愛染明王へ參詣する事なり。この日、本尊の開帳あり。愛染は愛嬌、あひぞめ等の意に解し花柳界、梨園等に信仰を持てる者多し。推古天皇元年聖徳太子四天王寺を攝津玉造の岸上より、難波荒陵の東に移したまふ時、施薬院として創立し給ふ。中古、勝鬘院と改稱す。以來千三百有餘年の星霜を經、屢々變災に罹り、現在の堂塔は慶長五年再建のものなり。境内の多寶塔は特別保護建造物にして精工妙技を盡し、寺中の一偉觀なり。

例句

勝靈參 多寶塔めぐる勝靈參りかな 千燈（同人）

建勳祭（けんくんさい） 信長忌（のぶながき）

季題解說 七月一日、京都紫野船岡山上に祀れる建勳神社の例祭なり。別格官幣社にして織田信長を祀り、同信忠を配祀せり。もと明治三年東京織田子爵邸に創立されしものにして、同十月建勳社と稱すべき旨仰出され、勅使御差遣御奉告の御儀あり、同八年此地に社地を賜はりしもの、十三年此山下に社殿成り、明治四十三年山上現地に移さる。船岡祭は十月なり。信長忌は其忌日六月二日、同じく紫野大德寺中、公の墓所ある總見院山内にて行はるゝものなれど極めてかたばかりのものゝ由なり。亦名古屋總見寺にても此日法要あり。

例句

建勳祭 朔日の禮と建勳祭かな 子角（同人）

鬼の洞念佛（おにのほらねんぶつ） 洞念佛 先祖祭（せんぞまつり）

古書校註 【栞草】 七日より十五日まで 「滑稽雜談」 洞は八瀬河の西の山中にあり、俗鬼の洞といふ。口狹く中闊し。高さ二丈許、深さ三丈、昔酒顚童子、此洞より丹波の大江山へ移りしといふ。或は昔叡山に一童あり。僧徒に美しきを愛す、勸酒交歡の時時、人を嚙血をとり、酒に和してこれを飲む、一旦魅となりて此洞に入 云云。此話羅山詩集酒顚童子の洞に題すといへる序にみえたり。

季題解說 京都八瀬河の西の山中に洞あり、毎年七月七日より十五日まで、村中の兒女此洞に集り鉦を鳴らし、彌陀の名號を唱へて以て先祖を祭るると云ふ。この洞は昔、酒顚童子が最初に棲み居たりと言ひ傳へらる。

例句

鬼の洞念佛 念佛の[illegible]著し鬼の洞 千燈（同人）

鹽竈祭（しほがままつり）

季題解說 七月十日、國幣中社、鹽竈神社の例祭なり。祭神は三座にして、鹽土老翁ノ神、武甕槌ノ神・經津主ノ神を祀る。傳へて曰く、天孫降臨にあたり、武甕槌・經津主の二神、鹽土翁ノ神を嚮導とし葦原ノ中國を平定し給ふ。時人その功を慕ひ三神を祀る、この三柱を鹽竈大明神といふ。往昔の古、鹽竈町の某寺に鹽竈あり。上古、鹽土翁ノ神この浦に來りて鹽竈を作り民に教へし所謂なりと、鹽竈の名これより出づ。國に[illegible]る[illegible]、竈中の水色[illegible]、[illegible]日には[illegible]の時を以て本社に

神供を捧ぐるの儀なり。

四萬六千日　酸漿市

季題解說　七月十日は東京淺草觀世音の結緣日にして、此日詣づれば一日にしてよく四萬六千日に相當する御利益ありと傳へらる。この東京都の清水觀世音に始まるといふも定かならず。

例句　酸漿市
酸漿市に重なり立てる脂粉哉　千燈（同人）

富士詣

記　富士道者　富士行者　富士講　富士の山開　富士市　富士日　篠小屋　禪定　富士の御判　お頂上

古書校註

【日次紀事】六月朔日より二十日に至りて處々の民人富士山に攀登る、（略）麓、各行人止宿の家あり、是を坊と謂ふ、（略）山伏先達也、參詣人是を嚮導となして登山す。日午、坊を出て其夜明に及びて山上に至る（略）坂路の中間の岩窟に小屋を構ふ、是を篠小屋と謂ふ（略）山上處々靈社靈地あり。絕頂に池あり。（略）其攀躋を得る事を元と富士山上詣と謂ふ。今之を略して山上と謂ひ、又或は禪定と稱す。（略）近在山腰を巡る者あり。是を横行道と謂ひ、又横山上と稱す。その行程、攀躋に比すれば（一）則道を倍し、且險難言語に不レ及。是を苦行となす。凡山上七月以後既に雪あり。登り難し。故に諸方より來る者六月を以って限となす。

【滑稽雜談】十五日（略）五月下旬に富士の大垢離と稱して精進潔齋する事今日富士禪定のためならし。然るに今は富士詣せずして只垢離のみを行ふ事常也。（略）昨十四日の夕より山へ入て、通宵のぼり、（二）明方に頂上に至て、朝日の出るを拜するに地上岩水に移りて（三）、種々の想を現ず。或は彌陀の來迎の想（略）を拜すなどいへり。惣て登山する者、七日或は三日の潔齋す。江州の產の者は潔齋なしと云ふ。其謂は富士山は江湖（四）の土砂にて涌出する故也。尤此節參詣多き故、商賣の者、爰に來て山下に市をなす。富士市と云ふ。此市は朔日より廿日まで侍る也。

註（一）よぢのぼる道に比ぶれば（二）夜道して登る（三）映りて。（四）琵琶湖。

季題解說　七月十日（もと六月朔日）を富士の山開きとす。是より諸人絕頂に鎭座せる富士權現（大宮町官幣大社淺間神社の奥の院、祭神木花咲耶姫命）に參詣するを富士詣と云ふ。登山道に大宮より、御殿場より、須走村より、又甲州吉田村よりするものあり。富士講は富士を崇拜信仰する團體を言ひ有志相寄りて年々先達の行者に伴はれて登山す。その服裝、何れも修驗者風にして、白衣に鈴を佩び、金剛杖を携ふるを常とす。山麓より頂上までの各登山道を十合に分ち、一合又は半合毎に石室の坊を設く。これ

例句

野馬追祭　國振りを馬に晴衣や野馳武者　雪人（明治新題句集）

博多の祇園祭（はかたのぎをんまつり）

博多祭（はかたまつり）　山笠（やまがさ）　追山（おひやま）　追山笠（おひやまがさ）

古書校註

【年浪草】博多、櫛田神社、筑前國那珂郡にあり。祭る所の神、中殿櫛田姫命。（略）今六月十五日祭祠を修す（今改十六日十七日）永享四年六月十五日始めて之を祭る。作り山六基（略）次第に上張りに組上げて、階上凡百人を居らしむべし。一基を引者凡千人に充り、木偶人（一）に鎧を着せて、階上に立つ。（略）神輿三基。供奉の行装（二）も亦嚴なり。

註（一）人形。（二）つき隨ふ人の裝ひ。

季題解說

七月十五日（もと六月十五日）筑前博多、縣社櫛田神社の祭禮なり。祭神は櫛稲田姫（一說に大若子神）・牛頭天王・天照皇大神を祀る。神事に山笠と稱する六基の山を出す。山笠は京都祇園の山に習ひたる壯麗なるものにして、當番町の年寄若者等、協議をなし、意匠を凝らして種々なる色彩の紙を用ゐ、上部に至るに從ひて貼り擴げしものなり。昔はこれを曳きしも今は、これを當番町に飾り据ゆ。又追山とて早朝この飾を取り拂ひ、臺と心木に幣を付したる山笠を定められたる順番に依り、神社より一基づゝ舁き出すなり。博多の男子は老若を問はず、これに參加す。追山（追山笠）はオール博多の大マラソン競爭にして雄々しき男性的の行事なり。

例句

追山笠　追山笠や博多の甍ゆるがせて　滴萃（ホトヽギス）

月山祭（くわつさんまつり）

季題解說

七月十五日、羽前國東田川郡月山に鎮座する月山神社の祭禮なり。本社は山頂の巖石累々たる間に在りて石を以て四圍を疊む。祭神は月讀命（月夜見命）にして、羽黑山大權現・湯殿山大權現、を併せて羽黑三山又は羽黑山三所權現と稱す。祭禮は出羽神社にて執行し、奉幣使の參向あり。

例句

月山祭　天晴れて出羽三山の祭哉　千燈（同人）

賣茶忌（ばいさき）

賣茶翁忌（ばいさをうき）

季題解說

七月十六日、賣茶翁、黃檗宗の僧、肥前蓮池の人、俗姓柴山、名は元昭、月海の號あり。十一歲にして鄉の龍津寺に入り化霖の弟子となる。二十二歲の時、師の許しを得て、東に行脚す。二十三歲の時、江戶を發足し、大雪に困苦し、仙臺萬壽寺に到り、月耕の室に日夜餘窮す。月耕は木菴の嗣なり。二十七歲の時、月耕七十四にて寂す。萬壽寺を去る。二十九歲時、化霖に隨ひて、三月黃檗に上り、獨湛に謁す。京畿を優游する事數旬、

五月歸西に著く。三十三歳の時、龍津寺に在て化霖に侍し寺務を監す。以後十餘年に及ぶ。享保五年十一月九日化霖寂す年八十七。五十七歳の時京洛に出づ。六十一歳の時、東山に通仙亭を構へ、鶴廬と稱して茶を煎じて賣る。居る事二三年、此間、賣茶翁の名大に傳ふ。文人墨客の交友多し。六十八歳の時歸國す、これより高遊外と稱す。翌六十九歳の時、洛西雙丘に茶舖を移す。八十歳の時、相國寺中林光院より聖護院村に移居す。八十一歳の時、晩秋九月四日、多年用ゐ馴れたる便宜茶具を容るべき擔ひ籃を燒却し以後茶を賣る事を廢す。これより揮毫を以て活計を立てしものの如し。寶暦十三年七月、岡崎より大佛の南幻々庵入り病を得て寂す、壽八十七。

【例句】
賣茶忌　賣茶忌や黄檗山の賣茶堂　月斗（同人）
老筆の高遊前に獻茗す　同（同）
若沖の賣茶の像に獻茶水　同（同）
賣茶忌や直入作の擔ひ籃　同（同）

閻魔參（えんままゐり）

十王詣（じふわうまうで）　大齋日（だいさいにち）　閻魔の齋日（さいにち）

【古書校註】

【栞草】十六日「釋氏要覽」閻羅王此に遮と云ふ、謂く遮りて惡を造らさらしむ。「倶舍論」閻羅王は地獄の主、鬼官の總司たり。「翻譯名義集」琰魔或は琰羅といふ、此に靜息と翻す、よく造惡の者不善業を靜息（二）するを以す、故に或は遮といふ。〇七月十六日を大齋日といひて善事を修し、奴僕にも暇をとらせて閻魔へ詣でしむるなり。

補 〇一月十六日も[illegible]

【新增】正月十六日及七月十六日、閻魔堂に詣づ。閻魔は正しくは閻魔羅闍と言ひ、閻羅國は地獄にて王の名なれば、閻魔大王ともいふ。梵譯にて靜息といふ。人の惡行及び不善心を靜息せしむるとの意なり。此日は閻魔の齋日と稱し、諸寺院には地獄の畫幅を掲ぐ。世俗にこの日は地獄の釜の蓋開くと稱し、亡者骨休みする日なりとて、商家の丁稚、下婢など休暇を與ふるもの多し。

【例句】
閻魔參　からくりの鉦うつ僧や閻魔堂　茅舍（ホトトギス）

御手洗詣（みたらしまうで）

糺の御手洗（たゞすのみたらし）　御手洗詣

【古書校註】

【栞草】山城國愛宕郡糺、或は只洲に作る。故に下鴨の社、是を亦糺宮と云ふ。神社の東に御手洗川あり。其水寒くして清冷にして溢れ流る（言）諸人此水に臨みて穢を濯ぐ。

【日次紀事】六月十九日下[illegible]　自十九日下[illegible]兩川合流の南、住吉社の東河

邊に於て、六月祓を修む。今日より諸人參詣し、納涼の遊をなす。林間假に茶屋を設け、酒食及多葉粉等、鯉の刺身・鱧の樺焼・眞桑瓜・林檎・太凝菜（一）を賣り、或は竹串を以て小團子數箇を貫き焼きて之を賣る。是を御手洗團子と稱す。社司此團子を禁に進りて、高貴家に獻す。參詣人も亦之を求む。

註（一）ところふと、即ちところてんなり。

季題解說　土用の間京都下賀茂なる河合社の東の川邊にて祓を修す。これに詣づるを御手洗詣と云ふ。この頃、糺川の兩邊にて納涼するを糺の納涼と稱し、糺の森に茶店を設けて御手洗團子を賣る。尚河合社は賀茂神社の末社の一つなり。

例句

御手洗團子　みたらしやきのふは吾妻の十團子　宗因　（梅翁宗因發句集）

祇園會

祇園祭　下の祭　上の祭　屏風祭　宵山　宵飾　宵宮詣　茅祓　ひ　祇園御輿洗　無言詣　弦召　鉾　山　山鬮　鉾立　鉾稚兒社參　鉾の稚兒　鉾の粽　鉾町　二階囃　祇園囃

季題解說

【滑稽雜談】十四日　神社啓蒙に曰、（略）圓融院天祿元年六月十四日始て御靈會。今歳より之を行ふ。（略）當世禁中よりの沙汰なし。（略）去る七日より旅所にまし／＼ぬる三座の神輿、本社へ今日歸座し給ひて、還宮あり。神輿は十八日まで外陣に居奉り、十八日の夜又神輿洗を行ふ。

【日次紀事】六月七日卯巳刻（一）大鉾六本各四條通を東洞院の西に出づ。是を渡ると謂ふ。六本各稱號あり。其内長刀鉾、鬮取るに及ばず。毎年魁首（二）たり。（略）斯の鉾行ざれば則次の鉾過ぐること能はず。函谷鉾第二となる。洲濱鉾或は放下鉾と稱す。（略）此三本、鬮を取るに及ばず。其間鷄鉾・菊水鉾・月鉾三本、船鉾・壹基、並に天神山・飛天神山・占手山・太子山・山伏山・孟宗山（或は笋山と謂ふ）・琴破山・白樂天山・郭巨山・蘆苅山・蟷螂山・笠鉾山・貳筒、花盗山・木賊刈山・岩戸山・舟鉾合せて十七本、凡鉾一本後に山三本連行す。（略）長刀鉾の長刀相傳ふ、三條小鍛冶宗近の作也。民間瘧（三）を患ふ者、此を戴けば病癒ゆ。（略）鉾井山の上、藝能ある者各其術を施す。（略）毎年午後攝州木津井城州山科より神輿舁數十人來集す。（略）神を輿中に遷す、是を宮遷と稱す。（略）神輿旅所に到り、（略）神を假宮に遷す。

【同】六月十四日　朝巳刻許、山渡る。第一辨慶山・其次鈴鹿山・觀音山・八幡山・役行者山・黒主山・淨明山・鯉山、各八本。（略）第九鷹野山（或は樽負ひと稱す）、第十船鉾、鬮を取るに及ばず。（略）神輿の供奉人の行列を練と謂ひ、渡と稱す。（略）午刻許神を三社の神輿に遷し、御旅所を出づ。（略）

大宮通御供町に至りて三社神輿を安置し、御供(四)を獻ず。(略)四條通より本山に入り、輿中の神を社内に遷すを執行す。

【日次紀事】五月晦日　男女參詣、各杉葉を受けて、禍災を祓ふ。是を茅祓と稱す。夜に入りて神輿洗ふ。凡其式神輿三基、所謂祇園社、中は素盞鳴尊、大政所と號し、西、稻田姫は少將井と號し、東、龍王女は、今御前と號す。大政所、今御前の神輿二基、神輿屋を出て、直に拜殿に入る。少將井の神輿一基、神輿屋より南門を出で、石の華居を歷て、松林を過ぎ、祇園町より日病地藏堂の前を過ぎて、鴨河邊に臨む。古、河水を神輿に灌いで、之を洗ふ。故に神輿洗と稱す。今其儀なしと雖も、舊によりて之を稱す。然る後再び祇園町より西樓門に入り、二基の神輿と與に拜殿に安ず。其供奉の四條芝居役者、竿頭に挑灯を張り、外面に各々の性名を記し、高く之を擧げ、意氣揚々然たり。神輿の往來其行くや飛ぶが如し。祇園町の家家戸毎に高くを挑灯張り、諸人群集して寸地を漏らさず。

註 (一)午前十時。(二)かしら、即ち先に立つ。(三)ぎやく、おこり。(四)神に供ふる供物神饌と同し。

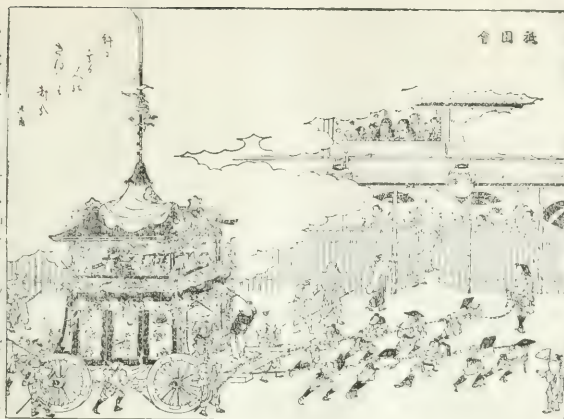
季題解説 京都祇園なる官幣大社八坂神社の祭禮を、祇園祭と云ふ。祭の期間は七月十七日より二十四日迄なれども、所謂祇園會として著名なるは、十七日の神幸祭及び、二十四日の還行祭の兩日なり。四條通を境ひとして、前者を下の祭、後者を上の祭とも云ふ。祭に先だちて七月一日より二階囃あり。毎夜鉾町の會所に集り、鉦・笛・太鼓にて「祇園囃」の稽古をなすなり。十日「御輿洗」の儀あり。三基の神輿を拜殿に安置す。同日六基の「鉾」及び十四基の「山」を町に構ふ。之を「鉾立」と稱し、鉾の在る町内を鉾町と云ふ。十一日鉾の稚兒の本社へ參詣するを、鉾稚兒社參と云ひ、十七日神幸祭の前日を特に「宵山」と云ふ。神幸祭には早朝より山鉾列を整へて熱鬧裏を巡行す。鉾はいづれもその周圍に胴卷と稱する綾錦を引き廻らし、金色燦然たる切妻、天を摩する鉾の穗先等、絢爛たる古典美は、たとふるにものなし。鉾には金冠を頂き絹繡の衣に粉黛臙脂に美しき稚兒の羯鼓を搏つさま天童の如く、數多の鼓手笛手の囃子につれて進み行く鉾の上よりは時にふれて粽を投ず、見物争ひて之を拾ふ。盜難除けの守りとなるなり。これを鉾の粽と稱す。斯の如くして山鉾は、中京を一巡して夕の方各元の位置へ曳き戻るなり。この日午後八坂神社より、三基の神輿に「綾召」其他氏子衆等供奉して御旅所に渡御し、神輿を此處に移して神行祭を終るなり。神行祭より二十四日の還幸祭の間は、祇園其他の花街より婦女の參詣するを習とし、所謂「無言詣」これなり。十八日上觀音山及び下觀音山と稱するニツの曳山、鉾の後に立つ。これは二十四日の還行祭に、還行するなり。又、祇園の茶屋にては各町家、一齊に店を休み、並びて店頭に屏風を飾るより、屏風祭の名もある程なり。

宵山　祇園會神行祭の前日、即ち十六日を特に宵山と云ふ。翌日の神行祭

に備へて、家々の簷付萬事全く整ひ、祭禮氣分中京に旺溢す。既に日暮るれば、粧ひ成れる各鉾一齊に、鉾の前後に、數十個の提燈を駒形に吊り連らね、最後の祇園囃の稽古をなす。これを見る人の宵のうちより、群がり滿ち、その賑ひ、又趣あり。

御輿洗　祇園會の神輿を、祭禮前後に二回洗ひ淨める儀式にて、單に御輿洗とも云ふ。渡御に先だちて七月十日及び、還幸後の二十八日の夜之を行ふ。八坂神社より各講社、氏子總代等三基の神輿に供奉し、加茂川なる四條大橋の中央に至りて、神官榊を淨水に浸して神輿に注ぎこれを淨む。當夜は四條河原及び附近の川床等、納涼を兼ねての拜觀の群衆にて大いに賑ふ。

無言詣　祇園會の時、七月十七日より二十四日まで、神輿が御旅所にある間、多く色町の女達の詣づるを云ふ。俗にこの期間をお旅中と云ふ。絶對に無言にあらざれば、念願の驗なしと傳へらる。

弦召（ツルメソ）　祇園會十七日の神行祭及び二十四日の還幸祭の兩日、神輿の渡御に隨ひて徒歩にて行く甲冑武者を弦召と云ふ。

鉾　祇園會の鉾を言ふなり。現在殘れるものに、長刀鉾・函谷鉾・月鉾、雞鉾・放下鉾・船鉾の六臺あり。うち船鉾を除く他は、ほゞ其他態樣造同一なり。直徑六尺餘の二雙の大車の上に組む所謂山車の壯麗を盡せしものにして、屋蓋の上に高さ四丈に及ぶ矛を立つ。即ちこの山車を鉾と稱する以爲なり。又之を眞木と云ふ。眞木には、鉾頭・天王樣（人形）・小旗・大旗・御幣・榊・お札を付く。天王樣は鉾の内で最も神聖なるものと云はれ、各鉾の名稱はこの木刻の人形より出でたるものの如し。和泉小次郎親衛が烏帽子直衣で右手に長刀持ちたる人形、これが長刀鉾。函谷鉾は孟嘗君。月鉾は月讀尊。雞鉾は住吉御神體。放下鉾は放下僧の像なり。放下は昔放下鉾と稱へたるも、後世すはまと言ひ馴すに到る　眞木の上の鉾頭の形が、京都名物菓子

祇園會

の須濱（或は洲濱）に似たればなり。船鉾はその名の如く唐船を形取り、舷を錦繡にて粧ふ。船先に金色の鷁首を輝かせ、漆黑の舵に螺鈿を鏤めたる様は鉾中第一の美觀なり。「山」とは、輓山」及び「舁山」の總稱なり。舁山はその高さ一間ばかりにして屋蓋無く、その上に松を樹て人形を置く。十五六人にて舁ぎ行くなり。輓山は其形鉾に似る。唯屋蓋の上に鉾を立てず、その代りに松を樹つるなり。輓山に、岩戸山、上觀音山、下觀音山の三臺あり。うち岩戸山は神行祭に、他は還行祭に巡行す。山は占出山その他十二臺ありて、神行祭の鉾の間に伍してかつぎ行くなり。

鉾立　七月十日祇園會の鉾を、各その鉾町衆にて組み立つるなり。九日より立て初めて十日之を完成す。十日より二階囃を廢して、鉾の上にて毎夜、祇園囃の稽古をつゞけるなり。

鉾の稚兒　鉾町に稚兒當番と云ふものありて、七八歳より十二三歳迄の男子あれはこれを出す。吉符の日（五日）去年の稚兒と今年の稚子の間に盃あり。其夕會所の二階にて舞の稽古をなす。十一日馬上にて八坂神社に參詣し位を貰ふ。十萬石の格式なり。十七日の神行祭には、鉾の正面にて舞ふ。この時左右に從する二人の水干を著けたる童子をかむろと云ふ。二十四日の還行祭には神輿に供奉して歩くなり。

祇園囃　鉾の上にて囃す囃しを云ふ。樂器は、鉦・笛・太鼓の三種にて、十歳位より十四五歳迄の男兒五六人を以て鉦をうち、二十四五歳迄の青年五六人にて笛を吹き、それ以上の年齡の者二人にて太鼓を擣つ。鉾の巡行する始終囃し續けるなり。鉾の行程の半はを過ぎて、その囃の調子を早くす。これを戻り囃と稱す。

[illegible]　「鉾[illegible]」は、鉾の巡行順序を定めるために鉾町の代表が鬮を引くことなれども、今は一山鬮のみなり。十五日これを行ひて舁山の順序を定めるなり。然して鉾の巡行する順序は、長刀鉾を先頭に、函谷鉾、次に月鉾と鷄鉾の二つは一年交互に三番四番となり、菊水鉾・岩戸山（輓山）、船鉾とつゞくなり。これ等鉾の間に山二つ三つと伍して行く事、前にのべたる通りなり。

例句

[illegible]

祇園會の山路に入るや大津繪　宗因（[illegible]）
たて白もともに歸や祇園の會　嵐雪（玄峰集）
祇園會や僧の訪よる梶が許　蕪村（句集）
祇園會や眞葛原の風かをる　同（　）
祇園會に[illegible]乳あしなづさ　召波（[illegible]）
祇園會の人をさける[illegible]の薄ころも　蓼太（[illegible]）
祇園會や京に日傘の下を行　同（同）

[illegible]

[illegible]を賣るも祭のきほひかな　其角（五元集）
まつりの日町の會合の判者かな　太祇（太祇句選）

鉾

月鉾や松原西へいこさ山　吉徳（[illegible]）

鉾にのる人のきほひもみやこ哉　其角（[illegible]）

鉾處々にゆふ風そよぐ囃子哉　大祇（太祇句選）

月鉾や八幡過る山かつら　竜[illegible]（[illegible]）

王鉾の向ひ日傘も通りけり　巣兆（[illegible]）

打水に船鉾涼し燈し時　[illegible]角（同　人）

大丸へ群れ並ぶ鉾の際かな　二月堂（同　）

鉾の兒

二階から物のいひたや鉾の兒　太祇（太祇句選）

うす痘の見えずていとし鉾の兒　几董（井華集）

かしこくも羯鼓學びぬ鉾の兒　召波（春泥發句集）

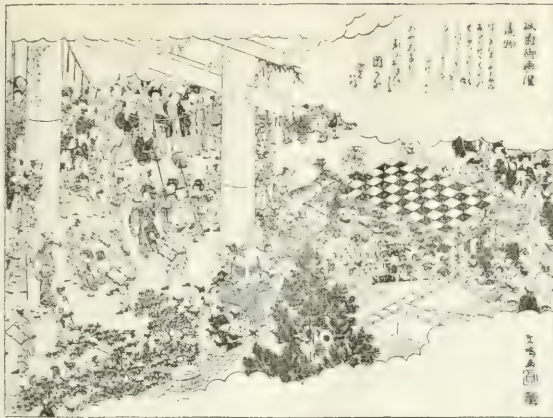
連立や祇園守りの結びさげ　支考（蓮二吟集）

兒あふぐ扇の消もまつりかな　白雄（白雄句集）

かな棒に急度言やめ岩戸山　支考（蓮二吟集）

山鉾町

鉾町へ戻りし鉾やすぐほどく　洛中（同　人）

参考　七月十七日及び二十四日の兩日、山城國京都市官幣大社八坂神社に於いて行はるゝ祭禮なり。古くは十七日より二十四日に至る八日間續けて行はれたり。祇園會とは、祇園御靈會の略語にして、一に、祇園祭、又は天王祭或は天下祭とも稱せられ、京中に於ける大祭なり。祭に先ち一、御輿洗・御輿迎の儀あり卽ち神輿三基旅所に神幸あり、馬長・山鉾等之に從ひ行く。極めて盛儀にして、上皇・后宮の御覽あり、或は主上紫宸殿に臨御し給ひ御覽の事ありき。又攝關大臣及び將軍等は棧敷より見物せりと云ふ。七月十六日の夜を宵山と稱す。家々の軒に神燈を揭げ青簾を懸け、美しき敷物を敷き、屛風を飾りて、其の壯麗を競ふ。十七日は鉾祭にして、三十有餘の山車を出す。是に鉾と山との二樣あり。卽ち長刀鉾・函谷鉾・鶏鉾・月鉾・放下鉾・船鉾・占出山・牛天神山・

太子山・白樂天山・伯牙山・岩戸山・琴割山・郭巨山・山伏山・霊天神山・木賊山・蘆苅山・孟宗山・保昌山・岩戸山等にして、何れも絢爛眼も眩むばかりなり。其の式は、四條通より東洞院の西へ繰り行くものにして、囃子は所謂祇園囃子を用ふ。鉾の上に十歳前後の男兒粉裝をこらし、金冠を戴きて羯鼓を打つ。是を鉾の兒と云ふ。又以上の鉾山の進行中その順序に就きて鬮改といふ事あり。元來長刀鉾・古出山は一番に進む習にして、之に鉾一つに山三つ宛隨ふを規定とす。兼ねて鬮にて順位を定め置きしを、四條境町邊に於いて、區長之が鬮を見て進むを許可するなり。即ち鬮を文箱に入れて持つ者は、雜子・紋附・麻上下にて區長の前に至り、許可ある時は退歩して扇を開きて通行を示すなり。廿四日に及び再び鉾渡る。然れども十七日より其の數・道程等僅少なり。此の夕神樂の渡御あり、鎧武者列をなして之に隨ふ、是を弦召と云ふ。

此の祭祀の起原は、清和天皇の貞觀十八年に始まると云ひ、或は圓融天皇の天祿元年と云ひ、諸書記す處區々なれども、崇德天皇の大治二年以後より、高倉天皇の承安三年頃には益々盛んとなりしものなり。然るに室町時代に至り應仁・文明の交には戰亂の爲中絕し、後ち、後土御門天皇の明應九年六月に再興せられたり。

三井寺の札燒

季題解說 七月十七日（もとは陰曆六月十七日）滋賀縣大津・長等山園城寺（三井寺）にて執行する行事なり。境內正法寺に安置す如意輪觀世音は、西國三十三所の第十四番の札所にして、この日巡禮の納めゆきし札を集めて燒却す。

例句

三井寺の札燒　札燒やカ餅屋が出て拜む　子角（同人）

桑名祭　比與利祭　石取神事　石取祭

古書校注 【栞草】六月十八日春日大明神の祭、勢州桑名の城下にあり。祭る神四座別當佛眼院說に云經津主命は、神護景雲元年下總香取の宮より勸請す。又武甕槌命は、正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請なり。天兒屋根命姬大神は永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請なり。每年八月十八日を以て祭辰となすこと、正應永仁の月日を以つてこれを修すといへり。○先十七日、社頭の南北に車一輛づゝ置き、夜に入て[illegible]、翌十八日[illegible]南社[illegible]南北へ引[illegible]、南[illegible]主座、北[illegible]、其に[illegible]日を以て祭る、[illegible]大明神は土地の[illegible]鎭座の月

日詳ならず、凝淵寺・鳥淵寺・池の淵寺合せて三寺といふ。又七月七日の神事あり、氏子員辨川に於て石をとり來て南社に供ず、これを石取の神事といふ。此日雌雄物を出す。（此八月祭を天武天皇の祭禮と記せる書あり、日本紀に天武天皇元年七月朔、車駕還三伊勢國桑名一宿に給ふ云々。今縣甲に神社あり。よりて誤り記す歟。

季題解說　七月十七日、伊勢桑名町桑名神社にて行はるゝ祭禮。一に比與利祭とも云ふ。

往古は流鏑馬神事ありしが、今は神輿の渡御及び優雅神樂のみなり。この祭に先立ちて石取神事あり、俗に石取祭と云ひ七月七日を以つて行はる。其起因は比與利祭の流鏑馬の馬場を修繕するため、程近き川原の石を取運びたるより初まる。大鉦を囃して有名なり。

月溪忌（げつけいき）　呉春忌（ごしゆんき）　四條派忌（しでうはき）

季題解說　七月十七日、月溪の忌日なり。月溪、一に呉春と云ふ。姓松村氏名春、字伯望、允伯は其號なり。又存白ともいひ、通稱は嘉右衞門、京都人、畫を始め大西酔月に學び後蕪村に就て修め且俳諧をも學ぶ。世に蕪村は俳を几董に畫を月溪に傳ふとさへ稱せらる。蕪村歿後應擧の畫風を慕ふ。其四條に住せし故に其畫風を四條派と稱するに到る。文化八年此日歿、享年六十、山城一乘寺村金福寺に葬る。墓域は蕪村の碑にほとりす。

例句

月溪忌　遺墨展す呉羽の里の月溪忌　月斗（同人）

呉春忌　呉春忌や池田の宿の二百幅　同・（同）

四條派忌　青墨のその繪勻はし四條派忌　同（同）

尚白忌（しやうはくき）

季題解說　七月十九日尙白の忌日なり、姓初め鹽川氏後江左氏、幼名虎之助、稱三益・木翁・芳齋・老贅子と號す、初め不卜後芭蕉門、伊勢の人、大津に住みて醫を業とす、其句平淡を以て知らる、享保七年歿す

例句

尙白忌　天の川湖上に白し尙白忌　月斗（同人）

座摩祭（ざままつり）　相嘗八十島祭（あひなめやそしままつり）

古書校註　【栞草】例祭九月廿二日、これを相嘗八十島祭と號す、新嘗の神事なるにや。

季題解說　七月二十二日大阪南渡邊町、座摩神社の祭禮なり。祭神は生井神・福井神・津長井神・波比支神・阿須波神と五柱なり。神功皇后三韓征

に供奉の儀を奉仕して神事終了す。この間一時、船舶の往來を止め、鉾流橋の通交も禁ぜらるゝなり。この神事は久しく廢止せられしを昭和五年復活されしものなり。

鉾流神事に次いで太鼓の宮入、地車の宮入篝の盛儀にて社前の賑ひ夜を徹すなり。

二十五日は渡御の神事あり、午後四時頃本社發向、猿田彦・催太鼓・臺鉾・獅子・風流花傘・八處女・唐櫃・和琴・網代車・御鳳輦・御神馬・御錦蓋・御翳・鳳神輿・玉神輿・稚兒・武者等列を整へて蜒々十數町、鉾流橋畔より御乘船、堂島川・安治川・木津川を經て、江子島に上陸、松島著御となる還行も往路の川筋を溯船還御し給ふ。渡御の御列供奉員は約五千六百有餘人なり(昭和五年調)

この日、汐は八ツ刻に滿ち夜の五ツ刻に引くも、今宵に限り夜の九ツ刻まで汐滿ち御船路安らかに還幸ありて神德の奇瑞を現はし給ふ。川筋に面する家々に新たに棧敷を設けて知人を招じ、酒肴を饗す。兩岸の見物船は二重三重に打重り、悉く提燈に燈を點じ、篝固船は水中に設けられたる篝の火の粉を浴びて水上を固む。宵空に擴ぐる五彩の花火・摺鉦・太鼓にて川筋を威勢よく上下するどんどこ船、又大舟篝とて大閘平船二艘を横繫ぎにし、床を張り、砂を積みたる上に、尺十の二間材を井桁に組みたるに油をそゝぎ、火をかけたる壯觀は水の都燈の都を、一夜に盡したる有樣にして京の祇園祭東京の山王祭と共に三都三偉觀の祭典なり。

御迎人形　御迎人形船は川渡御の日、吹流し・提燈・幕に飾られし船に一軀宛祭られ、列次を組んで曳船講の汽艇にひかれつゝ太鼓鉦を囃して、鉾流橋の河心にて渡御の乘船を待ち、先導して川筋を下る。人形は六尺乃至一丈二尺の大型にて二十軀。三番叟・安部保名・素盞嗚尊・羽柴秀吉・關羽・鎭西八郎・野見宿禰・八幡太郎・加藤清正等々あり。多く川口の町々に保管せられ、持町に於ては町の守護神として崇敬せられ宿禰町・鎭西町・保名町の稱あり。御迎は交代にて七八軀宛年々出づるを例とす。人形の中最も有名なるは柳文三作の「安部保名」にして、文化七年天滿市場の錢屋孫兵衞の次女さわが其艷姿に魅せられ、祭日二日を茫然として遂に發狂せし實話等あり。【參照】天滿の御祓(テンマノオハラヒ)

【例句】

天滿祭　菅原やみこし太鼓の夜の音　鬼貫(俳諧七車)

いさましや人の顏照る神祭　同(同)

川渡御　舟渡御を見る兒あつき篝哉　月斗(同人)

天滿(てんま)の御祓(おはらひ)

【由緒沿革】

【年浪草】當社は攝州大坂西成郡天滿にあり。祭る所の神、天滿天神。(略)

天暦年中、此地に於いて一夜に生じたる松樹あり。其梢に靈光赫々たり。（略）神託に曰、難波の梅を慕ひて、筑紫より爰に來る處なりと。（略）終に菅靈（一）を鎭め祭ると、云々。例祭六月廿五日琵物・車樂（二）等水陸共渡り畢りて、神輿戎嶋の御旅所に出て行き還る。川舟にて數萬。桃灯群集。遊船も亦比類なし。【參照】天満祭（マツリ）

註 （一）菅原道眞の靈也。（二）だんじり。

阿蘇祭（あそまつり）

季題解說 肥前阿蘇山の麓、官幣大社阿蘇神社の祭禮を云ふ。七月二十八日に行はる。古くは阿蘇神宮と云ひ、又關宗神宮に作る。又阿蘇三社とも稱し、健磐龍の命・阿蘇比咩・速瓶玉命を祀る。本殿二殿三殿あり。

唐崎參（からさきまゐり）

唐崎千日參（からさきせんにちまゐり）

古書校註 【増山の井】 齋院おりゐ給ひて、から崎の御稜といふ事あり。源氏乙女の巻に五節（一）の唐崎にて、はらへせし事あり。かやうの事の遺法にて、今も水無月晦日にまうで侍るなるべし。

【日次紀事】 六月晦日江州唐崎如別當明神詣。相傳ふ斯の神、日吉の末社にして、天智天皇の時六月祓を修むる處なり。一說住吉明神にして、社家は樹下生源寺の祖神なり。今日の參詣平日の千度に當る故に千日參りと稱す。祈願ある人木を以て小鳥居を造り社頭に供す。

註 （一）五節の舞姫の意也。

季題解說 有名なる唐崎の松に一祠あり。唐崎神社と言ふ。古くは六月晦日に祭禮を行はれたるも現今にては、七月二十八九日の兩日なり。此日の參詣は平日の千日に當ると言ふより、又千日參とも稱す。

例句

唐崎祭

舟たてゝ參る唐崎祭かな　涼舟（同人）

明治天皇祭（めいじてんわうさい）

季題解說 七月三十日百二十二代明治天皇の神去りましゝ當日なり。この日天皇の御神靈を祭り、伏見桃山陵に奉幣せしめらる。天皇諱は睦仁、祐宮と申し、孝明天皇の第二皇子、御母は從一位藤原慶子と申す。嘉永五年九月二十二日御降誕、御歳十六歳にて天津日嗣を承けさせ給ひ僅々五十年間に日本帝國が世界の一等國に列せしは宜に明治大帝の御偉業のしからしむる所なり、大帝、和歌に御堪能にましまし、その御製の多き事も御歴代中稀に見る所なり。明治四十五年七月崩御し給ふ。寶算六十一、在位四十六年、誠に允文允武の聖帝に在らせ給ひしなり

例句

明治天皇祭　明治天皇祭大暑の天の寒さ哉　月斗（同人）

宗祇忌（そうぎき）

季題解説　七月三十日、宗祇法師の忌日なり。其出、紀州賤民の子なりといひ、江州の出なりといひ少壯時代の經歷は知悉するものなし。少時律院に僧侶生活を送りし頃より和歌連歌を好み上洛して心敬、宗砌に師事し、文正元年の熊野法樂千句にも心敬と宗祇とは一座せり。時に宗祇四十六歳。此年關東より白河に節を曳き諸雅の訪問を敢てして以來文明年間以來、中國筑紫に遊び東海・東山・北陸に多く游杖を曳き、當時としては足跡天下に遍き觀ありき。遂に文龜三年止まりし越後より本土横斷草津・伊香保に浴し箱根湯本の宿にて病沒す。文治二年七月此日なり。著書吾妻問答・竹林抄・老のすさみ・筑紫道記・新撰菟玖波集などありて、此人室町時代連歌全盛期を代表する連歌師と稱すべきなり。

例句

宗祇忌　宗祇忌や秋澄み渡る富士の山　月斗（同人）

妙心寺蟲拂（めうしんじのむしばらひ）

季題解説　七月下旬（土用中天氣晴朗の日、古へは三・四日間今は二日間、二十七・八日頃多し）に之を行ふ。妙心寺蟲拂は其輪藏の經函を展曝する古式をいふものにて殊に日取も隨時に定められ、然も何日でも早朝、卽ち、午前五時に入堂の鐘が鳴つてから執り行はれ、約一時間半後の六時半頃には既に全部終了するといふ淸淨境にふさはしさ、世俗の如き日中でないことに第一に注意を要する。亦決して一般への公開の性質を帶びて居らざることも遺憾の一也。行事の内容は當事者の作例を以て左に示す。參照　人事―蟲干（ムシボシ）

例句

妙心寺蟲拂
入堂の鐘にはじまり蟲拂　含翠（懸葵）
蟲拂の僧盛相に寛げり　同（同）
（輪藏の八方に守護神天龍八部の像を安ず）
一角を守る一像や蟲拂　一朗（同）
梵音も涼しき朝や蟲拂　三幹竹（同）

住吉名越の大祓（すみよしなごしのおほはらひ）

住吉の御祓（おはらひ）　住吉南祭（すみよしなんさい）　住吉の火替（ひがはり）

古書校註

【增山の井】神代にいざなみの尊、日向の國あをきが原にて御秡し給ふ

時、顯れ給ひし神なれば也。

【月次紀事】 六月二十九日此月小なれば、則ち今日毎年神輿を舁くの輩、豫め其處より來り、住吉松原に宿し、潮垢離を修む。今朝神輿一基、宮前に寄る。社僧祝詞を誦し、神を遷す。然る後社司六七十員馬に騎り、供奉す。既にして神輿界（一）の御旅所に到れば、（略）父神を旅所の假宮に遷し、又祝詞を誦す。夜に入りて、神輿住吉に歸る。界の地人手毎に炬を點じ、神輿を送る。又大坂の地人同じく火を點じ、之を迎ふ。送迎相連り、恰も白晝の如し。六月晦日凡そ今日大なれば則攝州住吉社御祓を修す。

註 （一）堺、今の堺市。

季題解説 住吉三神の生れませしは伊弉諾尊の御禊し給ひし時なるに依り、特に上古の祓の遺風を嚴かに傳承されたる祭典なり。七月三十一日社頭にて大祓を修し、翌八月一日に堺の宿院に渡御あり、祭典の後、更に飯匙堀にて祓の式を行ふ。これを夏越の大祓とも、南祭とも稱す。盛大なる祭事なり。

飯匙堀は神功皇后御凱旋の時、御賜宴のありし地にして、干珠を埋められたるところといふ。この祭禮は大阪諸社の夏祭の殿なり。參照 名越の祓（ナゴシノハラヒ）

例句

住吉名越の大祓　夏越女が持つ玉串や夕嵐　呵成（同人）

下加茂の御祓（しもがものみそぎ） 矢取の神事 五十串（いぐし）

季題解説 立秋の前日、京都下鴨の加茂御祖神社の名越の祓なり。この日糺川の央に齋串（五十串）とて五十本の串を立つ。四十八本は小さく二本は大なり、串は竹にシデを附しありて、恰も矢の如し。諸人この五十串を得る時は幸ありと、式後爭ひ取る、因つて矢取の神事ともいふ。參照 名越の祓（ナゴシノハラヒ）

例句

下加茂の御祓　下鴨矢取神事　くらきより衛士現れし御祓かな　なかし（ホトトギス）

五十串　追ひかけよ五十串にかゝる冷し瓜　曉臺（分類俳句全集）

祭月（まつりづき）

季題解説 七月を大阪にて祭月といふ。市中に鎮座せる神々の祭禮をこの月中執行す。天滿祭の川渡御、生玉祭の陸渡御は華麗なる祭禮の雙璧なり。座摩神社・御靈神社の祭禮は富裕なる氏子を有し豪華見る可きものあり。陶器神社の祭禮には各種の陶器を以て人形の衣裳背景等を作り、市中の人氣を呼ぶ。住吉祭には堺の夜市あり。大濱に臨時魚市を設く。この日永代

濱にて乾物、鹽物の造り物をなす、等々大阪は炎暑の一月を祭氣分に浸るなり。〔參照〕座摩祭（[illegible]）天滿祭（[illegible]）住吉名越の大祓（[illegible]）

官幣社例祭表（夏季）

官幣大社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
出雲大社	五月十四日	大巳貴命	島根縣簸川郡大社町
加茂別雷神社	五月十五日	別雷命	京都市下京區上賀茂
加茂御祖神社	五月十五日	玉依姫命、鴨武津之身命	京都市左京區下鴨宮河町
丹生川上神社（下）	六月一日	闇龗神	奈良縣吉野郡丹生村
日枝神社	六月十五日	大山咋神、國常立神、足仲彦尊、伊弉册神	東京市麴町區永田町
八阪神社	六月十五日	素盞嗚尊、稻田姫命、八柱御子神	京都市東山區祇園町
札幌神社	六月十五日	大國魂命、大巳貴命、少彦名命	北海道札幌郡藻岩村
熱田神宮	六月廿一日	草薙劍	名古屋市南區熱田新宮阪町
住吉神社	六月卅日	上筒之男命、中筒之男命、底筒之男命、息長帶姫命	大阪市住吉區住吉町
月山神社	七月十五日	月夜見命	山形縣東田川郡立谷澤村
阿蘇神社	七月廿八日	健磐龍命、阿蘇比咩命、速瓶玉命	熊本縣阿蘇郡宮地町

官幣中社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
金崎宮	五月六日	恒良親王（皇太子）、尊良親王	福井縣敦賀郡敦賀町
御上神社	五月十四日	天御影命	滋賀縣野洲郡三上村
貴船神社	六月一日	高龗神	京都府愛宕郡鞍馬村
嚴島神社	六月十七日	市杵島姫神、田心姫命、湍津姫命	廣島縣佐伯郡嚴島町
熊野那智神社	七月十四日	家津御子神、熊野速玉神、熊野夫須美神	和歌山縣東牟婁郡那智村

官幣小社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
大國魂神社	五月五日	大國魂神	東京府北多摩郡府中町
波上宮	五月十七日	速玉男神、伊弉冊神、事解男神	那覇市若狭町

別格官幣社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
結城神社	五月一日	結城宗廣	津市大字八幡町
菊池神社	五月五日	菊池武時	熊本縣菊池郡隈府町
名和神社	五月七日	名和長年	鳥取縣西伯郡名和村
常盤神社	五月十二日	徳川光圀、齊昭、	水戸市大字常盤町
東照宮	六月一日	徳川家康	栃木縣上都賀郡日光町
建勳神社	七月一日	織田信長	京都市上京區紫野北船岡町
湊川神社	七月十二日	楠木正成	神戸市多聞通三

動物

夏野の鹿（なつのしか）　夏の鹿（なつのしか）　鹿の親（しかのおや）　親鹿（おやじか）

季題解説 子を生落して、後の親鹿を云ふ。また角の生ひ初めたる夏の鹿をいふ。

實作注意 俳句にては單に鹿は秋季のものとす、夏のものには其字を冠らすべし。〔參照〕鹿の子（シカノコ）　鹿の袋角（シカノフクロヅノ）　秋―鹿（シカ）

例句

夏野の鹿　わか戀は夏野の鹿の丸寐哉　羅城（たてなみ）

鹿の親　鹿の親笹吹く風に戻りけり　一茶（おらが春）

俄川飛んで見せけり鹿の親　同（同）

鹿の子（しかのこ）　鹿の子（かのこ）　麑（かご）　鹿子（かこ）

古書校註

【日次紀事】 毎年五月の時節、南都春日山の麋鹿の子漸く成長す。然れども力未だ足らず、鹿子市中に在る者、若狂狗（一）あれば則之を噛む。動もすれば死に至る（二）。是故に此節興福寺の下僧父町奉行の小吏相隨ひ、市中を經廻り、市中若し顚犬（一）あれば則之を執へ、其脚筋を斷ち、其犬をして横行せしめず。（略）近世斯事止む。

註（一）狂犬。（二）殺して了ふ。

季題解説 晩春・初夏に生れたる鹿の子の親鹿に伴はれ歩きゐる姿可愛ゆし。かの子・かごとも約す。

實作注意 子を通じて親鹿をも詠めり、別項夏の鹿・鹿の親を見よ。〔參照〕夏野の鹿（ナツノシカ）　秋―鹿（シカ）

例句

鹿の子　鹿の子のあどない顔や山畠　桃隣（古太白堂句選）

鹿の子の人に招れたる芝生哉　一茶（享和句帖）

人聲に子を引き隱す女鹿哉　同（おらが春）

親に似て月につゝ立鹿兒かな　梅室（梅室家集）

かの子　奈良　灌佛の日に生れあふ鹿の子哉　芭蕉（笈の小文）

八九間鹿の子見送る躰かな　白雄（白雄句集）

草の葉に見すく鹿の子の額哉　同（同）

草の原何を鹿の子のはみそめし　同（同）

はやり来て小松をわくる鹿子哉　成美（いかに〳〵）
あはれなり牝鹿につれて行く鹿子　同（同）
谷川をよろめきながら鹿の子哉　吟江（行雲日記）
鳩の中はしり過たる鹿の子哉　乙二（たのゝえ草稿）
うつとりと人見る奈良の鹿子哉　子規（全集）

参考　しか　學名 Sika nippon（TEMMINCK）動物學上日本鹿と稱へられ、北は北海道より南は朝鮮、九州まで廣く分布す。幼期には角を有しないが、生後二年目から角が出來始める。この角は毎年二月頃になると自然に脱落して四月頃に新しい角が出來る。新角は最初厚く皮を被つてゐるので、これを袋角と稱へる。鹿は自らこの皮を注意して剝ぎ取るのである。秋の交尾期には雄の性質兇暴となるを以て、奈良にては雄を捕へて角を切り落す。

鹿の袋角（しかのふくろづの）　鹿の若角（わかづの）　鹿茸（ろくじよう）　袋角

古書校註

【三才圖會】鹿茸（略）古角既に解ち、新角初て生ずる時、紫の茄の如し、月令に云ふ、冬至に麋の角解つ、夏至に鹿角解つ、陰陽相反す、此の如し。稍長じて四五寸、形分岐せる馬の鞍の如し。茸の端、瑪瑙の紅玉の如し。

【滑稽雜談】角落て間生ず。四五月の頃、茄子の形色に似たる考也。是を袋角と稱す。藥に用て鹿茸と云ふ。俗好かつ〳〵草に鹿茸の蟲の鼻より入て腦をはむといへり。（略）此者夏の季に用る事、只夏の鹿をいふなるべし。あへて茸の義に限らず。歌に夏野の鹿の束の間とよめる此事なるべし。萬葉集仙覺抄に云、五月の夏至日鹿角解つなどいひて、禮記に見えたり。按其もとの角落て、今生る角は、手にとる半生ゆるによせて、つかの間をとはよめる也。（一）宋岐云、夏の鹿は角生初て短くて一束斗なるを云ふ。

註（一）以下其文の自註なり。（二）夏野ゆく牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れておもへや（柿本人丸萬葉集）

季題解説　鹿の角は春脱け落ちて、夏新たに生えかはる時、その基脚となる袋蕊の未だ堅からず、未だ皮を被れるものを袋角といふ。鹿の若角とも云ひ、藥用かざる茸に似たるより鹿茸とも云ふ〔季題〕鹿の袋角

例句

鹿の袋角　牛の子にくらべん鹿の袋角　近之（蕉門發句集）
　年寄になきなし鹿の袋角　貞佩（古今句鑑）
鹿の若角　二葉にわかれ初けり鹿の角　芭蕉（全集）
　鹿の角まづ一ふしの別れ哉　同（笈の小文）

蝙蝠（かうもり）

伏翼（かつもり）　かはほり　蚊食鳥（かくひどり）　蚊鳥（かとり）　飛鼠（ひそ）　天鼠（てんそ）　仙鼠（せんそ）　家蝙蝠（いへかうもり）　油蝙蝠（あぶらかうもり）　きくがしら蝙蝠（わうちう）　やま蝙蝠

古書校註

【三才圖會】　按るに(略)老鼠化して成る。故に古き寺院多くこれあり。性山椒を好む。椒を紙に包んでこれを抛ぐれば、即ち、伏翼隨て落つ、竟にこれを捕ふ。

【滑稽雜談】　說文に曰　蝙蝠は飛鼠なり。爾雅に曰、服翼(一)と云ふ。蘇恭唐本草に曰、伏翼とは其晝伏して翼あるを以つて也。(略)時珍本草に曰、蝙蝠齊人(二)呼て仙鼠となす。(略)一夏夜出て蚊を喰ふ。絹或は絹布の白き物を竿頭に付て翅に掛れば、忽に地に落る者也。俗にかうもりと云ふ。かわほりの轉訛也。亦云、和の扇は中華の製を學びたるにあらず、蝙蝠の羽より工み出せり。故に昔は扇をかはほりと云ふ也。

註　(一)伏翼也　(二)支那戰國時代の齊の國人。(三)以下其諺の自說なり。

季題解說　飛翔すれど哺乳の動物なり。頭の形はつか鼠に似て、四脚の前二脚は甚だ長く、その指の間に廣き翅の如き膜ありて飛ぶ。全身黑し、夏の頃、晝は屋根裏など暗きに隱れ、黃昏より出でて飛び、蚊・蚋を食ふ。蚊食鳥・蚊鳥とも云ふ。かはほりはその古名なり。

實作注意　種類ありて小笠原島には大蝙蝠などあれど、季題の蝙蝠は夏の夕飄々と空を飛び交へる普通のものを云へるなり。

例句

蝙蝠

蝙蝠に手元もくらし油うり　北枝　(北枝發句集)
蝙蝠に顏かゝれなよ橋の上　桃隣　(古太白堂句選)
蝙蝠や傾城出る傘の上　太祇　(太祇句選)
蝙蝠や千木見えわかる闇の空　同　(同)
蝙蝠や月の邊を立ちさらず　曉臺　(曉臺句集)
蝙蝠や風ふるくさき門わたり　闌更　(俳句全集)
蝙蝠の轅に落つる嵯峨野哉　同　(同)
蝙蝠や古き檐ばのしのぶより　同　(同)
蝙蝠や風に吹かるゝ洗ひ髮　桃中　(明烏)
蝙蝠に人商ひの噂かな　梁瓜　(同)
蝙蝠や垢に魚わく捨小舟　周不　(俳諧新選)
蝙蝠や水へ遊かな橋の裏　之房　(同)
蝙蝠の立つや靜まる麥埃　麥里　(同)
蝙蝠や河原院のとぼし影　嘯山　(同)
蝙蝠やあるかなきかの宵月夜　素外　(古今句鑑)
蝙蝠や古き檐端に忍び住む　操舟　(同)
蝙蝠の舞ふ大家やかな行燈　百明　(故人五百題)
蝙蝠や闇に生るゝ羽の色　鳥醉　(同)
蝙蝠や禰宜の烏帽子に行あたり　柳居　(同)

かはほり

蝙蝠や風もほのかに薄月夜　馬光（馬光發句集）
蝙蝠やほの見えそむる天の川　吟江（心　花）
蝙蝠や鐘つく袖をかいくゞり　里推（類題發句集）
蝙蝠や月夜をめぐる按摩取　成美（谷風草）
かはほりのかくれ住けり破れ傘　蕪村（新花摘）
かはほりやむかひの女房こちを見る　同（同　）
かはほりや絵の間見めぐる人の上　太祇（太祇句選）
かはほりや古き軒端の釣しのぶ　曉臺（曉臺句集）
かはほりの夕を繭宜がつゝみ哉　白雄（白雄句集）
かはほりも土藏住のお江戸哉　一茶（九番日記）
かはほりや鑓を投げてもついてくる　同（新　集）
かはほりやさらば汝と兩國へ　同（發句集）
かはほりが眼を射てやらん小挑燈　集兆（曾波可理）
牛吼る商飛さるや蚊食鳥　闌更（半化坊句集）
雨の夜や軒下かける蚊食鳥　同（同　）

參考 最も普通なのは、いへかうもり、一名あぶらふし、學名 Pipistrellus abramus と云ひ、頭端から胴端まで約五センチに過ぎぬ極めて小形の種で、人家の屋根裏に潜み、初夏から晩秋まで夜飛翔する。頭胴二一センチに達するおほかうもり、鼻部が花瓣の如くに擴大せるきくがしらかうもり、高空を恰も鳥の如く殆ど一直線に飛行するやまかうもり、などは皆山地に産する種である

羽拔鳥（はぬけどり）　鳥毛を更ふる（しょうけをかふる）　羽拔鳥（はぬけとり）　羽拔鴨（はぬけがも）

古書校註

【滑稽雜談】一切の鳥の毛をかふるみな夏也。又按るに諸獸の毛をかふるも夏なるべしや。猶ほ心得べし(一)。

【栞草】凡諸鳥五月羽毛脱落、あたかも禿頭のごとし、これを羽拔鳥と云ふ。新六(二)夏草の野澤がくれの羽ぬけ鳥ありしにもあらずなるわが身かな　爲家

註　(一)猶は考ふべし。(二)新撰六帖の略。

例句

夏は諸鳥羽毛を革むるを常とす。仲夏の頃にも至れば、羽毛脱け落ちて、未だ新たに生ぜず、恰も禿頭の如し。之を羽拔鳥といふ。

實作注意

羽拔鳥

羽ぬけ鳥町にけぶる淺間山　蕪村（夜半叟句集）
涼しさを[illegible]羽ぬけ鳥　也有（蘿葉集）
追上て枝にしほ〳〵羽ぬけ鳥　五明（類題發句集）
なか〳〵に安堵顔なり羽拔鳥　一茶（發句集）

羽抜鳥　惰まるゝ鳥ははねゝ抜ぬなり　一茶（句帖）

日は照て雨は降也羽ぬけ鳥　半隠（小弓俳諧集）

參考　仲夏の候には、いろ／＼の鳥がその羽毛を更へる。この更生期にある鳥を羽抜鳥といふ。

時鳥

子規（シ）　郭公（クワツコウ）　杜鵑（トケン）　蜀魂（ショクコン）　杜宇（トウ）

不如歸（フジヨキ）　子嶲（シク）　子鵑（シケン）　杜魂（トコン）　蜀魄（ショクハク）

蜀鳥（ショクテウ）　鷃鳥（エンテウ）　謝豹（シヤハウ）　霍公鳥（クワツコウ）　勸農鳥　倶

佐羅　鶡鶵鳥　時の鳥　時つ鳥　三月過鳥　網鳥　四手の田長

田長鳥　田歌鳥　田中鳥　沓手鳥　童子鳥　冥途鳥　無常鳥　魂

迎鳥　魂つくも鳥　黄昏鳥　夕影鳥　射干玉鳥　夜直鳥　早苗鳥

菖蒲鳥　卯月鳥　橘鳥　夏雪鳥　戀し鳥　さくめ鳥　さくも鳥

賤子鳥　賤鳥　常言葉鳥　初時鳥　山時鳥　待つ時鳥

古書校註

【三才圖會】杜鵑の狀雀鷂に類して、色灰黑、腹は白く鷹彪あり。翅羽も亦白斑あり。口中赤く、頭に小冠毛あり。脛掌蒼色、其前指二つ、連膜あり。後趾一、諸鳥と異る。季春鳴く聲、本尊掛たかと曰ふが如し。夏に至りて最甚し。初秋に至て聲止む。冬月は則深山の中に蟄す。（略）歌人初て鳴く聲をきくを喜ぶ。

【日次紀事】三月杜鵑多く來り鳴き騷ぐ。人始めて杜鵑をきくを口實となす。故に茂林の中或は大樹の下其邊を徘徊して、耳を側でて、之をきく。倭俗專杜鵑を賞す。暮春に初めて聲を發するを初音と謂ふ。俗に傳ふ臥床に初音を聞けば、則其年病あり。若然ば則忽起て之を祝せよ。又厠に在りて初めて之を聞けば則凶事あり。假りに犬吠を爲せば則禍を變じて福となす。此事本草綱目に見ゆ。然らば則中華も亦然る乎。故に之を聽くに隨つて狗吠をなす。

【山の井】聲をまつには、しびりをきらして、立花のかげにかしらをかたぶけ、みゝをすまし、うつら、うつ木のもとに目をくらし、夜をあかすありさま、一夏のうちにきかぬ心を、無言の行をおこなふかとも、山籠して音信ざるかともいひなし、一聲のめづらしさは金輪王（一）の出世にもくらべ、をしの物いふにもなぞふ。又うづきにはねぶと（二）になくとも、いくさみだれに名のるなどもいひたてゝ雨の日はふりたてゝなき、月夜にこはいろをかゞやかすともいひ、猶本尊かけたとも、不如歸ともなく〳〵につけ、地獄にすむとも、鶯のかいこにまじるともいふ。

【滑稽雜談】〔不如歸鳥〕格物論に云ふ（略）啼き苦む時は、則自ら樹にか

かりて、謝豹思歸樂と呼ぶ。其聲(音イ)不如歸去なり。〔蜀魂、蜀魄〕寰宇記に云、(略)蜀王を杜宇と曰ひ望帝と號す。荊人鱉靈(略)望帝に見ゆ。相と爲す。自以へらく德鱉靈に如ずと。位を鱉靈に禪る。(略)遂に自ら亡去し、化して子規となる。蜀人其鳴くを聽きて曰、我帝の魂也。(略)〔鶗鴂鳥〕唐韻に云、鶗鴂は鳥の名、今の郭公なり。(略)〔時の鳥〕灌頂口傳に云、此鳥已が來べき時を知るゆへの名也。經信卿家歌合　名にたてる時の鳥とやいつしかも卯づききぬれば初音なくらん　入道俊成。(三)〔三月過鳥〕躬恒抄に云、四月五月六月ばかりあれば、三つきすこ鳥と云ふ也。五月雨の雲間に啼て過るなり。おもはずがほのみつきすこ鳥大伴黑主。〔綱鳥〕藻鹽草に云、是は時鳥を綱にて取て明年の夏先啼せんと云心也。〔しでの田長〕灌頂口傳に云、此鳥農業を催さん爲四五月來る。(略)(勸農鳥参照)士田は(四)田子の事也。田長は田の主なり。(略)〔童子鳥〕灌頂口傳に云、此鳥冬は深山の木のうつろに住み、頭の毛皆落て、小童の髮のごとし。(略)〔沓手鳥〕灌頂口傳に云、此鳥先生に沓を作りて賣りけるを、百舌鳥沓を買て價を乞はるゝ故に、百舌は此鳥の來る時は、木の下竹の中に隱れて見えぬ也。

【栞草】杜鵑は鶯の巢の中に生育すといふこと古へより行り。萬葉〔鶯の生卵の中にほとゝぎす、獨生れて、しが(父)父に似ては鳴ず、しが母に似ては鳴ず。下略〕又續世繼物語にもこのことみえたり。(略)今もたま〳〵鶯の巢にて生じたるを見る事あるよし云ふ人あり。〔勸農鳥〕此鳥農業を催さんため、四五月に來り、田をつくらば、はやくつくれ、時すぎぬればみのらずと鳴くといへり。故に名づく。〔倶伎羅〕契沖の說に、くきらは時鳥の梵語なりといへり。

【俳諧歲時記】〔四手の田長〕(略)越谷吾山云、凡そ諸鳥皆三指、只杜鵑のみ四指あり。その樹上に宿する時は二指前に向ひ、二指後に向ふ。四手の田長は是をもて名づく、或は四手を以つて死出となすものは非也と。實にしかるにや、つまびらかならず。〔謝豹〕蟲也。羞を以つて死す　人を見れば則足を以て面を覆ふ。羞る狀の如し。是蟲杜鵑の聲をきけば則死す。故に杜鵑をいうて又謝豹と云ふ。[五雜俎]

【年浪草】〔無常鳥〕十王經に曰、閻魔の卒三魂を縛し、閻の樹下に至る。二鳥棲み掌る　一を無常鳥と名く。(略)汝が舊里に化して、[illegible]となり、[illegible]語を示し、別[illegible]宜時となかん、

註 (一)[illegible]の王、[illegible]十萬由旬の底の國王。(二)舊本に[illegible]巧な[illegible]でないこと。これは[illegible]を言ひ[illegible]く「[illegible]」にも、「うつき來」ねぶとになくや郭公」とある。(三)[illegible]に「[illegible]と云ふ文字のまゝに[illegible]る也。[illegible]」とある。(四)[illegible]の[illegible]の[illegible]とも傳ふ。(五)已の父、六つ[illegible]の無常鳥化してほとゝぎすとなると。

季題解說　夏の候鳥で、[illegible]より稍小さく[illegible]なり、頭部より背にかけて灰黑色、胸・腹は白く、多くの黑横斑あり、嘴は短く[illegible]く稍鉤に尖る。脚は黃

色、四趾は啄木鳥のそれの如し。翼長く大きく黒褐色なり。晩春の候渡來して、各地の山に棲み、新綠の空に啼き初めて、梅雨の頃には晝夜を分たず鳴く。その聲一種悽愴の氣を帶び、詩情をそゝる。自ら巢を造ることなく、頰白・鶯等の巢に產卵して、孵化養育せしむる奇性あり。初秋に至つて南方に去る。禁鳥なり。

實作注意 古來詩歌に多く詠はるゝもの。子規・杜鵑・杜宇・蜀魂・不如歸等の異稱を有ち、又多く郭公の字を用ゐれど、郭公は別鳥なれば避くるをよしとす。和名また夥しく、うなゐ鳥・くきら・勸農鳥・くつで鳥・戀し鳥・死出の田長・しづ鳥・橘鳥・時の鳥・みゝつきすご鳥・冥途鳥その他多くあれど、何れも古名にて、俳句には多く用ゐられず。〔季題〕射豹　閑古鳥（カンコドリ）　時鳥の落文（ホトトギスノオトシブミ）　春—春時鳥（ハルホトトギス）　時鳥の巢（ホトトギスノス）

例句

時鳥

有明の油ぞ殘るほとゝぎす　宗因（梅翁宗因發句集）
ほとゝぎすいかに鬼神も慥にきけ　同（同）
岩躑躅染る泪やほとゝぎす　芭蕉（續山井）
またぬのに菜賣は來たか時鳥　同（六百番發句合）
ほとゝぎす今は俳諧師なき世哉　同（鹿島紀行）

さし籠たる局に

鳥さしも竿や捨けんほとゝぎす　同（千鳥掛）

明石

ほとゝぎすきえ行方や島ひとつ　同（小文庫）
麥や田や中にも夏はほとゝぎす　同（あゝよ草）
野を橫に馬引むけよほとゝぎす　同（猿蓑）

旅宿

京に居て京なつかしや時鳥　同（一字幽蘭集）
ほとゝぎす啼や五尺のあやめ草　同（伊達衣）
木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす　同（炭俵）
あけぼのやまだ朔日にほとゝぎす　同（芭蕉句選拾遺）
きかぬやうに人はいふなり時鳥　鬼貫（鬼貫句選）
ほとゝぎす耳すり拂ふ峠かな　同（同）
此夏はいく度きかんほとゝぎす　同（同）
夜の後燈白しほとゝぎす　同（同）
ほとゝぎすはだかで起て橋ふたつ　來山（續いまみや艸）
ほとゝぎす貴布ねへかよふ禰宜ひとり　同（同）
手枕にしびりがきれてほとゝぎす　同（同）
ほとゝぎすまだ夜著入れる蚊屋の中　同（同）
若鳥やあやなき音にも時鳥　其角（五元集）
有明の面起すやほとゝぎす　同（同）

（宮城）
歴々や下馬の折ふし時鳥　同（同）
阮咸が三味線しばし時鳥　同（同）
（傾城）
時鳥あかつき傘を買せけり　同（同）
きぬぎぬの用意か月に時鳥　同（同）
寮坊主寝ねば滿しほとゝぎす　同（同）
鐘[illegible]かおしをほとゝぎす　同（同）
蛤のやかれて啼やほとゝぎす　同（同）
點滴を硯に奇也ほとゝぎす　同（同）
時鳥人を馳走に寐ぬ夜哉　同（同）
羯音で耳を澄らせてほとゝぎす　同（同）
あの聲で蜥蜴（トカケ）くらふかほとゝぎす　同（同）
行燈を月の夜にせんほとゝぎす　嵐雪（玄峰集）
ほとゝぎす[illegible]かけつけん　同（同）
たちばなを食ひも[illegible]し時鳥　同（同）
時鳥聞け[illegible]座頭の根付哉　同（同）
山畑のうねりてぞ行ほとゝぎす　沾徳（俳諧五子稿）
ほとゝぎす馬子の寐てゐる松ばやし　言水（同）
鱧はねて水[illegible]也ほとゝぎす　同（同）
兄弟が顔見合すやほとゝぎす　去来（去来発句集）
心なき代官殿やほとゝぎす　同（同）
古郷に一[illegible]ほとゝぎす　同（同）
ほとゝぎすきのふ一聲けふ三聲　同（同）
うぐひすもやゝ受太刀や時鳥　同（同）
明くれの尖啼ひゞけほとゝぎす　同（同）
時鳥啼や湖水のさゝ濁り　丈草（丈草発句集）
山道や[illegible]荷にひゞく時鳥　同（同）
闇[illegible]かしやほとゝぎす　杉風（杉風句集）
時鳥寐まきとくまに影もなし　同（同）
おそふ[illegible]老の仕事にほとゝぎす　同（同）
竹の子によばれて坊のほとゝぎす　惟然（惟然発句集）
ほとゝぎす[illegible]ふたつの橋の淀の景　同（同）
ほとゝぎす山田の水にいろがつく　浪化（浪化上人発句集）
ほとゝぎす啼て入りけり南禪寺　北枝（北枝発句集）
時鳥うしろの人が聞出でし　同（同）
道に[illegible]心[illegible]ぎす　支考（蓮二吟集）

[illegible]

時鳥 ほとゝぎす啼山數や雲傳ひ　支考（蓮二吟集）

時鳥啼かぬ夜白し鷄熊山　同（同）

芍薬は遲し牡丹にほとゝぎす　同（同）

四五月の卯波さ波やほとゝぎす　許六（五老井發句集）

聞までは二階に寢たり時鳥　淡隣（吉本白雪句選）

我は夢夜番のきかぬほとゝぎす　也有（蘿葉集）

ほとゝぎす三聲四こえと消てゆく　同（同）

落著て能く〳〵や二度目のほとゝぎす　同（同）

能い時に御屋休みてほとゝぎす　同（同）

まつ戀に捨る夜明をほとゝきす　同（同）

粟津野や山から京のほとゝぎす　千代女（千代尼發句集）

男さへきかれぬものをほとゝぎす　同（同）

おもひ切てこちら向時ほとゝぎす　同（同）

唯もどる道なが〳〵し時鳥　同（同）

[illegible]

雞の聲つもりし耳やほとゝぎす　同（同）

時鳥畫に鳴け東四郎二郎　蕪村（萱の風）

ほとゝぎす哥よむ遊女聞ゆなる　同（新花摘）

耳うとき父入道よほとゝぎす　同（同）

篇たく矢數の空をほとゝぎす　同（同）

岩倉の狂女戀せよほとゝぎす　同（五車反古）

鞘走る友切丸やほとゝぎす　同（句集）

ほとゝきす平安城を筋違に　同（同）

稲葉殿の御茶たぶ夜や時鳥　同（同）

[illegible]

わすゝなよほとゝほ雲助ほとゝぎす　同（同）

哥なくてきぬ〴〵つらし時鳥　同（同）

[illegible]

名のれ〳〵雨しのはらのほとゝぎす　同（同）

松浦の文かく夜半や時鳥　同（新五子稿）

大人なる男の子旭けり時鳥　同（同）

失ふた杖も闇の夜時鳥　同（同）

[illegible]

雲を開く山ほとゝぎす第一義　同（落日庵句集）

時鳥待や都の空たのめ　同（同）

菖の葉を掻取る蓋やほとゝぎす　同（同）

時鳥琥珀の玉をならし行　同（同）

時鳥瘧さゝげてねぬ夜哉　太祇（句稿）

姿人にくれし夜ほとゝぎす　同（太祇句選）
ほとゝぎす今見し人へ文使ひ　同（同）
湖へ神輿さし出てほとゝぎす　同（同）
など我は寝ざめぬ老ぞ時鳥　同（同）
ほとゝぎす聞くや汗とる夜着の中　同（同）
老いて我うたがふ耳やほとゝぎす　同（石の月）
ほとゝぎす駕から覗く行方哉　同（新選）
ほとゝぎす古き夜明のけしき哉　几董（井華集）
月よりは上ゆくものかほとゝぎす　同（同）
ほとゝぎす啼かと待ば蜘の絲　同（同）
時鳥あとは松吹あらし哉　同（同）
ほとゝぎすいかに若衆の聲がはり　同（同）
ほとゝぎす咒咀の針うつ梢より　同（同）
ほとゝぎす鴨河越えぬ恨かな　同（同）
ほとゝぎす天狗の礫ゆるせかし　同（同）
曉のかねてしゞまやほとゝぎす　同（同）
飛啼の若音あやなし時鳥　同（同）
ほとゝぎす路通はもとの乞食哉　同（同）
あかつきの一音ぬしやほとゝぎす　召波（春泥発句集）
烏帽子にも耳は出るよ時鳥　同（同）
ほとゝぎす我も都のうつけ哉　同（同）
今宮の煤掃しばしほとゝぎす　同（同）
ほとゝぎす啼やあふみの西東　同（同）
ほとゝぎす夜もいろ〳〵の物の音　同（同）
[illegible]日枝や麓を横にほとゝぎす　樗良（樗良発句集）
ほとゝぎす野山に常のすがたあり　同（同）
ほとゝぎす曉にせまる高音哉　同（同）
時鳥聞なほす間に遠音かな　同（同）
ほとゝぎす啼やちらりと月に移り　同（同）
ほとゝぎす二聲聞しはつねかな　同（同）
時鳥啼の初音ぞうらみなる　同（同）
ほとゝぎすあやしく過る初音哉　同（同）
曉に魂入ぬほとゝぎす　曉台（曉台句集）
ほとゝぎす其夜を風のさはがしき　同（同）
時鳥なき行夜半の一かすみ　同（同）
ほとゝぎす南とおりに曇ゞもり　同（同）
時鳥聲に惜しとおもふ夜や　同（同）
聲くらし人まどはせのほとゝぎす　同（同）

空の津や千舟啼越すほとゝぎす　闌更　（半化坊發句集）
俳諧の羅漢ならべりほとゝぎす　同　（同）
待甲斐有二羽啼過るほとゝぎす　同　（同）
ほとゝぎす古き言魂思ふのみ　同　（同）
時鳥啼戻りけり山かつら　同　（同）
竹植て寢ころぶ空やほとゝぎす　蓼太　（蓼太句集）
雲踏て聞日も遠しほとゝぎす　同　（同）
弓取は弓持てきくほとゝぎす　白雄　（白雄句集）
鄙曇かならずよ山時鳥　同　（同）
聞初ていく日ふる也時鳥　一茶　（享和句帖）

老翁岩に腰かけて一軸をうつける畫

我汝を待つこと久し時鳥　同　（おらが春）
それでこそ御時鳥松の月　同　（七番日記）
時鳥湯けぶりそよぐ草そよぐ　同　（同）
此雨にのつ引ならじ時鳥　同　（同）
らうそくでたばこ吸けり時鳥　同　（同）
遠渡る橋の下より時鳥　同　（同）
時鳥けんもほろゝに通りけり　同　（句帖）
やれ廻よそれ時鳥〳〵　同　（九番日記）
ほとゝぎすなくや頭痛のぬける程　同　（嘉永板發句集）
から臼のとなりにすめばほとゝぎす　成美　（成美家集）
藪寺や箏月夜ほとゝぎす　同　（同）
ほとゝぎす啼はむかしの軒端哉　巣兆　（曾波可理）
時鳥また見に來ずや隅田川　同　（同）
ひがし山とつてかへすやほとゝぎす　同　（同）
迎には誰をやらうぞほとゝぎす　士朗　（枇杷園句集）
むら雨はむら降もするを時鳥　同　（同）
美しき空や高音のほとゝぎす　同　（同）
薄雲の夜の隅よりほとゝぎす　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
時鳥啼や夜汐のひた〳〵と　同　（同）
一嵐靜まるや江のほとゝぎす　同　（同）
蓬生の夜の大きさやほとゝぎす　同　（同）
ほとゝぎす遠き在所の月夜かな　同　（同）
ほとゝぎす聞や野にたつ身のしめり　同　（同）
不用意に出て野深し時鳥　同　（同）
その聲は霜夜に似たり時鳥　同　（同）
踏付し蕗の匂ひやほとゝぎす　同　（同）
時鳥啼夜の雨をおぼえけり　同　（同）

子規

木戸さして境内しんとほとゝぎす　梅室（梅室家集）
ほとゝぎす雲と曇の間にて　同（同）
東には山ほとゝぎす西に月　同（同）
鳴そめてなく空もちぬ時鳥　同（同）
時鳥鳴ならしぼれ釣の絲　乙二（をのゝえ草稿）
子規まつやら淀の水車　宗因（梅翁宗因發句集）
清く聞ン耳に香焼て子規　芭蕉（虚栗）
子規なくや黒戸の濱びさし　同（もとの水）
子規大竹藪をもる月夜　同（嵯峨日記）
川むかひたが屋敷へか子規　其角（五元集）
子規一二の橋の夜明かな　同（同）
六阿彌陀かけて鳴らん子規　同（同）
うかれ出て山がへするか子規　去來（去來發句集）
子規瀧より上のわたりかな　丈草（丈草發句集）
菜種がら焚や野風の子規　同（同）
子規柩をつかむ雲間より　蕪村（句集）

聖廟奉納

子規星は北野の朝もうで　同（落日庵句集）
子規鑑おとしの折からに　几董（井華集）
睡氣さす魔を蹴て行や子規　同（同）
探幽があけぼのゝ夢や子規　同（同）
子規けふはきのふと或夜かな　同（同）
うぐひすの箱根や伊豆の子規　召波（春泥發句集）
松の葉に下腹つくな子規　樗良（樗良發句集）
子規啼や有磯の浪かしら　曉臺（曉臺句集）
子規なくや夜明の海がなる　白雄（白雄句集）
子規鳴くやこゝにも山のつゆ　乙二（をのゝえ草稿）

郭公

郭公なき〱飛ぞ閙はし　芭蕉（續虚栗）
須磨の蜑の矢さきに啼や郭公　同（泊船集）
郭公うらみの瀧のうらおもて　同（俳諧曾我）
郭公聲横たふや水の上　同（藤の實）

[illegible]にて

落くるやたかくの宿の郭公　同（もゝよ草）
橋やいつの野中の郭公　同（卯辰集）
淀舟や犬もこがるゝ郭公　其角（五元集）

幽谷人不返

曉の氷雨をさそふや郭公　同（同）
[illegible]の反吐はとなりか郭公　同（同）
夢にくる母をかへすか郭公　同（同）

郭公

それよりして夜明烏や郭公　其角（五元集）
葉に成て書れぬ梅や郭公　同（同）

待乳山の社頭に雨をしのぎて

空は墨に畫龍のぞきぬ郭公　嵐雪（玄峰集）
郭公なくや雲雀と十文字　去來（去來發句集）
川越の途中に立や郭公　丈草（丈草發句集）
提燈のそらに詮なし郭公　杉風（杉風句集）
あかつきの鐘をさそひし郭公　同（同）
郭公雨のかしらを啼て來る　浪化（浪化上人發句集）
艫に舳に聞人せんぎや郭公　同（同）
留守に居人たゞならぬ郭公　蕪村（落日庵句集）
聞ぬ夜の行燈殘れり郭公　也有（蘿葉集）
耳かへてまつ寢がへりや郭公　同（同）
ほしものにたらぬ晴間や郭公　同（同）
一聲や座頭うつむく郭公　同（蘿の落葉）
十日ほど淡路をさらず郭公　曉臺（曉臺句集）
逢ぬうらみ血を吐までぞ郭公　同（同）
かつしかに行てきかばや郭公　同（同）
日頃經て鳴日に疎し郭公　同（同）
郭公一聲夏をさだめたり　蓼太（蓼太句集）
郭公巣を蹴落して出けるか　同（同）
百草のかをるや空に郭公　蒼虬（蒼虬翁發句集）

杜鵑

杜鵑啼音や古き硯箱　芭蕉（陸奥鵆）

不卜一周忌琴風興行

あれ〳〵と膾まらはづれて杜鵑　其角（五元集拾遺）
春過てなつかぬ鳥や杜鵑　蕪村（句集）
はしたなき女嬬の嚔や杜鵑　同（遺稿）
蚊屋漏て紙燭さす夜や杜鵑　也有（蘿の落葉）
あかつきや地震の後の杜鵑　几董（井華集）
伏見の夜急に更たり杜鵑　同（同）
とばしりし墨も頓阿の杜鵑　同（同）
杜鵑はるかにもどる深山かな　樗良（樗良發句集）
杜鵑なくや楓の花が散る　蒼虬（蒼虬翁發句集）

蜀魂

蜀魂まねくか麥のむら尾花　芭蕉（後双六）
あすの夜は寐させてくれよ蜀魂　千代女（千代尼發句集）
うぐひすのみだれごゝろや蜀魂　曉臺（曉臺句集）
蜀魂古巣は泊瀬かみよしのか　同（同）
このすぢを人もきくらん蜀魂　成美（成美家集）

杜宇

蜀魂ゆかり有べき野のすがた　　蒼虬（蒼虬翁發句集）
烏賊賣の聲まぎらはし杜宇　　芭蕉（韵　塞）
夜著きても愛宕に早し杜宇　　言水（俳諧五子稿）
しるべして山路もどせよ杜宇　　丈草（丈草發句集）
はやつゆの草木となりて杜宇　　成美（成美家集）
靄を出て靄に入間の杜宇　　蒼虬（蒼虬翁發句集）

参考

不如歸

木曾川のほとりにて
ながれ木や篝火の上の不如歸　　丈草（丈草發句集）

ほととぎす、杜鵑科、學名 Cuculus policephalus policephalus 俗に郭公の字をあてるが、郭公はその鳴聲に因む名で、次に述べる「くわくこう」に用ゆべきであり、明に誤用である。くわくこうよりも著しく小で翼長十六センチ、腹部黄色を帶ぶるを以て容易にこれと區別される。躰の下面に黑色の横斑があつて、恰も鷹の如き樣子を呈してゐる。南支那・印度等で越冬し、三四月頃渡來し晩秋まで滯留する。他の鳥が餘り好まぬ毛虫類をも嗜む性質があるので、若葉の頃、これを求めて集つて來る。かやうなのを初ほととぎすと云ふ。うぐひすの卵に似てはゐるがこれよりも小さな卵をうぐひすの巢の中に産み落し、うぐひすをして卵を孵へさせる。鳴聲は「てつぺんかけたか」「ほんぞんかけたか」などと聞える。

閑古鳥（かんこどり）

閑子鳥（かんこどり）　諫鼓鳥（かんこどり）　喝鼓鳥（かつこどり）　鳴鳩（かつこうどり）　布穀（くわつこうどり）　郭公（くわくこう）　郭公鳥（くわくこどり）　かつぽうどり　種蒔鳥（たねまきどり）

古書校註

【[illegible]】[illegible]傳註に云、布穀一名買[illegible]。蓋其聲を聞けば、則農（一に）錢を買ひ以つて、穀を布く也。陳藏器本草に曰、布穀は鳴鳩也。（略）時珍本草に曰、布穀名多し。（略）案るに毛詩義疏に云ふ鳴鳩大さ鳩の如くにして黄色を帶ぶ。啼鳴相呼びて、相集らず。巢をなす能はず、多く樹穴及空

鵲の巢中に居る。子を哺するに朝には、上より下り、暮には下より上る也。三月穀雨(二)の後始て鳴き、夏至の後乃止む。(三)和俗是をかんこ鳥と稱す。或は又かつぽ鳥などいへり。皆其聲の挨穀又は割麥によれり。又郭公の訛語なるべし。(四)此鳥啼て麥を刈の時とす。(略)かつこう鳥又別也。

【栞草】眞淵翁は俗に云ふかんこ鳥は喚子鳥の字音より唱へ誤れるもののよしいはれたり。

【三才圖會】　加豆古宇鳥。(王字未詳疑らくは光か郭公か)　按るに狀、杜鵑及蟲喰鳥に似て、微赤色を帶び、腹白く、黑斑なきのみ。(略)仲夏の後、聲有り。秋の後、聲止む。其聲大にして、圓亮(五)。加豆古宇と曰ふが如し。每に山林に棲み、人家に近づかず。

註　(一)共に農具の名　(二)陰曆三月二十頃。(三)以下其諺の自記也。(四)麥苅の條參照。(五)圓は玉をうつ様な音色、亮は朗かな音色。

季題解説　閑古鳥、今云ふ郭公なり。形狀殆んど時鳥の如く、色彩も背灰色、腹白色にして黑き横條あり。此鳥も亦自ら巢を營まず、時鳥の如く他鳥の巢に寄託して孵化せしむるも、形は時鳥より稍大きく、鳴聲は全く相違せり。春渡來し、夏月深山の幽邃に在りて、クワツクー〳〵と鳴き甚だ寂寥を感ぜしむ、人家に近づくことなし、秋南方に去る候鳥なり。郭公鳥・かつぽう鳥とも云ふ。

實作注意　漢名布穀・鳲鳩或は諫鼓・閑子の同音を用ゐられたり。又郭公の文字時鳥にも用ゐられたれば注意すべし。

杜鵑と郭公は、姉妹鳥にして、形、色共に見分け難きも、今日にては判然區別されゐるなり。その鳴き聲、ほとゝぎすは「テツペンカケタカ」と聞え、くわうこうは「クワツクー」と鳴く。大きさも郭公は杜鵑より一まはり大なり。郭公の音より「くわつこうどり」閑古鳥となり、閑と喚より呼子鳥となれり。郭公を英國にては「カツクー」獨逸にては「ククツク」と、その鳴き聲を名稱になしをれり。古くより呼子鳥は春に分類されたるは誤なり。尙郭公をほとゝぎすと訓したるも誤なり。**參照**　時鳥(ホトトギス)　筒鳥(ツツドリ)　春—呼子鳥(ヨブコドリ)

例句

閑古鳥

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　　芭蕉　(猿蓑)

風ふかぬ森のしづくやかんこ鳥　　其角　(五元集)

僧正が谷

佗しらに貝吹く僧よかんこ鳥　　同　(同)

淋しさは聞人にこそかんこどり　　千代女　(千代尼發句集)

足あとを字にもよまれずかんこ鳥　　蕪村　(句集)

閑居鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ　　同　(同)

山人は人なりかんこどりは鳥なりけり　　同　(同)

うへ見えぬ笠置の森やかんこどり　　同　(同)

むつかしき鳩の禮義やかんこどり　同（同）
閑居鳥さくらの枝も踏で居る　同（同）
かんこどり可もなく不可もなくね哉　同（同）
飯櫃の底たゝく音やかんこ鳥　同（新選）
ごつ〳〵と僧都の咳やかんこ鳥　同（新花摘）
閑居鳥賦いさゝか白き鳥飛ぬ　同（同）
かしこにてきのふも啼ぬかんこどり　同（連句會原稿）
親もなく子もなき聲や閑古鳥　同（題苑集）
金の出る山もと遠しかんこ鳥　同（落日庵句集）
わが捨しふくべが啼かかんこ鳥　同（遺稿）
羽いろも鼠にそめつかんこどり　同（同）
閑こ鳥招けども來ず柊には　同（同）
花なくてかくれよき木やかんこ鳥　同（同）
榎から榎に飛ぶやかんこどり　同（同）
なに食うてゐるかも知らずかんこ鳥　同（同）
むら雨の音しづまればかんこどり　几董（井華集）
かんこどり樹下に虱を捫る時　同（同）
さびしさの中に聲ありかんこ鳥　召波（春泥発句集）
晝日中逢ふ人もなしかんこどり　同（同）
世をいとふ我はづかしやかんこどり　樗良（樗良発句集）
ほろ〳〵と夏の落葉やかんこ鳥　曉臺（曉臺句集）

客中

閑こどり我行かたへなきうつり　同（同）
かんこ鳥啼や花なき野にもあらず　同（同）
人見ずば汝もなくまじ閑古鳥　同（同）
胸をうつ思ひぞ旅のかんこ鳥　闌更（半化坊発句集）
大寺や京に來て啼く閑居鳥　同（同）
閑居鳥ましらも叫ぶ小雨かな　同（同）
啼並ぶ女どりいかに閑居鳥　同（同）
我に來てとまりさう也かんこ鳥　蓼太（蓼太句集）
竹青し木青しひとり閑呼鳥　同（同）
なけば啼ふたつの山のかんこ鳥　白雄（白雄句集）
白樫を花に啼かもかむこ鳥　同（同）
閑古鳥啼く林より落羽かな　同（同）
閑古鳥青葉まじりの花の中　士朗（枇杷園句集）
君が代や物見の松に閑古鳥　也有（蘿葉集）
かんこ鳥しなのゝ櫻咲きにけり　一茶（旅日記）
長居して蔦にまかれなかんこ鳥　同（七番日記）

閑古鳥

桑の木は坊主にされてかんこ鳥　一茶（九番日記）

浴室に苔がはえたり閑子鳥　巣兆（曾波可理）

ひそとして此山を啼閑こどり　蒼虬（蒼虬翁句集）

青空やそれにも啼て閑子鳥　同（同）

此里も年寄多しかん子どり　同（同）

日のさせば居らずなりけり閑子鳥　同（同）

閑子鳥啼や檜原の吹通し　同（同）

夏ならぬ峰の夕日や閑子鳥　同（同）

人の行方ちいさく成て閑子鳥　同（同）

簑川一度もこえずかんこどり　梅室（梅室家集）

富士見ゆる所や朝のかんこ鳥　乙二（をのゝえ草稿）

諫鼓鳥

俳諧師見かけて啼や諫鼓鳥　支考（蓮二吟集）

鞨鼓鳥

鞨鼓鳥木のまたよりや生れけん　蕪村（遺稿）

鳴鳩

しづかさの啼もそこなはず鳴鳩　白雄（白雄句集）

布穀

わぶの木のその花鳥や布穀　几董（井華集）

戸をさせば戸の外へ来て布穀　梅室（梅室家集）

参考　くわくこう、郭公、學名 Cuculus canorus telephonus. 鳴聲が「くーくー」と聞ゆるを以てこの名がある。一名閑古鳥。ほとゝぎすに似てゐるが遙に大きく翼長二十二センチに達し、腹部は白色を呈するを以て容易に識別される。ほとゝぎすと同様の渡り鳥で、うぐひす、おほよしきり、もず等の巣に卵を産み落し、此等の鳥に孵化させる。其他の習性もほとゝぎすに似てゐる。「ほとゝぎす」に述べた所を參照せられたい。

筒鳥（つつどり）

都々鳥（つゝどり）　ぼんぼん鳥（どり）　布穀鳥（ふふどり）

古書校註

【三才圖會】（二）狀大さ鳩の如くして黄色を帶ぶ。啼鳴相呼びて相集らず。巣を爲すこと能はず。多く樹穴及空鵲の中に居りて子を哺む。朝上より下り、暮下より上る。二月穀雨の后始めて鳴く。夏至の后乃止む。（略）（二）按る

に布穀鳥は石州藝州に多く之有り。二月より五月に至り聲あり。其鳴くや豆豆豆豆(ツツツツ)と言ふが如し　田家此鳥鳴きて即雜穀の種を下す。江東亦豆を植う。(末女末木止利(メメキ)と稱す)俗郭公を以つて杜鵑となす者は甚謬なり。

【註】(一)本草綱目の記事　(二)良安の自註也

【季題解説】呼鳥・郭公と同じ種の鳥。大さ鳩の如くなれど細形なり。羽色は殊に時鳥に似たれども、胸・腹の黒横條稍黄し。春渡來して山に棲み、秋南に去る候鳥なり。その鳴聲恰も竹筒を鳴らす如く、ぽんぽんと聞ゆ、俗に、ぽんぽん鳥とも云ふ。

【實作注意】古くは郭公と混同し、閑古鳥に用ひ、喚子鳥に同じとせり。布穀の文字も閑古鳥に使用せるあり、注意すべし。【參照】閑古鳥(……)

【例句】

筒鳥　筒鳥や晝ひそやけき女人堂　文方(同人)

都々鳥　都々鳥や木曾のあらら山岨に似て　白雄(白雄句集)

【參考】つつどり學名 Cuculus optatus optrtus. くわくこうに甚だよく似て大きさもほぼこれに次ぐを以て識別することがむづかしいが、胸腹部の黒色横斑の幅が稍廣いことと、鳴聲が「ぽんぽん」と聞えることなどで區別される「ぽんぽん鳥」とも云ふ。習性はほととぎすに同じ。

慈悲心鳥(じひしんてう)　じふいち　ぼくちどり

【季題解説】佛法僧と混同されゐる鳥。一に「じふいち」と云ふ。大きさ郭公に等しく、背面は灰黒色、胸腹は淡赤茶色を帯び、郭公等の如く黒斑點なし、尾羽灰褐色にして黒帶を有す。夏期のみ本邦にある候鳥なり。その卵は空青色、郭公の如く他鳥に寄托して孵化せしむる性あり。概ね五月半、夕闇迫る頃より定まれる所に來て鳴き九時迄に止む、曉また鳴く。五六十尺の中空に大きく圓周を描きながら「ジッシン〳〵〳〵」と尾上りに甚高く響かせて鳴き、終りに「キユー〳〵〳〵」と悲痛なる聲を出して第一節を結び、その十數音を繰り返す。幽邃の山間にては晝も尚鳴く、晴曇を問ふ所にあらず。下野國北部山間地方はその分布生息地とす。【參照】佛法僧(……)

【例句】

慈悲心鳥　慈悲心鳥谿の底なる村十戸　石宇(同人)

慈悲心鳥葉櫻にすく星まばら　同(同)

【參考】慈悲心鳥、十一、杜鵑科。學名 Hierococcyx fugax nisicolor. 郭公に似て、背面は灰黒色であるが、下面は喉と胸とが少し赤褐色を帯びてゐるので區別される。翼長は二十センチ以上に達する。南支那・フイリツピンで越冬し、春季本州・四國・九州の森林に渡來し、コルリ・オホルリ等の巣の中に夏季産卵し、この假親に雛を育てさせる。鳴聲が「十一」と聞えるので、この名があり、東北地方ではバタチドリともいはれる。

佛法僧（ぶつぽふそう）　三寶鳥（さんぽうてう）

季題解說　幽玄淸淨の山地に住んで靈鳥と呼ばる。鳩より稍小さく、嘴赤く太く短し、先黑く鉤をなす。羽毛は一體に靑く、頭・顏・尾黑く、喉に縱斑あり、腹は綠色にて美しき鳥なり。熱帶の產にて、我國には晩春初夏の候に來りて幽邃なる深山に住るものあれど、多からず。性群棲を好まず、多くは一番ひ位、喬木の洞穴などに巢くうて產卵す。その長ぜしもの秋九月頃親鳥と共に南方に去る。初夏半頃より夜半過ぎにより鳴き續け曉に先つて止む（大和寶生原山にては）。佛法僧と鳴くと傳ふれど、ブッホウ〳〵とは聞ゆ。畿內にては高野・寶生等の山深き靈地に稀に棲みて、佛、法、僧の三音に鳴くより三寶鳥の異稱あり。

實作注意　此鳥一に慈悲心鳥と稱ふるとある書あれど、慈悲心鳥は全然別鳥なり。［參照］慈悲心鳥（六月）

例句

身延山

佛法僧　佛法僧すなはちきこゆ合掌す　紫　明（ホトヽギス）

鳴き止みし佛法僧や子規　靑　峰（同　人）

參考　佛法僧、三寶鳥。佛法僧科。學名 Eurystomus orientalis calonyx. 體形やゝ郭公に似てゐるが、胸部に鷹羽狀の斑紋がなくて綠靑色であり、嘴及び脚が赤い點などで區別される。體は概ね黑色又は綠靑色の濃厚な色を呈してゐる。翼長約十九センチ、頭は比較的大で、嘴が太く彎曲してゐる。馬來地方で越冬し、春季、本州・四國・九州の深山に渡來し、夏季蕃殖し、秋には再び南方に飛去する。高山の深林中に棲んでゐて、その鳴聲が「佛、法、僧」と聞えるので、三寶鳥とも云ひ、「古來靈鳥として、尊ばれてゐるが、木曾・日光・高野山のものが特に有名である。

夜鷹（よたか）　蚊母鳥（よたか）　怪鴟（よたか）　蚊吸鳥（かすひどり）

季題解說　森林の薄暮より「ほーほーほー」と鳴き出でて淋しさを誘ふ鳥。頭平に眼大きく、嘴小なれど口大きく開く時は口元の毛逆立ちて袋に似る。羽は茶・黑・灰等の小紋樣にして、木兎に類似す。夏月にのみ我國にあり。殊に山地に多く、地上に巢を營み、晝は眠り夕方より出でて活躍し、空中の小蟲を餌とするより蚊吸鳥の名あり。蚊母鳥とも書す。

例句

夜鷹　川狩の火をとりにきし夜鷹哉　夜　臼（同　人）

練雲雀（ねりひばり）

古書校註　【年浪草】練雲雀、凡そ六月毛を易へて舊を改む（一）。俗呼びて練雲雀と

稱す。毛を易ふるの時其飛ぶ事速ならず。故に鷹を放ちて、之を捕ふ。是を雲雀鷹と謂ふ。

註（一）詳しくなる

季題解說 陰曆六月頃に至れば、雲雀は毛を易へて音を入るゝと云ふ、之を練雲雀と稱す。その頃飛揚敏捷ならず、故に鷹を放ちて之を捕へしむることあり、雲雀鷹といふ。〔季題〕夏雲雀（一）人事 雲雀鷹（秋）春 雲雀（六）

例句

練雲雀

鳴程は鳴て終にはねり雲雀　陽和（類題發句集）
夕立の晴るゝ氣色や練雲雀　錢芷（篇突）
練雲雀人の走れば走るなり　升六（俳句大觀）

參考 ひばり、雲雀科。學名 Alauda arvensis japonica. 後頭部の羽毛が少し上向きとなつて居り、眉部に黃白色の斑、體には概ね赤褐色の地に黑斑を有する。北は樺太、南は琉球まで本邦各地に極めて普通である。六七月の頃羽毛を更生す。これを練雲雀と云ひ、この時、鷹を放つて捕へる。普通のひばりの他に本邦には主として體の大きさを異にする三亞種が見出される。

夏雲雀（なつひばり）

夏の雲雀（なつのひばり）

季題解說 夏に入りて尙囀れる雲雀をいふ。〔季題〕練雲雀（夏）春 雲雀（一）

例句

夏雲雀

摂子や空に聲ある夏雲雀　蘆鉾（心一つ）

夏の雲雀

立あがる夏の雲雀や雲の峰　吟江（夢占）

老鶯（おいうぐひす）

夏鶯（なつうぐひす）　老鶯（らうあう）　亂鶯（らんあう）　狂鶯（きやうあう）　殘鶯（ざんあう）

古書校註 〔栗草〕 枕草紙 夏秋の末まで老ごゑに鳴て（一）云々 上論爲對抄（支考著）あるとき故翁（二）のものがたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯といひ病蠶といへる、此詞のおもしろければ、「鶯や竹の子藪に老をなく」「さみだれや蠶わづらふ桑の畑」かく此二句を作り侍りしが、鶯は筍藪（三）といひて、老若の意情をいひふくめたること侍らん。貞享式 老鶯、この名は全く新撰也。しかれども老鶯とはもとより漢家の詩に出で、或は狂鶯とも亂鶯ともいひ、すべて春作の物なれども、例に今式の句法より、殘鶯は俳諧にて、老鶯を夏の名となさば、鶯に老の情ありて、風雅に何のさびしみといはん。此名は發調によるべき也

註（一）夏秋の末まで老ごゑに鳴きて、虫くひなどようもあらぬ者は名をつけかへていふぞ、くちをしくくすしき心地する。（二）芭蕉。（三）筍藪は寶暦の頃に

季題解說 鶯は二三月より鳴き始め、夏に至ればその聲次第に生氣に乏し

くなり來る、これを老いたりとなし、老鶯と云ふ。春過ぎて夏に尚鳴くより、殘鶯と云ひ、夏鶯とも謂めり。

【實作注意】古き書に、老鶯とはもと漢家の詩に出で、或は狂鶯とも亂鶯ともすとあれど、こは鶯を春のものとして時期外れの意ならん、聲は夏季に入りたりとも鶯は聲の狂ひ亂るゝものにあらず。春よりは生氣乏しくはなれど、調子は寧ろ流暢となるものなり。されば鶯の附子とて、その聲を學ばしむるも仲夏よりとす。【參照】鶯の附子、鶯音を入る、春・鶯。

【例句】

老鶯

鶯や竹の子藪に老を鳴く　芭蕉（別座鋪）
山中や鶯老て小六ぶし　支考（初便）
老を鳴く鶯思へきのふけふ　路通（故人五百題）
鶯の聲にも老のいらち哉　玄武（類題發句集）
鶯や籠にうき身の老を鳴く　此行（同）
鶯や茶時の山に老を鳴く　盧元（同）
鶯や老の榮花を牡丹まで　據遠（けふの昔）
百雨の鶯もやれ老を鳴く　一茶（七番日記）
鶯や餌にほだされて老を鳴く　梅室（梅室家集）
老鶯やいよ〳〵せまる阿蘇の嶮　紫浪（ホトヽギス）

夏鶯

欄に夏うぐひすや姝鳥　浪化（浪化上人發句集）

【參考】うぐひす、學名 Horornis cantans cantans. 我國特有の種で、主として本州・四國・九州に分布す。秋冬の候には平野に現はれ、人家に近づくが、夏になれば山地に移つて、蕃殖する。老鶯といふのはこれである。雄と雌とは同じ羽色をしてゐるが、雌の方が甚だ小である。朝鮮・臺灣・伊豆七島・小笠原島に產するものは普通のうぐひすとは少しく違ふので、學者は此等をそれ〴〵異なる亞種と認めてゐる。

鶯の附子　鶯の押親

【季題解説】聲よき飼養の鶯に、未飼の鶯を傍に置き、その美音を學び習はしむることと也。俗にその雛を附子と云ひ、親を押親と云ふ。【參照】老鶯

【例句】

鶯の付子

鶯の付子も共や出養生　青々（妻木）
鶯の付子育つや小商ひ　同（同）

鶯音を入る　鶯鳴き止む

【古書校註】

【年浪草】（一）月令に曰、反舌、聲無し。○拾芥抄に曰、反舌聲無し云々。凡そ物皆陰陽の氣に感じて質を成す。其の陰類の者は陰時に宜く、陽類の

に放ち、餌食をその意に任す。之れを忘れ飼・鳥屋晴・鳥屋籠など稱ふ。羽毛は日を逐うて脱け落ち、次第に新しく生じて夏終る頃舊の如し。毛をかふる鷹・鳥屋鷹の題あり。〔參照〕羽抜鳥 鷹羽遣習 人事—雲雀鷹 秋—初鳥狩 鷹打 網掛鷹 冬—鷹

例句

鷹塒入　鷹に聲なし雨にたれたる塒筵　白雄（白雄句集）

塒鷹　塒鷹や野山の夢の閑しき　巴靜（俳句大觀）

　塒鷲や既に搏つべき羽のさま　一風（同　）

〔參考〕 たか、おほたか、鷲鷹科。學名 Astur gentilis schvedowi. 古來鷹狩に用ひられた鷹は主に本種である。額には白き眉斑と眼の後方に白斑とが明瞭に認められる。翼長約卅センチ。歐洲・亞細亞・亞弗利加の大部にも分布し、本邦では樺太より四國まで各地に分布する。夏季羽毛更生する。之を塒入と云ふ。

鷹羽遣習　鷹之學習

古書校註【年浪草】月令に曰、季夏(一)鷹の學習す。註 學習は雛數々飛ぶことを學ぶ也。

註 (一)陰曆六月

季題解說 二十四節氣小暑の第三候、この頃鷹巢立して未だ幾もなるざる時なり。頻に飛ぶことを習ふとあり。〔參照〕鷹の塒入 冬—鷹

例句

鷹羽遣習　羽づかひの人に慣れてや幹の上　徒遊（俳句大觀）

雷鳥　雷の鳥　雷雛

季題解說 高山の雪線に接せる地に棲める珍鳥。形やゝ鶉に似て、大さ雉の雌に近けれど、尾は長からず角尾なり。脚は爪根に至るまで羽毛を蔽ふ。羽色は時候によりて之を異にす。夏は一般に雌雄の鳶色斑に似て黑み多けれど、翼と胸・腹は純白なり。冬は總身殆んど純白に化して、周圍の雪に對する保護色となる。日本アルプス一帶の高峰は有名なる棲息地にして、夏日登山者の往々見かくるところ也 性殊に雛を愛すること深く、溫順にして人の近づくも容易に逃ぐることなくして、高く飛翔せず。この鳥、快晴の日には見ること少なく、風雨の襲來する前に鳴き交はし姿を見すること多きより、この名あるか。雷の鳥とも云ふ。

例句

雷鳥　雷鳥や雲かゝりきし槍の峯　青蛙（同人）

　聲を殘して雷鳥消えぬ霧の中　綠荷（同　）

参考 らいてう「きじ科」。學名 Lagopus mutus japonicus. 形はやまどりに似てゐる。冬季に至れば全身純白色に變ずるが、夏季には腹部だけ白色で、他は黒の地色に茶色の横斑がある。雌の夏羽は雄よりも更に茶色に富んでゐる。翼長約二十センチ。所謂日本アルプス連峯にのみ産し、性甚だ遲鈍なるがため、容易に捕獲され、絶滅のおそれあるを以て天然記念物として指定された。かくも遲鈍な鳥が今日まで殘つてゐたのは、宗教上の信仰に因るのである。千島及び樺太に本州産のらいてうに極めて類似せる異亞種を産す。

燕の子（つばめのこ）　乳燕（ちつばめ）　子燕（こつばめ）

季題解説 燕の雛を云ふ。燕は大抵年二回育雛す。第一は五月、第二は六月中旬より七月中旬迄を普通産卵期とし、約十四日にして孵る。俗に一番子・二番子と云ふ。「巣燕」春・燕、

例句

燕の子　花の如き口をあけたり燕の子　月斗（同人）
燕の子四匹か四匹とも叫ぶ　桂居（同）
乳燕　古巣に乳燕ないて日高し　月斗（同）

参考 つばめ、燕科。學名 Hirundo rustica gutturalis. 春季我國に渡來し、夏季營巣し、冬季には印度・馬來・濠洲等に渡る。こしあかつばめ、學名 Hirundo daurica nipalensis は前記の普通のつばめに似てゐるが、體が稍々大きく、腰に赤色の斑があるので區別される。習性等も前種とほゞ同じであるが、主として南日本に渡來する。但し前種ほどにはその數が多くない。

鳥の子（とりのこ）　子鳥（ことり）

季題解説 鳥は春巣を營み、夏雛を育つ。孵化して六十日間、親鳥の養ふ所

なり。その頃の稚鳥を云ふ。

實作注意　鳥の繁殖期は春夏の候にあたるも、俳句にては一般鳥の巣の春季にされてゐるに準じて、鳥の巣も亦春なり、從つて巣の鳥は春に屬す。また鳥・鶉の文字混用さるゝも、鳥は里鳥、鶉は山鶉なり。〔参照〕春　鳥巣(カ・ス)(ノス)

例句
鳥の子　寒しとて啞々と鳴きけり鳥の子　月斗（同人）
子鳥　親鳥子鳥雨をなげきけり　同（同）

鶉の巣（うづらのす）

季題解說　鶉の產卵期は五月下旬より八月上旬までにて、多くは高地原野の草叢の根際などに、少量の枯草などを集めたる甚だ粗雜なるもの、本場北海道にては往々草などにて蔽はれ、爲に步行者の踏みつぶすことありと聞く。〔参照〕秋―鶉(ウヅラ)　春―鳥の巣(トリノス)

例句
鶉の巣　取上てそつと戻すや鶉の巣　柳隣（別座敷）
草刈にふみ崩されな鶉の巣　吟江（行雲日記）
畑ぬしも知らぬ顏かよ鶉の巣　志巣（俳句大觀）

參考　うづら Coturnix Coturnix japonica. 雉科。夏季は大抵東北地方・北海道に棲み、叢間に巣を營みて蕃殖し、冬季となれば南日本に渡來して越年する。雉科の鳥類中、最も小、翼長十センチに過ぎぬ。夏季の生殖季節には、雄は腮及び喉に美しい赤栗色を呈する。卵及び肉甚だ美味なるを以て飼鳥として有名である。

葭切（よしきり）

剖葦（よしきり）　蘆虎（よしきり）　葦原雀（よしはらすゞめ）　葭雀（よしすゞめ）　葦鳥（よしどり）　行々子（ぎやうぎやうし）　剖葦鳥（ぎやうぎやうし）　蘆鶯（よしうぐひす）
大葭切（おほよしきり）　小葭切（こよしきり）

古書校註　【三才圖會】蘆虎（俗名）。蘆原雀・葭剖・蘆鶯（以上俗稱）。（略）葦鳥（俗云盧原雀）狀倭の鶯に似て（一）、大さ雀の如し。青灰斑色、長尾。田澤蘆葦の中にありて好て葦の中の蟲を食す。其鳴くや喧しく、聲高亮也。天晴れ風靜かなれば則愈群りて鳴く。蒿鵲鵐（一名巧婦鳥）は剖葦と一種ならず。本草及倭名抄一種となすは非也。

註（一）形が日本のうぐひすと似てゐる。

季題解說　水邊の葦原に棲む候鳥の小禽、大葦雀を云ふ。形鶯に似て大きく、色も亦鶯に近く脊・翼・尾は褐色を帶ぶ。尾は稍長し。初夏湖沼河畔等の葦原に巢を營み、葦棲するを常とす。五六月、その繁殖期に入れば、終日囀り續け、夜に入りても鳴く。其聲ゲゲシゲゲシと甲高く續けて、甚喧噪なるより、行々子と云はる。また葦原雀・葭雀の稱あり。

【作法注意】葭切の語は、この鳥嘴にて巧に葭の莖を割き蟲を捕ふるより云へるにて、剖葦の字を擬む、また同じく葭切と呼ばるゝものに、小葦雀あれど、之は高原に棲み、習性も異なれるものなり。

【例句】

葭切

よしきりや漸暮れて須磨の浦　蓼太（蓼太句集）
葭きりや池さへ茂る下屋敷　公曳（古今句鑑）
葭切やなれて蘆屋の人の耳　呉仙（同）
葭切や拍子そろへて舟大工　晋窓（同）
よし切や木庄飾へ御用船　沾荻（吐屑庵句集）
葭きりのそは／＼と夜を明しけり　水路（鶉隱筆）
夜も鳴いて葭切いつを眠るなる　圭史（同人）
能なしの寐むたし我をぎやう／＼し　芭蕉（嵯峨日記）

行々子

言ひまけて一羽は立か行々子　也有（蘿葉集）
ぎやう／＼し日高に著て伏見哉　召波（春泥發句集）
隱家は市こそよけれ行々子　蓼太（蓼太句集）
行々子それきりにして置まいか　一茶（七番日記）
行々子大河はしんと流れけり　同（同）
いさかひは川向ひなり行々子　兆而（同）
葭の穂の孕みてせはし行々子　左次（同）
行々子鳴くや艫の音馬の鈴　露川（類題發句集）
五月雨や野渡人なくて行々子　太無（太無句集）
汝が父も經よむ鳥か行々子　木奴（心一つ）
啼返す入江の汐や行々子　青橋（同）
石山の手にとる如し行々子　花扇（同）
泥川も汐さし時か行々子　吟江（夢占）
人絶のせぬ渉し場や行々子　工見（鶉立）
船唄の聲遙かなり行々子　九雪（月影塚）
鳴そめて鳴かぬ日淋し行々子　南峰（鶴音）
見たやらでまだ見ぬ鳥や行々子　梅室（梅室家集）

葭雀

葭雀や曉けて一二のみをつくし　几董（井華集）
葭雀や晝一しきり肘枕　蓼太（蓼太句集）
トロッコの過ぎて靜やよし雀　盧子（ホトヽギス）
鍋のもの水に捨てたりよし雀　同（同）

【參考】よしきり、おほよしきり、鶯科、學名 Acrocephalus arundinaceus orientalis. 翼長九センチに達す、鶯科中の最大種、背面は淡褐色、その上方少しく深綠色を帶ぶ、眉斑に不判明なる黄白色の条がある、翼の下面は概ね白色、尾は長く約八センチ、印度・フィリッピン・濠洲等にて越冬し、夏季は北海道より臺灣に至る本邦各地に於ける沼澤・河川の水邊

葦の繁茂する處に群棲し、主として昆蟲を捕食する。本種の約二分の一位の大きさに過ぎぬこよしきり Acrocephalus bistrigiceps は羽毛も習性も本種に似てゐるが本種ほどには多くない。

翡翠　川蟬　鴗　魚狗　水狗　翠拏　魚虎　魚師　鴗天狗　翡翠

かはせび　そび　そに　そにどり

古書校註

【三才圖會】大さ燕の如し。(略)性よく水の上にて魚を取る。(略)故に其名を得。(略)翡翠、鴗の大なる者。

【栞草】此鳥、魚を害する故に、鴗天狗・水狗・魚虎・魚師等の名ある也。

季題解說　羽色翡翠石に似て美はしき鳥。古くは、そび。別の名、せうびん。俗に、ひすゐとも云へり。雀より稍大きく、頭に靑斑ありて、背は綠靑、翅は淺黃を雜ふ。腹赤褐にして、尾・脚短かけれど、嘴は軀に比較して甚長大なり。常に靜かなる河邊に棲みて、水をも潜り、魚の浮ぶを窺ひて捕ること巧みなり。

實作注意　四季を通じて見る鳥なれど、夏期最も活躍す。溪谷綠陰の杭等にありて、水面を凝視し、魚の影を見れば電光の如く啄み去る敏捷はこの鳥の持つ特性なり。魚狗・川蟬とも書す。又同種に、やませみ・みやませうびんあれど羽毛の色を異にす。參照　深山魚狗

例句

翡翠

かはせみや羽をよそほふ水鏡　露川（類題發句集）
翡翠の幾瀨かけてや淺みどり　蘇守（桃首途）
翡翠や水音さがす岨づたひ　蓑里（落首途）
翡翠の筑波おろしに吹るゝ歟　白雄（白雄句集）
かはせみや繪の具を流すおのが影　馬光（馬光發句集）
翡翠や草木動きつゝ雨到る　飛雨（同人）
翡翠の魚を覗ふ柳かな　子現（全集）
翡翠の去つて柳の夕日かな　同（同）
水馴棹かすめて飛びし翡翠かな　莉花女（ホトヽギス）

川蟬

川蟬の風かをるかとおもひけり　蓼太（蓼太句集）
川せみのねらひ誤る濁かな　子規（全集）
川せみの魚銜み去る夕日かな　同（同）

參考者　かはせみ　翡翠科。學名 Alcedo atthis japonica. 一名せうびん。頭部は暗綠色で、鮮明な靑い細斑を混じ、背面は尾に至るまで、眼のめざめるやうな空色。かやうな色彩をしてゐるので「ひすゐ」とも稱へられる。水邊の樹上に棲んでゐて、水中に餌を探る。樺太から琉球まで分布して居り、臺灣には稍小なる別の亞種を產する。

深山魚狗(みやませうびん)　翡翠(やませうびん)　赤魚狗(あかせうびん)　水戀鳥(みづこひどり)

季題解説 深山の溪流に棲む鳥。普通の魚狗より大きく嘴太く長く鮮明なる朱色。頭より背一體に暗赤色、腰の邊に藍色の羽あり、腹は褐色なり。赤魚狗ともいふ。

實作注意 俗にこの鳥水を戀ひ飲まんとて己が影に驚くといふより、水戀鳥の名あり、伊勢集に「夏の日の燃ゆるわが身のわびしさに水戀鳥の音をのみぞ鳴く」とあり。[illegible] 翡翠參照。

鷭(ばん)　方目鳥(ばん)　田鷄(ばん)　河烏(かはがらす)　護田鳥(やすめどり)　梅首鷄(ばいしゆけい)　小鷭(こばん)　大鷭(おほばん)

古書校註

【三才圖會】按るに鷭、大さ鳩の如く、黒色。短き尾、尖りたる嘴、本紅末黄。脚長くして正青。常に田澤に鳴く。人之を養ふも亦能馴れて、卵を伏す。其雛愛すべし。夏月鷭を以つて上饌(一)となす。味美なり。大鷭は形鷭に似て大なり。(略)俗に大鷭を以つて河鵜となす。(河鵜は別に一種有り)

【遠州府志】鷭、一名梅首鷄。其頂赤毛斑あり、故に之を稱す。偏黒[illegible]なる者、其味麁惡也。淡黒なる者其味佳となす。是れ初夏の珍味也。

【年浪草】爾雅集註に曰、鷭は即ち護田鳥也。人を見れば輙ち鳴く。主の官を守るに似たることあり、故に以て之を名く。

註 (一) 上等の食用　(二) [illegible]

季題解説 水邊の鳥。小鷭・大鷭の二種あり。普通に鷭と云へるは小鷭なり。形水雞に似て稍々大きく、背に暗緑褐色の黒、頭・頸・腹等に灰色。嘴扁く眼の上の肉冠と共に鮮紅の如く紅し。脚は淡緑、趾大きく發達して蹼なく、歩行速かにして、夏期沼澤の邊に棲息す。大鷭は形大きく、嘴白く、鼻の上に白き肉冠あり、脚黒、小鷭より[illegible]かし。俗に河烏と云ふ。

實作注意 やすめ鳥の異名ありとあれど、護田鳥は一に[illegible]五位(ゴイ)の古名なり。

例句

鷭一羽鷭[illegible]にもまれていく[illegible]ぞ　白雄（俳句大觀）

鷭鳴くや西日はづるゝ菅の中　雅窓（同　）
鳴き立し鷭の羽音や夜の舟　蛙三（類題發句集）
鷭鳴くや藺の伸び立てる田の夕　苔石（同　人）
鷭鳴きて葭の茂みに明けそめぬ　不田（同　）
鷭鳴くや曉の忍沼ひろ／＼と　秀峰（ホトヽギス）
鷭とぶや蓮見の舟のゆくかたを　櫻坡子（同　）

【參考】鷭　秧鷄科。學名 Gallinula chloropus parvifrons. 頭と頸は灰黑色、脊から下は深綠色を帶びた褐色。水泳に巧な鳥。本邦內に廣く分布し、水邊に近く棲息する。

おほばん Fulica atra atra は普通の「ばん」よりも大きく黑色であるので容易に區別される。おほばんも本邦內に廣く分布してゐるが、普通の「ばん」程にはその數が多くない。

水雞（くひな）

夏水雞（なつくひな）　緋水雞（ひくひな）　姬秧鷄（ひめくひな）　秧雞（あうけい）

古書校註

【三才圖會】竈鳥。（略）夜鳴て、旦に達す。聲人の戶を敲くが如し。蓋し水邊にあり、晨を告ぐ（一）、故に水雞と名く。

【滑稽雜談】時珍本草に曰、（略）夏至の後夜鳴き、秋の夜即止む。

註（一）朝を知らせる。

季題解說　水邊の鳥。數種あれど叩くと詠はるゝは緋水雞なり。鷭に似て小さく、嘴細く褐色、尾短かし。脚はよく發達して指長く、背は橄欖褐色、腹胸は赤褐色なり。春渡來して、初夏の頃水邊の叢等に巢を營み、繁殖して秋去る候鳥なり。河邊・湖沼・水田等に居り、容易に飛翔せざれども、走ること早し。一に夏水雞とも云ふ。

實作注意　緋水雞は六月頃交尾期に際し、雄はカタカタと連續して聞ゆる可憐の鳴音を發す。夕より朝にかけて聞くこと多し。その聲恰も戶を叩くに似たるより、古來水雞の鳴音にのみ叩くと云へり。秧雞とも書く。秧時の意より來りしなり。【參照】人事—水雞笛（クヒナブエ）

例句

水雞

明けながら月見る窓の水雞哉　宗養（大發句帳）
烏羽玉の夜たゞ音する水雞哉　宗長（宇津山記）
　山田氏の亭にとめられて
水雞鳴くと人のいへばやさや泊り　芭蕉（有磯海）
　大津湖仙亭
此宿は水雞も知らぬ扉かな　同（笈日記）
　白川に住、何云に文をつかはすはしに
關守の宿を水雞にとはふもの　同（伊達衣）
水雞鳴く夜半に遊行のつとめ哉　其角（五元集拾遺）

自鳴

夜あるきを母に寢ざりける水鷄哉　同（同）

雞もはら〳〵時か水鷄なく　去來（去來發句集）

御茶屋にて

おのが音の尼や水鷄の磯の闇　丈草（丈草發句集）

散頭の二葉に見ゆる水鷄哉　浪化（浪化上人發句集）

くひななく夜や明いに茗荷たけ　北枝（北枝發句集）

水音は水にもどりて水鷄かな　千代女（千代尼發句集）

油斷して水鷄に扉たゝかるゝな　支考（蓮二吟集）

聞き居れば叩くでもなき水鷄哉　野水（曠野）

挑燈を消せと御意ある水鷄哉　蕪村（夏より）

關の戸に水鷄のそら音なかりけり　同（句集）

村居

しらで猶餘所に聞きなす水鷄かな　太祇（太祇句選）

かしこくも旅人は來で水鷄哉　几董（井華集）

日も暮ぬ人もかへりぬ水鷄なく　召波（春泥發句集）

月の出に川筋白しくひな鳴　同（同）

めづらしや水鷄の遠音竹をうつ　樗良（樗良發句集）

くひな啼や幽になりし我心　同（同）

夜行

水鷄なけ夜の市人酒の醉　同（同）

水鷄啼宿とこたへたり姿もの　曉臺（曉臺句集）

我庵の澤瀉さきぬくひななけ　同（同）

曙は水門叩く水鷄かな　闌更（半化坊句集）

溜池や漬木のうへに水鷄鳴　同（同）

强く降る雨に水鷄の遠音哉　同（同）

日やけ田に水門たゝく水鷄哉　蓼太（蓼太句集）

早田刈て水鷄に遠き宿竈哉　同（同）

木寺を藪から叩く水鷄哉　同（同）

草しげみくひなの道に鎌入れん　白雄（白雄句集）

田面の闇をめぐるや鳴く水鷄　同（同）

蓋もたゝく我川しらで水鷄哉　也有（蘿葉集）

待人ももたでたしかに水鷄かな　同（同）

人の門たゝけば逃るくひなかな　同（同）

妹におくれて

水鷄とはいさめながらもなく音哉　同（同）

水鷄啼や風の柴門のたて忘　同（蘿の落葉）

鳴く水鷄うき身隱でありしとな　一茶（七番日記）

雨ながら月夜になりぬ鳴水鷄　成美（杉柱）

水鷄

明果て水雞出て行藪根哉　成美（いかに〳〵）
宵々に米搗く寺の水雞哉　同（手習）
霖雨や水雞追行淀の犬　樗堂（萍窓集）
病中や旅寐の水雞蚊屋に聞く　同（同）
笈佛の戸をたゝで聞水雞哉　巢兆（曾波可理）
こゝゆかむ水雞の小田といふ處　士朗（枇杷園句集）
壁の穴ことしも水雞聞ゆなり　蒼虬（蒼虬翁句集）
草の戸の腰かけ客や啼くひな　同（同）
草の戸の油をへらす水雞かな　同（同）
草むらに家藏見えて啼水雞　同（同）
水門の内から叩く水雞かな　梅室（梅室家集）
朝見れば番ひで走る水雞哉　同（同）
三日月の細きをたゝく水雞哉　李中（東華）
曙のさらしを走る水雞哉　夾始（同）
雷をしづめてたゝく水雞哉　露川（類題發句集）
よひ〳〵の待つ身につらき水雞哉　遊女若絲（同）
夕晴に虹たつ川の水雞哉　江風（西華）
一寐覺藻くさき宿や鳴水雞　太無（太無句集）
鳴水雞走る水雞や長堤　同（同）
水雞なく藪より奥や燈の明り　白歌（皮籠摺）
　佐屋
水際や水雞晝行日の曇り　都貢（幣袋）
池近し水雞の叩く音にさへ　操舟（古今句鑑）
水雞聞くや槇の古戸の下屋敷　素外（同）
庵室の木魚につるゝ水雞哉　樂水（俳諧新選）
菅刈の水雞追はへて轉にける　白圖（堅並）
白壁のお城をたゝく水雞かな　馬泉（桃首途）
夜遊の尻もすはらぬ水雞哉　荷丁（同）
水雞やんで山僧門を叩きけり　子規（全集）
狸淺く藺生ふるところ水雞鳴く　同（同）
狸來ずなりぬ水雞や戸をたゝく　同（同）
まらうどの去りたる後の水雞かな　小草女（ホトヽギス）

【參考】くひな　秧鷄科。學名 Rallus aquaticus indicus. 俗に水鷄の字を當てるが、水鷄はトラガヘルと稱せられる、支那・臺灣等に分布する大形の蛙に當つべきもので、明に誤用である。頭は黑く、少しく茶褐色の羽毛を混じてゐる。翼は黑褐色。體が扁平で、嘴と頸とはやゝ長く、脚はかなり長い。濕つた土地・水田等に棲み、冬季には印度・ビルマ等に渡る。

青鷺　青鷺のぼとゝぬれゐる雨中哉　月斗（同人）

【参照考】あをさぎ、蒼鷺、鷺科。學名 Ardea cinerea jouyi. 鷺の中、大なるもので、頭は白いが、頭の上と、後頭部とから生えてゐる、長い「みのげ」と稱する飾羽は青黑色。脚の下半は暗緑色、本邦に廣く分布してゐる。

都鳥（みやこどり）　都鴫（みやこしぎ）　ゆりかもめ

【古書校註】【三才圖會】都鳥大さ鷗鵜の如し。黑色。唯嘴と脚と正赤。關東に多く之あり。畿内に未之あらず。人亦之を食はず。業平（一）都鳥を隅田川に視るの語あり。著聞集（二）に云、建長六年二月都鳥を京師に獻ずる者あり、因りて叡覽し給ふ。宮女歌あり　すみだ川すむとし聞し都鳥けふは雲井の上に見る哉。

註（一）伊勢物語に出づ。「名にし負はばいざ事とはん都鳥我思ふ人はありやなしやと」。（二）古今著聞集參照。

【季題解説】海濱・河邊に棲む涉禽。鳩よりも稍大きく、頭より背は黑く、胸・腹共に白し、翼にも白き部分あり。嘴長く淡紅なり。介類と蟲類を食とす。都鴫とも云ふ。

【實作注意】四時我國に稀ならざるも、俳句にては夏季とす。又東京にて隅田川に浮べる一種の鷗を都鳥と呼ぶことあるも誤なり。【参照】夏鴨（なつかも）　通し鴨（とほしかも）

【例句】

都鳥　家に答ふ聲とも聞けり都鳥　曉臺（曉臺句集）

都鳥の我を呼ぶかも松の奥　同（同）

【参照考】都鳥、ゆりかもめ、かもめ科。學名 Larus ridibundus ridibundus.　夏季樺太及び千島で蕃殖し、冬季はそれより南の河川、湖沼に渡來する。嘴と脚とが美しき暗赤色を呈する小形の「かもめ」で、翼長約三十センチ。體色概ね白色であるが、翼の上羽は銀灰色である。夏季には頭部は黑褐色となる。有名な隅田川の都鳥は、冬季に渡來した本種なのである。

鵜（う）

水烏（みづがらす）　島津鳥（しまつどり）　荒鵜（あらう）　つかれ鵜　海鵜（うみう）　川鵜（かはう）　島津鵜（しまつう）　千島鵜（ちしまう）　姫鵜（ひめう）　鸕鷀（ろじ）

【古書校註】【三才圖會】本草綱目、鸕鷀處々水鄕に之あり。鴨に似て、小さく色黑し。（略）漁舟往々數十をつなぎ、其をして魚を捕らしむ。

【滑稽雜談】和に鵜と稱する者は鸕鷀也。又嶋津鳥とも歌によめり。又眞

鳥と云も鵜也と八雲抄袖中抄に侍る。此者連俳に鵜とばかりいへば雜也。鵜飼の心にて、鵜川、鵜舟、鵜繩など、(一)その漁獵の氣味あるは皆夏なり。

註 (一) 意味に漁獵の意を含んでゐるのは夏の季になるのである。

季題解說 昔より鵜飼に使ふ水鳥。形烏に似て大きく、全身黑く、肩・背は淡茶色を帶ぶ、頸長く嘴長くして、末少し曲れり。顏に毛のなき部分あり。水掻甚だ廣く、よく水を潜りて魚を捕ること巧なるより、飼ひ慣らして鵜飼ふ。長良川の鵜飼に用ゐるは、島津鵜とて普通のものより稍大きく、肩の雙翼に少し綠の光澤あり、尾張知多半島の產に限るといふ。外に千鳥鵜・姬鵜等の種類あり。荒鵜は捕獲して未だ馴れざる生の鵜をさして云ふ。

實作注意 島津鳥は鵜の古名なれど、一に鵜の枕言葉として用ゐらる。

參照 人事 鵜飼し夏

例句

鵜

鵜と共に心は水をくゞり行　鬼貫　(鬼貫句選)
鵜につれて一里は來たり岡の松　其角　(五元集)
首たてゝ鵜のむれのぼる早瀨哉　浪化　(泊船集)
しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し　蕪村　(句集)
鵜の嘴に魚とりなほす早瀨かな　白雄　(白雄句集)
草の雨おのが家とや鵜のもどる　一茶　(旅日記)
家近く鵜の聲戾る夜明哉　闌更　(分類俳句集)
月代や身ぶるひしたる鵜の雫　吟江　(心の花)
鵜は黑しされば鵜飼が闇の程　蒼狐　(古今句鑑)

秋田港に假寢する頃
雄鹿山も鵜も見ずなりぬ雨つゞき　乙二　(をのゝえ草稿)

つかれ鵜

疲れ鵜の叱られて又入りにけり　一茶　(句帖)
勞れ鵜や雫ながらに山を見る　成美　(いかにく)
月出て歸る新鵜のつかれ哉　蕪風　(椿花)

荒鵜

薄月やあら鵜休むる宵の程　吟江　(心の花)

參考 鵜、本邦に廣く分布する黑く大なる鳥であるが、喉及び顏は皮膚が裸出してゐる。生殖季節となると、頭及び頸の大部分に白く細長い羽毛が生え、脇腹にも白毛が生える。鵜飼で甚だ有名な鳥。鵜といふ名で呼ばれる鳥は動物學上、うみう Phalacrocorax carbo sinensis と、かはう Phalacrocorax capillatus との二種を含んでゐる。この兩種は極めて似てゐる。

通し鴨（とほしがも）

實作注意 【年浪草】大和本草に曰、日光山中禪寺の湖に眞鳧すむ。甚小也。黑鳧二種あり。淡黑、常に居て此に不レ歸と云ふ。是卽通し鴨なり。凡そ水鳥秋

冬渡る者は、春月必ず古巣に歸る（二）。其の中稀に春夏も亦池中に常居する者あり。（略）是を通鴨と云ふ。

註（二）故郷の古巣に歸る、卽ち北に去るを云ふ。

季題解説 鴨類は春北地に去る渡鳥なれども、稀には殘りて、夏も池沼に棲むものあり。蘆荻の間に巣を營み雛を育つ。之れを通し鴨と云ふ。

實作注意 また一種夏鴨とて四季必ず常住のものもあれど通し鴨の意ならず。［參照］夏鴨　夏の鴨　冬―鴨

例句

通し鴨

暮すには一人がましか通し鴨　一茶（新集）
まつてゐる妻子もないか通し鴨　同（同）
しづかさや山陰にして通し鴨　青々（妻木）
船倉の陰によりけり通し鴨　月斗（同人）
胸張つて蘆出て來り通し鴨　胡月（同）

夏鴨（なつかも）　黑鴨　輕鴨

古書校註 【三才圖會】輕鳧、全體黑色。頸後青を帶び、光あり。眼上淡白條あり。嘴黑くして、喙の端赤く、腹淡赤白色にして、黑き縱の紋一條あり。

【年浪草】仙覺萬葉抄に曰、黑鴨一名かると云は鴨の類也。田舍人は黑鴨と云ふ。

季題解説 鴨の變種輕鴨のこと、俗に黑鴨と云ふ。形眞鴨の如くなれど、羽色黑味がちにて派手ならず。頸の後青黑く光り、胸は淡茶、腹は淡紅を帶び黑き斑ありて、他の鴨類の如く、雌雄著しく色彩を異にせず。四季共に沼河にありて、初夏の頃水邊に巣を營みて産卵す。夏鴨と稱す。［參照］通し鴨　夏の鴨　冬―鴨

例句

黑鴨

黑鴨や飛んで身を啼く薄月夜　沾德（分類俳句集）

參考 夏鴨、此の鴨は他の鴨類が春北に歸るに反し、本邦全部で蕃殖する。よつて夏鴨（一名輕鴨）といふ。普通の鴨卽ちマガモの雌に似て、頭部が綠色の金屬光澤を呈せず、顏及び喉が黄白色である。學名 Polionetta paecilorhyncha zonorhyncha.

輕鳧の子（かるのこ）　鴨の子　かりの子　輕鴨の子

古書校註 【御傘】古歌にかるのこ共、かりの子ともよめるは、鴈にはあらず、鴨の事を云ふ。

【年浪草】本朝食鑑に曰・車鴨・輕鴨・蘆鴨此三・四五月に至るまで尙去

らず。（略）常に野水田溝に棲む。（略）凡そ鴨の子初生其毛黄白色、卵を出で能く水上に浮く。（略）○庖厨本艸に曰、倭名抄に鴨和名かも。野なるを鳧といひ、家なるを鶩と云ふと。古へは鴨と鶩（一）とわかちなく倶にかもといひけるとなむ。

註（一）あひる。

季題解説 輕鴨の子を云ふ。輕鴨單にかるとも云ひ、初夏の頃深田或は沼河の邊に巣を營み、雛を養ふ

實作注意 今いふかるの子は、輕鳧の子と限るにあらず、鴨類の子を云へるなり。【季題】夏鴨など

例句

輕鳧の子　かるの子や首さし出して浮藻草　惟然（惟然坊句集）
萍にかるの子遊ぶ汀かな　百明（故人五百題）

鴨の子　鴨の子や袋に入れし眞菰刈　邑姿（卵辰集）
鴨の子の蘆根はなれぬ暑さ哉　桐奚（小文庫）
鴨の子のひまなく沈む日暮かな　孤佛（佐渡日記）
鴨の子や驚く蘆の葉分船　蓼太（蓼太句集）
鴨の子の生れ立から月夜哉　芝之（俳句大觀）

鳧（けり）　水札（けり）　鳧の子（けりのこ）　計里の子（けりのこ）

季題解説 水邊に居て千鳥の族。形ほぼ鶏に似て稍大きく、頭と背は灰色、胸と腹は白色、翅には黒白交ふ。嘴黄に先黒し、脚も亦黄にして稍長く、常に水田・沼澤に在りて、小魚を捕へて食とす。飛翔する時ケリケリと鳴く。

實作注意 鳧はけりと讀めど、鳧にかもと訓ずる方正しとされ、重に水札（けり）の字を用ふ。

例句

水札　水札鳴や懸浪したる岩の上　去来（去来發句集）
水札ないて日影ちろつく流哉　一泉（其袋）
水札おろす山境や薄けぶり　行露（焦尾琴）
水札の子の淺田にわたる夕哉　曉臺（分類發句集）

鳧の子　鳧の子を野水にうつす植女哉　白雄（白雄句集）

水鳥の巣（みづとりのす）　鳰の浮巣（にほのうきす）　鳰の巣（にほのす）　鳰鳥の巣（にほどりのす）　浮巣（うきす）　鸊鷉の巣（かいつぶりのす）　鴨の巣（かるのす）

古書校註 【[illegible]】本綱、菰蒲の集解に曰、菰の葉、蒲草に類して叢茂す。夏月水鳥其中に宿して以て乳す。（略）○浮巣。大和本草に曰、鸊（二）。字彙に云、好て水に入りて食ふ。鳧に似たり。小也。（略）俗に鳰の字（三）を用ふ。

萬葉以下の古歌に鳰鳥と讀る是也。水上に浮巣を掛く。風に隨て漾ふ。

註（一）藻に似た沼澤地に生える草本。（二）（三）共に同一鳥を呼ぶ名にして、鴨に似て小さき水鳥。鳰は水に入る鳥の意なり。

季題解說　水鳥の類は夏月、菰・蒲・葦等の繁茂せる間に巢を營み、卵を抱きて雛を育つ。多くは水に從ひて上下する如く作る。殊に鳰の如きは全く浮游せるものあり。浮巢といふ。

實作注意　單に鳰の巢或は鴨の巢と詠みて差支なし。

例句

水鳥の巢
鳰の浮巢
鳰の巢

水鳥の巢をゆり出す小舟かな　疎松（皮籠摺）
內川や鳰の浮巢になく蛙　其角（五元集拾遺）
鳰の巢の浮み出けり宵月夜　成美（いかに〳〵）
鳰の巢の一本草をたのみ哉　一茶（七番日記）
鳰の巢を抱いて咲くや菱の花　遲望（類題發句集）
鳰の巢に親鳥もどるおもみ哉　吟江（夢占）
鳰の巢に鳰のとまりて眠りけり　楞堂（萍窓集）
ゆられ〳〵終には鳰も巢立ちけり　闌更（半化坊發句集）

浮巢

鳰立や浮巢を波の越る時　同（分類俳句集）
つゝかれる泥魚のよる浮巢哉　同（同）
流れくるあくたに開く浮巢哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
親鳥の羽風にありく浮巢哉　豆苗（しをり萩）
流さるゝ浮巢に鳰の聲悲し　子規（全集）
古沼の香につゝまれて浮巢見る　野風呂（ホトヽギス）

鴨の巢

鴨の巢や不二の上こぐ諏訪の池　素堂（とく〳〵句合）
鴨の巢の見えたりあるはかくれたり　路通（曠野）

參考　水鳥の巢　水鳥類が、葦・蒲などの繁茂してゐる水邊に巢を營んで雛を育てるが、其巢が輕くて水量が增すと浮び上る。よつてこれを浮巢といふ。

夏の鴛鴦（なつのをし）　鴛鴦涼し（をしすゞし）

古書校註　【年浪草】　水鳥の類總て冬多し。（略）鴛鴦鳬の類、假に夏季と爲すときは、則ち涼しと曰ふ。是れ連誹句作の通法なり。

季題解說　鴛鴦は冬季の候鳥なり。されど夏も尙居るものには「涼し」の詞を添へて夏季の題とす。〔參照〕夏の鴨（ナツノカモ）　冬―鴛鴦（ヲシドリ）

例句

鴛鴦涼し

鷺に遠く細雨の中の鴛鴦涼し　月斗（同人）
をし涼し大雷驟雨過ぎて後　同（同）
波のあるあたりに居りて鴛鴦涼し　眉峰（ホトヽギス）

【參考】をしどり、學名 Aix galericulata. 夏季となれば、雄は羽毛を更生して、雌と殆ど同様となり、頭上及び頸は灰黑色、背面は深緑褐色を呈し、如何にも涼しげなる様となる。

夏の鴨（なつのかも）　鴨涼し（かもすゞし）

【古書校註】【栞草】水鳥の類、すべて冬多し。故に和歌及び連俳にて、冬季とす。されども鴛鴨の類涼しと云ふときは、夏季とす。

【季題解說】鴛鴦と同じく冬季の候鳥なれども、特に「涼し」といふ語を添へて夏季の題とす。【參照】通鴨（トホシカモ）　夏鴨（ナツカモ）　夏の鴛鴦（ナツノヲシ）　冬ーー鴨（カモ）

夏蠶（なつご）　二番蠶（にばんがひこ）

【古書校註】【滑稽雜談】俗に云ふ夏蠶二番蠶と云ふ者なり。和におゐても暖國なんどはふたゝび蠶養三度絲取る所も侍る也。

【季題解說】初夏の頃より飼ひ始むる蠶をいふ。春蠶の卵の孵りたるものにして、起眠すること四度にて繭を作ること、春のものに同じ。されどその飼養日數短かし。絲量少なく、質また劣れり。【參照】人事ー蠶の上簇（カヒコノアガリ）　春ーー蠶（カヒコ）

【例句】
夏蠶　天の川夏蠶の窗に見ゆる哉　月斗（同人）
歸省子が桑摘まさるゝ夏蠶哉　同（同）

繭（まゆ）　蠶繭

【古書校註】【三才圖會】五月の初め將に繭を作らんとする時、葭簾を用ひて棚（一）となし之に放つ。桑を食はずして、身白色透明なる者を擇び取りて以つて横の中に投ず、先づ稈（二）或は枯菁草を以て縱にいれて、蠶の寓居とす。
【滑稽雜談】和にある所の蠶も、夏月に至りて蛹（三）となる。其形甕に似たり。蛹とは巢を造るなり。是を湯に煮て蠶を殺し、其蛹より絲を取る。歐に眉蠶とよむ。

註（一）蠶箔　（二）むぎわら　（三）繭の意

【季題解說】蠶の繭を云ふ。蠶は發生より四眠四起して生長し、終に口より絲を吐きて繭をつくる、形俵に似て長さ大抵七八分、色白きを普通とすれど黄なるあり、黄繭と云ふ。

【實作注意】蠶に繭を作らしめたるを、蠶のー繭ーーと云ひ、蛹の作りたる蠶に蛹となり、更に蛾となりて繭を破りて出つ、之を穿繭（　）と云ひ何れ

も別項にあり。〔參照〕蠶蛾ガサン　人事―蘭ユマ　春―蠶カヒコ

【例句】

[illegible]問屋山と積む[illegible]匂ふな[illegible]　月斗（[illegible]人）
行き違ふ蘭の車や鹿島道　同（同）
いと薄き蘭をいとなむあはれさよ　虚子（虚子句集）

蠶蛾（さんが）

ひびる　蠶の蝶　蘭の蝶　蘭の蛾　蘭蝶

【季題解説】 蠶の蛹の羽化したるもの。蘭の一方を破りて出づ、形燈蛾に似て、淺褐色なり。雄は痩せて疾走し、雌は肥大にして動かず。蠶の蝶ともいひ、蘭の蝶ともいふ。〔參照〕蘭ユマ

【例句】

蠶の蝶　衣川蠶の蝶の流れけり　大江丸（遺草）
蘭の蝶　蘭の蝶放つ家あり薄月夜　青々（妻木）

天蠶（てぐすむし）

白髮太郎　樟蠶蛾　樟蠶　すかし俵

【季題解説】 その腹中より釣絲のてぐすを取る蟲。栗・胡桃・椨・樟・枋・櫟等の木に生じ、形芋蟲に似て三寸許、綠色に青線あり、背に一面白毛あるより白髮太郎とも云ふ。蠶の如く起眠をなし、毛を庇し、網の如き蘭を營み、その中に居りて蛹となる。その蘭を俗にすかし俵と云ふ。絲に紡ぎて用ゆ。後羽化して大形の蛾となる、翅開けば四寸大、前に半圓後に蛇の目の斑あり。

蟬（せみ）

せび　螓　齊女　初蟬　蟬の發音　蟬のもろ聲
唖蟬　瘖蟬　夕蟬　夜蟬　山蟬　小蟬　蟬時雨　蟬の雨
い蟬　夏蟬　油蟬　みん〳〵蟬　みん〳〵　糠蟬　蚱蟬　馬蟬　にいに　熊蟬

【古書校註】

【滑稽雜談】 豳詩に云、五月鳴く蜩あり。月令に云、仲夏蟬始めて鳴く。（略）時珍本草に云、蚱蟬、一名蜩、一名齊女。（略）崔豹が古今註に云、齊王后、王を怨みて死す、化して蟬となる、故に蟬を齊女と名く。此謬説也。按るに詩人莊姜を美て、（一）齊侯の子、螓首、蛾眉となす。螓亦蟬の名也。人其名を隱して、呼て、齊女となす。義蓋此に取る。其品甚多し。蟬は諸蜩の總名也。（略）夏月始て鳴き、大にして色黑き者は蚱蟬也。又蝒音綿と曰ひ馬蜩と曲ふ。（略）（二）蟬小にして、色青赤の者寒蟬と曰ひ、寒螿と曰ひ、蜺と曰ふ。未秋風を得ずば則瘖して（三）、鳴く能はず。之を唖蟬と謂ひ、亦瘖蟬と曰ふ。順和名に曰、蚱蟬和名奈波世美馬蟬和名無末世美寒蟬和名加無世美（略）寒蟬は唖蟬也。

【年浪草】諸聲は蟬、蛙或は蟲の聲等に和歌によめり。諸ともに多く鳴くところにや。○玉吟　鳴立てをやみもなしや木隱の雨よりしげき蟬の諸聲　御相原院御製。

圕（一）美人と稱して　（二）啞蟬の條を引く　（三）啞さ、口たきくことの出來ない事。

【季題解說】喧しく鳴きて夏を表徵する昆蟲。種類ありて多少の相違あれど、頭短く角ばりて廣く、一對の複眼高く出で、紗の如き薄く而も剛き兩翅あり、六本の足ありて前肢二本は大きく刻みて、樹幹に止るに便せり。聲高く鳴くは雄にして、腹部に發聲器をもつ。雌は鳴かず、俗に啞蟬と云ふ。初蟬は、夏に入りて始めて鳴く蟬を云ひ、蟬時雨は、多くの蟬の鳴きしきる聲の、時雨降る音の如きなるを云ふ。初め地中に久しく在りて後に蛹となり、出でて羽化するもの、蟬の脫を參照すべし。

【實作注意】種類多し、春蟬・にいにい蟬・油蟬・みんみん蟬・熊蟬・蜩・法師蟬等ありて、その鳴音と時期とを異にす。

▽春蟬（春）晩春初夏の頃、松林にのみ居りて、ジワ〳〵と皺枯聲に鳴き合へるもの、形蜩に似たり。俳句にては春期に屬す。一に松蟬とも云ふ。

▽にいにい蟬（夏）梅雨明の暑くなる頃より鳴き出で、ニー〳〵と頭を銜き入る如き聲にて續け、チッ〳〵と鳴き納めるもの、頭・胸に少し綠を帶び、翅に淡黑の斑ある小形の蟬。一に夏蟬といふ。

▽油蟬（夏）盛夏の頃無遠慮に鳴きて暑さを喚るもの、ジー……と油を揚る如き思ひをさする普通の蟬。體黑く翅の褐色のもの。

▽みん〳〵蟬（夏）眞夏のもの、重に山地に多く、深山蟬とも云ふ。體に青味ありて翅は透明なり、ミーン〳〵と繰り返し高く鳴き響く。

▽熊蟬（夏）眞暑のもの。大形のもの體長一寸五分位、體黑く翅は薄く透けり、シエミ〳〵〳〵と暑しく鳴き立て、蟬時雨を思はすもの、一にしやあしやあ蟬とも云ふ。

▽蜩（秋）晩夏初秋入り、朝夕に限りカナ〳〵〳〵と聲を振り上げるもの、俳句には秋季とす。

▽法師蟬（秋）土用明頃より鳴き初め、ツク〳〵オーシーと聞え、つく〳〵法師とも云ふ。秋季のものとす。

總じて涼しき日には聲低く、暑き日には聲高く鳴く性あり。【季題】蟬の幾種、[illegible]　秋　蜩　法師蟬。

【例句】

[illegible]さに[illegible]へて[illegible]し蟬の聲　宗[illegible]（[illegible]）

蟬聲のそれ木にとまる[illegible]　鬼貫（[illegible]）

鳴せはし鳥とりたるせみの聲　同（同）

ゆく水や竹に蟬なく相國寺　同（同）

蟬

撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲　芭蕉（笈日記）

稲葉山

立石寺

しづかさや岩にしみ入る蟬の聲　同（陸奥鵆）

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　同（猿蓑）

隣から此木にくむやせみの聲　其角（五元集）

た[illegible]

蟬の聲ましらもあつき梢かな　同（五元集拾遺）

水うてや蟬も雀もぬるゝほど　同（同）

あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲　嵐雪（玄峰集）

蟬鳴くや麥を打つ音三々三　同（同）

鳴き立る蟬にはしるかくだり坂　沾徳（俳諧五子稿）

住かへよ人見の松の蟬の聲　去來（去來發句集）

蟬の音やおさへて通る山颪　杉風（杉風句集）

居りかはる羽おと涼し森の蟬　北枝（北枝發句集）

おしかへしなくや晴行くみねのせみ　同（同）

蟬の音をこぼす梢のあらし哉　支考（蓮二吟集）

蟬の聲けふは晝寢の仕舞かな　同（同）

吹く螺に木末の蟬も鳴止ぬ　桃隣（古太白堂句選）

蟬鳴くや秋の近さも一里塚　也有（蘿葉集）

柚が來てつもる梢やせみの聲　同（同）

蟬暑し松伐らばやと思ふ迄　同（鶉衣）

蟬なくや川に横ふ木のかげり　園友（笈日記）

蒼たつる醬油麥や蟬の聲　朱廸（同）

宮居

半日の閑を榎やせみの聲　蕪村（句集）

大佛のあなた宮様せみの聲　同（同）

蟬鳴くや行者の過る午の刻　同（同）

蟬鳴くや僧正坊のゆあみ時　同（同）

蟬鳴くや行く人絶ゆる橋柱　同（落日庵句集）

鳥まれに水また遠し蟬の聲　同（同）

せみ鳴やきのふは二日三日の月　同（新五子稿）

ひるがへる蟬のもろ羽や比枝おろし　同（遺稿）

蟬の聲尾上の鐘にひゞく也　同（夜半叟句集）

南蠻に雲のたつ日やせみの聲　同（同）

蟬なくや比枝のあざりの晝餉　同（同）

笠脱で歸る梵論ありせみの聲　同（同）

うたゝねの暮るゝともなし蟬の聲　太祇（句稿）

蟬鳴くや濕氣て涼しき別座敷　同（同）

たつ蟬の聲引放すはづみかな　太祇（太祇句選）
かげろひし雲又去て蟬の聲　几董（井華集）
さまかへて御庭拜むや蟬の聲　召波（春泥發句集）
蟬鳴や晝寢しばらく旨かつし　同（同）
鳴蟬の岩くらたどる日疾哉　同（同）
せみの聲茶屋なき岨を通りけり　同（同）
薄雲の山路をすます蟬の聲　曉臺（曉臺句集）
せみ鳴て梢の蛙おちにけり　同（同）
蟬鳴て杉にも脂の流れけり　闌更（半化坊發句集）
所々鳴さす蟬に照日かな　同（同）
蟬の音も煮ゆるが如き眞晝哉　同（同）
松の木や今日は朝から蟬の鳴　白雄（白雄句集）
蟬鳴てくるしや蓑のむら乾き　同（同）
蜘の巣に月さしこんで夜の蟬　一茶（旅日記）
蟬鳴や梨にかぶせる紙袋　同（同）
蟬鳴や空にひつつく最上川　同（七番日記）
鳥さしの邪魔に飛びけり松の蟬　同（九番日記）
殘る日や蟬遠ざかる山の松　成美（杉柱）
聲よわる夕暮淋し森の蟬　同（いかに〳〵）
蟬なくやひとり網手の道つくり　同（同）
蟬の音に薄雲かゝる林かな　巣兆（曾波可理）
旅人の木かげ掃けり蟬の聲　蒼虬（蒼虬翁發句集）
清瀧や夢のやうなる蟬の聲　同（同）
せみ鳴や心に遠きひとしきり　同（同）
松暗し風に鳴さす夜の蟬　田丁（反故集）
雨雲のちぎれて蟬の聲高し　米岑（觀隨筆）
鳴ながら川こす蟬の日影哉　巴人（俳諧古選）
替馬をつなぐ一木や蟬の聲　麥泉（春遊）
松原を一里は來たり蟬の聲　沾峨（吐屑庵集）
柿の葉にかくれて暑し蟬の聲　東有（西華）
草も木も動かぬ照や蟬の聲　桐天（落首途）
川船や聲遠ざかる森の蟬　吟江（推敲日記）
寢かゝれば駕ゆらるゝや蟬の聲　同（同）
一聲は何に追はれて夜の蟬　排雲（庚甑集）
來る蟬の身を打つけてとまりけり　嘯山（俳諧新選）
煎つける聲に[illegible]なく几かな　倚室（[illegible]室家集）
須磨の浦[illegible]、あの山に蟬の聲　子規（全集）
[illegible]の影[illegible]鳴く緣の柱哉　同（同）

いろ〳〵の賣聲絶えて蟬の晝　子規（全集）
庭の木にらんぷとゞいて夜の蟬　同（同）
蟬なくや五尺に足らぬ庭の松　同（同）

初蟬

初蟬の耳まで來る暑かな　也有（蘿葉集）
初蟬や里はしづまる麥ほこり　同（[illegible]）
初蟬や初瀬の雲のたえ間より　曉臺（曉臺句集）
はつ蟬の今這登る榎かな　闌更（半化坊發句集）
初蟬や梅雨の晴行朝嵐　孟遠（[illegible]句集）
初蟬に涼しく雨は晴にけり　梅郊（古今句鑑）

蟬時雨

浮島や動きながらの蟬時雨　一茶（享和句帖）
堂の縁に汗を入るゝや蟬時雨　月斗（同人）
蟬時雨晝の一醉火の如し　同（同）

啞蟬

啞蟬の鳴かぬ梢もあはれなり　杉風（杉風句集）

夕蟬

夕蟬の筏木に鳴くふもとかな　白雄（白雄句集）

山蟬

山蟬のたもとの下を通りけり　一茶（[illegible]句集）

【參考】 蟬　本邦産のもの約四十種を數へる。幼蟲は、すくも蟲と稱へられ、土中に生活してゐる。春夏の候、土中より出でゝ脫皮し、成蟲となる。雌は鳴かざるを以て啞蟬と呼ばれることがある。雄蟬が多數競ひ鳴くを蟬時雨といふ。

春蟬　學名 Terpnosia vacua. 本州・四國・九州に普通な種類で、四月から六月まで松林に來て、ギーギーと鳴く。體は黑色で金毛を多く生じてゐる。雌には褐色の斑紋が多くある。

にいにいぜみ　學名 Platypleura kaempferi. 七月初旬から現はれ、ジージーと弱き聲にて鳴く。九月には其影をひそめる。體面に細かき淡黃色毛を密生す。前翅は無色の地に暗褐色及び灰褐色の斑紋がある。北は北海道から南は臺灣まで廣く分布する。

あぶらぜみ　學名 Graptopsaltria nigrofuscata. 本邦に普通なる蟬で、翅は不透明な赤褐色。甚だ强き鳴聲を連續的に出す。

くまぜみ　學名 Cryptotympana japonensis. 南日本に普通な蟬で、シヤーシヤーと鳴き、七月から九月まで生存する。體は概ね黑く、翅は透明であるが、時としては甚だ褐色を呈することがある。

ひぐらし　學名 Tanna japonensis. 平地では夕刻に鳴くことが多いので、ひぐらしと云ふ。山地の如き涼しき所では日中でも鳴いてゐる。本州・四國・九州に普通な蟬で、カナカナと鳴く。

蟬の蛻（せみのもぬけ）

【古書】【別名】 蟬の脫殼（せみのぬけがら）　蟬の殼（せみのから）　空蟬（うつせみ）　蟬脫（ぜんだつ）　枯蟬（こぜん）　蟬退（ぜんたい）　蟬蛻（ぜんぜい）

【年浪草】 韻會に曰、秦に蟬脫を謂ひて蛩と曰ふ。云々 蟬退、枯蟬並びに

同じ。脱（一）は蟲の皮を解く也。○奥儀抄に曰、空蟬は蟬の脱から斗にあらず生たる蟬もいふ也。（略）○河海抄に曰、蟺也。文選に蟬蛻とかけり、皮ぬぎすてたる衣によそへていへり。一説には打聲蟬ともいへり、蟬の聲（二）をうつに似たる故也。

【俳諧歳時記】萬葉、蟬の聲の響が如く、ひびく故に打聲蟬といふか。又空蟬ともよめり。共に生ける蟬也。（略）只うつ蟬は蟬の惣名（三）とおもふべし。蟬の脱をうつ蟬とよみしは後のわざ也。

註（一）もぬけ　（二）玉又は石を材として一へ字形に作り梓に下げたる樂器。之を打ちて音を出す。（三）總稱。

【季題解説】蟬の脱殻を云ふ。蟬の幼蟲は地中にあること三四年、成長して蛹と成る。蛹堤を出でて樹に上り、背より割れてその皮を脱ぎ、羽化して蟬となる、そのぬけ殻の稱なり。蟬の殼と約し、空蟬ともいふ。【傍題】蟬[illegible]

【例句】

蟬の脱

木さらしや蟬のもぬけの薄衣　殘詞（虚栗）

わくら葉に取ついて蟬のもぬけ哉　蕪村（遺稿）

蟬のから

梢よりあだに落けり蟬のから　芭蕉（江戸廣小路）

我とわがからや弔ふ蟬の聲　也有（蘿葉集）

しがみつく力や殘す蟬のから　此筋（有磯海）

芭蕉葉に力すくなし蟬のから　似川（東[illegible]吟）

空蟬

空蟬や石の鳥居を鳴捨し　一井（[illegible]）

朝顔のませに空蟬をりにけり　つや女（ホトヽギス）

三一　夏の蝶　梅雨の蝶

【季題解説】夏出る蝶を云ふ。梅雨の蝶は梅雨期のもの、五月晴の山野に喜び遊べるを見る、季に至りて白きもの也。【季語注意】蝶は春の定めなれば、夏のものにはその字を置らしむべし。【類題】作り蝶

【例句】

夏の蝶

夏の蝶三つ葉は花を持ちにけり　草牛（同人）

豆の葉は埃まみれや夏の蝶　五黄堂（同）

夏の蝶楓にとまりいつまでも　虚子（ホトヽギス）

梅雨の蝶

花[illegible]日毎に殖ゆる梅雨の蝶　万斗（同人）

草の戸や葎茂りに梅雨の蝶　同（同）

蜻蛉生る　水蠆　やご

【季題解説】所によりては初夏の頃より生る。蜻蛉の幼蟲は水蠆と云ひ水中に棲む、多くは褐色か土色をなし、三對の脚と[illegible]の頭をもち醜きも

の、長ずれば水草又は石崖等に上りて羽化して成蟲となる。この幼蟲を「やまめ」ともいふ。【參照】秋─蜻蛉

【例句】
蜻蛉生る　植苗の東に生れし蜻蛉かな　碧童（新歳時記）
水葵　岸の花打つ雨や水葵浮く　一果（同人）

絲蜻蛉（いととんぼ）　燈心蜻蛉（とうしんとんぼ）　とうしみ蜻蛉（とんぼ）

【季題解説】　蜻蛉類にて一番小形のもの、體長一寸許り、翅細く、背黑く腹青し、體燈心の如く細きにより「燈心蜻蛉」の名あり、初夏の頃より水邊の雜草に飛ぶを見る　俗には「とうしみ蜻蛉」ともいふ。種類あり。【參照】秋─蜻蛉（トンボ）

【例句】
燈心蜻蛉　水引にとまる燈心蜻蛉かな　椎子（歌はれた蟲）

川蜻蛉（かはとんぼ）　鐵漿蜻蛉（おはぐろとんぼ）　かねつけ蜻蛉（とんぼ）

【季題解説】　夏期水邊に居りて、體形・大小等數種あり。草などに止まれば大なる翅を立てゝ靜かに開閉しゐるもの此種なり。體細く長さ二寸位、雌は羽透明なれど、雄は橙色にして甚だ美し、又一種翅の黑きものあり「鐵漿蜻蛉」又「かねつけ蜻蛉」ともいふ。【參照】秋─蜻蛉（トンボ）

【例句】
鐵漿蜻蛉　綠陰の水におはぐろ蜻蛉哉　月斗（同人）

蟷螂生る（たうらううまる）　蟷螂生る（かまきりうまる）　蟷螂の子（たうらうのこ）　子蟷螂（こたうらう）

【古書參照】
【滑稽雜談】　月令に曰、仲夏の月蟷螂生る。註に曰、蟷螂一には蚚父と名け、一には天馬と名く。言ふ心（一）は其飛捷（二）馬の如し。（略）（三）此節巣をなすを螵蛸といふ。俗に祖父の浮囊（フグリ）といふ者なり。蟷螂（四）は和名いぼじり、俗にかまきりと稱す。是秋也。作意心得有べし。

註　（一）天馬と云ふ意味は　（二）速く飛ぶこと。　（三）以下其諺の自記。　（四）蟷螂のみでは秋の季になると云ふなり。

【季題解説】　蟷螂は大抵五月半頃より孵化す、蟷螂の卵は數百集りて澁紙の塊の如き姿にて枝梢に著く、時至ればその塊よりうよ〳〵生れ出づ、形小さく可愛げなれど、怒れば斧を擧ぐること親の如し。

【實作注意】　曆七十二候の一、乃ち陰曆五月の節第一候に蟷螂生るとあり。

【參照】秋　蟷螂（カマキリ）

【例句】
蟷螂生る　蟷螂や生れ落つると斧を振る　夕口（俳句大觀）

蟷螂の生るゝ庭を持ちにけり　古川（同　人）
かまきりも青鬼灯もうまれけり　羽公（ホト、ギス）

蟷螂の子　蟷螂の子に見せてみん風車　枕山（類題發句集）
子蟷螂骨肉既に食める哉　圭岳（同　人）

夏蟲（なつむし）　夏の蟲（なつのむし）

古書校註　【滑稽雜談】八雲御抄に云ふ、夏蟲は惣名也。火に入るをも云ふ(一)。後撰に夏蟲の聲より外に(二)など詠へる。又螢を夏むしといふ常の事也。藻鹽草に云ふ夏蟲は四色なり。火取蟲（飛蛾也）螢、蟬、蚊也。火取蟲は世俗には蟲の火を取りに來らん蟲にあはんといへば、取りに來とて灯に入りて身をうしなふと云ふ。

註 (一)「飛んで火に入る夏の蟲」（諺） (二)「八重葎しげき宿には夏蟲の聲より外にとふ人もなし」（題しらず、讀人しらず）

季題解説　火取蟲の類をいふ。夏の夜燈火に集り來つて飛ぶもの。「飛んで火に入る夏の蟲の諺あり」。又螢・蟬・蛾・蚊などすべて夏季に發生する蟲をいひ、又螢の異稱。〔參照〕火取蟲ヒトリムシ

例句

夏　蟲　うつせみの繪に
夏蟲の生にこがれたる命かな　其角（五　元　集）
夏蟲や夜學の人の顔を打つ　召波（句　稿）
夏蟲や放つに戻る窓障子　百明（故人五百題）
夏蟲の死で落ちけり本の上　子規（仝　集）

夏の蟲
哀れさや石を枕に夏の蟲　桃隣（古太白堂句選）
前書、（流水）（燈）の（題）に
燈の影や水とりたかる夏の蟲　也有（蘿　葉　集）
片羽焼てはひあるきけり夏の蟲　闌更（半化坊發句集）
油火に蚊とはいはずに夏の蟲　白雄（白　雄　句　集）
すき立ての髪にとまるや夏の蟲　昌房（類題發句集）
草むらへ歸らぬものか夏の蟲　如流（同　）
有明に身をこがれつゝ夏の蟲　桃雨（心　一　つ）

火取蟲（ひとりむし）　燈取蟲（ひとりむし）　火蟟（ひとりむし）　火蟲（ひむし）　ひゝる　燈蛾（とうが）　火蛾（くわが）　燭蛾（しよくが）

古書校註　【三才圖會】燈蛾・飛蛾。火蛾、俗云、火取蟲。按るに蛾の小さき者を蛾となす。（蛾）夏夜、燈火を見れば、則ち火に入らんと欲するが如く、數回にして終に燈油の中に沒して死す。故に愚人、色欲の爲に身命を抛つ事を燈蛾に譬ふ(一)。

註（一）飛んで火に入る夏の蟲。

季題解説　夏の夜燈火を目がけて飛び集る蛾。古名ひひる、蝶と同類なれど、翅色一樣にて美ならず、殊に夏に多く、黄昏及夜間飛翔し、燈火を慕ひよるを以て、火取蟲・燈蛾・火蛾・火蟲とも云ふ。

實作注意　學問上燈蛾科に屬する火取蟲を云へど、俳句にては燈火を慕ふ昆蟲殊に蛾類一般を指す場合少なからず。參照　夏蟲（一二）　夕顔別當（ユフガホベツタウ）　内雀（ウツスズメ）

例句

火取蟲
雹のさそひ出してや火とり蟲　丈草（丈草發句集）
夕立にこまりて來ぬか火とり蟲　正秀（初便）
筆とめて打拂ひけり火取蟲　闌更（半化坊發句集）
さる程に螢は見えず火とり蟲　沾蛾（吐屑庵）
燈とり蟲月夜の庭へはなしけり　玉虹（鶉音）
むだ話蟲に行燈を消されけり　一茶（句帖）
白や赤や黄や色々の灯取蟲　子規（全集）
灯取蟲思ひつめたるぞ是非もなき　同（同）

灯蟲
大蛾きて動亂したる灯蟲かな　虚子（ホトトギス）

燈蛾
燈を消せば我を責るや燈蛾　梅室（梅室家集）
すさましや早瀨の舟に燈蛾　同（同）

火蛾
山莊や火蛾の跳梁夥し　月斗（同人）

夕顔別當（ゆふがほべつたう）　せすぢすずめ

季題解説　「すずめ蛾」の一種、體長一寸二三分の大きな蛾にして、夏日夕方迅速に飛翔し、又燈を求めて來る。體は紡錘形にして緑褐色、腹背に白條あり。前翅は灰褐色にして長く伸び、濃淡兩色の刷毛目線を斜走し、後翅は小さく暗褐に灰黄　を映ず。幼蟲は二寸餘に達する大形いもむしにして多く芋畠に現れて其の葉を食害す。參照　火取蟲（ヒトリムシ）　内雀（ウチスズメ）

參考　夕顔別當　せすぢすずめ、學名 Theretra oldenlandiae. 夕刻、夕顔の花など訪ひ來たる蛾の意。夕顔別當の名を以て呼ばるゝ蛾は多いが、最も普通なのは、せすぢすずめである。大形肥大の蛾で、腹背の中央に銀白色の二縦線を有し、腹部は圓錐形をなしてゐる。飛翔甚だ迅速である。

内雀（うちすずめ）

季題解説　蛾の一種。體長一寸五分にも達し頗る肥滿して雀に似たる故此の名あり、前翅は灰褐色にして中央に半月形の灰色紋あり、其の外側に二條の濃褐色の波狀線あり、後翅は中央に眼狀の紋あり、頭と胸とは灰褐色、

觸角は黄色羽毛狀を呈す。夏日夕景飛翔して蜜液を求め、又燈火を慕ひて來る。幼蟲は大形綠色のいもむし、秋蛹となり地中に越冬す。【季題】火取蟲、夕顔別當

【參考】内雀 學名 Smerinthus planus. 本邦では北海道から九州まで廣く分布する蛾で夏季人家の燈火を慕つて屋内に入り來る。體も翅も概ね灰褐色で恰も雀に似てゐるからこの名がある。後翅には眼狀の大紋がある。この蛾の幼蟲は柳の葉を食ふ。

腐草爲レ螢（ふさうほたるとなる）

【古書摘註】【年浪草】月令に曰、季夏腐草、螢と爲る。註に云、暑濕の氣を得るが故に變じて螢と爲る。○朱氏が曰、腐草螢と爲るは離明の極（一）、故に幽類化して明類と爲る也。

註（一）陰が陽になる理法の窮極に至り、遂に幽類即ち陰氣の死物が化して明類即ち陽氣な生命ある生物となる也

【季題解説】古へ、螢は腐草の化して成れるものと信じられたり。曆七十二候の一、陰曆六月中の第一候、腐草爲レ螢とあり。【季題】螢

【例句】腐草爲螢 酒は酢に草は螢となりにけり　一茶（句帖）

螢（ほたる）

夜知蟲（よるしるむし）　源氏螢（げんじぼたる）　大螢（おほぼたる）　平家螢（へいけぼたる）　姫螢（ひめぼたる）　初螢（はつほたる）　螢火（ほたるび）　飛ぶ螢（とぶほたる）　行く螢（ゆくほたる）
螢　散る螢（ちるほたる）　螢時（ほたるどき）　雨の螢（あめのほたる）　螢合戰（ほたるがつせん）　晝の螢（ひるのほたる）　夕螢（ゆふぼたる）

【古書摘註】【日本紀事】小滿後四日五日之間、江州勢田并宇治川・西賀茂・北宇喜田并水上蚋螢多出づ。是亦一時之壯觀也。土人螢を紗囊（一）に盛りて、高貴の家に獻ず。勢田螢、他處に比すれば則形大に光甚し。諸方より之を求む。近世勢田の土人螢を紗囊に入れて、市中に賣る。之を求むる人數籠の中に入れ又は庭園（一）の草際之間に放つ。

【三才圖會】江州石山寺の溪谷邊に螢多くして、長さ常に倍なり。因て其處を呼びて螢谷と名づく。北は勢田橋二町許に至り、南は供御瀬二十五町に至り、其間群飛すること高さ十丈許り、火焔の如く、或は數百、塊となりて、毎芒種(三)の後五月より夏至の後五日に至まで(凡十五日)盛りとなす。(略)其螢下りて山州宇治川に到る。(略)俗に以て源頼政の亡魂となすも、亦笑ふべし。

【年浪草】一説五月廿三日、今夜螢火殊に多し。今日頼政戰死すと。

【山の井】撫子にみだるゝを、兵部卿(四)の思ひによせ、車ゆり(五)にとびかゝるを至(六)が色ごのみにいひなし、日吉の山にとぶを、猿の尻のあかさにくらべ、いなり山におろめくを狐火かとあやしみ、もろこしの褒姒(七)がたまかとも、我朝の玉藻のまへ(八)にひかりわたるともいひ侍る。(略)猶又月夜には、ゐどころをかへ、闇には、しりをふりまはる心ばへ。(略)猶星とも見なしてすばるぼしとも、夜ばひ星などもきこゆ。

【栞草】○窓の星、蒙求(九)、晉の車胤、家貧しくして常に油を得ず。夏月には練の嚢に數十の螢火を盛りて書を照らし、夜を以て日に繼ぐ云云これより窓の螢とは云ふ也。○近世歌學家の説に、俗にほたるびと云ふは、漢字に螢火と書けるをそのまゝよみたる言にて、本邦古くほたるびといひたることなきよしいへり。實に後世の俗言なるべし。但し和泉式部家集などにも、ほたるびとよみたる歌みゆれば、今漢語俗言をもそのまゝ用ふる俳諧の上には、しひて、はゞかるべきにあらず。

註 (一)輕くうすき織物にてはれるふくろ。絹の輕細なもの又轉じて麻木綿のうすき物をもさす。(二)みぎり。(三)小滿より十五日後にあたる。五月の節。(四)源氏物語に出づ。螢宮とも匂宮とも呼ばれ、光源氏とは異母兄弟。匂宮が源氏の世話せし玉鬘に懸想し言よつた時源氏螢をはなつた事がある(源氏物語、螢卷)(五)百合の一種。(六)源至。天の下の色好と云はれし人。車にのれる女に懸想し、車中に螢を放ち入れ、弄れし故事あり。(伊勢物語三九段)(七)周の幽王の寵姫。(八)近衛院の御宇、玉藻前と云ふ寵化女あり。或夜玉藻前の身體より怪光輝きわたり朝日の如く、諸臣を驚かした。又帝御病の時、阿倍安成の占により、その化生たることあらはれ、書消す樣に行方をくらませしと云ふ。(九)三卷の通俗、後晉の李澣の著。古人の事蹟を記す。

季題解説 水邊に飛び交うて初夏の夜を彩る昆蟲。甲蟲の一類、普通三四分、頭小さく頸赤く、全體黑し。臀部に淡黃の發光器ありて、夜は鮮かに綠靑の螢光を放つ。鞘翅ありて雄はよく飛ぶも、雌は叢間に在りて飛ばず。五月中旬より夜水畔に出でて發光飛翔し甚だ美し、人の觀て捕ふる所。種類あれど普通なるは源氏螢・平家螢の二種とす。前者は形大きく清流の邊に發生し、後者は形小さく沼地等の汚水に近く發生す。又時に多くの螢飛び亂れ、或は一團となり或は碎けて水に散ることあり。之を螢合戰と云ふ。

實作注意 螢は宵より出でて夜半に近く盛んに飛べど、以後は一齊に草に沈みて飛翔せざるものなり。又螢の光を螢火と用ふべきも、ほうたるなど四音に訛るは面白からず。螢狩・螢賣・螢籠等は人事とす、別項にあり。參照

腐草爲螢 人事―螢狩 螢賣 螢籠

例句

螢

吹く風に居尻定めぬ螢かな　宗因（梅翁宗因發句集）
前にありと見れば螢のしりへ哉　同（同）
こひ〳〵といへど螢が飛んで行　鬼貫（俳諧七車）
愚にくらくいばらをつかむ螢哉　芭蕉（東日記）
此ほたる田ごとの月にくらべみん　同（みつのかほ）
晝見れば首筋赤きほたる哉　同（芭蕉句選）
妾が家ほたるに小哥告やらん　其角（五元集）
川ぐまや水に二重のほたる垣　同（同）
草の戸に我は蓼くふほたるかな　同（五元集拾遺）
柴舟にこがれてとまる螢かな　同（同）
蓑ほして朝々ふるふ螢かな　嵐雪（玄峰集）
牛部屋に晝見る草のほたるかな　言水（俳諧五子稿）
喜撰法師螢の歌も詠まれけり　素堂（同）
手の上に悲しく消ゆる螢かな　去來（去來發句集）
呼聲は絶てほたるのさかり哉　丈草（丈草發句集）
水音やほたるたのみに宿とりぬ　杉風（杉風句集）
すつときて袖に入りたる螢かな　同（同）
松の葉をつめたら探るほたるかな　浪花（浪花上人發句集）
田の水を見せて螢の盛かな　北枝（北枝發句集）
窓に寢て雲を樂しむ螢哉　支考（蓮二吟集）
蚊遣火の烟にそるゝほたるかな　許六（五老井發句集）
しからるゝ子の手に光る螢哉　也有（蘿葉集）
奪合うて弱らかしたる螢かな　同（同）
晝見てはきたなき水の螢哉　同（同）
ふたつとも飛ばず雨夜の螢哉　同（同）
雨にうちられしや螢見つけたり　同（同）
とまるものなくて町ゆく螢哉　同（同）
放されて息にも逃げぬほたるかな　同（同）
寐所へ扇にすゑし螢かな　園女（玉藻集）
川ばかり闇はながれて螢哉　千代女（千代尼發句集）
學問は尻からぬけるほたる哉　蕪村（句集）
摑みとりて心の闇のほたる哉　同（[illegible]）
狩衣の袖のうら這ふほたる哉　同（句集）
さし汐に雨の細江のほたる哉　同（遺稿）
淸水に見てかへるさのほたるかな　同（夜半叟句集）
水底の草にこがるゝ螢哉　同（同）

ほたる飛ぶや家路にかへる蜆賣　蕪村（夜半叟句集）
辻堂の佛にともすほたる哉　同（同）
我門を叩けは遠き螢かな　同（同）
見えすなる堰の蘆ごしのほたる哉　同（同）
淀舟の棹の雫もほたるかな　同（同）
草を打て螢いつはる團扇哉　同（同）
堀川の螢や鍛冶が火かとこそ　同（同）
佐保川の螢に遊ぶ上臈履　同（同）
空甯をのがれ出たるほたる哉　同（同）
うつす手に光る螢や指のまた　太祇（太祇句選）
手から手へ渡しわづらふ螢哉　同（同）
あるじなき几帳にとまる螢哉　几董（井華集）
もつれつゝ水無瀬をのぼる螢哉　樗良（樗良發句集）
盃のうへに吹るゝほたるかな　曉臺（曉臺句集）
草うてば螢亂るゝ古江哉　闌更（半化坊句集）
更行や螢地を這ふ町の中　同（同）
やゝありてぬれ紙出る螢哉　同（同）
追れては月にかくるゝほたる哉　蓼太（蓼太句集）
關の燈ゝつうごかぬ螢哉　同（同）
田の水を庭にひかせて螢かな　維駒（五車反古）
手の皺に蹴つまづいたる螢かな　一茶（七番日記）
飯櫃の螢追ひ出す夜舟哉　同（句帖）
貧しさは螢とぶにもまぎれけり　成美（成美家集）
川舟や螢をつかむ枕もと　同（いかに〳〵）
螢たつや榾ふむ馬の夜の音　同（谷風草）
杭際の渦にまかるゝ螢哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
吹落て笘にはさまる螢哉　梅室（梅室家集）
鐵漿捨に出たれば草の螢哉　乙二（をのゝえ草稿）
雨の夜の葉裏を傳ふ螢かな　吟江（擁被日記）
吹落てしばし水行螢哉　同（同）
浮草と共に流るゝ螢かな　同（同）
水にもえ月に消行螢哉　同（年蒼）
針箱に一夜とめたる螢哉　琴風（處分船）

大螢

大螢ゆらり〳〵と通りけり　一茶（七番日記）

初螢

物さしのとゞかぬ松や初螢　同（同）
初螢寺の柳に見付たり　定雅（椿花文集）

螢火

ほたる火や黒津の梢兒が島　去來（去來發句集）
螢火や吹とばされて鳰の闇　同（同）

飛ぶ螢

螢火や蟹のあらせし庵のへり　丈草（丈草發句集）
螢火に殊にうれしき家居哉　蕪村（落日庵句集）
螢火や岸にしづまる夜の水　太祇（太祇句選）
螢火や風の笹山吹おろし　曉臺（曉臺句集）
螢火に飛びつく魚や水の音　鐘丹（甲辰集）
もろこしの褒姒か玉か飛ぶ螢　重頼（犬子集）
藪垣や京都螢のあひを飛ほたる　鬼貫（鬼貫句選）
草の葉を落るより飛ぶ螢哉　芭蕉（いつを昔）
とぶ螢いつの涼の蒲むしろ　也有（蘿葉集）
飛ぶ螢あれと言はむもひとりかな　太祇（太祇句選）
火を擧げて闇のゆるみや飛ぶ螢　同（新選）
いふことのきこえてや高く飛ほたる　曉臺（曉臺句集）
飛螢舟に扇を揭にけり　闌更（半化坊句集）
草の葉や犬に嗅れてとぶ螢　一茶（七番日記）
小ふくべの青みにつくやとぶ螢　成美（成美家集）

行く螢

とりにがす隣の聲や行く螢　太祇（太祇句選）
水うみの低きに就て行ほたる　几董（井華集）
雨の夜や猶おもむろに行螢　召波（春泥發句集）
行螢夜のみかうしまゐりけり　同（同）
むら松やきえんとしては行螢　白雄（白雄句集）
隣から燈かげのさして行螢　巣兆（曾波可理）
竹の闇や大竹原をゆく螢　士朗（枇杷園句集）

散る螢

玉川のすゑやくだけて散螢　蕪村（岩本氏編全集）
山や水見えてはくらみ散ほたる　樗良（樗良發句集）

螢時

蓼跡の田植ておそき螢時　許六（五老井發句集）

雨の螢

草の根を立て驟雨の螢かな　何大（[illegible]）

螢合戰

かしこさに合戰なしに飛ぶ螢　許六（韻塞）
夢に似て戰ふ宇治の螢哉　蒼狐（古今句鑑）

晝の螢

あさましや晝の螢の辟もやらず　月溪（續明烏）

【動物學】 螢　水邊の草に棲み、夜間飛行し、發光する。最も普通の螢は平家螢と稱し、體長約一センチ。北海道より九州まで分布する。學名をLuciola lateralisといふ。源氏螢と稱へらるゝものは北海道には產せずして、本州・四國・九州に分布し、體長約二センチ、本邦產の螢中の最大種である。學名はLuciola cruciata.

兜蟲（かぶとむし）

甲蟲（かぶとむし）　皂莢蟲（さいかちむし）　鬼蟲（おにむし）　源氏蟲（げんじむし）

【動物學】 兜の前立に似たる角を持てる大形の甲蟲で、長さ一寸餘、幅七八

分、全身黒味の栗色、腹に六足あり。背に甲と羽ありて、夜は飛ぶ。雄にのみ長さ八分許の鹿の如き角と三分許の角を持つ。力極めて強く、その角は重き物を持ち上ぐるに耐ゆ、小兒の弄ぶ所。樫・椚・さいかちの樹に多く棲む。關東にてさいかち蟲、近畿にて源氏蟲とも云ふ。

【例句】

兜蟲
雌雄の兜蟲なり灯取蟲　凡　秋（ホトヽギス）
おもむろに角ふりかぶり兜蟲　多賀王（同）
蟲逋ふ爪の力や兜蟲　月斗（同人）
栗の木に登つてとりし兜蟲　羽山（同）
怒らして鬪はしけり兜蟲　苔水（同）

【參考】兜蟲　コガネムシ科。學名 Xylotrupes dichotomus. **さいかち**むしともいふ。さいかち其他の樹木の液汁を吸ふ。全體黒褐色で頭部に大なる角を有するが、雌にはこれがなくて鍬形蟲に似てゐる。幼蟲はオホヂムシといひ塵埃の下などに棲息する。
鍬形蟲は、大なる鋏狀の大顎を有する甲蟲。

髪切蟲（かみきりむし）、天牛（かみきり）　かみきり

【考證】【三才圖會】大さ蟬の如し。黒き甲光り漆の如し。甲上に黄白の點あり。（略）目の前に二黒角あり。甚長く前に向ひて水牛の角の如く、能く動く。（略）諸樹の蠹蝎（一）の化する所なり。夏月之あり。（二）

註（一）木食蟲の條參照　（二）本草綱目による。

【季題解説】木食蟲の羽化したるもの、長さ一寸許、巾四分許、背に堅き甲あり、腹に六足あり、色黒くして白き斑點あり翅は甲の下に疊む、首に黒白交れる太き二本の鬚ありて身よりも長し、口に鋭き齒ありて髪を切り細き枝をも切る。一名木食蟲。

【例句】

かみきり
かみきりや夕立晴をきゝと鳴く　無　我（歌はれたる蟲）

天道蟲（てんたうむし）　瓢蟲（ひさごむし）　てんとむし

【季題解説】小昆蟲。體半球形にして光澤あり、觸角を頭の前縁に附着し、末端桿棒狀をなす。腹部五環節になり、脚は伸縮に適す。幼蟲は紡錘形、刺を有し、白粉を被る。幼蟲・成蟲共肉食性。黒色赤紋、黄色黒紋等種類頗る多し。

【[illegible]】これは俗に「てんとむし」と言ひ介殻蟲又は蚜蟲（ありまき）等を食し益蟲なるも、之に似て「てんたうむしだまし」と言ふは、茄子西瓜等に着きて農作を害す。

金龜子（こがねむし）

かなぶん　金龜蟲（こがねむし）　黄金蟲（こがねむし）　ひめこがね蟲　どうがね蟲　まめこがね蟲　ぶんぶん　あをかなぶん

【季題解説】夏の夜燈火を旋つて唸り飛ぶ、最も普通なる甲蟲の一。大きさ五六分、腹は暗紫色、甲は美しき金色の光澤を帯びたる黒緑色にて堅し。晝は草木の陰に隠れて、夜よく飛翔す、物に觸れば六肢を縮めて落下し死狀を裝ふことあり。羽音の唸りより、ぶんぶんと俗稱す。果樹の害蟲にて種類甚多し。

【作法注意】玉蟲を黄金蟲とせる書あれど、自づから別種なり。【參照】玉蟲（タマムシ）

【例句】

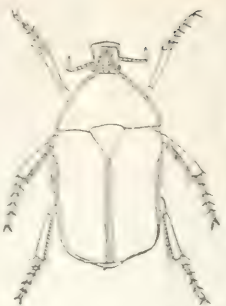
金龜子擲つ闇の深さかな　虚子（ホト、ギス）

金龜子[illegible]へこ燈の總走　北湖（同）

おもむろにをさまる翅や金龜子　水華（同）

金龜蟲目鼻をぬけて投じけり　青々（妻木）

草むらに長者屋敷やこがね蟲　茂秋（類題發句集）

【參考】小金蟲・金龜子蟲　こがねむしは、その幼蟲時代には土中に生活して作物の根を食ひ、成蟲となつては、その葉を食ふ農園の害蟲で、金屬樣の光澤を有する甲蟲。種類が多い。コガネムシ Mimela incidula ヒメコガネ Anomala rufocuprea ドウガネ Enchroa cuprea マメコガネ Popillia japonica カナブン Rhomborrhina japonica アヲカナブン Rhomborrhina unicolor などは普通種。この中、マメコガネは日本から米國へ、土と混じて移入され、米國に於て恐るべき害蟲となり、驅除に苦心してゐる。米人は Japanese beetle 又は Jap beetle（日本甲蟲）と稱してゐるのはこれである。

穀象（こくざう）

穀象蟲（こくざうむし）　米蟲（こめむし）　よなむし

【季題解説】米麥に著きて害を與ふる小形の甲蟲、穀象蟲の略。長さ一分許、黒褐色にて黄色の斑點あり、頭小さく前長く觸角をもち、よく移動す。穀類の表面に産卵して孵化せしむ、蛹となり次で羽化す。

【例句】

穀象のついたる米を干しけりけり　渓村（ホト、ギス）

米櫃の米に穀象湧きにけり　月斗（同人）

一と筵穀象つきし米乾しぬ　同（同）

穀象　穀象の俵はたくや水の上　南鷗（同人）
　　　穀象や米とぐ水の渦の中　紫江（同）
　　　穀象や俵はたきし箕の端米　一果（同）

【參考事項】こくざう　學名（Calandra oryzae）米穀倉庫中に棲みて米穀を食ふ害蟲。體長約四ミリ、赤褐又は黑褐色を呈し、口には長き吻がある。世界各地に分布してゐる。

玉蟲

金花蟲（キンクワチウ）　吉丁蟲（キツテイチウ）

【季題解說】昔く人の如る青く光りて美麗なる甲蟲、形米搗蟲に似て大さ一寸許、背に硬き甲ありて、竪に碧綠の條あり、腹は綠、共に金光を帶びて美はしきもの、夏榎に多く棲む

【實作注意】此雄蟲の干したるを簞笥に納むれば衣裳を多く得るといふ俗説と、これを白粉匣に貯ふれば、人に思慕されるといふ、婦女子の間に迷信ありて愛さる。【參照】金龜子（コガネムシ）

【例句】
玉蟲　玉蟲や伽羅とも朽ちぬ香包　白芹（遣草）
　　　玉蟲に殖えて淋しき衣裳かな　虚子（ホトトギス）
　　　玉蟲の疊める脚やいぢらしき　奇錢（同人）

斑猫

みちをしへ　みちしるべ　斑蝥（はんし）　芫菁（ぐわんせい）

【季題解說】海邊原野の砂地にありて、人近づけば急に飛んで數間の處にふり返り止まり、再び近づけば又繰り返すさま、恰も路を敎ふるに似たるより、みちをしへとも云ふ。劇毒ある甲蟲で大さ六七分、頭胸狹く、腹部廣く、甲碧綠、光りあつて、黄紅の斑あり。觸角長く、複眼大きく出で、顎は鉤になりて蟲を捕食す。

【例句】
斑猫　斑猫の一つ離れぬ茶店哉　青々（妻木）
　　　斑猫は人をあなどりおそれけり　月斗（同人）
みちをしへ　高野山
　　　此方へと法のみ山のみちをしへ　虚子（虚子句集）

【參考事項】斑猫　斑蝥科。學名 Cicindela chinensis. 幼蟲は地中に穴を穿つて棲み、成蟲は地上を步行する、肉食性の昆蟲。體長十八ミリ、概ね黑色で、黄、綠、紫を混ずる。發泡劑又は利尿劑たるカンタリスの原料として用ひられることマメハンメウ Epicanta gorhami に同じ。

蠅

家蠅　姬家蠅　縞蠅　肉蠅　黑蠅　金蠅　糞蠅　螫蠅　鼈甲蠅　蒼蠅　青蠅　犬蠅　小蠅　蠅の聲　蠅を追ふ　蠅を打つ　牛の蠅

古書校註

【滑稽雜談】 詩に曰、營營たる青蠅、樊(カキ)に止る。（略）光武紀に曰、蒼蠅の飛ぶ事數步に過ぎず、騏驥の尾に附せば乃ち千里の路を騰る。（一）

【年浪草】 狗蠅。時珍が曰、狗の身上に生ず。狀蠅の如し。黃色能く飛ぶ。堅き皮、利き喙、狗血を啖ひ噬ふ。冬月は則狗耳の中に藏る（二）。

註 （一）早く走り至る。（二）かくる。

季題解說 夏を跳梁期として食物に集り腐を舐めて甚だ煩はしき昆蟲 六足兩翅にして體長三分許、種類多けれど、吾人に直接關係の深きものは二三種。

▽家蠅 室內にて最も普通なるもの、食物に集り人體に煩しく、五月蠅（さばへ）の文字に當嵌る、執拗なるもの。

▽姬家蠅 家蠅に次いで室內に多き種類、體稍細く、腹部尖る、常に室內を高く飛翔して止るまこと少し。

▽縞蠅 肉蠅ともいふ、大形にして背に縱の黑線あるもの、魚肉商の店先に多し。

▽黑蠅 蒼蠅ともいふ、家蠅より大きく腹肥え、背黑色にて少し青味を含む、野外の臭へるものに多く、春・冬にも少なからざるもの。

▽金蠅 野外に多き種なれど、時に家に來る、黑蠅より小形、背金綠に光れり、腐敗せるものを好み、人糞に集り、最も嫌はるゝもの。

▽螫蠅 家蠅に似たれども、腹・背に黑點あり、畜舍牧場附近に多く、牛馬より吸血す。又人をも刺すことあり。

實作注意 蠅叩・蠅帳・蠅取器等は人事季題となりて別に取扱ふ [illegible] 瓜蠅（二）人事——蠅叩（一）、蠅捕器（へ） 蠅帳（二へ）

例句 蠅

うき人の旅にも習へ木曾の蠅　芭蕉（[illegible]）
蠅につく[illegible]にあたへけり　嵐雪（玄峰集）
うたゝ寝の貌に[illegible]や[illegible]まれ也　蕪村（[illegible]草）
蠅散て且ゥ白しや盆の糊　同（白畫賛）
いでくる硯の海の一つかみ　太祇（太祇句選）
あら浪に蠅とまりけり船の腹　同（同）
罪深く夜も喰ふ蠅や瓜の皮　几董（井華集）
時にあらず蠅にあらず[illegible]の蠅　召波（春泥句集）
羽ネもいだ蠅歩行けり誰か所爲　同（同）
[illegible]までも[illegible]行きむ蠅の足　暁台（暁台句集）
蠅にくしこゝろの先へたち廻り　[illegible]（同）
目覚行けりうつゝに[illegible]し顔の蠅　闌更（半化坊發句集）
やれうつな蠅が手をする足をする　一茶（句帖）
なぐさみに蠅をとる也窓の蠅　同（七番日記）

蠅

行燈の蠅ハ寝耳にさはりけり　沙月（俳諧新選）

綻りやめはむしかる蠅や襴の上　在□（古今句鑑）

人々にすがり付けり舟の蠅　志碩（心一つ）

蒼蠅

蒼蠅やみそぎに捨る瓜の皮　宗円（壽宗円集）

蒼蠅の魚の目せゝるあつさ哉　德卿（三千化）

蠅の聲

蒸のぼす坑の息や蠅の聲　太祇（題林集）

蠅を追ふ

武士に蠅を追はする御馬哉　一茶（七番日記）

摺子木で蠅を追ひけりとろゝ汁　同（同）

蠅を打つ

しばらくは蠅を打ちけり韓退之　其角（五元集拾遺）

雪信が蠅うち拂ふ硯かな　蕪村（句集）

蠅打て留守居ながらや病上り　同（遺草）

蠅をうつ音も嚴しや關の人　太祇（太祇句選）

蠅をうつ音や隣もきのふけふ　同（同）

あさましく蠅打つ音や臺所　召波（春泥發句集）

蠅打てつくさんと思ふこゝろかな　成美（成美家集）

蠅をうつ小僧眠れり膝の蠅　尺草（古今句鑑）

蠅打て我身にかゝる埃哉　嵐流（故人五百題）

蠅打や座頭の側に妻一人　東潮（或時）

牛の蠅

苦しさや笹葉かけ行牛の蠅　九節（有磯海）

書額にしばしうつるや牛の蠅　几董（井華集）

參考　蠅　冬季は、成蟲のまゝ越年し、夏季に大いに蕃殖する。

いへばへ　學名 Musca domestica.　世界に共通の種で家屋内に最も普通な蠅。

ぎんばへ　學名 Lucilia caesar.　これも世界共通種　青藍色で金屬性光澤がある。

くろばへ　學名 Calliphora lata.　肉上に產卵する蠅、本邦に普通、體は灰黑色で、やゝ藍色の光澤がある。

べつかふばへ　學名 Eggizoneura formoza.　本邦に普通なる種、夏日糞上によく見られる蠅。頭部・脚及び翅が鼈甲色をしてゐる。

にくばへ　一名しまばへ、學名 Sarcophaga carinaria.　肉上に產卵すること、くろばへに同じいが、胸背に明かな三條の黑色縱條があるを以て、しまばへといふ。世界に共通な種。

瓜(うり)蠅(はへ)　蠅(うりはへ)　瓜蟲(うりむし)　うりは蟲(むし)

季題解說　主に瓜類の苗に著くを特徵とせる形螢に似たる蟲。黃褐色の光澤を有し、葉を網狀に蠶食する害蟲、捕ふる時は惡臭ある液を出す、瓜蟲とも云ふ。

例句

螻　印籠に螻の來てとまりけり　青々（妻　木）

參考事項　瓜蝿、うりはむし　はむし科、學名 Rhaphidopalpa femoralis 瓜の葉を食ふ害蟲。長さ八ミリ、概ね橙黄色の躰色をなせる小甲蟲。本州より臺灣まで分布す。

蚊（か）

蚊柱（かばしら）　藪蚊（やぶか）　縞蚊（しまか）　あかまだらか　しろすぢやぶか　くろやぶか
晝（ひる）の蚊（か）　蚊（か）の聲（こゑ）　鳴（な）く蚊（か）　蚊（か）の唸（うなり）　蚊（か）を打（う）つ　蚊（か）を燒（や）く

古書校註

【三才圖會】本草綱目、冬は蟄し夏出づ。晝伏し夜飛ぶ。細き身利き喙、人の膚血を咂ふ。大に人の害を爲す。木の葉及び爛灰の中に化生し、子を水中に産み孑孑蟲と爲る。仍て變じて蚊と爲る也。（略）凡蚊を避くる、概の鋸屑を燻すべし。

【滑稽雜談】蚊群り集りて、疊々として、窓間檐端にあるを蚊柱と稱す。又夏蟲など歌にも讀り。但夏蟲は種々の別侍る。

季題解釋　夏の夕より飛翔し人畜を螫し血を吸ふ雙翅の蟲、ぼうふり蟲の羽化せるもの。形小さく灰色、身細く脚長く二翅ありて鳴く、晝は隱れ、暮より出でて、群り飛び、鋭き嘴にて血を吸ふは普通の蚊にして、別に縞蚊あり、重に晝間陰鬱の地に現はれ、脚に白斑のあるもの、藪蚊とも云ふ。蚊柱は、蚊の交尾する時群飛するさま柱の如く見ゆるものをいふ。蚊の聲は、蚊の羽音の唸りをいふ。

作法注意　蚊を打つ、蚊を燒くといふことは嚴格に言へば人事ならんも、蚊の出盛を動かせたるものとして眼目に扱ふ。但し蚊遣や蚊帳などは、それぞれ人事季題として別項にあり。〔季題〕人事　蚊帳、蚊遣火。

例句

蚊

わが宿は蚊のちいさきを馳走也　芭蕉（小文庫）
かぎりなや蚊までもそだつ海の上　来山（續今宮艸）
山中の蚊は書中に食ひにけり　去来（去来發句集）
子や啼かん其子の母も蚊の食はん　嵐蘭（猿蓑）
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音闇し　蕪村（其雪影）
うは風に蚊の流れゆく野川哉　同（句集）
あまた蚊の血にふくれ居る座禪哉　太祇（句選後篇）
蚊はつらくて蚊遣いぶせき浮世かな　几董（井華集）
さゝき人に蚊の口見ゆる臈かな　召波（春泥句集）
植込の蚊に罵れる女かな　同（同）
蚊の居ぬも浮世の外二畳の月　喜太（[illegible]句集）

蚊

旅人に蚊か出たゝゝと歩く　一茶　（九番日記）
さし潮見て晴れば蚊の出たりけり　同　（七番日記）
わびぬれば蚊の入るかそもたゞむ也　成美　（成美家集）
芒から蚊の出る窓に泊りけり　巣兆　（曽波可理）
夕ぐれは蚊に浮世めく住居かな　蒼虬　（蒼虬翁句集）
藪の蚊にせゝらるゝ羽音かな　尺布　（新選）
赤む迄人をさしてや蚊の弱り　百明　（故人五百題）
蚊の一つ來そむる宵の曇り哉　猿雖　（類題發句集）
朝朝蚊は追々に隠れけり　可龍　（同）
蚊一つに青空ちかき夕かな　乙二　（をのゝえ草稿）
一つゝ殺せども蚊のへらざりき　子規　（全集）

蚊柱

草抜けばよるべなき蚊のさしにけり　虚子　（ホトヽギス）
蚊柱の礎となるすて子哉　言水　（俳諧五子稿）
蚊柱にゆめのうきはしかゝる也　其角　（五元集）
蚊柱や蜘蛛のたくみのうら手より　几董　（井華集）
蚊柱や棗の花の散あたり　曉臺　（曉臺句集）
蚊柱の外にものふなき榎かな　一茶　（題叢）
一つ二つから蚊柱となりにけり　同　（七番日記）
蚊柱や通つて見れば通らるゝ　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
蚊柱や草に蒸たるくさり水　土髪　（新選）
蚊柱や立つかとしては風の前　梧庵　（文庫）

藪蚊

笹の葉にふすべ出さるゝ藪蚊哉　也有　（蘿葉集）

晝の蚊

晝の蚊をのがれてとまる德利哉　蕪村　（遺稿）
ひるの蚊の貌に鳴き行く廣間哉　太祇　（句選後篇）
晝の蚊やだまりこくつて後ろから　一茶　（發句集）
閑靜をほめて晝蚊にさゝれけり　梅室　（梅室家集）
晝の蚊や机の下のかくし酒　同　（同）

蚊の聲

蚊の聲やふじの天邊の明殘り　許六　（五老井發句集）
蚊の聲やしらむにさむし軒の雨　沾德　（俳諧五子稿）
蚊の聲の中にいさかふ夫婦かな　李由　（有磯海）
蚊の聲す忍冬の花の散るたびに　蕪村　（句集）
蚊の聲は打ちも消さぬよ雨の音　太祇　（句選後篇）
蚊の聲の日口を過るうき世哉　召波　（春泥發句集）
蚊の聲の夕に雲をおこしけり　曉臺　（曉臺句集）
蚊の聲のむら竹洩るゝ烟りかな　闌更　（半化坊發句集）
竹切て蚊の聲遠き夕かな　白雄　（白雄句集）
蚊の聲に雨雲かゝる小村哉　子規　（全集）

鳴く蚊

雨の暮傘のぐるりに鳴く蚊哉　二水　（曠野）

例句

草蜉蝣　草かげろふ吹かれ曲りし翅のまゝ　草田男（ホト、ギス）
優曇華　うどんげに母の心の晴れにけり　諾人（同）

蚊蜻蛉(かとんぼ)

季題解説　蚊に似て大きく、脚甚だ細く極めて長し、常に窓紙或は障子につきて、飛び叩きゐるもの。一般には「かがんぼ」又は「かのうば」と云ふ。然れども實は種類を異にす。前後二翅、蜉蝣に似て薄弱なり、特に長き尾毛を有す。

異名　かがんぼ

例句

蚊蜻蛉　蚊とんぼの足揃ひゐるめでたさよ　諾人（ホト、ギス）
蚊蜻蛉壁に影して通りけり　麥入（木太刀）

かがんぼ

かのうば　きりうじかがんぼ

季題解説　雙翅類大蚊科に屬する蚊の稍ゝ大なる如き昆蟲、體は黄褐色にして頭圓く、複眼は大形にして濃青色を呈し、觸角は十二節より成り、下顎の鬚は觸角の如く細長なり。胸部は黑褐色にして背上に著しく突起す。透明細長なる一對の翅を有し、脚は著しく細長にして黑褐色をおぶ。成蟲は六月頃出づるも人畜を刺さず、幼蟲は稻麥の害蟲なり。参照 蚊蜻蛉(カトンボ)

蚋(ぶと)

蠛子(ぶと)　ぶゆ　ぶよ　黄脚蚋(きあしぶゆ)　口太蚊(くちぶと)　さあしぶゆ

古書摘録　【三才圖會】夏月山谷の中に在りて、蚊に似て小く、脚も亦短く、黑色、晝多く出て、人を螫す。腫れ痛むこと最も烈し。

季題解説　山野の溪流附近に居り螫して血を吸ふ小蟲、形蠁子の如く一分に滿たず、色黑く、羽薄く紅味を帶び、胸高し。比較的水清き原野に居りて、雌は人畜を襲うて血を吸ふ。痛痒甚だ堪へ難きもの、幼蟲は水に在りて蛹となりて羽化す。ぶゆ・ぶよと訛ることあり。

例句

蚋　黑塚や蚋旅人を追ひまはる　曉臺（曉臺句集）
いかにせん蚋の細道小雨降る　霞舟（類題發句集）
苦しさに休めば蚋のたかりけり　闌更（俳句大觀）
蚋よるやせみの小川は清けれど　翠室（同）
淺山を歩いて蚋に食はれけり　月斗（同人）
蚋や愛し重たき雲が山包む　可竹（同）
畦草に火がうつりけり蚋いぶし　白童（同）
紀の國の山も奥なる蚋燻し　九二緒（ホト、ギス）

【例句】

黴　黴鏡の目には見えぬや人の顔　鷄人（俳句大觀）

眼をねむつて黴鏡を見る學者かな　虚子（ホトトギス）

油蟲（あぶらむし）　蜚蠊（ごきぶり）　五器かぶり

【古書摘註】 【三才圖會】 蜚蠊、多く古き竈の間に生ず。（略）赤褐にして其氣（いき）や其色や油の如し。故に俗に油蟲と名く。夜は竄れて畫出づ。甚しき者は數百群を爲し、卵を壁に挾みあるく。（略）純白なるもあり。共に好く油紙に着く。（略）死し易く活き易し。踊殺（一）すと雖未だ頭を損ぜざれば輙ち活く。（略）油蟲を避くるの法、靑蒿（二）の莖葉を用ひて竈の間にささば則絶ゆ。

註（一）ふみにじり殺す。（二）靑いよもぎ

【季題解説】 厨房爐邊に出づる昆蟲、大さ五六分より七八分、赤褐色、翅あり、全體油の如き光澤を帶び、歩行極めて早く、これば觸るれば惡臭を放つ、大小數種あり。

▽五器かぶり　大形のもの、長さ一寸餘、前翅は黑く、後翅は扇形に蟲まれて淡褐色、食物の外塗物食器類をも嚙むよりこの名あり。夜多く出でて徘徊することあり。【參照】蚜蟲（ありまき）

【例句】

油蟲　油蟲古き娼家の臺所　月斗（同人）

大店の男世帯や油蟲　同（同）

五器かぶり　五器かぶり暑き厨を横行す　同（同）

蚜蟲（ありまき）　蟻卷（ありまき）　あぶらむし　あぶろじ

【季題解説】 草木の新芽等に群がり著きて黍粒ほどの綠色の害蟲、四翅六脚なれども、飛翔すること能はず僅に蠢動するのみ。時に翅なきもあり。尾端より甘き汁を滲み出すより、蟻多く集る、蟻卷の意なり。あぶらむしとも云ひ、あぶろじと轉訛す。

【實作注意】 あぶらむしの稱に、別に厨の邊に棲む油蟲あれば注意すべし。

【參照】油蟲（アブラムシ）

【例句】

蚜蟲　蚜蟲に弱りし樫や塀の陰　樵三（同人）

【參考事項】 蚜蟲　半翅目、蚜蟲科に屬する小なる昆蟲、植物の液汁を吸つて生活す。所謂處女生殖又は單爲生殖と稱へらるる生殖法をも營みて大いに蕃殖す。處女生殖とは、雌蟲が雄蟲と交尾せずして生殖を營むを云ふ。種類が甚だ多い。

蓼食ふ蟲（たでくふむし）　蓼蟲（たでむし）

【古書校註】 【栞草】 孔叢に蓼蟲の賦あり。言ふ、是の蟲幼にして斯の蓼に長じ、以て辛しとなさず。○世俗に蓼食ふ蟲も好き〳〵といへるは、是より出たる諺なるべし。

【實作注意】 初夏蓼の新葉を食ふ蟲、辛きものを好みて食ふ蟲、俚諺に「一蓼食ふ蟲も好き〳〵」とあるより想像してのものか。〔參照〕植物　蓼

【例句】

蓼喰ふ蟲

炎天に蓼食ふ蟲の機嫌かな　　一茶　（句集）

蜱（だに）　蝨（に）　壁蝨（だに）　牛蝨（うしだに）

【季題解説】 獸に居りて犬牛馬などに著き、皮に食入りて血を吸ひ生活する、大きさ麻實の如き小蟲。黒白の斑ありて蜘蛛の如き肢八本二個の鉤を有す、口器は甚し吸血に適す。常に林叢中に棲み獸類の來るに寄生す。飢ゑたるは扁く、飽きたるは圓く其の血に膨る。種類多し。

【例句】

牛蝨

牛蝨のつきたる草のいきれかな　　蛭兒　（同人）

【參考】 だに、蜱、四對の脚を有する小さな蟲で、幼時は、塵埃等の中に棲んでゐるが、成蟲となれば、諸種の獸類の皮膚に寄生する。雌蟲は宿主から吸血し、著しく嚢状を呈するやうになる。學名を Haemaphysalis flava といふ。この外に主として牛、馬等に寄生する牛蝨 Boophilus caudatus などがある。

蚤（のみ）　蚤の跡（あと）

【古書校註】 【滑稽雜談】 枕草子に云、蚤もいとにくし、きぬの下にをどりありきて、もたぐるやうにすると下略。此者は古には夏に不用也。當世夏とす。

【季題解説】 夏季、出でゝ人畜に寄き、血を吸ふ小昆蟲。身一分許、色赤く、背小さし、鋭き口器をもつ。六肢よく發達して、極めて迅く跳躍す。雌は雄に比して大きく、常に人家に棲みて人を螫し血を吸ふ。又た猫に寄生する種類あり。

【例句】

蚤

蚤跡に見ぬ朝戸は暮にけり　　來山　（續今宮草）

蚤虱馬の尿する枕もと　　芭蕉　（奥の細道）

蚤虱

こゝもはやなれていく日ぞ蚤虱　　惟然　（惟然坊句集）

蚤

牧の間に酒にや蚤も神無月	支考	（蓮二吟集）
江戸立や蚤にわかるゝ衣がへ	許六	（五老井發句集）
蚤に蚊に喰せて夜の衣さく	曉臺	（佐渡日記）
憂旅や蚤の飛込む汁の中	蓼太	（蓼太句集）
風も吹き月もさしけり蚤の宿	一茶	（享和句帖）
鶺鴒歩をあきてや蚤の跳ぶ	同	（同）
猫の子が蚤すりつける懐かな	同	（同）
むく〳〵起や蚤を振はせに川原迄	同	（同）
蚤とりて有明の月は出にけり	成美	（成美家集）
蚤に似て押へし蟲の哀也	百里	（或時）
蚤憎し寝ぬに明行く鐘の聲	乙外	（古今句鑑）
衝越や蚤に喰れつ高鼾	以席	（心一つ）
鍋の蚤やと計り膝あけり	旨原	（森隣集）
蚤に寝ぬ門の咄や又一人	百明	（献人五百題）
打つけに蚤のはなしや旅歸り	梅室	（梅室家集）
老が身をしたひ來にけん舟の蚤	乙二	（をのゝえ草稿）
蚤飛んで仲間部屋の人もなし	子規	（全集）
明よりをみなを蚤の食ひにけり	月斗	（同人）
切られたる夢はまことか蚤の跡	其角	（五元集）
あはぬ夜の恨の種が蚤の跡	秋色	（古今句鑑）
蚤の跡それも若きは美しき	一茶	（七番日記）
蚤の跡數へながらに添乳哉	同	（同）

蚤の跡

參考 蚤、隱翅目、蚤科に屬する昆蟲。其種類五百に達すと云ふ。雌は大で背が丸いが、雄は小で背が直線狀をしてゐる。人間の外、種々の獸にそれ〳〵固有の蚤が寄生してゐるが、この宿主は必ずしも嚴重に區別されるものでなく、他の種類にも移行する。人間につく普通の蚤を Pulex irritans と云ふ。

紙魚（しみ）

蟫（しみ）　蠹魚（しみ）（タウギヨ）　衣魚（しみ）（イギヨ）　白魚（しみ）（ハクギヨ）　蛃魚（しみ）（ヘイギヨ）　雲母蟲（きららむし）　きら　むし　箔蟲（はくむし）

古書校註 【三才圖會】本草綱目。此蟲衣帛、書畫を蠹ふ。（一）始めは則ち青色、老ゆれば則白粉あり。（略）其形稍魚に似たり。其尾も亦二岐に分る。故に魚の名を得たり。

註（一）むしくふ。むしばむ。

季題解説 書籍衣類などにわきて、之れを蝕害する銀色の小蟲。身細く、二三分、翅なく、全體銀白色の細鱗を被り、觸るれば箔を殘す。觸角長く、多

云ひ、その形に因て筬蟲とも云ふ。忌むべき臭氣を放つ、錢蟲とも云ふ。古名雨彥。

参考 やすで、馬陸、圓座蟲 げじげじに似てゐるが、脚は左程長くない。胴部は扁平でなくて圓筒狀。人が觸れると丸くなるを以て圓座蟲といふ。山地又は原野に於て落葉の下又は腐植物中に棲むを常とす、植物性の食物を取る。躰側から臭氣ある分泌液を出すので、生殖時期の如き群居してゐる際には、殊にその惡臭が著しい。とびやすで Strongylosoma tambanum などは普通種である。ternsi. しろやすで Strongylosoma at-

挾蟲（はさみむし）

蠼螋（はさみむし）　大挾蟲（おほはさみむし）　しりはさみ

古書校註

【三才圖會】 本草綱目 此蟲喜んで氍毹（ケムシロ）の下に伏す 故に此名を得。（一）（略）六足あり。足腹の前にあり、尾に叉岐ありて能人物をはさむ。其溺（二）人の影を射て人をして瘡を生じ、身に寒熱をなさしむ。

註（一）挾蟲の名は氍毹とかく この名は氍毹の下に住むによるとの意 （二）いばり、尿。

季題解説 尾に鋭き鋏を持てる昆蟲、濕地・瓦石の下等に棲むもの。體細長く一寸許、觸角長く、背黑く光り、體は扁太く節あり。六脚は黃色、尾は堅く鋏の如く、小蟲を捕へて背の方へ反り曲げてこれを食ふ。しりはさみ等とも云ふ。

参考 挾蟲。革翅目に屬する昆蟲で、尾端に鋏を具へ、攻擊防禦をする。塵埃又は土の中に生活してゐるが、往々人家に浸入し、蠶などを食ふことがある。甲蟲に似て、前翅は小で硬く、後翅は大で膜狀をなしてゐる。本邦には數多の種を產するが本州に普通なのは、オホハサミムシ Labidura japonica. で、躰長三センチに達し、赤褐色又は暗褐色をしてゐる。

謝豹（しやへう）

季題解説 支那にて傳ふる所、小なる怪蟲なり。此蟲人を見れば前脚を以て面を覆ひ羞る貌をなすといふ。酉陽雜俎に小さき蝦に似て、毬の如く、地下數尺の所に棲み、地に出でて時鳥の聲を聞けば則ち死すとあり。**参照** 時鳥（ホトトギス）

例句

謝豹　目にものを見ずれば謝豹死にけり　月斗（同人）
　　　謝豹より倘羞かしき娘哉　同（同）

尺蠖（しやくとりむし）

しやくとり　寸取蟲（すんとりむし）　杖つき蟲（つゑつきむし）　招蟲（をぎむし）　屈伸蟲（くつしんちう）　土壜わり（どびんわり）

季題解説 匍行するとき體の中部を高く揚げ、屈伸しつゝ進むさま、指にて尺を計るが如きより名づけたる蟲。形細長く、大なるは二三寸、綠・灰・褐

色等あり。南端に五對の足をもち、腰を屈め、首尾相接し又伸びて進む。夏草木の枝に棲みて、静止する時は尾端にて體を支へ、小枝の如き狀をなす。嫩葉を食ふ害蟲。後に蛾に化す。略してしやくとり、又、寸取蟲・杖つき蟲ともいふ。

例句 尺蠖

尺蠖は風に吹かれて太りけり　月斗（同人）
尺蠖を礫につけて話しゐる　四方哉（同）
尺蠖は風に吹かるゝ眞似もする　みづほ（ホトヽギス）

參考 尺蠖、屈伸蟲・寸取蟲・杖突蟲。古語に、をざむし（招蟲）といふ。桑・眞弓・榆・柳・松等の葉を食害し、特有の屈伸移動運動を行ふ幼蟲の總稱である。この成蟲は、しやくとりが（尺蛾）と稱し、數多の種類がある。

くはえだしやく Hemerophila atrilineata. 幼蟲は桑の葉を食害し、靜止する時は、軀を斜にし、其狀恰も枯枝の如く見ゆるため、これに土壜をかけ、これを轉落破壞することがあるので、土壜わりとの俗稱がある。成蟲は六月乃至九月に現はれ、翅は灰白色、褐色の細斑散布す。前翅の中央及び後翅の外縁赤褐色を帯ぶ。

ゆうきまだらえだしやく Abraxas miranda. 幼蟲は眞弓・榆・柳等を食害し、成蟲は五月乃至八月現はれ、軀は黄色で黒點があり、翅は白色で暗黒色の點を數多有し、前翅の基部及び後角に近き内縁には赤褐色の大斑がある。

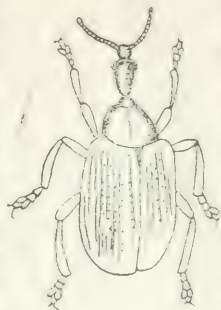
とんぼえだしやく Cystidia stratonice. 幼蟲は梨・梅・櫻等の葉を食害す。成蟲は六七月現はれる。動作は蜻蛉の如く、晝間飛翔するので、[illegible]たれてこの名がある。軀は黄色、黒斑があり、翅は白色地に、黒色の廣き帯狀部を中央及び外縁に有する。

落し文　時鳥の落文　鶯の落文

解說 植物の葉を卷きその中に住みて加害する葉卷蟲（その一種）の卷き葉。一種、手紙を文を捲きたるに似たるよりいふ。時鳥鳴きその卷葉の内部を投き破みて落したるもの、時鳥の落文ともいふ。栗の葉・椿の葉・櫻の葉に多し。

例句 落し文

[illegible]に見しが是なり落し文　青々（[illegible]）
落し文在家の與に拾ひけり　活東（木太刀）
[illegible]落し文　[illegible]人（同）
半木の森の宮居の落し文　夜野火（ホトヽギス）
中堂の茶屋の床几に落し文　都穗（同）

〔參考〕 おとしぶみ、落文、栗・楢・樺等の葉が、筒狀に卷かれたまゝ落ちてゐるのを、俗に一うぐひすの落文一又は「ほとゝぎすの落文」と云ふが、これは或種の甲蟲の仕業で、雌が産卵の際に、葉を横にかみきり、筒狀に卷いて、その中に一個づゝ卵を産みつける。この葉は、そのまゝ搖籃となつて枝についてゐることもあるが、地上に落ちることもある。これが即ち落文である。かやうなことをする甲蟲を動物學者はオトシブミの名で呼んでゐる。學名は Apoderus Jekeli といひ、孵化した幼蟲は一センチに達し、やゝ紡錘形をして居り、少し腹側に彎曲してゐる。頭部は淡褐色であるが、あとは概ね淡黄土色である。成蟲は概ね黒色、頭部は雄では長い倒圓錐狀、雌ではほゞ卵形。體長一センチ。樺太から九州、朝鮮まで分布する。尚、本種の外にうすあかおとしぶみ、うすもんおとしぶみ等同樣の習性と類似の形態とを有する種類が數多ある。

毛蟲（けむし）

鵝蟲（かはむし）　烏毛蟲（かつすけむし）　はうじやうむし　じこうばう　信濃太郎（しなのたらう）　松毛蟲（まつけむし）　金毛蟲（きんけむし）　茶毛蟲（ちやけむし）　梅毛蟲（うめけむし）　雀の巣器（すゞめのこき）

〔古書校註〕 【滑稽雜談】 梅・桃・杏子等の樹、ことに石榴の樹に多し。其窠のごとき物、俗に雀の巣器と云ふ。これ毛蟲の巣也。此蟲を雀の啄む故にしか云也。四五月に生じ盛夏羽化する也。【年浪草】 鵝蟲又烏毛蟲と名く。蛓蟲・蛅蟲、蓋し毛蟲の通稱也。

〔動物學說〕 全身に剛き毛のある蝶類の幼蟲。黑色又は褐色、闊く長く大なるは二三寸にも及ぶ。全體を覆ふ剛き毛は人を螫す。夏日樹上に棲み葉を食荒す害蟲なれど、後に羽化すれば可憐なる蝶となる。

〔實作注意〕 種類により大小あり、俗に松に居るを松毛蟲、梅に居るを梅毛蟲と云ひ馴はせり。又これを驅除するに火を點じ燒くことあり。毛蟲は又地方によりて方言あり、京師にてはハウジヤウ、堺にてはジコウバウ等の如し。

〔例句〕

毛蟲

佗ぬれど毛蟲は落ちぬ庵哉　（西吟與行）　鬼貫（鬼貫句選）

袖笠に毛むしをしのぶ古御達　蕪村（新花摘）

朝風に毛を吹れ居る毛むし哉　同（同）

我水に隣家の桃の毛蟲かな　同（同）

季題解説 地上に出づれはすくみて動かざるより名づく、一くろた 蟲の幼蟲なり。芋蟲に似て長さ一寸ばかり、白色にして首赤く、尾黒く、背に線あり。堆肥の中又は桑畑の肥土等に棲み、草根・蔬苗を害す。おむしとも云ふ。

例句

蠐　鉢にとりし畠の土に蠐かな　零餘子（枯野）

夜盗蟲（やとう）

季題解説 一種の蛾の幼蟲、五月頃より孵化して畑作物を害す。芋蟲の小さきに似て、最初は綠色後には土色に變じ、晝は土中等に潜み、夜は出でて蝕害す。老熟すれば土中に蛹となり、秋羽化して卵を生み又大根・甘藍等を犯す徹底的の害蟲なり。

實作注意 此害蟲甘蔗畑にも盛につく、農家にては麥刈後十數日毎宵出でて一齊に之を捕殺す、數多の燈は野の間に動いて夏の夜の偉觀たり。伊豫地方の風習。

例句

夜盗蟲　松明に人鬼の如し夜盗蟲とる　紫溟（カラタチ）

夜盗蟲の燈に遠く人語や闇の中　同（同）

蛆（うじ）　蛆蟲（うじむし）

古書校註

【滑稽雜談】和名の胆は蛆におなじ。此者の生ずる所一般ならず（一）。俗にはうじと稱す。變じて蠅となる事然り。故に夏月に許用す。餘月（二）も蛆は生ず。

註（一）同じでない。（二）夏月以外の他月

季題解説 蠅の幼蟲なり。水中若くは腐敗物中に蠅の産せし卵より發生し腐敗物を食ひて發育す。體形は圓筒狀にして、幾多の環節より成る。尾を有すれど、頭及脚を有せず、體を左右に動搖して進行す。次で蛹に變する時は俵狀の硬皮に圍まる。此蛹、再び變じて蠅となる。参照 蠅へ

例句

蛆　蛆湧くや魚屑すてし茗荷畑　青外（[illegible]祭）

蛞蝓（なめくぢ）　なめくぢ　なめくぢら

古書校註

【滑稽雜談】時珍本草に曰、（略）説文に云ふ蝌蠃、皆殼を負ふ者を蝸牛といふ。殼なき者を蛞蝓と曰ふ。

【年浪草】本草綱目に曰、蛞蝓、一名附蝸、蜒蚰螺。（略）（）倭名抄に曰、

兼名苑に云、蛐蜒(一)一名蚰蜒。方言に云、北燕に之を蛆蚭と謂ふ。（和名奈女久知良）

註（一）蚰蜒は蛞蝓の意

季題解説 蝸牛に似て殻なく側面の跡に銀白色を殘す蟲。長さ二三寸、背灰黄白色にして黒斑あり、頭に肉角ありて、驚けば縮む。常に陰濕の地を好みて棲み、晝伏して夜出で、腹部の伸縮によりて粘液を出して匍ひ行きたる跡に雲母の如き痕を殘す。夏の雨後に多く見るもの。なめくぢりと云ひなめくぢらとも訛る。

例句

蛞蝓

阪本の宿にとまりけるに火たき尾の隅に具足と太刀あり

なめくぢり這て光るや古具足　嵐雪（玄峰集）

五月雨や鮓のおもしもなめくぢり　鬼貫（鬼貫句選）

何事を壁に書てやなめくぢり　春波（類題發句集）

身の果はいづくなるらん蛞蝓　牧人（或時）

もちの樹の幹光らせつ蛞蝓　月斗（同人）

蝸牛（かたつぶり）

上牛兒　山蝸（クワン）　陸螺（リクラ）　蟠牛（ハンギウ）　でゞむし　でんでんむし　でいろ　かたつむり　かいつむり　まいまい　まいまい　まいまいつぶり　まいまいつぶら

古書校註

【三才圖會】蝸牛（俗云、蝸蟲）四の角ありて、二は短し。其短き者は角に非ず、露眼の如き者也。

【日次紀事】四月より五月に至り、霖雨あらば則蝸牛多く出で、或は牀に登り、或は壁に着す。二(一)高く登れば則其涎涸て盡き、隨て落つ。其貝に在るや、人見れば則頭角を縮す。兒童相聚りて謂ふ出出蟲蟲、出ざれば則釜を打破んやと爾云ふ。此蟲の貝俗に釜と稱す。

註（一）おびやつく（一）鼯（はねずみ）が敵に追はれば畏縮する所から、畏れちゞむ形容

季題解説 夏の日濕氣に乗じて草木に登り、雨露を嘗め、新葉を食ふ。晴るれば葉の陰に隱るゝ、渦卷形の殻を負うて這へる蟲。殻ははじき貝に似て薄く、色淡黄なるを普通とすれど、種々あり。行く時は殻を負ふ。身はなめくぢに似て角の如き眼を出して振り歩く。でゞむし・でんでんむし・まいまいつぶりとも云ふ。

實作注意 此蟲は名多し、地方によりては、まいまい・かいつむり、とも云へり。蝸角・蝸殻あれば[illegible]も、又蝸牛と音讀するは俳句には面白からず。

例句

蝸牛

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　芭蕉（[illegible]）

文しにふまるな庭のかたつぶり　其角（五元集）

かたつぶり酒の肴に這はせけり　同（同）

白露や角に目をもつ蝸牛　嵐雪（玄峰集）
蓑虫の角やゆつりし蝸牛　葉堂（俳諧五子稿）
ころころと笹こけ落し蝸牛　杉風（杉風句集）
笹の葉に何と寝たるぞ蝸牛　支考（蓮二吟集）
橋に来て踏かみふまず蝸牛　桃隣（古太白堂句選）
蝸牛折角這てこけにけり　移竹（玄　選）
蹇の三熊もふでやかたつぶり　蕪村（新花摘）
闢越るいざり画や蝸牛　同（同）
點滴にうたれて籠る蝸牛　同（五車反古）
こもり居て雨うたがふや蝸牛　同（句集）
かたつぶり何おもふ角の長みじか　同（同）
雨にとまる玉水の宿かたつぶり　同（同）
蓑虫はちゝとゝ鳴を蝸牛　同（遺稿）
摺鉢をつかめは夜への蝸牛　同（夜半叟句集）
壁塗の来ぬいとまありかたつぶり　同（同）
親と見え子と見ゆるありかたつぶり　太祇（句稿）
夜を寝ぬと見ゆる歩みや蝸牛　同（太祇句選）
ありわひて這うて出でけむ蝸牛　同（同）
怠らぬ歩みおそろしかたつむり　同（同）
引入て夢見顔なりかたつぶり　同（同）
折あしと角をさめけむ蝸牛　同（同）
かたつぶりとある人の許へ
来し跡のつゞくが淺まし蝸牛　同（同）
今朝見れば夜の歩みやかたつむり　同（同）
角出して這はでやみけり蝸牛　同（同）
[illegible]芭蕉庵に[illegible]
角文字のいほりに隠すかたつぶり　几董（井華集）
三日月の木ずゑに近し蝸牛　同（同）
ひよんの葉の落てあしくや蝸牛　同（同）
かたつぶりさとも閉じあり所　召波（春泥発句集）
夜べの雨馬蘭に殖ぬ蝸牛　同（同）
竹の子に脱捨られて蝸牛　也有（蘿葉集）
さみだれの隙や家こしの蝸牛　同（同）
箏に蝸牛の[illegible]
盗人の抓む夜もありかたつぶり　同（同）
傘にたゝみこみけり蝸牛　同（同）
四五寸に夜道明たり蝸牛　同（同）
たのみなき角としおもへ蝸牛　暁臺（暁臺句集）
登りつめて滞たり竹の蝸牛　蘭更（半化坊発句集）

又蚰蜒を畏る。敢て行く所の路を過ぎず、其身に觸るれば則死す。又蝦蟇を畏る。又雞喜んで蜈蚣を食ふ。（略）（四）本朝にも南方に大蜈蚣あり、一尺有餘の者多し。俗に相傳へて曰、蜈蚣は毘沙門天の使也と。其由る所をしらず。

註（一）本草綱目に見ゆ　（二）尿、いばり。（三）きれたゞる　（四）貝安の自記

季題解說　數多く足を持てるより百足とも書かるる蟲、多く石垣の間・樹の根・床下など陰濕の所に棲み、體偏平にして赤褐色、數十の環節より成り、長さは五六寸にも達するものあり。一對の鬚と岐れたる尾をもち、脚は二十對、その第一對は鉤形になりて毒を持つ、これに刺さるれば疼痛甚し。口器發達して蟲類を捕食す。

例句

蜈蚣
風薫の手拭蜈蚣居たりけり　　麥門冬（同　人）
百足
夜の百足寫經の机這ひにけり　　月　斗（同　　）
百足ばさと夜の疊に落ちにけり　　雷左右（同　　）
打水に又現はるゝ百足かな　　未曾二（ホトヽギス）

螻蛄（けら）

出典・考證

【三才圖會】　立夏の後夜に至りて則鳴く、其聲蚯蚓の如し。（略）此蟲五つの能有りて一技（一）を成さず。其五能は、能く飛べども屋を過ること能はず、能く緣れども木を窮る能はず、能く游げども谷を渡る能はず、能く穴すれども身を掩ふ能はず、能く走れども人を免る能はず（二）。（略）按るに螻蛄能く小鳥の病を治す、鶯を養ふもの、もし煩有れば則螻蛄を取りて餌とすれば卽時に活く、神效あり。諺に百舌鳥喜べば則螻蛄憤るとは是なり。

註（一）原本技にげいと振假名す、技の誤。（二）以上本草綱目による。

季題解說　田圃等の土中四五分の下に穴居して農作物の根を害ふ。形蠶に似て暗灰色の蟲。額丸く全身軟かき短毛に被はる。前翅は短かく後翅は長く恰も尾の如く見ゆ。晝は土中に潛み夜出でて飛び、燈火に來ることあり。これに觸るれば惡臭を發す。

作法注意　この蟲の雄は地中にありて鳴く、ビヽヽと低音に沁み入る如く聞ゆ。古來蚯蚓鳴くと思はれゐるは、實は此蟲の鳴けるを誤まれるなり。

【參照】秋　蚯蚓鳴く（なつ）

例句

螻蛄
畦塗るや螻蛄の這ひ出し鍬の先　　草　牛（同　人）
泣きじやくる女に螻蛄が燈をまはる　　朝　冷（同　　）

蟻（あり）

大黑蟻（おほくろあり）　山蟻（やまあり）　黑蟻（くろあり）　熊蟻（くまあり）　赤蟻（あかあり）　家蟻（いへあり）　蟻の門渡り（ありのとわたり）

季題解說　夏盛んに出でゝ食を貯へ、冬は蟄居せる小昆蟲、小なるは一二

分、大なるは七八分、黒きあり、赤きあり、體部の構造ほゞ蜂に同じく、朽木又は土中に巣を營みて群棲す。雌雄及中性と見るべきもの〻多くあり。雌雄は生殖に際し、二對の翅を生じて飛び、空中に交尾す。最も普通の家蟻の外種類甚だ多し。

實作注意 羽蟻といふも異種にあらず、蟻の成長期に於て羽蟻となるのみ。

[參照] 羽蟻(ハアリ)　蟻の塔(アリノタフ)

例句

蟻

蟻二三ついてゐるなり琥珀糖　月斗（同人）
つぶされし蟻漸くに甦り　同（同）
蟻の道髒の向ふを通ひゐる　千燈（同）
蟻の國の事知らず掃く箒哉　虛子（ホトヽギス）
蟻吹けば尻上げて撓む陽かな　千路（同）

參考 蟻　普通人間の眼に觸れるのは蟻の社會中、職蟲ばかりで、一生涯生殖をせず、たゞ勞役に服する。オホクロアリ Camponotus herculeanus japonicus 犬形の蟻で本邦到る處に産す。イヘヒメアリ Monomorium pharaonis は普通家屋内に侵入する、赤味を帶びたる蟻。

羽蟻(はあり)　飛蟻(はあり)　螘(はあり)　はり

古書校注 【三才圖會】按るに、は蟻(はあり)羽蟻也、人家古き松柱に聞蠶(アマ)を生ず。其蟻細(アリノコ)白、蠶粟子の如し。（略）蘩で黄赤に變じ、翼を生じ、再び黒に變じて、群飛す。奈何ともする能はず。相傳て咒歌を書て、其柱にはれば則蠶恐て除去す。屢試て驗あり。其歌未詳人の祕する所と云ことを知らず。はありとは山に住むべきものなるに里へ出るはおのが誤り。

季題解說 蟻・白蟻類の交尾期に際して翅を生じたるものを云ふ。初夏の頃よく見受くる所也。多くは朽木等に巣食へるより起ちて、空中に煙の如く群飛して交尾を行ふ。交尾を終へたる後は地上に落ちて翅を失ひ、土中に入りて産卵するものとす。白蟻とも書く。

實作注意 羽蟻は白蟻と同義なりとせる書あれど、蟻類の有翅のものを指すを正しとす。

[參照] 蟻(アリ)　蟻の塔(アリノタフ)

例句

羽蟻

けふは今日の羽蟻出しまふ柱かな　百池（俳句大觀）
水桶の尻干す日なり羽蟻とぶ　一茶（七番日記）
羽蟻出る迄に日出たき柱かな　同（嘉永板發句集）
朽れはてし梠と思へば羽蟻哉　芋蛆（續新俳句集）
やかて此堂を引へき羽蟻哉　表流（同）
地藏堂雷雨晴れたる羽蟻哉　月斗（同人）

羽蟻　雨乾く杉皮堆や羽蟻立つ　月斗（同人）
飛蟻　飛蟻とぶや富士の裾野の小家より　蕪村（句集）
すゑ摘の母屋の柱に飛蟻かな　几董（井華集）
取あへず箕をもてあふぐ飛蟻哉　百明（故人五百題）
飛蟻　皆柱叩けば散ぞ行く　季遊（俳諧新選）

〔参考〕 羽蟻　蟻には雄蟲・雌蟻・職蟲の三階級があつて、社會をつくつてゐるが、夏季になると、翅を有する雄蟲と雌蟲とが數千疋、巣から飛び出して空中で交尾する。これを羽蟻といふ。交尾後、地上に降りて來るが、雄は間もなく死に、雌は翅を脫落して、產卵する。

蟻の塔（ありのたふ）　蟻塚（ありづか）　蟻塚（ありづか）　蟻垤（ありづか）

〔季題解説〕 蟻の地下に巣を作る時、地中の泥土を掘り出して地上に積み、塚の如きものを作れるものを云ふ。全體堅くなりて大小の穴をなすこと海綿の如く多く灰色なり、高さ三四尺にも作ることあり。蟻塚とも云ふ。〔參照〕蟻（アリ）　羽蟻（ハアリ）

〔例句〕
蟻の塔　花苔に塔つむ蟻のすさみ哉　旨原（俳句大觀）
蟻塚　蟻塚やうつぼ柱のあぶれ水　青々（妻木）

〔参考〕 蟻塚、蟻の塔、地上に堆く出來た蟻の巣又は土中に蟻が巣を造る際、地上に運び出して堆くなつた土の山を云ふ。塔とは云へいづれも甚だ低いものを指すのであつて、アフリカなどに產する白蟻が造る數メートルの高塔の如きを意味するのではない。

蟻地獄（ありぢごく）　擂鉢蟲（すりばちむし）　あとずさり　あとござり蟲（むし）

〔季題解説〕 樹の下・緣の下等の乾ける砂に擂鉢形の穴を掘り、その底にもぐり棲みて、辷り込む蟻などの小蟲を捕ふる蟲、擂鉢蟲とも云ふ。形蜻取蜘に似て大なるは六七分、鉤形の顎ありて蟲を捕ふ。その動くときは常に前進することなく後退するより、「あとずさり」とも呼べり。後化してうすばかげろふとなるもの。

〔實作注意〕 異名甚だ多けれども、擂鉢蟲以外は地方的にて一般に通ぜず。

〔例句〕
蟻地獄　夕立水つく驚きや蟻地獄　月斗（同人）
蟻地獄松風を聞くばかりなり　素十（ホトトギス）

〔参考〕 蟻地獄、ほしうすばかげろふ（Glenuroides japonicus）の幼蟲。春夏の候、擂鉢狀の窪みを土砂中に作り、その中央に潜伏し、小昆蟲を捕食する。この土中より出して地上に置けば、後退するを以て、あとずさりと云ふ。體長一センチ半。

蜘蛛の子

土蜘蛛　袋蜘蛛　絡新婦　蜘蛛の太鼓　女郎蜘蛛　蜘蛛　蟏蛸　蜘　草蜘蛛　壁錢　蠨蛸　䖣蜴、

古書校註

【年浪草】　時珍が曰、按るに、王安石が字說に云、一面の網を設け物に觸て後之を誅す、誅義を知る者也、故に蜘蛛と曰ふ（略）○「草蜘蛛」藏器が曰、蜘蛛（一）孔穴の中及び草木稠密の處に在りて網を作る。蠶絲の如く帶（二）を爲り、中に就て一門を開きて出入す。○「壁錢」時珍が曰、皆窠形を以て名を命ずる也、大さ蜘蛛の如くにして形扁く、斑色、八足にして長し。○藏器が曰、蜘蛛に似て白幕を作すこと錢の如し。楷壁の間に貼す。北人呼んで壁繭と爲す。○「蠨蛸」藏器が曰、形蜘蛛に似て穴の上に窠を爲る。穴の上蓋あり穴の口を覆ふ。○「䖣蜴」時珍が曰、䖣蜴卽爾雅に土蜘蛛なり（三）、土中に網を布く。○「絡新婦」俗に云、女郎蜘蛛。○「蟏蛸」等の數多皆初夏に子を生ず、恰も罌粟子の如し　○藻鹽草に曰、蜘の子は生れ出て風にふかれておりおりにわかるゝよしいへり。○六帖おなじ世にむまれあひても蜘の子のちりぢりにこそ又わかるらめ　衣笠内大臣。○三才圖繪に曰、蜘蛛來て人の衣に著く、まさに親しき客至ることとあるべし。云々○先代舊事紀　吾昆子之可來夜也篠蟹之蜘蛛之歳儀豫兩明白然矣（四）　衣通姬。

【滑稽雜談】「女郎蜘蛛」李氏が三才之書に云、草上の花蜘蛛、絲最も毒あり。能く纏て小尾を斷つ。（略）和に云ふ女郎蜘なり。

註（一）[illegible]、[illegible]、[illegible]（二）[illegible]（三）[illegible]（四）わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも。

季題解說　蜘蛛は卵生にして變形することなく、蛻皮するのみにて子となる。初夏の頃孕み、卵嚢の隱れたるを、形容して蜘蛛の太鼓といふ。その嚢破るれば、中に無數の子ありて群り散るさま、罌粟粒を撒けるが如し。蜘蛛の子を散らすと譬に云へり。

實作注意　古來蜘蛛の子をのみ夏季の定めとすれど、蜘蛛の多くは夏出でて跋扈するものなれば、單に蜘蛛或は蜘蛛の網も亦夏季とすべき賦。蠅取蜘蛛は別項に說く［參照］蜘蛛の網。蠅虎。

例句

蜘蛛の子の[illegible]　桃隣（古、白[illegible]）

蜘の子はみなちりぢりの身すぎ哉　一茶（七番日記）

蜘の子や[illegible]の先にうき思ひ　[illegible]

蜘の子や[illegible]習ふ[illegible]　[illegible]

蜘の子やおのおの巧持去らむ　[illegible]

蜘の子の雨にぬれけり古扉　波弓（鶏音）

袋蜘　夕暮にわかれ出でけり袋蜘　其杉（俳句大觀）

參考　蜘蛛　四對の脚を有し、他の蟲を捕へて食ふ。車輪狀の巣を張る蜘蛛の中では、ぢよらうぐも（Nephila clavata）甚だ普通。卵を晩秋産み、卵嚢に入れて樹木に附着させる。晩春又は初夏に孵化して多數の蜘蛛の子が四方八方に這ひ出て來る。

蜘蛛の圍（くものゐ）　蜘蛛の巣（くものす）　蜘蛛の網（くものあみ）　蜘蛛の絲（くものいと）

季題解説　樹間或は庇などに蜘蛛の尻より出づる絲を張りわたして網形の作る巣をいふ。網の張り方には車網・筋網・扇網等蜘蛛の種類に依りて異る。網の絲は粘着性に富み、昆蟲のこれにかかるを待ちて捕へ食ふ。

實作注意　絲は間も無く粘着性を失ひ、又汚物等かかりて蟲を捕ふるに役立たざる時は又新に巣を作る。蜘蛛の種類に依りては昆蟲を捕ふるに役立たざる單に住所としての巣を作るものあり。蜘蛛の圍が夏期に屬するかは多少の異見あり。參照　蜘蛛の子（夏）

例句
蜘蛛の圍　喧嘩蜘蛛圍を立ち放れ向ひけり　田士英（太白）

蠅虎（はへとりぐも）　蠅取蜘（はへとりぐも）

古書校註　【年浪草】時珍が曰、小蜘蛛、專ら蠅を捕へて之を食ふ。之を蠅虎と謂ふ。【滑稽雜談】寛文年中世人專ら此者を愛して、飼馴しめ、蠅をとらす事を戲とす。奇は愛より生ずる習ひ、蠅虎の灰白色、種々に變じて殊色をなして、金銀をもつて是を求め、器に畜へ、籠に收めて祕藏せり。大に笑つべし。

季題解説　巣を張ることなき蜘蛛の一種、體の大さ二三分、前後に長く黑く白紋あり、三列に並びて八箇の眼あり、肢短かけれどもよく發達し、擧動輕快なり。巧に跳ね、又走り回りて敏捷に蠅を捕食するより、この名あり。常に家屋の壁・戸障子等に居るもの。參照　蜘蛛の子（夏）

例句
蠅虎　風蘭や蠅虎が日にいさむ　松露（同人）
蠅取蜘　夕暮や蠅取蜘の日のひかり　至江（俳句大觀）

蜥蜴（とかげ）　石龍子（とかげ）　龍子（とかげ）　青蜥蜴（あをとかげ）

季題解説　形守宮に似て細く腹部にて太く、膚は蛇の感じある四肢の爬蟲、全體に細かき鱗あるもの或は粟粒狀を成せるもあり、口小さく多くの細かき齒ありて蛇の如き枝に裂けたる舌を持てるもあり、尾は切れ易けれども、再び生ずる性を有す、昆蟲を食とし、物に驚けば巧に疾走して草叢に逃げ

隠る、種類多し。石龍子とも書く。

【例句】

蜥蜴　大蜥蜴見し驚や菊の芽に　太郎（同人）
　敷石をとび越え遊ぶ蜥蜴かな　虚子（虚子句集）
　刈麥の日に走り出し蜥蜴哉　消月（ホトトギス）
石龍子　出ずとよい石龍子や人をおびやかす　来山（続いま宮草）

【参考】　とかげ Eumeces latiscutatus. 蜥蜴目中の短舌類に屬し、舌が短く僅に口外に出し得るに過ぎぬ。體背面は暗綠色で、鮮綠色のやゝ太い縦線が三本ある。體側は淡綠色、腹面は淡黄褐色である。體長十九センチに達す。長き尾を有し、敵に尾を押へられると、自ら尾を斷つて逃走し、失はれたる尾の末半を再び生ずる。本種は本州・四國・九州に分布してゐる。

守宮（やもり）　壁虎（やもり）

【季題解説】　夏の夜門燈などに徘徊するを見る形蜥蜴に似たる蟲。とかげより扁たく尾短かし。普通灰色なり、四肢に五趾を具へ各趾褶襞ありて、壁を攀ぢ天井を倒ふ。常に床下壁間等に棲み、夜出で、燈に近づき小昆蟲を捕食す。時に一種の聲を發す。形醜くく人の忌み嫌ふものなれど無害なり。壁虎。

【例句】

守宮　頭あげて今や蛾にらむ守宮哉　山靜（ホトトギス）
　守宮ちゝと戀うてなき寄る月の壁　蕪子（同　）
壁虎　梅雨の戸を開くに落ちし壁虎哉　紫江（同人）

【参考】　守宮（Gekko japonicus）本州から台湾まで分布す。背面暗灰色、黒色の不規則な帶状斑紋がある。指の腹面には一列に十個内外の指間襞があつて、壁・天井に吸着し、夜になると、蟲を食ふ。やもりとは家を守るの意であるといふ。

蠑螈（ゐもり）　井守（ゐもり）　あかはら

【季題解説】　野井戸・池・溝等に居りて形守宮に似たるもの、水中に棲めども肺を持ちて呼吸す。背黒く腹赤、黒斑を交ふ、四肢歩行に適せざれども、尾ひらたくして游泳に適す。井守とも書き「あかはら」とも云ふ。

【実作注意】　此の蠑螈の交尾したるものを黒焼にしたる粉末を秘かに戀人に振りかくれば其人我に靡くとの俗説あり、「井守の黒焼」といふ。

【例句】

蠑螈　浮み出て我を見てゐるゐもりかな　虚子（ホトトギス）
　藻に潜む時に蠑螈の腹赤し　俳小星（同　）
　[illegible]し蠑螈浮く　一果（同人）

蛇（へび）

へみ　ながむし　くちなは　青大將　黄頷蛇　さとめぐり　ねずみとり　赤楝蛇　山楝蛇　熇尾蛇　日計　縞蛇　烏蛇　あまがさ蛇　えらぶうなぎ　金蛇　銀蛇

古書校註

【年浪草】多識篇に曰、金蛇（古加禰倍美）銀蛇（志呂加禰倍美）蝮蛇（久知波美）先代舊事記に曰、高津宮の御宇天皇田道臣に命じて蝦夷を擊たしむ、田道夷の爲に殺さる。其從士玉杵、田道の尸（一）を盜み、之を懷にして縊死す。夷賊之を憐みて墓を造りて其尸を納む。蝦夷の首之を聞きて大に怒り、衆を率ひて來り此墓を破る。俄に大蛇墓中より出で、蝦夷の首を咋み、衆數を咋む。

註（一）死體。

季題解說　くちなは・ながむし古くはへみと云ふ。細く長く繩の如く尾次第に細し、四肢なし。全身細かき鱗にて被ひ、腹部のものは運動を助く、鱗の外皮は年々脫け更る、口廣く舌細長く出し入れ神速なり。蛙鼠の類の生けるを嚥下し、死物は之れを取らず。大小種類多し。その普通なるは左の如し。

▽青大將　長さ二三尺より五六尺、色少し綠を帶び、所々に斑紋あり。里近く住み、時に人家に入りて梁を傳ひ鼠を追へることあり。人に害することなし。黄頷蛇。

▽赤楝蛇　長さ二三尺より四五尺、全身に黑赤色の細かき斑あり。山林又は溪間に住み、擧動敏捷なるもの、人に害せず。

▽熇尾蛇　赤楝蛇と同屬、餘り大ならず一二尺にとゞまる。灰褐色に黑色の細かき斑點あり、頸に白帶を繞らす。主として野生の小獸を捕食するもの。この蛇に嚙まるれば即日死するとて、日計の名を傳ふれど、實は毒なし。

▽縞蛇　長四五尺に達するものあり。青大將に似たれども、褐色にして四條の暗色なる縱縞あり。その體色特に黑きを、烏蛇と云ふ。何れも害なし。なめら。

其他毒を持てるものに、蝮・飯匙・倩あれど別項に說く。

實作注意　此類總て冬季は地中にありて蟄居す、冬季を參照すべし。〔參照〕蝮蛇　飯匙倩　蛇衣を脫ぐ　春―蛇穴出　秋―蛇穴入

例句

蛇
蛇の目の何歟悟りて早合點　支考（藪二吟集）
草の葉の蛇の空死したりけり　一茶（句帖）
針の如き火を吐きにけり蛇の舌　月斗（同人）
炎天に燒けたる砂丘蛇長し　同（同）

蛇取が來てゐる村の晝寐時　初　子（同　人）
蛇追うて泳げる犬を見てゐたり　虛　子（ホトヽギス）
蛇の草戰がして逃れけり　靄　人（俳句大觀）

參考　蛇　本邦に產する蛇の種類は多數あるが普通なのを擧げると次のやうである。

青大將 Elaphe climacophora.　北海道から九州まで分布す。ねずみとり、やじらめ、なぶさとも云ふ。長さ二メートルに達する最も普通の蛇。頭部は青綠花を帶び背部は暗褐綠色、大抵二乃至四條の縱線がある。腹面は淡青灰色。

しまへび Elaphe quadrivirgata.　北海道より九州まで分布す。體は褐色を帶び、背面に四本の黑褐色線がある。蛇屋に店先に置いてある生きた蛇は大抵これである。

やまかゞし Natrix tigrina.　本州より九州まで分布す。叢間に棲む、極めて普通な蛇で、體背面は暗青灰色、暗深綠色で、胴部には大形の黑斑が大抵四列に並び、やゝ虎皮狀を呈してゐる。尙胴部側緣に赤色の斑點が不規則に並んでゐる。體長約一メートル。以上三種は無毒蛇である。

まむし（其項參照）

は　ぶ（其項參照）

あまがさへび Bungarus multicintus.　臺灣全土に產し、往々人家に入り來る。頭部の形は青大將の如くで小。背面は藍黑色又は小豆色、やゝ不規則な白色の帶が凡そ四十六あり。毒性强し。

えらぶうなぎ Laticauda semifasciata.　犬吠岬以南の暖流區域に產する海產毒蛇。長さ二メートルに達す。體の後半は扁平となつて游泳に適してゐる。全身やゝ褐色を帶びた灰色で、黑灰又は暗褐色の環狀紋が四十內外ある。

蝮（まむし）　蛇

蝮（まむし）　蝮蟲（まむし）　はみ　くちばみ　たぢひ　蝮酒（まむしざけ）

古書校註

【三才圖會】　蝮蛇大抵長き者二三尺に過ぎず。凡諸蛇は頭より尾に至るまで次第に纖く、午蒡根の如し。惟蝮蛇は木の枝の如くにして尾端に至りて急に纖し。又諸蛇は卵生す。獨り此は胎生して、子を口より吐く。然れども利牙（一）あれば、易く產せず、七八月將に產せんとする時自ら牙を脫せんと欲し、好みて樹をかみ、人を咬む。（註）人之を殺すに宜しく其頭を擣くべし。もし身尾を打ちて未だ頭に及はざれば、則悲鳴す。其聲を聞きて群類來り集る。之を奈何ともすること無し。蓋し此實物に非ず（二）。其地の草莖化して萃蛇の如く然り。其猛忿知るべし。

註（一）[illegible]の牙ではない。

季題解說　毒を持てる蛇、長さ一二尺、頭三角形にして、體に一種特異の錢

形の斑紋あり。上顎に一對の牙を具へ、毒線を有し、物を咬めば毒液を出す。山間の樹陰・草叢の濕地を好み、人を見て逃げざるため、往々之を踏みて咬まれその劇しき毒に斃さるゝことあり。〔參照〕蛇

例句

蝮蛇　蝮取る人早見えず草の雨　虚子（ホト、ギス）

蝮酒　としよりや野良の疲に蝮酒　青縷（同）

參考　まむし　蝮 Ancistrodon blomhoffii. 北海道から九州まで分布。頭部が三角形で、頸が細い。背面は褐色を帶びた赤色又は黑色で、黑縁を有する暗褐色斑紋が多數ある。黑燒又は蝮酒として藥用に供する。毒はあまり烈しくない。毒蛇は其頭が三角形であると俗間に云ひふらされてゐるのは、マムシについて云へることで臺灣産の毒蛇中には頭部が三角狀でないものがいくらもゐる。

飯匙倩（はぶ）　波布（はぶ）　臺灣飯匙倩（たいわんはぶ）

季題解說　有毒蛇の一種。臺灣琉球に産す。長さは五六尺にも達し、頭は飯匙の形に似て左右に膨れ、全身灰褐黄色にして黑紋あり。上顎に毒牙ありて其毒慘烈、嚙まるゝ者概ね斃る。常に樹上・草叢に潜みて人畜を咬む。波布とも書す。〔參照〕蛇

例句

飯匙倩　飯匙倩取に逢ひし林を見かへりぬ　英池郎（ホト、ギス）

參考　はぶ Trimeresurus flavoviridis. 菴美大島、沖繩本島に分布す。背面は淡褐灰色、暗褐色の長き斑點が、兩側にある。腹面は白色。人畜を害す。

たいわんはぶ Trimeresurus mucrosquamatus. 臺灣中部以南の山地に多く、夜間人家に入り來ることがある。背面は黄褐色又は青褐色。背縁の兩側には大黑褐色の斑點がある。毒強し。

蛇衣を脱ぐ（へびきぬをぬぐ）　蛇の衣（へびのきぬ）　蛇の殼（へびのから）　蛇の脱殼（へびのぬけがら）　蛇の蛻（へびのもぬけ）　蛇皮（じやひ）　蛇殼（じやかく）　龍子衣（りうしい）

古書校註　【年浪草】本草綱目に曰、蛇皮・蛇殼・龍子衣等の名あり。

季題解說　蛇は一年に一度その上皮を更む。大抵仲夏の頃、物に觸れて脱ぎ、その脱殼を草木屋墻等に殘す。薄く、色白く、光澤あり。之を蛇の脱殼・蛇の蛻・蛇の衣といふ。〔參照〕蛇

例句

蛇衣を脱ぐ　脱てから猶おそろしや蛇の衣　幕女（伊丹發句合）

蛇の衣　蛇の衣ぬぎかけし薄哉　曉臺（曉臺句集）

恐ろしや釣鐘草に蛇の衣　會北（類題發句集）

蛇の殼

退隱

蛇の見返りもせぬ袴かな　杜口（俳諧古選）
古婆々がかたにかけたり蛇の衣　一茶（嘉永板発句集）
雨の日や泡とも消えず蛇の衣　泝風（俳句大觀）
あさましや櫛笥の中の蛇の衣　子規（全集）
蛇の衣傍にあり憩ひけり　虚子（ホト、ギス）
酒倉の間や蛇の殼光る　梨洋（同人）

龜の子

錢龜

季題解説 また錢龜といふ。石龜の幼なきもの。龜は水邊の土砂中に穴を掘りて卵を産み埋む。卵は五六十日にし孵化す、稚兒の大きさ錢の如し。夏日水盤等に之を養ふ。**参照** 春—龜鳴く

例句 錢龜

錢龜や青祇も知らぬ山清水　蕪村（句集）
錢龜や石垣づたひ泳ぎをり　きよなみ（ホト、ギス）

夏蛙

夏の蛙

季題解説 別種あるにあらず、普通の蛙の夏期に於けるものを云ふ。**参照** 青蛙　雨蛙　河鹿　蟇　春—蛙

例句 夏蛙　夏の蛙

刈藻つむかたに聲あり夏蛙　支朗（墜花集）
春は鳴く夏の蛙は吠えにけり　鬼貫（俳諧七車）

青蛙

季題解説 蛙の一種にして多く樹上に棲む。雨蛙に似て背面青緑色なれども雨蛙の如く色を變ぜず。指先に大なる吸盤と、指間に大なる蹼とあり。

實作注意 雨蛙とよく混同され易し注意すべし。**参照** 夏蛙　雨蛙

雨蛙

土鴨　雨乞蟇　雨乞蟲　あまごひ　梅雨蛙　雨蛤　樹蛤　枝蛙　枝の蛙　梢の蛙

古書校註

【清増鑑談】多識篇に云、土鴨。今案ずるに阿末加倍留。（一）和俗の云ふ、雨蛙または梅雨かへるなどこれらの類也。

【年浪草】本草に陶弘景が曰、鼃大にして青背なる者あり、俗に土鴨と名く、其の鳴くこと甚だ壯んなり。一種、小形のよく鳴く者を鼃子と名く。（略）（二）大和本草に曰、土鴨あまかへると云ふ、木葉も小なり、色青し。木の枝にすむ

と、云々是枝蛙（二）なり。

【三才圖會】蝦蟇の如くにして小く、背青緑にして腹白く、大なる者寸半に過ぎず。將に雨ふらんとして則ち鳴く。故に雨蛙と名く。俗傳て云、蛙變じて守宮と爲る。其の變ずるや、屋壁を抱きて、敢て動かず。雨露を吃せずして三旬許にて色を變じ、尾を生じ以て去る。

註（一）日本で普通言いふ。（二）枝蛙はエダノカハヅともいひ、土鴨枝に住む故に此の名ありと。

季題解説 夏の日樹枝に居る蛙の一種、形小さく色淡緑なれど、居所によつて忽ち茶褐色に變ずることあり。口尖り氣味にして、腹白く、指に黒き吸盤あり、能く樹に登り葉に止る。雨の降らんとするとき、貝殻を擦る如きよき聲して鳴く。冬は土中に蟄居す。

實作注意 雨蛙の異名を青蛙・枝蛙となせども、青蛙は雨蛙に酷似せる別の一種なり。又一般文獻には水田・池沼に棲む殿様蛙を青蛙となせり。甚だ紛はし。又枝蛙はもと、枝にゐる蛙の意にて、

日盛や枝の蛙の落る音　　秋房（古選）
朝日さす小枝の蛙青山椒　　九峰（新虚栗）
枝に蛙來鳴くや梅の雨近し　　玉圃（古今句鑑）

など詠みしを、後に枝蛙と約して用ゐたりしも、背く疑義を存す。參照 夏蛙　青蛙

例句

雨蛙
火をうてば軒に鳴きあふ雨がへる　　丈草（丈草發句集）
麥わらの家してやらん雨蛙　　智月（猿蓑）
雨蛙芭蕉に入りて吹かれけり　　其角（錦繡緞）
若竹の聲や音かす雨蛙　　桃隣（別座敷）
脚のばす篠の濡葉や雨蛙　　左蓮（桃の首途）
淋しさや虎が泪の雨がへる　　土芳（類題發句集）
雨蛙飛すおふりて栗の花　　荷白（故人五百題）
橋立は雨にかくれて雨蛙　　花蓑（ホトトギス）

河鹿（かじか）

河鹿蛙（かじかがへる）　錦襖子（きんおうし）

古書校註 【俳諧歳時記】蛙の類最佳きもの也。好みて山川清流の中にあり。その色蒼黑にして向ふの足に水かきなく、指の先みな丸し。夏の末より秋鳴也。又一説に河鹿は近來の稱呼或は西行に歌ありといふものは無稽の妄談信ずるに足らず。

註 秋八月の部に出し、秋の季とす。但此引用は春二月の條に見ゆ。杜父魚（大和本草）、黄顙魚（和漢三才圖會）をかじかと呼べど、此は魚類にして、河鹿とは異る。

季題解說 河鹿蛙の略。山川の清流中に棲む蛙の一種。普通蛙よりは形小さく體痩せ、褐色黒味がちにして斑あるものあり。腹部は白く喉に多數の黒點あり、足細く水搔を張り指頭に吸盤を具ふ。初夏の頃より石上に出でて抑揚ある清澄なる聲にて鳴く、涼風自ら湧くの思ひあり、都人之れを飼養してその聲を愛す。丈極めて小さく八九分なるは雄にて聲最もよし、一二寸なるは雌なり。

實作注意 漢名錦襖子、古くは「かはづ」と詠みしもの、後にかはづは蛙と混同せられしより、後世別に河鹿と稱へしものなり。以前の書には鹿の文字よりしてか秋季に分類されゐるものなれど、正しくは新綠の頃より鳴き出づる夏季のものにて、秋にはその聲を納めて鳴き居らず。冬は蟄居す。

【關聯】 夏蛙 青蛙 雨蛙 蟇 春―蛙

例句

河鹿

河鹿鳴いて石ころ多き小川かな　子規（全集）
川上は茂りに暗し河鹿鳴く　月斗（同人）
室生寺の一宿河鹿澄みにけり　同（同）
イみつ河鹿きく也朱の橋　代兎（同）
遠河鹿鳴くにおどろの芒の雷　風可（同）

蟇（ひきがへる） 蟾（ひき） 蟾蜍（ひき） ひき

古書校註

【抱朴子】 蟾蜍千才、頭上に角あり、腹の下に丹書あり、肉芝と名づく。よく山精(一)を食ふ。人これを食ふことを得れば仙となるべし。術家(二)取り用ひて霧を起し、雨を祈り、兵(三)を辟け、縛を解く。今技ある者蟾を聚めて戯とす、よく指使(四)をきく。

註 (一)山の精氣。(二)仙術を行ふ人。(三)武器。(四)いひつけ、指命。

季題解說 蛙の一種にして最も大形なるもの、殊に腹太し。背灰色と褐色斑の如くなりて甚醜し、動作甚だ鈍く行くこと遲し。藪・溝・床下など陰濕の地を好みて棲み、夜出でて蚊などの小蟲を吸ひ、晝は土石の間に伏して姿を見せず。

實作注意 蟇は冬眠の蟄居より出で、交尾するに際して靜に鳴くもそは早春の頃なり。蟇鳴くを夏に詠めるはいかゞか。蟾蜍或蟾の字を用ゆ。【關聯】 夏蛙 春―蛙

例句

蟇

思ふことだまつてゐるか蟇　曲翠（[illegible]）
つき出すや樋のつまりのひきがへる　好春（[illegible]）
[illegible]を[illegible]く口へきしたり蟇　一茶（おらが春）
蟾我をつくづくねめつける　同（七番日記）

蟇

そこ退て竹植ゑさせよ蟇　傳堂（芹堂集）
燈ともせばあちら向きけり蟇　松子（俳句大觀）
ひとつ葉を踏み挑めけり蟇　都雀（鳳凰集）
夕立のあとやきよろりと蟇　米儀（同　）
長生をする詮もなしひきがへる　乙二（松のうへえ草稿）
蟇弄ばるゝ詮なかり　月斗（同人）
蟇祭太鼓を聽きゐる歟　同（同　）

蟾

這出よかひ屋が下の蟾の聲　芭蕉（猿蓑）
蟾をふんで夜叩の花を憎みけり　其角（虚栗）
月の句を吐てへらさん蟾の腹　蕪村（文集）
垣こえて蟇のさけ行蚊遣かな　同（句集）
まかり出たる此の藪の蟾にて候　一茶（おらが春）
蟇出て我に向へり木下闇　尺艾（鶴音）
壕端や蟇の出游ぶ月夜よし　月斗（同人）

參考　蟇、内地では二月頃一時冬眠からさめて産卵し再び冬眠し、初夏の候から這ひ出し、晩秋にまた冬眠して越冬する。蟇は、その棲息地を記憶する本能があるので、同一の蟇が一箇處に毎夜現はれることは稀でない。

蟇には次の數種がある。

ひきがへる　Bufo formosus.　富士以東の産、前肢が長く指が細長い。蹼が甚だ短く第一指は第二指よりも短い。

にほんひきがへる　Bufo vulgaris japonicus.　富士以西の産、第一指は第二指とり長いか又は同長。

あじあひきがへる　Bufo bufo asiaticus.　朝鮮及び北支那の産。腹面は白色又は小黑點がある。

くろぶちひきがへる　Bufo melano-tictus.　臺灣の平地産。本州の蟇より小、頭部背面に黑色骨質隆起帶がある。

たかさごひきがへる　Bufo bankokensis.　臺灣山地産、體は暗褐色で、頭頂に黑色の隆起帶がない。

田鼈（たがめ）　河童蟲（かつぱむし）　高野聖（かうやひじり）　どんがめむし　どんがめ

季題解説　水中に游泳せる蟬の形に似たる昆蟲、河童蟲とも云ふ。體は汚れし褐色、前肢一對は蟷螂の如く鎌形をなし、小魚・蛙の類を捕食す、後肢にて泳ぐ。常に沼・池・溝等に棲み、夜に入れば水中より出でて飛翔し、特に光力強き燈火に集來す。その背の紋様、高野僧の笈を負ふに似たりとて、高野聖とも云はれ、俗にどんがめとも云ふ。

例句

田鼈　水口をつゞき落ち來る田鼈かな　秀峰（ホトトギス）

泥の中高野聖は裏返り　盆城（同）

龍蝨（げんごらう）　源五郎

季題解説 水中に棲む甲蟲、形稍兜蟲に似て角なく、青味ある赤銅色にて少し短毛あり、後脚は扁たく游ぐに適す。常に沼池に棲みて晴れたる夜外を出でて飛翔す。

例句 源五郎　光りつゝしづみゆくなる源五郎　玲人（ホトヽギス）

孫太郎蟲（まごたらうむし）　蛇蜻蛉（へびとんぼ）

季題解説 蛇蜻蛉と稱する昆蟲の幼蟲、乾して小兒の疳藥とするもの。初夏の頃より出づ。山間の清流石礫の間に棲み、體長一寸五分許り、少し扁たき圓柱、彩頭胸黒く他は灰色、胸に三對の肢をもてるもの。成蟲は蜻蛉に類して翅廣く、暗褐色半透明にして脈多し。頭部蛇に類するより、「蛇蜻蛉」の名あり、水邊に居りて時に燈火に來ることあり。

水馬（みづすまし）

水澄（みづすまし）　水黽（みづぐも）　河蜘蛛（かはぐも）　鼈寶　鼈蟲　しをんしほ　あめたか　けんぼ　つほう　あめうり　かつをむし　ゑびす蟲　あめんばう　まひまひむし

古書校註

【栞草】漢名水黽　わくかせわ　其身細長く、五六分ばかりの黒き蟲也。長き四足あつて、身は水につかず、水上を駈ること馬のごとし。依て水馬（一）と名づく。畿内西土にて鼈寶、江東の兒童シヤンシホといふ。筑紫にてアメタカといふ。其臭ひ黄煎の臭也。關東ケンボツホウ。○其色黒赤にして鼈甲に似たり。故に鼈蟲といふ。一說に此蟲味甘く飴に似たり。故に飴賣。○今江戸の方言にアメンボウといふ。

【滑稽雜談】大和本草に云、（略）又一種蜻蜓と化する者、西土の俗たうめと云ふ。（略）（二）愚按るに京都にて水馬或はゑび蟲と稱して、夏月の間、池水などに飛て、後は蜻蜓となる者ならし。

註 （一）大和本草に無之を黄へば死すと云ふ。（二）其說の自說なり。京都にて水馬と稱するものは鼈寶、アメタカ、アメンボウと稱する水馬と異ると註記す

季題解説 水蜘蛛ともいひ、形蜘蛛の如く水面を直線にツイ／＼と運動する蟲、關西にては之れを「みづすまし」と云ひ、關東にては主に「あめんばう」と云ふ。體細く長さ四五分、色帶黒く小白斑あり、腹部は銀白の微毛に被はる、細き翅あり、或は之を缺くもあり。肢細長く蜘蛛のそれに似たり。常に靜流池沼の水面を滑走す。觸れて他の水に移動することあり。體に水飴の如き臭ひあるより「あめんばう」と云へり。

實作注意 關西にては此蟲を「みづすまし」と云ひ、古くより漢名水馬の字

を用ゐ、全般的に作句され居れど、「みづすまし」は學名鼓蟲（まひく）の事にして、今は明かに區別され居れり。〔季重〕鼓蟲（夏）

例句

水馬

しづまれば流るゝ足や水馬　太祇（新選）

水馬足をのばして休みけり　麥翅（同）

水馬流れんとして飛び返る　子規（全集）

夕暮の小雨に似たり水すまし　同（同）

まひ〳〵は舞うてゐるなり水馬　盧子（ホトヽギス）

風吹いて一度に飛べり水馬　泊月（同）

水馬雨の如くに飛びにけり　月斗（同人）

參考　みづすまし（畿内）、あめんぼう、水馬、學名 Aquarius paludum. 池・沼・小川等の水面上に群居し、夜は空中を飛翔す。三對の長き脚を以て水面の上層、所謂水の皮上に、體を支へ、且つこの肢を動かして水面上を移動す。其狀恰も馬の驅るに似てゐるとて水馬といふ。躰長一センチ半、黑色を呈し、細長し。樺太から臺灣まで廣く全土に分布してゐる。

鼓蟲（まひまひむし）

舞々蟲（まひくむし）　渦蟲（うづむし）　水澄し（みづすまし）　かいもちかき　ごまいり　さとうめ　ごきあらひ　こまひむし　じやうかきむし　まぐさむし　おほみづすまし

古書校註

【栞草】わくかせわ　圓（マロ）く扁き黑き蟲、豆ほどあり。水上に浮旋（ウカ）りて、止まらず。筑紫にてカイモチカキ、江東の俗ゴマイリといふ。按ずるに是獨（コ）樂（マ）まはしの訛言なり。背純（マツ）黑く腹は淡赤し。關東にて水すまし又サウトメといふ是也。然るに得て水すましは水馬也と思へる輩多し。

季題解説

形小さき黑豆の如く水面に曲線を描いてクル〳〵廻る蟲。東京にては之を水澄（みづすま）しと云ふ。體長二分五厘許、黑く光澤あり。背に甲ありてそれに洸あり。常に池沼の水底にかくれ、時々水面に浮びて旋ること急にして水面に渦狀を呈す、渦蟲とも云ふ。

實作注意

此蟲東京にては水すましと云ひて、畿内の水馬に紛はし。

五月雨や精出す池の水すまし　吟江（心の花）

日の暮や流の溜水すまし　超波（句鑑）
我先に來てまはるなり水馬　雄淵（俳句大觀）
など卽ち鼓蟲なれば注意すべし。【同題】水馬みづすまし

【例句】

鼓虫　まひ／＼や雨に散かく／＼たゞひ哉　子規（全集）
舞々　舞々や水にものかく風情あり　垂耳（類題發句集）
まひ／＼にぽかと浮きたる蛙哉　供子（ホト、ギス）
まひ／＼の藻に突當り／＼　丁魚（同）
舞々蟲　世もかくや舞々蟲の夜も晝も　望翠（類題發句集）

【參考】まひ／＼、水すまし（東京）甲蟲と同樣に鞘翅目に屬する昆蟲で、水面を旋回しつゝ游泳するので、まひ／＼又は水すましといふ。體は瓜實狀、扁平圓滑で、三對の肢が凡て扁平となり游泳に適してゐる。複眼も上下二部に分れ、上部は空氣中を、下部は水中を見るに都合のよいやうになつてゐる。數多の種を產す。みづすまし（Gyrinus curtus）體長六ミリ半、黑色。樺太からカまで分布す。おほみづすまし（Dineutes marginatus）體長約一センチ、體の上面黑く青銅狀の金屬光澤を有し、下面は黃褐色。體上面の兩側に黃色の條がある。樺太から臺灣まで、日本全土に分布してゐる。

孑孑（ぼうふら）　棒振蟲（ぼうふりむし）　ぼうふら　みから

【古書校註】【三才圖會】常に一曲一直、棒を振るの狀の如し、故に之を名く。日を經て、羽化し、蚊となる。

【季題解說】蚊の幼蟲。水中に浮沈游泳するさま、棒を振るごときより棒振蟲と云へり。黑はみたる赤色にして一二分の小釘の形、尾に岐れあり、身に細き毛あり、靜かなる時は水面に浮び、驚くときは沈む。後蛹となるを丸子才と云ひ、更に羽化して蚊となりて水を飛び去る。ぼうふらと訛る。

【同題】蚊

【例句】

孑孑　ぼうふりや水の行へのいづこ迄　嵐雪（類題發句集）
ぼうふりの水や長沙の裏借家　蕪村（新花摘）
孑孑やてる日に乾く根なし水　太祇（太祇句選）
孑孑やなまなか澄めるくされ水　同（同）
ぼうふりや蓮の浮葉の露の上　同（同）
孑孑の天上したり三日の月　一茶（おらが春）
孑孑のひとり遊びやぬり盥　同（句帖）

ぼうふりや昔は誰が水鏡　蝶夢（類題發句集）
ぼうふりのふるや金魚の鼻の先　湖十（觀髓草）
ぼうふりも降たか雨の溜り水　梅室（梅室家集）
孑孑や汲んで幾日の閼伽の水　子規（全集）
孑孑や須磨の宿屋の手水鉢　同（同）
孑孑や松葉の沈む手水鉢　同（同）
一伸一縮に孑孑の天地あり　月斗（同人）
孑孑の甕を叩いて水汲めり　南鷗（同）
ぼうふらのかなしきかぶりふりにけり　福々（ホトヽギス）

棒振蟲

けふの日棒振り蟲よあすも又　一茶（おらが春）

蛭（ひる）

ひいろ　縞蛭（しまびる）　馬蛭（うまびる）　山蛭（やまびる）　かさびる　笄蛭（かうがいびる）　雨蛭（あまびる）　血吸蛭（ちすひびる）　ひいる

古書校註

【三才圖會】本草綱目。蛭水中に在る者を水蛭と名け、草土に在る者を草蛭と名く。狀、蚓（一）に似て扁し、能く牛馬人の血を咂ふ。（略）性、石灰食鹽を忌む。

註（一）蚯蚓。

季題解説 水田・溝・堀などの水中に棲み形稍筳の葉に似たる蟲。體扁たく、伸縮して游泳す。前後と腹に大なる吸盤をもち、人畜に吸着きて血を吸ふ。種類多し。蛭は地方に依りひいる又はひいろとも云ふ。

▽縞（しま）蛭（びる）　稍綠色、背に黃なる五つの條あり、血液を吸ひとるより外科用にさるゝもの、一に醫用蛭といふ。

▽馬（うま）蛭（びる）　黑褐色にして普通のものより大きく三四寸あり、多く溪流等に産して、動物質を食とするもの、くまびるとも云ふ。

▽山（やま）蛭（びる）　形大きく、深山幽谷の叢に潛み、野獸にくひつき、往々人にも吸ひつく怖るべきもの。

▽笄（かうがひ）蛭（びる）　馬蛭に似て頭の形丁字の如し、常に山中の樹上に棲み、雷雨の時よく地に落つ。

例句

蛭

草取の脛の血悲し蛭の口　爲有（類題發句集）
蛭の口搔ば蟬鳴く木かげ哉　士朗（枇杷園句集）
一たばね蛭の血ぬぐふ早苗哉　彌子（句兄弟）
存分に食入りし蛭とらへけり　浪都（故人五百題）
片足に蛭踏み落す藻刈哉　猿左（鶴音）
葉を落ちて火串に蛭の焦る音　蕪村（新花摘）

人の世や山は山とて蛭が降る　一茶（七番日記）
杖の先洗へば泳ぐ蛭二匹　虛子（ホトヽギス）
堰の水流れ越したる蛭ありぬ　同（同）
浮草を押しながら蛭泳ぎをり　素十（同）

船蟲（ふなむし）　海蛆（かいそ）

季題解說 海岸の岩壁舟揚場等に群棲して、好みて船底に附き、無數の小孔を穿つ蟲、形草鞋に似て一二寸、長き觸角あり、色青黑く光澤ありて、五對の脚の外、腮脚も步行の用をなし、走ること極めて速かなり。穿がれるは音を立てて散る。

例句

舟蟲

舟蟲に夜明の潮のよせ來り　凡水（同人）
舟蟲や燈臺守の通ふ徑　秋海堂（同）
舟蟲や潮ふくれくる雁木穴　雪明（同）
舟蟲の提燈這へる夜釣哉　李雨子（ホトヽギス）
舟蟲の大きな親の子澤山　今夜（同）
舟蟲やゆけばゆくほど岩疊　晋平（同）

參考 ふなむし、節足動物門、甲殼綱、等脚目。學名 Ligyda exotica. 船蟲又は海蛆と書く。北海道より九州に至るまでの海岸に廣く分布し、往往屋內又は船中にも入り來ることがある。石の下などに潛んで越冬し、四月より九月までを産卵期とす。盛んに蕃殖する群棲性の動物である。

さし

季題解說 やゝ少さき蛆の如き蟲にして、腐敗せる魚類に湧く。[illegible] 蛆（うじ）

參考 さし　鉤吻蟲、魚類に寄生する蟲。Echinorhynchus. 體は蛆の如き外觀を呈し、體の前端に吻と稱する出沒自由な突起があり、その表面に小さき鉤が並んでゐる。

緋鯉（ひごひ）　斑鯉（まだらごひ）　白鯉（しろごひ）

季題解說 養ひて觀賞用にする鯉の變種。全身赤きもの灰白に朱を混へたるもの等、すべて泉水に放ちて愛玩するのみ、食用にならざるものなり。

實作注意 鯉はその性、夏は水の淺きに游泳して食を漁るものなれば、人目にふれ易く、金魚と均しく夏季のものとす。又その小なるは金魚と同じく市中にこれを賣る。[illegible] 金魚[illegible]　冬　寒鯉[illegible]

例句

緋鯉

大緋鯉浮いて雨濁る水寬し　虛子（ホトヽギス）
釣殿の橋をくゞる緋鯉かな　楮月（五月雨句集）

源五郎鮒（げんごらうぶな）　堅田鮒（かただぶな）　夏頭鮒（こうづぶな）

古書校註

【三才圖會】鮒、江州湖中の者第一となす。大なる者一尺許り、世、源五郎鮒と稱す。膾（一）及鮓に作り、或は炙り煮る。共に佳きを以つて上品となす。深秋、其鰭紅に變ず。之を紅葉鮒と謂ふ。

註（一）なます。

季題解說　琵琶湖に產する「まふな」の大なるものを源五郎鮒と稱す、大なるは長さ二尺幅六寸に至る。首小さく體は銀色を帶び、味美なり。湖國特產の鮒鮓は之を用ふるもの、周年漁獲せらるゝも四月より七月迄を盛期とす。

實作注意　源五郎鮒の名は堅田の漁夫に源五郎なるもの常に大なる鮒を漁獲して、安土城主（或は天皇とも云ふ）に獻ぜしによると。或は云ふ「昔日佐々木の家臣に錦織源五郎、每年大なる鮒を捕り之を獻じ云々」と本草啓蒙に見えたれど何れに依るか確ならずとなり。堅田鮒（カタダブナ）とも云ふ。參照　濁り鮒（ニゴリブナ）

例句

堅田鮒　堅田鮒雨のあがりて日に少な　涼舟（同人）

參考　源五郎鮒・堅田鮒。近江堅田附近で多產する鮒。この琵琶湖の源五郎鮒は品質の良好なことと、年額十數萬圓に上るその夥しい產額とで甚だ有名である。但し源五郎鮒が固定した品種であるかどうかは疑はしい。

濁り鮒（にごりぶな）

季題解說　梅雨の頃は鮒の產卵期とす、この時鮒は增水と濁りに乘じて小流に泝り或は水田に入りて產卵す、これを又手網にて盲掬ひに捕ふるを「濁りをすくふ」と云ひ、その鮒を濁り鮒と云ふ。參照　源五郎鮒（ゲンゴラウブナ）

例句

濁り鮒　濁り鮒腹中卵ばかりかな　王樹（同人）
田さかりの水にのりきつ濁り鮒　同（同）
濁り鮒網もてぬまでかかりけり　涼舟（同）

參考　濁り鮒・ごみ鯰。梅雨の頃、河水がその量を增し濁つてゐる時に、流れ下る魚を網で捕へるのを濁りを掬ふと云ひ、この時得た魚を濁り鮒又はごみ鯰と云ふのである。卽ち鮒・鯰に限らず、はや・こひ・うぐひ等の種々の淡水產魚類が、これに含まれる。

鯰（なまづ）　梅雨鯰（つゆなまづ）　ごみ鯰（なまづ）

古書校註

【三才圖會】相傳へ云ふ、近江の湖中に大鮎（一）多く有りて中秋月明なる

夜百千群をなして竹生島（二）の北洲の沙上に跳ぶ。蓋此辨財天愛する所なり。未だ其よる處をしらず。又古語に曰、鮎竹に上るとは、竹滑り鮎粘る故に、決して上る可きの理なし。

註　（一）なまづ。鯰とは俗字にて鮎を正字とす。（二）竹生島辨天あり。

季題解説　長き鬚を有ちて運動不活潑なる淡水產の魚。頭大きく扁たく、口濶く長短二對の觸鬚あり、腹大きく、下體狭くして尾は側扁鰭なし、鱗なく甚だ粘滑なり。河川に居るは黒く、池沼に居るは黄を帶ぶ。腹は何れも白く、常に泥濘の底に棲み、多くは夜出でて、浮游するを夜釣又は簗を用ゐて獲る。梅雨の頃を產卵期とし「梅雨鯰」とてこの魚の旬とす。又こゝ魚の河川に棲むもの、梅雨增水の濁りに乘じて、水田小溝等に產卵のため泝りくるを捕ふるを「ごみ鯰」と云ふ。

例句

鯰・

薊かげ迯げし鯰を見付たり　泊雲（ホトトギス）

くらがりの桶の中なる鯰かな　九江路（同）

まんだけに色を變へたる鯰かな　九二緒（同）

片髭のなくてをかしき鯰かな　鴨石（同）

闇打の綱にかゝりし鯰かな　涼舟（同人）

ごみ鯰

ごみ鯰田の樋の口につまりけり　雀村（同）

山椒魚（さんせううを）

大山椒魚　半裂　はんざけ　箱根山椒魚　富士山椒魚　霞山椒魚

古書校註　【三才圖會】鯢は洛の山川及丹波但馬の處々に之あり。頭面、鮎に似て、身、守宮蟲に似る、略山椒の氣あり、故に山淑魚と名づく。（略）日本後紀に云、延曆十六年八月掖庭の溝の中に魚を獲、長さ尺六寸、形常の魚に異る。

季題解説　蠑螈に似たる醜き姿を持つ溪流に棲む兩棲動物。一に「はんざき」といふ。大なるは三四尺に達し、四肢あり。溪流巖石の下又は洞窟の內に棲み、水陸兩棲にて魚・蟹・蛙類を捕食し、我國及支那の特產とす、種類あり。

例句

山椒魚

溜りに朽木隠すや山椒魚　青蛙（同人）

山椒魚かくるゝ巖の深山南衆　花山（同）

参考　山椒魚　いもりと同じく、兩棲類中の有尾目に屬す。山間溪流中に棲み、水中の動物を捕食す。「さんせう」に類する臭氣を發するため、この名がある。大山椒魚、半裂、はんさけ・はんざき、Megalobatrachus japonicus. 其

だ大形、躰長一メートル半に達す。現存兩棲類中の最大種。四肢を切斷しても再び生ずるとの點に基づき半裂といふ。蓋し半裂にしても尚、生を保つとの誇大的形容。本州中部以南の山間に産し、南支那にも見出さる。

はこねさんせううを Onychodactylus japonicus. 躰の背面は赤褐色、一本の幅廣き黄紅色の帶狀部が背から尾まで中央を走つてゐる。體側と四肢とは暗褐色で、濃色の斑點がある。腹面は淡褐色で白斑を有する。本州・四國・九州に分布する。

ぶちさんせううを Hynobius nebulosus. 躰の背面赤褐色、黑褐色の雲狀斑點がある。腹面には灰白色の斑點が存在する。北日本に廣く分布す。

かすみさんせううを Hynobius naevius. 躰背面黑灰色、中央を縦走する一本の溝狀の窪みがある。躰の側面には大理石狀の斑點を有する。南日本に普通。

はこねさんせううを

鮎（あゆ）　あい　香魚（かうぎよ）　年魚（ねんぎよ）　とまり鮎（あゆ）

古書校註

【滑稽雜談】 崔禹錫が食經に曰、鮎は貌鱒に似て小し。白皮あり、鱗なし。春生じ夏長じ秋衰へ冬死す。故に年魚(一)と名く。(略)(二)時珍本草をみれば鮎は鯰におなじとみへて鯷（なまづ）魚也。あゆの說なし。多識篇には鱗を阿伊と訓ず、いづれか是なるや。夏長ずるを以て正とし鮎とばかり夏也。小鮎拔鮎(三)若鮎は春也。氏者春生じて水を泝る者なればのぼり鮎も春なり。秋に至りて魚衰へ白皮に赤色を生ずるを銹鮎と稱す。澁をさびと用べし。又秋は水に隨て下る。落鮎またくだり鮎也。冬に至りて此者絕えてなし。

【同】 和國におゐて往々にあり。殊に山城の鴨川大井川の者上品とす。尤禁裏へも日次に奉る也。和州吉野川の産佳品也　其外美濃の岐阜、飛彈の古河、越前の疋田、越後の糸井川、紀州の粉川、長門の吉見川の探鮎、肥前の松浦など、又丹州よりも出る。これらの産然も大魚なれど、風味城州の者に劣れり。又年始に禁裏へ奉る吉野の國栖魚(四)も鮎の事なめり。

【御傘】 鮎夏也。若鮎は春也。さび鮎おち鮎は秋也　鮎の子は冬也。子鮎・鮎の鮨等(五)は雜なり。(略) うるか鮎のわた(六)の名也。鵜也。

註 (一)あゆ。(二)以下其論の自說也　(三)澁鮎の誤　(四)クルス魚、新年の季　(五)今は鮎鮨、夏の季也。(六)はらわた

季題解說　夏季の淡水魚として最も優なるもの、今多く「あい」と云ふ。流緩く石多き河底にて孵化したる鮎の稚魚は、水流に從うて一旦海に入り、鹹水中に成育す。やがて、三四月の頃二寸餘に至れば水の溫みを趁うて再

び河に入る、この頃より若鮎として敏捷性を發揮し、清流の川上へと遡上生活を續け、十分成長すれば長さ尺にも及ぶものあり。細鱗滑かに、背蒼黑く腹白し。雌は首小さく身潤く色やゝ黄を帶ぶ、雄は身狹く淡黑し。常に岩石等に附著せる硅藻の類をのみ食餌とし、一種の香氣をもてるより「香魚」とも呼ばる。味淡泊にして甚美なり。秋の末に至れば再び流を下りて産卵すれば概ね衰弱して海に入り死す。その生存すること年を出でざるより「年魚」の稱あり。稀には越年するものあり「とまり鮎」といふ。若鮎は魚田に、長じたるは鹽燒或は膾として賞美さる。また鮎鮓あり。

【實作注意】 若鮎・小鮎は春、成魚は單に鮎にて三夏を通じて詠ひ、産卵期に川を下るものは落鮎・下り鮎とて秋季の題とす。**【參照】** 人事—鮎狩（アユガリ）

【例句】

鮎

鮎鱠藍より青き蓼酢かな　貞室（曠野）
またゝぐひ長良の川の鮎鱠　芭蕉（己が春）
夕ぐれは鮎の腹見る川瀨かな　鬼貫（俳諧七車）
飛鮎の底に雲ゆく流れかな　同（鬼貫句選）
石垢になほ食入るや淵の鮎　去來（去來發句集）
鮎くれてよらで過行夜半の門　蕪村（夏より）
我井戸に桂の鮎の雫かな　召波（春泥發句集）
鮎の背に朝日さすなり田村川　士朗（[illegible]）
蓼鮎や人影くゞる水の隈　曉臺（しをり萩）
吉野川の落花ふくみし鮎なる歟　月斗（同人）

巖魚（いはな）

嘉魚（かぎよ）　梗葉魚　岩魚小屋（いはなごや）

【季題解説】 谷川の巖石の間に棲む魚、形鱒に似て小さく、一尺二三寸に達す、背鰭の刺少なく、背は蒼黑く、腹は灰白色に淡黄の斑點を交ふ。味淡泊なり。秋清流の小溪に近く砂を掘りて産卵す。

【實作注意】 岩魚の生息は最も上流の谷深き清流に限らる。七八月山に棲む頃に多く釣獲さる。所により小屋を作りて屯すに便ぜらる、岩魚小屋これなり。岩の字は俗字にて、巖又嵓の文字を正しとす。漢名、嘉魚。

【例句】

岩魚

瀑壺の渦にかくれしいはなかな　涼舟（同人）
岩魚一つ釣るに終日かゝりけり　綠荷（同）
岩魚釣驟雨にぬれて寒き哉　青水（同）
虎杖の竿にて釣れる岩魚哉　無外（ホトトギス）

岩魚小屋

古るまゝに葛がくれなり岩魚小屋　秋櫻子（同）

山女（やまめ）

やまべ

【季題解説】 やまべとも云ふ。山間の溪流中に棲息する魚、櫻鱒の幼魚にして

海に至らず、溪水中に止まりて幼魚の姿其儘に熟魚となれるもの、形鮎に似るも全體淡褐色にして細鱗あり、體側に淡黑の斑點散り、腹白く、肉も白し、晩春長さ三四寸となり、蕉ち美しく味亦よろし。

【實作注意】 別項掲出の甘子（あまご）と酷似せるより同一に見做され居るも、山女には甘子の如く朱色の斑點なく區別明かなり。山陰・北陸方面の日本海に流入する河川の上流水温の低き流域、及び關東・東北地方諸川の上流にも之を見る。【季節】動物　岩魚（夏）　甘子（春）　鱒（春）

【例句】

山女　山女釣晩涼の火を焚きゐたり　秋櫻子（ホトトギス）

虎杖の小屋をうしろに山女釣　千代吉（同　）

【參考】 山女　山間の河川、溪流中に終生棲んで居り、こゝで蕃殖するが、これは普通の鱒（Oncorhynchus masou）が、陸上の水域内に封鎖されて、海へ下ることなきに至つたもので、かくの如きを陸封鱒（land-locked salmon）といふ。最大限二十五センチに過ぎぬ。體側に楕圓狀の大きな黑斑が並んでをり、側線の上下に小黑點が散在してゐる。甚だ美味である。

追川魚（おひかは）　赤鯇（あかはえ）　山吹鯇（やまぶきはえ）　鯇（はえ）　白鯇（しらはえ）　鬪魚（とうぎよ）

【季題解説】 鯇の雄を指して云ふ、一に「赤鯇」「山吹鯇」と稱す。河川湖沼に産す、夏日は頭紫・暗色・鰭は赤暗色となる、胴に十數條の横線あり、體長大なるは六七寸にも達す。雌は色も別種の如く體長も短かし、雌は單に「鯇」又は「白鯇」と云ふ。地方により異名多し。

【實作注意】 この魚鬪魚と書す、嬉遊笑覽に「水中互に尾を追ひて鬪ふ、支那にて鬪魚と云ふ」とあり。

【例句】

追川魚　相撲ちておひかは川を上りけり　涼舟（同　人）

鰣（はす）　桁鰣（けたはす）

【古書校註】

【滑稽雜談】順和名抄に曰、唐韻に云ふ、鰣（ハス）は（漢語抄に波曾（ハソ）と云ふ）魚の名也。魴（一）に似て肥美なり。江東四月之を出す。此れ和俗に云ふはす也。多識篇には鰣を患曾と訓ず。是否をしらず。故に産する所おほく鰣の所說に合す。其鱗を以つて花鈿（二）となすの事いまだ聞かず。此者夏月に群を成して桁のごとく連行す。是を桁鰣と稱す。又鰣の形、扁なるを桁と云ふ由侍る。

註（一）魴鯿。（二）時珍本草に鰣の硬鱗を花鈿に用ふる由見ゆ。

【季題解説】 琵琶湖その他の河川にも産す、形「白鯇」の大さなるに似て體長

一尺二三寸にも達す。此魚夏日を旬とし、網・竿釣にて漁る。

例句

鱒鮓や川裾祭の田舎酒　涼舟（同人）

金魚（きんぎょ）

和金（わきん）　蘭鑄（らんちう）　琉金（りうきん）　丸子（まるこ）　尾長（をなが）　出目金（でめきん）　支那金（しなきん）　獅子頭（ししがしら）　和蘭陀獅子頭（おらんだししがしら）　秋金（しうきん）　朱文金（しゆぶんきん）　錦蘭子（きんらんし）

古書校註

【三才圖會】始め外國より來る。近年之を玩賞す。之を食ふ者なし。形鮒に似て、尾鰕の如し。其大なる者六七寸。筑前及泉州の堺多く之を養ふ者あり。（略）春末に至りて子を生む。（略）三十五日にして孚り、頭尾備りて池に放つ。

季題解説

池に放ち器に養ひて專ら觀賞用の小魚、鮒の一變種なり。元和の時代に支那より渡來せしものにして、腹肥え、尾は長く太く、三四の岐をなす、色は紅白相交れり、その形鮒に似たるを鮒質と云ひ、乃ち和金なり。鯉に似たるを鯉質といふ、乃ち緋鯉なり。

▽蘭鑄　一名丸子（まるこ）ともいふ。體圓味を帶びて肥滿し、背鰭なく、尾十分に發る。阿蘭陀傳來といふ。

▽琉金　體短く闊く、腹膨出し、尾鰭は長くして垂る。俗に尾長とも云ふ。もと琉球產のもの。

▽出目金　體短かく、黑又は赤色にして斑點あり、蛙のそれの如く眼球飛び出づ。布哇より渡れるもの。

▽獅子頭　頭上に肉瘤ありて物を頂けるが如く、背鰭なく、體肥えて闊く、尾は分れて下方に彎曲す。

以上四種のものより變化せるもの多し。

實地注意

金魚は普通晩春より夏にかけて水藻等に產卵す、卵は旬日位にして孵化す、一番子・二番子・三番子と生む。此魚を愛玩すること夏季殊に流行し、初夏の頃より之を商ひに來る、金魚賣（[illegible]）と云ひ夏の風俗とす、これを養うて觀賞する器に金魚鉢、玻璃製のものに金魚玉あり。何れも人事に屬す。[illegible]　緋鯉[illegible]　日高[illegible]　人事　金魚賣[illegible]　金魚玉[illegible]

例句

金魚　翠陰に池あり金魚彩れる　月斗（同人）

一ひきに減つてしまひし金魚哉　同（　）

忘られし金魚の命淋しきよ　虚子（ホトトギス）

[illegible]の金魚哉　蓼井（同人）

參考

金魚、[illegible]、[illegible]の[illegible]種、學名（Carassius auratus）もと支那で[illegible]育され、我國に輸入されたのは[illegible]後柏原天皇の御宇、文龜二年

のことと云ふ。其後、大和國郡山をはじめとし諸所で飼育され、異品種の交配と淘汰とにより、新なる品種をも作り出すに至り、近來は米國に向け盛んに輸出するやうになつたのである。金魚に見らるる鮮明な赤色は人參に見られる赤色々素カロチン（carotin）に類するカロチノイド（carotinoid）で、この外に黄色々素と、鱗に銀白色の光澤を與へるグアニン（guanin）の微細な結晶、幼時には、どの金魚をも鮒の如き外觀を帶ばしめる黒色々素メラニン（melanin）とがあつて、多種多樣な色彩を呈させる。金魚の一品種たる朱文金の如きはグアニンの結晶を缺くため鱗は透明となり、鰓蓋の末端に於て鰓が透視される。金魚の主な品種は次の通りである。

和金最も鮒に近き體形のもので、最も強健。

蘭鑄體短く、腹部肥大し、體形やゝ卵形、背鰭を缺く。

琉金一名尾長。體形卵形に近く、凡ての鰭甚だ長い。

和蘭陀獅子頭琉金と蘭鑄との交配によつて生じた品種。體は蘭鑄のやうであるが、背鰭があり、頭部に肉瘤を有する。鰭は皆長い。和蘭陀といふのは珍奇なといふ意味で、和蘭陀から輸入されたのではない。天保年間に大和郡山附近で始めて作り出された品種である。

出目金、支那金。明治二十七八年戰役後、支那から輸入された品種、兩眼が突出してゐる。

秋金　蘭鑄と和蘭陀獅子頭との交配品種。背鰭が　く、他の鰭は長い。體形は卵形。

朱文金、和金と出目金と鮒とを交配して生じた品種であるが、和金と出目金だけの交配でもこれを生ずる。體形は鮒に近く、鱗は透明で、色彩は帶赤黄色又は淡紫青色。

錦蘭子　和金と蘭鑄との交配品種。體形鮒に類し、背鰭がない。黒・赤・白の混じたる色彩を呈する。

目高（めだか）

季題解說　緋目高（ひめだか）　白目高（しろめだか）　ばんだい

淡水產のもの、目高も魚の內といふほど小さき魚。上流には棲まず、多くは澱みたるに居り、好みて水面に羣游す。長さ一寸許、背淡褐色腹白し、頭平たく大きく、目大きく高し、名ある所。變種に緋目高・白目高あり。

實作注意　小兒の畜ひて玩とするところ、諸國異名多く、越後では「うるめ」と言ひ、大阪にては「ばんだい」、越中にては「かねさ」、京都にては「談義坊」と云ふ。　**參照**　金魚（きんぎょ）　人事―目高合（めだかあはせ）

例句

目高
菱の中に日向ありけり目高浮く　鬼城（ホトトギス）
吾もありと金魚の中の目高かな　一轉（同）

緋目高
緋目高や水垢に染む草の莖　五沼（蝦祭）

ほだ沙魚(はぜ)　ちゝかぶり

【季題解説】 形沙魚に似て色黒く、河邊の石の間に棲息するもの。身長三四寸に過ぎず、頭尖らず大きく、體瘦せたり。

【實作注意】 ちちかぶりとも云ふ、その他地方々々によりて異稱甚だ多し、周年釣に懸るものにて季感明かならず。

鮔(ごり)　石伏魚(いしぶし)　石斑魚(いしぶし)　川鰍(かはかじか)　鮴(ごり)　鰍(かじか)

【古書校註】

【三才圖會】 石斑魚は、狀彈塗魚(はぜ)に似て頭大く尾細し、鬚あり。硬鬐あり細鱗ありて無きが如し。其背の斑文淺黑色、腹白し。大なる者三四寸。常に石間に伏す。故に石伏と稱す。又、背腹其黑き者を呼んで談義坊主と名く。

【滑稽雜談】 (一)今俗にごりと稱す、或は云ふ是則來るの謂也。此魚また名を呼べば來る也。和におゐて賀州淺野川に此種おほし。國俗(二)夏にいたり此川に臨みて兩手を以て水中に叉し、口に歌て云ふ、白ごり黑ごり石の間から引連立つて御ざれの來んか來ん鮔ゝと押返し〳〵(三)唱ふに此魚必ず叉手の内へ入るといふ。洛におゐて鴨川の產味ひよろし。源氏にいへる(四)もおほくは此川の事なん。都俗是を取るに河中の砂石を鋤鍬などを用ひて淺瀨へ押しよすれば此砂石に付ておほくは鮔を獲るといへり。故に俗に鮔を推ともいひ侍るならし。

註 (一) 鮔(ごり)の條也。石斑魚が夏秋に游魚性伏沈して石間にある者也と見ば、和名抄に石斑魚を伊師布之と記す。ごりと云ふも、黄顙魚(これ又かじか)をさすに非ず。本書石首魚と記すれど誤也。(二) 俗間の習俗として鮔を捕ふに俗謡を唱ふ也。(三) くり返しくり返し　(四) 源氏物語常夏の巻

【季題解説】 形沙魚に似たる川魚、常に清流の巖石の間に居り石に吸ひつきて游はざるより石伏魚の名と共に川鰍の稱を持つ。大さ三四寸、頭大きく口潤く、褐色に黑き點と斑あり。

【實作注意】 味噌汁にして賞美す、京都高野川のもの有名にて、鮔汁は加茂・山端の料亭にて得意のものとす。又筍・白瓜などを交へて調へたる汁を越川汁といふとぞ。【參照】 人事—鮔汁(ゴリジル)　秋—鰍(かじか)

【例句】

瀬々の石掻いて鮔網布きにけり　麥秋　(新歳歳時記)

夏(なつ)魚(さかな)　〔夏肴〕

【季題解説】 夏季のさかなの總稱なり。

【例句】

江の月や幸さしかけし夏さかな　巣兆　(曾波可理)

魚島（うをじま）

夏肴　組の御前に涼し夏肴　曲翠（未若葉）

季題解説　初夏の頃主として鯛の最も多く漁獲され、且つ其味の最も佳なる頃を云ふ。俳句には人事の魚島を參照すべし。

例句

魚島　魚島の鯛を毎日貰ひけり　月斗（同人）

麥藁鯛（むぎわらだひ）

季題解説　六月麥秋頃の鯛を云ふ。此頃の鯛は産卵期を經過したれば味劣れるものとす。

例句

麥藁鯛　草の戸に麥藁鯛の奢りかな　冬葉（獺祭）

黒鯛（くろだひ）　茅海（ちぬ）　海鯽（かいづ）

古書校註

【三才圖會】　狀鯛に似て鰭の色黒く、鯽（一）に似たり。故に海鯽と名く。和名黒鯛と曰ふ。多く泉州より出づ。古へは泉州を茅渟（チヌ）と稱す。故に之を名く。凡鯛夏月味劣る。此魚は夏月味最も勝る。

註（一）鯽、鮒。

形體鯛に似て色淡黒く銀色を含めるもの、腹白し。眼割合に大きく七八寸より尺五寸位、時に二尺に達するものあり、近海に棲み夏季海濱に接近し來る、この頃味美なり、大阪灣の古名茅海の海に多く産するより「ちぬ」の別稱あり。性甚だ貪食。これを釣る季節は中夏より秋に至る、夜釣を重にす。

實作注意　この魚の幼魚を關東にては「かいづ」と云ふ。脚立を用ゐてそれを釣る。品川の「かいづ釣」は有名なり。

例句

黒鯛　黒鯛大小鼻唄まじり釣りにけり　文方（同人）

ちぬ　ちぬ釣やまくらがりなり頬被　禪寺洞（ホトトギス）

初鰹（はつがつを）　初松魚（はつがつを）

古書校註

【滑稽雜談】　東醫寶鑑に曰、松魚。（略）肉肥て色赤くして鮮明、松節（一）のごとし。故に松魚となす。（略）常陸國誌に曰、鰹魚古事記萬葉集皆堅魚となし、鰹の字なし。後世合せて一字となす。（略）徒然草に云、鎌倉の海

にかつをといふ魚は、彼(二)さかひには左右なき物にて、此頃もてなす物也。鎌倉の年寄の申侍りしは此うをおのれら若かりし世までは、(三)はかばかしき人の前へ出す事侍らざりき。(略)(四)所在往々に侍る。殊に相模土佐紀州伊勢に出る。鎌倉に出る事古へ久し、房州邊には殊に多し。

【年浪草】 大和本草に曰、相州鎌倉或小田原の邊に之を釣て、江府(五)に送る、最も早く出る者是を初鰹と稱して賞味す。

【三才圖會】 鰹、極めて堅硬。削り用ふ可し。故に俗に堅魚と曰ふ。

【俳諧歳時記】 この魚康永貞和の比までは敢て食ざりしにや、兼好がつれづれ草にも鎌倉の海に鰹てふ毒魚あるよししるせり。しかれども延喜式に堅魚を載たり。むかしは富貴の供御にもなし給ひしが、中ごろより毒ありとて食ざるにや。或人の云ふ、延喜式に載る所の鰹は今の鰹にあらず、鰯なりと。いかゞ猶考ふべし。

註 (一) 松枝の分るゝ所、此所の木の色赤し (二) 彼の所には比ぶべきものはない (三) 上流の人々。(四) 以下其諺の自説也。(五) 江戸。

季題解説 夏の初めに漁獲されて市場に上る鰹、江戸時代の風習として、頗る賞美され、殊に相州ものゝ逸早く來れるを、高價を出して爭ひ求むること、江戸氣質の誇とせしと云ふ。當今は然らず。【[illegible]】鰹。 人事・鰹釣る(カツヲツル)

例句

初鰹

鎌倉を生て出けん初鰹　芭蕉 (葛の松原)
又越む佐夜の中山はつ松魚　同 ([illegible])
目には青葉山ほとゝぎすはつ鰹　素堂 (俳諧五百[illegible])
初鰹盛ならべたる牡丹かな　嵐雪 (玄峰集)
朝比奈が曾我を訪ふ日や初がつを　蕪村 (新花摘)
初鰹觀世太夫がはし居かな　同 ( )
年よらぬ顔ならべたや初鰹　太祇 (太祇句選)
又嬉しけふの寐覺は初鰹　曉臺 (曉臺句集)
くれなゐは花にかぎらじ初鰹　蓼太 (蓼太句集)
面白の夢なき宿やはつがつを　同 ( )
初鰹金は塊りと見えにけり　闌更 (俳句[illegible]集)
いづかたに夜走るらんはつがつを　成美 (成美家集)
[illegible]人の軒にもすこし初がつを　巣兆 (曾波可理)
[illegible]音の中に千鳥や初鰹　月斗 (同人)
夜嵐とは僞ならじはつ松魚　白雄 (白雄句集)
髭どのに先こされけりはつ松魚　一茶 (七番日記)
芝浦や新松魚より夜が明る　同 ([illegible]番日記)
[illegible]なからに引さゝげけり初松魚　梅室 (梅室家集)
江戸一の鱗はものかは初松魚　寶馬 (古今句鑑)

初松魚

初松魚

水を出でて藍より青し初松魚　米璘（類題集）
初松魚水をこゝがば生やせん　吟江（古き友）
酢を以て可なりとやせん初松魚　沙月（其雪影）

鰹（かつを）

堅魚（かつを）　松魚（かつを）　ゑぼし魚（うを）　眞鰹（まがつを）　宗太鰹（そうだがつを）　ひらめじか　ひらそうだ　こがつを　やいと　せがつを　すま　すぢ鰹　鹽鰹（しほがつを）　鰹時（かつをどき）

季題解說　海産の魚、形鯖に似て大きく、大なるは二尺に及ぶものあり、體圓く肥え、頭稍尖り、鱗無く青黑くして體側に數條の蒼き縱線あり、腹は白く光る。肉深紅色なり。性活潑にして游泳巧なり、常に暖流を追うて洄游す。我國には五月の頃南方の沖合より來りて近海を洄游し、九月頃水温下れば南方に去る。されど土佐・薩摩の沖合には周年棲息す。眞鰹・さうだ鰹・めじか・すぢ鰹等あり。

實作注意　堅魚・松魚の字を用ゆ。又その頭部のやゝ烏帽子に似たるより「ゑぼし魚」とも云ふ。此魚關東にては殊に賞美され、德川時代鎌倉の鰹の夜に入りて江戸に運ばれたるを夜鰹とて賞されたり。［參照］初鰹（ハツガツヲ）

例句

鰹

鰹賣いかなる人を醉すらん　芭蕉（いつを昔）
妻鰹の卵の中にめぢかかな　其角（五元集拾遺）

懷亡母

うたゝねの夢にみえたる鰹哉　同（同）

其角の句の夢に戲れて悼

下郞等に鰹くはする日や佛　嵐雪（玄峰集）
大勢の中へ一本かつをかな　同（同）
庖刀の血を見せ申す鰹哉　梅室（梅室家集）
鎌倉に烏帽子すたりて鰹哉　田社（觀臨筆）
鰹著て入江の町や人の浪　扇裡（同）
涼しさや鰹のつらへ大柄杓　萬年（同）
引提て座敷へ通る鰹哉　津富（句鑑）
月影や鰹の背色腹の筋　百明（故人五百題）
我戀は夜鰹に逢ふ端居哉　言水（俳諧五子稿）
夜松魚に裾ぬらしたる内井哉　白雄（白雄句集）
わが宿のおくれ鰹も月夜哉　一茶（題叢）

鹽鰹

こひしきや蓼をむくらの鹽鰹　嵐竹（虛栗）

鰹時

世に青きものゝさかりや鰹時　素角（古今句鑑）

參考　鰹、普通に鰹と稱するは眞鰹のことで、東海道方面では夏期に、はじめて其姿をあらはす。所謂初鰹はこれである。日本海方面には殆ど見當らないが、太平洋方面では臺灣から北海道までこれを漁する。鰹の棲息

に適する水温は攝氏十七度乃至二十九度であるので、水温の高い琉球、臺灣地方では周年鰹がとれる漁場があるのに、房州沖では眞夏の頃盛漁期となり、東北地方では仲秋になつて盛漁期を迎へるやうな有様である。

かつを・まがつを Katsuwonus vagans 體の上部は鉛青色、下部は銀白色で濃青色の線が四本乃至十本、尾端へ向つて走つてゐる。

そうだがつを・宗太鰹 これは更に次の二種に分れる。

ひらめぢか・ひらそうだ・こがつを Auxis hira 體の背面は藍綠色で數多の虎斑が斜走して居り、腹面銀白色。北海道から臺灣まで分布し、往々日本海にも現はれる。岸近くに群來する。刺身とし又は「なまりぶし」に製する。

まるめぢか・らふそく・だいなんぼう Auxis maru. 荒皮の中央部長く後方に延びて背鰭の背後で細く終つてゐる。血合肉が多く、味劣る。

やいと・せがつを・すま Euthynnus yaito. 背部蒼黑色で、その後半部は斑紋がある。胸部に一個乃至七個の灸點の如き黑點があるので關西地方では、これを「やいと」又は「やいとしび」と云ふ。但しこの黑點を有せざる個體もある。味は餘り美ではない。

鰹の烏帽子（かつをゑぼし）

古書校註 【東草】 豆相の海邊、鰹、先寄らんとするときに、一物流れ來る。大さ二尺ばかり、形烏帽子に似て、左右に紐の如き物あり。その色瑠璃紺(一)にして光澤あり。是を鰹のゑぼしといふ。漁者この物の漂流するを期として、海上に艪を備へ鰹の寄るを見る。是を鰹見といふ。兩三日すぎて、果して大に鰹を得るとぞ。烏帽子魚(二)と名ることとこゝによれり。

註 (一) 青みがゝりし紺色。

季題解說 水母の一種にて怪奇なる形のもの、巨大なる浮嚢をもち、下面に甚だ複雜なる紐狀多く垂れ下り、人これに觸るれば疼痛を感じ、炎症を起すことあり、南海に多く初夏の頃鰹の群來するに先立て必ず浮游し來るよりこの名あり。【參照】 鰹カツヲ

例句 [illegible] 鰹の[illegible]の烏帽子流れけり　泣人（[illegible]祭）

津走（つばす）　わかし　はまち　いなだ　ふくらぎ

古書校註 【三才圖會】 六月比二三寸なる者を津波須と名く、肉[illegible](三)[illegible]と謂く。[illegible]して[illegible]を[illegible]つてこれを食ふ。七月一尺許なる者[illegible]と名く。十月二尺近き者を[illegible]と名く。[illegible]と稱す[illegible]、[illegible]長さ三四尺、最大なる

者五六尺、鰤と名づく。

〔註〕（一）鰤をさす。（二）九州。

〔季題解説〕鰤の幼魚、五六寸のものを云ふ。鰤の生長に從うて名稱を異にす。關西にては、つばす・はまち・めじろ・鰤の順序に稱へその大きさ時期は左の如し。

▽つばす　體長一寸五分位より稱へ五寸位迄のもの、旬は五月末六月始の頃關東にては「わかし」と云ふ。

▽はまち　體長一尺位のもの、旬は七月より以降。關東にては「いなだ」北陸にては「ふくらぎ」と云ふ。

▽めじろ　體長二尺位のもの、秋。關東・北陸にては「わらさ」「小ぶり」とも云ふ。

▽ぶ　り　目方一貫六百目以上のものゝ稱、冬。

〔實作注意〕尤も地方によりて亦異なる稱あるも、めじろに準ずる大きさよりは秋久は冬とす。〔參照〕冬　鰤

〔例句〕

つばす

關守へ土産におくるつばす哉　　松　頂（俳句大觀）

朝網に銤光れるつばすかな　　竹　叟（同　人）

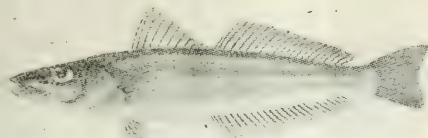
二三尾を鯛を添へたるつばす哉　　同　（同　）

鱚（きす）　きすご　白鱚（しろぎす）　海鱚（うみぎす）　青鱚（あをぎす）　川鱚（かはぎす）　虎鱚（とらぎす）　沖鱚（おきぎす）

〔古書校註〕

【三才圖會】其大なる者を古豆乃と名く。紀州にて之を道保と名く。（略）狀鯵に似て黄白。身圓く後尖りて短く細鱗。大抵四五寸、八寸位に過ぎず。尾に岐（一）なし。頭の中二の白石あり、肉厚く白し。味淡甘か。炙食、上品となす。病人に忌む事あり。秋月江戶品川芝の海濱にて貴賤之をつる。川幾須、江より河に上る者狀略扁く小。色微碧を帶ぶ。虎幾須、是亦川口にあり、狀圓く肥大。黑白の虎斑あり。

〔註〕（一）尾端分れざるを云ふ。

〔季題解説〕きすごともいふ。波靜かなる淺海の砂底に棲める魚。形やゝ梭魚（かます）に似て圓く肥え、長さ五六寸迄、口小さし、肉潔白にして味美なり、白鱚、て銀色の線あり、背淡褐色腹は白くし海鱚とも云ふ。外に種類あり。

▽青鱚　川に棲めるもの、一に川鱚とも云ふ、

す。〔參照〕人事―夕河岸(カシ)　皆潮(アミ)

例句

鰺　鰺網や夕潮さやぎ二處　　虛子（ホトトギス）

小鰺　汗も日も入りて小鰺の盛かな　　米運（雞隨筆）

夕暮は鯛にすぎたる小鰺かな　　蓼太（蓼太句集）

夕凪や潮くちみれば小鰺賣　　同（同）

又翌の日和呼ぶなり小鰺賣　　津富（古今句鑑）

舟の中から數へてくれて小鰺哉　　雀村（同人）

夕鰺　ゆふ鰺や今小よろぎの砂ながら　　蓼太（蓼太句集）

參考　鰺。我國沿岸に廣く分布する魚で、その側線に沿うて菱形鱗卽ち「ぜんご」と稱せられるものが並んでゐるのを特徵とする。

まあじ Trachurus japonicus. 「ぜんご」が側線の全長に沿うて並列してゐる。

むろあじ Decapterus m roadsi. 「ぜんご」が側線の後半にのみ並んでゐる。脂肪が、まあじよりも少いので乾物に作られることが多い。

鯖(さば)

ほん鯖(さば)　ひら鯖(さば)　まる鯖(さば)　ごま鯖(さば)

古書校註

【三才圖會】北海西海に多く有りて未湖中に有るを聞かず(一)。(略)形鯇(アメ)に類して鱗至て細なり。大なる者一尺四五寸、背正青色の中蒼黑の微斑文あり。或は繩の纒る如し。尾の邊兩々相對し角利(二)の鰭あり。其肉甘、微しく酸、餒り(三)易し、(略)上下之を賞す。中元日の祝用となす。但背より骨傍りて割り開き之を鮿(四)にす。二枚を一重となし、之を一刺と謂ふ。

註(一)本草綱目に江湖に生ずとあるによりて、かく記せり。(二)かどあり鋭いこと。(三)魚肉のたゞれくさること、(四)魚肉の鹽に乾したるもの。

季題解說　海産の魚、春秋を通じて市場に上る、晩夏より秋最も盛なり、尾に近く刺の如き鰭を持てるが特徵にて、全體色靑し、鱗甚だ細かく、頭に黑點散り背に蒼黑き虎斑あり、その斑の狀によりてまるさば、ひらさばの區別あり。大さ五七寸より尺四五寸に至る。

實作注意　この魚羣泳の性をもち活潑敏捷なり、六七月の産卵期には近海に廻游し來るを漁獲す。〔參照〕人事―鯖釣(サバツリ)

例句

鯖　生け鯖を水無き槽に打撒けたり　　牧人（ホトトギス）

鯖漁や浪に漂ふ篝屑　　鈴川（同人）

參考　鯖　攝氏十五度内外の淸澄な海水中を甚だ速に游泳し、四五月頃産卵し、秋季となれば脂肪が蓄積され、美味となる。所謂秋鯖はこれである。脂肪は眼瞼の組織間にも充實し、そのため視力劣へ、深處に移動して

越冬し、春季には脂肪を減じ、再び沿岸近くに姿を現はして來る。これに二種を區別する。
ほんさば・ひらさば Scomber japonicus. 第一背鰭の棘九、臀鰭には離れた棘の外に十二棘ある。體はやゝ扁平。
まるさば・ごまさば Scomber tapeinocephalus. 第一背鰭の棘は十一乃至十二、臀鰭には離れた棘の外に十三棘ある。體は丸味があつて細長い。背部の波狀斑紋は側線下に達し、その下の腹面に小黑點が二縱列をなし、恰も「ごま」を散布したやうな有樣なので、この名がある。

飛魚（とびうを）　つばめ魚　とびを　とびいを　ひいご　文鰩魚（ぶんえうを）

古書校註

【三才圖會】 按るに、飛魚西海に多し　背蒼く、腹灰白色。三四月群飛す。其飛ぶや水上を離る事尺許にして一段ばかりにして水に沒し復飛ぶ。薩摩に最も多し。鱐（一）に作りて他邦に送る。

注（一）魚の乾物

季題解說

時々海面より跳り上り、燕の如くに胸鰭を張つて飛ぶ魚、つばめ魚ともいふ。大さ一尺程、形鯯の如く、背蒼黑く腹白し。背鰭は甚だ小さけれども、胸鰭長く大きく、殆んど翼の如く、よく風浪を蹴つて跳ぶ。常に海の上層を游行し、害敵の襲來に逢へば群飛して海を掩ふ。五月の頃より淺海に來り、海藻多き所に産卵し、孵化したる稚魚は秋遠く洋海に去る。古名、とびを、又とびいを。漢名は、文鰩魚といふ。

例句

飛魚　飛魚や黑潮よする日向灘　几一（同人）
つばめ魚　波頭七つを越えてつばめ魚　掌山（ホトヽギス）

石首魚（いしもち）　ぐち　にべ

古書校註

【三才圖會】 狀白魚の如し、扁身弱骨細鱗、黄色金の如く、水より出せば能く鳴く、夜見れば光あり。首に白石二枚あり、瑩けば玉の如し。秋に至りて化して冠鳧となる。是卽野鴨の冠ある者也。（略）毎歳四月海洋より來る。其聲雷の如し。海人竹筒を以つて水底をさぐり其聲を聞き、乃網を下して之を取る。（二）鯼（三）鮸四股俱に之あり。鯗鮑に類す。形長く狹く、色淡青白（鮸）阿古、名義不詳　各月鯗の大なる者、俗呼んで阿古といふ。

注（一）以上三才圖會による

季題解說

頭の中に白く硬き小石の如きもの二つあるより名ある海產魚。形はほゞ鯛に似て狹く長し、鱗細かく、鰭長く、頭種小にして、尾に岐なし、身長三四寸、色灰黄なり、肉白く、脂少なく味美なり、此魚長じて七

八寸に至れば「ぐち」と云ひ、更に長じて二三尺に至れる「にべ」と云ふ。近海の泥底に棲み、五六月の頃産卵す。其季節には多數羣をなして或は河に集り或は淡水中に來游することあり。

實作注意　朝鮮の西海岸に多く鹽藏又は乾製にしてひさぐ。

例句

ぐち　延平島所見　石首魚舟に港たちまちうもれけり　　葉舟　（ホトヽギス）

鮎並（あゆなめ）　あいなめ　あぶらめ　ほつけ

季題解説　近海の海藻茂れる中層を游泳して遠く去る事稀なる魚。身細く長さ六七寸にも達す。鱗細く、色淡黑く濃く斑あり。鰭は概ね黄ばみ、體に數條の側線あり。味淡泊にして美なり。主に夏季釣獲せらるゝもの「あいなめ」と訛る。

實作注意　地方によりて異名多く内にて「あぶらめ」「ほつけ」など比較的普遍性あり。

鯒（こち）　牛尾魚（ぎうびぎよ）

古書校註

【三才圖會】　狀は小鱸（よかわ）に似て身闊く頭大に扁く口濶く下唇重疊、骨醜し。鰓の爲に長き鬣對生す。背灰黃色。細鱗背に頸より尾に至りて一道の短鬣あり。腹白く、臍以下一道の長鬣あり。尾窄る。其大なる者一二尺。肉厚く白し。膾(一)となして甘美。眼病の人之を忌む。

註　(一)煮物。

季題解説　近海の砂底に棲む魚、體長普通は一尺内外、頭扁く大きく、口横に闊く、體尾に至るほど次第に細し、頭に强き刺あり、眼は上向きに竝び、背は暗灰、腹は黄白、鰭皆黑く斑あり。種類多く、夏季を漁期とし、土用中最も盛んなり。漢名は牛尾魚。

例句

鯒　鯒王の砂ゆるがして游ぎけり　　零餘子　（零餘子句集）

洒魚見れば砂かぶる鯒の狡けれ　　文方　（同　人）

砂げむり上げたる鯒が突かれけり　　五松　（ホトヽギス）

赤鱏（あかえひ）　鱏（えひ）

古書校註

【三才圖會】　眞鱝（まかい）也。其肉赤し。俗傳に云、煮て食へば瀉痢(一)を止む。其膽小兒の雀目を治す。

註　(一)下痢。

季題解説　鱏は菱形團扇の如き扁たき魚、近海の淺き泥砂の底に棲めるも

の普通一二尺、大なるは方六尺に達す。周邊に鰭ありて鱗なく眼大きく口は頷の下にあり、背の中央に突起ありて尾に續く、尾は細長くして尖り、もとに刺ありて人を刺す。その中にて赤鱏最も味よく、背の色は黄赤にして腹白く、中に紅斑相對す。種類甚だ多し。

實作注意 この魚胎生にて七八月頃子を生む。味も赤夏季をよしとし、俗に「赤鱏の吸物章魚の足」とて夏の肴とせらる。

例句
赤鱏　赤鱏は比良目鰈と游ぶらん　凡水（同人）
　赤鱏のはりつく船の生簀かな　呵成（同）
　赤鱏の廣鰭潮を搏ち搏てる　誓子（ホトトギス）
鱏　べた〳〵と地を打つ鱏の尾鰭哉　秋陽（同）

鱚（しいら）

まんびき　九萬疋（まびき）　かなやま　たうやく　ねこづら

季題解說 南海の魚なり。大きさ三尺に近し、頭角ばりて體扁く、背鰭は頭下より尾の邊まで續く、鱗細かく皮厚し、色は淡蒼く、白き腹には堅き刺あり、常に群居を好み、數萬の群がりを見するより「まんびき」とも云へり。

實作注意 異稱多く、薩摩にては「九萬疋」、肥前にては「かなやま」、土佐にては「たうやく」と云ひ、赤頭部の姿より「ねこづら」とも一名す。此魚を夏季に部類せる書あれど、七八月を産卵期とし、秋季群をなして近海に來るを以て、その頃を漁期の盛りとす。市場に上るも秋なれば秋季のものとするを正しとす。淡鹽にして乾物とす。

甘子（あまご）　鯇（あめのうを）

季題解說 鱒の幼きものの名、大さ七八寸、鮎に似て、赤黒き小斑點あり、鱗細かし。倭訓栞に「伊勢國菰野に産す、鮎に似たる魚也、毎年六月十六日御覽川に網して、太神宮に獻ると云へり」とあり。

實作注意 琵琶湖に棲息せる鱒の幼魚を湖國にては「あまご」と稱へ、成熟したるものを「鯇」と云へり。このあまごは體側に黑斑と黑點とある上に鮮なる朱の斑點あり。〔同類〕 鱒魚は、山女　春―鱒（春）

例句
甘子　山に住んで暑さ知らずや甘子釣る　涼舟（同人）

參考 甘子　鱒の一種の幼魚。琵琶湖の外、箱根以西の太平洋に注ぐ各河川及び中國・四國・九州の諸河川の最上流に棲みヒラメ・エノハとも呼ばれる。體側に八乃至十一個の黑斑があり多數の朱點がある。肉は淡紅色、脂肪に富み、甚だ美味。琵琶湖では三年乃至四年で成熟するが、成熟期に近づいたものをアメノウヲといふ。晩秋一個、湖中に注ぐ河川を溯上

して産卵する。本種の學名は Onc rhynchus formosanus とすべしとの說がある。

初鱈（はつだら）

季題解說 北海に産する魚、形ほゞ鱸（すゞき）に似て長さ三尺に及ぶ、頭と口大きく强き歯を有す、鱗細かく、背に黑と灰の斑ありて腹白し、常に深海に棲みて、冬季産卵のため稍々淺きに羣來す。

實作注意 ある書に、初鱈は今年漁し得たる鱈なり。

はつ鱈や沖の釣場は二百尋　閣橋（雜談集）

註して此句夏なりと雜談集を引例しあれど、鱈の漁期は每年十一月の始より翌年三四月頃終るを普通とし、十一月初漁のものを初漁鱈、初鱈と稱ふるにて冬季のものたるべし。今假に此處に揭ぐ。

鱧（はも）

はむ　海鰻鱺（はも）

古書校註

【三才圖會】 海鰻鱺は、西南海に多し。（略）東北には全く之なし。形鰻鱺（一）に似て大きく、背に鬣ありて尾に連る。

註（一）うなぎ。

季題解說 海産魚、形鰻の如く、圓く長く尾の方側偏し、大なるは三尺を超ゆ、口大きく上顎尖りて歯は特に鋭く、指を近づけば嚙む。背鰭よく發達して尾鰭まで一列につゞき、全體灰色背は淡紫、腹は淡藍を帶ぶ、概ね四國・九州・瀨戸内海に産し、夏月漁獲多し。古名をはむといふ。

實作注意 この魚、肉に小骨多く、骨切にして用ゆべし、鱧の骨切とて關西獨特の料理とも云ふべく、ちりに燒物に夏期の肴として賞美せられ、七月夏祭の頃を旬とし、祭鱧とて家々にて用ゆ。宮中大膳職の御料魚にして、所謂重要魚類に屬す。 **參照** 人事――鱧の皮（ハモノカハ） 水鱧（ミヅハモ） 干鱧

例句

鱧

飯鮓の鱧なつかしき都かな　其角（五元集）

大阪の祭つぎ〳〵鱧の味　月斗（同人）

鈎うつて三尺の鱧見せにけり　同（同）

生け舟に嚙み合ふ鱧や背の疵　月四（同）

商を見する鱧に手鈎をうちにけり　伏兎（同　）

【参考】 はも Muraenesox cinereus. 鰻に似てゐるが、背鰭が、鰓孔の直上に始まる點で區別される。穴子とは口が大きく、眼の後方に至るまで裂けてゐること、體長が一メートル以上に達すること等で識別し得る。南日本に廣く分布し、關西にては特にこれを賞美する。

海鰻（あなご）　穴子（あなご）　うみうなぎ　まあなご　ぎんあなご

【古書校註】 【三才圖會】 状海鰻(一)に似て色海鰻より淺く潤はず。項より尾に至るまで小さき白點星の如くなる者あり。兩邊(二)打連ること各百有餘。其味甘きか。脂少くして美ならず。

註 (一)此處にては「うなぎ」をいふ。(二)兩側。

【季題解説】 形鰻に似たる海産の魚。砂泥の海底に穴居するより穴子と名づく。長さ二尺位まで、種類あれど普通は眞穴子を云ふ。背淡き褐色、腹白色を帯び、常に沿海の泥底に棲み、夜出でて食を漁るより、釣獲は夜間燭を用ゐて行ふ。初夏を産卵期とす。俗には海鰻ともいふ。

【例句】

海鰻　浪こゝに高くて釣るゝ海鰻哉　若沙（ホトトギス）

ほんだはらうかべり海鰻浮いてあり　鏡川（同　）

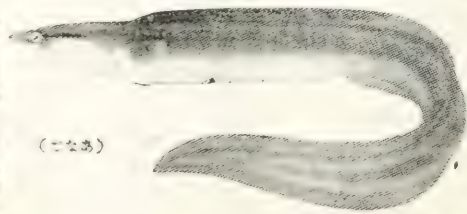
【参考】 穴子　鰻に似てゐるが、背鰭が胸鰭の基底上方附近から始まること等で區別が出來る。これに二種を區別する。

まあなご Astroconger myriaster. 胸鰭の先端上方から背鰭が始まつてゐる。體の背部淡褐色、下部白色。眼の周圍、吻部、鰓蓋等に數多の白點がある。東北地方及び北海道では、本種を「はも」と誤稱す。

ぎんあなご Anago anago. 脊鰭が、胸鰭基底の上方から始まつてゐる。著しく銀白色を帯びてゐる。東京附近では「まあなご」を賞美するが、關西では本種の方を貴ぶ。

（あなご）

鰻（うなぎ）　しらす　めそ　針鰻（はりうなぎ）　大鰻（おほうなぎ）　土用鰻（どよううなぎ）　鰻掻（うなぎかき）

【古書校註】 【三才圖會】 冬春は泥の穴に蟄し、五月に至りて游ぎ出づ。此時味勝れり。

五月子を生む。纖くして長さ三四寸、芒針(ハリ)の如し。之を針鰻鱺と謂ふ。漸く長じて川上に行く。(略) 鰻毎に陽に向ふ。朝には東に向ひ、暮には西に向ふ。(略) 江州の勢田城州の宇治並に名を得。鮓に作りて甚美なり。其鮓飯の中に誤りて糯米を入るれば則鮓成らず。豆州三島明神の前に小川あり。其鰻幾千萬計ふ可からず。俗に云ふ此明神の使魚(ツカハシメ)也と。

季題解說 淡水産の魚。鰻は秋、河川・湖沼より海に下りて産卵す。鹹水にて育ちたる幼魚は春、河川に遡り來る、未だ色黒からず、之を「しらす」と云ひ、稍々成長せるを「めそ」と云ふ。淡水に入りてより長じては形「あなご」の如く、背は蒼黒く、肉鰭ありて尾にまで續く、腹灰白にして斜に紋様あり、鱗なく、身甚だ滑かなり、大なるは數尺に至る、脂多ければ味宜し、夏を旬とし、土用鰻はその最とす。**參照** 人事―土用丑の日の鰻(ドヨウノウシノヒノウナギ)　冬―八日鰻(ヨーツメウナギ)

例句

鰻搔　腰の邊に浮く丸桶や鰻搔　竹人 (ホトヽギス)

參考 鰻　山芋變じて鰻となるとは、今日誰も信じない處であるが、この說話には多分の眞實が盛られてゐる。鰻は極めて移動の巧みな魚で、降雨の際など、濕つた草原を平然と進んで行く。養鰻池の周圍には逆向した柵を設けなければ、鰻は容易に逃走する。されば山芋の掘つた跡などに思ひもかけぬ鰻が潛伏して人を驚かすこと稀でない。前に擧げた言葉の如きは素朴な古人が奇異の感に打たれて速斷した處なのであらう。鰻は河沼で充分生長すると、仲秋の頃海へ下り、その深所に至つて産卵する。孵化した幼魚は遂に絲狀のハリウナギとなつて河を溯り、また前の歷史をくりかへすのである。鰻の血及び肉の中には一種の有毒物質が含まれてゐるので生肉のまゝ食ふことが出來ぬ。但しこの有毒物質は攝氏五十八度に十五分間熱すれば、破壞され、全く無害となる。土用丑の日に鰻を食ふこと、蒲燒として最も賞美されることとよく人の知る所である。鰻は天然のものを上とし、將に海に下らんとするものを最上としてあるが、近來食膳に上るのは大部分養殖鰻であると云つて過言でない。蠶蛹を餌料とすること一時盛んに行はれた頃は、鰻を淸水中に蓄へ蛹臭を去つてから、市場に出したものである。普通鰻と稱へられるのは Anguilla japonica なる學名を有するものであるが、この外に、おほうなぎ、一名かにくひうなぎ、學名 Anguilla mauritiana と云ふのがある。印度・馬來地方に主として棲み、我國では小笠原島方面まで北進してゐる。頭部やゝ扁平で、體長一メートル半に達する。脂肪過多で甚だ不味である。

章魚(たこ)　蛸(たこ)　鮹(たこ)　海蛸子(うみだこ)　章魚壺(たこつぼ)

古書校註

【三才圖會】 長さ丈餘の者海肌子と謂ふ。(略) 章魚性芋を好み田圃に入り

て芋を堀りて食ふ。其あるくや、目を怒らし、八足をふみ、立行す。其頭浮居(一)の狀の如し。故に俗に章魚坊主と稱す。

季題解説 註(一)僧侶。

足八本烏賊に似て頭圓く、脚ごとに十數箇の吸盤二條に連なり、口は其脚の中央にあり、體色は時に變化すれど常は灰褐色なり。煮れば深紅に變ず。性貪食にして、晝間は沿岸巖礁の間に潛み、食物となるべきものゝ近くに來るを待てど、夜は出でて肉食す。體長五寸脚の長さ三尺に及ぶものあり。

實作注意 章魚は周年漁獲さるれども、七八月を産卵期とし夏期を以てその味を最とす、俗に麥藁だこに祭はもとて味の宜しき諺とす。又之れを捕ふるには多く章魚壺を海底に沈め置き、來りて其壺に潛むを引き上げて獲捕す。一種小さき飯章魚あれど春季のものとす。蛸・鮹・海蛸子とも書す。

參照 麥藁鮹(夏) 烏賊(夏) 春―飯章魚

例句

鮹　祭の鮹祭の鮹と呼んで行く　寒月(ホトヽギス)

章魚壺　章魚壺や昨日とまりし淡路島　左右(同)

蛸壺を海月の中に沈めけり　一帆(同)

麥藁蛸(むぎわらだこ)

季題解説 麥藁章魚(むぎわらだこ)

六月頃、乃ち麥の秋時の蛸を云ふ。味のよくなりし鮹なり。

參照 章魚(夏)

烏賊(いか)

眞烏賊(まいか)　やり烏賊(いか)　するめ烏賊(いか)　烏賊の墨(すみ)　烏賊(いか)の甲(こう)

季題解説 章魚に似たる海産のもの、袋の如き體に章魚の如く十脚集り著く、八脚は短く端に兆の如き吸盤を並べ、二脚は頗る長く尺餘あり、口と眼は脚の付根の上に在り、總體灰色に褐色の斑ある薄皮を被りて肉白し、味甚だ佳く膾にても用ゐらる。眞烏賊・やり烏賊・するめ烏賊その他種類多し。

實作注意 烏賊の體中に一枚舟形の骨あり、烏賊の甲と云ふ。又墨液を含み居りて、害敵の襲ふに逢へば、之れを吹き出して姿を晦まし逃ぐ、烏賊の墨と云ふ。又、烏賊を春季にしたる書あれど、烏賊の旬は初夏より始まり秋迄を最とす。木の芽時の「花烏賊」と稱ふるは走りを賞してなり。**參照** 章魚(夏) 人事―烏賊釣(夏)

例句

烏賊　俎板に下手がやぶりぬ烏賊の墨　月斗(同人)

肥えて來し烏賊の甘味や濱泊り　同(同)

海消して烏賊舟歸る夜明哉　月因(同)

墨吐いて烏賊は己れに汚れゐる　飛雨（同）

手長蝦（てながえび）　杖突蝦（つゑつきえび）　草蝦（くさえび）　たなかせ　川蝦（かはえび）

古書校註【三才圖會】一名川鰕、大さ二三寸、兩手肥えて長く螯（一）あり、其雌は形相似て手小さく、螯なし。腹の下に多子を抱く。之を煮れば正紅色。

註（一）はさみ。

季題解説 川蝦の一種、長さ三四寸、首大きく、前の兩脚身より長く、雄には螯あり、味淡く佳なり。夏の初め多く漁さる。

實作注意 杖突蝦とも云ひ「たなかせ」とも云ふ、たなかせはたねかしの音轉にて種かしの頃より出づるによりて名づけたりと。草蝦とも書く。

例句

手長蝦　手長蝦餌をはさんで浮きにけり　虎落笛（ホト、ギス）
なめらかに石の上をゆく手長蝦　九二緒（同）

蝦蛄（しやこ）　しやくなげ

古書校註【三才圖會】閩書に開元遺事を載せて云、鰕蛄の狀蜈蚣の如く、尾は僧の帽の如し。泉人之を青龍と謂ふ。△按るに鰕蛄狀鰕に類して扁く、頭尾相等し。手足に鬚あり。多く背に細節あり。灰白色、碧を帶ぶ。攝泉（一）の雜肴の中にも亦混り來る。熱食す。其肉少くして味佳からず、相傳へて云ふ婦人の血閉を治すと。

註（一）攝州、泉州をさす。

季題解説 形稍々蝦に似てそれより體扁平なる海産、東海の沿岸に普通漁せらるゝ食用のもの、肢の紅色なると尾部の紅色なるとの外は、蒼灰色なり、煮れば赤褐色となる。初夏の頃卵を持ちて味美なり。天婦羅として賞美さる。

例句

蝦蛄　おほいなる蝦蛄の鎧のうすみどり　御舟（ホト、ギス）
ふき上る汐に小蝦蛄の生れけり　祥峰（同）

蟹（かに）　山蟹（やまがに）　川蟹（かはがに）　磯蟹（いそがに）　蟹の子（かにのこ）　蟹ひしこ

古書校註【三才圖會】本草綱目蟹の性多く躁し　聲を引て沫を噀く。死に至れば乃止む。流水に生ずる者黄にして、腥し。止水に生ずる者は色紺にして馨しき也。其子を散して後、即ち自ら枯死す。霜の前は物を食ふ、故に毒あり。

霜の後は將に螯せん(一)とす。故に味美なり。今の人以て食品の佳味となす。(略)蟛蜞鹽に藏する者也。

註(一)かくれる。

【季題解說】 淡水產と鹹水產との二種あり。腹・背に殼ありて横に廣く、眼は蟹の如く、飛び出て兩手に鋏あり、左右に各四足、皆尖れる爪あり、性前へ行くこと能はず、横に走ること速かなり。腹の下に卷き返したる厚き殼あり、俗にふんどしと云ふ。その狹く長きを雄とし、廣く圓きを雌とす。毎年夏一回殼を更む。多く水中の巖礁或は砂中、水邊の石崖等に穴居す。食すべきもの然らざるもの等種類甚だ多し。

【季題解說】 山蟹・川蟹・磯蟹は春夏の頃出でて横行するより、夏季のものと定められたるべくも、その食用となるべきものは、蝤蛑(晩秋)を除くの外は多くは產卵後にして味劣り、河川の產は春、深海の產は冬を旬とすれば、季題(夏)としての蟹は、食用とならざる山・川或は磯の小蟹類を指せるなり。【參照】蝤蛑。

【例句】

蟹

夕雨やをかに出揃ふ蟹の穴　曉臺(曉臺句集)
鋏あげて動かぬ蟹を掃きにけり　雨聲(ホトトギス)
月の蟹誘はれ逃げて縺れ合ひ　不知郎(同)
竹の根を洗ふ流れや蟹遊ぶ　玉骨(同)
紫の泡ふきかぶりもくず蟹　圓嶺(同)

蝤蛑　擁劍蟹　蝤蛑　蝤蛑の子　わたり蟹　海蟹

【季題由來】
【三才圖會】 擁劍蟹は江海に生ず。大なる者、味美なり。鹹水を用ひて、煮熟すれば、則純赤色に變ず。(略)山崎和州の游潮之あり。毎十月廿日必ず群出す。土人此日を候ひて(一)、多く捕るも亦一異也。
【滑稽雜談】 夏月にいたりて子を生ず。取て食する故、夏に用るならし。此者北邊におほし。又西海(二)にも產する也。都には見る事稀也。大坂界の地に來る多し。土俗是を賞す。

註(一)うかゞひて。(二)九州也。

【季題解說】 蟹の一種、食用として最も普通なる海產のもの、俗に海蟹と云ふ。甲扁圓をなし、横に廣きこと普通七八寸、その兩尖りあり、其大きく、鋏小さく、[illegible]、最後の一對は扁平杓子の如し、以て自由に游泳し、巧に速く泳ぐより「わたり蟹」の稱あり。初夏の頃より卵を多くもちて、味甚だよろしく其頃を旬とす。【參照】蟹

【例句】

蝤蛑の子　[illegible]ふ水上走りかざみの子　青々(妻木)

海膽　雲丹　海栗　うにのね

古書校註　【三才圖會】　和名宇仁、奥州の人呼んで乃彌と名く。（略）西海（一）大村・五島・平戸及津島の産最も佳也。北海越前の福居（二）及奥州の岩城の産亦良し。其狀圓く生栗に似て芒刺あり。紫黒色なり。故に俗呼んで海栗と曰ふ。芒殼より内に肉あり。

註　（一）九州。（二）福井。

季題解説　海底の巖石の間に著く貝の名。殼は圓く扁たく紫黒なり、そとに黒き刺多く栗の毬の如きより海栗の字を記す。肉食ふべからず。その卵を採りて練りて鹽辛とせるものをも「雲丹」と云ふ。酒家の好下物として賞翫せらるゝ所、越前雲丹・對州雲丹品質よく名あり。

實作注意　海膽の産卵は一年に三四回あれど、その採集は大抵年一回、産地によりて時期を異にす。越前にては夏季の土用、奥羽は五六月、九州は寒中に限るとあり。

例句

海膽　海膽の針ひとつ〱に生きてをり　團周（ホトヽギス）
　　　ハンケチに包みし海膽に刺されけり　黄子（同　人）
雲丹　雲丹動く磯巾著も動く哉　月斗（同　）
　　　雲丹よぶや酒座はてゝ侑妓あり　青七星（同　）

保夜　老海鼠　まぼや　あかぼや

古書校註　【三才圖會】　松前津輕の海岸中に之有り。引網にて之を取れば形團く（一）、大さ六七寸、圍り八九寸、殼淡赤。全躰に肬多く有りて、海鼠（二）の肬の如し。（略）香は海鼠の氣に似て、透頂（三）の香氣味あり。蒸酒を以つて食ふ。

註　（一）まるく。（二）なまこ。（三）透頂香。草の名。痰を治するに用ふ。

季題解説　海底の岩に附著せる海鼠の如きもの、形皮の袋の如く大きさ拳の如し、殼堅く薄赤くして疣多く目口なし。肉は赤貝に似て、このわたの氣あり、多く鹽して食用す。東北及北海道に産す。「まぼや」＝「あかぼや」その他種類あり。老海鼠とも書す。

海月　水母　海折　石鏡　備前海月　幽靈海月　水海月　行燈海月

古書校註　【滑稽雜談】　崔禹錫が食經に云、海月、一名、水母。貌、月の海中に在るに似たり。故に以て之を名く。時珍本草に曰、海蛇（一）、南人訛りて海折となす。（略）廣人水母と曰ふ。異苑に石鏡と名く。（略）（二）泥海に生ず。故に

備前筑後等よりおほく出る。此月専ら取りて櫟の葉を多く割きて水母の内に包み、鹽を用ひず、只葉を以て淹蔵する也。夫木集　我戀は海の月をぞ待わたるくらげの骨にあふ世ありやと　仲正。

註（一）くらげをさす。（二）以下其書の自註也。

季題解説　潮の流に從うて浮游し、水汚の凝れるが如き水産のもの、腔腸動物と云ふ。形或は傘の如く或は釣鐘の如く下に絲の如きものを長く曳く。骨なく軟かきこと寒天の如し。常に水の上層を浮動す。其の種類甚だ多し。然れども食用となるは備前海月の一種のみにて傘一尺位、肉厚く綠に切込あり、藍青色に見ゆ。晩夏の頃袋網にて漁獲し、乾して明礬漬・糟漬とし、二杯酢など酒の肴とす。

例句

海月

大海月船より煙草投げにけり　王樹（同人）
水夫等に海月見下ろす暇哉　同（同）
潮汲みの手桶にはいる海月哉　靜緒（同）
横ざまに海月流るゝ潮かな　虚子（ホトトギス）
夕風に海月の海となりにけり　筑紫郎（同）

参考　海月、水母　著名な種類を左に掲げる。

備前くらげ Rhopilema esculenta.　瀬戸内海に多く産し、九州地方にも見られる。半球形に近い傘を有し、その直徑は約四十センチ、紺碧色である。その下方に乳白色の觸手が根狀をなして着生してゐる。古來食用に供したもので、現今は明礬水中に保存し、用ふるに當つて熱湯をかけて柔くする。

幽靈くらげ Cyanea nozakii.　これも大形の海月で、傘の直徑半メートルに達するが、傘の色は白色、圓盤狀、甚だ長い多數の觸手を曳いて海中を泳ぎ、其有樣が幽靈のやうなところから此の名がある。夏季、瀬戸内海に多數に現はれ、カハハギを釣るに用ひられ、ハギドベといふ。ハギはカハハギで、ドベは海月の方言である。

みづくらげ Aurelia aurita.　よつめくらげとも云ふ。傘は圓盤狀で、直徑三十センチに達す、觸手は甚だ短く、傘緣に並んでゐる。我國の近海に極めて普通な水母。

あんどんくらげ Charybdea rastonii.　傘は殆ど立方形、其高さ八センチ半、幅三センチ半、晩夏の頃日本海・太平洋沿岸に現はれ、長い四本の觸手を以て刺し、海水浴者を惱ます。ひもくらげとも云ふ。

夜光蟲（やくわうちう）　ひき

季題解説　無數に海中に簇生し、夜間水波の動搖に從ひて燐光を發する、形微細なる小さき、透明にして、一本の長き觸手を以て海面を浮游する蟲。「ひき」とも云ふ。

【實作注意】晩夏の頃より夜間よく注目す、船の水尾にも櫂の動きにも無數の星の如き青光を放ち、手にて掬へば指の間より落つる水にも光るもの：暖流地方にて最も多く充滿せるは、海面一樣に明るくなる程にて、かの筑紫の不知火もこの類ならんと云ふ。

【例句】

夜光蟲　夜光蟲倚漕ぎ戻る舟のあり　秋櫻子（ホトトギス）

漂へるもののかたちや夜光蟲　耿陽（同）

甲板を洗ふ手桶の夜光蟲　嶺月（同）

夜光蟲掬へば温きうしほかな　遠久江（同）

【參考】夜光蟲、夜間海の表面近くで、發光する微細な動物。この發光を「ひき」と稱へることがある。夜光蟲なる名は、動物學上は、經一ミリの球狀の動物で學名を Noctiluca miliaris のみに與へられてゐるのであるが、これだけが光ることは殆どなく、夜間に發光するものの中には、他の微細な動物も混じてゐるのであるが故に、俗に夜光蟲の名で呼ばれるものゝ範圍は甚だ漠然としてゐる。狹義の夜光蟲は無數に蕃殖して、海水を淡紅色に變ずることもある。分布は極めて廣い。

赤子（あかこ）　いとみみず

【季題解説】蚯蚓（みみず）の類にて、溝の中に群棲し、一見赤絲の如き蟲。金魚の餌とするもの。いとみみず。

鮑（あはび）　鰒（あはび）　石決明（せきけつめい）

【古書校註】

「三才圖會」大さ四五寸より尺許に至る。肉の色白くして微しく青き者を雄となす。微しく赤き者を雌となす、其味雄より優れり。凡て肉の四圍堅く薄くして蒼黑色、鰒の耳と謂ふ。（略）其子貝寸許の者を止古布志（一）と名け、醃（二）となし一布久太米と名く。

註（一）とこぶし、と讀みしとは別種。（二）しほづけ。

【季題解説】あはび貝の略、その殼片側のみにて蓋なく海底の石につく貝。二三寸の小さきより大なるは七八寸に及び、殼は一方に乳頭の形したるもの十餘あり、大小順に並びてその七八は穴をうがつ、外面は甚粗糙なれども內面は淡藍にして七色に光り美し、螺鈿に用ゐ鈕に製る。雄は肉青く、雌は赤褐なり。常に潮流の作良なる沿岸に棲む。肉しなやかにして味甚だ美なり。水貝・鹽蒸或は粕漬として、夏季の食料として賞美さる。漢名は石決明。【參照】人事—鮑取（アワビ）

【例句】

鮑　鮑十個明日の生計足りぬべし　黃子（同人）

藻をもて結ぶ髻鮑採　秋陽（ホトトギス）

鮑とる女ばかりの焚火かな　　同（同　）

【参考】鮑。Haliotis gigantea. 春の彼岸から秋の彼岸まで、海女により又は潜水機を使用して漁せられる。扁平な貝殼なので、二枚介の一方だけのやうな觀を與へるが、實は卷貝で、その口が極めて大となり、螺層が甚だ低くなつたものである。その形に因んで英語では「耳貝」(ear-shell)といふ。一對の鰓で呼吸するので、貝殼には四乃至五個の孔があいてゐる。この穴は貝殼が成長するに從ひ、殼緣に近く、新に生じ、古孔は閉ぢて行く。海底に生ずる海藻を食つて生活する。我國にて賞美されるばかりでなく、乾燥し又は水煮罐詰として、支那へ輸出し、重要水産貿易品の一に數へられてゐる。貝殼の內面が美麗なので、諸種の貝細工に用ひられる。トコブシは鮑に似てゐるので、これと混ずる人もあるが、呼吸孔が六乃至九個、貝殼が長楕圓狀であり、鮑よりも小である。

長辛螺（ながにし）　さかさほゝづき　甲香（へたなり）　香螺（かうら）

【季題解說】近海の砂泥地に産する海扇の如き旋條のある貝、形はばいよりも太く甚だ長し、大なるは五六寸に及ぶ、殼白けれど汚れたる褐色の皮を被る。梅雨の頃漁獲多く、鮑に次で美味なり。

【實作注意】この貝七八月の頃海底の木石介殼類に産卵す、その卵は海酸漿に似て「さかさほゝづき」といふ。又その蓋（へた）を「甲香」と稱し、白檀麝香等の香料に交へ香と煉を多からしむるより、香螺とも書す。

海酸漿（うみほほづき）　長刀ほゝづき　軍配酸漿（ぐんばいほほづき）　南京酸漿（なんきんほほづき）

【季題解說】最も普通に「うみほほづき」と稱せられゐるは、「天狗辛螺（テングニシ）」の卵嚢なり、形巾着の如く大きさ寸に滿たず、色黃白に皮堅く、海中の石に疊まり重なり着く。染色せしもの女兒のほほづきに代へて賣る。又紅螺の卵は「長刀ほゝづき」とて形細長く寸許のものを云ふ。

【例句】海酸漿

海女の子に海酸漿を買ひけり　　黃　子（同　人）

かたまりて海酸漿や沖の石　　雨　亭（ホトヽギス）

土用蜆（どようしじみ）

【季題解說】夏の土用中の蜆、俗に身體の榮養を助くることと平日に增さるとて、之を食ふと說ける者あれど、夏の蛤は犬も食はずと諺にある如く、夏の蛤蜆は味よろしからず。

【例句】土用蜆

土用蜆汁かく鬼に淺しけり　　一　巣（同　人）

植物

夏木立（なつこだち）　夏木（なつき）　夏木陰（なつきかげ）　蓊林（うつりん）　茂林（もりん）

古書校註

【年浪草】元帝纂要に曰、夏草を茂草と曰ひ、木を蓊林・茂林（一）と曰ふ。

註（一）うつりん、もりん、共に皐月の異名ともせらる。

季題解説 夏の頃のおひ繁れる木立を云ふ。夏木は夏の木々の稱。

實作注意 木立は樹の生ひ重なれる貌にて、乃ち林なれば、夏木立は複数る場合を云ひ、然らざるは夏木と云ふ。**参照** 木下闇（コシタヤミ）　冬―冬木立（フユコダチ）

例句

夏木立

花にのみ訪ねし事よ夏木立　宗因　（三籟）

雲岸寺佛頂禪師舊跡

木啄も庵は破らず夏木立　芭蕉　（伊達衣）

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立　同　（猿蓑）

蜘の巣はあつきものなり夏木立　鬼貫　（鬼貫句選）

黒き葉の匂ひも暑し夏木立　巴丈　（笈日記）

山寺に斧の御や夏木立　也有　（蘿の落葉）

いづこより礫うちけむ夏木立　蕪村　（句集）

酒十駄ゆりもてゆくや夏木立　同　（同）

花か實か水にちり込夏木立　同　（新五子稿）

かしこくも茶店出したり夏木立　同　（百池手記）

動くともなくて恐ろし夏木立　同　（落日庵句集）

休み日や雞鳴村の夏木立　同　（同）

とろゝ汲む音なしの瀧や夏木立　同　（遺稿）

魚くさき村に出でけり夏木立　同　（新五百題）

木に眠る法師が宿や夏木立　同　（夜半叟句集）

夜渡る川のめあてや夏木立　太祇　（太祇句選）

甘き香は何の花ぞも夏木立　同　（同）

隠家や町から見えぬ夏木立　同　（新選）

放参の鐘鳴るかたや夏木立　几董　（井華集）

山伐や笈ゆり上げる夏木立　鈍可　（故人五百題）

夏木立阿闍梨の供の後ばせ　召波　（春泥發句集）

夏木立いつ迯失て裸城　同　（同）

谷河の空を閉るや夏木立　同　（同）

市人の爰見立てけり夏木立　同（同）
雪を嚙て一峰こえぬ夏木立　曉臺（曉臺全集）
井堰うつ槌の響や夏木立　雅因（新選）
夏木立初瀬こんもりと物深し　嘯山（同）
歩み來ぬ早瀬はあとに夏木立　白雄（白雄句集）
塔見する風のひづみや夏木立　竹豐（桂の首途）
夏木立川の向ふは月夜哉　吟江（古姿）
燈籠の古き都や夏木立　一萍（心一つ）
碁を崩す音閑かなり夏木立　嵐山（續明烏）
かつを木の尾ばかり見えて夏木立　翠江（桓の誠）
木棉織る音靜か也夏木立　成美（杉柱）
塔ばかり見えて東寺は夏木立　一茶（句帖）
堂守が茶菓子賣る也夏木立　同（七番日記）
人聲に蛭の降るなり夏木立　同（發句集）
大寺は留守の體なり夏木立　同（同）
湖水など見えて水深し夏木立　道彦（俳句大觀）
月影にうごく夏木や葉の光り　去來妻（炭俵）
家の向思ひ〳〵や夏木陰　虚子（ホトヽギス）

夏木
夏木陰

新樹（しんじゅ）　新綠（しんりょく）　新樹陰（しんじゅかげ）　綠雨（りょくう）

古書校註　【滑稽雜談】　和歌題林抄に云、新樹は四方の木ずゑ青みわたりて、木々の色もみな薄翠にみへ、しげき山下もいとゞ闇くなりて、月も漏來ず、急雨も音ばかりして、露も落ぬなど讀べし。（略）（一）是一切の木の若葉出で綠なるを新樹新綠などいふ也。（二）草の若葉は春なり。これは木の若葉なり。（略）六百番　影ひたす水さへ色はみどり也、庭の梢のおなじ若葉に　定家。

註（一）以下其言の說也　（二）御傘に「若葉は木の若葉也、草の若葉は春になる也」とあり。

季題解說　初夏の清新なる若葉を持てる樹々を云ふ。新綠亦同じ。

實作注意　新樹・新綠ともに初夏の鮮明なる若葉をもてる樹々を指すものなれど、その若葉の色彩を主として詠ふには新綠を用ゐ、その樹立を主とする場合は新樹の語を用ふる方、直覺明かなり。又綠雨の語あり、新綠に降りかゝる雨を云ふ。〔同類〕植物―綠陰（リョクイン）・若葉（ワカバ）・青葉（アヲバ）

例句

新樹

煮鰹をほして新樹の畑かな　嵐雪（玄峰集）
隣には木造りのぼる新樹哉　太祇（太祇句選）
世わたりのしれぬ小村の新樹哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
白雲を吹つくしたる新樹哉　才丸（眞木柱）
日の渡りて里守樹の新樹哉　帶布（明烏）

新綠　白藤が隱れる雨の新樹哉　月斗（同　人）
新綠や舟を曳かせて潤る　秋皎（ホト、ギス）
新樹陰　人媚て朝宴す新樹陰　曉臺（曉臺句集）

綠陰（りよくいん）　翠陰（すゐいん）

季題解說　若葉青葉の地に青き陰をつくれるを云ふ。初夏の境地なり。

實作注意　王安石の詩初夏即事の結句に、「綠陰幽草勝二花時一」とある如き初夏の風趣にして、木下闇の如く夏深き時期のものにあらず。「翠陰」と云ふも同じ。［參照］　新樹シンジユ　木下闇コシタヤミ

例句及作句

綠陰　綠陰や詩會の人の徘徊す　月斗（同　人）
綠陰や柱の御所の楓樹林　同（同　）
綠陰の庭池白鷺を放ちたる　同（同　）
綠陰や間へだてゝ榻二つ　雨意（ホト、ギス）
綠陰に擴げし地圖を閣みけり　たひら（同　）
翠陰　翠陰に池あり金魚彩れる　月斗（同　人）

青葉（あをば）　青葉若葉（あをばわかば）　青葉山（あをばやま）

季題解說　初夏の頃、樹々の若葉のやゝ生ひ茂りて、青々としたるを云ふ。

實作注意　古くは若葉と同意に併したれど、青葉は若葉より稍濃き綠を見せたるものにて、「青葉若葉」などと重ねて用ゐたるは、濃き薄き綠葉のうち交じれるを云へるなり。［參照］　若葉ワカバ

例句及作句

青葉　（詣西大寺）青葉して御日の雫拭はばや　芭蕉（笈日記）
有明のゆられて殘る青葉かな　乙由（麥林集）
欵冬に春をわたして青葉哉　支考（蓮二吟集）
すゞしさや青葉見上る嵐山　有施（八仙傳）
蝸牛照りからさるゝ青葉かな　月下（其袋）
梅の木の心しづかに青葉かな　一茶（句帖）
心よき青葉の風や旅姿　子規（全集）
青葉若葉　（月光山）あらたうと青葉若葉の日の光　芭蕉（奧細道）
青葉若葉下は玉ちる岩の水　闌更（半化坊發句集）
青葉若葉憑悲心深き深山哉　存義（句鑑）
青葉若葉苦中の鐘鳴り渡る　子規（全集）
青葉若葉烟突多き王子かな　同（同　）
青葉山　銀屛風にうつす綠や青葉山　盧元（八仙傳）

若葉（わかば）

柹若葉（かきわかば）　梅若葉（うめわかば）　樟若葉（くすわかば）　楠若葉（くすわかば）　樫若葉（かしわかば）　椎若葉（しひわかば）　櫨若葉（はじわかば）
藤若葉（ふぢわかば）　蔦若葉（つたわかば）　葛若葉（くずわかば）　榎若葉（えのきわかば）（其の他名の木）山若葉（やまわかば）　谷若葉（たにわかば）
森若葉（もりわかば）　里若葉（さとわかば）　庭若葉（にはわかば）　寺若葉（てらわかば）　水若葉（みづわかば）　むら若葉（わかば）　八重若葉（やへわかば）
うら若葉（わかば）　若葉時（わかばどき）　若葉晴（わかばばれ）　若葉曇（わかばぐもり）　若葉寒（わかばさむ）　若葉風（わかばかぜ）　若葉雨（わかばあめ）

季題解説　喬木と灌木とを問はず、總ての樹木の、夏に入りて瑞々しき新葉をつけたるを云ふ。種類に依りて一様ならざれども、凡て鮮かなる色彩をもてるもの若葉と云ふ。

實作注意　若葉は木々の種類に依つてその形態とその綠の美しさを異にせるより、特に柹若葉・樟若葉とその名稱を附して、特有の色彩、組織の柔かさなどを直覺せしむ。又その色彩の濃淡を表はすには「むら若葉」と云ふ。重なれるものには一八重若葉一などの言葉を用ふ。「若葉風」は若葉に吹く風、「若葉雨」は若葉に降りそゝぐ雨、其他若葉時の寒さ晴曇をも季の言葉として差支なし。【參照】新樹（しんじゆ）　青葉（アヲバ）　春　草若葉（クサワカバ）

例句

若葉

鈴鹿路は若葉の底の川瀬哉　宗春（三籟）
又是より若葉一見となりにけり　素堂（俳諧五子稿）
村雨につくらぬ椎の若葉哉　同（同）
年寒し若葉の雲の朝ぼらけ　其角（五元集）
若葉吹く風やたばこの刻よし　嵐雪（玄峰集）
若葉吹風さら〳〵と鳴りながら　惟然（惟然坊句集）
大空も見えず若葉のおく深し　北枝（北枝發句集）
晩鐘に雫もちらぬわか葉かな　千代女（千代尼發句集）
浴して若葉見に行く夕かな　鈍可（曠野）
淺間山烟の中の若葉かな　蕪村（新選）
をちこちに瀧の音聞く若ば哉　同（新花摘）
山畑を小雨晴行くわか葉かな　同（同）
般若讀む庄司が宿の若葉哉　同（同）
夜走りの帆に有明て若葉かな　同（同）
谷路行く人は小さき若葉哉　同（同）
淺河の西し東す若葉哉　同（同）
山に添うて小舟漕行く若葉かな　同（句集）
蚊屋を出て奈良を立ゆく若葉哉　同（同）
窗の燈の梢にのぼる若葉哉　同（同）
不二ひとつうづみ殘してわかばかな　同（同）
絶頂の城たのもしき若葉かな　同（同）
蛇を截てわたる谷路の若葉哉　同（同）

若葉

若葉して水白く麥黃ミたり　蕪村（句集）
金の間の人もの言はぬ若葉哉　同（新五子稿）
高どの丶燈影にしづむ若葉哉　同（同）
今ははや獨活もくはれぬ若葉哉　同（落日庵句集）
やどり木の目を覺したるわかばかな　同（遺稿）
峰の茶屋に壯士餉す若葉哉　同（同）
出家して親王ます里の若葉哉　同（同）
岸根ゆく帆はおそろしきわかば哉　同（同）
道觀の岡見しづかに若葉哉　同（遺草）
竹原を一木もれいづる若葉哉　太祇（句稿）
西風の若葉をしをるしなへかな　同（太祇句選）
嵐して藤あらはる丶若葉哉　几董（井華集）
祟なす樹も枝かはす若葉かな　同（同）
わかばして親と子疎き雀かな　同（同）
囀に蟲も聲添ふわかばかな　同（同）

奈良

君が代や今も若葉の男山　同（同）
あはしまを女の出る若葉かな　召波（春泥發句集）
水音も若葉も木曾の日々〱に　同（同）
蛇落ちて驚く崖の若葉哉　維駒（五車反古）
山寺の隱れて烟る若葉かな　嘯山（新選）

金閣寺

こがね鏽て若葉にしのぶ昔哉　樗良（樗良發句集）
雨雲のかき亂し行く若葉かな　曉臺（曉臺句集）
若葉して水とり雲のいそぎ哉　同（同）
鳥鳴いてしづ心ある若葉哉　蓼太（蓼太句集）
音もなく若葉にしほる細雨かな　同（同）
里の燈をふくみて雨の若葉哉　同（同）
雨はれて雫の青き若葉かな　同（同）
國ゆたかに見ゆる若葉の關路哉　白雄（白雄句集）
柴の戶の朝々しめる若葉かな　士朗（俳句全集）
消炭の庇にかはく若葉かな　一茶（句帖）
乘掛のひよつくり出たる若葉哉　同（九番日記）
若葉して佛のお顏かくれけり　成美（成美家集）
橋ゆけば人に見らる丶若葉哉　同（同）
淺草の甍こぶかき若葉哉　同（同）
傘のちいさく見ゆる若葉かな　集兆（曾波可理）
一日の心を得たる若葉かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）

手折を健氣にかくす若葉かな　梅室（梅室家集）
若葉吹く風やさげゆく馬の沓　乙二（たのゝえ草稿）
暮の雨霽れて若葉の月夜哉　桃水（句鑑）
風折々燈火見ゆる若葉かな　生佛（明烏）

浪花眺望
若葉こし甍こしにや西の海　一音（同）
鳥は鳴く水は流るゝ若葉哉　定雅（椿花）
山の井や若葉が上の濡布巾　九河（小弓俳諧集）
吹おろす若葉明るし奥の院　左虹（皮籠摺）
御靈荷をつくる榊の若葉かな　士朗（枇杷園句集）
見ありきて先問ふ郷の若葉哉　白雄（白雄俳句集）
灯ちら／＼絶えず若葉に風渡る　子規（全集）
宮か寺か若葉深く灯のともれるは　同（同）
三千の兵たてこもる若葉哉　同（同）
山越えて城下見おろす若葉哉　同（同）
雨岸の若葉せまりて船早し　虚子（ホトヽギス）
茂山やさては家ある柿若葉　蕪村（新五子稿）
楠の若葉穂に出る麥の騒がしき　長翠（俳句大觀）
葛の若葉吹切つ行嵐哉　曉臺（曉臺句集）
榎若葉曇れる天に静まれり　月斗（同人）
ふるさとの梅の若葉や堂籠　巣兆（曾波可理）
古城を守りて楠の若葉かな　安土（句集）
樫の木の青葉の先の若葉哉　斗入（俳句全集）
盛上てしたゝか椎の若葉かな　碧孤（句集）
爽や筑紫平野の楢若葉　月斗（同人）
濃く薄く奥ある色や谷若葉　太祇（太祇句選）
戸の明や魚荷こえ行山若葉　成美（いかにノ＼）
風に飛ぶ小禽の見ゆれ森若葉　月斗（同人）
庭若葉いきノ＼として天曇る　同（同）
遅櫻あり布く雨の若葉寺　同（同）
水若葉かつぎ著て來し人の影　園女（其袋）
八重若葉笑佛もうそ寒し　波麥（木若葉）
朝雲のはふ〳〵にも降すむら若葉　高之（夜の柱）
逢阪やいつ迄寒きうら若葉　士朗（俳句全集）
道にまよふや大野山も若葉時　路十（落葉道）
山鳩の一聲に眠さよ若葉頃　道之（百番句合）
葉影浮く島のまるさや若葉晴　蘭君（ホトヽギス）

若葉曇　寐たらぬか若葉曇か朝の内　梅室（俳句全集）
若葉曇にうつとりとゐる時移る　月斗（同人）
若葉雨　盞に終日したり若葉雨　同（同）
若葉寒　雲煙の去來す山や若葉寒む　同（同）
若葉風　花の瘦にあるを覺しぬ若葉風　同（同）

木下闇（こしたやみ）　下闇（したやみ）　木の下闇（このしたやみ）　木晩（このくれ）

古書校註【年浪草】夏木立下闇と和にいへる、即ち蔚林茂林と云ふ意なり。萬葉には木晩（コノクレ）と讀めり。○木晩乃暮闇有爾霍公鳥何處家登鳴渡良之（一）作者未詳。
註（一）このくれの夕闇あるに時鳥いづこを家と鳴きわたるらし。

季題解説　夏日鬱蒼と繁茂したる樹の間の晝尚暗きを云ふ。或は略して「下闇」と云ふ。

實作注意　闇は形容のやみにて、暗黒の事にてはあらず、暗さを感ずるの表示なり。［參照］夏木立（なつこだち）　茂（しげり）

例句

木下闇　須磨寺や吹ぬ笛きく木下闇　芭蕉（續有磯海）
（須磨の浦一見の時）
木の下やくらがり照す山椿　桃隣（古太白堂句選）
杣の手に明てゆく夜や木下やみ　也有（蘿葉集）
桑子さへ齒音おそろし木下闇　蓼太（蓼太句集）
日の影を踏まぬ奥あり木下闇　龜童（月影塚）
木下闇鷲も兎を逃しけり　羽有（同）
牛の目の光る山路や木下闇　白尼（類題句集）
木下闇水のもと末覺束な　贚上（佐渡日記）
梢の火の絶せぬ寺や木下闇　十曉（心一つ）
蟇出でて我に向へり木下闇　尺艾（鵜の音）
界隈の繩なひ所や木下闇　一茶（七番日記）
我を見て嘶く馬や木下闇　虚子（句集）
木の下闇　霧雨に木の下闇の紙帳かな　嵐雪（玄峰集）
（こがね海道にて）
賣卜先生木の下闇の訪れ顔　蕪村（新花摘）
下闇　下闇や鳩根性のふくれ聲　其角（五元集）
下闇や地蟲ながらの蟬の聲　嵐雪（玄峰集）
下闇に三輪も過けり泊瀨の町　召波（春泥發句集）
下闇に乾かぬ閼伽のしづくかな　蓼太（蓼太句集）
下闇や椎の名かさね草もなき　白雄（白雄句集）
下闇やいつともいたる石燈籠　蘭谿（恒鹹）

下闇や池しんとして魚泛きたり　子規（全集）

下闇や山先達が休ませず　月斗（同人）

茂（しげり）　茂み（しげみ）　茂る（しげる）　茂り葉（しげりは）　山茂（やましげり）　川茂（かはしげり）　庭茂（にはしげり）　茂り宿（しげりやど）　夜の茂（よのしげり）

古書校註　【山の井】すべて夏山のしげみは、日のめもおがまれず、ふる雨ももらず、わけなれし杣人も、道のとほう（一）をうしなひ、けだ物かるせこどもも、聲ばかりして姿は見えぬやうにいひなし侍る。

註（一）途方。方角がわからなくなる。

季題解説　夏の頃の樹木の枝葉生ひ茂れるを云ふ。

實作注意　若葉青葉の頃を經て鬱蒼と繁茂せる樹々を云へるにて、

茂る木は葉守の神の宿りかな　宗砌（大發句帳）

の如く茂るの動詞にも用ふ。山茂・川茂・庭茂或は茂り宿・夜の茂などとも云へり。參照　木下闇（コシタヤミ）

例句

茂

嵐山藪の茂りや風のすじ　芭蕉（嵯峨日記）

篠の露袴にかけし茂かな　同（後の旅）

雲を根に富士は杉なりの茂かな　同（續連珠）

川芎のたまさか匂ふ茂り哉　嵐雪（玄峰集）

光りあふ二つの山の茂りかな　去来（去來發句集）

傘の音して出づる茂かな　土芳（古人五百題）

山いも茂りてくらしうつの山　許六（五老井發句集）

松檜茂りの中の寒さかな　通雪（古人五百題）

たうノ\と瀑の落こむ茂り哉　士朗（枇杷園句集）

此山の茂や妙の一字より　蓼太（蓼太句集）

伊香保根や茂りを下る温泉の煙　一茶（句帖）

それノ\に池の小島も茂かな　梅室（梅室家集）

貝ふけば小蟲こぼるゝ茂かな　同（同）

山鳥のたれ尾ひらつく茂り哉　同（同）

山伏の法螺吹立つる茂りかな　子規（全集）

丈の低き老木茂りぬ原の中　同（同）

茂み

夕はえや茂みにもるゝ川の音　丈草（古人五百題）

茂る

神々と春日茂りてつゝら山　鬼貫（鬼貫句選）

神の杵雪の麓に茂りけり　闌更（半化坊發句集）

茂り葉

茂り葉や青女房の加茂詣　尺布（新選）

山茂

茂山やさては家ある柿若葉　蕪村（類題發句集）

日暮し日々に黒ずむ山茂　月斗（同人）

川茂

川茂四つ手の小屋の燈が見ゆる　同（同）

庭茂　燈籠の數々古りつ庭茂り　月斗（同　上）
茂り宿　一醉に枕叩びけり茂り宿　同（同　）
夜の茂　野も山も梅雨氣しめりの夜の茂　同（同　）

結葉（むすびば）

古書校註

【滑稽雜談】和哥題林抄に曰、（略）夏になれば、木の葉しげく結て、木陰も常よりいぶせく（一）おぼゆるなり。（略）金葉集に應德元年四月、三條内裏にて、庭樹結葉といへる事をよませ給ひける、院（二）御製をしなべてこずゑ青葉になりぬれば松のみどりもわかれざりけり。（三）愚按るに諸木茂り合て、葉と〳〵相交り、むすぼれたることくに侍る事也。

註（一）鬱陶しく。（二）白河院。（三）其詠の自註也。

季題解説　諸木の若葉する頃、其葉相重なりて結合ひたる如きを云ふ。參照　青葉（アヲバ）若葉（ワカバ）茂。

例句

結葉　結葉に後庭山の流れひく　圭岳（同　人）

病葉（わくらば）

古書校註

【栞草】病葉也。紅葉のごとく、赤くなりたるもの、又朽て黄ばみたるをもいふ。

季題解説　夏期諸木の生々と繁茂せる青葉の中に、暑氣に蒸されて、黄に赤に朽ちたる葉の枝に止まり或は降りくるものあり、わくら葉と云ふ。又蝕みて色を變へゐるものをも云ふ。

例句

病葉　病葉にちるもちられぬ茂哉　紀亮（古今句鑑）
わくら葉や人は頭痛に障る空　玉圃（同　）
わくら葉に添うて落ちけり蝸牛　烏明（文車）
病葉をはこぶ蟻あり嵐山　青々（妻木）
病葉を倘いため食ふ蟲いやし　呂柏（ホトヽギス）

土用芽（どようめ）

季題解説　夏土用の頃、草木の再び新芽を吹くことを土用芽と稱す。

實作注意　植物は概ね二三月頃より嫩芽を生じ、若葉となり青葉となるも、夏の土用更に亦芽を吹くことあり。乃ち土用芽なるも、新葉伸びても羸弱なる如し。參照　時候―土用（ドヨウ）　春―木の芽（コノメ）

土用芽や たしかに生きる樹を廻る　　みどり女（ホトトギス）

葉櫻（はざくら）　〔副題〕櫻若葉

古書校註 【栞草】才麻呂一派にては、葉櫻を春とす。蕉門諸流には、四月とせり。首夏の新緑を賞するなり。

季題解説 櫻の花の散りて後、若葉となりしを葉櫻と云ふ、櫻若葉のことなり

實作注意 葉櫻は葉と共に咲く一種の櫻なりとして春の季題とせるものあれど、葉櫻とは落花の後葉のみとなりし櫻の木の謂なれば、當然初夏のものなり。〔關聯〕若葉、春—櫻

例句 葉櫻

葉櫻や寺中の人の聲ばかり　　希因（類題發句集）
葉櫻や千題佛のみがき箔　　史邦（小文庫）
葉櫻や草鹿作る兵等　　蕪村（新花摘）
葉櫻や南良に二日の泊客　　同（同）
葉櫻や碁氣になりゆく奈良の京　　同（遺稿）
葉櫻のひと木淋しや堂の前　　太祇（太祇句選）
葉櫻に一木はざまやわか楓　　几董（井華集）
葉櫻や鳩の産家のうそ暗き　　蝶羽（千鳥掛）
葉櫻や蝶に盧生の夢さむる　　也有（蘿葉集）
葉櫻や人なつかしき鹿𦗝の奥　　去止（恒誠）
葉櫻や法師ばかりの來る庵　　竹笑（京水）
葉櫻を洗ふ大雨や夜明方　　月斗（同人）
三春の行樂櫻葉となりぬ　　虚子（ホトトギス）

葉柳（はやなぎ）　〔副題〕夏柳　柳茂る

季題解説 葉の茂りたる夏日の柳を云ふ　夏柳と云ふも同じ。

實作注意 俳句にては單に柳と云へば春、柳散るは秋、その枯れたるは冬の一定のなり。〔關聯〕花—春—柳　秋—柳散る　冬—枯柳

例句 葉柳

葉柳の寺町過る雨夜かな　　白雄（白雄句集）
葉柳や雨の間の庭つくり　　士朗（枇杷園句集）
葉柳や初夜も過ぎたる月の影　　蒼仙（古今太白集）
闇くなる葉柳くらき五月哉　　百明（俳諧大觀）
立ち並ぶ葉柳堀を埋めけり　　月斗（同人）

夏柳　車道狭く埃捲くなり夏柳　子規（全集）
釣り眠る、石沒す水や夏柳　魚將（ホト、ギス）

若楓（わかかへで）　若葉の楓（わかばのかへで）　嫩楓（わかかへで）　青楓（あをかへで）　青き紅葉（あをきもみぢ）　若葉の紅葉（わかばのもみぢ）

古書校註

【滑稽雑談】楓、初夏新葉を生ずるを嫩楓又は青楓など賞す。又一説に云、若葉の蝦手（かへで）は青楓と云ふ。嫩楓と云ふは春の末より初夏の頃まで、葉さきの色づきて、又梅雨の頃は、青葉に變ずる者也。其初夏に色付たるを若楓と申也。（略）夫木集　若かへで青きひとへに紅ひのはかまとみゆる岩つつじかな　慈圓

【年浪草】徒然草に曰、卯月ばかりのわかかへで。○鐵槌抄に云、杜牧詩に霜葉（一）二月の花より紅なりといひ或又新綠勝レ花と、云々　花の後に見る梢は、春の俤もおもひやらるるなり。（）又青き紅葉と云事あり。もみぢする木は春より秋の色の覺るなり。

註（一）霜で赤くなつた葉。

季題解説　楓の若葉を云ひ若葉の楓の略。嫩葉は晩春初夏に萌え出で淺綠の色美しく、翠影爽々として秋の紅葉に勝れり。［參照］若葉（なつ）　秋―紅葉（あき）

例句

若楓

若楓一降りふつて日が照て　來山（續いま宮艸）

東叡山

僧正の青きひとへや若楓　其角（五元集拾遺）
君だちの手習ひの間や若楓　涼菟（類題發句集）
三井寺や日は午にせまる若楓　蕪村（新花摘）
若楓學匠書ミに眼をさらす　同（同）
若楓まづしき賤がはき掃除　同（落日庵句集）
近う聞く座主の嚏や若楓　同（同）
篝目にあやまつ足や若楓　同（遺稿）
葉櫻に一木はざまや若楓　几董（井華集）
若楓午時に間のあるそよぎ哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
古井など人の覗きてわか楓　同（同）
禰宜が子の雛抱いて若楓　楞堂（新十家）
まぎれぬや青葉の中の若楓　吟江（夢占）
牛瀧のくらがり深し若楓　銀獅（俳諧新選）

目黑

垢離とりの男揃ひや若楓　蓼太（蓼太句集）
紅葉より赤くてそれも若楓　梅室（梅室家集）
四阿に日の影動く若楓　子規（全集）
川上の橋を隱して若楓　虛子（ホト、ギス）

青桐（あをぎり）

若楓修日風と游ぶかな　月斗（同人）

梧（あをぎり）　梧桐（ごどう）　桐麻（どうま）　あやぎり　あをによろり　いつさき

古書校註

【滑稽雜談】遁甲注に云、梧桐日月の正閏（一）を知る。十二葉を生ず。下より數へて、一葉を一月と爲す。閏あれば十三葉、葉の小なるを視て、閏何れの月と知れり。

【年浪草】梧桐一名青如狼狸（二）（略）此木内直ぐなる徳を備へたるものゆゑ、竹と同じく天子の御衣の紋とす。桐竹と稱する是なり。禮記にも出たり。又井の傍に桐を植れば、鴆鳥の毒を除く。桐は鳳凰の棲む木なり。鳳は諸鳥の長ゆゑ、此木は鴆鳥も恐てよらぬ也。

註（一）梧桐は正年と閏年の相違をしるとの意。（二）あをによろり。

季題解説　主に庭園に栽培の翠色を賞さるゝ落葉喬木。緑色の樹幹直立三丈餘、周圍三四尺に達す。葉は短毛ありて廣く三五裂して大さ七八寸、深緑に夏期甚だ茂る。六月の頃枝頭に長き穂を出し、枝を分ちて五瓣黄白の小花集り開く。後に莢を生じて内に實あり、圓く大豆の如く皮に皺あり。

實作注意　漢名、梧桐・梧・桐麻、果實は、梧桐子。異名「あやぎり」「あをによろり」「いつさき」。[參照] 桐の花（夏）

例句

青桐の笠に見て行くしづく哉　乙二（をのゝえ草稿）

青桐にかんばせ青く話しをり　唐秩（ホトヽギス）

參考　あをぎり（梧桐）Firmiana platanifolia, Schott et Endl.（あをぎり科）庭園に栽培する落葉喬木にして、蓋し元支那の原産なるべし、樹皮青く、葉は長柄を有し、基脚は心臟形にして、裏面に毛茸あり、夏日大なる頂生圓錐穂をなして帶黄小花を開く、一花穂中雌雄花相交る、果實は蓇葖をなし、全く成熟せざる前に於て、既に開裂して略舟狀をなし、兩邊緣に數箇の圓き種子を着く、樹皮にて繩索を製し能く水に堪ゆ。

青蔦（あをつた）

蔦茂る（つたしげる）

季題解説　夏季、蔦の葉の青々とし、またその茂れるを云ふ。蔦は山野に自生する藤本、莖に卷鬚ありて、他物に攀ぢ高處にも達す。葉は春、舊莖より出でゝ上部の深裂せる心臟形、色青く光澤あり。よく繁茂し、墻壁等を覆ふに至ることあり

實作注意　青蔦を詠むにはその色の青きを云ひ、蔦茂るはその繁茂の調なり。又蔦の一種にて、青蔦の名稱を有てるものあれど、古來季題としての「青蔦」は蔦類の青葉せるを云へるものなり。[參照] 茂、秋—蔦

例句

蔦茂る

二王にもよりそふ蔦の茂り哉　その（其袋）

蔦茂る　二筋と植ゑぬに蔦は茂りけり　嵐外（分類俳句集）

青蔦　一すぢの青蔦にして繭を巻く　牛欣（ホトヽギス）

玉巻く芭蕉

玉解く芭蕉　芭蕉の巻葉　芭蕉葉の玉　芭蕉若葉

古書校註

【年浪草】初夏中心、新葉を生じて、未開かざる者、之を巻葉と謂ふ、玉巻芭蕉と稱する者是か。

季題解説　初夏の頃、新葉を生じたる芭蕉の未だ開かずして巻葉の姿にあるを云ふ。

實作注意　玉は賞美の詞にして、尚ほ玉柏・玉椿と云ふが如く、玉巻く芭蕉は芭蕉の巻葉の謂なり。［参照］玉巻く葛（夏）　芭蕉の花（秋）　芭蕉（秋）

例句

玉巻く芭蕉　青苔や玉まく芭蕉一株二株　芭蕉（翁反古）

洛東芭蕉庵落成の日
耳目肺腸こゝに玉巻ばせう庵　蕪村（句集）

玉解く芭蕉　眞白な風に玉巻く芭蕉かな　茅舎（ホトヽギス）

芭蕉巻葉　賑やかに芭蕉巻葉の立てりけり　浪々（同）

芭蕉葉の玉　眞輪寺
芭蕉葉の玉より落ちて夜の露　孤佛（佐渡日記）

芭蕉若葉　青空や芭蕉の若葉ねぢほどけ　和鳴（類題發句集）

萩の若葉

萩若葉　萩の茂

季題解説　萩の若葉を云ふ。萩の芽生は古來彼岸と唱へ居るも、正しくは四月の初めとし、若葉の出揃ふは五月初めにて、梅雨中には大に茂り生長するものとす［参照］若葉（夏）　茂（夏）　萩（秋）

例句

萩の若葉　萩若葉霖雨の中の晴一日　月斗（同人）

又ぞ見ん古枝もしげる萩の露　紹巴（富士紀行）

常盤木落葉

柊落葉　木槲落葉　樫落葉　冬青落葉　楠落葉　杉落葉

古書校註

【栞草】四時凋まざる諸木の、新葉生じて後古葉の落るを云ふ。年浪草、多くは松のことを常盤木と歌によめり、松の落葉は秋とす、爰には、松の外の冬木を云ふといへるは泥めり。（一）總て松杉其外四時不凋の木を（二）おしこめて云べし。

註（一）拘泥してゐる。（二）凡べてをふくんで

季題解説 夏期に於ける常緑木の落葉を云ふ。杉・樟・柊・樫その他の冬季にも落葉せぬ樹木は、初夏の頃より新葉の生ひ整ふにつれて、古葉を落すもの也。〔參照〕松落葉（夏）　冬—落葉（冬）

例句

常盤木落葉　常盤木も落葉にしるき茂哉　玄仍（發句集）
　常盤木の落葉至つて靜かなり　葛三（俳句大觀）
　常盤木の落葉に鳥の聲凄し　子規（仝集）
柊落葉　柊の落葉するとき嵐かな　後川（類題發句集）
木斛落葉　木斛の落葉掃きたる茶の日哉　子規（仝集）
樫落葉　大粒の雨に交りて樫落葉　泊雲（ホトヽギス）
冬青落葉　冬青の葉の四五枚落ちて裏表　吉人（同）
樟落葉　楠の根に憩へば落つる古葉哉　鷗翔（同）
杉落葉　礎に杉の落葉や平泉寺　たけし（同）

松落葉（まつおちば）　松の落葉　散松葉　松葉散る

季題解説 松は四五月の候、俗に云ふ「みどり」乃ち新芽を立て、後、長じたる頃より古葉を落すものとす。松の落葉と云ふ。〔參照〕常盤木落葉（夏）　春—若緑（春）　冬—落葉（冬）

例句

松落葉　松の葉の落ちて地に立つ暑かな　風律（古人五百題）
松の落葉　蛸壺に松の落葉の溜りけり　成美（手習）
散松葉　散松葉數寄屋へ通ふ小道哉　子規（仝集）
　海樓や磐盤の上の散松葉　虛子（ホトヽギス）
松葉散る　清瀧や波に散込む青松葉　芭蕉（笈日草）
　松葉散る松の緑の伸びにけり　子規（仝集）

柏落葉（かしはおちば）　柏の落葉　柏若葉　柏散る

古書校註【御傘】「柏ちる」は夏也、無言抄に秋とあるは僻事歟
【滑稽雜談】連歌新式云、柏ちるなどすれば秋、落るも秋也　又云、落葉木葉同事也　松竹の落葉皆夏也、柏は夏ちる物也、夏曉

季題解説 柏の木は新葉を出すまで枯れながらも古葉多くは落ちずして枝に止まり、常盤木の如く初夏の頃に散るもの多し。

實作注意 本題を秋季とするものあれど正しくは夏季なり。又かしはの正字は槲とす。柏は本來「このてかしは」なれど、一般には柏を用ゐ居れり。
〔參照〕柏黄葉（秋）　秋—名の木散る（秋）　冬—落葉（冬）

例句

柏散る

仇すなと思ふ間はあり柏散る　保吉（俳句大觀）

筍

笋　竹の子　たかんた　たかうな　孟宗竹子　淡竹子　苦竹子　とまり筍　仙人杖竹

古書校註

【年浪草】神代卷に曰、伊弉諾尊又湯津爪櫛を以泉津日狹女に投げ給ふ。此卽化して筍となる。（略）畿内に筍のうちに知て、早く取て食ふ味淡し、是をとまりと云ふ。（一）源氏物語横笛卷に曰、たかうな是たかんな也。

【日次紀事】四月、洛内外竹亦笋を生ず。其中嵯峨醍醐の產を最とす。醍醐寺の僧徒、笋を蒸し、人家に贈る。是を蒸笋と謂ふ。柔脆淡薄、尤食ふに堪ゆ。近年醍醐三寶院門主幷小野隨心院門主、禁裏、院中及高貴の家に獻ぜらる。凡竹林を有するの人笋を伐りて、親戚朋友に贈る。或は煮或は蒸し或は鮓藏す。又醋に漬して之を食す。以つて之を鹽藏すれば卽ち來夏に至る。凡笋鹿猪甚だ好み食ふ。故に夜々人をして之を追はしむ。（略）鹿猪甚鐵炮を畏る。之に依り每夜火繩を薰し、鐵炮を打つに擬す。

【滑稽雜談】淡竹子。（略）此種筍を生ずる事はやし。然共味うすく、性不ㇾ宜也。苦竹子。蘇頌圖經に曰、苦竹、肉厚くして葉潤し。筍微に苦味あり。俗に甜苦笋と呼ぶ。諸家惟苦竹筍を以て、最も尊しと爲す。（略）此種（二）淡竹より筍生ずる事おそし。風味厚し。製して苦を去て食す。（略）（三）仙人杖竹。宋の嘉祐本草に曰、仙人杖。陳藏器曰、此れ是の筍竹と成らんと欲する時立死する者なり。色黑して漆の如し。（略）（三）是俗に云とまり筍也。又枸杞の一名をも、仙人杖と云ふ。混ずべからず。惣じて筍の生ずるに半夏生を過ぎて、生る者長ずる事あたはず。適々長じても竹とならずといへり。其筍の至りて短き者俗に玄翁と稱す。石工の短鑿に似たり。作意あるべし。

註（一）其諺の自說なり。（二）をひとまりたけ。

季題解說　竹類の地下莖より生ずる嫩芽を云ふ。其内一般の食用に供せらるる「孟宗竹」は、晩春より初夏にかけて採掘さる。早生にして、最も肥大、一貫目に達する者珍らしからず。地表に僅に現はれたる時採收す。外皮黑色の斑點を有し、細毛を以て被はる。多肉にして柔軟極めて美味なれば廣く用ゐられ、京都府乙訓郡の筍最も名あり。「淡竹」は孟宗に次ぎて出づ。細長にして肉質前種に劣る。細長にして地上に長く抽出したる後採掘す。「苦竹」晩生にして亦細長、其の味淡竹に及ばず。

實作注意　「たかうな」又「たかんな」と云ふ。筍は秋の松茸と共に食膳を賑かす兩大關の美味たり、孟宗筍は花時を最と爲す故に春季とすべき也。

淡竹、苦竹は夏なり、春筍の語あれども、それに及ばず、春とすべき也。

〔二三四〕若竹、竹の皮脱ぐ（タケノカハヌグ）、篠の子（スズノコ）、寒竹の子（カンチクノコ）

例句

筍

たけのこや稚き時の繪のすさび　芭蕉（猿蓑）
老僧の筍をかむなみだかな　其角（五元集拾遺）
たけのこの合羽著て出る入梅哉　支考（蓮二吟集）
筍のすへ筍や丈あまり　太祇（太祇句選）
筍に括り添へたりしやおの花　几董（井華集）
はたゝ神筍竹になる夜哉　子規（仝集）
筍をむきて象牙の白さかな　月斗（同人）

笋

笋や丈山などの繪のさや　其角（五元集拾遺）
笋の時よりしるし弓の竹　去來（去來俳句集）
笋の何處でかぬけて縄ばかり　支考（蓮二吟集）
笋の露曉の山寒し　同（同）
笋や甥の法師の寺とはん　蕪村（句集）
笋や五助畑の麥の中　同（新花摘）
笋や垣のあなたの不動堂　同（同）
笋を五本くれたる翁かな　同（同）
笋の藪の案内やをとしざし　同（同）
笋や柵を惜む垣の外　同（同）
笋を堀部彌兵衛や年の功　太祇（太祇句選）
笋やほりつゝゆけば弘いた道　同（同）
笋や思ひもかけず宇津の山　同（同）
笋やしつかに見れば草の中　召波（春泥句集）
笋や脚の黒子も七十二　同（同）
笋や一夜にかつぐ八重葎　曉臺（曉臺句集）
笋をゆり出す竹のあらしかな　蓼太（蓼太句集）
笋の番してござる地藏かな　一茶（句帖）

竹の子

竹の子や雪隱にまで龍義の坊　鬼貫（鬼貫句選）
竹の子を竹になれとて竹の垣　來山（今宮草）
うきふしや竹の子となる人の果　芭蕉（嵯峨日記）
竹の子や兒の歯ぐきの美しき　嵐雪（玄峰集）
竹の子や畑隣に悪太郎　去來（去來句集）
竹の子や道のふさがる客湯殿　浪化（浪化上人句集）
竹の子に身をする賃のたわれ哉　許六（五老井発句集）
竹の子の上るきはやや夜々の露　同（同）
たけの子や已に葉分に衝[illegible]まる　太祇（太祇句選）
閑たさに竹の子をりに出にけり　士朗（枇杷園句集）

竹の子

竹の子やまだ四五尺の草の露　士朗（枇杷園句集）
竹の子もほどあらじ土のわれにけり　闌更（半化坊發句集）
竹の子や客にほらせて亭主ぶり　蓼太（蓼太句集）
竹の子の萑の雨をかつぎけり　白雄（白雄句集）
いつまでぞ竹の子まとふさねかづら　梅室（梅室家集）
竹の子や馬飼ふほどの藪の主　巣兆（曾波可理）
竹の子や客にとはれて雨の簑　同（同）

たかうな

たかうなや雫もよゝの篠の露　芭蕉（續連珠）
掘食ふ我たかうなの細きかな　蕪村（新花摘）

若竹（わかたけ）

今年竹（ことしだけ）　竹の若葉（たけのわかば）　竹の若緑（たけのわかみどり）

古書校註

【年浪草】時珍が曰、土中の苞笋、(一)各、時を以つて出で、旬日箨(二)を落して、竹となるなり云々、是即今年竹、若竹と云ふ者也。

註 (一)苞は地の根、笋は筍。(二)たけのかは。

季題解説

竹の子の長じて竹となりたるものを若竹又は「今年竹」と云ふ。

實作注意

筍やうやく長じ、日に日に伸びて終には親竹をも凌がん勢をもち、生氣潑剌と幹枝の色彩も鮮かに清涼の趣を見するもの也。［參照］筍（タケノコ）　竹の皮脱ぐ（カハヌグ）　篠の子（スズノコ）

例句

若竹

垣根破るその若竹を垣根かな　素堂（俳諧五子稿）
若竹や鞭にわがぬる箱根山　其角（五元集拾遺）
友よ竹のさゝら三八宿とこそ　同（同）
若竹や煙の出づる庫裏の窓　曲翠（類題發句集）
若竹や筑波に雲のかゝる時　宋阿（同）
若竹や雞鳴いて午時の月　移竹（同）
うちぬきに若竹藪の月夜哉　浪化（浪化上人發句集）
若竹や夕日の嵯峨となりにけり　蕪村（瓜の實）
わかたけや橋本の遊女ありやなし　同（續明烏）
若竹や十日の雨の夜明がた　同（新花摘）
若竹や是非もなげなる芦の中　同（同）
若竹や曉の雨宵の雨　同（新五子稿）
わか竹や横雲のあちこちに見ゆ　同（同）
若竹や食ひのこしたる窗の前　同（夜半叟句集）
其中に箟は古りし今年竹　也有（蘿葉集）
風毎に葉を吹き出すや今年竹　千代女（千代尼發句集）
若竹や數もなき葉の露の數　太祇（太祇句選）
若竹に蠅のはなれぬ甘み哉　召波（春泥發句集）

若竹や村百軒の麥の音　召波（春泥發句集）
若竹や一字の燈深からず　曉臺（曉臺句集）
わか竹は月に養ふ景氣かな　同（同）
若竹やふしみの里の雨の色　闌更（半化坊發句集）
若竹や今解きし葉に風渡る　同（同）
少し見ぬうちに天晴若竹ぞ　一茶（七番日記）
茶に醉うて若竹藪の掃除哉　士朗（枇杷園句集）
若竹に露の傘乾す小庭かな　長翠（積翠發句集）
若竹に家かさなるや小野醍醐　蝶夢（同）
若竹の葉につく月の光りかな　蒼虬（倉波可理）
わか竹に衣ほしけり御影堂　梅室（梅室家集）
若竹に雨聲こまかき夜を愛す　月斗（同人）
今年竹　今年竹暖風涼雨恣　同（同）

竹の落葉（たけのおちば）　竹落葉（たけおちば）　笹散る（ささちる）

季題解說 竹類の多くは夏新葉生じて後、古き葉の散り落つるものとす、之れを「竹落葉」と云ふ。〔參照〕常盤木落葉（夏）、松落葉（夏）、冬—落葉（冬）

例句
竹の落葉　落る葉やあやに月洩る竹の嵯峨　都貢（［illegible］）
若竹や延る拍子に古葉散る　吟江（心の花）
野の宮や笹のふる葉の落つる音　来之（五車反古）

竹の皮脱ぐ　竹の皮散る

古書校註【三才圖會】 籜以て履を織るべし。以て笠を縫ふべし。又膠飴（一）を裹むに堪たり。淡竹の籜は淡赤乾色（二）にして、若竹の籜は黃にして黑點ありて潤色。山城、嵯峨を上となす。丹波之に次ぐ。

註（一）水飴。（二）乾しからびたる如くにしてうす赤き色。

季題解說 筍長するに從ひ、その籜を落して竹となる。下方の節より順次に脫ぎて、鮮かなる綠青の幹を見す。「まだけ」の皮には斑點あれど「はちく」には之れなし。物を包み細工物に用ふ。［illegible］筍

例句
竹の皮脫ぐ　脫捨てひとふし見せよ今年竹　蕪村（常盤の香）

篠の子（すずのこ）　篶の子　笹の子　馬篶　兒篶　［illegible］　五枚篠

古書校註【年浪草】 和漢三才圖會に曰、篠小竹發生して草の如し。俗に篠の字を用

ふ。凡篠數種あり。馬篠・兒篠・焼葉篠・五枚篠。云々（一）此等の筍、皆篠子也。又一種長開竹、俗に奈伊竹と稱す。長開筍篠の筍、諸州倶にあり。味尚苦多くして、甜微（二）なり。多食するに耐ず。

【滑稽雜談】和產の篠類、おほし。箬は俗云ふ粽篠の類なるべし。此種類、筍を生ずるを、篠の子と云ふ。此者又夏月に生ず。洛北の鞍馬山生ずる事多し。土人是を每年夏土用に苅收て、翌年五月の前是を京に商ふ。洛の万戶是を買取て、端午の粽を包むなり。傳聞く鞍馬の土人每春盛花の時、美食美酒を調し、花見の遊會を催す。その費幾許也。此端午に商ふ篠の價を以てこれに充ると也。

註 （一）以下略文の自記なり。（二）甘き味少き也

季題解釋 翠竹の子を云ふ。翠竹は通常「しの一」と稱し、「山竹」の事なり。初夏の候短かく且つ細くして節高からず。山野に多く自生して叢をなす。釣竿・杖・笛等に作る。**參照** 筍ノコ 若竹ワカタケ

例句

篠の子　篠の子や終に絶えたる廁道　太祇（太祇句選）

參考 めだけ　一名　しのたけ　Pleioblastus Simoni, Nakai.（禾本科）林野に多く生ずる多年生植物なり、地下に細き根莖を横走し、春夏の候多數の新條を出し、これに灰白色の鞘を有す、稈は高さ一丈乃至二丈に達し、梢上に枝を分ち、數回分岐して、狹披針形の葉を出し常綠なり、花を生ぜざるを常とすれども、時に五月頃叢生せる綠紫色の花穗を出すことあり。

夏草（なつくさ）　夏の草（なつのくさ）

季題解說 盛に生長せる夏の草を云ふ。

實作注意 夏草とは夏期に於ける百草の稱にして、庭の隅・町の空地・田畑の畦、或は原、野一面に生長せるもの等、その場所の何れを問はず、繁茂せるものを指せるものなり。**參照** 草茂る（クサシゲル）

例句

夏草
石の香や夏草赤く露暑し　芭蕉（陸奥衛）
夏草や兵どもが夢のあと　同（伊駒堂）
夏草や橋臺見えて河通り　其角（五元集）
夏草に狩入犬の見えぬ也　召波（春泥發句集）
夏草や所々にはなれ駒　闌更（半化坊發句集）
夏草やものの失へる水䶢　嘯山（新選）
夏草や暮れても暑き日のゆかり　樂瀧（同　）
夏草や竹の子わくる馬の鞭　雲鼓（曉山集）
夏草の眞直に立し曇哉　子車（帑袋）

夏の草

夏草や馬に嗅がれて立つ雲雀　素堂（俳句大觀）
夏草にまじりて早き桔梗哉　子規（全集）
夏草に深く埋るレールかな　虚子（ホトトギス）
夏草のわがたゝかへる跡に佇つ　黒潮（同）
夏草の中の薊や蝶半さす　月斗（同人）
かへり出ん方も露けし夏の草　宗因（三籟）
盗人の塚もむさるゝ夏の草　鬼貫（七車）
旅人の名はとく知りぬ夏の草　支考（蓮二吟集）
よく見れば朝露もちぬ夏の草　登舟（玉車反古）

草茂る（くさしげる）

季題解説　茂る草　名の草茂る
夏日草の繁茂せるを云ふ。

實作注意　元帝纂要に「夏草を茂草といふ」とありて、夏草と草茂るを同一題にせる書もあれど、夏草は夏期の百草を詠み、草茂るは夏草の茂れるその茂りを詠ふものとす。又「名の草茂る」の題あり。反故塚や茨も茂る數に入　大鯉（鶉尻古）などの如く雑草にあらずして名のある草木の茂りをいふ。［參照］夏草、青芒、青蘆、葎茂る

例句　草茂る

居士信女かくす小草の茂り哉　兀峯（桃の實）
酒賣も來ずなる草の茂り哉　道彦（俳句大觀）
舊道や人も通らず草茂る　子規（全集）
灯袋に草茂りけり石燈籠　同（同）
蘆の葉も老い交りたる草茂る　虚子（ホトトギス）
庭草の茂りにわいて鳴く蚊哉　月斗（同人）

草いきれ（くさいきれ）

季題解説　草のいきれ
夏日炎天の下に山野を行く時、熱き日光の照りつけに弱れる草々の蒸し返し來る溫氣を、草いきれと云ふ。

實作注意　畠見にむせるばかりや草の息　杉風（杉風句集）など作句されしものあれど、草の息を季語とするは面白からず。［參照］夏草、草茂る

例句　草いきれ

草いきれ人死にゐると札の立つ　蕪村（句集）
草いきれ帝都の中の曠野哉　虚子（ホトトギス）
脚半掛け草[illegible]の草いきれ　月斗（同人）

草のいきれ
いづれ咲く草のいきれぞ水の上　青々（妻木）

青芒（あをすゝき）　芒茂る（すゝきしげる）

季題解説 夏期、芒の葉の茂りて青々としたるを云ふ。芒は山野に自生するもの、春日芽を出して、夏に至ればその葉叢の高さ三四尺に至る。その葉線狀に細長く青々として稍々光澤あり。

實作注意 青芒は其葉の涼しげなる青色を指し、芒茂るはその繁茂せるの謂ひなり。【參照】草茂る（夏）　秋—芒（すゝき）

例句

青芒
青芒三尺にして亂れけり　子規（全集）
青芒風速矢より迅き哉　月斗（同人）
青芒馬泳がして歸るなり　同（同）
青芒露持つほどにのびにけり　同（同）
大文字の穴を覗くや青芒　子角（同）

青蘆（あをあし）　蘆茂る（あししげる）

季題解説 夏期、蘆の葉の茂りて青々したるを云ふ。蘆は水邊又は淺水中に自生し、春日その芽を出し、夏に至れば長じて五六尺、葉細く芒に似て青く、よく茂りて甚だ涼げ也。

實作注意 青蘆は其の翠色を客觀し、蘆茂るはその繁茂を主觀するものなれば、自ら趣を異にするものなり。【參照】草茂る　春—蘆若葉（アシワカバ）

例句

青蘆
青蘆に水上遠き流れかな　白雄（白雄句集）
洞庭湖青蘆がくれ筏行く　蘇人（同人）
青蘆に波打たせ行く小舟哉　吐牛（同）

蘆茂る
茂りあひて江の水細き蘆間哉　紹巴（梅物筌）
蘆原はみつ汐しらぬ茂り哉　宗春（三籟）
蘆茂り浮草匂ふ汀哉　周桂（大發句帖）

湖水
水縱横蘆の茂りの十二橋　月斗（同人）
片舟を女漕ぐなり蘆茂る　同（同）

參考 あし　一名　よし（蘆）Phragmites communis, Trin.（禾本科）水邊に生ずる多年生草本なり、春日舊根より生じ、高さ五六尺に達し、概形すすきの大なるものに似たり、地下莖は地中を横走す、夏日莖頂に大なる穗をぬき、圓錐花序をなして多數の花を着く、花下に白毛多し、莖を用ひて葦簾を作るべし。

葎茂る（むぐらしげる）

季題解説 夏、やへむぐら、かなむぐら等葎草の茂れるを云ふ。

實作注意 和歌などにて云ふ八重葎は、葎の茂りたるを云へるものなれど、八重葎は葎の一稱にて別項にあり。〔參題〕八重葎　金葎

例句

葎茂る　　甲斐山中
山賊のおとがひとづる葎かな　　芭蕉（新虚栗）

八重葎（やへむぐら）

〔關〕葎　小兒毅草（こをしへぐさ）

季題解説 原野到る處の路傍に自生する一年草、莖は柔軟なれば傾き生ふ。葉は細く八箇づゝ輪生す。莖葉ともに毛刺ありて他物に鈎著す。小兒毅草と稱しその一節をとりて人の衣服に投げつけて弄ぶもの。春より夏にかけて白色の小花を開く。一般に「葎」と略して云ふ。〔參題〕葎茂る　金葎

例句

葎
古寺や葎の下の狐穴　　闌更（俳句大觀）
訪ぬ人も葎の宿にかぞへけり　　白雄（白雄句集）
團扇貼つて先そよがする葎哉　　一茶（題叢）

參考 やへむぐら（あかね科）（Galium Aparine L.）隨地に生ずる二年生草本、莖は稍軟弱にして四稜をなし、其稜上に細逆刺あり。葉は細長く數個莖に輪生す（質は二片正葉、他は葉狀托葉）。夏時葉腋より出でたる枝上に淡黄綠色の花を開く。花は細微にして、花冠四裂し四雄蕊あり。果實は小粒狀にて、二箇相竝び表面に鈎刺ありて人衣等に着く。

金葎（かなむぐら）

〔關〕葎　葎草

季題解説 山野路傍の叢等に生ずる蔓草、莖にて他物に卷きつきて延ぶ。莖と葉柄に短かき刺を有す。葉は大形掌形五七箇に深裂し、色淡綠なり。夏より秋にかけて葉間に穗を出し、枝を分ちて淡黄色の小花を點綴す。後實を結ぶ、麻の如し。

實作注意 一名「むぐら」といふ。漢名に、葎草・勒草・葛勒蔓・葛葎蔓等稱ふ。〔參題〕葎茂る　八重葎

例句

葎
おこたりの机にからむ葎かな　　闌更（半化坊發句集）

玉卷く葛　玉まき葛　玉葛

古書校註

【滑稽雜談】清輔奥儀抄に云、玉卷く葛とは、葛のかつらは、玉のやうに卷きすへたればいふなり。藻鹽艸に云、玉卷葛は六月なり。(一)一說に葛の初て生ずるをいふとも侍る。

【年浪草】枝折萩に曰、葛の葉の手を卷たるを玉まくずといふとなり。

註　(一)此語の自記也。

季題解說

初夏、葛の新葉生じて卷葉しゐるを云ふ。參照　玉卷く芭蕉

秋―葛

例句

玉卷葛　手に足に玉卷葛や九折　桃隣（古太白堂句選）
あさゆふや露の玉まく葛の蔓　一道（鶴　音）
玉まくや風もさわがぬ眞葛原　之仲（類題發句集）
玉く葛　何代か玉まくず葉の鶴が岡　宗因（梅翁宗因發句集）

帚木　帚草　庭草　眞木草　地膚　地麥　落帚　涎衣草

古書校註

【年浪草】陶弘景が曰、莖苗を取て掃帚と爲す。○蘇頌が曰、根叢生をなす。窠每に三十莖あり。莖に赤きあり、黄あり。七月花を開く。○時珍が曰(略)性柔弱。故に將に老んとする時、帚にするべし。用ふるに耐たり。

季題解說

通常園圃に培養せらるゝ一年草。莖の高さ三四尺、枝葉よく茂り、葉は細長く深綠にして毛あり。夏日葉の間に黄綠の細かき花を開く。葉及び實は食用に供す。秋その枝を刈りて庭帚を作る。

實作注意

一名を「帚草」と云ひ、古くは「庭草」「眞木草」と云ひしもの、漢名には、地膚・地麥・落帚・涎衣草等種々あり。

例句

帚木　帚木の微雨にこぼれて鳴く蚊哉　柳雨（俳句大觀）
帚木に兒かくれあふ夕かな　長翠（同　）
帚木の四五本同じ形かな　子規（全集）
帚草　朝風になびくみどりや帚草　伯州（同人）

參考

ははきぎ　一名　ははきぐさ　Kochia scoparia, Schrad.（あかざ科）原と外來種にして園圃に栽培せらるる一年生草本なり、莖の高さ三四尺許、多く枝を分ちて狹長なる全邊葉を互生す、夏日枝上葉腋に綠黄色小花を着け穗をなす、雄花・雌花あり、萼片五、雄蕊五、子房一あり、莖を乾して箒に作る、故に箒木の名あり。又嫩葉は食ふべし。

眞菰(まこも) 菰(こも) 粽草(ちまきぐさ) 花且見(はなかつみ) 勝見草(かつみぐさ) 伏柴(ふしば) 眞菰艸(まこもぐさ) 眞薦(まこも)

古書校註 【年浪草】八雲御抄に曰、薦を陸奥には花かつ見と云ふ。(略)○童蒙抄に曰、花かつみとは花咲たる(一)蔣を云ふ。○顯註密勘も花かつみとは菰の事也と云ふ。

註 (一)まこも。筵ふくの條參照。

季題解説 池澤の淺水に自生する多年草。春日、根より新苗を出じ、夏に至れば高さ四五尺に達す。葉は二三尺、菖蒲に似たれども薄く、緣邊に刄あり、よく茂る。六月の頃これを刈採りて筵に織る。

實作注意 秋、花を開き後實を結ぶ、之を「菰米」と稱し、舂きて米麥に和して食ふ。又この嫩き莖の菌類の寄生により膨大して筍の如くなるを食用とす、所謂「菰角」なり。漢名は茭筍。又この菌の胞子成熟するときは黑色となる、「菰黑」と云ひて油蠟を染むるに用ふ。又葉にて五月節句の粽を卷くより「粽草」とも云へり。眞は接頭語なれば「菰」に同じ、古くは「勝見草」「伏柴」など稱へ、眞薦・眞蔣艸などの字を充つ。參照 人事 眞菰刈(マコモカリ)

例句

眞菰 先舟は眞菰の中や鳰の聲 石水(ホト、ギス)

眞菰草 笠島の人が笠著て眞菰艸 乙二(をのゝえ草稿)

參考 まこも Zizania latifolia, Hance.(禾本科)沼澤に自生多き多年生草本なり、春日舊根より新苗を生じ、高さ四五尺に達す、梢上に一二尺の穗を抽き、多く分岐して秋日小花を綴づる、上部に雌花を着け、下部に淡紫色雄花を着く、嫩莖菌類に冒さるる時、膨大して筍の如し、茭白と稱す、臺灣並に支那に多く、採て食用となす、莖中の胞子成熟する時は黑色となる、之をまこも墨と稱す。

絹絲草(きぬいとさう)

季題解説 大葉反(おほあはがへり)の若芽を密生せしめてかくは稱ふ。絹絲草を作るには大葉反の種を、水盤又は平鉢等に綿を敷き、水に浸したる上に一面に密布く蒔き、水を絶さず置けば二旬位にして三五分に伸び、

青絲色を呈して夏日一味の涼趣を添ふるものなり。【参照】人事—絹蒔く

例句

絹絲草　傾城や夜の窗に置く絹絲草　　默鳥（ホトヽギス）

餘花（よくわ）

古書校註

【年浪草】題林抄に曰、余花は、春におくれて、ひとり咲る事をあはれみ、山深ければ、夏の来るをもしらぬかとおぼめき（一）、青葉の中にさける、めづらしき心などよむべし。○雅章卿口決抄に曰、余花と出たるは、夏まで殘る花の事なり。夏木立の中に有を云べし。○金葉　夏山の青葉まじりの遅櫻はつ花よりもめづらしきかな　藤原盛房。○龜山殿七百首　ちり殘る花（二）かあらぬか夏山の青葉が下にかゝるしら雲　經繼卿。

註（一）疑ひ思ふ。（二）櫻花をさす。

季題解説　春に遅れて若葉の中に咲き殘れる櫻の花を云ふ。若葉の花、青葉の花ともいふ。

實作注意　また殘花をも夏季とするものあれど、殘花・名殘の花は春の末咲き殘れるものゝ稱とす。尚、殘春が春季の如きなり。殘花、殘葩、殘英は春とす。

風開く南障子や夏櫻　調和（俳林不改楽）

など詠めるものあれど、特種のものにあらずして、夏に見る櫻なり。【参照】春—殘花（ノコルハナ）　時候—餘春（ヨシユン）

例句

餘花　餘花もあらぬ子に教へ行神路山　太祇（太祇句選）
餘花いまだきのふの酒や豆腐汁　召波（春泥發句集）
上野山餘花を尋ねて吟行す　子規（全集）
餘花の寺人なつかしく話しけり　了谷（ホトヽギス）

若葉の花（わかばのはな）　青葉の花（あをはのはな）

古書校註

【年浪草】若葉花とは余花と同じかるべし。増山の井に若葉の花と出づ。（略）余花を夏とす。若葉の花可レ准レ之乎。

【栞草】月花は風雅（一）に一巻の飾なれば、跨げたるものは（二）、加減して四季を自由に配るべければ、若葉に花を結ては、決して夏と定むべし。

註（一）俳諧の道の意。（二）四季の一季に止まらず、季渡るものは。

季題解説　今日にては若葉の花は、青葉の花と共に餘花と同意に用ひらる。

【参照】植物—餘花（ヨクワ）　青葉（アヲバ）　若葉（ワカバ）

例句

若葉の花　老淋し若葉の花をさがす杖　杉風（杉風句集）

例句

桐の花

殿つくり並びてゆゝし桐の花　其角（五元集）
桐の花新渡の鸚鵡不言　同（同）
熊野路にしる人もちぬ桐の花　去來（去來發句集）
神鳴の鳴らで曇りし桐の花　史邦（小文庫）
葺替や蜘の絲はる桐の花　黃蝶（笈日記）
照りもせず曇りもはてず桐の花　也有（蘿の落葉）
塀越に大工遣ひや桐の花　凉菟（皮籠摺）
逞しき葉のさまうたて桐の花　召波（春泥發句集）
桐の花寺は桂のさとはづれ　曉臺（曉臺句集）
酒桶の背中ほす日や桐の花　蓼太（蓼太句集）
桐の花翡翠のすだれ猶あらん　白雄（白雄句集）
一里ほど先から見えて桐の花　蒼虬（蒼虬翁發句集）
烏子の踏ならひてや桐の花　理曲（西華）
責馬の汗にほこりや桐の花　呑水（東華）
雨戸なる二階座敷や桐の花　車庸（古人五百題）
桐の花咲くや都の古屋敷　子規（全集）
花桐の琴屋を待てば下駄屋哉　同（同）
藪醫者の玄關荒れて桐の花　同（同）
訟なき代官屋敷桐の花　青々（妻木）
晴天や濃紫なる桐の花　虛子（ホトヽギス）
桐の花富士に一翳なかりけり　月斗（同人）

參考　きり Paulownia tomentosa, Kanitz.（ごまのはぐさ科）往時より本邦各地に廣く栽培せらるゝ落葉喬木にして、高さ凡三丈に達す、葉は長柄を有し大形の掌狀をなして對生し、葉底は心臟形をなし、邊緣は通常五尖起を有し、葉面に粘毛を密生す、五月頃大なる圓錐穗をなし多數の紫花を開く、大形の唇形花にして、萼は厚くして褐毛を有し、花冠內に二强雄蕋と一雌蕋とを具へ、花後二室の堅き蒴果生じ、內に翼ある多種子を藏す、材は簞笥・下駄等を造るに賞用せらる。

海桐(とべら)の花(はな)

花(はな)とべら

季題解說　海邊に多く自生する常綠木。高さ丈餘に達し、葉は互生して質厚く光澤ある倒卵形にして、邊緣往々裏面に反るものあり。五六月の頃、芳香を放つ白色五瓣の花を開き後ちに黃色に變ず。實は指頭大、秋に熟して三つに裂け赤き種子を出す。この莖葉を採む時は一種の臭氣を發す。根も亦甚し。

實作注意　昔時、所によつて節分の夜に、此植物の枝を扉に挿さみ置きて惡鬼を除く俗ありしより「とべら」は扉の意なりとあり。

赬桐の花（ひぎりのはな）

赬桐咲く（ひぎりさく）　赬桐（ひぎり）　唐桐（たうぎり）

季題解説 通常觀賞用として栽培せらるる落葉灌木。幹の高さ一二尺より三四尺位。葉は桐の葉に類し、鋭き鋸歯ありて對生す。夏より秋にかけ、上方に枝を分ちて多數の赤色五瓣花を開く。普通溫室内に培養し、五六月頃より庭園に移し或は鉢植とす。

實作注意 夏秋に亙りて花を有つより秋季に分類せる書もあり。［季題］桐の花（ハナ）

油桐の花（あぶらぎりのはな）

山桐（やまぎり）　どくえ　いぬぎり　罌子桐（あぶらぎり）

季題解説 一に「山桐」と云ふ。山地に生育する落葉喬木。高きは三丈にも達す。葉は桐に似て互生し、五月の頃淡紫色五瓣の花を開き、圓く扁に實を結ぶ。内に種子あり、搾りて油を取る。材は白桐に代用さるれど品質劣り多く下駄材にせらる。

實作注意 別名「どくえ」「いぬぎり」など云ふ。罌子桐を此漢名に當つ。［季題］桐の花（ハナ）

百日紅（さるすべり）

百日紅（ひやくじつこう）　紫薇（しび）　怕痒樹（はくやうじゆ）　くすぐりの木（き）　百日白（ひやくじつはく）

古書校註

【三才圖會】樹、栯榴木に似て皮なく、葉、夏黄檀に似て、冬凋れ落つ。七月初、九月に至るまで花あり。淺紫紅色。（一）山谷に映ず。故に百日紅と名く。

註 （一）山谷にてれ輝く様に色彩にあざやかなる貌を云ふ

季題解説 觀賞用として庭園に栽培され、高さ二丈餘に達する。幹よく曲りくねり、樹皮滑かにして光澤あり、猿も尙滑るといふ意より此名あり。又仲夏より秋まで咲き續くより「百日紅」とも稱す。葉は卵形或は楕圓、對生と互生とあり。夏日枝梢に皺縮ある紅色の花を簇り開く。稀には花白色のものあり、「百日白」と云はる。

實作注意 俗にこの樹の樹皮を摩擦すれば枝葉共に動搖すとて一に「くすぐりの木」とも云ふ。南洋の原産、花言葉を「雄辯」とす。漢名、紫薇・怕痒樹、

例句 百日紅

散れば咲き散れば咲きして百日紅　千代（類題發句集）
さかづきや百日紅に顔の照り　支考（蓮二吟集）
籠るべし百日紅の散る日まで　同（露　笑）
咲きまさる百日紅に照る日哉　百明（古人五百題）
百日紅毎日散つて盛なり　習先（俳諧新選）

百日紅やゝちりがての小町寺　蕪村（夜半叟句集）
百日紅寺中大かた見えにけり　太祇（題林集）
百日紅虹立つ寺のうしろ哉　闌更（俳句全集）
浴室の煙の中や百日紅　太無（太無集）
雨乞のしるしも見えず百日紅　子規（全集）
寺焼けて土塀の隅の百日紅　同（同）
百日紅咲くや眞晝の閻魔堂　同（同）
僧房の閑に飽けり百日紅　青々（妻木）
日晴れぬ出水の中の百日紅　虚子（ホトヽギス）
泉水の鷺鳥に散りぬ百日紅　月斗（同人）

【參考】さるすべり　一名（ひやくじつこう）Lagerstroemia indica, L.（みそはぎ科）東印度の原産にて觀賞品として庭園に栽植する落葉木本なり、幹の高さ一二丈、樹皮は滑澤あり、葉は全邊長楕圓形にして、對生す、枝梢上に穗を成し、紅花或は時に白花を簇生す、花期甚だ長きに亙る、蕚は球形をなして六裂し、花瓣は皺縮して長柄あり、夏秋に開く。

夾竹桃（けふちくたう）

叫出冬（きやうしゆつとう）　半年紅（はんねんこう）　桃葉紅（たうえふこう）

【季題解說】高さ丈餘に及ぶ常綠灌木、性極めて日光を好む植物にて、日當よき場所を選びて栽うる時は夏期香ある花を開く、葉は形桃の葉に似たれども堅く厚く、表濃綠、裏は淡綠色、三葉つゝ輪生するを常とす。花は石楠花に似たる紅色二重瓣のものを、盛夏梢上に聚り開きて花期長し、時に黃白、或は八重咲のものあり。

【實作注意】繁殖の甚しく花の色彩も炎暑を強調する如き植物なり。原産は亞布利加沙漠の綠地オアシスのもの、葉と根に毒あり、殊に家畜に甚だし。花言葉は「注意」を意味せり。また夾竹桃の音より「叫出冬」、花期の長きより「半年紅」、葉の形より「桃葉紅」とも漢名す。

【例句】夾竹桃
夾竹桃に柱割れ行く借家住　月斗（同人）
夕風の火影にあるや夾竹桃　同（同）
門鑑を忘れて來たり夾竹桃　圭岳（同）
空家なる夾竹桃の埃かな　石郎（ホトヽギス）

厚朴の花（ほほのはな）

朴（ほゝ）　ほほのき　ほゝがしはのき

【古書校註】【三才圖會】厚朴、樹を榛と名く。子を逐折と名く。和名保々加之波の木。今保々の木と云ふ。（略）木の高さ、三四丈。徑り、一二尺。（略）葉大なる者は尺に近く、槲の葉に似て、刻齒なく、淺綠色。冬凋れ春嫩葉を生ず。

夏花を開く、狀牡丹の花に似て淺紫色、大さ一尺許。（略）刀劍の鞘或は[illegible]（一）（二）奩等を作る。

【年浪草】花彙に曰、（略）四月中心、花を發す。重辨勁厚。白葉紫心。全く女郎花に似て大なり。香馥數步に聞ふ。秋に至て、實紅熟す。千年藟に類す。

注（一）[illegible]（二）鏡奩、香奩

季題解説 山地に自生する喬木にして、幹の高さ四五丈に及び枝は多く、分岐せず疎生なり、葉は[illegible]に似て鋸歯なき倒卵形、大なるは長さ一尺以上に及ぶことあり、初夏の頃、枝梢に帶黃白色徑四五寸の大輪花を開き、花容白木蘭に似て香氣頗る強し、果實は萬年青に似て四五寸、秋紅熟す。

例句

朴の花

峨高く雨雲ゆくや朴の花　秋櫻子（ホト、ギス）
葉がくれて淵にうつりぬ朴の花　煤六（同　）
朴の花匂へる山の事務所かな　木犀（[illegible]）

参考 ほほのき Magnolia obovata, Thunb.（もくれん科）山地に自生する落葉喬木、幹四五丈に達し、枝は少數にして疎生す、葉は倒卵狀長楕圓形にして全邊なり、長さ一尺を超ゆるものあり、五月頃、枝頭に帶黃白色の大花を開く、その徑凡そ四五寸、通常九瓣の花瓣より成り、香氣頗る強し、果實はその長さ四五寸、九月頃熟し、種子は外皮赤色を呈す、材は古時刀の鞘に賞用し、又版木等種々の用途に供せり、又地方にては葉にて食物を包む。

泰山木の花

大山木　泰山木蓮　常盤木蓮　白蓮木　紅背木　洋玉蘭　格蘭德玉蘭

季題解説 觀賞用として庭園に栽培せらるゝ常綠の喬木、高さ二丈餘位を普通とす、多く枝を分ち、小枝と芽には茶褐の軟毛を生ず、葉は革質にして長橢圓或は長倒卵形、長さ四寸より七寸あり、互生す、表は濃綠色なれど裏は茶褐色に微毛を密布し恰も羅紗樣をなす。五六月「白木蓮」の花に似て、直徑七寸餘もある大輪の白花を空に向つて開く、香氣頗る高く、花容壯大、蓮花の如き清淨味あり。

實作注意 當植物は亞米利加の原產とす。一に「白蓮木」（京阪地方）「紅背木」と稱へ、又「格蘭德玉蘭」と云ふ。明治十二年亞米利加合衆國前大統領グランド將軍來朝の節その夫人の東京上野公園に手植せしよりその名ありと。

例句

泰山木

なか雨や泰山木は花墮ちず　久女（ホト、ギス）
庭上の泰山木や霧わたる　月斗（同　人）

【参考】たいざんぼく Magnolia gradiflora, L. (もくれん科) 北米原産にして庭園に栽植する常緑喬木、葉は大にしてシャクナゲ葉の態あり、革質にして長楕圓形又は長倒卵形をなし、上面は平滑にして光澤あり、下面は茶褐色にして密毛を生じ又緑色のものあり、花は大にして白色香氣強く、花徑五六寸、花瓣は倒卵形にして通常九箇あり、五六月開花す。

要(かなめ)の花(はな)

扇骨木(かなめのき)　金目黐(かなめもち)　かなめ樫(がし)　あかめ　あかめもち　そばのき

【古書校註】【三才圖會】木は高さ二三丈、(略) 四月小白花を開き、細子を結び簇(一)をなす。八九月赤く熟す。

註(一)あつまり生ずるを云ふ。

【季題解説】「かなめもち」の木、一名「かなめがし」多く垣根として栽培する常緑木、幹の高さ丈餘に達するものあり。葉は普通楕圓形にして先尖る、其質厚く滑かなり、夏の初に白色五瓣の小花を梢頭に叢生す。後實を結び熟せば暗紅となる。又一種その新葉の鮮紅なるもの甚だ美し、「あかめもち」又は「あかめ」と稱す。

【参考】かなめもち　一名　そばのき Photinia glabra, Maxim. (いばら科) 温暖なる山地に自生する常緑小喬木なれども、また庭園に栽植せらる、莖の高さ一二丈餘に達し、葉は革質にして長楕圓形をなし、縁邊に鋸齒を有し、其嫩葉は赤色を帶ぶ、初夏枝梢に複總狀に白色小花を攅簇す、五瓣を有し、果實は小球狀をなして紅熟す、小木は通常生垣に賞用す。

アカシヤの花(はな)

針槐(はりゑんじゅ)

【季題解説】道路樹として廣く用ゐらる落葉喬木、高さ四五丈に達し、枝幹に刺多く、葉は羽狀複葉、槐の葉に似て大きく、やゝ光澤あり、初夏白色の蝶形花を總狀花序に開く、後莢を結ぶ。亞米利加の原産にして近來舶載せられたるものなれど、今は普く各地に栽植さる。針槐とも云ふ。

【例句】アカシヤの花

アカシヤの花吹きたわむ嵐かな　虚子 (ホトトギス)

アカシヤの花ざかりなり渡御の道　通貫 (同)

槐（ゑんじゆ）の花（はな）　ゑにす　くぜまめ

季題解説　通常庭園に植うる落葉喬木。高さ二三丈に達し、葉は羽狀複葉にして、小葉は長卵形、先端やゝ尖る、夏日梢上に大なる穗をつくりて花を開く、花は白黄色の蝶形花、後ち長き莢を結ぶ。

例句
槐の花
卷葉を射れば花ちる槐哉　常矩（遺草）

參考　ゑんじゆ Sophora japonica, L.（まめ科）支那原産にして通常庭園に植うる落葉喬木なり、高さ二三丈に達し葉は羽狀複葉にして、小葉は長卵形をなし先端稍尖る、初夏梢上に大なる圓錐花序をして黄白色の花を開く、蝶形花にして、果實は連珠狀莢果なり、本種のイヌエンジュと異る點は、幹の稍小きと、萼の比較的平滑なると、小葉に毛なきと、大なる圓錐花序なると、莢の連珠狀なるとなり。

楝（あふち）の花（はな）　花樗（はなあふち）　樗（あふち）の花　栴檀の花　雲見草（くもみぐさ）

古書校註　【滑稽雜談】四五月、紫花を開く、俗に此木を栴檀と稱す。その芳香相似たる所侍るにや。又樗をあふちと稱す。非也。樗は諸書を考ふるに椿に似て氣臭し、或は虎目と呼て、葉の脱する所に痕ありて、博骰子（一）のごとし。故に骰子を呼て、樗蒲（二）といふか。（略）順和名にも樗は沼大（ヌテ）と訓じて、阿布智の訓なし。異名雲見草といふ。

註　（一）さいころ。（二）ちよぼと讀む。

季題解説　樗の字を用ふ、今專ら「栴檀」の木と云ふ。重に栽培する落葉喬木。高さ數丈に及ぶ、葉の形南天の如き羽狀複葉、鋸齒ありて互生す、夏穗をなして五瓣の淡紫花を開く、大さ錢の如し、後ち雌樹は實を夥しく垂れ結ぶ、秋熟すれば黄なり。

實作注意　異名一に「雲見草」と云ふ。又樗の字國訓に「あふち」とするも、一說に樗は一種惡木にして樹皮疎く漆に似たる葉に臭氣あるものとあれば、楝の字を用ふべし。〔參照〕秋―楝の實（アフチ）

例句
樗の花
露落て朝風匂ふ樗哉　宗祇（大發句帳）
どむみりとあふちや雨の花曇　芭蕉（翁行狀記）
きのふけふ樗に曇る山路哉　同（[illegible]）
虹の根をかくす野中の樗かな　鈍手（[illegible]）
[illegible]住んで斧にもれたる樗かな　枳風（[illegible]）
樗咲くや里に隱るゝ公家は誰　尙白（[illegible]）
花樗
鮓うりのかざしにとれや花樗　曉臺（曉臺句集）

花樗　菰鞍の見せ馬立てり花樗　曉臺（曉臺句集）
むら雨や見かけて遠き花樗　白雄（白雄句集）
栴檀の花　栴檀の花吹きまくや笠のうち　梅室（梅室家集）
雲見草　雲見草鎌倉ばかり日が照るか　其角（五元集拾遺）

【參考】せんだん　古名　あふち　Melia Azedarach, L. var. japonica, Makino.（せんだん科）暖國の山地に生ずるも通常人家に栽植する落葉喬木なり、莖の高さ二三丈に達す、葉は二回若くは三回羽狀複葉にして、小葉は卵形又は披針形にして、分岐或は鋸齒を有す、四五月の候、淡紫色の小花を複總狀花序に排列す、果實は楕圓形又は稍球形をなし、黄熟す、果實を苦楝子と稱し藥用に供す、この一變種タウセンダンの實を川楝と稱し、又藥用とす。

楮の花　かぞ　かみの木　こその木　紙漉草

【古書校註】【滑稽雜談】俗に云ふ紙の木と知べし。惣じて草木の季を押す者、花果の時を以て定む　此木、花は三月に發すれども、賞するにたらず。果は夏月なれども強て其實をいはずして、古來より楮とばかり季に用ゆ。案ずるに此樹の夏月に及て、白汁滋溢し、專ら皮汁を採りて、紙に製するを云ふならし。作者心得有るべし。備にいはく楮取など有べきか。
【年浪草】或は紙漉草と稱す。（略）按るに楮は時珍が說の如くに、三月花あり。六月の說にたがへり。故に雜談抄に花をいはずして、楮とばかりを季とすといへり。紙は常に漉て、季としがたく、殊に夏漉は紙臭氣ありて下品なり。楮も種類あり。大和本草に山楮あり。一名ガンヒヌカゴと云ふ。其木も皮も櫻に似たり。葉ははぎに似て小也。（略）深山にあり。花ははぎの花に似て、黄なり。夏の末にさく。其皮を剝ぎて楮の如くに、煮て、紙を漉くと云云、昔は山楮を用るか。

【季題解說】山野に自生するものあれど多くは栽培して繁殖せしむ。年々伐り採るを常とすれば高さ六七尺に過ぎず。枝は滑かに、葉は桑の葉に似て二寸ほど、花は梅に似たる淡紅色のものを五月始めより開き、苺に似たる實を結ぶ。冬月伐採して皮を剝ぎて紙を製す。

【實作注意】楮の花を春季のものとせる書あれど楮は明かに夏季のものなり、されど產地（土佐）にても餘り見ざるものなれば、季感甚だ乏し。

【例句】
楮の花　山中や楮の花に歌書かん　乙由（麥林集）

【參考】かうぞ　Broussonetia Kazinoki, Sieb.（くは科）山地に自生するも、通常栽培せらるゝ落葉の亞喬木なり、葉は桑に似て大なり、質厚からずして裏面に毛少し、下部のものは分裂すれども上部は然らず、邊緣

に鋸齒あり、雌雄同株にして、春日開花し淡黄紫綠色を呈す、雄花は短き穗をなし、雌花は相集りて球狀をなし、相共に斯枝上にあり、果實は六月頃熟し赤色にしていちごの實に似たり、樹皮を以て日本紙製造の原料となす、大昔は此皮を織て布を製し之れをユフと稱せり。

黐の花（もちのはな）

細葉冬青（ほそばもち）　もちの木　江戸黐（えどもち）　黒鐵黐（くろがねもち）

古書校註

【三才圖會】按るに黐樹深山に在て葉大く、子を結ばざる者を黐と爲す。

季題解説

山野に自生し庭園に栽培せらるゝ常綠喬木、高さ二丈餘に達す。葉は葉柄ある長橢圓形にして、厚く光澤あり、表は綠濃く裏は淡し。四五月頃、枝梢葉腋に綠白色の小花を叢生す、後ち實を結び熟すれば紅色となり美し。木皮を搗きて鳥黐を製す「もちのき」。【参照】人事―黐搗く（モチツク）

例句

黐の花

大蟻の踏轉かしてもちの花　孚水（ホトヽギス）

もちの花こぼれつゞきて靜かな　濱子（同）

参考

もちのき Ilex integra, Thunb.（そよご科）山野に自生する常綠喬木なれど、又觀賞用として園養せらる、樹の高さ一二丈許に達し、葉は革質にして滑澤、全邊にして鈍頭又は稍銳頭、下面は淡色を呈す、四五月葉腋に數多の淡綠色小花を叢生す、雌雄異株なり、果實は熟すれば、通常紅色稀に黄色を呈す、樹皮にてとりもちを製すべし。

椎の花（しひのはな）

椎木（しひのき）　しひがし　ひしひ　柯樹（かしひ）

季題解説

「かしは一屬の一種にして、暖國の山地に多き常綠喬木、大なるものは幹の高さ三四丈老樹に至りては五六丈にも及ぶ、葉は枝の兩側に二列に互生し、樫の葉に似て厚く、尖れる長橢圓形に鋸齒あり、表面は深綠色なれども裏は毛茸密生して黄褐色なり、六月の頃雄花は黄なる穗狀をなして開き、特種の香氣を放つ、秋實を結ぶ、どん栗に似て細し、樹皮は單寧を含みて魚網を染むるに用ふ、染戸の所謂「澁木」なり、庭木、生垣にも用ゆ。【参照】秋―椎の實（シヒノミ）

例句

椎の花

旅人のこゝろにも似よ椎の花　芭蕉（續猿蓑）

椎の花人もすさめぬにほひ哉　蕪村（寫經社集）

頭痛する八專中や椎の花　羅巳（[illegible]）

足もとにこぼれてちるや椎の花　李里（別座敷）

遠目には燃ゆる色なり椎の花　夏山（ホトヽギス）

炭負うて山下る人や椎の花　天門（同人）

【參考】しひ（柯樹）（ぶな科）暖國に多く繁茂する常綠喬木にして、高さ三四丈に至る、本年夏期の花は、翌年秋期に至りて實を熟す、葉は長卵形にして尖り、下面は灰白或は淡褐色を呈し、質厚く、緣邊に粗鋸齒を有す、花は雌雄同株上に開き、大略ナラ、カシ等に似・果實は長卵形にして尖り、嚢狀の總苞に被包せらる。

栗の花（くりのはな）　栗の落花（くりのらくくわ）

【古書校註】

【滑稽雜談】時珍本草に曰、栗の花、條（一）をなす。大さ筋頭の如し。長さ四五寸。燈を點すべし。（二）和產所說のごとし。四五月に花開く。和俗此花のおつるを以つて、梅雨の候とす。故に梅雨を呼んで墮栗花の雨ともいへり。

註（一）すぢ。（二）以下其諺後の自記也。

【季題解說】山地に自生する落葉喬木、高さ四五丈に達す、葉は欅に似て披針形緣に鋭き鋸齒あり。雌雄花を異にし所謂單性の雌雄同株なり。梅雨の頃三四寸の花穗を抽き淡黃色の細花を綴る。雌花は枝上に留つて實を結ぶ。【參照】天文—梅雨（ユツ）　秋—栗（リク）

【例句】

栗の花

世の人の見付ぬ花や軒の栗　芭蕉（鳥の道）
雨雲の空もおもたし栗の花　珍志（新選）
朝風や栗の吹間の甘臭き　不尤（新虛栗）
てかてかと日を見る朝や栗の花　雅重（心一つ）
朝川や柄杓にかゝる栗の花　風伴（類題發句集）
雞のくはへてふるや栗の花　半捨（同）
夕風や青葉にもるゝ栗の花　尺艸（俳句大觀）

栗の落花

毛蟲にもならで落ちけり栗の花　子規（全集）

【參考】くり（Castanea crenata, Sieb. et Zucc.）（ぶな科）山野に自生する落葉喬木、高さ三四丈に達し、葉は披針形にして邊緣に尖銳鋸齒を有し、頗るくぬぎの葉に似たり、六月頃淡綠色の雌花及黃白色の雄花を同株に開き、雄花は長穗狀に排列し、雌花は通常三箇づゝ殼斗內に包まれて雄花穗の基部に着生す、果實卽ちいがは全面に刺を着生せる嚢狀總苞內に包まれ、成熟すれば開裂して栗色の堅果を出し之れを食用とす。

柿の花（かきのはな）　柿の蔕（かきのたう）

【古書校註】

【滑稽雜談】和俗、柿の花を呼で柿の蔕と稱す。花落て、夏の間に青實を結ぶ也。

【季題解説】廣く栽培せらるゝ落葉喬木。高さ二三丈に達す。葉は楕圓或は卵形光ありて先端尖る。花は六月梅雨の頃新枝の葉腋に開き、帶黄色の壺狀をなし、その下に四五裂綠色の蔕ありて、一株に雌雄の別あり。果實は秋の末に熟す。【參照】青柿 秋—柿 杪紅葉

【實作注意】柿の花をまた杮の蕚とも云ふ。又「かき」の字正しくは柹と書す、柿はその俗字にして、いづれも「シ」の音なり。一般に用ゐる杮は音「ハイ」にして、柿（きふだ・こけら）と同字なれば果實の「かき」とは全く別字なれども今一般に柿又は杮の字を以てせり。

【例句】

柿の花

洗濯やきぬにもみこむ柿の花　　薄芝（續　　　菟）
澁きとは人はしらじな柿の花　　會北（古人五百題）
澁柿の花ちる里と成にけり　　蕪村（新　花　摘）
柿の花きのふ散しは黄ばみ見ゆ　　同（同　　　　）
蟲のために害はれ落つ柿の花　　同（句　　　集）
木の下に柿の花ちる夕かな　　同（落日庵句集）
鞍つぼに酒吸ふ門やかきの花　　曉臺（曉臺句集）
茶筵にたゝみこみけり柿の花　　樗堂（新　十　家）
澁柿のしぶしぶ花に咲にけり　　一茶（七番日記）
二三町柿の花散る小道かな　　子規（全　　　集）
柿の花こぼれて久し石の上　　虚子（ホトヽギス）

柿の蔕

落る氣で多く出來けん柿の蔕　　李流（俳諧新選）
柿のたう寺は鎌倉ふりにけり　　山夕（末　若　葉）

【參考】かき Diospyros Kaki, L. f.（かき科）山中に自生すれども、又普く栽培せらるゝ落葉喬木なり、幹の高さ二三丈に達す、葉は互生全邊にして、楕圓形或は卵形を呈し、花は新枝の葉腋に出で、雄花は聚繖花序をなし、雌花は獨在し毛を帶ぶ、秋日美しく紅葉することあり、元來雌雄同株なり、黄色の合瓣花冠は、壺狀をなし邊緣四裂し、花下に綠色の四裂蕚あり、六月梅雨の候に開く果實は帶黄赤色の漿果にして、品種により其形狀に種々あり、果實を食用とす、又嫩果より澁を採る、材は器具に用ふ。

石榴（ざくろ）の花（はな）

花石榴（はなざくろ）　實石榴（みざくろ）　白榴（はくりう）　黄榴（くわうりう）　安石榴（あんせきりう）　安榴（あんりう）

【古書摘註】

【華濃草】浙禘類書に曰、石榴、種甚多し。千葉深紅にして、實を結ぶ者實珠と名く、單葉は火榴と名く、甚能く花を開く。亦千葉の者、一種白花を白榴と曰ふ。黄花を黄榴と曰ふ。

【季題解説】廣く栽培せらるゝ落葉灌木。高さ丈餘に達し枝多く、葉は對生又は叢生する長楕圓にして先端の尖れるもの、滑かに光澤あり。梅雨の頃枝頭に花を著く、萼は紅色筒狀、質厚く五六裂す。瓣は五六枚少しく縮み、

普通は鮮紅色にして頗る美し。花後實を結び熟すれば自ら裂けて紅き種子を露はす。〔參照〕秋－石榴ザクロ

實作注意　本植物には花石榴と實石榴との二種あり。花石榴は多く八重咲にして果實を生ぜず、主として盆栽用とし、實石榴は多く庭園に栽培す。花柘榴には園養變種多く紅白絞りもの等あり。漢名、安石榴・安榴。一般に柘榴と書けど石榴を正しとす。

例句

石榴の花　むだ花の咲にこりする石榴哉　凡辨（俳句大觀）
色や火焔妻戸の前の花石榴　嵐久（鷹筑波）
花石榴　石窓に雨はやみたり花石榴　桃隣（古今白堂句選）
五月雨にぬれてや赤き花石榴　野坡（類題發句集）
したゝるき雨の雫や花石榴　重厚（俳句大觀）
花石榴久しう咲いて忘られし　子規（全集）
饅屋の狭き二階や花石榴　月斗（同人）
二つ釣りし簾の透間花石榴　虚子（ホトヽギス）

參考　ざくろ　Punica Granatum, L.（ざくろ科）小「アジア」邊の原産にして通常庭園に栽植する落葉喬木なり、高さ一丈に達し、葉は略對生し長橢圓形全邊にして光澤を有す、梅雨の頃枝梢上に多數の花を生じ、通常赤き筒狀をなせる萼と、深紅色の花瓣とを有し、果實は球狀にして、熟すれば裂けて紅肉を有する種子を現はす、觀賞用のものには、多くの變種ありて或は複瓣花のものあり、或は白色其他の花色を有するものあり、花を觀賞用に供す、又實を食用にす。

棗の花（なつめのはな）

古書校註　【滑稽雜談】和に云、毛吹草等の俳書、みな三月部に註す。然ども和産のもの、また四月に花を開く者多し。之に仍て今爰に之を記す。

季題解說　果樹として人家に栽培される落葉喬木、高さ二丈餘にも達す。初夏の頃新枝に葉を生ず、葉は互生して卵形、間もなく白く青みたる五瓣の小花を數箇叢り著く。後ち實を結び秋紅熟す。詳くは秋季の棗を見よ。

實作注意　棗は五月の初め乃ち初夏の候に入つて新芽を出すより「なつめ」と云ふとの說あり。棗は重に果實の秋を以て季題とす。〔參照〕秋－棗ナツメ

例句

棗の花　蚊柱や棗の花の散るあたり　曉臺（俳句全集）

參考　なつめ（棗）*Zizyphus vulgaris*, Lam.（くろうめもどき科）「アジア」原産にして通常人間に栽植せらるゝ落葉灌木なり、高さ二丈餘に至り、往々刺を有す、葉は平滑卵形にして互生し鈍鋸齒あり、基脚不等形

にして三刺裂を有す、數箇の夏日淡黄緑色小花を葉腋に叢生す、果實は核果にして楕圓形をなし、生食すべく、又藥用に供すべし。

榎の花（えのきのはな）

【季題解説】 山野庭園にある落葉喬木、高さ三四丈に達す、葉は椋に似て楕圓形にして先尖り、緣に鋸齒あり、夏の初め淡緑色の花を開く、形小さく椎の花に似たり、後ち實を結び熟して黄赤色となる。

【實作注意】 榎の實は一般の木の實と均しく秋季とす。又單に榎にては無季なれば注意すべし。〔參照〕秋…榎の實

【例句】 榎の花

美しや榎の花のちる清水　白雄（俳句全集）

【參考事項】 えのき Celtis sinensis, Pers. var. japonica, Nakai. （にれ科）山野に自生し又道傍等に植ゑある落葉喬木なり、幹は直徑數尺高さ三四丈に達するものあり、葉は楕圓形にして先端尖り、邊緣の上部に鋸齒を有す、初夏淡黄色の細小花を綴り、雄花と雌花とあり、花後小豆大の黄赤色球狀果を結ぶ。

榊の花（さかきのはな）

花榊　榊　坂樹　賢木　楊桐　眞榊　龍眼木

【古書校註】 【三才圖會】榊・坂樹・賢木・龍眼木・和名佐加木、正字未詳、按ずるに榊は本邦神事必用の木也（略）小白花を開く（略）日本紀に云、八百萬の神天の香久山の坂樹を取りて、天の窟戸の事を祈る事ありて以來、神の緣木（一）となる。

註（一）神にゆかりのある木

【季題解説】 山地に自生する常緑木なれど、神社の境内に栽植され、枝を採りて神前に供さるゝもの、直立して高さ三丈餘に達し、葉は（略）に似たれども細葉・厚葉・圓葉のものあり、五六月の頃淡黄白色の香ひある小花を開き、冬に至れば紫黒色となる圓き實を結ぶ、材質堅緻なり。

【實作注意】 榊種に檢あり、春花を開くもの、また眞榊と云へど眞は接頭語にして榊のことなり。

【例句】 花榊

立ちよりし結の社や花榊　いはほ（ホトトギス）

【參考事項】 さかき Cleyera ochnacea, DC. （つばき科）は關東圓以西の山地に自生する常緑喬木なれども、又往々庭園神社等に栽培せらるゝことあり、高さ一二丈、葉は互生し革質全邊にして、通常長楕圓形或は卵圓形をなし、夏頃葉腋に白花を開く、細花にして、花後圓き漿果を結び、熟して黒く、内に多種子あり、葉ある小枝を神前に供ふ。

櫟の花　栩　櫪　櫪　つるばみ　いちひ　どんぐりの木

古書校註

【果草】　時珍云、二種あり、一種は實を結ばず、其名を棫といふ。一種は實を結ぶ、其名を栩といふ。其實を橡とす。其葉櫧の葉の如くして文理あり、皆斜に勾る。四五月花を開く、栗の花の如し、黄色。「大和本草」今按るに櫟の木は櫧に似て同類異物なり、其木の高さ二三丈實も櫧に似たり。

季題解説　「かしは」屬の一種にして、林野に多く自生する落葉喬木、樹葉共に栗に似て高さ二三丈に達す、葉は長橢圓披針形側脈著しく緣に鋸齒あり、夏の初め葉の間に黃褐色の穗狀花を開く、栗の花に似たり。雌樹は秋實を結ぶどんぐりと云ふ。材は上質の薪炭となり、椎茸造りの木とす。樹皮は單寧を含むを以て染料及び鞣皮用となり、葉は天蠶の食餌となり、枝に生ずる蟲癭は染料をとる。此の樹異名多く、どんぐり・しだみ（陸奥）・じだんぼう（上野）・どんぐりまて（信濃）・くのぎ、くにぎ・うつな（伊豫）・じざい（但馬）・うばぼう（攝津）かながしや・ふしまき（秩父）とちまき・うつぎ等と呼ばる。〔參照〕石楠の花ノハナ　秋―團栗クリ

例句

櫟の花　熊笹に櫟の花の散りにけり　瑞穗（同人）

橡の花　栃の花

古書校註

【三才圖會】　四五月花を開く。栗の花の如し。黄色。實を結ぶ。

季題解説　多くは深山にある喬木。幹の周圍八九尺、高さ七八丈にも及ぶものあり。葉は對生にして大なる掌狀複葉、大小不同の七小葉より、小葉に鋸葉あり、五月の頃枝梢の葉間に白色淡紅を帶べる五瓣の花を集めて六寸乃至一尺ばかりの穗をなす。九月頃實を結ぶ。詳くは秋季の「橡の實」を見るべし。〔參照〕秋―橡の實ハチ

例句

橡　橡の花どよもす風の白き夜や　草一（石楠）

瀧道や踏みしだかれし橡の花　默禪（ホト・ギス）

石楠の花　櫟子　いちがし　いちひがし　あきさくがし

季題解説　又「いちひかし」。常綠の喬木。幹直立して高さ三四丈に及ぶ。葉は互生し、長橢圓形にて頂尖り、上部のみの緣に鋸齒あり、裏に毛を生ず。花は小さく檔に似たり。實も相似て圓く、炙りて食ふべし。材は堅密なり。花期は五月頃とす。園藝上此の木を多く聚め植ゑ、枝を刈込みて種種の形をなせる綠門を作ることあり、之を石楠門といふ。〔參照〕櫟の花ノクヌギハナ

秋　石楠の實（イチヒ）

木斛（もくこく）の花（はな）　あかみのき　ほつぼう　もつぼう　厚皮香（こうひかう）　水木犀（みづもくせい）

季題解説　暖國の海濱に多き常綠の喬木、時に園養す。高さ二三丈周り四尺にも達す。樹皮は黒く滑か、葉は厚く長橢圓倒卵形をなし長さ二三寸、色深綠に光澤あり、夏日葉の間に黄白色五瓣の花を開き、果實は丸く熟すれば紅くなりて裂く。材は堅く、樹皮は染料をとる。

例句
木斛の花　木斛の花一時や庭掃除　迷水（ホト、ギス）

參考　もくこく　Ternstroemia japonica, Thunb.（つばき科）暖國に生ずる常綠の喬木なれども、また庭園に植ゑらる、高さ二丈餘、葉は長橢圓狀倒卵形にして全邊なり、質厚く滑にして光澤を有す、七月頃枝上に白色長梗花を開く、五瓣花にして、果實は直徑三四分の球狀をなし熟すれば紅子を露出す。

杪欏（しやら）の花（はな）　夏椿（なつつばき）　さるなめ　さんごな　杪欏（しやら）

季題解説　一名「夏椿」と云ふ。山地に自生する落葉喬木なれど、往々庭園にも栽培せらる。高さは二三丈にも達し、樹皮滑かに赤褐色、百日紅に似たるより、さるなめ・さるすべりとも云はる。葉は鋸齒ある長橢圓形にして尖り互生す、六月頃葉間に山茶花に似たる一重の白花を開く。實は寶珠の如く頂尖る。材は挽物細工の料とす。

作句注意　さるすべりの名あれども百日紅にあらず、沙欏の名あれど印度產の沙羅樹にあらず、又木天蓼の一名を「なつつばき」とも云へば、何れも混同すべからず。

例句
沙欏の花　沙羅の花苔にこぼれて靜かなる　蛃魚（ホト、ギス）

參考　なつつばき　一名しやらのき　Stuartia pseudo-Camellia, Maxim.（つばき科）山中に生ずる落葉喬木なれども、時に庭園に栽て賞觀せらる、幹の高さ二丈許、葉は橢圓形にして細鋸齒あり、嫩葉は下面に絹毛を具ふ、夏に單瓣の大なる白花を開き、直徑一寸五分許長狀つばきに似たり、萼の基部に革質をなせる三角の苞を有す、果實は寶珠狀をなして頂端尖り、開裂して種子を散ず、眞正の沙羅雙

樹は固有産にして本種にあらず。

夏藤（なつふぢ）　土用藤（どようふぢ）　めくらふぢ

【古書抜註】

【年浪草】　又一種夏藤あり。黄白色、莖、葉、花共に紫藤に似て小さし。山州山科の近道往々有り。四月花を開く。(一)

註（一）年浪草には石藤の項にあり。

【季題解説】　夏の土用頃に咲くより一に「土用藤」と云ふ。莖・葉・花・實共に藤に似たれども小形なり。花の色は白くすこしく黄色を帯ぶ、暖地には自生すれども多くは盆栽にせらる。

【季感要説】　夏藤は固有の稱へなれば

成佛の花の色香や夏の藤　　杉風（杉風集）

などの如く夏の藤と詠めば春季の藤の夏季に尚咲き殘れるもの丶謂となれば注意すべし。〔春〕春—藤。

【例句】

土用藤　巖をもつてかためし谷や土用藤　　禪寺洞（天の川）

【参考】　なつふぢ　一名、どようふぢ　Millettia japonica. A. Gray.（まめ科）山野に自生する纏繞性の落葉小灌木なり。莖は褐色を呈し、葉は羽狀にして互生し、小葉多し、小葉は長卵形をなし、末尖る、盛夏の候花を總狀に開く、白色小蝶形花にして、花後二三寸の莢を結ぶ、花戸メクラフヂと稱するものは本種の一園藝品なり。

葡萄の花（ぶだうのはな）　花葡萄（はなぶだう）

【古書抜註】

【三才圖會】　三月小花を開き穗を成す。黄白色。仍て實を星の如くに連り着く。

【季題解説】　葡萄は初夏の候、新枝と葉と對生して花穗を出し、黄綠色の小花を藤の花の如く、總狀花序に開く。「慈善」「快樂」等を意味する花言葉あり。尚ほ詳くは秋の「葡萄」を見よ。

【季感要説】　葡萄の開花期は五月中旬とするも種類によりて一週間位の遲速あり、「でら」は一番早く「三尺」は次に「甲州葡萄」は最後とす。何れも長き房狀に花粉を否貌に黄色の化粧をなす。〔秋〕秋—葡萄。

【例句】

葡萄の花　青葉すく日弱し葡萄の花は黄に　　圭岳（同人）

柑類の花（かうるゐのはな）

【古書抜註】

【年浪草】　橙油柑は五月の部に見えたり。○柚の花（略）金柑（略）乳柑（略）蜜

柑橘。

【俳諧歳時記】柑子の花・蜜柑の花・橙の花・橘の花・九年母の花・枳殻の花・柚の花・金柑の花・佛手柑の花等は悉く夏日白色五瓣にして香氣ある花を開く、各々別項にあり。

【[illegible]】柑類の花は一見した感じ各大同小異な故、柑類の花と一括してまとめらしく、特殊なものを取あげるときは、柑子の花・蜜柑の花等となるべし。〔季語〕花橘（一）　朱欒の花（ザボン）　柑子の花（カウジ）　金柑の花（キンカン）　九年母の花（クネンボ）　橙の花（ダイダイ）　夏蜜柑の花（ナツミカン）　佛手柑の花（ブシユカン）　蜜柑の花　柚の花（一）　春　枳殻の花（カラタチ）

【例句】
柑類の花　柑類の花の盛の御室かな　句兒（[illegible]寒）

花橘（はなたちばな）

橘の花（たちばな）　常世花（とこよばな）　庭古草（にはふるくさ）　昔草（むかしぐさ）

【年浪草】和漢三才圖會に曰、按るに太知波奈の和名は橘類の總名也、今單に太知波奈と稱する者乃ち包橘也。（略）日本紀に曰、垂仁帝九十年の春、田道間守（一）に命じて、常世國に遣はし非時香菓（二）を求めしむ。今橘と謂ふ者是也。

註（一）たぢまもり。（二）ときじくのかぐのみ。

【[illegible]】暖地に栽培せらるゝ常綠の小喬木、高さ丈餘に達す。葉は橢圓形にして綠濃く、光澤あり、初夏葉腋に白色五瓣の花を開き香氣あり。果實は蜜柑に似て小さし、冬熟す。

【[illegible]】一名「常世花」といふ。「たちばな」は田道間花の約。古、垂仁帝の御代、田道間守が勅をうけて、常世の國に渡り、非時香果即ち橘を求め、景行天皇の元年に歸朝せしに、先帝崩じたまへるにより、香果を陵に捧げて悲哭して死せりといふ故事より此名ありと云ふ。又今の柑子は橘の一變種なりとも云ふ。或に云ふ、昔の橘は今の蜜柑なりと。又「たちばな」は柑橘類の總稱なりとも云へり。又橘はその花にも實にも用ひらるれば、その何れかは句に就て自ら辨ずべし。庭古草・昔草の異名あり。〔季語〕柑類の花（夏）　柑子の花（夏）　蜜柑の花（夏）　秋　橘の實（アキ）　新年　橘飾る（シンネン）

【例句】
花橘　駿河路や花橘も茶の匂ひ　芭蕉（炭俵）
酒蔵や花橘の一在處　巴紅（[illegible]首途）
長屋や橘にほふ家の内　也貫（[illegible]句選）
橘や定家机の有所　杉風（[illegible]句選）
橘の花　橘やむかしやかたの弓矢取　蕪村（新花摘）
たちばなのかはたれ時や古館　[illegible]（[illegible]）
夜嵐に橘匂ふ舞臺かな　甘谷（鶯[illegible]音）
橘や日本紀齎す書院の間　[illegible]美（[illegible]草）

常世草　風やしるべ闇にかをるはとこよ草　弘永（毛吹草）

昔草　しのぶ頃と咲もあへるやむかし草　宗春（三籟）

柑子の花（かうじのはな）　花柑子（はなかうじ）　包橘（はうきつ）

【季題解説】多く暖地に栽培さるゝ常綠灌木、樹容やゝ纖細、上方にのみ生長する特性あり、葉は長卵互生、花は白色五瓣の小花、果實は普通の蜜柑より小形にて皮薄し、酸味極めて多し、柑類中最も早く成熟するもの。

【植物古註】柑子は今日云ふ「橘」（昔云ひし「たちばな」にあらず）に近きものにして或はそれより出でしと云はる。漢名、包橘。【參照】柑類の花（カウルヰノハナ）　花橘（ハナタチバナ）　秋—柑子。　新年—柑子飾る（カウジカザル）

【例句】

柑子の花　むろならで花のつきたる柑子哉　如云（曆 筑波）

夏の日にむされてさくや柑子花　貞德（犬子集）

柚の花（ゆのはな）　柚子の花（ゆずのはな）　いずの花　花柚（はなゆ）　花柚子（はなゆず）

【古書校註】

【滑稽雜談】時珍本草に曰、柚樹の葉、皆橙に似たり。其花甚香ばし。（略）按に、柚は酒毒を解く。飲酒の人の口氣を治するよし、日華本草などにみえたり。又俗の賞するは、只芬香ならんのみ。

【季題解説】「ゆず」の花を云ふ。庭園等に栽培される常綠小喬木。高さ丈餘に及び他の柑橘類と異りて寒地にも生育す。樹勢强く枝に刺あり、葉は長卵形にして葉柄に翅ありて二段の如く見ゆ。初夏の頃白色五瓣の小花を開き香氣を放つ、よつて蕾を香味料ともす。

【和漢古註】元來「柚」の字は「ゆず」にあらずして、別なる蜜柑類の一種とあり、漢書によれば柚は又一に香柑と稱し實は圓く大きく熟すれば金黃色となる種のものなりとあれど、我國にては古くより柚・柚子に當たり。柚の花を花柚と呼びてよし。【參照】柑類の花（カウルヰノハナ）　秋—柚（ユズ）

【例句】

柚の花　柚の花にむかしをしのぶ料理の間　芭蕉（嵯峨日記）

柚の花やゆかしき母屋の乾隅　蕪村（新花摘）

柚の花や能酒藏す塀の内　同（同）

柚の花や蟻はひ上りはひ下り　朱梁（句音）

柚の花のさはりもせぬにこぼれけり　嵐外（類題發句集）

花柚　花柚見てしきりにかはく山路哉　蓼太（蓼太句集）

花柚水にうかべて諧の簾かな　白雄（白雄句集）

旅寐する寺は花柚の盛り哉　萬春（古人五百題）

花柚子　花柚子の香をなつかしみ張物す　くに女（ホトトギス）

蜜柑の花

古書校註 【栞草】本草綱日 樹の高さ丈餘、其葉兩頭尖り、綠色にして面光る。四月小花をひらく。色白うして甚だ香し。 大和本草 其花を花橘と古歌によめり。

季題解説 至る所に栽培せらる常綠木。高さ丈餘に達す、葉は卵狀披針形にして互生す、葉間に實あれど目立たず、六月の頃、白色の五瓣花を開く。**參照** 柑類の花 花橘 冬―蜜柑 新年―蜜柑飾る

例句
蜜柑の花
猶哀れ栗も蜜柑も花の時　乙由（袞林集）
春過ぎてはや咲く蜜柑柑子哉　大江丸（俳句大觀）
樹々の風蜜柑の花をこぼしけり　鯨洋（ホトヽギス）

金柑の花

姫橘　金橘

古書校註 【年浪草】金柑は、同く（一）曰く、其樹橘に似て甚だ高大ならず。五月白花を開く。

註（一）時珍なり。

季題解説 姫橘とも云ふ。多く暖地に栽培せらるゝ常綠灌木。高さ六七尺に達し、楕形蜜柑に似たり。花は白色五瓣、夏の半ばに開く。實は多く著き、圓形と楕圓形とあり、冬熟して春迄落つることなし。金橘。**參照** 柑類の花 秋―金柑

例句
金柑の花
二尺ばかりの金柑花をつけにけり　涼舟（同人）

九年母の花

くねぼ　香橙　乳柑

古書校註 【三才圖會】本草綱目、乳柑樹橘に異なる無し。但し刺少きのみ、其實橘より大にして、瓣味甘し。

季題解説 暖地に栽培する常綠喬木、高さ一丈餘に達す。枝梢に刺あり、葉は蜜柑に似て稍大なり。初夏五瓣の白花を開き、頗る香氣強し、「香橙」の名ある所。實は扁圓形越年して成熟す。**參照** 柑類の花 秋―九年母

橙の花

回青橙　臭橙　橙　臭橙

古書校註 【三才圖會】按るに、橙の樹大なる者高さ丈餘許り、周尺に過ぐ。嫩き時

は刺あり。老いては刺無し。其葉圓く大、乳柑に似て短く、背の色淡し。五月小白色を開く。橘・柑・橙・柚の花相似て小白花なり。

季題解説 主として暖地に栽培される常綠の喬木。蜜柑に近き種類なり。幹の高さ一丈許となり、葉は互生し、先の尖れる葉柄に翼あり。夏の半に白色五瓣の小花を開く、圓き實を結び、冬に至れば黃色となり、落つることなく樹上に止まり、翌年夏に至つて再び綠色となる「回青橙」の名あり。

實作注意 單に橙と云へば橙の實を意味して秋のもの、又飾る意を含めば新年の季題詠物となるなり。〔參照〕柑類の花(カウルヰノハナ)　秋―橙(ダイダイ)　新年―橙飾(ダイダイカザリ)

例句
橙の花　　橙の花や社務所の裏戸口　　圭岳（同人）

夏蜜柑の花（なつみかんのはな）　夏橙の花（なつだいだいのはな）

季題解説 もと長州萩の產と云はる。今は暖地の何れにもあり。橙等に似たる常綠の灌木。幹の高さ丈餘に至り、葉は長卵形、葉柄に翅あり、葉腋に刺あり、五月頃橙の花に似たる白色の五瓣花を開き、後ち果實を結び冬に至れば黃色を呈するも未だ味ふべからず、其儘樹上に越年せしめ夏に入りてより之を食す。夏橙とも云ふ。〔參照〕柑類の花(カウルヰノハナ)　植物―夏蜜柑(ナツミカン)

例句
夏蜜柑の花　　夏蜜柑色づく花の香に匂ふ　　圭岳（同人）

佛手柑の花（ぶしゆかんのはな）　ぶつしゆかん

古書校註 【三才圖會】本草綱目、佛手柑樹朱欒に似て、葉尖長く、枝間刺有り。之を近水に植うれば、乃ち其實を生ず。

季題解説 暖地に栽培せられ高さ丈餘に達する常綠木。莖に刺あり、葉は楕圓形、先鈍く尖り鈍齒微かにあり、初夏の頃蜜柑に類する白色五瓣の花を開く、香氣強く、蕾の時は赤味を帶ぶ。實は漿果、冬に至つて黃熟し手指の集りたる如き觀より名あり。〔參照〕柑類の花(カウルヰノハナ)　秋―佛手柑(ブシユカン)

例句
佛手柑の花　　佛手柑の花ちる蜂の巣箱哉　　涼舟（同人）

朱欒の花（ざぼんのはな）　內紫（うちむらさき）　じやがたら蜜柑（みかん）　ざんぼ　ぼんぼう　じやんぼ　文旦（ぶんたん）

古書校註 【三才圖會】本草綱目、柚の大なる者を朱欒と謂ふ。最大なる者を香欒と謂ふ。爾雅、之を櫾椵（ゆかう）と謂ふ。

季題解説 朱欒は鹿兒島及熊本南部に最も多く、主として邸園に植栽し、

して、嫩芽は紅を呈すれども、開けば青色となる。晩春初夏新葉に前後して帶紅色の小花を開く、後ち二つの翅を有する實を結ぶ。形ちプロペラの如し

【名稱起原】　楓古くは「かへるで」と訓じ、漢名、槭樹・雞冠樹と書す。【參照】植物―若楓(ワカカヘデ)　秋―紅葉(モミヂ)

【例句】

楓の花

見る時を楓の花の盛かな　　長翠（俳句大觀）

欄や楓の花に手をのばす　　月斗（同人）

漆(うるし)の花(はな)　山漆(やまうるし)

【古書校註】【三才圖繪】漆木高さは二三丈、其身柿の如く、其葉椿の如く、皮は白く、花は槐に似たり、子は牛李の子の若し

【季題解說】　山野に自生する落葉喬木、高さ二三丈に達し、梢枝は太くして疎なることを通性とす。葉は藤の如き羽狀複葉にして微毛あり。六月の頃黃白の小花を開く。雌樹には實あり、蠟を採り、樹の脂よりは漆を取る

【實作注意】　專ら漆を取るものは培養して五七年なるより取り後には伐り倒すこととあり。一種「やまうるし」は山中に自生のもの大木なり。また「花漆」の語を用ふべからず、花漆は薄紙にて漉し搾りたる漆の事なり。【參照】人事　漆搔(ウルシカク)　秋―漆の實(ウルシノミ)

【例句】

漆の花

よき蔭をつくる大樹は庭うるし　　白川（ホトトギス）

【參考植物】　うるし　Rhus vernicifera, DC.（うるし科）支那の原產にして、諸處に栽培せらるゝ落葉喬木なり、高さ二三丈に達し、枝は太くして疎らなること、皆此類の通性とす、葉は奇數羽狀複葉にして、小葉は五七對をなし、卵形又は橢圓形にして尖り、全邊にして、皆短柄を有す、六月頃黃綠色小花を複總狀に開き、核果は歪形扁平にして、平滑なり、樹皮より漆汁を取り用う、

櫨(はじ)の花(はな)　黃櫨(くわうろ)　はせ　はにし　はじの木(き)　らふの木(き)　はせうるし　やまうるし

【古書校註】【三才圖會】其葉小さく淺青色、莖は微赤し。三四月小白花を開き、細子を結ぶ。秋に至りて紅葉す。

【季題解說】　高さ一二丈に達し、漆樹に似たれども、枝を分つこと多きを以て區別すべし。葉は藤の如き羽狀複葉にして光澤あり、五六月の頃黃綠色の小花を綴

る。實は漆よりやゝ大きく、扁たく堅し、蠟を採ること又漆の如し。

【實作注意】「はじつき」「はぜうるし」「らふつき」等の異名あり、重に秋の紅葉を詠ふれば花を詠めるもの乏し。【參照】漆の花（夏）秋－櫨紅葉（秋）

【例句】櫨の花

雲蒸して降りなやみけり櫨の花　麥門冬（同　人）

棕櫚の花

【古書校註】すろ　棕櫚　椶魚　椶笋　唐棕櫚

【本草綱目】時珍が曰、椶櫚皮中、毛縷馬の鬃鬣（一）の如し、故に椶と名く。俗に棕に作る。鬣は音闘鬣也。初め葉を生ずる白皮の葉の如し。高さ一二三尺、卽ち木端數葉大さ扇の如し、上に聳え四もに散じ、岐裂け其の莖三稜四時凋まず、其の幹正直にして葉無き處皮有りて之を裹む、長ずる每に一節を轉す。其の皮絲毛有り。（略）三月木端莖中に於て數黄苞を出す苞中に細子有り列を成す、乃ち花の孕也。狀魚腹孕子の如し、之れを椶魚亦椶笋と謂ふ。漸く長じて苞を出す時は則ち花穗を成す、黄白色の實を結ぶ、累々として大さ豆の如し

【註】（一）たてがみ

【季題植物記】暖地に自生する常綠喬木にして、庭園に栽植す。幹は直立し高さ三四丈に及び、圓柱狀にして枝を生ずることなし、葉は幹の頂に叢生し、長き葉柄をもてる大形掌狀に分裂せる樣恰も羽團扇に似たり、葉柄の基部に大なるに擇ありて纖維多く纏ふが如し、五月下旬花を開く、雌雄異株にして雄花は黄色にし粟粒の如く、雌花は三個の雌蕊より成り、後に豆大の黑き實を結ぶ

【季題研究】棕櫚の花は穗をなして其の粒ある苞を出すや、魚の「はららご」の如し、之を椶魚・椶笋といふ。古名「すろ」と云ひ、一般に棕櫚と書けど俗字なり。

【例句】棕櫚の花

村中にひよつと寺あり棕櫚の花　也有（蘿葉集）

梢より放つ光やしゆろの花　蕪村（新花摘）

古寺や僧なまめかす棕櫚の花　三園（新慶集）

筒組んで兵隊休む棕櫚の花　子規（全集）

すろの花

あたゝかなきつゝ曇りけりすろの花　浪化（[illegible]）

三月季

すろの花のごき出たる嵐哉　芝柏（[illegible]）

【參考】しゆろ　Trachycarpus excelsa, Wendl.（しゆろ科）我邦の原産にして、今は本邦各所に栽培せらるゝ常綠木本なり、稈は二丈許に達し、圓柱狀にして直立し、枝を分たず、其頂端に大形の葉を簇生す、葉は長柄を有し、其莖角稜刺齒を有す、葉片は硬强にして深裂し平行脈を有す、葉柄の基部に大なる鞘ありて、纖維織るが如し、俗にシユロの毛といふもの是

れなり、五六月の候幹頭葉腋より分枝せる花穂を生じ、多數淡黄色小花を綴り、大なる苞を具ふ、雌雄同株なり、花被六片を有し、雄花には六雄蕊雌花には一雌蕊あり、此變種にタウシュロあり、支那の原産にして庭園に植ゑらる、棕櫚是れなり。

芭蕉の花（ばせうのはな）　花芭蕉（はなばせう）

季題解説　熱帶地方の原産、觀賞用として庭園に栽培される多年生植物。高さ一丈餘に達し、地下莖より直に葉を出し、大なる長楕圓形、長さ四五尺餘あり。夏日相寄れる數葉の中心より太き花梗を出し、淡黄色の大なる楕圓形の苞を具へ、花梗の未だ延びざる内は、この苞相重りて花瓣の如くに見え、恰も蓮の花の蕾の觀あり、この花梗と苞との間に十數箇の不整齊を生ず、帶黄色を呈して實を結べども我國にては熟さず。また一種、姫芭蕉と云へるあり。琉球の産、花は鮮紅色にして最も美なり。参照　玉巻芭蕉（タマバセウ）　姫芭蕉（ヒメバセウ）　秋—芭蕉（バセウ）

例句

芭蕉の花　筒の如芭蕉の花のころがれる　鵜　錢（ホトトギス）

簑の中に草ひいてあり花芭蕉　あふひ（同　）

花芭蕉　髪洗ふ盥や桶や花芭蕉　雲　泉（同　）

参考　ばせう（芭蕉）Musa Basjoo, Sieb.（ばせう科）蓋し支那の原産にして通常觀賞用として栽植する多年生草本なり、高さ一丈内外に達す、葉鞘相擁して一の稈をなし直立す、葉面は大なる長楕圓形にして、中筋の兩側に平行せる多數の支脈を具ふ、夏秋の間葉心より花莖を横出し側向して鈎狀をなし花を開く、花は帶黄色偏形にして大形茶黄色の苞腋に簇生し、綠色の下位子房を有し、下部に雌性花、上部に雄性花を生ず、後肉質の長き果實肉を生じ稀に成熟して黄綠色を呈し黑色の種子を生じて果內に滿つ、本品は温帶地の産にして熱帶のものにあらず。

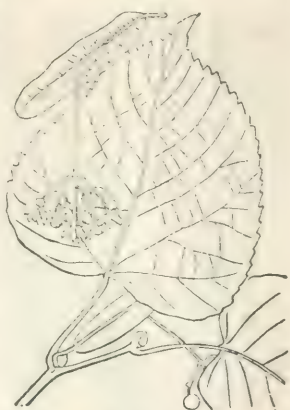
菩提樹の花（ぼだいじゅのはな）　菩提の花（ぼだいのはな）

季題解説　古刹等に植ゑらるゝ落葉喬木、高さ一二丈に達す、葉は心臟形又は廣三角形にて表滑かに裏白く毛あり、長さ一二寸を通例とす。通常葉に似て披針なる總苞に花軸を出し黄褐色の小花を分枝に開く、花後圓き實を結ぶ。

實作注意　印度産に同名の大樹あれど本邦には見受くるものにあらず。且つ屬科を異にす。参照　秋—菩提子

例句

菩提樹の花　梅雨めきしぬくき菩提樹嗅ぎにけり　朝　冷（同　人）

参考　ぼだいじゅ　Tilia Miquelina, Maxim.（しなのき科）支

邪原產の落葉喬木、幹の高さ一二丈に達し、莖は不等邊の心臟形又は廣三角形をなし、上面平滑下面帶白色にして、毛茸を密生し、長さ通常三四寸あり、夏期に至れば葉腋に細長なる苞を出し、その中央に花梗を出し、多く多岐して黃褐色の花を開く。花後圓形の實を結ぶ。

合歡の花（ねむのはな）

かうか花（かうかばな）　ねぶ　ねぶたのき　ねぶりのき　ねむのき　ねむ　りぎ　かうかのき　なびきねぶり　合昏（がふこん）　夜合樹（やがふじゆ）　絨花樹（じゆうくわじゆ）

古書摘記　【栞草】和名抄「禰布里乃木（ネブリノキ）」萬葉になびきねぶりともよめり。又「新六帖」にからか花ともよみたり。

參考解說　山野に自生する落葉喬木、高さ三丈にも達す、葉は互生し、二回羽狀複葉にして非常に多數の小葉より成り、その小葉は夜間閉合して睡眠するより「ねむのき」の名あり。花は夏日梢に穗を生じ、細絲を集めたる如き淡紅色の美花を開き、多く夕に咲いて日中に萎む性あり。花の後莢をつけ中に種を收む。

實作注意　「ねぶ」「ねぶりのき」など稱へ、合昏・夜合樹・絨花樹などの漢名あり。

例句　合歡の花

象潟や雨に西施が合歡花　芭蕉（雪丸げ）
舟引の妻の唱歌や合歡の花　下鄂（[illegible]）
眉つくる合歡や日暮の小柴垣　露川（小弓俳諧集）
鶴の脛も合歡の葉陰哉　蕪村（句集）
雨の日やまだきにくれてねむの花　同（新五子稿）
心憎き合歡の下影網入れん　同（落日菴句集）
[illegible]の供養も果てゝ合歡の花　子曳（俳句大觀）
合歡咲いて人は怠る普請哉　保吉（俳句全集）
合歡咲くや稲の小構ほしけにて　巣兆（曾波可理）
見落すな合歡の小家の酒ばやし　同（　）
合歡咲くや七つ下りの茶菓子賣　一茶（句集）
行水や背戸口狭きねむの花　子規（全集）
うつくしき蛇の鱗や合歡の花　青々（[illegible]）

ほのかにも散つてをるなり合歡の花　虚子（ホトトギス）

明治新題句集

温泉煙に暫く見えず合歡の花　同（同）

はるかなる合歡の下道誰も居ず　つる女（同）

花合歡に蛾眉なが〳〵し午後三時　茅舍（同）

物申のとゞかぬ寺やねぶの花　蓼太（蓼太句集）

島原の晝靜か也ねぶの花　寄井（椿花）

ねぶの花

參考　ねむのき　一名　かうかのき　Albizzia Julibrissin, Dur.（まめ科）山野に自生する落葉喬木なり、高さ二三丈に達す、葉は二回羽狀複葉にして、非常に多數の小葉より成り、小葉は夜間閉合す、是れねむのきの名を得たる所以なり、夏日梢頭に紅色花を出し夕刻前に開く、萼花瓣短小なり、雄蕊は數多く、非常に長くして、紅色を呈し頗る美麗なり、果實は扁莢にして中に扁豆子を收む。

檀の花

季題解說　山野に自生する落葉小喬木。大なるは丈餘に達す、樹皮に縱の裂目あり、葉は桃の葉に似て鋸齒あり、五六月の頃薄綠の白き小花を開き、後ち稍方形の蒴果を結び、秋熟すれば自ら裂けて紅肉出づ。その葉秋の紅葉甚だ美し。　參照　秋—檀の實　檀紅葉

參考　まゆみ　Euonymus Sieboldiana, Blume.（にしきぎ科）多く山野に生ずる落葉亞喬木なり、大なるものは高さ二丈に達することあり、葉は橢圓形・卵狀橢圓形又は卵狀披針形にして對生し、尖頭をなし邊緣に細鋸齒あり、五六月の頃花梗に淡綠色數花を着く、蒴は稍方形を呈し深く四裂し、深紅色を呈し、內部の黃赤色の種子を出す。

皂莢の花

皂角の花

季題解說　山野河原等に自生する落葉喬木。高さは三四丈にも達し、枝幹に刺あり、葉は「槐」に似たる羽狀複葉、夏日葉間より蝶形黃綠色の花を穗につゞる、花後尺餘のゆがみたる莢を結ぶ。　參照　秋—皂莢

例句　皂莢の花

皂莢の落花してゐる靜かかな　鬼城（ホトトギス）

水木の花

季題解說　山野に自生する落葉喬木。高さ二三丈、枝は帶紅色、葉は廣橢圓形、滑澤にして裏帶白なり、初花、四瓣の小白花を簇生し、花後實を結び熟すれば紫黑色となる、よく庭園の植込にせらる。　參照　秋—水木の實

腋に柄を持てる梅の花に似たる白色の五瓣花を下向に開く、夏梅とも稱す。花後棗に似たる指頭大の實を結び熟して黄色となる。

實作注意　此植物、葉の若きものも果實も食用とす、味辛し。果實は木天蓼と稱し、漢方薬として腹痛を治するに當つ。又猫之を好み猫の藥餌となす。漢名、獲留。異名「わたたび」。

例句

木天蓼の花　またたびに花見顏なる小猫哉　存義（俳句大觀）

木天蓼　木天蓼を傳うて踰ゆる小谷かな　晩霞（にひはり）

參考　またたび　Actinidia polygama, Miq.（さるなし科）山地に生ずる蔓性の落葉灌木にして、雌雄異株なり、葉は楕圓形にして尖り、鋸齒を有す、六七月頃葉腋に花梗を出し、一箇乃至三箇の白花を開く、五瓣花にして梅花に似たり、常に下向して開く、花時に梢葉白色に變ず、花後指頭大にして鋭頭長楕圓形の漿果を結び、熟して黄色を帶ぶ、蟲の入りたるものは凸凹ある圓形を呈す、果實は又藥用とし又鹽漬とす、味辛し、莖葉果實とも大に猫の好むものなり。

山椒の花　はじかみの花

季題解説　山野に自生する落葉灌木なれども通常人家に園養さる、幹の高さ丈餘にも及ぶものあり、多くの小枝を分ち枝上に刺をもつ、葉は葉だちの羽狀複葉にて多くの鋸齒ある小葉より成る、晩春綠黄色の小花を葉腋に簇がり咲く、後ち實を結ぶ。辛味と香氣あり。花實共に煮て食ひ、嫩葉は「きのめ」とて調理に用ふ。

例句

はじかみの花　はじかみの花や下枝の摘みあらし　圭岳（同人）

實作注意　山椒の花、古くは夏季と定めあれど、實は春季のものとす。古名を「はじかみ」と云ひ、秦椒とも書す。又「花山椒」と云へるは實山椒の若きもの、調理用の語とす。

卯の花

空木の花　花卯木　垣見草　潮見草　夏雪草　初見草　雪見草　道求草　水晶花　溲疏　更沙うつぎ　八重うつぎ　口紅うつぎ　丸葉うつぎ　山うつぎ　姬うつぎ　裏白うつぎ　日光うつぎ　初卯の花　卯の花月夜　卯の花垣

古書校註　【滑稽雜談】　大和本草に云、空木、四月に白花を開く。卯の花と云ふ。古歌に多く詠ぜり。漢名未レ詳。其葉は雨々相對す。長枝多し。實は胡椒に似たり。其樹高さ四五尺に不レ過。其木、中空虛也。（一）木理細膩（二）也。用レテ

之器とし、木釘とす。(註)(三)今按に八雲御抄並に藻鹽草には卯の花を草の部に注せり。花木と草の兩種侍るにや。(註)連俳いづれも木の部と定められたり。

【山の井】 卯花は波にも見たてゝ、兎のはしるかともいひ、魚も木にのぼれなどもいへり。つぼめるを三か月の影かといひ、ありかゝるを月蝕にやとも見なす。ねこねうつぎの花は色々にさくなれば、紅の雪もまじるかとうたがひなど、もはら月雪に見なせば雪月花一度に見るともいへり。

【三才圖會】 楊櫨、卯の花と云ふは宇夏木の花の略也(註)數種あり。山空木、箱根空木、三葉空木共に山中に之あり。人籬垣に植る者は、山空木、箱根空木也 皆中空なる故、空虚木と名く。

註 (一)木の心ながらになつてゐる。(二)きめがこまかになめらかな事 (三)以下其[illegible]の自說也。

【季題解說】 空木の花の略なり。山野に自生し枝を多く分つ落葉灌木、庭園にも栽培し生垣等になすもの。高さ普通は五六尺なれど時に丈餘に及ぶものあり、葉は對生し、尖れる長卵形にして細かき鋸齒あり。五月の頃白色五瓣の花を五六寸の穗を出して開く、實は黑く小さし。又重瓣のもの、紅色のもの等あり。材は堅くして木釘・楊子・春口等に用ひられ、實は君仙子と稱し、[illegible]に和して[illegible]の藥とす。空木の種類の主なるものを擧げれば、

▽さらさうつぎ やへうつぎ、くちべにうつぎとも稱し、花は菊の小頭花に似外淡紅内白又は雪白等あり。

▽まるばうつぎ やまうつぎとも云ひ山地に自生する二尺前後のもの。

▽ひめうつぎ 京都・伊勢・日光又は美濃・信濃・九州等の山中に產する高さ三四尺のものにして、五六月頃雪白色の小花を攢簇す。

▽うらじろうつぎ 產地は箱根及び同國。につくわううつぎ 產地は日光・武藏の三峯山等あり。

【[illegible]】 此木の幹枝は空洞なるより「空木」といはれ、異名に垣見草・潤見草・夏雪草・卯見草・雪見草・夏木草等あり、又方言にはうつけ(土佐)・あさつぼ(近江)・ごきたて(近江)・はめき(薩摩)等異名多し [illegible]箱根空木の花[illegible] 毒空木の花[illegible]

【例句】

卯の花

卯の花も母なき宿ぞ冷まじき　芭蕉(續虛栗)
卯の花やくらき柳の及ごし　同(炭俵)
[illegible]に卯の花[illegible]なみたかな　同([illegible])
うの花やいづれの御所の加茂詣　其角(五元集)
卯の花や縞から山の道のくま　同(同)
[illegible]て夜卯の花を[illegible]けり　同([illegible])
卯の花も白し夜半の[illegible]　青木([illegible])
[illegible]の花に[illegible]　去來([illegible])

うの花の絶間たゝかん闇の門　去來（去來發句集）
卯の花も海のかざりや朝熊山　同（同）
卯の花に五日も月の定まらず　杉風（杉風句集）
卯の花やちぎれ〱に雲の照り　支考（蓮二吟集）
卯の花や夜深に繋ぐ市の牛　同（同）
山かげで卯の花咲きぬ須磨明石　同（同）
卯の花に新り過たる曇り哉　同（同）
卯の花や其垣ねとは見えざりし　也有（蘿葉集）
卯の花や雨のあがりの杏の刎　楚舟（別座敷）
うの花や貫布禰の神女の練の袖　蕪村（新花摘）
卯の花のこぼるゝ蕗の廣葉哉　同（句集）
うの花や庵へ寐にくる小商人　同（新五子稿）
卯の花や妹が垣根のはこべ草　同（落日庵句集）
卯の花やけふは音なきわらひ病　同（同）
卯の花ははまりこくらの垣根哉　太祇（太祇句選）
卯の花に加茂の酸莖のにほひ哉　几董（井華集）
うのはなに寒き日もあり山里は　同（同）
卯の花や茶依作る宇治の里　召波（春泥發句集）
卯の花に貴舟のみこの篝かな　同（同）
うのはなやかきあげ城の湛水　同（同）
うのはなの中に崩れし庵かな　樗良（樗良發句集）
卯の花の中行袋のしづく哉　曉臺（曉臺句集）
卯の花の草にかゝれりにはか水　同（同）
うの花や籬を見こしに夜の海　白雄（白雄句集）
卯の花にしめつぼくなる疊かな　一茶（九番日記）
うの花に一人きりの社かな　同（おらが春）
寐所見るほどに卯の花明りかな　同（同）
卯の花の葉も見がてら茶振舞　乙二（をのゝえ草稿）
うの花や振つて投げこむ松明殼　巣兆（曾波可理）
卯の花や物なつかしき古部　蒼虬（蒼虬翁發句集）
卯の花や人がこぼして溢れぐせ　梅室（梅室家集）
卯の花や風腥き磯山家　成美（いかに〱）
卯の花や迷ひ子戻る里の家　同（谷風景）
卯の花や傾城町へ背戸づたひ　虎等（焦尾琴）
卯の花や大工出さうな川手水　虚白（蘿首途）
背闇や卯の花白き水溜り　吟江（推蔵日記）
踏歛て卯の花つかむ夜道哉　樗堂（俳句全集）
曇る日や卯の花匂ふ小野の里　初音（鶴音）

卯の花の垣根に入るや豆腐賣　布平（三崎志）
押しあうて又卯の花の咲きこぼれ　子規（全集）
卯の花のこぼるゝ瀑の生贄哉　月斗（同人）
聲もなく兎うごきぬ花卯木　嵐雪（玄峰集）

花卯木

参考 うつぎ　一名　うのはな　Deutzia scabra, Thunb.（ゆきのした科）山野に多く自生する落葉灌木なり、多く叢生し、高五六尺を常とす、葉は長楕圓形にして尖り、短き柄を以て對生し、邊緣に細鋸齒を有し、表裏とも甚だ粗澁す、五六月の候花穗をなし白花を開く、五瓣にして、花後花柱を存せる小なる圓き實を結ぶ、材を以て木釘を造る。

箱根空木の花（はこねうつぎのはな）　箱根卯の花　七變化　錦うつぎ　錦帶花　十姉妹

古書校註【滑稽雜談】俗に箱根空木或は山空木と云へり。又一種、小空木花紅白の者、京畿に多し。是を山空木と云ふ。（略）篤信が云ふ、是十姉妹に似て牡荊の類也といへり。

季題解説　山地に自生する落葉灌木、往々庭園にも栽培す。高さ丈餘にも達し、葉は楕圓形にて尖り鋸齒ありて對生す。初夏の頃、枝梢の葉腋に五裂筒狀の多くの花を簇らす、花の色は初め白色なれども、漸次紅紫色に變じ、一株に白花紅紫花相混じて美し、依て「七變化」とも稱することあり。また箱根山中に多く生ずるより「はこねうつぎ」又は「はこねうのはな」と云はれたるも、實は同山のものは別種「にしきうつぎ」なり。錦帶花

【同前】卯花か

例句
箱根空木の花　箱根卯木花は盛を昨かな　正長（毛吹草）

毒空木の花（どくうつぎのはな）　いちろべごろし　ねずみうつぎ　うまぶらひうつぎ　いわしやかず　しまうつぎ

季題解説　山野河原等に自生する落葉灌木、高さ四五尺に達し、葉は長卵形にして先きとがり對生す、初夏葉に先ちて穗形に細かき黄綠色の花を列

ぶっ實は豆大にして紅色、熟すれば紫黑色となる、激毒あり　依つて「いちろべころし」「ねずみうつぎ」の奇名ありて異名も多し。

【例句】

毒空木の花　毒空木牛遠ざけて繋ぎけり　夜臼（同人）
下刈のとゞかぬ山や毒空木　涼舟（同）

梔子の花（くちなしのはな）

巵子（しし）　山梔子（さんしし）　黄梔花（くわうしくわ）　山黄枝（さんくわうし）　林蘭（りんらん）

【古書校註】

【滑稽雜談】時珍本草に曰、巵は酒器也。巵子（一）之に象る、故に名く。俗梔に作る。（略）葉兎の耳の如く、厚くして、深綠。春榮え、秋悴つ。夏に入りて花を開く。大さ酒盃の如し。白弁黄蕋。

註（一）くちなし。くちなしの花酒盃に似る所から巵子花と名くと。

【季題解説】暖國の山地には自生のものあれど多くは庭園に栽培せらるゝ常綠灌木。樹の高さ一丈にも達し、葉の先尖り長さ二三寸の長橢圓、暗綠色にして光澤あり、柄は短かく對生す。初夏、梢頭に徑一寸許り、香氣ある六裂の白き花を開き、凋む頃には淡黄に變色す、後に赤く黄ばみたる六稜の實を結ぶ。中に仁あり、染料を採り、藥に用ゆ。花は酢味噌にして珍味あり。

【實作注意】漢名「巵子」、巵は酒を容るゝ器なり、此果實の形巵に似たるより巵子或は梔と云ふ。所謂名花十友中の禪友に當てらるゝ花なり、又花言葉にても純潔・清淨を意味される。この果實の乾したるものを「山梔子」と稱へ、黄梔花・山黄枝・林蘭などと書さる。

【例句】

梔子の花　口なしの花さくかたや日にうとき　蕪村（新花摘）
口なしの花はしぐと咲きにけり　浮石（類題發句集）
薄月夜花くちなしの匂ひけり　子規（全集）
くちなしの一片解けし馨かな　よりえ（ホトヽギス）

【参考】

くちなし（Gardenia florida, L.）（あかね科）暖國の山地に自生あれど多くは庭園に培養せらるゝ常綠灌木、莖の高さ六七尺、葉は對生し長き橢圓形にして全邊光澤あり、兩葉柄の間に尖りたる葉間托葉あり、夏日香氣ある白色大形の花を開く、花冠は質厚くして六片に裂け、各裂片は蕾の時間旋襞に排列す、果實は橢圓形にして、兩端尖り六縱稜あり、宿存せる六萼片あり、熟すれば黄赤色を呈す、果實を採て染料又は藥用に供す。

柾の花（まさきのはな）

【季題解説】普通庭園に栽培せられ生籬等にせらるゝ常綠灌木。葉は橢圓對生、滑かに厚く鈍き鋸齒あり、四時凋まず、七月頃葉腋に枝を分ち綠白色

小形の花を聚め開く、後ち蒴果を生じ裂けて赤色の種子を出す。花よりも美し。[illegible]秋　柾の實[illegible]

例句　柾の花　つくばひや斑入柾の咲きこぼれ　圭岳（同人）

参考　まさき　Euonymus japonica, Thunb.（にしきぎ科）海邊に近き地に自生すれども通常庭園に植ゑられ若くは籬とせらるる常綠灌木なり、葉は對生し平滑にして厚く、楕圓形或は長楕圓形にして鋸齒あり、七月頃葉腋に淡綠色四瓣の小花を聚繖狀に着く、後蒴果を生じ熟して四裂し赤色の假種皮ある種子を出す、變種に葉に白斑を有するものあり、特に觀賞に適す。

青木の花（あをきのはな）　桃葉珊瑚

季題解説　山野に自生する常綠灌木なれど、好んで庭園に栽植さるる本邦特産の植物、枝葉共に青く、葉長楕圓に尖りて鋸齒疎らし、夏の初め紫褐色四瓣の小花を開く、花後[illegible]に似て細き實を結び冬より翌春にかけて紅熟す。葉に白斑のある變種あり。

参考　あをき　Aucuba japonica, Thunb.（みづき科）山野の稍陰地に自生する常綠灌木なれども、之を庭園に植うること多し、樹皮始めは綠色にして平滑なれども後にコルク質に變ず、葉は長楕圓形にして、長さ五六寸に達し、厚くして光澤を有す、雌雄異株なり、春日枝梢に花穗を出し、多數の紫褐色四瓣花を開く、花後楕圓形の實を結び冬月紅熟して美なり、園藝品には葉に斑入の者あり。

樒の花（しきみのはな）

季題解説　山地に自生する常綠の喬木、樹皮黑く香氣あり、葉は先端尖り[illegible]長楕圓、[illegible]三四月の頃葉腋に淡黄色の小花を開く、花後實を結ぶ、香ひあれども有毒なり、枝葉を佛前に供し、葉と樹皮とは[illegible]して抹香を製す。

季題詳記　樒の花は夏季のものに定められたれど、實は春季を正しとす
漢名、莽草

例句　[illegible]しきみ花さく雨の中　紫村（[illegible]花　選）

深山樒の花（みやましきみのはな）

季題解説　山地に自生する常綠[illegible]、樒の一種、高さ一二尺、形狀常の樒に似て[illegible]月頃小白花を開き、後ち實を結び冬の頃紅熟す。

【實作注意】　深山樒は實の紅熟期を季とする定めなれば

　　雪にさへ隱れぬ深山樒哉　　　巴　人（類題集）

などとある如く單に深山樒と云へば冬季となるなり。【[illegible]】橘の花ノ[illegible]

【例句】　深山樒の花

　　花もてる深山樒や樒の下　　　夜　臼（同　人）

【參考】　みやましきみ　Skimmia japonica, Thunb.（へんるうだ科）

深山中樹下に自生する常綠灌木なり、高さ一二尺に達し、葉は革質常綠にして、互生し枝に上稍對生又は輪生狀をなして着き、長楕圓形にして、全邊なり、葉中に小なる油點を散布す、四五月頃枝端に圓錐花序を頂生し、白色小形の花を着く、雌雄異株なり、果實は漿果にして、熟すれば赤色を呈す、有毒植物の一なり。

金雀花（えにしだ）

　　金雀枝（えにしだ）

【季題解説】　庭園に栽培する灌木、高さ普通四五尺、年經たるは一丈にも及ぶ。枝細く長く直立に叢生す。葉は三個の小葉よりなる複葉にて極めて小さく一二分に過ぎず、初夏、葉腋に黄金色蝶形の花を綠枝綠葉の間に咲きならべ、甚だ美し。花の後莢を結ぶ。

【例句】　金雀花

　　金雀花に照りつ曇りつ島一日　　　水　青（同　人）

【參考】　えにしだ（Cytisus scoparius, Link.（まめ科）　歐洲原産にして通常觀賞用として栽培する常綠の灌木なり、莖高さ四五尺なれども年を經れば丈餘に達し、葉は三箇の小葉より成れども、形極めて小く、且葉を生ずること甚だ少し、然れども、細幹叢生して常に深綠色を呈し、以て同化作用を營む、初夏葉腋に一二花を開く、黄色蝶形花にして形は大なり、花後兩緣に毛ある莢を結ぶ。

南天の花（なんてんのはな）

　　なるてん　なつてん　南天燭（なんてんしよく）　南天竹（なんてんちく）　天竹（てんちく）　南燭（なんしよく）　惟南木（ゐなんぼく）

　　白南天（しろなんてん）　藤南天（ふぢなんてん）　縮犬南（ちぢみなんてん）　細葉南天（ほそばなんてん）　斑入南天（ふいりなんてん）　蔓南天（つるなんてん）

【古書校註】

【三才圖會】　畫譜に國天竹と名く。其葉儼に竹に似たり。子を生じ、穗をなす。紅なること丹砂（[illegible]）の如し。久しきを經て、脫ちず。之を庭中に植れば火災をさく。甚驗あり。（略）山陽の地には大木あり。作州土州の山、長二丈餘、太さ周り一尺二三寸の者あり。枕に作る。俗耶鄲の枕と謂る。（略）遠州一宮は滿山皆南天にて實の盛り甚美なり。

【俳諧歳時記】　俗傳ふ、南天は凶夢を消滅するよしいへり。故に女子、鏡の背に此葉を挿む。是鏡は女子且周の具なるを以つて也。後遂に背面多く南天を鑄ること、唐山（[illegible]）の鏡に菱花を用ふるがごとし。

【季題解説】 （一）[illegible]と硫黄の和せるもの、米粉の[illegible]に達するを云ふ。（二）[illegible]（二）南天に同じ。
通常庭園に栽植せらるゝ常緑灌木、高さ四五尺を常とすれど時に丈餘に及ぶものあり、葉は羽状複葉にして小葉の多き恰も棟に似たり。初夏の頃より枝頭に長き穗を出して枝を分ち、小形白色の花を開く、實は丸く小さく、冬熟すれば赤色となりその花よりも美し。品種も多く白南天は實白く、藤南天は實藤色、葉の縞あるを縞南天、葉細きを細葉南天、葉に斑あるを斑入南天、葉細く軟かきを蔓南天等といふ。

【季題雅語】 一に「なんてん」「南天燭」「南天竹」と云ひ、漢名、天竹・南燭・雅南木等云ふ。　[illegible]秋―南天實

【例句】

南天　南天の花うちこぼす夜雨哉　只泊（東華）
南天や米こぼしたる花のはて　也有（蘿葉集）
南天や雪の花ちる手水鉢　巴静（類題發句集）
南天の花も咲きけり一夜鮓　萬艸（古人五百題）

忍冬の花（すひかづらのはな）

吸葛（すひかづら）　忍冬（にんどう）　鷺爪花（さぎのつめ）　金銀花（きんぎんくわ）　忍冬茶（にんどうちや）

【古書摘註】 【[illegible]】 陶弘景が本草に曰、此草藤生す、冬を凌ぎて凋まず、故に忍冬と名く。時珍が本草に曰、（略）花初て開く者、蘂瓣倶に色白し。二三日を經れば則黄に變じ、新舊相參り、黄白相映ず。故に金銀花と呼ぶ。[illegible]大和本草に曰、諸のかづら皆右にまとふ、只忍冬の蔓左にまく、故に左纏藤と云ふ。

【季題解説】 一に「にんどう」とも云ふ。山野に自生する蔓だちの灌木。時に觀賞用とす。葉は長楕圓形對生、冬に至るも凋まざるより「忍冬」の稱あり、初夏葉の腋に莖にある鷺の爪に似たる筒形の花を開くより「鷺爪花」とも云ふ。花の色最初白色なれども後に淡黄色に變ずるより「金銀花」の名もあり、又花に蜜ありて甘し、小兒よく之を取りて吸ふにより「吸葛」の名稱となる。葉は乾かして茶の代用とす「忍冬茶」之れなり。花言葉は「友愛」を意味す。

【例句】

忍冬　蚊の聲す忍冬の花の散るたびに　蕪村（句集）
忍冬の花[illegible]おらむくもで哉　白雄（白雄句集）
忍冬の[illegible]を賣る[illegible]　子規（全集）
金銀花　見る人のみるまゝにせよ金銀花　曉臺（曉臺句集）

紫陽花（あぢさゐ）

あづさゐ　てまりばな　かたしろぐさ　しちだんくわ　よひら　はでよひら　七變化（しちへんげ）　繍毬花（しうきうくわ）　刺繍花（ししうくわ）　繍毬花　八仙花（はつせんくわ）　瓊花（けいくわ）

澤紫陽花（さはあぢさゐ）　こがく　やにがく　しちだんくわ

古書摘註

【滑稽雜談】　韻語陽秋に曰、山花あり、色紫にして氣香く穠麗愛すべし、人其名を知るなし　白樂天其名を標して（一）紫陽と曰ふ。之を記す（二）に詩（三）を以つてす。或は繡毬草と名く。

【年浪草】　和漢三才圖會に曰、其莖叢生し、葉は繡毬の葉に似て、五月花を開く。云々。此花も繡毬花に似て、淡碧色。一名與比良乃波奈と曰ふ。

註　（一）記して。（二）記錄するのに（三）何年植之向仙檀早晩移栽到梵家雖在人間不識與君名作紫陽花（白氏文集）

季題解説　觀賞用として庭園に栽培さるゝ落葉灌木。莖の高さ四五尺にも達し、多くは叢生せり。大形の葉は對生し先の尖れる卵形或は楕圓形にして粗らき鋸歯あり、初夏の頃四片の小さき花の多數相聚つて毬をなして開く、その小花は白・碧・淡紅等に次第に變化するより「七變化」の稱あり。なほ「あぢさゐ」の種類には、さはあぢさゐ・こがく・べにがく・あぢさゐ（普通のもの）・てまりばな（一般稱とは異つた名をいふ）・しちだんくわ等あり。又しばあぢさゐ（こあぢさゐ）・たまあぢさゐ・やはずあぢさゐ・つるあぢさゐ（ごとうづる）、等は「あぢさゐ」屬中別種の植物なり。

實作注意　古名「あづさゐ」と云ひ、一名「てまりばな」「かたしろぐさ」「しちへんぐさ」など稱へ、和歌にては多く「よひらのはな」と詠めり。漢名、紫繡毬・八仙花・瓊花等に云ひ、花言葉に「御身は冷淡」とあり。

例句

紫陽花

紫陽花や帷子時の薄淺黄　芭蕉（陸奥鵆）
紫陽花や藪を小庭の別座敷　同（別座敷）
あぢさゐやひゑも蚯蚓のくもり聲　曉臺（曉臺句集）
あぢさゐやよれば蚊の鳴く花のうら　同（同）
あぢさゐに喪屋の燈うつるなり　同（同）
紫陽花やおもひ忘れし跡の色　同（同）
紫陽花や都を雨の木の間より　士朗（枇杷園句集）
紫陽花や筧の水の澄るまで　蓼太（蓼太句集）
紫陽花のかはりはてたる思ひ哉　白雄（白雄句集）
あぢさゐや舟も通はぬ元在所　蒼虬（蒼虬翁發句集）
紫陽花や溜てはこぼす雨の音　同（同）
紫陽花の大一輪となりにけり　嘯山（俳諧新選）
あぢさゐの花いろ〳〵に雨や倦　貞知（句鑑）
あぢさゐや嵐に動く窓の下　雪臺（鶉音）
紫陽花や朝紫に暮は何　児一（類題發句集）
紫陽花の下ゆく水や飛鳥川　蘆丸（同）

紫陽花は泡より淡し掌　米丈（鶴籠筆）
紫陽花やいづれの色に花盛　薫風（俳句全集）
紫陽花や上絵かきゐる窓の前　可亦（三千化）
紫陽花に鳥の羽のこぼれけり　成美（手習）
紫陽花のあすにどこまで道つくり　乙二（をのゝえ草稿）
紫陽花や曇りこもりゝ凄しき　青々（妻木）
紫陽花に積陰雨となりにけり　月斗（同人）

【參考】あぢさゐ　Hydrangea Hortensia, DC. var. Otaksa, A.Gray.（ゆきのした科）普通庭園に栽培する落葉灌木なり、莖の高さ四五尺にして叢生す、葉は平滑對生、楕圓形若くは卵形にして厚く、邊縁に鋸齒あり、七八月の候多數の花相集りて大なる球をなす、其殆ど總ての花は大形花瓣樣の萼を有し、美なる紫碧色を呈す、種名「オタクサ」は「シーボルト」の妻お滝さんの名より出づ。

繡毬花（てまりばな）　手毬花（てまりばな）　[illegible]（おほでまり）

【季題解説】「おほでまり」とも稱す、紫陽花に似たる觀賞用の落葉灌木、高さ數尺、葉は丸形に鋸齒ありて對生す、葉には皺ありて細かき毛をもつ、初夏の頃、多數の白き花を手毬形につけ直徑二三寸のもの。

【例句】手毬
手にとらば轉ぶべく思ふ手毬哉　寉公（俳句大觀）

【參考】てまりばな　一名おほでまり　Viburnum tomentosum, Thunb. var. plicatum, Maxim.（すひかづら科）觀賞用として庭園に培養せらるゝ落葉灌木にしてヤブデマリの變種なり、葉は對生し稍圓形にして鋸齒あり、葉面多少皺縮し毛茸を有し、裏面の脈上殊に著し、初夏多數の白色裝飾花を攢簇し、大なる球狀を呈す。

金絲梅（きんしばい）

【季題解説】自生のものもあれど多くは庭園に栽培せらるゝ半落葉の小灌木。高さ三四尺に達す、枝を分つこと、葉に柄なく長楕圓にして對生することも、未央柳に似たり、花は黄色五瓣、赤未央柳に似たれども蕊甚長からず、花内にあり。葉に一種の油を有す。【季題】未央柳は

【參考】きんしばい　Hypericum patulum, Thunb.（おとぎりさう科）高し支那原産なるべしと雖も今は山野に自生する小灌木にして久しく庭園に栽培せらる、莖の高さ三四尺にして通常叢生し、葉は對生せる無柄の長楕圓形にして、長さ七八分より一寸餘に及ぶ、夏日梢上に開花す、黄色五瓣花にして花瓣は圓卵形を呈し、光澤ありて美し、雄蕊は多數にして五體をなす。

雁皮(がんぴ)の花(はな)　眼皮(がんぴ)　かにひ

古書校註【三才圖會】俗説に云、達磨大師九年面壁の時眠らざらんと欲し、自ら上下の睫を剪り、之を棄てし地に、此草を生ず、其花肉赤色なり、以爲らく睫に似たり。因て眼皮と名く。

【滑稽雜談】歌には、かにひとよめり。拾遺集物名　わたつ海のかきなかに日のはなれ出てもゆると見ゆるは蜑のいさり(一)か　伊勢。

註（一）漁火。

季題解説 多く山地に自生する落葉灌木。高さ三四尺より七八尺、葉は卵形、枝と共に柔かき毛あり、初夏枝の端、葉の間に形丁字に似て小さき四裂淡黄白の花を開く。莖の内皮を採りて製紙の原料とす。

例句

雁皮の花　掘立の腰掛茶屋や雁皮咲く　道彦（俳句大觀）

參考 かんぴ Lychnis coronata, Thunb.（なでしこ科）支那の原産にして普く庭園に培養し觀賞に供する多年生草本なり、莖は叢生して直立し高さ一二尺に達す、葉は對生し長卵形にして先端尖り質稍剛し、夏日梢上葉腋に集りて黄赤花を開く、萼は平滑にして毛茸なく、花瓣は邊緣に不齊齒あり、花喉に鱗片を具ふ、十雄蕋、五花柱あり。

天女花(おほやまれんげ)　大山蓮花(おほやまれんげ)

季題解説 山地に自生する落葉灌木なれど庭園にも栽培せらる。葉は廣倒卵形、表滑かに裏白く微毛あり、五六月頃白色杯形二三寸の花を枝梢に開き、頗る芳香を放つ、花は常に下に向つて開き、紅き蕊を見せて花貌淸美、樹容亦悠容なり。

例句

大山蓮花　瀧しぶき大山れんげ匂ひけり　梓石（さつき）

參考 おほやまれんげ Magnolia parviflora, Sieb. et Zucc.（もくれん科）山地に生ずるも觀賞の爲め庭園に栽ゑある落葉樹なり、葉は廣倒卵形をなし下面は白毛を布く、枝梢上に白花を開く、直徑二寸許にして常に下向す、花瓣は數片ありて倒卵形をなし、雄蕋は紅色を呈す、五六月頃開花す。

女貞(ねずみもち)の花(はな)　女貞花(ねずみもち)　やぶつばき　てらつばき　たまつばき

季題解説 山野に自生するものもあれど、主として觀賞用に或は生垣等に栽培せらるゝ常綠木、高さ普通六七尺、葉は卵形對生厚くして冬青の木に似たり、冬も枯凋せず。夏日枝梢に白色の小花を簇り開く、一種の香あり。

花の後果實を結び熟すれば紫黒色となる、實の形色鼠の糞に似たると葉の冬青に似たるより「鼠もち」の名ある所。

【實作注意】 別名「たうつばき」或は「やぶつばき」と云ふ、藪椿の字を用ゐるより、春季の藪に咲きゐる椿と誤用するもの多し、（[illegible]春—椿）、

【例句】 女貞花

つくばひに落花の雪や女貞花　月斗（同　人）

藪椿門は葎の若葉かな　芭蕉（笈日記）

笠の晉目を導くや藪椿　素堂（俳諧五子稿）

七賢が植けん花や藪椿　遊林（反故集）

羽重し雨の子鳥藪椿　遊林（同　）

【參考】 ねずみもち　一名　たまつばき　Ligustrum japonicum, Th-ニニ（ひひらぎ科）山野に自生すれども、觀賞用として栽植する常綠の小木となり、莖の高さ六七尺、葉は厚く革質にして、全邊なり、夏月枝梢に小白花を圓錐狀に簇生す、花冠四裂し二雄蕊あり、果實は長楕圓形にして、熟すれば紫黒色を呈し、恰も鼠矢の如し、生垣に用ふ。

巖藤（いはふぢ）

庭藤（にはふぢ）　姫藤（[illegible]）　草藤（[illegible]）　崖豆（[illegible]）

【古書校註】 【年浪草】和漢三才圖會に曰、按るに花葉並に藤に似て、小し、三月花を開く、紫色或は白色、乃ち紫藤・白藤の二種あるが如し、云々　岩藤又草藤（略）

紫花白花の二種あり、三月より四月に至て花を開く。

【季題解說】 落葉の小灌木なれども殆んど草本の如し、野生のものなれども庭園にも栽植す、枝は細長く、葉は互生、小葉は橢圓形、葉の裏多少白味を帶ぶ、初夏の頃枝上に穗を出して紅紫色の蝶花形を蝶の如くに咲かすもの、一に「庭藤」と云ふ。

【例句】 岩藤

巖藤やとりつく、道また折坂　乙外（古今句鑑）

巖藤やちる時水の濁り哉　時習（[illegible]集）

活けてあるひ迦いはふぢは池の坊　綱女（ホトトギス）

蔓梅擬の花（つるうめもどきのはな）

つるもどき

【季題解說】 「つるうめもどき」と云ふ、山野に多き落葉性灌木、葉は橢圓形なり、五月葉腋より枝を抽き、黄綠色の細花を開く、花の後球形の蒴果を結び、熟して三裂し、紅色の種皮を表にして美し、秋の實を賞せらるゝ方普通なり、（[illegible]秋、[illegible]擬）。

【例句】 つるうめもどきの花

葉がくれに花知られずよ蔓もどき　圭岳（同　人）

茉莉花（まつりくわ）　まうりんくわ

【季題解說】一名「もつりんくわ」は木犀科のうばい屬、丈け三四尺の灌木。葉は有柄、對生又は三片輪生の橢圓形乃至廣卵形。花は淡黄白色の頂生聚繖花序、三五乃至十許花、頗る佳なる香氣を放つ。

【實際觀察】臺灣に於ては臺北近郊淡水河の兩岸に汎く栽培され、全島的には庭樹又は鉢植として觀賞せられ、臺北以外には多く栽培せるを見ず。六月花盛りの候摘みて陰乾にし、專ら包種茶の香味料として用ゐられ、又料亭の食卓に飾られ、或は婦人の頭髮に飾らる。支那婦人は首飾とも爲すと聞けど、臺灣にては之を見ず。單に簪と爲す。殊に五十歲以上の老婦の頭髮には種々の生花が常に簪され、就中茉莉・含笑・樹蘭などの花を愛好するが如し。

【例句】

茉莉花　籠に滿つ茉莉花白し夕渡舟　輝石（同人）

淡水河畔　茉莉花の匂へる中や舟下る　原人（同　）

凌霄の花（のうぜんのはな）　凌霄（のうぜん）　凌霄花（りようせうくわ）　のうぜんかづら　のせう

【古書摘註】【滑稽雜談】時珍ガ草に曰、紫葳、一名凌霄。俗赤艷なるを謂て、紫葳と曰ふ。葳は此花、赤艷なる故に名く。（略）夏より秋に至りて、花を開く。（略）のうぜんとは凌霄を訛る也。

【季題解說】「のうぜんかづら」の略稱。多くは觀賞用として庭園に栽培せらる蔓性落葉木。莖は處により氣根を出して樹木・墻垣等に攀ち上り、高さ數丈に及ぶことあり。葉は大形の鋸葉ある羽狀複葉對生なり。七八月頃、黄赤色の五裂合瓣の大形花を開く。有毒植物なり。

【[illegible]】漢名、紫葳・凌霄花。往昔より此花を嗅けば腦を害ひ、その露眼に入れば盲ひすと云はるれど、美しきより一般に愛好され、花言葉にては「名譽」を表はす意となす。「のせう」と訛る地方あり。

【例句】

凌霄　凌霄や木を離れては何處這ん　桃隣（古太白堂句選）

凌霄や水なき川を渡る日に　蒼虬（蒼虬翁發句集）

凌霄の暑さや非時に居はる時　榮木（八仙傳）

凌霄の咲や田中の藥師堂　露蕉（東華）

家毎に凌霄咲ける温泉かな　子規（全集）

凌霄花　行水にうつりてあつし凌霄花　菊陀（三千化）

吹のぼる梢たのもし凌霄花　盧元（八仙傳）

【參考學名】のうぜんかづら（Campsis chinensis, Voss.（のうぜんかづら

科）支那原産攀登性落葉の藤本なれど觀賞用として庭園に栽培し、時に逸出して野生をなす、莖は他物に攀縁して氣根を出し高さ數丈に及ぶことあり、葉は對生し羽狀複葉をなし、小葉は卵形にして鋸齒あり、七八月の候黃赤色の大花を開く、萼は綠色五裂し、花冠は合瓣にして稍唇形を呈し二强雄蕋と一雌蕋とを有す、花に有毒成分を含む。

薔薇(ばら)　さうび　しやうび　ゆききさほ花(ばな)　西洋薔薇(せいやうばら)

古書校註　【清輔雜談】歌には「さうび」と讀めり、源氏賢木の卷に「はしのもとのさうび」ト有リ、又ゆききさほ花の異名傳ふ、（略）躬恒抄、夏といへばさかりになりぬはしの本のあなたこなたのゆきゝさほ花　赤人。

【三才圖會】金櫻子、山林の間に叢生す、大に薔薇に類し、刺有り、四月白花をひらく、夏秋實を結ぶ、黃赤色、かたち小き柘榴に似て長し

季題解説　俗に西洋ばらと云へるもの　庭園に溫室に普く栽培され、芳香をもちて花姿の艶麗なるより汎く愛好せらるゝ灌木　小葉は卵圓形にして鋸齒あり、花は色も形も多種多樣にして園藝變種頗る多し、春秋に咲くもの四季共に咲くものもあれど、その多くは夏期を開花期とす。薔薇。

實作注意　此花の栽培は世界に於て最も古きものゝ一にして希臘羅馬時代より既に賞讚の記錄ありて、彼斯の神話にも傳へらるゝものにして、愛情、貞淑の象徵として戀愛を意味する花とされ、花言葉多し、紅きは貞節・戀とし、白きは尊敬、紅と白は情火・結合、紅き蕾は純潔、可憐、白き蕾は處女を意味す　（四）植物（野茨）　玫瑰（三）

例句

薔薇　夕風や白薔薇の花皆動く　子規（全集）
薔薇の香の紛々として眠られず　同（同）
薔薇胸にピアノに向ふ一人かな　同（同）
薔薇剪るや戀しき人の鋏も　虚子（ホトトギス）
さうび　一輪に並べて多きさうび哉　青々（妻木）

野(の)茨(いばら)　茨の花　花茨　うばら　いばら

季題解説　原野に自生する落葉灌木、幹は細くして蔓狀をなし、多く枝を

分ち、高さ三四尺を常とすれども時に七八尺に達することあり、枝幹に刺多し、葉は互生せる羽狀複葉、小葉は卵形鋸齒あり、初夏の頃五瓣の白花を開き香氣あり、花の後實を結び、秋に至りて紅熟す、恰も雨天の如し、多く「花茨」と詠まるゝもの、亦略して「茨」といひ「うばら」と轉訛す〔季題〕植物　薔薇ば

〔例句〕

花茨

花いばら故鄕の路に似たる哉　蕪村（五車反古）
愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら　同（句集）
山吹の卯の花の後や花いばら　同（遺稿）
袖かけて子供の泣くや花茨　五明（類題發句集）
花茨繩打舟のすれ下がる　月斗（同人）
花茨咲く野はるけき曇かな　同（同）
灯ちらちら茨の花垣たそがるゝ　子規（全集）
ことごとし茨の花垣誰家ぞ　保吉（類題發句集）
道のべの低きにほひや茨の花　召波（春泥發句集）
路たえて香にせまり咲くいばら哉　蕪村（句集）
夕立に猶匂ひ出るうばら哉　不中女（北の山）

〔參考〕いばら　うばら　のいばら　Rosa multiflora, Thunb.（いばら科）原野に自生多き落葉灌木、幹は細くして建長し、通常高さ三四尺に達す、枝に多く刺を密生し、葉は羽狀複葉にして毛を生じ、通常五箇又は七箇の小葉を有す、初夏、枝梢に白色圓錐狀をなせる花を開く、五瓣にして芳氣あり、秋日紅實を結ぶ。

菝葜（さるとりいばら）の花（はな）

さるとり　おほうばら　もかきばら　うぐひすのさる　わのさんきらい　山歸來（さんきらい）

〔古書校註〕【菜草】　わくかせわ　菝葜さるとりいばらなり、山野に多く生ず。葉は柿に似て刺あり、筑紫の俗かめいばらといふ。

〔季題解說〕「さるとりいばら」屬の一種にして、山野に自生する蔓性の灌木、長さ六七尺より丈餘に及ぶものあり、莖は滑かに堅く、多く枝を分ちてゆがみ、枝に刺を生ず、葉は柿の葉に似て甚だ滑かく圓形又は橢圓形にして互生し、葉柄每に二本の卷鬚ありて他物に絡み上る。花は初夏の候、新葉の葉腋に花莖を抽きて六瓣黃色の小花を簇り開く。後豆ほどの實を結び秋に至れば紅熟す。地方的に異名多し。試みに次に掲ぐれば、わさんきらい・いびついばら・かきいばら・かめいばら（筑前）、からたちいばら（讃岐）、がんたちいばら・ぶんたち（伊勢）、ゑびいばら・さるかけいばら（越後）、がんらいいばら（能登）、さるとりいぎ（周防）、うまがたぐい（備前）、かたらぐい（安藝）、

かこばら(上總)等。

實作注意 一般に「さるとり」と約し、又「山歸來」と云へど正しくは「わのさんきらい」と云ふ也。漢名、菝葜・芭葜・鐵菱角とあり。

佛桑花（ぶつさうげ）

ぼさつばな　琉球むくげ　扶桑　福桑　朱槿　赤槿　照殿紅

季題解説 我國にては盆栽品として珍重される不耐冬性小灌木。高さ二三尺、葉は卵形にして先端尖る、粗らき鋸齒あり。夏秋の候、葉腋に形ち木槿に似たる美しき花を朝に開き夕に萎む。花の色普通赤色なれど栽培變種には白・黄・紫あり且つ八重咲のものもあり。

實作注意 此花もと琉球渡來のものなるより「琉球むくげ」と云ひ、又「ぼさつばな」とも稱ふ。漢名、扶桑・福桑・朱槿・赤槿・照殿紅等に書さる。

例句
佛桑花　よく馴けるヒヨコ愛らし佛桑花　零餘子（枯野）

澤塞の花（さはふたぎのはな）

季題解説 はいのき科に屬する落葉灌木、山林中に生ず。多く分枝して倒卵形の葉を互生す。葉は常に粗澁し、緣邊に小鋸齒を有す。五月頃、新葉と共に圓錐狀の穗をなして多數の花を叢集す。花冠深く五裂し多雄蕋あり、花色は白色。花後歪球形の小果を結び、秋日熟して藍色を呈す。

例句
澤塞の花　澤塞登山の杖に散らしけり　圭岳（同人）

繡線菊（しもつけ）

古書校注 【平漢草】大和本草に曰、繡線菊、小木なり。叢生す。四月早く萌生す。四月花を開く、あつまり開く。盛久し。花紅白あり。淡紅なり。愛すべし

季題解説 山野に自生する落葉の小木本。夏日莖の頂に淡紅色又は白色の五瓣花を傘狀に簇り開く。時に庭園の植込にも植はる。

例句
しもつけ　しもつけを地に並べけり植木賣　青々（妻木）

參考 しもつけは Spiraea japonica, L. f.（いばら科）山野に自生する落葉の小灌木なれども、また庭園に栽培して觀賞用に供せらる。莖の高さ三尺、葉は長卵形、若しくは廣披針形にして尖鋸齒を有す。夏日莖頂に淡紅色又は白色の小花を繖房狀に簇生す、花蕊にして長き雄蕊あり

杜鵑花

五月躑躅　山躑躅　山石榴　あいつ

古書校注 【滑稽雜談】白花き、杜鵑花是れ也、初夏より咲出して既に一季となれ

ば、五月躑躅と云ふを略して(二)さつきと呼ぶならし。

【三才圖會】山躑躅・山石榴・杜鵑花・和名阿伊豆也。之今云ふ左豆木(略)四月始て開き、五月盛なりとなす。(三)人五月を呼び、さつきと稱す故に之を名く。

註 (一)五月 (二)さつきの由來兩書異なる

季題解説 常緑の小灌木、野生のものは溪畔の巖間等にあれど、普通には庭園に栽培す、高さ三四尺、葉は狹長にして小さく、枝上に繁く互生す、花は他の躑躅類に遲れて開き、小枝頭に一花づゝ躑躅に似たる紅紫色の五裂のものを著く。一時に咲かずして花期長し。

實作注意 陰暦五月(早月)を開花期とするより「さつき」と名づけ「五月躑躅」の稱あり、又杜鵑の鳴く頃なるより杜鵑花の謂なり。

例句
杜鵑花　さつき咲く庭や岩根の黴ながら　太祇 (太祇句選)
五月躑躅　花ばかり日の照る五月つゝじ哉　春波 (類題發句集)

參考 さつき Rhododendron lateritium, Planch. (しやくなげ科) 多く庭園に培養せらるゝ常緑灌木なれども、又往々河邊の岸上に野生す、高さ數寸乃至一二尺、葉は線狀披針形をなして、上下尖り、全邊にして枝と共に毛あり、花は六月頃枝端に出で、通常紅紫色を呈し、花冠大にして五裂し、花中に五雄蕋あり、つゝじの殿をなすは此品なり。

鬼縛の花(おにしばりのはな)　夏坊主(なつぼうず)

季題解説 山野海邊に自生する落葉灌木。高さ三四尺に達す、葉は倒長卵形、通常枝梢等に集生し、冬は梢上にあれど、夏脱落するを以て、「夏坊主」とも云ふ、花は淡綠にして沈丁花に似たり、晩春より初夏に開く。後實を結んで紅實す、實は秋なり。樹皮の纖維强靱にして抄紙の原料とす。有毒植物なり。參照 秋―鬼縛の實(オニシバリノミ)

水臘樹の花(いぼたのはな)

季題解説 山野に自生する落葉灌木、高さ丈餘に達す。枝も葉も對生し、五月頃、枝の上に二三寸の穗を出し、冬青(もちのき)に似たる小さき五瓣の白花簇り開く、實は黑く圓し。この樹に生じてその枝葉を害する形芋蟲に似たる一寸餘の蟲あり「疣取蟲(いぼとりむし)」とてその幼蟲の分泌せる白色の粉狀物を蠟に變化せしめて器物に光澤を附け又疣を治するに效あり。

例句
水臘樹の花　こぼれゐるいぼたの花の垣根かな　除夜子 (ホトヽギス)

鷹爪の花(れだまのはな)　連玉(れだま)　鶯織柳(ちようしよくりう)

季題解説 暖國にて培養さるゝ灌木、寒地にては冬日は温室に養はる、高

例句

夏萩　夏萩の花疎らかに朝の露　句佛（懸葵）
夏萩や陰なき坡の坂上る　朱由（同人）

蚊子木（ぶんしぼく）　蚊母草（ぶんぼさう）

古書校註

【采草】蚊子木・蚊母草・蚊母鳥　五雜俎　嶺南に蚊子木あり。葉冬青の如し、實枇杷の如し。熟するときは蚊いづ。塞北に蚊母草あり、葉の中に血蟲あり、化して蚊となる。

季題解説　五雜俎に「嶺南に蚊子木あり、葉冬青の如く、實枇杷の如し、熟する時は蚊出づ」「五雜俎に「塞北に蚊母草あり、葉の中に血蟲あり、化して蚊となる」とあり。蚊母樹のことならんか。【季題】秋・蚊母樹（イスノキ）

牡丹（ぼたん）

ほうたん　廿日草（はつかぐさ）　深見草（ふかみぐさ）　名取草（なとりぐさ）　照咲草（てりさきぐさ）　鎧草（よろひぐさ）　隣草（となりぐさ）　夜白草（よしろぐさ）　夜白色草（よしろいろぐさ）　花の王（はなのわう）　皇の花（すめらぎのはな）　木芍藥（きじやくやく）　富貴草（ふうきさう）　洛陽花（らくやうくわ）　百花王（ひやくくわわう）　天香國色（てんかうこくしよく）　花神（くわしん）　山橘（やまたちばな）　絶花（たちばな）　白牡丹（しろぼたん）　紅牡丹（べにぼたん）　黒牡丹（くろぼたん）　牡丹園（ぼたんゑん）　牡丹畑（ぼたんばたけ）　牡丹見（ぼたんみ）　牡丹長者（ぼたんちやうじや）

古書校註

【山の井】ぼたんは重衡（二）の形にもたとへ、（三）夢庵の名をもよせ、あかき縮のぐ、こはぜなどにもいひかけ、蝶からしゝのとびまはる心ばへ、猫せなかゝらちねぶりゐる有りさまなど、したつ。もろこしには花の王ともてはやし、牡丹は花の富貴なる物ともいへり。

【滑稽雜談】萬葉には山橘と讀り。其餘は皆深見草と詠ず。そのほか異名多し。此者和俗の賞する所、萬花の第一とし、都鄙往々に生ず。そのうへ近世賞生と云ふ事侍りて、珍花年毎に出す。是異人錄など云ふ書に、宋單父、種藝の術ありて牡丹の種を變易して色樣おなじからす。

深見草（略）和訓義解に云、此草の花、春暮より咲初て、夏に至る。春深くみるの心なり。

山橘　八雲御抄に云、牡丹一説に山橘とは牡丹也。

豐橋　先代舊事記に曰、（略）牡丹この花豔美絶倫。故に絶花（タチバナ）と云ふ。

花王　牡丹を以て、花の王と云也。

富貴草　周茂頻が愛蓮說に曰、牡丹は花之富貴なる者也。

廿日草　白氏文集（四）に曰、牡丹芳花開く。花落つ二十日。（三）一城の人皆たはれたるが如し。

夜白色草　躬恒祕藏抄に云、夜白色の草は牡丹なり。此花を天人の下りて

見給ふ也。

名取草　藻鹽艸に云、昔ある女、此花を愛しておほく植置て、晝はひねもすにながめくらし、夜は終夜風に損すべき事を歎きけるほどに、男他の心ありとて離別しけり。

註（一）重衡が、平家物語巻十（千手）に重衡を牡丹花にたとへられしと見ゆ　（二）牡丹花肖柏の事、室町末期文明頃の連歌師、大永年間歿。平生花を愛し、殊に牡丹花を好み、庭前に植えおきしと云ふ　（三）一夜の人皆牡丹の美に二十日間も心を奪はれ、花の散りおちし時、忧然として[illegible]のの漢に見えしの意

季題解説　牡丹は支那原産の落葉灌木、觀賞用として花卉中隨一のものにして、汎く園圃に栽培さるゝは人の知る所、高さ二三尺より大なるは五六尺に及ぶ、葉は淡綠色、普通二回羽狀複葉にして、小葉は二三裂して缺刻深し、五月梢上に芳香ある大形の美花を開く、その色紅・紅紫・白等或は絞に彩られ、重瓣に單瓣に甚だ多様なれども、花姿の豐麗なること洵に花の王の名に背かず、富貴の表徵として富貴草の名ある所たり。花散りて後毛のある莢を結び子實その中に包まる　種類甚だ多く數百種に上るものなり。

實作注意　牡丹は古來、菊・芍藥と共に三佳品に稱へられ詩歌に繪畫に珍重さるゝ所、漢名に、木芍藥・富貴草・洛陽花・百花王・天香國色・花神等美稱され我國の異名には、廿日草・深見草・名取草・照咲草・鎧草・鬲草・夜日草等ありて、「ぼうたん」と音便す。〔參照〕秋―牡丹の根分（ボタンノネワケ）　牡丹の接木（ボタンノツギキ）　冬―寒牡丹（カンボタン）

例句　牡丹

寒からぬ露や牡丹の花の蜜　芭蕉（別座舗）

八專[illegible]に笑ふぼたんかな　其角（五元集拾遺）

しらぬ火の鏡にうつる牡丹哉　同（同）

いにしへのならの都の牡丹持　同（同）

古寺にあり來りたる牡丹かな　嵐雪（玄峰集）

はつ鰹盛ならべたる牡丹哉　同（同）

[illegible]に牡丹をむかはもとの[illegible]哉　來山（續今宮草）

座所は花の指圖やぼたん講　同（同）

牡丹散てこゝろもおかずわかれけり　北枝（北枝發句集）

をどり子の笠並べたる牡丹哉　支考（蓮二吟集）

蠟燭にしづまりかへる牡丹かな　許六（五老井發句集）

西東六條殿の牡丹哉　同（同）

牡丹

唐戸から覗いて見たる牡丹哉　許六（五老井發句集）
一輪を蝶の吸ひあく牡丹哉　也有（蘿葉集）
蝶々の夫婦寝あまるぼたん哉　千代女（千代尼句帖）
牡丹散てうちかさなりぬ二三片　蕪村（新選）
牡丹切て氣の衰ひしゆふべ哉　同（鶉經社集）
日光の土にも彫れる牡丹かな　同（新木稿）
不動畫く琢摩が庭のぼたん哉　同（同）
金屏のかくやくとしてぼたん哉　同（同）
南蘋を牡丹の客や福西寺　同（同）
ぼたん有る寺行過しうらみかな　同（同）
やゝ廿日月も更行くぼたんかな　同（同）
方百里雨雲よせぬぼたんかな　同（同）
詠物の詩を口すさむ牡丹哉　同（同）
山蟻の覆道造る牡丹かな　同（同）
蟻蜉
蟻王宮朱門を開く牡丹哉　同（同）
廣庭のぼたんや天の一方に　同（五車反古）
波羅石　吐綺道
閻王の口や牡丹を吐んとす　同（句集）
寂として客の絶間のぼたん哉　同（同）
地車のとゞろとひゞくぼたん哉　同（同）
ありて後おもかけにたつぼたん哉　同（同）
こと草も刈捨ぬ家のぼたん哉　同（新五子稿）
虹を吐いてひらかんとする牡丹哉　同（遺稿）
みじか夜の夜の間にさける牡丹哉　同（同）
日枝の日をはたち重ねてぼたん哉　同（自畫賛）
ぼうたんと豐に申す牡丹哉　太祇（句稿）
盗まれし牡丹に逢へり明る年　同（句選）
低く居て富貴をたもつ牡丹哉　同（同）
こゝろほど牡丹の撓む日蔭哉　同（同）
門へ來し花屋にみせる牡丹哉　同（同）
牡丹一輪筒に傾く日數かな　同（同）
牡丹二代連歌は劣るあるじ哉　几董（井華集）
百雨のなき魂もゆるぼたん哉　同（同）
牡丹芳街坊主蜂にさゝれたり　同（同）
ねたまるゝ人の園生のぼたん哉　同（同）
此寺のぼたんや旅の拾ひもの　同（同）
大阪の牡丹さゝげぬ本願寺　召波（春泥發句集）

おめかけを牡丹の花の主かな　同　（同）
夜をおしむ筒の牡丹や枕上　同　（同）
賞て見しぼたんにめでて入院哉　同　（同）
御出入の李白を捜すぼたん哉　同　（同）
園廣し黄なるも交る牡丹哉　同　（同）
雨覆ひの廿日ふり行く牡丹哉　太魯　（芦陰舍句選）
牡丹折りし父が怒ぞなつかしき　同　（同）
花やかに静かなるものは牡丹哉　曉臺　（曉臺句集）
どや／＼と牡丹つりこむ塀の内　士朗　（枇杷園句集）
花はまだ雨ほしあへぬ牡丹哉　蓼太　（蓼太句集）
園くらき夜を静かなる牡丹哉　白雄　（白雄句集）
牡丹袖に連歌戻りとしられたり　同　（同）
扇にて尺を取たるぼたんかな　一茶　（九番日記）
雨の夜や鉢の牡丹の品定め　同　（同）
茶釜ほどあるかなきかの牡丹哉　巣兆　（曾波可理）
蔵の間二丁も過ぎて牡丹かな　蒼虬　（蒼虬翁句集）
四五輪に陰日向ある牡丹哉　梅室　（梅室家集）
光そふ有明月の牡丹かな　百明　（故人五百題）
青天に向って開く牡丹かな　汶郁　（[illegible]選）
凛として牡丹動かず眞晝中　子規　（全集）
牡丹載せて今戸へ歸る小舟かな　同　（同）
嶄然と牡丹伐りたる遊女かな　同　（同）
牡丹咲く賤が垣根か内裏跡　同　（同）
牡丹花を吹き撓む風や雨来だ　虚子　（ホトヽギス）

ぼうたん
ぼうたんやしろがねの猫こがねの蝶　蕪村　（新花摘）
牡丹に濺ぎし酒や馬上杯　青々　（妻木）

廿日草
深見草
散る時もあればこそあれ廿日草　芭蕉　（蕉反古）
紅や葉さへ花さへ深見草　紹巴　（ふし紀行）
かいほこれ今をむかしのふかみ草　鬼貫　（俳諧七車）

鎧草
燃たつや夕日おとしの鎧草　雅因　（新選）

白牡丹
飛胡蝶まぎれて失し白牡丹　杉風　（杉風句集）
山蟻のあからさまなり白牡丹　蕪村　（新花摘）
白牡丹只一輪の曇りかな　闌更　（半化坊発句集）
白ぼたん崩れんとして二日見る　成美　（成美家集）
篝火の燃えやうつらん白牡丹　子規　（全集）
白牡丹雨中に[illegible]て雲ふ哉　月斗　（同人）

牡丹雲
ほた[illegible]小草に露を下す也　几董　（井華集）

牡丹見
牡丹見に[illegible]すりとよき書茶哉　[illegible]　（古今句選）

参考 ぼたん（牡丹）Paeonia suffruticosa, Andr.（うまのあしがた科）支那原産にして觀賞用として庭園に栽培せらるゝ落葉灌木なり、高さ二三尺乃至五六尺に達し、葉は通常二回羽狀複葉にして、淡綠色を呈し、小葉は二三裂片をなし、又深く缺刻す、五月頭枝梢上に極めて大形の美花を開き、直徑五七寸に達す、紅色・紅紫色・白色等種々あり、根皮を藥用とす。

芍藥（しゃくやく）　花の宰相（はなのさいしやう）　夷草（えびすぐさ）　夷藥（えびすぐすり）　貌佳草（かほよぐさ）

古書校註

【滑稽雜談】董子か云、芍藥、一名將離。故に將に別れんとするに之を贈る。朱註に云、芍藥を以て贈となして、恩惜の厚を結ぶ。（略）時珍本草に曰、芍藥は猶婥約のごとし。婥約は美好の（一）貌。此草、花の容、婥約たり、故に以て名となす、（略）芍藥をもかほよ草といふ說侍る。是芍藥の義也。然れ共かほよ花は、垣津旗の事といふ。若かほよ草、かほよ花ふたつにや。

【年浪草】（花宰相）時珍が曰、群花品（二）の中、牡丹を以て、第一とし、芍藥を第二とす。故に牡丹を謂て、花王と傳し、芍藥を花相となす。（えびす草）御傘に曰、梶原性善が萬安方に、ゑひす草と付たりと云云。和名衣比須久須里より出たる名にや。

【御傘】（廿日草・ふかみ草）世上にあやまりてふかみ廿日草共云ふとて牡丹に混亂せり。何の書にも管見未知らず。（略）又說に芍藥を廿日草と云は、咲くよりちりはつるまで、見しほどに、花のもとにて、廿日へにけり此歌より云ふといへり。慥成る出書いまだしらず。惣別櫻等の花も三七日有物と申せば、芍藥にかぎりて、廿日草と云ふべきいはれなし。はつか草とよめる（三）證歌見ざらんほどは信用し難し

註 （一）有樣。（二）もろもろの中、澤山の中。（三）證據の歌を見ない内は。

季題解說 觀賞と藥用とに栽培される多年草。春宿根より莖を生じ高さ二三尺ばかり質は滑かなり。葉は互生複葉、小葉は深く三裂し光澤ある綠色なれど、綠と葉柄に稍紅色を帶ぶるものあり。初夏の候、梢上に牡丹に似たる大花を開く、色は紅・白・淡紅・紫紅のもの、又一重・八重のもの等、園藝變種多し。然れども白色の一重を以てその原種とす。

實作注意 支那北部の原種なるより「夷草」「夷藥」と云ひ、花姿の美しきより「貌佳草」と稱す。又牡丹の花の王に對し「花の宰相」とも云ふ。

例句

芍藥

芍藥や路次を開けば奥の前　支考（ありそ海）

牡丹散り芍藥開く且かな　桃英（卯辰）

芍藥に紙魚うち拂ふ窗の前　蕪村（新花摘）

芍藥は菩薩牡丹は佛かな　道立（續選發句集）

芍藥の蕋の湧き立つ日向かな　太祇（新選）
蒼なき芍藥園となりにけり　白雄（白雄句集）
五六代芍藥つくる山家かな　十朗（枇杷園句集）
芍藥にうき十藥の茂り哉　倚白（故人五百題）
芍藥や窗にさし出す馬の面　成美（谷風草）
芍藥や兵士宿とる大伽藍　子規（全集）
芍藥や倶樂部の庭の花畠　月斗（同人）
芍藥の色疲れ居り夜更の燈　太郎（同　）
花の宰相　莢や紅顏肥えし美宰相　旨原（俳句大觀）

參考　しやくやく Paeonia albiflora, Pall. var. hortensis, Makino.（うまのあしがた科）亞細亞東北地の原産にして、庭園に栽培し賞觀に供する多年生草本なり、高さ一二尺に及ぶ、根は肥厚し、莖は直立し數條叢生す、葉は分裂し、小葉は卵形又は披針形をなす、初夏莖頂に大形の美花を開く、紅色又は白色等種々の花色あり、又一重八重あり、芍藥根は藥用に供せらる。

天竺牡丹（てんぢくぼたん）　ダリア

季題解説　墨西哥原産、天保の頃渡來せしも、弘く栽培せられ、種類甚だ多し。普通に莖の高さ三四尺、枝を多く分ち葉は對生羽狀、其花の色彩の多樣と其の豐麗なると花期の長きと（初夏より秋の末に至る）栽培の容易なるより、園藝品中流行盛んなり。此の花は種類非常に多きも、左の九品種よりなる。

▽單花品種—舌狀花冠は一層に排列し、平坦にして反曲せず
▽單花カクタス品種—舌狀花冠は一層に排列し、緣部は反曲す。
▽ポンポン品種—小形の花序、合花コップ狀の舌狀花冠
▽ポンポン、カクタス品種—小形の花序、合花小形の舌狀花冠
▽ショー品種—大形花序、合花コップ狀舌狀花冠、色は單色或は緣部濃色。
▽ファンシ品種—大形花序、合花コップ狀舌狀花冠、色は二種以上なるか、緣を暈けるか或は緣に濃色
▽カクタス品種—大形花序、全花舌狀花冠にして平坦或は緣は反曲。
▽デコラチブ品種—大形花序、全花舌狀花冠、舌狀花冠の形は種々あり。
▽矮小品種—高さ一尺より一尺五六寸、舌狀花冠は一層に排列す

例句

牡丹　工場の蝶をかぶれるダリヤかな　鎭西郎（同　人）

ダリヤ　蟬澄める空の深さやダリヤ咲く　竹　朗（曲　水）

参考　てんぢくぼたん　Dahlia variabilis, Desf.（きく科）「メキシコ」原産の觀賞用多年生草本にして今日普通にダリアと稱す、春宿根より新苗を發生す、根は集合して塊狀をなす、高さは五六尺に達す、葉は對生し羽狀に分裂し、小葉は卵形にして鋸齒あり、夏より秋にかけて枝を分ち枝頭に美花を着く、花に單重八重あり、又花色一樣ならず色に紅・黄・白・赤・紫等あり。

草牡丹（くさぼたん）

季題解説　山野に自生する有毒の多年草、稍木質をなせる莖は直立して二三尺に達す、全體に毛茸多し。葉は複葉にして三小葉よりなり、小葉は卵形を數裂す、夏秋の候莖頭と葉腋とに白又は淡紫色の花を繖花序に開く。

参照　牡丹

向日葵（ひまはり）

日車　日向葵　日輪草　ヘリアンサス　迎陽花　照日葵　望日蓮　轉日蓮　西番葵　西番菊　羞天花

季題解説　菊科に屬する一年生草木、矮生のものは二三尺に過ぎざれども、長生のものは七八尺に達す。葉は圓く尖りて鋸齒あり、莖葉共に細き毛刺ありて滑かならず。炎天盛夏の頃に莖頭及枝頭に黄色菊花に似たる大形の花を開く、大なるものは徑七八寸に及ぶ、常に點頭し日に向いて移る。日廻りの名の依る所也。

實作注意　原産は北米のもの、希臘の神話にも傳へられ、花言葉に「崇拜」を意味せらる。我國にても古くより栽培せられ變種頗る多し。異名を日向葵・日輪草と云ひ、「日車」と俗稱す。漢名に迎陽花・照日葵・望日蓮・轉日蓮・西番葵・西番菊・羞天花等あり。

例句

向日葵　向日葵や遊ばせてある藏の跡　千　燈（同　人）

日車　日車の陰まはときし廚かな　支　方（同　）

日車の我れに傾く浴みかな　几　湫（俳句大全）

日車の花の雨干るほめき哉　菁　々（妻　木）

参考　ひまはり　Helianthus annuus, L.（きく科）庭園に培養する一年草本にして「メキシコ」の原産なり、莖の高さ六七尺に達す、葉は互生し心臟形を呈し葉柄を具ふ、八九月頃莖頂幷に枝梢に大形の頭狀花を開く、頭花の大なるものに至りては、直徑七八寸に達し、周圍に黄色の舌狀

花を有し、内部に無数の管状花を有す、花後多数の大なる瘦果を生ず、従来向日葵の名ありて其花日に従つて回ると思はれしが此事實全く之れなし。

葵（あふひ）

葵の花（あふひのはな）　錦葵（きんき）　銭葵（ぜにあふひ）　こあふひ　蜀葵（たちあふひ）　梯梧葵　唐葵（からあふひ）　花葵（はなあふひ）　草葵　葵　水葵（みづあふひ）　二葉葵（ふたばあふひ）

古書校註

【年浪草】本草綱目に曰、蜀葵、紫白の二種あり、白莖を以て勝れりと爲す。大なる葉、小なる花、紫黄色、其最も小さき者を鴨脚葵と名づく。（略）今（一）案るに葵は通名にして種類多し　人家往々賞するは蜀葵なり（略）草葵・たち葵此二つは亦即蜀葵也。

【三才圖會】〔蜀葵〕本草綱目、蜀葵は春の初、子を種ふ　冬月宿根より亦自ら生ず。（略）葉、葵葉に似て大なり、亦絲瓜の葉に似て歧叉あり（略）花、木槿に似て大なり　深紅・淺紅・紫黑・白色・單葉・千葉の差あり。

【滑稽雑談】〔錦葵・小葵〕格物叢話に曰、葵花の小なる者、錦葵と名づく。時珍本草に曰、（略）五銖錢の如し、粉紅色に紫の縷文あり。俗に云ふ葵く錢葵などいへる者也。〔水葵〕馬融が傳に云、鳧葵、葉圓にして蓴の如し。水に生ず。水葵と名づく。（略）〔二葉葵〕先代舊事紀に曰、時に月繭尊水任信と爲して天高田の葵を以て授けて、以て之を下し玉ふ。（略）此種中華の書に見え侍らず。我朝、山城國加茂祭に用ゆる所の葵也。此者は洛北の山に生じて他産はなき由なり。（略）此者異名おほし。其内もろかつらと云は、一説に四月中、申日、日吉祭に折れる觚を、酉日、加茂へつかはす。加茂にて葵草に取そふるをもろかつらと云ふ。

季題解説　錦葵は二に屬する葵類の稱、宿根草、莖は通常直立して枝有せず、高さ二三尺より六七尺に及ぶ、葉は鋸齒をなし互生、花は五箇の雄蕊よりなるもの、每葉腋より花梗を出して開く、花種々あり　何れも賞に栽培するもの。

△錦葵　二年生、高さ二三尺に達し、葉は五七裂、六月頃淡紅色にして紫條あるもの或は深紅又は白の花を開く、時に重瓣のものあり。

△蜀葵　多年生、高さ六七尺に達し、三五裂時に缺あるもあり、六月頃各葉腋に大形の花を開きつぎ、上部に至れば穗狀をなすに至る。花色に紅・白・紫等又重瓣のものあり。

△花葵　一年生、高さ一二尺、下葉は圓く、上葉は心臟形をなして淺く數裂す。夏日淡紅色にして優美なる花を開く。　二葉葵（三月）　黄蜀葵　紅蜀葵（[illegible]）　冬　冬葵（[illegible]）

例句

[illegible]　一もとの葵を登る山路哉　[illegible]

しのばるゝものや葵の五六月　蓼太（蓼太句集）
駕の酔葵見しより醒てけり　巣兆（曾波可理）
雨三日下葉腐るゝ葵かな　成美（杉柱）
親雛のひよこ遊ばす葵かな　同（同）
野草には長のすぐるゝ葵哉　岩泉（花つみ）

錢葵
蜘の巣のたよりとなるや錢葵　冠邦（三千化）

蜀葵
日につれて咲き上りけり立葵　闌更（半化坊句集）
咲きのぼる梅雨の晴間の葵哉　成美（杉柱）

花葵
段々に暑き日數や花葵　可成（類題發句集）
咲きつめて暮日なりぬ花葵　成美（杉柱）

参考　はなあふひ　Lavatera trimestris, L.（あふひ科）地中海附近の原産にして、觀賞用の一年草本なり、全體柔軟にして、莖の高さ一二尺、下葉は圓く、上葉は心臓形をなし、淺く數裂して邊縁に鈍鋸齒を有す、梢上葉腋に一梗をぬき夏日淡紅色の美なる花を開く。

たちあふひ　Althaea rosea, Cav.（あふひ科）小アジアの原産にして、庭園に植ゑ其花を賞する多年生草本なり、莖の高さ七八尺に達し、葉は互生し圓き心臓形をなし稜角あり、或は五七に淺裂し、葉面に皺あり、六月頃各葉腋に大形の花を開き、梢にあつては長き穂をなすに至る、又重瓣の品あり、色は紅・白・紫等一ならず、頗る美なり。

ぜにあふひ　Malva sylvestris, L. var. mauritiana, Boiss.（あふひ科）庭園に栽培する二年生草本にして、莖の高さ二三尺に達して直立す、葉淺く五七裂し鈍齒を有す、花は直徑寸許にして五月頃開花す、色は通常淡紫色にして濃紫色の脈條あり。又白色等の變種あり。

黄蜀葵（とろろあふひ）

とろろ　ねり　黄葵（おうき）　花薬草（くつやくさう）

季題解説　根を採りて糊料をつくるに栽培する一年草、莖の高さ四五尺に及び、葉は掌狀に深裂し、鋸齒ありて毛を生ず、夏より初秋にかけ黄色にして裾に紅を帯べる大形五瓣の花を開き、花後蒴果を結ぶ。

實作注意　根に製紙の糊料に用ゐる粘液あるにより「とろろあふひ」と云ひ、略して「とろろ」、又「ねり」と稱す。漢名、黄葵・花薬草あり。〔参照〕葵（アフヒ）

例句

黄蜀葵
黄蜀葵咲れば一の門閉づる　默禪（ホトトギス）

紅蜀葵（もみぢあふひ）

紅蜀葵（こうしよくき）

季題解説　庭園に栽培される多年草、葉は硬く滑かに木質狀を呈す、高さ五六尺、葉は掌狀に五裂乃至七裂し、細き楓葉の如く、長き葉柄ありて互生す。夏日、鮮明なる紅色大形の美花を開く、直徑四五寸に及ぶ。紅蜀葵

とも云ふ。 [參照] 葵(あふひ)

例句 紅蜀葵

紅蜀葵常住はだかなる畫を　亞浪 (石楠)

天竺葵(てんぢくあふひ)　ゼラニウム　洋葵(やうあふひ)

季題解説 觀賞用のもの、多年草、莖高さ一二尺、葉は心臓形にて淺き裂狀と鋸齒あり、葉質軟かく葵の葉に似て外國種なるより此名あり。夏日葉間に花莖を抽きて深紅五片の花を簇がり開く、花期長し。

實作注意 南亞弗利加の原産、我國へは維新前の渡來、「洋葵」とも書す。また「幽愁」の花言葉あり、花色を想はしむ [參照] 葵(あふひ)

例句 ゼラニウム

退院やなほ咲きつぐゼラニウム　三重女 (同人)

二葉葵(ふたばあふひ)　雙葉細辛(ふたばさいしん)　賀茂葵(かもあふひ)　葵草(あふひぐさ)　插頭草(かざしぐさ)　日陰草(ひかげぐさ)　兩葉草(もろはぐさ)

季題解説 一名「加茂葵」と稱するもの、山地に自生する多年草、莖は地上を匍匐し、節々に鬚根を出し、その所より直立せる短き枝を抽き頂に心臓形の二個の葉をもつ、四五月の頃この葉の間に紫色の一花を生ず、花は鐘形にて下を向く。かの加茂神社の葵祭に使用する葵葉は乃ちこの二葉葵なり。

實作注意 一名「葵草」「插頭草」「日陰草」「兩葉草」と云ひ、雙葉細辛と稱す。[參照] 葵(あふひ)、宗教 賀茂祭(カモマツリ)

例句 二葉葵

かけてけふ世々の葵の二葉哉　宗牧 (宗牧句帖)

姫芭蕉(ひめばせう)　美人蕉(びじんせう)

季題解説 もと琉球の産なりしも、今は觀賞用に栽培せらる。概形芭蕉に似てやゝ小さく、夏日葉心に鮮紅色の花を開く、その苞順次に重なる。葉を煎じて女の髪を洗ふに用ふ。一に「美人蕉(びじんせう)」とも云ふ。

例句 姫芭蕉

亞字欄に美人浴後や姫芭蕉　圭岳 (同人)

夏水仙(なつずゐせん)　鹿葱(ろくそう)

季題解説 自生するものもあれど多くは庭園等に栽培せらるゝ多年草、葉は花と時を異にし各地下の鱗莖より出で、水仙よりはやゝ幅廣し、花は五六個乃至八個にして淡紅色のものを一莖頭に開く。夏水仙と云へど八月の頃を開花期とす。

實作注意 一に「鹿葱花(ろくそうくわ)」と云ひ、鹿葱と稱す。

罌粟の花　芥子の花　花罌粟　白罌粟　はなげし　ポピー　罌子粟　囊子　象穀　御米花　鴉片花　罌粟坊主　罌粟畑

古書校註

【山の井】けしは須彌をいれたる（一）ふるごとをもよせ、千にわる世話をもいひ（二）、又消す詞にもそへていへり。わらはべのつぢのみに髮生（三）じたるをけし坊主といふも、此花のちりたる後の似たればなり。

註（一）念佛三昧經等に須彌世界を芥子にいると見ゆ。小の中に大を容るゝことに云ふ。（二）至小の喩に「芥子粒ヲ八ツ割リニシタヤウ」と云ふより、芥子粒を千にわるとは至小の義であらう　世話は世話言葉、俗言の意　（三）つじ　つむじ（旋毛の略）つむじの所ばかりに髮のはへるの意

季題解説　藥用に觀賞に汎く園圃に栽培せらるゝ一年草、莖は直立して滑かに白色を帶び高さ四五尺に及ぶ。葉は長橢圓形鋸齒ありて基部にて莖を抱く。五六月頃莖頭に花を開く、初め二枚の萼片を被りて垂れ、開くに從うて上を向き、萼片を落して大形美麗なる四瓣花を開く、花の色、紅・紫・白或は絞りあり、またそれ等の八重咲もありて多種多様なり。花後平滑なる球形の實を結ぶ、之を罌粟坊主といふ。其形ち罌子（瓶）に似、種子粟の如きより罌粟と名づけられたりと云ふ。

實作注意　罌粟の實の青綠色なる時期に之れを傷つけて滲出する乳液を採り乾かしたるものを阿片と稱し、藥用、として又モルヒネを製す。種子は食用に供し、之より油を搾り藥用、油繪具の製造にも供すなど、多様に用途あり。もと南部歐羅巴の産にて、眠り藥の神話を傳へ、花言葉に遺忘を意味するも面白し。「けし」の字、言海に芥子とあれど字義を見ず、漢名には罌子粟・囊子・象穀・御米花・鴉片花等あり。【參照】鬼罌粟　雛罌粟　春・罌粟の若葉　罌粟雛　秋　罌粟蒔

例句

芥子の花

海士の顔先見らるゝやけしの花　芭蕉（罌粟合）
散る際は風もたのまじけしの花　其角（五元集）
けしの花朝精進の凋れかな　同（同）
舟乘の一濱留守ぞけしの花　去來（去來發句集）
別作
散る時の心やすさよ芥子の花　越人（猿蓑）
熊谷の堤上ればけしの花　許六（五老井發句集）
一つ家や十本ばかり芥子の花　百明（故人五百題）
けしの花籬すべくもあらぬかな　蕪村（句集）
入相を撞くも法師や芥子の花　同（落日庵句集）
二度も見ぬもろさを芥子の夕哉　也有（蘿葉集）
露にむき袁ゝ見こしや芥子の花　曉臺（曉臺句集）
汐風や砂ふきかゝるけしの花　同（同）

めら〱と火さゝば燃む一重芥子　同　（同）
陽炎にゆらるゝ芥子のひとへ哉　同　（同）
芥子咲て狐の嫁入月夜かな　闌更　（半化坊句集）
まだ散らぬ芥子倒しけりはしご賣　同　（同）
二三本芥子作りけり弱法師　同　（同）
けしの花猶短夜の寢覺哉　蓼太　（蓼太句集）
けしの花見てゐるうちは散らざりし　白雄　（白雄句集）
咲く日より雨に逢ひけりけしの花　一茶　（享和句帖）
桑の木は坊主にされて芥子の花　同　（句帖）
僧になる子の美しや芥子の花　同　（九番日記）
芥子提げて群集の中を通りけり　同　（發句集）
嵐過てまた咲き出たりけしの花　士朗　（枇杷園句集）
灰捨てしばらく芥子のくもり哉　成美　（成美家集）
芥子の花開きもはてず散りにけり　吟江　（心の花）
うれしがる手に崩れけりけしの花　蒼虬　（蒼虬翁句集）
蟻の來て引ずる芥子の一重かな　同　（同）
墨繩の墨がつきけりけしの花　同　（同）
露もつもかはくも芥子の一重哉　梅室　（梅室家集）
罌粟の花風と戰ふ力なく　涼斗　（同人）

花罌

花げしに組んで落ちたる雀哉　白雄　（白雄句集）

白罌粟

白けしに羽もぐ蝶のかた見哉　芭蕉　（[illegible]）
附[illegible]

留別

白芥子や時雨の花の咲きつらん　同　（鶉尾冠）
白罌粟や片山里の藪の中　太祇　（太祇句選）
白げしに蝶はく〱家や[illegible]の里　几董　（井華集）
白芥子に焚火移るや[illegible]の町　曉臺　（曉臺句集）
白芥子の花透く朝日夕日哉　闌更　（半化坊句集）
獨山とは芥子の寺に朝日かな　支考　（蓮二吟集）
咲かばやと仰向く芥子の蕾哉　草十　（故人五百題）

芥子坊主

鐘撞の俗を笑ふや芥子坊主　乙由　（麦林集）
花散りて芥子は坊主の名のみ哉　支考　（蓮二吟集）
笆をば遁れもやらで芥子坊主　也有　（蘿葉集）
花の底覗けばにくし芥子坊主　梅室　（梅室家集）
夕暮やけしの坊主の父穎ゆる　寄條子　（[illegible]）

芥子畠

芥子畠花ちる跡の須彌いくつ　其角　（五元集拾遺）
[illegible]見ればあしこに散るや芥子畠　吟江　（推[illegible]日記）
[illegible]夜を剛しに[illegible]けし畠　舎羅　（西華集）

參考 けし Papaver somniferum, L. （けし科）、舊世界の原産にして觀賞用又は藥用として園圃に栽培せらるゝ二年生草本なり、葉は無柄にして莖を抱き、長楕圓形にして邊緣缺刻あり、色は白綠色なり、花は莖頂に獨在して五月頃開き、花色は紅色・紫色・白色等種々あり、大にして四瓣を有し又八重咲の者あり、瓣外に早落性の二綠萼片あり、多雄蕋・一雌蕋あり、子房頂に放射狀の柱頭あり　蒴果は球形又は楕圓形をなす、阿片、もるひねは主として白色品より製す。

朝菊（あさぎく）　朝鮮菊（てうせんぎく）

古書校註

【年浪草】花彙に曰、花菖苣。救荒本草に云、（略）四五月葉間に紫碧花を開く。初に綻るとき、野菊の如し。朝に開き、夕に萎む。

【滑稽雜談】朝菊と云ふ者實は朝鮮菊と稱す。花單葉にて、夏月に開きて盛日には萎み、朝毎に英（一）を發す。故にあさ菊共いへり。**參照**秋—菊（きく）

註（一）はなぶさ、草木の華。

季題解說　菊の一種にして、人家に多く栽ゑ、苗は冬を經て長生す。高さ四五尺、蔓延する如し。四五月葉間に紫碧の花を開き、初めて綻る時野菊の如し

雛罌粟（ひなげし）　虞美人草（ぐびじんさう）　美人草（びじんさう）　麗春花（れいしゆんくわ）

古書校註

【年浪草】名花譜に曰、花四瓣、色艷（一）罌粟に類して小なり。（略）古文前集に曾子固が虞美人草の詩の題の注に曰、項王亡滅して、虞姬自ら刎ぬ。其墓上の草、人呼て美人草となす。同じく詩に、青血（二）化して原上の草と爲る。（類書に一種虞美人艸と云ふ者あり。異種也。

【山の井】美人草は、とらふす野にも、ともにとおぎり、草枕ならべて見ばやとも思ひ、虞氏（三）がなみだか花の露、りふじんに手折ばしすななどやうにもいひなし、みなす。

註（一）つややかに美し　（二）なま血　新しく色のこい血。（三）虞姬、項羽の妃。

季題解說　普く庭園に栽培して觀賞せらるゝ一二年草。莖の高さ一二尺に達し、莖葉もに毛茸をもつ。葉は羽狀に深く裂けて披針形となり互生す、初夏の頃より莖頭に二三寸許の美花を開く、その質薄き四瓣の姿は微風にも耐へ得ぬさまにて甚だ可憐なり。色は紅・紫・白等種々ありて等しく愛翫さるゝ所なり。果實は壺狀のもの、藥用となすこと亦普通の罌粟の如し。

實作注意　この花一に美人草と云ふ。又漢名を、虞美人草・麗春花と云ふ、虞美人草は、かの楚王の寵姬、虞氏が自刃せる魂の化して此花となり

しと云ふは周く人の知るところ。又麗春花は、杜甫の詩に「百草競春華、麗春應最勝」と詠じ、草花譜には草花中之妙品也と稱へるにも知るべし。此花元來は歐洲の産、古き希臘の神話をも傳へて「慰安」或は「脆き愛」等の花言葉を有つ。〔參照〕罌粟の花

例句

雛罌粟　雛罌粟に悲しきことの甦る　千々（同人）
虞美人草　たまゆらの風も堪へざり虞美人草　木城（同）
美人草　捨てられし西施か野邊の美人草　正直（毛吹草）
戀草と云ふべきものや美人草　定時（同）
衣張の指圖まばゆし美人草　乙由（麥林集）
誰種を蒔そこなひし美人草　也有（蘿葉集）
裏門の垣間見にけり美人草　其法（類題發句集）
上原寂光院
花散りて青きつぶりや美人草　嘯山（俳諧新選）

鬼罌粟（おにげし）

オリエンタルポツピー

季題解説　地中海地方の原産、英名「オリエンタルポツピー」、栽培品の多年草、葉莖ともに粗毛を有し、大なるは五六尺に達す、葉は羽狀に分裂し線狀長橢圓形、鋸齒あり。六月の候、莖を出して花を開く、重に深紅色炎ゆるが如き大形の花を開く、罌粟の覇者たり。丈高くして鉢植には適せざるも、花壇植込等に栽培して甚だ濃艶なり。〔參照〕罌粟の花

例句

鬼罌粟　鬼罌粟の散り耐へかるや夕嵐　土居（同人）

鳶尾草（いちはつ）

一八（いちはつ）　鳶尾（いちはつ）　紫羅傘（いちはつ）　子安草（こやすぐさ）　水蘭（すゐらん）

古書校註　【滑稽雜談】　閱書に曰、本草圖經に云、紫羅傘、鳶尾と名け、葉射干に似、花の色紫碧、高莖を抽んず。俗、紫羅傘と呼ぶ。其根は鳶頭、亦薬に入る射干、胡蝶花は此類也。（參）大和本草に曰、射干は和名からすあふぎ也。鳶尾は一八なる事分明也　いちはつは、莖短く葉ひろく花紫に、燕子花に似たり　綱目に、鳶尾とあるは、是一八なり　蘇恭が説（こ）よし。

【年浪草】　鳶尾は燕子花の類にして、花早く發く。白花もあり。

註「通雅」の「草」に「鳶尾、本草所在有之、葉似射干而闊短、不抽長莖、花紫碧色」とあり。

季題解説　普く庭園に栽培さるゝ多年草。高さ一二尺、葉は劍形、長さ一尺許り、淡緑色にして數葉扁列す。初夏の候、葉間より莖を出すこと葉よりも長く、上部分岐して各枝に一花をつく、杜若に似て大きく三瓣なり。色淡紫碧にして紫點あり。時に白色のものもあり。

實作注意　「一八」と書し、一名を「子安草」と云ふ。水蘭・紫羅傘の稱も

亦此花なり。薬家にてはこの地下莖を鳶尾根・鳶頭と稱し吐劑及び下劑に用ふ。根を鳶頭と云へるより花を鳶尾とす。

例句

一八　一八やしやがちゝに似てしやがの花　蕪村（新花摘）
一八や曉の戸塚の茶の煙　成美（谷風草）
一八の白きを活けて達磨の繪　子規（全集）

參考　いちはつ　Iris tectorum, Maxim.（あやめ科）蓋し支那の原産にして今は栽培して賞觀に供する多年生草本なり、高さ一二尺に達す、葉は冬枯れ、廣く短くして淡綠色を呈し厚からず、初夏葉中より單一なる梗を抽きて頂に花を開く、紫色或は稀に白色、外花蓋片は、其内面に稍雞冠狀の突起を有す。

夏菊（なつぎく）　紺菊（こんぎく）　五月菊（さつきぎく）

古書校註【滑稽雜談】花史に云、夏菊、六月より開き、八月に至る。殊に香味なし。亦妄に濫にして、菊の名を竊む者也。和に生ずる夏菊種類おほし。或は紺菊と云ふ物、中華（一）に云ふ五月菊と云ふ者にて、花小にして紫碧色、五月に開く。夏秋論と稱する物、六月に花を開き、大輪なり。

註（一）支那。

季題解說　菊の同種中にて早くも六七月に咲く品種のもの。其内にて普通のものは淡紅色の花を開くものにして、丈は一尺內外、深綠色の葉を有し、莖は暗紫色、花は多少八重咲をなせり。その外黃色・白色のものあれど何れも花徑大きからざるもの也。〔參照〕秋—菊（六）

例句

夏菊　休斗新宅
夏菊に露をうつたる家居哉　鬼貫（句選）
蠅なくば一花折ん夏の菊　其角（新山家）
夏菊や小雨は匂ふ新すだれ　篤非（故人五百題）
花咲や皐月の菊の尺あまり　尙白（同）
九月に武州より上るべき人に云遣す
菊に逢はん人に夏ぎく先咲ぬ　也有（蘿葉集）
夏菊の小しやんとしたる月夜哉　一茶（旅日記）

蝦夷菊（えぞぎく）

翠菊（さつまぎく）　さつまこんぎく　ちとせぎく　まんざいぎく　佛螺（ぶつら）　江南臘（かうなんらふ）　アスター

季題解說　翠菊とも書し、支那原産の一年草、園藝家は「アスター」と呼ぶ。莖は高さ一二尺、上部は枝を分ち、全株に粗毛あり、葉は「嫁菜」に似て廣し、夏日枝頭に菊に似たる舌狀花を開く、花の色、紫紅・紅・白・絞

等種類多し。

實作注意 異名に「さつまくぎく」「さつまこんぎく」「まんざいぎく」あり。

漢名に、佛蝶・江南臘等あり　**參照** 秋―菊

例句

蝦夷句　蝦夷菊に日向なからの雨涼し　鳴雪（鳴雪句集）

矢車菊(やぐるまぎく)　矢車草(やぐるまさう)

季題解説 園養の草、高さ一二三尺、葉細く、莖と葉とに白毛あり、夏日通常藍紫色の淡濃相混りたる美花を開く。形ち矢車に似たるより名あり。

實作注意 此草もと歐洲產、神話をもちて花言葉には纖美・沈鬱の意をもつ。又俗に「矢車草」と云へど、矢車草は別にあり、深山に自生するものにて、五首の小葉よりなる掌狀複葉の形矢車に似たるもの、夏日白色の小花を簇がり開くものなれば注意すべし。**參照** 秋―菊

例句

矢車草　眞中の色濃き花や矢車草　千止（ホトトギス）

誰か活けし矢車草や酒保の卓　子角（同人）

參考 やぐるまぎく Centaurea Cyanus, L.（きく科）、歐洲原產の園養植物にして一年生若しくは越年生草本、莖の高さは二三尺、披針形の葉を互生し、莖葉共に白毛を有す、夏より秋に至り開花し、通常藍紫色なれども、又桃色・白色等の品あり、頭狀花は矢車狀を呈するを以て、この名あり。

錦雞菊(きんけいぎく)　金鷄草(きんけいさう)

季題解説 菊の類、庭園に栽培される一二年生の草本、莖の高さ一二尺、葉は羽狀複葉、小葉は三五個卵形なり。六七月の候、長柄を有する一つ花を開く、その色黃金色にて中央は紫褐色なり。北米より渡來のもの　**參照** 秋―菊

例句

錦雞句　風暑し錦雞菊の搖ぎにも　壬居（同人）

除蟲菊(ぢよちうぎく)　むしよけぎく　白色除蟲菊(はくしよくぢよちうぎく)　赤色除蟲菊(せきしよくぢよちうぎく)

季題解説 正しくは「むしよけぎく」と云ふ。白花と赤花の二種あり。元來は舶來種なりしも、現今は殺蟲劑用として各地に栽培す、殊に和歌山縣盛んなり。高さ一二尺、莖葉共に毛あり、葉は淡綠色、羽狀に分裂し、互生す。初夏の頃より一重菊の如き多數の頭狀花を開く、徑一寸許、白色黃心のものと、赤色黃心のものとあり。この花を乾燥して粉末とし蚊取線

香・蚤取粉等の驅蟲劑を製す。［参照］秋―菊

例句

除蟲菊　眞つ白に雨がふるなり除蟲菊　九二緒（ホトヽギス）

麦稈菊（むぎわらぎく）

金貝草（きんがひさう）　貝殼草（かひがらさう）　かひざいく

季題解説　觀賞用に栽培せらるゝ一二年生の草本。莖は高さ二尺許に達し枝を分ち、葉は互生にて長楕圓披針形全緣なり。夏より秋にかけて黄色又は黄赤色小菊に似たる花を開く、恰もセルロイド製の花瓣の如く見ゆ。

實作注意　此花もと濠洲産、古き情話を傳へて維新前に渡來したるもの、花言葉には「永久の貞操」を意味せり。金貝草と稱ふ。［参照］秋―菊

松葉菊（まつばぎく）

さぼてんぎく　きくぼたん

季題解説　常綠多年生、莖はやゝ灌木狀にて常に横臥すれども、枝は上方に向く、高さ一尺許、葉は多肉性、恰も松葉牡丹のそれの如し。花は菊に似たる多數の瓣よりなり徑一寸許、紅・白・淡紅等の色に開きて美し。この花日光を受けてよく開き陰れば萎む特性あり。

實作注意　此花亞弗利加喜望峰の原産なるより乾燥地を好み、赫奕たる炎天にも耐へて美花を見する樣、夏季の草花として最たるものなり。一に「さぼてんぎく」「きくぼたん」と云ふ。［参照］秋―菊

例句

松葉菊　白日を降る雨細し松葉菊　圭居（同人）

波斯菊（はるしやぎく）

季題解説　北米原産の一年生草本、廣く庭園に培養せらる。莖の高さ一尺乃至三尺、莖と葉は共に平滑にして、下部の葉は、無柄、二回羽狀複葉をなし、分裂小葉片は線形をなし、上部の葉は、一回羽狀複葉又は無柄の單葉をなす。初夏毎梢頭に一箇の頭狀花を着く。外圍の小花は深黄色の管狀花冠、中央の小花は紫褐色の管狀花冠を有す。果實は黑褐色なり。［参照］秋―菊

占婆菊（ちやんぱぎく）

竹煮草（たけにぐさ）　けんくわぐさ　博落廻（はくらくくわい）

季題解説　原野に自生の草。莖は直立して高さ二三尺より七八尺に達するものあり、密毛多く毒汁を含む、葉大形にしてほゞ掌狀に淺く切れ、葉柄により て互生す。夏日莖頭に枝を分ち白に褐色を帶べる小花を總形に開く。この莖葉を以て竹を煮る時は柔くなり細工を施すに自由となるより「竹煮草」の一名あり。害蟲驅除に用ふ。［参照］秋―菊

例句

竹煮草　山崩のあとの磧や竹煮草　默與（一萬句集）

参考　たけにぐさ　Macleya cordata, R. Br. 一名、ちやんぱぎく（けし科）、原野に多き大形の多年生草本にして、莖の高さ三四尺乃至五六尺に達す、葉は圓き心臓形にして、邊緣鈍形に一裂し、裂片に齒あり、裏面は白色を呈し往々短毛あり、莖頂分枝し、多數の小花を着け大なる圓錐花序をなす、花は小にして二萼片を有し花瓣なし、多雄蕋、一雌蕋あり、花後長橢圓形の扁たき莢を結ぶ、莖葉共に黄褐色の汁を有し有毒なり、夏日花を開き、白色にして時に紅色を帶ぶ、此草と共に竹を煮る時は、柔になりて細工に自由なりと言はるれども信ずるに足らず。

孔雀草（くじやくさう）　紅黄草（こうわうさう）　藤菊（ふじぎく）　隱元草（いんげんさう）　大阪菊（おほさかぎく）

季題解説　一名「こうわうさう」と云ひ、又「藤菊」と稱す。主として園養する一年生草本、高さ一二尺、箆形の葉は細く羽狀に對生す、鋸齒あり。夏日花莖を抽きて頂に紅黄色八瓣の舌狀花を開く、多くは鉢植にされる草花。

例句

孔雀草　這入りたる門の内より孔雀草　たけし（ホトヽギス）

紫蘭（しらん）　白及（びやくきふ）　紫蕙（しけい）　黄蕙（わうけい）　蕙（けい）　蕙蘭（けいらん）

古書校註

【滑稽雜談】按ずるに、和俗の、ある蕙は零陵香には有べからず、蕙又蘭の一種にして、（略）春蕙秋蕙の二種あり、花また紫と白の二色あり。

【三才圖會】蕙蘭に按ずるに零陵香の異名、蕙草なり。此と同じからず。紫蕙は即ち紫蘭、按ずるに蕙蘭は（略）三四月葉の端に白花を開き、香からず、（略）黄なる花の者は、俗呼んで黄蕙と名く、以て其花を愛す。紫の花の者は、紫蕙と名け又紫蘭と云ふ。此れ乃ち山草の白及か考ふべし。

蕙蘭（大和本草）紫蘭　莖を立て葉を生ず。秋蘭に似て、潤く薄く、色淡青、縦理あり。三四月莖端に白花を開く、香しからず。又黄紫二種あり。

【年浪草】和俗、蕙と稱するもの白及の類にて葉大小あり。山中に生ずるもの、白花黄花あり。又盆に植て愛するもの、黄蕙星蕙あり。此根菱の如く稜あり。（略）和俗の紫蘭と稱するもの根菱に似たるものなし。（略）時珍が曰、蘭草、蕙草、乃ち一類二種と云は和俗に云ふ蕙にあらず、秋開く花香甚しきものなり混ずるかへらず。

季題解説　原野の濕地に自生することもあれど、主として庭園に培養さるゝ多年草、高さ一二尺、葉は互生して廣く、披針形の一尺許、縦に襞多し。初夏の頃、花梗を抽きて總狀に下紫青の大花を開く、色普通は紅紫色、稀に白

色あり。

實作注意 此植物、根は黄白色にして多量の粘液を含みて、「白及」と稱せられ、藥用とし、又糊料とせらる　漢名、紫蕙とも呼ぶ　[參照] 秋 蘭の花(ランノハナ)

例句 紫蘭 紛はしき葉もまゝ見ゆる紫蘭哉　篆 雅（俳句大觀）

風蘭(ふうらん)　桂蘭(けいらん)　仙草(せんさう)

古書校註 【年浪草】 此物山石の傍に生ず、取り來りて、椶櫚皮を以て之を包み、之を樹下及簷下に掛く。風を好みて茂盛す、故に風蘭と名く。花葉蘭に似て、葉靱へ横に垂る。五六月花を開く。微香あり。

季題解說 山中老樹の枝上に著生する草本、樹上にありて風を見て茂るとて風蘭と呼べるもの、觀賞用としても栽培さる。葉は厚くして細長く溝あり、普通は二寸内外の長さにて萬年青の如き互生葉に抱き合ふ。夏日葉間より花莖を抽きて蘭に似たる白色の花を開く、微香ありて美し。漢名、桂蘭・仙草。 [參照] 秋—蘭の花(ランノハナ)

例句 風蘭 水鉢に風蘭の香や一雫　素 水（三千化）
風蘭の花垂るゝ簷や遠雷す　風 生（ホトヽギス）

參考 ふうらん Finetia falcata, Schlecht.（らん科）山中老木に着生する多年生草本にして培養して觀賞に供せらる、葉は狹長にして厚く鋸脊を有し、長きは四五寸に達し、互に相抱擁して數層に至る、夏日葉間より莖を抽くこと三四寸、白色の數花を着く、花に微香あり、花蓋片は狹長にして三片は上に竝び、二片左右に下垂す、長き距あり。

うてふ蘭(らん)　大巖蘭(いはいはらん)　巖石蘭(がんせきらん)　胡蝶蘭(こてふらん)　石蘭(せきらん)

季題解說 暖地の喬木帶、巖石の間に自生する多年草。莖の高さ三四寸、葉は二枚乃至四枚ありて線狀披針形、裏に紫黑色の條あり。六七月の頃莖頭に淡紫紅色の數花を開く、可憐にして美し。鉢植に愛す。

實作注意 一名「大巖蘭」「巖石蘭」「胡蝶蘭」「石蘭」とも云ふ。尚「うてふらん」は有頂蘭かとあれど定かならず。 [參照] 秋—蘭の花(ランノハナ)

例句 胡蝶蘭 温室の柱懸なる胡蝶蘭　了 谷（ホトヽギス）

鈴蘭(すずらん)　君影草(きみかげさう)　リリー

季題解說 山地に自生して稀なる多年草、近來は觀賞に栽培さるゝもの。根

莖は横走し、節より鬚根を出し、地下より二三枚の葉を生ず、葉は長楕圓形、長さ四五寸、全緣にして平行脈あり、六月頃、葉間より花莖をぬき、その上部に芳香を有する白色風鈴狀の花を並べ垂れ、甚だ愛らし。花後漿果を結び、秋に至り紅熟す。

實作注意 我國にての鈴蘭は、從來北海道・朝鮮・信州八ヶ嶽に自生する外他には絕對に見る事なきものとされしも、近年大和宇陀の向淵にその大羣落を發見され天然記念物として保存の指定を受く。その發見迄は里人雜草と共に每年刈り取り、「よい香の花」と稱し里娘の髮飾とせしものなり、多くは密生し坪當り二千株以上に及ぶ、附近に香蘭と稱する畔あり。鈴蘭一に、「きみかげ草」と云ひ、完き純粹の花言葉を有す。又北海道にては「リリー」と呼ぶ。葉は煎じて心臟藥となす。［參照］秋―蘭の花（ランノハナ）

例句

鈴蘭　伜らへば鈴蘭の香のどこやらに　佐海（ホトヽギス）

名護蘭（なごらん）

季題解說 山地の巖上朽木等に生ずる蘭科の草、葉幅厚くして短かし、一莖數葉、晚夏葉の間より花莖を出し、穗をなして純白の花を垂れ開く、微香あり、形蘭花の如し。［參照］秋―蘭の花（ランノハナ）

參考 なごらん Aerides japonicum, Lindenb. et Reichb. fil（らん科）南方暖地の樹上或は岩上に着生する常綠多年生草本、根は粗にして長く、莖、長さ一二寸あり、葉は長楕圓形にして鈍頭を有し面平滑にして質厚く、長さ四五寸ありて兩列し一株凡四五葉あり、夏時、莖側に花莖を垂れ出すこと四五寸許、白花にして淡綠色の數花を總狀に着く、花蓋片は長橢圓形にして、脣瓣は前方闊く下に囊狀の距ありて其嘴前を指す、花に微香あり、花蓋片の內面並に白色の脣瓣に紅紫斑あり。

撫子（なでしこ）

瞿麥　常夏（とこなつ）　形見草（かたみぐさ）　おもひぐさ　ひぐらしぐさ　なつかしぐさ　河原撫子（かはらなでしこ）　野撫子（のなでしこ）　大和撫子（やまとなでしこ）　鷺撫子（さぎなでしこ）　藤撫子（ふぢなでしこ）

古書校註

【滑稽雜談】 [illegible]曰、（略）人家栽る者稍小にして纖媚（こ）也、細白斑紅菫紫淺碧の數色あり。俗呼びて常陽花となす。（略）順和名抄に曰、瞿麥[illegible]古今抄に云、（略）花の姿ちいさやかにうつくしく、色々によければ、おさなき名に響いて、撫子と云ふ。また盛り久しければ常夏といへり。唐撫子は色をなす。大和撫子は紅梅色也

【[illegible]】 大[illegible]に云、[illegible]少[illegible]き[illegible]絕[illegible]の御と[illegible]す、[illegible]と取[illegible]今[illegible]常夏と稱す、[illegible]を避くる也　〇（二）大和撫

子・唐撫子・川原撫子・鶯撫子・藤撫子・（一）（略）鶯撫子は花の形によりて名とし、藤撫子は色によりての名なるべし。

【註】（一）なまめきこぶ　（二）以下施文の自記なり。撫子の種類を擧ぐ。

季題解説　山野に多き多年草、秋七草の内にて可憐の花を開くより觀賞にも栽培さる。莖は高さ二尺許に達し、葉は線狀披針形にて尖り、對生す。夏秋の候、莖上に通常二個づゝの花を開く、緣邊多く刻まれたる五片合瓣のもの、普通は淡紅色なれど種々ありて美し。

實作注意　榮雅抄に「花の姿ちいさやかに美しく、色々に吹けばおさなき名子にたとへて撫子とす、又盛り久しければ常夏と云へり、唐撫子は色々の品あり、大和撫子は紅梅色なり」とあれど、今日云ふ常夏は石竹の一變種にて、昔の常夏乃ち此撫子なり。又我國にて從來「瞿麥」を撫子に充つれど、之は元來石竹卽ち「からなでしこ」の異名なり。また一に「河原撫子」「野撫子」「大和撫子」と云はれ、又「形見草」「おもひぐさ」「なつかしぐさ」「ひぐらしぐさ」及び牛麥・巨句麥等に稱せらる。又花の形を象りて紋所にされ、純潔なる愛の花言葉を有てり。【參照】石竹　蟲取撫子

例句

撫子　正成の像

なでしこにかゝるなみだや楠の露　芭蕉（小文庫）
醉て寢むなでしこ吹ける石の上　同（甚集）
撫子よ河原に足のやけるまで　鬼貫（句選）
撫子やそのかしこきに美しき　惟然（惟然坊句集）
訪鴨河使や撫子見つゝ晝餉　蕪村（夜半叟句集）
撫子に霜見んまでの暑かな　几董（井華集）
なでしこや美人手づから灌ぬる　召波（春泥發句集）
撫子の節々にさす夕日かな　成美（成美家集）
撫子の露折れしたる河原哉　士朗（俳句大觀）
御地藏や花なでしこの眞中に　一茶（七番日記）
露の世や露のなでしこ小なでしこ　同（同　）
朝風や撫子ふせる雨の後　吟江（推敲日記）
撫子や水うつ庭に起あがり　扣角（發首途）
撫子や宵の鴨川のすて篝　蘭雅（したり萩）
撫子に秋や通ひて白みがち　牧童（北の山）
撫子に白布晒す河原哉　子規（全集）
撫子に馬けつまづく河原かな　同（同　）

參考　なでしこ（なでしこ科）Dianthus superbus, L.　一名、かはらなでしこ、やまとなでしこ　山野に多き多年生草本にして、從來秋の七草の一に算へらる、莖の高さ一二尺、葉は線狀にして尖り、膨起せる節を擁して對生す、秋、梢に枝を分ち優美淡雅なる淡紅花を開く、萼は長き筒

をなし、花瓣の邊緣深く絲狀片に剪裂せり。

石竹（せきちく）　唐撫子（からなでしこ）　石の竹（いしのたけ）　洛陽花（らくやうくわ）

古書校註

【三才圖會】瞿麥即石竹也。今以て二種となす。共に葩（一）の周圍に刻齒（二）あり。切叉ありて剪紅紗に似たる者を瞿麥となし、切叉なき者を石竹となす。並に豫州より出づる者良し。丹波紀伊之に次ぐ。

【俳諧歲時記】むかし島田の時主といふ勇子あり、わが家の後の山に一の石あり。彼の石崇ありて、人をなやます。仍て時主件の石を射る。則矢立て拔けずして花さきぬ。この花石竹也、花かさなりて咲く。藻汐草（三）是等は名によりて說をまうけたる也

註（一）花　（二）ぎざ〳〵　（三）前記の說を反駁せるなり

季題解說　庭園に栽培して切花ものの多年草。莖は高さ一二尺に達し、多くの枝を分ちて叢生す。葉は線形にして尖り對生す。六七月の候、枝頭に撫子に似て瓣の切込淺き美しき花を開く。栽培の變種頗る多く、色彩も瓣樣も種々あり。

實作注意　支那原産なるより「唐撫子」と云ひ、漢名、洛陽花に充つ。また古くは「石の竹」と稱し、

絕えやらぬ根や年をふる石の竹　紹巴（富士見行）

などあれど、今日にては面白からず　【參照】撫子（二）和蘭石竹（二）

例句

石竹

石竹や紙燭して見る露の玉　許六（笈日記）

石竹に雀すごしや砂むぐり　史邦（小文庫）

石竹や淋しき椙の比丘尼寺　幡東（藻首途）

蕾ながら石竹の葉は針の如し　子規（全集）

石竹や舌妻の森に雨晴れぬ　同（同）

唐撫子

親なしか唐撫子ちよこちよこと　宗因（梅翁宗因發句集）

參考　せきちく Dianthus chinensis, L. 一名、からなでしこ（なでしこ科）支那の原産にして觀賞用として廣く庭園に栽植せらるる多年生草本、莖の高さ一尺許、叢生するを常とす、葉は對生し線形をなして尖り、萼筒下の苞は四箇乃至六箇長くして上端尖銳なり、五月頃花を開く、花瓣の頭には齒牙狀に細裂す、十雄蕋、二花柱、色に紅色・白色等種々あり。

和蘭石竹（おらんだせきちく）　麝香撫子（じやかうなでしこ）　紅茂草（こうもさう）　カーネーション

季題解說　初め和蘭より輸入せるより此名あり、庭園温室に培養される多年草。莖は硬質、下部は殆んど木質なり、葉は線形にて白綠色を呈す。夏日、五花瓣の美花を開く。園藝變種多く花のさま種々なれど、皆芳香を有す。

實作注意　「カーネーション」は英名なり、又その香氣強きより「麝香撫子」とも云はれ、漢名に、紅茂草あり。　參照　撫子（ナデシコ）　石竹（セキチク）

例句

カーネーション籐椅子ならして骨牌とる　かな女（ぬかご）

蟲取撫子（むしとりなでしこ）　蠅取撫子（はへとりなでしこ）　小町草（こまちぐさ）　おほてんま

季題解說　南歐原產、栽培される一二年草。莖は一二尺の高さに達し、莖葉滑かに白色を帶ぶ、葉は對生、卵狀披針形。五月頃より枝梢に一見櫻草の如き五瓣花を簇り咲かす、色普通紅色なれど時に白色あり。その植物莖の上部節下より粘液を分泌し、小蟲の花部に上るを防ぐより此名あり。

實作注意　ある書に一名を「小町草」と云ふとあれど恐らく俗稱なるべく、出所を明かにせず。　參照　撫子（ナデシコ）　石竹（セキチク）

例句

小町草

小町草に引かへす蟻をふみにけり　かな女（ぬかご）

小町草花壇に盛りすぎにけり　素十（ホトトギス）

朝顔（あさがほ）　蕣（あさがほ）　牽牛花（あさがほ）　東雲（しののめ）　あさなぐさ

季題解說　最も普通に栽培さるゝ蔓性の一年草、葉は通常三裂し、長柄ありて互生す、莖葉ともに毛茸あり、花は葉腋に漏斗狀をなせる大形の美しきもの一梗に一花、或は二三花をつく、早朝に開き午前に凋むは汎く人の知る所、栽培變種頗る多く、從つて花色のみならず、葉に花に種々の變形あり。

實作注意　元來朝顔は秋季に屬すものなるを、近來は人工的に競うてその開花期を早からしむるべく栽培に盡すより、盛夏の頃既にその開くを見るも、自然のものに於ては初秋より開くを常とす。從つて朝顔のもつ本來の色彩は秋風吹き、露下りて初めてその冴えを見するものなることは、朝顔專門家の唱ふる所、古人の朝顔を秋季と定めたる意も亦此處にあるべきなり。例句其他秋季に見よ。　參照　朝顔の苗（アサガホノナヘ）　夏朝顔（ナツアサガホ）　秋―朝顔（アサガホ）　朝顔の實（アサガホノミ）　枯朝顔（カレアサガホ）

參考　あさがほ　Pharbitis Nil. Chois.（ひるがほ科）「アジア」原產にして最も普通に培養せらるゝ一年生草本なり、纏繞莖を有し、葉は通

常三裂し長柄ありて互生し、毛あり、夏日葉腋に漏斗形をなせる大形の花を生ず、一梗に一乃至三花あり、萼は深く五裂し裂片狭長にして背に毛あり、朝に開き午前に萎む、果實は球形にして三室を有し、各室に二箇づゝの種子を藏す、葉及花に種々の變形あり、花色は藍紫、其他種々の色あり、アメリカ原產のものは Pharbitis hederacea, Choisy なり、種子を藥用牽牛子と稱す、今は觀賞用として廣く培養す。

朝顏の苗

朝顏の芽生　朝顏の二葉

季題解說 朝顏の芽生より移植する迄のものゝ稱。朝顏の播種は四月中旬より六月初旬迄は何時播種するも可なれど大抵八十八夜後を適期とす、初め床地に下種し、其の苗の二三寸となるに及びて鉢に植ゑ替ふるものとす。［參照］朝顏　夏朝顏　秋—朝顏

例句

雨二日はや朝顏の芽生かな　闌更（半化坊句集）

朝顏のもたけそろひし双葉哉　菊郞（太白）

夏朝顏

早咲朝顏

季題解說 朝顏の早生種なり、人工的に開花期を早められたるものにあらずして、自然に仲夏に花を開くもの、花の形小さきものなり　［參照］朝顏　朝顏の苗　秋—朝顏

例句

麥飯に夏朝顏の分限哉　恒丸（俳句大觀）

花もなき夏朝顏の靑き哉　鐵船（同　）

衝羽根朝顏

衝羽根日々　日々朝顏　百日草　長久草　ペチユニヤ

季題解說 「ペチユニア」と稱する舶來種の草花、莖は枝を分つて蔓狀に繁茂するもの、普通高さ一二尺、葉は長卵形にて多くは互生す、夏日朝顏に似たる漏斗形の靑紫色・紅色の花を開く、園藝種多々あり。

作法注意 此花、咲き出でては花の途切るゝ事なく晩秋まで咲き續くより「つくばねにちにち朝顏」とも云ひ、又和名にて百日草、長久草と書す。［參照］朝顏

參考 つくばねあさがほ　Petunia hybrida, Vilm.（なす科）南米の原產にして庭園に培養せらるゝ一年生草本なり、莖の高さ一二尺、時としては大に叢茂し、蔓性狀をなして數尺に達することあり、多く分枝す、葉は對生し、卵形にして全邊なり、葉腋に葉梗を抽きて夏日漏斗狀の花を開く、紫色・紅色・其他種々あり、觀賞用として栽培せらる。

晝顏（ひるがほ）　旋花（せんくわ）　鼓子花（こしくわ）　あめふりばな　はやひとぐさ　みみだれぐさ　すまひぐさ　あふひづる

古書校註　【滑稽雜談】　時珍本草に曰、旋花、其花瓣を成す狀、軍中吹く所の鼓子(一)の如し、故に名く。

【三才圖會】　旋花、日午に盛りにして且暮に萎む、故に俗牽牛花を以て朝顏と稱するに對して、此を晝顏と名く。

註　(一)つゞみに類した樂器

季題解說　到る所の原野草叢に自生する蔓草。春宿根より生じて蔓を上げ、草木又は垣などに絡みて長ず、葉は長くして尖り本に兩尖あり、長き柄をもつ。五六月頃より、形ち朝顏に似て小さき花を開き、朝より夕に至りて萎む、其色淡紅色と白色とあり。種類三四あり。

實作注意　主として日中に開花するよりこの和名のある所、一名「あめふりばな」「はやひとぐさ」と云ひ、施花・鼓子花と稱す。**參照**　濱晝顏（ハマヒルガホ）

例句

晝顏

祖母の自畫讃

ひるがほに米つき涼むあはれ也　芭蕉（類柑子）

美濃路より

子ども等よ晝顏咲きぬ瓜むかん　同（藤の實）

ひるがほに晝寐せうもの床の山　同（韵塞）

馬子の袖にひるる顏かゝる假寐哉　言水（俳諧五子稿）

晝顏や夏山臥の峯づたひ　支考（蓮二吟集）

晝がほやともに刈らるゝ麥畠　桃隣（古太白堂句選）

晝顏や假橋殘る砂河原　也有（蘿葉集）

ひるがほや町に成行杭の數　蕪村（夏より）

晝顏やこの道唐の三千里　同（句集）

晝顏や頓ふ牛のまくらもと　同（夜半叟句集）

晝顏や夜は水行溝のへり　太祇（太祇句選）

晝顏にしばしうつるや牛の蠅　几董（井華集）

晝顏や子を運ぶ鼬垣根より　召波（春泥發句集）

晝顏は酒をのむべきさかりかな　曉臺（曉臺句集）

晝顏は日の染みかゝる色なる歟　闌更（半化坊發句集）

晝顏やきのふの花は日に焦れ　同（同　）

晝顏やひとり横ふわたし舟　蓼太（蓼太句集）

晝顏や日のいらいらと薄赤き　白雄（白雄句集）

豆腐屋が來る晝顏が咲にけり　一茶（七番日記）

晝顏の道ひのぼる也わらぢ塚　同（句帖）

晝顔や露の玉の消ゆるとき　巢兆（曾波可理）
ひるがほに一息つくや米飛脚　蒼虬（蒼虬翁句集）
晝顔や鮎のいりつく砂の上　治天（類題發句集）
晝顔や籬の竹のはしる音　冬季（同）
晝顔や牛の涎のはてしなき　鷺太（文車）
晝顔や船引やすむ逆きれ　冬翠（同）
しんくと野は晝顔の盛哉　瓜流（古選）
晝顔や蓬根笹の下くらみ　吟江（推敲日記）
晝顔や野川に牛を放し飼　龜卜（新選）
晝顔や赤土匂ふ澤傳ひ　蘆角（月影塚）
此あたり皆晝顔の蓬かな　乙二（俳句大觀）
晝顔の花に干くや通り雨　子規（全集）
晝顔の咲くや砂地の麥畑　同（同）
晝顔や安達太郎雨を催さず　同（同）
晝顔や土橋の上に這ひかゝる　同（同）

【參考】
鼓子花　鼓子花のみじか夜ねぶる晝間哉　芭蕉（芭蕉翁俳諧集）

ひるがほ（Calystegia japonica, Choisy.（ひるがほ科）原野に自生する多年生蔓草なり、長き纏繞莖を有す、葉は長葉柄あり互生し、長橢圓狀披針形にして、長さ三寸許に達し、葉底は耳形をなす、夏日漏斗形をなせる淡紅色有梗大花を日中に開き、花中に五雄蕋・一雌蕋あり、萼の下に接して二片の廣き苞あり。

濱晝顔（はまひるがほ）　濱旋花（はまひるがほ）

【季題解說】海濱の砂地に多く自生する多年草、莖は砂上を這ひ、葉は質厚く心臟形にて互生す、花は晝顔に同じ。長く根莖を引きて甚だ繁殖するもの。

濱旋花　（季題、晝顔等）

【例句】
濱晝顔
晝顔やたまくむすぶ波の露　蓼太（蓼太句集）
大汐や晝顔砂にしがみつき　一茶（七番日記）
晝顔の花咲く磯の鳥かな　蒼虬（蒼虬翁句集）
晝顔に蜑割きたるにほひ哉　桃睡（瓜しるし）
晝顔や貝にちらほら磯畠　太無（太無句集）
晝顔に貝半むきかけし濱邊哉　宰馬（[illegible]）
ひる顔のからみて咲や捨碇　雨龍（[illegible]）
晝顔は鹽焼く賤のなかめ哉　光山（類題集）

【參考】（Calystegia Soldanella, R. Br.　はまひるがほ（ひるがほ科）

海岸の砂地に多き多年生草本にして、地下莖は長く砂中に蔓延し、地上莖は地に臥す、葉は腎臟狀圓形をなして厚く光澤あり、互生して長葉柄を有す、五月葉腋に花梗を抽きて漏斗形淡紅色の花を開く、蕚を包む二枚の苞あり。

巖菲

雁緋　巖菲仙翁　剪夏羅　剪紅羅

季題解說　普く庭園に培養さるゝ多年草、莖は直立叢生し、高さ一二尺に達す。葉は對生長卵形にして先尖りその質稍硬し。夏日梢上葉腋に石竹の如き五瓣花を開く、色美しき黃赤色を呈す。

實作注意　一名「巖菲仙翁」と云ひ、漢名、剪夏羅・剪紅羅と稱す。

例句

雁緋　花を庭にうつすは繪師の雁緋かな　一雪（洗　摺　物）

縷紅草

留紅草　縷紅朝顏　るこう　蔦蘿　絲蘿松　爬纏虎

季題解說　觀賞に栽培せらるゝ一年生の蔓草、莖細く他物に絡はり、長さ丈餘にも伸ぶ。葉は細密にして互生杉菜の如し、夏日葉腋より細長き漏斗形五裂の小紅花を出す、その形丁字の如く、長さ六七分なり。後實を結ぶ。鉢植として支柱を立て纏絡せしむるに愛らし。

實作注意　此植物秋に分類せる書あれど、夏より秋に亙りて咲くものなれば夏とすべし。蔦蘿・絲蘿松・爬纏虎等稱す。

例句

縷紅草　相語る風雨のあとや縷紅草　みの吉（ホトヽギス）
縷紅草垣にはづれて吹かれ居り　清子（同　）
來年は藁に卷かせん縷紅草　春亭（俳句大觀）

參考　るかうさう　Quamoclit pennata, Bojer.（ひるがほ科）熱帶「アメリカ」の原產にして古くより栽培せらるゝ一年生蔓草にして、纏繞莖は長さ數尺に達し、葉は互生し葉柄あり、羽狀に分裂して裂片絲狀をなす、夏日、葉腋に紅色又は白色の花を開く、花冠は細長くして邊緣五裂し、雌雄蕊は花外に超出す。

月見草

待宵草　大待宵草

季題解說　一般に云ふ「月見草」は待宵草を指して誤り稱せるなり。待宵草・大待宵草・月見草いづれも同科の植物にして、花形も亦相似て夕に開き朝に閉づるものなるより混同せらる。

▽待宵草　もと南米の產、我國には七十年程前に渡來せしもの。當時は珍花として庭園に栽培されしも、繁殖力甚だ盛にして、現時は海邊川原鐵道沿線等至る所に普通に野生するに至れるもの、二年生の草、莖の高さ

二三尺に達し、葉は互生の披針形にして、疎き鋸齒をもつ。夏日、葉腋毎に大形にして鮮黃色四片の花を開く、夕に咲き出で、日出後には赤黃色に色を變へて凋れ萎む、此花「浮薄」を意味する花言葉を有つ。

▽大待宵草　北米原產にして往時の舶來に係り、庭園に培養せらるる品種なり。多年生草本、待宵草に比して葉の楕圓形なると、全體に大形にて莖の高さ四五尺に及び花も亦大なり。夕に咲きて朝に凋む。

▽月見草　北米の原產、あかはな草。園養品種にて、待宵草の如く自生品を見ることとなし、莖の高さ三四尺に達し、葉は廣披針形にして互生齒狀に羽裂す、花は白色、凋めば紅色を呈するもの亦夕に開き朝に萎む。

實作注意　以上事實は三種に分たれたれど、一般には待宵草を月見草と謂ひ馴はすれば、月見草にて詠ふも差支なかるべし

例句

月見草　月見草夜空水より澄みにけり　月　斗（同　人）
月見草咲くとしぼむと渡し場に　同。（同　）
月見草夢と咲きみる河原哉　福　子（同　）
船と出て歸らぬ人や月見草　貴　川（同　）
待宵草　吹かれつゝ待宵草は開くかな　ていう子（ホトトギス）

松葉牡丹（まつばぼたん）　半支蓮（はんしれん）　日照草（ひでりさう）　亞米利加草（あめりかさう）　爪切草（つめきりさう）

季題解說　夏の觀賞花として普く栽培さるる小形草花、莖は直立に分枝し、高さ六七寸、葉は肉質の圓柱形にて並びつく樣松葉の如し。盛夏の日中に莖頭に五瓣の花を開きて夕に閉づ、その色紫・紅・黃・絞等ありて單瓣に重瓣に甚だ多樣なり　性乾燥地を好み、强くして容易に枯死することなく、燃ゆるが如き炎天にも其妍を競ひて甚だ美し。

實作注意　南米の原產なれど古くより我國に渡來せしもの、京阪にて爪切草といふ、莖をきり地にさせば繁殖す、故に名あり　その他地方的に異名甚だ多けれど各普通性に乏し

例句

松葉牡丹　炎天の松葉牡丹を踏みにけり　滴　翠（同　人）
敷石の南側松葉牡丹哉　涼　舟（同　）

參考　まつばぼたん　Portulaca grandiflora, Hook.（すべりひゆ科）南米原產にして庭園に培養する一年生草本なり、莖は直立して分枝し高さ五六寸餘、葉は圓柱形にして莖頭、基部に長き毛あり、夏日花は枝頭に開き無梗にして紫・紅・黃・白等あり、五瓣、多雄蕊あり、日中に開き午後閉づ、花後蒴果を結び、中に鉛色の細子あり

仙人掌の花（さぼてんのはな）　覇王樹（さぼてん）　團扇仙人掌　柱仙人掌　玉仙人掌　海膽仙人掌（うにさぼてん）

丸仙人掌

季題解説 熱帶地方の原産にして我國にては專ら觀賞に栽培せらるゝもの種類甚だ多し、形態も亦多樣多種なり、莖は多肉性、圓形扁平のもの、圓柱形のもの、丸きもの、細く紐狀等種々あれど、何れも綠色にして表面に鋭き多數の刺ありて、葉はなし。花は黃・赤・白等ありて、その形も一樣ならざれど、何れも南國を思はする色彩と姿にて開く。

▽團扇仙人掌　形ち團扇の如きもの又は板狀にて性質強く、成育の速かなるもの。

▽柱仙人掌　長き柱形にして柔かき刺の密生せるもの、花は總て大輪にて美し。

▽玉仙人掌　球形にして刺よく發達し、花は主として頂部に咲き、多くは大輪咲きなり。

▽海膽仙人掌　丸形で刺少く、花多くは白色、四寸位の大輪、花容豐麗なり。

▽丸仙人掌　丸球形にして刺短かく、花は中輪又は小輪なれど多花性にして花期永く、子を吹きて繁殖よきもの。

近頃仙人掌の流行は世界的と云ふもよく、我國又輸出漸く多し。

例句 仙人掌の花

仙人掌の花咲く宿や痱の灸　紫洞（ホトヽギス）
仙人掌の奇峰を愛す座右哉　鬼城（同　）
門を出て仙人掌の花見に行ける　素十（同　）

參考 さぼてん Opuntia Ficus-indica, Mill. var Saboten, Makino（さぼてん科）「メキシコ」原產にして廣く人家に栽培せらる、體は長橢圓形にして扁平なり、多數連結し、綠色にして棘あり、大なるもの尺許り、夏、體上に黃赤色の花を出し、花後橢圓形の實を結び熟して黃色を呈す、小兒往々喰ふ、元來サボテンとは唯此の一種を指すの名なり。

木犀草

ニホヒレセダ

季題解説 一名「ニホヒレセダ」と稱し舶來種なり、觀賞に栽培せらるる普通一年生草。莖は五六寸より一尺五六寸に達す、初めは直立なれど後には稍々伏臥し、葉は長橢圓形三裂す。夏日、枝梢上に穗をなして黃白色の小花を綴り芳香を放つ、其香ひ木犀に似たるより名あるところ。

參考 もくせいさう Reseda odorata, L.（もくせいさう科）北アフリカの原產にして、觀賞用の一年生草本、莖高さ一尺許り、少しく毛を有す、葉は長橢圓形又は稍線形をなし、時に三裂片をなし、常に全邊なり、夏期枝梢上に穗をなして花を綴る、色は帶綠白色にして葯は橙黃色を呈す、香氣頗る高し、後部側部の花瓣は細裂し、多雄蕋あり。

芸香（へんるうだ）

季題解説 舶來種の多年草、莖は二三尺に達し、下部は木質をなす、葉は重複葉互生にして肉厚し、白色を帶ぶ、臭氣甚し、初夏莖頭に枝を分ち四瓣の黃花を開く、實を藥用とす。

参考 へんるうだ（芸香）Ruta graveolens, L.（へんるうだ科）歐洲原產の多年草本にして、庭園に培養せらる、莖の高さ一二尺に達し、下部は木質を呈す、葉は互生して多裂し、淡綠色を呈し紫色を帶ぶ、六七月の頃、枝梢に繖房花序をなして黃色花を開く、花は莖頂のものは五瓣、十雄蕊を有し、側方のものは四瓣、八雄蕊を具ふ、子房の下には綠色の花盤あり、果實は蒴をなす、此植物は全部に强き臭氣を有し、藥用として用ひらる。

麝香豌豆（じやかうゑんどう）

スヰートピー　花豌豆（はなゑんどう）　麝香蓮理草（じやかうれんりさう）

季題解説 花壇或は切花にする一年生草花、單に「スヰートピー」の原名にて呼ぶ、小葉の複葉にて卷鬚を有し、托葉を具ふ。莖及び葉柄に特種の翅あり。夏日葉腋に花軸を抽き、大形にて美しき蝶形花を開き、よき香ひあり。花の色は種々あり

例句

スヰートピー　スヰートピー蛇にだかれてうつむける　早苗（ホト、ギス）

ヂキタリス　きつねのてぶくろ

季題解説 歐洲の原產、人家に栽培せらるゝ多年草。莖の高さ三四尺、直立して枝を分たず、葉は卵狀長橢圓、下部のものは葉柄を有す、緣に鋸齒あり。花は葉柄に長き穗をなし、五裂鈞鐘狀のものを下より順次に開く。觀賞に適す。心臟病の藥なり。

例句

ヂキタリス　ヂキタリス其他藥草花盛　凡秋（ホト、ギス）
摘むほどに花見せにけりヂキタリス　子角（同人）
ヂキタリスの葉畑を涼しうす　香車（同）
ヂキタリスのびたり裾の花は實に　玄紫（同）

参考 ぢきたりす Digitalis purpurea, L.（ごまのはぐさ科）歐洲の原產にして人家に栽培せらるゝ多年生草本なり、莖の高さ三四尺、直立して枝を分たず、葉は卵狀長橢圓にして、下部のものは葉柄を有す、葉緣に鋸齒を有し、葉面皺縮す、花は夏日莖梢に長き穗をなし、下より順次に開く、萼は五裂し、花冠は長き鐘狀をなして大なり、紅紫色にして濃き斑點あり、又白色の品あり、花冠は多少唇形をなす、二强雄蕊を有す、果實は蒴にして種子を作り、中に種子入り、心臟病の特效藥として用ひらる、

又觀賞用とす。

アマリリス

季題解說 舶來の草花。球根の多年草、葉は細長く先尖る。花莖の高さは一二尺、頂に形ち百合に似たる數花を開く、色は淡紅・紅白絞りのもの等あり。花壇に切花に栽培す。變種多し。

グロキシニア

季題解說 近時舶來の溫室栽培もの、葉圓く甚だ短かき莖に簇生す、莖葉に細毛ありて肥大なり、初夏頃葉の間より花梗を抽きて紅・紫・緋・絞等の漏斗狀の花を開く。媚態の花言葉あり。栽培變種多し。

參考 ぐろきしにあ (Gloxinia) Sinningia speciosa, Nichols.(いはたばこ科)「ブラジル」の原產にして、多年生草本にして、殆ど本莖なく、葉は根生し、有柄卵形にして、邊に鈍鋸齒あり、葉中に花梗を抽き、頂に各一花を有し、側に向て開く、花冠は膨大し、略鐘狀をなして、邊緣相開、淺く五裂す、紫色其他種々の色あり、初夏の候開く、觀賞用として溫室に栽培せらる。

サルビヤ　セージ

季題解說 南部歐洲の產、我國にても葉を藥用とするに培養する多年草、莖は高さ三尺餘、下部は木質をなす、葉は廣披針に皺襞あり、七八月頃梢上に開花す、赤・白・紫の脣形花なり。花を觀賞用ともすべし。

例句 セージ

波立てる朝の沙漠花シエージ　北湖（ホトトギス）

參考 さるびや　Salvia officinalis, L.(唇形科) 南部歐洲の原產にして、園圃に栽培せらるゝ多年生草本にして、莖の高き三尺餘に達し、下部は木質をなす、葉は廣披針形にして葉面に細かなる皺あり、夏日、梢上に穗をなして紫色の花を輪狀につく、花冠は唇形をなす、葉を藥用に供し、又香料として西洋料理に用ゆ「セージ」と呼ぶ。

トレニア　花賣草（はなうりぐさ）　夏菫（なつすみれ）

季題解說 近時舶來の一年草、多く花壇の緣取或は模樣取等に栽培さるゝもの、莖の高さ八九寸葉は先尖りたる卵形、鋸齒あり、對生す。夏日莖上に淡黃と紫等の花を開く、形やゝ露草に似て愛らし。一に「花賣草」と云ふ。

例句 トレニア

トレニアの植込まろし車寄せ　圭岳（同人）

紅の花（べにのはな）　紅藍花（べにばな）　紅粉花（べにばな）　紅（くれなゐ）　吳藍（くれのあゐ）　末摘花（すゑつむはな）　紅藍（こうらん）　紅花菜（こうくわさい）　紅畑（べにばたけ）

紅摘む（べにつむ）

古書校註

【滑稽雑談】奥羽出羽の國々より是を出す商賈すくなからず、染色の用とし、または容飾の物となりて、貴賤の賞する者也。尤も其花時を以て夏に押す。

【年浪草】時珍が曰、（略）五月に至りて花を開く。大薊の花の如くにして、紅花。晨（一）を侵して花を採る。○倭名抄に曰、紅藍（和名久禮乃阿井）○本朝式に曰、紅花（俗之を用ふ）○和訓義解に曰、（略）此花初めて末より開き次第に本に咲也。咲に隨て、摘取者也、故に呼んで末摘花と云也。○源氏物語末摘花の卷に（三）なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむ花を袖にふれけむ　彼の末摘花若鼻の先赤きに比して讀たまへり。

註（一）朝早く。（二）光源氏の詠歌也。

季題解説　園圃に培養する二年生の草本、莖の高さ三四尺に達し、莖葉に刺あることも薊の形も薊に似たり、葉は黄綠色互生なり、五月梢上に紅黄色の美しき頭上花を生ず、形亦薊に似たり。夏曉未だ露の乾かざる内に此花を摘みとる。紅を製し、種子より油を搾る。

實作注意　古名「吳藍」「紅」或は咲くに隨つて末を摘み取るより「末摘花」と云へり、漢名には、紅藍・紅花菜等あり。

例句

紅の花	行末は誰肌ふれむ紅の花	芭蕉	（西華集）
	白粉は蝶の羽にあり紅の花	桃隣	（古太白堂句集）
	山陰やこゝもとの日は紅の花	千代女	（千代尼發句集）
	神子村や椿の下の紅の花	蘭更	（半化坊發句集）
	琴の爪かして摘さん紅の花	汀伍	（小文庫）
	筬賣も娘ほめけり紅の花	嵐枝	（三千化）
	尼寺の名にこそたてれ紅の花	袖角	（蘆分船）
	したゝかに紅の花咲く小庭哉	子規	（全集）
	奈良へ通ふ商人住めり紅の花	同	（同）
紅粉花	眉刷毛を面影にして紅粉の花	芭蕉	（猿蓑）
	紅粉買や朝見し花を夕日影	其角	（五元集拾遺）
末摘花	何に此末摘花を老の伊達	支考	（蓮二吟集）
	わか戀は末摘む花の香かな	子規	（全集）
紅畠	手すさみや御城女中の紅畠	湖曉	（新選）
	暑き日や指もさゝれぬ紅畠	千代尼	（古今句選）

参考　「べにばな」Carthamus tinctorius, L.（きく科）越年生草本にして栽培せらる、近東の原産なり、莖の高さ三四尺、葉は互生し、廣披針形にして、鋭刺多し、秋時梢頭に花を開き管狀花より成る、紅黄色なり、

總苞に刺を有し、花の狀茴香に似たり、花より紅を製し、又嫩苗は食用とすべく、種子は油を搾るべし。

茴香の花

呉の母　懷香　茴香子　魂香花

季題解説　園圃に栽培して特異の強き香氣を有せる多年草、莖は叢生して高さ六七尺に達す、葉は互生して細く長きこと絲の如く、莖と共に白色を帶び香ひあり、夏日枝上ごとに五瓣の細小黃花を集まり開くこと傘の如し、實は長さ二分許、細稜あり、果實より茴香油を製し、又藥とす。用として健胃劑、祛痰劑たり。

實作注意　支那より渡來のもの、因りて古くは「呉の母」の名あり。懷香・茴香子・魂香花等の稱あり。【參照】秋─茴香の實

例句

茴香の花　茴香を亂して霽るゝ山雨哉　蛃魚（ホトヽギス）
茴香の花の匂ひや梅雨曇　青蜂（同人）

參考　うゐきやう　Foeniculum vulgare, Mill. 繖形科。歐洲原產にして園圃に栽培せらるゝ多年生草本なり、芳香を有し每春宿根より叢生し莖の高さ六七尺に達す。葉は大形にして絲狀に細裂せる裂片を有す。夏日、小花を複繖形花序に群生し、五瓣より成る。黃色の此實より採れる茴香油は、酒或は菓子などに香味をつくるに用ひられ、又藥用に供せらる。

美女櫻

はながさ　しきざくら

季題解説　觀賞花の草本、莖は斜上性に蔓延し、葉は有柄長橢圓、鋸齒深く粗毛を被る、互生なり、夏より秋にかけて花簪の如く、五瓣の小花を二三十輪花叢に開く、紅色或は紫色・白色・絞り等美しく咲き續く。美女櫻の名甚だふさはし。

實作注意　南米の原產にして原名「ブアーベナ」、家庭和合の花言葉を持てり、「はながさ」「しきざくら」とも云ふ。

參考　びぢよざくら　一名　はながさ　Verbena phlogiflora, Cham. 南米「ブラジル」原產にして庭園に培養せらるゝ多年生草本。莖は上昇し、葉は對生して分裂し、明に葉柄あり。長橢圓形の穗を成し夏秋の候花を開く、花は美にして赤色の外種々あり、花形は盆狀をなす。

日日草

そのひぐさ　花海棠　日々花　日日紅　長春花　四時花

季題解説　觀賞用に栽培する一年草、莖の高さ一二尺に及び直立して微紅色を帶ぶ、葉は橢圓乃至線、短かき柄にて對生す、夏日葉腋に枝を出して、各梢に五裂五瓣形の「白粉花」に似たる紅紫色の花を開き、日に日に咲き次

ぎて絶え間なく秋にも及ぶ。

實作注意　「日々花」「日々紅」とも云ひ、長春花・四時花・花海棠等に稱す。東印度の原産、熱帶地にては野生の狀態となれりと。

參考附着　にちにちさう　Lochnera rosea, Reichb　けふちくたう科。西印度原産にして今は各地に培養せらるゝ一年生草本、莖の高さ一二尺、長橢圓形全邊葉を對生し葉柄あり。夏期莖頭に紅紫色又は白色の花を開く、花冠は盆狀をなし、下部筒狀をなして細く、其先きは廣くして五裂し、稍五瓣の觀あり、雄蕊は筒中にあり。花後細長き果實を結ぶ。

百日草（ひやくにちさう）

じんにや　江西拉花（かうせいらつくわ）　火求花（くわきうくわ）

季題解説　舶來の庭園草花、原名「じんにや」、一年生にして、高さ二尺許、葉は橢圓にして二葉づつ對生し、花は葉腋より枝を分ちて枝頭に菊の如き單瓣の花を開く、色紅・樺・紫等あり。七月の頃より晩秋にかけて咲き續け百日草の名を恣にす。江西拉花・火求花。

例句

百日草　吹きかへて我庭富むや百日草　宇米　（選　草）

千日草（せんにちさう）

千日紅（せんにちこう）

季題解説　庭園に培養され多く佛花とさるる草花、莖は直立して枝を分ち高さ一尺餘に達す、葉は長橢圓形の對生、短かき葉柄を有し、莖葉共に細毛あり、花は夏より秋にかけて莖頭に紅色の毬をなして開く。時に變色のものあり。

實作注意　元來は東印度產、我國には天和の頃支那より渡來せしもの、花期長く冬に至つて葉は枯るゝも花はその色變ることなきより「千日草」と云ひ、又「千日紅」とも稱す。花言葉には不變の愛と云ふ。

例句

千日紅　一莖の千日紅の早かな　松籟（ホト・ギス）

參考附記　（莧科）せんにちさう　一名　せんにちこう　Gomphrena globosa, L. 印度原產にして庭園に培養し觀賞用に供する一年生草本、莖は分枝し高さ一尺許、葉は對生し、長橢圓形或は倒卵狀長橢圓形をなす、夏秋の頃開花し、花は球狀に排列し球下に卑圓形の二苞あり、花は有色の二苞あり之を擁し、毛ある五萼片、筒狀をなせる五雄蕊、二岐せる一子房あり、

花は紅色を常とすれども時には白色又は淡紅色のものあり。

丁字草　花丁字　水甘草

季題解説　稍水濕の原野に自生する多年草、莖は直立して一二尺、葉は柳の如き披針形にて互生す。五月の頃莖上に花梗を分ちて桔梗色丁字に似たる花を開く。花後細長き實を結ぶ。

實作注意　花姿優美なれば往々鉢植にして愛さるゝもの、俗には「花丁字」とも云ひ、「高貴」の花言葉を有つ、「水甘草」と書す。

例句

丁字草　丁字草花甘さらに咲きにけり　子規（全集）

擬寶珠　花擬寶珠　ぎぼし　ぎぼ　紫蕚

季題解説　山野に自生する多年草、往々庭園に栽培す。高さ一尺許、葉は卵形、長き葉柄ありて地下部の莖より叢生す、夏日その叢中より、二尺許莖を抽き、上部に筒形六裂帶紫色の花を總狀に開く。嫩葉は食用とすることあり。

實作注意　約して「ぎぼし」又は「ぎぼ」とも云ふ。漢名は、紫蕚といふ。

【參照】　玉簪花

例句

花擬寶珠　虻入りてかくれ終せぬ花擬寶珠　虛子（ホトヽギス）

參考　ぎばうし　Hosta japonica, Aschers. et Graebn. var. coerulea, Makino.（ゆり科）山野に生ずる多年生草本なれども、又庭園に栽培し高さ二尺餘に達す、葉は卵形全邊にして、長柄を具へ叢生す、夏日叢葉の間より花莖を抽き、其上部に總狀をなして花を着け、通常紫色を帶ぶ、花被は其下部筒狀を呈し、先端六裂す。

玉簪花　ぎばうし　高麗擬寶珠

季題解説

【三才圖會】　葉濶圓、末尖り橋の欄干の形に似たり。故に俗呼て、岐保宇之と名く。五月花を開く。

【滑稽雜談】　和俗是を高麗擬寶珠と云ふ。其葉の形、（一）葱輿にある擬寳花に似たる故也。又一種、其葉至て大に、紋粗き者は、擬寶珠とのみ稱す。是も小白花を開く。尤見るにたらずかし。俳書に鷺草と云も是也。

註　（一）天子ののる輿。

季題解説　百合科の多年生草本、觀賞用植物。花莖は二三尺より四五尺にして、葉は卵形全邊にして尖り、濃綠色を呈し、蠟質の白粉を具へ、長き葉柄を有す。花は白色の六裂せる筒狀花蓋を有し、總狀花序に排列す。雄蕊

六個、雌蕋は三心皮の結合せるものにして、果實は蒴果をなす。〔參照〕擬寶珠（ぎぼうし）

午時花（ごじくわ）　金錢花（きんせんくわ）　夜落金錢（やらくきんせん）　日中金錢（にっちうきんせん）　子午花（しごくわ）

【季題解説】庭園に栽培する一年草、莖は高さ二三尺に達し、葉は葉柄長く戟狀披針形にして互生す、夏秋の候紅色五瓣の美花を開く、此花正午に開き夜に入れば閉づ、よりて此名あり。

【實作注意】熱帶亞細亞の原産、支那にては、夜落金錢・日中金錢と稱へ、此國にても「金錢花」とも云ふ。其他の漢名に、子午花・川蜀葵・毗尸沙等あり。

銀盞花（ぎんせんくわ）　野西瓜苗（やせいくわべう）　朝露草（てうろさう）　毛球花（まうきうくわ）　富榮花（ふえいくわ）

【古書摘注】【年浪草】春耕が糸切齒に曰、下學集に錢朝露草と出づ。一名銀錢花と云ふ。花の形格に似て小く、色白青く、うるみあり。（略）葉朝に開き、夕に萎む。

【季題解説】庭園に栽培せらるゝ一年草、莖の高さ一二尺に達し、下部の葉は圓形なれど上部のものは三裂又は五裂するを常とす。夏の候、黃色紫心の美しき花を開く、日中にのみ開花する特性を有す。

【實作注意】此花露の未だ乾かざる朝に開き、午後に至れば凋むより「朝露草」の名あり。又、野西瓜苗・毛球花・富榮花等に稱せらる。

【例句】
朝露草　仇し野にさくや電光朝露草　貞繼（毛吹草）

紫草（むらさき）　ねむらさき　江戸紫（えどむらさき）　紫丹（したん）　茈草（しさう）　鴉銜草（あかんさう）

【季題解説】山野に自生する草なれど時に園養す、莖は高さ二尺餘に達し、楕圓形の葉を互生す、莖葉ともに毛ありて面粗らし、夏日梢頭に無色漏斗形五裂の小白花を開き、後堅き小果を結ぶ、根は紫根と稱し、深紫色の部分あつて染料に用ゆ。

【實作注意】江戸時代には紫色の染料として盛に培養せられ、江戸紫の代表的名稱を有するものなりしも、現時は然らず。「ねむらさき」とも云ひ、紫丹・茈草・鴉銜草等の稱あり。〔參照〕春—若紫（わかむらさき）　花紫（はなむらさき）　冬—紫根掘る（ほる）

立藤草（たちふぢさう）　のぼりふぢ　ルーピナス

【季題解説】豆科の草本、高さ一尺許、葉は櫻草の葉の如き八九枚の掌狀複葉、夏の頃莖梢に花莖を抽きて藤の花の如く白・紫・淡紫等の美花を開

く、花は藤と反して直上するより立藤と云ふ。

京鹿子（きやうがのこ）

季題解說 庭園に培養する多年草、莖の高さ一二尺に達し、葉は掌狀に分裂して長き柄を有す、夏秋の候枝梢上に紅色の小花を叢生して美し、鉢植等にす。

鈴掛草（すゞかけさう）

季題解說 極めて稀に栽培せらるゝ多年草、莖は蔓性にして地に著きて根を下す、葉は長卵形、互生、鋸齒あり、夏日各葉腋に數箇の小花を球狀に開き紫紅色を呈す。花をつけし枝の姿、行者の著つくる鈴懸の如し。

鐵線花（てつせんくわ）

菊唐草（きくからくさ）　鐵線蓮（てつせんれん）　てつせんかづら

古書校註 【三才圖會】 按るに鐵線花、二月苗、宿根より生ず。一梗三葉、微しく芍藥の秧(一)に似て小く、莖細く靭へて堅勁し。故に俗に鐵線と曰ふ。(略) 四月花を開く。(略) 其花白色の六辨、平に開きて、蘂圓く、紫色亦もやさし。

註 (一) なへ。

季題解說 庭園に栽培する蔓性の落葉灌木。莖は細長く蔓をなし微毛あり、葉は對生し、二回三出の複葉をなし、その小葉は卵形、葉柄を以て他物に卷きつゝ莖を上昇せしむ、六・七月頃六片の白き花被を有せる美花を開く、蕊は暗紫色にて多數あり。有毒植物。

實作注意 支那原產のもの、鐵線蓮とも稱し、一名「菊唐草」ともいふ。

例句 鐵線花

山伏の隱居や垣に鐵線花　盧元（類題發句集）
鐵線花葡萄の棚へよぢからみ　犀州（同人）
御所拜觀の時鐵線の咲けりしか　子規（全集）

參考 てつせん Clematis florida, Thunb.（うまのあしがた科）支那の原產にして庭園に栽植する蔓性の落葉藤本なり、葉は對生にして多くは二回三出、小葉は卵形又は卵狀披針形をなし全邊又は少數の缺刻を有す、葉柄を以て他物に卷絡することカザクルマに同じ、初夏開花し、白色の六萼片より成り花徑二寸餘、雄蕊は暗紫色を呈す。

凌霄葉蓮（のうぜんはれん）

金蓮花（きんれんくわ）　ナスターシアム　早金蓮（さうきんれん）　荷葉蓮（かえふれん）

季題解說 觀賞の一年草。莖は柔軟にして地上を匍ひ多くの小枝分ち立つ、麗は葉柄長く互生し、圓形楯狀にして淺き六個の切込あり、夏季葉腋に美

麗なる五瓣花を開く、花の色黄・赤・橙黄等種々あり、花の形は凌霄花に似、葉は蓮に似たるより「のうぜんはれん」の名を附したりと。花屋にては普通この花を「ナスターシアム」と稱ふ。

【實作注意】一名「金蓮花」と云ひ、旱金蓮 荷葉蓮と稱す。又花言葉には此花を兜に葉を楯に見立てゝ「勝利」となす。

【例句】金蓮花

日おもての薄葉明るし金蓮花　草城（ホトヽギス）

【參考】のうぜんはれん Tropaeolum majus, L.（のうぜんはれん科）

南米の原産にして賞觀用として栽培せらるゝ一年生草本にして、莖は蔓性をなし直立せず、多く枝を出し長さ數尺に及ぶ、葉は互生し細長なる葉柄端に楯狀をなす、夏期葉腋に長梗を出し花をつけ側向ふ、萼は五片にして下部合體し、上側に於て一の長距となる。花瓣五ありて、下の三瓣は類瓣く花爪狹長にして、邊に毛齒狀の片あれども上の二瓣には之れなし、色は瓣萼共に黄色その他種々の色あり、ノウゼンはノウゼンカヅラの略、ハレンは葉蓮にして、花はノウゼンカヅラの如く葉は蓮の如しとの意なり。

時計草（とけいさう）

ぼろんかづら　西番蓮（せいばんれん）　子午蓮（しごれん）　轉心蓮（てんしんれん）　玉蘂花（ぎよくしんくわ）

【季題解説】蔓性の多年草、卷鬚ありて他物に絡みて生ず、葉は常綠にて深く掌狀に裂け、葉柄の基に托葉をもつ、夏の頃紅色に紫暈のある大形の美花を開く、形稍時計の盤面に似たるより名ある所、此花日中に開きて夜間は閉づ、花の後橙色の實を結ぶ。

【實作注意】原産は南米ブラジルのもの、一名「ぼろんかづら」。西番蓮・子午蓮・轉心蓮・玉蘂花の漢名を有つ。

【例句】時計草

日日の峠泊りや時計草　答推（雲母）

鐘つきの前に開くや時計草　花晩（俳句研究）

【參考】とけいさう Passiflora caerulea L.（とけいさう科）「ブラジル」原産の觀賞用多年生草本、卷鬚ある纏繞莖を有し葉は常綠にして深く掌狀に分裂し、葉柄の基脚に大なる托葉を有す、花は大形にして夏日日中に開き、白色にして紫暈あり、花下に三片の苞あり、花被は十片（萼片五、花瓣五）にして二列をなし、其内部は細絲狀片多くして、濃紫色及淡紅色を有す、五雄蕊を有し下は柱をなす、子房は蕊上にありて三花柱あり、果實は漿果なり。

釣浮草（つりうきさう）

フクシヤ　ホクシヤ

【季題解説】小灌木狀の植物、專ら觀賞用に栽培さるゝもの、高さ三尺位に達す、葉は長卵形、鋸齒あり、對生す。夏日特異なる形の美花を下垂す、花

の色中は白又は紫、外は赤き提燈狀の花を開く、而して萼の白きは紅或は紫の花冠を有し、萼の紅或は紫のものは白の花冠をもちて頗る美し。園藝變種あり。

實作注意　この花蕾の形と色と、釣魚に用ゐる浮木に似たるより、釣浮木草と呼ぶもの、原産は南米、「フクシヤ」「ホクシヤ」と云ひ、趣味の花言葉を持つ。

參考　ほくしや　一名、つりうきさう　Fuchsia magellanica, Lam.（あかばな科）南米の原産にして觀賞用植物として溫室に培養し、灌木狀をなす、莖の高さ一二尺、卵形の葉を對生す、莖葉共に紫黑色を帶ぶ、初夏、葉腋に長梗を抽きて、初夏紅紫色花を下垂す、萼は筒狀四列し、四花瓣、八雄蘂あり。

含羞草（おじぎさう）　知羞草（おじぎさう）　懼内草（おじぎさう）　眠草（ねむりぐさ）　ころいち

季題解說　熱帶の植物。我國にては栽培種の草本、高さ七八寸、莖は堅く所々に毛刺あり、葉は互生し長さ二寸許、合歡の葉に似たり、此葉は一種の刺戟によつて運動する性あり。觸るれば凋み暫くして伸ぶ、夏日葉腋に花莖を出し多數の小さき蝶形花を開く。

實作注意　葉に觸るれば垂れ下る運動のさま叩頭をする如きより「おじぎさう」と云ひ、夜に入れば全葉を垂れ、朝に起きるより「ねむりぐさ」の名を有つ、我國へは天保年間に輸入されたるもの、當時は「ころいち」と稱へ非常に流行し、二兩三兩の價を呼び、殊に御殿女中等盛に求めたりと傳ふ。知羞草・懼内草の稱あり。**參照**　植物—合歡花（夏ノ）

例句　眠草

指ふれてほのかにぬくし眠草　とし女　（ホトヽギス）

參考　おじぎさう　一名　ねむりぐさ　Mimosa pudica, L.（まめ科）南米の原産にして觀賞用として栽培す、元來は多年生なれども通常は一年生草本をなす、莖高さ一尺許細毛及び疎に刺あり、葉は有柄にして互生し羽片二對をなして略ぼ掌狀に出で多數の廣線形小葉を二列に排列す、刺戟により運動する性あり、花は小にして夏季に開き球狀に集り淡紅色を呈し柄あり、花瓣四裂し、長き四雄蕋と一雌蕋とありて、花柱亦長し、莢は節を有し、毛あり。

花菱草（はなびしさう）　金英花（きんえいくわ）

季題解說　北米原産の草花、莖の長さ一尺内外、葉は細く裂けし羽狀複葉、莖葉共に滑かに稍白色を帶ぶ。夏日莖頭に花梗を出して濃黄色四瓣の美しき花を開く、栽培變種少なからず、露地の花として最も美しく、甘美の花言葉あり。

【例句】花菱草　花菱草黄なる蝶々まぎれけり　三木（同人）

【參考植物】はなびしさう　一名　きんえいくわ　Eschscholtzia californica, Cham.（けし科）北米加州の觀賞用植物にして、元來は多年生草本なり、莖の高さ一尺乃至一尺五寸許、葉は絲狀に細裂し、莖と共に白色を帶ぶ、花は夏日細き長き花梗を有し梗頂に一花ありて二寸内外の徑あり、日光を受けて開花す、萼は帽狀をなして開花前に落ち、花瓣は四片あり、黄色其他種々の色あり、花中に多雄蕊一雌蕊あり、花後長形の蒴果を結ぶ。

金魚草（きんぎよさう）

【季題解說】觀賞用に栽うる草、莖の高さ二三尺許、葉は長楕圓形一二寸のもの。花は初夏の頃、莖頭に金魚の游泳する狀の如き赤・白・紫等の美しきものを開く。

【參考植物】きんぎよさう　Antirrhinum majus, L.（ごまのはぐさ科）歐洲原産にして人家に栽培せらるゝ多年生草本なり、莖の高さ二尺内外、葉は披針形にして短き葉柄を有し、全邊にして對生す、花は梢に穗をなして開き、短き梗を有す、萼は五裂し、花冠は大にして、下は筒をなし上面は假面狀を呈す、二强雄蕊あり、觀賞用植物にして夏時花を開く、紅紫色白色等種々あり。

當歸（たうき）

【季題解說】園圃に栽培する宿根草、地下に多肉の根莖を有し、高さ二三尺に達す、葉は分裂せる小葉よりなる羽狀複葉にして、其質厚く深綠色、夏秋の間に枝頭に白色の小花を傘狀に綴る、根を藥用とす。

【參考植物】たうき　Ligusticum acutilobum, Sieb. et Zucc.（繖形科）山地に自生すれども、園養することせんきうに同じ、莖の高さ二三尺、葉は多數の分裂せる小葉より成れる大なる羽狀複葉にして、其質厚く、深綠色にして光澤を有し、邊緣尖銳齒を有す、葉柄往々紫黑色を呈す、夏秋の候枝梢上に白色の小花を複繖形に開く、全草に强き佳香あり、根を乾して藥用とす、藥香深し、本種は蓋し支那の當歸に非らず。

風車の花（かざぐるまのはな）　轉子蓮（てんしれん）　纏枝牡丹（てんしぼたん）

【古書校註】

【三才圖會】纏枝牡丹、柔枝倚附して（二）、花を生ず。牡丹の態度あり。

【年浪草】花彙に曰、纏枝牡丹、蔓生、莖葉鐵線の類なり。花八瓣にして、單葉、蒼白色、其狀風車に似たり。又白花あり。三四月花を開く。

註（一）物によりかゝつて。

季題解説 自生のものあれど庭園に栽植する落葉蔓性草、長き葉柄によつて他物に絡み延ぶ、葉は對生し通常三箇の小葉よりなる複葉、裏に毛あり。五六月の頃、徑三四寸ばかりの美花を開く、瓣片八枚よりなる、その形の恰も紙風車の如きより名あるものなり、花の色、青紫・薄紅・白等種々あり。轉子蓮とも稱す。有毒植物也。

例句
風車の花　白妙や名も涼しげに風車　露重（西華集）

鋸草（のこぎりさう）　羽衣草（はごろもさう）　西洋鋸草（せいやうのこぎりさう）

季題解説 山地に自生し庭園に栽培される菊科の多年生草本、莖の高さ二尺ばかり、その上方の葉腋より分枝する例なり、葉は細長くして細かく深き鋸齒を有する樣鋸の如きより此名あり。五六月の頃梢頭に白又は淡紅の花を簇がり咲かす。

實作注意 又之に類して「西洋鋸草」あり、古く希臘の戰話を殘せるもの、花言葉に「戰」の意味をもてり。

例句
鋸草　子が植ゑし鋸草や納屋の前　涼舟（同人）

參考 のこぎりさう　一名　はごろもさう　Achillea sibirica, Ledeb.（きく科）山地に自生し、又は庭園に栽培せらるゝ多年生草本、莖の高さ二尺に達し、上方葉腋より分枝す、葉は互生し羽狀に深裂し、裂片に鋸齒あり、夏日梢頭に繖房狀をなして多數淡紅色又は白色淡紅色の小頭狀花を着く、舌狀瓣小數にして短し。

草夾竹桃（くさけふちくたう）　花魁草（おいらんさう）　フロックス

季題解説 花壇の植込に栽培さるる草花、年々春に新芽を出し、莖は直立し、高さ三四尺に達し、葉は互生披針形なり、夏より秋にかけて莖頭に花筒をもつ盆形の小花を數多毬の如くに開く、色普通は紅紫なれども無色のものもありて甚だ美し。

實作注意 北米の原産にして、洋名「フロックス」、我國にては一に「花魁花」と云ひ、合意の花言葉を持つ。

例句
花魁草　暑の日の炎ゆるに燃ゆる花魁草　亞浪（石楠）

石斛の花（せきこくのはな）　石斛（せきこく）　巖木賊（いはとくさ）　少彦藥根（すくなひこのくすね）　巖藥（いはぐすり）　林蘭（りんらん）　杜蘭（とらん）

季題解説 山地の巖上或は樹木に附著して生ずる多年草。莖の高さ三四寸より六七寸、節ありて木賊の如きにより「巖木賊」とも云はる。葉は節毎

に出し、夏日になれば上部の節に通常淡紅色の美花を二つづゝ出す。栽培されて變種多し。

實作注意 此草藥用とせらるゝより古名を「少彦藥根」と云はれ、一名を又「巖藥」と稱す。漢名、林蘭・杜蘭。精を益し腎を補く。

例句 石斛の花　石斛に瀑落つる巖のはさまかな　青々（倦鳥）

石鹼草（さぼんさう）

季題解說 舶來の草花、花壇、切花のもの、莖の高さ二尺許、葉は楕圓形、互生して大なり、六七月の候白又は淡紅色の五瓣の花を開く。この葉莖を水に浸して採むときは泡立つことと石鹼水に似たるよりこの名あり。

菊萵苣（きくぢさ）　はなぢさ　朝菊（あさぎく）

季題解說 食用と觀賞とに栽培する一二年草本、莖は普通二三尺、葉は萵苣に似、花は野菊に似たる愛らしき頭狀花を初夏の候に開く、冬春の頃新葉を摘みて食ふ。

實作注意 又一に「はなぢさ」とも云ふ。また一に「朝菊」とも云ふ、此花朝に開き午前中に變色して凋るより名ありと。〔參照〕春―萵苣（ちさ）

猿猴草（ゑんこうさう）

季題解說 觀賞に栽培せらるゝ草、莖は柔かくして直立することなく地につきて廣がる、晩春より長き莖を出して黃花を開くさま猿の手を延ばせるに似たり。

例句 猿猴草　岩陰や猿猴草に入梅穴　青峰（同人）

梅鉢草（うめばちさう）　うめばち

季題解說 高原或は山麓の陽地に生ずる草。高さ四五寸、葉は厚く小さく心臓形、青く赤みなり。夏秋の候葉間に莖を抽き、中間に一葉を生じ、先端に白色五瓣の花を開く、一重にして梅の花に似たり。

例句 梅鉢　うめばちも龍膽も咲く道あやし　鬼峯（ホトヽギス）

小判草（こばんさう）　俵麦（たはらむぎ）

季題解說 一名「俵麦」と稱す。夏日鉢植として觀賞するに清涼を思はしむる草、莖の高さ一二尺に直立し、穂に垂す、葉は麦に似て細く薄く柔かな

り、夏日莖頭に小判形の花穗を垂れ、初め黄綠なるも熟して褐色となる。甚だ愛すべき草本なり。

飛燕草（ひえんさう）　千鳥草（ちどりさう）

季題解説　庭園に栽培さるゝ越年草、莖は直立して二三尺の高さに達し、葉は細き裂片に分れ互生す。初夏の候莖梢に一種奇形なる花を多數に並べ開く、色は白碧・淡紅・紫等あり、花の形燕の飛べる如きより「飛燕草」と云ひ「千鳥草」とも稱せらる。

例句
千鳥草　千鳥草白きも咲きぬ紫も　徳子（ホトトギス）

苧環（をだまき）　いとくり　絲繰草（いとくりさう）　紫苧環（むらさきをだまき）　樓斗菜（ろうとさい）

古書校註　【三才圖會】按るに、絲繰草は高さ二三尺、葉は胡蘿蔔の葉に似て二三月花を開く。白色黄を帶ぶ。形變に似たる故之を名づく。

季題解説　庭園に栽培さるゝ多年草、春宿根より芽を出し高さ一尺程に叢生す、葉は多くの切込ある帶白綠色の複葉、互生す。花は藍紫色又は白色にて五萼五花瓣のものを下方に向うて開く。後ち實を結ぶ。園藝變種多し。

實作注意　花の形より名附られたるもの、「いとくり」「絲繰草」「紫苧環」とも云ひ、樓斗菜の漢名あり。

例句
苧環　藥園やをだまきに來る白き蝶　珠鳴（俳諧辭典）

道灌草（だうくわんさう）　すゝくさ　すかくさ　瘡草（かさくさ）　王不留行（わうふりうぎやう）　剪金瓜（せんきんくわ）

季題解説　歐洲原產の越年草、莖の高さ一二尺に達す、葉は披針形にして對生す、五六月の候莖上に分枝して淡紅色の五瓣花を開く、花後小指大の五稜ある實を結び中に黑色の種子を含む、藥用なり、又觀賞に栽培す。中世江戸道灌山に栽培せられしより此の名あり。

實作注意　別名すゝくさ、すかくさ、瘡草の外、漢名に王不留行・剪金瓜等あり。

蛇鬚（じやのひげ）　りゆうのひげ　はづみだま　麥門冬（ばくもんとう）　沿階草（えんかいさう）　小麥冬（せうばくとう）

季題解説　一に「りゆうのひげ」とも云ふ。山野の林中に自生し、又人家庭園の外圍或は雨落等に植うる常綠草、葉は細長く、叢生して長さ一尺程、初夏、葉間に高さ四五寸の莖を出して少しく曲り、小形淡紫色の六瓣花を穗狀につける。花後實を結ぶ。根は連球をなして鬚あり、藥用とす。

【實作注意】此植物の種子の皮を剝ぎ、毬の如くつくによく彈くより「はづみだま」の名あり、又根は「麥門冬」と稱し鎭咳・解熱等の藥とす。漢名、沿階草・小麥冬等あり。

【例句】麥門冬

行わたる掃除や藪に麥門冬　清民（俳句大觀）

【參考】じやのひげ　一名　りうのひげ　Ophiopogon japonicus, Ker-Gawl.（ゆり科）林野に自生する常綠多年生草本なれども、人家之を植う、地下に連珠狀の根を有し、之より細長き葉を叢生す、初夏葉間に花軸をぬき、淡紫色花を綴り多少一側に傾く、外反する六花蓋にして、後碧色の實を結ぶ、卽ち此實は裸出せる種子なり。

鷺草（さぎさう）　鷺毛玉鳳花（がもうぎよくほうくわ）　連鷺草（つれさぎさう）

【古書校註】

【三才圖會】奥州處々鷺草之あり。（略）六月莖を抽きて、花を開く。正白色、雪の如し。形鷺鳥に似たり、故に名く。連鷺艸、鷺艸と一類異種。

【滑稽雜談】一種紫蕚とて、玉簪の紫花を開く者、筑紫にて鷺草と云ふ由、篤信もいへり。

【季題解說】山野の濕地に生じ、また園養さるゝ多年草、春宿根より生ずる莖の高さ尺許に達すれば細長き葉を互生す。夏の日その莖上に二三輪の白花を開く、其形ち恰も白鷺の翼をひらげて飛べるが如きより此名あり。花容の清楚頗る愛すべく、支那にては之を名づくるに「鷺毛玉鳳花」を以てす。

【例句】鷺草

鷺草の咲く林泉の濕り哉　惡志路（同人）

【參考】さぎさう　Habenaria radiata, Spreng.（らん科）山地の濕地に生ずる多年生草本にして、時に觀賞の爲めに栽培せらるゝことあり、宿根より莖を抽くこと凡一尺余に達す、葉は狹長にして尖り、夏日、梢上に白色の二三花を開く、長き距を有し、唇瓣は闊大にして邊緣細裂して美なり。

忍（しのぶ）　事無草（ことなしぐさ）　海州骨碎補（かいしうこつさいほ）

【季題解說】山地に普通なる多年草、黑褐の鱗毛を有せる根莖は長く匍匐して所々に葉を生ず、この葉羊齒の如く數回の羽狀複葉に分裂し、夏日葉裏に褐色の子囊葉を生ず。涼味ある夏の觀賞植物として釣忍とさる。

【實作注意】しのぶの文字多く葱を用ゐらるれど葱は「すひかづら」の字なれば、正しくは忍を用ふべきなり。また「事無草」と云ひ、海州骨碎補の異稱あり。【季題】忍草ナハ　人事――釣忍ハリン

【例句】忍

大岩にはえて一本忍かな　鬼城（ホトトギス）

【[illegible]者】　しのぶ　Davallia Mariesii, Moore.（うらぼし科）　山地の樹上或は岩上に生ずる多年生草本にして觀賞用としてしのぶ玉を作る、根莖は肥大にして黑褐色の毛茸鱗片を密生し、長く匍匐して處々に葉を生じ、下に根を生ず、葉は三角形の外形を有し、數回羽狀に分裂し、夏日小裂片の裏に褐色半コップ狀の苞被を有する子囊群を生ず。

虎耳草（ゆきのした）

雪の下（ゆきのした）　虎の耳（とらのみみ）　つるあふひ　ねこのみゝ　絲蓮（いとはす）　岩蔓（いはかつら）　岩露（いはつゆ）　崎人草（きじんさう）　石荷葉（せきかえふ）　金錢吊芙蓉（きんせんてうふよう）　瑠璃草（るりさう）

【古書校註】

【三才圖會】　虎尾草。（略）六月莖端に花を著く。極細白、穗の如し。末窄く（一）、獸尾に似たり。故に名く。一種淺紫色の者あり。俗呼んで、瑠璃草と曰ふ。

【滑稽雜談】　和產の石長生（カツテイソウ）をも虎尾と稱す。

註（一）末の方のせまきを云ふ。

【季題解說】　山間溪谷の濕地には自生するものなれど、多くは庭園の濕潤地に栽植せらるゝ常綠草。匍匐する枝を分け葉は心臟形にて互生す。その質肉厚く毛ありて裏は赤綠色なり、初夏の頃より秋に亘りて根際より莖を上げ白色五瓣の小花を開く、種類あり。葉は藥用とす。

【實作注意】　一名「絲蓮」「岩蔓」「岩露」「崎人草」「虎耳」と云ひ、漢名、石荷葉・金錢吊芙蓉と稱す、

【例句】

雪の下　日さかりの花や涼しき雪の下　呑舟（有磯海）

川蟹が出てふるはしぬ雪の下　子角（同人）

【參[illegible]者】　ゆきのした　Saxifraga sarmentosa, L. f.（ゆきのした科）多く山谷に自生する常綠多年草本なれども、亦庭園石間等に栽植せらるゝこと多し、葉は圓形にして毛茸多く、葉面白斑を呈す、赤紫色綫狀の匐枝は、地に臥して長く延び隨所に新苗を生ず、夏日花莖を抽き白花を開く、三瓣小に二瓣大なり、

蓮（はちす）

はす　みづきぐさ　つれなしぐさ　池見草（いけみぐさ）　露堪草（つゆたへぐさ）　水堪草（みづたへぐさ）　露玉草（つゆたまぐさ）　紅蓮（べにはす）（グレン）　朝鮮蓮（てうせんはす）　白蓮（しろはす）（ビヤクレン）　餅蓮（もちはす）　支那蓮（しなはす）　達磨蓮（だるまはす）　中蓮（ちうれん）　茶碗蓮（ちやわんはす）　高麗蓮（かうらいはす）　藥藕草（やくぐうさう）　蓮の花（はすのはな）　蓮花（れんげ）　蓮の莟（はすのはな）　藕花（ぐうくわ）　水華（みづはな）　君子花（くんしくわ）　花の君子（はなのくんし）　蓮の香（はすのか）　蓮の露（はすのつゆ）　蓮池（はすいけ）　採蓮歌（さいれんか）

【古書校註】

【御傘】　落葉も夏也、大液の芙蓉（一）も同前。蓮の實（二）も同前。秋といふ

人不レ用レ之、餘の葉草のみにかはりて花と共に、蓮は實を結ぶもの也。

【山の井】九品の蓮臺(三)をも、(四)中將姬の手織をも思ひよせ侍る。猶太液の芙蓉の貳なかりしかほばせをめで、(五)花の君子といへる心ばへをもしたつ。

【滑稽雜談】殊に城州伏見向ひ嶋、江州志那の江湖に多し。近代又唐蓮或は錦蓮など、至て荷花葉共にちいさき者、其形皆一也。只磁器畫盆に植て、席上几案(六)の下に花を開くを愛するならし。

【年浪草】周茂叔愛蓮說に曰、蓮は花の君子なる者也。（略）〇蓮の異名〇池見艸〇露堪艸〇水堪艸。

註 （一）漢の武帝の作りし池 白居易の詩に「大液芙蓉未央柳」とあり （二）蓮の實は他の植物と異つて花と同時に生ずる。故に夏の季になるの意 （三）極樂の九の等級上中下の三品、其各又上中下の三級がある。蓮臺は蓮座に同じ。（四）當麻曼陀羅は中將姬の作る也、當麻寺の條參照 （五）周茂叔愛蓮の說、所引の年浪草參照。（六）机。

季題解說 池沼又は水田等の淺水中に栽培せらるる多年生植物。地下に肥大なる根莖を長く有し、狹まりて明瞭なる節を具へ、節間には多くの縱に走る管狀の空隙を有す、卽ち食用に供する「蓮根」なり。葉は圓く楯形にして高く水上に出で、大なるものは直徑二尺餘に達す。夏日花莖を抽き花瓣多數の大花を開く、紅色と白色とあり、よく芳香を放つ。花後花托生長し倒漏斗形をなし、上面の小孔中に椎の實の如き實を藏す。その形蜂の巢の如きより「はちす」と名附られ「はす」と約すに至る。種類多し。

▽紅蓮 一名朝日蓮、葉は大形、根莖亦肥えて大きく、外皮肉ともに灰色を帶ぶ。花は淡紅又は紅色なり。

▽白蓮 一名餅蓮、形狀稍小なれども外皮白く肉質に粘あり、故に餅蓮と云ふ。花色また純白なり。

▽支那蓮 一名[illegible]蓮、葉は最も大形、根莖甚だ太く、節間短く、外皮褐色なり、花は白色赤斑あり。

▽中蓮 根莖大ならざるも、大なる花を開くより觀賞方面に發達し多く品種を出す。

▽茶碗蓮 一名高麗蓮、前種より尚小形にして盆に養はる。

補說 蓮の葉は多少[illegible]の綠色、上面は蠟質よく發達し細毛の空氣を含めるより、雨を撥き玉露の如く轉々せしむるより「露玉草」「水堪草」「露玉草」とも云ふ。又「池見草」とも云ふ。漢名に、荷・[illegible]草等あり。又花は、[illegible]・蓮華・蓮花・水[illegible]また、君子花と云ひ愛蓮說に「蓮花君子者也」と評され、

とく起よ花の君子をとふ日なら 召波 （五車反古）

など句あり、葉は、荷葉・蓮、實は、蓮子・蓮肉・蓮的、花托は、蓮房・蓮[illegible]、[illegible]は、荷[illegible]・荷蕅、根は、荷根・藕根と稱す。熱帶亞細亞の原產なるも我國には支那より渡來せしものとも傳へられ古來詩歌に多くその清美を賞はるる所たり。また蓮葉を用ゐて蓮飯をつくり、花を用ゐて蓮茶を喜び、其他

食用に薬用に供せらる。【参照】蓮の浮葉　蓮の葉　鬼蓮　人事―蓮飯　蓮茶　蓮見　秋―蓮の實　冬―蓮根掘る

例句

蓮

さは〳〵と蓮うごかす池の龜　鬼　角　（鬼貫句選）
香一爐蓮に錢を包みけり　其　角　（五元集拾遺）
そよがさす蓮雨に魚の兒躍　素　堂　（素堂句選）
鳥うたふ風蓮露を礫けり　同　（同　）
　開かんとする時筆に似たり
己つぼみおのれ畫て蓮かな　同　（同　）
佛めきて心置かるゝ蓮かな　秋　色　（類題發句集）
戸を明けて蚊帳に蓮の主人哉　蕪　村　（遺　稿）
　蓮を贈られて
先いけて返事書也蓮のもと　太　祇　（太祇句選）
茂助田に愛すともなき蓮哉　几　董　（井華　集）
いゐの香に朝氣の蓮を愛す也　同　（同　）
剃捨し髪や涼しき蓮の絲　同　（同　）
明方や水も動かず蓮匂ふ　大　魯　（蘆陰舍句選）
莟を葉におく風の蓮かな　曉　臺　（曉臺發句集）
雀等が浴みなくしけり蓮の水　一　茶　（旅　日　記）
吼犬もしづまる蓮の夜明哉　成　美　（成美家集）
蓮の絲蓮の莖をも詠れけり　乙　二　（松のゝえ草稿）
　古白百ケ日
蓮咲いて百ケ日とはなりにけり　子　規　（全　集）
夜の闇にひろがる蓮の匂ひ哉　同　（同　）
支那鉢の大きなものに蓮哉　月　斗　（同　人）

白蓮

白蓮を切らんとぞ思ふ僧のさま　蕪　村　（句　集）
白蓮に人影さはる夜明かな　蓼　太　（蓼太句集）
白蓮に夕雲陰るあらしかな　白　雄　（白雄句集）

蓮の花

佛珍のふるきもたへや蓮の花　蕪　村　（句　集）
蠢ねぶる身の尊さよ蓮の花　士　朗　（枇杷園句集）
剪るをりに行合せけり蓮の花　蒼　虬　（蒼虬翁發句集）
蓮の花三輪にして池狹し　子　規　（全　集）

蓮華

やゝ廣き水に來てゐる散蓮華　みづほ　（ホトヽギス）

蓮の香

　木間庄馬亭
蓮の香に目をかよはすや面の鼻　芭　蕉　（笈　日　記）
蓮の香や田は仕付たる水の後　沾　德　（俳諧五子稿）
蓮の香や水をはなるゝ莖二寸　蕪　村　（句　集）
　座主のみこのあなかまとてやをらたち入給ひけるいとたうとくて
罹に遮る蓮のにはひかな　同　（同　）

蓮の香や深くも籠る葉の茂　太祇（太祇句選）

寄蓮戀
蓮の香の深くつゝみて君が家　同（同　）

蓮の香をうしろにしたり岡の家　一茶（享和句帖）

蓮の香に起きて米炊くあるじ哉　巣兆（曾波加里）

蓮の露
濡笠にうけ合せけり蓮の露　丈草（丈草發句集）

引寄て蓮の露吸ふ汀哉　太祇（太祇句選）

蓮池
蓮池の田風にしらむうら葉哉　蕪村（遺稿）

蓮池やその寺建た土の跡　乙由（古人五百題）

採蓮歌
何いうて唱く舟ぞ採蓮歌　召波（春泥發句集）

【參考】 はす Nelumbo nucifera, Gaertn.（ひつじぐさ科）蓋し印度産若くは埃及の原産、池沼又は水田に栽培せらるる大なる多年生草本なり、大なる長き根莖を有し、葉は圓く楯形にして、高く水上に挺出し、大なるものは葉徑二尺餘に達す、夏日、花梗を抽き大なる淡紅色若くは白色の美花を開く、果實は膨大せる樹存花托の内に熟す、根莖の肥大部を蓮根と稱して食用に供す、種子も亦食せらる。

蓮（はす）の浮葉（うきは）

浮葉（うきは）　蓮（はす）の水葉（みづは）　蓮（はす）の錢葉（ぜには）　錢荷（せんか）

【古書校註】

【年浪草】荷葉は（一）淸明の後初めて水に貼す（二）。四月水面に布て生ず。之を浮葉と謂ふ。

註（一）春分の次の氣節三月五日頃（陰曆）。（二）水の上につく。

【季題解說】 蓮は宿根、四五月の候より新葉を生ず、その初に生ずるものは水に貼きて泛ぶ、形大ならず、之れを浮葉と云ふ。

【實作注意】 一に「蓮の水葉」とも云ひ、又れた小さきより「蓮の錢葉」とも稱へ錢荷の字を充つ。

さゞ波や蓮の葉こゆる朝嵐　吟江（雅薇日記）

なども浮葉を詠めるもの也。【參照】蓮（六一）　蓮の葉（六二）

【例句類題】

一葉浮て日に昔ぬる蓮かな　素堂（素堂句集）

浮葉卷葉立葉折葉とはちすらし　同（同　）

蓮一葉うくやうれしきものゝ數　乙二（をのゝえ草稿）

波なりにゆらるゝ蓮の浮葉哉　子規（全集）

一面に蓮の浮葉のこまぐと　虚子（ホトヽギス）

浮葉卷葉此蓮風情過たらん　素堂（素堂句集）

蓮池の深さわするゝ浮葉哉　荷兮（春の日）

[illegible]も三つ四つ蓮のうき葉哉　蕪村（句集）

蓮[illegible]のせばい中にも浮葉かな　[illegible]水（をだ卷）

蓮の葉　蓮の巻葉　蓮の立葉　蓮の折葉　荷葉

【季題解説】浮葉の初生時代を過ぎたる蓮の葉は、潔く水を抽きて莖を立て、初め斜に卷葉を見せ、後ち之を開く、圓く濶く綠色の葉面よりは一種の微かなる香氣を放つ。尙ほ蓮の項も見よ。

【例句】

蓮の葉　蓮の葉や心もとなき水離れ　白雪（續猿蓑）
起出でていざ蓮の葉の雨聞かん　芋秀（新選）
蓮の葉に硯の水を流しけり　可曉（西華）
橋裏に吸ひ著いてゐる蓮廣葉　たかし（ホトヽギス）

蓮の卷葉　法華經に似たる蓮のまき葉哉　立圃（空礫）
あしらひて卷葉添へけり瓶の蓮　太祇（太祇句選）
瓶の蓮ことしも卷葉ばかり也　召波（春泥發句集）

蓮の立葉　風の上の露は蓮の立葉哉　紹巴（大發句帳）
蓮はまだ立葉も見えず杜若　句空（類題發句集）

蓮の折葉　立つ鷺の羽風に蓮の折葉かな　自笑（千鳥掛）

鬼蓮　芡の花　水蕗　みづふぶき　茨蕗　いばらばす　芡　雁啄　雞雍

【季題解説】池澤中に生ず、全體刺を以て被はる。葉は蓮と同じく楯狀をなし下面は紫色を呈し、葉脈凸起して一面に皺をなす。夏日莖を出して一花をつく、初め鳥の嘴の如く、開けば四瓣四層紫色なり。別に南洋產の大鬼蓮の一種あり。

【實作注意】一名「みづふぶき」「水蕗」又は「茨蕗」と云ひ、芡・雁啄・雞雍等の稱あり。【參照】蓮

【例句】

鬼蓮　鬼蓮の池をとぢたる暑さ哉　津富（古今句鑑）

【參考】おにばす　一名　みづぶき　Euryale ferox, Salisb.（ひつじぐさ科）池水中に生ずる一年生草本なり、全體刺を以て蔽はる、葉は其形圓くしてはすと同じく楯形をなし、上面は皺をなし、下面は紫色を呈して葉脈凸起す、大なるものは通常直徑三四尺に達す、夏日、長梗を出して一花を着く、花の長さ一二寸ありて僅に水面に出でゝ開く、四萼片、紫色多瓣花、多雄蕊あり、子房は下位にして八室に分る、種子を食用とす。

睡蓮　未草　鼈蓮　小蓮華　子午蓮

【古書校註】【滑稽雜談】時珍本草に曰、段公路が北戸錄に云、睡蓮有り、萍蓬草之類

也。其葉荇の如くして大、其花莖を布きて數重る。夏に當り其花を開く。夜縮みて水に入る。晝亦た出づ。和俗、ひつじ草と稱す。上の説のごとく、未の時より花萎む故とも、又日の中開く故、晝の當時と云ふ心ともいへり。江湖に多し。

【季題解説】池沼に生ずる多年生の水草、根莖は水泥底の土にありて多數の葉を水面に浮ぶ、葉は圓く其部は深く裂けて箭形をなす。表は深緑色なれど裏は淡紅紫色なり。夏日、泥中の地下莖より花梗を長く出して、大さ一二寸より三四寸の蓮に似て清秀なる白花を開く。この花朝に開き夕に閉づるより睡蓮と稱せらる。花の後實を結び、熟すれば自ら水中に沈むる作用をなす。

【實作注意】和名を「未草」と云ふも未の刻（午後二時頃）より閉花するよりの意味にて、一に「綿蓮」「小蓮華」と云ひ、「子午蓮」と稱す。また花言葉に心の純潔を意味するも此花の清美を想はしむ。瓦鉢の水盤にも栽培され夏日の花として甚だ涼し。〔參照〕河骨（カウホネ）

【例句】

睡蓮

睡蓮は皆花閉ぢつ宵の星　月斗（同人）

睡蓮や御縁日なる寺の池　美郷（同）

睡蓮のこぞりしりぞく風のあり　代々木池苑　野風呂（ホトトギス）

睡蓮や御釣魚臺の札古りて　浪々（同）

燕子花（かきつばた）

杜若（かきつばた）　かいつばた　かに花（ばな）　かほよ花（ばな）

【古書校註】

〔年浪草〕本邦古來燕子花を以て杜若となし、或は劇草を用て、加岐豆波太と訓ず、共に誤也。劇草は馬藺、杜若は藪茗荷也

〔三才圖會〕燕子花、其葉白菖に似て大也。色淡く、其花實共に白菖に似て、肥大なり。紫色を正とす。近年淺紅の者、白色の者を出す。皆變種也。五月盛りとなす。又四時花を開くものあり。參州八橋（一）の産名を得たり。

〔滑稽雑談〕八雲御抄に曰、かほ花萬葉うつくしき花也。仙覺萬葉抄に云、かほ花は杜若也　貝鳥の喙とき、さけばかほ花と云ふ。

註（一）參河の國にあり。かきつばたの名所。伊勢物語にも見ゆ。

【季題解説】形容溪蓀に似たれども全體に大形なり。池沼水邊の濕地等に生ずる多年生の草本、地下に太き根莖あり、葉は劍狀に叢生し、高さ二三尺、夏日叢葉の中央より花莖を出し頂に紫・碧・白・紅等の花を開く、亦あやめに似たり。

【異名解説】一名「かほよばな」とあれども、「貌好草」は芍藥の異名なれば紛はし、又「杜若」の字を用ゐれども大和本草に依れば杜若は「藪茗荷」の類なりとあり。一[illegible]溪蓀、花菖蒲、[illegible]白菖[illegible]

例句

燕子花

切る人やうけとる人や燕子花　太祇（太祇句選）
燕子花咲や日照りの朝曇　浪化（浪化上人發句集）
かきつばた似たりや似たり水の影　芭蕉（續山井）

杜若

杜若われに發句の思ひあり　同（千鳥掛）

大江の宿り

杜若語るも旅のひとつかな　同（芭蕉翁全傳）

宗祇舊蹟

有がたき姿拜まん杜若　同（泊船集）
手のとゞく水際うれし杜若　同（芭蕉句選拾遺）
簾まけ雨に提げ來る杜若　其角（五元集）
かきつばた疊へ水はこぼれても　同（同）
紫の蜘もありけり杜若　同（同）
澤瀉の鑓を引く也かきつばた　同（五元集拾遺）

島田の宿にある俳を訪ふ

やすき瀬を人に教へよかきつばた　嵐雪（玄峰集）
咲中に紫ばかりかきつばた　來山（今宮草）
朝酒やまだ兒起ぬ杜若　言水（俳諧五子稿）
かきつばた花あるうちは降れ曇れ　杉風（杉風句集）
日あたりや紺やの裏のかきつばた　許六（五老井發句集）
翡翠のまぎれて住歟杜若　桃隣（古太白堂句選）
足洗ふうちや釣瓶に杜若　也有（蘿葉集）
きつゝまだ馴ぬ袷やかきつばた　同（同）
行春の水そのまゝやかきつばた　千代女（千代尼發句集）
かきつばたべたりと鳶のたれてける　蕪村（句集）
宵々の雨に音なし杜若　同（同）
貧乏な御下屋敷や杜若　同（新五子稿）

六雲を訪問

京の水藍より出でゝ杜若　同（落日庵句集）
今朝見れば白きも咲けり杜若　同（同）
雨の日は行かれぬ橋やかきつばた　同（同）
かきつばたやがて田へとる池の水　同（同）
切る人の帶とらへけり杜若　同（同）
雨に倦く人もこそあれかきつばた　同（同）
泥の干る池あたらしや杜若　同（同）
かきつばた魚や過ぎけん葉の動き　几董（井華集）
等閑に杜若咲く古江かな　同（同）
かきつばた深く住む戸に鳴子哉　召波（春泥發句集）

鍵の手の寺前の池やかきつばた　同（同）
寸穢もてみやげにくれし杜若　同（同）
杜若門から覗く貴屋鋪　同（同）
女繭なら舟へと申せ杜若　同（同）
かりそめに見て過ぎかたしかきつばた　樗良（樗良發句集）
鼻紙に足ふく人や杜若　曉臺（曉臺發句集）
わりなきや道々開くかきつばた　同（同）
昔女はらからすめりかきつばた　同（同）
かきつばた穗麥の變に立ならび　同（同）
鶴越に使は來りかきつばた　蓼太（蓼太句集）
何鳥の冠に著せんかきつばた　同（同）
人々の扇あたらし杜若　同（同）
宵に人たちもとふるやかきつばた　白雄（白雄句集）
通ひ路に障子わたすやかきつばた　一茶（發句集）
杜若花のそばよりつぼみ哉　成美（成美家集）
賣澤や一輪見ゆるかきつばた　蒼虬（蒼虬翁發句集）
燈を見せて猶剪にくし杜若　梅室（梅室家集）
人について麥わけゆけば杜若　同（同）
飲のわかぬ池の淺みや杜若　吟江（推葉日記）
杜若卍ほろりと開けたり　鳴山（新選）
古溝や只一輪の杜若　子規（全集）
三河路や名もなき橋の杜若　同（同）
八橋を賣る茶店あり杜若　同（同）
かきつばた咲くや水田の鷺の中　同（同）
杜若うつりて遠き渚かな　泊月（ホトヽギス）
白になり紫になり杜若　默禪（同）

外三片は長くして立ち花蕊柳をたれり。

參考　かきつばた　Iris laevigata. Fisch.（あやめ科）水邊等に生ずる多年生草本なり、通常栽培せらるれども亦野生あり。高さ二三尺許、葉は廣き劍狀を呈し中央に隆起脈なく、鮮綠色にして柔かなり、夏日莖頭に數花を開く、紫色を普通とし、白色・淵色等の異品あり、外花蓋三片は楕圓形を呈して下垂し、內花

溪蓀（あやめ）　はなあやめ　紅眼鸚（こうがんらん）

【古書校註】

【和漢三才圖會】大和本草に曰、（略）本草綱目に二種あり、一種は池澤に生じ、根大にして葩二、白く、節疎なる者白菖也。俗に之を泥菖蒲と謂ふ。一種は溪澗に生ず。根痩せ細く、節稍密なる者は溪蓀也。俗に之を水菖蒲と謂ふ。

圖（一）花。此の說（白菖）の部を參照すべし。

【季題解說】通常人家に栽植さるゝ多年生の草本、地下莖は橫臥して細長き劒狀葉を叢生す、その基部は紅色を帶ぶ。初夏の頃葉間より花莖を抽きて二三尺。頂きに通常二三の大花を開く、花は略花菖又は燕子花に似て碧紫色或は菫色にて優美なり。

【實作注意】昔「あやめ」と呼びしは今の「しやうぶ」の事なれば本花と混同され易く、本花の稱へは「花あやめ」の略なり。紅眼鸚の稱あり。[參照]

燕子花（カキツバタ）　花菖蒲（ハナシヤウブ）　白菖（ハクシヤウブ）

【例句】

あやめ　片隅にあやめ咲きたる門田かな　子規（全集）

はなあやめ　花あやめ九條はむかし揚屋哉　月居（新選）

【參考】あやめ Iris sibirica L. var. Orientalis Maxim.（あやめ科）山原に自生する多年生草本なれども、通常觀賞用として庭園に培養せらる。莖の高さ一二尺、葉は細長し。五六月頃葉中より莖を抽き頂に紫色又は白色の花を開く。外花蓋三片は下垂し大にして闊く其柄部に網狀脈を有す。內花蓋三片は花柱より長くして廣し。

花菖蒲（はなしやうぶ）　玉蟬花（ぎよくぜんくわ）　菖蒲園（しやうぶゑん）　菖蒲池（しやうぶいけ）　野花菖蒲（のはなしやうぶ）

【古書校註】

【滑稽雜談】大和本草に云、是れ和花にして花も葉も花あやめに似て大なり。燕子花より葉小なり。四月に花開く。紫白あり。水陸共に宜し。

【季題解說】水邊の濕地に栽培せらるる多年草、地下莖より葉を出し、高さ二三尺に達す。葉は細長く劒狀に尖り、その基部抱き合ひて直立す。初夏の頃、葉間に花莖を出してその頂に美しき大形の花を開く、色は濃紫・淡紫・白

斑等種々あり。

【實作注意】花容の似たるより溪蓀・燕子花と混同され易きも本花の葉には高き中肋の脈あれば、區別し得べし、此花古く「花かつみ」と稱せられたりとの說あれど、異說ありて定かならず。漢土にては「玉蟬花」と云ふ。

同類　燕子花　溪蓀　白菖

【例句】

花菖蒲

きる手元ふるひ見えけり花菖蒲　其角（五元集拾遺）

片隅に菖蒲花咲く門田哉　子規（全集）

堀切や菖蒲花咲く百姓家　同（同）

【參考】はなしやうぶ Iris Kaempferi, Sieb.（あやめ科）水邊濕地に栽培せらるゝ多年生草本なり、高さ二三尺に至る、葉は劍狀を呈し、通常多少青みがゝりたる綠色をなし中肋隆起す、初夏の頃、葉中より一の莖を抽きて頂に花を開く、紫色その他種々あり、紫の外列片は圓大にして內列片は小なり、原種は山原の乾地に生じ赤紫色の花を開く、野はなしやうぶと稱す。

白菖

菖蒲　水菖蒲　あやめ　あやめぐさ

【季題解說】沼池水邊に自生する多年生の草本にして、南天星科に屬するもの、地下に長き根莖を匍匐し、年々之れより葉を簇生す、葉は劍狀にして明瞭なる中肋ある平行脈あり。大なるものは長さ四五尺に達するものあり、根葉共に特種の芳香を有す、初夏簇葉の間に花軸を出して穗狀の淡黃小花を開く。

【實作注意】端午の節物として軒に懸け、或は菖蒲酒をつくり、菖蒲湯を立つるもの、古くは「あやめ」「あやめぐさ」と稱せられてありしより、鳶尾科の「溪蓀」と混同され、又しやうぶの同音なるより、これも鳶尾科の「花菖蒲」に思ひ誤まられゐるものなれど、白菖は南天星科にて鳶尾科のものと異り美しき花を有つものにあらず、穗の如き小花を綴るばかりにて、其葉を端午に用ゐ或はそれより香水の原料を取る外、花を觀賞するものにあらず。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒　芭蕉（奥の道）

[illegible]

たゞは白菖を詠めるものなり。又菖蒲の字を用ゐれども菖蒲實は「石菖」の稱なり。【參照】燕子花　溪蓀　花菖蒲　人事　菖蒲湯

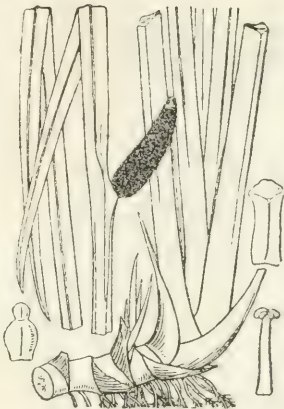
例句

菖蒲

澤にあるうちは名たゝぬ菖蒲哉　千代女（千代尼發句集）

引き盡す菖蒲の跡や田のつもり　桃隣（古太白堂句選）

菖蒲提げて女行くなり柳橋　子規（仝集）

參考　しやうぶ　Acorus Calamus. L. var. angustatus, Bess.（てんなんしやう科）池沼の水邊に生ずる多年生草本にして、地下に長き根莖を有し、年々之より劍狀の平行脈葉を簇生し、大なるものは長さ三四尺に達す。初夏、葉間に花軸を抽きて肉穗花序をなし、淡黃色の小花を着く。昔は之を「あやめ」と稱せり。

唐菖蒲（たうしやうぶ）　和蘭菖蒲（おらんだあやめ）　グラヂオラス

季題解說　舶來の多年生草「和蘭菖蒲」とも云ひ、一般に「グラヂオラス」として知らる。春日、地下の球莖より劍狀の葉を生じ、夏日葉間に花莖を抽くこと三尺、上部に多數の花を側方に向つて並び開く。紅色・淡紅色・白色等種々あり。【參照】花菖蒲　白菖

例句

グラヂオラス

いけかへてグラヂオラスの眞赤哉　松葉女（ホト、ギス）

石菖（せきしやう）　石菖蒲（いしあやめ）

古書校註　【滑稽雜談】時珍本草に曰、按るに臞仙神隱書に云ふ石菖蒲、一盆を几上に置き、夜間書を觀れば則烟を收めて目を害するの患なし。（略）四時ありて、最淸玩とす。夏に許用する事、新葉出る時をいふか。

季題解說　水邊の石間等に發生し深綠色にて冬も枯れざる多年草、往々庭園の雨落ち等に栽植せらるゝことあるもの。葉は劍狀に甚だ細く叢生す。初夏の候、葉間より花莖を出し、圓柱狀に淡黃色の小花を穗の如くつく。變種多く矮小種は夏期の盆栽として觀賞せらる。

實用注意　此植物　菖蒲の如き香氣をもち　浴湯料に用ひらる。地下莖の乾燥

したるものを漢藥にて石菖と云ひ頭痛傷胃に用ふ。古くは「石あやめ」と云へれば、本來は菖蒲の名稱を有せしものなりし。然れども今は用ふべからず。【參照】 白菖ウブ 庭石菖ニハゼキ

【例句】

石菖 白露を石菖に持つ價かな 其角（花摘）

石菖に月の殘りや軒の下 猿雖（類題發句集）

【參考】 せきしやう（菖蒲） Acorus gramineus, Soland.（てんなんしやう科）溝の邊などに自生する多年生草本にして、時に庭園等に栽植せらるゝことあり。葉は常綠にして劍狀をなし、細長く中肋を有せず、初夏、圓柱狀なる黄色肉穗花序を出し、多數の小花を着く、花蓋は六片より成り、雄蕊は六箇を有す、多くの變種ありて、矮小種を盆栽とし賞觀す。

庭石菖（にはぜきしやう）

【植物解說】 栽培品種、莖は短かく、葉は叢生して株をなし鬚根をもつ。葉は細長く劍狀にして先尖り、長さ二三寸、概形石菖の葉に類す。初夏の候叢葉の間より花莖を抽きて六片の花被よりなる小花を開く。淡紅・紅紫・碧紫等種々の色あり。

【實作注意】 元來北米原產にして初め庭園の觀賞にされしも、今は野生の狀となれり。花は晴天によく開き、曇雨の日には閉づる性あり。【參照】 石菖セキシヤウ

アイリスイリス　アイリス

【植物解說】 鳶尾科の球根植物、渓蓀の類にして、丈け二三尺、葉は鳶尾に似たり。初夏の頃に開花し、色は白・淡黄等にして種類多し。【參照】 渓蓀アヤメ

【例句】

アイリス アイリスの咲けばこひしきあやめかな 沼蘋女（ホトヽギス）

百合の花（ゆりのはな）

鬼百合（おにゆり） 鐵砲百合（てつぱうゆり） 笹百合（ささゆり） 姬百合（ひめゆり） 雀百合（すずめゆり） 鹿子百合（かのこゆり） 車百合（くるまゆり） 山百合（やまゆり） 黑百合（くろゆり） 博多百合（はかたゆり） 透百合（すかしゆり） 兒百合（ちごゆり） 袂百合（たもとゆり） 早百合（さゆり） 竹島百合（たけしまゆり） 野姬百合（のひめゆり） 細葉百合（ほそばゆり） 野百合（のゆり）

【古書摘要】

【滑稽雜談】 和に云、獸にさゆり花などいへり。異名を光草と云ふ。（略）【鬼百合】時珍本草に曰、紅花六瓣、四垂せざる者山丹也。（略）大和本草に云、鬼百合は山丹也、五月に花を開く、又鹿子百合と云ふ者花深紅色、是も山丹の類也 【車百合】時珍本草に曰、（略）紅花黄を帶び、六瓣四垂、上に黑斑點あり。（略）（一）百合の類にては花最も大きし、故に鬼の名あるか。

【三才圖會】 【鐵百合】 花は白色、瓣二つ厚く大にして、上に向ふ。或

は横に垂る。最愛すべし。本荒球の深山渓谷の間に出づ。之を得難し。人縄に縋りて下りて、纔に一株袂に入れ復縋りて上る。故に袂百合と名けて珍重とす。「黒百合」凡そ花に黒色の者之無し。惟此紺色愛すべし。本奥羽より出づ。（略）「透明百合」白紅黄色の數種あり。上に向ひて、開く。花鮮明にして美なり。奥羽より出づ。佐渡越後亦之あり。「博多百合」花黄白色、背赤斑の文理(三)あり。「兒山丹」花小く美にして莖矮く、甚愛すべし。江戸より出づ。「車百合」（略）卷丹の別種なり。葉略濶く、對生し、車輪の如し、故に車山丹と名く。其花舞捲轉り、横に垂る。

【年浪草】「鹿子百合」花肆に云ふ、白花紫點ありて、其花横に白く開く。此點ある故に、鹿子百合と謂ふ。

註（一）其諺の自說也。（二）花。（三）あやとすぢ。

季題解説　百合は宿根多年生の草、地中に多肉の鱗片よりなる所謂鱗莖を有し、葉は多く披針形なり。初夏の頃より美しき大花を開く。古來より盛に栽培せられ種類甚だ多し。

▽鬼百合　山野に自生するあれど園圃に栽培す。鱗莖大きく、莖は紫黑色を帶び高さ四五尺に達す、葉腋に紫黑色の珠芽を生ず。夏日枝上に小枝を分ちて、黄赤色に紫色の小點を散在する大形の花を開き蘂を長く外に出す。鱗莖は食用とす。

▽鐵砲百合　觀賞に栽培せられ盛んに輸出さる。高さ一二尺、花は白色、香氣强く、側方に向くさま喇叭の如し。一名「爲朝百合」。

▽姫百合　山地に自生するものあれども多く庭園に栽培す、鱗莖小さく數顆集合し、大なるは二尺、小なるは一尺、葉細長し、花は紅白の二種あり。花期早し。

▽笹百合　山地に自生す。高さ二三尺、葉は立ち、花は大形淡紅色のもの莖頭に一花をつく。

▽鹿子百合　觀賞用、高さ二三尺、花は大形にして美しき數花を開く、色淡紅に濃紅色の突起ありて花片著しく反る。

▽車百合　高山に自生す。高さ二三尺、下部の葉は輪生す、花は黄赤色に暗紫色の斑點ありて、稍下方に向つて開く。

▽山百合　山野に自生す。高さ四五尺、葉の先端尖る、花は白色内面に暗紅色の斑點を有し香氣高し。鱗莖は食用となる。

例句

百合の花

わすれ草もしわすれなば百合の花　素堂（五子稿）

百合の花折られぬ先にうつむきぬ　其角（五元集拾遺）

飴賣の箱にさいたやゆりの花　嵐雪（玄峰集）

世の露に傾き安し百合の花　支考（蓮二吟集）

胸を病む人を似せてや百合の花　也有（蘿葉集）

かりそめに早百合生ケたり谷の房　蕪村（句集）

朱硯に露かたぶけよ百合の花　同（道草）
百合あまた束ねて涼し伏見舟　召波（春泥發句集）
草臥や百合になぐさむ鳳來寺　曉臺（曉臺句集）
空ざまにゆり咲く日を稟るかな　同（同）
傍向きし百合に雨降る垣根哉　闌更（半化坊句集）
星の夜も月夜も百合の姿かな　同（同）
我見ても久しき蕗や百合の花　一茶（享和句帖）
古家や草の中より百合の花　成美（成美家集）
我宿は夜さへ見ゆる百合の花　同（同）
百合切て並べて置くや草の上　蒼虬（蒼虬翁發句集）
蜘の絲ひくやねおむく百合の花　梅室（梅室家集）
隱れ家のもの／＼しさよ百合の花　子規（全集）
うつぶけに白百合さきぬ岩の鼻　同（同）
宿の浴衣百合の花粉にふれて來し　松宇（筑波）
草山の百合は模樣を見るやうな　潮光（倦鳥）

胡蝶花（しやが）　渉莪（しやが）　著莪（しやが）　金萱花（きんけいくわ）　藪菖蒲（やぶしやうぶ）　姫しやが

古書校註

【和漢三才圖會】射干（やかん）・野萱花・草薑・黄遠・仙人掌・紫金牛。（略）按ずるに本草綱目に射干と鳥扇と一物となす。（略）其の二物、莖・葉・花の形狀各別也。（略）射干は葉烏尾に似て濶く、段々葉を抱きて上り生ず。中心に一莖を抽き、高さ三四尺、七月花を開く。萱草花に似て、六辨黄赤（略）實を結び、房を作る。（略）一種小射干（略）葉小にして、長さ六七寸、石菖の葉の如し。花赤小く、淺紫、略菖蒲花に似て小く、美しく愛すべし。

【滑稽雜談】三才圖會に曰、金萱花、一名高良薑。紫・白金・黄の三色あり。鼓吹風に花を逃て[illegible]搖蕩するが如し。婦人之をとりて飾となす、（略）（二）貴人云ふ、俗の渉莪と稱する者は、金萱花なりと。惣じて又圖會を管見するに其圖まことによく合せり。和産の者花開く、萼（ここに紫白あり）一、貴に金萱を帶ぶ、徒圖上の説に合せり。異説に、胡蝶花ともいへり、其花の形蝴蝶に似たれば、云なるし。俗又藪菖蒲とも云ふ、從水尾帝御製俳諧に　にごらずば花もほとけよ床の[illegible]の渉莪。

【三才圖會】又世俗所ふ所の鳥扇は、乃射干にして、射干は乃ち鳥扇也。其に形狀を以て之を辨ずれば則自ら明らけし。

註（一）以下其諸の自説なり。（二）はな。

植物圖説　林下陰濕の地に自生する多年生の常綠草、地下莖より葉を扇子狀に叢生、葉は劍狀にて長一尺餘、質厚く光澤ある綠なり。初夏の頃葉中より花莖を抽くこと一二尺、小葉を着して上端に數花を開く、形ち鳶尾に似て

小さく、白色に紫暈あり、中心に黄色の斑ありて美し。（[illegible]）射干ファ

例句 しやがの花 濁らずばなれも佛ぞしやがの花 來山（續いま宮艸）
花 筍に插り添たりしやがの花 几董（井華集）
藪陰にうす日さしゐつ胡蝶の花 雪間女（同人）

参考 しやが Iris japonica, Thunb.（あやめ科）陰地に生ずる多年生草本なり、葉の高さ一二尺に達す、葉は常綠にして深綠色を呈し廣くして厚く光澤あり、四五月頃葉中より花梗を出して花を開く、白くして紫暈あり中心黄色を呈し頗る美なり、花梗は數箇の枝に分れ、花蓋片は毛狀の鋸齒を有す、花後實なし。

澤瀉（おもだか） 花慈姑（はなくわゐ） 生藺（なまゐ） 野茨菰（やしこ） 剪刀草（せんたうさう）

季題解説 池沼・溝・水田等に自生して全體慈姑に似てそれより小形の多年生草。地下に塊莖を有し、春日葉を叢生す。葉の形慈姑より痩せて小さし。夏日葉間に莖を出し、二三枝を分ちて三瓣白色の花を開く。泉水に栽ゑ水盤に活けて夏季の觀賞花たり。

實作注意 慈姑は其花を開くこと稀なれど澤瀉はよく開花するより「花慈姑」の名あり。漢名、野茨菰・剪刀草と稱し、古名を「生藺」と云ふ。又この花と葉を應用して紋所に用ゐるは人の知る所なり。

例句 澤瀉 やれ壺に澤瀉細く咲にけり 鬼貫（鬼貫句選）
澤瀉や弓矢立てたる水の花 素堂（俳諧五子稿）
澤瀉は水のうらかく矢尻哉 蕪村（落日庵句集）
澤瀉や花の數そふ魚の泡 太祇（太祇句選）

参考 おもだか Sagittaria trifolia, L. var. typica,（おもだか科）池溝廢田等に多く生ずる多年生草本なり、葉形くわゐに似て痩小、球莖も甚小し、夏日葉間に花莖を抽き、二三枝を分ちて圓錐花序に白花を開く、三瓣花にして雌雄兩花あり、するたくわゐはこの一種なり。

河骨（かうほね） かはほね かはと たいこのぶち 萍蓬草（ひやうほうさう） 骨蓬（こつぽう）

季題解説 池沼河流等の水淺き所に生ずる宿根の水草。根莖甚だ強く、葉は水を出でたるは里芋に似たる長楕圓箭狀のもの、質厚く光澤あり。水にあるは質軟かく薄く形甚だ大なり。夏の末、莖を水面に抽きて椀形黄色の花を開く、庭池に養ひ挿花に用ゐらる。

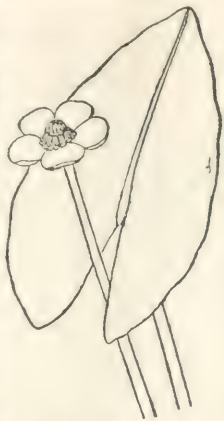
實作注意 一に「かはほね」と云ひ「かはと」「たいこのぶち」など稱する地方あり。漢名に、萍蓬草・骨蓬等あり。根莖を乾燥して川骨と稱へヒステリー症・消化器病の藥用とす。

例句

河骨

河骨や終にひらかぬ花ざかり　素堂（俳諧五子稿）
川骨や撥に凋める夜半樂　嵐雪（玄峰集）
河骨に水のわれゆく流かな　芙水（曠野）
河骨の二もと咲くや雨の中　蕪村（句集）
水渺々河骨莖をかくしけり　召波（春泥發句集）
川骨や碎けぬ花にさゞら波　巣兆（曾波可理）
川骨の一輪つよき姿かな　一露（類題發句集）
河骨の水底見ゆるわたり哉　千山（商華）
河骨の蕾りゝしや水はなれ　馴山（新選）
河骨は肥たり水は痩る時　如本（其雪影）
川骨や水に渦まく日のうつり　枝水（鶴音）
河骨や流るゝかたへうち撓み　完車（同　）

參考　かはほね　Nuphar japonicum, DC.（ひつじぐさ科）沼澤河流等の淺水に生ずる多年生草本なり、根莖横臥し甚だ太し、葉は水面上に挺出し、一見サトイモの葉に似て細長く、長さ一尺內外に達し、其質稍厚し、又別に質薄き沈水葉を具ふ、七八月頃、太き花梗を抽き、水面上に一黃花を開く、五萼片大にして花瓣狀をなし、花中に小形多數の花瓣竝に多雄蕋を有す、根莖を川骨と稱し藥用とす。

水葵（みづあふひ）　なぎ　雨久花（うきうくわ）　浮薔（ふしやう）　藍鳥花（らんてうくわ）

季題解說　廢田水澤等に生ずる一年草、莖短く初生葉は細長なれど漸次圓く心臟形をなす、夏秋の候、葉柄の中腹裂けて花莖を出し、紫碧色又は白色の愛らしき花を圓錐狀に開く。花後其莖漸く屈折し葉柄に沿うて實を熟す。

實作注意　古名「なぎ」、また雨久花・浮薔・藍鳥花と稱す。

例句

水葵

加茂川のすゐやながれて水葵　也有（蘿葉集）

布袋葵（ほていあふひ）　布袋草（ほていさう）　和蘭水葵（おらんだみづあふひ）

季題解說　南米原產の水生草、葉の奇形なると花の美しきとより庭池或は水槽等に浮かせて栽培さるゝも、暖地にては繁殖極めて旺んなるより田の害草となすまでなり。葉は短かき莖に多數叢生し、滑かにして葉身は稍く葉柄

に膨れたる部分を有し、其内に空氣を含む。夏日青紫色の花瓣を有せる美花を穗狀花序に開く。その葉柄に膨れたる膨部も布袋の腹の如き觀あるより「布袋草」の名あり。また「和蘭水葵」とも呼べり。

【例句】
布袋草　泉水や所定めぬ布袋草　圭岳（同人）

菱の花

菱（ひし）　みずもくさ　水栗（みづくり）　蔆菱（りようりよう）

【古書校註】
【滑稽雜談】　時珍本草に曰、芰、一名蔆。其葉支散す。故に字、支に從ふ。其角稜（一）峭たり、故に之を蔆と謂ふ。（略）五六月小白花を開く。背に背き、晝合し宵炕す。月に隨て轉移す。（略）實を菱角と云ふ。（二）（略）花色に黃白紫の異說侍れど白色也。

註　（一）かどがけはしい。（二）實は菱形にして角あればなり。

【季題解說】　古き池沼等に生ずる一年生の水草。根は土中にあり、莖細長くのびて水面に出で、菱形の鋸齒ある葉を叢生す。葉柄には空氣を含める膨大部ありて水中に浮ぶに適す。夏の日葉腋に小白花を開く、四瓣四箇なり。花後突起を有する實を結ぶ。〔季題〕秋　菱の實（ひし）

【例句】
菱の花　行く水の跡や片よる菱の花　桃隣（古太白堂句選）
　晝過の水の姿やひしの花　竹夜（八仙傳）
　鳩の巢を抱いて吹くや菱の花　遲望（類題發句集）
　菱咲いて雛喉腹見する入江哉　乙州（同）

藺の花

藺（ゐ）　藺草（ゐぐさ）　鷺尻刺（さぎのしりさし）

【古書校註】
【三才圖會】　きりぐ＼す草・龍當草・藺（音吝和名抄）　和名は爲、俗に野芒と云ふ。本草綱日、粽心草は河水の旁に生じ、纖細にして、龍鬚に似たり、席（一）と爲すべし。（略）俚俗五月に采て、角黍の心をつなぐ、呼て粽心草となす。（略）王禎に云、莞に似て、細く堅し。（略）燈心草に似て微しく扁く、長さ一尺餘、中空にして、白瓤（二）なし。一株地に布て叢生し、中に長ずる者莖をたて、杈葉を生じ、絲芒の如し。指爪以つて葉を搊ば則吾莎雞（キリギリス）の聲をなすと。

【滑稽雜談】　按に龍鬚・虎鬚・莞草・燈心草・粽心草皆一類也。和俗其粗細をわかち、或は席と爲し、燈炷（三）と爲し、或は粽心に卷き（四）、又は蓑を織り、履を作る。莞は太藺也、本草には藺の名見えず。諸國に產するも、備後を最となし、備中之に亞ぐにや。

註　（一）むしろ。（二）白き軟き心をいふ。（三）燈心に同じ。（四）ちまきを卷く。

【季題解説】水田に栽培するものなれど又原野の濕地に自生するもの少なからず、莖圓くして細長く三四尺に達し中に白髓あり、夏日莖の上部に側生して淡褐色の細花をつゞる。

【實作注意】一名「藺草」「鷺兒刺」など稱ふ。猶一般には別項小髭（こひげ）をも混同して藺と稱ふ。【參照】小髭・太藺

【例句】

藺の花

藺の花や泥によごるゝ宵の雨　鈍可（曠野）

藺の花にひたひたと水の濁り哉　此筋（小文庫）

藺の花の棹におされて起きなほり　立子（ホトトギス）

【參考】ゐ　Juncus effusus, L. var decipiens, Buchen.（ゐ科）原野の濕地に生ずる多年生草本、莖圓くして細長く三四尺に達す、中に白髓あり、夏日莖の上部に花梗を側生し、多く分岐して緑褐色の細花を綴る。髓を燈心とす、又此の一品なるコヒゲは疊に織る。

太藺（ふとゐ）

太藺　青藺　唐藺　丸蒲　丸菅　水葱　莞

【季題解説】池澤に自生するものなれども、水田に栽培せらるゝ宿根草。莖圓く高さ五六尺、下部に褐色の鱗片葉を有するのみにして、通常葉を缺く。夏日莖頭に淡黄褐色の數花を開く、此莖を採りて蓆を織る。

【實作注意】古名を「太藺」と云ひ、「青藺」「唐藺」「丸蒲」「丸菅」等と異名し、水葱・莞と稱す。此植物は莎草科に屬し、別項の藺・小髭とは科を異にす。又之れを太藺と云へるに對し、藺・小髭を細藺と唱ふるものあれど俗稱なり。【參照】小髭　藺の花

【例句】

太藺

太藺すいすい折れしは折れし影つくる　静波（ホトトギス）

花もちて亂れそめたる太藺かな　七草（同　）

【參考植物】ふとゐ　Scirpus lacustris, L. var. Tabernaemontani, Trautv.（かやつりぐさ科）池澤に自生あれども、往々觀賞用として池中に培養せらるゝ多年生草本なり、圓莖高さ五六尺、下部に褐色の鱗片葉を有するのみにして、尋常葉を缺く、夏日莖頂に花梗を分ち淡黄褐色數の花を着く。

小髭（こひげ）

小髭藺　龍鬚　燈心草　石龍芻　燈草　席草

【季題解説】水田中に植うる多年草、莖は細長くして圓く、高さ二三尺に達す。葉は下部に茶褐色の鱗片葉を有するのみなり。夏日莖頭より二三寸下りて淡緑色にて質硬き多數の小花をつく。此莖を刈り採りて疊表を織る。備後表は之れなり。

【實作注意】一名「小髭藺」「龍鬚」「燈心草」と云ひ、石龍芻・燈草・席草、等稱す

こひげ、燈心草、又藺の一種、尾道地方にて産する疊表の原料、細く短く、是にて織りたるものは緻細にして上品なれば一般に高級品として珍重せらる。産地備後南部御調郡・沼隈郡・豐田郡に限らる。學名「こひげ」なるも當方にて此稱を知るものなく、總て藺・ゆ・藺草の稱を用ふ。「こひげ」と稱するは製織したる疊表の織方の名稱にして、譬へば、引通・小幾（俗にトボ）・二配・三配・四配・五配・六配等のごとく、縱に用ゐたる苧絲の數により疊の等級を表はすに用ゐらるゝ名稱なり。【參照】藺の花　太藺

蒲の穂（がまのほ）

【古書校註】　蒲鉾（かまぼこ）　香蒲（かうほ）　蒲黃（ほわう）

【三才圖會】夏に至りて、梗を叢葉の中より抽き、花梗を端に抱く。（略）花の狀鉾に似たり、故に蒲鉾と謂ふ。松明に作りて甚良し。

【季題解説】水田等に生ずる多年草、幅五六分長三四尺の厚き葉を叢生す。夏日、一株に圓き莖を出すこと五六尺に及び、頂に穂をなして黃色小形の花を綴る。花穂熟すれば徑七八分長さ六七寸の蠟燭形を呈する、所謂蒲鉾形なり。

【實作注意】蒲の穂俗に「がまほこ」と云ふ。之に油を灌ぎて點火すれば蠟燭の作用となり、その成熟せるは火口の料となり、花粉は「蒲黃」と稱して藥用となり、莖葉は以て蒲蓆を作る。用途多し。

【例句】

蒲の穂

蒲の穂や蟹を雇ひて折もせん　其角（むつみ）

蒲の穂や泊り雀の門遊び　草也（三崎志）

蒲の穂やこけかゝりたる軒のつま　含羅（類題發句集）

蒲の穂の蠟燭立て涼哉　乙由（菱林集）

【參照】がま（香蒲）Typha latifolia, L.（がま科）水中に生ずる多年生草本にして、幅五六分長さ三四尺の厚き葉を叢生す、圓莖を抽くこと四五尺、夏日梢に穂をなして雌雄花を綴る、雌花は黃色雄花の下に接し、直徑七八分、長さ六七寸の蠟燭形をなし褐色を呈す、花粉を蒲黃と稱し藥用とす。

黄麻（つなそ）　かなびき

【季題解説】一名かなびきと稱し、田麻科（シナノキ）の一年草樹皮より纖維をとり、木質を火藥用の炭とし、葉を藥用に供す。高さ五尺乃至一丈に達し、花は五瓣色は淡黃色にして莖の上部は二三個宛簇生し、莖は圓形にして直立す。纖維は其製造極めて容易なれども、粗硬にして力弱きを以て精巧なる織物となすことを得ず。主としてズック用に供せられ、又家具用粗布・綱・繩等として重用さる。

【例句】

黄麻　卿の根にすぼまる畑の黄麻かな　冬葉（獺祭）

麻（あさ）　大麻（おほあさ）　麻の葉（あさのは）　麻の花（あさのはな）　花麻（はなあさ）　麻の香（あさのか）　麻の實（あさのみ）　あさから　苧から（をから）　種麻（たねあさ）　麻畠（あさばた）

【季題解説】麻は大麻とも云ひ、園圃に耕作する一年草にして、春種を下せば、夏、高さ七八尺に達す。莖の外面には縦に數條の溝を有し直立す。葉は所謂「あさの葉」と稱して、模樣等に應用せらるゝ楓の如き形にして、此葉邊は鋭尖なる鋸齒狀をなす。此植物は雌雄異株にして雌麻と雄麻とあり。雄麻は淡緑色なる細かき花を枝の前端に叢生す、實を生ぜず。雌麻は極小なる穗狀の花にして果實は俗に「あさのみ」と稱し食料に用ひらる。莖の皮の纖維をとりて麻絲とす、用途甚だ廣く、針絲・魚網の原料として重用せらるゝ外、綱となり、帆布となり、蚊帳となり、更に夏向賞用せらるる「かたびら」は之れより織らる。又その殘莖は「あさがら」又は「苧がら」と稱して火藥の原料となり、盆の節會に用ゐるなり。【參照】亞麻の花（アマノハナ）　花亞麻（ハナアマ）　櫻麻（サクラアサ）　茼麻（イチビ）　苧（カラムシ）　人事　麻刈（アサカリ）

【例句】

麻

麻の露皆こぼれけり馬の道　李辰（曠野）

麻につるゝ逆につるゝ暑さ哉　東行（千鳥掛）

麻赤く蜻蛉日に死ぬ畠かな　保吉（分類俳句集）

暮行や麻にかくるゝ嵯峨の町　蘭芝（爪しるし）

麻村や家をへだつる水ぐるま　其角（五元集）

川音や宿麻つけぶる朝ぼらけ　泉川（炭俵）

刈り進む麻に見え來し日本海　春青（ホトトギス）

麻の葉

麻の葉の赤らむ末や雲の峰　史邦（小文庫）

麻の葉に棲ひる窓の火影哉　元灌（西華集）

花麻

花麻に野鼠はしる曇りかな　兎日（鶉鳥）

麻の香

麻の香や笠きてはひる野雪隱　元翠（西華集）

種麻

種麻やぐるりに殘るやけ畠　浪化（浪化上人句集）

麻畠

しのゝめや露の近江の麻畠　蕪村（句集）

なつかしき闇の匂ひや麻畠　召波（春泥發句集）

すは〳〵と夜は明易し麻畠　曉臺（曉臺發句集）

雲乾く雷雨の風や麻畠　吟江（[illegible]日記）

あさばたに風の音聞く涼哉　同（同）

夕立の麻畑あらふ匂ひかな　四卜（東華）

【植物解説】あさ（大麻）（Cannabis sativa, L.）（くは科）蓋し南弁に中

央亞細亞の原産にして通常園圃に培養せらるゝ一年生耕作植物なり、莖直立し高さ七八尺、方形なり、葉は對生し上部は互生し、有柄にして掌狀に深裂し、各裂片細長にして尖り鋸齒を有す、雌雄異株にして淡綠色の花は圓錐花穗をなし夏日開き、雄花は六萼片・六雄蕊ありて花粉多く、雌花は一子房・二花柱あり、夏秋の候莖を刈り收め、其皮を剝ぎて纖維となし、又抄紙の料とす、麻骨は火藥の炭とし、種子は香味料とし、又油をも搾る。

亞麻の花（あまのはな）　いちねんのあま　ぬまごめ

季題解說 一名「いちねんのあま」又「ぬまごめ」と稱し、園圃に培養さる。亞麻科に屬する一年草、三四尺の直立したる莖を有し、葉は細くして互生し、夏、五瓣、紫碧色の花開く、美なり、花後種子を結ぶ、藥用としまた亞麻仁油をとる、搾粕は家畜の飼料又は肥料にす。纖維用としては七月下旬種子の十分熟せずして莖の下部少しく黄味を帶びたる時、之を拔き取る。若し種子成熟せば之れより得る纖維は硬くして粗惡となる。之れより紡出の絲は亞麻絲と云ひ麻絲より需要多し。太絲は帆布・ズック等に、中絲は夏服地を即ちリンネルを織るに用ゐられ、細絲は上布・ハンカチーフ・シヤツ等に使用さる。參照 麻（アサ）　花亞麻（ハナアマ）

例句 亞麻の花
亞麻の花ふるればもろく散りにけり　照子（ホトトギス）

花亞麻（はなあま）　べにばなあま

季題解說 「べにばなあま」といへるにて、專ら觀賞用に栽培さるる亞麻の園藝種をいふ、高さ一二尺、紅色にして美しき五瓣花を開く。參照 麻（アサ）　亞麻の花（アマノハナ）

櫻麻（さくらあさ）　雄麻（をあさ）　雌麻（めあさ）　おぎ　めぎ　みあさ

古書校註 【年浪草】櫻麻は櫻花の咲く頃、蒔るゆゑの名とも、又麻の花の櫻に似たるゆへとも云ふ。夏季に櫻麻といへば、決して花の櫻に似たる云ふべし。卽白麻なり。俳書に麻刈を夏とし、二番刈を秋とす。櫻麻和歌（一）に秋によめり。

圖（一）新千載和歌集に「露むすぶ下葉を見れば、櫻麻のあふのかりほに秋は來にけり」彈正尹邦省親王の御詠見ゆ。

季題解說 雌麻を一名メギ・ミアサと稱するに對し雄麻をヲギ・サクラアサと稱す。雄麻は薄綠色なる細かき花、枝の前端に叢生す。花蓋五片にして雄蕊五本ありと。雄麻は專ら纖維を用ゐるものにして、更に白木赤木に分つ、白木は纖維青く纖維銀白色にして光澤あれど彈力弱し、赤木は莖紫赤

色、彈力强けれど褐色を帶ぶ、仙覺抄の「さくらあさとは櫻色なる麻のある也」は此の赤木を指すならん。【參照】 麻ァサ 人事 麻刈アサカリ

【例句】

櫻麻 誰がふせる野なるらん櫻あさ　普　人（卯 辰 集）

三日月のいつか出てゐる櫻麻　嵐　竹（小 文 庫）

莔麻いちび　きりあさ　いちびがら　ほくちがら

【古書校註】

【年浪草】 時珍が曰、莔麻今の白麻也。葉の大さ桐の葉に似て、團くして尖あり。六七月黄花を開き實を結ぶ。半磨の形の如し。齒有り。嫩き時は青く、老時は黑し。

【季題解說】 錦葵科に屬する一年生の草、春種を下す。成長して高さ六七尺柔毛密生す。葉は互生し、心臟形にして、頂尖る。長さ三寸許り、實の形は石臼の半分の如し、闊くして、高さ五分許り、廣さ六七分、頂は凹くして、菊紋をなす。内に黑き種子あり。莖を水に浸し、外皮を去り麻を取る。白色にして繩に綯ひ、布に織るべし。莖を疊表の經絲として强し、幹をいちびから・ほくちがらと云ひ、火口とするに火保ちて消えがたし。

【同類】 麻ァサ

苧からむし　苧麻からむし　眞苧まを　白苧しらを　枲　線麻せんま　ラミー

【古書校註】

【年浪草】 時珍に曰、苧麻は紵と作して以て績紵す可し。故に之を紵と謂ふ。凡そ麻絲の細き者を絟と爲す、粗き者を紵と爲す。

【季題解說】 到る處の原野にあれど園圃に培養さるゝ多年草にして木だちの莖を有す。春宿根より莖を抽くこと三四尺に達し、葉は互生、卵形にして先尖る。表は深綠色なれど裏は毛ありて白し、夏秋の候分枝せる花莖を出し、淡綠色の小花を綴る。皮より纖維をとり、絲織物の料にす。

【實作注意】 一名「眞苧」「白苧」と云ひ、漢名に、枲・苧麻・線麻等あり。

【同類】 麻ァサ

【例句】

苧　苧のあとから蕎麥の二葉哉　浪　化（浪化上人發句集）

【參考】 からむし　一名まを（苧麻） Boehmeria nivea, Hook. et Arn.（いらくさ科） 原野に自生多しと雖も、又園圃に耕作せらるゝことあり、春日宿根より生じ莖を叢くこと高さ三四尺、葉は互生にして稍圓形をなし、其裏面は綿毛を平布して白色を呈す、夏秋の候葉腋に分枝せる花穗を出して淡綠色の細花を綴る、下方のもの雄穗にして上部のもの雌穗なり、雄花は四萼片、四雄蕋あり、果實は相集りて小毬狀をなす、纖維をと

り織物とす。ラミーは此一變種なり。【參照】麻

棉の花　日照草　日半夏

【古書校註】【三才圖會】花日に向ひ、性、北風を惡み、西風を喜ぶ。（略）日照草と曰ふ。（略）花黄蜀葵に似て、花淺黄色なり。（略）白花の者あり。本赤く末白き花あり。或は日午前は黄色、午後は赤紫色なる者を、日半夏と名く。

【季題解說】畑作の一年草、高さ一二尺に達す、葉は掌狀に分裂し、葉柄ありて互生す。土用の頃葉腋に普通淡黄の五瓣花を開く、形黄蜀葵に似たり。花後蒴果を結ぶ。

【實作注意】棉の下種は多く五月の初旬とす。その開花期は土用半ばを通例とし、秋季に入りて絮を吹く、之を誤りてか棉の花を秋季に分類せる書あるも正しからず、棉の花は晩夏のもの也。又一般に綿の字を用ゐれども、綿は繭より製せしものを指し、木棉の棉は木扁を正字とす。

【例句】棉の

丹波路や棉の花のみけふも見つ　闌更（半化坊句集）
船著きの小さき廓や棉の花　子規（全集）
棉の花蔓へ曲る小路哉　同（同）
泉州や海の青さと棉の花　月斗（棉葉雜誌）
龍華の塔見え初めぬ棉の花　圭史（同人）

【參考事項】わた（Gossypium indicum, Lam.（あふひ科）陸田の耕作植物にして蓋し東亞原産の一年生草本、春下種し夏莖高さ二尺内外に達す。葉は多少深く掌狀に分裂し長葉柄あり、秋日葉腋に花を開く、淡黄色にして花底暗赤色を呈す、花徑一寸半内外あり、花下に通常三齒列せる三苞あり、花後球狀の果實を結ぶ、俗に「もも」といふ、熟すれは棉開きて白棉を吐く、綿中に種子あり、綿は紡績上の用多し。

瓜の花

胡瓜の花　南瓜の花　西瓜の花　越瓜の花　冬瓜の花　絲瓜の花　苦瓜の花　甜瓜の花

【季題解說】茄蘆科の瓜類の花を云ふ。甜瓜・胡瓜・越瓜などの花なり。何れも黄色五瓣にし鐘狀をなし雌雄花を異にするもの。

【實作注意】俳句にて單に瓜といへばまくは瓜を云ふなり。他は名稱を冠するなり。瓜類の各項を參照すべし。【參照】夕顏　花瓢

【例句】瓜の花

瓜の花雫いかなるわすれ草　芭蕉（類柑子）
夕にも朝にもつかず瓜の花　同（篋の實）
花と實と一度に瓜のさかりかな　同（木がらし）

美濃を出て知る人稀や瓜の花　　支考（蓮二吟集）
花瓜や絃をかしたる琵琶の上　　吉水（俳諧五子稿）
雷に小屋は焼かれて瓜の花　　蕪村（句集）
あだ花は雨にうたれて瓜畠　　同（同）

夕顔（ゆふがほ）

夜顔（よるがほ）　夕顔の花（ゆふがほのはな）　顔瓜（かほうり）　[illegible]の花（ゆふけのはな）　黄昏草（たそがれぐさ）　壺盧（ころ）　瓠瓜（こくわ）　匏瓜（はうくわ）
まるゆふがほ　ふくべ

古書校註

【滑稽雑談】此者和産も種類多し、或は長瓢又懸瓠・瓠・壺・蒲盧、これらの種類皆夏日に花咲て實のる。この花、みな葉は萎みて夕に開く、故に夕顔の花と稱す。（略）愛すべきは蒲盧の花なるべし。

【年浪草】源氏夕顔巻に曰、しろき花ぞ、（一）をのれひとりゑみのまゆひらけたる。〇弄花に曰、夕がほのつぼみ、蕾のまゆに似たる故にいへり。〇枕草子に曰、夕顔は朝がほに似て、いひつゞけたる、おかしかりぬべき花の姿にてと云々。此花一輪一枝一本などいふはいかゞ、一ふさといはんはしかるべしと也。

【山の井】五位以上の家には、はひよらせぬといひならはして、たゞ、くずや（二）の軒のはなにさかへ、五でうわたりのあはらやなどに、えみの眉ひらきかゝれるやうにのみ、したつ。又五月かけ露などむすびて、夕がほを見るかゞ見とも、ひたいのあせとも見なす。

註（一）白い花が自分だけ嬉しげに笑しく咲きほこつてゐる　（二）草ぶきの家、茅屋

季題解説　夕顔の花を云ふ。園圃に栽培される蔓草、春種を下す。葉は細長く全体に細毛を被り、巻鬚ありて他物に絡みて攀ち上る。葉は心臓形にして淺く掌状に缺刻し、柄ありて互生す。夏日葉腋に五裂白色の合瓣花を開く。この花晝は凋み、夕に開くより夕顔と名づく。果實は細長き漿果にして長さ二三尺に達す。乾瓢はこの果肉を薄くはぎて乾したるものなり。

實際知識　古くは「瓠瓜」「蝶の花」「黄昏草」と云ひ、壺盧・瓠瓜・匏瓜と漢名す。又この一種に「まるゆふがほ」又は「ふくべ」と稱するものあり。漿果庬大にて容器につくるもの。

[illegible]とりと知らで[illegible]の蒂哉　　支考（蓮二吟集）

など句あり。[illegible]花言（一）に　人事—干瓢剝く（二）、秋—夕顔の實

例句

夕顔にみとるゝや身もうかりひよん　　芭蕉（續山井）
夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて　　同（武蔵曲）
夕顔や酔て顔出す窓の穴　　同（續猿蓑）
夕顔に干瓢むいてあそびけり　　同（有磯海）
夕顔の白き[illegible]根より　　其角（五元集）
夕がほや一臼のこす花の宿　　同（同）
夕顔に[illegible]しうすごき葉のならび　　惟然（惟然坊句集）

夕顔

夕顔や半時のかねに日の返し　浪化（浪化上人發句集）
ゆふがほのかた尻かけぬさん俵　北枝（北枝發句集）
夕顔の屋根に桶干す雫かな　尙白（類題發句集）
夕顔や人まつ女見つけたり　也有（蘿葉集）
夕顔や提燈つるす薬師堂　同（同）
夕顔や行水すつる垣あかり　惟中（偵誠）
夕顔や女子の肌の見ゆる時　千代女（千代尼發句集）
ゆふがほや黄に咲たるも有べかり　蕪村（句集）
夕顔の花噛む猫や餘所ごころ　同（同）
夕かほや行燈提し君は誰そ　同（新五子稿）
夕貌や武士ひとこしの裏つゞき　同（遺稿）
ゆふがほや竹焼く寺のうすけぶり　同（同）
夕顔や早く蚊帳つる京の家　同（落日庵句集）
ゆふがほのまとひもたらぬ垣根哉　太祇（太祇句選）
夕顔やそこら暮るゝに白き花　同（同）
夕顔や鼠葬るめくら兒　几董（井華集）
夕がほやくれど呼ばるゝ油賣　同（同）
ゆふがほや古君今の名はしらず　召波（春泥發句集）
夕顔や用所見て證旅の宿　同（同）
ゆふがほの中より出る主かな　樗良（樗良發句集）
ゆふがほの花立されよ夜の蠅　曉臺（曉臺發句集）
夕顔の花曉にうち見たり　同（同）
夕がほやあからさまなる閨むしろ　同（同）
夕がほやもたせかけたる老の杖　士朗（枇杷園句集）
夕がほや似氣なき人の里わたり　闌更（半化坊發句集）
ゆふがほに阿兒と呼子は女なり　白雄（白雄句集）
夕顔や花の上なる籠り堂　同（同）
夕顔に久し振なる月夜かな　一茶（享和句帖）
夕顔やよその空なる稻の殿　集兆（會波可理）
ゆふ顔の上に行合ふ煙かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
夕顔は月さへ暗き夕まぐれ　吟江（古姿）
夕顔に車寄せたる垣根かな　子規（全集）
夕顔の戸叩けば女應と呼ぶ　同（同）

参考　ゆふがほ　Lagenaria vnlgaris, Ser, forma.（うり科）亞弗利加及亞細亞の原産にして、人家に栽培する一年生蔓草なり、葉は互生して葉柄を有し、掌狀に淺裂し、卷鬚は分岐す、夏日花を葉腋に生じ、一株に白色の雄花雌花を開き、雄花は長柄を有し、雌花のものは短し、花冠は平開して、五裂す、果實は長大にして屢二三尺に達し、表面に毛を有し、果肉

は白色を呈す、變種多し、煮て食ふ、乾瓠は主として此一品のフクベと稱するものより製す。

瓠の花（ひさごのはな）　花瓠（はなひさご）

季題解説 園圃に培養する蔓性の一年草、各葉腋より卷鬚を出して他物に絡まりて止る。葉は心臓形にして淺く掌狀に缺刻す。夏日白色五裂の合瓣花を開く、花後生なる果實は中縊れによつて所謂瓢簞形のもの。〔參照〕夕顔　秋—瓢簞

例句

瓠の花　宵闇に見れば瓠の花白し　朱拙（西華）
日々に咲く花に追はるゝ瓠哉　霞水（[illegible]選）
雪隱のながめも久し花ひさご　馬光（馬光發句集）
花瓠　花瓠小き形整へり　壽水（ホトヽギス）

參考 へうたん Lagenaria vulgaris, Ser. forma.（うり科）畑に栽培する一年生の攀緣草本にして、卷鬚によりて他物に攀緣す、葉は互生にして葉柄あり、圓き心臓形を呈し、往々掌狀に淺裂す、花は白色にしてゆふがほと異らず夏秋に開く、果實は中間に縊を有する漿果にして、初め毛を帶ぶ、成熟せる果實にて酒器を製す、大小種々あり、小なるをせんなりべうたんと云ふ。

酸漿の花（ほほづきのはな）　鬼燈の花（ほほづきのはな）

季題解説 多くは栽培される宿根草で、莖の高さ二三尺、葉は粗き刻みある圓形、葉柄ありて互生す、六七月の頃葉腋に花梗を出し白色に綠を帶びたる小花を二三箇づゝ開き、花の後外包著しく膨れて果實を包み、初め青く熟すれば紅色となる。

實作注意 古名「かがち」「あかかがち」「ぬかづき」と云ひ、漢名は、寒漿・苦蘵・燈籠草・紅姑娘等あり、又一說に外苞のつきたるまゝなるを「ぬかづき」と云ひ、剝きて吹き鳴らす場合を「ほほづき」と云ふと。又一說に「鬼燈」の字を用ふれど、鬼燈は酸漿提燈なるを假用せるなりと。〔參照〕青酸漿、秋—酸漿。

例句

鬼燈の花　鬼燈の花は暮れたに[illegible]ず螢　乙二（俳句全集）

參考 ほほづき Physalis Alkekengi, L. var. Franchetii, Makino.（なす科）自生あり又[illegible]も、通常人家に栽植する多年生草本なり、作宿根より苗を出し、莖の高さ二三尺に達す、葉は有柄にして互生し通常二葉相接して出づ、卵圓形にして葉緣に齒あり、六七月の頃花は葉腋に出でゝ獨在し、帶黃白色を呈し、花梗を有し、花冠は輻狀にして、淺く五裂す。花後

莢増大して肉質の紫果を包み、紫果と共に熟して赤色となる、觀賞用として栽培す。

豆類の花

豆の花　大豆の花　豇豆の花　鵲豆の花　刀豆の花　赤小豆の花

季題解說　豆類の内蠶豆・豌豆等の外は槪ね夏季に開花す。

▽大豆　花は極めて小形の淡赤紫色にして各葉腋の間に簇生す。

▽豇豆　葉腋より短かき花梗を生じ、先端に二個の甚だ小なる白色又は淡紅色の花を著く。

▽鵲豆　隱元豆。葉腋より出づる花梗は甚だ長く之に白色又は赤紫色の大なる穗狀をなせる花を簇生す。

▽刀豆　花は葉腋より生ずる花梗に四五個を著く、その色白と淡紫の二種あり。

▽赤小豆　花は葉腋に黃色の蝶形花を開く。

實作注意　俳句に一單に豆の花と云へば蠶豆(春季)春季の花の謂なれば、其他のものには各その名稱を冠らすべし、大豆の花・豇豆の花と云へるが如し。

【參照】春　蠶豆花ノハナ　豌豆花ノハナ

莧

ひょう　あをげいと

古書校註

【三才圖會】　莧、藍に似て微圓く、皺あり。六月細花を開き、穗をなす。(略)莖葉を採りて、蔬となす。(略)赤莧は莖葉、赤紫色、高き者三四尺なり。(略)五色莧も亦十樣錦に似て、共に庭園に種て之を愛す。

【年浪草】　莧、倭俗(一)盆中の蔬となし、聖靈に供る必用の物となす。

註　(一)盆中に食する蔬菜の意。

季題解說　一名を「ひょう」「あをげいと」等といふ、畑地に栽培して葉を食用とする一年草　莖の高さ三四尺に達し、葉は柄長くほゞ菱形なり、夏の頃梢上に黃綠の細花を穗狀に綴る。

例句類纂

莧　莧肥ゆる蘭の畑の四隅哉　玄伯(俳句大鑑)

滑歯莧

馬齒莧　馬齒草　馬莧　五行草　長命菜　たちすべりひゆ

古書校註

【滑稽雜談】　陶氏本草に曰、今の馬莧、別に一種あり。地に布て葉生ず。至て細微、俗呼て、馬齒莧となす。時珍本草に曰、馬齒莧、其葉比並して、馬の齒の如し。園生之を生ず。六七月細花を開く。小尖、實を結ぶ。

【年浪草】　大和本草に曰、(略)略此草を軒に掛れば馬虻内に入らず。

【三才圖會】其性剛强にして、倒に檐間に懸く、日を經て、猶景天草（一）の强きが如き也。

註（一）蠻草

【季題解說】多く畑地等に自生する雜草にして、莖葉共に多肉質なり、莖は常に平臥して分岐し、葉は軟かく長橢圓形、對生す。夏日黃色の小花を開き小さき實を結ぶ。

【實作注意】この植物の莖葉を煎服すれば馬の咬傷等忽ち癒ゆとて古くは「馬莧」の名ありて、馬齒莧・馬齒草と書し、五行草・長命菜等と稱す。（四）照莧一

【例句】

すべりひゆ　深草の院とやいはんすべりひゆ　正　好（鷹　筑　波）

馬齒莧　既守其草をかれ馬齒莧　宗　好（其　袋）

【參考】すべりひゆ　Portulaca oleracea, L.（すべりひゆ科）庭園・畑地・路傍等に生ずる一年生草本にして、莖葉共に多肉質なり、莖は通常地に臥して分枝多し、圓柱形にして往々紅色を帶ぶ、葉は楔狀長橢圓形をなす。夏日、枝頭葉間に黃色の小花を開く、無梗して朝開き晝頃閉づるを常とす、二萼片・五花瓣・十二雄蕊あり、子房は半下位にして花柱五枝に分る、花後蓋果を結ぶ。

たちすべりひゆ　Portulaca oleracea, L. var. sativa, DC.（すべりひゆ科）人家に栽植する一年生草本にしてすべりひゆの一變種、全體すべりひゆと同じ雖も、草狀彼れより大きく、高さ一尺許に及び其莖は直立す、葉は長倒卵形を呈す、夏日枝頭葉間に五瓣の黃色の小花を開く。

萵の花　萵の薹

【古書校註】

【年浪草】田園家圃多く之を栽う。三四月臺を起し、莖肥え中空にして脆し。之を折れば白汁有り。葉毎に莖を抱へ相連て叉を分つ。四五月黃花を開く。初めて綻ぶる、野菊の如し。一花子を結ぶこと鶴虱子の如し。

【季題解說】野菜萵は種類多し、葉は「からし菜」に似て、四月長じて中央より花莖を出す、之れを「萵の薹」といふ。夏の初に至り梢頭更に小枝を出し形ち野菊に似たる花を開く。

【實作注意】萵の若葉は春之を食用とするより、單に萵を春とし、薹及び花は夏季とす。（参照）春　萵苣

【例句】

萵の花　花つけてある萵の葉を摘りにけり　昔　水（同　人）

小家内にかきあましけり萵の薹　涼　舟（同　）

【參考】萵[illegible]枝上に黃色の花を開く、冠毛は軟質にして白色なり、歐洲原

産の越年生の草本なり。

牛蒡の花

季題解説　蔬菜の牛蒡を種取りの爲め花を開かしむ、五・六月の候に至れば、葉間より花莖を出し、三尺の高さに達し、尖端に多く栗毬狀の蕾を生ず。花は薊に似て丸く藍紫色を呈す。種子は長紡錘狀にして暗灰色なり。種子は特に親種ものを貴ぶ。参照　若牛蒡

山牛蒡の花　商陸　當陸　蓫葍　夜呼　魚鋤

季題解説　山野に自生するものもあれど多くは藥用に栽培するもの、莖の高さ四五尺にも達し、葉は煙草のそれに似て稍小さし、夏日、梢上の葉腋に花莖を出して瓣のなき小さき花を總狀に綴る、蕚は白色なり、花の後暗紫色の實を結ぶ。

實作注意　一名「魚鋤」と云ひ、漢名に商陸・當陸・蓫葍・夜呼等あり。古來「しやうりく」と稱して藥用にさるゝ植物なり。

例句
山牛蒡の花
麥刈りて哀れになりぬ山牛蒡　重行　(古人句集)

胡蘿蔔の花　人參の花

季題解説　畠に栽培さるゝ蔬菜、根は肉質黃赤色葉は數回分岐せる複葉にして長き葉柄を有し、初は大根の如くに叢生す、春その中央より莖を立つること四五尺に達し、初夏の頃梢上に枝を疎生し、白色の小花を複繖形に開く。花後棘毛の多き實を結ぶ。

實作注意　もと歐洲の產、支那に入りしは元の始め、胡地より來り、其味少しく蘿蔔に似たるより、胡蘿蔔と稱せられしとあり、番蘿蔔・紅頭菜・赤珊瑚・金笋と稱し、また人參の字を用ゐ來りしも、人參は藥用に供する朝鮮人參の文字なれば、野菜のものには胡蘿蔔を用ゐ、一名を菜人參・畑人參と云ふ。種子は慢性の下痢を治す。参照　冬―胡蘿蔔

茄子の花　なすの花　花茄子

季題解説　一年生の草本、廣く栽培さる、二月頃種を下し、莖は木質の髓を有して堅く高さ二三尺、枝よく繁茂し小灌木狀をなす、葉は卵形にして互生し、莖と共に紫黑色なり、夏より秋に亙りて淡紫色又は藍白色の五瓣花を開く。花後暗紫色を呈する實を結ぶ紫點にして光澤あり。季節蔬菜の寵兒として品種並に料理法多し。

實作注意　元來茄子は瓜類と異りて雌雄同花なるを以て開花すれば必ず結實すべき性質を有す。参照　茄子

【例句】

茄子の花　百もぎる跡に花さく茄子かな　梅室（梅室家集）
花茄子　とかくして一つとめけり花茄子　琴風（焦尾琴）
五月雨や蟲はみ落す花茄子　成美（いかに〳〵）
米粒のたまつてをるや花茄子　みづほ（ホトヽギス）

【參考】なす　Solanum Melongena, L. var. esculentum, Nees.（なす科）印度の原産にして、畑に栽培せられ一年草本、莖の高さ二尺餘に達す、葉は稍歪形なせる卵形にして互生す、多くの枝を分ち夏秋の候、莖に花梗を出し紫色の合瓣花を着く、花徑一寸内外にして花冠平開し、數片に分裂す、雄蕊の葯は黄色を呈す、花若し穗をなす時は基部以外の花は實を結ばず、花後暗紫色を呈する大形の漿果を結ぶ、基部に宿存蕚を伴ふ、果實を食用とす、品種頗る多し。

芋の花（いものはな）　里芋の花（さといものはな）

【季題解説】里芋の花なり。夏日黄白色の花を開く。通常花を出さゞれども、時には單性の肉穗花序を出し開花することあり。大形の佛焔苞を有し、雄花は上部に、雌花は其下部に集る。品種甚だ多し。【參照】秋―里芋

【例句】

芋の花　芋の花見付次第に切りにけり　涼舟（同人）

馬鈴薯の花（じやがいものはな）　じやがたらの花（はな）

【季題解説】瓜哇を經て我國に傳はりしもの「じやがたら薯」なり。普く菜園に栽培さるる多年生草本、莖の高さ二尺ほど、葉は羽は大小形を異にせる小葉よりの羽狀複葉、六月頃より莖上に白花又は淡紫色の茄子に似たる五裂の合瓣花を開く。地下の塊莖は所謂「馬鈴薯」にして叢生し、皮の色は薄く赤黄ばめり。汎く食用とされ、澱粉を製し酒精の原料とす。

【實作注意】荷蘭薯・喜舊花・土豆兒・山藥蛋等と書す。又一に「かびたんいも」と云ふ。

【例句】

馬鈴薯の花　じやが芋の花に屯田の詩を謠ふ　鬼城（ホトヽギス）
じやがたらの花　じやがたらの花に今宵も月の暈　白汀（同）
摘み捨ればじやがたらの花もいとほしく　夏山（同）

胡麻の花（ごまのはな）　黒胡麻（くろごま）　白胡麻（しろごま）　金胡麻（きんごま）

【季題解説】脂麻の類、畑に栽培せらるゝ、一年生草本なり、莖は方形にて直立し高さ四五尺に達し、短かき軟毛あり、葉は對生して上部のものは細長

く、中部卵形、下部は分裂す、花は七月頃葉腋ごとに「ぢきたりす」に似たる白紫中のものに三花を著く、後ち莢を結び熟すれば黒く中に多數の種子あり。種子は食料、葉用に供す。〔參照〕春—胡麻蒔く　秋—胡麻刈る　新胡麻

〔例句〕

胡麻の花　花も葉も暑き匂ひや胡麻の花　如雷（俳句大觀）
浦波に足ぬらし来つ胡麻の花　露月（露月句集）
二三枚下葉落しつ胡麻の花　晩舟（同　人）
後しざり出でくる蜂やごまの花　愛星（ホトヽギス）
道埃冠りて胡麻の花盛　旭子（同　）

〔參考〕 ごま Sesamum indicum, L.（ごま科）印度及び埃太の原産にして畑地に栽培せらるゝ一年生草本なり、莖の高さ二三尺、四稜にして短毛あり。葉は對生して葉柄を有し、長楕圓形或は披針形をなす。下部のものは往々三裂す。花は梢上葉腋に一花づゝ開き、花冠は筒狀にして末五裂し、花序少しく長し、花後蒴を結び、黒色（くろごま）又は白質（しろごま）或は淡黄色（きんごま）の小種子を藏す。夏日、白色にして淡紫暈を帶びたる花瓣開く。種子は食用に供し、又油を搾る。

蕃椒の花

〔季題解説〕 畑地に栽培する一年草。高さ一二尺多く枝を分つ、葉は細く柔く、葉柄をもちて互生し、葉の數比較的多し、花は夏日葉腋に五裂合瓣の小白花を開き、花の後漿果を結ぶ、熟せば紅し。

〔作句注意〕 南米の原産なれど、我國へは一説に慶長十年煙草と共に南蠻より輸入せるより「南蠻胡椒」の名ありと云はれ、又豐臣秀吉が朝鮮征伐の際に加藤清正の持ち歸りしより「高麗胡椒」の名ありと云はる。又「なんばん」「なんばんからし」とも云はる。番姜・辣茄とも書す。〔參照〕青蕃椒　秋—蕃椒

〔例句〕

蕃椒の花　赤からん花の白さや蕃椒　晩山（俳諧古選）

獨活の花

山獨活の花　土當歸

〔季題解説〕 山地に自生すれども汎く畑地に培養する蔬菜類、莖の高さ四五尺に及び、葉は二回羽狀複葉莖を抱きて互生す。夏の頃白色の小花を疎らに聚め傘狀に開く。土當歸。〔參照〕春—獨活

〔例句〕

山獨活の花　山獨活の色に冷たき雨降りぬ　築甸（同　人）

〔參考〕 うど Aralia cordata, Thunb.（うこぎ科）山地に自生する宿根

草なれども、又多く園中に培養せらる、莖の高さ四五尺、葉は大形の二回羽狀複葉にして、小葉は卵形鋸齒あり、夏秋の候淡綠花を開き繖形花序をなし、花後紫黑色の漿果を結ぶ、其嫩莖を食用に供す、一種の佳香あり。

蒜の花（にんにくのはな）　大蒜（おほびる）

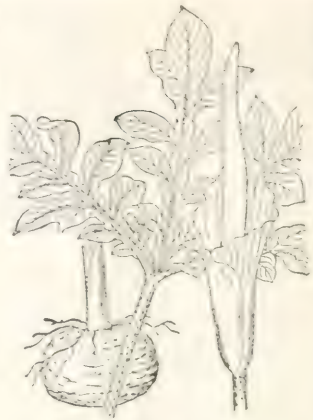
季題解説 畑地に栽培する多年草本なり、地下に大なる鱗莖を有し、葉は細長く扁たし、夏日葉間に丸莖を出して白紫色の小花を蹄形に簇生す、葱の花に似たり、往々球芽を交ゆ、臭氣強き植物なり。地下莖は之を食用とし薬用とす。

實作注意 古名を「大蒜」と云ひ、蒜仔・葫・胡蒜の字を充つ。（參照）春・蒜

蒟蒻の花（こんにやくのはな）　蒟蒻芋（こんにやくいも）　雄芋（おこいも）　雌芋（あさいも）　磨芋（みがきいも）

季題解説 日陰を選びて山地、樹下等に栽培さるゝ多年草、地下球莖を有し、直立の葉柄を出して葉は掌狀複葉にて羽狀の裂片よりなり暗紫色なり、花は天南星に似て、苞は夏日紫黑色を呈す、球莖は蒟蒻玉と稱し、食用の蒟蒻を製す。

實作注意 一名「蒟蒻芋」と云ひ、蒻蒻・鬼芋・雌芋・磨芋と稱す。

參考 こんにやく Amorphophalus Konjac. K. Koch.（てんなんしやう科）蓋し支那の原産にして畑に栽培せらるゝ多年生草本、地下に球莖を有し、之より長柄の一莖を直立し、葉片は複雜に分裂し長さ三四尺に達することあり、葉に先きて夏日帶紫褐色花を老根にのみ生ず、其形うらしまさう、からすびやく等と一般にして大なる佛焰苞を有する肉穗花序なり。花軸の上部巨大にして、棒の如し。

山葵の花（わさびのはな）

季題解説 溪間の濕地に自生する草本、多くは栽培す。地下に圓柱形の根莖ありて、その根莖は辛味を有するより香味料として用ゐらる。柄ある心臓形の根葉を出し、春日根葉中より莖を抽し、莖の長さ尺餘に達し、小形の葉を互生す、この莖葉を食用とす。普通には四五月頃莖頭に白

色十字形の小花を綴る。調理には缺くべからざるものなり。

【實作注意】山葵の栽培は根莖を重に採るには、溪間にて常に冷水の湧出する處を選びて之を植ゑ、葉莖を專らにするには畑地に栽培すべく、これを葉山葵と稱ふ。山葵漬に用ゐるものとす。

【例句】山葵の花
闇古鳥鳴くや山葵の花盛　太無（大無句集）

百合化爲蝶（ゆりくわしててふとなる）

【古書校註】【三才圖會】諸書に所謂、（烏足之葉化レ蝶、橘蠹化レ蝶、菜蟲化レ蝶、百合花化レ蝶、蔬菜化レ蝶、樹葉化レ蝶、或は綵裙化レ蝶。）蝶に化する者甚だ多し。各其の見る所の者に據て言ふのみ。蓋し知らず。蠹蠋諸蟲老に至て倶に各の蛻して蝶と爲り蛾と爲る。蠶の必ず羽化するが如し。朽たる衣物も亦必ず蟲を生じて化す。草木の葉の化する者は乃ち氣化風化也。其色亦た各々其蟲食ふ所の花葉、及び化する所の物色に隨て然り。

【季題解説】俗説に云ふ。夏日、百合の花化して蝶となると。

【例句】百合化爲蝶
百合の蕊胡蝶の髭となりにけん　青々（妻木）

藜（あかざ）　灰藋（くわいてう）　灰天莧（くわいてんかん）　灰菜（くわいさい）　藜の杖（あかざのつゑ）

【古書校註】【年浪草】時珍が曰、灰藋、四月苗生じ、蔬となる。藜は灰藋の紅心なる者也。莖葉稍大なり。嫩き時も亦食ふべし。老れば莖杖となる。（略）○徒然草に曰、藜羹。

【季題解説】田野に生ずる一年草、莖の高さ普通は四五尺その大なるは木狀を呈して杖となし得るものあり。葉は綠を波形に鋸まれ、質軟かく白き粉を有つ、初夏の頃枝頭に黄綠の細かき花を穗狀に綴る。嫩葉は食用とし、生葉の煎汁は毒蟲の害を治す。漢名、灰藋・灰天莧・灰菜等。

【例句】藜
うれしさは我丈過ぎしあかざ哉　家足（續明烏）
和ものになるを藜の盛りかな　青丈（古人五百題）
美濃巳百亭
哀げもなくて夜に入る藜かな　乙二（をのゝえ草稿）

藜の杖
やどりせむ藜の杖になる日まで　芭蕉（笈日記）
我寺の藜は杖になりにけり　惟然（類題發句集）

【參考】あかざ　（Chenopodium album, L. var. centrorubrum, Makino.（あかざ科）畑に培養する一年生草本なり、莖は直立し高さ四五尺徑

一寸許に達す、葉は互生し有柄にして三角狀卵形をなし緣邊波狀齒を有し柔にして綠色を呈し、嫩葉は紅紫色の粉狀物に被ある、枝上に穗をなし、夏時、綠黃色の細花を攢簇す、嫩葉は食用に供し、老大の莖は以て杖となすべし、野外隨處に之と同種にして嫩葉赤からざるものあり、之をシロザ又はシロアカザと云ふ。

蓼（たで）

本蓼　眞蓼　紫蓼　藍蓼　靑藍　細葉蓼　あぶさ蓼　江戸蓼
柳蓼　川蓼　水蓼　絲蓼　八百善蓼　葉蓼　蓼賣

古書校註

【三才圖會】濕地を喜む。二三月苗を生じ、四五月繁茂し、秋に至り穗をなし、細花を開く。紅白色なり。（略）夏月其葉をむしり飴と同じく食す。以て必用の物となす。

季題解說 蓼科の草本にして高さ二尺に達す、秋に至りて枝の梢間に穗を出して花を開く、夏葉を採りて食用とす、味辛し。「たで」は「ただれ」の意にて口舌に辛き故に名づくといへり。種類多し。
▽本蓼　俗に「またで」又は單に「たで」と稱するもの、多く畑地に栽培せられ、紫蓼・藍蓼・細葉蓼・あぶさ蓼等の種類あり。食用のもの。
▽柳蓼　水濕地に自生するもの、葉は細く紅を呈せる莖、夏より秋にかけて白色に紅味を帶べる小花を開く、味頗る辛し。
▽川蓼　また「みずたで」と稱す、山地の淸流に生じ、流に從ひて底に莖を引きて繁殖力强く、繁茂して四時衰へず。

實作注意 俳句にては單に蓼と云へば夏季の定めとし、蓼の花或はその紅葉は秋季とす。（參照）犬蓼（秋）　秋―蓼の花（秋）　蓼紅葉（秋）

例句

蓼
手に乾く蓼摺小木の雫かな　其角（五元集拾遺）
しのゝめや雲見えなくに蓼の雨　蕪村（句集）
砂川や或は蓼を流れ越す　同（同　）
人妻の曉起や蓼の雨　同（落日庵句集）
一鍬の蓼うつしけり雨ながら　同（夜半叟句集）
沖膾のはやせを戀ぬ蓼の雨　几董（井華集）
籠高く摘みおく蓼や雨の園　召波（春泥發句集）
川狩や蓼かなぐりし跡もある　竹巻（末若葉）

蓼賣
蓼賣の片荷に見ゆるさゞれ石　移竹（新選）

犬蓼（いぬたで）

あかのまんま　馬蓼　黑…草

季題解說 到る處路傍に普通なる一年草、莖の高さ一尺許、披針形葉互生す、初夏の頃より赤色に白色を交ふる花を穗形に開く、赤飯の如し、秋紅葉し

て美し。食用にならず。

實作注意 俗に赤のまんまと云ふ。馬蓼・黒記草は其漢名。[参照] 蓼花

例句

京の田舍

犬蓼　犬蓼の柳原こそ五條なれ　舟竹（花摘）

虎杖の花（いたどりのはな）　明月草の花（めいげつさうのはな）　たぢひの花（はな）

季題解説 山野に自生する宿根草、新族芽を生ず形獨活に似て綠色、微紅の斑點あり（春の獨活参照）長ずれば莖の高さ一二尺より三四尺に及び、狀恰も竹の幹の如く、若き莖は食用にし、老いたるは杖とすべし。葉は長き葉柄をもちて互生し、卵形にして先端急に尖る、花は夏日葉腋に穗狀をなして多數の小花をつく。通常白花なれども、山地のものには帶紅のものあり。實は三角にして薄き翅の如きものあり。

實作注意 花の色、特に著しく紅色を帶べるものを明月草といへり。斑杖・酸杖・苦杖と稱へ、古くは「たぢひ」と云ひしもの。利尿通經劑たり。[参照] 春――虎杖イタドリ

例句

虎杖の花　虎杖の折れ伏す花をふみにけり　虛子（ホトヽギス）

探鑛に虎杖の花こぼれけり　投石（芝蘭）

濱木綿の花（はまゆふのはな）　濱萬年青（はまおもと）

季題解説 暖地に自生する常綠の多年草、大なるは莖の高さ三四尺に達す。葉は萬年青に似て更に濶大、多肉にして強き光澤あり。夏日花莖を出して、六瓣の白花を十餘個繖形に開く、芳香あり。

實作注意 一に「濱萬年青」と云はれ、古來紀州熊野に緣あるものとして多く和歌に詠まる、南紀の海濱に多し。

例句

濱木綿の花　濱木綿の花はいつさく夏刈す　白雄（白雄句集）

夏薊（なつあざみ）　眞薊（まあざみ）　きせる薊（あざみ）　鰭薊（ひれあざみ）　飛廉（ひれあざみ）　矢筈薊（やはずあざみ）　野薊（のあざみ）

季題解説 夏季に咲く薊の類を云ふ。固有の名あるにあらず。眞薊・鰭薊・野薊等は夏季に開花す。

▽眞薊　原野の水邊に多く、花の點頭するさま煙管の雁首の如きより一きせる薊」の一名あり。

▽鰭薊　飛廉と書し、一名「やはづあざみ」と稱し、莖葉を通じ縱に羽狀に薄き翼をもち刺甚だ多し。六月頃淡紅色の稍小なる花を開く。

▽野薊　普通の薊より小形なり、蕚より一種の粘液を分泌するもの。[参照]

春—薊（アザミ）　秋—鬼薊（オニアザミ）

例句

夏薊

夏薊鎌を揮って倒しけり　水子（ホトギス）

一荷汲めば濁る山井や夏薊　迷雀（芝蘭）

参考　まあざみ　一名　きせるあざみ　（Cirsium Hilgendorfii Makino.（きく科）原野の水傍に生ずる多年生草本にして、莖の高さ二三尺、單一或は多少分枝す、葉は羽裂し、裂片不齊の粗鋸齒あり、齒端は棘をなす、根葉は柄を有し、莖葉は互生し、上部のものは無柄なり、夏秋梢頭に各一個の紅紫色の頭狀花をつけ、往々點頭す、總苞鱗片は鱗次す。ひれあざみ　一名　やはずあざみ（きく科）（Carduus crispus L.）原野に生ずる越年生草本にして、莖の高さ三四尺、枝を分つ、莖身を通じて、縱に綠色の狀翼を生じて細棘あり、葉は互生し、羽裂し邊緣に棘多し、六月頃紫紅の花を開く、通常數個の頭狀花枝頭に相集る、花に冠毛あり。のあざみ　（Cirsium Makii, Maxim. var. intedium, Nakai.（きく科）原野に多き多年生草本にして、莖の高さ二三尺、梢に枝を分つ、葉は莖に互生し、無柄にして葉底莖を抱く、羽裂して裂片粗齒あり、齒端棘をなし、莖葉に毛あり、初夏枝端に管狀花より成れる頭狀花を着く、總苞圓くして總苞瓣鱗次し粘着す、花は紅紫色にして罕に白色・紅花等の異品あり。

草藤（くさふぢ）　天人藤

季題解説　山野に自生する多年草、蔓性の莖は伸びて數尺に達し、葉は長橢圓の小葉よりなる羽狀複葉、葉の先端にある卷鬚を以て絡む、五六月の頃、蝶形淡紫色の花を總狀に簇がり咲かす。牧草とする所。

参考　くさふぢ　Vicia Cracca. L. var. japonica. Miq.（まめ科）原野に自生する多年生草本なり。蔓性の莖は長く伸びて數尺に達し、羽狀葉の先端にある卷鬚を以て、他物に卷きつく、五六月の頃梢葉腋に花梗を抽き淡紫色の蝶形花を多數攢簇して穗をなし、頗る美なり。

葛藤（つゞらふぢ）　つづら　葛籠葛（つゞらかづら）　青葛（あをかづら）　青藤（あをふぢ）　木防已（もくぼうき）

季題解説　到る處の原野路傍に多く梢木の質をなせる蔓莖草、細く、葉は心臟形にて互生し、花は小形黄白にして夏開く、莖を編みて籠・葛籠等を作る。

實作注意　一名を「つづら」「葛籠葛」「青葛」とも云ひ、青藤とも稱す。

香薷（かうじゆ）　薙刀香薷　犬荏（いぬえ）　野紫蘇（のじそ）　犬紫杉　香茹（かうじよ）

季題解説　山野路傍に自生する一年草、春生じ夏長ず、莖は方莖、高さ二三尺、葉は紫蘇に似て尖れる長卵形、莖葉ともに毛茸あり、秋、寸餘の薙刀

狀の穗を生じて小紫の花を綴る、故に「長刀香薷」ともいふ

【實作注意】　夏季に葉、秋季に花を採取し陰乾にして藥用に供す、脚氣の水腫・霍亂・吐瀉等夏季の症狀に效あり、香薷散は古くより用ゐられたり。俳句にては夏期の繁茂を季題とす。一名を「犬荏」と云ひ、香茹・野紫蘇等漢名多し。　【類題】人事—香薷散（ふん）

【例句】

香薷　　野水ひき香薷植ゑたり草の堂　　青々（倦鳥）

灸花

【季題解説】　山野路傍に多き蔓性の草、莖は細長く他物に絡みつきて生ふ、葉は對生にして先の尖れる長卵形、葉の裏に細毛棘にあり、冬は落葉す。夏日葉腋に筒狀の無花を出す、大きさ三分許にて中心紫なり。小兒戲れて花を身に貼りて灸に擬するより灸花と云ふ。

　屁糞葛　五月女葛　牛皮凍　臭皮頭　雞屎藤

【實作注意】　此植物の莖葉を採むときは、惡息を發するより、「屁糞葛」と云ひ、「五月女葛」とも云ふ。又、牛皮凍・臭皮藤・雞屎藤と漢名す。

【例句】

灸花　　牛を埋めし土饅頭や灸花　　夜臼（同　人）

酢漿草

　すぐさ　すいものぐさ　すつぱぐさ　すかんこ　すかすか　すずめのはかま　とんぼぐさ　こがね草　酢母草　酸味草　三葉酸　三角酸　あかかたばみ　うすあかかたばみ

【[illegible]】

【滑稽雜談】　大和本草に曰、此草靑と紫の二種あり。筑紫にてこがね草と云ふ。世俗の衣裳の紋に此葉の形を附る。又是を用て鏡を研ぐと云云。

【季題解説】　庭園路傍等に生ずる小さき雜草、莖には微毛あり、地上を匍匐して長さ三四寸位、葉は心臟形の小葉三個よりなる複葉にして、長き柄をもちて互生す。春より夏に亙り黃色五瓣の小花を着け、後に莢を結ぶ。莖葉より絞りし汁は、皮膚病・毒蛇毒蟲の咬傷・火傷等に效あり、又眞鍮磨にも用ゐらる。

【實作注意】　この植物の葉を味ふに强き酸味あり「すぐさ」「すいものぐさ」と云ひ、酢母草・酸味草・三葉酸・三角酸等の名ある所なり。又葉の形をとりて紋所にしたるものに、かたばみ劍・かたばみ等あり。

【例句】

酢漿草　　落梧亭

　藏の陰かたばみの花珍らしや　　荷兮（笈日記）

　かたばみや照かたまりし庭の隅　　野荻（續猿蓑）

　かたばみの花の宿にもなりにけり　　乙二（をのゝえ草稿）

かたばみの花雨降るとなく雀　同（同　）

赤草（あかくさ）　山酸漿　地錦（おにしき）

古書校註

【年浪草】赤草、一名山酸漿。（略）夏日其茎葉真紅となる。其苗山澤にあり。故に山酸漿と名く。立花（一）を好める人、夏日之を愛して、花瓶に挿む者也。[illegible]白虎通に朱草あり。一名赤草。以て、絳を染むべし。韓畢を別つと云云。[illegible]一名異種也。

註（一）いけ花

季題解説

赤草は又山酸漿といひ、高さ七八寸許、一茎一葉、蘘荷の如くにして薄く小さし、とする説、又地錦・馬蓼或は赤莧の事なりとする説等あれど未だ實物定かならず。

例句

赤草　赤草や夕日に重き水の色　重厚（類題発句集）

羊蹄（ぎしぎし）の花

しし　しぶくさ　野大黄　羊蹄根　羊蹄根大根　牛舌（ぎうぜつ）　牛頽（ぎうたい）

古書校註

【年浪草】時珍が曰、羊蹄は、葉の長さ尺許、牛舌の形に似たり。夏に入り、[illegible]を起し、花を開き、實を結ぶ。夏至即ち枯る。羊蹄は根を以て名くる也。[illegible]和訓義解に曰、（略）俗に、しのね又ぎしぎしと云ふ。夏に至て、小黄花を開く、其根大黄（一）に似たり。（一）羊蹄和俗に大黄と云ふ。是也。[illegible]葉花共に、黄赤に[illegible]あり。其實、枝ながら、振り動かせば、其音ぎしぎしと云ふ。

註（一）[illegible]

季題解説

[illegible]や、湿潤ある路傍に多き草、春の初より尺餘の長大葉を叢生し、地下に太き黄色の根を有す、四五月頃高く花茎を抽きて枝を分ち花穂をつく、淡緑白色なり、種類多し。

[illegible]

古へは「し」「しぶくさ」と云ひ、一名を「羊蹄根」「羊蹄根大根」といふ。又漢名に、牛舌・牛蘈・[illegible]等あり。根は薬用とす。

例句

羊蹄の花　ぎしぎしの風にはじまる夕哉　雪甫（類題）

天南星（てんなんしやう）の花

天南星（てんなんしやう）　山蒟蒻（やまこんにやく）　山人参（やまにんじん）　虎尾（とらのを）

古書校註

【三才圖會】此草は本名也。[illegible]漢名抄にも本草字有りて、天南星なし。

蓋し天南星の名は始て背の時より出る事を明なり。今却つて虎掌識る者なし。（略）天南星にも二種あり。

【圖】（一）の前〔一〕、薬用植物に見よ。

【[illegible]】 山野の陰地に自生する多年草、形蒟蒻に似て高さ三四尺に及ぶ、葉は複葉にして長き葉柄有し、數個の廣披針形なる小葉より成る、晩春初夏の頃花莖を抽きて黒紫色の佛焔花開く、有毒植物也。

【[illegible]】 一に「山蒟蒻」「山人蔘」といひ、又「虎尾」（同名異物あり）ともいふ。地方により「てんなみさう」（加賀）、「てんないさう」（伊勢）等の異名あり。

【例句】
天南星　　天南星澤水臭き筧かな　　昆六（俳諧辭典）
　　　　　杉谷や天南星に蝮出る　　青峰（同人）

天門冬の花（てんもんどうのはな）　草杉蔓（くさすぎかづら）　すまろぐさ　地門冬（ちもんどう）　商蕀（しやうきよく）

【[illegible]】 海濱に自生する多年草なれど薬用に園養さるゝもの、莖は蔓性にして他物に纏ひ、葉は細く恰も杉の葉に似たり。夏日淡黄白色の小花を開き、地下にある根は甘藷の如く長さ二三寸、黄なると白きとあり、薬用とし又砂糖漬として食す。

【[illegible]】 一に「草杉蔓」と云ひ、古くは「すまろぐさ」と稱ふ。漢名に、地門冬・商蕀等あり。

草合歓（くさねむ）　田合歓（たねむ）　合萌（がつはう）　田皁角（でんかつかく）

【[illegible]】 田野畦畔に自生する一年草、高さ二三尺、葉は淡緑色合歓に似たる羽状複葉、夏秋の頃、黄色蝶形の花を葉腋に開く、花後莢を結ぶ。葉は茶の代用とし又薬用とす。一に「田合歓」と稱し、合萌・田皁角の漢名あり。

【一〔二〕】 合歓花ノ部

【例句】
草合歓　　草合歓を見せて出水の引きそめぬ　　桃厓（同人）

【[illegible]】 くさねむ　Aeschynomene indica, L.（まめ科）田野に多き一年生草本にして、莖柔く高さ二尺許、圓くして中莖、葉は羽狀複葉にして淡緑色、形ねむの葉に似たり。夏秋の候葉腋に花軸を抽き少數黄色の小花を開く。花後に莢を結ぶ。莢は熟すれば節々相離る。

げんのしようこ　現の證據（げんのしようこ）　忽草（たちまちぐさ）　みこしぐさ　いしやいらず　うめづる　つるうめさう　ねこあしぐさ　牛扁（ぎうへん）　紫地楡（しちゆ）　牻牛兒（ばうぎうじ）

【[illegible]】 野外到る處に生ずる多年草、全體地に臥しがちなり、莖は一二尺

ふ說も有り、さるによりて忘草と忍草とは、一草二名と心得たる古人もあり、又別々といふ說もあり。(略) 軒に生ずる忘れ草と萱草とは各別也。軒に生ずる忘草には花さかず。

註 (一) 以下其諺の自說也。

季題解說 原野に自生する多年草、高さ二尺に達す、葉細く劍狀をなして地下の鱗莖より叢生す、夏期葉間に花莖を抽き、鬼百合に似て小さき黃褐色の花を開く、芳香あり。

實作注意 文選に註して「萱草忘レ憂也」あるに本づき一名を「忘草」と云ひ、又「ひるな」とも云ふ。諼草の字をも用ゐ、宜男草の稱あり。

例句

萱草の花　萱草の花とばかりやわすれ艸　來山 (今宮艸)

誰が塚ぞ萱草咲けるおのづから　子規 (全集)

朝鮮朝顏(てうせんあさがほ)　曼陀羅華(まんだら)　狂茄(きやうか)　鬧陽花(とうやうくわ)　鬪羊花(とうやうくわ)　喇叭花(らつぱくわ)　萬桃花(まんたうくわ)

季題解說 有毒植物なり、人この花葉を食へば狂亂すとて「狂茄」とも云ふ。一年生の草、高さ四五尺、葉は茄子に似て互生す、夏の末葉腋に朝顏に似たる漏斗形の暗紫色の花を開く、花の後無花果の如き實を結ぶ。

實作注意 「曼陀羅花」と云ひ、鬧陽花・鬪羊花・喇叭花・萬桃花等に漢名す。

例句

曼陀羅華　海の上に晴れたる雨やまんだら花　冬葉 (獺祭)

參考 てうせんあさがほ Datura alba, Nees. (なす科) 印度邊の原產にして偶々人家に栽培せらるゝ一年生草本、高さ三四尺許にして、枝を分ち、葉は互生し葉柄を有して卵形をなし、邊緣淺く稜をなす、夏秋の候、大形の花を開く、花冠は漏斗狀を呈し、筒長く、下部は筒狀の萼にて包む、果實は球形の蒴にして、表面に多刺あり、不正に開裂し、白色の種を出す、有毒植物なり。

突羽根の花(つくばねのはな)　胡鬼子(こきのこ)　はごのき

季題解說 一名「はごのき」と稱し、山地に自生する落葉灌木、その根の一部は他の植物の根に寄生するもの。高さ七八尺、葉は「いぼた」に似て先の銳く尖れる橢圓形、對生す。六月の頃四瓣淡綠の花を開き、秋實を結ぶ、その形兒女の玩ぶ羽子の如し。

實作注意 果實は「はごのこ」と稱し、秋の季題とす。參照 秋―突羽根(ツクバネ)

參考 つくばね 一名 こきのこ Buckleya Joan, Mak. (びやくだん科) 山地に自生する落葉灌木にして、其根の一部は他の植物の根に寄生す、高さ七八尺、葉は卵形或は卵狀長橢圓形にして、先端尖銳をなし對生す、雌雄異株にして、五月頃枝梢に雌花は單生し、雄花は數箇叢生し花色

淡綠を呈す、花後生ずる果實は四片の大なる苞を果實の頂に有し、兒女の玩ぶ羽子の如し、果實を鹽漬とし好事者以て料理の飾とす。

車前草の花　　大車前　おんばこ　かへるば　大葉子

季題解説 路傍畦畔等に日生する多年生草本、葉の長さ三四寸、楕圓にして綠色なり、地につきて叢生す、夏叢葉の中に莖を出すこと七八寸、莖の頭に穗をなして淡紅紫色の細花を開く。大車前・琉球車前・やぐら車前・さざえ車前・車前・へら車前等種類多し

ばうき(甲斐)、ほうづきば(安房)等の名あり。葉、實何れも藥用にす。

例句

車前草の花　おほばこの花ふみ行きぬ畑の畦　はる代(同人)

參考 おほばこ Plantago major, L. var. asiatica Decne.(おほばこ科)到る處に普く生ずる多年生草本、葉は叢生し長柄、楕圓形或は卵形、數條の縱脈を有す、夏日花を開く、花は小にして多數穗狀に排列す、蕚は四片ありて卵圓形をなし、下に一片の鱗狀苞あり、花冠は白色漏斗狀にて末四裂し、中に四雄蕊一雌蕊あり、果實は蒴にして蓋を以て開き、中に少數の種子あり、所謂車前子是なり、葉を食用に供し、種子を藥用とすべし。

蕺菜　　蕺菜の花　十藥　之布木　蕺耳根　魚腥菜　黃蓀

季題解説 山野路傍等の樹下陰濕の地に生ずる多年草、白色の地下莖を有し盛んに蕃殖するもの、莖の高さ五六寸より尺許、葉は甘藷に似て心臟形、表は綠濃く裏は色淡く、多少赤味を帶ぶ、葉柄ありて互生す。初夏の候上部葉腋より莖を出し白色四片の苞をもち黄色の穗狀をなす頗る微細なる花を簇生す

實作注意 恰も色は花瓣の如く花の蕊の如し、莖葉共に一種の惡臭あり。

一名「十藥」古くは之布木、漢名に蕺耳根・魚腥菜・黃蓀等あり。

例句

十藥　十藥や蕗や茗荷や庵の庭　子規(全集)

參考 どくだみ　一名じふやく　Houttuynia cordata, Thunb.(はんげしやう科)隨處に生ずる多年生草本なり、地下莖を引きて盛に繁殖す、莖の高さ數寸乃至尺餘、心臟形の全邊葉を互生す、初夏梢上枝を出し枝頂に花穗を生ず、白色四片の苞を有し花瓣の狀あり、上に穗狀をなして淡黃色をなせる多數の裸花を綴る、三雄蕊、一子房、三花柱あり、莖葉ともに一種の惡臭を有す、民間にて地下莖及葉を藥用に供することあり。

蚊帳吊草　　莎草[illegible]　かやつり

古書校註 【莎根草】和漢三才圖會に日、蚊帳釣草、葉穗共に莎根草に異なる事なし。

但根細き莖にして、子なく引くに拔き易し。其莖三稜あり。小兒中を裂きて、引き擴げ、以つて蚊帳を釣るに比して、戯となす。此れ香附子草の類と謂つべき者かなゝ。京畿兒童專ら此戯あり。

【滑稽雜談】拔るに毛吹草に蚊帳草と載たるは此者也。或は云ふ香附子の花と同時に開きて青花也。然に五六月に吹なり。香附子は穗をなして、柔の如し。蚊屋つりも又相似たる也。

【[illegible]】原野の路傍にある一年生の雜草、莖は三稜形にて高さ一二尺、莖頂に細長き葉を出しその間に黄褐色穗狀の花をつく。

【[illegible]】小兒この草の莖を裂き廣げ蚊帳を吊るに比して玩びとするもの。俗に「莎草」の字を當てゝ漢名とす。

【[illegible]】
蚊張吊草　野宿にも蚊帳つり草の茂り哉　兎山（類題發句集）
埋もれて蚊帳釣草に坐りけり　ゝ石（ホト、ギス）
水づきたるかやつり草の徑かな　光子（同　）

【[illegible]】かやつりぐさ（Cyperus japonicus, Makino.）（かやつりぐさ科）路傍圃圃に最も普通なる一年生雜草なり、葉は細長くして根生じ、莖は三稜形にして高さ、一尺許に達す、莖頂に三葉を出し、夏日その間に疎らなる黄褐色の穗を生ず。

踊子草（をどりこさう）

踊草（をどりさう）　踊花（をどりばな）　虚無僧花（こむそうばな）　野芝麻（やしま）　續斷（ぞくだん）　川旦（せんたん）

【古書校註】【三才圖會】高さ、尺許り。莖、微赤色。葉小麥に似て、雨々對立し、三四月、葉の本に小花を開く。白色微赤。おぶ人、笠をきて躍るに似たり。故に俗、踊花と云ふ。又續斷（二）を以て踊草と爲す。

註（二）和名ほみ、莖四稜あり葉蕁麻に似る、四月紅白の花を開く、根赤黄色。

【[illegible]】山野の濕地を好みて生ずる多年草、莖は方形をなして高さ一二尺、葉は卵狀心臓形、先尖りて粗き鋸齒あり、長き葉柄を持ちて對生す、花は上部葉腋に開く、色普通は淡紅紫色なれども時に白色。晩春初夏を開花期とす。花の形狀も[illegible]の笠をかむりて踊る狀に似たるより名あり。

【[illegible]】「をどりさう」とも云ふ、漢名に、野芝麻・續斷・川且等あり。

【[illegible]】
踊子草　波鍋をとりかこみたりをどりこ草　茨花（ホト、ギス）
踊花　たんぽぽもまだ咲てありをどり花　太無（太無句集）
祭見の道[illegible]へけり踊花　乙由（麥林集）

【[illegible]】をどりこさう　Lamium album, L. var. barbatum, Franch. et Sav.（唇形科）路傍山野の稍陰地を好みて生ずる、多年生草本なり、莖は高さ一尺乃至一尺五寸許、葉は對生して長柄を有し、卵狀心臓形にして尖り、邊緣に鋸齒あり葉面皺縮す、春より初夏に亘りて葉腋に數花を生じ、

は筒狀に相集り下部は白色上部は綠色を呈す、花後實を結ぶ。

蘿藦（ががいも）

かがみ　かがみいも　乳草　ぱんや　草斑枝花　芄蘭　雚芄
蘭　水皮花　羊角菜　合鉢兒

季題解說　山野に自生する多年生の蔓草。春舊根より芽を出し、葉は大さ四五寸、長き心臟形にして對生なり　夏葉腋に花梗を出し淡紫色五瓣の小花を集め開く。花後二三寸の胡瓜の如き疣ある莢を結ぶ。莢熟すれば紫にして竪に裂け內に白き絮あり、針の如く「斑枝花」に似たり。俗に「ぱんや」といひ棉の代用とす。その莖甚だ强く、棉弓の弦とす、根は藷の如く橫に生ず。

實作注意　古名「かがみ」。かがいもは、かがみいもの轉約なり、又この莖葉を切れば白汁を出すより「乳草」とも云ふ。芄蘭・雚芄蘭・水皮花・羊角菜・合鉢兒など稱す。

參考　ががいも Metaplexis japonica, Makino.（ががいも科）原野に自生する多年生纏繞草本、地下莖を引いて繁殖し、莖は長く延びて綠色を呈す、葉は葉柄を有し對生し長心臟形をなし全邊にして支脈明なり、莖葉を切れば白汁を出す、夏日、淡紫色の花を生ず、花は葉腋に短き穗をなし下に長き花梗あり、花冠五裂し面に毛あり、果實は頗る大にして獸角狀をなし面に突起あり、種子に白色の種髮を有し、風に從つて飛ぶ、種子の白絮は綿の代用とし、針插印肉に用ゐらる、本種に「クサパンヤ」の名あり。

敦盛草（あつもりさう）

あつもり

季題解說　山野に生ずる多年草。莖は直立して高さ一尺許、尖りたる卵形葉はその基にて莖を抱く。花は五月の候莖頂に出で點頭し、紅紫色にて幌形の特瓣を有するものを開き甚だ美し。

實作注意　別花に「熊谷草」と云へるあり。山地の陰濕地に生じ、莖の高さ一尺許、その頂に扇を開きたる如き二箇の大葉を生じ、其中間に一花を開けるもの、その熊谷草に對して、本花の形ち平敦盛が矢幌を背負へる姿に見立て、命名せるものなり。〔參照〕春—熊谷草

例句
敦盛草　春行くと敦盛草の花の幌　冬葉（獺祭）

參考　あつもりさう Cypripedium speciosum, Rolfe.（らん科）山地の草間に生ずる多年生草本にして、莖の高さ一尺餘、卵形の尖銳頭を有し四五葉莖を抱きて互生す、五六月に莖頂に紅紫色一花を開く、花蓋片長に卵形にして尖り下部の二片は合體す、脣瓣は大にして開き囊をなす。蕊柱二葯あり。

泡盛草（あわもりさう）　あわもりしようま

古書校註【三才圖會】泡盛草は高さ一二尺、一莖數朶、葉は草蓮花に似て略圓し、夏白花を開く。細小にして花芒の穗に似たり。

季題解說 山地溪畔等に生ずる多年草。莖は高さ三尺許、葉は三枝九葉を一葉とせるもの、葉の質は剛く、深綠色に光る。夏の候、梢上に枝を多く分ち白色小形の花を叢簇す。「あわもりしようま」と云ふを本名とす。

虎尾草（とらのを）　をかとらのを　珍珠菜（ちんしゆさい）

季題解說「をかとらのを」を略して云へるもの、原野濕地に生ずる宿根雜草。高さ二三尺、葉は長楕圓、三四寸末尖り、深綠にして厚く皺あり、互生す。夏日莖頭に五瓣の細小白花を總狀に綴り開き、大なるものは六七寸の長さに及ぶ。花穗の末すぼまりて傾くさま獸の尾に似たり。

例句

虎の尾草　虎の尾を踏んで逃行く鼬哉　女元（俳諧辭典）

虎の尾の浸れる水を掬ひけり　露中（ホトトギス）

參考 をかとらのを　一名とらのを　Lysimachia clethroides, Duby.（さくらさう科）山地原野に生ずる多年生草本にして、地下莖を引いて繁殖し、莖の高さ三尺許、長楕圓狀披針形の全邊葉を互生し邊毛あり、夏日頭に總狀花をつけ一方に傾く、花冠は白色にして五深裂し、花後多數の丸き小實を結ぶ。

烏柄杓（からすびしやく）　烏柄杓の花（からすびしやくのはな）　半夏（はんげ）　ほくそみ　地文（ちぶん）　三不掉（さんぶてう）

季題解說 畑地に生じ甚だ繁殖して農家の困難する雜草なり。地下に球莖を有し、それより一二葉を出し、その頂に三小葉をつく。夏日別に莖を出して、上部に佛焰と稱する帶黃紫色の苞ありて、中に雌雄の花を穗狀につづり、花軸の先端を細長く出す。恰も蠟燭の焰の細く燃ゆるが如し。

實作注意 一名「半夏」と云ふ。古くは「ほくそみ」と稱へたり。また、地文・三不掉の漢名を有つ。

例句

半夏の花　半夏生や半夏をひきに親子連　月斗（同人）

桑やせし畑に舌吐く半夏かな　順圓（類題發句集）

燈臺草（とうだいさう）　鈴振花（すずふりばな）　澤漆（さくしつ）　五鳳草（ごほうさう）　猫兒眼睛草（べうじがんせいさう）　綠葉綠花草（りよくえふりよくくわさう）

季題解說 [illegible]傍に自生する草。莖は七八寸、倒卵形の細き鋸齒のある葉を互生し、莖頭に輪生せる五葉を生じ、五枝を分ちて各枝頭に淡黃綠色の小花をつく、[illegible]の如し、「鈴振花」とも云ふ。此草の莖葉を切るに白

色の乳液出づ、有毒なり。別種に「大戟」（たかとうだい）あり。

實作注意 一名「すゞふりばな」、又「澤漆」と云ひ、五鳳草・猫兒眼睛草・綠葉綠花草の稱あり。

例句

燈臺草　本くらき燈臺草の茂りかな　重杉（同人）

姫女苑（ひめぢよをん）　犬嫁菜（いぬよめな）

季題解說 一名「犬嫁菜」と云ふ。元來舶來のものなれど繁殖力甚だ強く、今は各地に蔓延せり。莖の高さ二尺餘、葉は長橢圓形にして互生す、短かき毛あり。夏日、白色の頭狀花を分枝につく、田畝に有害なる雜草なり。

例句

姫女苑　畔低しはびこる梅雨の姫女苑　圭岳（同人）

都草（みやこぐさ）　黃金花（こがねばな）　黃蓮華（きれんげ）　烏帽子花（ゑぼしばな）　淀殿草（よどどのぐさ）　きつねのゑんどう　こがねのめぬき　みやこばな　百脈根（ひやくみやくこん）　牛角花（ぎうかくくわ）　錦都草（にしきみやこぐさ）

季題解說 山野路傍の芝地或は堤防等に多き草。莖は通常傾臥し、葉は五個の小葉よりなれる羽狀複葉、各小葉は三分許の長橢圓なり。花は五月の頃黃色蝶形花を開き、開花後僅にして紅黃に變ず、可憐なる花なり。

實作注意 別名「黃金花」「黃蓮華」「烏帽子花」と云ひ、又昔大坂城に在りし淀君のいたく愛でたるより「淀殿草」とも云ふとありて、花言葉に「復讐」を意味するとあるも面白し。百脈根・牛角花（花後生ずる莢果より來る）と漢稱あり。

例句

都草　黃なる花都草とは思へども　いはほ（ホトヽギス）

參考 みやこぐさ　一名　こがねばな　Lotus corniculatus, L. var. japonicus Regel.（まめ科）路傍の芝地等に多き多年生草本。莖は通常傾臥す。葉は三小葉より成る。小葉は長さ三分許の橢圓形をなす。小葉狀の托葉あり。五月頃黃色蛾形花を成ず。後一寸許の細長き莢を結ぶ。一變種に花後の赤色に變ずるあり、にしきみやこぐさの名あり。

駒繋（こまつなぎ）　こまとゞめ　こまとめはぎ　うまつなぎ　金剛草（こんがうさう）　馬棘野藍枝子（ばきよくやらんし）

古書校註 【三才圖會】山野處處に有り。高さ一二尺、莖枝葉花みな萩に似て小し。七月花を開き、莢を作すこと小豆の莢の如く、中の子は黑色、其根甚だ強き故、芻人、（一）牛馬を繋ぐ可し。

註（一）草刈の人。

【季題解說】原野山麓に多く生ずる草本狀の小灌木。莖は高さ二三尺に達し、葉は萩に似て小卵形の小葉よりなる羽狀複葉を互生す。夏日、紅紫色小形の蝶形花を一寸許、萩の花の如くに開く。花後閻形の莢を結ぶ。

【實作注意】此植物の根・莖甚だ强靱なるより駒を繫ぐに堪ゆるとの意より命名さる、漢名、馬棘・野藍枝子。

【例句】

金剛草　根を引けば中々强し金剛草　青水（俳諧五子稿）

捩花（ねぢばな）

綬草（ねぢばな）　ねぢればな　もぢばな　もぢずり　文字摺草（もぢずりさう）

【季題解說】原野堤防の芝地等に多き多年草、高さ一尺内外、細長き葉は數少なく、莖のもとに互生す。初夏の頃小形淡紅色の花を穗形に列べ、螺旋狀に捩れ咲くより此名あり。

【實作注意】一に、もぢばな「もぢずり」と云ひ、綬草の字を充つ。

【例句】

文字摺草　穗芽河原文字摺草をひきにけり　富竹雨（同人）

【參考】もぢずり　一名　ねぢばな　Spiranthes australis Lindl（らん科）原野の芝地等に多き多年生草本、根は肥厚せる纖狀をなし、莖の高さ六七寸乃至一尺許、其端に少數の狹長なる葉を具ふ、初夏の頃莖稍に捩れたる穗狀花序をなして多數の淡紅色の小花を綴り、その狀頗る可憐なり。

螢草（ほたるさう）

まるばさいこ　ほたるさいこ　南柴胡（なんさいこ）

【季題解說】山野路傍に自生する草、高さ三尺許、葉は篦形無柄にて莖を抱き夏日梢上に枝を分ち、小形黄色の花を開く。

【實作注意】一名「まるばさいこ」「ほたるさいこ」と云ひ、漢字は南柴胡。

【例句】

螢草　鹿の音のしばらくやみぬ螢草　みづほ（ホトトギス）

ひとひらの花びら立てゝ螢草　たかし（同　）

【參考】ほたるさいこう　一名まるばさいこ Bupleurum sachalinense, Fr. Schm.（繖形科）山地に自生する多年生草本にして、莖の高さ三四尺に達す、葉は互生し、長楕圓狀披針形或は篦狀披針形にして鈍頭を有し全邊にして無柄、基脚の兩側耳に擴がりて莖を抱く、上部に枝を分ち、夏日黄色小花を複繖形花序に開く。

藪虱（やぶじらみ）

のにんじん　[illegible]　草じらみ

【季題解說】原野路傍等に自生する雜草。莖の高さ一二尺、疎らに枝を分つ。葉は蕪にんじんに似て羽狀複葉なれども甚だ細かし、花は白花の小花を複繖狀に開く、花期は夏日。

【實作注意】此植物、果實に毛多く、觸るれば動物或は衣服等につきて、種子

の散布をはかるより、竊衣の名ある所、一名「のにんじん」とも云ふ。

例句

藪虱　やぶじらみ去來が墓をさがしけり　四明（懸　葵）

　女房や馳せ出て拂ふ藪じらみ　鬼城（ホトヽギス）

草じらみ　うつむいて草じらみとる袴かな　虚子（同　）

参考 やぶじらみ Torilis Anthiscus, Gmel.（繖形科）原野路傍に生ずる二年生草本。葉はやぶにんじんに似たれども、其裂片繊細にして、莖高さ一二尺疎に枝を分つ、夏日小白花を複繖形狀につく、果實は橢圓にして稍扁平、毛刺甚だ多く、熟すれば動物の體又は衣服等に着く。

一藥草（いちやくさう）　かゞみ草（さう）　きつかふ草（さう）　なしやり草（さう）　鹿蹄草（かていさう）　鹿飽草（かはうさう）　鹿銜草（かしようさう）　破血丹（はけつたん）

季題解説 山野の濕氣ある地に自生する多年草。葉莖の高さ四寸許、葉は橢圓にして厚く深綠色、對生す。冬に至るも凋まず。五六月の頃別に花莖を抽きて高さ五六寸、白色五瓣下向きの小花を開く。鉢植として觀賞する他に、血止、治痛、毒消等の藥用として効果を有す。

實作注意 山中にて蛇其他の毒蟲に咬まれたる時、この草の葉を揉みて塗布すれば癒ゆと傳ふるより「一藥草」の名あるもの、鹿蹄草・鹿飽草・鹿銜草・破血丹とも稱す。

白屈菜（くさのわう）　田蟲草（たむしさう）　草の黄（くさのわう）　草の王（くさのわう）

季題解説 路傍石垣等の間に多く生ずる草。莖軟く高さは一二尺に達す。葉は菊のそれに似て、初夏黄色の小四瓣花を開く。實は細長く一寸許り、鳳仙花の如く種子を飛ばす。この莖葉を切るに黄色の乳液を出す。疥癬に効あるより俗に「田蟲草」と云ふ。

種付花（たねつけはな）　碎米薺（さいべいせい）　辣米子（らつべいし）　野芹薺（やきんせい）

季題解説 路傍畦畔等の濕地に多き雑草。莖の高さ五六寸より尺餘り、葉は圓形橢圓形の小葉よりなる羽狀にて頂上の葉のみやゝ大形なり。多く四五月頃赤色の花を開き、花後長さ五六分の莢を結ぶ。碎米薺・辣米子・野芹菜

など稱ふ。

【例句】
碎米薺　碎米薺にふみ込む畦の崩れ哉　圭岳（同人）

馬鞭草（ばべんさう）　くまつゞら

【季題解説】「くまつゞら」と云ふ。原野路傍に自生する雜草。春宿根より生じ、高さ二三尺、方莖なり。多くの小枝を分ち、葉は三尖にして對生す。花は夏より秋にかけて莖の頭に小さき淡紫の花穗をなして開く。元來は雜草なれど、本草藥として「馬鞭草」と稱へらる。

【例句】
馬鞭草　馬鞭草御用車の憩ひけり　來之（俳諧辭典）

【參考】くまつゞら Verbena officinalis, L.（くまつゞら科）原野路傍に生ずる多年生草本にして、莖の高さ二尺內外、多く枝を分つ、葉は對生し、通常三裂して裂片更に羽狀に分裂す、花は夏日開き、淡紫色の瘦長なる穗狀をなす、花冠は盆狀にして邊緣五裂す、喉下に無柄の雄蕊あり。

十二單（じふにひとへ）　うるき　筋骨草（きんこつさう）　散血草（さんけつさう）

【季題解説】林野に自生する雜草。高さ五六寸、葉は細長く、莖葉に白毛密生す。四五月の候踊子草に似たる白色の小脣形花を輪生す。

【實作注意】古名「うるき」、筋骨草・散血草と稱す。

【參考】じふにひとへ Ajuga nipponensis, Makino.（脣形科）林野に多き多年生草本なり、高さ五六寸許、一株に數莖を出す、葉は細長にして疎鋸齒を有し、對生す、綠色稍薄く、莖葉、花萼等總て白毛を生ず、初夏の頃、各葉腋に小形淡紫色の脣形花を輪生す。

蟹草（かにくさ）　蔓忍（つるしのぶ）　蟹蔓（かにつる）　海金砂（かいきんしや）　さゝみせんかづら

【季題解説】一名「蔓忍」と云ふ。山野に自生する多年草、莖は蔓をなして多物に絡らみ、脊硬く光澤あり。細く延びて數尺に及ぶ。葉は短き枝頭を對生し、齒朶の如く再羽狀に分裂す。夏日上方の葉裏に子囊羣をなして點々と排列す。蟹のみその色に似たり。俗に「蟹蔓」とも云ふ。海金砂と書す。

鵯上戸の花（ひよどりじやうごのはな）　ほろし　白英（はくえい）　排風藤（はいふうとう）　毛和尚草（けをしやうさう）

【季題解説】山野に自生する蔓木樣草本。年々蔓より枝葉を出して他物に纏繞す。葉は蔦類に似て三裂し、軟毛あり。夏日白色の合瓣花を開く。花後實を結び、秋熟せば南天の如し。

【實作注意】一名「ほろし」と云ふ、白英・排風藤・毛和尚草など稱す。花よりも實の紅甚美し。【參照】秋・鵯上戸の實（ひよどりじやうごのみ）

甘野老の花（あまどころのはな）　甘菜（あまな）　笑草（ゑみぐさ）　甘草薢（かんひかい）　萎蕤（ゐずゐ）

季題解説　山中原野の陰地に生ずる宿根草。春生じて莖の長さ一二尺常に傾く。葉は互生し楕圓形にて平行脈あり。初夏葉腋に綠白色筒形の花を下垂す。形ち風鈴の如し。根莖「野老」に似て甘し。

實作注意　一名「甘菜」古名「笑草」。漢名「甘草薢」。又根莖は「萎蕤」と稱し、滋養强壯藥とす。また澱粉を生ず。

破れ傘（やぶれがさ）　兎兒傘（やぶれがさ）　やぶれすげがさ　きつねのかさ

季題解説　山野の樹下等に自生する多年生草本。莖の高さ二尺餘り、葉は大きく掌狀に深く裂け、恰も破れたる傘をひろげたる如きより名あり。夏日長く莖を抽きし頂に疎に帶白色の筒形花を綴る。

實作注意　一名「やぶれすげがさ」又俗に「きつねのかさ」と云ひ、兎兒傘と書す。

例句
兎兒傘
古路やからくも通ふ兎兒傘　巴石（獺祭）

參考　菊科に屬し山中の樹下に生ず、葉は掌狀に深裂し、裂片に粗齒あり、葉裏黃色を帶び下部の葉には長柄あり、夏日、莖を抽くこと一二尺、梢上に頭狀花を疎穗狀につゞる、頭狀花はもみぢ傘より大にして、總苞は白紫色を呈し白色の管狀花を有す。

靫草（うつぼぐさ）　空穗草（うつぼぐさ）　夏枯草（かこさう）（カコサウ）　滁州夏枯（じよしうかこ）　すいすいばな　すいばな　すもとり　しびとのまくら　きつねのまくら　とりげぐさ　やりばな　まつかさぐさ　うちばな　ちぐさ

古書校註

【三才圖會】　和名宇流木。今云ふ宇豆保草。本草綱目。夏枯草は原野の間に甚多し。苗の高さ、一二尺許り。冬至の後葉を生ず。其葉、節に對して生じ、旋覆の葉に似て長く大なり。（略）其莖、微方（一）なり。三四月花を開き、穗をなす。（略）長さ一二寸、穗の中に紫淡の小花を開く。一穗に細なる子四粒あり。此草夏至の後には卽枯る。蓋し、純陽の氣を稟け、陰氣を得るときは則枯るゝ也。嫩苗瀹で過き浸し、苦味を去り、油鹽之を拌ぜ食すべし。莖葉大に瘰癧を治し、結氣を散す。（略）穗の形、矢筒の靫（二）に似たる故宇豆保草と云ふ。

註　（一）正方形である　（二）矢を插み背負ふ武具。

季題解説　山野に自生する多年草。莖は方莖にして高さ一尺許、全株に細毛あり、葉は薄荷に似て對生長卵形、花は六七月の候莖頭に穗狀の叢を作りて脣形の小紫花又は淡紫色・深紅色・淡紅色・白色等の花を開く。花形空穗に似たるより此の名生づ。

【實作注意】 靭草の花穗は夏生の頃に花の終りし後、褐色に變じ、枯死せる如く見ゆるより「夏枯草」と云ふ。又地方に依り異名多く、すいすいばな（近江）、すいばな（土佐）、すもゝり、しびとのまくら（美濃）、きつねのまくら、とりげぐさ、やりばな、まつかさぐさ（出雲）、うちばな、ちぐさ（木曾）等あり。

【例句】

靭草

道の邊や麥に吹入るうつぼ草　長翠（俳句大觀）

うつぼ草こゝ五月雨の湊かな　道彦（同　）

樊噲草（はんくわいさう）

大呉風草（おほつはぶき）　望江南（ぼうかうなん）

【季題解説】 山野の多くは濕地に生ずる多年草。莖の高さ一二尺より四尺位まで、淡綠白色に暗紫の斑點あり。葉は廣く大きく七切の又あり。夏の頃莖端に枝を分ちて、「石蕗」に似たる黄色花を開く。漢名、大呉風草、望江南。

【參考】 はんくわいさう　Ligularia japonica, Less.（きく科）山野に生ずる大なる多年生草本なり、莖の高さ三四尺に達す、葉は互生し大なる掌狀葉をなし分裂深く、各裂片更に缺刻鋸齒を有す、初夏莖頭に枝を分ち大なる頭狀花を開く、花は鮮黄色にして舌狀花冠大なり。

二人靜（ふたりしづか）

狐草（きつねぐさ）　早少女花（さをとめばな）　及己（きふき）」

【古書校註】 【三才圖會】（一）謠歌に云ふ、靜女の幽靈二人と爲り、同く遊舞す。此花二本相雙び艷美なり、以て之を名づく。按るに二人靜、高さ尺許り、葉櫻桃（二）に似て厚し。三月莖の間白花を開く。形蓼穗の如くにして、二つの小朶（三）枳を成す。

註（一）謠曲「二人靜」をさす　（二）ゆすらうめ　（三）また

【季題解説】 山林陰地に生ずる多年草。莖の高さ一尺餘に達し、枝を分たず上部の節に鋸齒ある橢圓形の葉を對生すること二三層、五月頃頂に二條の穗を出し白色の小花を點綴す。花後綠色の實を結ぶ。

【實作注意】 古くは「狐草」、一名は「早少女花」漢名は及己。【參照】春「一人靜」

【例句】

二人靜

置かれある簾に二人靜かな　義千（第　祭）

螢袋

山小菜　釣鐘草　提燈花　風鈴草

【古書校註】 【大和本草】 大和本草に曰、[illegible]、葉[illegible]牡丹に似て、四五月紫花を開く。其花釣鐘の如し、又白花、紫花なる者あり。和品、と云々。

註 [illegible]

【季題解説】山野に自生する宿根草、春發芽して高さ一二尺に達し、葉は桔梗の如く、梅雨の頃莖頭に花莖を出して、六七分許の形ち風鈴の如く又提燈の如き花を開く、五裂したる花を開く、色は藍紫・淡紫・白等のものあり。

【實作注意】花の形より「釣鐘草」と云ひ、又「提燈花」「風鈴草」ともいふ。「螢袋」山小菜の字を以て當つ。

【例句】

釣鐘草

蟻の寄釣鐘草のうつぶせに　白雄（白雄句集）

恐ろしや釣鐘草に蛇の衣　曾北（類題發句集）

蒼朮の花（をけらのはな）

うけら　蒼朮（さうじゆつ）

【季題解説】山野に自生する多年生草本、春舊根より新苗を出す。その嫩きは軟毛を被り、長ずるに從ひ硬くなり、下部は木質をなして莖の高さ二尺にも達す。概ね葉は楕圓形複葉なれども單葉なるあり。夏日梢頭に薊に似たる淡黄・薄紫・紅等の頭狀花を開く。根は乾して藥用に供す。古來「蒼朮」と稱するもの之れなり。

【實作注意】此植物の根を乾燥したるものの外皮を除き、乾燥したるものを白朮と稱へ藥用とし、又正月の屠蘇散に混ず。又これを燻蒸するときは濕氣を拂ひ邪氣と惡臭を去り、疫氣を除くに效ありとて、梅雨の候に室内を燻蒸する例あり。〔參照〕人事—蒼朮を燒く（サウジユツヲヤク）

【參考】をけら　一名　さうじゆつ　Atractylis ovata, Thunb.（きく科）山野に自生する多年生草本なり、春日舊根より出でたる稚苗は、多く軟白毛を被むる、莖の高さ一二尺質硬し、葉は互生し剛くして通常羽裂し、葉緣に刺狀齒あり、夏日枝梢毎に頭狀花をつけ、其周圍に魚骨樣の數苞を具ふ、花は白色にして稀に紅色のものあり。

葈耳（をなもみ）

なもみ　卷耳（けんじ）　蒼耳（さうじ）

【季題解説】山野に自生する雜草。高さ三四尺、鋸齒を有する心臟形の茄子に似たる葉。夏日梢上に枝を分ち黄色の花を疎く集め開く。雌雄異株、雌花は熟すれば大きさ四五分、硬き刺を密生して人衣に鉤著す。

【實作注意】一に「なもみ」とも云ふ。漢名、卷耳・蒼耳等。

麒麟草（きりんさう）

費菜（ひさい）　黄菜子（くわさいし）

【古書校註】【年浪草】漢名未詳。高さ尺許。莖葉、景天（一）に似て小。其葉淺綠にして、鋸齒あり。莖端花を生ず。花亦景天に似て、色黄なり。夏より秋に至りて、其花猶あり。景天の別種か。

註（一）辨慶草の異名

【季題解説】山地に自生する宿根草なれど、多く庭園に栽培せらる。春日莖を

叢生し高さ一尺許、葉は厚く狭小、鋸齒ありて互生す。夏日莖頭に枝を分ち黄色五瓣の花を集む。漢名、費菜・黄菜子。

草鷹爪（くされだま）　硫黄草（いわうさう）　忍にしだ

古書校註　【滑稽雜談】　圖書に曰、鷹爪、藤生(一)、花淺黄色、末鋭にして、鷹爪に似たり。(略)大和本草に曰、今案に木と草と二種あり。花いづれも黄色、葉似レ柳。五月開レ花。(略)

【年浪草】　一種木の屬走を鷹爪と云ふ。一種草の屬を忍にしだと云ふ。

註（一）つる生をなす。

季題解説　一名「硫黄草」と稱す。山地に自生する多年草、莖は高さ三四尺、葉は廣披針形、二三葉對生し、夏日莖頭に五瓣の小黄花を穂狀に開く。

瓜蓮華（つめれんげ）　瓦松（やまつ）

季題解説　山地に自生する常綠草、多くは石間或は屋上に生ず。葉は多肉にして細長く先尖る。葉色は時に紫色を呈して多數に重疊す。夏日葉心より莖を抽きて四五寸、多數の帶紅白色花を穂狀に開く。又、瓦松と稱す。

[illegible]　つめれんげ　(Cotyledon japonica, Maxim.)(べんけいさう科)山地に生ずる常綠多年生草本にして、石間又は屋上に生ず、葉は多肉にして細長、其の先端尖り、葉色は往々紫を呈す、多數相重り、夏日葉心より莖を抽くこと高さ四五寸、多數の白花を長穂狀に開く、五瓣・十雄蕊・五雌蕊あり。

玉簾の花（たまずだれのはな）

季題解説　石蒜科の多年草、莖の高さ一尺位、葉は狭小なる線狀をなして地下の鱗莖より叢生す、夏日、花莖を抽き頂に白色にしてやゝ紫を帶べる一花を著く。

浦島草（うらしまさう）　蛇頭天南星（まひづるてんなんしやう）　虎掌（こしやう）

季題解説　山林の陰地に自生する多年草、地下に球莖あり、葉は一柄上につき、鳥足狀に分裂す。春夏の候高さ尺餘の佛焰花を開く、花莖の上部は黒紫色を呈し甚だ長くし、纖細狀をなす、浦島の釣の絲に擬してこの名あり、有毒植物なり。

實作注意　一名「蛇頭天南星」と云ひ、虎掌の稱もあり。

例句

浦島草　なか〳〵に浦島草の壽命かな　みどり女(ホトトギス)

[illegible]　〔一〕山林の樹下に自生する多年生草本にして、地下に球莖をなし、葉

は一柄上に着きて、鳥趾狀をなして多數に分裂し、各裂片は狹長にして全邊をなす、春夏の候一莖を抽き暗紫色の佛焰花を開く、花軸の上部は黑紫色を有し、甚だ長く延長して鞭狀をなす、浦島が釣絲を垂るゝに擬し此和名あり。有毒植物なり。

下毛草　くさしもつけ

季題解說 山地に自生する多年草、高さ二尺許、葉は掌狀にして托葉を有し、夏日梢上に小枝を分ちて淡紅色の細かき花を綴る。時に鉢植を見る。

實作注意 此植物と同名の「繡線菊」(別項)あれば注意すべし。[參照] 繡線菊シモツケ

例句

下毛草　下野や日にむされたる花の色　青崎 (類題俳句集)

一つ葉　いはぐみ　いはのかは　唐一葉　石蘭　石韋

季題解說 山地の巖上等に生ずる多年生常綠の羊齒植物、往々庭園に栽植す。根莖は茶褐色の鱗毛を密毛して、細長く匍匐し、所々より一葉づゝ葉を生ず。三四寸の葉柄を有して直立し、長楕圓形の六七寸、質厚くして深綠なれど背に褐色あり。背に子囊群を密生す　新葉は夏に生ず。

實作注意 一名「唐一葉」「石蘭」古名「いはぐみ」「いはのかは」と云ひ、漢に石韋の稱あり。

例句

一つ葉　夏來てもたゞ一つ葉のひとつかな　芭蕉 (曠野)

巖檜葉　巖苔　巖松　苔松　卷柏　萬年松　長生草

季題解說 山地巖壁に生ずる多年生常綠草。高さ五六寸、枝は多數頂に叢生し、葉は小形鱗狀檜の葉に似たり、常に陰濕を好み濕氣あれば葉を開展するも乾燥に逢へば卷縮する性あり。夏日盆栽として珍重せらる。

實作注意 一名「巖苔」「巖松」「苔松」と云ひ、卷柏・萬年松・長生草等の稱をもつ。

例句

巖檜葉　巖檜葉や庭打水の一柄杓　圭岳 (同人)

片白草（かたしろぐさ）　三白草（みつじろぐさ）　半夏生（はんげしやう）　半夏生草（はんげしやうぐさ）

季題解説 到る處の水邊に自生する宿根草。莖高さ二三尺に達し、地下に根莖を有す。葉は長楕圓影にて厚く深緑色、基部は莖を抱く。夏半夏生の候に梢上に表のみ白き特異の葉を三つ生ずるより「片白草」「三白草」又は一半夏生草」の名あり。その白葉の間に三寸許の穗をなして小花を綴る。色白く緑の蔓なり。

溝蕎麥（みぞそば）

季題解説 多く水邊に自生する一年草。莖の高さ一二尺に達し、戟形の葉を互生す。葉柄の基部に鞘を有し、扁圓の小托葉をもつ。夏日葉腋に枝を分ち毎梢頭に多花を簇生し珠の如し。白色に先き淡紅なり。

例句 溝蕎麥
溝蕎麥の中にさゝ蟹かくれけり　涼舟（同人）

水車前（みづおほばこ）　水朝顏（みづあさがほ）

季題解説 池沼・溝・水田等に生じ概形「おほばこ」に似たる一年水草。莖は極めて短く、葉は薄く柔かくして帶紫緑色なり。夏日叢葉の間より莖を出して一花を水面に頂き開く。紅紫色三瓣のものを開く。「水朝顏」とも云ふ。

例句 水車前
水車前の花咲きながら流れけり　一杉（ホトヽギス）

風鳥草（ふうてうさう）

季題解説 海邊に自生する一年草、滿圓く毛ありて紫色を帶び、高さ一二尺、葉は五箇相集りて五葉の如く、七月頃白色の四五瓣花を開く。蘂甚だ長く、風鳥の飛翔するが如し。

濱豌豆（はまゑんどう）　野豌豆（のゑんどう）

季題解説 海邊の砂地に自生する草、莖の高さ一二尺に達し、凡そ豌豆に似たれども小形なり。葉は藤に似て先に細き卷鬚あり。夏日藤の花に似たる蝶形の花を立て、初め淡紫色後ち濃く移りに至れば碧に變色す。

實作注意 一に「野豌豆」とも云ふ。然し、田野に自生する「矢筈豌豆」も亦野豌豆と稱へれば混同すべからず。

例句 濱豌豆
うら〳〵と濱豌豆に歩きけり　海市（ホトヽギス）
錨綱に壓されて咲くや濱ゑんど　子角（同人）

王孫（わうそん） 土針（つちはり）　ぬはりぐさ　はりぐさ　つちはり

季語解説 「王孫、和名あれば則ち往昔本朝にありしこと明かなり。今識るものなし、惜しい哉。特に無毒にして療病の功最も大なるを、然も亦方薬中之を用ふる者稀なり」と和漢三才圖會にあり。

鳳梨（あななす）　パイナップル

季語解説 熱帯地方に産し、我國にても小笠原島・臺灣等に栽培せらる。常緑草本、葉は扁濶にして長く鋭き大鋸齒を有す。夏時叢葉の間に花開き果實を結ぶ。一名「パイナップル」と云ひ、果實は楕球にして鱗甲あり。やゝ松毬狀をなし長さ四五寸に及び頂上に數箇の葉を叢生す。日を經れば熟して黄赤色を呈す。果肉は甘酸多漿、且つ香氣あり、生食し或は罐詰とし、糖果を製するなど汎く應用せらる。食後の水菓子として夏季最も賞美さる。

例句

鳳梨　日章旗や鳳梨熟す小學校　雨城（ホトトギス）

参考 あななす（鳳梨） Ananas comosus, Merr.（あななす科）熱帯「アメリカ」原産にして廣く栽培せらるゝ常緑草本なり、葉は大形にして先端尖り、邊緣に刺を有す、夏日莖頂に淡紫色花を出し厚き穂をなし密集す、果實は多數相接して楕圓狀の一體をなし鱗片狀をなし、稍松毬形を呈す、其長さ大なるものは五六寸に達し、頂上に數箇の葉を叢出す、黄色の雄蕋を着く、果實を食用とす「パインアップル」是なり。

バナナ　甘蕉（かんしょう）

季語解説 熱帯地方に産する植物にして莖の高さ一丈餘に達し、全形芭蕉に類し、頂上に八乃至十箇の大葉を生ず。初夏叢生葉の中央より大形の花叢を出す、花色淡黄色を呈し、多數集りて苞葉に擁せらるゝこと芭蕉の如し。果實は長さ四五寸直徑凡そ一寸初め青色、熟すれば黄色にして、柔き果肉を有す。一花莖に三四總を著け、一總に十二三箇の果實を著く、バナナは芳香ありて甘味を有し、且つ營養物に富めるを以て廣く愛食せらる。

例句

バナナ　バナナ提げて人あかり來る波止場哉　冬籌（同人）

夏密柑（なつみかん）　夏橙（なつだいだい）

季語解説 橢形橙に似て實は大きく果皮厚し、齒に少し凹凹あり。黄熟せしものは甘味と酸味と少々の苦味あり。夏蜜柑は夏花の後に果實を結び、冬に至れば黄熟すれども、未だ十分の佳味を出さず、その儘梢上に止むれば、翌年の盛夏に至りて、眞の風味に達す。夏橙ともいふ。〔三四〕植物―夏蜜柑の花（夏）

例句

夏蜜柑　山吹の歸り花あり夏蜜柑　子規（全集）
黄塵や荷揚場に賣る夏蜜柑　緑村（ホトトギス）

参考　なつみかん　Citrus Aurantium, L. var. Natsumikan, Makino.（へんるうだ科）主として暖地に栽培する常綠灌木、高さ一丈許り、葉は楕圓形にして先端は鈍頭を有し、葉柄に狹き翼を具ふ、邊緣は殆ど全邊なれども鋸齒を作す、葉の全長三寸餘、其幅一寸餘なり、初夏花を梢葉腋に出し白色を呈し香氣あり、果實は大形にして横徑三寸乃至五寸に達し皮厚くして汁多し、貯藏に適し夏時に生食す、故に夏みかんと云ふ。

青柚（あをゆ）

古書校註【滑稽雜談】和産の者、四五月に花あり。五六月實を結ぶ。是を青柚と稱して、夏月に賞す。此二物を盃酒に加へて、甚佳也。按に柚は酒毒を解し、飮酒の人の口氣（一）を治す。

註（一）口臭の意

季題解說　柚の實の未だ熟さずして青きもの、略ぼ球形にして徑一寸、一寸五分位の處、香氣頗る高し。果皮を削ぎて調理の香味料として煮物・吸物にあしらひとして用ゆ。〔參照〕植物—柚の花（ユノハナ）　秋—柚（ユズ）

例句

青柚　研たての小刀そへて青柚かな　翠袖（末若葉）
葉かげなる數へる程の青柚哉　虛子（ホトトギス）

青柿（あをがき）

季題解說　晩夏の頃未だ熟さゞる柿の實の青綠色なるを云ふ。味未だ澁し、澁柿のものは搗きて澁とす。

實作注意　ある書に青柿とは靈棚に倂ふる枝柿を云ふとあれど、限れるにあらず。未熟の青き柿の謂ひなり。〔參照〕柿の花（カキノハナ）　秋—柿（カキ）

例句

青柿　青柿や蟲葉も見えて四つ五つ　鬼城（鬼城句集）
夕風や青柿かたき空の色　倶子（一萬句集）

林檎（りんご）

苹果（へいくわ）　西洋林檎（せいやうりんご）　赤林檎（あかりんご）　紅林檎（べにりんご）　青林檎（あをりんご）　小林檎（こりんご）　唐林檎（たうりんご）　いめ林檎（りん）

古書校註【三才圖會】子、赤李の如くして、差圓く、六七月に熟す。（略）其實は窪

満あり一、縄の痕の如し。徐く熟して、半青半紅、味淡、甘微酸、(一)脆く美なり。

註 (一) あまく、少しく酸味をおぶ。

季題解説 林檎の果實を云ふ。その種類數百に及び、すべて食用として用途多し　西洋林檎は中央アジアの原産にして、我國に輸入せられしは明治初年なり。爾來東北地方及び北海道・朝鮮にて盛に培養せらる。早生種のものは八月頃、中生種のものは九月、晩生種のものは晩秋又は初冬に及びて熟す。果實は扁圓形にして、基部凹陷す。品種多く、各々色及び大きさを異にす。生食して甘美なり。又茶盌蒸、フライ等にして食し、ジャム・林檎酒にもつくる。あかりんごは、紅林檎とも稱し、加賀、信濃、陸奥に栽培せられ、果實は紅色にして味甘し。こりんごは唐林檎とも稱し、形甚小さき圓狀卵形、紅黄色にして、基部に凹みなく、味酸し。いぬりんごは熟すれば黄色、日に面するところ紅色を呈す。味甘し。

例句

林檎

手にとるも林檎は軸で面白し　其角（五元集）
美しき頬に喰ひつく林檎かな　去音（類題發句集）
ゆかしさも紅淺き林檎かな　百里（或時）
つや〳〵と林檎涼しき木間哉　尙白（古人五百題）
りんこめす女車の往來かな　一烟（同）
星の使者ある夜まどへる林檎哉　文方（同人）
わくらはの梢あやまつ林檎哉　蕪村（夏より）
うつくしき籠の林檎や贈り物　子規（全集）
垣外に待てる荷馬車や林檎園　地藏尊（ホトヽギス）

桃

桃の實　毛桃　銀桃　水蜜桃　すゐみつ　早桃　早桃　魁桃　旭
[illegible]　夏桃　桃實

古書校註

【滑稽雜談】和漢も亦異品あり、心を附て見るべし。「桃の花」の心を以て句となすは、勿論春也。油桃、早桃の類ひ夏也。冬桃、霜桃又冬也。分別すべし

季題解説 桃の果實を云ふ（樹容に就ては桃の花（春季）を見るべし）。果實は外面に毛を有する核果にして、形倒卵形に頂尖れるもの、或は殆んど圓形のもの等種々あり、核は大く表面に皺あり。夏の終より秋にかけて熟すを普通とすれど、「五月早桃」（一名「夏桃」）等二三の早熟種あり。又「水蜜桃」も夏の內より市場に出づ、形大きく多漿甘美にして、外皮の紅きものと黄なるものあり、黄なるは「銀桃」ともいふ。其他種類甚だ多し。

實作注意 夏桃を除く普通の桃は古來秋季の定めなれど、近來舶來種の移入

されてより夏期に熟して市場に出づるもの多く、從つて夏季のものに分類せるものあれば掲ぐ。〔參照〕春　桃の花（一八）

例句

桃の實　桃の實や花の名殘の紅少し　柳佐（新類題）

早桃　汲水に浮びて光る早桃哉　稜草花（同）

李（すもゝ）

酸桃　赤李　うらべすもも　鵝黃　白李　牛心李　臙脂李　琥珀李　牡丹杏

古書校註

【三才圖會】李は形桃に似て、味酸を帶る。故に酸桃と稱す。生は青く、熟せば正赤にして甘し。又純白の者あり。皆肌濃美なり。關東に多く之あり。

【滑稽雜談】八閩通誌食貨部に曰、李其品一ならず。白李も亦鵝黃と名づく。實清く脆し。五六月熟す。臙脂李は皮肉倶に紅なり。味甘く、夏熟す。琥珀李は皮紅にして、肉黃也。味微しく澁し。秋熟す。

季題解説　李の果實を云ふ。李は栽培せらるゝ落葉樹、高さ丈餘に達し、葉は廣卵形、四月葉に先つて白色五瓣の花を開き、後實を結び、梅雨の頃に熟す。形圓く桃の實よりも小さし。普通赤色にして核小さく、甘く酸し。生食すべく半熟のものを鹽漬とす。種類あり。

▽赤李「うらべすもも」とも云ふ、果の內部淡紅にして臙脂の如く大形なり。

▽白李　黃白色にして白き粉をつけ早熟のものなり。

▽牛心李　熟して青白色、常の李より大きく尖り曲れるもの味美し。

▽牡丹杏「とがりすもゝ」に似て曲らず、圓大にして紅し、味爽かなり。

▽巴旦杏　別項にあり。〔參照〕巴旦杏（ハタンキヤウ）　春―李の花（スモヽノハナ）

例句

李　葉がくれの赤い李になく小犬　一茶（題叢）

なりかゝる蟬から落す李哉　殘香（炭俵）

李盛る見世のほこりの暑哉　萬乎（續猿蓑）

杏子（あんず）

杏　からもも　梅杏　金杏　白杏　肉杏　沙杏　李杏

古書校註

【三才圖會】本草綱目に云ふ。杏は葉圓にして尖あり。二月紅花を開く。（略）甘くして沙（一）ある者を沙杏となし、黃にして酢を帶る者を梅杏となす。青くして黃を帶る者を李杏となす。太さ、梨の如く橘の如き者を金杏となす。（略）山林及家園に皆之あり　信州に最も多し。

註（一）糖分のかたまつて砂の樣になれるもの。

季題解說 その實を云ふ。杏子、古名「からもも」、幹枝葉共に梅に似て肥ゆ。花は紅梅に次ぎて開く、形も稍梅に似て淡紅なり。花の後に葉を生ず、又梅に似て大なり。花の八重なるは、實なし、「花あんず」と云ふ。花の一重なるは實を結ぶ、梅の實より大なり。熟すれば黃色になり味甘く酸し。核の中の肉を杏仁と云ひ藥用とす。種類あり。〔參照〕春―杏子の花

▽梅杏　また杏と稱し、黃色にて酸味多きもの。

▽金杏　形大きく黃赤色を呈し、味甘き種類

▽白杏　形大にして黃白色を呈し、味甘く上等なる品種。

▽肉杏　赤色にして大形の種類なり。

例句

醫者どのと酒屋の間の杏かな　召波（春泥發句集）

杏　隱してや兒の食はんと杏かな　嘯山（俳諧新選）

巴旦杏（はたんきやう）　あめんとう

古書校註 【三才圖會】本草綱目に云、巴旦杏は回回國より出づ。今關西諸土にも亦有り。樹杏の如くして葉小なり。實も亦尖り、小にして肉薄く、其核梅の核の如く、殼薄くして仁甘く美なり。茶に點じて之を食へば、味榛子の如し。

季題解說 「李」に屬するもの。果實樹容すべて李に似たり。果實も李に似て大きく、稍心臟の形をなし、熟すれば果皮は淡赤色にして白き粉を被び、果肉は橙黃色、味李類の中にて最もよろし。〔參照〕李子

例句

巴旦杏　巴旦杏庭の茂りに蝕みつ　月斗（同人）

枇杷（びは）　びや　こふくへ　蠟兒（らふじ）　蠟兒　炎果（えんくわ）　夏果（かくわ）　金珠　唐枇杷（たうびは）　田中枇杷（たなかびは）　白枇杷（しろびは）

古書校註 【俳諧歲時記】盧橘、枇杷一物といふ說あれども誤り也。時珍が云ふ、文選上林の賦を注するもの、枇杷を盧橘とするは誤れり。楊升菴・丹鉛錄・爾雅代醉[illegible]く同し云々。李白詩に盧橘、秦樹（二）たり、枇杷漢宮に出づと並びて舉げたれば別物なるべし。枇杷は中ごろより此國へわたりけるにや。昔のまゝにとなへ來りて、いまだ和名を聞かず。

註（一）漢書名　（二）秦都の國に生ずる木

季題解說 枇杷の果實をいふ。樹容は枇杷の花（冬季）を見るべし。枇杷の花は冬季に開き果實は翌年の夏に至りて黃色に成熟す。形圓きもの倒卵形のものもありて、外面に微毛あり、內に黑褐色の核を含む。生食して味甘く佳良なり。種類に依りて遲速あれど大抵六七月市場に上る。田中枇杷、唐

枇杷、白枇杷等の種類あり。枝は木太刀、琵琶等を作るに用ひられ、葉は二三の薬品を加へて枇杷葉湯を作り、夏の疫氣を避くるに用ひらる。【參照】人事—枇杷葉湯(六八一) 冬—枇杷の花(八六六)

例句

枇杷　今宮祭に行て
けふことに枇杷も鈴ふるいさめ哉　鬼貫(七車)
人ありや窗の枇杷くふ山烏　楚常(卯辰集)
むつかしき葉も添けりな市のびは　瓜流(類題発句集)
鈴生りの枇杷の枝振折て見ん　曾榮(俳句大觀)
枇杷の實に蟻のたかるや盆の上　子規(全集)
枇杷の鈴四五枚の葉に立撓わり　泊雲(ホトトギス)
枇杷の種生けるが如くすべりけり　月斗(同人)
闇がりの縁に踏みけり枇杷の種　同(同)

參考 びは(枇杷)(いばら科)通常人家に栽植しある常綠の喬木にして、高きもの三四丈餘に達す、葉は互生して枝端に集り長大にして裏面に毛を有し葉緣に鋸齒あり、初冬に五瓣の香ある小白花を短き複總狀花穗に集め着け穗軸穗枝に褐色あり、翌年の夏果實成熟す、形正圓或は橢圓形にして、黄熟し外面に毛茸あり、味甘酸にして佳味なり、果内に暗褐色の大なる種子あり。

犬枇杷（いぬびは）　小無花果（こいちじく）　山枇杷（やまびは）　天仙果（てんせんくわ）　奶漿包（だいしようほう）

季題解説 處々に自生すれども殊に暖國の海濱に多き常綠灌木、高丈餘に達し、葉は滑かにして橢圓形、互生なり、夏秋の候葉間に無花果に似たる花をつけ指頭大の實を結ぶ。

實作注意 「小無花果」「山枇杷」等の異名ありて、天仙果・奶漿包と漢稱あり。【參照】枇杷。

例句

小無花果　こいちじくくれて濱の子裸かな　主岳(同人)

參考 いぬびは　一名こいちじく　Ficus erecta, Thunb.(くは科) 處々に自生すれども、殊に暖國の海邊に多き落葉灌木なり、高さ一丈許に達し、葉は橢圓形にして互生し、殆ど平滑なり、夏秋の間葉間の長梗上に紫紅色花嚢を生ず、雌雄異株なり、雄花は雄株の花嚢中に生ず、而して雌花は雌株の花嚢に生じ、後成熟し紫黑色となり、小兒採り食ふ。

岩梨（いはなし）　砂苺（すないちご）　はまなし　こけもも　越橘（えつきつ）

古書校註 【滑稽雑談】大和本草に曰、岩梨(和名)葉平地木（ヤマタチバナ）に似て、高數寸の小木也。實は似レ苺酸。北國に一。砂苺と云ふ。山城州の山、砂土に生ず。味不美。小兒食す。私に云ふ、此者熟する時黑色を帶ぶ。俗に黑嚢付るといへり。

【三才圖會】伊波奈之は江州三井寺の山中に之あり。（略）葉の大さ、瓢樹の葉の如くにして尖がらず、地に揩て生ず。二月小白花を生ず。虎耳草（ユキノシタ）の花に似たり。三月子（み）を結ぶ。青大豆の如し。闇くして數顆攅生（一）す。楊梅樣の如し。葉の交に襃む。外色青、内紫黑色。小兒皮を剝て食ふ。味微酸也。

註（一）多數の圓い粒が集り實る

季題解説 山地に自生する常綠小灌木、高さ五六寸に達し、莖は地に布きて生じ、葉は長橢圓にして堅く鋸齒あり、裏面に茶褐色の毛をもつ。春枝端に淡紫色鐘狀五裂の花を三四箇下げ、形圓き果實を結びて熟す、色黑赤し、味甘く酸く食ふべし。

實作注意 よないちご・はまなし・こけももとも稱し、越橘とも書く。

例句

岩梨

軒近き岩梨折るな猿の足　千那（猿蓑）

岩梨や山の道草わすれ草　任口（類題發句集）

岩梨や崖の窪みの齒朶がくれ　涼舟（同人）

[illegible]嚢つけて岩梨味をもちにけり　夜白（同）

參考 いはなし Epigaea asiatica, Maxim.（しやくなげ科）山地に自生する常綠の小灌木なり、莖は地上に臥して、高さ四五寸に過ぎず。葉は互生し、長橢圓形を呈し、緣邊に褐色の剌毛ありて至細の鋸齒をなし、質强剛にして粗糙なり。表面は綠色にして光澤を有し、背面は淡黃色にして、中肋に褐色の細剌毛を有す、春日梢上に淡紫色鐘狀花數箇を簇生し、夏日小球狀の白色果を熟す。

玫瑰（はまなす）

古書校註

【清稗類鈔】時珍の食物本草に云、玫瑰、莖の高さ二三尺、極めて穢汚灌漑に利す。春時條を抽き、枝幹刺多し、薔薇に似て、葉邊鋸齒多し。四月花を開く。大なる者は盞の如く、小なる者は蓉の如し。色は臙脂の若く香は薔薇に同じ。味甘微苦、之を食へば芳香甘味、人をして神爽たらしむ。

季題解説 北國の海濱砂地に多く自生する落葉灌木、高さ二三尺、多く枝椏を分ち、全體に剛毛を密生す、葉は羽狀互生、小葉は橢圓にて鋸齒ありて

皺あり。茨に似たる紅紫色の五瓣花を開く。花の後櫻桃に似たる果を結び晩夏熟すれば赤し、小兒の好む所。

賞作注意　「はまなす」は濱に生じ、梨に似たる味の實なるより、濱梨と呼ぶべきを、東北の訛にてしをすと云へるものなり。

例句

玫瑰
玫瑰や砂の小山の影圓く　文方（同人）
玫瑰や晝たけし波よせ返し　翔字（石楠）
玫瑰の花に押し行く潮涼し　蕉雨樓（高潮）
玫瑰の霧の中なる浪の音　紅石（ホトヽギス）

生胡桃（なまくるみ）

季題解說

【滑稽雜談】　博物志に曰、張騫（一）外國に使して還る。乃ち胡桃種を得たり。（略）明珍本草に曰、此果、外青皮肉ありて、之を包む。其形桃の如し。胡桃は乃其核也。（略）（二）今夏に押する所、その青皮ある者を生胡桃と云ふ。勿論當季（三）也。胡桃とばかりは秋也。

註　（一）支那前漢武帝の時大月氏に使して匈奴に捕へらる　十餘年後歸る。（二）以下其諺の自說也。今夏の季に當つる所の者はの意。（三）夏の季。

季題解說　胡桃の熟さずして青きものをいふ。胡桃の實は桃に似て光澤なく、核は堅くして多くの皺あり、核肉は脂ありて味美なり、種々料理に用ゐらる。生胡桃は青皮を被れる胡桃を云へる也。【參照】秋―胡桃（くるみ）

例句

生胡桃
雨ばれや枝に汗かく生胡桃　如在（俳句大全）

參考　おにぐるみ、一名くるみ　Juglans Sieboldiana, Maxim.（くるみ科）山野に多く自生すれども又往々栽植さるゝ落葉喬木なり、高さ四五丈に達することあり、葉は奇數小葉より成り、羽狀複葉にして九乃至十五箇、小葉は邊緣に鋸齒を有し兩面に毛あり、六月頃開花す、雌雄同株にして雄花葇荑穗は綠色にして長さ五六寸、腋生して垂れ、雌花は頂生して直立し帶赤色の花柱を有す、花後核果を結ぶ、大さ七八分、核は卵圓形にして極めて硬く表面に皺あり、花色雄花穗は綠色にして長さ五六寸、雌花穗は稍帶赤色の花柱を有す、材を以て鐵砲の臺木を製し、種子は食用に供す。

青梅（あをうめ）

梅の實（うめのみ）　實梅（みうめ）　梅實（うめつり）

古書校註

【滑稽雜談】　和產又種多し。洛において、醍醐笠取村（一）の種、果皮薄く肉厚くして上品とす。

季題解說　梅の實の未だ熟さずして色青きものを云ふ。實梅と云ふも同じ。

梅酒（人事）を作るに用ふ。

實作注意 青梅と云ふも實梅と稱ふる同一のものなれども、青梅の場合は未熟にして其色の青きを思ひ、實梅の場合は黄熟せるものをも指せる感じあり。【參照】人事―梅酒（ウメザケ） 梅干（ウメボシ） 春―梅（ウメ）

例句

青梅

玄山つくしに行くに

青梅のつくしにいさむ藍出かな　鬼貫（七車）

うれしさは葉がくれ梅の一つかな　杜國（春の日）

青梅や拌心の人垣を隔（ヘダツ）　蕪村（新虛栗）

青梅や微雨の中行く飯盛　同（新花摘）

青梅やさてこそしりぬ豐後橋　同（　）

青梅に眉あつめたる美人かな　同（五車反古）

青うめを打てはかつちる青葉哉　同（句集）

青梅に打鳴らす歯や貝のごと　同（遺稿）

青梅ににほひ佗しくもなかりけり　太祇（太祇句選）

青梅や女のすなる飯の菜　同（　）

青梅や黄なるも交る雨の中　召波（春泥發句集）

青梅を見つけ出したる朝日かな　春海（其雪影）

青梅をかつや女子の童木履　木導（類題發句集）

青梅に蟷螂うたる丶曇かな　成美（谷風草）

梅の實

梅の實の落ちて乏しき老木哉　子規（全集）

摘んで梅かちけりな寺若衆　同（　）

十たらず野中の梅の黄ばみけり　曉臺（曉臺句集）

實梅

荒園の草に落ちたる實梅哉　月斗（同人）

小梅（こうめ）　信濃梅（しなのうめ）　甲州梅

季題解說 一名「しなのうめ」と稱し、庭園に培養する落葉灌木にして、枝細く高さ六七尺に過ぎず、葉も花も梅に似て、花は白く多く下向に開く、實は小形に圓く丸金柑の如し、一枝に二三十個を着け垂れ、梅雨に入れば忽ち早熟す。

實作注意 俳句にて普通に梅と稱ふれば梅の花を意味すれど、小梅に限りてその果實を指すに用ふ。

例句

小梅

赤きには紫蘇のそめたる小梅哉　秋色（句兄弟）

楊梅（やまもゝ）　もゝかは　樹梅　機梅　聖梅　楊梅

古書校註

【滑稽雜談】時珍本草に曰、其形水揚子の如くにして、味、梅に似る、故

に名づく。實を結びて楮實の如く、五月熟す。紅白紫あり。紅・白に勝り紫、紅に勝れり。（略）順和名に曰、七卷食經に云ふ、山櫻桃二種あり。黒櫻子和名夜末毛毛。

季題解說　楊梅の果實をいふ　楊梅は暖地の自生種なれど、園養さるゝ常綠喬木、大なるは高さ數丈に及ぶ。葉は互生の長楕圓狀披針形にして質厚し。春三月葉間に花を開き、花の後桑の實に似て三四分の丸き實をつく。夏熟して紫赤色となる、味甘くして食ふべし。又白色のものあり、生食の外、鹽藏又は砂糖漬とし、或は酒を釀す。

實作注意　俳句にては單に楊梅と云へばその果實を指して云ふ。「やまうめ」「やうばい」「ももかは」等異名し、漢字は、樹梅・龍睛など用ふ。**參照** 春―楊梅の花ヤマモモノハナ

例句

楊梅

山ももの落つる際つく清水哉　　未陌（あやにしき）

楊梅のぬけて行身や駿河籠　　馬光（馬光集）

楊梅や千體佛のあたま數　　越蘭（類題發句集）

町中や楊梅時に鳴く蛙　　左次（東　集）

やまもゝの色にそみたる木桝かな　　ひさ女（ホトトギス）

やまもゝや叔母はやもめとなりにけり　　今夜（同　）

餅梅（もちうめ）

古書校註

【年浪草】　名義未詳、梅子、凡梅雨の時熟す、其間黃熟して、更に滓なく液多き者疑らくは之餅梅と謂ふ可きか。和俗果穀の類粘る者を呼びて、餅となす。此謂か。

櫻の實（さくらのみ）

實櫻（みざくら）　さくらんぼう　さくらんぼ

古書校註

【滑稽雜談】　私案に、和産の山櫻と稱して、花至て細白。見るにたらざるいやしき種あり、其樹に是を生ず。一枝數十顆（一）。大さ如レ椒（二）。俗に櫻んぼと云ふ。又字和水と云ふ。（略）鹽藏して殺（三）となす。

【三才圖會】　能く魚毒を解す。（四）

註（一）圓く小さき粒。（二）はじかみ　（三）肴に同じ。（四）此の實魚毒の力を失はすたいふ。

季題解說　櫻の實をいふ（櫻は春參照）。櫻樹は初夏實を結ぶ、豆大にして、始靑く、次で赤くなり紫になり、熟すれば黑し、小兒好んで食ふ。俗に「さくらんぼう」と云ふ。

實作注意　櫻桃の實をも一般に「さくらんぼう」とも稱ふれど、本項のものは普通の櫻樹の實をさして云へるなり。

に刺多く、葉は圓形にして淺く三裂す。夏季に至れば淡綠色の小花を垂れ、楕圓形の小果を結ぶ、色赤味を帶ぶる綠黄色なり。庭園に栽培す、實は甘く酸く生食す。英名「グースベリー」と稱するものゝ一種。

【參考】すぐり　Ribes grossularioides, Maxim.（ゆきのした科）信州に特産する落葉の灌木なり、莖は叢生して三四尺に至り、強刺を有し、莖面に時に細刺あり、葉は互生或は短枝に束生し、略圓形にして、淺く三裂し、缺刻鋸齒を有し、長柄あり、春日葉腋より花梗を抽き白花を着く、小にして下垂す、五萼片は狹長にして反曲し、五花瓣は長楕圓形をなして尖り直立す、花中に五雄蕊あり、果實は球形にして平滑なる漿果をなす、本種は洋種のグースベリに酷似すと雖へども、別種に屬す。

桑の實（くはのみ）　椹（くはのみ）　桑苺（くはいちご）

【古書校註】【三才圖會】桑は蠶を養ふの地皆多く之を栽ゆ。實らざる者、俗に之を男桑と謂ふ。

【滑稽雜談】按るに桑實は覆盆子に似たり。時又同熟す。俗に桑いちごと稱する者か。

【季題解説】桑の木の實をいふ（樹容は桑の花（春季）見よ）。桑は春、葉に先ちて花を開き、夏に至りて實を結ぶ、その色初は綠、次で赤、更に熟して紫黒色になれば生食すべし。味甘く酸味ありて多漿なり。釀して酒をつくる。

【實作注意】漢字は、椹をあて、實の形苺に似たるより「桑苺」とも云ふ。【參照】春―桑の花（ハル）

【例句】

桑の實

桑の實に片つま染る娘哉　一風（類題發句集）
桑の實の西紅や施藥院　全阿（錦龍賦）
桑の實や兒にまゐらする李氏が環　几董（井華集）
桑の實や二つ三つ食ひて甘かつし　鬼城（ホトトギス）

椹

椹や花なき蝶の世すて酒　芭蕉（虚栗）

【參考】くは（桑）（くは科）山野に自生するものありと雖も、多くは畑に栽培せらる、葉は卵圓形にして鋸齒を有し、種々に分裂するものと、然らざるものとあり、花は四月頃葉と共に開き、單性にして、雌雄異株又は

同株に開き、共に穗狀を呈す、果實は痩果にて多肉宿存の萼片之れを包み此のもの相集つて楕圓形の所謂桑椹をなし、熟すれば紫黑色を呈す。

木苺（きいちご）　懸鉤子（きいちご）

季題解説　多年生草木にして直生又は匍匐性又は蔓性の灌木にして刺あり。單葉又は複葉を互生して托葉を備ふ。花は頂生又は腋生、單一・總狀・複總等の花序にして、白・紅・紫等諸色あり。種類は非常に多し。其の内「懸鉤子」は一般に云ふ木苺の代表的のものにして、山野に自生する落葉木。高さ三四尺、莖葉共に刺多く、衣類等に懸かるゝを以て「懸鉤子」と稱す。葉は稍長みを有する掌形鋸葉あり、四五月の頃葉間に白色五瓣の花を開き、夏日黄色の果實を熟す、食ふべし。外に日本産の「きいちご」には、うらじろいちご、えぞいちご、おほもみぢいちご、かぢいちご、くまいちご、くろいちご、ごえふいちご、ごしよいちご、たいわんいちご、ちしまいちご等種類多し。　[illegible]　苺子

例句

木苺　木苺をつむや茨にさはらじと　寶玉（ホトトギス）

取それて落つ木苺の[illegible]金　戡　十字（同　）

苺（いちご）　苺（いちご）　覆盆子（いちご）　和蘭苺（おらんだいちご）　西洋苺（せいやういちご）　蔓いちご　苺摘む（いちごつむ）　苺籠（いちごかご）

古書校註　「三才圖會」蓬蘽・覆盆子・薦・樹苺・蛇苺、凡五種あり。「蓬蘽」（略）六七月に小白花を開き、蔕に就きて實を結ぶ事、三四十顆にして簇を成す。生なれば則青黄、熟すれば則紫黯。微しく黒き毛あり。狀熟したる椹（一）の如し。（略）「覆盆子」（略）蓬蘽より小。（略）白花を開き、四五月實のる。子を成す事も亦蓬蘽より小にして、稀疎なり。生なれば則青黄、熟すれば則烏く赤し。（略）「薦」（略）四月に實のる。熟すれば其色紅にして、櫻桃の如く、覆盆に似て太だ赤く、味酸く甜して、食ふ可し。（略）「樹苺」（略）四月に小白花を開き、實を結ぶ。色紅。覆盆子と一樣、但し色紅なるを異となす。（略）「蛇苺」（略）四五月に小黄花を開く。五出。實を結ぶ事鮮紅なり。狀覆盆に似て、面と蔕とは則不同、其根甚細く、其實啖ふに堪へず。

註　（一）粒が集り實る。（二）桑の實。

季題解説　苺の實を云ふ（和蘭苺皆及す）。近來盛んに栽培せらる宿根草、地に匍匐する莖を有し、葉は三個の掌狀複葉、深緑にして鋸あり、莖葉に毛あり、春の末に葉間に五瓣の白き花を開き、夏の初め細粒をなせる實熟して赤し、實は種類によりて異なれど、味甘く一般に賞せらる。覆盆子・木苺・草苺・蛇苺は別種なればその項に就て見るべし。　[illegible]　木

[illegible]　苺イチゴ　苗代苺イチゴ　草苺ナゴ、蛇苺一名

例句

苺　麓ともおぼしき庭のいちごかな　支考（蓮二吟集）

岩鼻や旅人労れていちご食ふ　白雄（白雄句集）

旅ごゝろも奈須野のいちごこぼれけり　乙二（松の、え草稿）

いちご熟す去年の此頃病みたりし　子規（全集）　[illegible]

覆盆子　一畝の覆盆子葉茂り實少し　虚子（ホトトギス）

蓬いちご　山ふみの錫にかけたり蓬いちご　曉臺（曉臺句集）

苗代苺（なはしろいちご）　三葉苺（みつはいちご）　茅苺（ちぼいちご）　栽秧抛子（さいあうはうし）

季題解説　原野に生ずる匍匐性の落葉小灌木、長さ四五尺に達し、蔓狀に刺を具へ小枝を分つ、葉は柄ありて互生、普通は三つの小葉よりなる複葉。表綠に裏白し。初夏苗代時に淡紅紫色の小さき五瓣花を開き、赤色の實を結ぶより、「苗代苺」と云ふ。食するに甘く酸し。酒を釀し、舍利別とす。

實作注意　一に「三葉苺」と云ひ、地方的の異名甚だ多し。漢名、茅苺・栽秧抛子等あり。參照　苺イチゴ

例句

苗代苺　よく熟れて苗代苺向ふ岸　圭岳（同人）

草苺（くさいちご）　蓬藥（くさいちご）　やぶいちご

季題解説　その果實を云ふ。山野に自生する小灌木。莖の高さ一二尺に及び、粗に刺を有す。葉は互生し小葉を以て羽狀をなし毛をもつ、春花を開き夏日その實熟して紅色となる。味甘く少し酸し。この種類に和蘭苺（西洋苺）又は苗代苺あり。參照　苺イチゴ

例句

草苺　魚籠持ちの子が食ひゐるや草苺　圭岳（同人）

蛇苺（へびいちご）　くちなはいちご

季題解説　原野路傍に多く地上に蔓延して遂には一尺餘にも及ぶもの、長柄ある三個の小葉を有し、三月頃葉腋に黃色の五瓣花を開き、果實は細小なれども熟するときは花托腫大して紅色を呈す、食ふべからず。しかし開花前の莖葉を煎じて内服すれば、子宮病・月經不順等を治癒す。參照　苺イチゴ

例句

蛇苺　藪の側まで草刈つて來て蛇苺　月村（同人）

夏茱萸（なつぐみ）　たはらぐみ　唐茱萸（たうぐみ）

季題解説　山野に自生する落葉灌木、高さ八九尺、互生せる葉は長楕圓形、

註（一）から

季題解説 酸漿の未だ熟さず外苞の尙青きものを云ふ。酸漿の萼は五裂鐘狀にして初め形小なれど、花後は著しく膨大して廣卵形をなし、表面脈に脉多き外苞となり、果實を包みて垂る。後赤熟す。〔參照〕酸漿の花（六六）秋　酸漿（註）

例句

青鬼燈

我戀や口もすはれぬ青鬼燈　嵐雪（其袋）
逢恨戀
少女を失ひし丈州を悼む
哀れなり青鬼燈のぬしや誰　白圖（堅並集）
叢に鬼灯青き空家かな　子規（全集）
うかゞへば青鬼灯のなかりけり　草秋（ホトヽギス）
雨の降る青鬼灯の夜店かな　富士子（同）
蚊遣もえて青鬼燈の丈高し　青々（妻木）

臼（うす）の實（み）

鸎實（うすのみ）　あうじち　鶯神樂（うぐひすかぐら）の實（み）　鶯（うぐひす）の木（き）の實（み）

古書校註

【栞草】和名抄　鸎實和名阿宇之智、一云、宇久比須乃岐乃美、今案所出未詳。大和本草　苦利子樹、和名宇久比寸といふ、所々山林にあり、小木なり、葉は山躑躅に似て兩々相對す、臘月より諸木にさきだちて生ず、三月に小花さき、四月に實熟す、兩々相對して、葉の莖より內に有り、葉の莖の本より實の莖生ず、異物なり、鶯の始て鳴ときに、此花さく故に名とせしにや、京畿にて臼の木と云ふ、その實の形臼のごとく、上に窪みあり、百菓の先がけなり、秋は紅葉して落つ、立花の下草にするなり。

季題解説 臼の木の實なり、臼の木は山地に自生する落葉小灌木。高さ三四尺。葉は寸餘の卵形互生す。春夏の候、葉の間にどうだん躑躅に似て薄紅の小花を開く、實の形小豆程にて熟せば赤く、上凹みにて臼の如きより此名あり。味酸甘く小兒の好んで食ふ所なり。紅葉す。

早（さ）苗（なへ）

稻（いね）の苗（なへ）　苗（なへ）　若苗（わかなへ）　玉苗（たまなへ）　あまり苗（なへ）　捨苗（すてなへ）

古書校註

【年浪草】本朝食鑑に曰、凡そ四月五月節前に至て、苗を種う。籾を蒔て三四十日に至て既に苗を生ずること七八寸、或は尺餘。之を採て田に移植す。此を早苗と稱ふ。

季題解説 稻の苗。苗代より本田に移し植うる頃のものの謂なり。苗代に蒔附後凡そ三四十日間にして苗の長さ六七寸に成長し、葉の先淡黃色を帶ぶ、これを熟苗または堅苗と云ふ。これを採りて本田に挿植するものなりその時期は八十八夜前後とす。

實作注意 一に「若苗」と云ふ、又美稱して「玉苗」とも云ふ、あまり苗、捨苗等の語あれども、なほ早苗取に就て別項を參照すべし、【參照】人事―早苗取

例句

早苗

雨折々思ふ事なき早苗哉　芭蕉（木曾の谿）

西か東か先早苗にも風の音　同（信夫摺）

白河に出る
しら河の關をこゆるとて古道をたどるまゝに

早苗にもわがいろ黑き日數哉　同（泊船集）

文字摺石

早苗とる手もとや昔忍ぶずり　同（小文庫）

手ばなせば夕風やどる早苗哉　同（俳諧古選）

見てゆくや早苗のみどり里の藏　言水（俳諧五子稿）

白鷺の羽ずりに動く早苗哉　浪化（浪化上人發句集）

獺の住む水も田に引く早苗哉　蕪村（新花摘）

山おろし早苗を撫て行方哉　同（遺稿）

雨洗ふ長井の象の早苗哉　同（落日庵句集）

山城へ近江の早苗移りけり　召波（春泥發句集）

水頭あけて早苗の投げらるゝ　虛子（ホトトギス）

苗

水古き深田に苗のみどりかな　蕪村（新花摘）

髻を捨るや苗の植あまり　同（落日庵句集）

あまり苗

うれしさはこれにもたりぬあまり苗　乙二（松窓乙二發句集）

捨苗

捨苗や田中の庵のはいり口　白雄（白雄句集）

麥（むぎ）

二年草（ふたとせぐさ）　年越草（としこしぐさ）　茶筅草（ちやせんぐさ）　大麥（おほむぎ）　小麥（こむぎ）　麥の穗（むぎのほ）　穗麥（ほむぎ）　蓬麥（おそむぎ）　痩麥（やせむぎ）　麥の秋（むぎのあき）　麥秋（ばくしう）　麥野（むぎの）　麥畠（むぎばた）　麥の波（むぎのなみ）　麥稈（むぎわら）　麥埃（むぎぼこり）　麥日和（むぎびより）　麥の雨（むぎのあめ）

季題解説 五穀の一に數へられ、米に次ぐ有要なる植物、冬の頃に種を下せば數日にして芽を出し、冬を經て枯れず、翌春四月の末に至りて穗を出す、莖は圓く中空にして周々に節あり、高さ三四尺に及ぶ、葉は細長く下に鞘ありて莖を包む、穗は莖頭に一箇生ずるのみ、各節に六箇の小穗を生じ、六條に排列して、長き芒を有す。二年草、年越草又は茶筅草の異名あり。種類頗る多く、收穫の時季によりてこれを早熟と晩熟とに分ち、大別して大麥と小麥とす。大麥は炊きて飯となし、或は粉に挽きて麪類・パン・味噌・醬油・麥酒の原料となり、其用途多し、稈は夏帽子等を造る、小麥は飯に炊ぎてされども是亦用途多く各種の菓子類を製し、味噌・醬油を作り、滓は石鹼の料となり、稈にて屋根を葺く。

實作注意 穗を出したる麥を「穗麥」と云ひ、時來りてその熟せるを「麥の秋」と稱す、「麥野」は「麥畠」の廣大をもてるもの、「麥の波」は麥畠の風に靡け

るさまを形容しての詞、又麥の收獲をも詠じて麥の秋と云へるものあれば注意すべし。（一名）烏麥（カラスムギ）　人事—麥刈（ムギカリ）

例句

麥
　行駒の麥になぐさむ宿り哉　芭蕉（小文庫）
　　田家にて
　屋の棟の麥や穗に出て夕日影　丈草（丈草發句集）
　穗に出て夏をつくらふ田麥哉　浪化（浪化上人發句集）
　うは風に音なき麥を枕もと　蕪村（句集）

麥の穗
　麥の穗や泪に染て鳴く雲雀　芭蕉（嵯峨日記）
　　留別
　麥の穗を便につかむ別かな　同（有磯海）
　　行脚の客にあふて
　いざ共に穗麥食らはん草枕　同（孤松）

穗麥
　春や穗麥が中の水車　蕪村（句集）
　蕎麥あしき京をかくして穗麥哉　同（五車反古）
　旅芝居穗麥がもとの鏡たて　同（句集）

遲麥
　遲麥の端午へかゝるみだれかな　浪化（浪化上人發句集）

瘦麥
　瘦麥や我身ひとりの小百姓　召波（春泥發句集）

麥の秋
　辻堂に死せる人あり麥の秋　蕪村（新花摘）
　病人の駕も過ぎけり麥の秋　同（句集）
　飯盜む狐追ひうつ麥の秋　同（遺稿）
　深山路を出拔てあかし麥の秋　太祇（太祇句選）
　穗にむせぶ咳もさわがし麥の秋　同（同）
　覆面の內儀しのばし麥の秋　召波（春泥發句集）
　禰宜殿に馬も借られず麥の秋　乙二（たのゝえ草稿）
　唐崎がなくば何所まで麥の秋　蒼虬（蒼虬翁發句集）

麥秋
　麥秋や鼬啼なる長が許　蕪村（新花摘）
　麥秋や遊行の棺通りけり　同（同）
　麥秋や何に驚く屋根の雞　同（新五子稿）
　麥秋や埃にかすむ晝の鐘　太祇（太祇句選）
　麥秋や埃の中を薩摩殿　几董（井華集）
　麥秋の草臥聲や念佛講　同（同）
　麥秋や糠の中ゆく太神樂　也有（蘿葉集）
　麥秋や土臺の石も汗をかく　一茶（九番日記）
　麥秋や雲よりうへの山畠　梅室（梅室家集）

麥野
　馬子起て馬をたづぬる麥野哉　其角（五元集拾遺）

麥畠
　つかみ合ふ子供のたけや麥畠　去來（去來發句集）
　狐火やいづこ河內の麥畠　蕪村（句集）

麥の波
　わびしげや麥の穗なみにかくれ妻　太祇（太祇句選）

引く如くなるより「茶挽草」の名あり。又雀麥と云ひ燕麥と書す。〔參照〕麥〔秋〕

【例句】

烏麥　秋しらぬしげりもにくし烏麥　其角（五元集拾遺）
　心ならでまわるもをかし茶引草　鬼貫（鬼貫句選）

【參考】からすむぎ（燕麥）Avena fatua, L.（禾本科）原野に自生する二年生草本なり、莖高さ二三尺に達し、葉は細くして尖り概形おほむぎに似たり、疎らなる穗を抽く、發育よきものは分岐す、五月頃開花、花は下に向ひ其頴極めて大なり、頴果は小麥に似て細長にして毛あり。

夏蕨（なつわらび）

【季題解説】蕨は春地下莖より新葉を出すものなれど、深山に生ずるものはその出ること遲く初夏に至りて漸く嫩芽を上ぐるものとす。之を夏蕨と云ふ。〔參照〕春—蕨（ワラビ）

【例句】

夏蕨　くるしくも雨こゆる野や夏蕨　白雄（白雄句集）
　鳥啼いて谷靜なり夏蕨　子規（全集）

水蕨（みづわらび）　水人參（みづにんじん）　水防風（みづばうふう）

【季題解説】水田沼澤の淺水又は濕地等に生ずる一年草、短小柔軟なる葉を羽狀に分裂し、四五寸より一尺餘に達す、葉の緣邊は裏面に曲り、縱列せる子嚢を覆ふ。

【實作注意】水中に生ずるものは大きく、陸地のものは小し、夏の間に葉を取り煮て食す。一名を「水人參」「水防風」と云ふ。

蕗（ふき）　款冬（くわんとう）　蕗の葉（ふきのは）　蕗の廣葉（ふきのひろは）　永蕗（ながぶき）　秋田蕗（あきたぶき）

【古書校註】

【年浪草】時珍が食物本草に曰、款冬（一）水傍澗間に生ず。葉葵に似て大なり。根紫色　十二月黄花を開く、青紫蔓土を去ること一二寸。○崔禹錫が食經に曰く、蕗の葉、葵に似て圓く廣く、其莖之を噉ふべし。○陶弘景が曰く、款冬腹裏に絲あり云々。四五月專ら其莖を採りて蔬となす。之を長蕗と謂ふ。

註（一）蕗をさす。

【季題解説】山地に自生す。山間地方は之を採收して食用に供す。都會にては重要なる蔬菜として菜園に栽培す。初春宿根より地面に接して花蕾を發生し、大きさ拇指の如く薄青く、苦味多し。食用とす、蕗の薹なり。春高さ四五寸穗に黄白花を開き、別に一莖一葉を出す、高さ一二尺、葉は大きく牛蒡に似て圓く葉柄長くして青く紫色を帶ぶ、多肉柔軟にして一種の芳

香を有す、莖は皮を剝きて食ひ、葉も食品と爲す。品種に水蕗（一名地蕗）あり、秋田蕗は葉柄四五尺を越え、莖の太さ二三寸に及ぶものあり、其の大なる事有名なり。〔參照〕人事―蕗代、春―蕗の薹

例句

蕗　しねんこの竹倒れけり蕗の中　戍美（谷風草）

蕗の葉　夜もすから蕗の葉廣し雨の音　曾北（類題發句集）

蕗の葉に鳴出る蛙やついり晴れ　酒堂（同）

蕗の廣葉　卯の花のこぼるゝ蕗の廣葉哉　蕪村（句集）

山陰や蕗の廣葉に雨の音　闌更（半化坊發句集）

紫蘇

のらゑ　片面紫蘇　青紫蘇　兩面紫蘇　縮緬紫蘇　白蘇　紫蘇酒　紫蘇の色　紫蘇の香

古書校註

【三才圖會】肥地の者は面背皆紫なり。瘠地の者は面青く背紫なり。其面背、皆白き者は、卽白蘇なり。乃ち荏なり。紫蘇嫩なる時、葉を採りて蔬に和して之を茹ふ（略）五六月根を連ねて（一）採り收めて火を以つて其根を煨（二）し、陰乾すれは則久しきを經て葉落ちず

註（一）根をつけたまゝ。（二）埋火にてやくこと。

季題解說

古名「のらゑ」畑地に植うる一年生の草、莖は方形にして紫色又は青色を呈し高さ二三尺許にして、多く枝を分つ。葉は楕圓にして先尖り周邊に鋸齒あり。莖背青きを「片面じそ」兩面青きを「青じそ」表裏共に紫色なるを「兩面じそ」と云ひ葉の縮緬を有するものに「縮緬紫蘇」の名稱を附す。八九月頃穗狀をなして、白或は淡紅色の唇形の花冠を著け、直に細き實を生ず。莖葉共に一種爽快なる佳香を有す。梅干その他漬物の色著と香味をつけるに用ゐらる、又「紫蘇酒」をも作る、唐津の名産なり。

例句

紫蘇　夕風や花落すしその露重み　杉風（常盤屋句合）

紫蘇の香　紫蘇の香を嫌ふ兒あり瓜膾　如闌（車　蓋）

參考

しそ　Perilla frutescens, Breit. var. crispa, D. Che（唇形科）

支那の原産にして、畑に栽培する一年生草本なり、莖は方形にして枝を分つ、葉は對生して長柄を有し、廣卵形にして邊緣に鋸齒あり、葉色紫色を呈し、且佳香あり、夏秋の交枝梢に穗をなし淡紫色小唇形花を穗狀に綴る、葉は梅漬の料となし、實は醬油漬又は鹽漬にして食用に供す、アヲジソは綠葉を有し白花を開く一品なり。

青山椒

古書校註

【三才圖會】四月黄花を開き、青白色、五月實を結ぶ。叢生（一）して青

色、之を青山椒と謂ふ。味辛く香佳し。鹽水に藏せば、年を越して、辛味變ぜず。

註（一）あつまり生ず。

季題解説 山椒の實の未だ熟さずして青きものを云ふ。辛味と香氣ありて煮て食ふべく、燒肴のあしらひに添へ或は口取に用ふ。〔參照〕春―山椒の花。秋―山椒。

例句

青山椒　燒飯に青山椒をちからかな　　桃隣（古太白堂句選）

勾ひ出る青山椒や葉の雫　　正哥（類題發句集）

青山椒摘むや鞍懸もちよりて　　芳水（ホト、ギス）

青蕃椒（あをたうがらし）　青唐辛（あをたうがらし）

古書校註

【三才圖會】番椒（一）は南蠻より出づ（略）五月小白花を開き、子を結ぶ。數品あり。（略）皆（二）生は青く、熟すれは赤し。

註（一）慶長年中渡來す　（二）此生の青きを青蕃椒と稱す（年浪草）

季題解説 蕃椒の實の未だ熟さずして青色なるもの。蕃椒の漿果は秋の頃成熟すれば眞紅になるも未熟の間は青し、葉小枝と共に煮食し或は燒き或は油を以て煠めて食す、種類に依て形長きもの丸きものあり。〔參照〕蕃椒の花―夏、秋―蕃椒。

例句

青蕃椒　我世からし青蕃椒南蠻酒　　四明（懸葵）

蠶豆（そらまめ）　はぢき豆　豆

季題解説 廣く畠に栽植さるゝもの、秋、種を下ろして夏これを收む。莖は方形にして高さ二尺許、葉は互生し羽形にて五個の葉片を有す、軟かく女兒これを膨らして、酸漿として遊ぶ、花は春、葉間に白色に紫黑の斑あり蝶形のものを開き、花の後莢を空に向けて結ぶ。故に「そらまめ」と云ふ。莢は稍平き圓筒形をなし豆は扁平にして拇指大の短卵圓形をなし未熟なる時には綠色を呈す、筍の後を受けて、初夏の食膳を占むるものとす。京阪にては「はじきまめ」と稱す。

實作注意 俳句にて豆と云へば、そら豆を云ふ。他は名稱を冠らして稱ふなり。えんど豆・青豆・黑豆・あづき豆・さや豆等の如き也、豆の葉・豆の花・豆飯など云へばそら豆をいふなり。〔參照〕人事―豆飯。春―蠶豆の花。

例句

蠶豆　蠶豆のみのるにつけて葉のあはれ　　虛子（ホト、ギス）

はじき豆　はぢき豆出初めの澁さ懷しき　　月斗（同人）

夏豆　五月豆　早生豆　夏大豆　枝豆

季題解説　大豆の早生種をいふ、五月豆、色普通のものよりも微に濃く、專ら豆腐の製造に用ふ　早生豆、前種に次ぐ早熟種、五月豆より扁たく大なり　〔季題〕秋―大豆ッ

例句

夏大豆　枝豆に大方引きぬ夏大豆　居士（同人）

豇豆　大角豆　ささげ　十六豇豆　十八豇豆　二十六豇豆　はたさゝげ

古書校註【三才圖會】夏至の前に、種を下す、蔓長くして籬に延ぶ　其莢尺餘なり、其子凡十八許有る故、俗呼んで十八と名く、六月嫩き莢煮て食ふ、味甘美なり、紅白の二種あり

【滑稽雜談】河内に二十五一と云ふ者、至りて長し、

實作注意　蔓性・矮性の二種あり、葉は三葉片より成りて長柄あり　夏、小形なる白花を開き、續いて莢を生ず、莢は細長くして、短莢種と長莢種とあり、その長短によりて、十六豇豆・十八豇豆・二十六豇豆などいふ

例句

豇豆

植ゑ置きし園の垣穗の初さゝげ　杉風（杉風句集）

生りそめて姉かきゝけの花かつら　同（同　）

角豆とる籬のそなたや生駒山　凡董（其董集）

枝立てゝさゝげ這はする宿りかな　蓼太（蓼太句集）

新しき笠をかむりてさゝげ摘む　素十（ホトトギス）

一掴の手葉にすかる豇豆かな　鷗鶥（同　）

つくりたるながくるながきさゝげかな　天城子（同　）

參考　ささげ　Vigna Catiang, Endl. var. sinensis, King.（まめ科）

支那原産にして廣く栽培せらるゝ一年生草本なり、通常纒繞莖を有す、葉は三箇の小葉より成れる複葉にして長柄を有す、葉腋に花軸を生じ、夏日其頂に數箇の淡紫色花を生ず、稍大形の蝶形花なり、花後長き莢を生ず、其葉も長きものを十六ささげと呼ぶ、一種、莖の直立するものをはたさゝ

茄子（なすび）

なす　崑崙瓜（こんろんくわ）　崑崙紫瓜（こんろんしくわ）　長茄子（ながなす）　卵茄子（たまごなす）　丸茄子（まるなす）　巾着茄子（きんちやくなす）
白茄子（しろなす）　青茄子（あをなす）　金茄子（きんなす）　千生茄子（せんなりなす）　錫杖茄子（しやくぢやうなす）　初茄子（はつなす）　谷茄（としよりなす）
穀子茄　茄子畑（なすばたけ）　茄子汁（なすじる）　茄子和（なすあへ）　煮茄子（になす）　茄子賣（なすうり）

古書校註

【三才圖會】小にして、多く子を結ぶ者を、俗呼んで錫杖茄と曰ふ。（略）早き者は六月取食ふ。俗に伊羅里と稱す。（略）晩き者七八月之を取る、大にして長を帶び（一）、子を結ぶ事多からず。味最美なり。故に諺に曰、秋茄を子婦に食はしむる勿れと。

【滑稽雜談】白茄。時珍本草に曰、白茄又銀茄と名く。（二）和産あり。其茄の形ちいさし。大なるものまれなり。味よろしからず。紫茄子に不レ及也。○谷茄。黃山谷が曰、茄の老たる者、子堅く、谷（三）の如し。穀通。穀子茄と名く。○崑崙紫瓜。杜寶の拾遺錄に云、隋の煬帝、茄を改めて、崑崙紫瓜と曰ふ。今曰ふ崑崙瓜は茄子の異名也。惣て瓜茄類、玉祭のに具結ばば秋なるべし。

【年浪草】長茄。王禎が農書に曰く、水茄形長く味甘し。多識篇に曰、水茄、今按るに奈加奈寸比。

註　（一）長くて。（二）日本産のもの。（三）からぞ。皮の白い楮。

季題解說　「なす」ともいふ。蔕の方やや窄める卵形、色紫黑にして光澤あり種子を含む。形により「長茄子・卵茄子・丸茄子・巾著茄子」の別あり「白茄子・青茄子・金茄子」は色分けにして又千生茄子らありて品種多し。漬茄子に限り小形が喜ばれ、煮茄子・鴫燒・揚出し・味噌和・芥子和等料理法多し。

實作注意　嚴格にいへば茄子畑は地理、茄子汁・茄子和・茄子賣は人事の部に分類すべきところなるべきも、こゝには慣例に從ひて茄子の項下に收めたり。

參照　茄子の花（ナスビノハナ）　人事―茄子漬（ナスツケ）　鴫燒（シギヤキ）　秋―秋茄子（アキナスビ）

例句

茄子

猪の牙にもげたる茄子哉　爲有（炭俵）
切すてる茄子や蔕を歸花　蕪村（落日庵句集）
茄子ありこゝ武藏野の這入口　召波（春泥發句集）
市に急ぐ朝紫の茄子かな　乙由（麥林集）
花も實も共に盛の茄子哉　丈石（新選）
暑き日に飽きて茄子の煮物哉　定雅（續明烏）
鎌倉の宮人ちぎる茄子哉　成美（谷風草）
旱して彌々茄子の光りけり　月斗（同人）
日中の一雨ありし茄子かな　裸馬（同）

茄子畑

背戸見せに連れて步行や茄子畑　重五（三仙）

初茄子

五月雨や酒匂てくさる初茄子　其角（五元集）

甜瓜（まくはうり）

眞桑瓜　甜瓜　眞瓜　初甜瓜　玉眞瓜　あま瓜　梵天瓜　白梵天　九條眞桑　美濃眞桑　葵瓜　舳松瓜　金瓜　銀瓜　金甜瓜　銀甜瓜　梨瓜　瓜　初瓜　瓜作　瓜畑　瓜の香　瓜の番

古書校註

【三才圖會】甜瓜は味、諸瓜より甜きなり。（略）五六月に花開く、黄色。六七月に瓜熟す。其類最も繁し。

【滑稽雜談】山城帝都の九條眞桑、和州に梵天（瓜色白子赤し）美濃眞桑（眞桑村よりいづる此瓜の根本と云ふ）泉州堺舳松瓜、武藏江戸葵瓜（葵花の形瓜名にあり）等也。其外荒川谷川の二瓜、みな甜瓜の類なり。

【日次紀事】古二條殿池水有り。其淸冷（略）夏月甜瓜を浸して、禁裏に獻ぜらる。今に至りて其例を逐ひ、土川中奈良瓜を獻ぜらる。○古、妙心寺甜瓜少許り禁裏に獻ぜらる。今に至りて然り。今は別して甜瓜數百を求められ、節物と稱し、諸門主及女中群臣の家に賜ふ。

【年浪草】金瓜は攝州兎原郡、田邊村小路村之を出す。其色黄金の如し。○銀瓜は參州之產。其色白銀の如し。和州日村の梵天瓜、此種南都（一）にも亦之あり。

註（一）奈良なり。

季題解説　一「まくは」と云ひ單に「うり」とも稱ふ。（俳句にてうりと云へばまくはうりを云ふなり）。廣く栽培せらる。春、種を蒔き、莖蔓は卷鬚を有して延び、大さ數寸の心臓形の葉を著く、五六月の頃雌雄五裂の黄花を開き、七月頃孫蔓に多く結實する性質を有す。一般に顆は長圓形にして長さ四五寸太さ二寸内外なり、熟すれば黄にして縱に細き淡綠の條あり、皮を剝ぎて生食す、芳香ありて味甘し「あまうり」ともいふ。多く水に冷して食ふ。美濃の國本巣郡眞桑村より出せしを始めとし眞桑瓜の名、古くより著はる。金甜瓜・銀甜瓜・梨瓜・梵天瓜等の種別あり。〔參照〕姫瓜（夏）　メロン　人事―冷瓜（夏）

例句

眞桑瓜
白くても白き味なし眞桑瓜　鬼貫（七車）
我に似な二ツにわれし眞桑瓜　芭蕉（初蟬）

甜瓜
待ちうけて聲師にすゝむる甜瓜哉　几董（井華集）

眞瓜
ごろり寢の枕にしたる眞瓜哉　一茶（七番日記）
頰べたにあてなどしたる眞瓜哉　同（おらが春）
草の葉のつきたる番の眞瓜哉　朱山（同人）

初まくは
はつ眞瓜たてにやわらん輪にやせむ　芭蕉（泊船集）
御骨柳片荷は涼し初眞瓜　同（市の庵）
蔓ながら都へなどか初眞桑　白雄（白雄句集）

玉眞瓜
瓜

闇夜きつね下はふ玉眞瓜　芭蕉（東日記）
瓜の皮むいたところや蓮臺野　同（笈日記）
朝露によごれて涼し瓜の土　同（續猿蓑）
瓜切てさびぬ劒の光かな　嵐雪（玄峰集）
ならはしの鹽茶のみけり瓜の後　其角（五元集拾遺）
水桶にうなづきあふや瓜茄子　蕪村（句集）
兵どもに大將瓜をわかたれし　同（遺稿）
代官に妖て瓜食ふ狐かな　几董（井華集）
先すゝめ東寺は近き瓜所　召波（春泥發句集）
瓜刻むあした隣をきかれけり　同（同）
はらばうて瓜むく軒のかげり哉　蓼太（蓼太句集）
瓜一つ丸にしづまぬ井なりけり　一茶（おらが春）
瓜食うて蟻にひかれそ木かげまで　乙二（松のゝえ草稿）
瓜好きの僧正山を下りけり　子規（全集）
瓜冷にあらん食て去ね日の盛　月斗（同人）

はつ瓜

初瓜の價きのふのむかしかな　几董（井華集）
初うりやまつ畑ぬしの茶振舞　曉臺（曉臺句集）
初瓜を引とらまへて寢た子哉　一茶（おらが春）

瓜作

ひとくゝる繩もありけり瓜作り　太祇（太祇句選）

瓜畑

山陰や身を養はん瓜畑　芭蕉（いつを昔）
盗人に出あふ狐や瓜ばたけ　太祇（太祇句選）
瓜畑やいざひや〳〵と草枕　蓼太（蓼太句集）
瓜畑に褌で出たり朝月夜　月斗（同人）

瓜の香

瓜の香に狐嚔す月夜かな　白雄（白雄句集）

瓜の番

雨なども賣侍るなり瓜の番　一茶（旅日記）
瓜番のをらざる小屋に雨宿　泉龍（ホトトギス）
辮髮を梳りつゝ瓜の番　甲乙（同）

【參考】まくわうり（Cucumis Melo, L.（うり科）南亞細亞の原產にして、畑に栽培せらるゝ一年生草本なり、莖は蔓性をなし卷鬚を有す、葉は互生し掌狀に淺裂して、葉底は心臟形をなす、夏雌花雄花同株に生じ、花冠黃色にして五裂して大ならず、雌花は下部に子房あり、果實は通常橢圓形をなし、一種の香氣を有し、味甘し、蔬果を生食す、「マスクメロン」は此一品なり。

胡瓜（きうり）

黃瓜（きうり）　唐瓜（からうり）　そば瓜（うり）　初胡瓜（はつきうり）

【古書校註】【三才圖會】宜しく煮て食ふべからず、上質とならざ氏、（嶺）紙園の神、胡瓜

を社地に入るを禁す。土生の人(一)之を食ふ事を忌む　八幡の鳥肉、御靈の鮎、春日の鹿食へば則爲に祟を被る。(二)

【滑稽雜談】京には賞せず、殊に祇園氏地の者これを不レ食。(略)又庭園に植れば、盗賊の難なしと。其由未レ知也。

【年浪草】韓瓜、甜瓜に似て、大く皮濃ならず。味劣る。(通俗志に熱瓜と訓ず。

註　(一)祇園社の氏子食はず。(二)祇園の氏子の胡瓜を食はざる例なあく。

季題解説　春苗を生じ、蔓延す。匍ひ作り、棚作り、屋根形作り、垣根作りの整枝法あり。葉は葡萄葉狀にして厚く一般に濃綠色を呈す、初夏に五瓣の黄花を開く。瓜の類中最も早く熟するものにて形狀、圓筒形にして先端稍々尖り色澤綠にして疣あること海鼠の肌の如し、熟すれば黄なり(黄瓜の義)胡瓜揉として生食し、或は煮、淺漬と稱して一夜漬の漬物として食す。古名「かららり」「そばうり」。參照　人事—瓜揉

例句

胡瓜　前垂に胡瓜を抱いて戻りけり　開古城(同人)

參考　きうり(Cucumis sativus, L.)(うり科)南亞細亞の原産にして、畑に栽培せらるゝ一年生草本なり、卷鬚によりて攀緣す、葉は互生し、掌狀に淺裂し、通常五尖起を有し、毛茸ありて粗澁なり、花は雌雄花同株に生じて夏開き、花冠は黄色五裂して、皺あり、雌花は花下に長形の子房あり、果實は長形の漿果にして、若き時表面に小刺を散布す、蔬果は廣く食用に供せらる。

姫瓜　蜜柑瓜

古書校註

【三才圖會】按るに姫瓜葉花小く、五六月瓜生ず。大さ二寸許り、圓くして淺青色。味苦く食ふ可からず。熟すれば、稍黄み、微甘と雖、食ふに堪へず。唯小兒之を取りて鼻口の狀を畫き、翫となす。

【日次紀事】六月兒女、墨并脂粉を以て、人面を姫瓜に粧ひ、水引を以つて、其蔕を繫ぎ、之を提げて、玩具となす。

季題解説　眞桑瓜の變種なり、葉の形、普通の眞桑瓜よりやゝ長く、莖にも葉にも多くの毛あり。果實は大さ約二寸、淺黄・綠色を呈し、味眞桑瓜に似て淡し。俗に「蜜柑瓜」とも云ふ。

例句

姫瓜　姫瓜に生し立けむ瓜ばたけ　太祇(太祇句選)

越瓜　白瓜　淺瓜

古書校註

【滑稽雜談】俗に淺瓜と稱す。其瓜の色、青瓜より淺きによれり。菜瓜と

も他國にては云ふ。一說菜瓜は靑瓜と云ふ。諸國に產すといへども、山城の者第一也。狛の里に作る事ひさし。古歌におほくよめり。帝城において此瓜の種、洛東一乘寺村或は粟田口の產、風味厚し。通じて東臺（トウダイ）と稱す。

季題解說 甜瓜の變種ともいはれ葉及び花は甜瓜に酷似す。草勢彼に比して稍强健なり。蔓の先端は蛇の首を擡げたるが如くに、盛に伸長す。七月頃より結顆し始め胡瓜に次ぎて成熟す。この瓜は綠を帶びし白色にて甚だ大なる長圓筒形にして外皮は滑かなり、表面白色を呈すれば此名あり。胡瓜の如く採み、葛煮に或は漬物にして用ふ、奈良漬は殆ど越瓜を本位とし、中にも桂瓜最も貴重せらる。「あさうり」ともいふ。〔參照〕靑瓜（アヲウリ）

例句 越瓜　越瓜の土肌白き葉陰かな　伊珊（俳句大全）

參考 しろうり　Cucumis Melo, L. var. Conomon, Makino.（うり科）熱帶の原產にして、畑に栽培する一年生の攀緣草本なり、花葉の狀まくわうりに同じ、果實は長楕圓形にして七八寸より一尺許に達し、外皮は平滑にして白綠色を帶ぶ、花期花色共にまくわうりと異ならず、蓏果を食用とす、あをうりは此一品にして共に奈良漬に製す、

靑瓜（あをうり）　菜瓜（なうり）　漬瓜（つけうり）　漬物瓜（つけものうり）　縞瓜（しまうり）

古書校註 【滑稽雜談】 大和本草に云、菜瓜又漬瓜と云ふ、但越瓜に風味不ㇾ及、越瓜は皮薄く、菜瓜は皮厚く、硬し。

【本草】 時珍が靑色瓜といへる是か。江戶にてこれを本田瓜といふ。丸漬瓜に似て長大なり。

【三才圖會】 按ずるに、菜瓜、葉越瓜に似て小く、背に微毛あり。六七月瓜を結ぶ。甜瓜に似て、皮厚く深靑色、縱の白紋あり、肉は越瓜に似て、煮て食するによからず。

季題解說 「靑瓜」は越瓜の變種にして外皮綠色なり。淡色の縱條あるものを縞瓜と云ひ、共に一見甜瓜に似たれども、異なるは成熟後も甘味なき故に生食せず、越瓜と同じく漬物とし、漬け瓜として多く市場に出るものなり。「なうり」「つけうり」等稱す。〔參照〕越瓜（シロウリ）

例句 菜瓜　菜瓜にかるき土用の[illegible]哉　圭岳（同人）

西瓜（すゐくわ）　水瓜（すゐくわ）　黃西瓜（きすゐくわ）　大和西瓜（やまとすゐくわ）

古書校註 【三才圖會】 按ずるに、西瓜は慶安中に黃檗の隱元入朝の時西瓜扁豆等之種を携へ來りて、始めて長崎に種う。

【年浪草】本朝食鑑に曰、卽西瓜也。（略）○増山の井に夏に出づ、秋たる可し。

【滑稽雜談】此者甜瓜におくれて熟し、秋に至るまで賞す。故に夏に非ず。秋也と云ふ。所好に隨ふべし。

季題解説　蔓性一年生の植物にして、莖は極めて長く伸長す。深綠色の大きな掌狀葉を著け、花は雌雄異花、黄色の小形にして雌花は長圓形の花托を有し受精する時は次第に膨大して顆を生ず。形狀に球形と楕圓形の二つあり。吾人の食するは瓜類と異り內果部なり。肉は淡紅・深紅・黄色の別あり。黄西瓜は近時の栽培種にして水分多くして甘し。近時大和高市郡國中産、最も有名なり。大和西瓜の名宜傳さる。

實作注意　西瓜は昔は秋の季題なりしを、近時は夏日市場に現るを以て、夏の季題として採錄するを普通とす。但し、古歳事記の説明は秋なるべし。

参照　人事―西瓜提燈（スヰクワヂヤウチン）

例句

西瓜

赤行燈西瓜を切りて並べけり　子規（全集）
旱雲西瓜を切れば眞赤なり　同（同）
西瓜食うて暫く星の話かな　月斗（同人）
汗の手に八百屋が叩く西瓜哉　春虎（同）
蔓化舞に援りし西瓜や二十ほど　郊雨（同）
瓜哇西瓜所見
西瓜みな椰子の葉編みて包みあり　苦參（ホト、ギス）
西瓜舟淀の芥の中に著く　吾亦紅（同）
東西に三河西瓜の貨車の出る　麥畝（同）

水瓜

板の間に抱き下したる水瓜哉　葉子（同人）

メロン

マスクメロン　カンタールーブ

季題解説　舶來の瓜の一種にして、今多く栽培す、莖葉とも甜瓜と酷似すれども果實は球形にして普通直徑四寸位あり。熟すれば黄白にして外皮一面に白色の割目樣の網目密生す。味甘く香氣甚だ高くして室內に漲る。高級の果實として取扱はる。滑皮種にカンタールーブあり他に種類多し。参照　甜瓜（マクハウリ）

例句

メロン

銀の匙メロンの香氣ほの走る　百合子（同人）
拳ほどなメロンに蔓の撓みかな　曲荳（同）
メロン食ふことを忘れてゐたりけり　水竹居（ホト、ギス）

夏菜（なつな）

季題解説　夏季に食用とする菜類の總稱にして、一般に、平莖・京菜・芥菜・

高菜等市場に現る。菜類は秋涼なる氣候を好む故、夏季高温期は病害蟲の發生著しく完全なる發育は望み難し。

【例句】

夏菜　蟲の食ふ夏菜とぼしや寺の畑　荆口（小文庫）

蔓菜（つるな）　蕃杏（つるな）　濱菜（はまな）　濱萵苣（はまぢしゃ）

【季題解說】中部の海邊に生じ、時に畑地に栽培さるゝやゝ蔓性の宿根草、莖葉共に肉多く、莖は地を這うて長さ二三尺、葉は三角狀卵形の互生なり。夏秋の候、葉腋に小形の五瓣の黄色花を開く。この嫩き莖葉は食用とし、又陰干にしたるを煎じて藥用とす。

【實作注意】一名を「濱菜」、關西にては「濱萵苣」と云ふ。蕃杏の字を充つ。

【參考】つるな　一名　はまぢしゃ　Tetragonia expansa, Murr.（つるな科）　海邊に生ずる多年生草本なれども、又畑地に培養せらるることあり、莖の長さ二三尺餘に達し、稍蔓性なり、莖葉共に多肉にして、葉は互生し三角狀卵形をなす、葉腋に花を開く、四萼片ありて花瓣なし、下房は下位なり。

甘藍（かんらん）　キャベツ　玉菜（たまな）　牡丹菜（ぼたんな）

【季題解說】「キャベージ」訛りて「キャベツ」俗に「玉菜」又は「牡丹菜」といふ。蔬菜中にても有用なる栽培種とす。二年生にして多肉なる葉密相抱合して所謂ヘッドの頭球を形成す、之れ玉菜の稱ある所以なり、内部は黄色又は白色にして柔軟多汁甘味に富み吾人の食用に供し、甚だよろし。其の種類多く四時市場に出づれども夏の蔬菜として最もよろし。

【例句】

キャベツ　自動車でキャベツ積み出す部落哉　老圃（ホトヽギス）

【參考】たまな　一名　キャベツ　Brassica oleracea, L. var. capitata, L.（十字花科）　歐洲の原産にして園圃に栽培せらるゝ越年生草本なり、葉は廣滑無毛にして白色を帶び、牡丹花狀に相重なり、中央の葉は密に相擁して大なる球をなす、花時には莖を立て總狀花をつく。

蓮の若根（はすのわかね）　新蓮根（しんれんこん）　蓮の根（はすのね）

【季題解說】蓮の嫩根をいふ、軟質にして帶白色なり、初夏之を採りて漬物蔬菜とす。支那にては藕絲菜といふ。天王蓮を以て早採栽培を行はんには、二寸の深さに植ゑ、其の後常に一二寸の深さに灌水し六月以後に至り排水して僅に龜裂を生ずる位に保たしむ。然る時は七月上旬に至り直徑一寸位の「新蓮根」を採掘し得と云ふ。普通蓮根は初冬、枯葉後より翌年三四月の發芽前迄に採るものとす。【參照】蓮（夏）　冬―蓮根掘る（冬）

根芋（ねいも）

古書校註

【年浪草】世俗に根芋と稱すは、須伊木是なり。

【三才圖會】芋の莖、蔌和名以毛加良一に以毛之といふ俗に須伊木と云ふ。之を煮て食ふ柔にして味淡甘なり。皮を剝きて、之を乾せば、正白色、干瓢の如し。肥後の産最佳し。

季題解説 芋の萌芽を根莖ともに食すべきものにして、軟かにして美味なり。之を「ねいも」と稱し市場に出す。参照 秋―芋（イモ）

新藷（しんいも）

季題解説 薩摩藷の未だ小なる走りをいふ。早熟栽培による時は、七月上旬に小指大となり、同下旬に拇指大となり順次採收するに至るなり、主に皮の赤きもの早し。参照 秋―甘藷（サツマイモ）

新藷　新藷をくれし俵にともしけり　虚子（ホトトギス）

若牛蒡（わかごばう）　筏牛蒡（いかだごばう）　新牛蒡（しんごばう）

季題解説 晩春初夏に採收さる嫩き牛蒡をいふ、小さく細く柔軟なるもの莖をも煮て食する頃のものなり。之を市場に出すに筏形に束ねて一把となす所もありて「筏牛蒡」といふ。栽培種は二年生にして秋蒔は（根が越年し）翌春再び發芽し、六月頃四五寸に生長したる時、間引く。若く白き此頃のものを「新牛蒡」といふ。普通は十一月以後に採掘す。参照 牛蒡の花（ゴボウ）

例句

若牛蒡　女夫塚草生にけり若牛蒡　呂夏（江戸俳壇）

参考 ごばう Arctium Lappa, L.（きく科） 畑に栽培する越年生草本なり、地下に多肉なる長根を有し、莖の高さ四五尺に達す、葉は大形にして長柄を有し稍心臟形をなし、下面は綿毛を布き、白色を呈す、夏日梢上に紫色の管狀花よりなる頭狀花を着く、總苞は針狀にして尖端鈎狀をなせる鱗片より成る、其根を食用とし、又時にその嫩葉柄を食することあり。

夏大根（なつだいこん）

季題解説 二年子大根を春播して、之れより改良したるものならんと云ふ。三月播種すれば七月採收すべし。煮食・漬物兩用に供せらる。俗に夏大根辛しといふは其の發達十分ならず、よく肥育せざればなり。参照 冬―大根（ダイコン）

例句

夏大根　蕎麥切や京のあま味に夏大根　嵐枝（征の首途）

むら雨や朝露ながら夏大根　李由（篇突）
磯はたや夏大根のこぼれ咲　里下（鵜音）
冷飯に夏大根のおろし哉　蓼太（蓼太句集）
木曾は今櫻もさきぬ夏大根　支考（夏衣）
せゝらぎや湯女が洗へる夏大根　默禪（[illegible]櫻）

夏蕪（なつかぶ）

季題解説 夏季に栽培する小蕪の類にして、葉は光澤ある淡綠色を呈し、缺刻少し、葉柄も柔軟にして根と共に食用に供す、夏季の淺漬用としてよろし。〔季題〕冬―蕪。

例句 夏蕪
淺漬に香を愛すなり夏蕪　月斗（同人）

玉葱（たまねぎ）　白玉葱（しろたまねぎ）　黄玉葱（きたまねぎ）　赤玉葱（あかたまねぎ）

季題解説 玉葱はキャベツと同様に、歐洲より舶來したる蔬菜にして、葱に似たる風味を有し然も彼よりも甘味多し、多年生の根物にして畑地に栽培す。地下の鱗莖は扁球形をなし、之を玉葱と云ひ、直徑三寸内外、厚さ二寸許あり、葉はネギに似て細く、花を生ずる莖は圓柱形、中空にして二三尺の高さに達す。秋、其の頂に多數の小白花を球狀に著く。「白玉葱」「黄玉葱」の別あり、夏季に採收するもの多し。

參考 たまねぎ [illegible]（ゆり科）「ペルシャ」の原産にして畑地に栽培せらるゝ越年生草本なり、高さ一二尺に達し、地下に扁圓狀の鱗莖を有し、葉は中空にしてネギに似たれども大に細し、秋日圓柱狀をなせる花軸を長く葉間に立て、下部肥膨し頂に多數の白色小花を球狀に著く、鱗莖を食用に供す。

夏葱（なつねぎ）　刈葱（かりぎ）　かれぎ　小葱（こねぎ）　分葱（わけぎ）

古書校註 【年浪草】本朝食鑑に曰、冬葱・春葱二種。春葱初め生ず、針の如し、俗に[illegible]利岐と[illegible]、[illegible]となさず、生食すべし、生食は醋味噌に和すれば則彌好し。
【三才圖會】葱正月葉を刈て、（略）之を食す。再三刈るべし、故に俗呼んで刈葱と曰ふ、（略）稍長ずる者八月に移し種う。

季題解説 葱の一種、葉に冬葱に比し、分蘖力多く夏季に至りても品質柔軟なり、故に俗に是れを刈葱と稱へ、此れを「かれぎ」ともいふ、葉は小さく小葱なり、花莖葱に同じ、三月下旬之を植ゑるに當り幼苗を[illegible]中に横臥せしむ、五月頃より繁茂し夏日之を採收して食用とす、多く醋味噌和にす。一名、小葱・分葱ともいふ。〔季題〕冬―葱。

例句

夏葱　夏葱に雛さくや山の宿　子規（全集）

刈葱　野のするゑやかりぎの畑をいづる月　鬼貫（句選）

茗荷の子（みやうがのこ）　めが　蘘荷（じやうか）　蘘租（きやうそ）　山薑（さんきやう）

古書校註

【三才圖會】 蘘荷（略）和名、米加茗荷に作るは非なり。茗は乃ち茶の名。（略）其の子略竹笋に似て二寸許、淺紫色。俗に茗荷笋と稱す。細く切りて酢に和し之を食ふ。

季題解説 山谷竹林等の濕地に自生するものあれど、多くは人家に栽培され食用に供さるゝもの、莖葉共に薑に類し、高さ二三尺に達す、初夏地より短かき花莖を抽き大小六七片の苞をつけ形筍の小さきに似たるもの、之れを「茗荷の子」と云ふ。一種の香味ありて調理に用ゐらる。

實作注意 古名を「めが」と云はれ、漢名に、蘘荷・蘘租・山薑あり。又「めうが」の字音冥加に通ずるより「弓矢の冥加に叶ふ」等の意義よりして紋所に用ゐられゐるも、一方此草を食せば健忘になるとて厭み嫌ふ人あり。然し根部の液汁は藥用として吐血痔血を止め、藥物過用を緩和す、外用として點眼す。はれ目・やに目・突目を治す、稻麥の芒につかれしをよく排除す。

參照 春ー茗荷の花（ミヤウガノハナ）

例句

茗荷の子　仇落や柿に並びし茗荷の子　道彦（俳諧辭典）

草石蠶（ちよろぎ）　ちようろぎ　甘露子（かんろし）

季題解説 園圃に培養する一年草、高さ一二尺、莖は方形なり、葉は橢圓形にして先端尖り鋸齒粗らし、莖葉共に毛茸あり、秋淡紅の花を穗狀に開く此草の球根は連珠狀にして、色白く形蠶に似、六七月の頃掘りて梅と共に漬けて食ふべし。正月の儀式に用ふる「ちよろぎ」なり。

例句

草石蠶　はびこらぬ顏と芽を出すちよろぎ哉　巣兆（俳句集）

參考 ちよろぎ Stachys Sieboldi, Miq.（唇形科）支那の原産にして園地に培養する多年生草本、莖の高さ一二尺、葉は長橢圓形にして、方形

の莖に對生し、鋸齒鋭ならず、莖葉共に粗毛あり、夏日穗狀に紅紫色の花をつゞる、花形イヽゴマに似て稍小なり、地下莖の末端に白色連珠狀の塊莖を生ず。塊莖を食用に供す。

薤（らきやう）　らつきよ　おほみら　さとにら　たまむらさき　やまむらさき

【季題解說】　其の根塊を汎稱し季とす。葱の類、葉は根元より叢生し葱に似て細く三稜にして内空なり、秋數莖を出して小紫花簇る。韮の花より大なり。夏根の傍に子根を生ず、球は短紡錘にして外皮白色又は淡紫色を呈し、一球より十餘に分るゝこと稀ならず、其の特有の臭氣と辛味とは人の賞する所にして酢漬として食用に供す。おほみら・さとにら・たまむらさき・やまむらさき等の別名あり。

【例句】

薤

薤屑畚をはたいて捨てにけり　竹叟（同人）

一斗の薤掃除や丸一日　つばな（同　）

味噌つけて生薤をかじりけり　月斗（同　）

苔の花（こけのはな）　花苔（はなごけ）

【古書校註】

【滑稽雜談】　苔の類、夏に至りて、紫花に白花を開く。極て細なる者也。此者を苔の花といふならし。

【年浪草】　○石蕊、時珍が曰、其狀花蕊の如し云云○玉拍（マツクサ）、弘景別錄に曰、石上に生ず、松の如し。高さ五六寸、紫花　○桑花、日華本草に曰、桑樹の上に生ず。白鮮也。地錢花樣の如し云云。（一）本邦も亦屋上庭園石上樹上多く苔を生ず。五月淋雨降る時每に繁茂して、花狀の如き者を生ず。倭俗之を苔の花と稱す。

註（一）以下庵文の自記也。

【季題解說】　苔は到る處陰濕の地に生ずる隱花植物にして、微細なるものなれど、其種の別判明せず、全體に扁平なるもの細かき葉を着くるものとあり、種類甚だ多く、夏季茂し梅雨の候花の如きものを出す、苔の花と云へり。蘚・苔また「こけ」の字。

【例句】

苔の花

能因に踏まれし石の苔の花　桃隣（古太白堂句選）

岩角や火蠅すり消す苔の花　太祇（太祇句選）

此奥に聖おはしぬ苔の花　曉臺（曉臺句集）

苔生ひ早花咲きぬ蕊もちぬ　士朗（枇杷園句集）

絶え／＼に温泉の古道や苔の花　蓼太（蓼太句集）

老僧が塵拾ひけり苔の花　一茶（句帖）

屋根の苔花まで咲いて落ちにけり　同（同　）

苔の花　西行の米やこぼれて苔の花　梅室（梅室家集）
水かけて明るくしたり苔の花　乙二（をのゝえ草稿）

苔茂る（こけしげる）

季題解說　隱花植物の蘚苔類は、夏期を繁茂期とす。梅雨陰濕の頃をその盛りとす。

例句
苔茂る　一山の祖こそしげれる苔の下　宗因（梅翁宗因發句集）

早松茸（さまつたけ）　松花蕈（さまつたけ）　さまつ

實作注意　【三才圖會】松茸（略）八九月の交、盛となす。他月は之なし。五月出づる者、俗に早松茸と名く。其香味未可ならず。
【滑稽雜談】和に生ずる者梅雨の濕熱を感じて出る。其れ蓋秋時にすぐれて莖肥え、色白し。是を梅雨蕈を稱するよしいへども、本草などにも其說見えず。俗に早松蕈と云ふ。五六月に產する故稱するならし。

季題解說　一般に略して「さまつ」と云ふ。梅雨の頃、山地の松林中に生ずる松茸なり、別種のものにあらざれど氣候による早生のもの也、香氣薄く、味も亦秋の如く美ならず、たゞその早生を愛でられて高價を唱ふ。參照　梅雨茸（ツユタケ）

例句
早松茸　子規たしかに峰の早松茸　丈草（丈草發句集）
追薫　今もその薫りしたはし早松茸　米戎（米風）

梅雨茸（つゆだけ）

季題解說　梅雨期に生ずる菌類の總稱にして、山野の林下或は庭中陰濕の地によく之を見る、食ふべからざるもの。參照　早松茸（サマツタケ）

例句
梅雨茸　泡吹いて柴の梅雨茸燃えにけり　桃丘子（同人）

蟬茸（せみたけ）　蟬花（せみばな）　冠蟬（くわんせん）

季題解說　蟬の蛹として土中に棲息する間に菌類の寄生を受け、これがために斃れ、其體上より菌類が長き枝條を地上に出し時に數枝に分岐するものあり、蟬花とも云ふ。一名、冠蟬。參照　動物—蟬（セミ）

例句
蟬花　蟬花やうとき山邊の青葉垣　青々（妻木）

黴(かび)　青黴(あをかび)　毛黴(けかび)　麹黴(かうじかび)　黒黴(くろかび)　白黴(しろかび)　黴の香(か)

【季題解説】 食物・飲料・果實或は衣服・器具・紙布の類に至るまで寄生する青・白・褐・赤等の色をもてる極めて微細する下等菌類の俗稱にして、久しく暖氣と濕氣の中にあれば生ずるもの、殊に陰濕の梅雨期に最も甚し。青黴・毛黴・黒黴・麹黴・白黴等種類多し。

【例句】

黴　旅人の我につる蚊帳黴臭し　月斗（同人）
一束の黴の錢を掴きけり　正史（同）

黴の香　かびの香や一册足らぬ七部集　月斗（同）
黴の香や父が書きたる出入帳　風可（同）

水草の花(みづくさのはな)

【季題解説】 水中に生じて夏期花を持てる草を云ふ。

【實作注意】 水草一般の花を言ふ場合にて、個々のもの例へば河骨、睡蓮等は別にあり。

【例句】

水草の花　聞もつけぬ名は呼びにくき水草哉　來山（續今宮草）
水たゝへて水草移す小沙彌かな　白雄（白雄句集）
水に咲く花や扇の白地の繪　二竹（笠日記）
水草の花のあけくれ渡守　たか女（ホトトギス）

萍(うきくさ)　浮草の花　浮草　鏡草　種子無　無根草　紙子反　無物草　水萍　青萍　品藻

【古書校註】

【年浪草】吳普本草に曰、水萍、一名水簾。葉圓く小にして、一莖一葉、根水底に入りて、五月白花あり。○時珍が曰、蘋、一（註）其葉大さ指頭の如く、面青く背紫也。細紋あり、四葉合成し、中十字を折る。夏秋小白花を開く、故に白蘋と謂ふ。（註）凡有萍の類、其花水面に開く。或は白或は黃、五六月實也。

註（一）浮き草。（二）あさゞ、うまぐさ。

【季題解説】 池沼水田等に自生す、根あれど地に達することなく、水面を漂うて生育する小草。繁茂旺盛にして水面を覆ふに至り、水田にある時は作物に害あるもの、種類に左の如きあり。

一水萍　池水沼澤に多し、大きさ一二分表に緑、裏は赤紫にて圓き三葉づゝ結合し多數の鬚根を垂れ、夏日淡緑色の小花を開く。

一青萍　水田及び其の水面に浮び、前種より更に小さき二三葉結合にて多

數莖生し、夏秋の候又淡緑色の小花を生ず。

▽品藻　水中に漂ふもの、非常に薄き葉の形の品字形をなすより名あり。枝狀をなして連らなり、前種の如く一本づつの根を出すもの、花を生ずること同じ。

實作注意　一名「鏡草」「種子無」「綴子反」「無物草」と云ふ。浮草・水萍とも書す。

例句

萍

萍の實もいさぎよし水驛　嵐雪（玄峰集）
萍を岸につなぐや蜘の絲　千代女（千代尼發句集）
萍や夜は稲妻の只おかず　白雄（白雄句集）
萍の鍋の中にも咲にけり　一茶（句帖）
浮草のかさなりもあへず涼み川　蕪村（落日庵句集）
　浪華の舊國あるじして諸國の俳士を集めて圓山に會莚しける時
うき草を吹あつめてや花むしろ　同（句集）
浮草を拂へば涼し水の月　几董（井華集）

藻の花（もはな）　花藻（はなも）

古書校註

【滑稽雜談】時珍本草に曰、藻は乃ち水草之文有る者、潔淨澡浴するが如し。故に之を藻と謂ふ。○萬葉仙覺抄に云、いつもの花と云ふいつとは、物をほむるは何にもいつの詞をそゆる習ひなれば、是も藻の花をほむる詞也。（略）和に海藻・河藻と其品多し。皆夏也。夏に至て花さくなり。

季題解說　水に生ずる藻類の花を云ふ。多くは湖沼或は細流等の水底に生じ、長きものは數尺に及び總の如く、葉は絲の如く細く、節毎に多く集る、夏の日淡絲又は淡黄緑色の小花を開く。種類多し。

實作注意　藻類には淡水産と海産との二様あれど、季題としての藻の花は、淡水のものを云へるなり。

例句

藻の花

藻の花や金魚にかゝるいよ簾　其角（五元集）
藻の花や綰にかき分けて誘ふ水　同（五元集拾遺）
藻の花をやうじとするや釣の絲　北枝（北枝發句集）
藻の花や鵜にかぶられて鬧しき　也有（蘿葉集）
藻の花や小舟よせたる門の前　蕪村（新花摘）
藻の花や片われからの月もすむ　同（句集）
路の邊の刈藻花咲く宵の雨　同（同）
　題湖
藻の花や藤太が鐘の水はなれ　同（遺稿）

花藻

藻の花や雲しのゝめの水やそら　同（夜半叟句集）
藻の花や釘のこたへぬ舟大工　同（同）
藻の花や網にひかれて苔の花　同（同）
藻の花やわれても末に舟の跡　召波（春泥發句集）
藻の花や引かけて行くぬれ鐙　曉臺（曉臺句集）
藻の花や隙なき水の中ながら　蓼太（蓼太句集）
川越えし女の脛に花藻かな　几董（井華集）
行水に誘はれがほに花藻哉　同（同）

金魚藻（きんぎょも）　松藻（まつも）　松葉藻（まつよも）

季題解説 到る處の淡水中に沈生する多年草、莖至つて細く、節々に細長き葉を多數輪生し、絲狀に羽裂す、夏日葉腋に紅白質の小花つく。

實作注意 夏日金魚を飼養する器中に此草を入れて趣を添ふるより金魚藻と稱すれど正しくは「松藻」と云ふ。 參照 藻の花(夏)

例句

松葉藻　松葉藻の梳らるゝ流れかな　戸千（同人）

蛭蓆（ひるむしろ）　眼子菜（ひるこしろ）　蛭藻（ひるも）　笹藻（さゝも）　牙歯草（がしさう）

季題解説 水生植物なり、水面に浮べる葉は楕圓形、葉柄を具へて對生す、葉は細長く根は水底を匍ふ。水中の葉は膜質なり、花は小形帶黄綠色を穗狀に開く。

實作注意 葉の形蛭に似るとて「蛭藻」笹に似るとて「笹藻」とも云ひ、漢名に、眼子菜・牙齒草あり。頗る蕃殖の強きものにして、忽ちの内に水田を覆ふに至り農家に厭はるゝものなり。 參照 藻の花(夏)

例句

蛭蓆　刈あとの商田の濕りやひるむしろ　夜臼（同人）

蓴菜（じゅんさい）　蓴（ぬなは）　茆（ぬなは）　水葵（みづあふひ）　蓴の花（ぬなはのはな）

古書校註

【三才圖會】 性滑りて、長きこと絲縷の如し、奴奈波と稱するは、則滑縄の略なり、泥を惡み沙を喜ぶ、故に沼中に生えず、其葉、水上に出でず（略）山城淀・伏見の川上に多く之あり。

【滑稽雜談】 俗とつて賞味となす事、唐にはありけるなり、和において、近世より賞す、ことに淀南の清水に多し、淀の城主永井信齋と云ふ人甚是を賞せられしより、當代貴客に饗す、此者ゞ蓴菜と呼ぶ、故に彼信齋(一)に音近きを以て俗人と此菜とを互に呼ぶ、誤笑ふべし。

註 （一）[illegible]

季題解説 古き池沼に自生する宿根草、莖は水中に沒し、葉は橢圓形にして楯狀をなし、長さ二三寸に及ぶ、莖を葉の背面に寒天質の粘液を分泌し、新葉は殊にその質に富む、夏日暗紫色の花を日中にのみ開く。新葉は葉柄と共に身用とす。

實作注意 古くは「ぬなは」と云ひ、茆・水葵等の漢名あり。

例句

蓴菜

蓴菜や一鎌いるゝ浪のひま　惟然（惟然坊句集）
蓴菜や水をはなれて水の味　正秀（同　）
蓴菜やしるよしもしける水所　太祇（太祇句選）
引程に江の底しれぬ蓴かな　尙白（類題發句集）
　千早薙葵末下曬鼓といふ題を
ぬなはとる小舟にうたはなかりけり　蕪村（新花摘）
幽庵が便ゆかしきぬなは哉　几董（井華集）
行船や蓴うら照る波日陰　姿仙（新虛栗）

蓴の花

箔散るやぬなはの花の水の上　曾北（類題句集）

參考 じゆんさい Brasenia Schreberi, J. F. Gmel.（ひつじぐさ科）池沼に生ずる多年生草本なり、地下莖は橫走し、葉は水面に浮び長柄あり、楕圓形全邊にして、楯狀をなし長二三寸に及ぶ、莖と葉の背面とには、寒天樣の粘質物を有し、新葉は特に之れに富む、花は小さく夏咲き暗紅色三萼片三花瓣より成り多雄蕋、數子房あり、粘質物と共に嫩葉を食用とす。

淺沙(あさざ)の花(はな)

荇菜(あさざ)　茆(あさざ)　花蓴菜(はなじゆんさい)　金蓮兒(きんれんじ)　接餘(せつよ)　藕蔬菜(かうそさい)　菱角草(りやうかくさう)　金絲(きんし)　荷葉(かえふ)

古書校註 【滑稽雜談】和訓義解に云、此花水の淺き所に咲く也。あさくさくと云ふを略せり。○大和本草に云、和品淺砂は、其根水上に現はるゝ者也。花はかうほねに似て黃花也。

季題解說 池澤に生ずる水草。根は水底にありて、葉は水面に浮ぶ。水の深淺に隨ひ莖に長短あり。葉は圓く形ち蓴菜に似たれども一方に缺けあり。葉は表は綠なれども裏は紫なり。夏の頃錢大瓣の黃花を水面に開く、莖と

觸るれば天鵞絨の如き滑かさあり。稍紡錘形となせる根元より珊瑚珠形に分枝するもの種類あり。夏日之を採取し灰乾にして貯ふ。

【[illegible]】一名「みるぶさ」「みるめ」「うみまつ」と云ひ、水松と書す。暖行に入れ三杯酢として食するによろし。

【例句】

海松　海松の香や汐こす風の磯馴松　其角（五元集拾遺）

汐滿ちぬ雫うれしや籠のみる　召波（春泥發句集）

海松ふさ　海松ふさや貝取出刃を蛋にかゝる　其角（五元集拾遺）

海松ふさやかゝれとてしも寺の尼　嵐雪（玄峰集）

荒布（あらめ）　黑菜（くろめ）

【季題解説】海藻の一種、温暖なる海中の巖礁に著きて生ず、質昆布の如きも、一根より長き莖を出し、扁平なる長き主葉を出し、その左右に羽狀に列れる副葉を生じ平滑にして薄し。體黑褐色なれども乾燥すれば黑色に變ず。七月頃採集し、乾燥して貯藏す。黑菜。【參照】人事―荒布刈る（アラメカル）

【例句】

荒布　濤ひきて莖逆立てる荒布かな　鴻一（ホトヽギス）

黑菜　岩窪に深き海ある黑菜かな　誓子（同　）

【參考】あらめ　Ei-enia bieyclis, Kjellm.（褐藻類）　北海道を除く、温暖なる海底に生ず、黑褐色にして五分―七尺の莖を有し、初め共上部は扁平なる中央葉となれども莖の上部分岐し叉狀となり、枝狀をなし、其の末端より羽狀又は複羽狀に列する狹長なる多數の副葉を生じ、各葉多少皺ありてカヂメより薄し、生殖器は葉の兩面に斑紋をなして生ず、食用とす、前條のカヂメに於ける如く常に莖の上部の中央葉を存して葉に皺あるもの各地に普く一般にアラメと云ひ食用とす、上代は之を粉末にして貯へたるものをカヂメ（搗布）と云ひしより二種の混同を見るに至れり。

海蘿（ふのり）

【季題解説】海中の岩石に附着する植物。夏日、これを採集す。【參照】人事―海蘿干す（フノリホス）

【參考】ふのり（Gloiopeltis furcata, var. coliformis, (Okam.)（紅藻類）潮線間の岩石に附着し、通常夥しく繁殖し、岩面を被ふことあり、形五分より二寸許、體は管狀にして生長すれば中空となり不規則に分岐し、枝の基部は縊れたり、暗色又は小豆色にして光澤ありて表面は粘滑なり、三四月の頃黃褐色斑點を散布するを見る、これ生殖器の所在なり、糊料に供す、商品としてのフノリ即ち是れなり。

――「夏之部」完――